岡山県中世城館跡総合調査報告書

第２冊

－　備中編　－

２０２０

岡 山 県 教 育 委 員 会

49　実山城跡の堀切（北東から）

158　備中松山城跡　大松山城跡遠景（東から）

巻頭図版２

285　南山城跡遠景（西から）

393　備中高松城跡遠景（北西から）

序

岡山県教育委員会では、県内に所在する中世城館跡について、その実態を把握するとともに、今後の保存・活用の基礎資料とすることを目的として、「岡山県中世城館跡総合調査」を平成 25 年度から 7 か年にわたり実施してまいりました。本書はそのうち、旧備中国に所在する中世城館跡の調査成果報告書です。

備中国は岡山県西部に位置します。北に標高 1,000 m級の山々からなる中国山地、中央に標高 500 ～ 300 mの吉備高原、南に平野があり、これらを貫いて高梁川が北から南へ流れ、さらには瀬戸内海とそこに浮かぶ島々もあり、多彩な地形と風土がある地域です。

室町時代以後、守護の細川氏が弱体化すると、備中国各地で秋葉氏、庄氏、石川氏、日幡氏、竹井氏、伊勢氏、藤井氏といった国人（在地の有力武士）が勢力を強めていきます。しかし、山陰から尼子氏、さらに西から毛利氏が侵攻したため、国人達はこれらと協調・対立する形で生き残ろうとしました。その中で毛利氏に協力して備中国最大の国人となったのは三村氏ですが、備前国の宇喜多氏との争いの中で勢力を削がれ、最後は毛利氏に反旗を翻して（備中兵乱）、天正３（1575）年に滅亡します。以後備中国は毛利氏の支配下に収まり、羽柴秀吉が天下取りに進む重要な合戦となった天正 10（1582）年の備中高松城水攻めの後、講和が成立したことで争いは起こらなくなりました。こうした戦乱の時代を反映するかのように、この地には伝承地を含めて約 500 か所を数える城館跡が存在します。今回の調査ではこの城館跡のうち、約 340 か所の規模や構造等を明らかにすることができました。

本書が今後の地域の歴史研究に寄与するとともに、中世城館跡の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、総合調査及び報告書作成にあたりましては、文化庁をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和２年２月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　向　井　重　明

例　　言

1　本書は、岡山県教育委員会が平成 25 年度から平成 31（令和元）年度にわたり、国庫補助を受けて実施した岡山県中世城館跡総合調査の報告書の第２冊（備中編）である。この調査は、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が担当した。

2　本書には、岡山県西部の旧備中国に所在する中世城館跡の調査成果を掲載した。旧備中国内に該当する市町村は以下のとおりである。

新見市、高梁市、真庭市、井原市、総社市、笠岡市、浅口市、倉敷市、岡山市、加賀郡吉備中央町、小田郡矢掛町、浅口郡里庄町、都窪郡早島町

3　調査は、平成 26 年度に文化財センター職員 澤山孝之・米田克彦・上栫　武、平成 28 年度に同職員 小林利晴・物部茂樹・小嶋善邦、平成 29 年度に同職員 小林・物部・岡本泰典、平成 30 年度に同職員 小林・氏平昭則・和田　剛が担当して実施した。

4　調査事業を円滑に実施するため、専門委員２名を委嘱し、調査全般及び報告書の作成に関する専門的な指導・助言を得た。また学識経験者、中世城館及び中世史の専門的知識等を有する者のうちから、調査協力員を委嘱し、さらに調査協力者を依頼し、助言を得た。記して深く感謝の意を表す次第である。

5　本書の執筆は、第１～３章・第５章を文化財センター職員が実施し、文末に文責を記した。第４章歴史史料調査を畑　和良（歴史研究家）が、第６章を畑　和良と文化財センター職員が担当・執筆し、文末に文責を記した。

6　本書の編集は、文化財センター職員氏平が行った。

7　畑　和良、尾崎　聡、島崎　東の各氏には、縄張り図の提供及び城館跡に関する教示を受けた。ここに感謝の意を表する。

8　本書に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の「数値地図 25000」（地図画像）を３万５千分の１に縮小して複製したものである（承認番号　令元情複第 417 号）。本書掲載図を複製する場合は、国土地理院長の承認を得るものとする。

9　第３章の縄張り図で使用した地形図は、以下の機関から借用し、掲載の許可を得た。

新見市域・高梁市域・真庭市域・井原市域・総社市域・笠岡市域・浅口市域・岡山市域・矢掛町域・里庄町域・吉備中央町域：各市町作成の都市計画図・市町域図・地形図（1/2,500）を使用。

倉敷市域:倉敷市長の承認を得て、倉敷市所管の測量成果倉敷市都市計画図 1/2,500 を複製。（承認番号　平成 26 年３月 13 日　都第 3863 号）

10　現地調査並びに報告書作成に関しては、以下の機関から多大なる協力、助言をいただいた。記して謝意を表する（順不同）。

文化庁、新見市教育委員会、高梁市教育委員会、真庭市教育委員会、井原市教育委員会、総社市教育委員会、笠岡市教育委員会、浅口市教育委員会、倉敷市教育委員会、岡山市教育委員会、吉備中央町教育委員会、矢掛町教育委員会、里庄町教育委員会、早島町教育委員会

11　本書 に掲載している縄張り図を転載する場合には、本報告書名に加えて作図者名を明記すること。

凡　　例

1　第２・３・６章で用いた高度値は、標高である。

2　第３章で示した方位は、一部を除いて平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。

3　第３章に掲載した縄張り図の縮尺は、基本的に 1/2,000 であるが、必要に応じて変更（1/3,000、1/4,000 など）している。また図ごとの縮尺は、見出しに記載している。

4　本書第３章で遺構を示す場合、原則として曲輪及び曲輪群は曲輪「Ⅰ」のようにローマ数字で表記し、竪堀や堀切などは竪堀「１」のようにアラビア数字で記載した。

5　第２章の分布図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「鞆」・「白石島」・「福山東部」・「寄島」・「新市」・「神辺」・「笠岡」・「玉島」・「金丸」・「井原」・「矢掛」・「箭田」・「倉敷」・「小畠」・「地頭」・「三山」・「総社西部」・「総社東部」・「油木」・「備中市場」・「高梁」・「豪渓」・「東山内」・「帝釈峡」・「東城」・「吹屋」・「川面市場」・「有漢市場」・「下加茂」・「小奴可」・「備中矢田」・「新見」・「井倉」・「呰部」・「道後山」・「油野」・「足立」・「刑部」・「勝山」・「多里」・「上石見」・「千屋実」・「上刑部」・「横部」・「阿毘縁」・「印賀」・「根雨」・「美作新庄」を複製・加筆したものである。

目　　次

巻頭図版
序
例言
凡例
第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 5
第２章　城館跡の分布図・一覧表 …… 9
　１　分布図 …… 9
　２　備中国中世城館跡一覧表 …… 76
　３　備中国中世城館跡遺構の評価と残存状況表 …… 102
　４　備中国中世城館跡一覧表 …… 106
第３章　城館跡の概要 …… 111
　第１節　哲多郡 …… 113
　第２節　阿賀郡 …… 147
　第３節　川上郡 …… 185
　第４節　上房郡 …… 213
　第５節　後月郡 …… 243
　第６節　小田郡 …… 267
　第７節　下道郡 …… 311
　第８節　浅口郡 …… 333
　第９節　賀陽郡 …… 357
　第 10 節　窪屋郡 …… 435
　第 11 節　都宇郡 …… 445
第４章　歴史史料調査 …… 457
第５章　城館関連地名表 …… 527
第６章　総括 …… 541
　第１節　考古学から見た備中国の城館跡 …… 541
　第２節　備中国の政治・軍事動向と城館 …… 553
備中国中世城館関連文献一覧表 …… 567
報告書抄録
奥付

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

１　調査の経緯

瀬戸内海北岸のほぼ中央に位置し、近畿地方と東に接する岡山県は、備前・備中・美作の３国からなる。南北朝時代から室町時代　にかけて播磨の赤松氏と伯耆・因幡の山名氏がこの地をめぐって争い、戦国時代には出雲の尼子氏や安芸の毛利氏、上方の織田氏が進出して抗争を繰り広げた。このため､県内に残る中世城館跡は､昭和 55 年に刊行された「日本城郭大系」13 で 884 か所、現在の遺跡地図で約 1,100 か所と全国的に見てもすこぶる多い。

こうした城館跡の大半は、眺望に優れた山頂や尾根上に立地するため、テレビ塔などの建設候補地にあげられることが多く、近年では携帯電話基地局の設置も相次いでいる。また、林道建設や土砂採取により、城跡が損なわれる事態も頻発している。

このため岡山県教育委員会では、県内各地に残る中世城館跡の現状を把握し、その保存と活用を図るための記録を作成することを目的に、平成 25 年度から国庫補助事業として中世城館跡総合調査を実施することとなった。

２　調査の計画

調査にあたっては、平成 25 年７月１日に策定した「岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項」に基づいて、７か年にわたる調査体制を組織した。当初は、平成 25･26 年度に備前地域 471 か所、平成 27・28 年度に備中地域 410 か所、平成 29・30 年度に美作地域 491 か所と、現在の行政地域単位で調査を実施することとしていた。しかし、県北部の美作地域や備中地域北部は遠隔地である上、降雪等の気象条件により県南部と同様に調査を進めることは困難と考えられた。このため、平成 26 年度に調査計画を見直し、県北部・南部を並行して調査するよう改めた。最後の令和元年度には、これまでの調査結果に検討を加え、その成果を備前国・備中国・美作国の３分冊の報告書にまとめて刊行した。

岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項

（目的）

第１条　この事業は、岡山県内に所在する中世城館跡の所在とその内容等について悉皆的かつ総合的に調査し、その実態を把握するとともに、今後の保存・活用の基礎資料とすることを目的とする。

（事業主体）

第２条　この事業は､岡山県教育委員会（担当　岡山県古代吉備文化財センター（以下「センター」という。）が行う。

（実施期間）

第３条　この事業は、平成 25 年度から平成 31 年（令和元年）度まで実施する。

（調査対象）

第４条　この事業における調査の対象は、おおむね中世（平安時代末から戦国時代までをいう。）に築かれた城、館、屋敷、砦、陣、要害、烽火台、物見櫓等（以下「城館」という。）とする。ただし、古代又は近世の城館についても、中世の城館との関連をうかがわせるものについては、これに含める。

（事業内容）

第５条　この事業の内容は、次のとおりとする。

（１）現地調査

ア　図面、地図等関連資料の収集・整理

イ　現地踏査による縄張り調査

ウ　台帳作成

（２）文献調査

ア　関連する史誌、報告書、研究論文等の収集・整理

イ　城館関連地名の抽出と検討

ウ　台帳作成

（３）報告書作成・刊行

［報告書の主な内容］

目的、経緯、概要（位置・規模・構造・現況・略史・縄張り図）、分布地図、一覧表等

（専門委員等）

第６条　この事業を円滑に実施するため、専門委員（以下「委員」という。）３名以内及び調査協力員（以下「協力員」という。）10 名以内を置く。

２　委員は、調査全般及び報告書の作成・刊行にわたって必要な専門的指導・助言を行う。

３　協力員は、当該年度の対象地域で行う調査の実施に当たって必要な専門的協力を行う。

４　委員及び協力員は、岡山県内の埋蔵文化財に詳しい学識経験者、中世城館及び中世史の専門的知識等を有する者のうちから、岡山県古代吉備文化財センター所長（以下「所長」という。）が委嘱する。

５　委員の任期は、委嘱した日から令和２年３月 31 日までとする。

６　協力員の任期は、委嘱した日の属する年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

（庶務）

第７条　この事業の庶務は、センターにおいて処理する。

（その他）

第８条　この要項に定めるもののほか、この要項の実施に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附　則

この要項は、平成 25 年７月１日から施行する。

３　調査の体制

調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その実施にあたって専門的な指導・助言を得るために専門委員２名、対象地域の調査について協力を得るために調査協力員数名を、中世城館跡及び中世史の専門的知識を有する者の中から委嘱した。

専門委員

稲田孝司　岡山大学名誉教授（平成 25 ～令和元年度）

中井　均　滋賀県立大学教授（平成 25 ～令和元年度）

調査協力員

有賀祐史　赤磐市教育委員会社会教育課主任（平成 25 年度）

石井　啓　備前市教育委員会生涯学習課主幹（平成 25 年度）

村上　岳　瀬戸内市教育委員会社会教育課文化振興係長（平成 25 年度）

團　正雄　勝央町教育委員会教育振興部主査（平成 26・27 年度）

池田和雅　美作市教育委員会美作分室主任（平成 27 年度）

高田知樹　井原市教育委員会文化課係長（平成 28 年度）

森　俊弘　真庭市教育委員会生涯学習課主幹（平成 28 年度）

山本原也　笠岡市教育委員会生涯学習課文化係学芸員（平成 28 年度）

小郷利幸　津山市教育委員会文化課企画参事（平成 29 年度）

日下隆春　鏡野町教育委員会生涯学習課主幹（平成 29 年度）

西野　望　矢掛町教育委員会教育課生涯学習係長（平成 29 年度）

前角和夫　総社市教育委員会文化課文化財係主査（平成 29 年度）

藤原好二　倉敷市教育委員会生涯学習部文化財保護課倉敷埋蔵文化財センター主任（平成 30 年度）

水田貴士　浅口市教育委員会文化振興課文化振興係長（平成 30 年度）

三浦孝章　高梁市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事（平成 30 年度）

白石祐司　新見市教育委員会教育部生涯学習課文化振興係主任（平成 30 年度）

畑　和良　歴史研究者（平成 25 ～ 30 年度）

調査協力者

乗岡　実　岡山市教育委員会文化財課課長（平成 26・27 年度）

高橋伸二　岡山市教育委員会文化財課主査（平成 26・27 年度）

調査指導

近江俊秀　文化庁記念物課埋蔵文化財部門調査官（平成 25 ～平成 30 年度）

文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門調査官（平成 30 年度）

文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門主任調査官（令和元年度）

大橋雅也　岡山県教育庁文化財課総括副参事（平成 25 ～ 27 年度）

岡山県教育庁文化財課総括参事（平成 28 年度）

柴田英樹　岡山県教育庁文化財課総括副参事（平成 29 ～令和元年度）

岡山県古代吉備文化財センター

平成 25 年度

所　　長　平井泰男

次　　長　大崎智浩

参　　事　光永真一

〈総　務　課〉

総括主幹　岡部　一

主　　任　宮岡佳子

主　　任　岡村涼平

〈調査第二課〉

課　　長　亀山行雄

総括副参事　澤山孝之（調査担当）

主　　任　小嶋善邦（調査担当）

主　　任　河合　忍（調査担当）

平成 26 年度

所　　長　村木生久

次　　長　大崎智浩

参　　事　光永真一

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　岡部　一

主　　任　宮岡佳子

主　　任　山内基寛

〈調査第二課〉

課　　長　亀山行雄

総括副参事　澤山孝之（調査担当）

主　　任　米田克彦（調査担当）

主　　任　上栁　武（調査担当）

平成 27 年度

所　　長　宇垣匡雅

次　　長　成本俊治

参　　事　光永真一

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　金藤賢史

主　　任　宮岡佳子

主　　任　山内基寛

〈調査第一課〉

課　　長　亀山行雄

総括副参事　澤山孝之（調査担当）

主　　任　米田克彦（調査担当）

主　　任　島崎　東（調査担当）

平成 28 年度

所　　長　宇垣匡雅

次　　長　成本俊治

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　金藤賢史

主　　任　浦川徳子

主　　任　山内基寛

〈調査第一課〉

課　　長　亀山行雄

総 括 主 幹　小林利晴（調査担当）

主　　幹　物部茂樹（調査担当）

主　　幹　小嶋善邦（調査担当）

平成 29 年度

所　　長　宇垣匡雅

次　　長　髙田　亮

参　　事　大橋雅也

〈総　務　課〉

総括副参事　金藤賢史

主　　任　浦川徳子

主　　任　東　恵子

〈調査第一課〉

課　　長　亀山行雄

総 括 主 幹　小林利晴（調査担当）

副　参　事　物部茂樹（調査担当）

主　　幹　岡本泰典（調査担当）

平成 30 年度

所　　長　向井重明

次　　長　髙田　亮

参　　事　大橋雅也

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　甲元秀和

主　　任　浦川徳子

主　　任　東　恵子

〈調査第一課〉

課　　長　髙田恭一郎

総括副参事　小林利晴（調査担当）

副　参　事　氏平昭則（調査担当）

主　　任　和田　剛（調査担当）

令和元年度

所　　長　向井重明

次　　長　佐々木雅之

参　　事　大橋雅也

〈総　務　課〉

総 括 主 幹　甲元秀和

主　　任　東　恵子

主　　任　多賀克仁

〈調査第一課〉

課　　長　髙田恭一郎

総括副参事　小林利晴（報告書担当）

副　参　事　氏平昭則（報告書担当）

主　　幹　和田　剛（報告書担当）

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

現地調査

城館跡の現地調査にあたっては、まず、『岡山県遺跡地図』（2003）に記載されているものや文献に見えるものに、地元の伝承等を加えて台帳を作成した。それをもとに現地を踏査し、関連遺構を確認したものについては測量や写真撮影を行って現状の記録を作成した。測量には主にＧＰＳ受信機を使用し、作成した縄張り図は市町村作成の都市計画図（1/2,500 ～）もしくは岡山県作成の森林基本図（1/5,000）から抜粋した地形図と合成した。

文献調査

中世・近世の文書から中世城館跡に関わる記事を抜き出し、一覧表を作成した。また、城館跡にかかわる記載のある近代～現代の自治体誌や研究書を収集して台帳を作成し、城館跡の概要を記述する参考とした。

関連地名調査

『角川日本地名大辞典　岡山県』角川書店（1989）や自治体誌に集成されている地名（小字名）から城館に関連するものを抽出して一覧表を作成するとともに、その一部について地籍図・切図との対照を行い城館跡の所在を検討した。

２　調査の経過

平成 25 年度

年度当初は、事業の体制や全体計画の検討と併行して、調査対象とする備前市・瀬戸内市・赤磐市・和気町・玉野市・加賀郡吉備中央町所在の城館跡 311 か所について情報収集を行うとともに、城館跡に関わる文献や地名の調査に着手した。７月１日(月)に「岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項」を策定し、８月 15 日（木）付けで専門委員２名と、当該年度の調査協力員４名を委嘱して調査体制を整えた。また、26 日（月）には九州歴史資料館 岡寺良学芸員から縄張り図の作成方法について指導を受けた。９月３日（火）から対象地の現地調査に着手したが、吉備中央町については狩猟期と重なって実施が困難となったことから翌年度に変更した。10 月 16 日（水）には、古代吉備文化財センターにおいて調査事業会議を開催し、調査の計画や方法等について協議した。また 30 日（水）には、京都府教育委員会に赴いて「京都府中世城館跡調査」の進め方について教示を受けた。１月 17 日（金)、古代吉備文化財センターにおいて文化庁記念物課 近江俊秀調査官にこれまでの調査状況を説明し、翌日、津山市岩屋城跡にて現地指導を受けた。２月 25 日（火）には、瀬戸内市中央公民館において調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。３月 28 日（金)、現地調査、文献調査、城館関連地名調査を終了し、31 日（月）に事業を完了した。

平成 26 年度

４月から、調査対象の岡山市、勝田郡勝央町に所在する城館跡 258 か所について検討を行うとともに、前年度から繰り越した吉備中央町所在の城館跡 77 か所の現地調査に着手した。また５月１日

（木）には、当該年度の調査協力員等 4 名を委嘱した。10 月 15 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、調査計画の変更を協議するとともに、調査報告書の作成案について協議した。また、岡山市勝尾山城跡において現地指導を受けた。3 月 13 日（金）には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について意見交換を行った。そして、24 日（火）には現地調査、27 日（金）には文献調査と城館関連地名調査を終了し、31 日（火）に事業を完了した。

平成 27 年度

調査対象とした岡山市、美作市、勝田郡奈義町、久米郡美咲町、苫田郡西粟倉村所在の城館跡 274 か所について情報収集を行い、4 月から現地調査と関連文献･地名調査に着手した。5 月 1 日(金)には、当該年度の調査協力員等 4 名を委嘱した。10 月 7 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、備中高松城合戦の舞台となった岡山市宮路山城跡において現地指導を受けた。3 月 14 日（月）には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。18 日（金）には現地調査、25 日（金）には関連文献･地名調査を終了し、31 日（木）に事業を完了した。

平成 28 年度

調査対象とした笠岡市・井原市・浅口郡里庄町・真庭市・真庭郡新庄村・久米郡久米南町所在の城館跡 410 か所について検討を行い、 4 月から現地調査に着手した。また 4 月 28 日（木）には、当該年度の調査協力員 4 名を委嘱した。 5 月 9 日（月）から、城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10 月 19 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、八浜合戦の陣地となった玉野市両児山城跡において現地指導を受けた。 2 月 22 日（水）に城館関連の文献・地名調査を、 3 月 13 日（月）には現地調査を終了した。 3 月 2 日（木）、文化庁記念物課 近江調査官に調査状況を報告するとともに、同所にて開催された「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」において県内の代表的な城館跡を紹介した。17 日（金）には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について意見交換を行った。そして 31 日（金）、調査記録の整理を終えて事業を完了した。

平成 29 年度

4 月から、津山市・総社市・小田郡矢掛町・苫田郡鏡野町に所在する城館跡 400 か所の情報収集を行い、現地調査に着手した。 6 月 8 日（木）には当該年度の調査協力員 5 名を委嘱し、29 日（木）から城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10 月 11 日（水）、真庭市久世公民館において調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、真庭市陣山城跡において現地指導を受けた。 3 月 1 日（木）には現地調査を、 7 日（水）には関連文献・地名調査を終了した。 3 月 14 日（水）、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。 3 月 30 日（金）には整理作業を終了し、事業を完了した。

平成 30 年度

新見市・高梁市・倉敷市・浅口市・都窪郡早島町に所在する 276 か所の城館跡を対象に調査を行っ

た。４月から、対象城館跡の情報収集を行うとともに調査に着手した。５月 18 日（金）には当該年度の調査協力員５名を委嘱し、６月 20 日（水）から城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10 月 10 日（水）、倉敷市ライフパーク倉敷において調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、倉敷市黒山城跡において現地指導を受けた。３月 15 日（金）、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。３月 19 日（火）には現地調査を、20 日（水）には関連文献・地名調査を終了した。３月 29 日（金）には整理作業を終了し、事業を完了した。

平成 31（令和元）年度

４月１日（月）から報告書作成を開始した。作業は、城館跡と文献の調査に関する前年度までの整理作業結果に検討を加え、その成果を備前・備中・美作の旧国単位３分冊へと編集する計画で進めた。７月 24 日（水）古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、報告書作成について協議した。また、矢掛町茶臼山城跡において現地指導を受けた。２月 28 日（金）に３分冊、総頁数約 1,600 頁の報告書を刊行した。３月 31 日（火）には報告書作成作業を終了し、事業を完了した。（亀山・髙田）

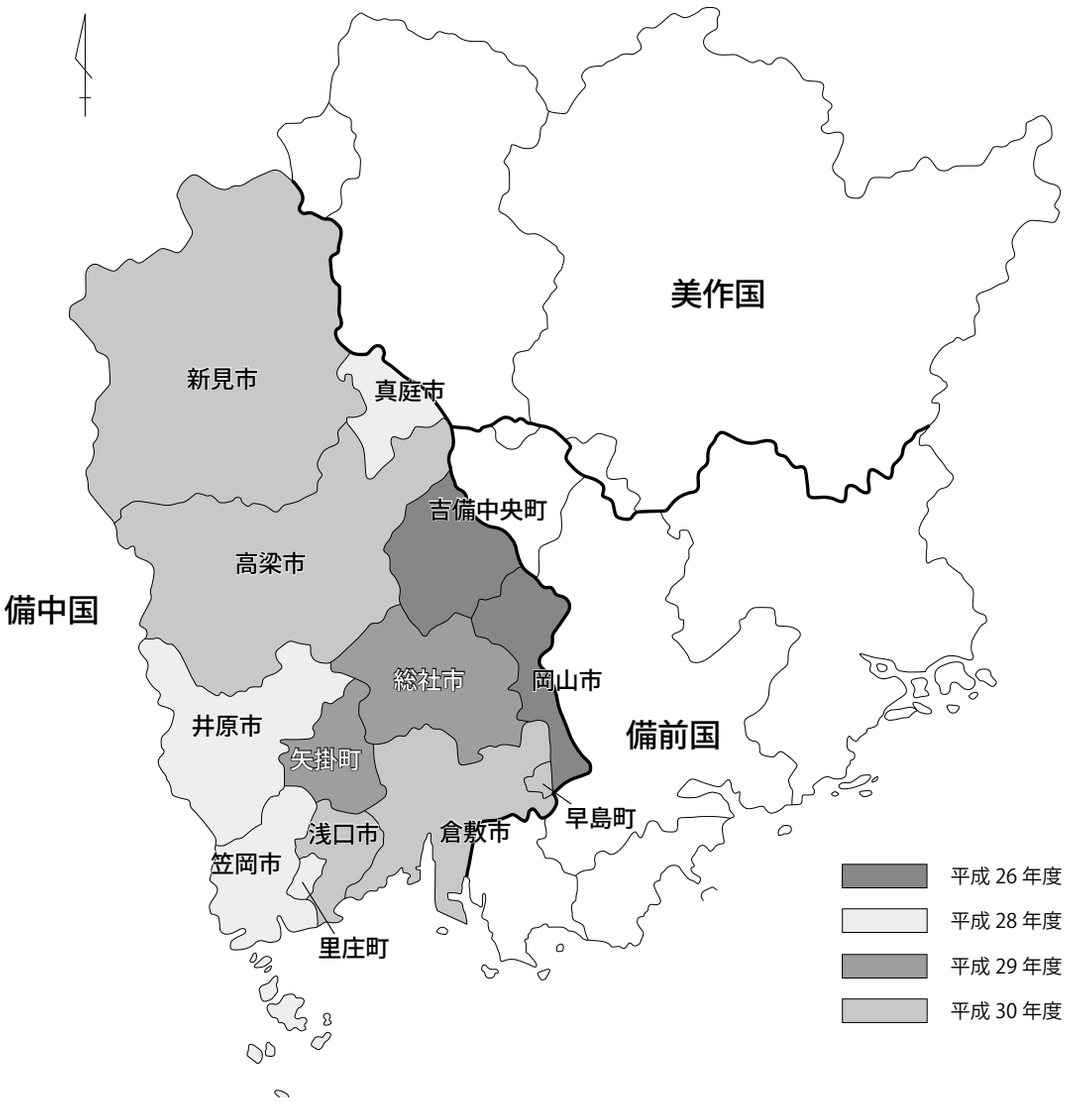
○備中国の現地調査

平成 26 年度の岡山市の一部・吉備郡吉備中央町（旧賀陽町）の 92 地点を皮切りに、１年おいて平成 28 年度は井原市・笠岡市・浅口郡里庄町・真庭市（旧北房町）の 117 地点、平成 29 年度は総社市・小田郡矢掛町の 83 地点、平成 30 年度は新見市・高梁市・浅口市・都窪郡早島町・倉敷市の 192 地点の調査を実施した。合計では 484 地点の調査を実施し、結果 442 城の城館関連遺構を確認している。また近世地誌に記載があるがその実態が明らかではない城館などが、他にも 116 か所存在する。

岡山県全体では、1,423 地点の調査を実施し、1,126 城の城館関連遺構を確認している。（備前国：446 地点の調査を実施、278 城の城館関連遺構を確認。美作国：493 地点の調査を実施、406 城の城館関連遺構を確認。）

写真１　調査風景（高梁市備中松山城跡）

写真２　調査協力員会議（平成 30 年度）



第 1 図　備中国調査実施年度

表 1　岡山県中世城館総合調査事業 7 か年計画

年度	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元
対象地域	備　前（446）						補足調査報告書刊行
		美　作（493）					
				備中（484）			
小計	244	265	211	243	244	216	
調査該当市町村名	玉野市42	岡山市182	岡山市39	笠岡市37	総社市54	倉敷市63	
	備前市34	吉備中央町57	美作市87	井原市50	矢掛町29	高梁市54	
	瀬戸内市36	勝央町26	奈義町30	里庄町 2	津山市111	新見市77	
	赤磐市86		西粟倉村 4	真庭市131	鏡野町50	浅口市20	
	和気町46		美咲町51	新庄村 2		早島町 2	
				久米南町21			

第２章　城館跡の分布図・一覧表

1　分布図

凡　　例

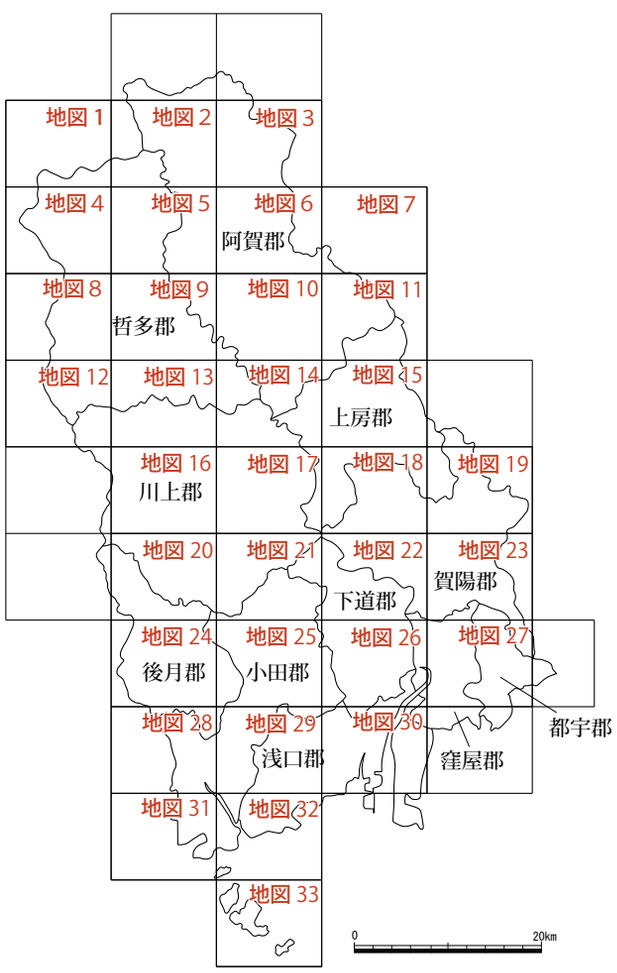
・城館番号は、旧郡を通して番号を付している。

・本巻の収録市町村は、新見市、高梁市、真庭市（旧北房町）、井原市、総社市、笠岡市、浅口市、倉敷市（旧児島郡除く）、岡山市（北区・南区の一部）、加賀郡吉備中央町（旧賀陽町）、小田郡矢掛町、浅口郡里庄町、都窪郡早島町である。境界の詳細は分布図で示した。

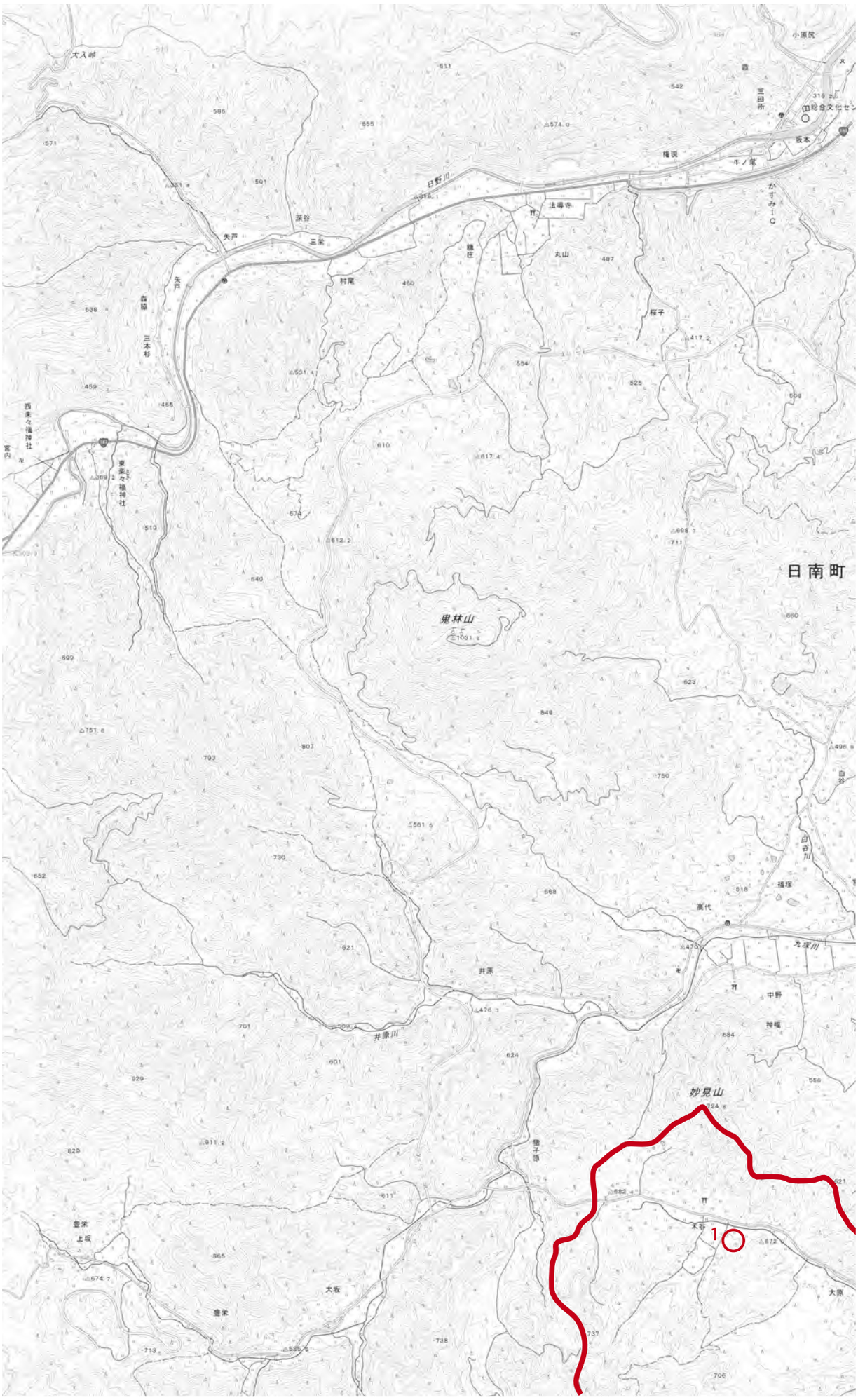
・城館跡の範囲は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」を基に赤の実線で示している。すでに消滅しているものは、赤の点線で示している。また地形改変等により、城域が不明瞭なものは赤丸で示している。

・旧国境を実線で、旧郡境は点線で示している。

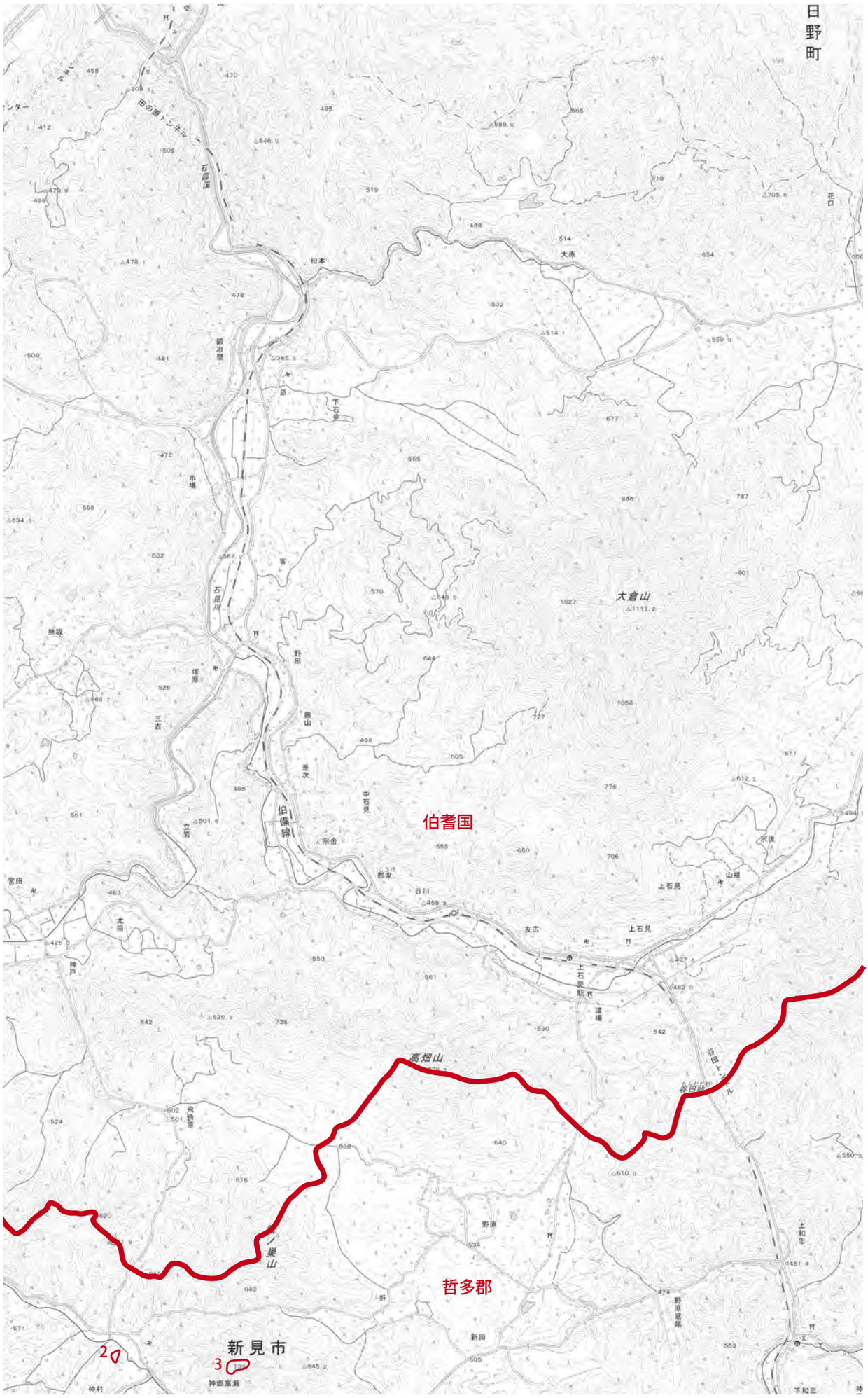
・旧国・旧郡の境界線は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館『旧高旧領取調台帳データベース』に記された旧村境を基にしており、おおむね新郡区編成時（明治 11 年）のものである。

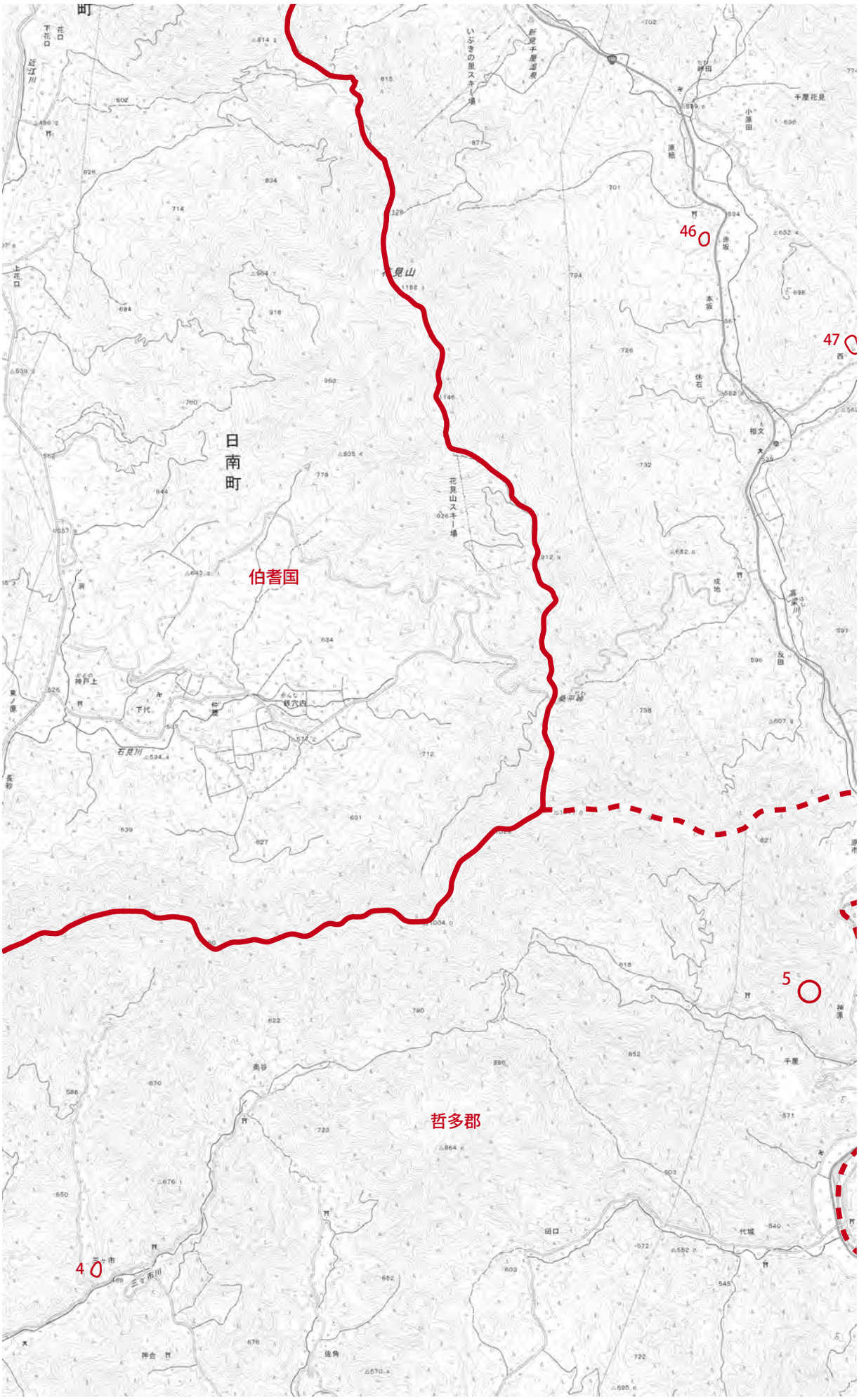


第 2 図　　城館跡索引図（1 /800,000）

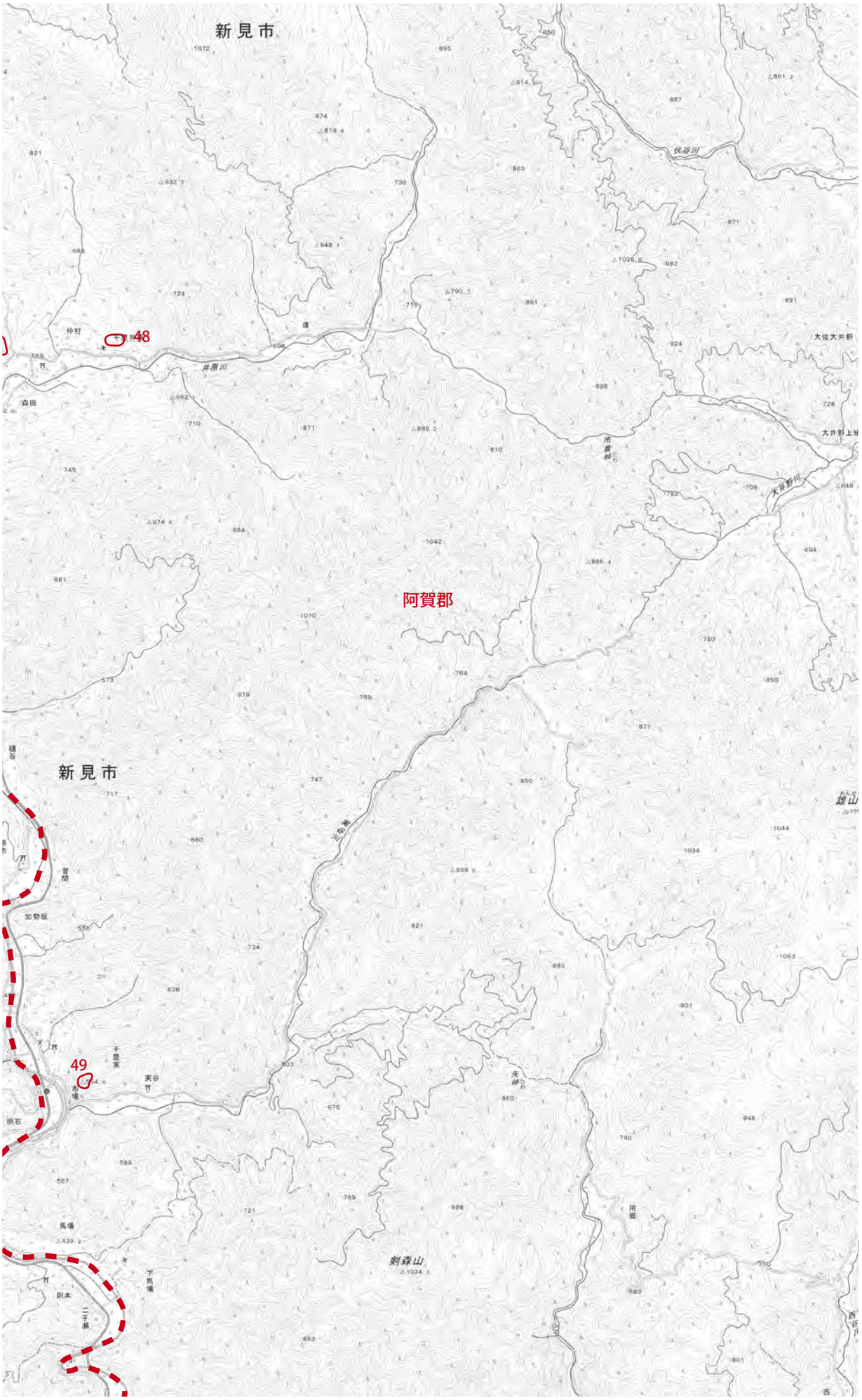

日南町
鬼林山
妙見山
1

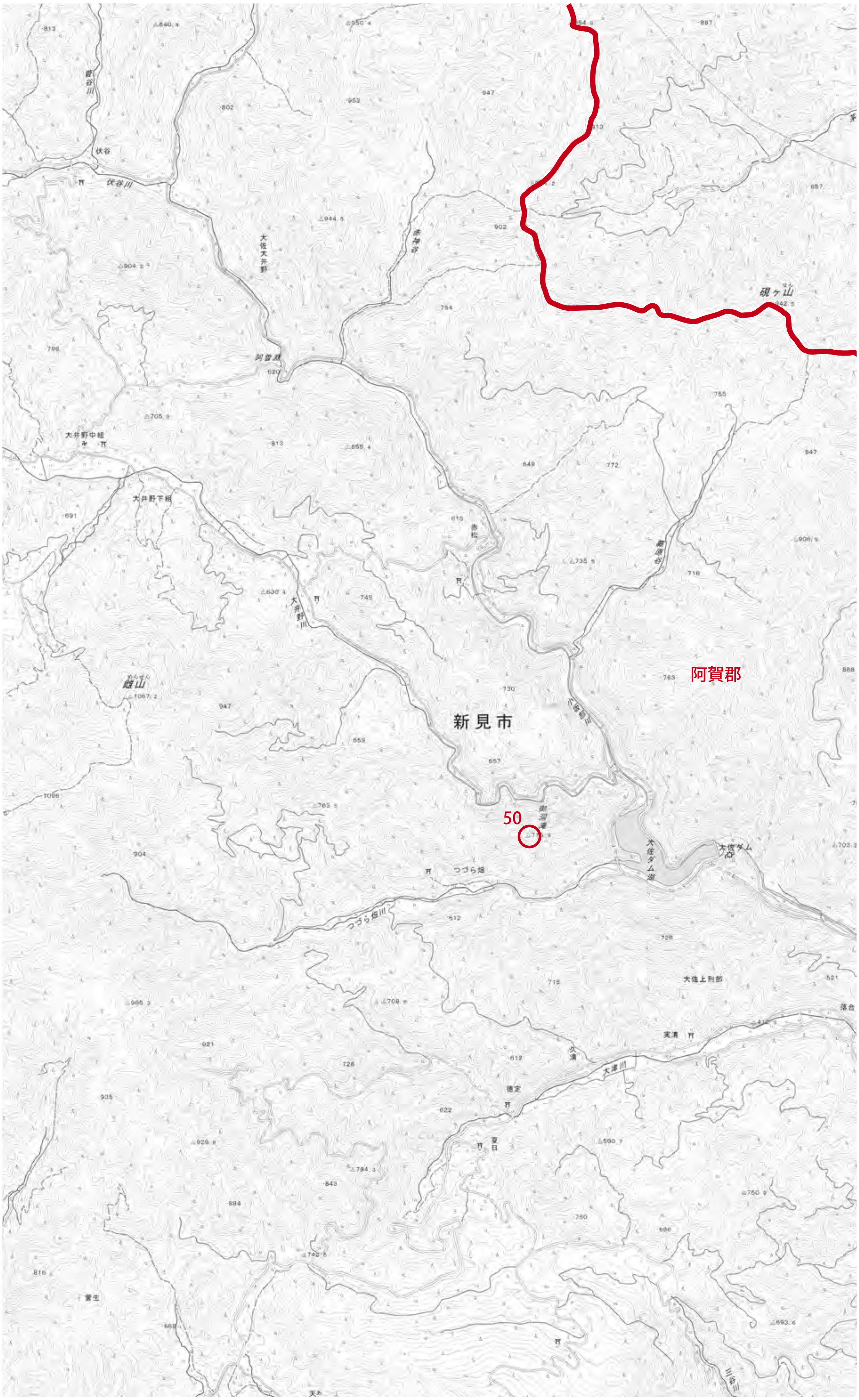
地図 1




日南町
伯耆国
哲多郡
46
47
5
4
←
1

地図 2

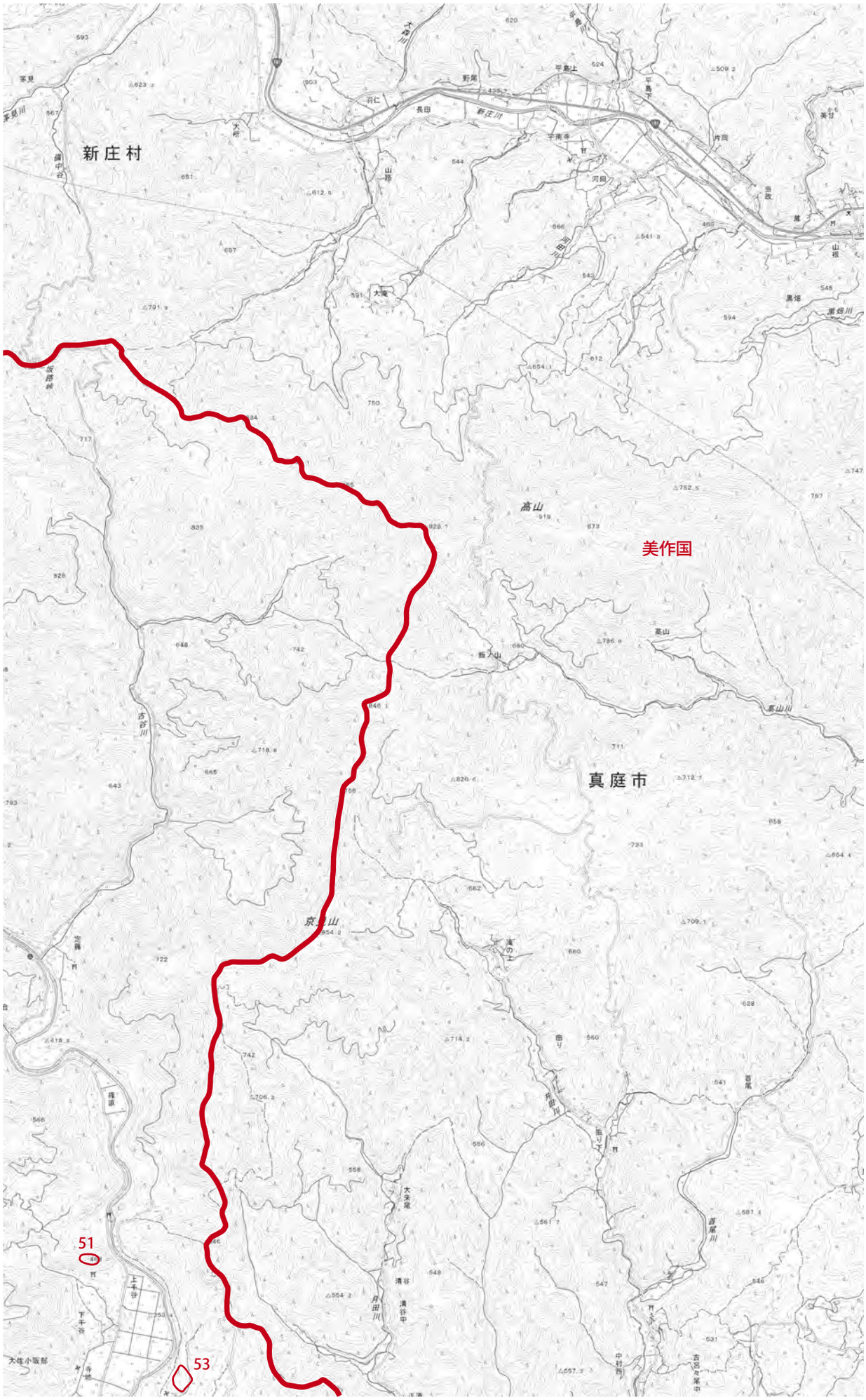




阿賀郡
新見市
50
硯ヶ山
大佐ダム
大佐ダム湖
大佐大井野
大井野中組
大井野下組
伏谷
伏谷川
阿曽瀬
赤松
大井野川
雌山
つづら畑
つづら畑川
大佐上刑部
実清
大津川
徳定
夏日
青生

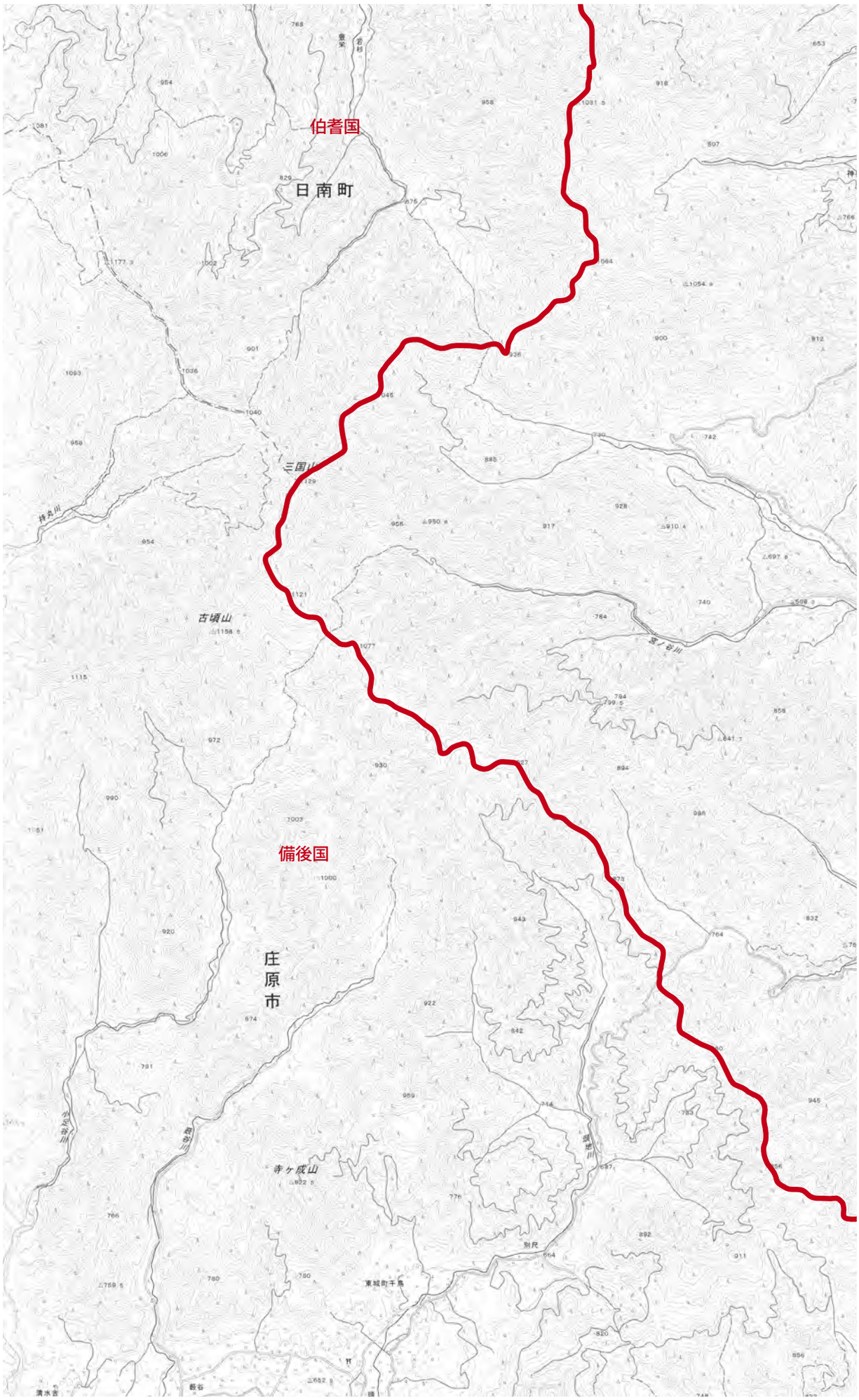
←
2

地図 3

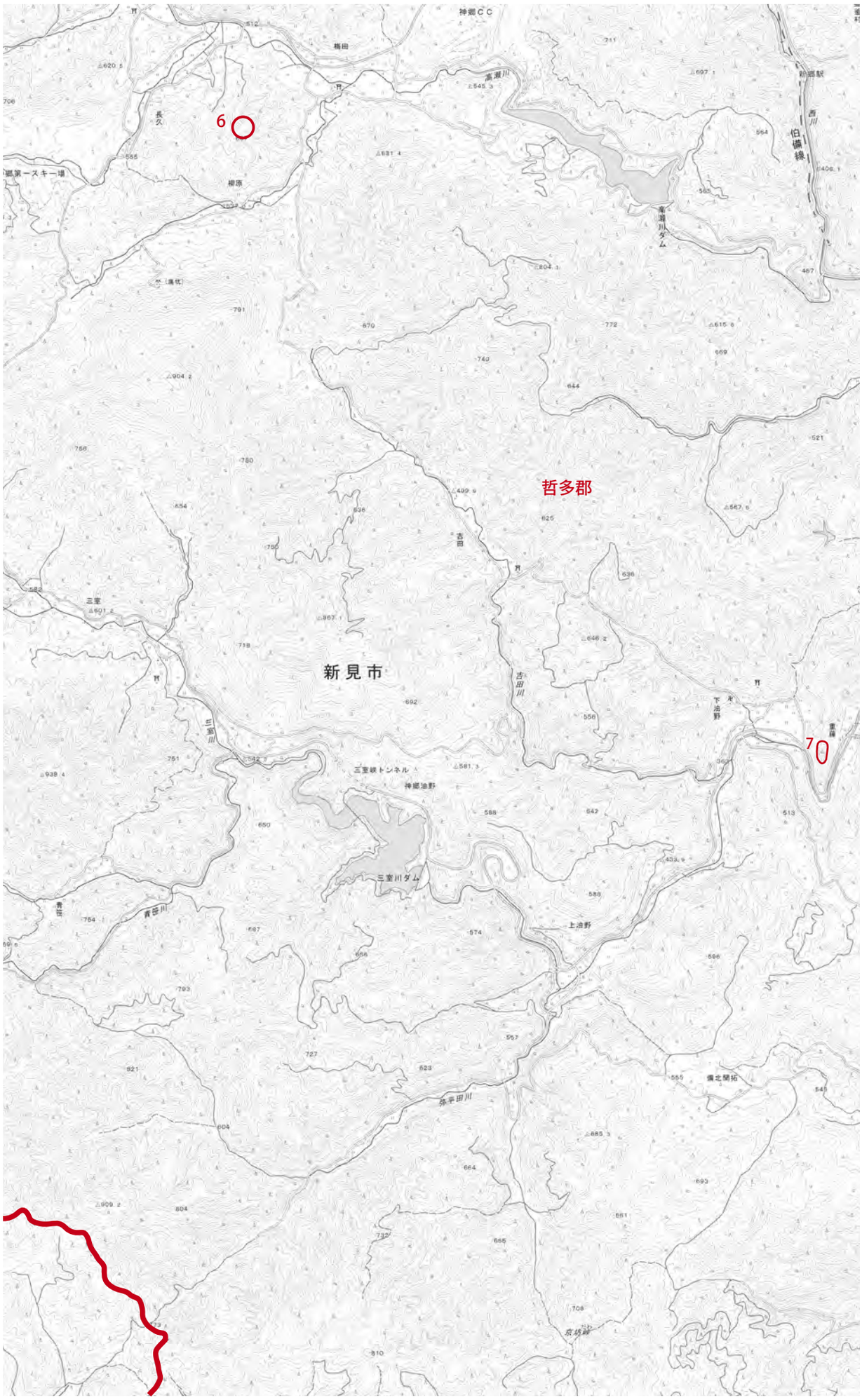


6
↓

↑
1



地図 4



6
7
哲多郡
新見市
神郷ＣＣ
梅田
高瀬川
長久
柳原
新郷駅
西川
伯備線
高瀬川ダム
吉田
吉田川
三室
三室川
三室峡トンネル
神郷油野
三室川ダム
上油野
下油野
青笹川
弥平田川
備北開拓
京坊線

→
5

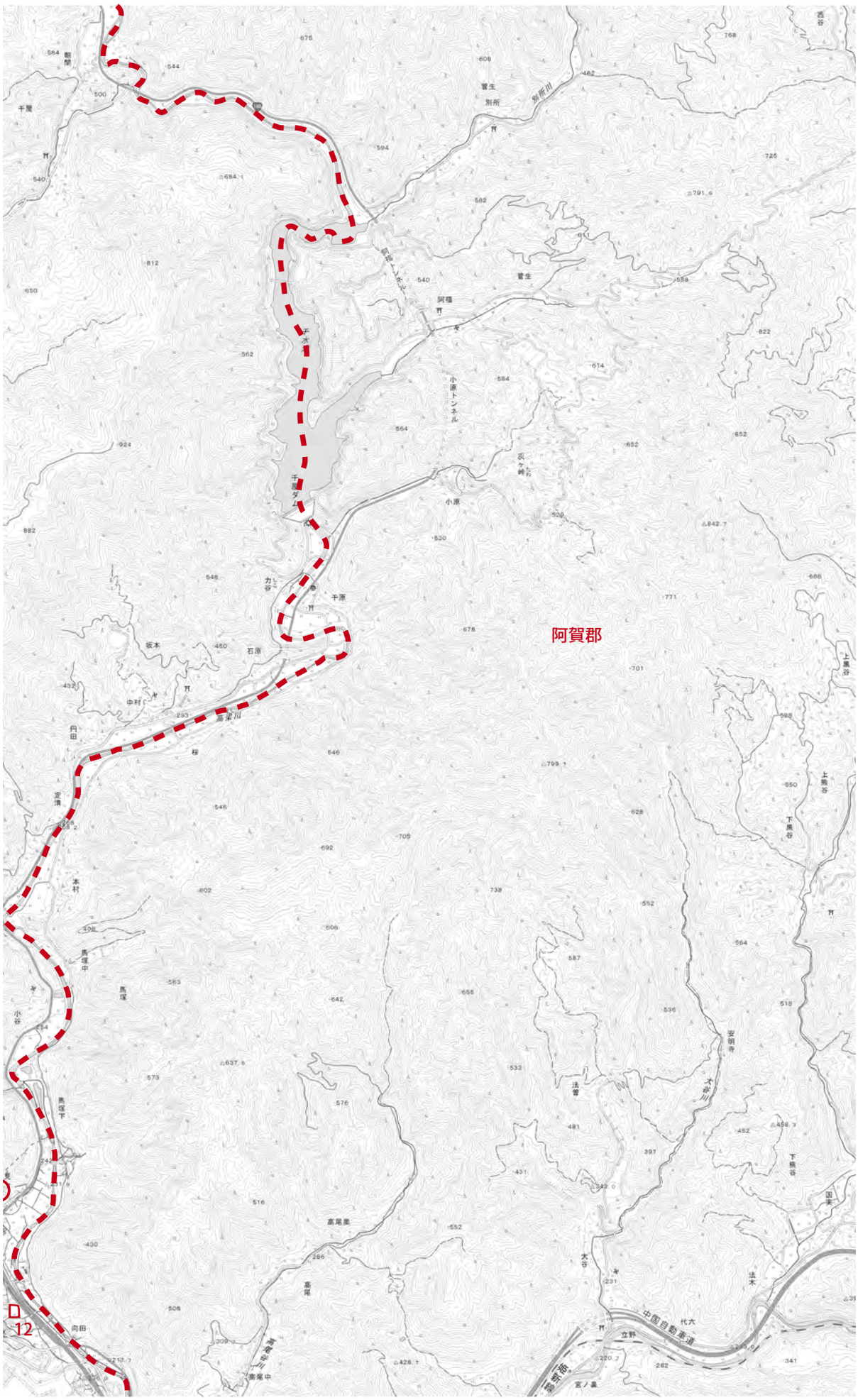
8
↓

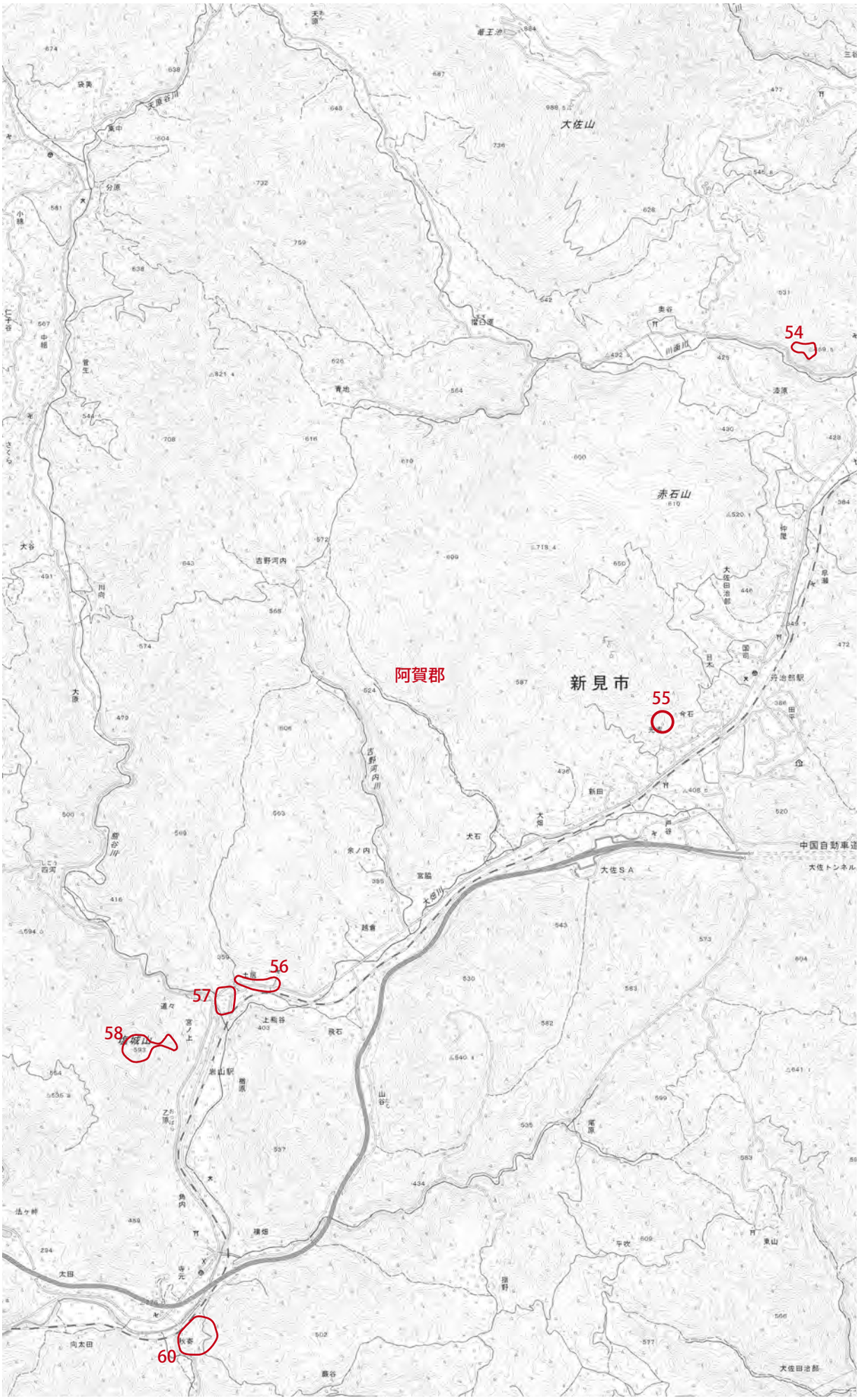
↑
2

←
4

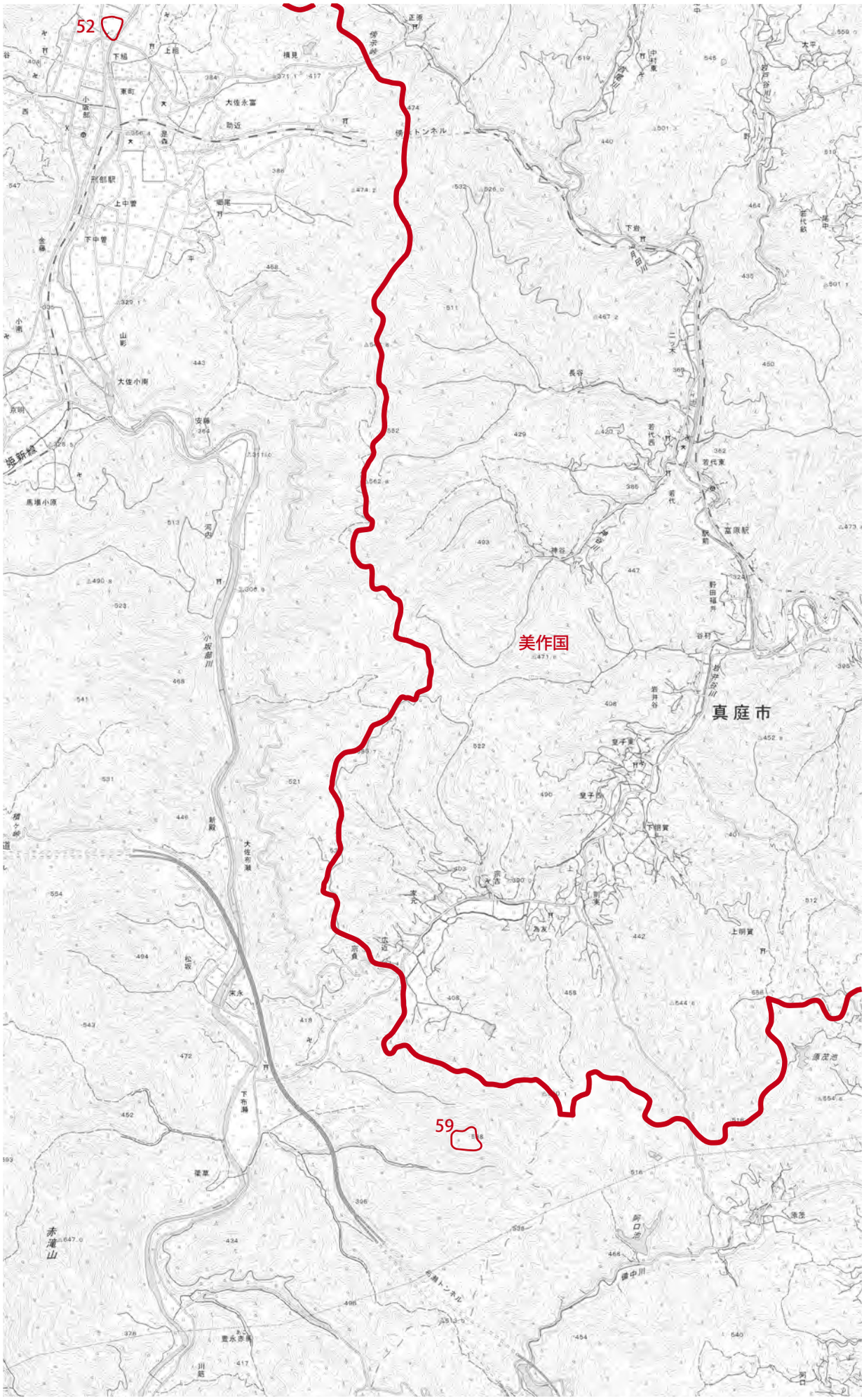
三坂川
天銀山
本村
下吉川
上吉川
哲多郡
新見市
足立
足立駅
油野川
伯備線
田曽
野田
矢谷
木戸
内ノ草
上市
谷内
中国自動車道
中田井屋
大庭
竹ノ下
小谷
8
9
10
11

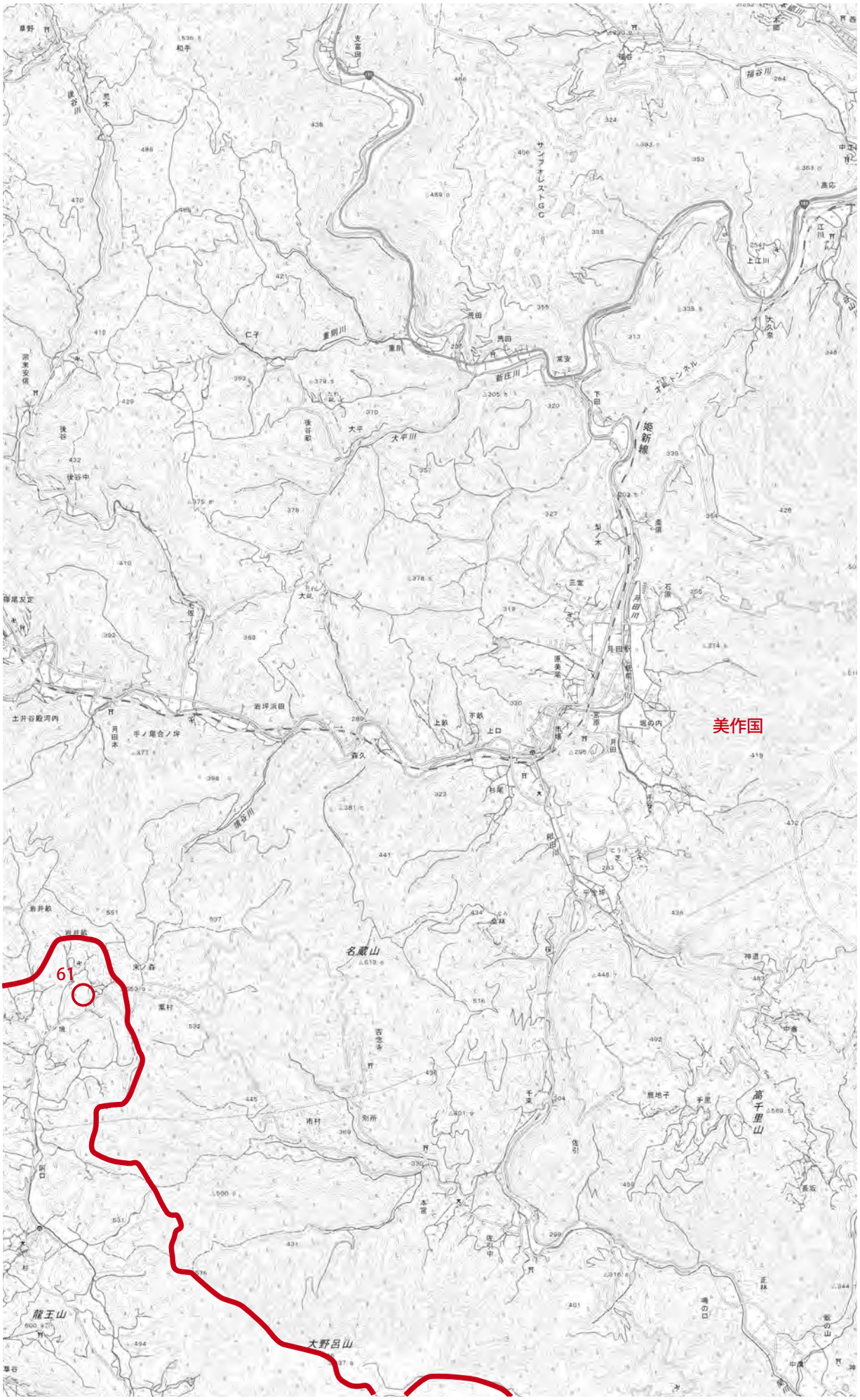
地図 5




↑
3
←
5
阿賀郡
新見市
大佐山
赤石山
54
55
56
57
58
60
大佐ＳＡ
中国自動車道
大佐トンネル
大佐川
吉野河内川
川面川

地図 6



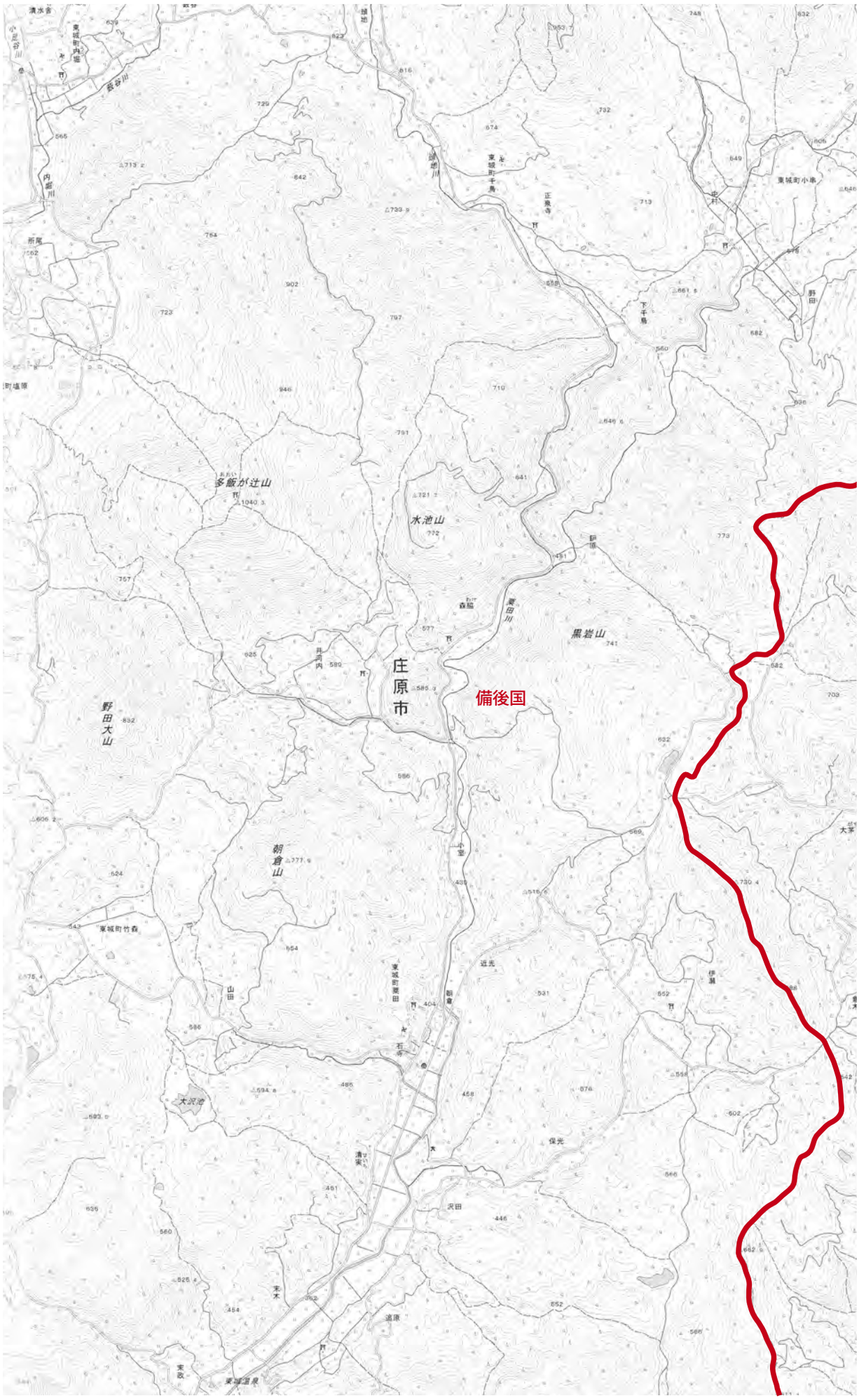


←
6

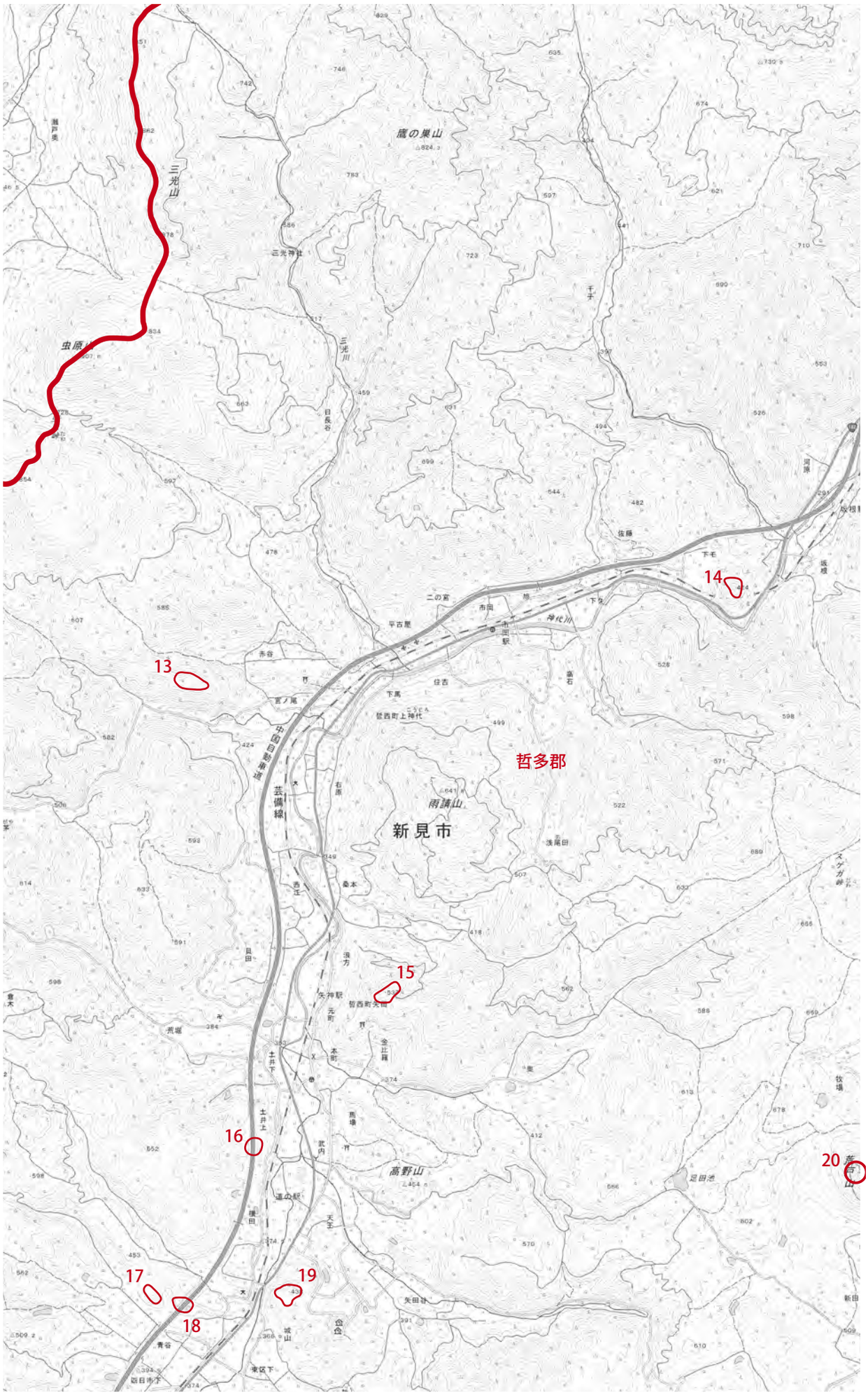
地図 7

11
↓

↑
4



地図 8



鷹の巣山
三光山
三光神社
三光川
虫原
日長谷
二の宮
平古屋
市岡
神代川
佐藤
下毛
坂根
赤谷
宮ノ尾
下馬
住吉
哲西町上神代
中国自動車道
芸備線
右原
哲多郡
雨請山
新見市
浅尾田
桑本
西江
貝田
浪方
矢神駅
哲西町矢田
荒堀
土井下
土井上
本町
金比羅
馬場
武内
高野山
道の駅
横田
天王
矢田谷
足田池
青谷
城山
東区下
四日市下
13
14
15
16
17
18
19
20

→ 9

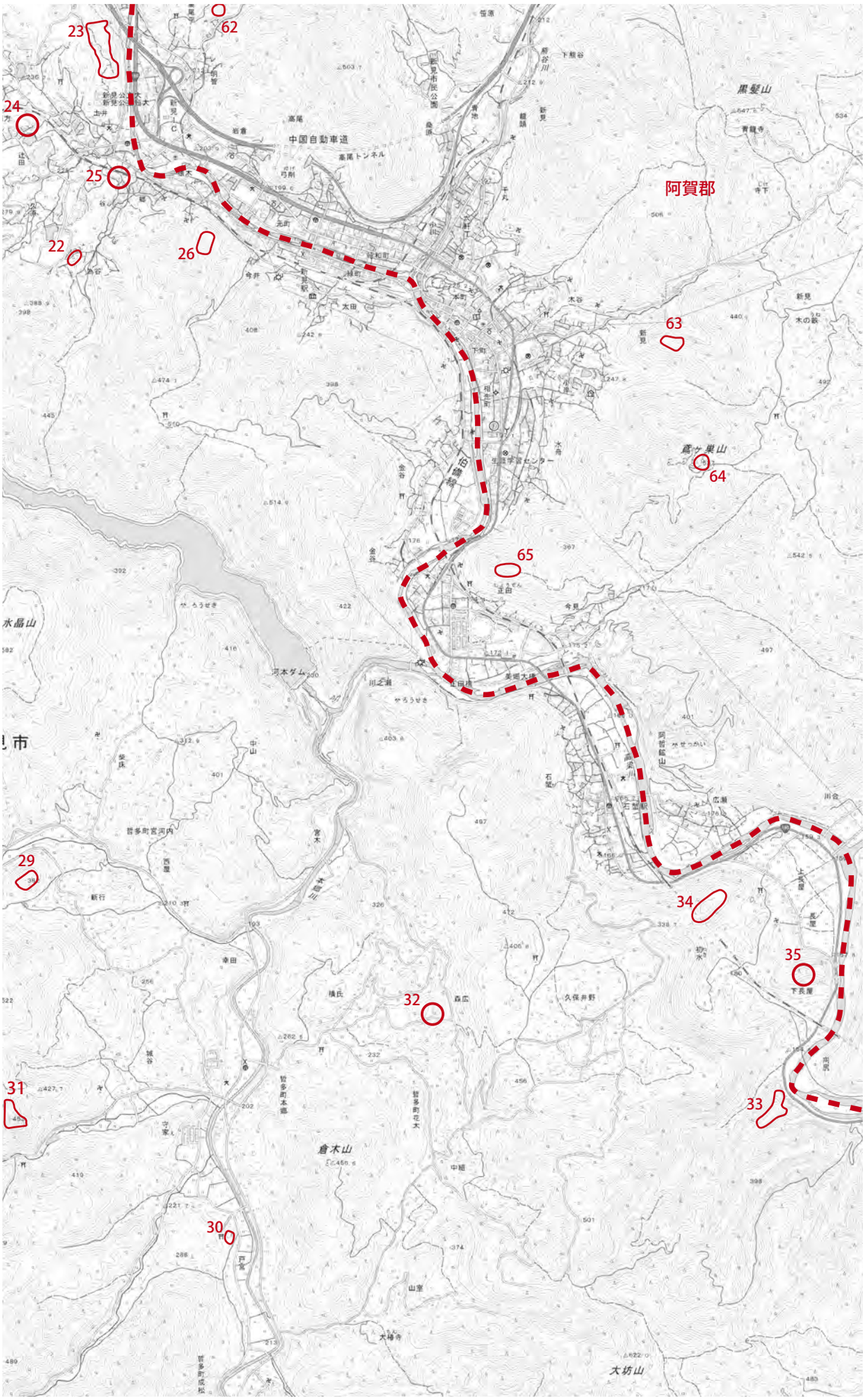
12 ↓

↑
5

←
8

21
20
27
28
哲多郡
新見
中国自動車道
神郷ＰＡ
芸備線
神代川
備中神代駅
布原駅
西川
養護学校
大野本村
田渕本村
茅帽子山

地図 9

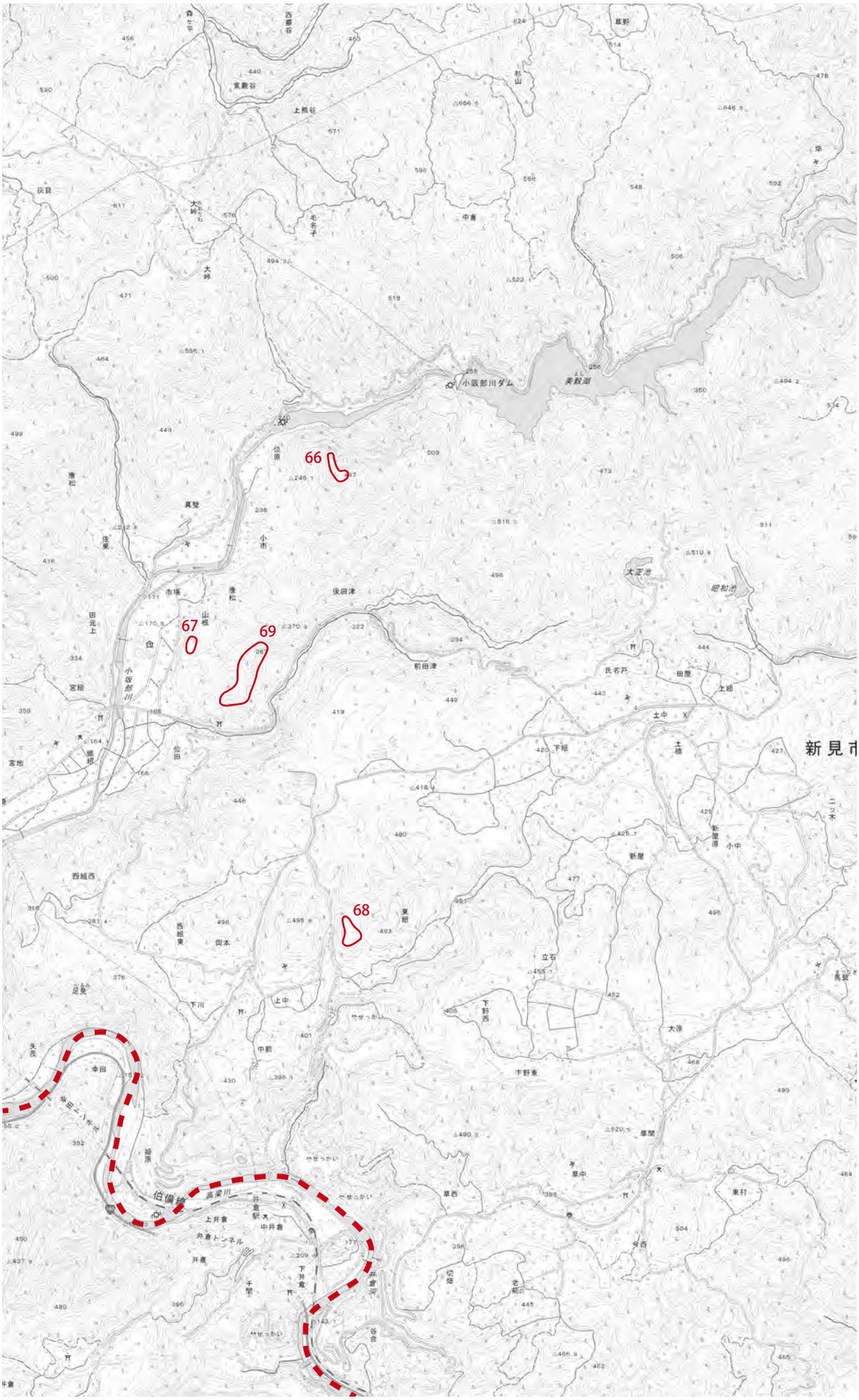


阿賀郡
中国自動車道
黒髪山
鳶ヶ巣山
倉木山
大坊山
水晶山
23
24
25
22
26
62
63
64
65
29
31
30
32
33
34
35

→ 10

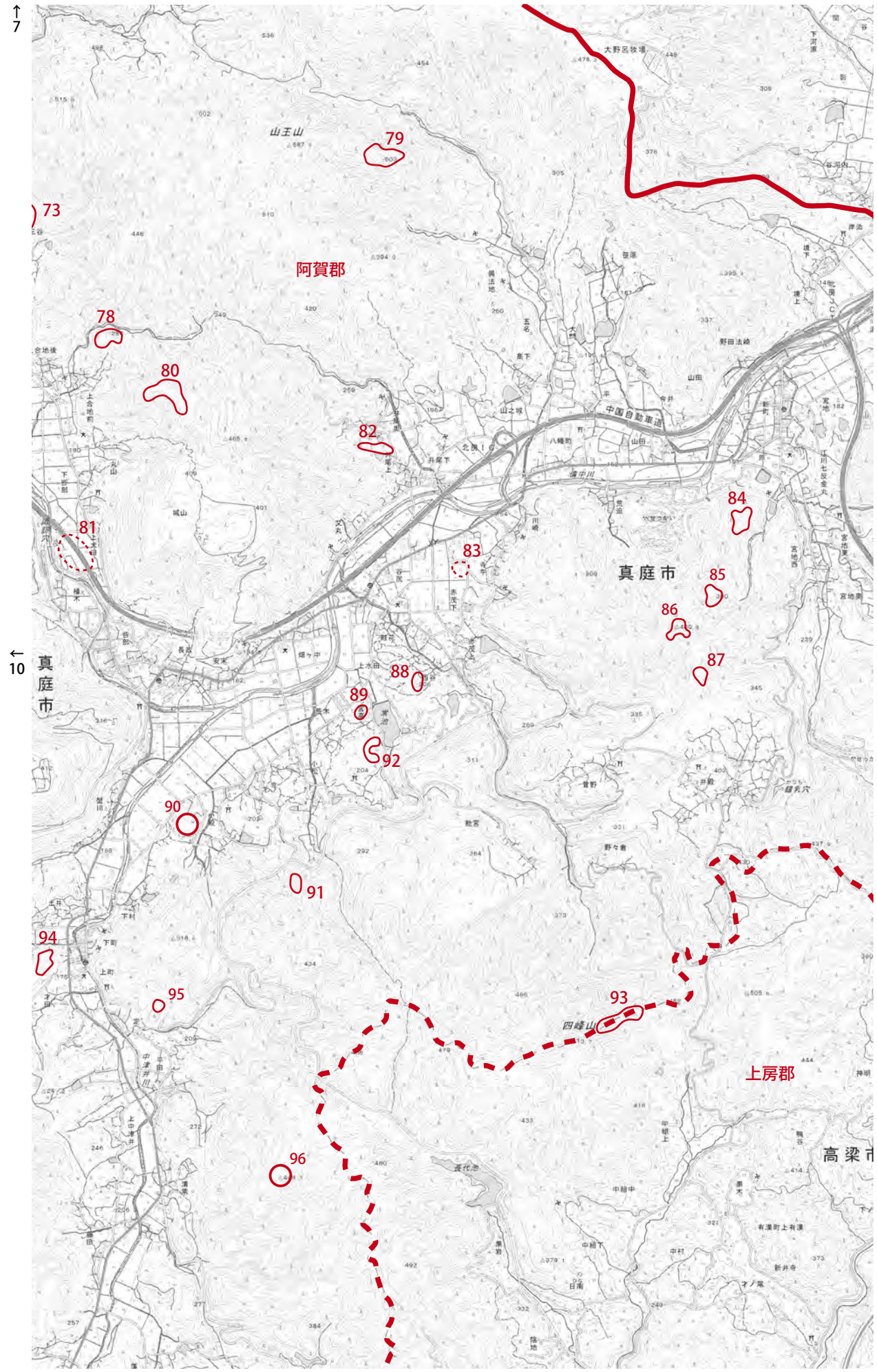
13 ↓

↑
6

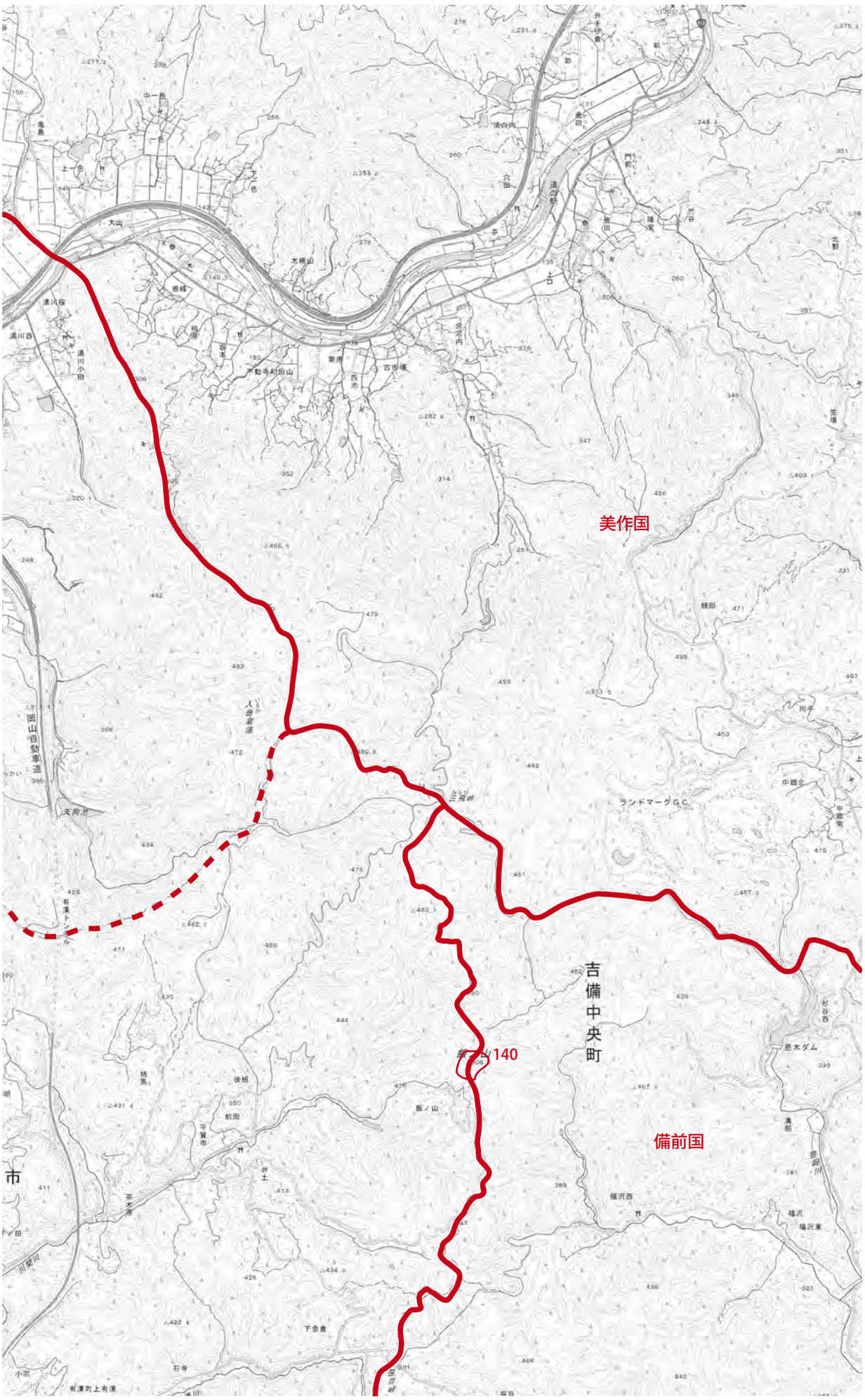


←
9

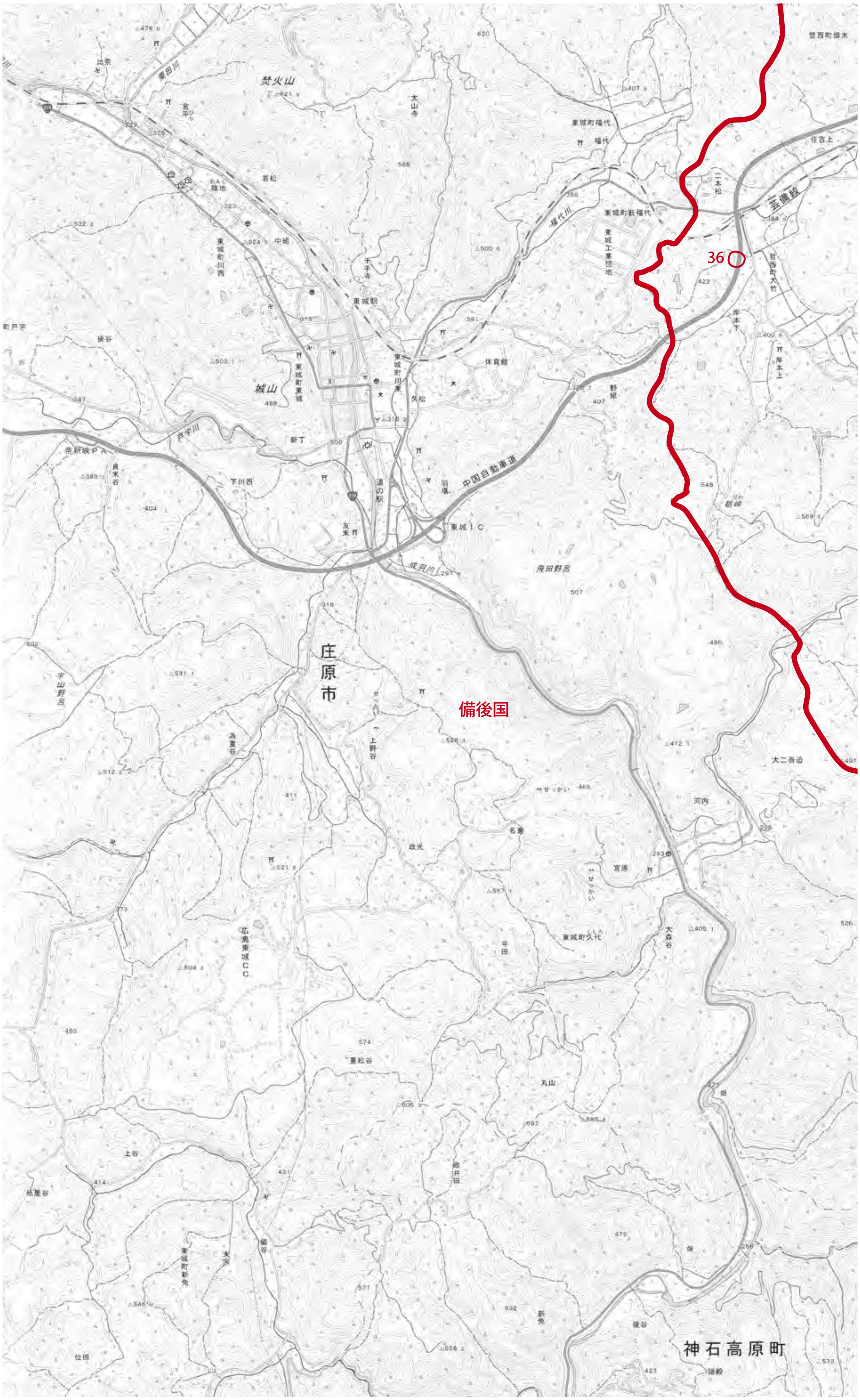
地図 10


↑
7
←
10
真庭市
山王山
79
73
阿賀郡
78
80
82
81
83
84
真庭市
85
86
87
88
89
92
90
91
94
95
93
四峰山
上房郡
高梁市
96

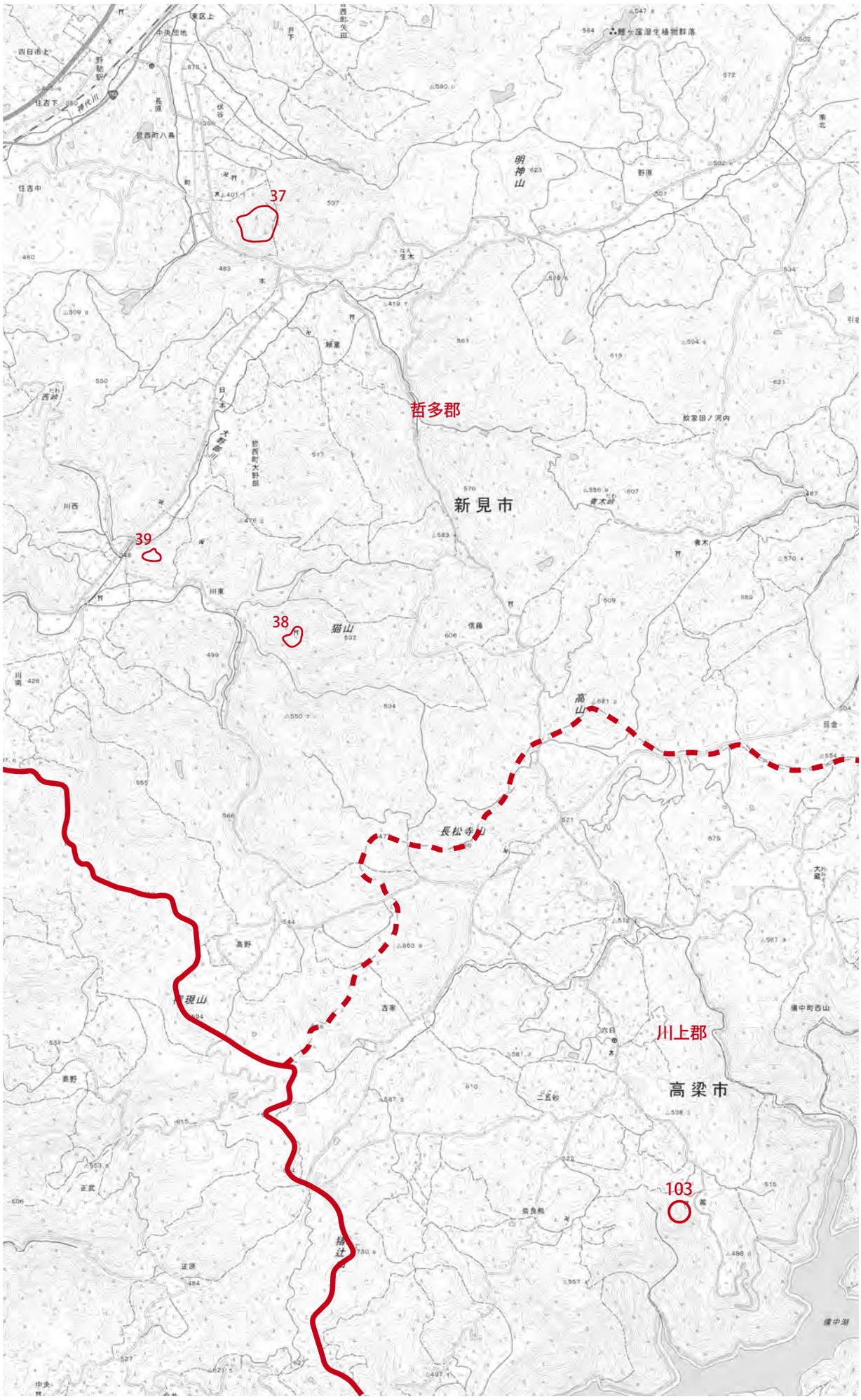
地図 11

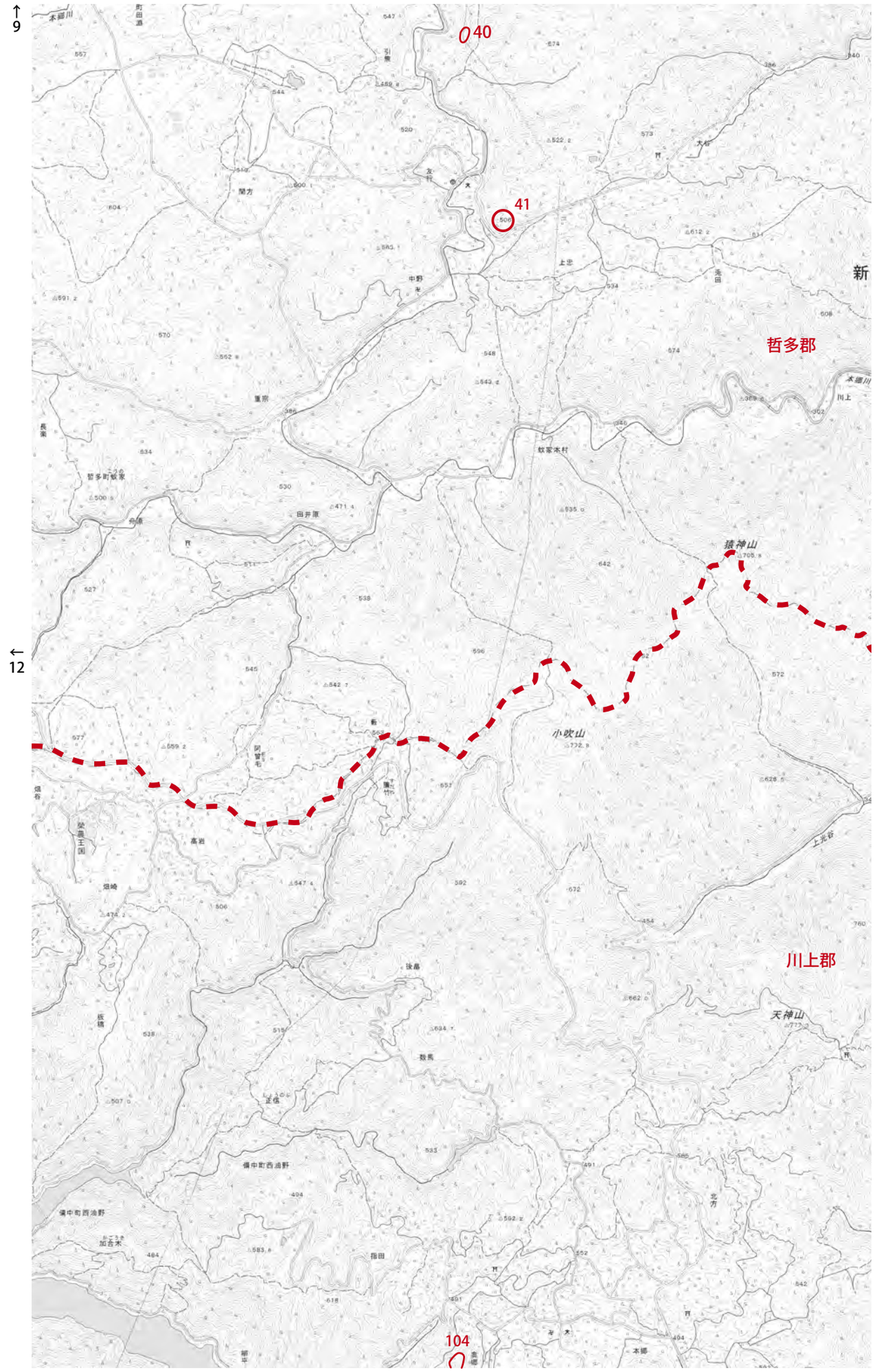


↑
8

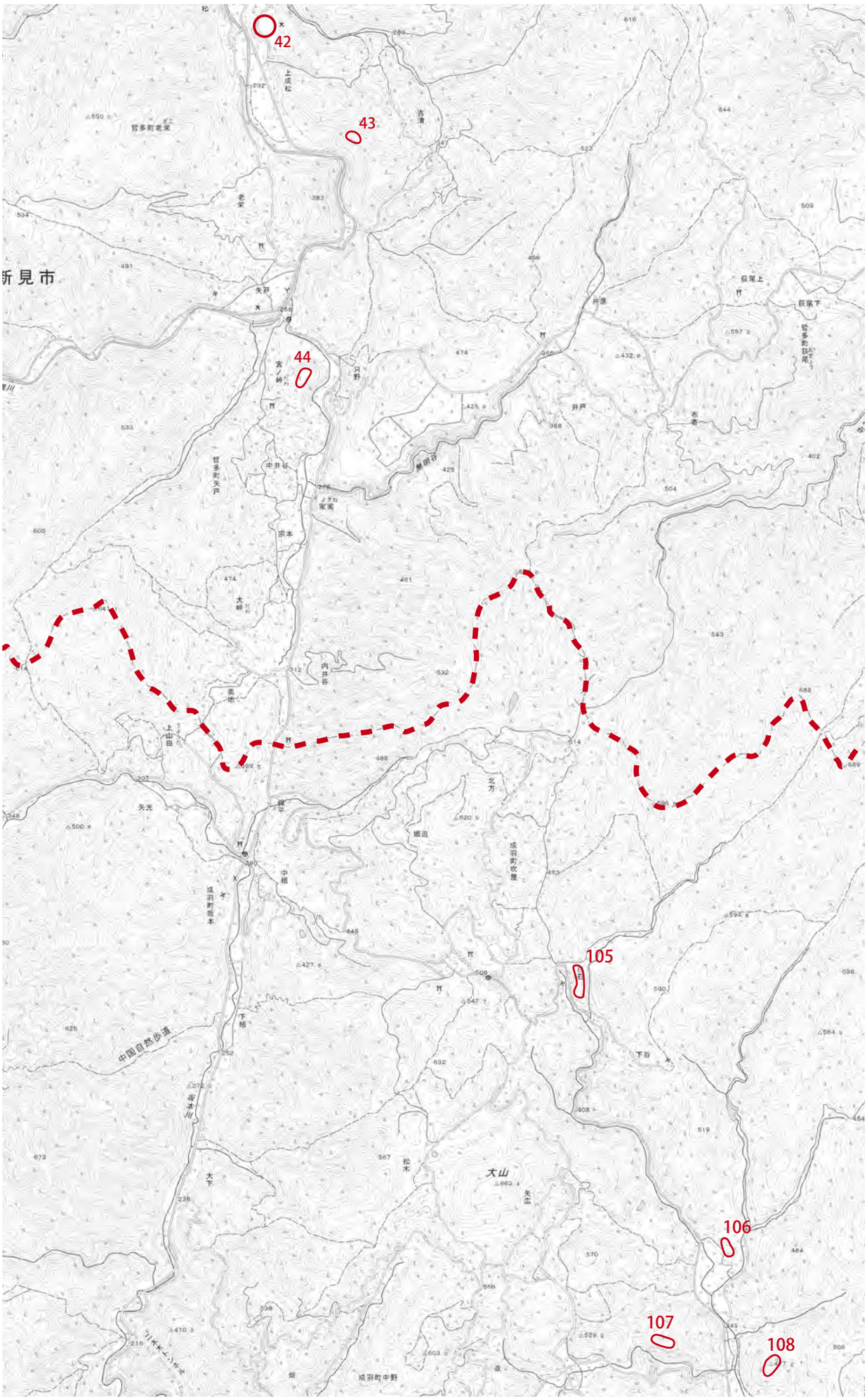

備後国
庄原市
神石高原町
36
焚火山
城山
中国自動車道
芸備線
東城駅
東城ＩＣ
道の駅
体育館
成羽川
帝釈峡ＰＡ
戸宇川
福代川
東城町福代
東城町新福代
東城町川西
東城町東城
東城町久代
広島東城ＣＣ
東城町新免
飛田野呂
宇山野呂
大二香迫
河内
宮瀬
名倉
大森谷
上野谷
重松谷
丸山
上谷
位田
後谷
若松
中組
下川西
新丁
友末
久松
岸本上
岸本下
二本松
住吉上

地図 12




↑
9
40
41
新
哲多郡
猿神山
小吹山
←
12
川上郡
天神山
104

地図 13

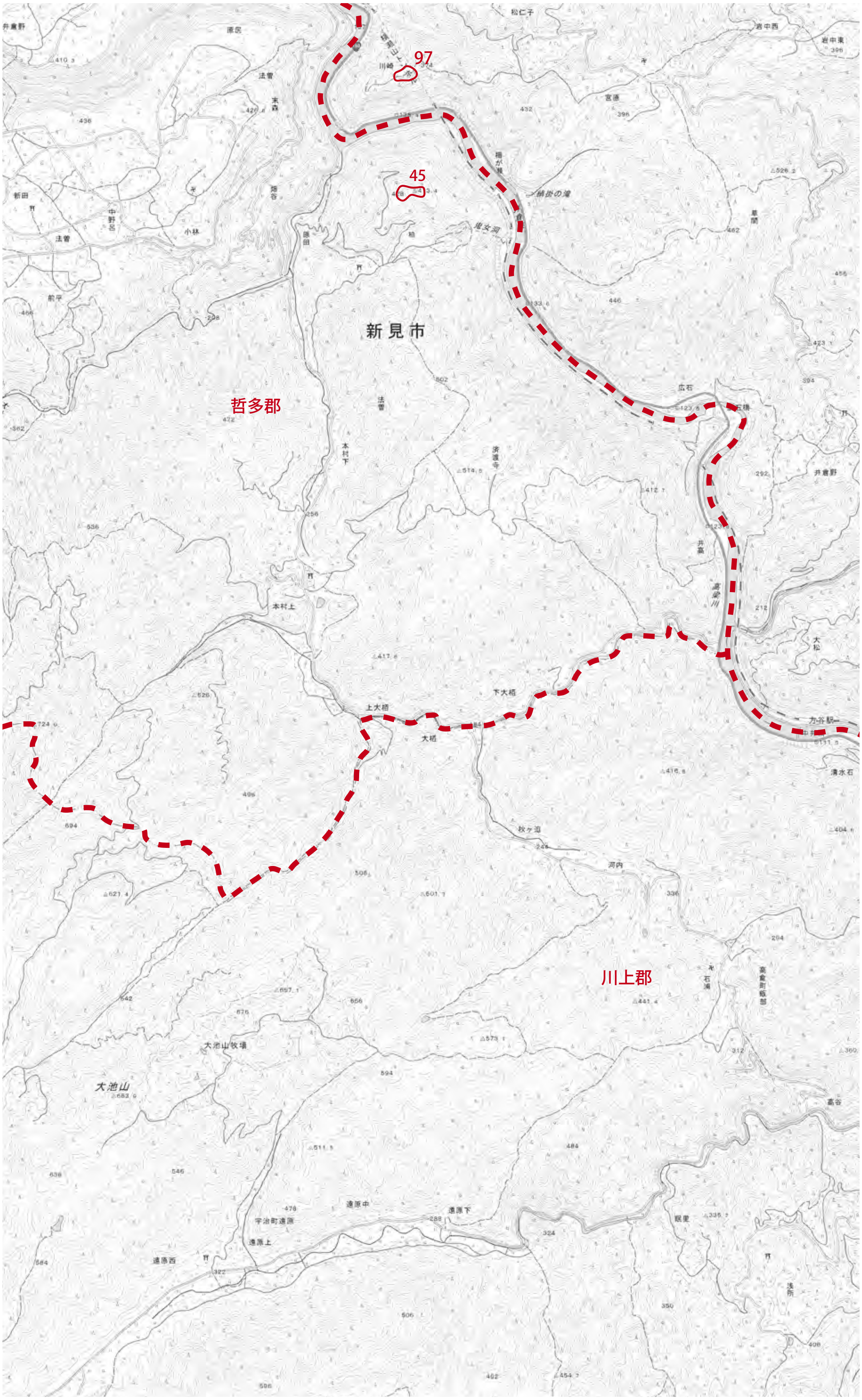


→ 14

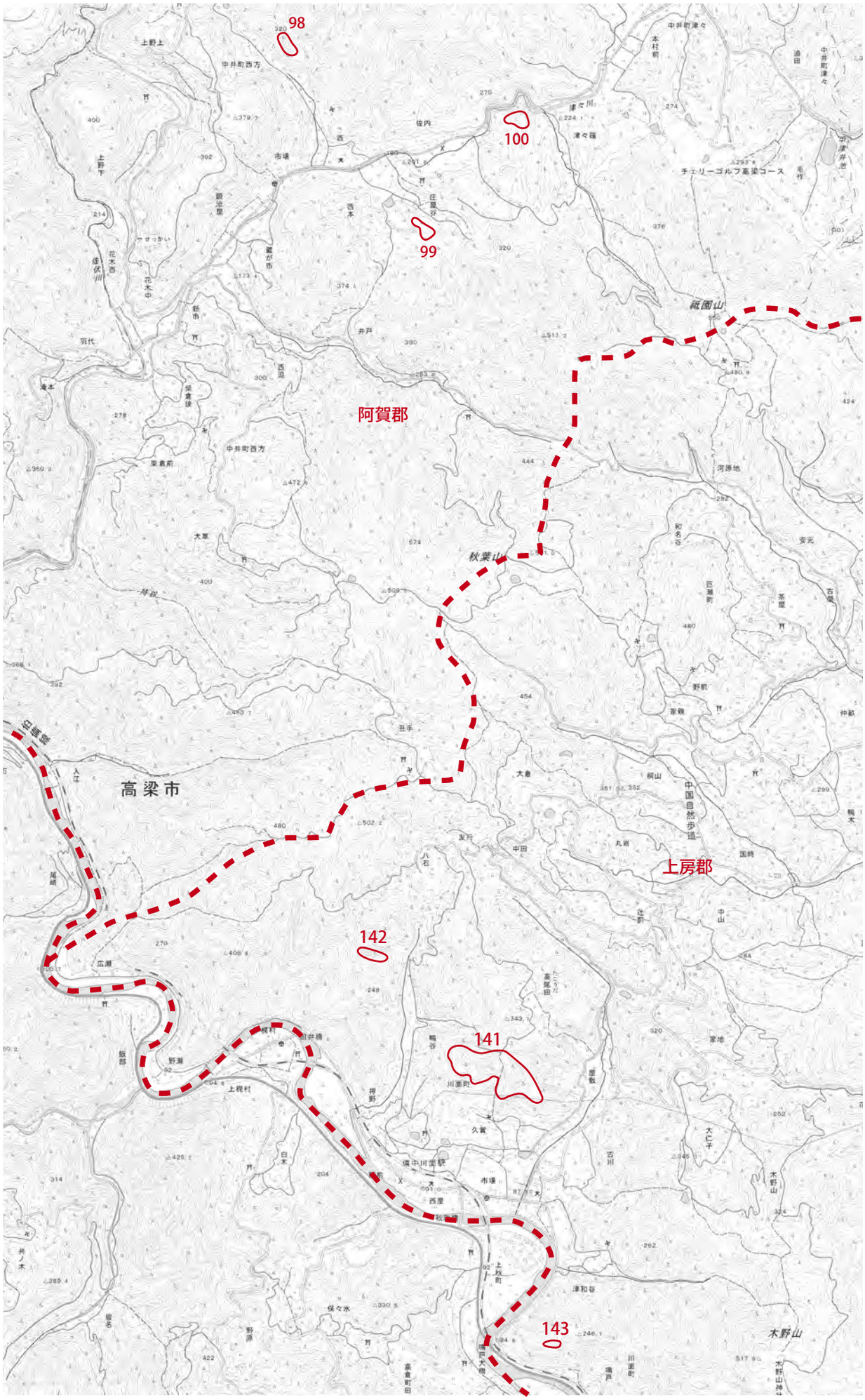
16 ↓

↑
10

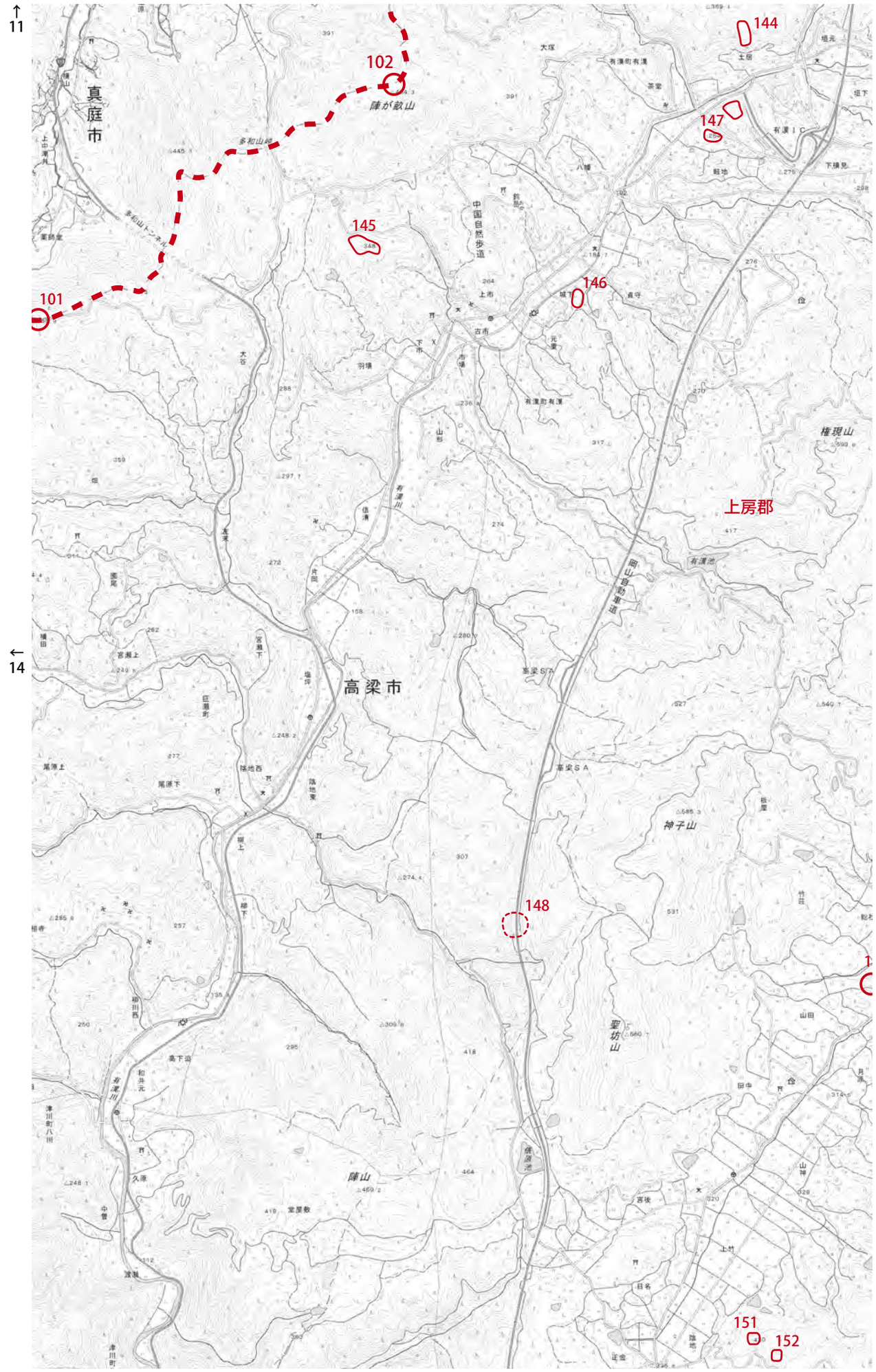
←
13



地図 14



↑
11



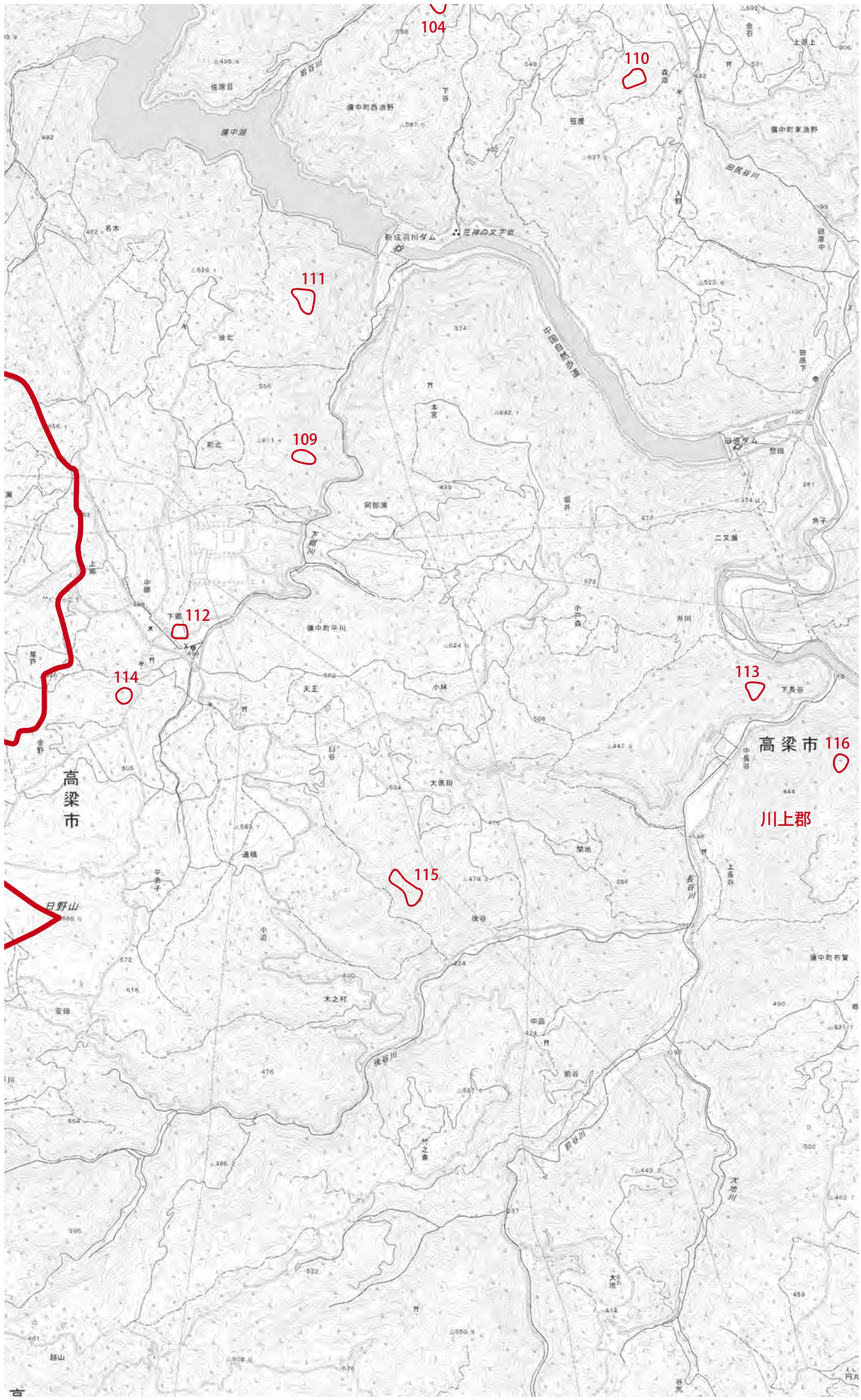
真庭市
陣が畝山
多和山峠
多和山トンネル
中国自然歩道
上市
古市
下市
市場
羽場
大谷
有漢町有漢
有漢川
有漢池
有漢ＩＣ
上房郡
権現山
岡山自動車道
高梁市
高梁ＳＡ
神子山
聖坊山
陣山
俵原池
101
102
144
145
146
147
148
151
152

←
14

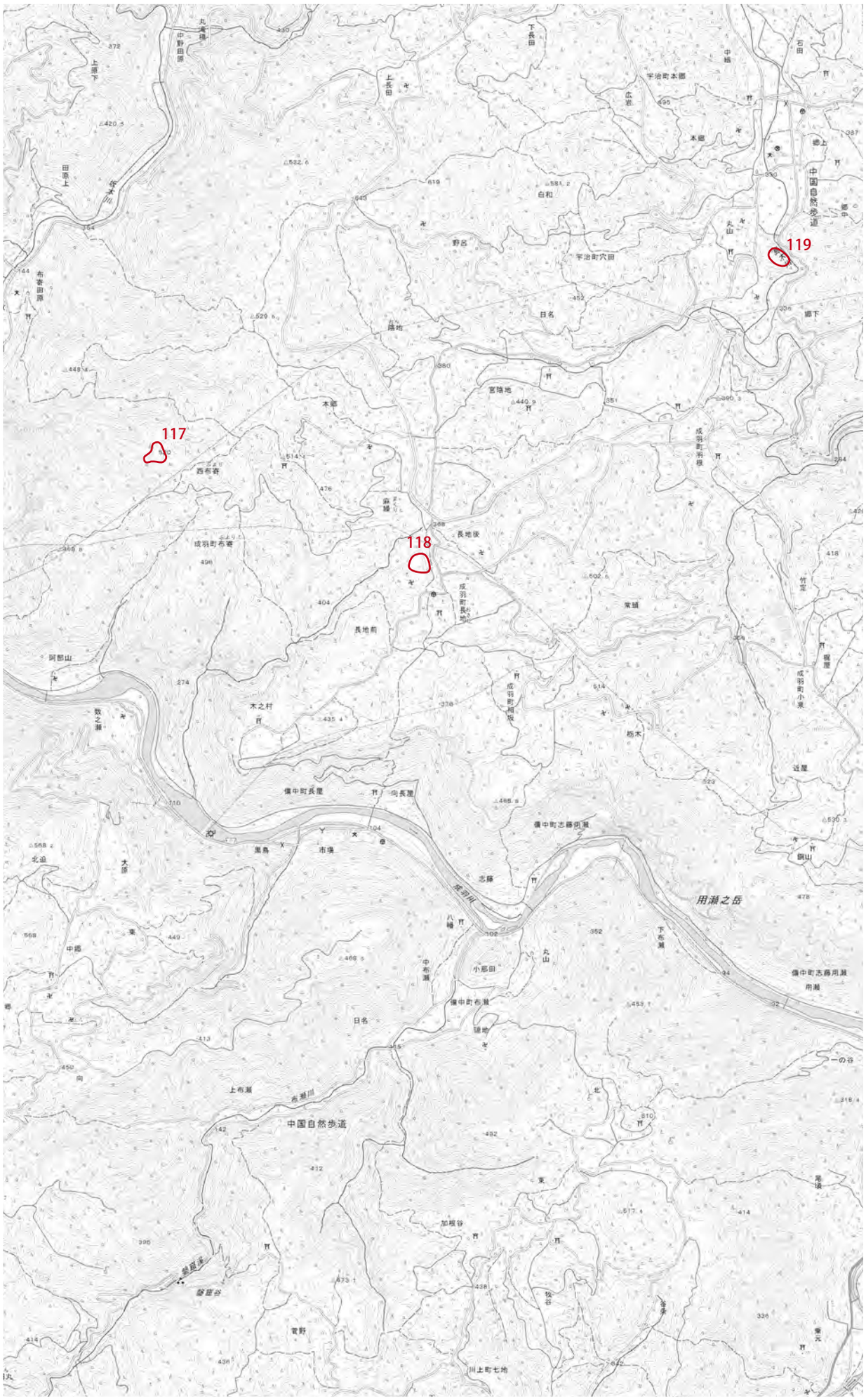
地図 15

18
↓

↑
13

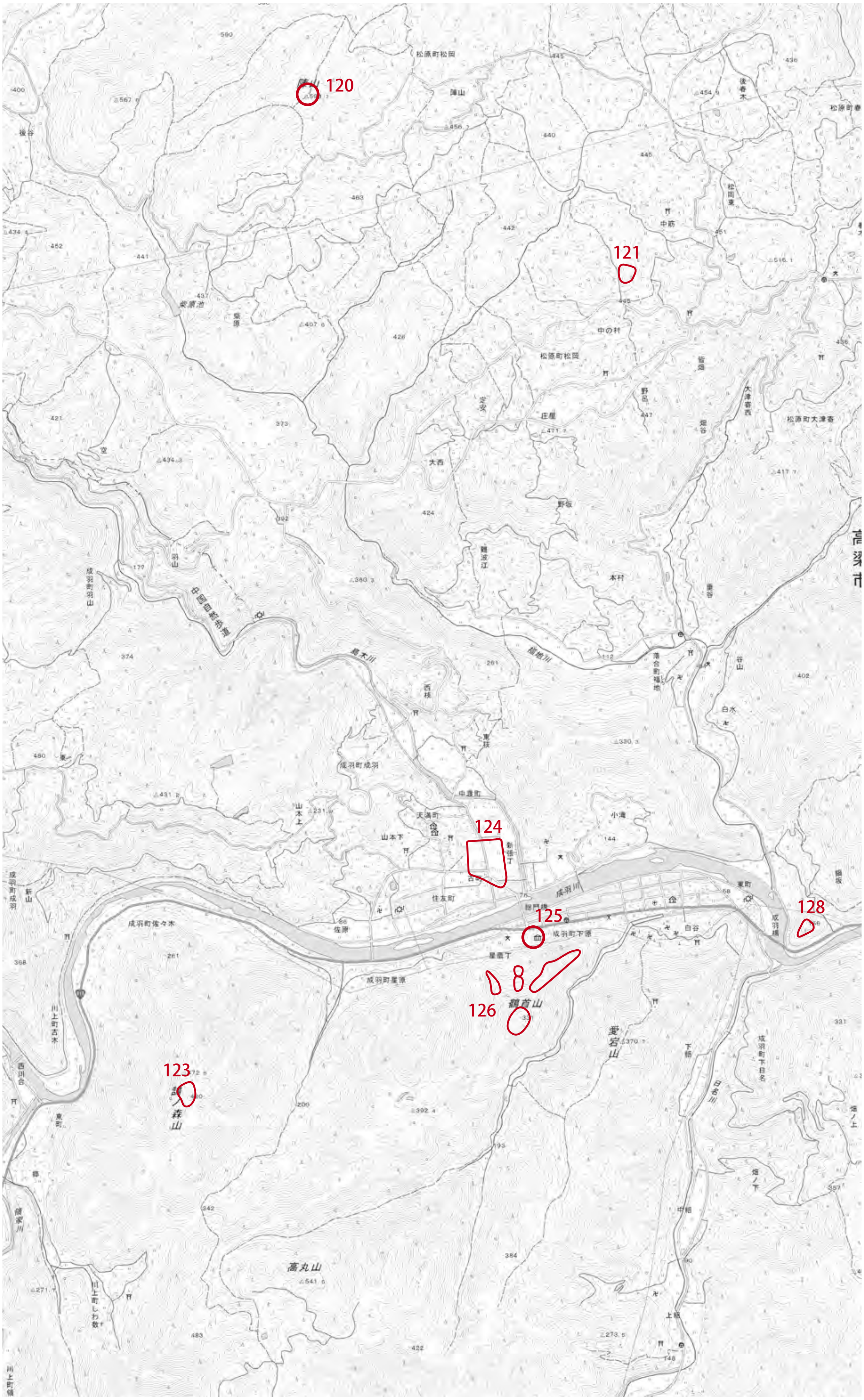

104
110
111
109
112
114
113
116
115
高梁市
川上郡
高梁市
日野山
備中湖
新成羽川ダム
笠神の文芋岩
備中町西油野
備中町東油野
備中町平川
備中町布賀
中国自然歩道
田原ダム
二又瀬
大原田
後谷
後谷川
前谷川
長谷川
大地川

地図 16

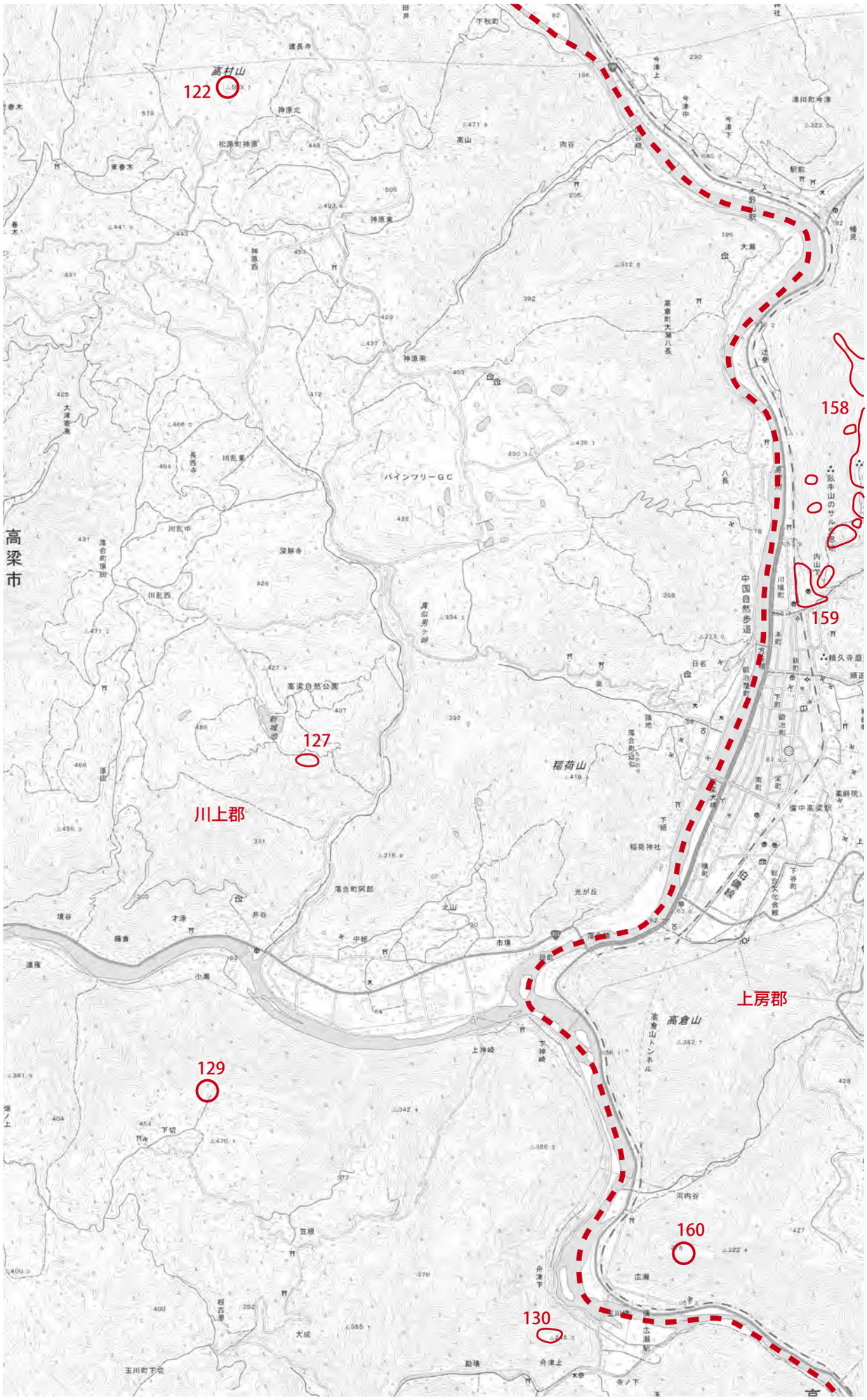


↑
14

←
16



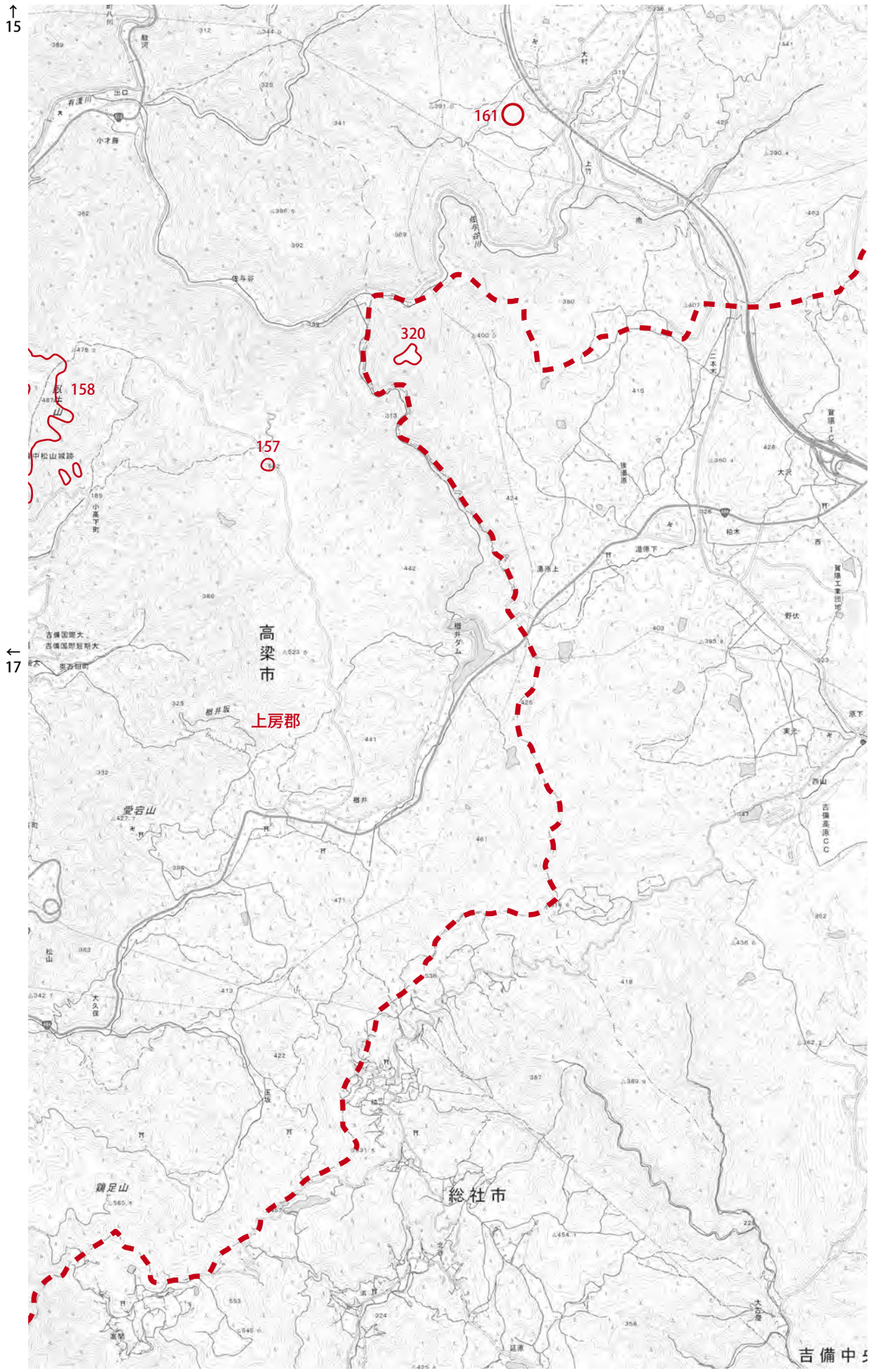
地図 17



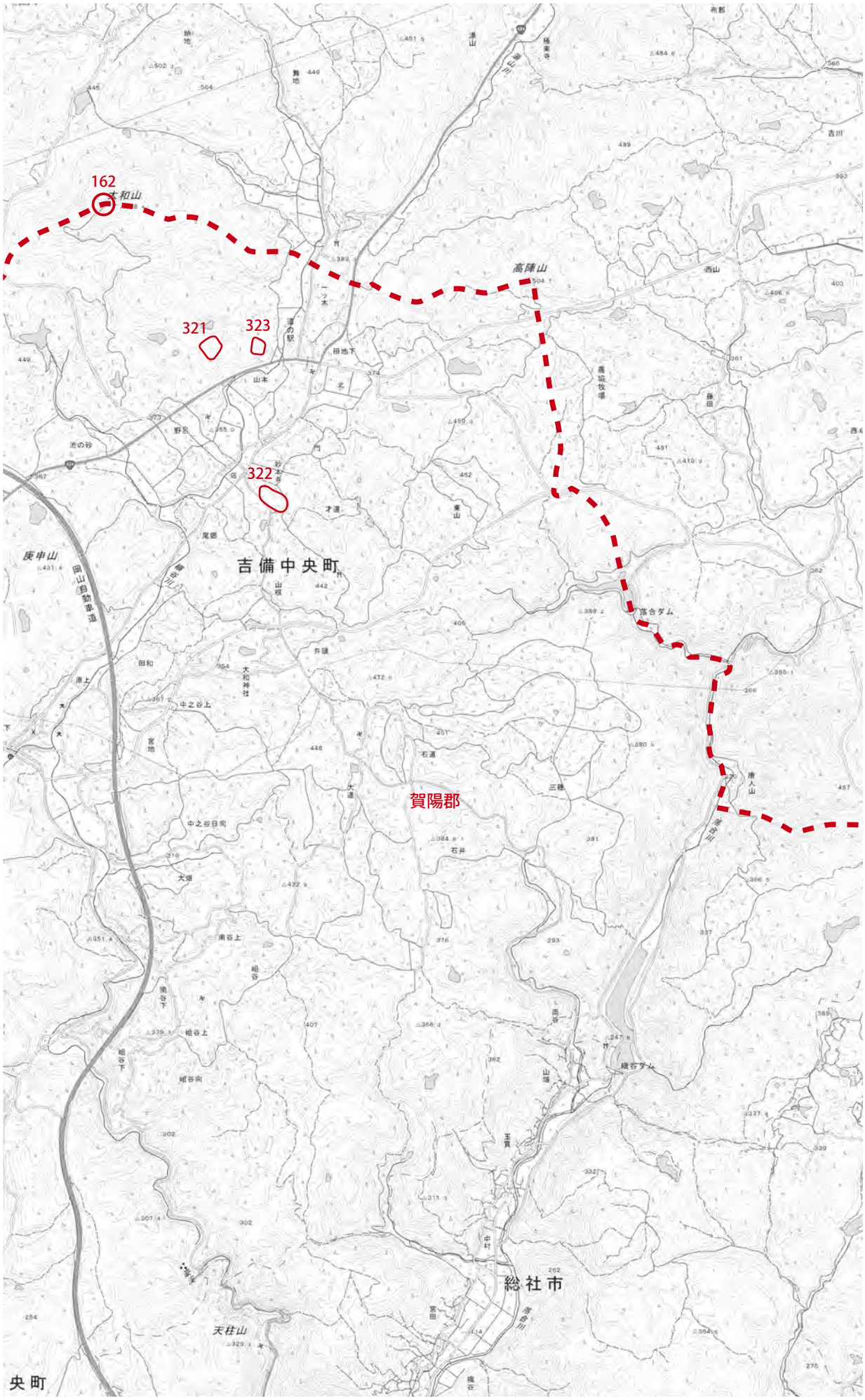
高村山
122
158
159
127
川上郡
稲荷山
上房郡
高倉山
129
160
130
高梁市
パインツリーGC
中国自然歩道
高梁自然公園

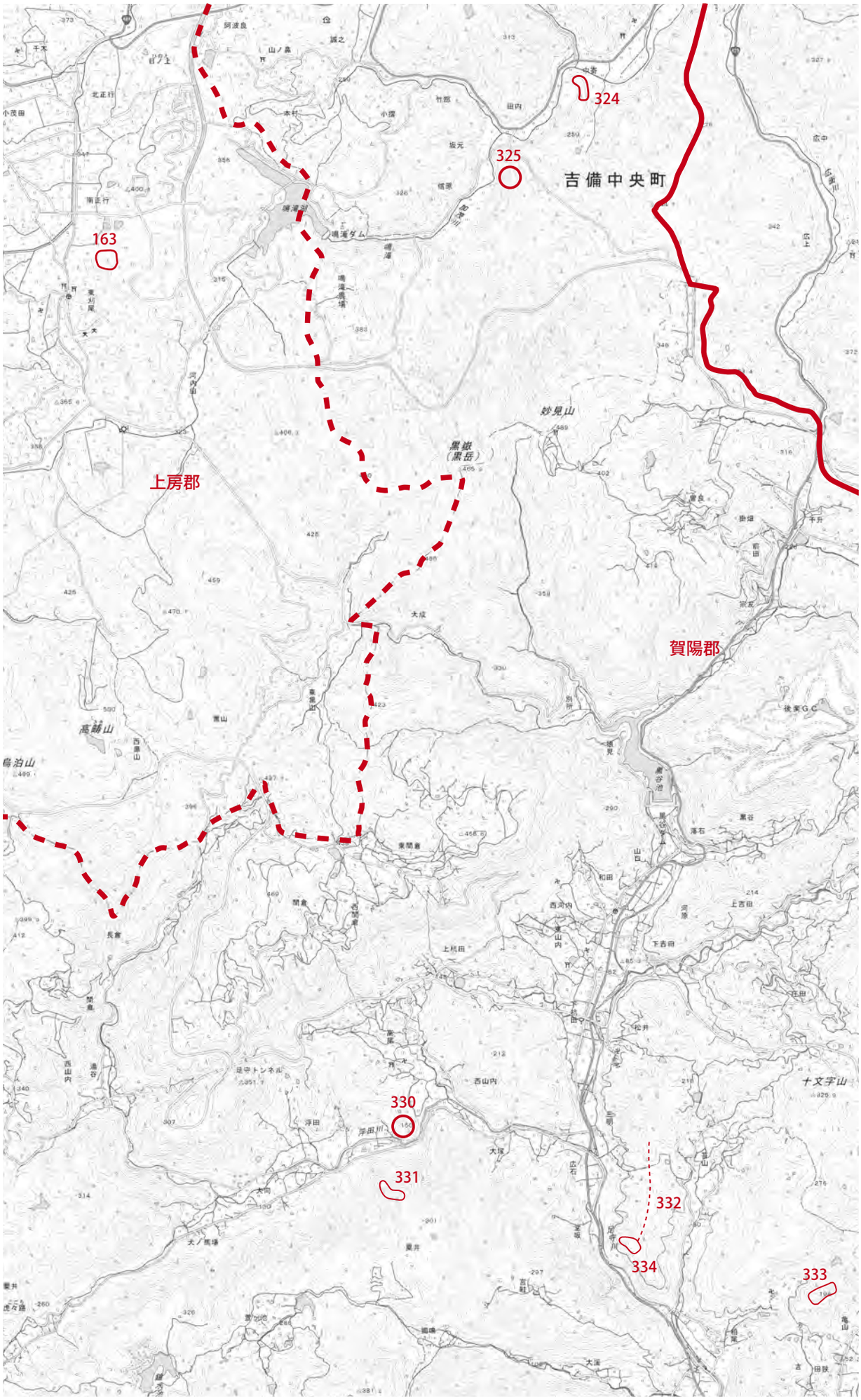
→ 18

21 ↓


↑
15
161
320
158
157
高梁市
上房郡
←
17
愛宕山
鍾足山
総社市
吉備中

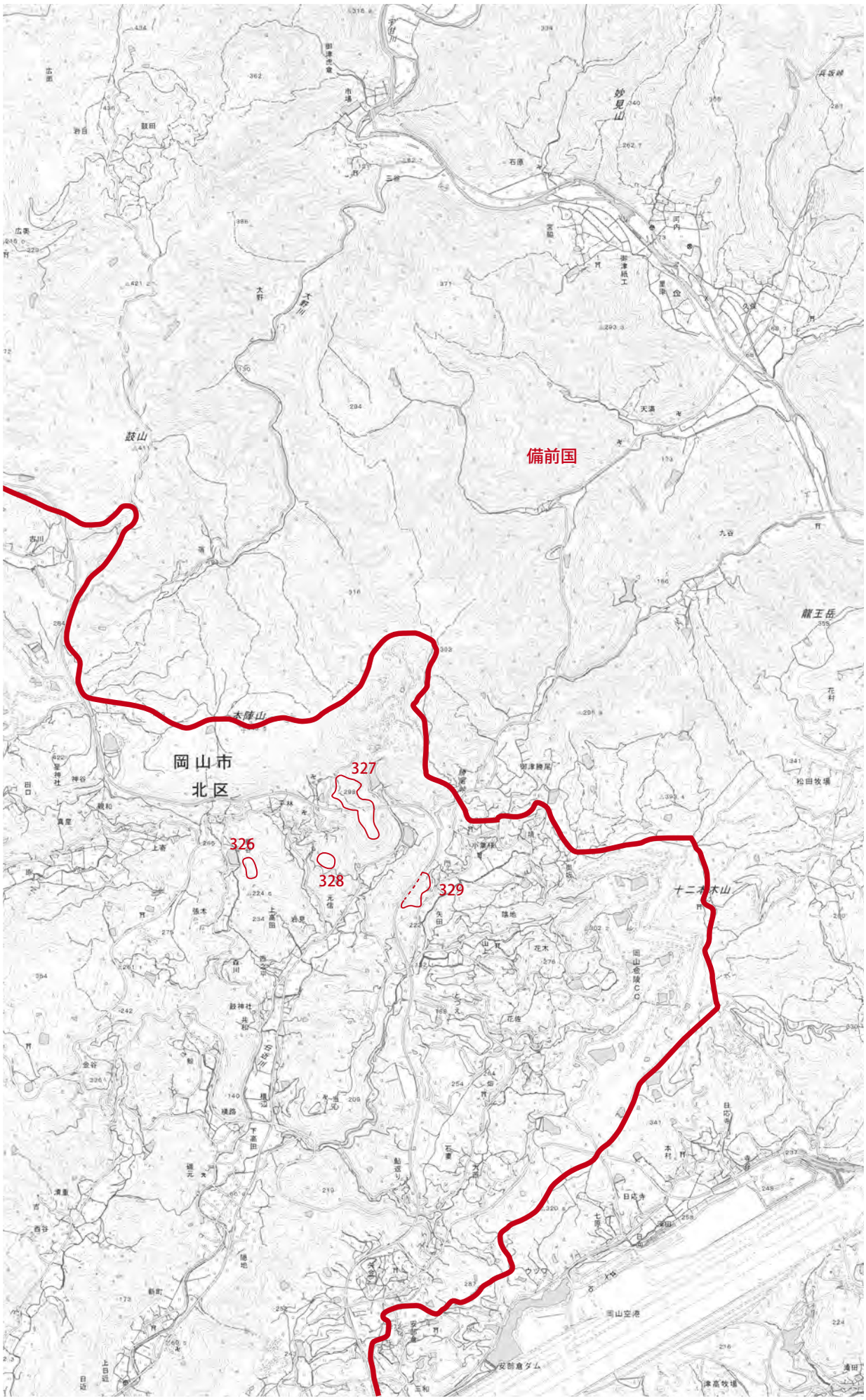
地図 18



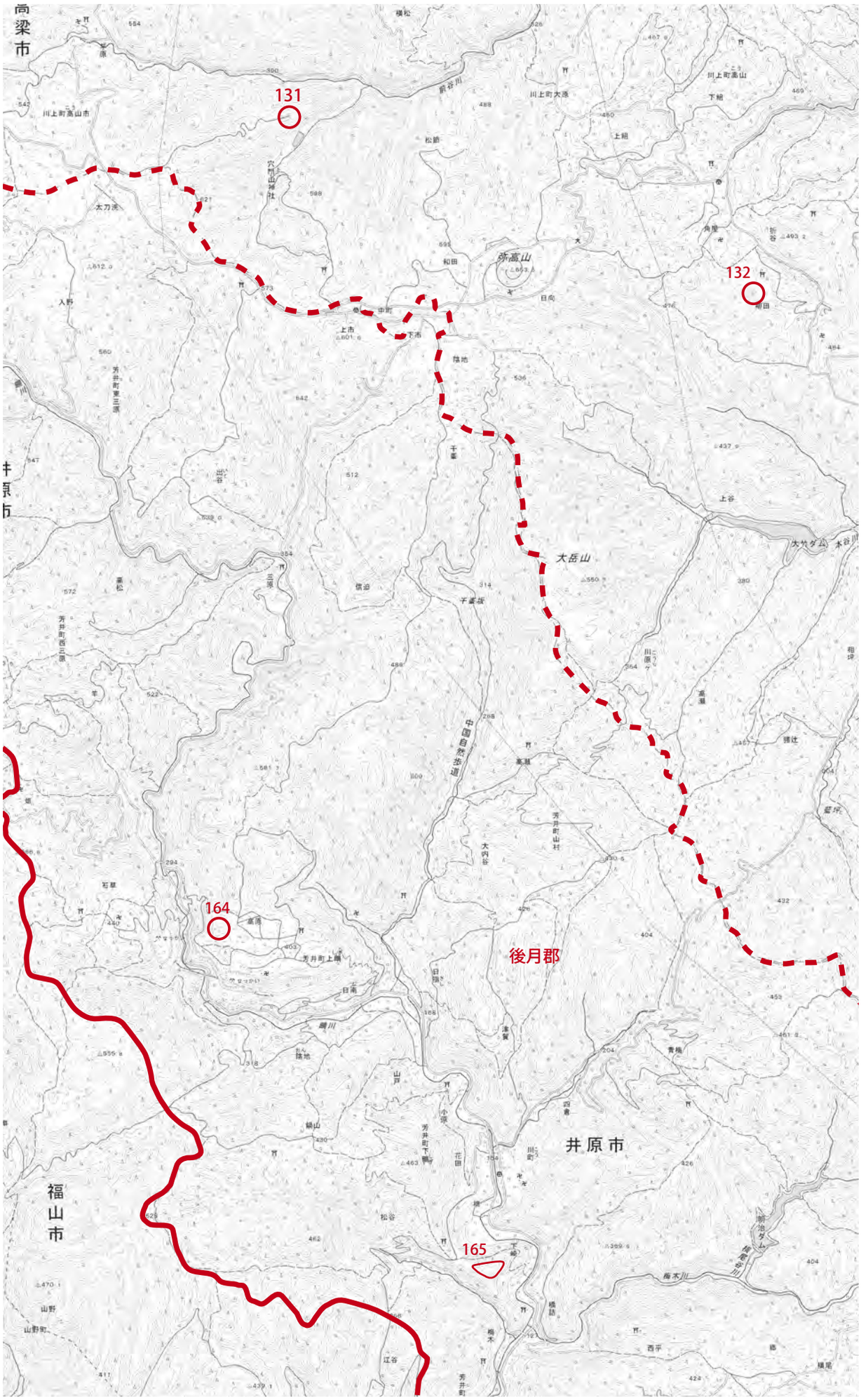


← 18

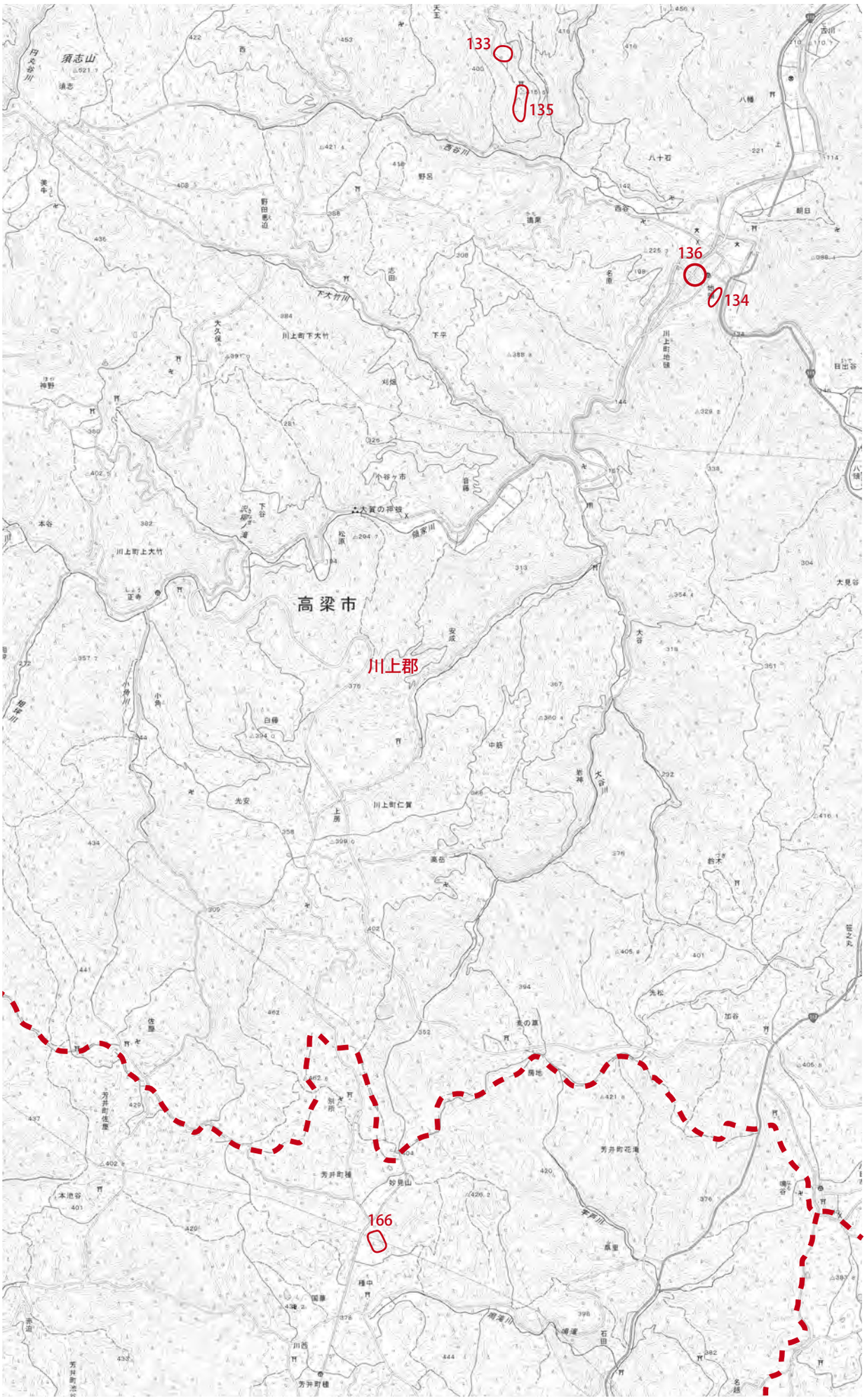
地図 19

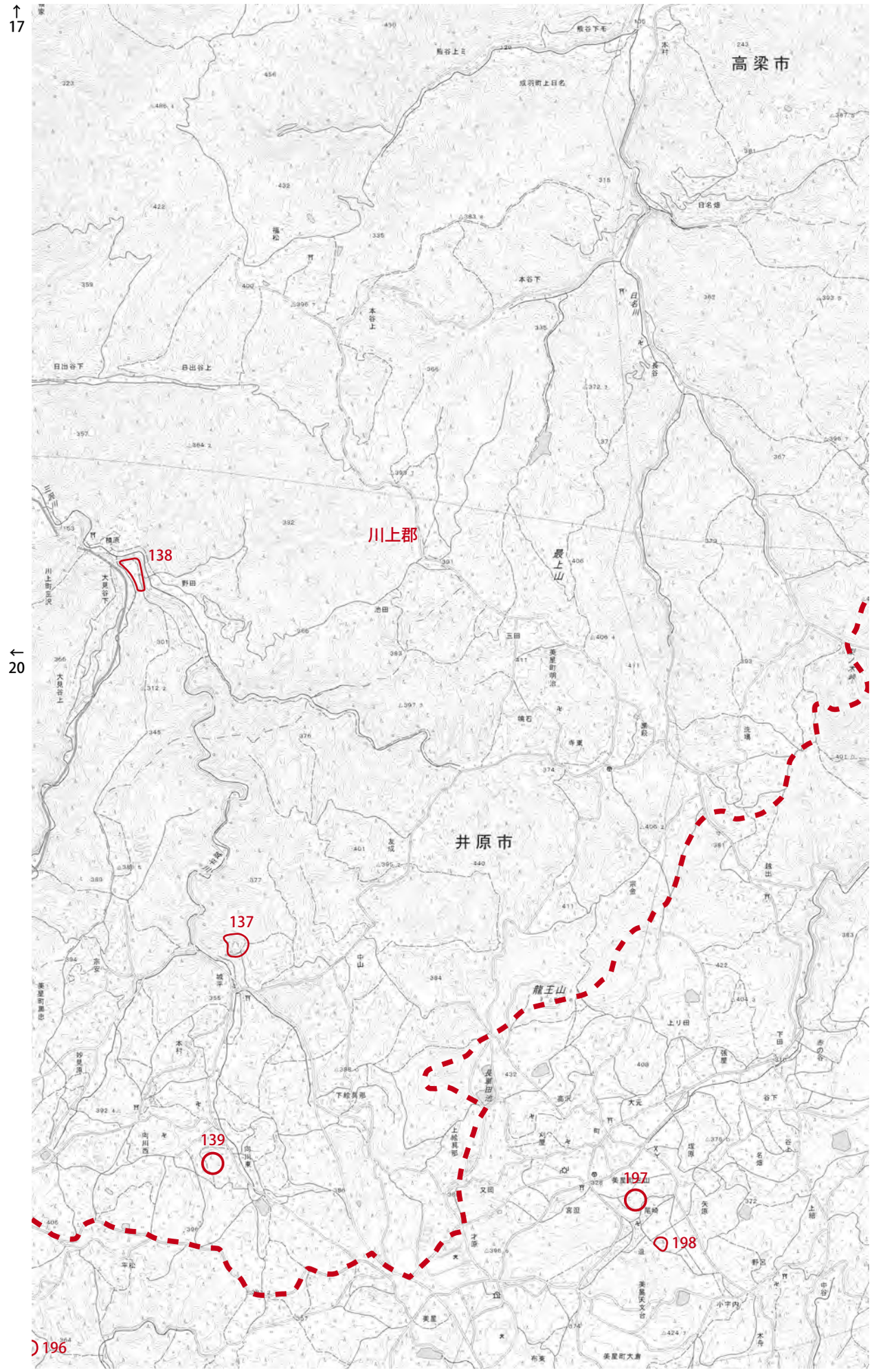


↑16

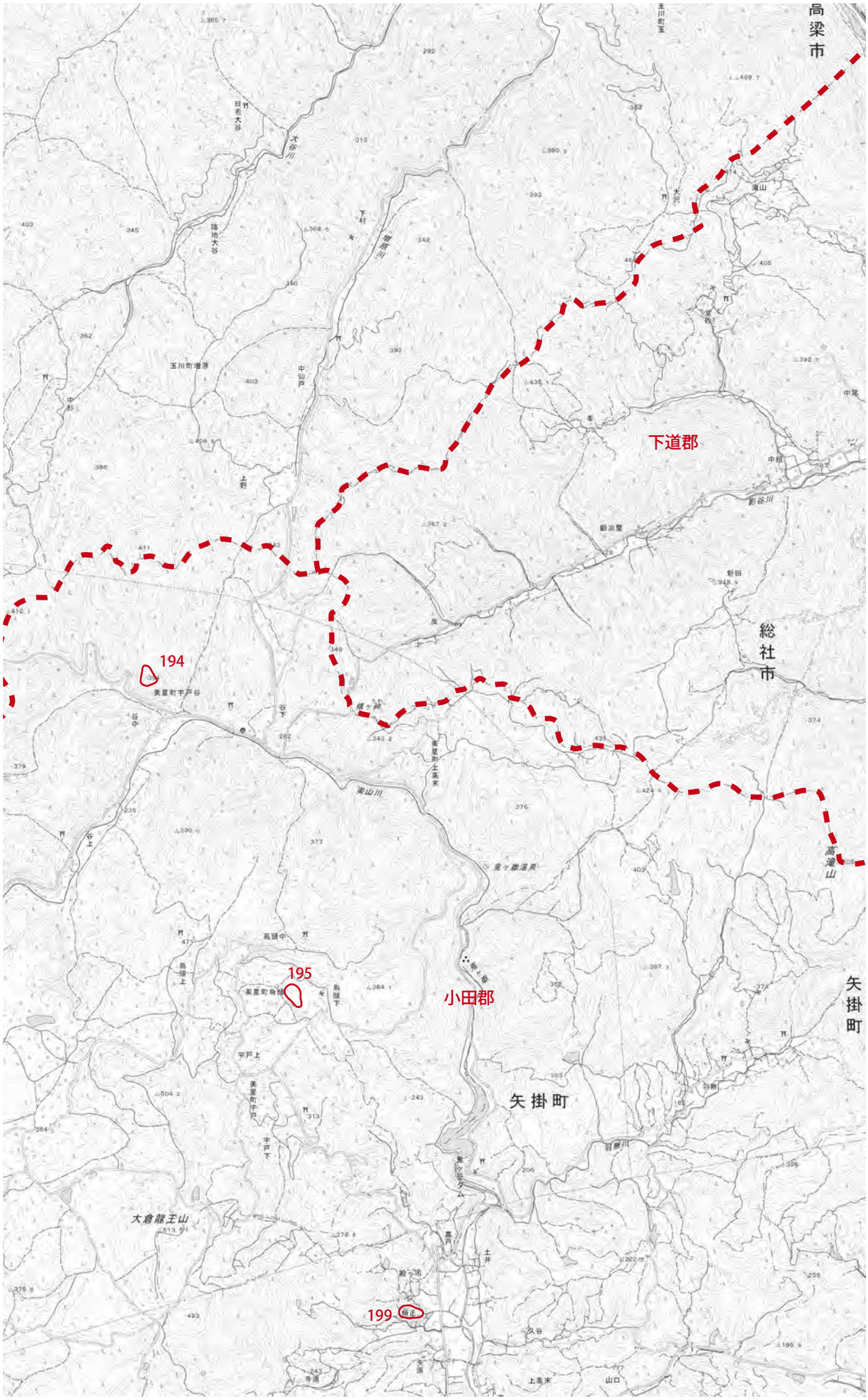


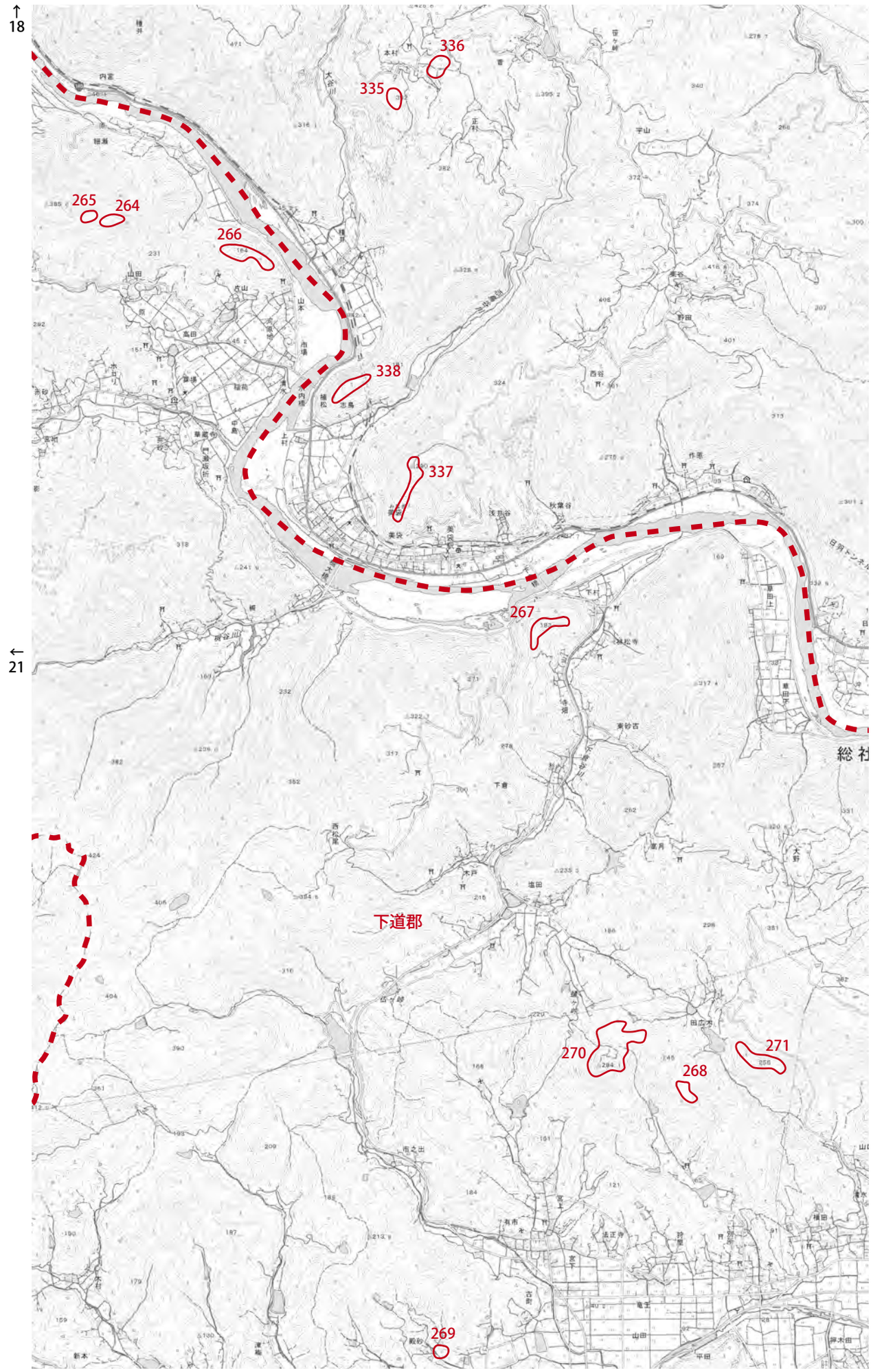
地図 20



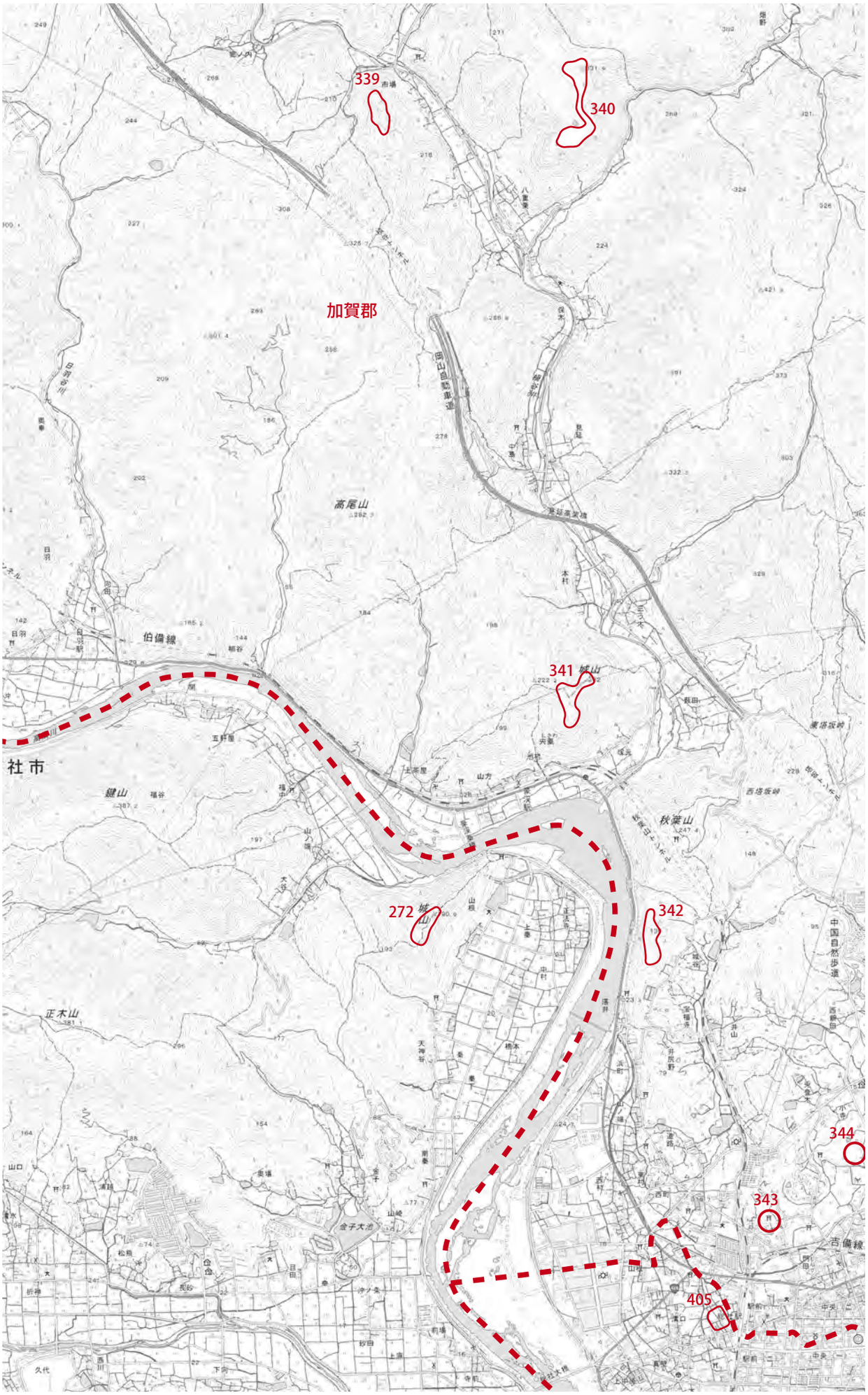

↑
17
←
20
高梁市
川上郡
井原市
138
137
139
196
197
198
龍王山
最上山

地図 21



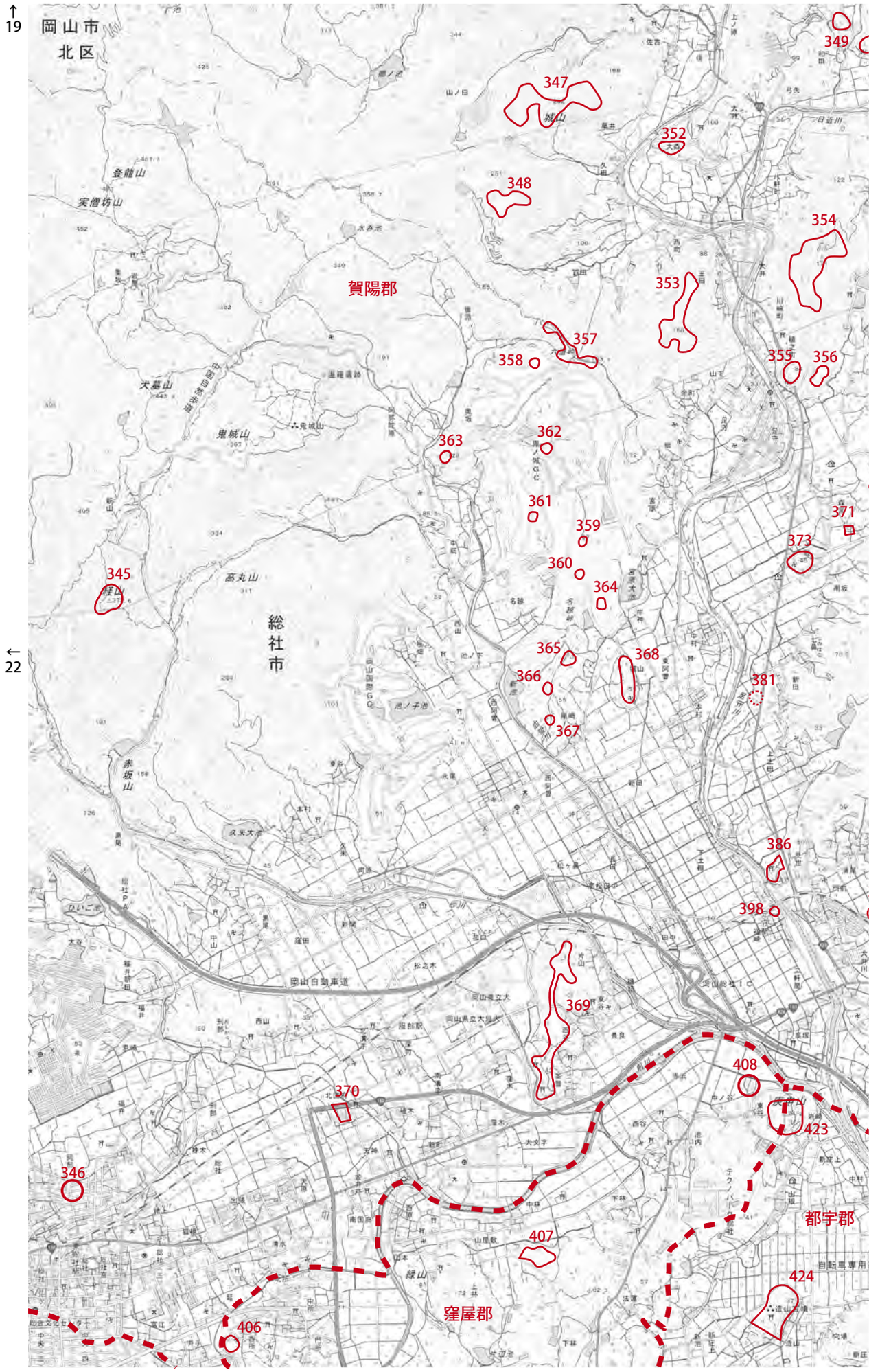

↑
18
←
21
336
335
265
264
266
338
337
267
270
271
268
269
下道郡

地図 22

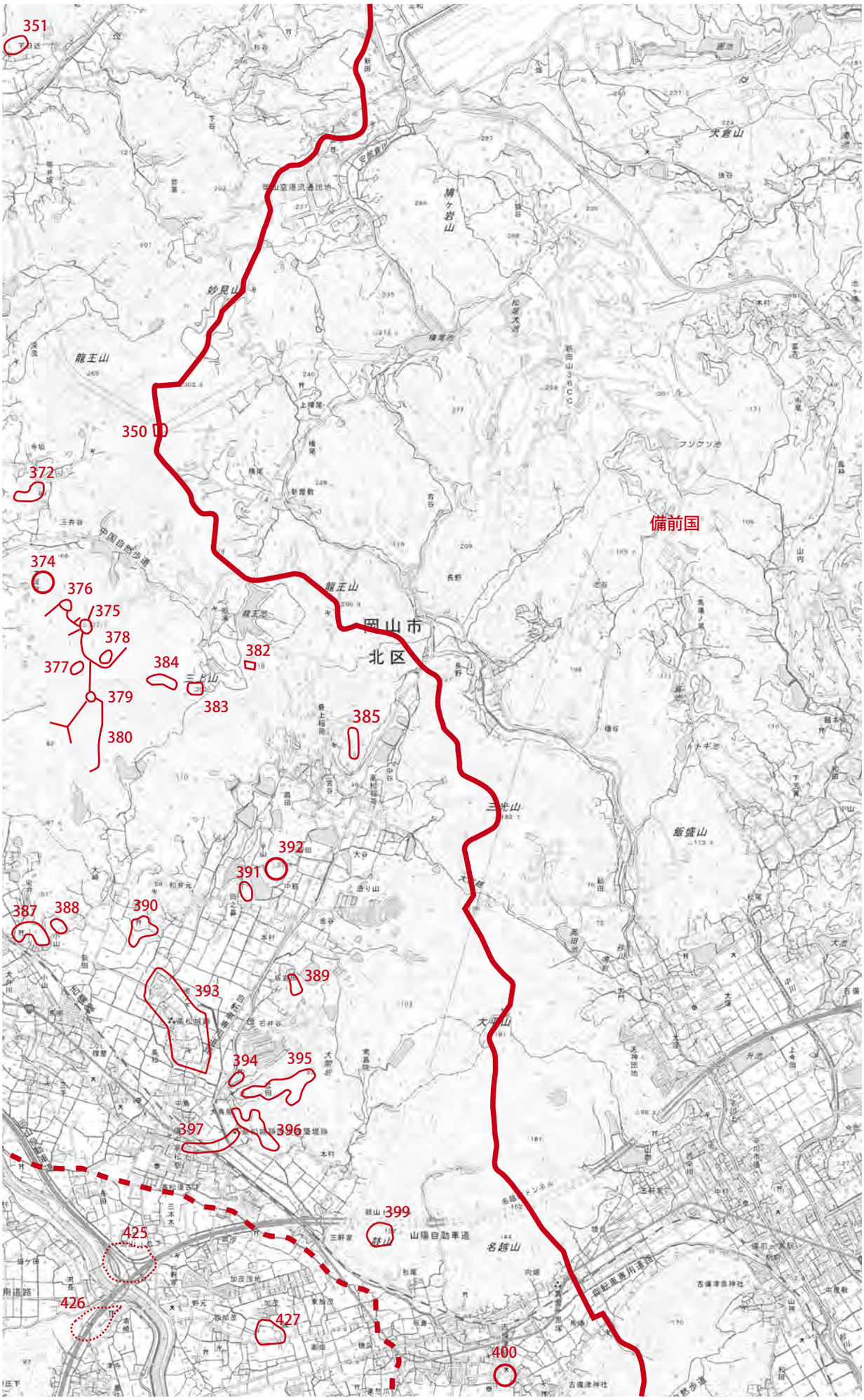

339
340
加賀郡
高尾山
伯備線
341
城山
社市
鍵山
秋葉山
272
城山
342
正木山
344
343
吉備線
405

→
23

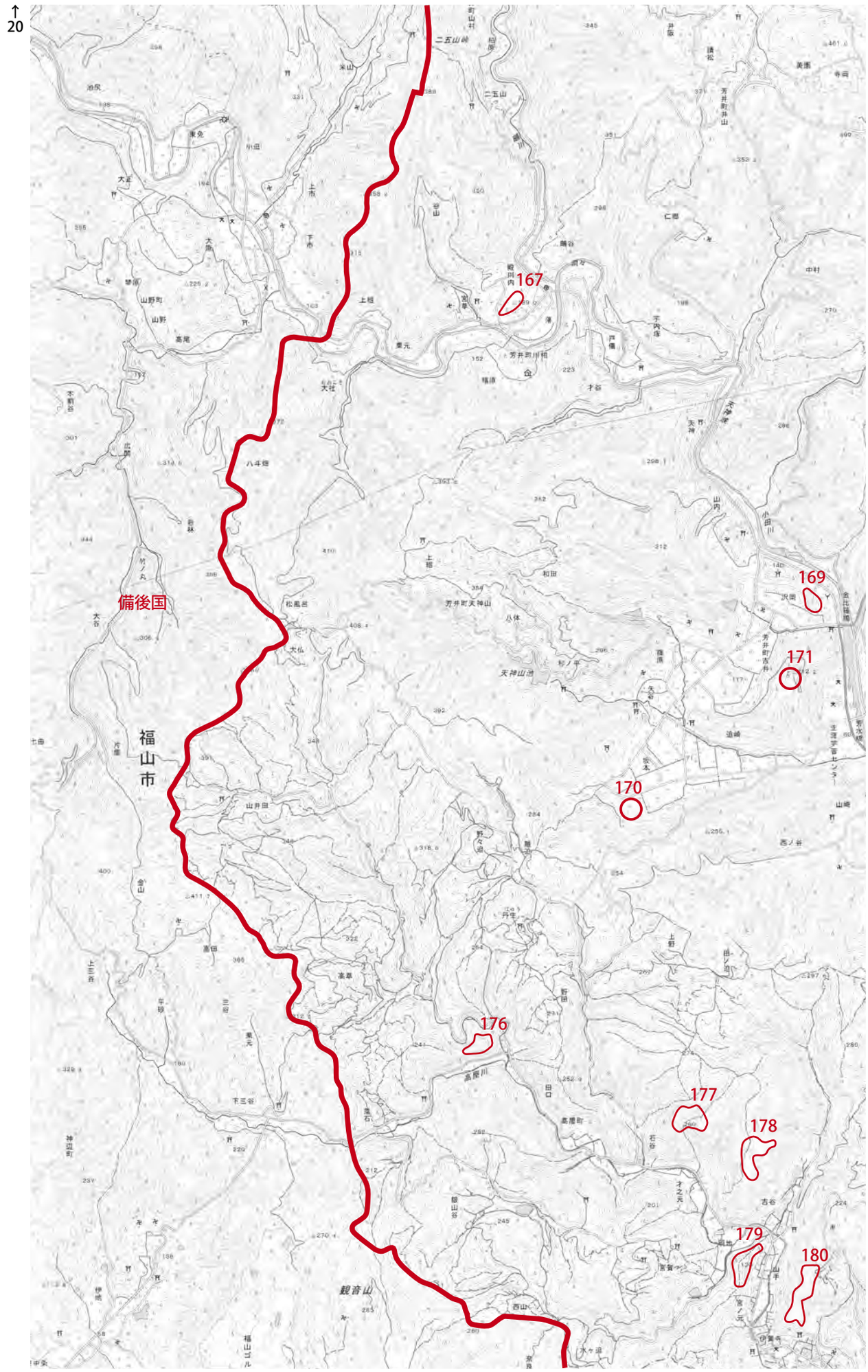
26
↓


↑
19
岡山市
北区
賀陽郡
総社市
窪屋郡
都宇郡
登龍山
実僧坊山
犬墓山
鬼城山
高丸山
赤坂山
城山
緑山
岡山自動車道
349
347
352
348
354
353
357
358
355
356
363
362
361
359
371
373
360
364
345
365
368
366
381
367
386
398
369
408
370
423
346
407
424
406

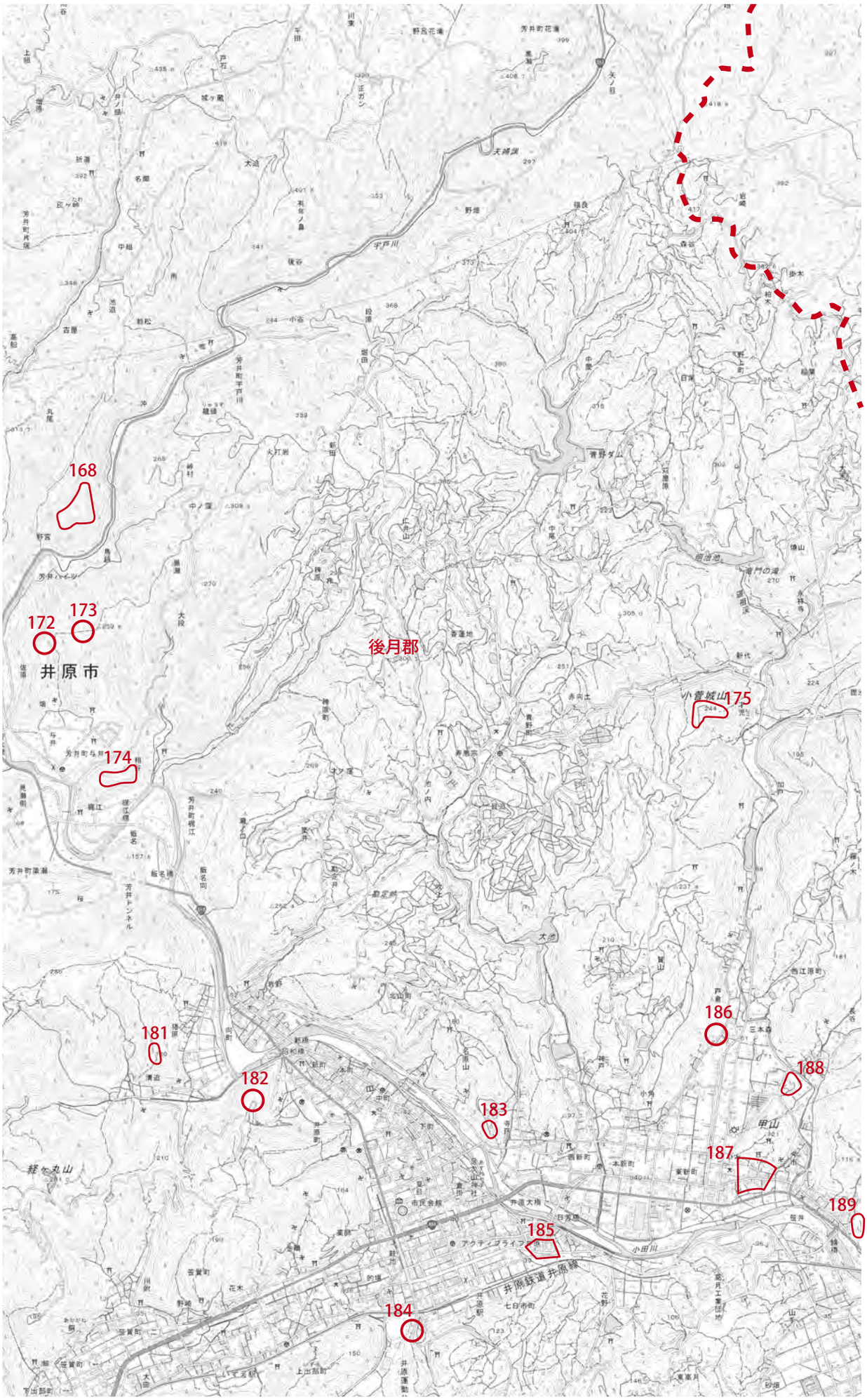
地図 23


351
350
372
374
376
375
378
377
379
380
384
382
383
385
392
391
387
388
390
389
393
394
395
396
397
399
425
426
427
400
備前国
岡山市
北区
龍王山
妙見山
鳩ヶ岩山
大倉山
三光山
飯盛山
大平山
名越山
山陽自動車道
中国自然歩道

27
↓


↑
20
二五山峠
167
備後国
福山市
169
171
170
176
177
178
179
180
観音山

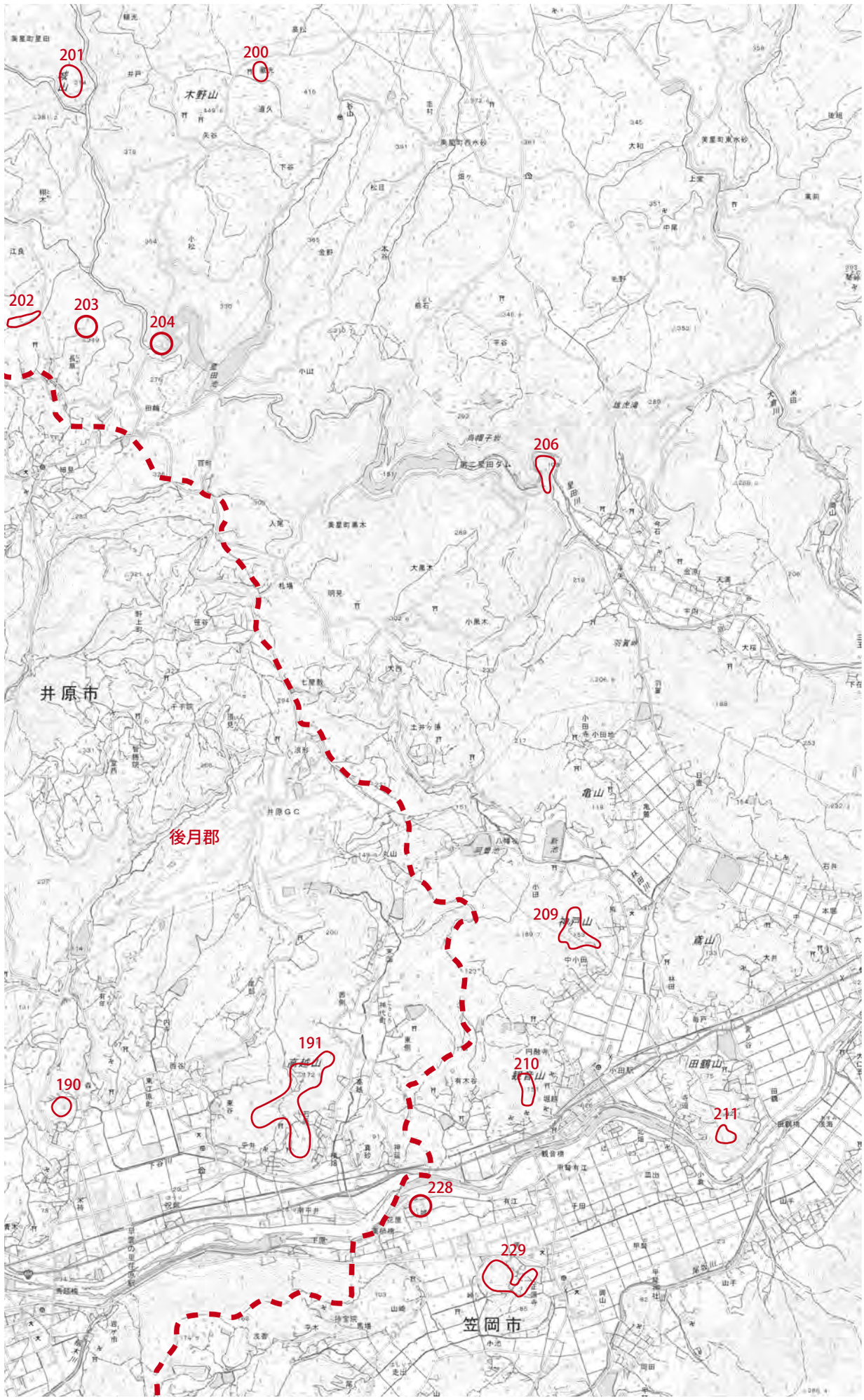
地図 24



→ 25

28 ↓

↑
21



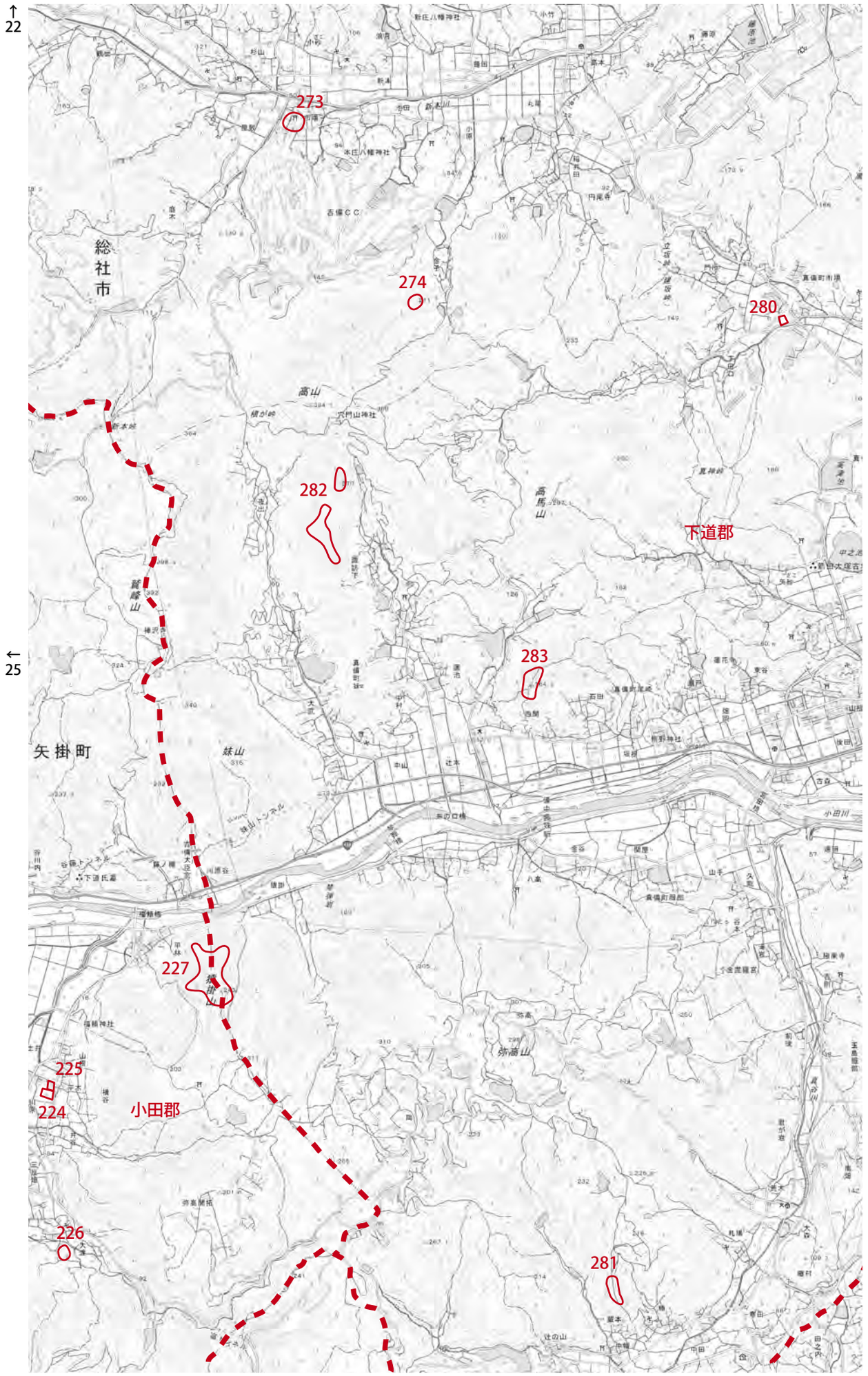
201
200
202
203
204
206
209
210
211
190
191
228
229
後月郡
井原市
笠岡市
木野山

←
24

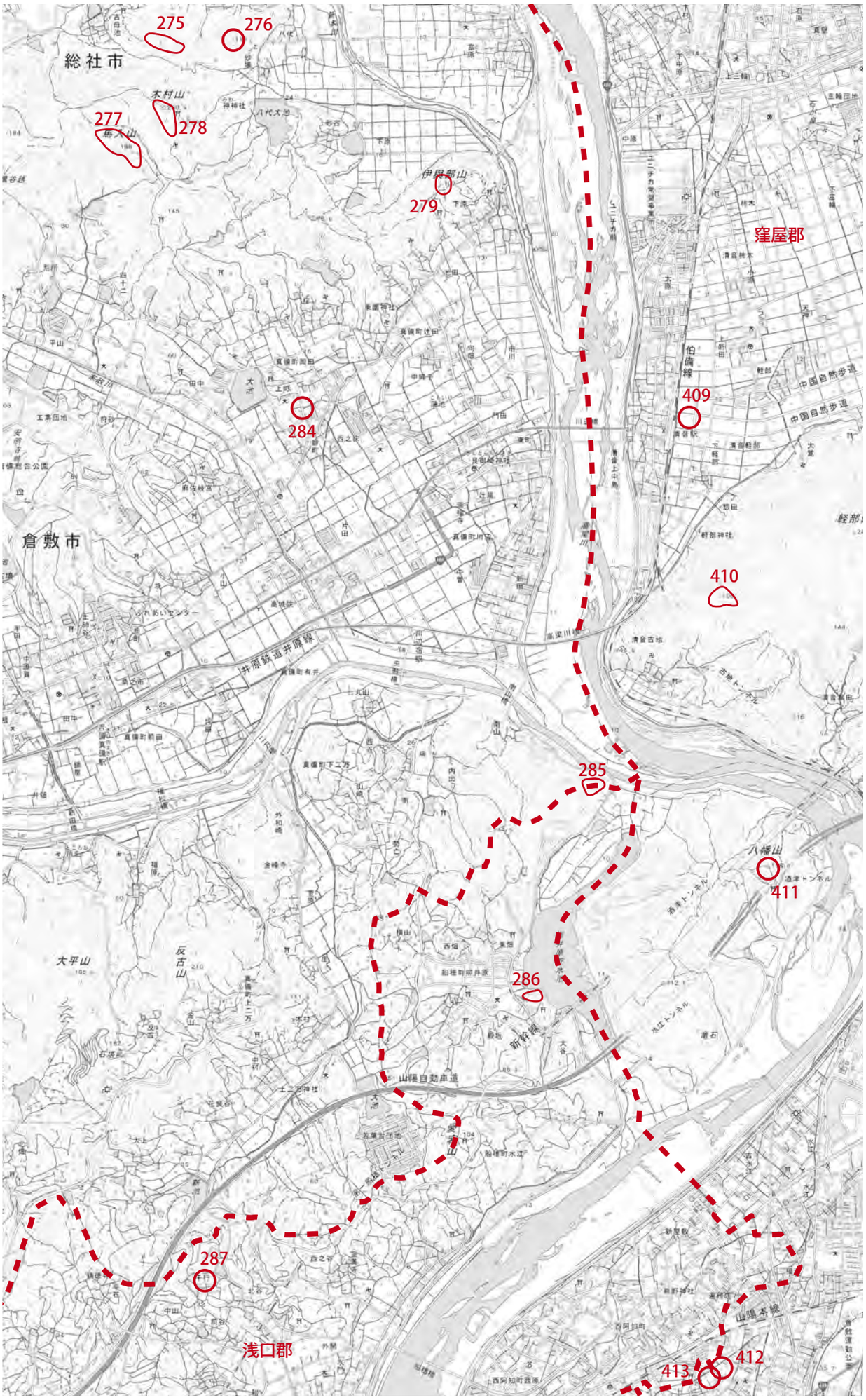
地図 25

205
207
208
214
215
212
213
218
216
217
220
223
222
221
219
小田郡
矢掛町
大倉山
高妻山
茶臼山
加茂山
井原鉄道井原線
→
26
29
↓

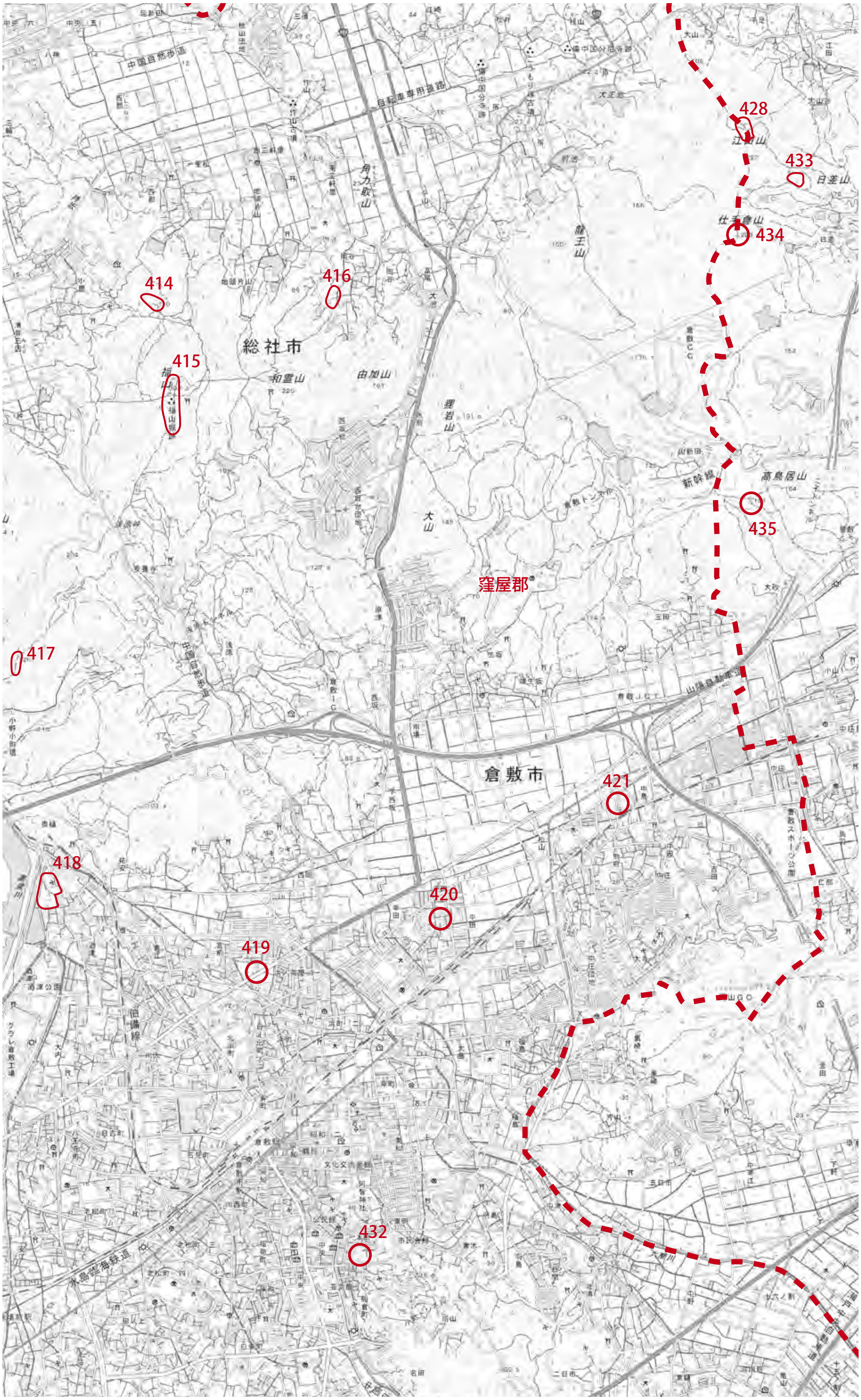
↑
22


273
274
280
282
283
227
225
224
226
281
下道郡
小田郡
総社市
矢掛町
高山
高馬山
妹山
鷲峰山
弥高山
猿掛山

←
25

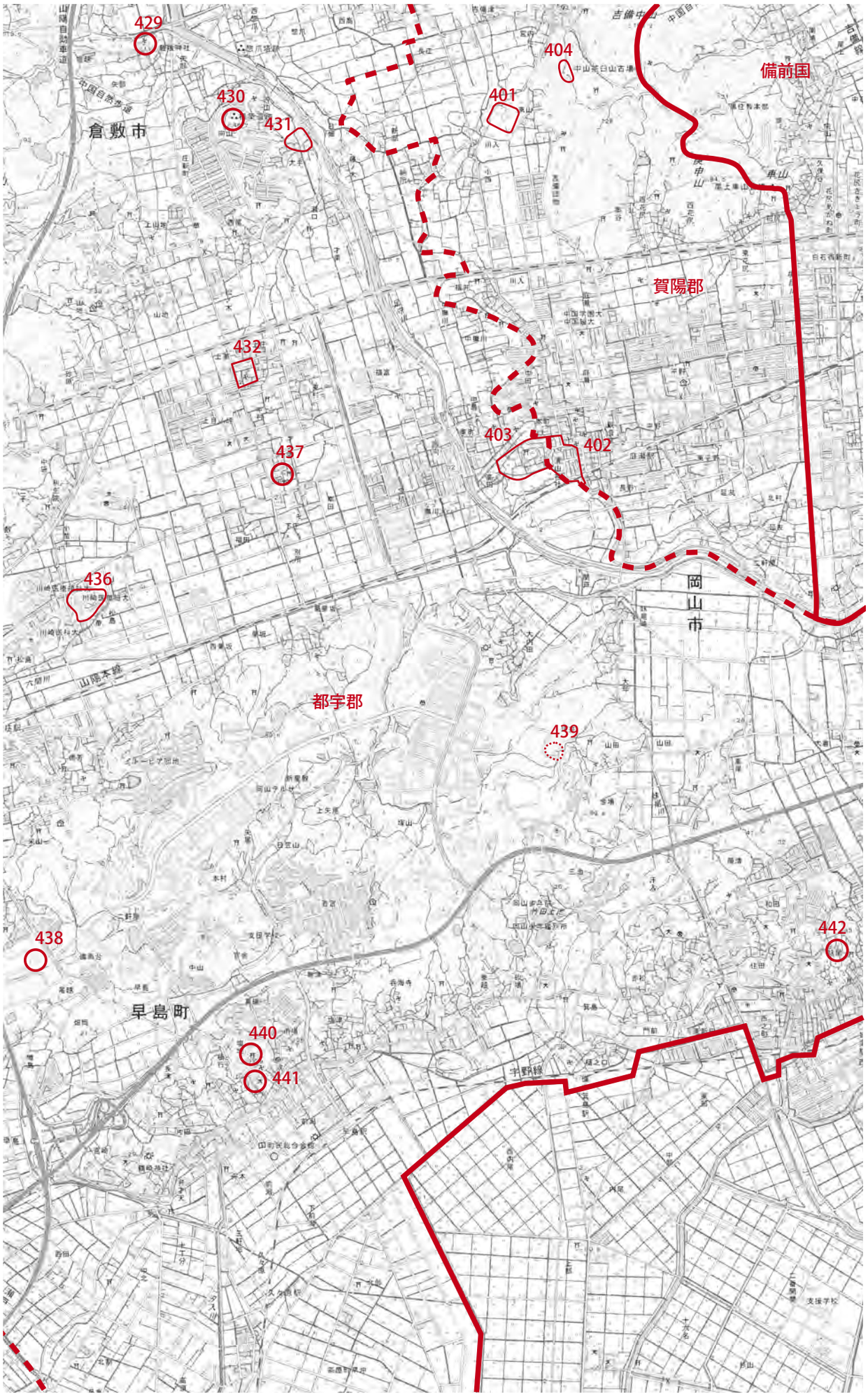

地図 26
275
276
総社市
木村山
277
馬入山
278
伊賀部山
279
窪屋郡
伯備線
409
中国自然歩道
284
倉敷市
410
→
27
井原鉄道井原線
285
八幡山
411
大平山
反古山
286
新幹線
山陽自動車道
287
浅口郡
山陽本線
412
413
30
↓

↑
23

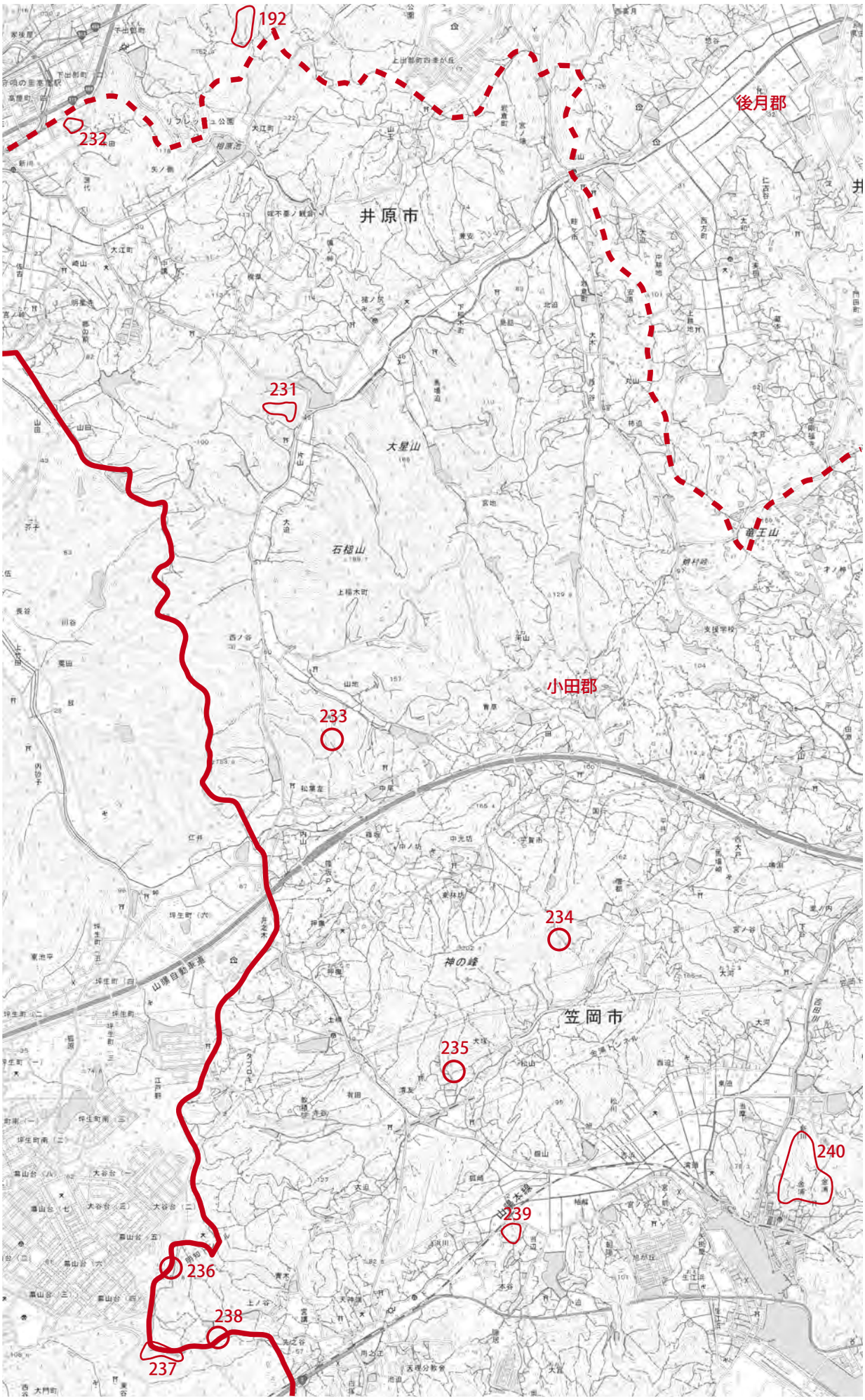

428
433
434
414
416
415
435
総社市
和霊山
由加山
高鳥居山
新幹線
窪屋郡
417
倉敷市
421
418
420
419
432

←
26

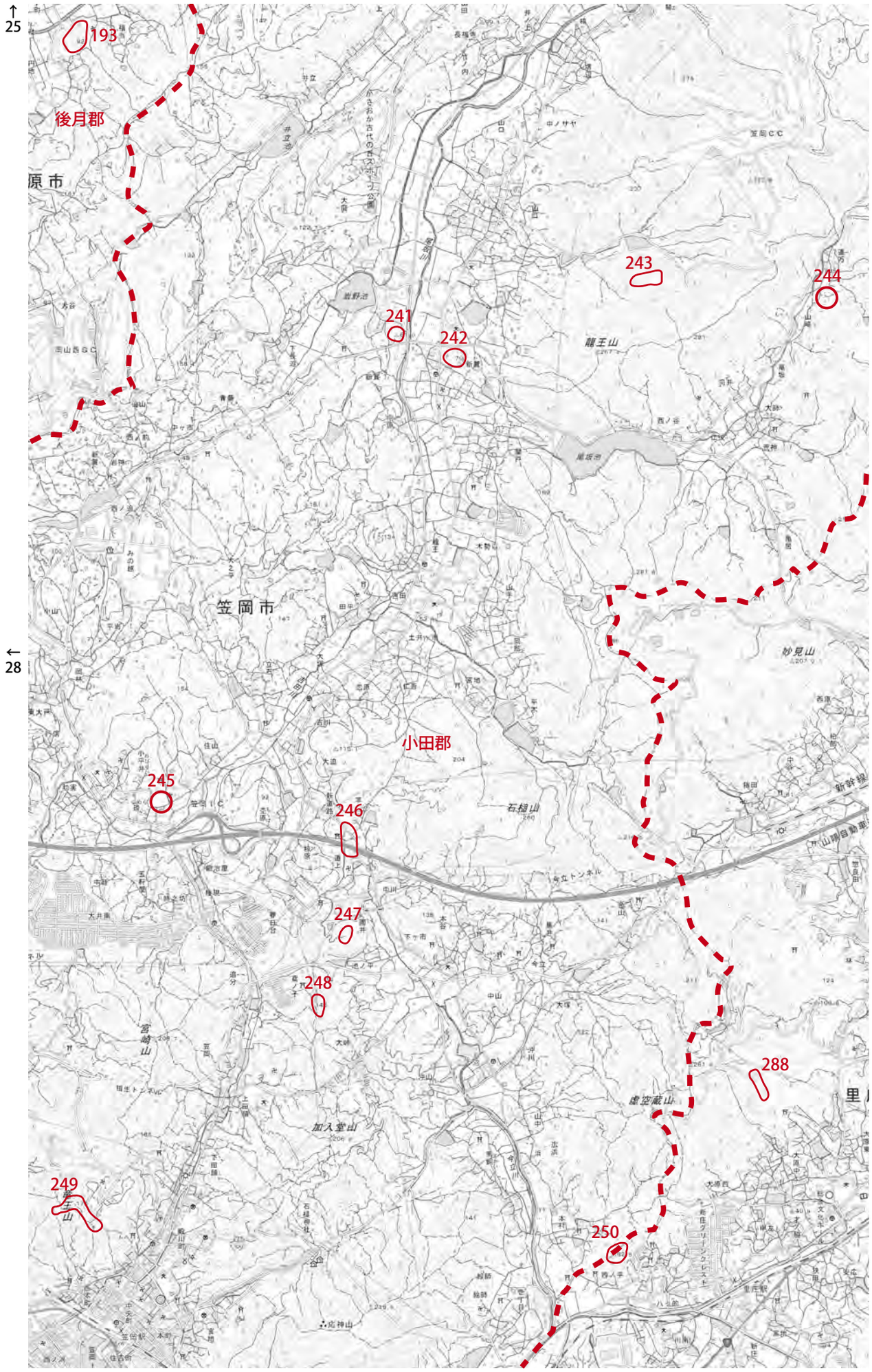
地図 27


429
430
431
倉敷市
404
401
備前国
賀陽郡
432
403
402
437
436
岡山市
都宇郡
439
438
442
早島町
440
441
山陽本線
宇野線

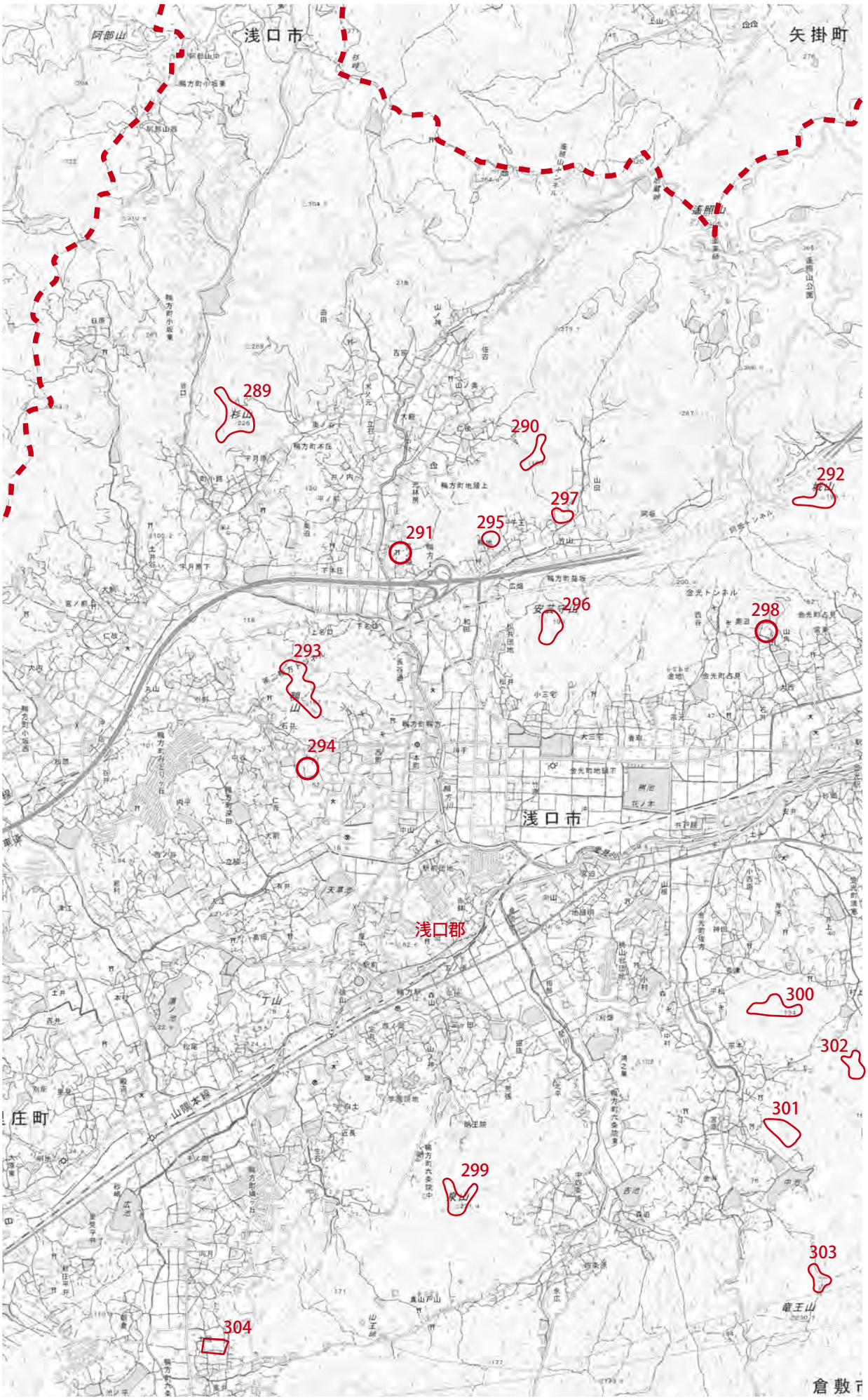
↑
24


192
232
231
233
234
235
236
237
238
239
240
後月郡
井原市
小田郡
笠岡市
大屋山
石越山
神の峰
→
29
31
↓

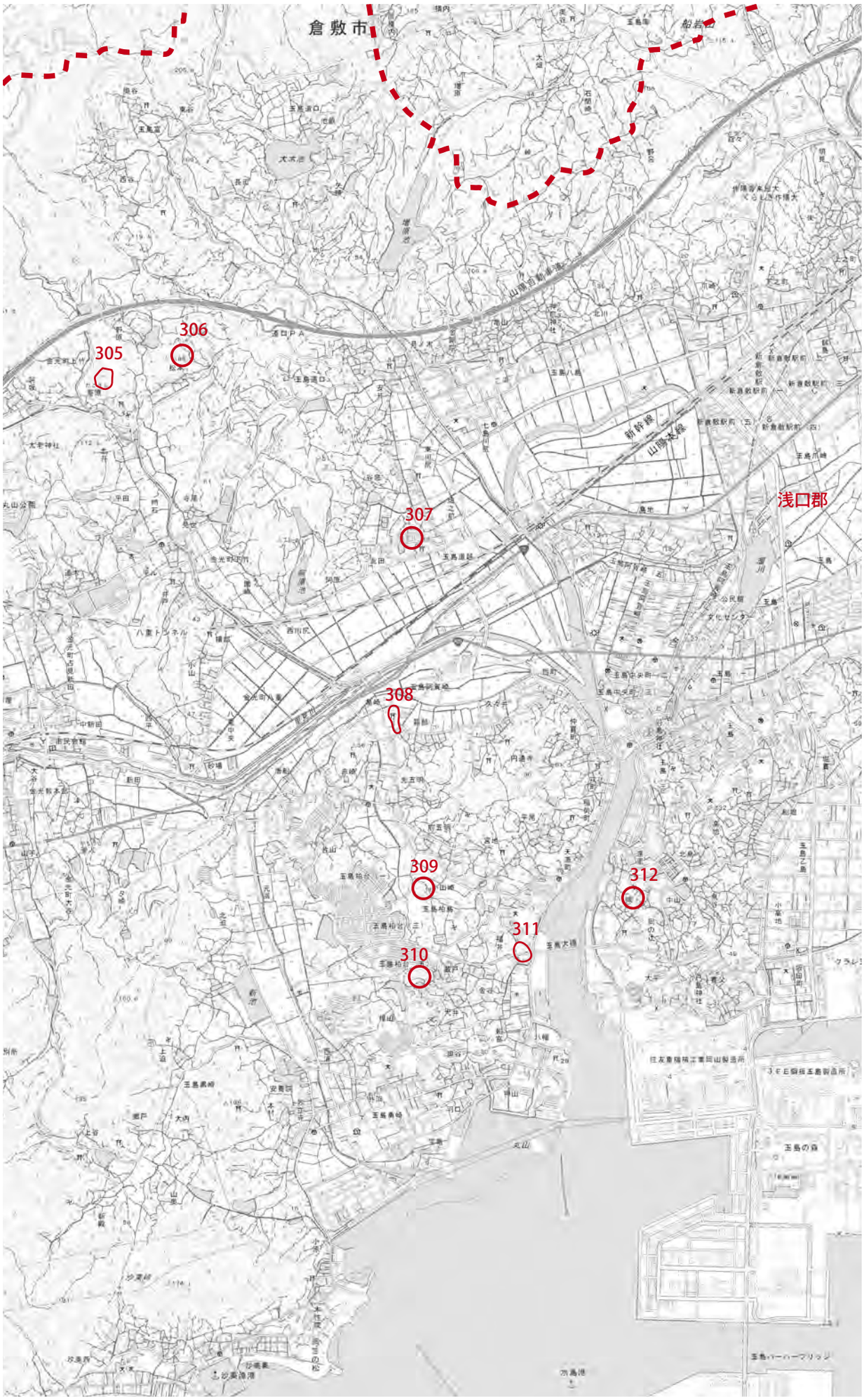
地図 28


↑
25
193
後月郡
原市
笠岡市
小田郡
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
288
龍王山
妙見山
石越山
加入堂山
虚空蔵山
宮崎山
←
28

地図 29


浅口市
矢掛町
阿部山
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
浅口郡
→
30
32
↓

↑
26



←
29

地図 30

↑
28

備後国
福山市
山陽新幹線
山陽本線
福山駅
東福山貨物駅
引野町
東深津町
西深津町
南蔵王町
東手城町
南手城町
手城町
東川口町
川口町
曙町
新涯町
新浦町
新市町
西新涯町
東新涯町
千代田町
松浜町
多治米町
三吉町
三吉町南
王子町
文化ホール
福山大学
人江大橋
高須
芦田川
芦田川大橋
河口大橋
竹ヶ端運動公園
竹ヶ端
日之出丘
八幡山
二子
高島
箕沖町
南浦
日本化薬工場
引野町南
伊勢丘
山之上
谷地池
平成台
長浜
沖浦
三山
銀雪町
文京町
屋内競技場
文化ホール
福山大学
人江大橋
芦田川大橋
河口大橋
竹ヶ端運動公園
八幡山
日本化薬工場

地図 31

→
32

↑
29

←
31

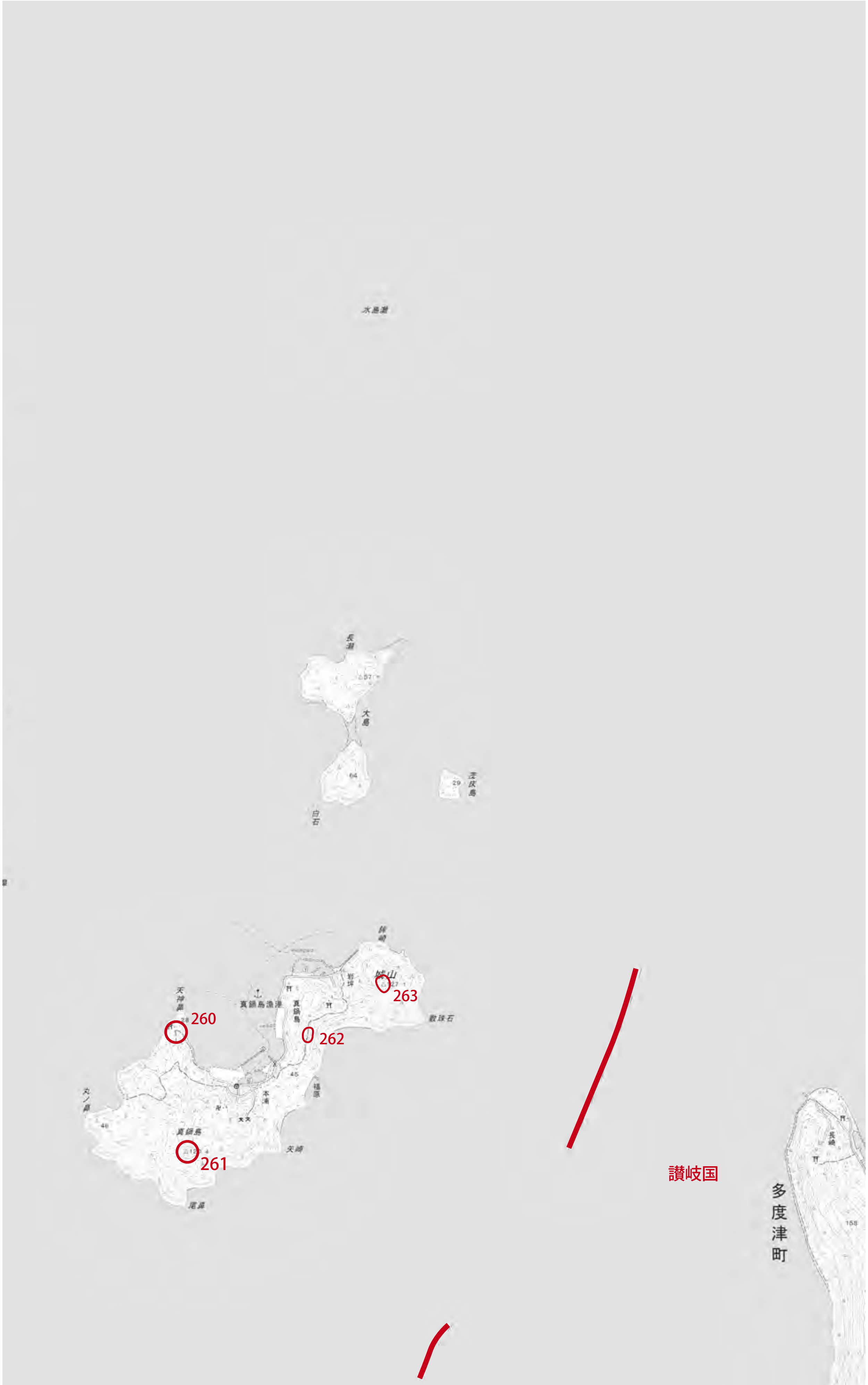
地図 32

33
↓

↑
32

小田郡
笠岡市
白石島
白石島漁港
中島
モッコク
カルカイ
応神山
立石山
ウルメ
高山
北木島
北木島町
バックリ山
トンギリ山
北木島港
秋葉山
八幡山
丸岩
丸岩港
外浅海
大宇根
大浦港
大飛島港
荒神山

地図 33



2　備中国中世城館跡一覧表

1　一覧表の作成について

（1）本表は、旧備中国に属した旧哲多郡、旧阿賀郡、旧川上郡、旧上房郡、旧後月郡、旧小田郡、旧下道郡、旧浅口郡、旧賀陽郡、旧窪屋郡、旧都宇郡（以後旧を除く）に所在した城館跡等の一覧である。

（2）郡の単位は、分布図凡例のとおりである。ただし、郡境に位置するものは、①：近世地誌等に記載された旧村のある郡、②：①がない場合は主要部分が属する郡に含め、「郡名」覧には両方を明記している。

2　一覧表の記載内容について

（1）本表は、中世城館跡及び城館関連遺構等を記載している。

（2）本表には、城館番号、城館跡名、旧郡、所在地、位置（緯度・経度）、立地、標高（最高所）、比高（最高所と山麓間）、城域（東西･南北の長さ）、現況（地目）、概要、分布図（地図番号）、解説頁を記載した。

・城館番号：分布図及び解説頁の番号と対応する。

・城館跡名：『改訂 岡山県遺跡地図』（岡山県教育委員会 2003 年）に用いられたものを原則として使用している。また別称については、中世城館関連文献一覧に記載している。

・所 在 地：市町村名と大字を掲載している。また城館範囲内に複数の住所が存在する場合は、その全てを記載している。

・位　　置：主郭と推定した位置の北緯・東経を示している。

・立　　地：広義の意味で、以下の 4 種に分類する。なお第 3 章では、より詳細な地形的特徴を記述している場合もある。

頂　部：独立丘陵や山塊の頂部に占地するもの

尾根部：山塊から派生した尾根筋に占地するもの（尾根頂部や平坦部を含む）

端　部：尾根の先端部分や斜面・裾部分に占地するもの

平地部：平地に占地するもの

・標　　高：城館の最高所の数値を表記し、1 の位は切り捨てている。ただし、標高 10 m未満のものは、そのままの数値を表記している。

・比　　高：城館の麓と思われる場所から最高所までの数値を表記し、1 の位は切り捨てている。ただし比高差が 10 m未満のものは、そのままの数値を表記している。

・城　　域：城館遺構が存在する範囲を表記し、1 の位は切り捨てている。また、城域が判然としないものは空欄にしている。

・現　　況：山林・水田・畑・果樹園・宅地・社寺・その他の項目に分けて記載している。

・概　　要：第 3 章で解説した城館は、確認した遺構の種類のみを記載している。また、その他のものは、現地の状況や故事来歴等を記載している。

・分 布 図：分布図にある図番号と右・左を表記している。

・解 説 頁：第 3 章で解説した城館はページを表記している。

表２　備中国中世城館跡一覧表

哲多郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
1	宗重屋敷跡	哲多	新見市神郷高瀬	北緯35°05′46″ 東経133°18′02″	端部	550	5		畑	妙見山の麓にある木谷集落内にある。高瀬川脇にある段丘上の畑が該当地である。平坦地は広くしっかりしている。	1 左	
2	仲村城跡	哲多	新見市神郷高瀬	北緯35°05′19″ 東経133°19′03″	端部	540	20	東西40m 南北110m	山林	曲輪・堀切・横堀・土塁を確認。	1 右	114
3	勝ヶ城跡	哲多	新見市神郷高瀬	北緯35°05′18″ 東経133°19′34″	頂部	730	220	東西120m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	1 右	114
4	三ヶ市城跡	哲多	新見市神郷釜村	北緯35°05′36″ 東経133°22′45″	端部	520	70	東西40m 南北50m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	2 左	115
5	名称未定	哲多	新見市千屋	北緯35°06′36″ 東経133°25′52″	頂部	640	190		山林	南北方向に流れる高梁川の東側に位置する。緩やかな頂部付近に細長い尾根に合わせた平坦地が数箇所存在する。	2 左	
6	小郷寺城跡	哲多	新見市神郷高瀬	北緯35°04′44″ 東経133°19′38″	端部	630	120		山林	当地には神社が建っており、周辺には若干の平坦地が存在する。この神社付近が曲輪であった可能性がある。	4 右	
7	挽野城跡	哲多	新見市神郷油野	北緯35°02′29″ 東経133°22′10″	端部	410	50	東西20m 南北110m	山林	曲輪・堀切を確認。	4 右	115
8	楪城跡	哲多	新見市上市	北緯35°01′47″ 東経133°25′54″	頂部	480	220	東西500m 南北780m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切を確認。	5 左	116～121
9	朝倉城跡	哲多	新見市上市	北緯35°01′06″ 東経133°25′51″	頂部	430	200	東西120m 南北320m	山林	曲輪・掘切・竪堀を確認。	5 左	122・123
10	横見政所跡	哲多	新見市上市	北緯35°00′57″ 東経133°26′05″	端部	250	10		畑、宅地	標高250m～242mで、南は市道、東は横見集会所の東で南へ流れる小川、西は道路を境とする約50m四方が該当地と思われる。	5 左	
11	粒根城跡	哲多	新見市上市	北緯35°00′50″ 東経133°25′45″	端部	330	80	東西110m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	5 左	124
12	地頭方政所跡	哲多	新見市上市	北緯35°00′29″ 東経133°26′09″	平地	220	0	東西75m 南北85m	水田・宅地	曲輪・堀切を確認。	5 右	124
13	岩高城跡	哲多	新見市哲西町上神代	北緯34°57′45″ 東経133°19′23″	尾根部	530	150	東西190m 南北100m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	8 右	125
14	見坂山城跡	哲多	新見市哲西町上神代・神郷下神代	北緯34°58′05″ 東経133°21′48″	頂部	410	100	東西60m 南北140m	山林	堀切・石垣を確認。	8 右	126
15	万石城跡	哲多	新見市哲西町矢田	北緯34°56′37″ 東経133°20′16″	尾根部	530	170	東西200m 南北150m	山林	曲輪・竪堀を確認。	8 右	127
16	土井城跡	哲多	新見市哲西町矢田	北緯34°56′04″ 東経133°19′41″	端部	410	40	東西100m 南北100m	山林・道路	発掘調査あり。曲輪・堀切・掘立柱建物を確認。	8 右	128
17	白石城跡	哲多	新見市哲西町畑木	北緯34°55′31″ 東経133°19′14″	端部	430	30	東西60m 南北120m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	8 右	129
18	藤木城跡	哲多	新見市哲西町畑木	北緯35°55′29″ 東経133°19′22″	端部	410	30	東西100m 南北50m	山林・道路	発掘調査あり。曲輪・掘立柱建物を確認。	8 右	129

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
19	豆木城跡	哲多	新見市哲西町矢田	北緯34°55′32″ 東経133°19′50″	尾根部	430	60	東西180m 南北130m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁を確認。	8 右	130
20	荒戸山城跡	哲多	新見市哲多町田淵	北緯34°55′58″ 東経133°22′21″	頂部	760	190		山林	山頂部分には平坦面があるが、ほぼ自然地形である。北西・南東方向の尾根先端部も緩やかな斜面である。城館関連遺構は判然としない。	8 右	
21	中田山城跡	哲多	新見市神郷下神代	北緯34°59′28″ 東経133°23′31″	端部	310	40	東西130m 南北20m	山林・道路	曲輪・堀切を確認。	9 左	131
22	福本城跡	哲多	新見市西方	北緯34°59′15″ 東経133°26′22″	端部	250	20	東西90m 南北40m	山林	曲輪・堀切を確認。	9 右	131
23	竹野城跡	哲多	新見市西方	北緯35°00′00″ 東経133°26′31″	尾根部	290	80	東西120m 南北310m	山林	曲輪・堀切・虎口を確認。	9 右	132・133
24	金子氏屋敷跡	哲多	新見市西方	北緯34°59′44″ 東経133°26′13″	端部	240	30	東西100m 南北100m	山林・宅地	西方集落に対して西方向から延びる尾根端部に位置する。新見荘の三職を務めた金子氏の屋敷跡と伝えられる。隣接する水田に屋敷に伴うとされる古井戸が残る。	9 右	
25	西方政所跡	哲多	新見市西方	北緯34°59′34″ 東経133°26′34″	端部	210	20	東西100m 南北100m	山林・畑・果樹園・線路	西方集落に対して南から突出する尾根端部に位置する。東寺百合文書に登場する、新見荘の領家方政所に比定されている。なお、『新見市史』では隣接する北側低地を領家方政所址としている。	9 右	
26	宮田山城跡	哲多	新見市西方	北緯34°59′19″ 東経133°26′57″	尾根部	310	90	東西100m 南北130m	山林	曲輪・土塁・堀切・竪堀群を確認。	9 右	134
27	馬酔木城跡	哲多	新見市哲多町田淵	北緯34°55′38″ 東経133°23′00″	端部	510	30		山林・運動場	本郷川を南に望む、標高510mを測る東西方向の尾根に立地する。山小屋、グラウンドとキャンプ場跡地で削平。山小屋とグラウンド間の溝が堀切の可能性がある。	9 左	
28	小屋ヶ畝城跡	哲多	新見市哲多町田淵	北緯34°55′15″ 東経133°23′19″	端部	570	80		山林	本郷川南にある尾根の頂部、標高570mに立地する。山頂部南側に50～80cm大の積石列とその奥に１ｍぐらいの自然石１つ を確認した。石座の可能性が高い。	9 左	
29	滝丸城跡	哲多	新見市哲多町宮河内	北緯34°57′01″ 東経133°26′11″	頂部	380	120	東西80m 南北80m	山林	曲輪を確認。	9 右	135
30	諏訪山城跡	哲多	新見市哲多町成松	北緯34°55′45″ 東経133°27′04″	端部	260	40	東西60m 南北65m	山林	曲輪、堀切を確認。	9 右	135
31	猿滝城跡	哲多	新見市哲多町本郷	北緯34°56′09″ 東経133°26′07″	尾根部	450	180	東西90m 南北160m	山林	曲輪、堀切を確認。	9 右	136
32	助正城跡	哲多	新見市哲多町花木	北緯34°56′32″ 東経133°27′56″	端部	300	40		山林	頂部は緩やかな平坦地で、祠が建っている。頂部の北西方向に尾根筋が延びているが、若干の平坦地が続く。城館関連遺構は判然としない。	9 右	
33	鯉滝城跡	哲多	新見市長屋	北緯34°56′11″ 東経133°29′27″	尾根部	220	120	東西300m 南北30m	山林	曲輪・堀切を確認。	9 右	137・138
34	石蟹山城跡	哲多	新見市石蟹・長屋	北緯34°56′55″ 東経133°29′08″	尾根部	310	150	東西280m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁・石列・虎口を確認。	9 右	139・140
35	名称未定	哲多	新見市長屋	北緯34°56′41″ 東経133°29′35″	頂部	260	100		山林	東西に長い尾根上で、尾根の東側で南斜面に段状の加工が見られるが、頂部は約200mにわたり岩盤が露出した自然地形である。東端に社跡と１辺約15ｍの方形平坦面が存在した。	9 右	
36	岸本城跡	哲多	新見市哲西町大竹	北緯34°54′15″ 東経133°18′04″	端部	410	20	東西80m 南北90m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切・掘立柱建物を確認。	12 左	140

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
37	西山城跡	哲多	新見市哲西町八鳥	北緯34° 54′ 24″ 東経133° 19′ 44″	尾根部	510	110	東西280m 南北220m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	12 右	141・142
38	育野古城跡	哲多	新見市哲西町大野部	北緯34° 52′ 53″ 東経133° 19′ 52″	頂部	530	130	東西70m 南北90m	山林	曲輪・堀切・虎口を確認。	12 右	143
39	二条殿跡	哲多	新見市哲西町大野部	北緯34° 53′ 12″ 東経133° 19′ 15″	端部	390	40	東西90m 南北50m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切を確認。	12 右	144
40	鎌ヶ畝城跡	哲多	新見市哲多町蚊家	北緯34° 55′ 05″ 東経133° 24′ 17″	尾根部	510	50	東西10m 南北70m	山林	曲輪・堀切を確認。	13 左	144
41	歴却山城跡	哲多	新見市哲多町蚊家	北緯34° 54′ 25″ 東経133° 24′ 27″	端部	500	60		山林・携帯基地局	本郷川を西に望み、小学校南東側の山塊頂部に立地する。頂部南側には現在携帯基地局が設けられ、その周囲は自然地形で城館関連遺構は判然としない。	13 左	
42	成松山城跡	哲多	新見市哲多町成松	北緯34° 55′ 08″ 東経133° 27′ 11″	端部	260	40		中学校	ほぼ全面が中学校敷地内にあたる。北側に残る尾根も急斜面のため城館関連遺構は判然としない。	13 右	
43	井ノ畝城跡	哲多	新見市哲多町老栄・哲多町成松	北緯34° 54′ 50″ 東経133° 27′ 32″	尾根部	370	130	東西70m 南北40m	山林	曲輪を確認。	13 右	145
44	越山城跡	哲多	新見市哲多町矢戸	北緯34° 53′ 51″ 東経133° 27′ 22″	端部	330	70	東西130m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13 右	145
45	柏山城跡	哲多	新見市法曽	北緯34° 54′ 30″ 東経133° 31′ 38″	頂部	420	290	東西220m 南北110m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	14 右	146

阿賀郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
46	赤坂城跡	阿賀	新見市千屋花見	北緯35° 09′ 18″ 東経133° 25′ 24″	端部	620	30	東西120m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・石積みを確認。	2 左	148
47	西城跡	阿賀	新見市千屋井原	北緯35° 08′ 56″ 東経133° 26′ 04″	端部	590	20	東西70m 南北170m	山林	曲輪・掘切・土塁・虎口・櫓台を確認。	2 左	149
48	仲村城跡	阿賀	新見市千屋井原	北緯35° 08′ 57″ 東経133° 26′ 33″	端部	610	30	東西150m 南北110m	山林	曲輪・土塁を確認。	2 右	150
49	実山城跡	阿賀	新見市千屋実	北緯35° 06′ 17″ 東経133° 26′ 25″	端部	550	80	東西110m 南北110m	山林	曲輪・掘切・土塁を確認。	2 右	151
50	葛籠畑山城跡	阿賀	新見市大佐上刑部	北緯35° 07′ 11″ 東経133° 32′ 10″	頂部	710	270		山林	東西に細長い尾根頂部状に平坦地があるとされる。高田城の支城と言われる。	3 左	151
51	割亀山城跡	阿賀	新見市大佐小阪部	北緯35° 05′ 39″ 東経133° 33′ 58″	尾根部	460	100	東西80m 南北30m	山林	曲輪・堀切を確認。	3 右	152
52	矢作城跡	阿賀	新見市大佐永富	北緯35° 05′ 07″ 東経133° 34′ 02″	平地	340	0		畑・宅地	旧大佐町の町並みの北側に当たる。当地は現在宅地と畑地で、周辺地形より１ｍほど高くなっている。この高まりが館跡と想定される。	6 右	152
53	円通山城跡	阿賀	新見市大佐永富	北緯35° 05′ 14″ 東経133° 34′ 22″	端部	390	40	東西140m 南北90m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀を確認。	3 右	153
54	周防城跡	阿賀	新見市大佐小南	北緯35° 03′ 58″ 東経133° 33′ 24″	尾根部	460	120	東西100m 南北80m	山林	曲輪・堀切を確認。	6 左	154

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
55	安本城跡	阿賀	新見市大佐田治部	北緯35°02′37″ 東経133°32′45″	端部	430	30		山林	近代以降と思われる石垣を築いた段が３段程度と現代の社が確認できる。城館関連遺構は判然としない。	6 左	
56	土居遺跡	阿賀	新見市上熊谷	北緯35°01′42″ 東経133°31′00″	端部	310	10	東西200m 南北100m	水田・畑	発掘調査あり。掘立柱建物を確認。	6 左	154
57	田治部氏屋敷跡	阿賀	新見市上熊谷	北緯35°01′39″ 東経133°30′49″	平地	300	0	東西120m 南北190m	宅地・道路	発掘調査あり。掘立柱建物・井戸を確認。	6 左	155
58	塩成山城跡	阿賀	新見市上熊谷	北緯35°01′26″ 東経133°30′25″	頂部	590	290	東西280m 南北80m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・土塁・石垣・虎口を確認。	6 左	156・157
59	大山城跡	阿賀	新見市大佐布瀬	北緯35°01′07″ 東経133°35′35″	頂部	530	240	東西180m 南北160m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	6 右	158
60	田治部国衙政所跡	阿賀	新見市上熊谷	北緯35°00′23″ 東経133°30′39″	平地	260	0	東西70m 南北50m	水田	南北方向の水田の石垣が３段程度あり、屋敷地の地割の痕跡の可能性がある。城館関連遺構は判然としない。	6 左	159
61	境陣所跡	阿賀	真庭市阿口	北緯35°01′36″ 東経133°37′41″	端部	540	40		山林	谷底平野の独立丘陵上に立地する。頂部は南北に長く、平坦であるが、自然地形か。南端斜面には段が巡るが、当時のものか不明である。城館関連遺構は判然としない。	7 左	
62	丸山城跡	阿賀	新見市高尾	北緯35°00′10″ 東経133°27′01″	端部	250	20	東西50m 南北60m	山林	曲輪・虎口を確認。	9 右	159
63	小谷山城跡	阿賀	新見市新見	北緯34°58′57″ 東経133°28′59″	尾根部	380	160	東西130m 南北90m	山林	曲輪・土塁・堀切・石積みを確認。	9 右	160
64	鳶ヶ巣城跡	阿賀	新見市新見	北緯34°58′31″ 東経133°29′07″	頂部	530	300	東西40m 南北60m	テレビ中継所	曲輪を確認。	9 右	161
65	角尾城跡	阿賀	新見市正田	北緯34°58′08″ 東経133°28′17″	尾根部	320	150	東西110m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	9 右	161
66	甲籠城跡	阿賀	新見市唐松	北緯34°58′29″ 東経133°31′20″	尾根部	440	260	東西70m 南北170m	山林	曲輪を確認。	10 左	162
67	山根城跡	阿賀	新見市唐松	北緯34°57′52″ 東経133°30′40″	端部	220	50	東西60m 南北120m	山林	曲輪・土塁を確認。	10 左	163
68	城山城跡	阿賀	新見市足見	北緯34°56′49″ 東経133°31′22″	尾根部	470	70	東西70m 南北150m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	10 左	163
69	鬼山城跡	阿賀	新見市唐松	北緯34°57′49″ 東経133°30′56″	頂部	360	190	東西120m 南北430m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・櫓台を確認。	10 左	164・165
70	鳶ヶ城跡	阿賀	新見市豊永赤馬	北緯34°58′56″ 東経133°34′12″	頂部	680	180	東西40m 南北190m	山林	豊永赤馬集落を南東に見据える山塊頂部に位置する。明確な造成の痕跡は見られず、城館関連遺構は判然としない。	10 右	
71	宇山城跡	阿賀	新見市豊永宇山	北緯34°56′20″ 東経133°34′40″	端部	430	40		山林	宇山洞の南側に位置する。頂部には広い平坦地が存在するが、植林による段堀が激しく城館関連遺構は判然としない。	10 右	
72	双内城跡	阿賀	真庭市上呰部	北緯34°59′43″ 東経133°36′36″	尾根部	400	190	東西50m 南北430m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	10 右	166
73	高釣部城跡	阿賀	真庭市上呰部	北緯34°59′27″ 東経133°37′20″	尾根部	330	210	東西170m 南北210m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・虎口を確認。	10 右	167
74	植木城跡	阿賀	真庭市下呰部	北緯34°58′05″ 東経133°37′19″	端部	310	120	東西60m 南北50m	山林	曲輪を確認。	10 右	168

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
75	土井砦跡	阿賀	真庭市下中津井	北緯34° 56′ 49″ 東経133° 37′ 19″	端部	190	10	東西120m 南北20m	山林	堀切・土塁を確認。	10右	168
76	才田城跡	阿賀	真庭市下中津井	北緯34° 56′ 18″ 東経133° 37′ 00″	尾根部	340	140	東西240m 南北90m	山林・社寺	市指定史跡。曲輪・堀切を確認。	10右	169
77	加葉山城跡	阿賀	高梁市中井町津々	北緯34° 55′ 34″ 東経133° 16′ 16″	尾根部	350	110	東西140m 南北70m	山林	曲輪・堀切を確認。	10右	170
78	上合地砦跡	阿賀	真庭市下呰部	北緯34° 58′ 59″ 東経133° 37′ 44″	端部	280	80	東西120m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	170
79	山王城跡	阿賀	真庭市五名	北緯34° 59′ 38″ 東経133° 38′ 57″	尾根部	500	290	東西170m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	11左	171
80	丸山城跡	阿賀	真庭市下呰部	北緯34° 58′ 45″ 東経133° 38′ 01″	尾根部	420	210	東西260m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	172
81	植木遺跡	阿賀	真庭市下呰部	北緯34° 58′ 12″ 東経133° 37′ 35″	平地	170	0	東西50m 南北150m	水田・宅地・道路	発掘調査あり。掘立柱建物・井戸を確認。	11左	173
82	井尾城跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 58′ 34″ 東経133° 38′ 56″	端部	180	20	東西200m 南北60m	山林・畑	曲輪・土塁を確認。	11左	174
83	赤茂館跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 58′ 08″ 東経133° 39′ 18″	平地	170	10	東西80m以上 南北80m以上	水田	発掘調査あり。掘立柱建物・井戸を確認。	11左	174
84	片山城跡	阿賀	真庭市宮地	北緯34° 58′ 17″ 東経133° 40′ 33″	尾根部	270	100	東西50m 南北140m	山林	曲輪・堀切・土塁・櫓台を確認。	11左	175
85	片山古城跡	阿賀	真庭市宮地	北緯34° 58′ 02″ 東経133° 40′ 26″	頂部	380	210	東西40m 南北100m	山林	曲輪を確認。	11左	176
86	飯山城跡	阿賀	真庭市山田・上水田・宮地	北緯34° 57′ 55″ 東経133° 40′ 16″	頂部	430	250	東西140m 南北100m	山林	曲輪を確認。	11左	176
87	陣山砦跡	阿賀	真庭市上水田・宮地	北緯34° 57′ 45″ 東経133° 40′ 22″	尾根部	420	170	東西50m 南北130m	山林	曲輪を確認。	11左	177
88	福尾城跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 57′ 42″ 東経133° 39′ 06″	端部	200	30	東西60m 南北150m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	177
89	山東塚城跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 57′ 36″ 東経133° 38′ 51″	端部	180	20	東西70m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	178
90	小殿城跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 57′ 11″ 東経133° 38′ 05″	端部	200	20	東西60m 南北200m	山林・社寺	頂部平坦面に明瞭な加工痕跡は確認できないが、浅い堀切や丘陵先端部に曲輪を確認。	11左	
91	小松城跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 56′ 59″ 東経133° 38′ 34″	尾根部	310	150	東西40m 南北85m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	178
92	荒木城跡	阿賀	真庭市上水田	北緯34° 57′ 29″ 東経133° 38′ 55″	端部	190	30	東西120m 南北140m	山林	曲輪・堀切を確認。	11左	179
93	四ッ畝城跡	阿賀 上房	真庭市上水田・高梁市有漢町上有漢	北緯34° 56′ 30″ 東経133° 40′ 04″	頂部	470	290	東西330m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁・櫓台を確認。	11左	180
94	柾木館跡	阿賀	真庭市下中津井	北緯34° 56′ 41″ 東経133° 37′ 27″	端部	210	30	東西40m 南北140m	山林	曲輪・堀切を確認。	11左	181

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
95	定砦跡	阿賀	真庭市上中津井	北緯34° 56′ 31″ 東経133° 37′ 57″	端部	210	20	東西40m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	11左	181
96	高機山遺跡	阿賀	真庭市上中津井	北緯34° 55′ 54″ 東経133° 38′ 30″	頂部	440	250		山林	山頂部は平坦であるが、自然地形。頂部南緩斜面3×5mの範囲に木炭片と焼土塊の散布を確認するが時期不明。『北房町史』記載の故事来歴の根拠は不明。城館関連遺構は判然としない。	11左	
97	川崎城跡	阿賀	新見市草間	北緯34° 54′ 58″ 東経133° 31′ 42″	頂部	370	220	東西120m 南北70m	山林・社寺	曲輪を確認。	14左	182
98	古見山城跡	阿賀	高梁市中井町西方	北緯34° 55′ 02″ 東経133° 34′ 49″	尾根部	310	150	東西50m 南北170m	山林	曲輪を確認。	14右	182
99	城山城跡	阿賀	高梁市中井町西方	北緯34° 54′ 21″ 東経133° 35′ 26″	端部	230	30	東西30m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。	14右	183
100	津々城跡	阿賀	高梁市中井町津々・中井町西方	北緯34° 54′ 46″ 東経133° 35′ 50″	端部	250	70	東西130m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	14右	184
101	勝陣山遺跡	阿賀 上房	真庭市上中津井・高梁市有漢町有漢	北緯34° 54′ 02″ 東経133° 37° 22″	頂部	450	210		山林	山頂部は平坦であるが、自然地形と考えられ、城館関連遺構は判然としない。『北房町史』では毛利元清が永禄12年（1569）斎田城を攻撃したときの宿営地と伝えると記す。	15左	
102	陣ガ畝砦跡	阿賀 上房	真庭市上中津井 高梁市有漢町有漢	北緯34° 54′ 53″ 東経133° 38′ 57″	頂部	480	280		山林	山頂部及び尾根筋に広い平坦面が存在する。南に延びる尾根筋に加工段が認められるものの、城館関連遺構は判然としない。宇喜多氏が陣を構えたと伝わる。	15左	

川上郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
103	戸構城跡	川上	高梁市備中町西山	北緯34° 50′ 50″ 東経133° 21′ 33″	尾根部	550	50		山林・社寺	成羽川北岸の尾根頂部に立地。南北2段の平坦面が残るが神社関連の造成と考えられ、城館関連遺構は判然としない。『備中集成志』『備中誌』では城主を赤木弾正忠泰忠と記す。	12右	
104	軽尾城跡	川上	高梁市備中町西油野	北緯34° 50′ 11″ 東経133° 24′ 16″	尾根部	570	120	東西60m 南北120m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	13左	186
105	小金山城跡	川上	高梁市成羽町吹屋	北緯34° 51′ 41″ 東経133° 28′ 35″	尾根部	490	50	東西140m 南北30m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	13右	187
106	笹尾城跡	川上	高梁市宇治町宇治	北緯34° 50′ 43″ 東経133° 29′ 13″	端部	380	20	東西120m 南北40m	山林	曲輪・堀切を確認。	13右	188
107	滝谷城跡	川上	高梁市宇治町本郷	北緯34° 50′ 23″ 東経133° 28′ 55″	尾根部	480	130	東西120m 南北40m	山林	曲輪・土塁を確認。	13右	188
108	白毛ヶ城跡	川上	高梁市宇治町宇治	北緯34° 50′ 18″ 東経133° 29′ 25″	尾根部	470	120	東西40m 南北120m	山林	曲輪を確認。	13右	189
109	北丸城跡	川上	高梁市備中町平川	北緯34° 48′ 34″ 東経133° 23′ 40″	尾根部	550	190	東西150m 南北70m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認。	16左	189
110	袈裟尾城跡	川上	高梁市備中町東油野	北緯34° 49′ 56″ 東経133° 25′ 08″	尾根部	620	140	東西140m 南北130m	山林・社寺	曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁を確認。	16左	190
111	紫城跡	川上	高梁市備中町平川	北緯34° 49′ 08″ 東経133° 23′ 41″	頂部	600	70	東西160m 南北150m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	16左	191

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
112	平川氏館跡	川上	高梁市備中町平川	北緯34°47′56″ 東経133°23′08″	平地	460	0	東西70m 南北80m	畑・宅地	堀切・土塁を確認。	16左	192
113	山根城跡	川上	高梁市備中町平川・備中町布賀	北緯34°47′44″ 東経133°25′38″	尾根部	260	150	東西110m 南北50m	山林	曲輪・土塁・石列を確認。	16左	192
114	金子山城跡	川上	高梁市備中町平川	北緯34°47′43″ 東経133°22′52″	端部	510	50	東西100m 南北70m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	16左	193
115	大原田城跡	川上	高梁市備中町平川	北緯34°47′01″ 東経133°24′07″	尾根部	450	220	東西60m 南北180m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	16左	194
116	勝負城跡	川上	高梁市備中町布賀	北緯34°47′28″ 東経133°26′01″	頂部	480	360	東西50m 南北90m	山林	曲輪を確認。	16左	195
117	中村城跡	川上	高梁市成羽町布寄	北緯34°48′34″ 東経133°26′44″	尾根部	520	90	東西100m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	16右	196
118	長地城跡	川上	高梁市成羽町長地	北緯34°48′12″ 東経133°27′53″	端部	410	40	東西70m 南北40m	山林	曲輪を確認。	16右	196
119	丸山城跡	川上	高梁市宇治町穴田	北緯34°49′17″ 東経133°29′25″	端部	370	50	東西130m 南北70m	山林	曲輪・土塁・櫓台を確認。	16右	197
120	陣山城跡	川上	高梁市松原町松岡・宇治町宇治	北緯34°49′52″ 東経133°31′12″	頂部	590	100		山林	高梁市宇治町と松原町の字境に位置する陣山頂部が推定地。細長い尾根頂部約300mの間に４か所平坦地が存在するが、自然地形の可能性が高く、城館関連遺構は判然としない。	17左	
121	馬之城跡	川上	高梁市松原町松岡	北緯34°49′13″ 東経133°32′36″	端部	460	10	東西60m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口・土橋を確認。	17左	198
122	秋町城跡	川上	高梁市松原町神原	北緯34°49′54″ 東経133°34′34″	頂部	550	70		山林	高村山頂部に位置する。三角点を中心に楕円形の平坦面とその外周に幅１m程度の溝が見られるが、城館関連遺構は判然としない。	17右	
123	高ノ盛城跡	川上	高梁市成羽町佐々木	北緯34°46′16″ 東経133°30′41″	頂部	470	390	東西70m 南北90m	山林	曲輪・石積みを確認。	17左	198
124	三村氏居館跡	川上	高梁市成羽町成羽	北緯34°47′05″ 東経133°31′59″	平地	70	0	東西160m 南北250m	宅地	曲輪・土塁を確認。	17左	199
125	三村氏陣屋跡	川上	高梁市成羽町下原	北緯34°46′50″ 東経133°32′13″	平地	70	0	東西310m 南北80m	美術館・小学校など	成羽川市街地のほぼ中央、成羽川に南面する石垣遺構として残存する。そのため、三村氏時代の遺構は残存しておらず、三村氏との関連については不明である。市の指定史跡であり、指定名は成羽陣屋跡。東から御作事門、大手門、御庫門の各虎口が残る。石垣の特徴を見る限り、古いものは算木積みの発達も弱く17世紀初頭に遡る可能性がある。	17左	
126	鶴首城跡・古鶴首城跡	川上	高梁市成羽町下原	北緯34°46′33″ 東経133°32′09″	頂部	330	250	東西560m 南北500m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・石積み・虎口・櫓台を確認。	17左	200～205
127	阿部深山城跡	川上	高梁市落合町阿部	北緯34°47′28″ 東経133°34′53″	尾根部	420	280	東西140m 南北30m	山林・公園	曲輪・竪堀を確認。	17右	206
128	鍋阪城跡	川上	高梁市落合町福地	北緯34°46′53″ 東経133°33′23″	端部	160	90	東西70m 南北60m	山林	曲輪を確認。	17左	207
129	ツガン丸城跡	川上	高梁市玉川町下切	北緯34°46′18″ 東経133°34′29″	尾根部	450	20		山林・社寺	北に成羽川を望む山頂に立地する。丘陵頂部にある神社周辺になだらかな平坦面が存在するが、城館関連遺構は判然としない。	17右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
130	玉の城山城跡	川上	高梁市玉川町玉	北緯34°45′24″ 東経133°35′58″	尾根部	240	190	東西110m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	17右	207
131	中山城跡	川上	高梁市川上町高山市	北緯34°44′47″ 東経133°23′35″	尾根部	500	130		山林・宅地	前谷川の南側にある東西方向に細長い標高約500ｍの尾根頂部に位置する。頂部に規模の小さい平坦地があるが、現在は宅地化されている。東側の尾根先端方向には自然地形が続き、城館関連遺構は判然としない。	20左	
132	折居城跡	川上	高梁市川上町高山	北緯34°44′10″ 東経133°25′38″	端部	450	20		山林	尾根頂部に平坦面があり、石敷と宝篋印塔1基を確認した。城館関連遺構は判然としない。	20左	
133	小城山城跡	川上	高梁市川上町七地	北緯34°45′00″ 東経133°28′13″	尾根部	420	260	東西100m 南北80m	山林	曲輪・堀切を確認。	20右	208
134	小社森城跡	川上	高梁市川上町地頭	北緯34°44′07″ 東経133°29′09″	端部	180	40	東西30m 南北100m	山林	曲輪・堀切を確認。	20右	208
135	国吉城跡	川上	高梁市川上町七地	北緯34°44′50″ 東経133°28′18″	尾根部	410	250	東西40m 南北210m	山林・公園	市指定史跡。曲輪・土塁を確認。	20右	209・210
136	堀ノ内遺跡	川上	高梁市川上町地頭	北緯34°44′12″ 東経133°29′02″	平地	130	0		宅地	川上町地頭の中心部に位置する。商店街通りと川上地域局前の道が交差する十字路を中心とするが、現状では城館関連遺構は判然としない。	20右	
137	小笹丸城跡	川上	井原市美星町黒忠	北緯34°41′44″ 東経133°30′47″	尾根部	380	70	東西110m 南北120m	山林・社寺	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口・井戸を確認。	21右	211
138	野田城跡	川上	高梁市川上町三沢	北緯34°43′05″ 東経133°30′21″	端部	190	20	東西25m 南北70m	山林・神社	曲輪・堀切・土塁を確認。	21左	212
139	氏高公館跡	川上	井原市美星町黒忠	北緯34°40′57″ 東経133°30′41″	端部	360	20		山林・公園	公園整備や畑地造成により大規模に改変を受けている。公園の南西側には堀切と想定される土塁を伴った溝が掘削されている。尾根筋を断ち切る３条の溝を確認したが、これらに挟まれた尾根上平坦面の城館関連遺構は判然としない。	21右	

上房郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
140	飯ノ山城跡	上房 津高	高梁市有漢町上有漢・ 加賀郡吉備中央町福沢	北緯34°56′24″ 東経133°43′08″	頂部	500	60	東西170m 南北100m	山林・社寺	曲輪・掘切・竪堀群を確認。	11右	214
141	寺山城跡	上房	高梁市川面町	北緯34°51′22″ 東経133°35′40″	頂部	310	170	東西650m 南北200m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁・虎口・土橋を確認。	14右	215～217
142	城平城跡	上房	高梁市川面町	北緯34°51′45″ 東経133°35′09″	尾根部	300	100	東西150m 南北30m	山林	曲輪・堀切・土塁・櫓台を確認。	14右	217
143	鳴戸城跡	上房	高梁市川面町	北緯34°50′21″ 東経133°35′56″	尾根部	200	100	東西120m 南北20m	山林	曲輪・堀切を確認。	14右	218
144	殿屋敷跡	上房	高梁市有漢町有漢	北緯34°55′08″ 東経133°40′31″	端部	320	60	東西40m 南北170m	山林	曲輪を確認。	15左	218
145	飯の山城跡	上房	高梁市有漢町有漢	北緯34°54′18″ 東経133°38′50″	尾根部	340	90	東西180m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	15左	219
146	台ヶ鼻城跡	上房	高梁市有漢町有漢	北緯34°54′07″ 東経133°39′47″	端部	210	30	東西50m 南北110m	山林・畑	市指定史跡。曲輪を確認。	15左	220

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
147	常山城跡	上房	高梁市有漢町有漢	北緯34°54′48″ 東経133°40′29″	端部	250	50	東西280m 南北270m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・櫓台・土橋を確認。	15左	221・222
148	粧田山城跡	上房	高梁市巨瀬町	北緯34°51′49″ 東経133°39′31″	尾根部	400	250	東西33m 南北10m	道路	発掘調査あり。曲輪を確認。	15左	223
149	羽子田城跡	上房	加賀郡吉備中央町豊野	北緯34°52′29″ 東経133°41′25″	端部	370	40	東西50m 南北145m	山林・畑	町指定史跡。曲輪・堀切・土塁を確認。	15右	224
150	上ヶ城跡	上房	加賀郡吉備中央町竹荘	北緯34°51′36″ 東経133°41′06″	端部	300	10		畑・宅地・社寺	頂部に平坦面はあるものの、城館関連遺構は判然としない。	15右	
151	野路山城跡	上房	加賀郡吉備中央町上竹	北緯34°50′17″ 東経133°40′35″	尾根部	430	60	東西30m 南北25m	山林・公園跡	曲輪・土塁を確認。	15左	225
152	陰地城跡	上房	加賀郡吉備中央町上竹	北緯34°50′14″ 東経133°40′41″	尾根部	450	80	東西33m 南北38m	山林	曲輪・横堀・土塁を確認。	15左	225
153	大原城跡	上房	加賀郡吉備中央町田土	北緯34°51′25″ 東経133°43′46″	尾根部	320	70	東西150m 南北200m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	15右	226
154	小谷城跡	上房	加賀郡吉備中央町湯山	北緯34°51′03″ 東経133°44′30″	尾根部	350	110	東西90m 南北130m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	15右	227
155	大畑城跡	上房	加賀郡吉備中央町湯山	北緯34°51′18″ 東経133°44′42″	尾根部	350	130		山林	頂部や尾根筋の平坦面は狭く、城館関連遺構は判然としない。林道により大きく損壊。	15右	
156	矢倉城跡	上房	加賀郡吉備中央町上竹	北緯34°50′39″ 東経133°41′37″	頂部	580	80	東西65m 南北55m	山林	曲輪・横堀・土塁を確認。	15右	228
157	高陣の陣跡	上房	高梁市松山	北緯34°48′30″ 東経133°38′25″	尾根部	500	20	東西70m 南北90m	山林	曲輪・土塁を確認。	18左	228
158	備中松山城跡	上房	高梁市内山下	北緯34°48′32″ 東経133°37′20″	頂部	420	340	東西800m 南北1800m	山林・公園	国指定史跡。曲輪・堀切・土塁・石垣・虎口・櫓台・土橋を確認。	17右	229〜241
159	備中松山城尾根小屋跡	上房	高梁市内山下	北緯34°48′06″ 東経133°37′04″	端部	85	20	東西230m 南北220m	高校	県指定史跡。近世城郭である備中松山城のうち、戦闘施設として本丸、二の丸、三の丸、太鼓の丸他を後背の臥牛山山頂に残した上で、城主の居館と政庁を山麓に移し築城されたもの。主な施設としては御殿、作業所、台所、米蔵、茶屋、武具方などがある。石垣の特徴から築城は慶長期にまで遡る公算が大きく、江戸時代初頭、備中一国の総代官となった小堀政一により築城されたものと思われる。	17右	229〜241
160	広瀬固屋城跡	上房	高梁市松山	北緯34°45′42″ 東経133°36′33″	尾根部	290	240		山林	南から北東へ高梁川を望む山頂に立地する。頂部に幅15m×長さ20mほどの平坦な地点があり、中央から西側へ約100m先に幅約10mの平坦面があった。城館関連遺構は判然としない。	17右	
161	離小屋城跡	上房	加賀郡吉備中央町上竹	北緯34°49′47″ 東経133°39′31″	尾根部	370	60		山林・運動場	頂部は大きく削平を受けている。斜面地でも城館関連遺構は判然としない。	18左	
162	大和佐山城跡	上房 賀陽	加賀郡吉備中央町納地・北	北緯34°49′28″ 東経133°41′27″	頂部	600	230	東西730m 南北370m	山林・無線中継局・雨量観測施設	東西に2か所に平坦地をもつが、無線中継施設や雨量観測施設建設により著しく地形改変が及び、城館関連遺構は判然としない。『備中府志』では城主は土肥実平の末裔の土肥頼母とされる。	18右	
163	菅野城跡	上房	加賀郡吉備中央町吉川	北緯34°49′16″ 東経133°45′18″	端部	370	20	東西50m 南北60m	山林・社	曲輪・土塁・横堀・虎口を確認。	19左	242

後月郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
164	高原城跡	後月	井原市芳井町上鴫	北緯34°41′51″ 東経133°23′16″	端部	400	10		水田・畑	小円丘上に所在すると伝えられている城。後世の改変が著しく、城館関連遺構は判然としない。裾部に五輪塔が所在。	20左	
165	井戸橋城跡	後月	井原市芳井町下鴫	北緯34°40′38″ 東経133°24°28″	尾根部	260	130	東西190m 南北80m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	20左	244
166	小屋の山城跡	後月	井原市芳井町種	北緯34°40′44″ 東経133°27′40″	端部	410	30	東西70m 南北90m	山林	曲輪・横堀・竪堀・土塁を確認。	20右	245
167	中山城跡	後月	井原市芳井町川相	北緯34°39′07″ 東経133°24′32″	端部	140	40	東西20m 南北170m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	24左	245
168	木之山城跡	後月	井原市芳井町宇戸川	北緯34°38′25″ 東経133°26′26″	尾根部	250	180	東西110m 南北270m	山林	曲輪・横堀・土塁を確認。	24右	246・247
169	正霊山城跡	後月	井原市芳井町吉井	北緯34°38′02″ 東経133°25′51″	端部	110	50	東西70m 南北140m	山林・畑	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	24左	248
170	有井城跡	後月	井原市芳井町吉井	北緯34°37′14″ 東経133°25′03″	平地	90	0		水田	名称未定遺跡（芳井町57）。有井城推定地と伝えられる。須恵器・灰釉陶器が表採され、遺構が存在する可能性が高い。	24左	
171	大仙山古城跡	後月	井原市芳井町吉井	北緯34°37′45″ 東経133°25′47″	頂部	210	150		山林	小田川の西側にある独立山塊頂部に位置する。頂部に約40mの平坦面を有するが、周辺は後世の削平が著しく、城館関連遺構かどうか判然としない。	24左	
172	能多ヶ丸城跡	後月	井原市芳井町吉井	北緯34°37′54″ 東経133°26′16″	尾根部	220	160		山林	小田川東岸の尾根筋に立地。平坦地はあるが、城郭関連遺構かどうかは判然としない。平成11年の分布調査では、地元では「城跡」と呼ぶとする。『備中誌』の「能多ヶ丸」か。	24右	
173	名称未定	後月	井原市芳井町与井・芳井町吉井	北緯34°37′57″ 東経133°26′26″	尾根部	260	190		山林	能多ヶ丸城跡の東約300m、尾根続きの高所、城郭関連遺構かどうかは判然としない。平成11年の分布調査で、ここより北東約200mの尾根上に「木戸口」の地名を確認。	24右	
174	雄瀬山城跡	後月	井原市芳井町梶江・芳井町与井	北緯34°37′26″ 東経133°26′38″	尾根部	160	110	東西180m 南北100m	山林	曲輪・堀切を確認。	24右	249
175	小菅城跡	後月	井原市西江原町	北緯34°37′40″ 東経133°29′08″	頂部	240	150	東西200m 南北80m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	24右	250
176	落石城跡	後月	井原市高屋町	北緯34°36′23″ 東経133°24′23″	尾根部	180	90	東西180m 南北50m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	24左	251
177	高屋城跡	後月	井原市高屋町	北緯34°36′05″ 東経133°25′17″	尾根部	250	190	東西150m 南北110m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認。	24左	252・253
178	吉谷城跡	後月	井原市高屋町	北緯34°36′00″ 東経133°25′36″	尾根部	250	200	東西120m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・石垣を確認。	24左	254
179	山手城跡	後月	井原市高屋町	北緯34°35′34″ 東経133°25′32″	尾根部	120	70	東西60m 南北120m	山林	曲輪・堀切・虎口・土橋を確認。	24左	255
180	小見山城跡	後月	井原市高屋町	北緯34°35′30″ 東経133°25′51″	尾根部	180	140	東西70m 南北420m	山林・果樹園	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	24左	256・257
181	念堂山城跡	後月	井原市井原町	北緯34°36′25″ 東経133°26′45″	尾根部	180	110	東西25m 南北90m	山林・社寺	曲輪を確認。	24右	258
182	横手山城跡	後月	井原市井原町	北緯34°36′16″ 東経133°27′10″	尾根部	180	130	東西20m 南北140m	山林・畑・社寺	尾根頂部は緩やかな斜面で、下った先に神社などで加工段が２段ほどつくられている。現状では城館関連遺構は判然としない。	24右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
183	青陰城跡	後月	井原市西江原町	北緯34°36′09″ 東経133°28′12″	端部	90	40	東西50m 南北70m	テレビ中継塔	曲輪を確認。	24右	258
184	鎌田城跡	後月	井原市上出部町	北緯34°35′28″ 東経133°27′52″	端部	50	10		墓地	井原平野南縁の北延する尾根に立地。尾根の東半分は道路により削平され、西半分は墓地となり、地形改変が大きい。城館関連遺構は判然としない。	24右	
185	伊達氏館跡	後月	井原市七日市町	北緯34°35′44″ 東経133°28′26″	平地	30	0	東西150m 南北110m	宅地	堀を確認。	24右	259
186	十蔵城跡	後月	井原市西江原町	北緯34°36′28″ 東経133°29′11″	平地	50	0		畑・宅地	中堀城跡と同じく那須氏が築いた小菅城跡の前身の城とされる。現在は宅地化して城館関連遺構は判然としないが、遺物の散布が見られることから埋蔵文化財包蔵地となっている。現在お宮が建っている周辺が、周囲より高い地形である。推定地の東側の小字が「城東」である。	24右	
187	中堀城跡	後月	井原市西江原町	北緯34°35′57″ 東経133°29′22″	平地	30	0	東西250m 南北200m	宅地	堀を確認。	24右	259
188	亀迫城跡	後月	井原市西江原町	北緯34°36′20″ 東経133°29′31″	端部	70	20	東西100m 南北160m	公園	曲輪・土塁・竪堀を確認。	24右	260
189	白実城跡	後月	井原市東江原町・西江原町	北緯34°35′49″ 東経133°29′49″	端部	50	20	東西30m 南北140m	山林・社寺・墓地	曲輪を確認。	24右	261
190	米持城跡	後月	井原市東江原町	北緯34°36′13″ 東経133°30′09″	端部	80	40	東西50m 南北80m	山林	曲輪を確認。	25左	261
191	高越城跡	後月	井原市東江原町・神代町	北緯34°36′19″ 東経133°31′12″	頂部	170	130	東西150m 南北120m	山林・公園	市指定史跡。曲輪・堀切・井戸を確認。	25左	262・263
192	戸木荒神山城跡	後月	井原市下出部町	北緯34°35′08″ 東経133°27′07″	尾根部	120	80	東西60m 南北220m	山林	曲輪・堀切を確認。	28右	264
193	才崎城跡	後月	井原市木之子町	北緯34°35′03″ 東経133°30′04″	尾根部	90	50	東西90m 南北60m	山林・畑	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	29左	265・266

小田郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
194	宇戸谷茶臼山城跡	小田	井原市美星町宇戸谷	北緯34°42′46″ 東経133°34′11″	尾根部	330	90	東西30m 南北80m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	21右	268
195	土居山城跡	小田	井原市美星町鳥頭	北緯34°41′39″ 東経133°34′48″	端部	320	30	東西50m 南北100m	山林	曲輪・堀切を確認。	21右	268
196	茶臼山城跡	小田	井原市美星町星田	北緯34°40′15″ 東経133°29′50″	端部	360	30	東西60m 南北70m	山林・社寺	曲輪を確認。	21左	269
197	城山城跡	小田	井原市美星町三山	北緯34°40′48″ 東経133°32′32″	端部	340	20		山林・宅地	地元で「城山」と呼ばれている丘陵に所在すると伝えられている城。後世の開発によって大規模に改変され、城館関連遺構は判然としない。	21左	
198	土井の前城跡	小田	井原市美星町三山	北緯34°40′38″ 東経133°32′40″	平地	340	0	東西70m 南北60m	山林・畑・宅地	土塁を確認。	21左	269

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
199	殿ヶ市城跡	小田	小田郡矢掛町上高末	北緯34° 40′ 30″ 東経133° 35′ 20″	端部	130	30	東西130m 南北60m	山林・社寺	曲輪・竪堀を確認。	21右	270
200	三村氏居館跡	小田	井原市美星町星田	北緯34° 39′ 57″ 東経133° 31′ 01″	平地	390	10	東西80m 南北100m	畑	市指定史跡。土塁を確認。	25左	270
201	金黒山城跡	小田	井原市美星町星田	北緯34° 39′ 55″ 東経133° 30′ 12″	尾根部	360	80	東西90m 南北140m	山林	市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・土橋を確認。	25左	271
202	法雲山城跡	小田	井原市美星町星田	北緯34° 39′ 03″ 東経133° 29′ 57″	端部	300	20	東西170m 南北40m	山林・墓地	曲輪・堀切を確認。	25左	272
203	岩崎城跡	小田	井原市美星町星田	北緯34° 39′ 00″ 東経133° 30′ 16″	尾根部	350	70		山林・宅地	頂部付近は、養鶏（養豚？）場の跡地によって削平されている。頂部北側端にわずかに切岸状の加工面が残る。	25左	
204	尼子城跡	小田	井原市美星町星田	北緯34° 38′ 58″ 東経133° 30′ 36″	端部	240	30	東西60m 南北10m	山林	星田池の西奥に立地。周囲は車道による削平を受ける。尾根上はほぼ平坦で、約50㎝の段差や石組み井戸あり。明確な城館関連遺構は判然としない。地元は「尼子城」と呼ぶ。	25左	
205	下高末城跡	小田	小田郡矢掛町上高末・下高末	北緯34° 40′ 04″ 東経133° 35′ 15″	頂部	210	150	東西110m 南北120m	山林	曲輪・土塁を確認。	25右	272
206	瀧山古城跡	小田	小田郡矢掛町宇内	北緯34° 38′ 33″ 東経133° 32′ 16″	尾根部	120	50	東西100m 南北200m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・土橋を確認。	25左	273
207	薬師山城跡	小田	小田郡矢掛町下高末	北緯34° 39′ 33″ 東経133° 35′ 16″	端部	100	40	東西150m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。	25右	274
208	小林山城跡	小田	小田郡矢掛町小林	北緯34° 38′ 40″ 東経133° 34′ 31″	頂部	190	150	東西100m 南北100m	山林	曲輪・堀切を確認。	25右	274
209	神戸山城跡	小田	小田郡矢掛町小田	北緯34° 36′ 51″ 東経133° 32′ 23″	頂部	150	110	東西240m 南北110m	山林	曲輪を確認。	25左	275
210	岩屋山城跡	小田	小田郡矢掛町小田	北緯34° 36′ 18″ 東経133° 32′ 11″	頂部	150	110	東西50m 南北150m	山林	曲輪を確認。	25左	276
211	龍山城跡	小田	小田郡矢掛町小田・浅海	北緯34° 36′ 07″ 東経133° 33′ 02″	尾根部	90	60	東西90m 南北60m	山林	曲輪を確認。	25左	276
212	川面館跡	小田	小田郡矢掛町西川面	北緯34° 37′ 00″ 東経133° 34′ 07″	平地	20	0	東西100m 南北130m	水田	発掘調査あり。柱穴列・堀を確認。	25右	277
213	太郎丸城跡	小田	小田郡矢掛町浅海・江良	北緯34° 36′ 20″ 東経133° 33′ 54″	尾根部	90	60		山林	南側の麓には「太郎丸」と呼ばれる屋敷が建つ。丘陵頂部には古墳が３基ほど存在する。頂部の東側先端部に切岸状の段差があるが、頂部を含めて城館関連遺構かどうかは判然としない。	25右	
214	神子山城跡	小田	小田郡矢掛町小林	北緯34° 37′ 58″ 東経133° 34′ 45″	端部	60	30	東西120m 南北80m	山林	曲輪を確認。	25右	277
215	蓮池城跡	小田	小田郡矢掛町東川面	北緯34° 37′ 34″ 東経133° 34′ 27″	端部	50	20		山林・畑	細尾根上の広範囲に平坦地が存在するが、後世に畑地として利用されたようで、城館関連遺構としては判然としない。尾根先端付近には小さい平坦地があり、現在祠が建つ。また尾根上には古墳が数基存在する。	25右	
216	中山城跡	小田	小田郡矢掛町東三成・矢掛	北緯34° 37′ 44″ 東経133° 32′ 26″	端部	70	30	東西30m 南北110m	山林	曲輪・堀切を確認。	25右	278
217	山本城跡	小田	小田郡矢掛町矢掛・東三成	北緯34° 37′ 48″ 東経133° 36′ 41″	端部	90	50	東西80m 南北60m	山林	曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁・虎口を確認。	25右	278

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
218	伽藍山城跡	小田	小田郡矢掛町江良・里山田	北緯34° 36′ 30″ 東経133° 35′ 07″	頂部	290	200	東西110m 南北370m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	25右	279・280
219	山田古城跡	小田	小田郡矢掛町南山田	北緯34° 35′ 42″ 東経133° 35′ 44″	尾根部	210	180	東西30m 南北200m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。	25右	281
220	要害山城跡	小田	小田郡矢掛町東三成	北緯34° 37′ 22″ 東経133° 36′ 58″	尾根部	160	120	東西260m 南北190m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・土橋を確認。	25右	282
221	中山城跡	小田	小田郡矢掛町南山田・中・横谷	北緯34° 35′ 52″ 東経133° 36′ 29″	頂部	270	230	東西720m 南北220m	山林	曲輪・堀切・虎口・土塁・土橋を確認。	25右	283～285
222	船が迫山城跡	小田	小田郡矢掛町南山田	北緯34° 35′ 50″ 東経133° 36′ 10″	尾根部	180	150	東西90m 南北40m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・土橋を確認。	25右	285
223	茶臼山城跡	小田	小田郡矢掛町東三成・矢掛	北緯34° 37′ 17″ 東経133° 36′ 08″	尾根部	110	90	東西700m 南北600m	山林・公園	曲輪・堀切・竪堀・土橋を確認。	25右	283～290
224	庄氏館跡	小田	小田郡矢掛町横谷	北緯34° 36′ 12″ 東経133° 37′ 29″	平地	20	0	東西50m 南北60m	宅地・畑	猿懸城西麓の緩斜面上に立地する。福武家住宅の東側にある東西約80m、南北約70mの範囲が該当するものと思われる。城館関連遺構は判然としない。	26左	
225	花房氏館跡	小田	小田郡矢掛町横谷	北緯34° 36′ 14″ 東経133° 37′ 31″	平地	20	0	東西80m 南北70m	山林・宅地	猿懸城西麓の緩斜面上に立地し、南側に庄氏館跡が隣接する。東西約50m、南北約60mの方形の敷地であったと推測される。城館関連遺構は判然としない。	26左	
226	原砦跡	小田	小田郡矢掛町横谷	北緯34° 35′ 37″ 東経133° 37′ 34″	端部	80	30	東西80m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	26左	290
227	猿掛城跡	小田 下道	小田郡矢掛町横谷・倉敷市真備町妹	北緯34° 36′ 34″ 東経133° 38′ 16″	尾根部	240	210	東西120m 南北440m	山林	町・市指定史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・石垣・虎口を確認。	26左	291～293
228	楢村氏居館跡	小田	笠岡市走出	北緯34° 35′ 49″ 東経133° 31′ 42″	平地	20	0		水田・宅地	小田川が東西に流れる箇所の南隣に位置する。現在は水田と宅地だが、「城」という地名が残り、東西と北側は現有の道路で、南側は水路に区切られた200×150mの範囲内を屋敷地と推定する。	25左	
229	折敷山城跡	小田	笠岡市走出	北緯34° 35′ 37″ 東経133° 32′ 05″	尾根部	60	40	東西350m 南北170m	山林・畑	曲輪・堀切・竪堀群・石積みを確認。	25左	294・295
230	滝山城跡	小田	井原市大江町	北緯34° 34′ 27″ 東経133° 25′ 33″	尾根部	100	70	東西80m 南北120m	山林・畑	曲輪・土塁・石積みを確認。	28左	296
231	工ヶ城跡	小田	井原市下稲木町・上稲木町	北緯34° 33′ 44″ 東経133° 27′ 18″	尾根部	110	60	東西240m 南北100m	山林	市指定史跡。曲輪・土塁を確認。	28右	297・298
232	すくも山城跡	小田	井原市大江町	北緯34° 34′ 46″ 東経133° 26′ 21″	端部	40	20	東西90m 南北60m	山林	曲輪を確認。	28右	298
233	仮名沢城跡	小田	笠岡市篠坂・井原市上稲木町	北緯34° 32′ 32″ 東経133° 27′ 29″	尾根部	150	100		山林	城関山山頂一体に立地するとされる。城館間関連遺構は判然としない。部分的に字境の土塁が認められる。	28右	
234	入田城跡	小田	笠岡市入田・西大戸・有田	北緯34° 31′ 51″ 東経133° 28′ 27″	尾根部	160	70		山林	頂部付近と尾根先端付近に平坦面、また切岸状の加工面がある。	28右	
235	有田城跡	小田	笠岡市有田	北緯34° 31′ 19″ 東経133° 28′ 01″	端部	20	10	東西30m 南北100m	畑・宅地	「城ヶ曾根・代官屋敷・堀田」の地名が残る。尾根先端高所に主郭、尾根先端方向に２面程の腰曲輪を設ける城と推定。『備中誌』は「在田城」とし、城主小見山備中守文応年中（1260）と記す。	28右	
236	明知城跡	小田	笠岡市用之江・福山市大門町	北緯34° 30′ 36″ 東経133° 26′ 45″	尾根部	180	70		山林	２か所の頂部に平坦面がある。また土塁が頂部付近を横断する。城館間関連遺構としては判然としない。	28右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
237	明知山城跡	小田	笠岡市用之江・福山市大門町	北緯34° 30′ 21″ 東経133° 26′ 42″	尾根部	140	100	東西220m 南北40m	山林・無線局	曲輪を確認。	28 右	299
238	森山城跡	小田	笠岡市用之江・福山市大門町	北緯34° 30′ 22″ 東経133° 26′ 59″	尾根部	110	70		山林	広島県境付近の山塊から派生する尾根筋端部に位置する。頂部に平坦面あり、その北側に帯曲輪状の加工面がある。また北東側の尾根端部に畝状竪堀群が築かれる。	28 右	
239	大橋山城跡	小田	笠岡市大宜	北緯34° 30′ 46″ 東経133° 28′ 16″	端部	20	20	東西80m 南北130m	山林	曲輪を確認。	28 右	299
240	西浜城跡	小田	笠岡市金浦	北緯34° 30′ 58″ 東経133° 29′ 33″	尾根部	80	70	東西300m 南北200m	山林	曲輪を確認。	28 右	300
241	政所山城跡	小田	笠岡市新賀	北緯34° 33′ 59″ 東経133° 31′ 30″	端部	60	20	東西40m 南北50m	山林	曲輪を確認。	29 左	301
242	諏訪山城跡	小田	笠岡市山口	北緯34° 33′ 53″ 東経133° 31′ 45″	端部	60	20	東西50m 南北60m	山林	曲輪を確認。	29 左	301
243	馬鞍山城跡	小田	笠岡市山口	北緯34° 34′ 11″ 東経133° 32′ 36″	尾根部	220	130	東西140m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	29 左	302
244	小丸山城跡	小田	笠岡市尾坂	北緯34° 34′ 08″ 東経133° 33′ 25″	端部	150	20		山林	尾坂川に向かって西に張り出す尾根端部。ほぼ水平な畑地跡と西側斜面に新しい墓地がある。城館関連遺構としては判然としない。	29 左	
245	小平井城跡	小田	笠岡市小平井	北緯34° 32′ 15″ 東経133° 30′ 26″	端部	40	20		畑・宅地・運動場	吉田川の上流、南へ突きだした丘陵上で、現在約130×60mの運動場となっている。「馬場ノ下」・「門戸」の地名が残る。城館間関連遺構としては判然としない。	29 左	
246	園井土井遺跡	小田	笠岡市園井	北緯34° 32′ 05″ 東経133° 31′ 18″	平地	40	0	東西60m 南北60m	畑	発掘調査あり。掘立柱建物・堀・柵を確認。	29 左	303
247	園井城跡	小田	笠岡市園井	北緯34° 31′ 46″ 東経133° 31′ 16″	尾根部	100	80	東西40m 南北60m	山林・配水池	曲輪を確認。	29 左	304
248	鳶の子城跡	小田	笠岡市笠岡・園井	北緯34° 31′ 31″ 東経133° 31′ 08″	尾根部	140	90	東西40m 南北110m	山林・鉄塔	曲輪・堀切を確認。	29 左	304
249	笠岡山城跡	小田	笠岡市笠岡・金浦	北緯34° 30′ 42″ 東経133° 30′ 08″	頂部	150	140	東西70m 南北40m	山林	曲輪・土塁を確認。	29 左	305
250	広浜城跡	小田 浅口	笠岡市広浜・浅口郡里庄町新庄	北緯34° 30″ 35″ 東経133° 32′ 27″	尾根部	80	70	東西40m 南北40m	山林	城館間関連遺構としては判然としない。	29 左	306
251	高丸城跡	小田	笠岡市茂平・西茂平	北緯34° 29′ 05″ 東経133° 27′ 08″	頂部	70	70		山林・土取場	現地確認困難のため、状況不明。	31 右	
252	前影山城跡	小田	笠岡市茂平	北緯34° 29′ 34″ 東経133° 28′ 04″	尾根部	140	140		山林	大橋山城跡の支城と伝えられているが、城館間関連遺構としては判然としない。	31 右	
253	小見山城跡	小田	笠岡市神島	北緯34° 28′ 34″ 東経133° 30′ 50″	頂部	90	80		山林・社寺	城館間関連遺構としては判然としない。	32 左	306
254	笠岡城跡	小田	笠岡市笠岡	北緯34° 30′ 04″ 東経133° 30′ 22″	頂部	60	60	東西150m 南北350m	社寺・公園	曲輪を確認。	32 左	307・308
255	鳴ヶ端城跡	小田	笠岡市横島・入江	北緯34° 29′ 12″ 東経133° 31′ 36″	端部				宅地・高校	丘陵上に所在したと伝えられるが、後世の開発等により丘陵全域が削平されたため、詳細不明。	32 左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
256	横島城跡	小田	笠岡市横島	北緯34° 29′ 02″ 東経133° 31′ 29″	端部	40	30		山林	横島から派生した尾根の北側先端頂部に位置する。頂部は、緩やかな平坦面が続く。東側の斜面に帯曲輪状の地形が巡る。	32 左	
257	福浦城跡	小田	笠岡市神島内浦	北緯34° 27′ 54″ 東経133° 30′ 00″	尾根部	110	110		山林	神島内浦の福浦浜の西に位置する尾根上。高所や尾根筋、尾根鞍部付近に平坦な場所はあるが、自然地形である。城館関連遺構は判然としない。	32 左	
258	鳥越城跡	小田	笠岡市神島内浦	北緯34° 28′ 13″ 東経133° 31′ 13″	端部	50	50		山林・社寺	頂部に平坦面が所在するが、畑地造成等による改変が認められる。頂部西側に性格不明の石垣が存在する。	32 左	
259	大道城跡	小田	笠岡市神島外浦	北緯34° 27′ 01″ 東経133° 29′ 56″	端部	50	50	東西60m 南北30m	山林・畑	曲輪を確認。	32 左	309
260	平山砦跡	小田	笠岡市真鍋島	北緯34° 21′ 30″ 東経133° 34′ 22″	端部	30	30		社寺	神社によって改変を受ける。西側に野面積みの石塁や土塁が築かれているものの、城館関連遺構は判然としない。	33 右	
261	沢津城跡	小田	笠岡市真鍋島	北緯34° 21′ 04″ 東経133° 34′ 26″	頂部	120	120		山林・社寺	阿弥陀山及びそこから西へ延びる尾根上に城が所在したと伝わる。頂部の祠や、尾根筋の畑地造成等によって改変を受ける。なお、「城田」という城館関連地名が伝わる。	33 右	
262	真鍋城跡	小田	笠岡市真鍋島	北緯34° 21′ 30″ 東経133° 34′ 58″	尾根部	80	80	東西25m 南北30m	山林・社寺	市指定史跡。曲輪・石垣を確認。	33 右	309
263	城山城跡	小田	笠岡市真鍋島	北緯34° 21′ 40″ 東経133° 35′ 17″	頂部	120	120	東西50m 南北30m	山林	曲輪を確認。	33 右	310

下道郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
264	要害山城跡	下道	総社市原	北緯34° 44′ 24″ 東経133° 37′ 46″	尾根部	320	220	東西90m 南北20m	山林	曲輪・堀切・櫓台を確認。	22 左	312
265	三本松城跡	下道	総社市原	北緯34° 44′ 25″ 東経133° 37′ 39″	尾根部	340	240	東西80m 南北20m	山林	曲輪・堀切を確認。	22 左	312
266	山本城跡	下道	総社市原	北緯34° 44′ 17″ 東経133° 38′ 18″	尾根部	160	110	東西340m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	22 左	313
267	下倉城跡	下道	総社市下倉	北緯34° 42′ 55″ 東経133° 39′ 39″	尾根部	180	140	東西250m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	22 左	314
268	田広木城跡	下道	総社市久代	北緯34° 41′ 13″ 東経133° 40′ 17″	尾根部	230	200	東西50m 南北120m	山林	曲輪・土塁を確認。	22 左	315
269	殿砂遺跡	下道	総社市新本	北緯34° 40′ 15″ 東経133° 39′ 14″	平地	50	0		水田・宅地	発掘調査あり。掘立柱建物・井戸・方形区画などを確認。	22 左	315
270	鬼身城跡	下道	総社市山田・下倉・久代	北緯34° 41′ 17″ 東経133° 39′ 55″	頂部	280	220	東西120m 南北190m	山林	市指定史跡。曲輪・掘切・竪堀群・土塁・石垣・虎口を確認。	22 左	316～318
271	高丸古城跡	下道	総社市久代	北緯34° 41′ 18″ 東経133° 40′ 37″	頂部	250	200	東西50m 南北120m	山林	曲輪・土塁を確認。	22 左	319
272	荒平山城跡	下道	総社市秦	北緯34° 41′ 53″ 東経133° 42′ 56″	頂部	190	160	東西60m 南北190m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口・井戸を確認。	22 右	320
273	市場古城跡	下道	総社市新本	北緯34° 39′ 46″ 東経133° 38′ 36″	端部	60	10	東西100m 南北140m	畑・宅地	曲輪・土塁を確認。	26 左	321

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
274	馬首城跡	下道	総社市新本	北緯34° 39′ 06″ 東経133° 39′ 07″	尾根部	210	130	東西50m 南北20m	山林	曲輪を確認。	26左	321
275	襄越城跡	下道	総社市八代・久代	北緯34° 40′ 04″ 東経133° 41′ 47″	尾根部	130	100	東西180m 南北30m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	26右	322
276	名称未定	下道	総社市八代・久代	北緯34° 40′ 04″ 東経133° 42′ 05″	尾根部	110	90		山林	頂部の平坦面は緩い造りであり、西・南・北東３方向の尾根筋に緩い平坦面が見られる。北東方向の尾根筋は比較的しっかりしている。	26右	
277	馬入道山城跡	下道	倉敷市真備町市場	北緯34° 39′ 41″ 東経133° 41′ 35″	頂部	180	140	東西310m 南北100m	山林	曲輪・掘切・竪堀・土塁を確認。	26右	323・324
278	木村山城跡	下道	総社市八代	北緯34° 39′ 49″ 東経133° 41′ 47″	頂部	200	180	東西60m 南北250m	山林	曲輪を確認。	26右	325
279	夕部山城跡	下道	総社市下原・倉敷市真備町辻田	北緯34° 39′ 32″ 東経133° 43′ 01″	頂部	100	80	東西30m 南北70m	山林・公園	曲輪を確認。	26右	326
280	桜城跡	下道	倉敷市真備町市場	北緯34° 39′ 02″ 東経133° 40′ 45″	平地	32	0	東西70m 南北70m	畑・社寺	土塁を確認。	26左	327
281	陶山城跡	下道	倉敷市玉島陶	北緯34° 35′ 30″ 東経133° 40′ 00″	尾根部	170	120	東西30m 南北140m	山林	曲輪を確認。	26左	327
282	諏訪山城跡	下道	倉敷市真備町妹	北緯34° 38′ 15″ 東経133° 38′ 43″	尾根部	240	180	東西50m 南北500m	山林	曲輪・掘切・竪堀・土塁を確認。	26左	328・329
283	鳥ヶ岳城跡	下道	倉敷市真備町尾崎	北緯34° 37′ 42″ 東経133° 39′ 38″	尾根部	160	140	東西50m 南北180m	山林	曲輪・竪堀・土塁・石列を確認。	26左	330
284	岡田藩陣屋跡	下道	倉敷市真備町岡田	北緯34° 38′ 44″ 東経133° 42′ 22″	平地	19	5	東西350m 南北500m	山林・宅地・小学校	真備町岡田の平野部に位置する。備中伊東氏の陣屋跡とされ、一角は現在、小学校の敷地や、山林、宅地等となっている。小学校敷地の南部に方形の区画が道路として遺存している。その範囲は南北500m、東西350m程を測り、この内部に藩主居館や家臣団の屋敷地が広がっていたものと考えられる。	26右	
285	南山城跡	下道	倉敷市真備町川辺・船穂町柳井原	北緯34° 37′ 22″ 東経133° 43′ 39″	尾根部	60	40	東西110m 南北100m		発掘調査あり。曲輪・堀切・横堀・竪堀群・土塁・虎口・櫓台を確認。	26右	331・332

浅口郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
286	梁場山城跡	浅口	倉敷市船穂町柳井原	北緯34° 36′ 37″ 東経133° 43′ 25″	端部	40	30	東西30m 南北25m	山林・小学校跡地	曲輪、土塁を確認。	26右	334
287	后王城跡	浅口	倉敷市船穂町船穂	北緯34° 35′ 35″ 東経133° 42′ 00″	平地	37	4	東西90m 南北70m	畑・宅地	高梁川の西岸、尾根の先端に立地する。周囲に比べると高所になるが、城館関連遺構は判然としない。	26右	
288	鳶尾城跡	浅口	浅口郡里庄町里見	北緯34° 31′ 13″ 東経133° 33′ 05″	尾根部	190	150	東西25m 南北140m	山林・社寺	曲輪・土塁を確認。	29左	334
289	杉山城跡	浅口	浅口市鴨方町小坂東	北緯34° 33′ 40″ 東経133° 34′ 34″	頂部	220	200	東西260m 南北300m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・石垣を確認。	29右	335・336

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
290	西知山城跡	浅口	浅口市鴨方町地頭上・益坂	北緯34° 33′ 33″ 東経133° 35′ 52″	頂部	180	130	東西120m 南北180m	山林	曲輪・堀切を確認。	29右	337
291	名称未定	浅口	浅口市鴨方町益坂	北緯34° 33′ 13″ 東経133° 35′ 17″	端部	50	20		山林・社寺	日吉神社東の丘陵上に立地する。尾根上に古道と南谷部に開墾が見られるが、城館関連遺構は判然としない。	29右	
292	城山城跡	浅口	浅口市金光町占見新田・金光町上竹	北緯34° 33′ 24″ 東経133° 37′ 07″	頂部	190	180	東西200m 南北80m	山林	曲輪・土塁を確認。	29右	338
293	鴨山城跡	浅口	浅口市鴨方町鴨方・深田・小坂東・本庄	北緯34° 32′ 43″ 東経133° 34′ 49″	頂部	160	100	東西200m 南北350m	山林・公園	曲輪・堀切を確認。	29右	339～341
294	石井山城跡	浅口	浅口市鴨方町深田	北緯34° 32′ 26″ 東経133° 34′ 51″	端部	50	20	東西90m 南北160m	畑・果樹園	鴨方往来を北背にして、南へ延びる標高50mの丘陵頂部に位置する。城域は南北160m、東西90mに及ぶとされる。現況は畑地で、城館関連遺構は判然としない。	29右	
295	益坂城跡	浅口	浅口市鴨方町益坂	北緯34° 33′ 15″ 東経133° 35′ 41″	端部	60	20	東西80m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	29右	341
296	安芸守山城跡	浅口	浅口市金光町地頭下	北緯34° 32′ 58″ 東経133° 35′ 56″	頂部	200	170	東西80m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀・石列・土橋を確認。	29右	342・343
297	片山城跡	浅口	浅口市鴨方町益坂	北緯34° 33′ 21″ 東経133° 35′ 59″	端部	60	20	東西100m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	29右	343
298	おどえ屋敷跡	浅口	浅口市金光町占見	北緯34° 32′ 59″ 東経133° 36′ 53″	平地	27	0		山林・畑・宅地	範囲北西隅の石垣に接して東西方向の幅１ｍ程度の石組み水路あり、砂防関連の可能性が高い。石垣は切石を使用し江戸中期以降だろう。城館関連遺構としては判然としない。	29右	
299	泉山城跡	浅口	浅口市鴨方町六条院中	北緯34° 30′ 51″ 東経133° 35′ 31″	頂部	220	180	東西120m 南北150m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	29右	344
300	長山城跡	浅口	浅口市金光町佐方・金光町須恵	北緯34° 31′ 34″ 東経133° 36′ 54″	頂部	130	100	東西100m 南北90m	山林	曲輪・土塁を確認。	29右	345
301	佐方城跡	浅口	浅口市金光町佐方	北緯34° 31′ 07″ 東経133° 36′ 56″	尾根部	110	80	東西180m 南北150m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀群・虎口を確認。	29右	346
302	須恵竜王山城跡	浅口	浅口市金光町大谷	北緯34° 31′ 21″ 東経133° 37′ 15″	尾根部	140	80	東西120m 南北150m	山林	曲輪・堀切を確認。	29右	347
303	竜王山城跡	浅口	浅口市金光町佐方	北緯34° 30′ 36″ 東経133° 37′ 06″	頂部	210	170	東西170m 南北50m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	29右	348
304	土居遺跡	浅口	浅口市鴨方町六条院西	北緯34° 30′ 22″ 東経133° 34′ 29″	平地	40	0	東西140m 南北100m	畑・宅地	曲輪・土塁を確認。	29右	349
305	上竹城跡	浅口	浅口市金光町上竹	北緯34° 33′ 50″ 東経133° 37′ 53″	端部	100	60	東西50m 南北90m	山林・畑	曲輪・竪堀・土塁を確認。	30左	349
306	名称未定	浅口	浅口市金光町上竹	北緯34° 33′ 54″ 東経133° 38′ 13″	端部	80	50		山林・畑	玉島との境にある東西に長い尾根上。東端は畑で開墾、西側は平坦な自然地形であった。城館関連遺構は判然としない。	30左	
307	要害山城跡	浅口	倉敷市玉島道越・玉島道口	北緯34° 33′ 15″ 東経133° 39′ 14″	端部	10	10		宅地	里見川の北側にあり、独立丘陵の頂部に位置する。長さ300m弱の丘陵頂部が該当するが、全面的に宅地化されており城館関連遺構は判然としない。	30左	
308	亀崎城跡	浅口	倉敷市玉島阿賀崎	北緯34° 32′ 37″ 東経133° 39′ 09″	端部	10	10	東西40m 南北70m	山林・社寺	曲輪を確認。	30左	350

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
309	小山崎城跡	浅口	倉敷市玉島柏島	北緯34° 31′ 59″ 東経133° 39′ 17″	端部	10	10		畑・宅地	丘陵に囲まれた低地に北へ突出する丘の頂部。全体が畑や耕作地となっていて、城館関連遺構は判然としない。頂部中央西寄りに五輪塔が祀られている。	30 左	
310	畑山城跡	浅口	倉敷市玉島柏島	北緯34° 31′ 40″ 東経133° 39′ 15″	端部	30	20		畑・墓地	東西方向の独立丘頂部。頂部は墓地・畑と自然地形で城館関連遺構は判然としない。	30 左	
311	森本松山城跡	浅口	倉敷市玉島柏島	北緯34° 31′ 45″ 東経133° 39′ 43″	端部	20	20	東西50m 南北100m	山林	曲輪・土塁を確認。	30 左	350
312	水島城跡	浅口	倉敷市玉島乙島	北緯34° 31′ 58″ 東経133° 40′ 11″	端部	20	20		宅地・社寺	元々は玉島乙島の西側端頂部に位置する。源平合戦の時に木曽義仲が陣したと伝わる。現在頂部の平坦地は、寺と畑地によって改変が著しく、城館関連遺構は判然としない。	30 左	
313	片島城跡	浅口	倉敷市片島	北緯34° 34′ 49″ 東経133° 43′ 03″	端部	30	30	東西150m 南北50m	社寺・墓地	曲輪・竪堀群を確認。	30 右	351
314	西山城跡	浅口	倉敷市連島町西之浦	北緯34° 33′ 48″ 東経133° 42′ 32″	尾根部	90	90		畑・鉄塔	最頂部に大きな平坦面があり、斜面には石垣を伴う段々の平坦面が巡る。これらは鉄塔と畑の造成に伴うもので、城館関連の遺構は判然としない。	30 右	
315	大平山城跡	浅口	倉敷市連島町矢柄	北緯34° 33′ 43″ 東経133° 43′ 21″	頂部	160	160	東西270m 南北40m	山林	曲輪・石垣を確認。	30 右	352
316	丸山城跡	浅口	倉敷市連島町連島	北緯34° 33′ 55″ 東経133° 43′ 54″	尾根部	90	80		墓地	『連嶋町史』によると曲輪が10面ほど描かれているが、全面が霊園管理事務所などで削平され、城館関連の遺構は判然としない。	30 右	
317	茶臼山城跡	浅口	浅口市寄島町柴木	北緯34° 29′ 37″ 東経133° 33′ 44″	尾根部	190	130	東西200m 南北100m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	32 右	353
318	竜王山城跡	浅口	浅口市鴨方町六条院西・寄島町	北緯34° 30′ 03″ 東経133° 35′ 10″	頂部	280	210	東西320m 南北280m	山林・鉄塔	曲輪を確認。	32 右	354・355
319	青佐山城跡	浅口	笠岡市大島中 浅口市寄島町	北緯34° 28′ 15″ 東経133° 34′ 17″	頂部	240	240	東西130m 南北240m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	32 右	356

賀陽郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
320	佐与谷城跡	賀陽	吉備中央町西	北緯34° 48′ 54″ 東経133° 39′ 05″	尾根部	380	220		山林・社寺	頂部はやや傾斜を持つ平坦面であるが、城館関連遺構は判然としない。	18 左	
321	野山城跡	賀陽	吉備中央町北	北緯34° 48′ 58″ 東経133° 41′ 58″	端部	430	80	東西120m 南北100m	山林・社寺	町指定史跡。曲輪・土塁を確認。	18 右	358
322	伊達弾正館跡	賀陽	吉備中央町北	北緯34° 48′ 25″ 東経133° 42′ 14″	端部	370	30	東西180m 南北40m	山林・畑	曲輪・土塁を確認。	18 右	359
323	古和田城跡	賀陽	吉備中央町北	北緯34° 48′ 58″ 東経133° 42′ 10″	端部	370	20	東西50m 南北50m	山林	曲輪・土塁を確認。	18 右	360
324	山崎城跡	賀陽	吉備中央町竹部	北緯34° 49′ 54″ 東経133° 47′ 23″	端部	200	20	東西70m 南北120m	山林	曲輪・堀切を確認。	19 左	360
325	坂元城跡	賀陽	吉備中央町竹部・坂元	北緯34° 49′ 34″ 東経133° 47′ 04″	端部	250	60		山林	加茂川に向かって北へ突き出す丘陵に立地。尾根上は平坦に近いが、城館関連遺構は判然としない。	19 左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
326	草谷城跡	賀陽	岡山市北区上高田	北緯34° 47′ 05″ 東経133° 49′ 38″	端部	260	40	東西50m 南北140m	山林	曲輪・土塁を確認。	19右	361
327	忍山城跡	賀陽	岡山市北区上高田	北緯34° 47′ 15″ 東経133° 50′ 08″	尾根部	290	140	東西95m 南北390m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・虎口を確認。	19右	362・363
328	元信城跡	賀陽	岡山市北区上高田	北緯34° 47′ 06″ 東経133° 49′ 58″	端部	240	140	東西40m 南北20m	山林	曲輪・土塁を確認。	19右	364
329	忍山城出城跡	賀陽	岡山市北区山上・上高田	北緯34° 47′ 01″ 東経133° 50′ 22″	尾根部	240	100	東西70m 南北190m	山林	発掘調査あり。曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	19右	365
330	名称未定	賀陽	岡山市北区西山内	北緯34° 46′ 09″ 東経133° 46′ 35″	端部	150	50		山林	「コジョウヤマ」と呼ばれる山頂部に位置。造作のあまい曲輪が存在した可能性がある。城館関連遺構は判然としない。	19左	
331	亀石山城跡	賀陽	岡山市北区粟井	北緯34° 45′ 54″ 東経133° 46′ 34″	尾根部	260	160	東西170m 南北50m	山林	曲輪を確認。	19左	366
332	名称未定	賀陽	岡山市北区粟井・苔山	北緯34° 45′ 48″ 東経133° 47′ 39″	尾根部	160	100		山林	尾根上に土塁状の高まりは確認できるが、山道の造成等に伴うものと推測され、城館関連遺構は判然としない。	19左	
333	亀山城跡	賀陽	岡山市北区吉	北緯34° 45′ 33″ 東経133° 48′ 25″	尾根部	190	120	東西170m 南北125m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	19左	367
334	堂坂の対岸の陣跡	賀陽	岡山市北区粟井・苔山	北緯34° 45′ 44″ 東経133° 47′ 36″	尾根部	170	110	東西150m 南北90m	山林	曲輪・堀切を確認。	19左	368
335	名称未定	賀陽	総社市延原	北緯34° 44′ 51″ 東経133° 39′ 00″	尾根部	390	20	東西30m 南北60m	山林	曲輪・土塁を確認。	22左	368
336	延原城跡	賀陽	総社市延原	北緯34° 44′ 58″ 東経133° 39′ 12″	尾根部	410	20	東西80m 南北150m	山林	曲輪・土塁を確認。	22左	369
337	金頭山城跡	賀陽	総社市美袋	北緯34° 43′ 29″ 東経133° 39′ 05″	頂部	290	250	東西40m 南北420m	山林	曲輪を確認。	22左	369・370
338	大渡城跡	賀陽	総社市美袋・種井	北緯34° 43′ 46″ 東経133° 38′ 47″	尾根部	170	120	東西290m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁・石垣を確認。	22左	371
339	鍋坂城跡	賀陽	総社市槙谷	北緯34° 44′ 47″ 東経133° 42′ 43″	尾根部	260	160	東西70m 南北160m	山林	曲輪・堀切・石垣を確認。	22右	372
340	高馬城跡	賀陽	総社市槙谷	北緯34° 44′ 58″ 東経133° 43′ 36″	頂部	330	250	東西110m 南北300m	山林	曲輪・土塁を確認。	22右	373
341	志良計城跡	賀陽	総社市宍粟・見延	北緯34° 42′ 45″ 東経133° 43′ 37″	頂部	250	210	東西220m 南北400m	山林	曲輪・竪堀・土塁を確認。	22右	374
342	井山城跡	賀陽	総社市井尻野	北緯34° 41′ 51″ 東経133° 43′ 53″	尾根部	130	80	東西50m 南北350m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。	22右	375
343	浅尾陣屋跡	賀陽	総社市門田	北緯34° 40′ 48″ 東経133° 44′ 24″	端部	30	10		畑・宅地	現総社市街地の北側に位置する。浅尾藩の陣屋で、範囲は400×250mにも及ぶ。曲輪や堀切などは中世城館の技術の援用である。現在は宅地によって削平された箇所が多い。	22右	
344	小寺城跡	賀陽	総社市小寺	北緯34° 41′ 02″ 東経133° 44′ 46″	端部	30	20		山林	尾根先端頂部には畑地の可能性が強い数段の平坦地が存在する。城館関連遺構は判然としない。	22右	
345	経山城跡	賀陽	総社市黒尾	北緯34° 43′ 01″ 東経133° 45′ 14″	頂部	370	340	東西130m 南北100m	山林	市指定史跡。曲輪・横堀・土塁・石垣・虎口を確認。	23左	376

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
346	中島屋敷跡	賀陽	総社市小寺	北緯 34° 40′ 50″ 東経 133° 45′ 03″	平地	10	0		宅地・公園	住宅地の中にある「小寺中島公園」の西端に「経山城主中島家屋敷跡」の石碑が建つ。城館関連遺構は判然としない。	23 左	
347	立石城跡	賀陽	岡山市北区粟井	北緯 34° 44′ 50″ 東経 133° 47′ 12″	頂部	260	220	東西600m 南北240m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・石列を確認。	23 左	377～379
348	久田城跡	賀陽	岡山市北区粟井	北緯 34° 44′ 29″ 東経 133° 46′ 59″	尾根部	230	200	東西260m 南北110m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23 左	380
349	和田城跡	賀陽	岡山市北区吉	北緯 34° 45′ 09″ 東経 133° 48′ 30″	端部	60	20	東西40m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23 左	381
350	守福寺裏山の陣跡	賀陽	岡山市北区下足守・横尾	北緯 34° 43′ 40″ 東経 133° 49′ 15″	尾根部	280	230	東西25m 南北20m	山林	曲輪・土塁・石列・虎口・櫓台を確認。	23 右	381
351	日近城跡	賀陽	岡山市北区日近	北緯 34° 45′ 04″ 東経 133° 48′ 39″	端部	100	60	東西90m 南北70m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	23 右	382
352	構跡	賀陽	岡山市北区大井	北緯 34° 44′ 42″ 東経 133° 47′ 44″	端部	70	40	東西75m 南北30m	山林	曲輪・堀切・土塁・横堀を確認。	23 左	383
353	宮路山城跡	賀陽	岡山市北区足守・大井	北緯 34° 44′ 01″ 東経 133° 47′ 45″	頂部	160	140	東西260m 南北550m	山林	曲輪・掘切・竪堀群・虎口・土橋を確認。	23 左	384・385
354	鍛冶山城跡	賀陽	岡山市北区足守・大井	北緯 34° 44′ 15″ 東経 133° 48′ 22″	頂部	170	140	東西260m 南北380m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	23 左	386・387
355	植之町西陣跡	賀陽	岡山市北区足守	北緯 34° 43′ 51″ 東経 133° 48′ 16″	尾根部	80	60	東西90m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23 左	388
356	植之町東陣跡	賀陽	岡山市北区足守	北緯 34° 43′ 51″ 東経 133° 48′ 25″	尾根部	80	60	東西60m 南北60m	山林	曲輪を確認。	23 左	388
357	大陣屋跡	賀陽	総社市奥坂・岡山市北区粟井	北緯 34° 43′ 56″ 東経 133° 47′ 17″	尾根部	160	80	東西390m 南北180m	山林	曲輪・土塁を確認。	23 左	389
358	千引砦跡	賀陽	総社市奥坂	北緯 34° 43′ 53″ 東経 133° 47′ 09″	尾根部	160	90	東西30m 南北20m	ゴルフ場	発掘調査あり。曲輪・土塁・掘立柱建物・柵を確認。	23 左	390
359	名越１号砦跡	賀陽	総社市東阿曽・奥坂	北緯 34° 43′ 14″ 東経 133° 47′ 20″	尾根部	90	70		山林	血吸川と足守川の間に２つの尾根の内、東側筋に立地している。現在はゴルフ場の敷地内である。	23 左	392
360	名越２号砦跡	賀陽	総社市東阿曽・奥坂	北緯 34° 43′ 07″ 東経 133° 47′ 20″	尾根部	80	60	東西30m 南北30m	山林	曲輪・土塁を確認。	23 左	391・392
361	名越３号砦跡	賀陽	総社市奥坂	北緯 34° 43′ 21″ 東経 133° 47′ 07″	尾根部	120	90	東西20m 南北30m	山林	発掘調査あり。曲輪・土塁を確認。	23 左	391・392
362	名越４号砦跡	賀陽	総社市奥坂	北緯 34° 43′ 35″ 東経 133° 47′ 10″	尾根部	130	100		ゴルフ場	血吸川と足守川の間に２つの尾根の内、西側筋に立地している。現在ゴルフ場の敷地内である。	23 左	392
363	小陣屋跡	賀陽	総社市奥坂	北緯 34° 43′ 33″ 東経 133° 46′ 45″	尾根部	120	70	東西30m 南北80m	山林	曲輪・土塁を確認。	23 左	393
364	牛神砦跡	賀陽	総社市東阿曽	北緯 34° 43′ 00″ 東経 133° 47′ 26″	尾根部	70	50	東西50m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23 左	393
365	尾崎１号砦跡	賀陽	総社市東阿曽・奥坂	北緯 34° 42′ 48″ 東経 133° 47′ 17″	尾根部	70	50	東西40m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23 左	394

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
366	尾崎２号砦跡	賀陽	総社市東阿曽・西阿曽・奥坂	北緯34° 42′ 42″ 東経133° 47′ 12″	尾根部	50	40	東西20m 南北20m	山林	曲輪・土塁を確認。	23左	394
367	尾崎３号砦跡	賀陽	総社市東阿曽・西阿曽	北緯34° 42′ 35″ 東経133° 47′ 17″	尾根部	50	40	東西20m 南北20m	山林	曲輪・土塁を確認。	23左	394
368	鳥越山城跡	賀陽	総社市東阿曽	北緯34° 42′ 41″ 東経133° 47′ 33″	頂部	50	40	東西70m 南北290m	山林	曲輪を確認。	23左	395・396
369	長良山城跡	賀陽	総社市長良・窪木・岡山市北区高松田中	北緯34° 41′ 41″ 東経133° 47′ 15″	頂部	80	70	東西120m 南北1000m	山林・社寺	曲輪・掘切・横堀・土塁・土橋を確認。	23左	397～400
370	総社遺跡	賀陽	総社市総社・金井戸	北緯34° 41′ 08″ 東経133° 46′ 16″	平地	10	0	東西100m 南北150m	宅地	発掘調査あり。２重の堀を確認。	23左	401
371	土居武家屋敷跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 43′ 17″ 東経133° 48′ 32″	平地	20	0	東西m 南北55m	水田・宅地	堀の痕跡を示す水田と、それに囲まれた宅地で土塁の残欠らしき土盛りを確認。	23左	401
372	一国山城跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 43′ 27″ 東経133° 48′ 43″	端部	80	40	東西200m 南北70m	山林	発掘調査あり。曲輪・土塁を確認。	23右	402
373	冠山城跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 43′ 10″ 東経133° 48′ 19″	端部	40	20	東西160m 南北95m	山林・果樹園・墓地	曲輪・竪堀群・土塁を確認。	23左	403・404
374	名称未定	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 43′ 08″ 東経133° 48′ 46″	尾根部	80	50		山林・採土場	採土により削平されており、全域を踏査することができなかった。踏査地点では城館関連遺構は判然としない。	23右	
375	南坂南陣跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 42′ 58″ 東経133° 48′ 56″	尾根部	130	110	東西20m 南北35m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	23右	404
376	南坂北陣跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 43′ 02″ 東経133° 48′ 52″	尾根部	110	95	東西55m 南北30m	山林	曲輪・土塁を確認。	23右	404
377	下足守Ａ陣跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 42′ 49″ 東経133° 48′ 54″	尾根部	140	110	東西65m 南北35m	山林	曲輪・土塁・虎口・櫓台を確認。	23右	405
378	下足守Ｂ陣跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 44′ 51″ 東経133° 49′ 00″	尾根部	140	110	東西25m 南北20m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	23右	405
379	上土田大崎境の陣跡	賀陽	岡山市北区大崎・上土田	北緯34° 42′ 42″ 東経133° 48′ 58″	尾根部	120	100	東西18m 南北18m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	23右	406
380	山上土塁跡	賀陽	岡山市北区下足守・大崎・上土田	北緯34° 42′ 52″ 東経133° 48′ 56″	尾根部	140	100	東西450m 南北490m	山林	尾根筋を低い土橋状に造成している箇所が部分的に認められる。	23右	406・407
381	すくも山城跡	賀陽	岡山市北区下足守	北緯34° 42′ 40″ 東経133° 48′ 08″	端部	40	20	東西160m 南北95m	山林・果樹園・墓地	発掘調査あり。曲輪・土塁・竪堀を確認。	23左	408・409
382	三上山東の陣跡	賀陽	岡山市北区大崎	北緯34° 42′ 50″ 東経133° 49′ 40″	尾根部	210	180	東西30m 南北22m	山林・社寺	曲輪・土塁を確認。	23右	409
383	三上山の陣跡	賀陽	岡山市北区大崎	北緯34° 42′ 45″ 東経133° 49′ 25″	尾根部	200	170	東西53m 南北33m	山林	曲輪・土塁を確認。	23右	410
384	三上山西の陣跡	賀陽	岡山市北区大崎	北緯34° 42′ 46″ 東経133° 49′ 12″	尾根部	160	110	東西35m 南北23m	山林	曲輪・土塁を確認。	23右	411

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
385	龍王山陣跡	賀陽	岡山市北区高松稲荷	北緯34°42′34″ 東経133°50′07″	尾根部	120	90	東西25m 南北150m	山林・社寺	曲輪・土塁を確認。	23右	412・413
386	生石城跡	賀陽	岡山市北区門前	北緯34°42′03″ 東経133°48′14″	端部	30	20	東西30m 南北50m	山林・墓地	曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁を確認。	23左	414
387	小山城跡	賀陽	岡山市北区小山	北緯34°41′52″ 東経133°48′40″	端部	20	10	東西150m 南北150m	山林・社寺・墓地	曲輪・堀切・土塁を確認。	23右	415
388	大崎城跡	賀陽	岡山市北区大崎	北緯34°41′53″ 東経133°48′50″	端部	20	10	東西50m 南北40m	山林	曲輪を確認。	23右	416
389	坂古田陣跡	賀陽	岡山市北区平山	北緯34°41′40″ 東経133°49′51″	端部	30	20	東西90m 南北190m	山林・果樹園	曲輪を確認。	23右	416
390	八幡山陣跡	賀陽	岡山市北区大崎・和井元	北緯34°41′53″ 東経133°49′11″	端部	40	30	東西70m 南北80m	山林・社寺	曲輪を確認。	23右	417
391	岡之鼻陣跡	賀陽	岡山市北区平山	北緯34°42′00″ 東経133°49′38″	端部	20	10		畑・古墳	古墳の築造に伴い丘陵は大きく削平されて広い平坦面が造成されている。城館関連遺構は判然としない。	23右	418
392	カジヤマの陣跡	賀陽	岡山市北区平山	北緯34°42′06″ 東経133°49′46″	端部	30	20		山林	頂部および南・東・西斜面に段取りによる平坦面を確認する。城館関連遺構は判然としない。	23右	
393	備中高松城跡	賀陽	岡山市北区高松	北緯34°41′34″ 東経133°49′19″	平地	10	0	東西200m 南北520m	水田・畑・宅地・社寺・公園	国指定史跡。発掘調査あり。曲輪・堀を確認。	23右	419〜422
394	御崎山陣跡	賀陽	岡山市北区立田	北緯34°41′21″ 東経133°49′37″	端部	20	10	東西140m 南北40m	山林	曲輪を確認。	23右	423・424
395	石井山陣跡	賀陽	岡山市北区立田	北緯34°41′19″ 東経133°49′45″	尾根部	80	70	東西450m 南北190m	山林	曲輪、土塁を確認。	23右	424・425
396	蛙ヶ鼻陣跡	賀陽	岡山市北区立田	北緯34°41′11″ 東経133°49′41″	尾根部	50	50	東西330m 南北110m	山林・墓地	曲輪・堀切を確認。天正十一年銘の宝篋印塔が点在。	23右	426
397	高松城水攻め築堤跡（蛙ヶ鼻）	賀陽	岡山市北区立田・高松原古才	北緯34°41′09″ 東経133°49′36″	平地	8	5		水田・公園	国指定史跡。発掘調査あり。土塁を確認。	23右	427〜429
398	高松城水攻め築堤跡（副堤跡）	賀陽	岡山市北区福崎	北緯34°41′53″ 東経133°48′12″	平地	11	2		宅地・公園	国指定史跡。土塁を確認。	23左	427〜429
399	鼓山城跡	賀陽	岡山市北区吉備津・立田	北緯34°40′47″ 東経133°50′14″	尾根部	120	110	東西70m 南北70m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	23右	430
400	板倉枡形城跡	賀陽	岡山市北区吉備津	北緯34°40′14″ 東経133°50′46″	平地	4	0	東西90m 南北85m	宅地・学校	鯉山小学校の校庭が一辺90m前後の方形区画で、城館の名残か。吉野口遺跡・吉備津田渕後遺跡の範囲内。	23右	
401	伝賀陽氏館跡	賀陽	岡山市北区川入	北緯34°39′49″ 東経133°50′42″	平地	3	0	東西130m 南北120m	畑・宅地	県指定史跡。曲輪・土塁を確認。外周の水田は堀の痕跡を示す。	27右	431
402	庭瀬城跡	賀陽	岡山市北区庭瀬	北緯34°38′35″ 東経133°50′57″	平地	1	0	東西500m 南北350m	宅地・社寺・公園	曲輪・濠を確認。	27右	432・433
403	撫川城跡	賀陽	岡山市北区撫川	北緯34°38′34″ 東経133°50′49″	平地	4	0	東西130m 南北80m	社寺・公園	県指定史跡。曲輪・土塁・石垣・濠を確認。	27右	432・433

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
404	宮内城跡	賀陽	岡山市北区吉備津	北緯34° 39′ 57″ 東経133° 50′ 59″	尾根部	120	120	東西40m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	27右	434

窪屋郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
405	真壁城跡	窪屋	総社市溝口	北緯34° 40′ 26″ 東経133° 44′ 10″	平地	10	0	東西100m 南北130m	宅地	土塁を確認。	22右	436
406	三須城跡	窪屋	総社市三須	北緯34° 40′ 17″ 東経133° 45′ 47″	端部	20	10	東西100m 南北110m	山林・畑	曲輪を確認。	23左	436
407	亀山城跡	窪屋	総社市下林	北緯34° 40′ 37″ 東経133° 47′ 10″	端部	30	20	東西210m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁を確認。	23左	437
408	赤浜城山城跡	窪屋	総社市赤浜	北緯34° 41′ 14″ 東経133° 48′ 06″	端部	20	10		宅地	庚申山の北西麓にある、かつて標高約20mを測った小規模な独立丘陵上に所在。現在、丘陵は削平されて住宅地になっている。城館関連遺構は判然としない。	23左	
409	下軽部遺跡	窪屋	総社市清音軽部	北緯34° 38′ 43″ 東経133° 44′ 05″	平地	10	0		水田・畑・宅地	平成19～20年度に総社市教委が発掘調査実施。幅0.7～2mで長さ約100mの溝で囲まれる屋敷地を想定。東方隣地に「城之内」「城之堀」などの地名がみられる。	26右	
410	軽部山城跡	窪屋	総社市清音軽部・清音古地	北緯34° 38′ 03″ 東経133° 44′ 13″	頂部	190	180	東西190m 南北100m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口を確認。	26右	438
411	流山城跡	窪屋	倉敷市酒津	北緯34° 37′ 05″ 東経133° 44′ 25″	頂部	130	120	東西50m 南北80m	山林	倉敷市酒津の八幡山山頂に位置する。頂部は平坦面となっているが、周囲との境は不明瞭である。南側一段下にも曲輪状の平坦地がある。南北80m、東西50m程の城郭遺構であった可能性がある。	26右	
412	上河原城跡	窪屋	倉敷市中島	北緯34° 35′ 16″ 東経133° 44′ 14″	平地	3	0	東西150m 南北150m	水田・宅地	範囲内は周辺とほぼ同じ高さで、城館関連遺構は判然としない。小字「殿屋敷」が範囲内北西にあり。	26右	
413	中大道城跡	窪屋	倉敷市中島	北緯34° 35′ 14″ 東経133° 44′ 10″	平地	3	0	東西150m 南北150m	宅地	範囲内は周辺とほぼ同じ高さで、城館関連遺構は判然としない。	26右	
414	幸山城跡	窪屋	総社市西郡・清音三因	北緯34° 39′ 07″ 東経133° 45′ 31″	尾根部	170	150	東西140m 南北70m	山林	市指定史跡。曲輪・土塁を確認。	27左	439・440
415	福山城跡	窪屋	総社市西郡・清音三因	北緯34° 38′ 47″ 東経133° 45′ 35″	頂部	300	280	東西380m 南北70m	山林・公園	国指定史跡。曲輪・横堀・土塁を確認。	27左	441・442
416	岡谷城跡	窪屋	総社市岡谷	北緯34° 39′ 08″ 東経133° 46′ 17″	端部	30	10	東西50m 南北110m	山林・宅地	曲輪・土塁を確認。	27左	443
417	黒田古城跡	窪屋	総社市清音黒田	北緯34° 37′ 50″ 東経133° 44′ 55″	尾根部	120	100	東西30m 南北120m	山林	曲輪を確認。	27左	443
418	青江城跡	窪屋	倉敷市酒津	北緯34° 36′ 59″ 東経133° 45′ 02″	端部	20	20	東西60m 南北50m	山林・宅地・社寺	曲輪・土塁を確認。	27左	444
419	宮前城の内城跡	窪屋	倉敷市宮前	北緯34° 36′ 42″ 東経133° 45′ 59″	平地	4	0	東西240m 南北220m	宅地・店舗	範囲内が50cm程度周囲より高い状況が確認できた。城館関連遺構は判然としない。小字「城ノ内」の範囲全体。	27左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
420	平田城の内城跡	窪屋	倉敷市平田	北緯34°36′54″ 東経133°46′46″	平地	2	0	東西120m 南北140m	宅地	区域内の標高は周囲とほぼ同じ高さで、城館関連遺構は判然としない。	27左	
421	万寿城跡	窪屋	倉敷市中庄	北緯34°37′18″ 東経133°47′32″	平地	7	4	東西190m 南北250m	畑・宅地	県道162号線の東側、ＪＲ山陽本線北側の南北約120m、東西約80mの範囲が周囲よりも約２m高い。城館関連遺構は判然としない。小字「城之内」範囲内。	27左	
422	小野城跡	窪屋	倉敷市本町	北緯34°35′41″ 東経133°46′24″	平地	4	0		宅地	現在アイビースクエアの敷地。城館関連遺構は判然としない。	27左	

都宇郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
423	庚申山陣城跡	都宇	岡山市北区新庄上	北緯34°41′07″ 東経133°48′15″	頂部	70	60	東西200m 南北130m	山林・社寺	曲輪を確認。	23左	446
424	造山城跡	都宇	岡山市北区新庄下	北緯34°40′26″ 東経133°48′15″	端部	30	25	東西110m 南北115m	山林・社寺	曲輪・竪堀・土塁を確認。	23左	447
425	津寺遺跡	都宇	岡山市北区津寺・加茂	北緯34°40′40″ 東経133°49′09″	平地	5	0		水田・道路	発掘調査あり。中世墓と中世～近世の屋敷地を確認。	23右	448
426	甫崎天神山城跡	都宇	岡山市北区津寺	北緯34°40′29″ 東経133°49′00″	端部	40	30	東西300m 南北150m	山林・畑・社寺・道路	発掘調査あり。曲輪・堀切・土塁を確認。	23右	449・450
427	加茂城跡	都宇	岡山市北区加茂	北緯34°40′25″ 東経133°49′43″	平地	5	0	東西180m 南北160m	水田・宅地	市指定史跡。曲輪を確認。	23右	451
428	鷹巣城跡	都宇	岡山市北区新庄下	北緯34°39′45″ 東経133°48′04″	尾根部	210	190	東西50m 南北75m	山林	曲輪・堀切・土塁・石積みを確認。	27左	437
429	河屋城跡	都宇	倉敷市矢部	北緯34°40′03″ 東経133°49′09″	平地	13	10		畑・社寺	足守川に向かって西から延びる低い丘頂部に立地。現在は寺の建物などで削平・造成され、城館関連遺構は判然としない。	27右	
430	楯築陣山跡	都宇	倉敷市庄新町	北緯34°39′47″ 東経133°49′31″	端部	40	40		山林・社寺	発掘調査実施。円丘部頂と斜面から土師器高台付椀・皿、土鍋、白磁、刀子、鉄釘、鞴の羽口片などが出土。遺物の時期は12世紀後半から15世紀にわたる。城館関連遺構は判然としない。	27右	
431	日畑城跡	都宇	倉敷市日畑	北緯34°39′43″ 東経133°49′50″	平地	10	10	東西170m 南北100m	山林・宅地	曲輪を確認。	27右	438
432	庄城跡	都宇	倉敷市上東	北緯34°38′52″ 東経133°49′35″	平地	2	0	東西180m 南北230m	宅地・社寺	曲輪を確認。	27右	439・440
433	日差山城跡	都宇	倉敷市山地	北緯34°39′33″ 東経133°48′19″	尾根部	200	170	東西40m 南北40m	山林	曲輪・石積みを確認。	27左	440
434	練尾氏城跡	都宇	倉敷市山地	北緯34°39′21″ 東経133°48′03″	頂部	220	140		山林	仕手倉山山頂に位置する。頂部南北約30m、東西約20mの楕円形の範囲が平坦であるが、自然地形である。陣城として使用されていた可能性がある。	27左	
435	高鳥居城跡	都宇	倉敷市二子	北緯34°38′24″ 東経133°48′06″	頂部	150	150		山林・社寺	高鳥居山頂上に立地する。東西約50m、南北約20mの範囲で平坦だが自然地形で、陣城として利用されていた可能性がある。	27左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
436	松島城跡	都宇	倉敷市松島	北緯34° 38′ 02″ 東経133° 48′ 52″	端部	20	20	東西120m 南北70m	大学	曲輪を確認。	27 右	441
437	平松城跡	都宇	倉敷市下庄	北緯34° 38′ 31″ 東経133° 49′ 44″	平地	2	0	東西240m 南北200m	宅地	東西240m、南北200mの範囲が屋敷地の跡とされている。平松公民館を南東の隅として、一辺80mの方形地割が一部遺存している。	27 右	
438	鳥羽城山城跡	都宇	倉敷市鳥羽	北緯34° 36′ 44″ 東経133° 48′ 39″	尾根部	50	20		山林・ゴルフ場	早島にある山塊の西側に位置する頂部が該当する。当地は現在ゴルフ場になっており、城館関連遺構は判然としない。	27 右	
439	坪井城跡	都宇	岡山市南区山田	北緯34° 37′ 29″ 東経133° 50′ 58″	端部	60	50	東西60m 南北60m	山林・畑	林道のため大きく地形改変を受けており、城館関連遺構は判然としない。ただし、竹藪になっている平坦面には礎石かと思われる石が露出しており、時期不明ではあるが段状を呈する平坦面が見られる。また、周辺で中世を中心とする遺物の散布を確認している。	27 右	
440	早島城跡	都宇	早島町早島	北緯34° 36′ 23″ 東経133° 49′ 34″	端部	30	30		公園	早島町役場の北側にある小高い丘が該当地である。現在公園となっており改変が著しい。敷地内は段々に成形されているが、当時はこれらが曲輪であった可能性がある。	27 右	
441	戸川家陣屋跡	都宇	早島町早島	北緯34° 36′ 18″ 東経133° 49′ 38″	平地	5	0	東西190m 南北230m	宅地・小学校	早島町早島に所在する旗本戸川氏の陣屋跡。現在は早島町立早島小学校の敷地となっており、一部に堀と井戸、石垣、石橋などが残存している。	27 右	
442	名称未定	都宇	岡山市南区妹尾	北緯34° 36′ 47″ 東経133° 52′ 11″	端部	30	30		山林・畑・宅地・墓地	『日本城郭大系』では源平期の妹尾氏居館伝承地と記載され、妹尾太郎兼康が居城したとされる。伝承地は南側に妹尾陣屋跡や稲荷大明神がある丘陵頂部に所在したとされるが、館関連遺構は判然としない。	27 右	

備前国

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高（m）	比高（m）	城域	現況	概要	分布図	解説頁
17	藤沢城跡	津高 上房	吉備中央町加茂市場・田土	北緯34° 51′ 40″ 東経133° 44′ 57″	頂部	340	120	東西240m 南北500m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。第1冊備前国参照	5 左	119～121
39	本陣山城跡	津高 賀陽	岡山市北区御津虎倉・上高田	北緯34° 47′ 35″ 東経133° 49′ 36″	頂部	440	170		山林	標高440mの本陣山頂部に立地。頂部はややなだらかな平坦面。毛利氏が忍山城に攻め入った際の本陣とされる。『岡山県通史』には、河原源左衛門、河田七郎などが居城したと記す。第1冊備前国参照	10 右	
40	勝尾山城跡	津高 賀陽	岡山市北区御津勝尾・岡山市北区山上	北緯34° 47′ 24″ 東経133° 50′ 23″	頂部	330	110	東西130m 南北150m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口・横堀を確認。第1冊備前国参照	10 右	138

3　備中国中世城館跡遺構の評価と残存状況表

・本表には、備中国城館跡の「遺構の評価」と踏査時における城館の「残存状況」を掲載している。

・本表で用いた城館番号は、第２章・第３章で表記したものと一致している。

【城館の評価】

◎：城館関連遺構が良好に遺存しており、また規模も比較的大きいもの

○：城館関連遺構が残存するもの

△：城館関連遺構は判然としないが人工的な地形改変が認められる、もしくは副次的な情報があるもの

【残存状況】

・「完存」「一部損壊」「半壊」「全壊」「消失」「一部消失」に分けて表記している。

・発掘調査が行われた後に消失した城館を「消失」、一部が消失したものを「一部消失」と表記する。

表３　備中国中世城館跡遺構の評価と残存状況表

哲多郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
1	宗重屋敷跡	△	一部損壊
2	仲村城跡	○	完存
3	勝ヶ城跡	○	完存
4	三ヶ市城跡	○	一部損壊
5	名称未定	△	完存
6	小郷寺城跡	△	一部損壊
7	挽野城跡	○	完存
8	楪城跡	◎	完存
9	朝倉城跡	○	完存
10	横見政所	△	一部損壊
11	粒根城跡	○	完存
12	地頭方政所跡	○	完存
13	岩高城跡	○	完存
14	見坂山城跡	○	完存
15	万石城跡	○	完存
16	土井城跡	○	一部消失
17	白石城跡	○	完存
18	藤木城跡	○	一部消失
19	豆木城跡	○	完存
20	荒戸山城跡	△	完存
21	中田山城跡	○	完存
22	福本城跡	○	完存
23	竹野城跡	○	完存
24	金子氏屋敷跡	△	完存
25	西方政所跡	△	完存
26	宮田山城跡	○	完存
27	馬酔木城跡	△	半壊
28	小屋ヶ畝城跡	△	完存
29	滝丸城跡	○	一部損壊
30	諏訪山城跡	○	一部損壊
31	猿滝城跡	○	完存
32	助正城跡	△	完存
33	鯉滝城跡	○	完存
34	石蟹山城跡	◎	完存
35	名称未定	△	完存
36	岸本城跡	○	一部消失
37	西山城跡	◎	完存
38	育野古城跡	○	完存
39	二条殿跡	○	完存
40	鎌ヶ畝城	○	完存
41	歴却山城跡	△	半壊
42	成松山城跡	△	半壊
43	井ノ畝城跡	○	完存
44	越山城跡	○	完存
45	柏山城跡	○	一部損壊

阿賀郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
46	赤坂城跡	○	一部損壊
47	西城跡	○	一部損壊
48	仲村城跡	○	一部損壊
49	実山城跡	○	完存
50	葛籠畑山城跡	○	完存
51	割亀山城跡	○	完存
52	矢作城跡	○	一部損壊
53	円通山城跡	○	完存
54	周防城跡	○	完存
55	安本城跡	△	一部損壊
56	土居遺跡	○	一部消失
57	田治部氏屋敷跡	○	一部消失
58	塩成山城跡	○	完存
59	大山城跡	○	完存
60	田治部国衙政所跡	○	完存
61	境陣所跡	△	完存
62	丸山城跡	○	一部損壊
63	小谷山城跡	○	完存
64	鳶ヶ巣城跡	○	半壊
65	角尾城跡	○	完存
66	甲籠城跡	○	完存
67	山根城跡	○	完存
68	城山城跡	○	完存
69	鬼山城跡	◎	完存
70	鳶ヶ城跡	△	完存
71	宇山城跡	△	一部損壊
72	双内城跡	○	完存
73	高釣部城跡	◎	完存
74	植木城跡	○	完存
75	土井砦跡	○	完存
76	才田城跡	◎	完存
77	加葉山城跡	○	完存
78	上合地砦跡	○	完存

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
79	山王城跡	○	完存
80	丸山城跡	○	完存
81	植木遺跡	○	一部消失
82	井尾城跡	○	一部損壊
83	赤茂館跡	○	一部消失
84	片山城跡	○	完存
85	片山古城跡	○	完存
86	飯山城跡	○	完存
87	陣山砦跡	○	完存
88	福尾城跡	○	半壊
89	山東塚城跡	○	完存
90	小殿城跡	△	完存
91	小松城跡	○	完存
92	荒木城跡	○	完存
93	四ッ畝城跡	○	完存
94	柾木館跡	○	完存
95	定砦跡	○	完存
96	高機山遺跡	△	完存
97	川崎城跡	○	完存
98	古見山城跡	○	完存
99	城山城跡	○	完存
100	津々城跡	○	完存
101	勝陣山遺跡	△	完存
102	陣ガ畝砦跡	△	完存

川上郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
103	戸構城跡	△	半壊
104	軽尾城跡	○	完存
105	小金山城跡	○	完存
106	笹尾城跡	○	完存
107	滝谷城跡	○	完存
108	白毛ヶ城跡	○	完存
109	北丸城跡	○	完存
110	袈裟尾城跡	○	完存
111	紫城跡	○	完存
112	平川氏館跡	○	一部損壊
113	山根城跡	○	完存
114	金子山城跡	○	完存
115	大原田城跡	○	完存
116	勝負城跡	○	完存
117	中村城跡	○	完存
118	長地城跡	○	一部損壊
119	丸山城跡	○	一部損壊
120	陣山城跡	△	完存
121	馬之城跡	○	完存
122	秋町城跡	△	完存
123	高ノ盛城跡	○	完存
124	三村氏居館跡	○	完存
125	三村氏陣屋跡	△	一部損壊
126	鶴首城跡・古鶴首城跡	◎	完存
127	阿部深山城跡	○	完存
128	鍋阪城跡	○	完存
129	ツガン丸城跡	△	完存
130	玉の城山城	○	完存
131	中山城跡	△	半壊
132	折居城跡	△	完存
133	小城山城跡	○	完存
134	小社森城跡	○	完存
135	国吉城跡	◎	完存
136	堀ノ内遺跡	△	完存
137	小笹丸城跡	◎	完存
138	野田城跡	○	完存
139	氏高公館跡	△	完存

上房郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
140	飯ノ山城跡	○	完存
141	寺山城跡	◎	完存
142	城平城跡	○	完存
143	鳴戸城跡	○	完存
144	殿屋敷跡	○	完存
145	飯の山城跡	○	完存
146	台ヶ鼻城跡	○	完存
147	常山城跡	○	完存
148	粧田山城跡	○	消失
149	羽子田城跡	○	一部損壊
150	上ヶ城跡	△	完存
151	野路山城跡	○	完存
152	陰地城跡	○	完存
153	大原城跡	○	完存
154	小谷城跡	○	完存
155	大畑城跡	△	半壊
156	矢倉城跡	○	完存
157	高陣の陣跡	○	完存
158	備中松山城跡	◎	完存
159	備中松山城尾根小屋跡	◎	完存
160	広瀬固屋城跡	△	完存
161	離小屋城跡	△	半壊
162	大和佐山城跡	△	半壊
163	菅野城跡	○	完存

後月郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
164	高原城跡	△	半壊
165	井戸橋城跡	○	完存
166	小屋の山城跡	○	一部損壊
167	中山城跡	○	一部損壊
168	木之山城跡	○	完存
169	正霊山城跡	○	完存
170	有井城跡	△	完存
172	能多ヶ丸城跡	△	完存
173	名称未定	△	完存
174	雄瀬山城跡	○	完存
175	小菅城跡	○	完存
176	落石城跡	○	完存
177	高屋城跡	○	完存
178	吉谷城跡	○	完存
179	山手城跡	○	完存
180	小見山城跡	○	完存
181	念堂山城跡	○	完存
182	横手山城跡	△	完存
183	青陰城跡	○	完存
184	鎌田城跡	△	一部損壊
185	伊達氏館跡	○	完存
186	十蔵城跡	△	一部損壊
187	中堀城跡	○	一部損壊
188	亀迫城跡	○	完存
189	白実城跡	○	一部損壊
190	米持城跡	○	一部損壊
191	高越城跡	○	完存
192	戸木荒神山城跡	○	完存
193	才崎城跡	○	完存

小田郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
194	宇戸谷茶臼山城跡	○	完存
195	土居山城跡	○	完存
196	茶臼山城跡	○	完存
197	城山城跡	△	完存
198	土井の前城跡	○	半壊
199	殿ヶ市城跡	○	一部損壊
200	三村氏居館跡	○	一部損壊

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
201	金黒山城跡	◎	完存
202	法雲山城跡	○	一部損壊
203	岩崎城跡	△	半壊
204	尼子城跡	△	一部損壊
205	下高末城跡	○	完存
206	瀧山古城跡	○	完存
207	薬師山城跡	○	完存
208	小林山城跡	○	一部損壊
209	神戸山城跡	○	完存
210	岩屋山城跡	○	一部損壊
211	龍山城跡	○	一部損壊
212	川面館跡	○	一部消失
213	太郎丸城跡	△	一部損壊
214	神子山城跡	○	一部損壊
215	蓮池城跡	△	一部損壊
216	中山城跡	○	一部損壊
217	山本城跡	○	完存
218	伽藍山城跡	○	完存
219	山田古城跡	○	完存
220	要害山城跡	○	完存
221	中山城跡	○	完存
222	船が迫山城跡	○	完存
223	茶臼山城跡	○	完存
224	庄氏館跡	△	完存
225	花房氏館跡	△	完存
226	原砦跡	○	完存
227	猿掛城跡	◎	完存
228	楢村氏居館跡	△	完存
229	折敷山城跡	○	完存
230	滝山城跡	○	完存
231	工ヶ城跡	○	完存
232	すくも山城跡	○	完存
233	仮名沢城跡（城関山城跡）	△	完存
234	入田城跡	△	完存
235	有田城跡	△	完存
236	明知城跡	△	完存
237	明知山城跡	○	完存
238	森山城跡	△	完存
239	大橋山城跡	○	一部損壊
240	西浜城跡	○	一部損壊
241	政所山城跡	○	一部損壊
242	諏訪山城跡	○	一部損壊
243	馬鞍山城跡	○	完存
244	小丸山城跡	△	完存
245	小平井城跡	△	一部損壊
246	園井土井遺跡	○	一部消失
247	園井城跡	○	一部損壊
248	鳶の子城跡	○	半壊
249	笠岡山城跡	○	完存
250	広浜城跡	△	完存
251	高丸城跡	△	半壊
252	前影山城跡	△	完存
253	小見山城跡	○	一部損壊
254	笠岡城跡	○	一部損壊
255	鳴ヶ端城跡	△	全壊
256	横島城跡	△	一部損壊
257	福浦城跡	△	完存
258	鳥越城跡	△	一部損壊
259	大道城跡	○	一部損壊
260	平山砦跡	△	完存
261	沢津城跡	△	完存
262	真鍋城跡	○	完存
263	城山城跡	○	一部損壊

下道郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
264	要害山城跡	○	完存
265	三本松城跡	○	完存
266	山本城跡	○	完存
267	下倉城跡	○	完存
268	田広木城跡	○	完存
269	殿砂遺跡	○	一部消失
270	鬼身城跡	○	完存
271	高丸古城跡	○	完存
272	荒平山城跡	○	完存
273	市場古城跡	○	一部損壊
274	馬首城跡	○	完存
275	襄越城跡	○	完存
276	名称未定	△	完存
277	馬入道山城跡	○	完存
278	木村山城跡	○	完存
279	夕部山城跡	○	完存
280	桜城跡	○	一部損壊
281	陶山城跡	○	完存
282	諏訪山城跡	○	完存
283	鳥ヶ岳城跡	○	完存
284	岡田藩陣屋跡	△	一部損壊
285	南山城跡	◎	消失

浅口郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
286	梁場山城跡	○	一部損壊
287	后王城跡	△	一部損壊
288	鳶尾城跡	○	一部損壊
289	杉山城跡	○	完存
290	西知山城	○	完存
291	名称未定	△	一部損壊
292	城山城跡	○	完存
293	鴨山城跡	○	完存
294	石井山城跡	△	一部損壊
295	益坂城跡	○	完存
296	安芸守山城跡	○	完存
297	片山城跡	○	完存
298	おどえ屋敷跡	△	一部損壊
299	泉山城跡	○	完存
300	長山城跡	○	完存
301	佐方城跡	○	完存
302	須恵竜王山城	○	完存
303	竜王山城跡	○	完存
304	土居遺跡	○	一部損壊
305	上竹城跡	○	完存
306	名称未定	△	完存
307	要害山城跡	△	半壊
308	亀崎城跡	○	一部損壊
309	小山崎城跡	△	一部損壊
310	畑山城跡	△	一部損壊
311	森本松山城跡	○	一部損壊
312	水島城跡	△	一部損壊
313	片島城跡	○	一部損壊
314	西山城跡	△	一部損壊
315	大平山城跡	○	一部損壊
316	丸山城跡	△	全壊
317	茶臼山城	○	完存
318	竜王山城跡	○	一部損壊
319	青佐山城跡	○	完存

賀陽郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
320	佐与谷城跡	△	完存
321	野山城跡	○	完存
322	伊達弾正館跡	○	完存
323	古和田城跡	○	完存
324	山崎城跡	○	完存

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
325	坂元城跡	△	一部損壊
326	草谷城跡	○	完存
327	忍山城跡	○	完存
328	元信城跡	○	完存
329	忍山城出城跡	○	一部消滅
330	名称未定	△	完存
331	亀石山城跡	○	完存
332	名称未定	△	完存
333	亀山城跡	○	完存
334	堂坂の対岸の陣城	○	完存
335	名称未定	○	完存
336	延原城跡	○	完存
337	金頭山城跡	○	完存
338	大渡城跡	○	完存
339	鍋坂城跡	○	完存
340	高馬城跡	○	完存
341	志良計城跡	○	完存
342	井山城跡	○	完存
343	浅尾陣屋跡	△	一部損壊
344	小寺城跡	△	完存
345	経山城跡	○	完存
346	中島屋敷跡	△	半壊
347	立石城跡	○	完存
348	久田城跡	○	完存
349	和田城跡	○	完存
350	守福寺裏山の陣跡	○	完存
351	日近城跡	○	完存
352	構跡	○	完存
353	宮路山城跡	○	完存
354	鍛冶山城跡	○	完存
355	植之町西陣跡	○	完存
356	植之町東陣跡	○	完存
357	大陣屋跡	○	完存
358	千引砦跡	○	消失
359	名越１号砦跡	△	完存
360	名越２号砦跡	○	完存
361	名越３号砦跡	○	消失
362	名越４号砦跡	△	完存
363	小陣屋跡	○	完存
364	牛神砦跡	○	完存
365	尾崎１号砦跡	○	完存
366	尾崎２号砦跡	○	完存
367	尾崎３号砦跡	○	半壊
368	鳥越山城跡	○	完存
369	長良山城跡	○	完存
370	総社遺跡	○	一部消失
371	土居武家屋敷跡	△	完存
372	一国山城跡	○	一部消失
373	冠山城跡	○	一部損壊
374	名称未定	△	半壊
375	南坂南陣跡	○	完存
376	南坂北陣跡	○	完存
377	下足守Ａ陣跡	○	完存
378	下足守Ｂ陣跡	○	完存
379	上土田大崎境の陣跡	○	完存
380	山上土塁跡	○	完存
381	すくも山城跡	○	一部消失
382	三上山東の陣跡	○	完存
383	三上山の陣跡	○	完存
384	三上山西の陣跡	○	完存
385	龍王山陣跡	○	完存
386	生石城跡	○	一部損壊
387	小山城跡	○	完存
388	大崎城跡	○	一部損壊
389	坂古田陣跡	○	完存
390	八幡山陣跡	○	完存
391	岡之鼻陣跡	△	完存
392	カジヤマの陣跡	△	一部損壊
393	備中高松城跡	◎	一部消失
394	御崎山陣跡	○	一部損壊
395	石井山陣跡	○	完存
396	蛙ヶ鼻陣跡	○	完存
397	高松城水攻め築堤跡（蛙ヶ鼻）	◎	一部消失
398	高松城水攻め築堤跡（副堤跡）	○	一部損壊
399	鼓山城跡	○	完存
400	板倉枡形城	△	一部損壊
401	伝賀陽氏館跡	○	一部損壊
402	庭瀬城跡	○	一部損壊
403	撫川城跡	○	一部損壊
404	宮内城跡	○	完存

窪屋郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
405	真壁城跡	○	一部損壊
406	三須城跡	○	完存
407	亀山城跡	○	一部損壊
408	赤浜城山城跡	△	一部損壊
409	下軽部遺跡	○	一部損壊
410	軽部山城跡	○	完存
411	流山城跡	△	完存
412	上河原城跡	△	一部損壊
413	中大道城跡	△	一部損壊
414	幸山城跡	○	完存
415	福山城跡	○	完存
416	岡谷城跡	○	一部損壊
417	黒田古城跡	○	完存
418	青江城跡	○	半壊
419	宮前城の内城跡	△	一部損壊
420	平田城の内城跡	△	一部損壊
421	万寿城跡	△	一部損壊
422	小野城跡	△	半壊

都宇郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
423	庚申山陣城跡	△	一部損壊
424	造山城跡	○	完存
425	津寺遺跡	○	一部消失
426	甫崎天神山城跡	○	一部消失
427	加茂城跡	○	一部損壊
428	鷹巣城跡	○	完存
429	河屋城跡	△	半壊
430	楯築陣山跡	△	一部損壊
431	日畑城跡	○	一部損壊
432	庄城跡	○	一部損壊
433	日差山城跡	○	一部損壊
434	練尾氏城跡	△	完存
435	高鳥居城跡	△	完存
436	松島城跡	○	半壊
437	平松城跡	△	一部損壊
438	鳥羽城山城跡	△	一部損壊
439	坪井城跡	△	一部損壊
440	早島城跡	△	一部損壊
441	戸川家陣屋跡	△	一部損壊
442	名称未定	△	一部損壊

4　備中国不明中世城館跡一覧表

・本表は、近世地誌などに記されてはいるが所在地が不明の城館と、城館が所在したとされる伝承地を踏査したが、城館関連遺構が不明瞭であったものを載せている。
・所在地欄には、所在地が推定される現在の市町村名と大字名を載せているが、場所が推定できないものは市町村名のみもしくは空欄にしている。
・文献番号欄には、巻末にある文献一覧表の番号を記載している。

表 4　備中国不明中世城館跡一覧表

哲多郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
443	旗山城跡	哲多	新見市哲多町荻尾	頂部に3角点、祠を見つけるがGISの範囲に人工的加工痕は見られない。東の尾根先端部まで見るが、自然地形であった。	18・142・143
444	中山城跡	哲多	新見市哲多町荻尾	西裾部に加工段が2段ほどあったが、頂部は自然地形で、畑などの開墾と判断した。	87
445	吉清城跡	哲多	新見市哲多町老栄	井ノ畝城跡の東側隣にある尾根頂部が該当する。本地は後世の改変が著しいが、裾部においても自然地形が続く。	
446	カイリョウが鼻の砦跡	哲多	新見市哲多町田淵	本郷川を挟んで鎌ヶ畝城の対岸、北と南にある東へ突き出した尾根先端が想定地である。北側は丘陵裾部に開墾による段と丘陵を横断する道が認められる。南側は尾根上に人家や畑があり、その南東側・北西側の尾根も歩いたが、自然地形であった。『万歳村誌』の記載では北側の方が対象地のようである。	
447	荒井城跡	哲多	新見市上市	所在地不明。	4・12・37・86・143

阿賀郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
448	名称未定	阿賀郡	新見市千屋	南北方向に流れる高梁川の東側に位置する。緩やかな頂部付近に細長い尾根に合わせた平坦地が数箇所存在する。	
449	土井城跡	阿賀郡	新見市千屋実	蛇行して流れる高梁川の東側に位置する。尾根先端頂部を2箇所調査したが、なだらかな平坦地のみが存在する。	18・141・143
450	明石山城	阿賀郡	新見市千屋	千屋鈴上に所在する明石神社後背の丘陵上に立地か。神社との比高差は約70mを測り、丘陵頂部は幅5m程と細い平坦面が約100m程続く。	4・11・12・18・37・44・86・124・141・143
451	畝田山城跡	阿賀	新見市草間	草間字東村。『阿哲郡誌』上巻に記述あるも場所不明。	9・18・142
452	名称未定	阿賀	新見市城山	現城山公園。名称は常山が転化したらしい。	

川上郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
453	小泉城跡	川上	高梁市成羽町小泉	成羽町史に記載あり。ただし、教蓮寺北側の三つの尾根上には城館関連遺構は判然とせず、位置違いかもしれない。	91
454	城山城跡	川上	高梁市備中町東油野	旧備中中学校跡地か。丘陵東側の山裾に自然石野面積みの石垣が3段ほど残る。	142
455	布賀陣屋跡	川上	高梁市備中町布賀	元禄6（1693）年、水谷勝時により造営される。現在布賀はくうん荘が所在する場所にあったとされるが、その範囲は不明。	30
456	岸本山城跡	川上	高梁市川上町大竹	『川上町史』に岸本城跡として記載されるも、所在地は不明。	143

上房郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
457	畦地遺跡	上房	高梁市有漢町有漢	尾根頂部に平坦地があり、かつて曲輪の可能性が指摘されていた。平成5年度に確認調査が実施され、遺構・遺物は確認されていない。もともとこの平坦地は植林による地形改変であった可能性が高い。	

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
458	正尺屋敷跡	上房	高梁市有漢町有漢	有漢町土居地区で南下がりの丘陵縁辺部に立地。屋敷地の南面に東西74m、西面に南北40mで高さ2～3mを測る石垣を巡らせる。秋庭氏の屋敷跡とされる。市指定史跡。	27
459	綱島屋敷跡	上房	高梁市有漢町有漢	高さ約5m、延長約70mの石垣を巡らす。江戸時代、庄屋を代々務めた綱島本家の屋敷跡。市指定史跡。	27
460	笠城跡	上房	高梁市有漢町上有漢	『城郭大系』13に「371笠城　詳細不明。」、『有漢町史』地区誌編　川関地区に　「笠城跡　川関上の「とち原」の山上」とあるが、詳細位置不明。	26・27・82・143
461	末次城跡	上房	高梁市有漢町上有漢	『有漢町史』地区誌編　長代西組・中組地区に　「末次城址　西組日南の中組に近い山の上」とあるが、詳細位置不明。	4・10・12・26・27・37・143
462	川西城跡	上房	吉備中央町田土	平坦地は存在するが、明確な城館関連遺構は判然としない。	143
463	櫻坂城跡（櫻迫城跡）	上房	吉備中央町田土	頂部は比較的平坦であるが、明確な城館関連遺構は判然としない。	4・10・12・37・52・71・142・143
464	名称未定	上房	吉備中央町吉川	頂部に平坦面はあるものの、明確な城館関連遺構は判然としない。	
465	伝安藤屋敷跡	上房	吉備中央町湯山	曲輪・石垣・井戸を確認。近世初頭までは遡る。	71

後月郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
466	天神山古城跡	後月	井原市芳井町天神山	山頂は平坦地形であるが、人為的な加工痕跡は判然としない。なお、城館関連地名が伝わる。	20・53・142・143
467	名称未定	後月	井原市芳井町片塚	比高差20mほどの小さい丘に、「城ヶ蔵」という地名が残る。頂部付近は墓地造成や畑地による削平により、ほとんど元地形を止めておらず、現在では城館関連遺構は判然としない。	
468	久田城跡（吉井古城）	後月	井原市芳井町吉井	『城郭体系』では、吉井古城、『城郭全集』では久田城と記載されている城館であるが、詳細な場所等は不明。	53・142
469	一橋家代官所	後月	井原市芳井町吉井	江戸時代の代官所である。	142
470	市場城跡	後月	井原市芳井町下鴨	『井原市芳井町史』には、下鴨に「市場ノ城」が伝承されていると記載された城館。詳細な場所等は不明。	10・23・36・53・141・143
471	楢林城跡	後月	井原市芳井町川相	『井原市芳井町史』に、居館跡として井原市芳井町川相字楢林の地を比定するものの、旧状をとどめていないとする。	19・36・53・142
472	河合勘解由の館跡	後月	井原市芳井町川相	『荏原の歴史随想』に、中山城の下で、殿ヶ市の地名を持つ場所と記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
473	射場	後月	井原市芳井町川相	『川相誌』に、中山城の弓の射場の址して、戸儀の瀬戸屋舗の裏と名くる地ありと記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
474	馬場	後月	井原市芳井町川相	『川相誌』に、殿川内及び落にありと記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
475	番所	後月	井原市芳井町川相	『川相誌』に、川相上組、赤羽根堂の丘上高所と記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
476	田井屋敷	後月	井原市芳井町	『川相誌』に、戸儀の中央部にありと記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
477	端館	後月	井原市芳井町川相	『川相誌』に、川相宮草と記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
478	館址	後月	井原市芳井町	『川相誌』に、兵衛の館址は今の屋号大屋の屋敷と記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
479	館	後月	井原市芳井町	『川相誌』に、藤井皓玄は田中（西吉井、坂本）に館を構えと記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
480	大名屋敷跡	後月	井原市芳井町佐屋	『川相誌』に、佐屋中央辻上の嶺上に東西五間、南北五間の陣屋と記載されるが、詳細な場所等は不明。	53
481	三輪崎城跡	後月	井原市木之子町	『井原市史』の地図に落とされている場所を調査。墓地により大規模改変を受けている。平坦面は認められるものの、城館関連遺構と断定するにはいたらない。	4・8・10・19・24・36・37・53・141・143
482	鴻守城跡	後月	井原市東江原	近世地誌類に記載されるも所在地などは判然としない。	19・36・53・142・143
483	朝日長者	後月	門田村	『岡山市史第二巻』に後月郡門田村にありとされるものの、詳細な場所等は不明。	40
484	夕日長者	後月	門田村	『岡山市史第二巻』に後月郡門田村にありとされるものの、詳細な場所等は不明。	40

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
485	長者の屋敷跡	後月	門田村	『岡山市史第二巻』。朝日長者と夕日長者を合わせた名称と想定される。門田の土井に比定されると考えられるが、この土井の所在地は不明。	40
486	栗山城跡	後月	井原市野上町	『井原市史Ⅰ』に、隣接地の民家に昔土塁のようなものがあったと伝えるが、現在は平地が残ると記載。城館関連遺構が確認できない。	19
487	甲山砦跡	後月	井原市西江原町	『井原市史Ⅰ』に、甲山から亀迫城へ至る尾根に削平地が存在すると記載されるものの、未確認。	19
488	平林館城跡	後月	井原市大江町	『井原市史Ⅰ』に、地元で伝承されている城であると記載されるも、未確認。	19
489	法泉寺の東裏山の城跡	後月	井原市西江原町	『井原市史Ⅰ』に、史料などの記述により存在が推測できると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
490	中野山城跡	後月	井原市西江原町	『井原市史Ⅰ』に、史料などの記述により存在が推測できると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
491	才峠城跡	後月	井原市西江原町	『井原市史Ⅰ』に、史料などの記述により存在が推測できると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
492	平井氏の土居屋敷背後の要害跡	後月	井原市東江原町	『井原市史Ⅰ』に、平井の土居の背後に、削平壇・堀切状の切り通しが残ると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
493	平井氏の土居屋敷跡	後月	井原市東江原町	『井原市史Ⅰ』に、「土居屋敷」が打ち渡されていると記載されるも、詳細な場所等は不明。	19
494	字平井の小土居跡	後月	井原市東江原町	『井原市史Ⅰ』に、高越山城の南麓に「小土居」の地名があると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
495	笠原氏の土井跡	後月	井原市東江原町	『井原市史Ⅰ』に、高越山城の東麓に「土居」・「土居の前」・「土居の後」の地名が残ると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
496	梶草の土居跡	後月	井原市大江町	『井原市史Ⅰ』に、検地帳に「といの内」・「土居の東」・「土居の前」の地名が見えると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
497	笹賀の土井跡	後月	井原市笹賀町	『井原市史Ⅰ』に記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
498	門田の土井跡	後月	井原市門田町	『井原市史Ⅰ』に記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
499	野上の土井跡	後月	井原市野上町	『井原市史Ⅰ』に記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
500	上出部の土井跡	後月	井原市上出部町	『井原市史Ⅰ』に記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
501	木之子の土井跡	後月	井原市木之子町	『井原市史Ⅰ』に、地籍図で館の形が確認できると記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
502	田中氏の土居跡	後月	井原市下出部町	『井原市史Ⅰ』に記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
503	西江原の土居跡	後月	井原市西江原町	『井原市史Ⅰ』に、一橋陣屋と川を隔てた北東の一角と記載されるが、詳細な場所等は不明。	19
504	土坂城跡	後月	井原市	『勝山町略史』に記載されているが、詳細な場所等は不明。	19
505	長谷東山城跡	後月	井原市西江原町	『井原史料第一集』に、城代深沢主水と記載されているが、詳細な場所等は不明。	24
506	古城跡	後月	井原市	『井原市史Ⅲ』に古城跡13箇所と記載されている。対応関係不明。	20
507	古城跡	後月	北山村	『井原市史Ⅲ』掲載の「村々様子大概書」に、「古城跡壱ヶ所あり、城主大山治部少輔」と記載されるが、詳細な場所等は不明。	20
508	城峠	後月	高屋村	『井原市史Ⅴ』に「治郎左衛門之城跡アリ」と記載されるが、詳細な場所等は不明。現在判明している高屋村に所在する城のどれかを示していると思われる。	20
509	古城跡	後月	高屋村	『井原市史Ⅴ』に「字宮ヶニ土肥伊賀守ノ古城跡アリ」と記載されるが、詳細な場所等は不明。現在判明している高屋村に所在する城のどれかを示していると思われる。	20
510	高橋城	後月	西江原村	『西江原村史』に、高橋氏として、「高橋城に居城す」と記載されるが、詳細な場所等は不明。現在判明している西江原村に所在する城のどれかを示していると思われる。	97
511	山辺の城	後月	出部村	『川相誌』に、「出部村山辺の城主佐藤庄三郎」と記載されるが、詳細な場所等は不明。現在判明している上出部・下出部に所在する城のどれかを示していると思われる。	53
512	■野城	後月	西荏原	『笠岡市史史料編上巻』掲載の「備中一ヶ国重宝記」に、「西荏原　■野城　那須与一」と記載されるが、詳細な場所等は不明。	44

小田郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
513	茶臼山城跡	小田	井原市美星町星田	明確な城館関連遺構は判然としない。	143
514	雲会	小田	井原市美星町三山	『岡山県美星町史通説編』に、「荘官館」として遠景写真が掲載されているものの、場所特定不可能。197城山城跡の可能性あり。	99
515	古城	小田	下稲木村	「北野備中領古城記」に記載と『備中誌』に書かれるものの、詳細な場所等は不明。	10

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
516	雨乞山の構跡	小田	矢掛町里山田	『備中兵乱記』に名の見える城郭で、『小田郡誌』では、焼山（山田古城跡）の西北にある標高309mの龍王山に所在かとする。これに該当すると思われる山頂付近の尾根筋を踏査したところ、平坦な地形が続くものの堀切や曲輪の造成は全く認められず、少なくともこの地点には城跡は存在しないと結論づけた。	8・20・89・110
517	道万屋敷跡	小田	笠岡市尾坂	尾根先端頂部から裾部にかけて所在すると伝わるが、屋敷に伴う遺構は判然としない。	
518	前影城跡	小田	笠岡市茂平小屋	『城郭全集』に、前影山城の支城と記載されるが、詳細な場所等は不明。	142
519	神島宮城跡	小田	神島	『備中村鑑』に記載されているが、詳細な場所等は不明。現在判明している神島に所在する城のどれかを示していると思われる。	4・10・12・37・44
520	神嶋城跡	小田	神島	『古戦場備中府志』に記載されているが、詳細な場所等は不明。現在判明している神島に所在する城のどれかを示していると思われる。	48
521	神島内城跡	小田	笠岡市神島	『城郭全集』に記載されているが、詳細な場所等は不明。現在判明している神島に所在する城のどれかを示していると思われる。	142
522	神島外城跡	小田	笠岡市神島	『城郭全集』に記載されているが、詳細な場所等は不明。現在判明している神島に所在する城のどれかを示していると思われる。	142
523	鬼ヶ城跡	小田	笠岡市	『城郭全集』に記載されているが、詳細な場所等は不明。	142
524	古城	小田	横島	『備中誌』に、「城主不詳、小寺云管見志料の小田郡横島村の状に出たり」と記載されるが、詳細な場所等は不明。現在判明している横島に所在する城のどれかを示していると思われる。	10
525	城山	小田	木之目村	『備中誌』に、「木目村」の項目で書かれているが、「木目村」ではなく、「木之目村」のことと判断。詳細な場所等は不明。	10
526	古城	小田	神島	『備中誌』に、内神島に所在と記載されるが、詳細な場所等は不明。現在判明している神島に所在する城のどれかを示していると思われる。	10
527	城跡	小田	用之江村	『備中誌』に、用之江所在で、城主未詳、村老の口碑に高田河内守と云と記載されているが、詳細な場所等は不明。現在判明している用之江に所在する城のどれかを示していると思われる。	10
528	陶山城跡	小田	西浜村	『備中誌』に西浜村に所在と記載されるが、現在分かっている城館内容と比定すると、240西浜城跡か254笠岡城跡のいずれかになる。特定できない城とする。	10・110
529	二迫山古城跡	小田	大河村	「馬場」・「小丸」などの城館関連地名が残されている場所が比定される可能性があるものの、城館関連遺構の有無は不明。	44

下道郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
530	名称未定	下道郡	倉敷市真備町服部	小田川と真谷川の合流地点の南東側に位置する。東西に細長い尾根の西側先端部が該当する。平坦地は存在するが、後世の削平である可能性が高い。背後の尾根頂部付近は自然地形が続く。	
531	ブンジロ城	下道郡	倉敷市真備町二万	所在不明。	37

浅口郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
532	鴨山砦跡	浅口	浅口市鴨方町鴨方	鴨山城東側の別尾根山頂に立地。頂部約30×30mの範囲が近世以降の石垣で囲われ、その内側に2か所のＴＶ中継施設、3基の自然石石塔が存在する。城館関連の遺構は判然としない。	
533	都羅島城	浅口	倉敷市連島町矢柄	連島町矢柄付近。現在住宅地となり、城館関連の遺構は判然としない。	37・124・143
534	三本松城	浅口	倉敷市玉島	『日本城郭全集』15補記述。位置などの詳細不明。	142
535	茶臼山城	浅口	大島村	『岡山県通史』では、所在地に浅口郡大島村と記載されている。記載内容から、寄島町の茶臼山城を示していると思われるが、確証はない。	16・37・44・48
536	屋形	浅口	笠岡市大島中	青佐山城の西北山麓に、細川通薫の館跡とされる。「土居」・「土居の下」という地名が残っていると伝わるものの、所在地不明。	47

賀陽郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
537	馬越城跡	賀陽	吉備中央町岨谷	頂部に狭い平坦面はあるが、明確な城館関連遺構は判然としない。	52・113・142・143

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
538	名称未定	賀陽	吉備中央町上野	吉備高原の北側にある丘陵に平坦面と堀切を伴う城跡があるとの地元情報に基づいて踏査したが、城館関連遺構は判然としない。	
539	名称未定	賀陽	岡山市北区東山内	頂部は一部に平坦地があるが、城館関連遺構は判然としない。	
540	本陣山城跡（奥宿城跡）	津高・賀陽	岡山市北区御津虎倉・上高田	頂部はやや平坦ではあるが、明確な城館関連遺構は未確認。谷を挟んで西側の山頂部も踏査したが、遺構は判然としない。	25・37・55・142
541	サガジョウ	賀陽	岡山市北区粟井	現地は「サカジョウ」と呼ばれ、平坦面があるものの、城館関連遺構は判然としない。	
542	善修寺城跡	賀陽	岡山市北区日近	『日本城郭全集10』の記載には、天文年間の築城で日近修理進の日近古城の城地内にあって、文殊坊という山伏が居住したとされる。永禄5年（1562）に毛利氏麾下の福武新介により日近古城が陥落し、文殊坊の善修寺館も落ちて福武新介に服従したと記す。そして、福武氏は善修寺館の跡に仏堂を建てて仏性山善修寺と号したとある。現地不明のため未調査。岡山市北区日近周辺とされる。	141
543	田上山城跡	賀陽	岡山市北区足守	『備中誌下』は、（古川）古松軒によれば城主は田上弾正であり、今はこの場所に惣堂大明神の社があると記す。現地不明のため未調査。岡山市北区足守周辺とされる。	9・55・142
544	清水山城跡	賀陽	岡山市北区下足守	『備中誌下』には、『備中府志』に宇喜多の長臣岡越前守の一族岡剛介が居城していたとするが、（古川）古松軒が里人にこの山のことを尋ねたが、どの山のことを言っているのか、清水山という山は聞いたことがないとのことであり、『備中府志』作者の平川氏の僻説であると記している。なお、『岡山県通史』と『日本城郭大系13』は、『備中府志』の内容を踏襲している。現地不明のため未調査。岡山市北区下足守とされる。	4・9・12・37・55・105・142・143
545	名称未定	賀陽	岡山市北区立田	頂部は平坦に近い自然地形で、城館関連遺構は判然としない。	
546	鎌倉山砦跡	津高・賀陽	岡山市北区御津勝尾・北区山上	信倉山の北約1㎞に鎌倉山があり、かつて土塁らしいものが確認されたとの情報に基づいて踏査したが、候補地が採石により消滅し確認できなかった。	
547	日羽の城山	賀陽	総社市日羽	日羽の集落の北西に位置する山塊に立地するとされる。『昭和町史』は「日羽の城山」として写真を載せる。頂上を「城の辻」、西山麓を「城麓」、村人は出城、古老はお堂があったと伝えるという。『昭和地区全図ふるさと再発見』の地図には鶴古城跡、草田古城跡、美袋岸ノ上要害城跡の位置が掲載されている。	72

都宇郡

城館番号	城館跡名（別称）	旧郡	所在地	概要	文献番号
548	こうげが城跡	都宇	岡山市北区中撫川	『戸川記』を参照に踏査するも、城館関連遺構や城館の存在を示唆する地割は未確認。	

第３章　城館跡の概要

備中国は、現在の岡山県西部にあたる地域である。北側は伯耆国、東隣に美作国と備前国、南側は海を隔てて讃岐国、西側は備後国に囲まれていた。北の伯耆国境には中国山脈があり、その南に美作・備前国から続く吉備高原の山塊が続いている。ほぼ全域がこの地域を南北に貫いて流れる高梁川水系に属し、これに合流する成羽川・小田川などが東西方向に平地部を形成している。

本国は、哲多郡、阿賀郡、川上郡、上房郡、後月郡、小田郡、下道郡、浅口郡、賀陽郡、窪屋郡、都宇郡の 11 郡から構成される。

哲多郡：新見市千屋以南の旧新見市西側、旧神郷町、旧哲西町、旧哲多町が該当する。新見市千屋以南で南北方向に走る高梁川が東隣の阿賀郡・上房郡との境となる。今回の調査では 45 か所の城館関連遺構を確認し、32 城を本文に掲載している。

阿賀郡：旧新見市東側、旧大佐町、真庭市旧北房町、高梁市の北部で高梁川より東側（中井町）が該当する。今回の調査では、57 か所の城館関連遺構を確認し、49 城を本文に掲載している。

川上郡：高梁市の高梁川より西側と井原市美星町の一部（美星町黒忠）が該当する。今回の調査では、37 か所の城館関連遺構を確認し、28 城を本文に掲載している。

上房郡：高梁市川面町以南の高梁川より東側と吉備中央町（旧賀陽町北側）が該当する。今回の調査では、24 か所の城館関連遺構を確認し、19 城を本文に掲載している。

後月郡：井原市の北側（高屋町・木之子町より北）が該当する。今回の調査では、30 か所の城館関連遺構を確認し、22 城を本文に掲載している。

小田郡：井原市美星町の大部分と井原市南側、小田郡矢掛町、笠岡市の大部分が該当する。今回の調査では、70 か所の城館関連遺構を確認し、38 城を本文に掲載している。

下道郡：高梁川以西の総社市、倉敷市真備町が該当する。今回の調査では、22 か所の城館関連遺構を確認し、20 城を本文に掲載している。

浅口郡：笠岡市の東端と真鍋島、浅口市と浅口郡里庄町、倉敷市の船穂町を含む高梁川西側、倉敷市の高梁川東岸の一部（片島町、西阿知町、連島町）が該当する。今回の調査では、34 か所の城館関連遺構を確認し、23 城を本文に掲載している。

賀陽郡：吉備中央町（旧賀陽町南側の一部、旧加茂川町西部）、総社市の高梁川東側の北部、岡山市北区の西側が該当する。東西は約 22km、南北は約 26km と広大な上に岡山市北区の延友から庭瀬・川入・吉備津・高松までが舌状に張り出した郡域となっている。今回の調査では、85 か所の城館関連遺構を確認し、75 城を本文に掲載している。

窪屋郡：総社市の高梁川東側の南部と倉敷市の高梁川より東側（高梁川寄りの片島町、西阿知町、連島町を除く、東端は江田山から高鳥居山・福島を経て六間川）が該当する。今回の調査では、18 か所の城館関連遺構を確認し、９城を本文に掲載している。

都宇郡：北端はおおよそ岡山市北区の新庄上、南西端は倉敷市茶屋町、南東端は岡山市南区古新田までの範囲である。今回の調査では、20 か所の城館関連遺構を確認し、10 城を本文に掲載している。

城館跡概要凡例

1　城館跡概要のタイトルに示した内容は、以下の通りである。

①城館番号　城館番号は第２章の城館跡分布図、及び一覧表の番号を記している。

②城館名　城館名は周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称を記している。

③所在地　所在地は現在の市郡町村名並びに大字名の順に記している。複数の大字にまたがる場合は、「・」で大字名間を区分している。

④分布図番号　分布図番号は第２章の城館跡分布図で用いた、分布図の挿図番号を記している。右・左は地図の見開き右ページに記載してあるか、左ページに記載してあるかを示している。

---

①番号　②城館名（よみがな）　③所在地（大字、大字・大字）　④分布図番号

2　城館跡概要には以下のとおり、城館跡に関する情報を記している。

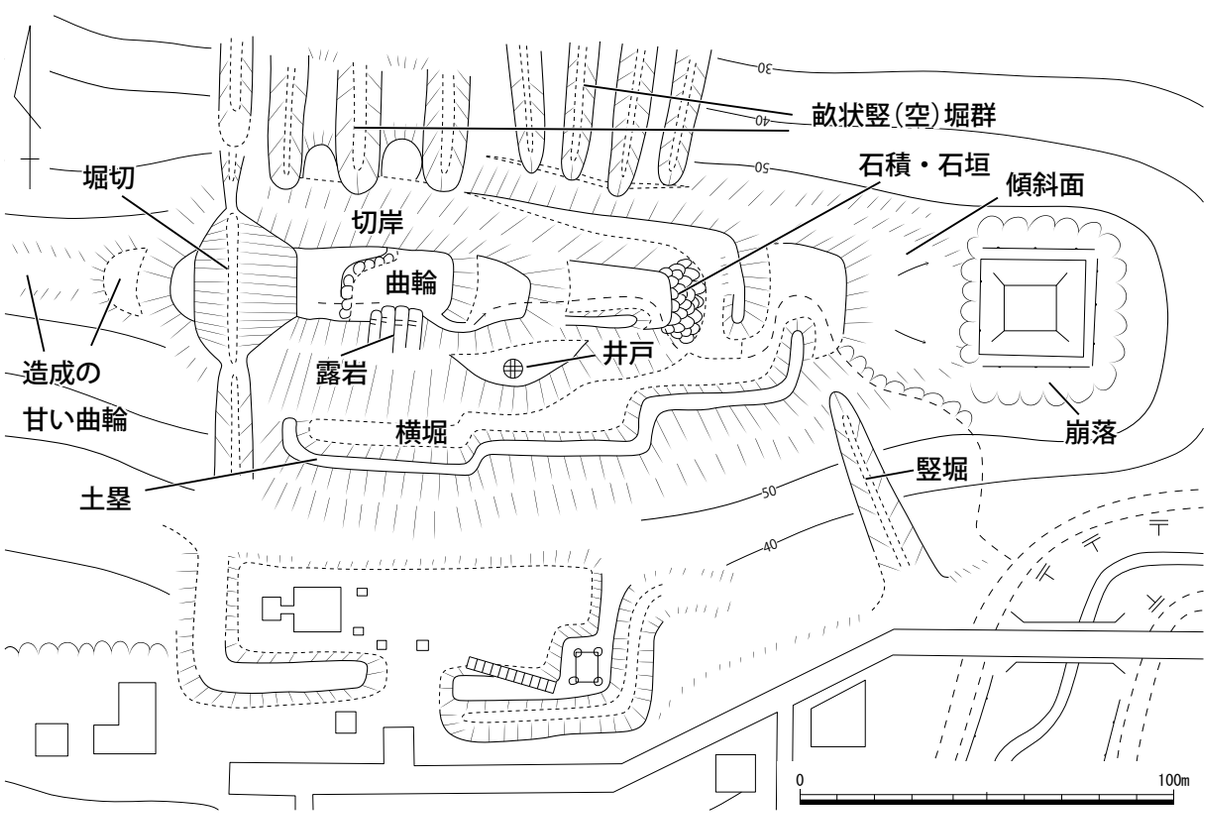
立地　城館跡に関する地理的情報を記す。他の城館との位置関係などについても記す。

概要　城館跡の縄張りに関する観察結果について記す。

文献・伝承　城館跡に関連する一次文献や参考文献の内容について記す。

あわせて執筆者の所見についても記載し、文責は文末の（　）内に示している。

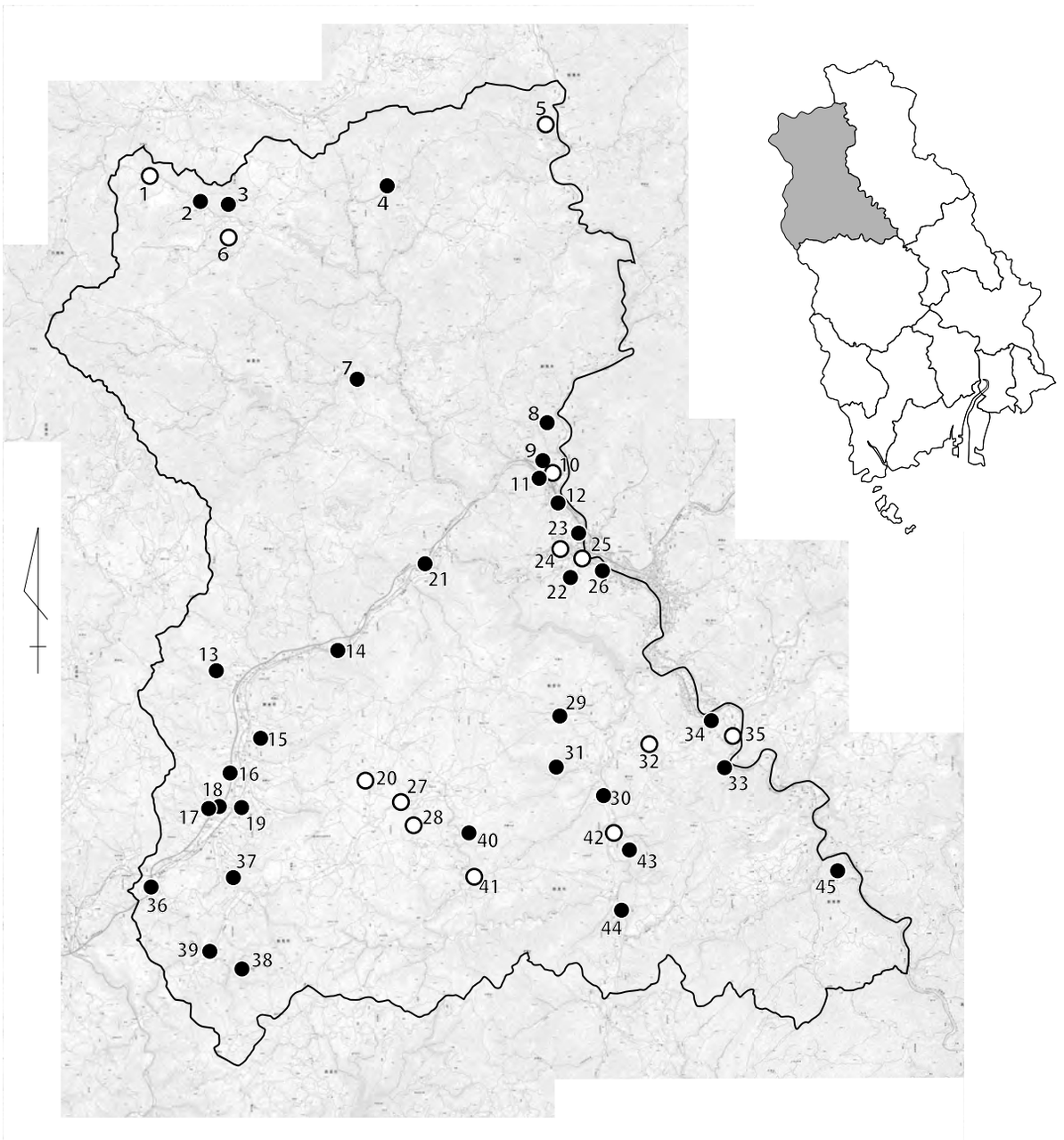
3　縄張り図に記載している遺構等の表現は下図のとおりであるが、製作者により異なる場合もある。



第３図　縄張り図凡例（『京都府中世城館跡調査報告書』を参考に作図）

※各節先頭ページ城館位置図の凡例：●解説文の掲載あり　○第２章の一覧表のみ掲載

第 1 節　哲多郡



1. 宗重屋敷跡
2. 仲村城跡
3. 勝ヶ城跡
4. 三ヶ市城跡
5. 名称未定
6. 小郷寺城跡
7. 挽野城跡
8. 楪城跡
9. 朝倉城跡
10. 横見政所跡
11. 粒根城跡
12. 地頭方政所跡
13. 岩高城跡
14. 見坂山城跡
15. 万石城跡
16. 土井城跡
17. 白石城跡
18. 藤木城跡
19. 豆木城跡
20. 荒戸山城跡
21. 中田山城跡
22. 福本城跡
23. 竹野城跡
24. 金子氏屋敷跡
25. 西方政所跡
26. 宮田山城跡
27. 馬酔木城跡
28. 小屋ヶ畝城跡
29. 滝丸城跡
30. 諏訪山城跡
31. 猿滝城跡
32. 助正城跡
33. 鯉滝城跡
34. 石蟹山城跡
35. 名称未定
36 岸本城跡
37. 西山城跡
38. 育野古城跡
39. 二条殿跡
40. 鎌ヶ畝城跡
41. 歴却山城跡
42. 成松山城跡
43. 井ノ畝城跡
44. 越山城跡
45. 柏山城跡

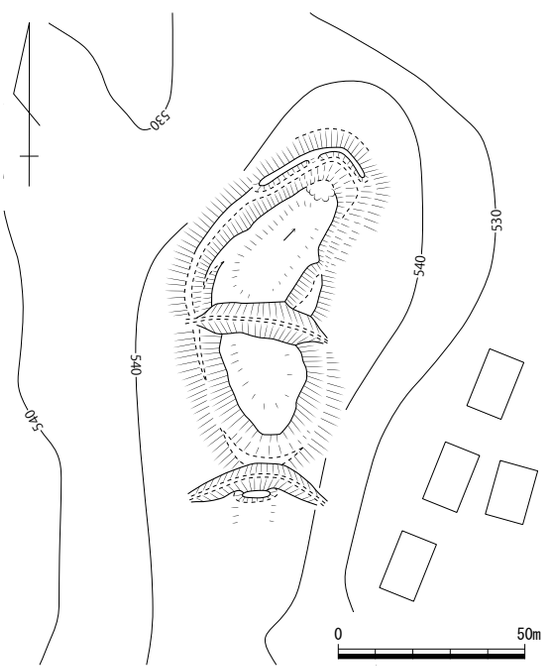
第 4 図　哲多郡城館位置図

２　仲村（なかむら）城跡　　新見市神郷高瀬　　地図１右

立地　標高 650 m級の山塊から北東方向へ向けて派生した尾根先端頂部で、高瀬川の南西側畔に位置する。比高差 20 ～ 30 mほどの低い尾根上に立地しており、川を挟んで勝ヶ城跡と対峙する位置関係にある。

概要　全長 100 m前後の、小さな山城である。頂部にある約 30 × 20 mと約 25 × 20 mの２つの曲輪が主要遺構である。この間には、幅約 10 mの堀切が横たわっている。また尾根筋にもほぼ同規模の堀切と、高さ約 0.5 mの土塁によって城域を画している。尾根前方の曲輪に西側から北側にかけて帯曲輪があり、東側には腰曲輪がある。この腰曲輪の北側縁辺には高さ約１mの土塁を配している。土塁には１か所途切れた箇所があり、虎口になる可能性がある。

文献･伝承　故事･来歴は伝わっていない。（小林）



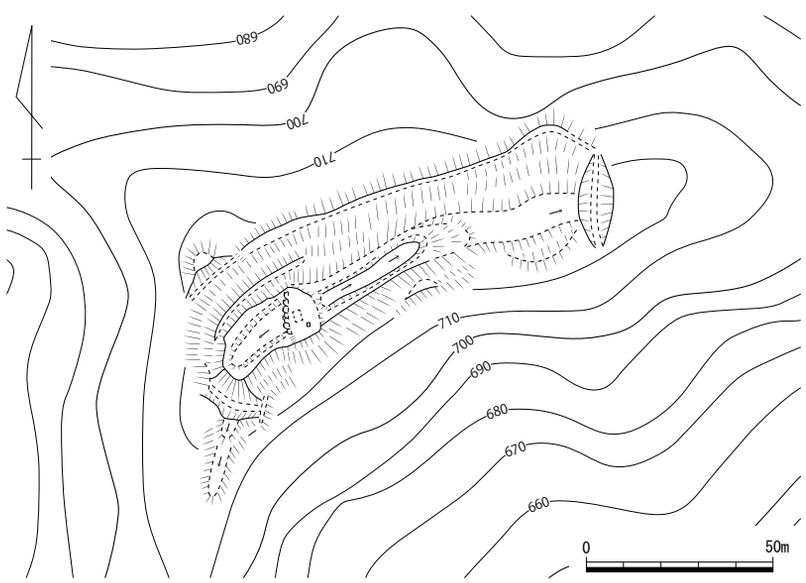
第５図　仲村城跡縄張り図（1/2,000）

３　勝（かつが）ヶ城跡　　新見市神郷高瀬　　地図１右

立地　高瀬川を南に望む標高 730 mの独立丘陵の山頂に立地する。

概要　規模は東西 120 m、南北 60 mになる。東西に細長い尾根頂部に曲輪を配し、北西に東西 17 mで深さ８m、南西に東西 15 mで深さ３m、東に南北 25 mで深さ５mの、計３条の堀切を設ける。最高所は長さ 60 m、幅６mの曲輪だと思われるが、中央を掘り下げて 10 m四方の平坦面が作られ、近世以降の祠と石灯籠が配置される。曲輪の北約 15 m下方に北西と東の堀切底部を結ぶ犬走りが確認できる。

文献・伝承　『備中集成志』に「城主安原彦左衛門元吉。天正以後吉岡蔵人」。（氏平）



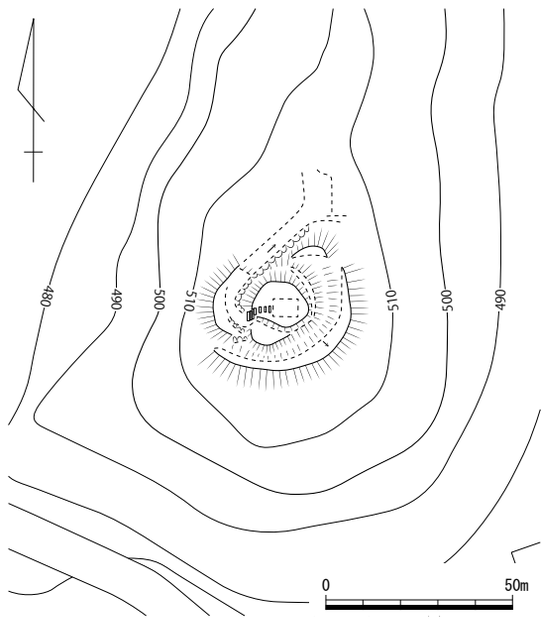
第６図　勝ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

4　三ヶ市城跡（さんがいち）　　新見市神郷釜村　　地図２左

立地　三ヶ市川を南に見下ろす南北に細長い丘陵の先端に立地する。標高 520 mで、比高差は 70 mを測る。東へ川を遡ると千屋に達する。

概要　南北 50 m、東西 40 mの小規模な山城である。視界は東西が同程度の比高の丘陵に阻まれ、南のみ良好である。現在頂部に西を向く社が建てられ、北側から頂部曲輪まで尾根を削って道が造成されている。それより古い参道は西から急斜面をつづら折れで登っていたようで、登城路を踏襲した可能性がある。北に堀切が 1 条あった痕跡が確認できるが、山道造成によってか不明瞭になっている。頂部は 10 m四方の楕円形の曲輪である。その下側、北・西・南に曲輪を 3 カ所設けるが、西側の曲輪は道路による撹乱で規模が不明である。頂部から 5 m程度下方に、東から南側にかけて最大幅 4 mの帯曲輪を配している。

文献・伝承　故事来歴は確認できない。　（氏平）



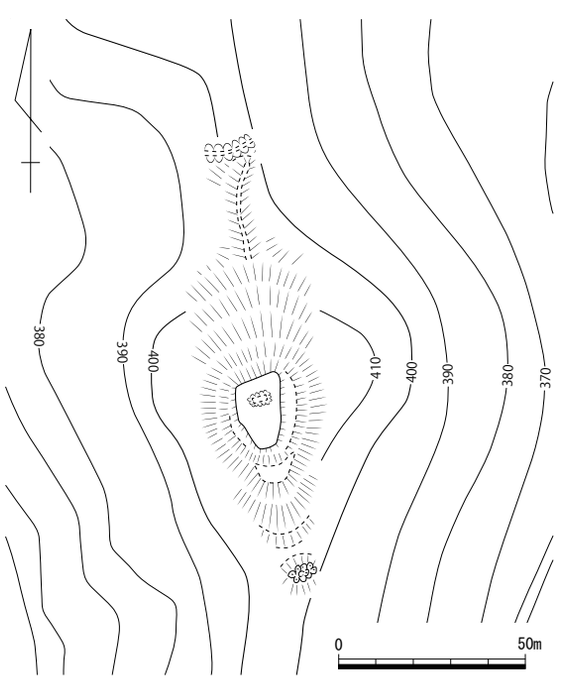
第 7 図　三ヶ市城跡縄張り図（1/2,000）

7　挽野城跡（ひきの）　　新見市神郷油野　　地図４右

立地　西から東へ蛇行しながら流れる油野川の北側隣に位置する。頂部の標高は、約 410 mである。

概要　頂部にある曲輪は、長さ約 20 m、幅約 15 mの規模で、その縁辺部は帯状に平坦地が存在している。この頂部の南側には、長さ 5 m前後の小さい曲輪が付随する。さらに南側に岩盤を掘り残した地形が土壇状に残っているが、当城の主要施設は頂部の曲輪とその南側の小さい曲輪のみで、規模の小さい山城である。頂部の北側は、急峻な地形が続き、約 20 m下る。その先には土橋状の地形が約 30 mあり、その先端に切通しがある。この切通しは本来堀切であった可能性もある。

文献・伝承　『備中村鑑』には「挽野々城」と書かれ、池野村にあり平中将重藤卿が在城したとある。その他に永禄年間に嶺本間兵衛、天正年間に三村親友が在城と伝わる。　（小林）



第 8 図　挽野城跡縄張り図（1/2,000）

８　楪（ゆずりは）城跡　　新見市上市　　＜市指定史跡＞　地図５左

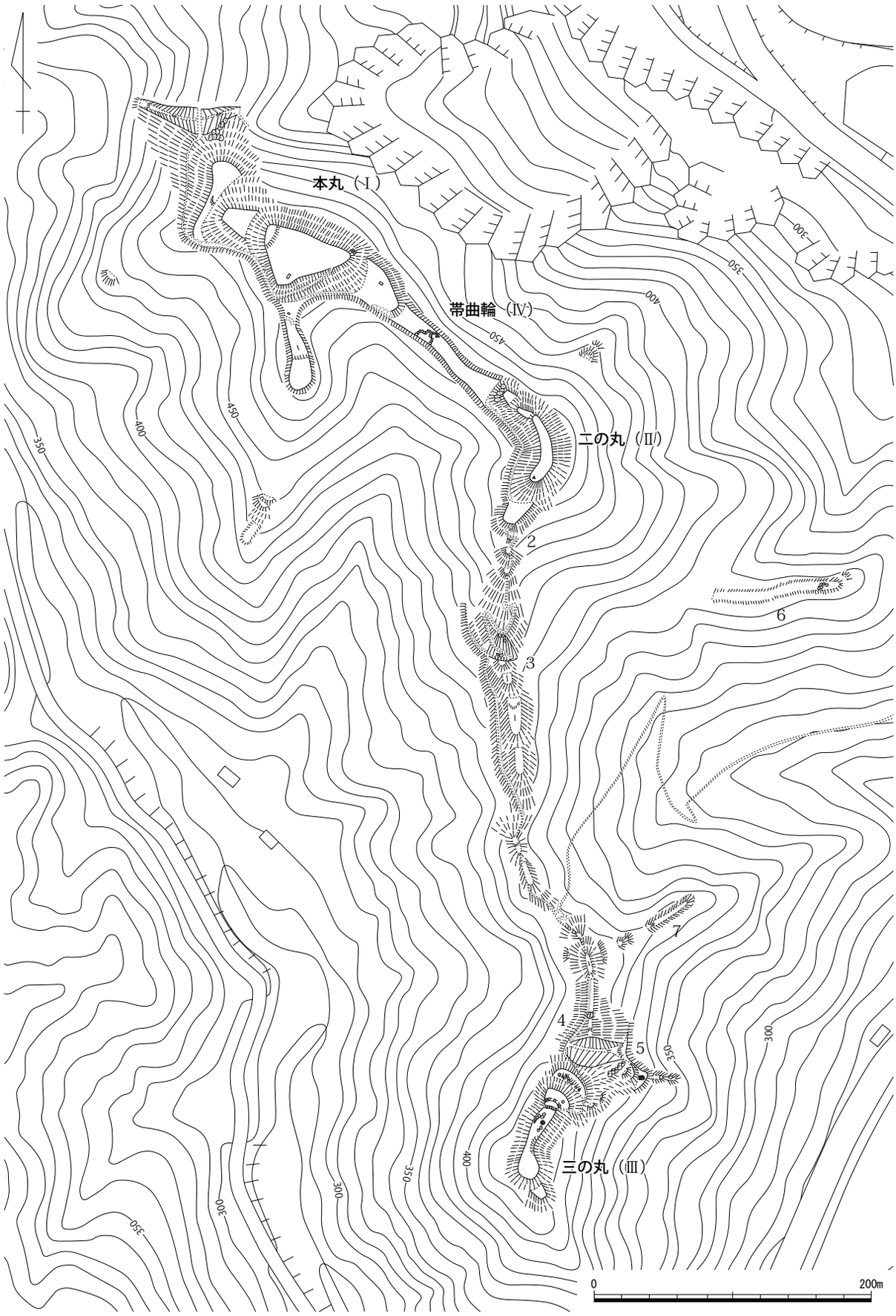
位置　本城は新見市上市に所在する、標高 480 mを測る山塊頂部に位置する。城の東麓には南北に高梁川が流れており、近世にはこれに沿うように備中国の新見と伯耆国の日野とを結ぶ伯耆往来が通っていた。城の南約 1.3㎞ の位置には、小谷川と高梁川の分岐点が位置している。この場所は日本中世史に知られる祐清殺害伝承地の傍で、神郷、哲西地域を経て備後国東城へ至る間道（近世の備後往来）と伯耆往来との合流点にあたっている。中世における地勢も概ねこれと同じであったと考えられ、城はこうした街道筋を押さえる要衝にある。なお、新見市域には中世を通じて新見荘が存在していた。鎌倉時代の後半、文永８～９（1271 ～ 72）年には地頭と荘園領主の間で支配地の分割、すなわち下地中分が行われた。本城の位置する上市地区東半はこの分割以降、戦国期に到るまで地頭方の領域であり続けた。

概要　城域は東西 500 m、南北 780 mを測る。備中国北部では最大規模の城であり、岡山県内を見渡しても有数の山城である。城域は北から「本丸（Ⅰ）」、「帯曲輪（Ⅳ）」、「二の丸（Ⅱ）」、「三の丸（Ⅲ）」と呼び慣わされ、南北に曲輪を連ねる連郭式山城である。歴史学的には正しい用語ではないが、ここではこれらの名称を用いて各曲輪について記述していくこととする。

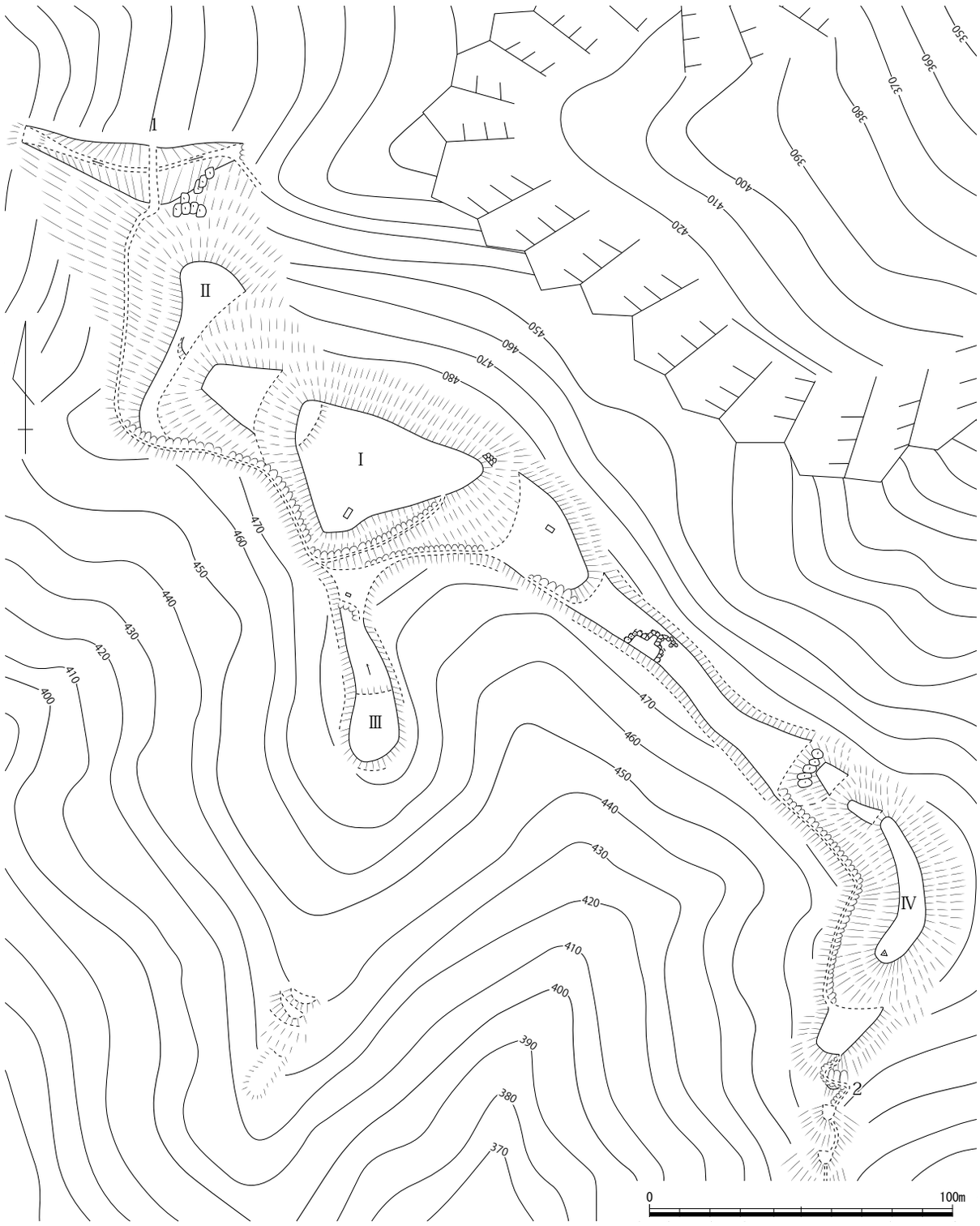
「本丸」後背にあたる城域最北部には東西 80 m、幅 20 m、深さ約 10 mを測る堀切１が掘削され、その領域を画している。この堀切１の南側には多数の露岩が見られることから、自然の谷地形を取り込んだもののようである。また、堀切の西側上端は崩れているようだ。現在堀の中央には遊歩道が取り付けられており、旧観を失っている。しかし堀底を進むと東側、西側共に傾斜変換点があり、ここをそれぞれ堀切の先端と判断した。

「二の丸」の南にも小さな堀切２があり、さらに南へ下ると城域中央を区画する堀切３に至る。堀切３は幅 20 m、深さ８mを優に超える大規模なものである。ここから「三の丸」の北端に位置する堀切４までは、階段状に連なる地形が続く。この地点の地形には明確な切岸を切った痕跡がなく、自然地形をそのまま残している状況であった。しかし、「二の丸」と「三の丸」を連接するこの尾根地形が城域として利用されていないとすると、「三の丸」が「本丸」、「二ノ丸」から見て南 400 mの位置に突出していたことになる。一方、「三の丸」の北には比高１m程の小形の堀切４と、深さ 10 m、東西 40 mを測る城域でも２番目の規模を誇る堀切５が掘削されている。堀切２、３、４、５はその位置から考えて、明らかに尾根上を進む敵兵の進入を防む遮断線である。ならば、一見自然地形に見える堀切３、４の間の地形についても、兵の駐屯地や旗指物の置き場など、曲輪として利用されていた可能性を想定するのが自然ではなかろうか。なお、『日本城郭体系』では、この地形を明確に曲輪と認識している。あわせて堀切３、４の間にある谷地形を堀切として記載している。しかし、現在この地点は現在城域の東麓から続く遊歩道により削平を受けており、堀切の痕跡は認めがたい状況であった。

さて、今回の調査では、城域から派生する尾根上にも、何カ所かの曲輪とみられる平坦地を見つけることができた。特に「二の丸」の東 140 mの位置にある平坦面６と、「三の丸」の北東に位置する平坦面７はその中でも大形のものである。平坦面６は長さ 90 m、幅８～ 10 mを測り、東側先端部付近に露岩が認められた。平坦面７は長さ 30 mを測る。いずれも城から見て高梁川、そして伯耆街



第 9 図　楪城跡縄張り図（1/4,000）



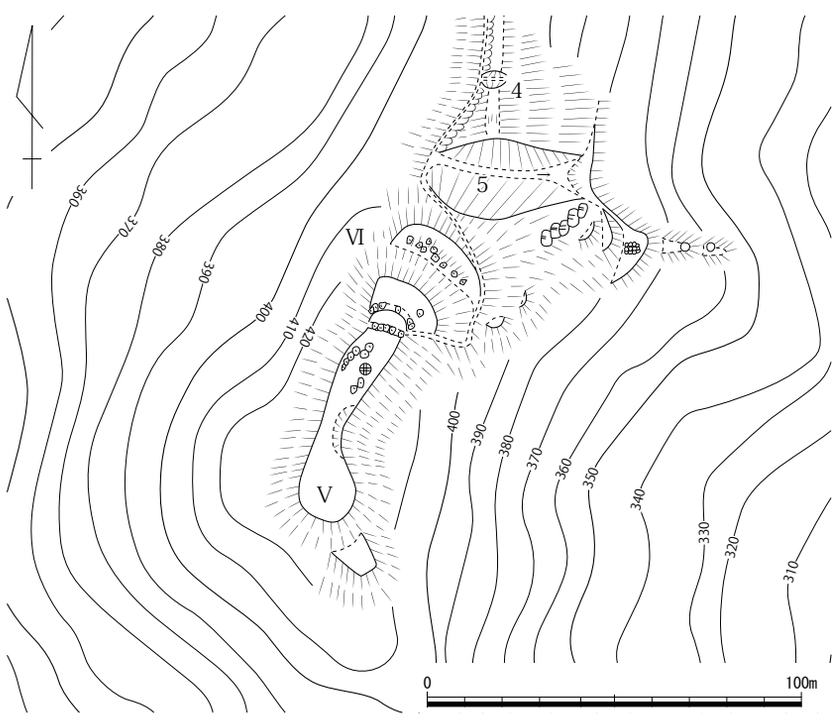
第 10 図　楪城跡「本丸」・「帯曲輪」・「二の丸」縄張り図（1/2,000）

道に対して東から突出する位置にあたる。こうした立地からみて、この二つの平坦面は街道筋に対する見張り場のような機能を持っていたことを想定できよう。

次に「本丸」､及び「二の丸」について記述する。「本丸」は堀切 1 の南に続く 5 面の曲輪からなる。主郭となる曲輪Ⅰは通称「三ノ壇」と呼ばれる。東西 60 m、南北 40 mを測る大形の曲輪で、城内では最大の規模を誇る。曲輪Ⅰの周囲には高さ 5 ～ 8 mを測る切岸が見られる。現在、曲輪の南に入り口が取り付いているが、これは最近造成された遊歩道であるため、本丸の入口の位置や構造に関し

ては不明である。曲輪の北東側斜面に石積みが見られる他、西端には高さ 0.5 mほどの土塁状の高まりが見られる。曲輪Ⅰからは北方向への眺望に優れ、高梁川とそれに沿って進む伯耆街道を一望できる。曲輪Ⅰから北西へ向かっては２面の曲輪が続く。堀切に相対する位置にある曲輪Ⅱは通称「一ノ壇」と呼ばれ、その規模は南北 60 m、東西 10 ～ 20 mを測る。また、曲輪北側の一部に高まりが認められる。曲輪の中央は堀切１に対して入隅となり、曲輪の縁辺が扇形の折れを見せる。堀切を超えて城内へ入る進入者への横矢を意図したものであろう。曲輪Ⅰの南の尾根上にも曲輪Ⅲが続く。この曲輪は通称「花（端）の丸」と呼ばれる。曲輪Ⅲの北側一部は削平を受けているため原形は不明ながら、最大幅 15 mを測る細長い曲輪である。曲輪Ⅰの東には通称「四ノ壇」と呼ばれる曲輪が続く。その規模は東西 30 m、南北 25 mを測る。「本丸」を構成する曲輪群は最小でも長さ 20 mを超えるもので、一つ一つの郭面の大きいことが特徴と言えるだろう。また、各曲輪は５～ 10 mを測る高い切岸により突出している。本丸の南東には幅 15 ～ 20 m、長さ 75 mを測る通称「帯曲輪」が続く。帯曲輪は平坦に造成されており、その北側には石壇が見られる。この石壇は地元では櫓台の跡と伝わっている。帯曲輪の東には「二の丸」が位置する。「二の丸」は４面の曲輪からなる。その最高所に平面逆Ｃ字形を呈する曲輪Ⅳを配し、その南北に曲輪を連ねる。曲輪Ⅳこそ長さ 45 m、幅 10 mを測るが、それ以外の曲輪は最大でも長さ 20 mに満たず、「本丸」との差異は明白である。曲輪Ⅳからは北、及び東から南方向への眺望が開け、「三の丸」に向かって延びる尾根筋を見下ろすことができる。従って、「二の丸」は「本丸」と「三の丸」とを結ぶ、「つなぎ」の曲輪と位置づけることができるだろう。城の防衛にあたっては、この「二の丸」こそが連携の要を担っていたものと考えたい。曲輪Ⅳが中央で折れ曲がるような形状を見せるのは、城の南北両方向への眺望を確保するためのものであったと推察できる。「二の丸」の南には露岩を取り込んだ小規模な堀切２が掘削されており、その領域を区画している。

続いて「三の丸」について記述する。「三の丸」は城内でも最南部に位置する曲輪群である。「三の丸」周辺には露岩が多く見られ、厳しい傾斜となる自然地形を取り入れつつ造成されているものと見られる。「三の丸」は現状４面の曲輪からなっている。最高所にある曲輪Ⅴには井戸とみられる窪みがあり、その東側中央部分には自然地形に由来するとみられる地形の下がりが認められる。曲輪Ⅴの南東に小型の曲輪が



第 11 図　楪城跡「三の丸」縄張り図（1/2,000）

１面続く。曲輪Ⅴからは特に南方向の眺望に優れ、新見荘域から遡る高梁川及びそれに沿って進む伯耆街道を見下ろすことができる。堀切５に対面する曲輪Ⅵには多数の礫の散布が見られ、もともとは石積みがあったことを想起させる。また。堀切５の南東にも数面の小曲輪が造成されている。

ここまでをまとめると「本丸」は大型で平坦な曲輪を連ねるもので、高い切岸と堀切により防御を固めている。事実、「本丸」の主郭たる曲輪Ⅰの規模は 158 備中松山城跡の一角に当たる、大松山城跡の「本丸」のそれにほぼ匹敵している。こうした大型の曲輪は古式の山城の特徴かとも思えるが、曲輪面がほぼ平坦に造成されていることと、急傾斜な切岸により突出している点には注意したい。一方で「三の丸」は堀切こそ大規模なものであったが、曲輪の規模は小さく、かつ自然地形を残す不完全なものであった。「二の丸」と「三の丸」間の地形には明確な造成の痕跡を見いだしがたい状況であったことを含め、本城に見る曲輪の構成は多様なものである。では、こうした多様性はどのような理由により生まれたのであろうか。後述するとおり、楪城は幾度も城主交代を経ており、改修が行われた記録も残る。つまり、もともと自然地形を取り入れた古式の山城であったものを、異なる主体が戦国時代後半に幾度かの改修を実施したことで、多様な曲輪構成を見せるようになったのではないか。特に城域各所で見られる石積みは、新しい時期の改修を思わせる。

文献・伝承　楪城の築城について明確に記す文献は存在しないが、『備中府志』、『備中集成誌』等の近世地誌類では新見祐信の名を挙げている。これに類似した説として『日本城郭体系』では南朝方の武将として活躍した新見貞直を築城主としている。しかし、杜氏が築城したとする別伝もあり、判然としない。16 世紀に入ることから、楪城に関連すると思われる文書が『東寺百合文書』等に現れる。永正 12（1515）年、新見国経が国方（守護方）と多（田）治部氏が新見荘に乱入、合戦にいたった経緯を報告するなかで「三職衆も未当城籠候、」と見える「当城」が楪城のことを指すか。翌永正 13（1516）年には三村氏が新見荘域に乱入しており、この際にも新見氏が「当城」に籠もっていたことがわかる。この時、文書の発給者である新見国資（国経のことか）は、出雲、伯耆の助力を得て、旧領を奪還したいとしており、この頃、山陰で自立を遂げていた尼子氏の庇護下に入ったことを想起させる。その後の経緯は一次資料では追跡できないが、『新見市史』では天文２（1533）年に尼子氏の配下であった庄為資の支援の元、楢崎時信が入城したとしている。しかし、『東寺百合文書』には元亀元（1570）年に新見荘の年貢収入について三村氏に図った記録があり、この頃までには楪城は三村氏の支配下となっていた。なお、『新見市史』では『杜家文書』を引いて、永禄 13（1570）年に楢崎氏から三村元親の弟、元範へ城主交代がなされたとする。元範はこの際、城の整備と拡充をなし、さらに楪城に南面する朝倉城には冨谷大炊介、粒根城に伊勢入道を入れ、要衝を押さえたとする。その後、楪城が史料に登場するのは毛利氏と三村氏との間で勃発した、いわゆる「備中兵乱」に際してのことである。『備中兵乱記』によると、天正３（1575）年正月５～７日まで毛利勢と三村氏の戦いは続いたが、翌８日、城中にいた冨谷大炊介以下、数名の部将が毛利方に寝返り、「花（端）の丸」に火を放った。三村元範は城を立ち退いたが、落ち延びる途中で多（田）治部景治により討たれたという。乱後、楪城は毛利氏一族の吉川元春が治めることとなり、今田経高が在番として置かれた。天正６（1578）年９月 14 日付け発給かと思われる吉川元春書状では、経高に楪城の改修を命じている。翌天正７（1579）年７月、楪城で毛利輝元、小早川隆景、吉川元春による会合が開かれる予定であったが、元春は山陰での戦況不利を理由に参加を断っている。天正 10（1582）年の備中高松城の戦いを経て、天正 13（1585）年に毛利氏と宇喜多氏・豊臣氏との間で国分けがなされた際には、毛利氏

側の城として残された。その後、慶長５（1600）年の毛利氏の防長移封に際して廃城となったとされる。（和田）

写真３　遠景（東から）

写真４　帯曲輪（南から）

写真５　二の丸頂部（南から）

写真６　二の丸南側堀切３（南から）

写真７　三の丸北端堀切５（北から）

写真８　三の丸頂部（北から）

９　朝倉（あさくら）城跡　　新見市上市　　地図５左

立地　東に高梁川、西に谷内川があり、その合流地点を南に望む標高 430 mの尾根頂部に立地する。現在は東に国道 180 号線、西に国道 182 号線が通っている。江戸時代においては、東の高梁川側からは明智峠越えで大山道につながり、西側の上市字谷内からは谷田峠越えの雲伯往来が通るなど、出雲・伯耆と備中北部を結ぶ陸上交通の要衝となっていた。南側 500 mの谷内川を挟んだ対岸に粒根城跡、北側約 1.3km の矢谷川を越えた尾根頂部に楾城跡が位置する。東側山裾には横見集落があり、地元の方の話ではかつては集落内から城跡まで道が通じていたようである。

概要　頂部付近に位置する曲輪群Ⅰとその北にある曲輪群Ⅱに分かれる。全長は南北 320 mに及ぶが、曲輪群Ⅰ・Ⅱの間に自然地形のままの部分が 110 m分存在する。

曲輪群Ⅰは全長 150 mに及び、最頂部の主郭から南側に７つの曲輪を配する。各曲輪の形は不整形で、さらに主郭～４面目の曲輪の平坦部は緩やかに南へ向かって傾斜していて、地形改変は最小限に止まるようだ。主郭は幅 15 m、長さ 35 mで最高所中央部に径７mほどの大きさで楕円形の高まりを設けている。４面目曲輪の北東隅に虎口状に見える部分があり、５面目の曲輪南西斜面には幅５mの範囲で石積みを確認した。曲輪群下方に竪堀があるが、尾根頂部より東に寄った位置にあり掘切になっていない。主郭から西に延びる尾根へは５mと６mの落差の２つの小曲輪を設けているが、その西側の尾根頂部は自然地形で堀切は確認できなかった。主郭側面や尾根南東側で傾斜が緩くなる部分にも腰曲輪と切岸が見られる。主郭北部は、落差８mと 15 mの２条の堀切で隔絶している。掘切から北へは平坦な尾根が続き、堀切から 130 m北から曲輪群Ⅱとした小規模な曲輪群がある。

曲輪群Ⅱは全長 70 mを測り、頂部は東側の中央部が長さ 20 mを測る曲輪となっていて、西側には腰曲輪を伴う。曲輪群Ⅰよりさらに簡素な地形の加工である。当城は２つの主要街道の合流地点を押さえ、北の楾城跡と連携して新見荘の北端を防衛する役割を担っていたと考えられる。曲輪群Ⅱは楾城跡との連絡や北側からの攻撃に備える意味で重要な施設と言えよう。

文献・伝承　『新見市史』によると、天正２～３（1574 ～ 75）年の備中兵乱時に三村元範の配下でもと新見国経の被官、冨谷大炊助が居城していた。冨谷大炊助は『古戦場備中府志』などでも城主として記載がある。三村元範は永禄 13（1570）年に楾城に入城していることから、その頃からの在城であろうか。『備中兵乱記』では冨谷大炊助は毛利方に寝返り、楾城の大手門を開いて毛利方を招き入れたと記されている。　（氏平）

写真９　遠景（南から）

写真 10　曲輪群Ⅰ　２・３段目曲輪（南から）

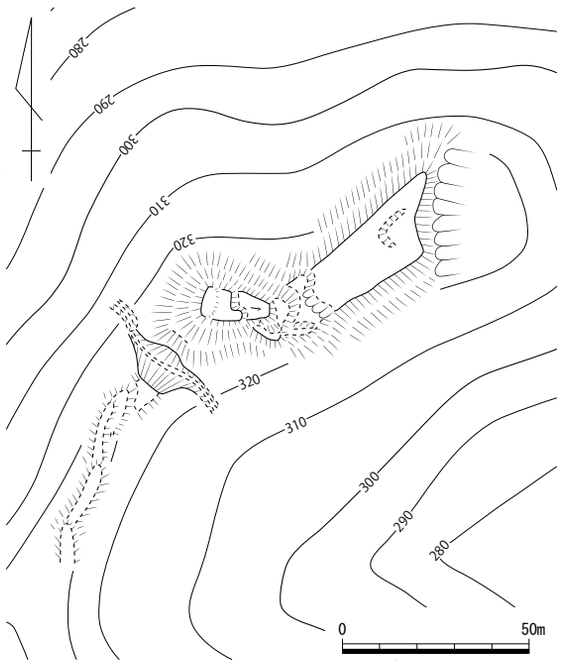
第 12 図　朝倉城跡縄張り図（1/2,000）

11　粒根（つふね）城跡　　新見市上市　　地図５左

立地　標高約 490 m級の山塊から北東方向へ派生した尾根の先端頂部に位置する。頂部の標高は約 330 mである。小川を挟んだ北側の山塊には、朝倉城跡が位置している。

概要　細い尾根上に位置する全長約 100 mの小さな山城である。頂部の曲輪は小さく、長さ約 20 mで、西側半分は土塁状の高まりとなっている。この頂部から尾根先端方向に小さい曲輪が続き、そのさらに東側に長さ約 50 m、幅約 15 mと比較的大きな曲輪が 1 面築かれている。この曲輪はほぼ平坦を呈しているが、先端部分がやや凹み、残った部分が土塁状になっている。頂部の背後は深さ約 10 mの堀切が造られており、城域を画している。堀切から山側は、細尾根が続く。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「哲多郡井村」にあり、伊勢掃部入道が在城したとある。　（小林）



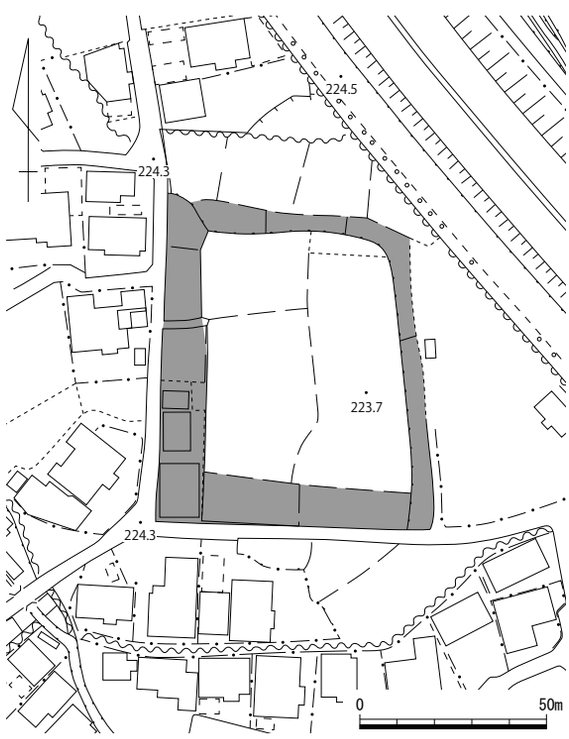
第 13 図　粒根城跡縄張り図（1/2,000）

12　地頭方政所（じとうがたまんどころ）跡　　新見市上市　　地図５右

立地　高梁川と谷内川の合流地点を北に臨む、標高 220 mを測る平地に立地する。

概要　小字名は下町地頭で、現在は水田と宅地であるが、南北 65 m、東西 50 ～ 55 mの方位に沿った方形区画が周囲よりも 30cm ほど高く、西側幅 10 m、北～東側幅約 5 m、南側幅約 10 mの区画が帯状に取り囲む形状がよく残されている。中央の方形区画が屋敷地、帯状に取り囲む区画が堀跡を表しているものと思われる。なお、区画外の北側は、帯状区画内より 50cm 程度標高が下がる。

文献・伝承　『新見市史』では、下地中分によって新見庄が東方地頭方と西方領家方に分けられた文永 10（1273）年頃から『地頭方政所』が置かれ、元弘 3（1333）年東寺が地頭職となり、天正 2（1574）年に東寺との連絡途絶まで継続していたと想定している。　（氏平）



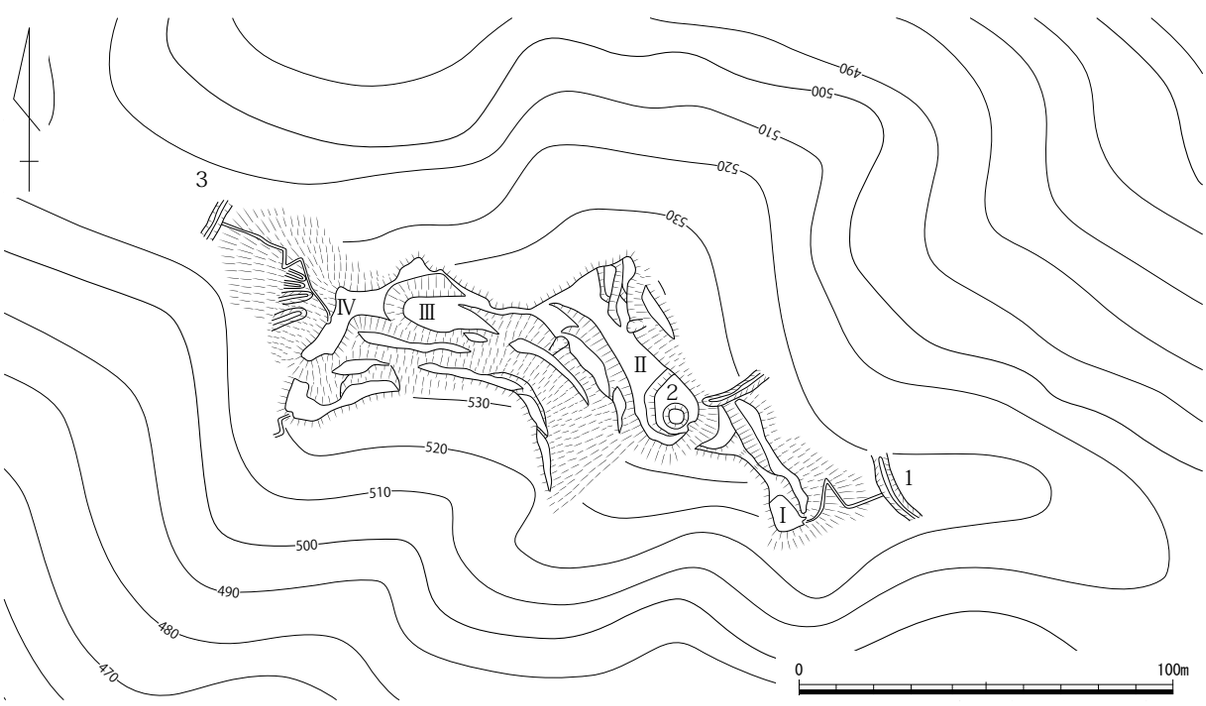
第 14 図　地頭方政所跡平面図（1/2,000）

13　岩高（いわたか）城跡　　新見市哲西町上神代　　地図８右

立地　新見市哲西町上神代字宮ノ尾にあり、背後の山塊から派生した標高 547 mを測る宝道岳頂部に位置する。尾根は東西方向に伸び、その南北は急峻な崖となっている。城は備中国新見から備後国東城へ抜ける街道（近世期の備後往来）に対して西から突出する好位置に当たり、街道を押さえる要衝であったと見られる。

概要　城域は東西約 200 m、南北約 70 mを測る中規模城郭である。城への道は、宮ノ尾集落からつづら折れに続いている。城域の東端に長さ約 20 mを測る堀切１が認められ、これにより防御線をなしている。この堀切から比高８mを測る切岸を登った位置に、曲輪Ⅰがある。曲輪Ⅰの東端には平入りとなる虎口が見られる。曲輪Ⅰの東側にある腰曲輪から、曲輪Ⅰに進入した敵兵に対して横矢を掛けることができる。曲輪Ⅰの西、比高約５mの切岸を挟んで、城域最高所には主郭となる曲輪Ⅱが位置する。曲輪Ⅱの規模は東西 10 ～ 18 m、南北 60 mを測り、その南北に腰曲輪を配する。曲輪Ⅱの東側に高さ 1.5 mを測る円形の基壇２がある。曲輪Ⅲは曲輪Ⅱの西に位置し、城域では２番目の規模となる。この曲輪の北には不整形な曲輪Ⅳが設けられている。曲輪ⅢとⅣの南には、長さ約 15 ～ 30 mを測る腰曲輪が３面にわたって造成されており、この方面の侵入者に対して備えていたものと見られる。また、曲輪Ⅳの西には４本の畝状竪堀群が掘削されており、守りを固めている。さらに曲輪Ⅳから西へ 45 mの位置に堀切３を設けて、この方面からの進入を遮断している。これら本城の縄張りは戦国時代でも後半の特徴を見せると言える。

文献・伝承　昭和４（1929）年に刊行された『阿哲郡誌』には天正年間（1573 ～ 1585）に大深九郎左衛門信継が築城したと記すが、これを裏付ける一次資料、近世地誌類等を欠く。　　（和田）



第 15 図　岩高城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

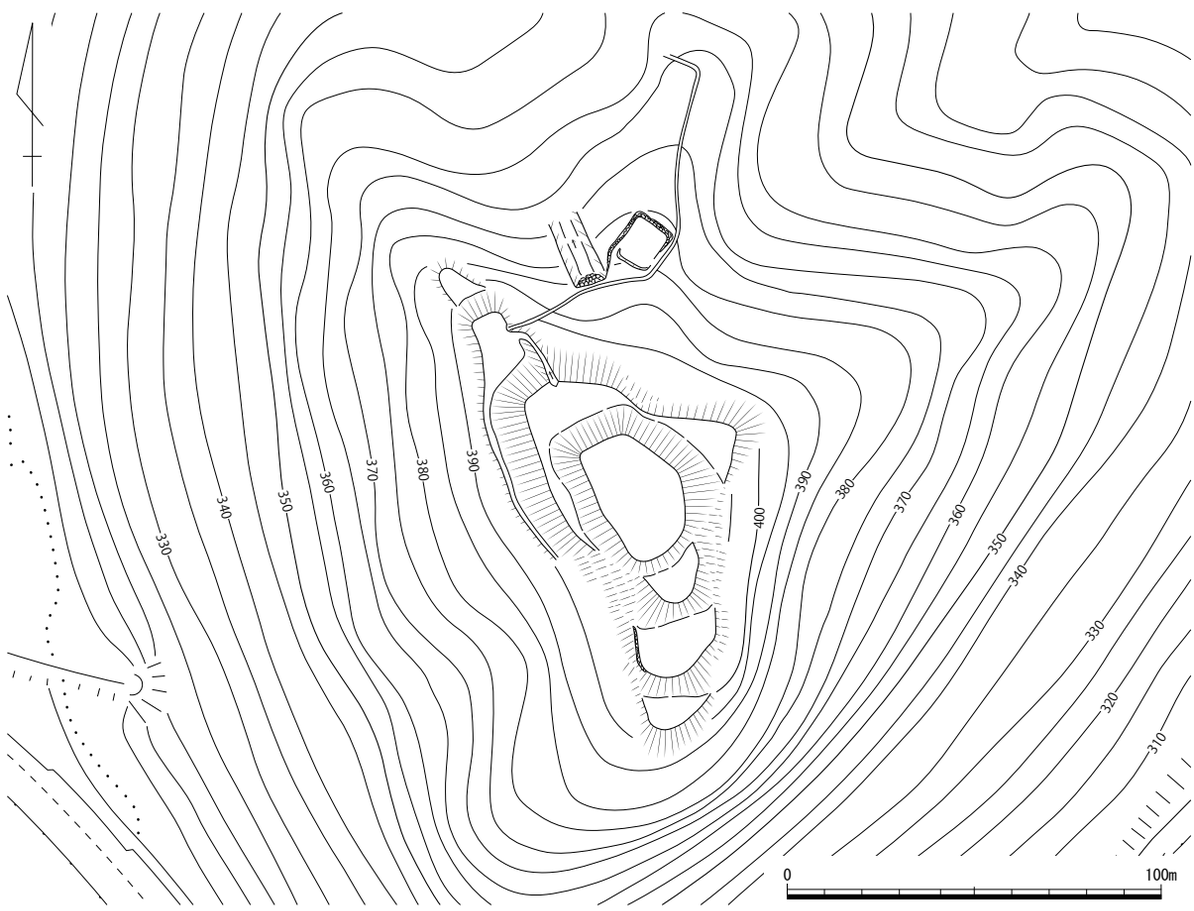
14　見坂山城跡（みさかやま）　　新見市哲西町上神代・神郷下神代　　地図８右

立地　南へ派生した尾根先端頂部にあり、東西に流れる神代川は当地にぶつかり屈折しながら裾部を流れている。旧哲西町と旧神郷町の境にあり、前者では「見坂山城」、後者では「武坂（むさか）城」と言われていた。

概要　頂部に主郭を置き、そこから延びる南北の尾根筋に曲輪を連ねた山城である。主郭の規模は、長さ約 35 m、幅約 25 mでしっかりした平坦面を造っている。周囲の切岸も約５mの高さがあり、急峻である。尾根前面には３つの曲輪が連なり、その中間の曲輪の側面には石垣が築かれている。各曲輪間の切岸は最大７mを測るものもある。主郭北東方向の小さい尾根筋には１面の曲輪を配する。主郭背後の北西側には、３面の曲輪を築く。やはり各曲輪間は、高い切岸で守っている。

本城の全長は約 140 mとそれほど大きい山城ではないが、各曲輪は広く、また切岸も高くしっかりしている。頂部からは神代川の流域が広く見渡せ、要衝を守る城であったことが窺える。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「見坂山城」として上神代村にあり、羽場右馬頭が在城したと伝わる。羽場氏となると南北朝に築城となるが、現在の縄張り図を見ると室町時代後期まで改築が行われたとされている（文献 136）。　（小林）



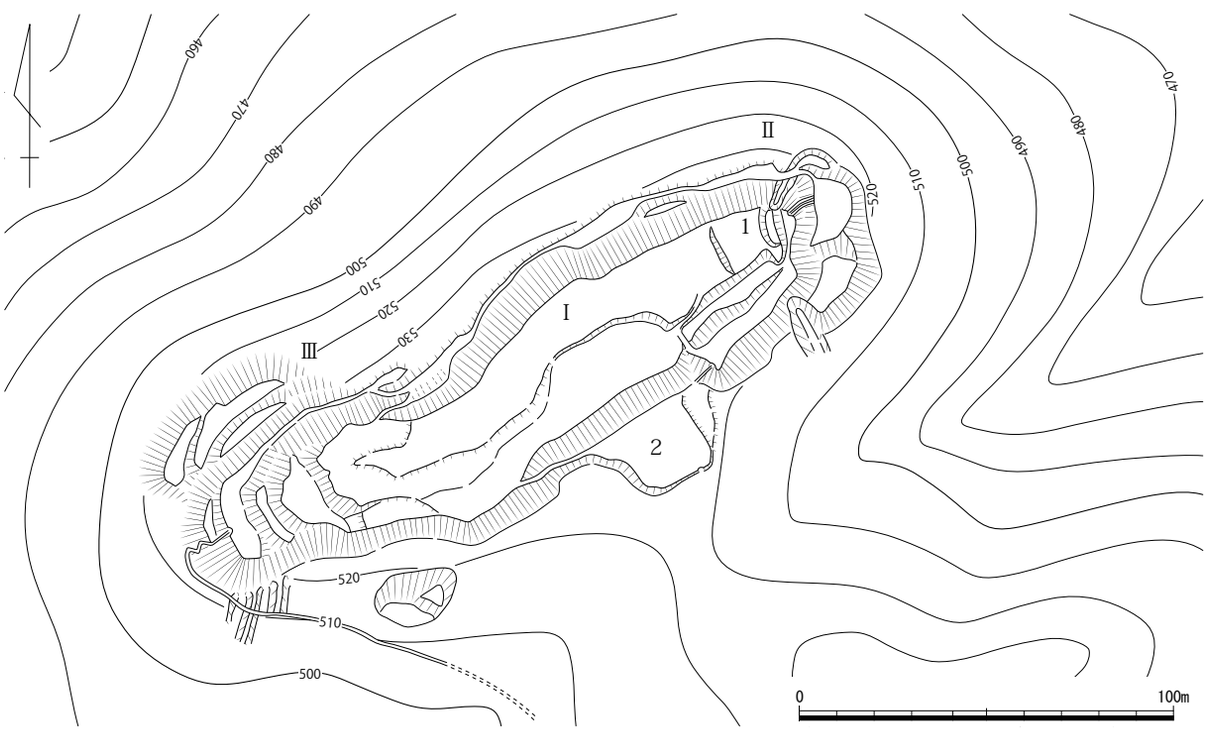
第 16 図　見坂山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

15　万石（まんごく）城跡　　新見市哲西町矢田　　地図８右

立地　新見市哲西町矢田に所在する金比羅山山頂に位置する。この城の西麓には備後国東城と備中国新見とを結ぶ道（近世期の備後往来）が所在する。この城を中心にして、南北２㎞の範囲には、この道に対して東西から突き出すように岩高城跡、豆木城跡、藤木城跡などの諸城が位置している。このことから見て、中世期の道も近世期のそれと同様のものであった公算が大きい。本城はこれら諸城の分布域の中心に位置しており、さらに北東方向に平野部を眺望できる好位置にある。

概要　本城の縄張りは、基本的には主郭１面からなる単郭式の城である。主郭となる曲輪Ⅰは東西140 mを測る大規模なものである。その西側に不整形な自然地形を残すものの、基本的には平坦に造成されている。また、曲輪Ⅰの東西には、防御施設となる階段状の曲輪群Ⅱ及びⅢが造成されている。東側の曲輪群Ⅱは５面の曲輪からなっており、部分的に土塁と竪堀を用いて防御を固めている。土塁１は長さ 12 m、高さ２mを測る。各曲輪はそれぞれ比高３～５mを測る切岸により隔てられている。南北に見られる竪堀は幅４～６m、長さ 10 ～ 20 mを測り、いっそう防御を固めている。西側の曲輪群Ⅲは６面の曲輪からなる。曲輪Ⅰから派生する３つの曲輪は階段状に造作されており、その西端には現在の登城道が取り付いている。もともとはこの地点が城内への入り口であったか。この３面の曲輪に見る切岸は傾斜角度が低く、防御面での機能に劣る。さらに北西方向に向かって曲輪が三面見られる。その幅は３～５m程と狭い。なお、主郭Ⅰの南には１辺約 20 m、高さ 0.5 mを測る方形段２が取り付いている。

文献・伝承　『阿哲郡誌』には秋庭三郎重信の弟、四郎重光が在城したことを記すが、これを裏付ける史料を欠く。城は単郭式となる構造と、不完全な曲輪造成から見て、古式の山城であるか。（和田）



第 17 図　万石城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

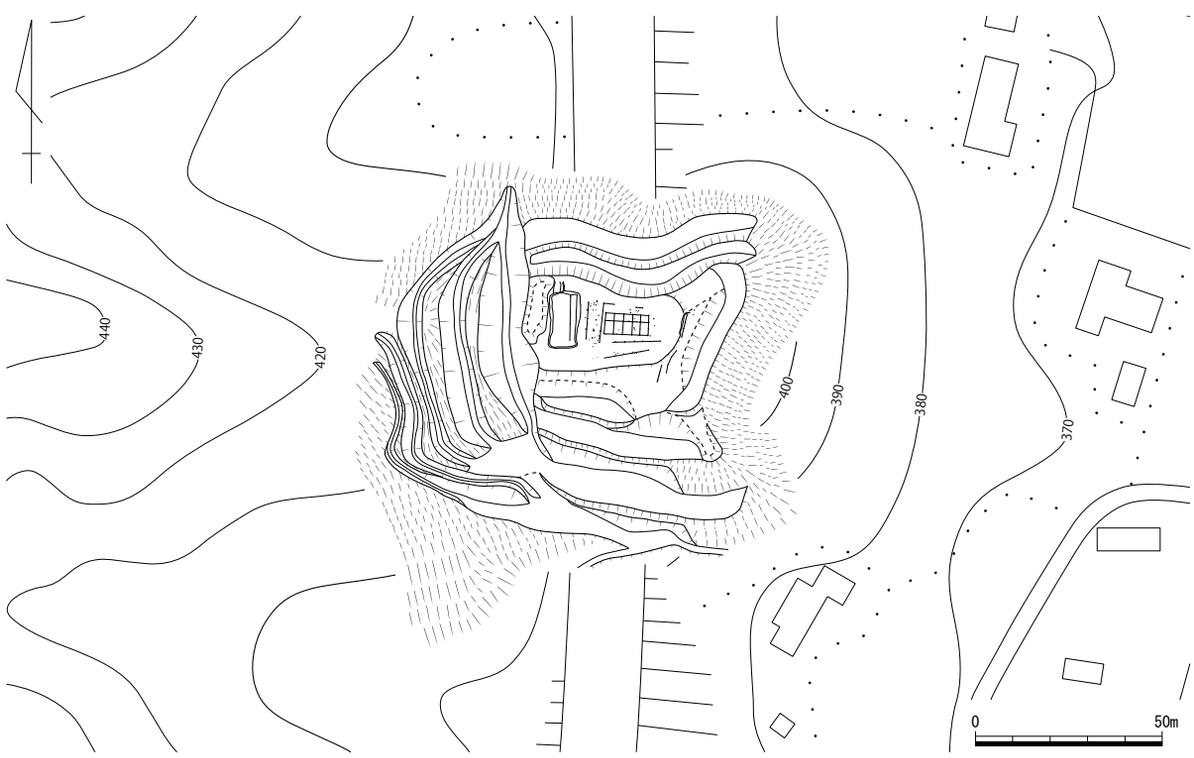
16　土井（どい）城跡　　新見市哲西町矢田　　地図８右

立地　南から北へ流れる神代川の西岸、東へ向かって突き出した丘陵の先端頂部、標高 410 mに立地する。東に平地部を見渡し、南約 1 km に豆木城跡、北東約 1.4km に万石城跡が位置する。

概要　当城では、昭和 50（1975）年に中国自動車道建設に伴い発掘調査が実施された。発掘調査報告書によると、南斜面に 4 面、東斜面に 1 面、北斜面に 1 面の平坦部（曲輪）が造成される。西側丘陵との境は５つの切り通しを設ける。平坦頂部（主郭）は南北 35 m、東西 12 mの規模で、中央東側に東西に長軸を取る北庇の５×１間の掘立柱建物、建物の南に東西方向の５間の柵列と多数の柱穴がある。建物の西側には南北約 15 m、東西約８mの長方形凹部遺構が存在し、さらに西側の切り通しとの境に土塁が設けられる。遺物は平坦頂部周辺から備前焼擂鉢、亀山焼甕、土師器椀・皿が出土した。

後に島崎　東氏が報告書と実地踏査に基づいて再検討した。主郭周辺部出土遺物より南北朝期～15 世紀後半の存続期間を想定した。主郭と丘陵との間は東から幅 13、10、７mの掘切とその間の土塁状障壁２面で切断する。主郭は長さ約 45 ×幅約 20 mの規模で、その中に建物が桁行５間×梁間３間、約 12 × 5.5 mの規模で１棟、さらに柵列が建物の南側に２列、西側に２列並ぶ。その西に平面約 16 × 14 m、深さ 0.5 ～ 1 mの平面長方形で断面箱形の掘り込みが存在し、半地下式竪穴系の建物が想定できる。さらに西側に南北長約 20 m、幅約４mの土塁状高まりがある。主郭北側斜面には幅３～６m、長さ約 60 mの曲輪２面、南側斜面には幅６～ 10 m、長さ 40 ～ 50 mの曲輪２面を造成する。現在西側路線外の尾根続きに古道状の溝４条が残されている。現状は発掘調査報告書の図面通りで、西から２条分の溝は尾根頂部に達せず、西方向へ外れて続く。東側路線外は自然地形を残す。

文献・伝承　文献 115 島崎論文で詳説されている。　（氏平）



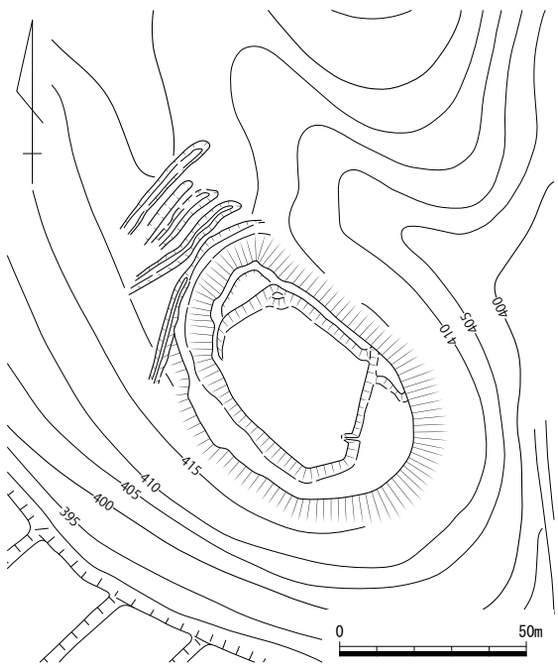
第 18 図　土井城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

17　白石（しらいし）城跡　　新見市哲西町畑木　　地図８右

立地　南北方向に流れる神代川の西側隣にあり、県境付近の山塊から南東方向へ延びる尾根先端に位置する。頂部の標高は約 430 mである。

概要　全長約 100 mの山城である。頂部にある主郭は、長さ約 50 m、幅約 40 mと長大である。背後と北東側辺に土塁が廻っている。特に背後側は高さが約４mもある。主郭の前面には帯曲輪が１面配され、曲輪の数は主郭とこの遺構の２つだけであるが、規模は大きく切岸も高くしっかりした造りである。主郭の背後は、５条にもおよぶ堀切によって守りを固めている。最も主郭よりの１条は、深さもあり比較的しっかりしているが、他の４条は非常に浅い。全体として畝状竪堀のような景観である。

文献・伝承　『古戦場備中府志』に書かれた「藤林城」が本城ではないかと指摘されている。(小林)



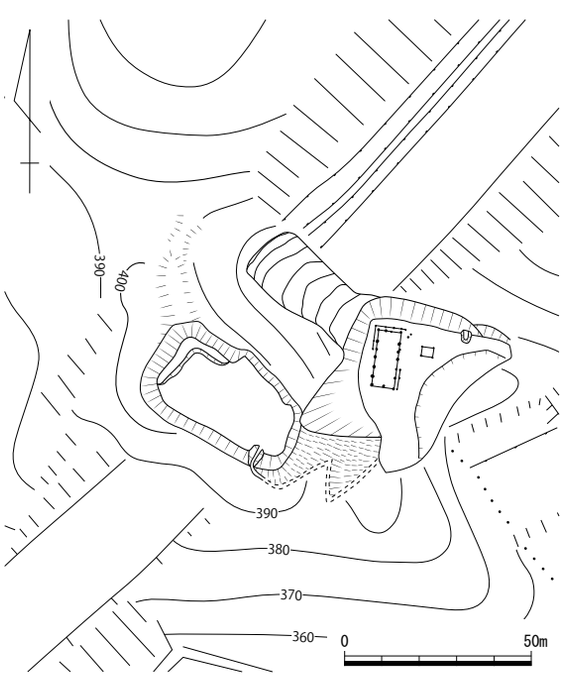
第 19 図　白石城跡縄張り図（1/2,000）
作図：島崎　東

18　藤木（ふじき）城跡　　新見市哲西町畑木　　地図８右

立地　南北方向に流れる神代川の西側隣にあり、山塊から南東方向へ延びる尾根先端に位置。

概要　1971 年に中国自動車道建設に伴い、城の全域と直下の谷部が合わせて発掘調査された。尾根筋に築かれ、長さ約 40 m、幅約 25 mの長方形を呈する曲輪が１つのみで構成される。主郭の背後には、Ｌ字形に土塁を配する。主郭東側直下にあたる谷部には、６×２間と１×１間の掘立柱建物が検出されている。この建物群の北東側に土塁があり、入口と考えられ、建物と含めて根小屋と評価されている。これら城と谷部遺構の時期は、同時と考えられている。

文献･伝承　『備中村鑑』には、「畑木村」にあり、吉良常陸守が在城したと書かれている。　(小林)



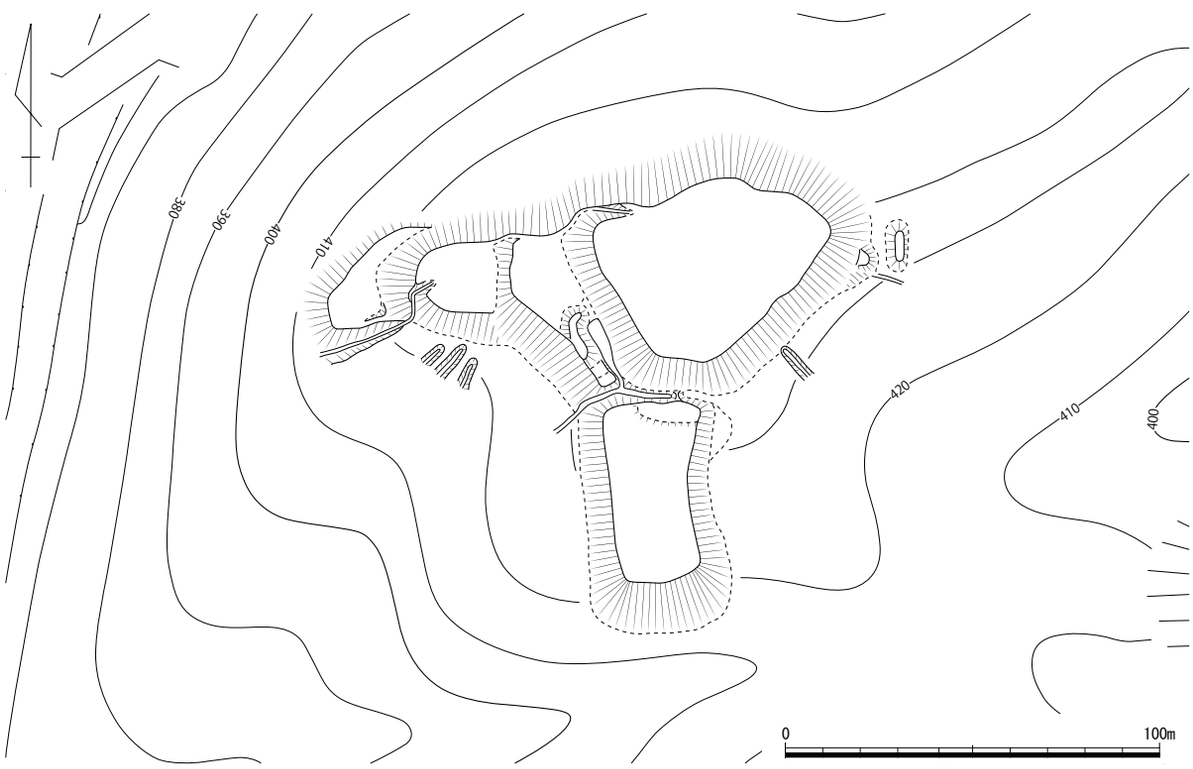
第 20 図　藤木城跡縄張り図（1/2,000）
作図：島崎　東

19　豆木（まねぎ）城跡　　新見市哲西町矢田　　地図８右

立地　北から流れる神代川を遮る形で東西から尾根が張り出す部分の東岸で、北西に向かって延びる標高 430 mの山塊端頂部に立地する。神代川対岸の北約 1 km には土井城跡、西約 700 mに藤木城跡が位置する。

概要　尾根頂部東西 180 m、南北 130 mの範囲に曲輪 5 面を設ける山城である。主郭を中心に、西の尾根続きに 3 面の曲輪、南側にも方形の曲輪を 1 面設ける。主郭は南北 50 m、東西 60 mに及ぶ地形に沿った三角形状の形状である。東側の尾根続きは高さ 8 mの切岸を設け、切岸から 4 m離れて高さ 1 m、長さ 14 m、幅 6 mの土塁を築き、その東側は自然地形となっている。主郭の西は、主郭から 5 mの切岸を経て東西 17 m、南北約 20 mの曲輪がある。この曲輪の南側、主郭との間は横堀状で、西側谷部との間には 1 mの高さの土塁を拵えている。この曲輪から下方への切岸は緩やかで、続く曲輪は東西が約 20 m、南北は 35 m程度の規模である。西側最後の曲輪は 8 mのやや急な切岸を経由し東西方向が 23 mほど、南北は尾根に沿って腰曲輪状に展開する。主郭南側は南北 50 m、東西 26 mの方形の曲輪がある。主郭との間は幅 4 mの掘切で画される。この曲輪の北側には南北 6 m、東西 16 m、高さ 0.5 ～ 1 mの高まりが存在する。また、主郭から西側曲輪群へは、主郭北端を経由して西から 2 番目の曲輪中央から南に折れ西へ向かう古道を確認した。主郭とその南側の掘切は、西へ向かって下がる古道と繋がっているようである。

文献・伝承　『古戦場備中府史』では城主を吉良丹後守とし、文脈からは天正頃の在城が考えられる。『備中村鑑』には松尾左馬允が在城したと書かれている。　（氏平）



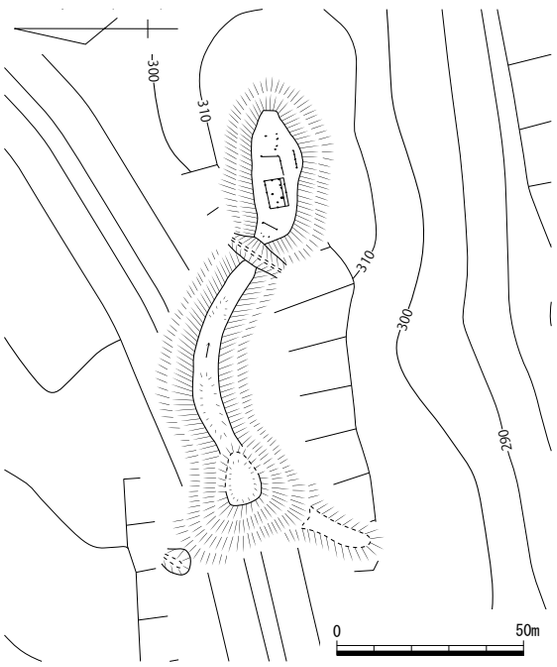
第 21 図　豆木城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

21　中田山城跡（なかだやま）　　新見市神郷下神代　　地図９左

立地　東西に流れる神代川の北側隣にあたる。標高約 550 m級の山塊から南東方向へ派生した尾根先端頂部に位置し、神代川流域を広く見渡せる。

概要　標高約 310 mの尾根頂部に長さ約 40 m、幅約 15 mを測る主郭を置く。中国自動車道建設に伴う発掘調査で、３×２間で縁が付随する掘立柱建物１棟と、柱穴列４列が検出されている。頂部の北西側には幅約６mの堀切が築かれ、長さ約 70 mあり「く」の字に曲がった細長い平坦地が続いている。この平坦地の鞍部方向にも堀切状の施設があり城域を画している。出土遺物から、室町時代の長い期間使用されたと報告されている。

文献・伝承　発掘調査時は「岩屋城」と呼んでいたが、『古戦場備中府史』には「中田山城」と書かれ、下神代村にあり、楢崎左京亮景宗が在城したとある。　（小林）



第 22 図　中田山城跡縄張り図（1/2,000）
作図：島崎　東

22　福本城跡（ふくもと）　　新見市西方　　地図９右

立地　本地より南西側にある山塊から派生した尾根の先端頂部にあたり、標高は約 250 mの箇所である。新見市西方の久原地区と為谷地区を流れる小川に挟まれた、谷筋の出口付近に位置する。

概要　頂部の主郭から、東西方向に伸びる尾根筋に曲輪を築いている。全長約 70 mの小さな山城である。主郭の規模は、長さ約 15 m、幅約 10 mで、南側辺の虎口状の窪みとその隣に土塁が築かれている。尾根筋側には、長さ約 30 mの細長い曲輪が１面置かれるが、この北側辺には、土塁状の施設が置かれている。これら曲輪の側面にあたる北側には腰曲輪状に平坦地が続く。尾根鞍部方向は長さ約 10 mの曲輪１面と、切り通しが続く。かつては堀切として機能したのではないか。

文献・伝承　故事来歴は不明であるが『新見市史』に書かれた福本城に該当するか。　（小林）

第 23 図　福本城跡縄張り図（1/2,000）

23　竹野（たけの）城跡　　新見市西方　　地図９右

立地　南北に流れる高梁川の西側隣にあり、本地より東側にある標高約 570 mの山塊から派生した尾根筋が川へぶつかる手前の先端頂部にあたる。頂部の標高は約 290 mである。本地は東側斜面が高梁川による浸食が激しく、西側斜面より急峻である。頂部からは新見市街地を広く見渡せる。

概要　南東方向へ延びる尾根筋上にある３つの頂部に曲輪群を配した山城である。すべてを合わせると、全長約 300 mに達する大型の城となる。特に南側の曲輪群が大きく、全長約 170 mの規模となる。頂部にある主郭は、直径約 15 mの円形でそれほど大きくはない。北西側に１つ曲輪を置き、主郭とこの曲輪を帯曲輪で囲んでいる。ここまでが長さ約 45 m、幅約 30 mの規模で、本城の中核をなす施設であったと考えている。周囲は高さ約 10 mの切岸によって守られ、背後は堀切によって画している。この中核の曲輪群から尾根先端部分に向けて、さらに曲輪が５面ほど連なっている。この部分は帯曲輪や腰曲輪状のものが多く、側面からの攻撃を想定していたと考えられる。上から２面目の曲輪が最も大きく、東西両斜面に曲輪が廻っているが、他はどちらかというと西側斜面寄りに配される。これは先述したとおり、東側斜面の直下に高梁川が流れていて、その浸食によって急峻な地形となっており、逆に西側はやや緩やかな斜面のため腰曲輪を複数配し守りを厚くしたものと思われる。また上から３面目と４面目には土井古墳群が残り、古墳を取り込んで築城したことが窺える。

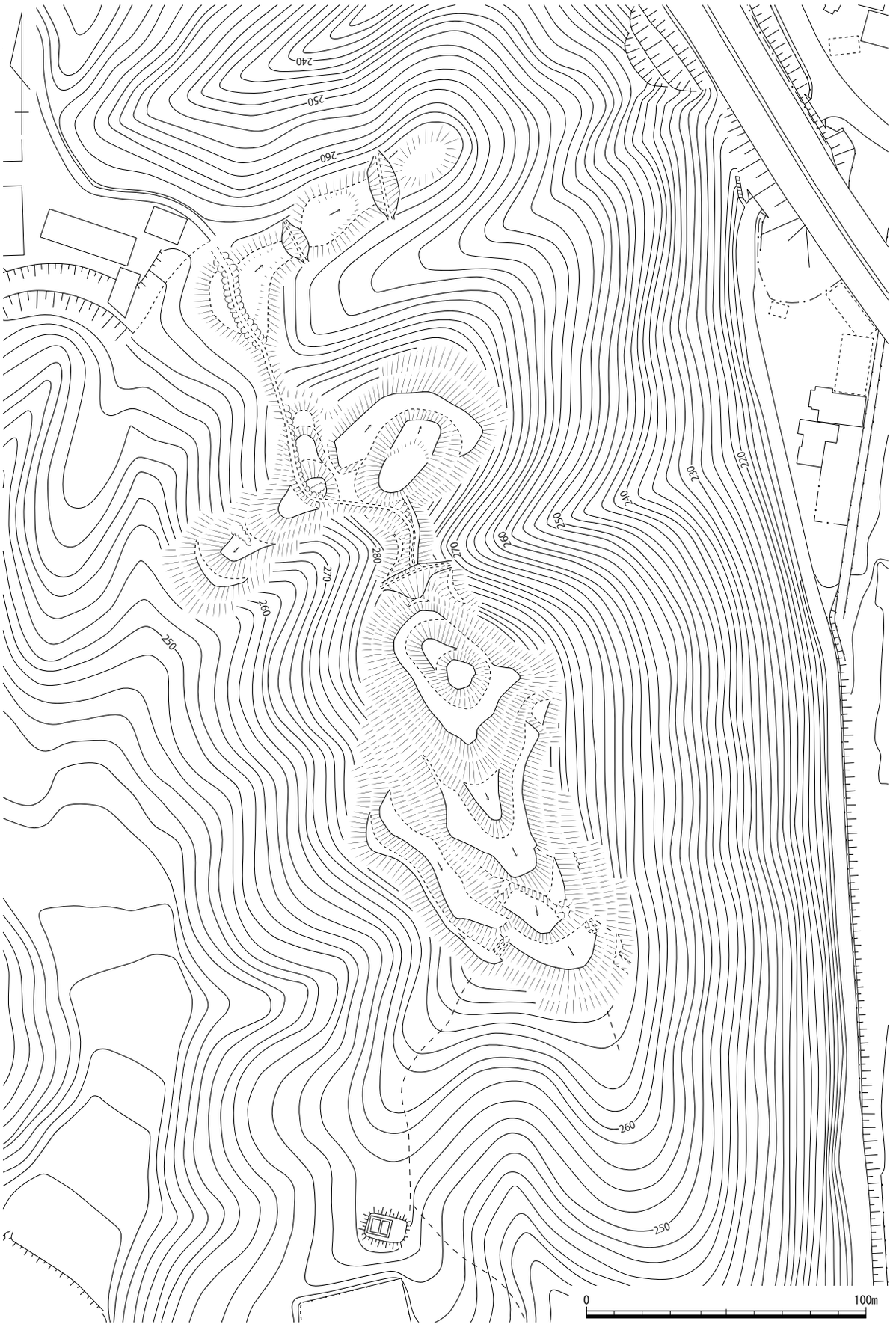
中央に位置する曲輪群は、全長約 140 mの規模である。北東方向から南西方向へ伸びる尾根筋に遺構を築いており、南側曲輪群と直交するような形である。頂部の曲輪は長さ約 30 m、幅約 20 mの規模で、比較的大きい。周囲は高さ約５mの切岸によって守る。この頂部の北東側から西側にかけて長さ約 15 mの腰曲輪を配し、この２面がこの曲輪群の中核となる。この部分から南西方向の細い尾根筋にも、曲輪を３面築いている。さらに北側にある尾根筋の曲輪群は、頂部を自然地形のまま残し、その両脇を掘切によって画している。城の一部として機能していたのであろう。

当城は規模の上でも大型になり、また新見荘の中心であった西方地区に築かれた山城である。宮田山城跡・楪城跡・朝倉城跡とともに、新見盆地の北側を守る中核的な山城であったと考える。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「竹野々城」と書かれ、哲多郡井村に位置するとある。城主は三村左介元盛であったとされる。備中兵乱時には、楪城の前衛としての位置付けであったが、真っ先に落城したと言われる。　（小林）

写真 11　遠景（南から）

写真 12　主郭（左側）と腰曲輪（北西から）

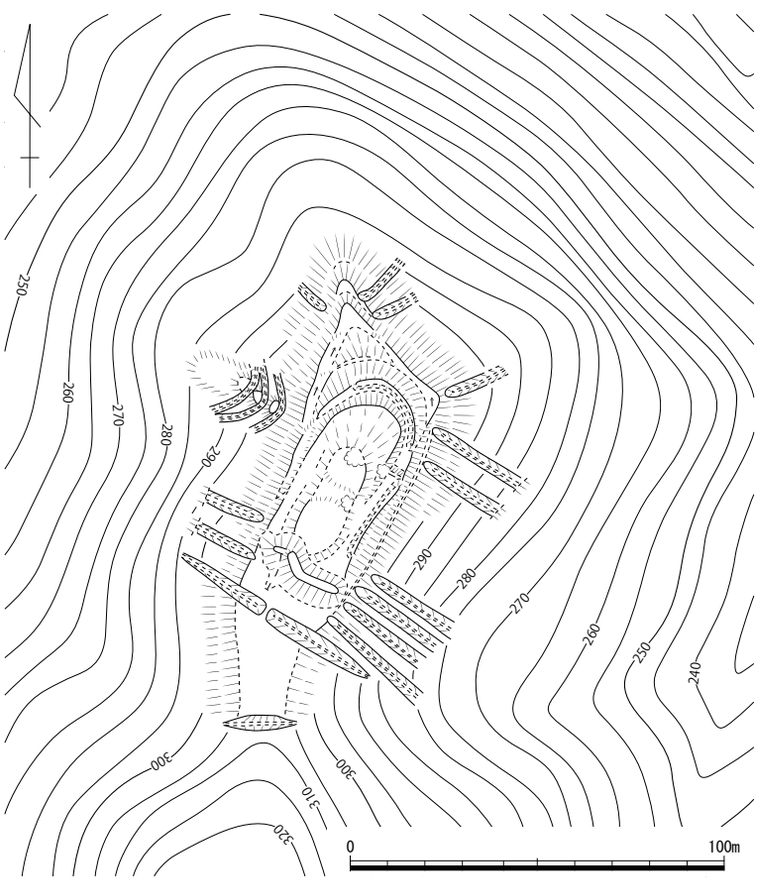


第 24 図　竹野城跡縄張り図（1/2,000）

26　宮田山城跡（みやたやま）　　新見市西方　　地図９右

立地　新見市西方に所在する、標高 310 mの山塊端頂部に位置する。麓からの比高差は 90 mを超える。城の周囲は切り立った崖となっている。城からは新見荘中枢部を北に見据え、あわせて伯耆街道に対して南から突出している。さらに言えば高梁川からも 200 m程しか離れておらず、陸上、河川交通を一挙に抑えることのできる要衝と言える。なお、付近には宮田屋敷、あるいは宮田家高の屋敷という小字が残っており、これらとの関連が注目できる。

概要　城域は南北 120 m、東西 100 mを測る中規模山城である。城域最南部に深さ 1.5 m程の小規模な堀切を設けて、南へ続く山塊から隔絶する。さらに城域に近い位置に、もう一条堀切を掘削してる。この堀切は長さ 50 mを超え、稜線から城域を完全に切り離している。基本的な縄張りは単純で、城域の最高所に主郭を設ける単郭式の山城である。しかし、この城に設けられ防御施設群は極めて発達したものと言える。まず、主郭南西、及び南東側に総計７本の畝状竪堀が設けられている。この竪堀群は主郭最南部に向かうような指向性があるが、その主郭最南部には周囲からの比高約２mを測る土塁が設けられている。この土塁は中央付近で「く」の字形に折れを見せており、畝状竪堀の堀底を進んできた侵入者に対して、横矢を掛けることができるようになっている。主郭北東から北に掛けても総計６本の畝状竪堀群が掘削されている。主郭北には犬走りが巡っている。主郭北東の腰曲輪にはＣ字形の土塁を設けて、竪堀の底を進む侵入者を待ち受ける。さらに主郭西に続く稜線上には、Ｖ字形の堀切を３段に連ねて掘削している。以上のように、本城に見る縄張りは主郭に対して明確な求心性を保持している。主郭周囲の犬走りは竪堀や堀切を連接し、臨機応変に防御線を形成できたものと見られる。



第 25 図　宮田山城跡縄張り図（1/2,000）

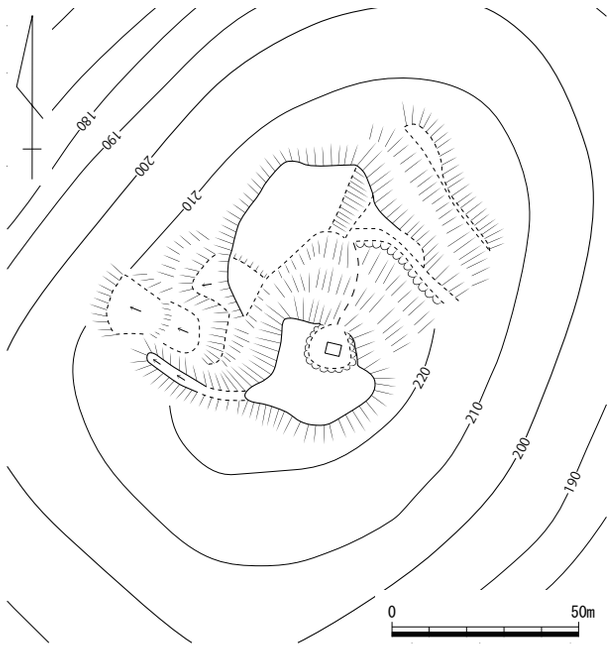
文献・伝承　永正 12（1515）年に勃発した新見荘西方での合戦に際して見える、宮田城が本城のことを指すか。しかし、本城の技巧的な縄張りは戦国時代でも後半の特徴を見せるものと言えよう。本城が新見荘を北に望む高梁川西岸にあることを思う時、天正 7 ～ 13（1579 ～ 85）年まで続いた毛利氏と宇喜多氏・羽柴（豊臣）氏との間での軍事的緊張下において改修されたのではなかろうか。（和田）

29　滝丸（たきまる）城跡　　新見市哲多町宮河内　　地図９右

立地　本郷川支流の宮河内川を北に望む、標高 380 mの独立丘陵頂部に立地する。

概要　城域は東西 80 m、南北 80 mの範囲である。現在、頂部にある神社の下まで、丘陵南西端から北東へ回る車道が作られている。神社の正面は集落のある北方向を向き、本来の参道は北側と考えられ、登城路を踏襲していた可能性が高い。頂部の曲輪は四方になだらかな斜面となる自然地形を残し、１辺 25 mの四角形状である。北側下方５mに 45 × 20 mの曲輪を１つ設け、その西側の谷部には 10 m四方の平坦面を２カ所作りだしている。谷部の南側は頂部から西へ延びる細長い尾根を土塁状に生かす形をとっている。

文献・伝承　『古戦場備中府史』などでは城主を赤松左馬介教祐と記し、嘉吉の乱で討ち死にした祐之の嫡男とする。　（氏平）



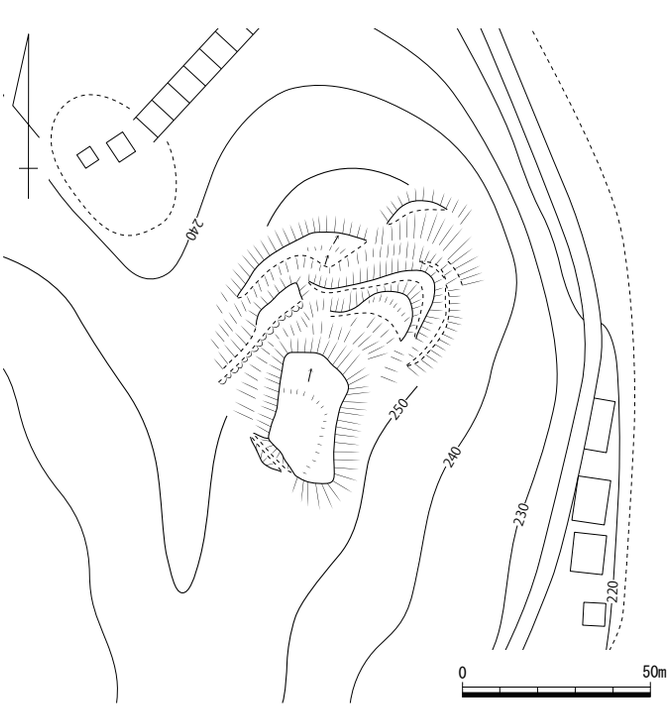
第 26 図　滝丸城跡縄張り図（1/2,000）

30　諏訪山（すわやま）城跡　　新見市哲多町成松　　地図９右

立地　北へ向かって流れる本郷川西岸で北へ延びる尾根先端部頂、標高 260 m に立地する。谷を１つ挟んで北西の尾根に諏訪山神社がある。

概要　城域は東西 60 m、南北 65 mの範囲である。頂部には南北 35 m、東西 17 mで方形の曲輪を構築している。その南西側の尾根は急激に細くなり、幅 15 m、深さ最大２mの堀切１条で切断している。北側から西側の斜面は、頂部の曲輪の５m下方から帯曲輪状に５面の曲輪を設けている。最上段の爪形の曲輪は東西 14 m、南北７mを測り、北東方向へ低くなっている。西側斜面は現代の山道のため、一部削平を受けている。

文献・伝承　故事来歴は不明。　（氏平）



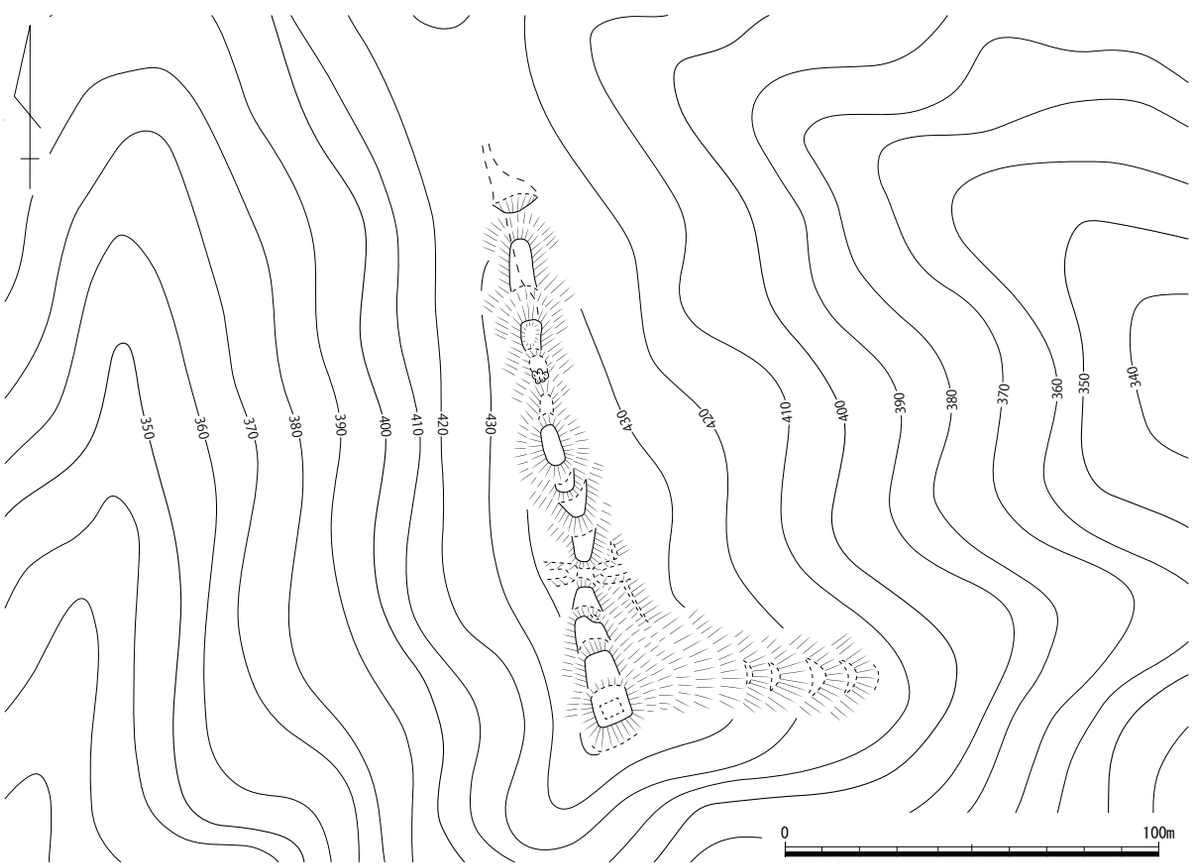
第 27 図　諏訪山城跡縄張り図（1/2,000）

31　猿滝（さるたき）城跡　　新見市哲多町本郷　　地図 9 右

立地　本地より北東側にある山塊から派生した尾根の先端頂部にあり、標高は約 450 mの箇所である。本地より南側眼下には東西方向に城谷川が流れ、当城からはその流域が広い範囲で見渡せる。

概要　当城のある場所は、北側の鞍部方向以外は急峻な地形に囲まれており、天然の要害であったことが窺える。遺構が築かれた箇所は、南北に細長い尾根筋上で、幅は 10 m強しかない。最頂部は最南端であり、ここが主郭であったと思われる。主郭から見て尾根先端方向はほぼ絶壁であり、遺構が乗るような地形ではない。そのため、尾根鞍部方向に向けて、曲輪を連郭状に配している。全長は約 150 mであり、中型規模である。頂部の主郭は、長さ約 20 m、幅約 10 mの規模で、現在神社が建てられている。そこから北側に向けて２面の曲輪が続き、尾根の凹んだ部分を堀切状に生かしている。さらに北側にある長さ約 15 mの頂部を基点として、南北両側に小さな曲輪が連なる。一番大きい曲輪でも長さ約 15 mで、大半が 10 mにも満たない。これらの曲輪群は、露岩など自然地形を生かしながら造られている。最北端の鞍部付近には、切岸状の施設で終わっているが、本来は堀切になるかもしれない。また南端にある主郭の周囲は特に急峻な地形であるが、唯一少しだけなだらかな東側方向の尾根筋に小さな曲輪を４つほど配して守りとしている。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「猿瀧城」と書かれており、哲多郡則安村に位置するとある。城主は横山右馬允であったとされる。　（小林）



第 28 図　猿滝城跡縄張り図（1/2,000）

33　鯉滝（こいたき）城跡　　新見市長屋　　地図９右

立地　北から流れてきた高梁川が東へ蛇行する突先に北に向かって張り出す、標高 220 mの山塊端頂部に立地する。比高差は 120 m程度であるが、尾根続きの南西側を除き、全周が急斜面に囲まれる天然の要害地であり、南西側以外からの登城は困難を極める。眺望は北に下長屋集落を望み、東側は高梁川を見下ろすがあまり広範囲ではない。直線距離で北約 1.5km には石蟹山城跡が、南東約 4 km に川崎城跡、4.5km に柏山城跡が位置する。

概要　全域は長さ 300 m、幅 30 mの規模を測る。北側尾根先端部の曲輪群と、その南側の最頂部曲輪から続く細長い曲輪群の２つの部分に分かれる。

北側尾根先端部は全長 75 mを測り、標高 200 m付近から細い尾根上に爪形の曲輪を７面段状に連ねている。これらは、最も広い曲輪で長さ８m、幅８mを測る小規模なものである。最も広い曲輪上にごく最近まで小社が建立されていた跡が残されている。

南側曲輪群は、北側尾根先端部曲輪群から 70 m南に尾根を登ったところから始まる。両曲輪群の間は痩せ尾根と岩盤が露出した自然地形であった。南側曲輪群の北端頂部には径 10 mの円形の曲輪があり、そこから南西の尾根上へ３m下がったところから長方形の曲輪を３面連ねている。最北の曲輪は長さ 30 m、最大幅８mで、２mの切岸下に長さ 15 m、幅７mの曲輪があり、さらに 1.5 m切岸を上がって最も南の曲輪は長さ 20 m、幅８mを測る。南側曲輪群の北西側は急斜面であるが、南東側は斜面がやや緩やかになるため腰曲輪と切岸を設けている。頂部の円形曲輪から東方向へ続く尾根上には、10 m下方に深さ２mの掘切を設けて切断している。

南側曲輪群から南西は尾根上を合計３条の堀切で切断している。北には落差８m、東西 30 m弱の大きな堀切、間に岩盤を掘り抜いた落差３m、東西 10 m強の堀切、岩盤が露出する痩せ尾根 30 mを経て最後に落差３m、東西

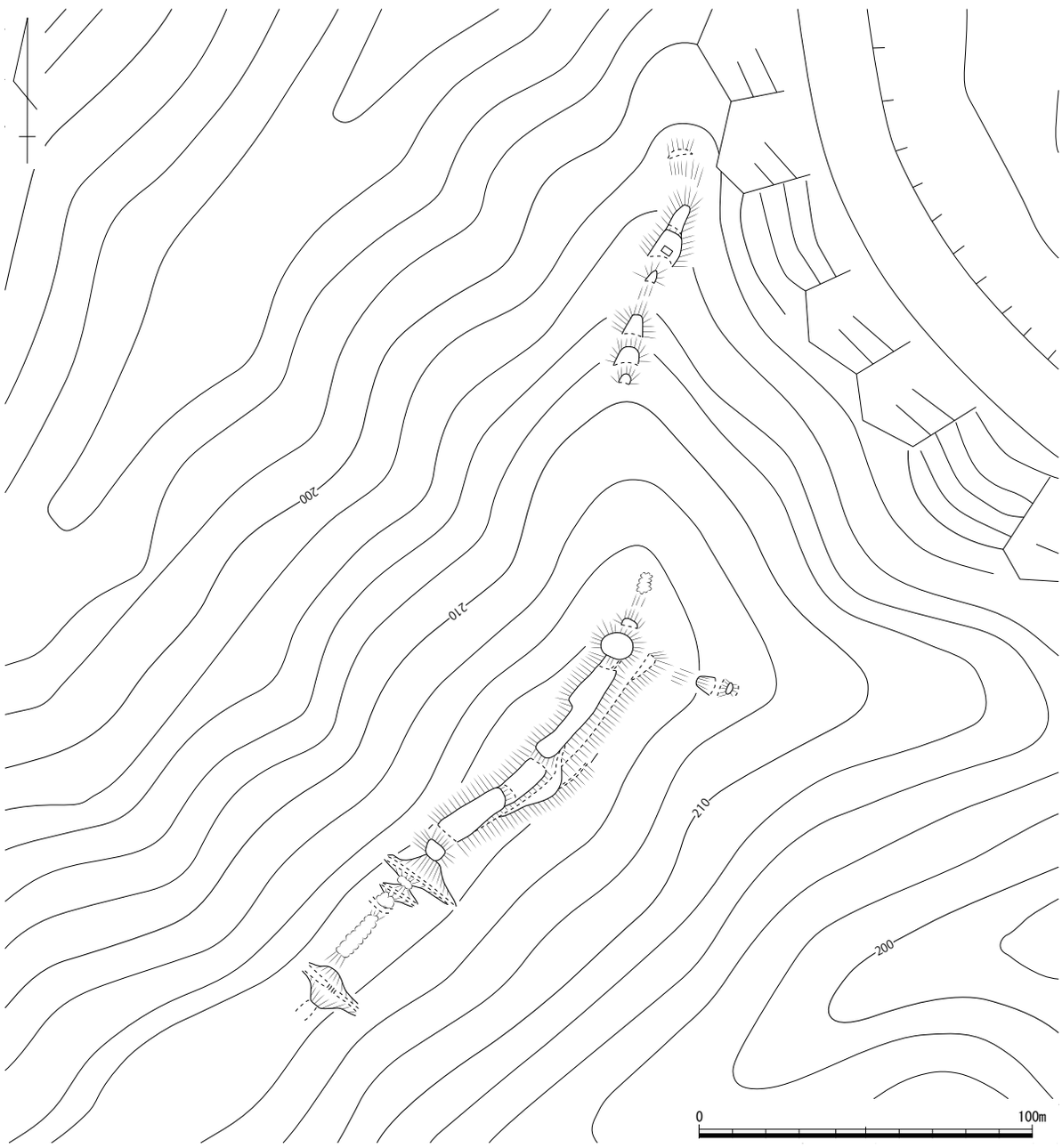
写真 13　遠景（北から）

写真 14　南から２番目の堀切（南東から）

20 mを測る堀切となる。最後の堀切より南西側尾根上約 120 m先までは、自然地形が続くことを確認した。延長線上に登城道があると思われたが、現状では認められない。

約 1 km 北の別地点にかつて鯉滝城跡とされた東西に長い独立丘陵があるが、この地点には丘陵頂部東端に社跡があったのみで、南斜面に若干地形の加工が見られるものの、頂部は岩盤混じりの自然地形が続いている。陣城として使用されていた可能性がある。

文献・伝承　『古戦場備中府史』では、城主を石蟹山城守、石蟹孫兵衛としている。『新見市史　通史編上』では石蟹山城守は三村一族と解釈されている。『新見市史　史料編』所収「新見市法曽　三上家系譜」では、元亀元（1570）年６月８日柏山城落城に伴い自害した城主の三上六郎重吉の弟の三上新之丞重行に「石蟹孫兵衛慰久元之猶子　後ニ於長屋村鯉滝城討死　行年一八」との記載がある。　（氏平）



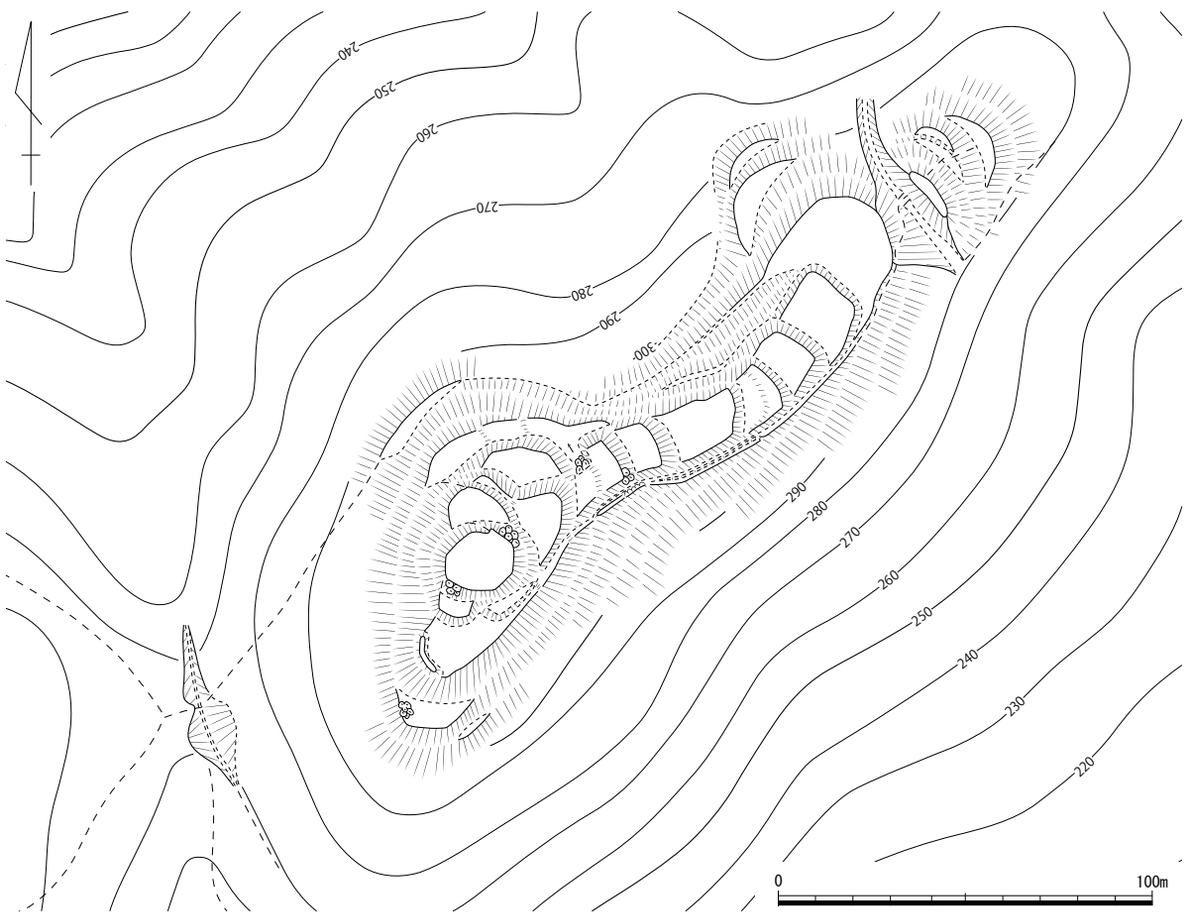
第 29 図　鯉滝城跡縄張り図（1/2,000）

34　石蟹山城跡（いしがやま）　　新見市石蟹・長屋　　地図９右

立地　高梁川と小坂部川の合流地点の西側隣が該当する。標高約 330 m級の山塊から北東側に延びる尾根頂部に位置する。高梁川の上・下流域の谷筋と小坂部川流域の谷筋が広く見渡せる。

概要　比較的広い尾根頂部を利用して曲輪を築いた、全長約 270 mの連郭式山城である。頂部にある主郭は、長さ約 20 m、幅約 15 mの規模で、周囲は露岩を利用した高さ約３mの切岸によって守られる。主郭から見て尾根先端方向に当たる北東側には、互い違いに３面の曲輪が置かれる。この曲輪群が当城の中核であり、周囲は高い切岸が築かれる。ここから尾根先端方向にかけて、大小７つの曲輪が屈曲しながら連なる。これら曲輪群は、規模が長さ 20 ～ 30 mと比較的大きく、平面形は方形を呈してしっかりした造りである。中核部分の直下の曲輪には露岩を削り出した虎口状の施設があり、主郭北側尾根筋に築かれた腰曲輪へと連結する。尾根先端部分には幅約 15 mの堀切と土塁が続き、入口方向の守りを固める。また各曲輪の南側は通路状に凹んだ施設によって繋がれ、一部石列が残る土塁で築いて主郭まで伸びる。主郭背後の南西側にも曲輪が数面と、堀切が築かれ城域を画する。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「石蟹山城」と書かれ、哲多郡石蟹村に位置したとある。城主は三村山城守元宣であったとされる。元々は石蟹氏の居城であったが、永禄 13（1570）年毛利氏と三村氏に攻められ落城し、以後三村氏が在城することになったようである。　（小林）



第 30 図　石蟹山城跡縄張り図（1/2,000）

写真 15　遠景（北西から）

写真 16　連郭式の曲輪（北東から）

写真 17　堀切（南東から）

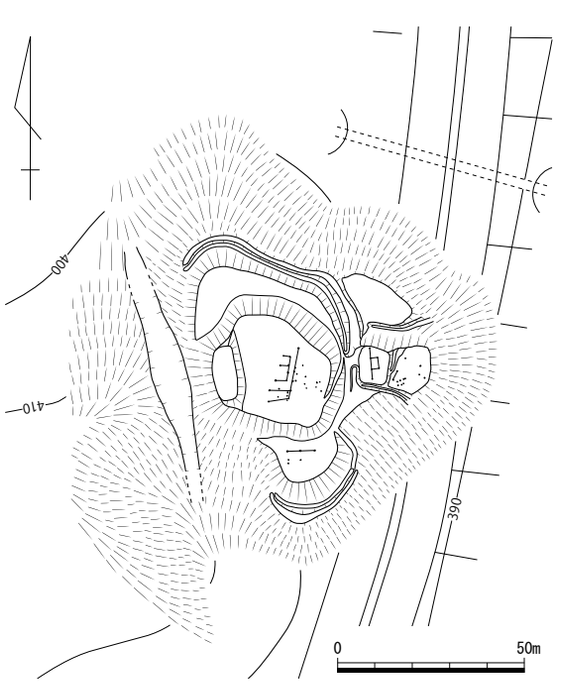
写真 18　石列（北東から）

36　岸本（きしもと）城跡　　新見市哲西町大竹　　地図 12 左

立地　神代川の南側であり、広島県との境付近にあたる。県境付近の山塊から北へ派生した尾根先端頂部に位置する。

概要　頂部に長さ約 25 m、幅約 30 mの主郭を置き、そこを取り巻くように数面の曲輪を築いていた山城である。全長は約 80 mと小さいが、主郭を取り巻く切り岸は約３mあり高く急峻である。主郭の左右は腰曲輪状の施設を配し、その縁辺には土塁を築いて守っている。主郭前面には小さな曲輪が３面あり、左右の腰曲輪の隙間を埋めるように存在している。主郭背後は谷部となっており、堀切状を呈している。

文献・伝承　『備中村鑑』では、「岸本山城」として大竹村にあり、吉岡質休が在城したと書かれている。中国道建設に伴い曲輪の大半が発掘され、南北朝期から室町時代前期の遺物が出土。（小林）



第 31 図　　岸本城跡縄張り図（1/2,000）
作図：島崎　東

37　西山（にしやま）城跡　　新見市哲西町八鳥　　＜市指定史跡＞　地図 12 右

立地　標高約 530 m級の山塊から西へ派生した隣の尾根頂部に位置する。頂部の標高は約 520 mである。当地は神代川の南東側にあり、広島県東城・高梁市備中町・新見市哲多などへ向かう谷筋の接点に位置する交通の要衝である。

概要　頂部の主郭は長さ約 40 m、幅約 30 mの規模で、背後に土塁を配している。主郭の南側にはもう一つの頂部があり、長さ約 50 m、幅約 20 mの規模になる長方形の曲輪である。頂部２つの曲輪は、曲輪と帯曲輪で連結しており、主郭を含めた曲輪数は７つである。当城の中核はこの７つの曲輪群であり、この箇所だけでも約 140 mの長さがある。各曲輪は長大で平坦をなしているなど精美に造られている。北側から西側へ廻る帯曲輪の先端部分には、虎口を想定している箇所がある。

この曲輪群を構成する尾根頂部からは、４つの尾根が派生するが、そのすべてに曲輪や堀切を配して守りを固めている。北側の尾根筋には、高い切岸に続き、幅４mと３mの堀切が２条配され、その先に曲輪１面が続く。北西側の尾根筋には、堀切が１条のみ配される。西側方向の尾根筋は２本あり、その内北側の尾根は曲輪１面と堀切２条、さらに４面の曲輪が続く。この尾根筋は最も遺構が多く、曲輪の規模も大きい。また頂部に存在した虎口に繋がる箇所であり、入口方向として意識していた可能性が高い。西側方向南側の尾根筋には、堀切１条、曲輪１面とその直下に堀切２条が続いている。また鞍部方向は、斜面上に３条の堀切を配置し、最深部に土橋状の遺構と堀切で城域を画している。

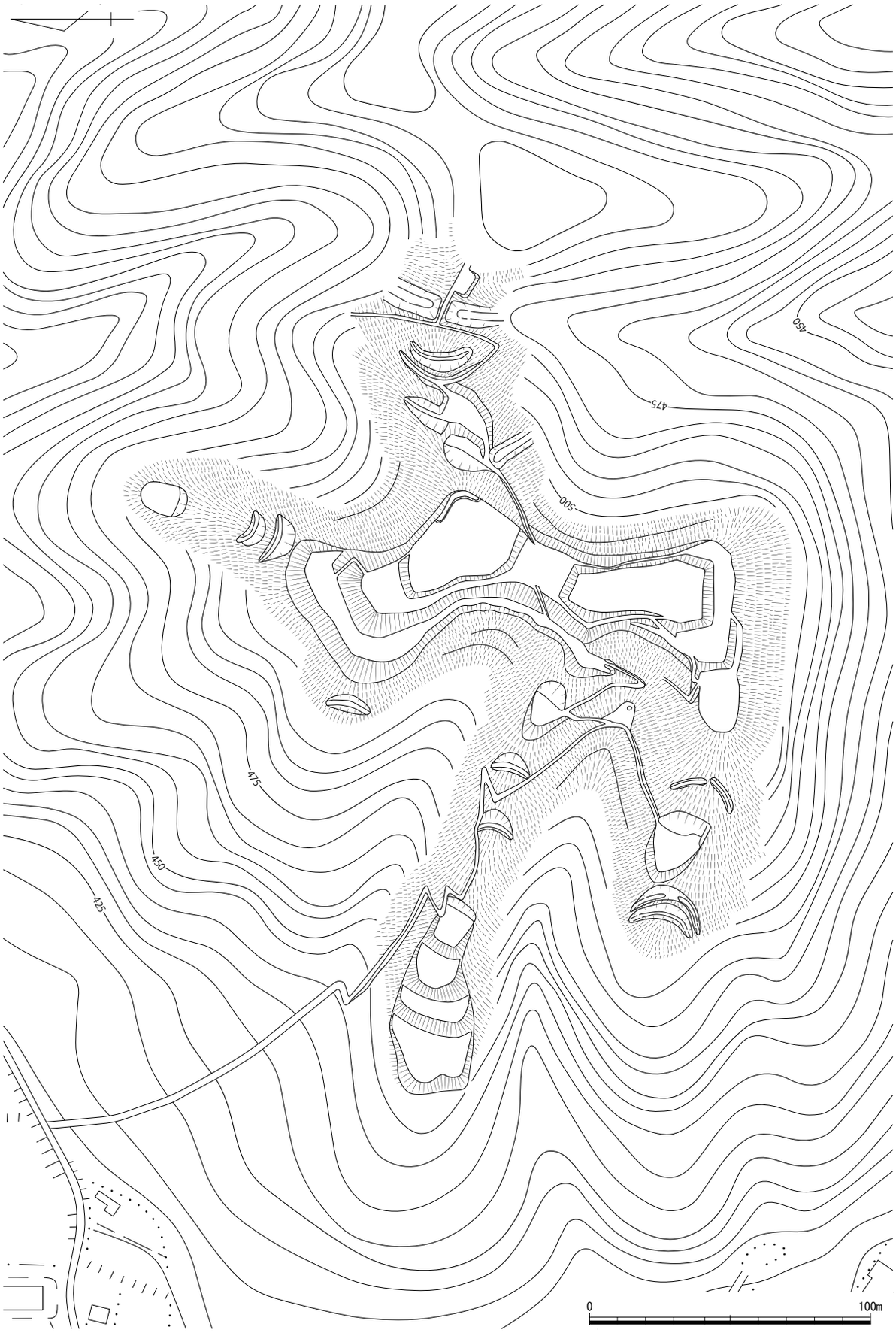
当城は、鞍部を含め主郭に繋がるすべての尾根筋に堀切を配する重厚な造りであったことが窺える。全長は約 270 mで、旧哲西町内では最も大規模な山城である。あらゆる谷筋の接点に遺構が築造されており、地域の中核をなす山城と言えよう。

文献・伝承　『備中村鑑』には、八鳥村にあり市川別當行房が在城したと書かれる。また天文年間に宮高盛が改修を行い、名称を「要害城」とした。同年間には大内氏や尼子氏の抗争が、当城を含んだ八鳥・二本木において２度の合戦があったとされる（文献 136）。　（小林）

文献 136：島崎東・竹原伸之「哲西の山城Ⅱ」『やたべ』No.43　哲西民俗研究会　2013 年

写真 19　遠景（北西から）

写真 20　頂部南側の曲輪（北から）



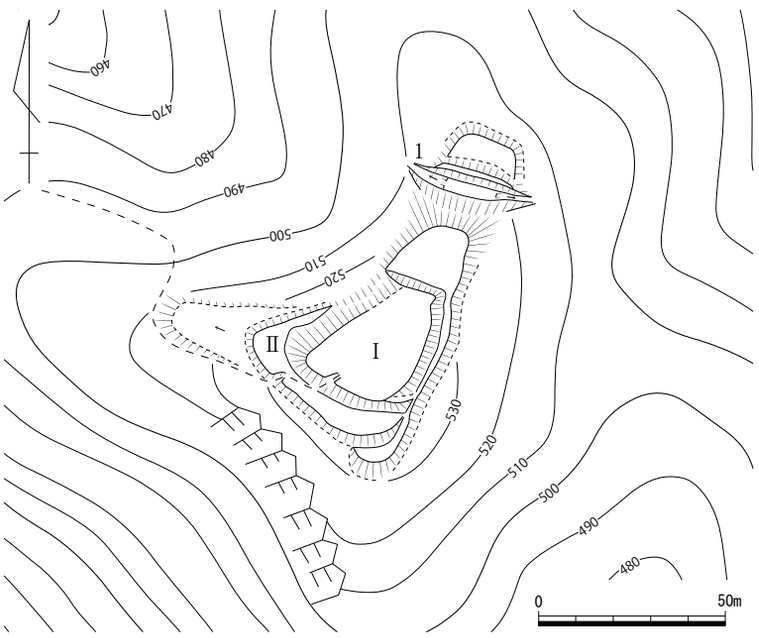
第 32 図　西山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

38　育野（いくの）古城跡　　新見市哲西町大野部　　地図 12 右

立地　備中国、備後国国境に近い哲西町大野部の山塊端頂部に位置する。大野部地域は成羽川の支流である大野部川沿いに展開する平地部と丘陵からなっている。また、大野部地域は近世期の備後街道が東西に横断する哲西地区中心部と、備中国成羽から南北に続く街道が接続する場所にあたっており、街道交通の要地にあると言える。

概要　城域は南北 90 m、東西 70 mを測る小規模な山城である。城へ上る城道は西麓にある育野神社からつづら折れとなるが、築城時の城道については不明と言わざるを得ない。城域の最頂部に主郭となる曲輪Ⅰを配する。曲輪Ⅰは東西南北とも最大幅 30 mを測る平面台形の曲輪である。曲輪面は平坦に造成されているが、西側の一部は、自然地形をそのまま利用しているものと見られた。曲輪Ⅰから北へは２面の曲輪が、東側には帯曲輪がそれぞれ造成されている。また、城域全体を画していたと思われる、堀切１が掘削され、北東方向から尾根上を進む敵兵に対して防御線をなす。堀切１は深さ６mを測る。曲輪Ⅰの南と西側にもそれぞれ２面の曲輪が続く。曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰの南から西側を取り巻く様に造成されている。曲輪Ⅰ、Ⅱとも、現在の山道の取り付き口が見られるが、これが築城当時には虎口であったか。曲輪Ⅱの西にもさらにもう１面曲輪が続くが、その先端は明確とは言えず、自然地形をほぼそのまま利用しているものと考えたい。以上のように、本城は曲輪Ⅰを中心とする求心的な縄張りを持つ。

写真 21　遠景（西から）



第 33 図　育野古城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

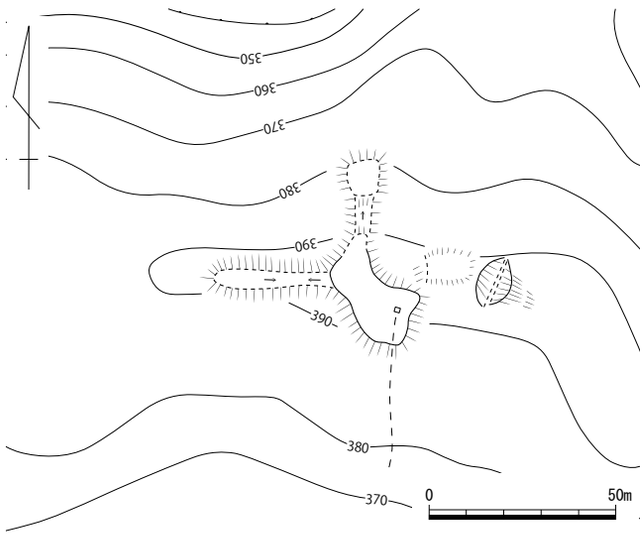
文献・伝承　『備中府志』、『備中集成誌』には育野之城として登場する。また、城主として斉藤長門守景忠の名を挙げている。これによると斉藤氏はもともと摂津国西成郡津村の領主であったとされ、性を津村氏と改めたという。その後、慶長年間までに監物忠尚が相続したことを記すが、育野城主を継承したかについては明らかではない。そのため、廃城時期については不明である。　（和田）

39　二条殿跡（にじょうでん）　　新見市哲西町大野部　　＜市指定史跡＞　地図 12 右

立地　北東から南西に流れる大野部川と東から西に流れる高野川との合流地点を南西に望む標高 390 mの丘陵端頂部に位置する。東へ高野川を遡ると約 1.2km で育野古城跡に達する。

概要　城域は東西 90 m、南北 50 mの範囲である。頂部は 20 × 30 mの不整形な平坦部で、加工は明確ではないが曲輪と認識した。尾根頂部から西の尾根上に南北 15 m、深さ 2 mの堀切が 1 条あり、頂部から北側へ延びる尾根上に 10 m四方の曲輪が 1 つある。頂部曲輪の東側は約 30 mほど平坦な尾根が続くが自然地形である。頂部東側の小社から南に向かう山道があり、下る途中の現代墓地の中に宝篋印塔・五輪塔群を確認した。この山道が登城道かもしれない。

文献・伝承　元弘 2（1332）年、後に足利義詮に重用される歌人二条為明が育野城主斉藤景宗を頼ってこの地に遷り住んだときの仮殿と伝えられる。　（氏平）



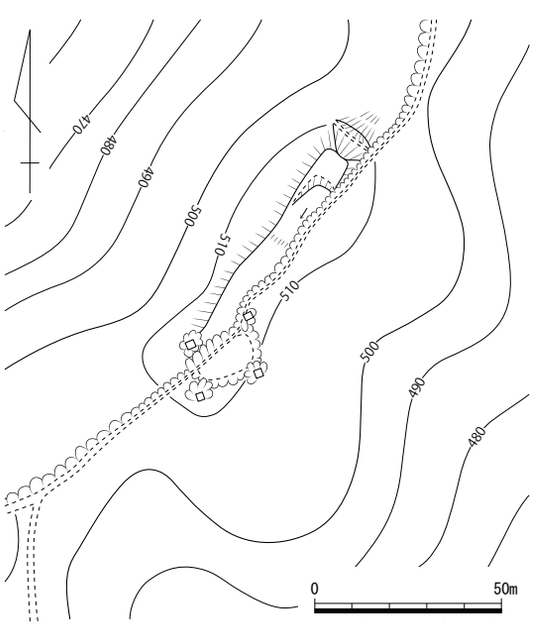
第 34 図　二条殿跡縄張り図（1/2,000）

40　鎌ヶ畝城跡（かまがうね）　　新見市哲多町蚊屋　　地図 13 左

立地　新見市哲多町蚊屋の山塊端頂部に位置する。城は高梁川水系本郷川の中流域にある、大野集落の南側入り口にあたる。

概要　城は北東端に深さ 3 mを測る堀切を設け、主郭周囲に切岸を設けた単純な構造である。山道による削平を受けているため、半壊している状況であり、その全容は不明ながら、細い尾根上に展開する南北 100 m以下の小形の城郭であろう。堀切近くに一段曲輪状の高まりがあり、堀切を超えて入城してきた侵入者への横矢掛けを意図したものか。ただ、その造成は完全ではなく、高まりの南には自然丘陵の名残と思われる傾斜が見られる。なお、分布調査の際に、南側にも堀切があった旨が記録されているが、南側は現状、鉄塔建設に伴い削平を受けており、その有無については確認できなかった。

文献・伝承　本城に関連する文献、伝承は知られない。　（和田）



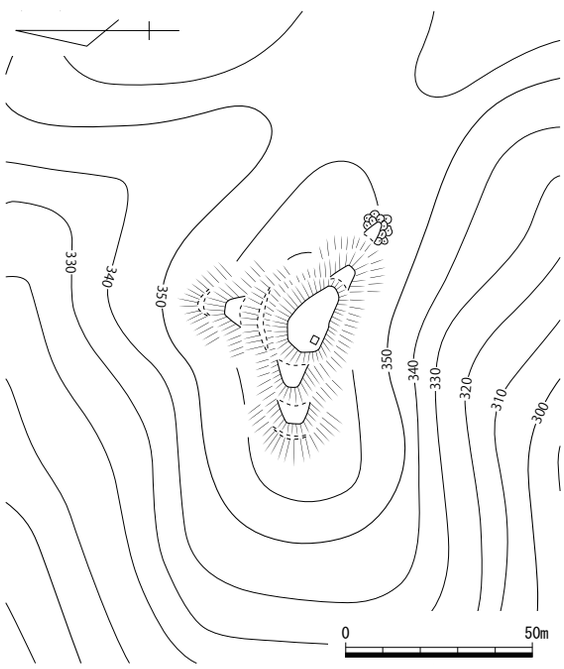
第 35 図　鎌ヶ畝城跡縄張り図（1/2,000）

43　井ノ畝（いのうね）城跡　　新見市哲多町老栄・哲多町成松　　地図 13 右

立地　本地より東側にある山塊から派生した尾根の先端頂部で南から北流する本郷川東隣にある。

概要　東西方向に細長い尾根筋に曲輪群を築いた全長約 60 mの小さな山城である。頂部に主郭を置き、その規模は長さ約 20 m、幅約 10 mを測る。ここには現在祠が建っている。主郭の両脇と北側の尾根筋の３方向に曲輪を連ねている。尾根先端方向の西側には長さ約５mの曲輪２つが築かれる。鞍部にあたる南東方向には、曲輪一つと切岸の直下に岩盤を加工した小さな曲輪が置かれる。その先には遺構が存在せず、堀切が築かれることもない。主郭北側尾根筋にも、小さな曲輪が数面築かれており、この方面が比較的緩やかな地形であったための配置であろう。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「井畝城」と書かれ、老榮村にあり稲富玄蕃在城とある。　（小林）



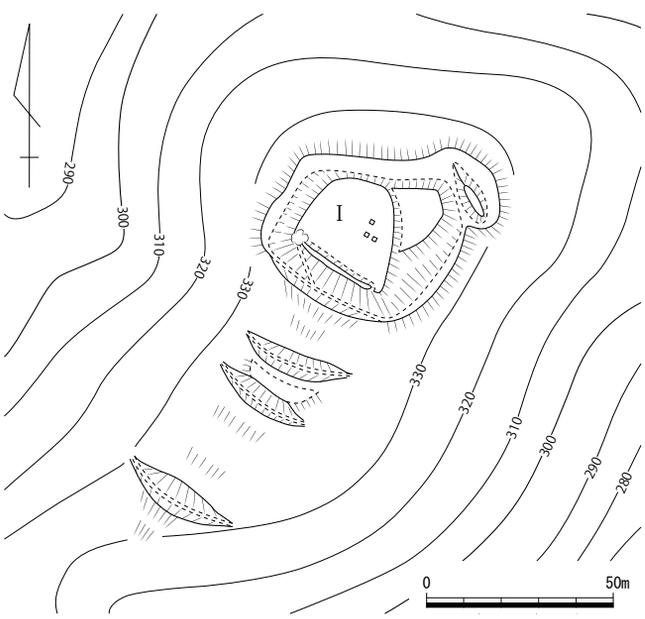
第 36 図　井ノ畝城跡縄張り図（1/2,000）

44　越山（こしやま）城跡　　新見市哲多町矢戸　　地図 13 右

立地　新見市哲多町矢戸の山塊端部に位置する。城は新見荘域の正田集落から、成羽川中流域へ抜ける間道に対して南から突出する。城はこうした間道を押さえる要衝であったものと見られる。

概要　城域は南北 130 m、東西 50 mを測る。城域の南側に三条の堀切を掘削し、尾根筋からの進入を遮る。さらに主郭となる曲輪Ⅰの南にも堀切を掘削し、併せて堀切の正面に高さ 0.5 mを測る土塁を設け防御線を形成している。曲輪Ⅰの東にもう一面曲輪を配し、その先は堀切により、城域北側を画している。曲輪Ⅰの周囲には腰曲輪、または犬走りが見られる。

文献・伝承　『備中府志』には元亀（1570 ～ 73）年中に逸見和泉守が城主であったとする。　（和田）



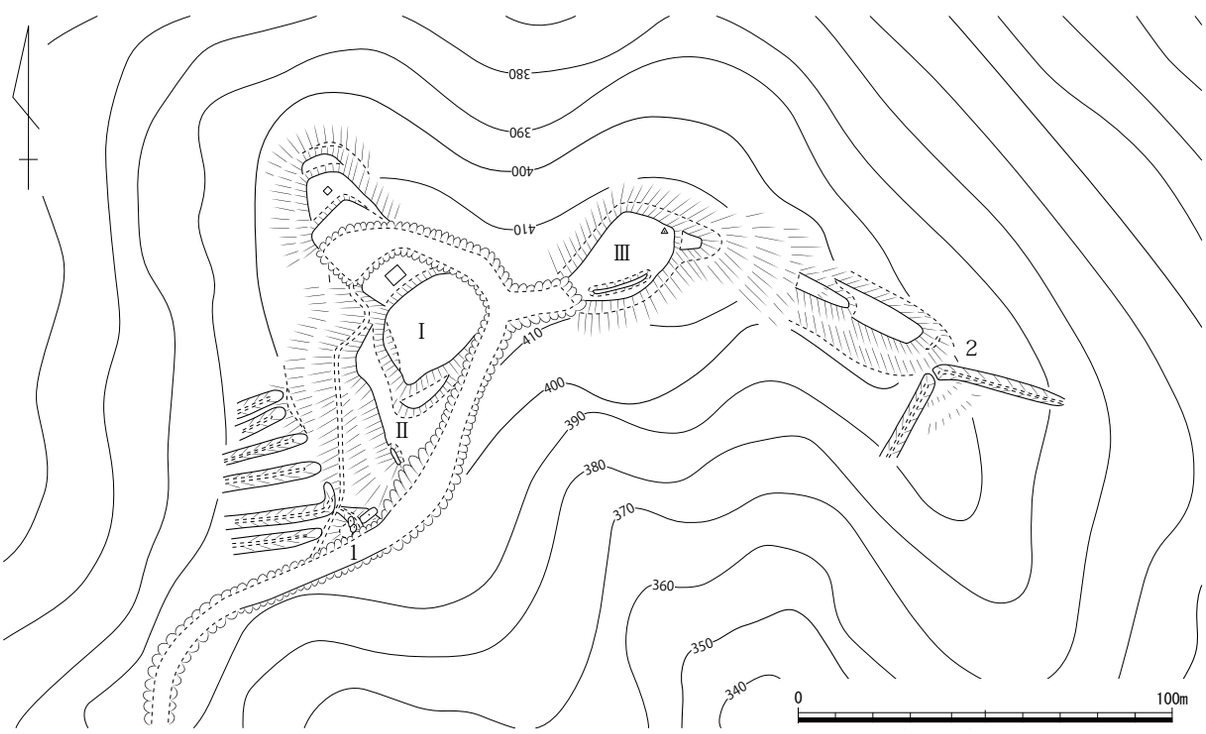
第 37 図　越山城跡縄張り図（1/2,000）

45　柏山城跡（かしわやま）　　新見市法曽　　地図 14 左

立地　新見市法曽の標高約 430 mを測る山頂に位置する。城は哲多郡、阿賀郡、上房郡の３郡郡境に近く、しかも高梁川沿いに南北に走る新見往来に対して西から突出する好位置にある。城からは街道城から北約３km の位置には現県道 50 号、すなわち備中・備後国の国境地帯である哲西地区へ抜ける間道の入り口が所在している。このように、城は備中国北部地域を東西南北に貫く陸路を抑えることができる、要衝にあたると言える。

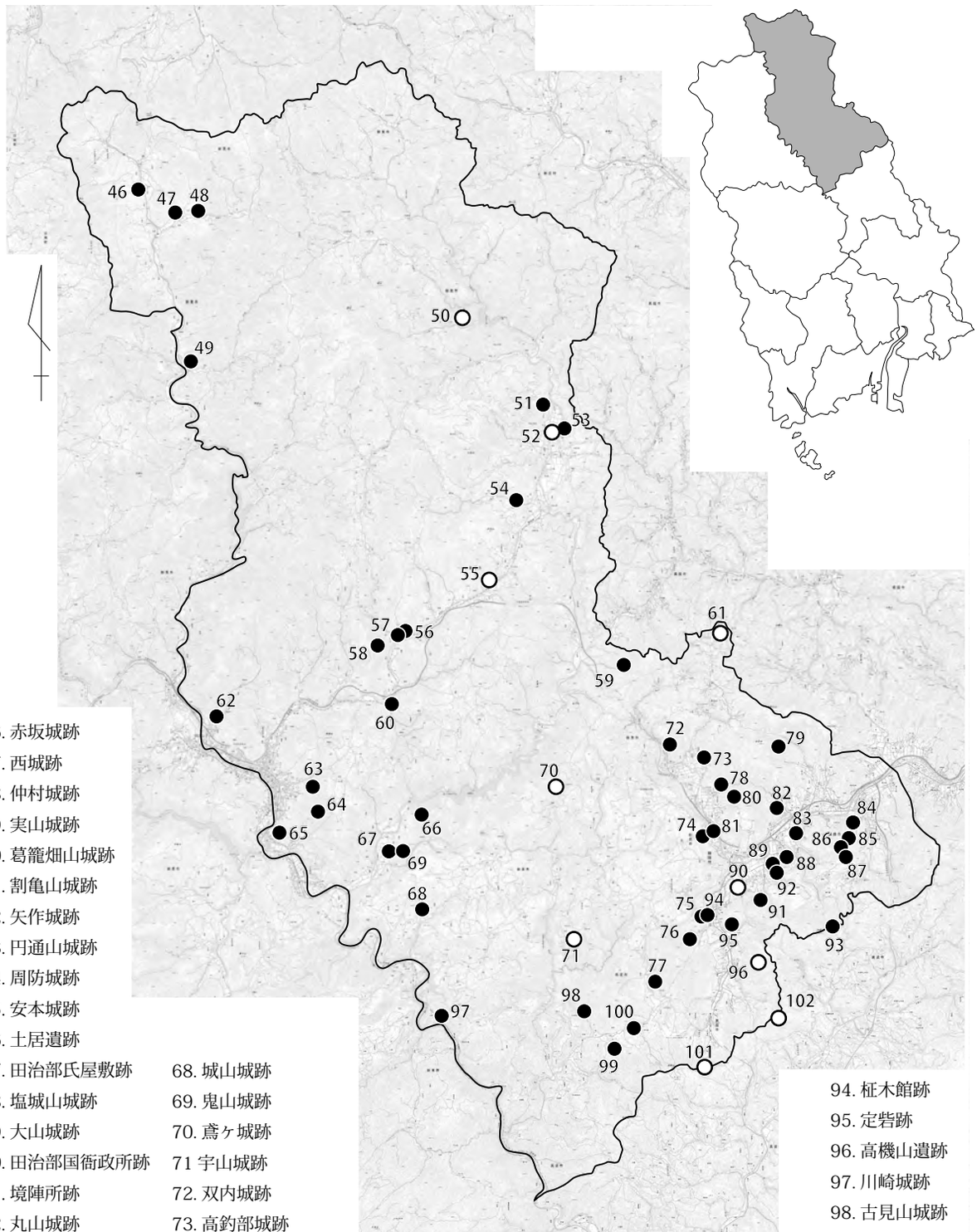
概要　城域は東西約 220 m、南北 110 mに渡って展開する。現在城内には愛宕神社があり、これに至る道路により城域西側は削平を受けている。しかしながら、その損壊は一部に留まり、城の全容を把握することは可能である。城は最高所に主郭となる曲輪Ⅰが設けられ、その周囲に曲輪を連ねる連郭式山城である。曲輪Ⅰは現状で南北 20 m、東西 30 mを測る。概ね平坦に造成されているが、その西側は一部自然地形を残す。主郭から北へは、少なくとも４面の曲輪が連なっている。曲輪Ⅰの南西から南に掛けては、腰曲輪である曲輪Ⅱが造成されている。曲輪Ⅱの南西隅に高さ約 0.5 mを測る土塁が遺存している。そしてこの腰曲輪と土塁正面には、６本の畝状竪堀群が掘削されており、侵入者に対して防御線をなす。さらに堀切１を掘削し、城域の西側を画す。曲輪Ⅰの東には曲輪Ⅲが配される。曲輪Ⅲは現状で南北 20 m、東西 30 mを測る。曲輪Ⅲの南側には高さ 0.5 mの土塁が築かれており､南側からの進入者に対して備えている。曲輪Ⅲから東へ尾根筋を下ると２面の曲輪が見られ、その東南には堀切２が掘削されている。堀切２は中央部が土橋状に掘り残されている。

文献・伝承　『備中府志』では三上刑部左衛門満之、『備中集成誌』では城主として三上淡路守満之の名を挙げる。　　（和田）



第 38 図　柏山城跡縄張り図（1/2,000）

第２節　阿賀郡



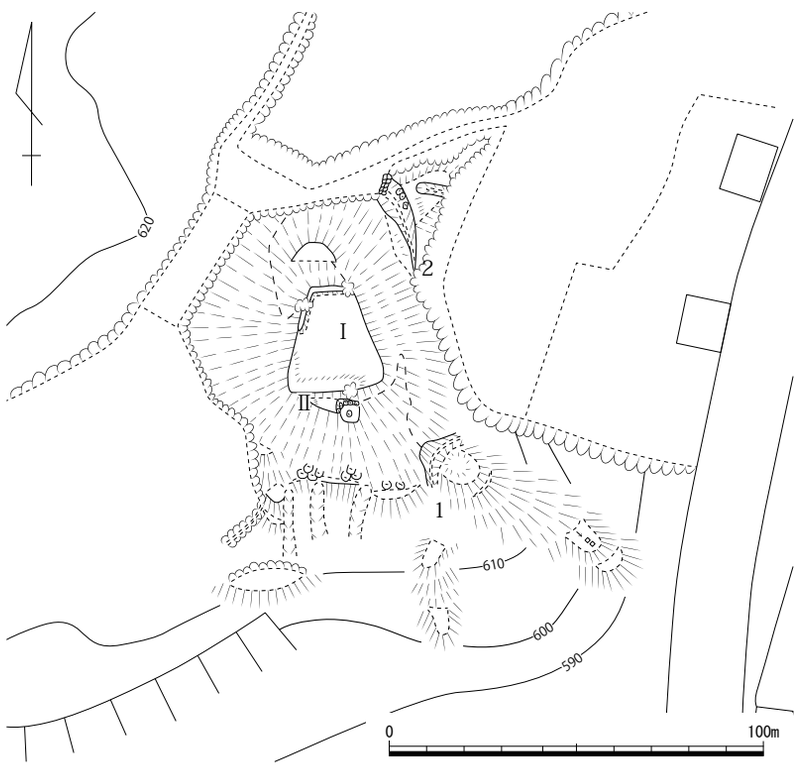
46. 赤坂城跡
47. 西城跡
48. 仲村城跡
49. 実山城跡
50. 葛籠畑山城跡
51. 割亀山城跡
52. 矢作城跡
53. 円通山城跡
54. 周防城跡
55. 安本城跡
56. 土居遺跡
57. 田治部氏屋敷跡
58. 塩城山城跡
59. 大山城跡
60. 田治部国衙政所跡
61. 境陣所跡
62. 丸山城跡
63. 小谷山城跡
64. 鳶ヶ巣城跡
65. 角尾城跡
66. 甲籠城跡
67. 山根城跡
68. 城山城跡
69. 鬼山城跡
70. 鳶ヶ城跡
71 宇山城跡
72. 双内城跡
73. 高釣部城跡
74. 植木城跡
75. 土井砦跡
76. 才田城跡
77. 加葉山城跡
78. 上合地砦跡
79. 山王城跡
80. 丸山城跡
81. 植木遺跡
82. 井尾城跡
83. 赤茂館跡
84. 片山城跡
85. 片山古城跡
86. 飯山城跡
87. 陣山砦跡
88. 福尾城跡
89. 山東塚城跡
90. 小殿城跡
91. 小松城跡
92. 荒木城跡
93. 四ッ畝城跡
94. 柾木館跡
95. 定砦跡
96. 高機山遺跡
97. 川崎城跡
98. 古見山城跡
99. 城山城跡
100. 津々城跡
101. 勝陣山遺跡
102. 陣ガ畝砦跡

第 39 図　阿賀郡城館位置図

46　赤坂（あかさか）城跡　　新見市千屋花見　　地図２左

立地　新見市千屋赤坂の山塊端部に位置する。城は高梁川の最上流域にあたり、城の東には伯耆街道が南北に走っている。城からは南、つまり赤坂集落方向への眺望に優れ、高梁川沿いの陸路を見下ろす要衝にあると言える。

概要　城はその最高所に東西、南北とも 25 mを測る平面台形の曲輪Ⅰを据える。この曲輪が主郭であり、その周囲は比高 10 mを測る切岸により周囲から完全に突出している。主郭の北端から西にかけては高さ約１mを測る土塁が巡る。主郭南側縁辺部にもわずかに高まりが認められ、往時は南側にも土塁が築かれていたものか。なお、主郭南西端に削平が認められたが、従来はこれが虎口であった可能性も想定できよう。主郭面の南に曲輪Ⅱが造成されている。この曲輪Ⅱの東側は一段低くなっており、その外周に沿って高さ 0.5 ～１mの石積みが築かれている。石積みは岩盤を取り込みつつ、高い場所では２段積みとなっている状況が見て取れた。この石積みはその形態から見て、主郭面への侵入を防ぐ足止めとしての機能を持っているものと考えたい。なお、西側の石積天端は曲輪の上面まで達しておらず、曲輪の流出を防ぐ土留めとしての機能も併せ持つものか。曲輪Ⅱからは山道が南東麓まで続くが、南東麓には堀切１が掘削されている。堀切１から南東へ向かっては、自然丘陵が続いているが、その先端に組合式の五輪塔を集積している場所があり、これが曲輪であった可能性がある。曲輪Ⅱの南側正面は露岩が多数認められ、自然地形かとも見られるが、わずかな切岸段、あるいは犬走りかとみられる小曲輪があり、竪堀状の地形の低まりが３か所で認められた。主郭北側にも爪形の曲輪が一面認められ、さらに北東麓に堀切２が掘削されている。堀切のすぐ東側に竪堀が一本認められた。このように本城は曲輪を中心に据えた単郭の山城であるが、厳しい切岸、石積みや堀切、竪堀を併せたその守りは堅い。主郭が土塁により囲繞されていることは既に述べたが、これも含めて少人数の籠城でも効果的に防御できるよう工夫が成されていると見るべきであろう。



第 40 図　赤坂城跡縄張り図（1/2,000）

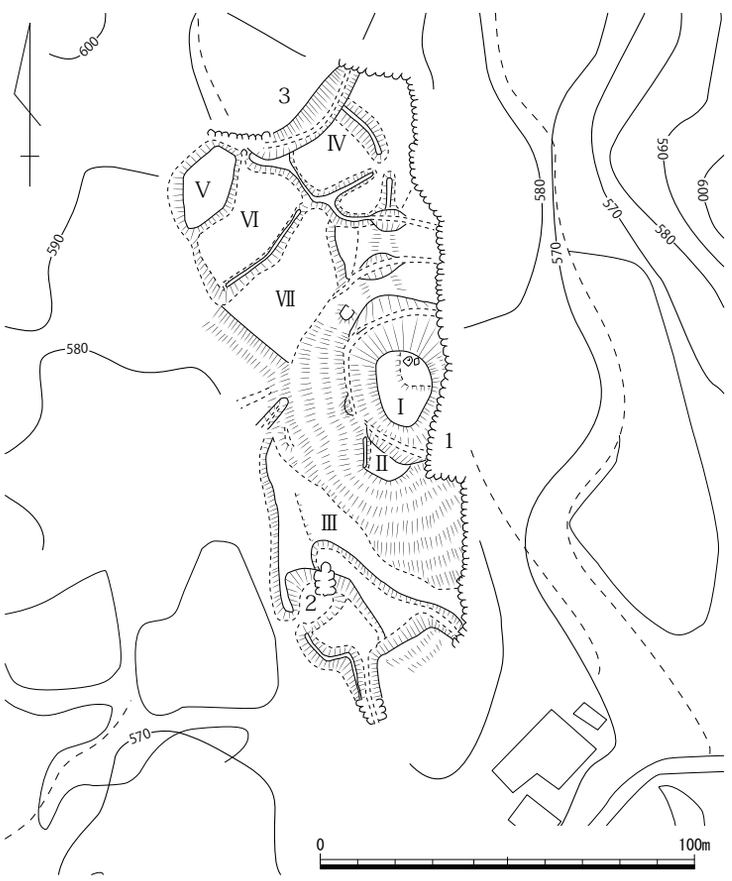
文献・伝承　『備中府志』には城主として尼子方の武将、間加部近江守の名が挙げられている。間加部氏についての詳細は知られないが、備中・伯耆国間の国境警備を担う国衆の一人と考えて良いであろう。　（和田）

47　西城跡（にし）　　新見市千屋井原　　地図２左

立地　伯耆・備中国の国境から南流する高梁川と、千屋井原地区を西流する井原川との合流点から700 m、井原川へ北から突き出す丘陵端部に位置する。周囲には法源寺や国司神社などの宗教施設が所在する。また、城のすぐ東を北に進む市道は鳥取県境へ抜ける国道 180 号の側道の一つであり、小田原集落を経て、千屋地区の中心街の北に位置する如意禅寺の麓で再び 180 号と合流している。この城はこれら宗教施設をつなぐ位置にあり、これらとの関連性を想起すべきであろう。

概要　城は農道により東半分を大きく改変されているため、その全容は不明であるが、現状南北 170 m、東西 70 mを測る。城の中央には周囲からの比高差５mを測る主郭Ⅰがある。その北東端は 30cm ほどの高まりがあり、形状から見て櫓台であった可能性が高い。主郭の南には堀切１を挟んで土塁を伴う曲輪Ⅱがある。さらに南には腰曲輪Ⅲがあり、その最南端には喰い違い虎口を伴う枡形状空間２があり、堅固な守備を見せる。さらに、この城の施設において特筆すべきは主郭北に土塁を築き階段状に配される曲輪群であろう。このうち、北東に位置する曲輪Ⅳは突出する土塁により仕切られており、東南隅に入り口が設けられている。一方北西からは階段状に三面の曲輪Ⅴ、Ⅵ、Ⅶが見られ、曲輪Ⅵには高さ 50cm の土塁が伴う。曲輪Ⅶは曲輪群の中で最も低い位置にありながら、面積的には最大でかつ平坦である。これら曲輪群の最奥には溝３があるが、これは後背の丘陵から城域を画する堀切と見られる。

写真 22　遠景（東から）



第 41 図　西城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　この城について伝わる記録はない。しかし、この城に施される虎口の形状や、複雑な累線を見せ展開する土塁など防御施設の構造などから、戦国後期に築かれた城郭である可能性が高い。　（和田）

48　仲村（なかむら）城跡　　新見市千屋井原　　地図２右

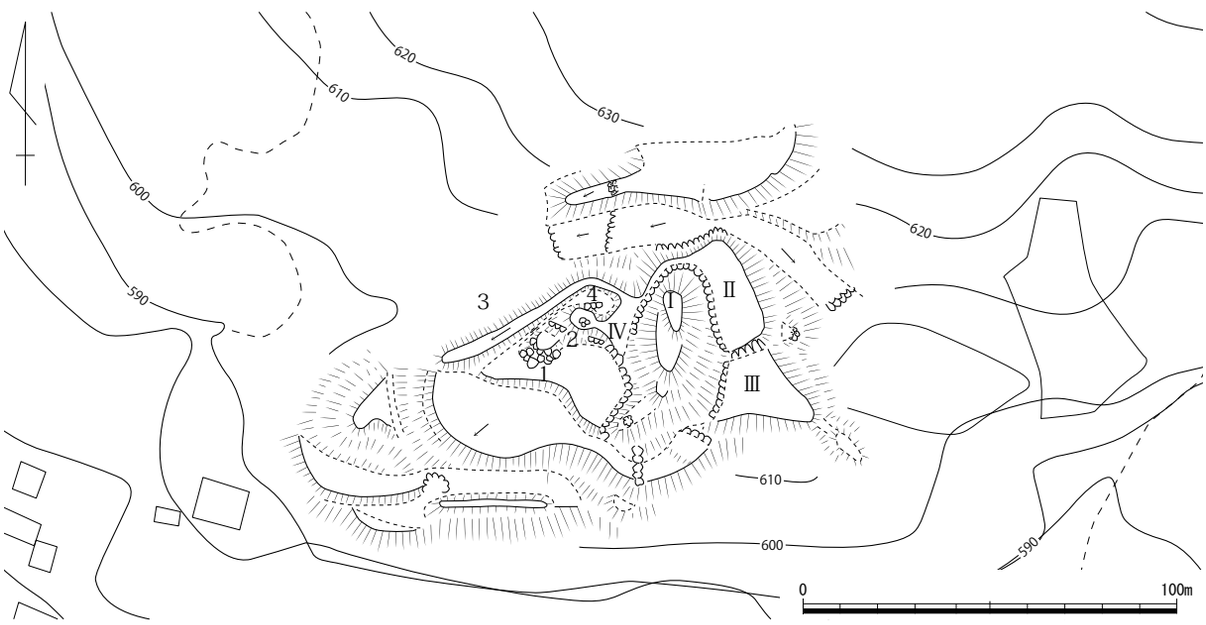
立地　伯耆国境に近い千屋井原地区を流れる井原川に北から突き出すように延びる山塊上に位置する。

概要　南北110ｍ、東西150ｍに及ぶ中規模の城である。城の中央には主郭と思われる曲輪Ⅰがあり、周囲からは10ｍ以上の比高差がある。その周囲には腰曲輪状にⅡ～Ⅳが巡るが、形態から見て後世に畑地として改変を受けているらしく、原形を留めてはいないものと判断された。腰曲輪周辺に残る集石１も加工の痕跡はなく、また大きさも不揃いなところから畑の土留めであったらしく、横矢状遺構２、土塁状遺構３からなる枡形状遺構４も、畑作地へ入る進入路として改変を受けているものと思われる。だが、城の後背は北からの山塊から堀切状に切り離されており、従来は城郭として利用されていた可能性が高い。

文献・伝承　城主や伝承について明らかなことはない。ただ、その立地から西城跡同様に、地元土豪層により築かれた城郭施設であった可能性がある。　（和田）

写真 23　集石（南から）

写真 24　枡形状遺構４（南から）



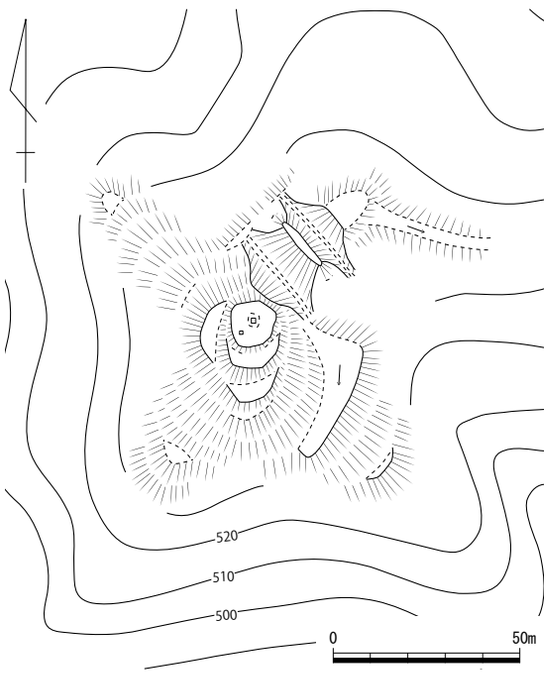
第 42 図　仲村城跡縄張り図（1/2,000）

49　実山城跡（さねやま）　　新見市千屋実　　地図２右

立地　高梁川と実谷川の合流地点の北側隣にある、標高約 550 mの尾根先端頂部に位置する。

概要　頂部にある主郭は、一辺が約 15 mとそれほど大きくはない。また主郭南側にある２面の曲輪も長さ約５mでそれほど大きくはない。西側にある曲輪も同様に規模は小さく、切岸もしっかりしていない。しかし主郭から東へ約 10 m降った帯曲輪は長さ約 15 m、幅約 35 mと大きい。主郭に取り付く４方向の尾根筋には、掘切と小さな曲輪を配している。特に北東側の尾根筋にある掘切は２条配され、深さ約８mと約５mの規模で大きい。間には土塁が配されるなどかなりの防御を誇っている。主郭の規模に対し２条配された掘切は見事な造りであり、背後の守りに重点を置いている。

文献・伝承　『備中村鑑』には實村にあり、太田四郎重治在城と書かれる。　（小林）



第 43 図　実山城跡縄張り図（1/2,000）

50　葛籠畑山城跡（つづらはたさん）　　新見市大佐上刑部　　地図３左

立地　大井野川とつづら畑川に挟まれた山塊から東へ派生した、標高約 710 mの尾根先端頂部。

概要　東西に細長い尾根筋を利用して、遺構を構成した山城である。頂部にある約 40 × 20 mの平坦地を主郭として利用する。東側端には加工痕が見られる。頂部からは広い範囲で周囲が見渡せる。この頂部から、西側隣に約 70 mのその長い平坦地を曲輪として利用したと考えられる。これら２つの曲輪を合わせた全長は約 110 mの小さな山城であったと考える。しかし南北両側の斜面は急峻な地形であり、当城の立地自体が天然の要害であったと思われる。

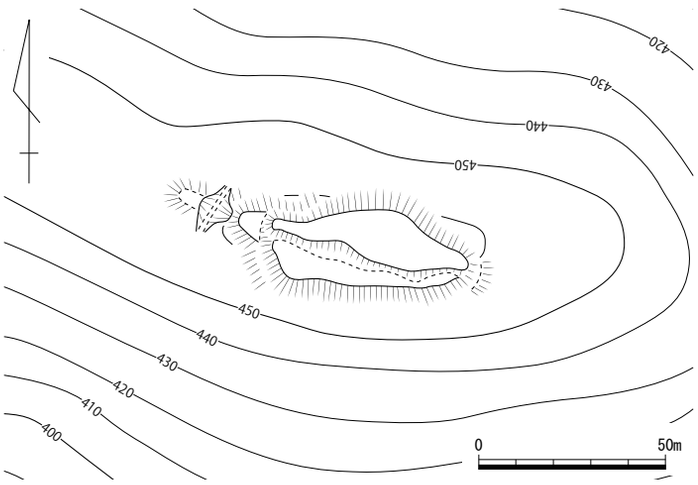
文献・伝承　『備中村鑑』には「山奥村」にあり、城主は山本藤内と書かれる。『阿哲郡誌』には、高田城主三浦定勝の支城と言われる。永禄年間に毛利氏に攻撃されて落城したとある。　（小林）

写真 25　遠景（南東から）

51　割亀山城跡（われがめさん）　　新見市大佐小阪部　　地図３右

立地　刑部の盆地北端で、南流する小坂部川の西岸、東へ突き出した標高 470 mの丘陵端頂部に立地。

概要　規模は東西 80 m、南北 30 mである。西端の鞍部は深さ３mの堀切１条で切り離しており、曲輪を１つ経た頂部には紡錘形で自然地形に沿った形の主郭が１つある。南側には、主郭から２m下で主郭とほぼ同じ長さの腰曲輪を１つ設けている。東側は斜面に沿って切岸のみで終わり、その先は自然地形だが急斜面となる。西端の堀切より西にも明瞭ではないが若干の平坦面がある。主郭面と腰曲輪が最大の平坦面であるが、加工は最低限で広く平坦面を確保することを目的にしているように見受けられる。



第 44 図　割亀山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『備中府史』に城主宮崎三郎兵衛で楢崎一族と記載がある。『新見市史　史料編』の「宮崎家由緒」では、宮崎晴氏が城を守るも天正二（1574）年毛利氏に攻められ息子の元時と共に自害したとある。　（氏平）

52　矢作城跡（やはぎ）　　新見市大佐永富　　地図６右

立地　北から南へ流れる小坂部川の西側畔に位置する。旧大佐町の町並みの北側に当たる。該当地は平地部分に存在する。この部分は伯耆方面に抜ける南北方向の道から、美作国勝山方面に抜ける道の分岐点にあたる。

概要　当地は現在宅地と畑地になっている。南側と西側は道路によって区画されており、その内包は宅地化されている。北側と東側の縁辺部は１段下っている。特に東側は約１mの段差をもっており、さらに東側を流れる小坂部川によってより一層の区画がもたれる。これら四周の段差により、当地は周辺より高い地形が形成されることとなる。その範囲は南北約 150 m、東西約 100 mとなり、この高まり内に館跡の存在が想定出来よう。

写真 26　遠景（北から）

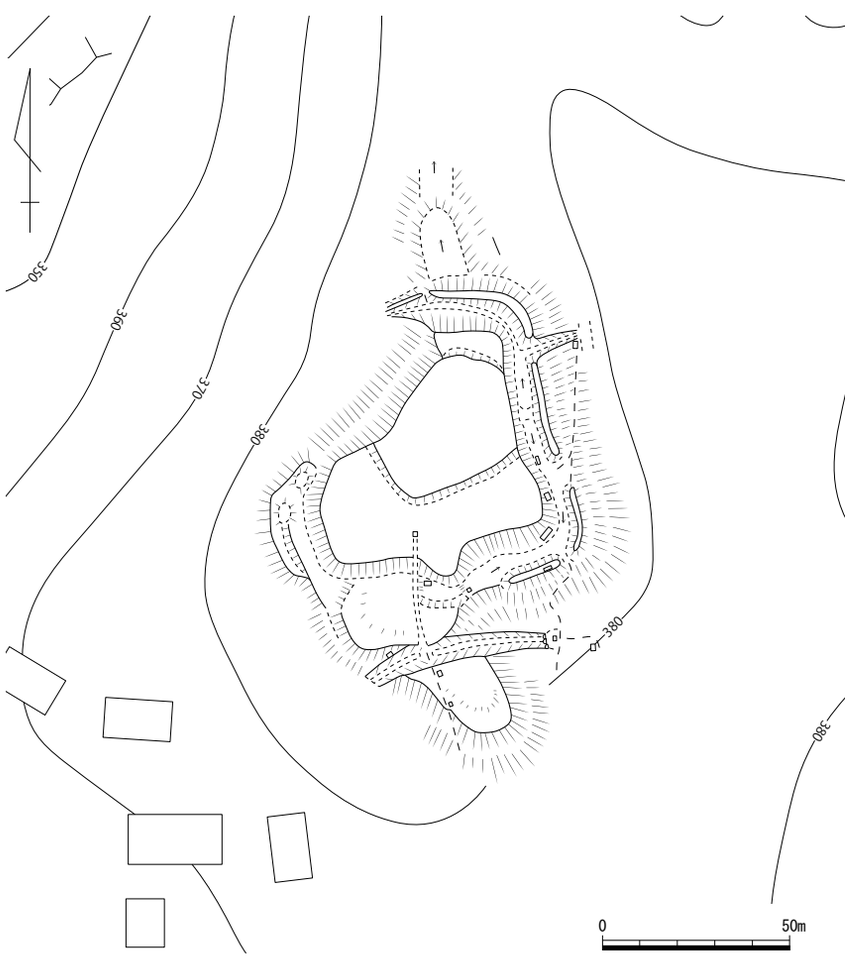
文献・伝承　『備中村鑑』には、「矢はぎが城」として長留村にあり、城主を法行六郎左衛門尉としている。　（小林）

53　円通山城跡（えんつうざん）　　新見市大佐永富　　地図３右

立地　小坂部川東岸で南へ張り出した標高 390 mの丘陵端頂部に立地する。眺望は西に良く、小坂部川と刑部の盆地を広く見渡せる。北西約 1 km に割亀山城跡、東 1.1km に美作国真嶋郡 27 岩明山城跡が位置する。比高差は 40 m程度で、比較的低い位置にある城館である。

概要　南北 140 m、東西 90 mの規模で、南へ張り出した丘陵頂部全体を城域としている。頂部に２つの大きな曲輪を置き、北側の尾根頂部から東側の側面に向けて土塁を伴う横堀を掘削し、南側は堀切１条で切断する。その一方、西側は曲輪を１面配するだけで目立った防御施設はない。

頂部は東西×南北 35 mを測る五角形状の主郭、その南側 1 m下に東西 60 m×南北最大 30 mの曲輪がある。この曲輪の南端中央には約７mを測る南への突出部があり、横矢が掛かるようになっている。主郭の北側 1 m下にも幅 20 mの曲輪がある。横堀は頂部曲輪群から北側で約８m、東から南で５mの深さがあり、外側には切れ目のある土塁４つを設ける。土塁の高さは最北部では２m、そこから南の土塁２つでは１m、最南端の土塁では 50cm を測る。土塁１つ目と２つ目の間には竪堀を確認したが、他の切れ目からは竪堀は認められない。横堀は主郭から南へ３段目の曲輪の途中、２段目の曲輪の突出部下まで続いている。曲輪の南側は東西 50 m、深さ最大 2.5 mの堀切で切断する。堀切の南側にも南北 20 mの曲輪が認められる。主郭から南へ３面目の曲輪の西側にある曲輪は形状が不明瞭で、そこから西は傾斜が緩やかになるため、この曲輪より西は後世の改変の可能性がある。なお、北から２面目の曲輪中央には小社があり南側から参道が続いているほか、横堀内に江戸後半以降の石仏が配置されている。



第 45 図　円通山城跡縄張り図（1/2,000）

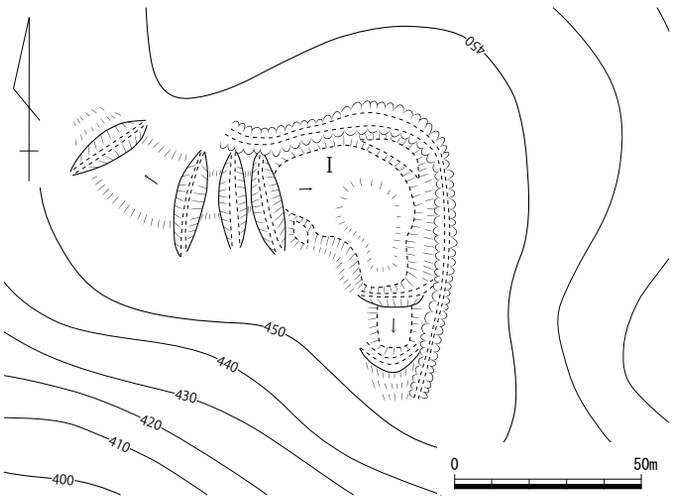
文献・伝承　『古戦場備中府志』では開基を綱嶋太郎維守とし、児島合戦で毛利家より恩賞を受けた庄右京進が城主とある。『備中村鑑』は「圓通山城」として城主を坂田美濃守と記す。　　（氏平）

54　周防城跡　　新見市大佐小南　　地図６左

立地　新見市大佐町小南に所在する、標高 460 mの山塊端頂に位置する。城域は小阪部集落の南入口近くに位置する。小阪部集落は美作国と備中国の国境地帯に近く、新見荘域と美作国とをつなぐ間道の結節地点にあたる。城はこうした街道を見下ろす要地にあると言えよう。

概要　城域は東西 90 m、南北 70 mを測る。城域中央に主郭Ⅰを据え、西と南の両方向に、堀切を設けて防御する。基本的には単郭の城であるが、主郭周囲には明確な切岸が見られない。主郭西には４条の堀切が掘削されている。主郭南側にも２条を設けている。いずれも深さ３m程を測る。

文献・伝承　『備中府志』には築城者として楢崎弾正忠基兼の名を挙げている。これによると弾正忠は本城を築城後、永禄年中に月田城主として転身したと言う。　（和田）



第 46 図　周防城跡縄張り図（1/2,000）

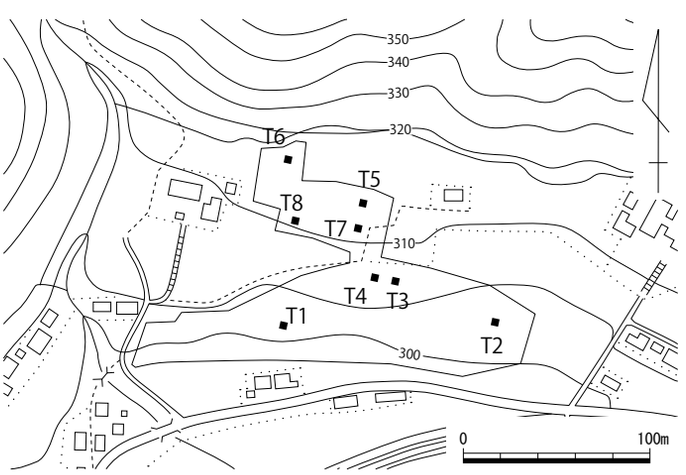
56　土居遺跡　　新見市上熊谷　　地図６左

立地　山塊から南の平地へ舌状に張り出した丘陵裾部の標高 310 ～ 300 mに位置する。

概要　現在は水田・畑地となっている。平成元年に圃場整備に伴う確認・発掘調査が実施され、遺物としては青磁碗、須恵器、備前焼、土師器椀・小皿があり、遺構ではＴ２付近に存在した中世後半～戦国期に該当する３×５間で北側庇の建物１棟などが検出された。南西 150 mに位置する田治部氏屋敷跡と関連する屋敷地であろう。

文献･伝承　文献 159　宇垣匡雅「[13] 上熊谷土居遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告 20』1990 年　（氏平）

写真 27　土居遺跡建物１（東から）



第 47 図　土居遺跡調査区配置図（1/4,000）

57　田治部氏屋敷跡（たじべしやしき）　　新見市上熊谷　　地図６左

立地　新見市上熊谷の土居集落に所在する。新見荘の置かれた新見市街地からは、主要地方道新見勝山線を熊谷川沿いに沿って遡ること約７km の位置にある。屋敷跡周辺は四方を山々に囲まれた谷底の平野部となっている。さらに屋敷跡の北方からは菅生川が、北東からは大畑川・西谷川が流れ、屋敷跡の南で熊谷川と合流している。さらに熊谷川沿いに進めば、西は新見盆地、東は大佐町から進んで美作国境へと至り、これらを結ぶ要衝にあると言える。なお、この屋敷跡の南西山塊端頂部には、屋敷跡に居住したとされる田治部氏の居城、塩城山城が所在する。

概要　現在、土塁、堀等の施設は一切残存していないが、南北 170 m、東西 100 mを測る長方形の地割と、「家ノ前」・「家ノ上」・「町屋敷」等の小字や、古井戸が遺存している。また、屋敷地の北東部分について、主要地方道新見勝山線改良工事に伴い、昭和 61（1986）年度に発掘調査が実施されている。この成果によると、検出された遺構は３つのグループに分けることができる。概ね 15 世紀中葉～ 16 世紀初頭（A グループ）、16 世紀中葉～ 17 世紀初頭（B グループ）、17 世紀末～ 19 世紀代（C グループ）の３時期に区分される。また、B グループの建物群と C グループの建物群は、その主軸方向が異なる。

文献・伝承　この屋敷地に居住したとされる田治部氏は田治部郷に拠点を置く国衆（国人）とされる。その初見は『太平記』に見える。その後は『東寺百合文書』に隣接する備中国新見荘への濫妨・横領等を行ったことが報告されている。明応２（1493）年に田治部弥次郎が新見荘を去り、その動向は一時不明となる。

『備中兵乱記』等の軍記物には天正２～３（1574～75）年の「備中兵乱」に際して毛利方として活動した、田（多）治部雅楽頭景春の存在が記される。景春は毛利方の攻勢により楪城を脱出した、三村元範を討ち取ったことで知られる。（和田）

第 48 図　田治部氏屋敷跡平面図（1/2,000）

58　塩城山（しおぎさん）城跡　　新見市上熊谷　　＜市指定史跡＞　地図６左

立地　大畑川と熊谷川の合流地点の西側隣にある標高約 590 mの塩城山の頂部に位置する。東側の麓に、県道の改良工事に伴い発掘調査を行った田治部氏屋敷跡が存在するなど、当地は新見市街地から旧大佐町へ向かう谷筋の要衝に位置している。

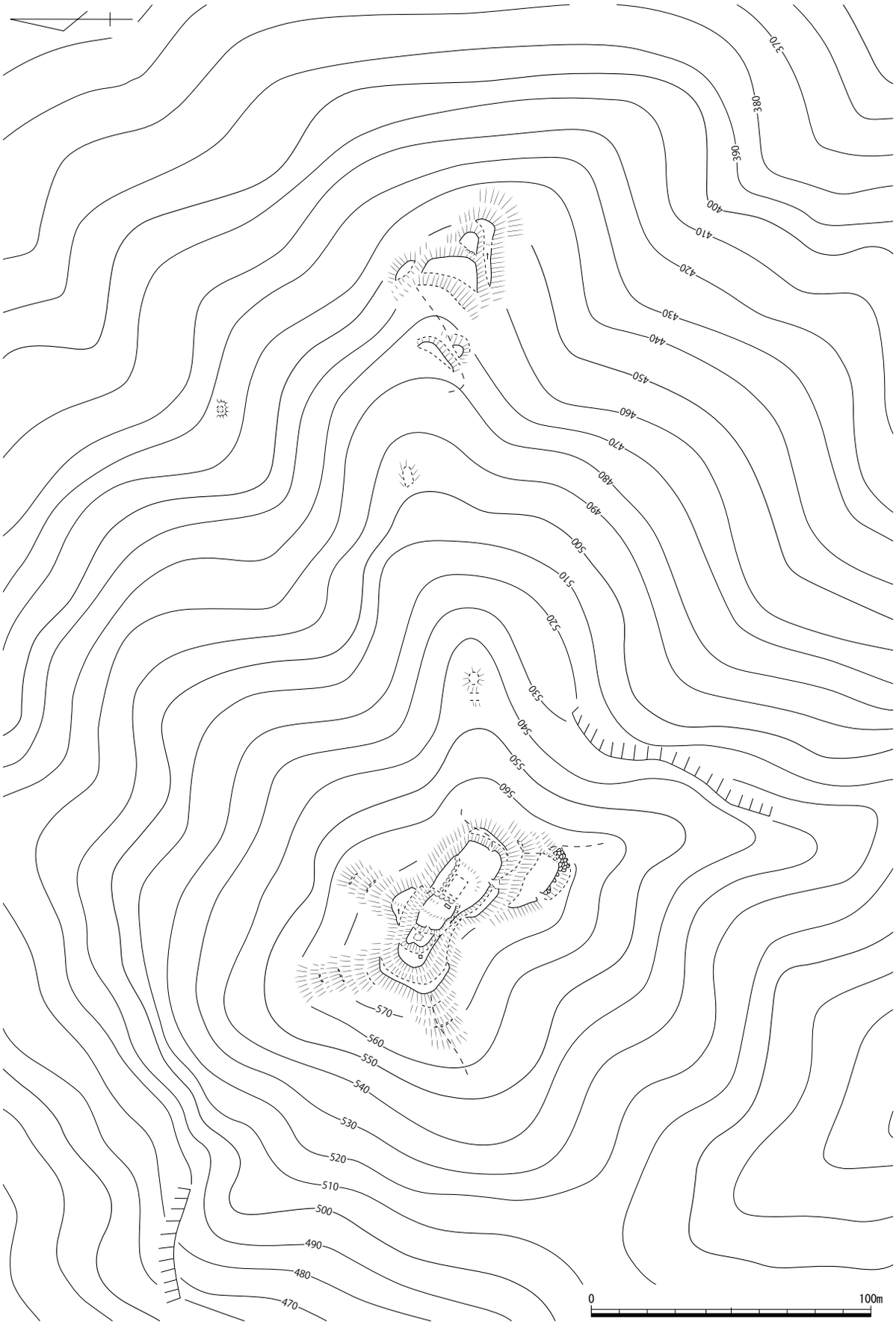
概要　主郭にあたる頂部は 100 mにも満たない空間であり、また四周が急峻な地形となっている。山城の縄張りは、主にこの狭い頂部中心に築かれている。最高所は約 10 m四方しかなく、櫓台が置かれた程度の広さである。その南東側には、長さ約 25 m、幅約 15 mのある程度広い曲輪が１面置かれる。ここには現在神社が建っており、若干地形が改変されている。特に社殿の北東側は土塁状の高まりがあるが、神社建設時の残存か城に伴うものか判然としない。頂部の背後に当たる北西側には曲輪が３面続く。頂部直下の曲輪には凹みがあり、井戸になるのではないかと推定する。また３面目は帯曲輪状に尾根筋を廻る。頂部の北東側と南東側に曲輪１面ずつ、南西側には帯曲輪が築かれ、主郭部分を守っている。頂部南側を下った箇所に曲輪が１面あり、幅が約 20 mある。この曲輪の側面には、高さ２mほどの石垣が築かれている。また虎口状に開いた箇所があり、頂部の南側にも同状の施設が存在する。この方面を城の入口として意識していた可能性がある。

頂部から約 100 m東へ下った尾根筋にも曲輪群が存在する。ここには、長さ約 10 m、幅約 20 mの曲輪を中心に３～４面の曲輪が築かれている。また斜面に石列が残っている箇所もある。この曲輪群と頂部の曲輪群の間には曲輪状の平坦地が数カ所存在しており、この尾根筋も城の入口として意識していたものと推定する。　また東側の曲輪群から約 70 m下った谷筋に洞窟状の岩盤があり、中央部の凹みに水が溜まっていた。井戸として使った可能性が考えられる。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「鹽山城」と書かれ、「熊谷村」にあり、城主は田治力太郎元春となっている。『萩藩閥閲録』第一巻には、1571 年に毛利元就に対し、庄元資・三村元親兄弟が本城を包囲したいと申し出たところ、内々に調略を進めており、小早川隆景配下の香川光景・長就連に交渉させていると書かれる。備中兵乱時には、『小早川隆景書状』によると、新見要害（楪城）を攻略した際、城主の三村元範が城から落ち延びる通路上で毛利方の当城城主である多治部氏の手勢に討ちとられたと書かれる。　（小林）

写真 28　遠景（北東から）

写真 29　主郭南の曲輪の石垣（東から）



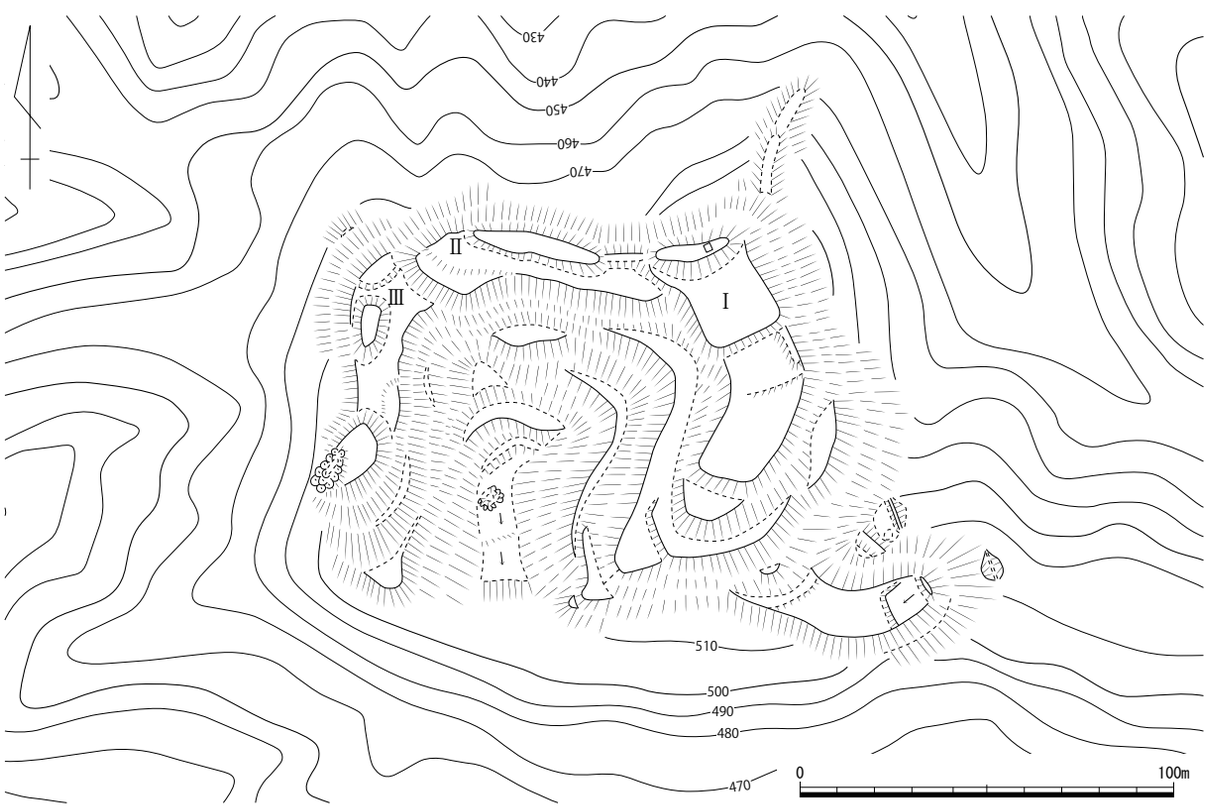
第 49 図　塩城山城跡縄張り図（1/2,000）

59　大山（だいやま）城跡　　新見市大佐布瀬　　地図６右

立地　新見市大佐布瀬の山塊端頂部に位置する。城域は備中、美作国国境からたったの 500 mの位置にある。しかも城の西にある布瀬集落から小坂部川沿いに下れば新見荘南の入り口である唐松まで通じており、城は境目地域ならびに間道を押さえる要衝にあったか。

概要　城の南側は極めて急峻な崖面となっており、もともと山城築城の適地と言える。城は馬蹄形を呈する尾根上に東西 180 m、南北 160 mの規模で展開する。城の最高所にあたる曲輪Ⅰが主郭と見られるが、その北には旧地形の掘り残しと思われる土塁状の高まりが認められる。こうした高まりは曲輪Ⅱ、Ⅲにも見られる。曲輪Ⅱの西側及びⅢの南側は旧地形とみられる緩斜面を残しており、その造成は完全とは言いがたい。谷部は帯曲輪、あるいは犬走りとみられる曲輪が３面に渡って造成されている。特に西側斜面の曲輪は明確な造成痕跡を見いだしがたく、自然地形をそのまま利用している状況を見て取れた。城域最東部に堀切を掘削して城域を画しているが、その幅は 10 m程で、城の規模から見ればかなり小型の部類と言えるのではないだろうか。以上のように、本城の曲輪造成は各所に自然地形を残す不完全なもので、曲輪配置も主郭である曲輪Ⅰへの求心性を欠く。主郭周囲には数段の腰曲輪が造成されているため、兵力の集中も図りがたいものと見られる。こうした本城の縄張りはその築城が古い時期に遡る可能性を示すか。

文献・伝承　『備中府志』では本城の開基を鎌倉右大将家により宛行された、布施忠政としている。時代が下って天文年（1532 ～ 55）中に福井孫六左衛門尉が城主であったとする。　　（和田）



第 50 図　大山城跡縄張り図（1/2,000）

60　田治部国衙政所跡（たじべこくがまんどころ）　新見市上熊谷　地図６左

立地　南から流れる森ヶ平川と北から西に流れる熊谷川に挟まれる、西へ向かって下がる丘陵裾部の平地に立地する。

概要　標高 267 mあたりで南北方向の水田石垣が３段程度あり、石垣の形状が自然石の野面積みで近世より古いと考えられるため屋敷地の地割の痕跡の可能性がある。屋敷地想定範囲は石垣が残る水田の東西約 70 m、南北約 50 mとしたが、南に隣接する畑もその範囲に含むなら南北は約 100 mに及ぶ。『新見市史』では、想定範囲南東の民家を政所想定地としている。

文献･伝承　『新見市史』では､『国衙領英賀政所』として永享元年 (1429) ごろまで代官安富因幡入道宝城、寛正２年 (1461) まで代官安富筑後入道智安とする。同年６月安富代官排斥の土一揆が起こり、新見荘から退去している。（氏平）

第 51 図　田治部国衙政所跡平面図（1/2,500）

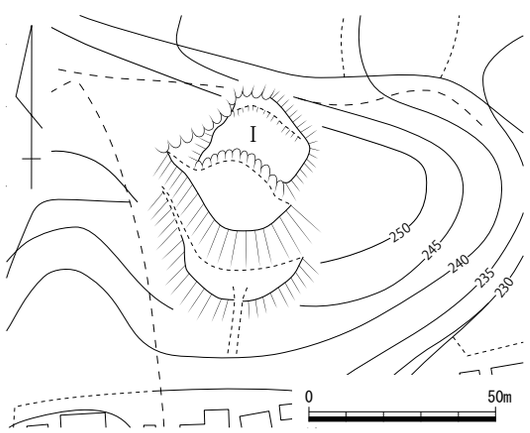
62　丸山城跡（まるやま）　新見市高尾　地図９右

立地　新見市高尾に所在する、山塊端の頂部に所在する。城は新見荘の中心にあたっていた高尾集落から高尾谷川を上った谷部にあり、川筋に向かって西から突出するように築かれている。

概要　城域北側を削平により失っており、その全容は不明であるが、現状３面の曲輪と、最も南の曲輪に取り付く虎口を確認できる。主郭となるのは最高位置にある曲輪Ⅰと見られる。

文献・伝承　本城に関連する文献、伝承等は知られない。（和田）

写真 30　遠景（南西から）



第 52 図　丸山城跡縄張り図（1/2,000）

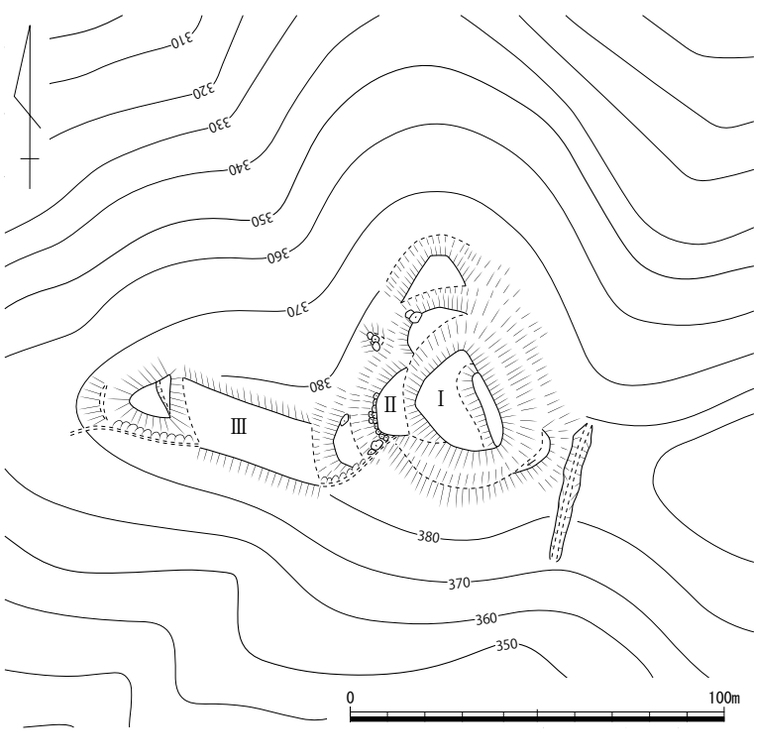
63　小谷山城跡（こたにやま）　　新見市新見　　地図９右

立地　新見市新見木谷の山塊端頂部に位置する。城は高梁川上流域の小盆地に形成された、新見荘域を西に見据える高所にある。高梁川沿いには伯耆街道が南北に走り、城は新見荘の奥津城であっただけでなく、こうした陸路を押さえる要衝にあると言える。

概要　城域は東西 130 m、南北 90 mを測る。城は主郭となる曲輪Ⅰを中心にして、西及び北方向に曲輪を連ねる連郭式山城である。曲輪Ⅰは東西 20 m、南北 30 mを測る。主郭東側は高さ 1.5 mの土塁が築かれている。主郭の周囲は比高５～８mを測る厳しい切岸により突出している。主郭東側後背には爪形の小曲輪が見られるほか、東から続く尾根筋には堀切が掘削されている。主郭の北には曲輪が２面続く。主郭西の尾根上には都合５面の曲輪が連なるが、最も主郭に近い曲輪Ⅱの西側端部には石積みが構築されている。石積みは 30～60cm 大の自然石を２段に積んでいる。石積みの天端は曲輪上面にほぼ達しており、曲輪への侵入を阻む足止めであったと見られる。また、一部露岩を取り込んでいる状況から、曲輪の造成土流出を防ぐ土留めとしての機能を併せ持つものと考えたい。さて、この城の縄張りを特徴付けるのは曲輪Ⅲの存在である。曲輪Ⅲは東西 35 m、南北 15 mを測る細長い曲輪で、曲輪北の切岸の造成は、あまり明瞭でない。曲輪自体は平坦に造成されてることから、兵の駐屯地、あるいは居住域として利用されていたか。曲輪Ⅲの西側にも２面の曲輪が続く。城域西端には爪先形の小曲輪が見られるが、これは明確な造成痕跡が認められなかった。

写真 31　遠景（南西から）

文献・伝承　『備中府志』には康安２（1362）年、伯耆国の田公孫三郎が駐屯したことを記す。しかし本城の求心的な縄張りは、明らかに戦国時代まで下るものである。新しい時期に大規模な改修の手が入っているものと考えたい。　（和田）



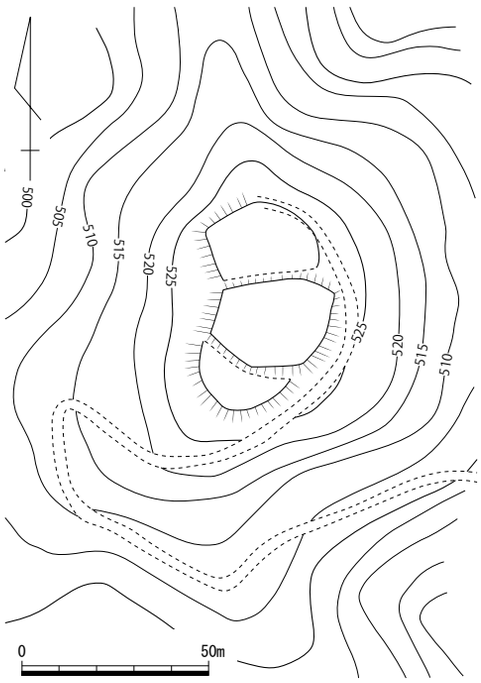
第 53 図　小谷山城跡縄張り図（1/2,000）

64　鳶ヶ巣（とびがす）城跡　　新見市新見　　地図９右

立地　現在の新見市街地南東にある独立峰、鳶ヶ巣山山頂標高約 540 mに立地する。

概要　現在、最高所はテレビ中継所のため２段に造成され、縄張りが判然としない。『日本城郭大系』13 掲載の復元図によると、規模は南北約 60 m、東西約 40 mで、頂部に１つ、その南北に１つずつの計３つの曲輪からなっている。なお頂部からは全方位に尾根が延びているが、現在の所城館関連の遺構は判然としない。

文献・伝承　『備中集成志』では、楢崎右京大夫利景が築城､康安年中（1361 ～ 62）楢崎三郎左衛門慰が在城、永禄四（1561）年楢崎彦左衛門慰豊景は備後国久佐へ所替となった。永禄年間は尼子氏配下の徳光兵庫守、天正年中は三村左馬亮親重、同太兵衛慰親當が城主と記される。『新見市史　史料編』掲載の楢崎氏家譜では、楢崎六良基澄、右近義澄、右京進勝基、兵庫貞澄、市之丞と五代にわたり当城主であったとされる。　（氏平）



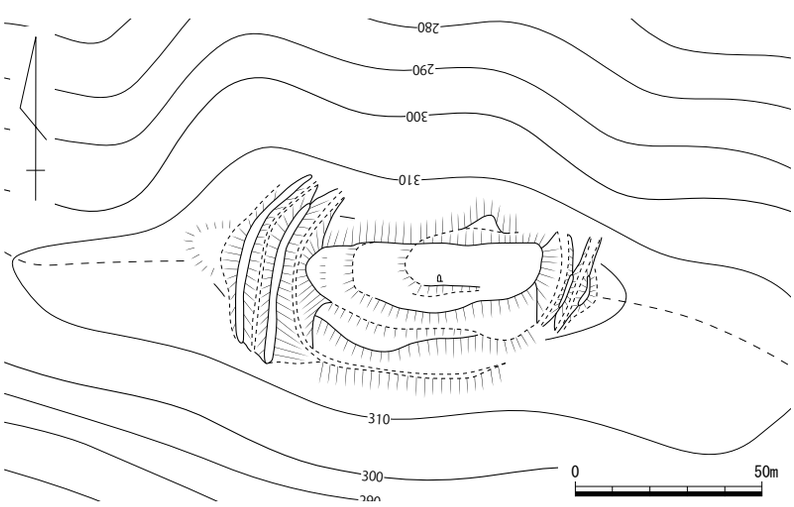
第 54 図　鳶ヶ巣城跡縄張り図（1/2,000）
文献 143 を加筆

65　角尾（つのお）城跡　　新見市正田　　地図９右

立地　北から流れる高梁川へ向かって東から張り出す山塊の頂部、標高 320 mに立地する。北西に新見の市街地を望み、北・西・南に高梁川を見渡すことができ、南東約 2.6km に石蟹山城跡がある。

概要　城域は東西 110 m、南北 60 mを測る。東西に長い尾根上の東と西端を２重の堀切で切断、間を東西 60 mの主郭としている。主郭自体は不明瞭な２段の切岸を経ながら西側へ下がる。主郭の北・南側は切岸・腰曲輪を巡らせるが、南側は地形の傾斜が緩く、切岸を２段施す。掘切は西側が深さ最大 2.5 m、南北 50 mの大規模である。東側は尾根が狭い部分を掘削していることもあり、深さは最大４mであるが、南北は 30 m弱に止まる。また､主郭中央に「角尾山城址」の石碑がある。

文献・伝承　『備中府史』は城主三村六郎元高と記す。(氏平)



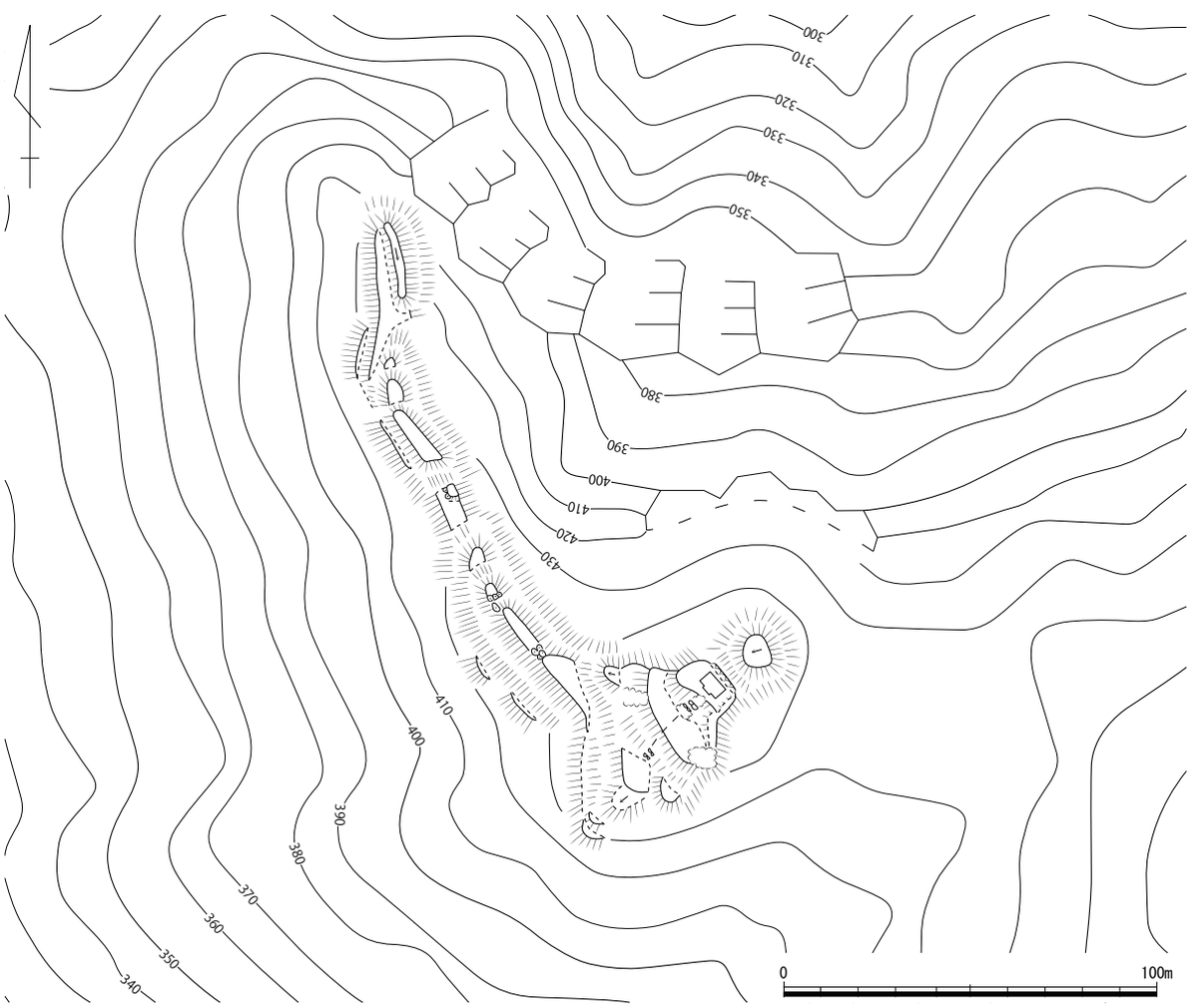
第 55 図　角尾城跡縄張り図（1/2,000）

66　甲籠城跡（こうごめ）　　新見市唐松　　地図 10 左

立地　小坂部川が東から南へ流れを変える突先に張り出す、標高 440 mの尾根頂部に立地。比高差は 260 m程度で、北西～西側に小坂部川と唐松の盆地を見渡し、南約 1 km に鬼山城跡が位置する。

概要　南北 170 m、東西 70 mの規模で、頂部に 1 つ主郭を置き、北側と西側に曲輪を連ねて設けている。頂部にある主郭は南北最大 9 m程度の楕円形で、郭面が東から西へ傾斜している。3 m下の曲輪は長さ 10 m、幅 15 mを、その 3 m下の曲輪は長さ 8 m、幅 30 mを測る。この 2 つの曲輪上に近世神社に由来する石組、石段、礎石が残る。さらにその下方は不明瞭だが尾根先端を爪形に曲輪を構築する。小坂部川に突き出した北側は、幅の狭い尾根上を 140 mにわたり 9 面の曲輪が続いている。北端には長さ 20 m、高さ 2 mの土塁が存在する。東側面は急斜面であるが、西斜面は傾斜が緩い部分約 4 か所に切岸を設けている。この部分の曲輪は幅が最大でも 8 m、最も細いところでは 3 mしかない。なお、神社の西側延長線上に約 500 m南西の小市集落までつづら折れに続く山道が残る。

文献・伝承　『東寺百合文書』の新見国経書状で、永正十二（1515）年に「唐松要害」には伊達氏が居城したことが知られる。『庄氏系譜』では、伊達常陸守に「英賀郡唐松甲籠城主」の但し書きがある。『古戦場備中府史』には城主として伊達常陸守宗衡、伊達右京亮信衡の名がある。　（氏平）



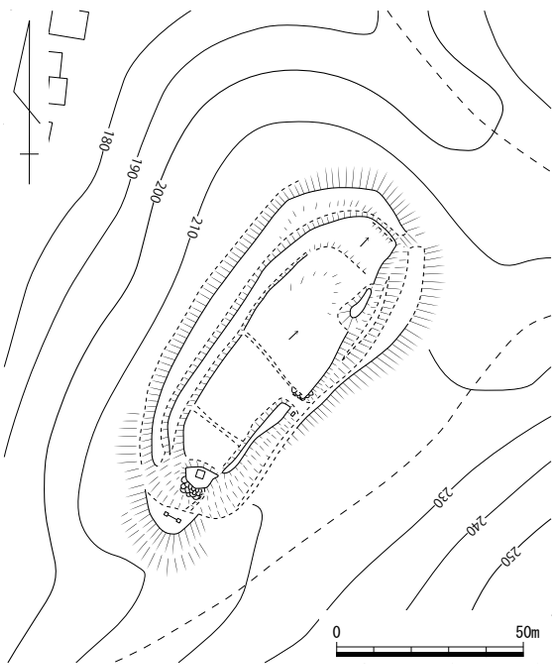
第 56 図　甲籠城跡縄張り図（1/2,000）

67　山根城跡（やまね）　新見市唐松　地図 10 左

立地　鬼山城跡がある山塊から、西へ向けて派生した尾根先端頂部に位置している。北東方向から南西方向へ流れる小坂部川の東側畔近くになる。

概要　頂部にある広い曲輪と帯曲輪から構成され、全長は約 110 mの小さな山城である。頂部にある主郭は、長さ約 80 m、幅約 25 mと細長いが長大である。南東側辺には、高さ約 1 mの土塁が残り、特に南側がしっかりしている。また最南端は高まり状の施設があり、現在祠が置かれている。祠の南西先には小さな曲輪が 1 面ある。土塁がある辺には虎口があり、その一部には石垣が築かれている。帯曲輪は北西側辺で 2 面、南東側辺で 1 面が確認できる。主郭には何段かの整地された跡があり、かつて社寺が建てられていた可能性が考えられる。

文献・伝承　故事来歴は判然としない。　（小林）



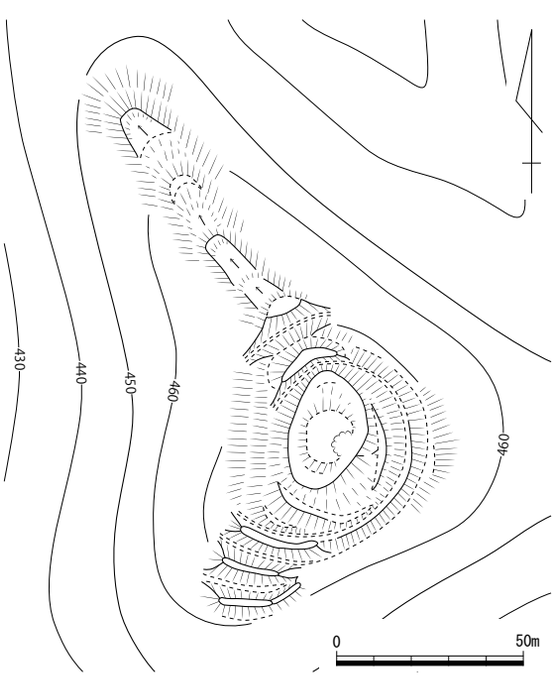
第 57 図　山根城跡縄張り図（1/2,000）

68　城山城跡（しろやま）　新見市足見　地図 10 左

立地　草間台にある山塊から西側へ派生した尾根頂部に位置する。本地の標高は約 440 mである。

概要　頂部にある主郭は、長さ約 30 m、幅 20 mに規模であるが、あまり平坦に造作されず、自然地形を生かしたままである。この主郭に対し、北西側には 2 条の堀切と 2 重の土塁で、南西側は 3 条の堀切と 3 重の土塁で守りを固める。また主郭から見て直下の堀切は、主郭東側を帯曲輪状に廻ることにより繋がれている。北西側の尾根筋には、堀切の先に曲輪状の平坦地が数面続いているがあまりしっかりしていない。この平坦地を含めた城の全長は、約 150 × 70 mである。主郭の西側は、比較的急峻な地形であるため、遺構は続いていない。

文献・伝承　『阿哲郡誌』には、草間村にあり橋本右衛門正光が築くと書かれる。　（小林）



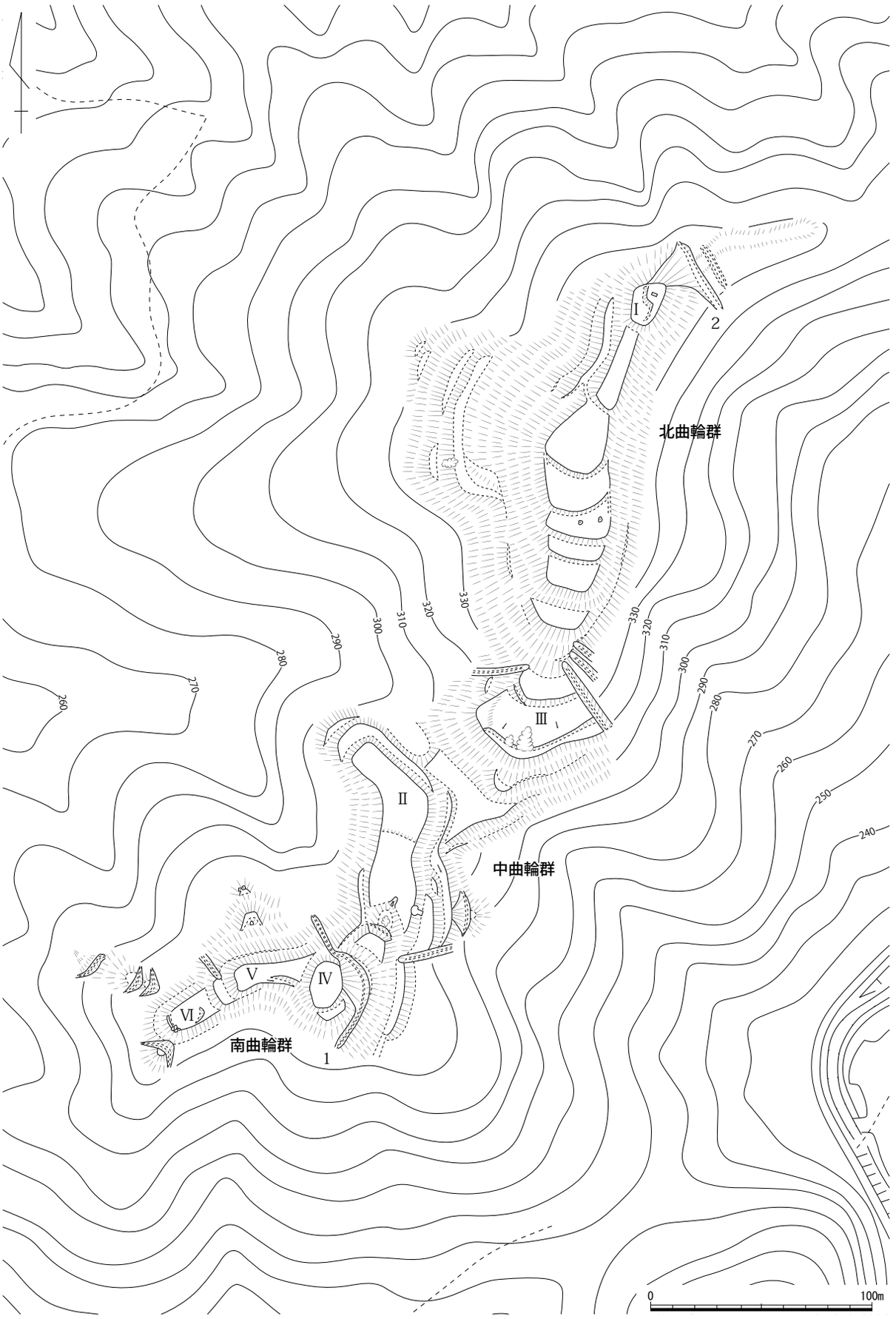
第 58 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）

69　鬼山（きやま）城跡　　新見市唐松　　地図 10 左

立地　城は新見市唐松の山塊端頂部に位置する。標高は 310 ｍを測り、城からは南西麓の唐松集落に対する眺望が開ける。この城の西麓には高梁川水系小坂部川が流れており、城から３㎞南西で高梁川と合流している。高梁川沿いには備中国を南北に貫く道（近世の新見街道）が走っている。小坂部川沿いに北東方向に遡れば備中、美作国の国境地帯である布瀬集落に通じ、さらに川沿いを進めば備中国と伯耆国とをつなぐ道（近世の出雲街道）に接続する。また､城の南麓から東麓に位置する道（現県道 78･50 号)を進めば草間台地を越えて真庭市呰部集落へ至る。呰部集落から備中川沿いに進めば、美作国との国境地帯に至ることができる。このように、本城は備北地域を東西南北に貫く街道、間道の結節点に位置する要衝と言える。

概要　城域は東西 120 ｍ、南北 430 ｍを測る。備中国北部では屈指の規模を有する大型城郭である。城域を俯瞰すれば大きく三つのブロックに分かれる。北曲輪群は城域最高所にあり、主郭とみられる曲輪Ⅰを含む 11 面の曲輪からなる。中曲輪群は城域で最大規模となる曲輪Ⅱとその周辺の腰曲輪からなっている。南曲輪群は横堀状をなす堀切１とそこから派生した竪堀により区画された４面の曲輪からなっている。ここでは北曲輪群から順にその特徴について記述する。北曲輪群は先述の通り主郭である曲輪Ⅰから階段状に曲輪を連ねる。曲輪は尾根上に整然と造成されており、その郭面は、最も南近くに位置する曲輪Ⅲを除くと、完全に平坦となっている。各曲輪間は高さ約２～５ｍの切岸により隔てられている。曲輪Ⅰの北東隅には櫓台と思われる高さ２ｍの高まりが見られる。曲輪Ⅰの後背は深さ約８ｍを測る堀切２により、防御を固めている。堀切２の東にも、堀切の痕跡かとみられる地形の低まりがある。その他防御施設として、４本の竪堀が掘削されている。中曲輪群の中心にあたる曲輪Ⅱは南北 70 ｍ、東西 40 ｍを測る。周囲には腰曲輪が造成されている。曲輪Ⅱの上面はほぼ平坦となっており、その規模から見て建物が建つ居住域等であった可能性を想定したい。南曲輪群は、城内でも際だった戦闘機能を有する曲輪群である。その最高所にある曲輪Ⅳ後背の堀切とその周囲の切岸の高さは約８ｍに達し、周囲から完全に突出している。おそらくは見張り台、あるいは司令所のような機能を担う曲輪であろう。曲輪Ⅳの西に位置する曲輪Ⅴの南には入り口が見られる。入り口は曲輪の側面に沿って設けられた坂虎口であり、虎口に対して曲輪Ⅴから横矢を掛けることが可能である。城域最西部に位置する曲輪Ⅵに対しては、北西及び南西方向にＶ字形の堀切を掘削して防御線を張っている。これに対応するように、曲輪Ⅵの西端には高さ約 50㎝を測る土塁を築いて守りを固めている。以上のように、鬼山城跡は竪堀、堀切、横堀、土塁を交えた技巧的な縄張りを有している。階段状に連なる北曲輪群は兵の駐屯地として十分の広さがある。また、中曲輪群は居住域等であったと見られるなど、曲輪間の機能分化も明瞭である。

文献・伝承　『備中府志』には当城の開基として伊達一族の杉右衛門尉重國及びその弟の重春の両名を挙げている。重國は尼子方の武将として、重春は備中兵乱に際して毛利方として戦い、それぞれ軍功を成したとする。しかしながら本城の縄張りは戦国時代でも最末期の様相を見せるものである。天正 11（1583）年当時、本城の所在する唐松は、安国寺恵瓊発給文書（史料 407）により毛利氏と宇喜多氏の間でその帰属が定まっていなかったことが知られる。本城の築城背景として、そうした軍事的緊張を想定することもできよう。　（和田）



第 59 図　鬼山城跡縄張り図（1/2,500）

72　双内城跡　　真庭市上呰部　　地図 10 右

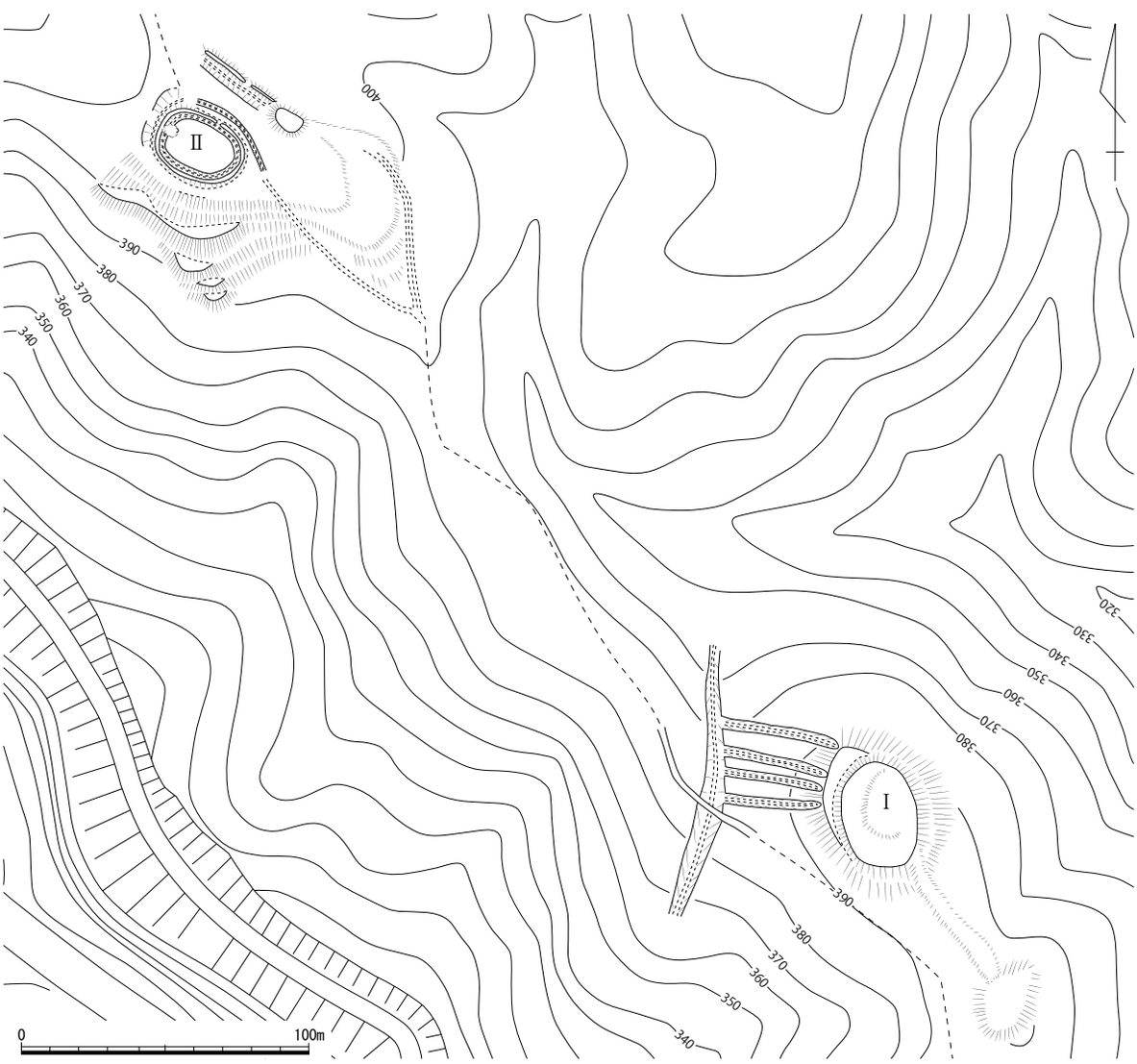
立地　備中川の北西側に位置し、標高約 400 mの城山の頂部と約 300 m離れた尾根平坦面の２か所に立地する。城の西側に沿って中国自動車道が走る。

概要　曲輪群は２か所存在し、主郭Ⅰは、40 × 25 mの規模で、10 m前後の高まりが存在し、櫓台になる可能性がある。西北西方向に向けて４本の竪堀が連なり、掘切まで伸びていた。

主郭Ⅰから北西側には、周囲を土塁で囲った主郭Ⅱがある。長さ約 25 m、幅約 20 mの規模で、楕円形を呈していた。土塁は高さが約 50cm で、両側を堀で囲っている。谷側にあたる主郭Ⅱの南側には、幅３～５mほどの曲輪が４面配され、北東側は、幅 50cm の横溝と土塁で守られていた。

この２つの曲輪群は、どちらも櫓台程度の規模であり、主郭Ⅰは南側～南東側にあたる呰部方面を望み、主郭Ⅱは南側～西側方向を流れる備中川の谷筋を監視していたのではないかと考えている。

文献・伝承　『呰部村誌』では、城守は庄信資の被官である左右地氏とする。　（小林）



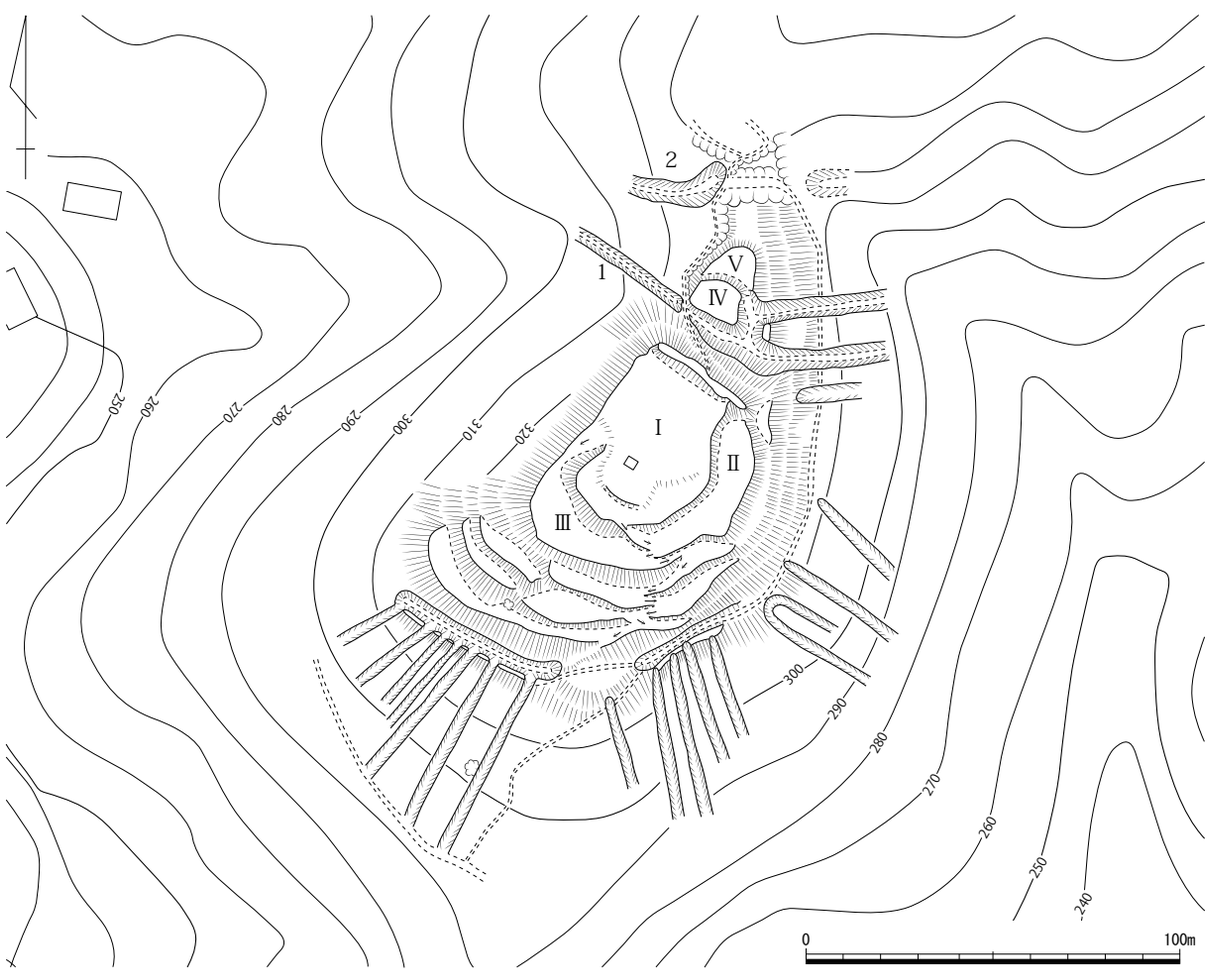
第 60 図　双内城跡縄張り図（1/2,500）

73　高釣部城跡（たかつるべ）　　真庭市上呰部　　地図 10 右

立地　城は、備中川の左岸に所在する高釣部山から南西に延びる尾根の先端頂部に立地する。約 1.1km 北西に双内城跡、約 1.6km 南東に丸山城跡が所在している。

概要　標高約330m、平地との比高差約120mの頂部に、高さ約 1 mの土塁を北東辺に築いた曲輪Ⅰを配する。この曲輪の西側には、祠の参道かもしれない曲輪Ⅲからの通路が接続している。また、曲輪Ⅰ南辺中央部から曲輪Ⅱ・Ⅲを経て横堀まで至る九十九折りの植林道がある。南から南西斜面にかけては、帯曲輪状に曲輪を配し、その下方に土塁を設けた横堀とそこから延びる竪堀を開削し、守りを固める。横堀は中央付近で一旦途切れ、その場所には加工痕跡が認められない平坦面が存在する。この平坦面南端からも竪堀が 1 条掘削されている。北東側尾根続きには、竪堀として斜面へ延びる堀切 1・2 と、堀切間に配した曲輪Ⅳ・Ⅴを設ける。これらの東斜面には堀切 1 と接続する横堀が掘削され、さらにその北端から竪堀が延びるなど、強い防御意識が垣間見える。なお堀切 2 は、尾根上から東斜面部にかけて大規模に改変を受けている。

文献・伝承　『北房町史』には、城主は庄信資・直清で、信資の父勝資が天正の始め頃から築城に着手していたと記す。『備中地誌』には、「高釣部山庄三治郎勝祐」と記載される。なお、北側山麓に殿屋敷と呼ばれる場所があると『北房町史』は伝える。　（小嶋）



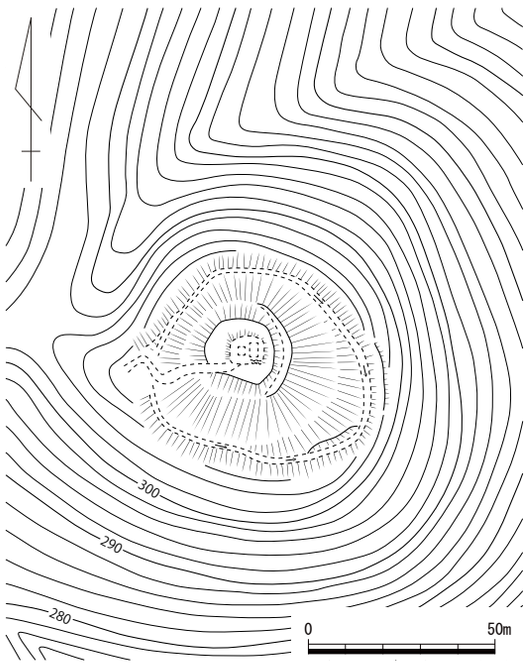
第 61 図　高釣部城跡縄張り図（1/2,000）

74　植木城跡　　真庭市下呰部　　地図 10 右

立地　備中川の西側にあり、西側にある山塊から下る尾根頂部に位置していた。標高は約 312 mになり、比高差は約 120 mに当たる。東側の麓には、植木遺跡が広がっている。

概要　尾根頂部に 15 × 10 mの主郭を築く。主郭上には現代のお宮が２つ建っていた。主郭の東側には、幅３m前後の小さい平坦面があり曲輪にしていた。さらに主郭と曲輪を囲むように、幅２mほどの帯曲輪が一周する。この帯曲輪は幅が狭いことから道であった可能性もあり、山城の構造は単純である。植木城跡は帯曲輪までを含めても規模が 60 mほどしかない小型であるため、南西側山塊にある才田城跡や、東側に位置する丸山城跡などの支城的な役割であったと思われる。

文献・伝承　『北房町史』では、永正年間以降、代々植木氏が居城したと記している。　（小林）



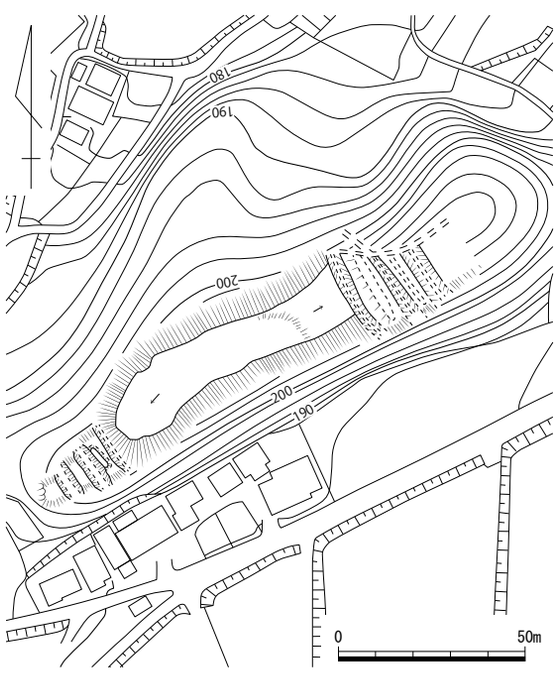
第 62 図　植木城跡縄張り図（1/2,000）

75　土井砦跡　　真庭市下中津井　　地図 10 右

立地　中津井川の西側にあり、東西に延びる独立丘陵の尾根先端部に位置する。標高は約 190 mで、比高差は約 10 mである。

概要　砦は、尾根上に約 70 mの東西に長い平坦面を造り、多少の段差を付けただけの構造である。ただし平坦面の両側に、それぞれ３条の堀切を配していた。平坦面から見て、東側に位置する堀切群は、手前から深さが約２mと２m弱が２つ続く計３条で構成される。尾根先端部に当たる西側の堀切群は、手前から深さ 2.5 m、1.5 m、１mの計３条から成っていた。土井砦跡は規模こそ小さいが、独立丘陵上の両側に３条ずつの堀切と土塁で固める念入りな造りとなっていた。

文献・伝承　城主等は不明であるが、『北房町史』ではこの地の地頭であった山田重英の居館でないかと推定している。　（小林）



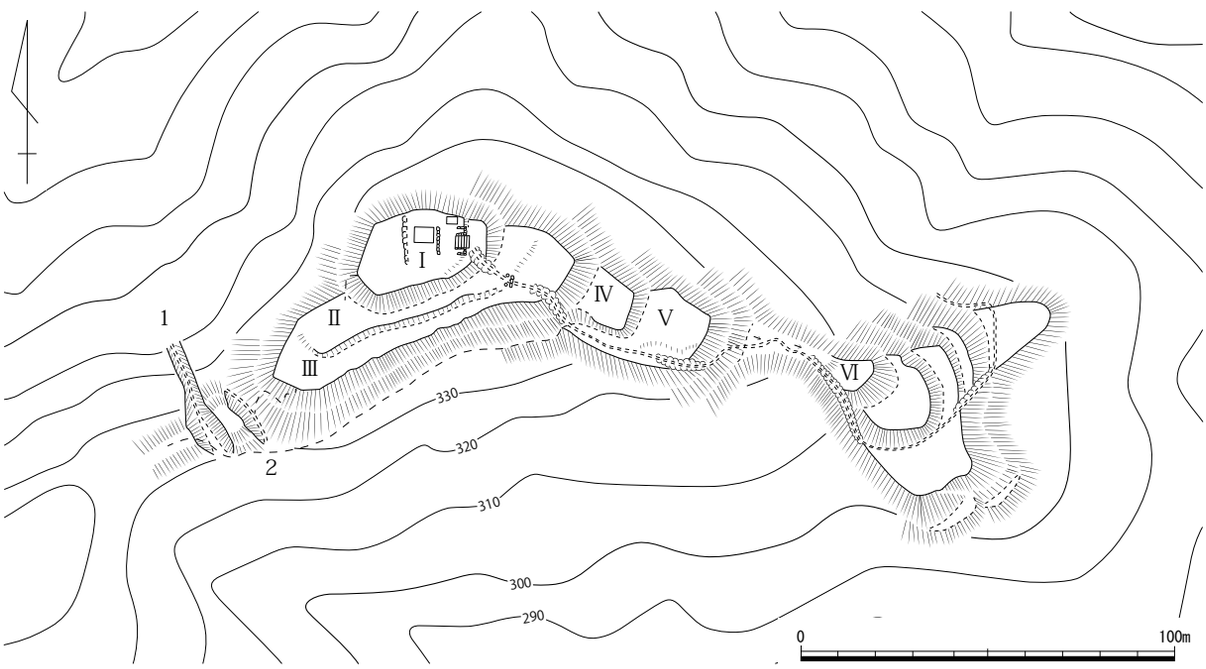
第 63 図　土井砦跡縄張り図（1/2,000）

76　才田（さいだ）城跡　　真庭市下中津井　　＜市指定史跡＞　地図 10 右

立地　城は、中津井川左岸に所在する斎田山から東へ延びる尾根の先端頂部に立地し、美作と備中を結ぶ伯備往来や上水田の平野を東方に見下ろす。中津井川の対岸には定砦跡が所在し、さらに東方に目を向けると四ッ畝城跡を視界に収める。

概要　標高 340 mの頂部から東西に延びる尾根筋に曲輪を連ねた連郭式の山城で、東西 240 m、南北 90 mの城域を測る。西側尾根続きは、幅が狭く南北両側が急斜面となっている鞍部にもかかわらず２条の堀切で守りを固める。堀切１の北側は、竪堀状に斜面を開削している。頂部には、城山神社によって改変を受けている約 35 × 20 mを測る曲輪Ⅰを配している。曲輪Ⅰの東から南にかけて曲輪Ⅱ・Ⅲが取り巻く。曲輪Ⅲから東側尾根筋には曲輪Ⅳ・Ⅴが設けられ、曲輪Ⅴから約６m下がると馬の背状の尾根筋が約 30 m続き曲輪Ⅵに至る。この曲輪Ⅳ～Ⅵ間は、城山神社参道による改変が著しい。曲輪Ⅵから東側は二股に尾根筋が分かれ、その両者に曲輪を築いている。なお、曲輪Ⅲの南側斜面に「城井戸」と呼ばれる穴が所在する。

文献・伝承　この城の築城時期には諸説あり、主なものでも文治３（1187）年に山田重英（『北房町史』）、永正 14（1517）年以降に植木秀長（『日本城郭体系』）、永禄 12（1569）～元亀２（1571）年頃に浦上宗景（『久世町史』編年史料 474）が伝えられる。また、『庄氏系譜』には天文２（1533）年に備中松山城に拠る上野氏を滅ぼした後、斎田城に植木下総守藤資を置くと記載されている。この城をめぐる主な戦いには、浦上・宇喜多氏の後詰めにより攻城方の毛利勢の庄元資が討死した元亀２（1571）年の合戦（史料 73 ～ 81）や、備中兵乱の際に山王山城の庄勝資らが三村方の部将を備中松山城へ逐った合戦、さらに天正７（1579）年に籠城した毛利勢が四ッ畝城に拠った宇喜多方を破った合戦（史料 183・184・188・189 など）などがある。なお、元亀３（1572）年に結ばれた毛利氏と浦上氏の講和によって、浦上方から毛利方へ明け渡された城の一つである（史料 95）。　（小嶋）



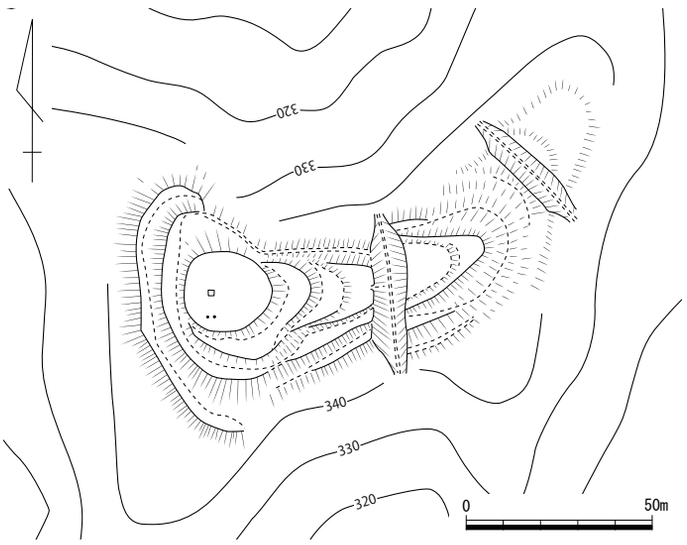
第 64 図　才田城跡縄張り図（1/2,000）

77　加葉山城跡（かばやま）　　高梁市中井町津々　　地図 10 右

立地　標高約 350 mの独立峰山頂部に立地。津々川を西に臨み、南に津々集落のある盆地が開ける。

概要　頂部に直径 20 mを測る円形の主郭を置き、周囲に曲輪を連ねた全長約 140 mの山城である。主郭の東側は深さが３m程の堀切２条で尾根筋を切断している。東端の堀切の東側は傾斜がゆるやかで、自然地形的である。東西堀切の間は、西堀切側に長さ 20 mの曲輪を設ける。主郭と西堀切の間に３面の曲輪が連なり、最も上側の曲輪は南へ回り込む。主郭には小社と鳥居があり、両者を結んだ延長線が登城経路の可能性がある。主郭西側は幅の狭い２面の帯曲輪と切岸を設ける。

文献・伝承　『備中府志』などでは、寿永の頃（1182 ～ 84）、源範頼が平家追討の際に布陣と伝えられ、その後津々加賀守範宗が居城、天文三（1534）年にここより出陣したとされる。（氏平）



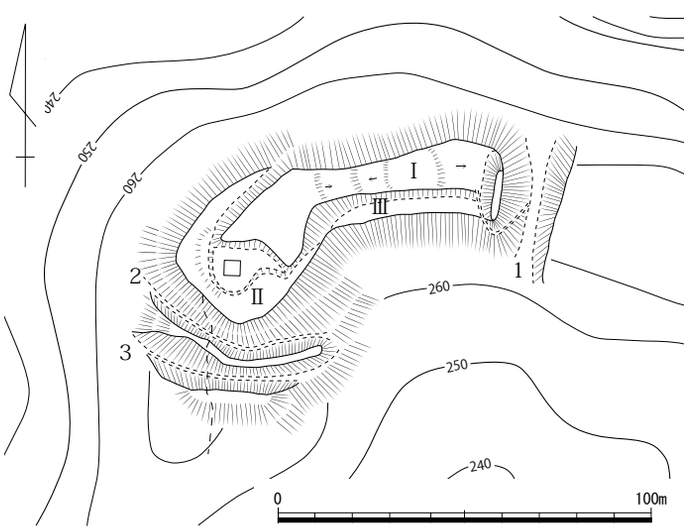
第 65 図　加葉山城跡縄張り図（1/2,000）

78　上合地砦跡（じょうごうじ）　　真庭市下呰部　　地図 11 左

立地　城は、丸山城跡が所在する山塊の北西方向に延びる尾根筋の先端に位置している。標高約 280 m、平野部との比高差約 80 mを測る。

概要　長軸約 150 mを測る尾根上平坦面の中央やや東側に幅約 15 m、深さ約８mの堀切１を掘削し、それより西側の平坦面を城域とする。東辺に高さ約 50cm の土塁が遺存する曲輪Ⅰは、西端の権現様による改変部分を除き、自然地形を残す。堀切１底面から土塁南端を回り込み曲輪Ⅲへと至る通路があるが、後世のものかもしれない。曲輪ⅡとⅢは、植林による改変を受ける。曲輪Ⅱの南側斜面には、横堀状を呈する堀切２・３を開削し、守りを固める。

文献・伝承　城主や築城時期などは伝わっていないが、『北房町史』には、丸山城の御根小屋と想定すると記載される。（小嶋）



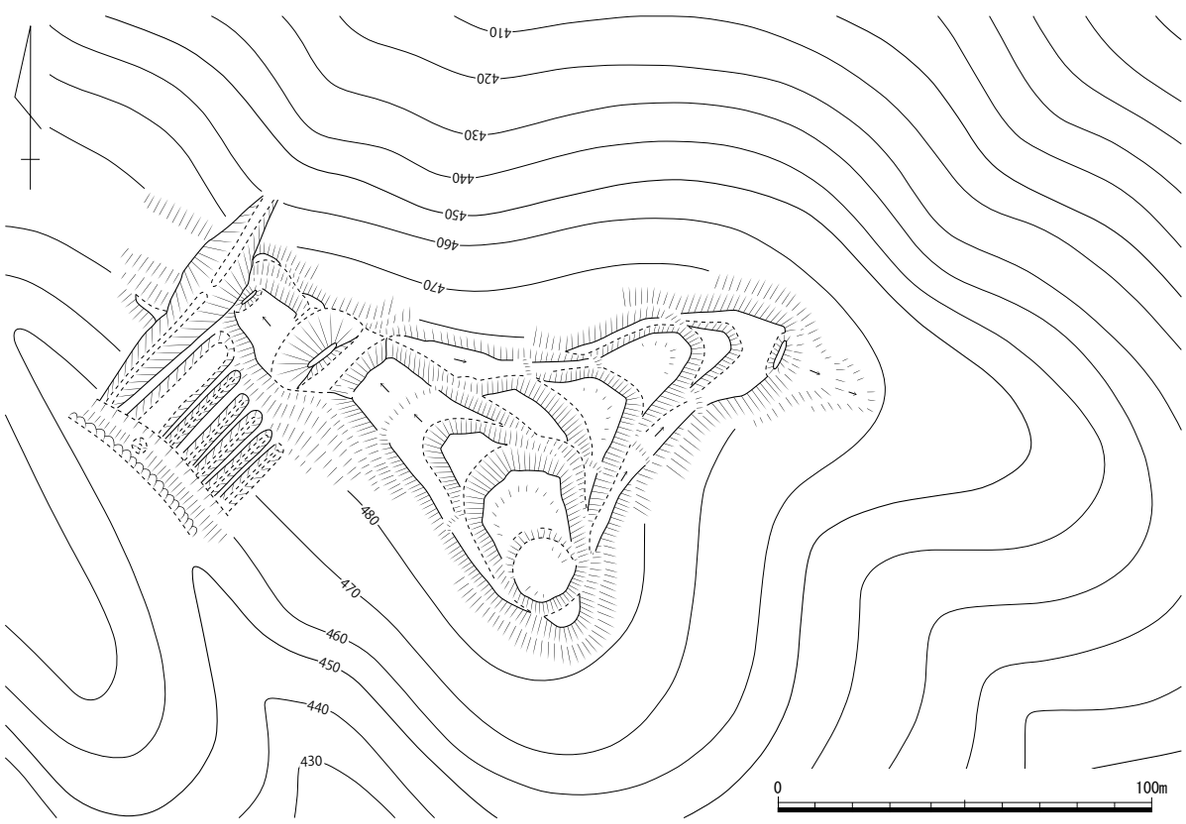
第 66 図　上合地砦跡縄張り図（1/2,000）

79　山王（さんのう）城跡　　真庭市五名　　地図 11 左

立地　中国道北房 IC から見て北側に存在する、標高 500 m級で東西に連なる山王山山塊の東端に位置する。山城は頂部にあり、比高差は約 290 mである。

概要　城跡のほぼ中央に位置する主郭は、35 × 20 mの楕円形を呈している。南側が 20 ～ 30cm ほど高く、幅は 20 mくらいの規模であり櫓台の可能性がある。主郭から見て北東方向が尾根先端側になり、曲輪が 4 面続く。北東側の曲輪は、それぞれ幅が 20 mほどで、長さは主郭側から 10 m、15 m、20 m、25 mと先端にいくほど広くなる。最先端の曲輪は帯状に曲輪が巡っており、通路的な存在であったかもしれない。この曲輪群の先端には土塁状の高まりがあり、さらに城外に向けて通路状に下っていた。また主郭の南側には小さな曲輪が 1 つ存在している。北西側には 2 面の曲輪があり、主郭側が小さく、 2 面目が大きい。2 面目の規模は、幅 20 m、長さ 25 mで全曲輪の中で最大である。この曲輪のさらに北西側に、二重の土塁が築かれ、さらに堀切によって守りを固めていた。二重の土塁は、東側から高さ 1.5 m、0.5 mの規模を持つ。堀切は、西側土塁頂部から 6 mほどの深さで築かれていた。また土塁の南側斜面には、それぞれの規模が幅 3 ～ 4 mで深さ 0.5 mほどの竪堀が 5 本並んでいる。山王城跡は、全長が約 170 mになり、主郭の左右に何重もの曲輪を配し、土塁、堀切、竪堀などで固めた重厚な造りを呈していた。

文献・伝承　『北房町史』では、城主が植木道久で、元亀元（1570）年に尼子・宇喜多の連合軍に敗れ､以後宇喜多信濃守に代わる。『備中地誌』には五名山田村の「山王古城」と記されていた。（小林）



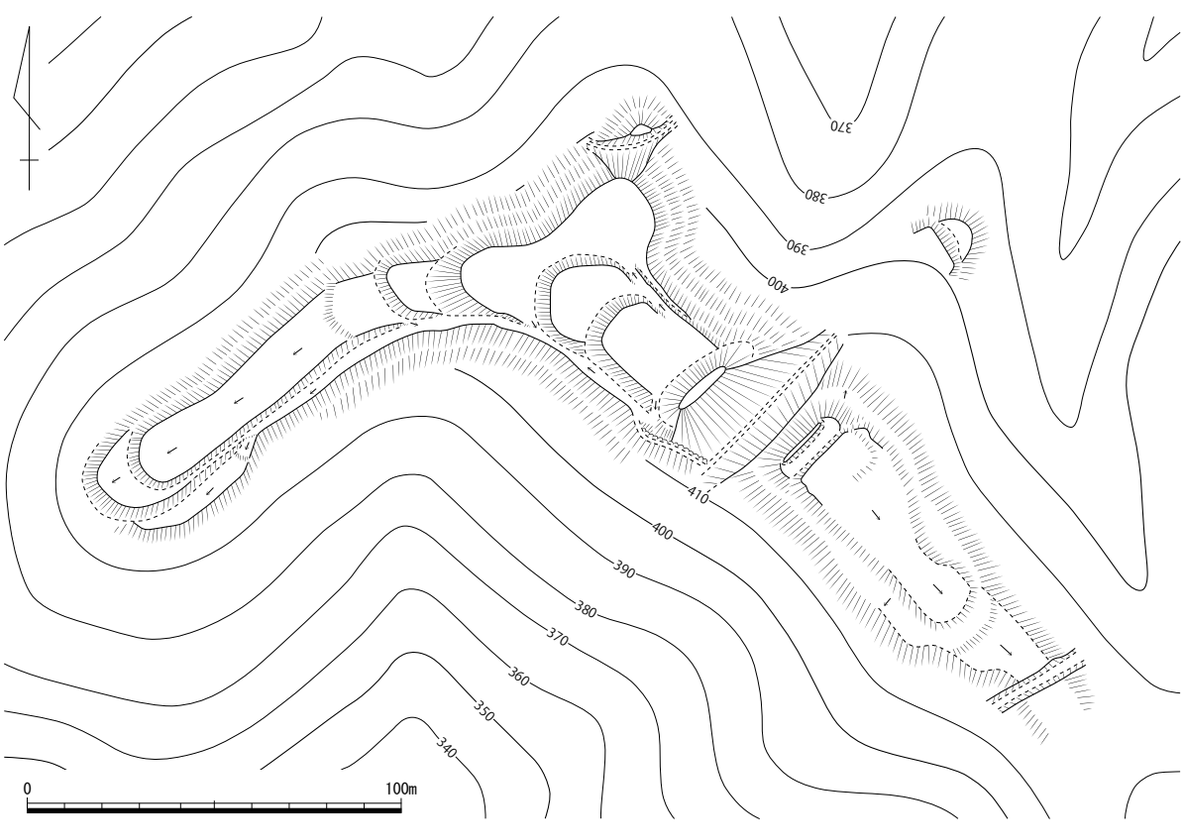
第 67 図　山王城跡縄張り図（1/2,000）

80　丸山城跡（まるやま）　　真庭市下呰部　　地図 11 左

立地　備中川右岸にある上呰部丸山部落の北東側山麓に位置する。標高 420 mの山頂付近にあたる。

概要　主郭は、城域のほぼ中央付近で山頂に位置し、長さ 25 m、幅 20 mの規模を持つ。主郭の北西側の尾根上に連なる曲輪は、4 面で構成されている。主郭から見て 1 面目の曲輪は、長さ 10 m、幅 15 mの規模を持つ。2 面目は北側と西側に延びる尾根筋へ向けて二手に伸びており、他の曲輪よりも大きい造りである。1 ～ 2 面目とも、高さが 5 mほどの切岸が造られる。3 面目以降は、幅が 15 mほどになり、4 面目はさらに南西方向へと屈曲する。この 4 面目は長さが 70 mほどになり、全曲輪の中で最も長い。この曲輪群の南側には、帯状の曲輪が主郭下まで延びていた。主郭の南東側は、高さ約 5 mの土塁が築かれ、深さ 10 m以上になる堀切が続いていた。堀切より先に土塁と 2 面の曲輪が造られる。曲輪の規模は、主郭から見て手前から長さ約 60 m、約 20 mと続く。さらにその先端には堀切を配し守りを固めていた。また山城の北側にある 2 つの小さな尾根筋にも、土塁や曲輪を築いていた。この丸山城は、全長約 300 mの規模を誇り、各施設が充実した城郭である。眼下には上呰部の全域が見渡せる立地となっており、地域の中枢をになう城であろう。

文献・伝承　築城は永正年間で城主は福井重之であったと言われ、『備中村鑑』では庄太郎家名が在城とある。庄勝資が城主時の元亀元（1570）年に、尼子・宇喜多勢の攻勢により落城する。天正二（1574）年に勝資は毛利と結び、斎田城攻略の功で城主に返り咲く。天正九（1582）年に勝資が児島麦飯山合戦で討ち死にすると、庄信資が城主となった。　（小林）



第 68 図　丸山城跡縄張り図（1/2,000）

81　植木（えき）遺跡　　真庭市下呰部　　地図 11 左

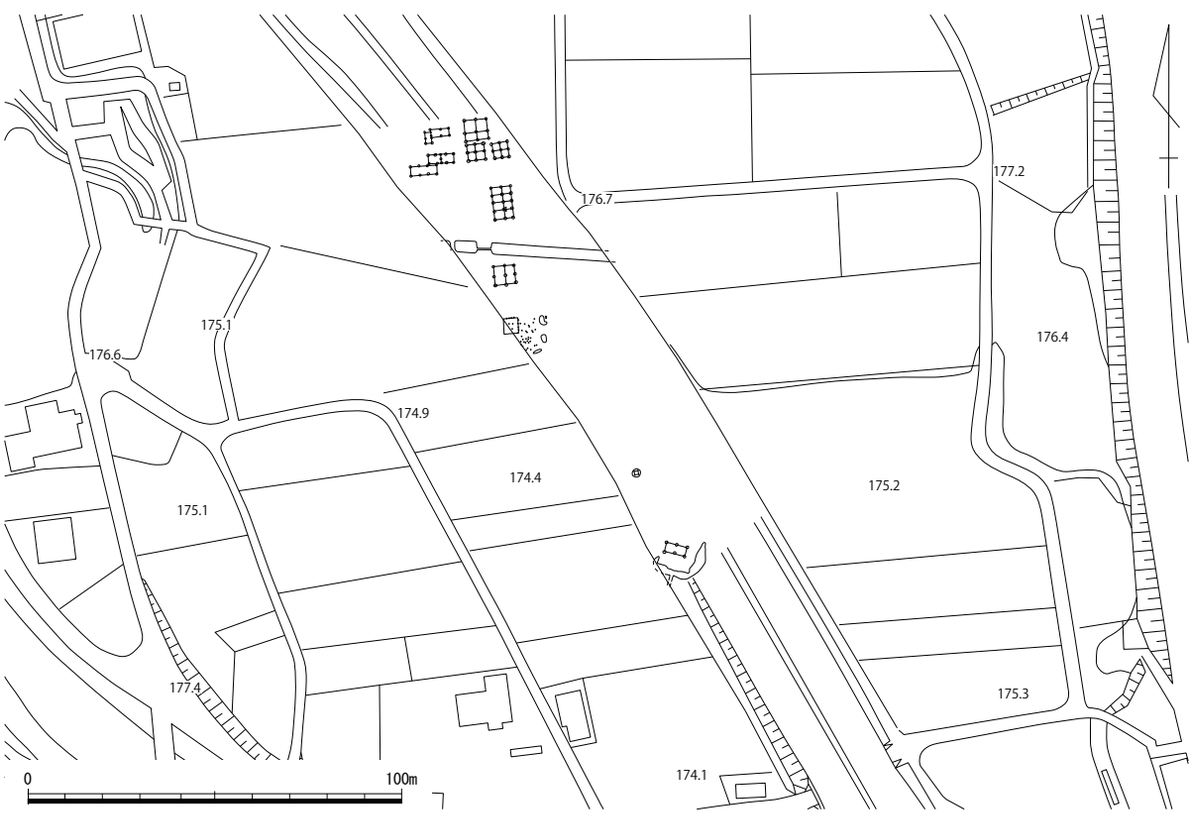
立地　旧北房町の町並みの北西側にあり、備中川によって形成された谷底平野に位置する。現在では、中国自動車道が遺跡の中央に走り、それ以外の箇所は宅地と水田になっている。当地から見て西側山塊の先端には植木城跡が、北東側山塊には丸山城跡が存在する。

概要　平地部分であるが該当範囲に「古城」という地名があるため、館跡があったと考えられている。中国自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、鎌倉時代～室町時代にかけての遺構・遺物が見つかった。掘立柱建物 11 棟、井戸 1 基、溝などが検出され、掘立柱建物は最大のもので 4 × 2 間、床面積が約 67㎡を測る。幅 4 ～ 5 mで断面箱形の大きい溝は、調査区を分断するように東西に配されており、その北側には掘立柱建物が 8 棟あり、しかもかなり密集している。この溝の南側は遺構密度は少ないが、井戸が存在しまた溝で囲まれた掘立柱建物が存在する。出土遺物の多くはこの地区の掘立柱建物や土器溜まりなどから出土しており、北側とは違った性格が窺える。

遺物は、土師器・須恵器・青磁・白磁・天目・備前焼・鉄器（鏃・鑿・火打鎌・釘）・古銭・漆器・砥石・硯や炭化米などが出土した。この内、青磁などの陶磁器は中国産で 13 ～ 15 世紀、銅銭は唐代から宋代までが含まれていた。

文献・伝承　故事来歴はないが、遺跡の存続時期からすると、当地に関連がある植木氏の館跡ではないかと考えられている（文献 161）。　（小林）

文献 161：「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976 年



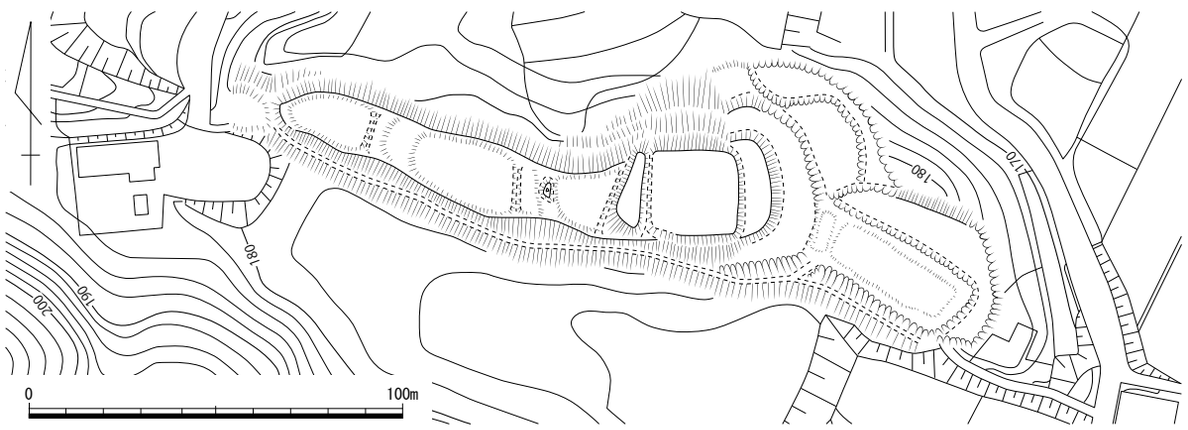
第 69 図　植木遺跡平面図（1/2,000）

82　井尾（いのお）城跡　　真庭市上水田　　地図 11 左

立地　備中川北側にある独立丘陵の頂部付近に立地する。

概要　20 × 20 mの主郭を中心に、曲輪が尾根端部に向けて２面以上存在する。さらにもう１～２面曲輪があった可能性があるが、現在では畑地となっており判然としない。主郭から見て裾部に向けてもう１面の曲輪が築かれ、その先端に土塁が築かれていた。

文献・伝承　『備中集成志』によれば、天正年間ごろの城主は大月七郎左衛門尉通重とする。（小林）



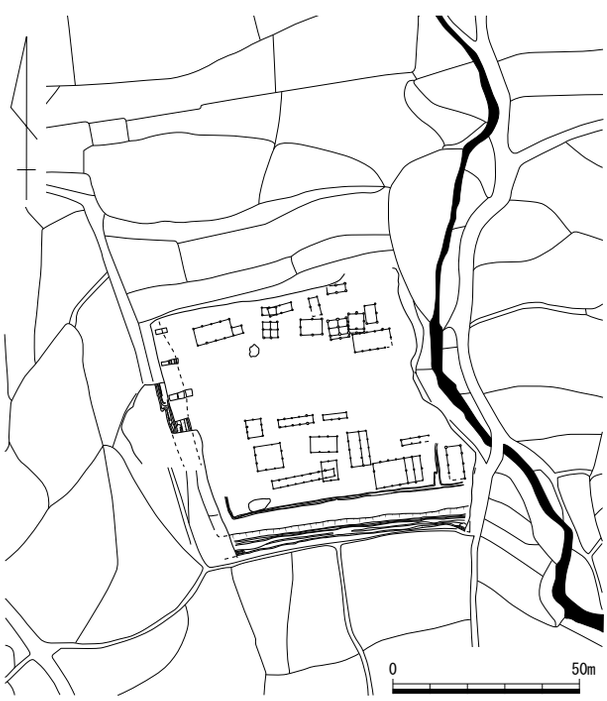
第 71 図　井尾城跡縄張り図（1/2,000）

83　赤茂（あかも）館跡　　真庭市上水田　　地図 11 左

立地　館跡は、飯山城跡が所在する山塊から北西に派生する尾根の末端部に立地する。この尾根の東側は備中川に注ぎ込む小河川が北流し、西側は谷地形、さらに北端は備中川に向かって急斜で下りる斜面となっている。

概要　発掘調査の結果、南・西辺を幅約５ｍの溝で、北・東辺を自然地形で区画された東西 65 m、南北 62 mを測る平坦面が検出された。この平坦面上からは、室町時代中葉～後半と推定される掘立柱建物 23 棟、井戸２基が確認されている。報告書によると、これらは少なくとも３時期に分かれ、主屋とされる建物を中心に数棟の建物から構成される。

文献・伝承　報告書では、背後の山塊に所在する四ッ畝城跡の城主もしくはそれに近い人物の屋敷地と想定している。（小嶋）



第 70 図　赤茂館跡縄張り図（1/2,000）
文献 162 を加筆

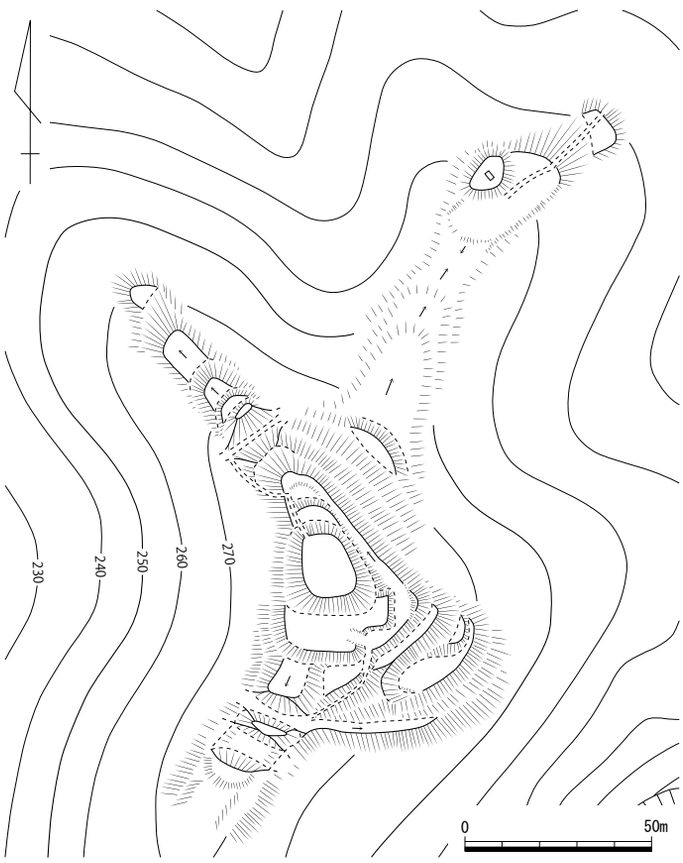
84　片山（かたやま）城跡　　真庭市宮地　　地図 11 左

立地　備中川南側にある飯山山塊の先端に位置する。飯山山塊には陣山砦跡、飯山城跡、片山古城跡が築かれるが、その中で最も施設が整った山城である。

概要　尾根の先端付近頂部に、15 × 15 mの主郭を配する。その主郭を中心に、曲輪が北西側に５面、南西側に２面、南東側に３面築かれていた。北西側は幅 10 m前後の痩せ尾根上に、主郭から見て長さ５mと 10 mほどの２面を配し、深さ約７mの堀切と高さ１mほどの土塁で区切る。さらにその先に長さ５m、15 m、５mの曲輪が連なっていた。南西側は、２面の曲輪（長さ 10 m程）の先に２条の堀切と土塁によって守りを固めていた。２条の堀切はそれぞれ深さ５mほどで、その間の土塁は高さ２mほどの規模をもち、城域を画している。また南東側も腰曲輪状に曲輪を３面を配していた。さらに北東側の尾根上に１面の曲輪を築き、端部にも大仙砦と呼ばれる櫓台程度の平坦面と曲輪を配していた。

当山城は全長が東西約 50 m×南北約 140 mを測り規模自体大きくないが、各尾根上には充実した施設を築き、また派生する尾根上にも曲輪や出丸状の施設を配する堅固な造りである。

文献・伝承　『備中村鑑』では、宮地村にあり城主が乃美少輔七郎元信とする。　（小林）



第 72 図　片山城跡縄張り図（1/2,000）

写真 32　遠景（北西から）

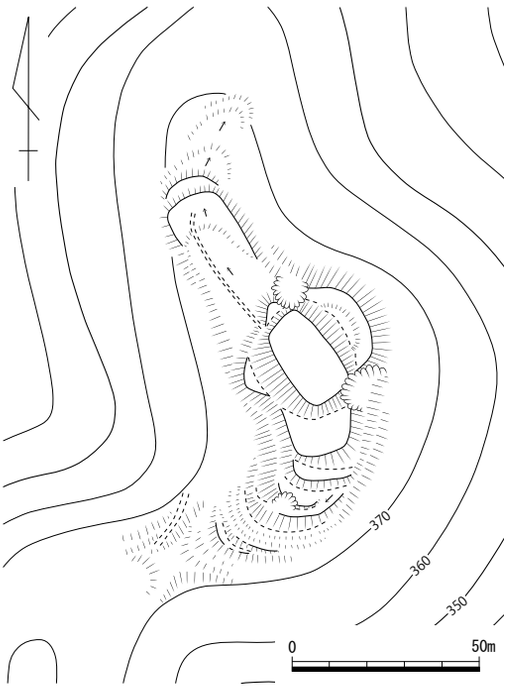
写真 33　南西端北側の堀切（東から）

85　片山古城跡（かたやまこ）　　真庭市宮地　　地図 11 左

立地　飯山城跡が立地する山頂から北東へ下る尾根筋が一旦高所となる部分に立地する。さらに尾根筋を下っていくと再び高所があり、片山城跡が立地する。麓との比高約 210 mを測る。尾根の東西両斜面は急傾斜となっている。眺望は東から北東、北西方向に開け、一色から山田にかけての備中川流域を見渡せる。

概要　頂部の主郭を中心に南北両尾根筋と東西両斜面に９つ程度の曲輪を設けている。曲輪と曲輪の段差は 0.5 ～ 1.5 mと総じて低い。主郭の広さは 25 × 14 m。主郭から北側の尾根先端方向には自然地形の尾根が少し続いたあと２面の曲輪が見られる。主郭南側の尾根鞍部方向には２面程度の曲輪が続き、その下方にも小さな段が見られる。尾根鞍部には堀切は見られない。

文献・伝承　『北房町史』（1992 年）では、同一尾根上にある飯山城跡・片山古城跡・片山城跡・大山砦跡を互いに連携したものと捉えている。　（物部）



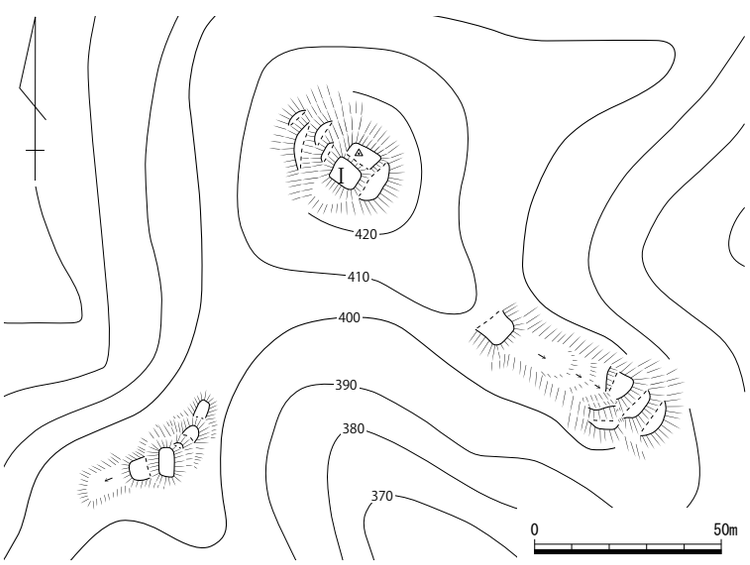
第 73 図　片山古城跡縄張り図（1/2,000）

86　飯山城跡（いいのやま）　　真庭市山田・上水田・宮地　　地図 11 左

立地　城は、備中川右岸の飯ノ山に立地し、備中川及び中津井川が形成した平野を一望する。山頂から北東に延びる尾根筋には片山古城跡や片山城跡が、背後の山塊には四ッ畝城跡が所在する。

概要　山頂部とそこから南東及び南西に派生している尾根筋に曲輪を構えた城である。山頂部には約８×６mの方形を呈する曲輪Ⅰを設け、南西側を除いた周囲に曲輪を配する。南東側の尾根筋には、長さ約 40 m、幅約 10 mを測る平坦面の付け根とその先端部に数面の曲輪を造成していた。南西側尾根筋の曲輪群は、山頂からの比高差約 30 mの鞍部を挟んだ尾根筋頂部に所在し、いずれの曲輪も規模が小さい。

文献・伝承　『北房町史』では、片山城主片山常久に属していた人物を城主と記す。　（小嶋）



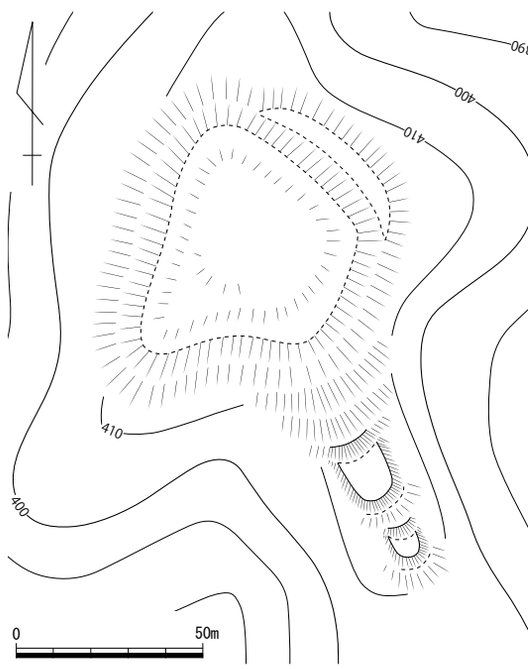
第 74 図　飯山城跡縄張り図（1/2,000）

87　陣山砦跡（じんやま）　　真庭市上水田・宮地　　地図 11 左

立地　備中川の南にある標高約 430 mの飯ノ山から、南に派生した尾根先端頂部付近に位置する。

概要　頂部を含めて全長約 120 ～ 130 mの小さな山城である。頂部は約50 mの範囲に平坦を呈するが、自然地形に近い。この北東側に長さ５mほどの平坦面が見られ、曲輪状を呈する。この頂部の南側斜面上に、長さが約12 mと約５mの曲輪２面が築かれる。この２面の曲輪は、頂部付近の施設に比べるとしっかりした造りである。おそらく南側からの攻撃に対する防御を考慮した配置であったと考えられる。本地のある山塊には南北方向に片山城跡・片山古城跡・飯山城跡が続いている。本城はその最南端に位置しており、また防御施設が南側を向いていることから、上記３城の補助的施設と推定している。

文献・伝承　故事来歴は不明であるが、飯山城跡の出丸であったとする説がある。　（小林）



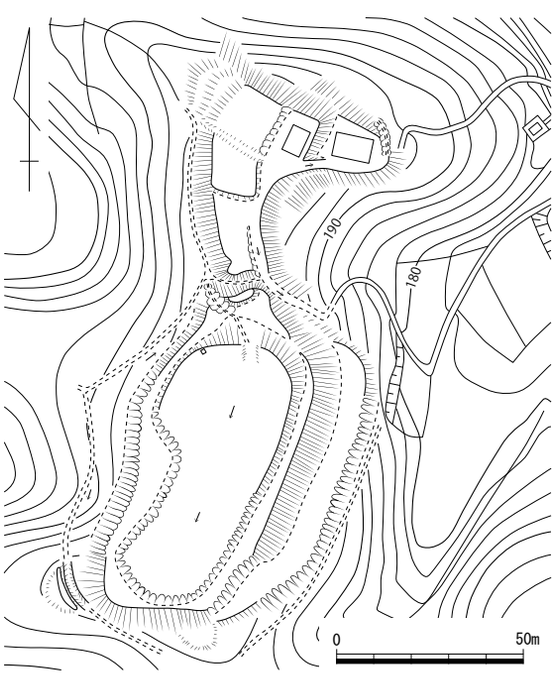
第 75 図　陣山砦跡縄張り図（1/2,000）

88　福尾城跡（ふくお）　　真庭市上水田　　地図 11 左

立地　備中川の南側にある低い丘陵上の頂部付近に位置する。標高 200 m付近が該当するが、麓との比高差は 30 mほどしかない。

概要　長さ 70 m、幅 35 mの主郭を中心にして、２～５mほどの帯曲輪が廻る構造である。しかし現在切岸状に見える施設は、植林によって大半が掘削されたものと思われ、城館はかなり改変されている。主郭南西側の堀切と、北東側の切岸は、かろうじて原形を留めていた。主郭北側は幅４mの堀切と、高さ1.5 mの土塁で守りを固めている。堀切のさらに北側には、長さ 50 m、幅 20 mほどの曲輪群が存在し、２面の曲輪をなしていた。しかし墓地造成や畑地により改変が著しく、主郭以上に判然といない要素が多い。

文献・伝承　『北房町史』では、城主は西谷三郎右衛門と記している。　（小林）



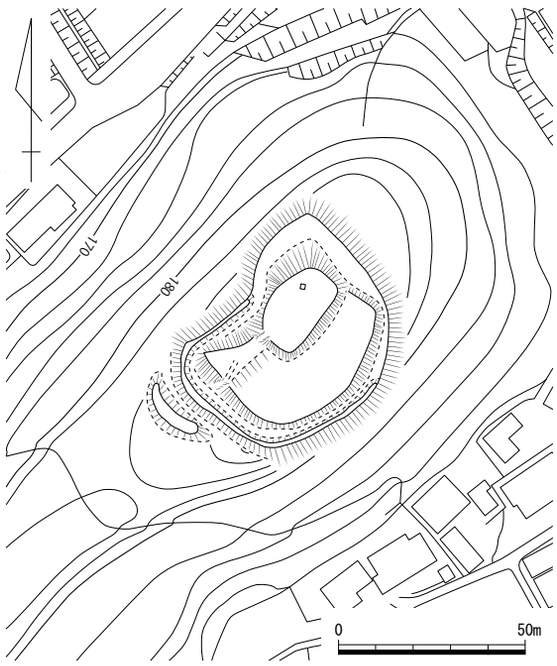
第 76 図　福尾城跡縄張り図（1/2,000）

89　山東塚城跡（やまひがしづか）　　真庭市上水田　　地図 11 左

立地　備中川南側にある独立丘陵の先端付近の頂部が該当する。標高 185 m付近にあり、周辺地形との比高差は約 20 m程しかない。当地は古墳群が立地している真っ只中にある。

概要　当地の丘陵上には、荒木西塚古墳と荒木東塚古墳が存在している。そのうち東側にある前方後方墳の荒木東塚古墳を利用して山城にしている。古墳の後方部を 20 × 15 m前後の主郭にして、前方部を長さ 15 m、幅 10 mの曲輪にして使用していた。曲輪先端部は撥形に開いており、前方後方墳の名残をよく残している。さらに主郭南東側に幅 15 ～ 20 mほどの曲輪を配している。さらにそれらの周りを 2 ～ 5 mを測る帯曲輪で囲んでいた。前方後方墳の前方部前面には、高さ 1.5 mと 1 mを測る二重の土塁と、深さ 1.5 mの堀切によって尾根部を遮断し守りを固めていた。

文献・伝承　故事来歴は不明である。　（小林）



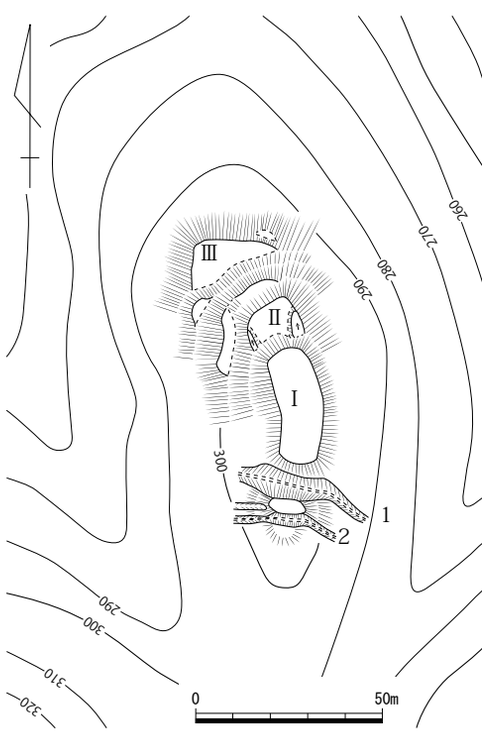
第 77 図　山東塚城跡縄張り図（1/2,000）

91　小松城跡（こまつ）　　真庭市上水田　　地図 11 左

立地　城は、備中川と中津井川が合流する水田盆地を南から見下ろす尾根の先端頂部に位置し、砦部集落及びその奥に所在する双内城跡まで一望する。約 1.2km 北方に荒木城跡が築かれている。

概要　標高約 310 m、平野部との比高差約 150 mを測る頂部の平坦面に曲輪Ⅰを配する。この曲輪から北に下がる尾根筋には、東西両辺に最大 1 mの高さを測る土塁を築いた曲輪Ⅱが所在し、さらにその下方に平面三角形の曲輪Ⅲが配されている。南側尾根続きには、竪堀として斜面へと続く堀切 1 ・ 2 を設け、さらにこの堀切間の西斜面には竪堀が 1 条掘削される。なお、堀切 1 底面と曲輪Ⅰとの比高差は約 5 mを測る。

文献・伝承　『備中誌』は、小松内大臣重盛の部下もしくは庄一族の室氏が代々居城したと記載する。このうち、室氏は庄氏が北房に進出する以前からこの地を治めていた地頭であると『北房町史』は記す。　（小嶋）



第 78 図　小松城跡縄張り図（1/2,000）

92　荒木（あらき）城跡　　真庭市上水田　　地図 11 左

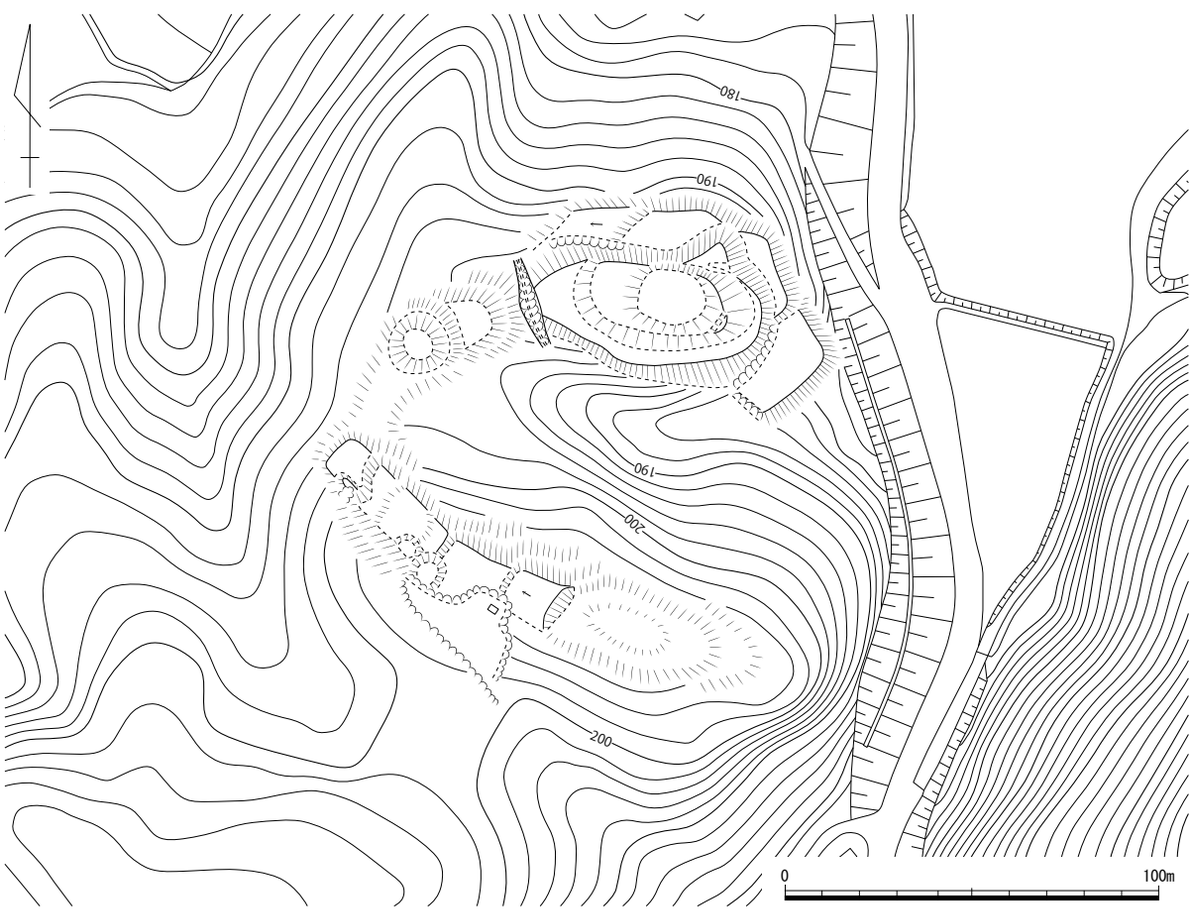
立地　備中川の南側にある標高約 450 m級の山塊から、川に向けて北側に派生する尾根先端頂部に位置する。本城の北側には近接して山東塚城跡、東側には福尾城跡、南西側の山塊尾根先端頂部に小松城跡が立地している。

概要　東側に突き出した丘の上に築かれた城で、さらに南側の尾根筋にも遺構が築かれている。北側の遺構は、頂部が長さ約 35 m、幅約 20 mあり、なだらかな地形で、しっかりした平坦面にはならない。この頂部の南側を中心に帯曲輪が 1 面巡る。頂部の周囲は 5 ～ 6 mの高い切岸で守っている。西側にある鞍部には、堀切状の切り通しがある。位置から考えて、本来は堀切の機能があり、城域を画していた可能性が高い。また頂部東側から北側にかけての下側に、平坦地が巡っている。比高差の少ない尾根筋であるため、これらの平坦地は後生に畑地として利用されていたが、かつては曲輪であった可能性が十分あると考えている。

南側の尾根筋には、尾根鞍部に向けて曲輪が 4 面続いている。この尾根筋は、頂部にはなんの造作見られず、鞍部方向にのみ遺構が造られる構造で、北側にある曲輪群の補助的役割になるであろう。

また本城の尾根筋は宮迫古墳群中にあり、各場所に古墳が点在している。

文献・伝承　『北房町史』には、小松城跡の東方を守る支城ではないかと書かれている。　（小林）



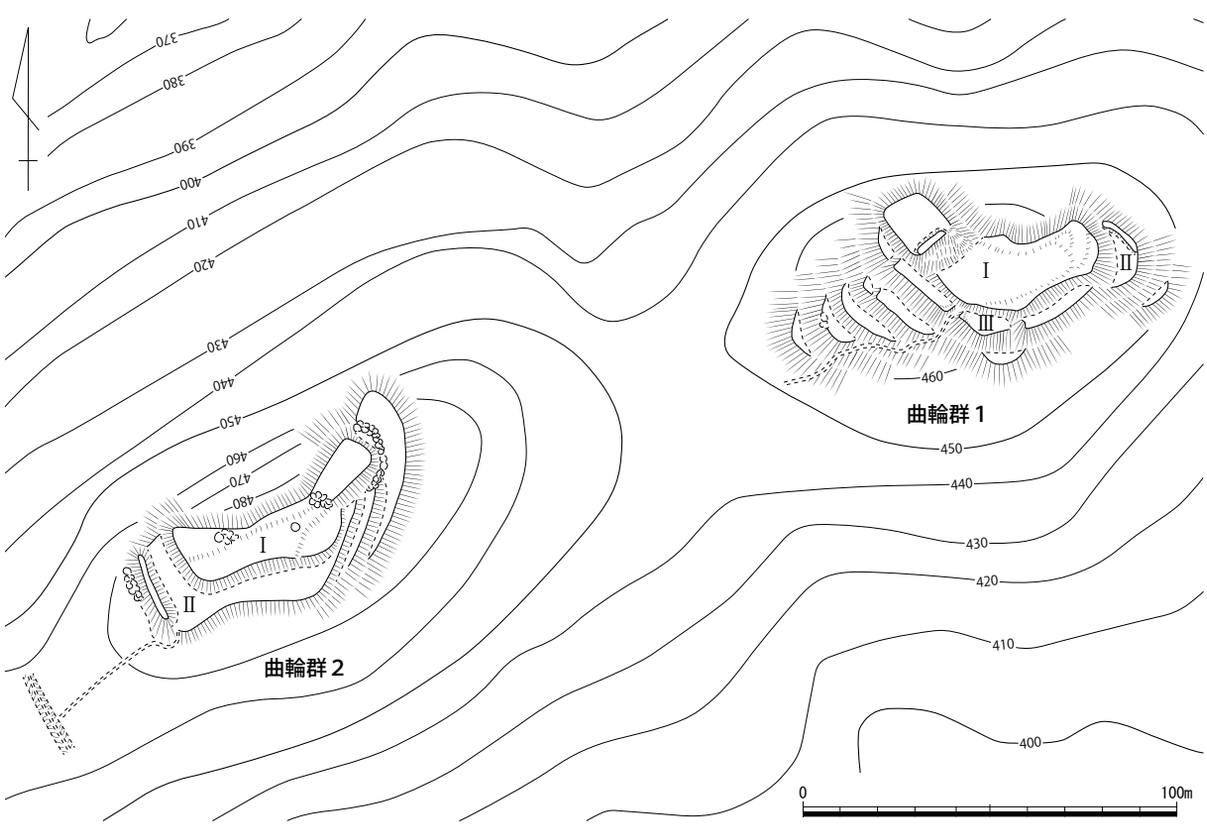
第 79 図　荒木城跡縄張り図（1/2,000）

93　四ッ畝（よつうね）城跡　　真庭市上水田・高梁市有漢町上有漢　　地図 11 左

立地　城は、標高 514 mを測る四峰山から東へ延びる稜線上に並ぶ峰の東から２番目と３番目に立地している。呰部や上水田の盆地を南から見下ろし、旧北房町内の城はもとより、備前と備中の国境に所在する飯ノ山城跡まで視認する。

概要　やや広い鞍部を挟んだ両峰上にそれぞれ曲輪を造成した城である。東側の曲輪群１は、標高約 470 mの頂部に平面「Ｌ」字形の曲輪Ⅰを配する。この曲輪は造成が甘く自然地形を残すものの、北端部には南東辺に高さ約１mの土塁を築いた櫓台が所在する。曲輪Ⅰより東側は土塁状の高まりが残る曲輪Ⅱを設け、南側は帯曲輪状に曲輪を巡らす。曲輪群２に至る尾根筋には、曲輪を５面連ねる。これら曲輪の南東側には、尾根鞍部から曲輪Ⅲの平入り虎口状を呈する箇所に取り付く山道が通っている。西側の曲輪群２は、頂部に自然地形を残した約 55 × 15 mの曲輪Ⅰを配し、北側以外を帯曲輪状に曲輪を巡らしている。曲輪Ⅱの南西辺には高さ 50cm の土塁が遺存する。四峰山に至る西側鞍部に浅く狭い堀切を１条配し、その堀切から続く通路が、土塁南端を「く」字状に回り込んで曲輪Ⅱに接続している。

文献・伝承　『北房町史』によると、『藤森家文書』では末次城主でもある工藤治郎兵衛尉を城主と記すとする。『備中府志』では、高橋右馬允資高を城主とする。天正７（1579）年の宇喜多氏と毛利氏の争いでは、宇喜多方の部将が拠っており、毛利方の才田城と交戦を繰り返していたが落城した。落城後は、毛利方の馬屋原兵部大輔が在番する（表５史料 208・209）。なお、いわゆる「芸備和平」の際に、毛利方に明け渡された城の一つである（表５史料 95）。　（小嶋）



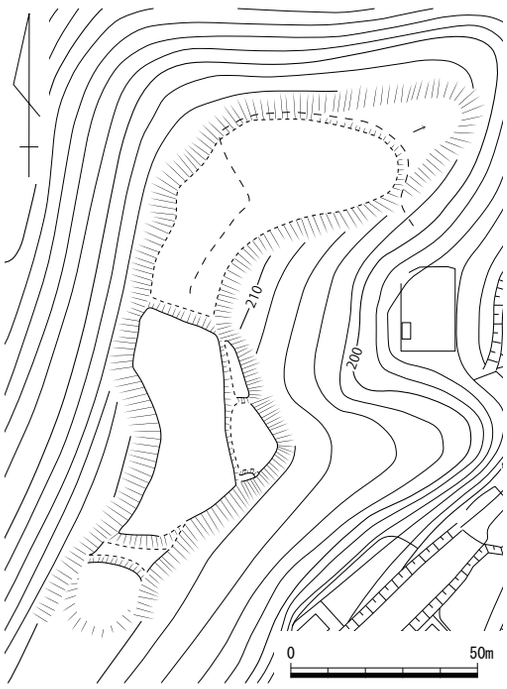
第 80 図　四ッ畝城跡縄張り図（1/2,000）

94　柾木（まさき）館跡　　真庭市下中津井　　地図 11 左

立地　北流する中津井川西岸に位置し、北東方向へ長く延びる丘陵尾根先端部に立地。麓との比高差は 30 mを測る。眺望は良く、南東から北東にかけて、中津井川の流域から備中川との合流地まで見渡せる。

概要　曲輪３面、堀切１条で構成される。頂部の主郭は南北 60 m、東西 15 ～ 25 mと広い。主郭東縁に沿って曲輪が２面あり、その南端に土塁が認められる。主郭の南側には、上幅約 10 m、底幅約３m、深さ約２mを測る箱堀状の堀切がある。主郭の北側は尾根先端までなだらかで広い平坦地となっているが、切岸が不明瞭であり、自然地形かもしれない。

文献・伝承　『北房町史』では、位置関係から才田城との関係が深いと考え、館の主を才田城を築いた山田重英の一族と推定している。また、重英の屋敷がこの地にあり、重英の墓も近くの丸山にあったという伝承を書き留める。　（物部）



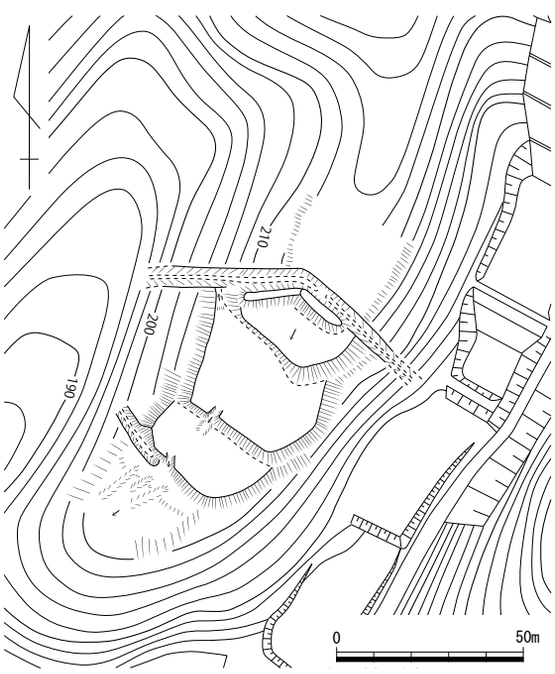
第 81 図　柾木館跡縄張り図（1/2,000）

95　定砦（さだ）跡　　真庭市中津井　　地図 11 左

立地　中津井川東側にある尾根先端部に位置する。標高約 210 mで、比高差は 20 mである。城館の麓には、史跡である定古墳群が築かれている。

概要　尾根先端頂部上に築かれた主郭は、長さ 15 m、幅 30 mの規模をもっている。主郭から尾根先端方向である南西側に向かって、幅 35 m、長さ 20 mと、幅 30 m、長さ 15 mを測る２面の曲輪を配していた。さらに曲輪の先端には堀切状の施設があるが、山道であった可能性もある。主郭の背後に当たる北東方向には、高さ２mの土塁と、深さ３mの堀切を配する。堀切と土塁は、く字状に屈曲する構造である。この城館は、長軸長でも 70 mほどしかない小規模な縄張りであり、砦的な施設もしくは館跡であったと推定される。

文献・伝承　『北房町史』では、城主が室大和守一族とする。　（小林）



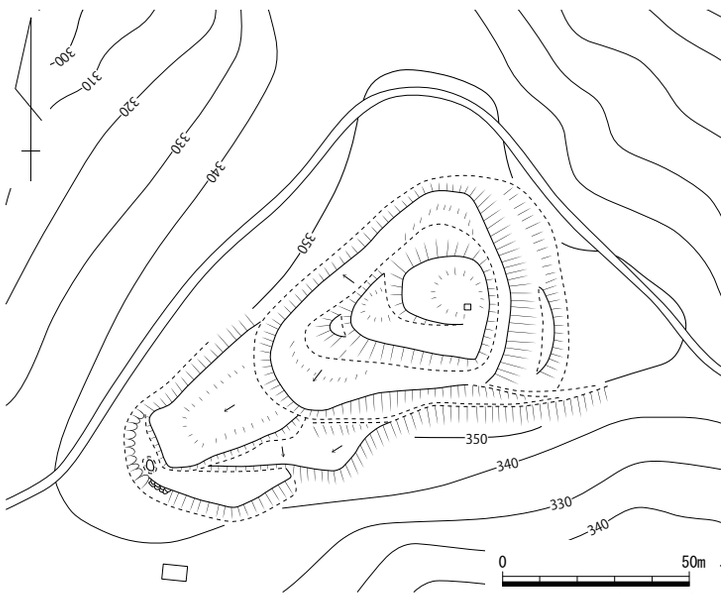
第 82 図　定砦跡縄張り図（1/2,000）

97　川崎（かわさき）城跡　　新見市草間　　地図 14 左

立地　高梁川東岸で、南流する高梁川が西方向へ蛇行する部分に張り出した、尾根頂部標高 370 m に立地する。高梁川を挟んで対岸に柏山城跡、北約 5 km に石蟹山城跡が存在する。

概要　頂部から同心円状に曲輪が 3 面あり、その西に長さ 30 mの緩やかな傾斜を持った 1 面がある。南側は急斜面の切岸と曲輪 2 面を確認した。また、各曲輪は地形に沿った傾斜を残す。これら曲輪群の西端には現代の墓地があり、さらに西側には廃屋が残っている。

文献・伝承　『古戦場備中府史』によると永禄年中には杉右馬允重国が在城し、『新見市史　通史編』では永禄 11（1568）年頃城主杉不忍が三村元親に攻められ討死にした言い伝えを記す。　（氏平）



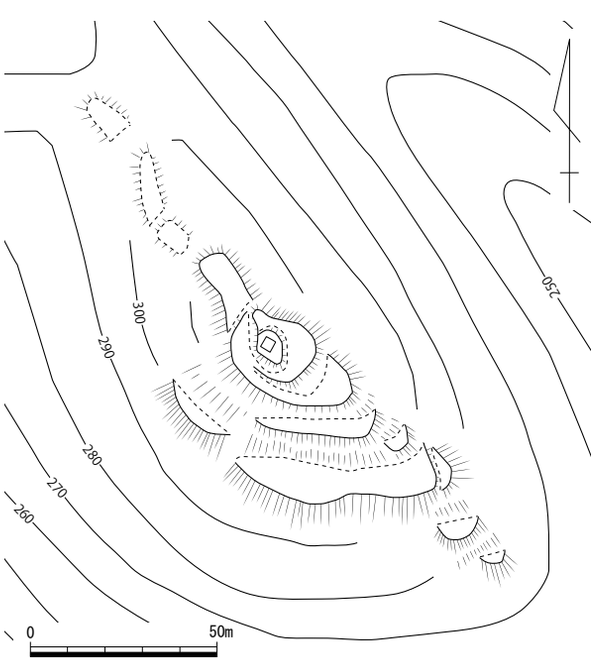
第 83 図　川崎城跡縄張り図（1/2,000）

98　古見山（こみやま）城跡　　高梁市中井町西方　　地図 14 右

立地　津々川から北側へ入る谷の先端に張り出す尾根先端頂部標高 310 mに立地。東西に山塊が迫り、眺望は南側に限られる。

概要　頂部中央に社が建つ高まりのある南北 20 m、東西 15 mの主郭があり、南～東に帯曲輪を巡らせる。南東側は大きめの曲輪を 2 か所尾根幅いっぱいに配置し、最大の曲輪は東西 50 m、南北 10 mに及ぶ。南側尾根先端は落差 5 m以上の 2 か所の小さい曲輪で画している。北西側は緩やかに鞍部へつながる自然地形である。北東側は自然の急斜面を生かしている。

文献・伝承　『新見市史　史料編』所収の「山田保寿所蔵文書　源家山田姓杉氏系伝略」によると、父が源頼朝に仕えた山田筑前守重春が「西方村古見山ニ居城」した。一九代後の山田源内重奥は、永禄 11（1568）年九州立花城攻めに「西方ノ要害」から出兵した。　（氏平）



第 84 図　古見山城跡縄張り図（1/2,000）

99　城山（しろやま）城跡　　高梁市中井町西方　　地図 14 右

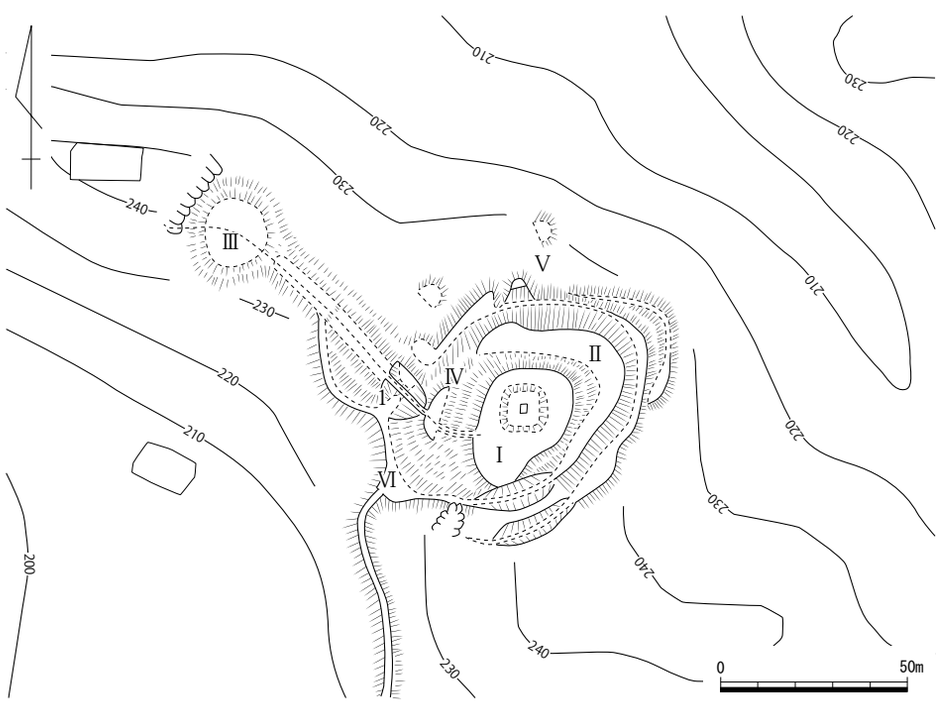
立地　北に津々川を望む舌状丘陵の頂部に位置し、周辺との比高差は 30 mを測る。丘陵の先端部には御嶽神社が位置し、北東には小矢谷をも見下ろす。結果、高梁川から川沿いに北房方面へ進む道を眼下に収めることが可能である。

概要　丘陵頂部に主郭を構え、その周囲に複数の堀切と曲輪を造成している。周囲に２重、３重の腰曲輪と小規模の曲輪を配置する山城で、その防御は堅い。主郭（曲輪Ⅰ）は標高約 240 mに位置し、その規模は南北約30ｍ、東西約25ｍを測る。主郭北側から南西側にかけて幅約10ｍほどの腰曲輪（曲輪Ⅱ）が巡る。主郭との比高差は約５ｍを測り、急傾斜な切岸が造成されている。城への第一の進入路は、現御岳神社裏背後の円形の曲輪（曲輪Ⅲ、古墳である可能性あり）へ侵入した後、狭い丘陵尾根筋を通る道筋である。この道筋は幅約５ｍと狭く、城内への侵入を妨げている。ここを通過しても城への進入路は主郭北側に設けられた比高差約 1.5 ｍを測る堀切１により阻まれる。侵入者はここに設けられた長さ 1.2 ｍ、幅 0.4 ｍの土橋を通過せざるを得ず、その際には土橋の南に設けられた曲輪Ⅳからの横矢に曝される。主郭南側は比高差２ｍを測る二重の堀切が掘削され、尾根伝いに進む侵入者を阻む。一重目の堀切からは幅約 0.4 ｍを測る犬走りが主郭南西から北側へ設けられている。この犬走り沿いに北側へ進むと主郭北側で腰曲輪Ⅱと曲輪Ⅴの間の切岸底に到達する。なお、現在の進入路が取り付いている南西側からの進入路方面には曲輪Ⅵが配され、防御を固めている。

写真 34　遠景（北西から）

文献・伝承　天正２～３（1574～1575）年に勃発した備中兵乱で使用されたとする伝承がある。ただ、近世地誌類や軍記物等はその名が見えず、城主等については不明である。

（和田）



第 85 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）

100　津々（つつ）城跡　　高梁市中井町津々・中井町西方　　地図 14 右

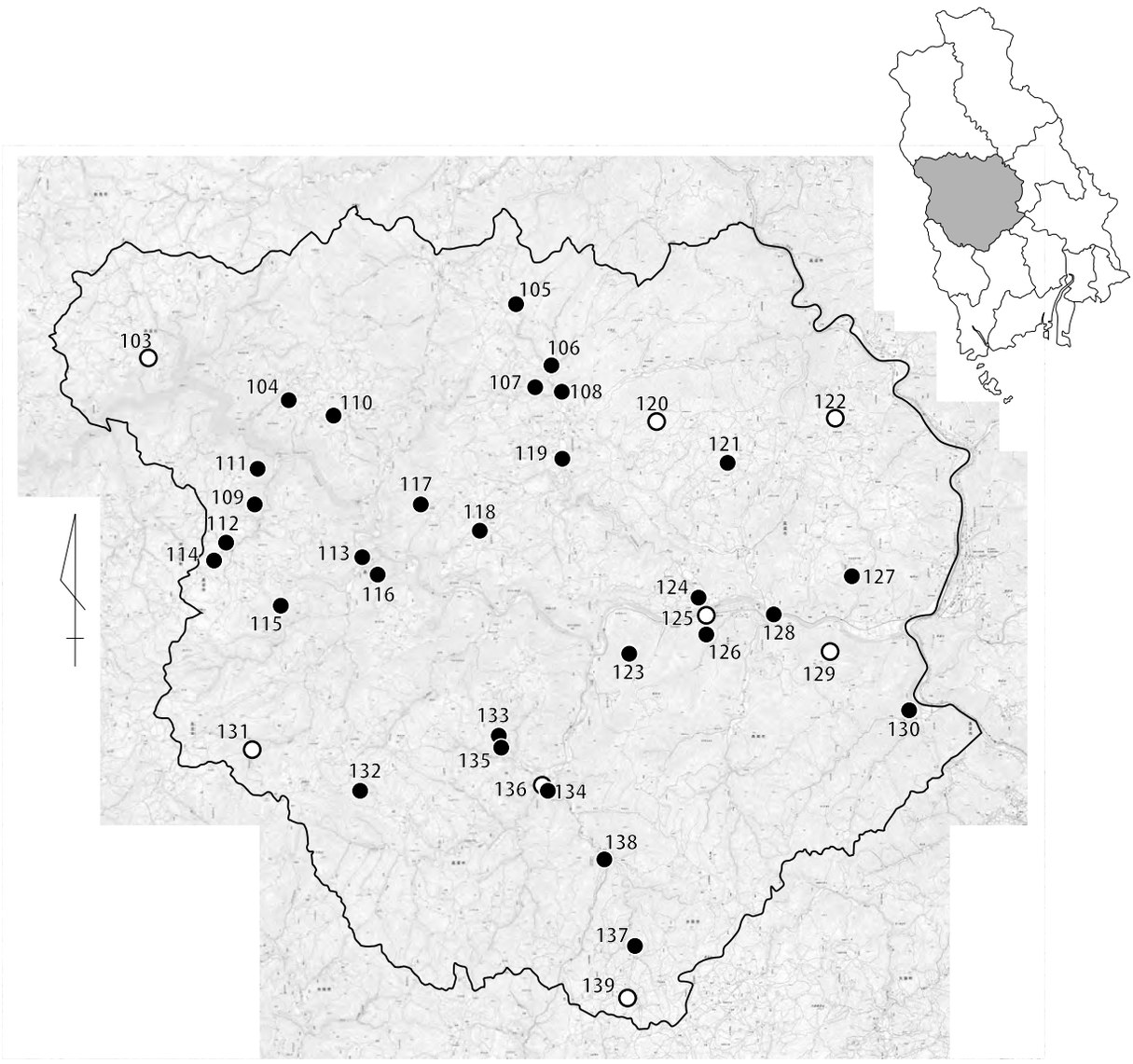
立地　標高約 510 ｍの山塊から北方向へ派生した尾根先端頂部に位置する。

概要　頂部に長さ約 20 ｍの主郭を置き、周囲に曲輪を連ねた全長約 90 ｍ前後の小さな山城である。主郭の南側は尾根鞍部方向に当たり、近接して土塁と堀切を配し城域を画する。土塁は高さ 50cm とそれほど高くないが、堀切は深さが３ｍ程のしっかりした造りである。堀切の南側は自然地形状に緩やかな傾斜が続く。主郭の南西側には窪みがあり、その麓に小さな祠が残る。この方面がかつての虎口であろう。主郭の東西方向に数面曲輪を築いているが、西側は１面のみで、細尾根が道状に伸びている。東側は４面の曲輪が連なる。特に３・４面目は規模が大きい。３面目にはスロープ状の施設がある。

文献・伝承　『北房町史』は庄氏の末裔である津々加賀守が居城したと記す。　（小林）

第 86 図　津々城跡縄張り図（1/2,000）

第３節　川上郡



103. 戸構城跡
104. 軽尾城跡
105. 小金山城跡
106. 笹尾城跡
107. 滝谷城跡
108. 白毛ヶ城跡
109. 北丸城跡
110. 袈裟尾城跡
111. 紫城跡
112. 平川氏館跡
113. 山根城跡
114. 金子山城跡
115. 大原田城跡
116. 勝負城跡
117. 中村城跡
118. 長地城跡
119. 丸山城跡
120. 陣山城跡
121. 馬之城跡
122. 秋町城跡
123. 高ノ盛城跡
124. 三村氏居館跡
125. 三村氏陣屋跡
126. 鶴首城跡・古鶴首城跡
127. 阿部深山城跡
128. 鍋阪城跡
129. ツガン丸城跡
130. 玉の城山城跡
131. 中山城跡
132. 折居城跡
133. 小城山城跡
134. 小社森城跡
135. 国吉城跡
136. 堀ノ内遺跡
137. 小笹丸城跡
138. 野田城跡
139. 氏高公館跡

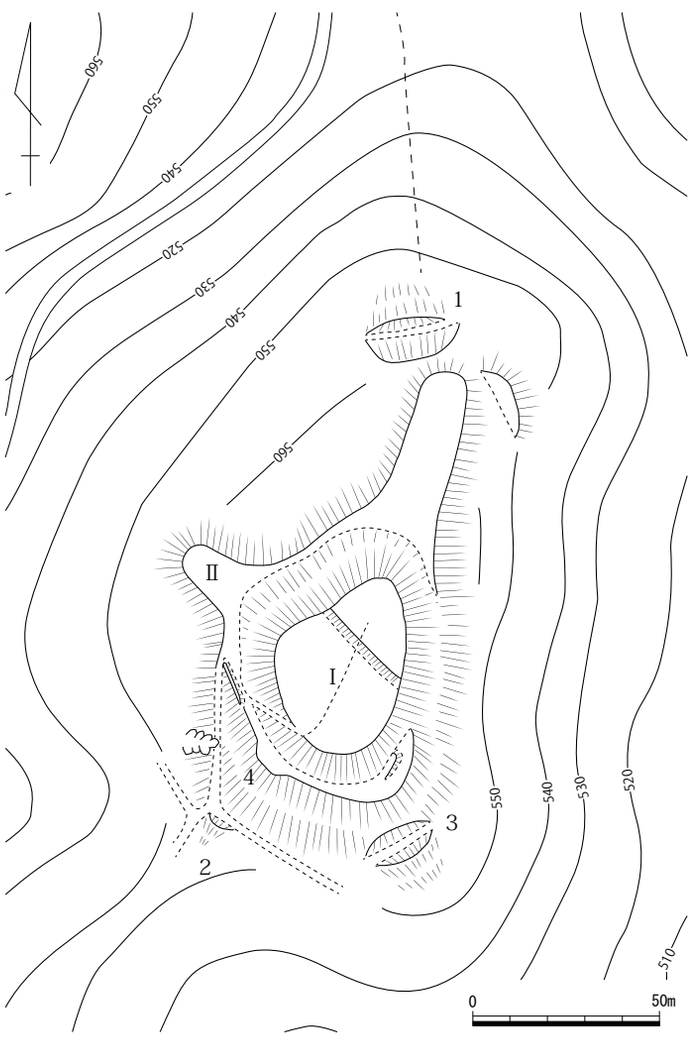
第 87 図　川上郡城館位置図

104　軽尾（かるお）城跡　　高梁市備中町西油野　　地図 13 左・16 左

立地　備中湖から岩谷川に沿って北東に河岸段丘を上り、北に奥郷、東に西油野の集落を望む丘陵頂部に位置する。城からは南西部に向かっては丘陵が連続するが、この方向へは城から約 100 mの位置にある丘陵鞍部のため、視界は遮られる。

概要　城域は南北約 150 m、東西約 60 mを測る。北から延びる丘陵鞍部を切断して深さ約５mの堀切１を掘削して北側の城域を画する。他に丘陵南東部に深さ約３mを測る堀切２、南西方向へは比高約 1.5 mを測る堀切３と併せて周囲からの侵入を阻んでいる。本城は基本的には単郭式の山城で、主郭Ⅰを取り巻くように腰曲輪が造成されている。堀切２から登坂を試みた場合、南西側の腰曲輪から北東、北側の腰曲輪をつなぐ幅約２mの犬走りに設けられた横矢４と対面することになる。これを避けても北へ続く高さ約 0.5 mの土塁に進入を妨げられる。さらに城の東に突出するように曲輪Ⅱが配される。この曲輪は形状から見て周囲への横矢を意識したものであろう。この曲輪の周囲には急角度に切り落とされた切岸が取り巻いている。また、城の中央には周囲から約５mの切岸により突出した、主郭Ⅰが配される。主郭Ⅰは長さ約 50 m、幅 30 mを測る。曲輪の北東部分が 1.5 mほど高く削り残されている状況を見て取れた。位置関係から見て、城の中心部はこの位置にあったものと見られ、建物などが建っていた可能性を想定できる。

写真 35　遠景（東から）



第 88 図　軽尾城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『備中集成誌』、『備中村鑑』などの地誌類に本城の名が見える。天文年間（1532 ～ 54）に、細川天竺三郎が城主であった。天竺三郎は備中国の本来の守護である細川氏の庶流とのことであるが、三村、あるいは毛利氏の被官化していたか。　（和田）

105　小金山城跡（こがねやま）　　高梁市成羽町吹屋　　地図 13 右

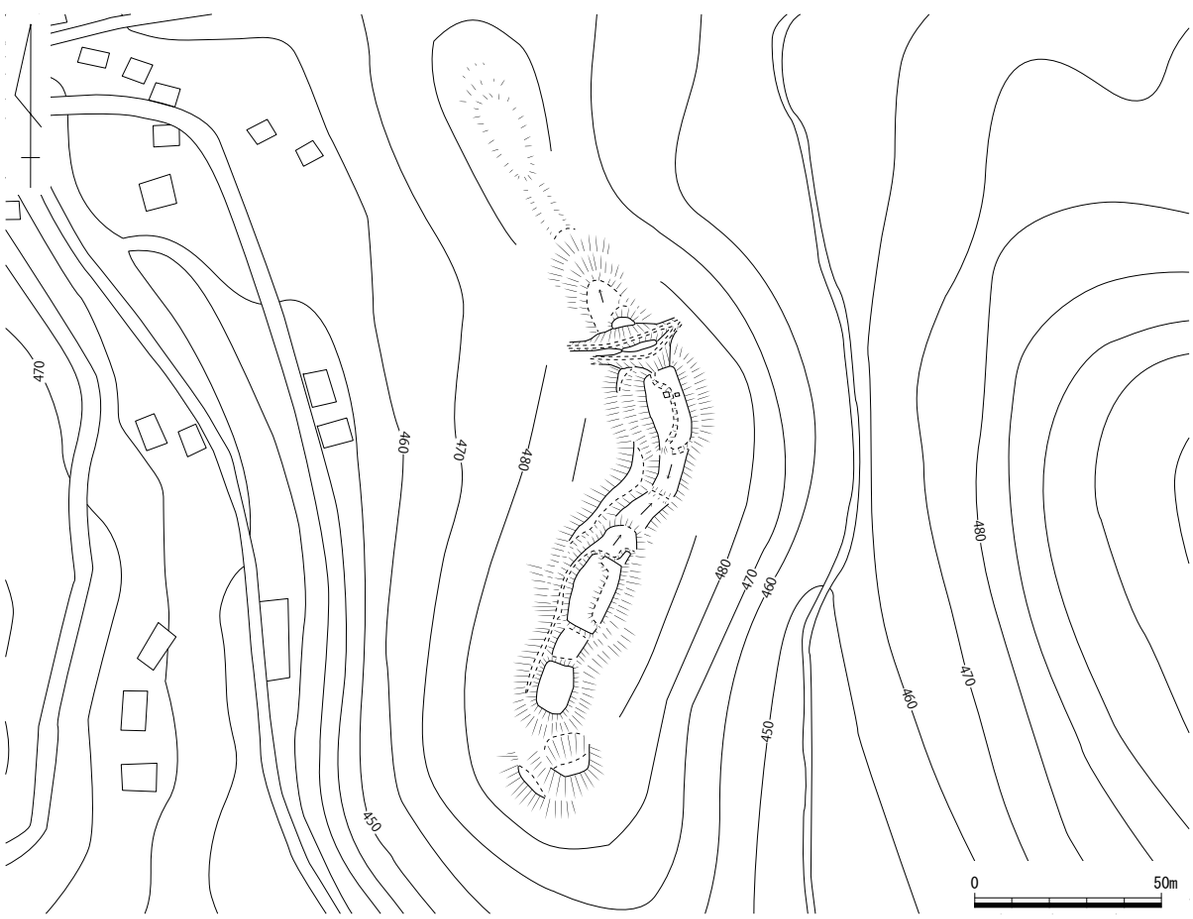
立地　現高梁市成羽町吹屋集落の東側にあり、集落の入口部分に立地していた状況である。標高約500 m級の山塊から南へ派生した尾根先端頂部に位置する。

概要　細尾根上に複数の曲輪を築いた連郭式の山城で、全長は約 120 mである。頂部にある主郭は、長さ約 25 m、幅約 10 mと細長い曲輪である。北側から東側にかけて、土塁状の高まりがあり、現在この箇所に祠が建っている。主郭前面には、長さ約 20 m、幅約 15 mの大きめの曲輪が配される。この曲輪には主郭側に虎口状の施設があり、土塁も残っている。また曲輪上の東側辺にも土塁状の高まりが存在する。この曲輪のさらに前面は、尾根先端に向けて数面の曲輪が続く。また主郭から続く曲輪群の西側は、帯曲輪によって各施設を繋いでいる。主郭背後の鞍部方向は、２条の堀切によって守りを固めている。この堀切は、斜面上に築かれているのが特徴であり、さらに鞍部方向に向けては緩やかに自然地形が続く。

当城は細尾根を利用した細長い曲輪を連ねた中型規模の山城であるが、吹屋往来を見据える位置であり、また吹屋集落の入口を守ることを主目的として築かれた山城であったと考えられる。

文献・伝承　『備中村鑑』などの記載では、尼子方の将である吉田六郎兼久が在城したと言われている。

（小林）



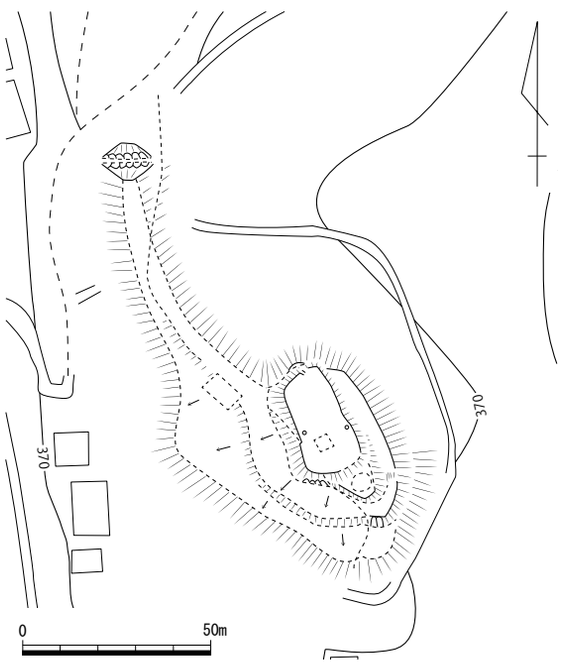
第 89 図　小金山城跡縄張り図（1/2,000）

106　笹尾（ささお）城跡　　高梁市宇治町宇治　　地図 13 右

立地　島木川の東側にある小高い丘であり、標高約 510 m級の山塊から南へ派生した標高約 380 mの尾根上に立地する。本城は、吹屋往来に近接しており、交通の要衝に築かれている。

概要　頂部に長さ約 30 m、幅約 20 mの主郭を置き、その東側に腰曲輪が 1 面、南側に小さい曲輪が 2 面付随する。主郭の西側斜面は、約 3 mの切岸によって守っており、その下方は緩やかな斜面が続く。主郭北西側は細尾根が 50 mほど続き、その先に切通が存在する。この施設が本来は当城の堀切であった可能性も残る。その場合の城域は、約 100 mになると思われる。また主郭南側の曲輪には、現在五輪塔が多数置かれている。

文献・伝承　『川上郡誌』『備中村鑑』には、近藤掃部介の居城で備中兵乱時には三村方であり、川向かいの滝谷城の赤木氏に攻められた。　（小林）



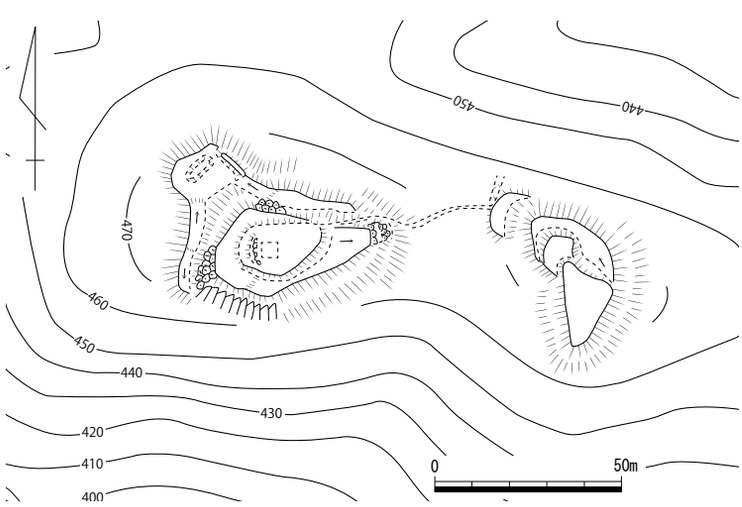
第 90 図　笹尾城跡縄張り図（1/2,000）

107　滝谷（たきだに）城跡　　高梁市宇治町本郷　　地図 13 右

立地　島木川を東に、滝谷川を南に望み、白毛ヶ城跡の西側対岸山頂標高 480 mに立地する。

概要　尾根頂部に 2 つの曲輪群を配する。西側は東西 60 m、南北 35 mの範囲である。東西 20 m、南北 12 mの楕円形の主郭の周りに曲輪を配し、その下側西～北側に帯曲輪が存在する。帯曲輪につながる北西にある曲輪は 15 × 11 mの方形で、北東・北西に土塁を設ける。また、主郭上に 1 辺 2 m程の小祠がある。東西間の尾根は加工が見られない。東側は幅 30 m、長さ 45 mの範囲である。南東端の最高部曲輪は 20 × 15 mの三角形である。曲輪を 1 段挟んで西から北に最大幅が 5 m程度の帯曲輪、最後に 3 m下でやや不整形な幅 10 m程度の曲輪がある。

文献・伝承　『備中集成志』では、承久 3 (1221) 年赤木太郎忠長が備中穴田郷を賜り信州赤木郷より移住の際築城したとする。　（氏平）



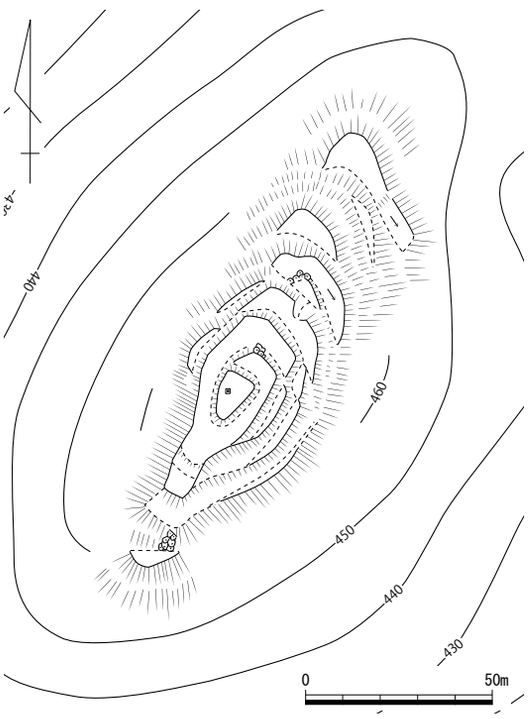
第 91 図　滝谷城跡縄張り図（1/2,000）

108　白毛ヶ城跡（しらけが）　　高梁市宇治町宇治　　地図 13 右

立地　西に南流する島木川を望み、南西へ張り出す尾根の先端頂部、標高約 470 mに位置する。

概要　最高所に 10 m四方の曲輪があり、それを取り囲み南北 40 m、東西 20 mの帯曲輪がある。北側は大きく５段の曲輪に分けられ、それぞれの曲輪間に高さ 1.5 ～３mの切岸を設ける。北下方から４段目の曲輪までは、郭面は不整形である。東側に腰曲輪が３段あるが､それぞれの幅は１～２mと狭く、高さ 1.5 ～３mで緩い傾斜の切岸である。西側は主郭付近には幅の狭い曲輪が見られるが、切岸で自然斜面へつなげている。南端は尾根が狭くなり、６m斜面の下側に曲輪１か所を確認したが、その下方は急斜面になっている。

文献・伝承　『古戦場備中府志』などによると、天文 10（1541）年頃から活躍した赤木忠国の婿である宇治左衛門尉が居城したとされる。　（氏平）



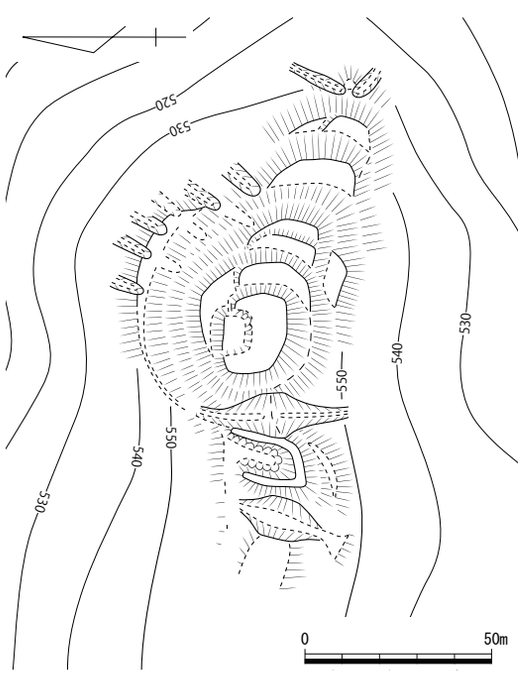
第 92 図　白毛ヶ城跡縄張り図（1/2,000）

109　北丸城跡（きたまるの）　　高梁市備中町平川　　地図 16 左

立地　西川上山地上にある標高約 610 mの山塊から西へ派生した尾根先端頂部に位置する。

概要　頂部に主郭を置き、東西に細長い尾根筋に遺構を配する全長約 130 mの山城である。主郭は長さ約 25 m、幅約 20 mの規模である。主郭東側の尾根先端方向には、規模が長さ 10 ～ 15 m、幅 20 ～ 30 mの曲輪が４面築かれる。主郭から数えて２～３面目間と３～４面目間の切岸は、高さ約 10 mあってしっかりとした造りである。４面目の先にはU字形であったと考えられる堀切がある。また主郭北側斜面上では６本の竪堀が配されている。主郭背後には、幅 10 ～ 15 mの２条の堀切が築かれ城域を画している。堀切の間は､現在コ字形に土塁が配されているが､内側部分の裾部は後に削られた。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「北丸城」とあり、平川村にあって城主は江草右京とある。　（小林）



第 93 図　北丸城跡縄張り図（1/2,000）

110　袈裟尾城跡　　高梁市備中町東油野　　地図 16 左

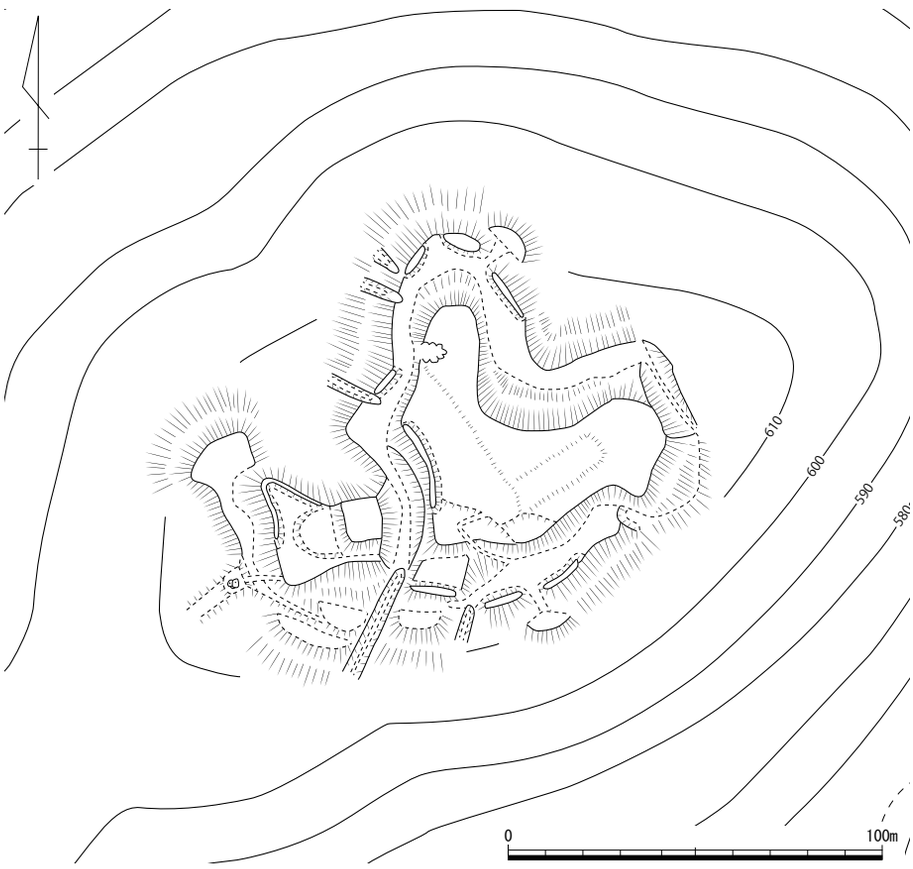
立地　標高約 630 mの山頂に立地し、西約 1 kmに軽尾城が位置する。南約 1 kmに成羽川が流れるが、見渡すことはできない。眺望は東～北側に良く、南流する田尻谷川を東に見下ろす。川からの比高差は 130 m程度だが、東側斜面は急峻で登るのは困難である。

概要　最頂部で東西 70 m、南北 60 mを測るＬ字形の主郭を中心に、東西尾根筋に堀切 1 条ずつを掘削し、主郭の北・南に帯曲輪 1 つずつ、西側堀切のさらに西に 3 面の曲輪群を設ける。

主郭の東側は、深さ 8 mの堀切で尾根を切っているのみである。主郭の北側には、東堀切底からつながる帯曲輪が西堀切まで続いている。この帯曲輪と主郭の比高差は 5 ～ 8 m、幅は最大 10 mで、主郭と共に突出する北端に 3 か所の切れ目のある土塁があり、土塁の北東隅の切れ目の先に曲輪状の平坦面を築いて虎口状に構築している。帯曲輪北西側斜面には竪堀が 3 本確認できる。西の堀切は深さ 5 mで、主郭側に土塁を設置し、そのまま南へ向かい竪堀につながる。南側の帯曲輪は長さ約 50 mで、南端に 3 か所の切れ目がある土塁があって、南東隅の切れ目の先は北帯曲輪と同様に曲輪状の平坦面を築いて虎口状に造り出している。西堀切南側は不明瞭だが竪堀の両側に曲輪状のものを確認している。西堀切西側の曲輪群は主郭北西側の谷を回り込むように構築され、上から 2 面目の曲輪北西側に土塁を築いている。これら曲輪群から西へは尾根鞍部を経て緩やかに尾根が続いている。曲輪群西の尾根頂部には長さ 3 m、高さ 2 mの露岩があり、それより西では地形改変は見られなかった。

文献・伝承　『古戦場備中府志』によると、築城は鷲尾庄司武久だったが保元の乱 (1156) で源義朝に従ったため所領を没収され蟄居した。鎌倉時代は赤木右京亮師忠以降赤木氏の居城であったが、天文年間 (1532 ～ 1554) には平松右京亮資直が居城した。平松資直は天正 2 (1574) 年三村正親に従い国吉城に籠城、その後備中松山城に転戦し本丸で戦死したとされる。

（氏平）



第 94 図　袈裟尾城跡縄張り図（1/2,000）

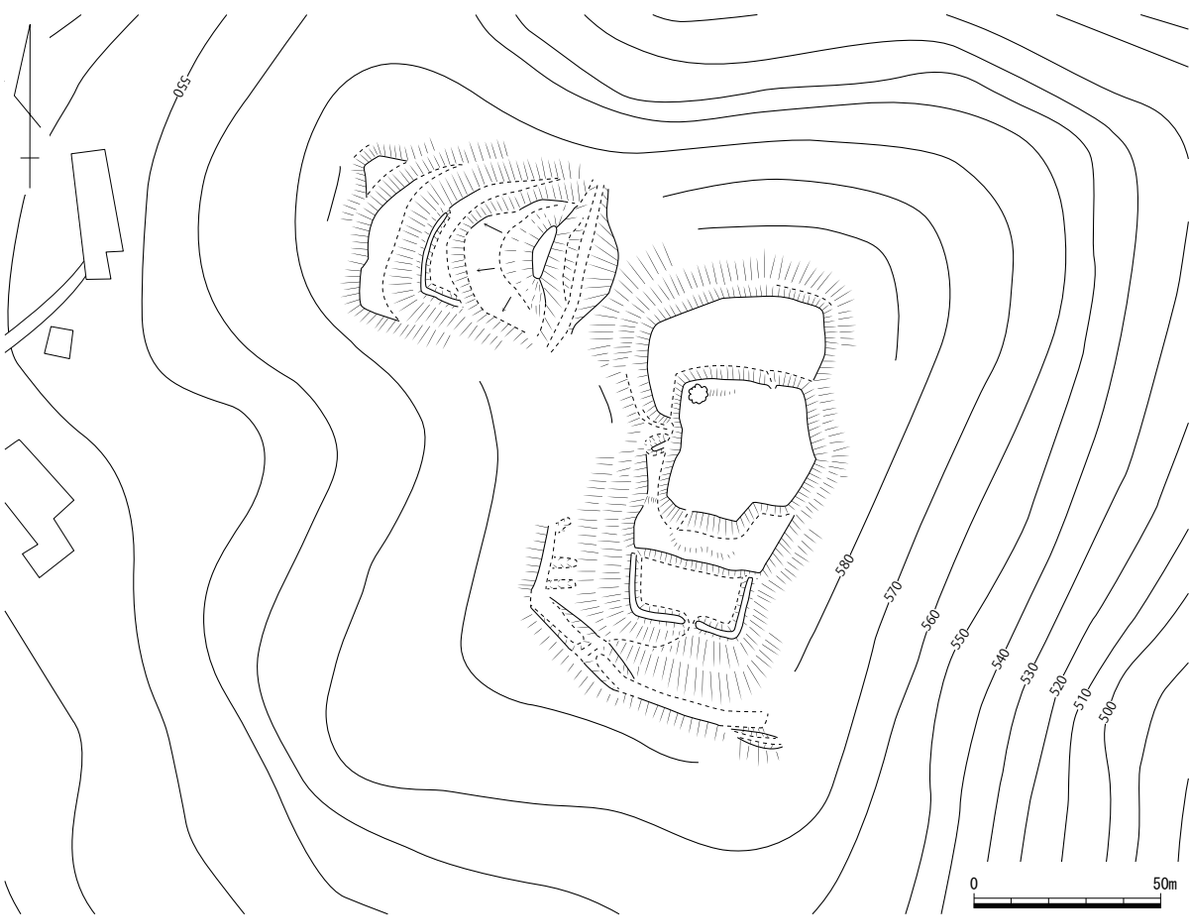
111　紫城跡（むらさき）　高梁市備中町平川　地図 16 左

立地　新成羽川ダムの南西側にあり、標高約 600 m級の山塊から北へ派生した尾根先端頂部に位置する。吉備高原上にあり、背後の北側は成羽川まで比高差が約 300 mを超える。

概要　大きくは頂部にある主郭と、その北側背後に 1 面、南側前面に 2 面の曲輪を連ねる山城である。主郭は 40 m四方のほぼ正方形を呈している。規模も大きく、精美な平坦を造っている。南東側辺には折れを持ち、北西側辺には井戸状の窪みがある。主郭前面にある曲輪の内、先端の曲輪は辺部を土塁で囲んでいる。主郭背後の曲輪も、長さ約 20 m、幅約 45 mと規模が大きい。この曲輪群は四周を高い斜面によって守られているが、斜面下の南側と西側に堀切を設けている。南側堀切には土橋状の施設があり、ここから主郭前面の土塁に囲まれた曲輪まで現在でも道が続いている。本来この部分を入口として意識していたものと思われる。西側堀切の先にある尾根平坦地にも、数面の曲輪が築かれており、中には土塁で囲んだ曲輪も含まれている。主郭の西側に虎口状の施設があるが、この箇所は西側曲輪群との連絡口であったであろう。

本城は全長こそ中型であるが、主郭周辺の曲輪の規模と造作がしっかりしており、平川地域の中核をなす山城として位置付けられると考える。

文献・伝承　『平川家由緒書』では平川氏の居城、『備中村鑑』に藤原資親在城とする。　（小林）



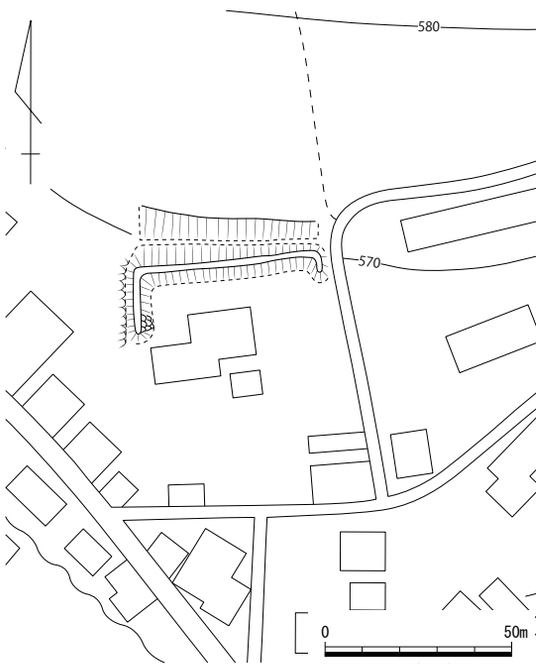
第 95 図　紫城跡縄張り図（1/2,000）

112　平川氏館跡（ひらかわしやかた）　　高梁市備中町平川　　地図 16 左

立地　備中町平川にある新岡山変電所から南へ張り出した尾根裾部に位置する。周囲を下郷川とそれに繋がる小川が流れている。

概要　かつて庄屋があった箇所に屋敷があったと伝わる。屋敷推定地の南側辺には、現在石垣が築かれる。この石垣がある位置が屋敷地の南端になることが想像出来る。しかし現在ある石垣自体は後生に築かれたものであるようだ。当地は現在畑地と宅地になっているが、その北側に竹林があり、ここに遺構が残っている。高さ 2.5 mの土塁と堀切が 1 条築かれる。堀切の深さは土塁の高さと同様で、しっかりした造りとなっている。土塁は両端とも南側に折れており、平面上ではコ字状を呈している。この土塁から南側辺の石垣までの距離は約 50 m強であり、おおよそ半町四方の規模が見込まれる。

文献・伝承　平川氏の館跡と言われる。　（小林）



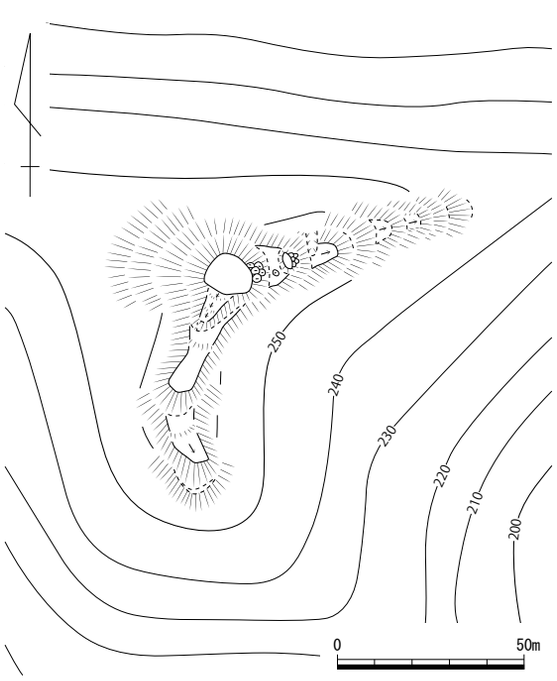
第 96 図　平川氏館跡縄張り図（1/2,000）

113　山根城跡（やまね）　　高梁市備中町平川・備中町布賀　　地図 16 左

立地　成羽川と長谷川の合流地点の南西側にあり、本地より南西側山塊から派生した尾根先端頂部に位置する。

概要　頂部にある主郭は、規模が 15 m弱四方でしっかりした平坦面を造る。この主郭を中心として、北東方向へ伸びる尾根筋と南西方向に伸びる尾根筋に曲輪を配した全長約 120 × 50 mの山城である。南西側の曲輪群は、２面が築かれ、主郭からスロープ状に伸びた通路が付随する。北東側の曲輪群は、長さ約 10 mの曲輪が２面築かれ、さらに造作のあまい平坦地が続く。切岸はそれぞれ３m以上で高く、１面目には、土塁が配されその斜面上に石列が築かれるなど重厚である。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「山根山城」として平川村にあり、城主は物部郷兵衛尉であったと書かれている。　（小林）



第 97 図　山根城跡縄張り図（1/2,000）

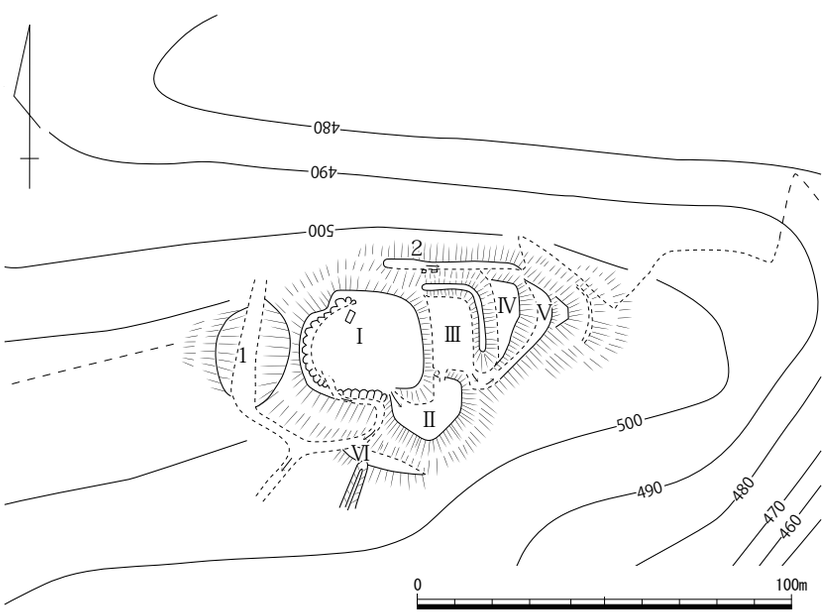
114　金子山（きんござん）城跡　　高梁市備中町平川　　地図 16 左

立地　備後国境へ通じる往路を挟んで展開する平川集落に対して、南西方向から東に突き出る丘陵鞍部に立地する。城から 600 m東に備後国境が位置し、境目の城として要衝をなしている。北東方向の丘陵鞍部には建武３・延元元（1336）年に安門郷に入部した平川氏の館跡推定地があり、平川氏が創り上げた戦国期城下町の一角をなす城と言えよう。

概要　標高約 510 mの丘陵鞍部を比高約５mの堀切１により切断して城域を画しており、その規模は東西約 100 mを測る。主郭Ⅰは東西、南北とも約 30 mを測る隅丸方形で、北西側が逆くの字形に屈曲しており、堀切を越えた侵入者に対して、横矢を掛けられる形状をなす。ただ、曲輪Ⅰは現状で石鎚神社の境内となっており、削平を受けているものとみられる。社の後方が約 4.5 mもの高さを持つことから構築当初は２段程度の曲輪が造成されていた可能性がある。城への進入路は東側が主であったとみられ、等高線に沿って５段の曲輪が造成されている。曲輪Ⅲから主郭Ⅰへの切岸は約５m、曲輪Ⅳ周囲に見られる切岸は高さ約６mを測る。曲輪Ⅱは主郭南東に位置し、主郭Ⅰ南東隅からの横矢が掛けられる。その北に位置する曲輪Ⅲは北辺から東辺にかけて高さ約１mの土塁が逆Ｌ字形に巡る。郭面は南北約 20 m、東西約 20 mを測る。南西隅に虎口が設けられているが、その西部に曲輪Ⅱが張り出し、横矢を掛けることができる。仮にこの曲輪Ⅲの進入に成功しても、侵入者は主郭Ⅰと曲輪Ⅱ、及び土塁上からの挟撃に曝される。これら曲輪群の北側には東西 35 m、幅２mの犬走り２が設けられている。また、曲輪Ⅱの南西にも幅 20 mを測る曲輪Ⅵが配される。

写真 36　遠景（北東から）

文献・伝承　『備中府志』には「城主平川左衛門尉景親、同弥次郎氏親本城大手にて世々武勇を顕し、小早川家より諱の字を賜る」とあり、平川氏が毛利氏と昵懇であったことがわかる。小規模ながら強固な防御施設を持つこの城は、平川氏の活躍の舞台にふさわしいものである。　　（和田）



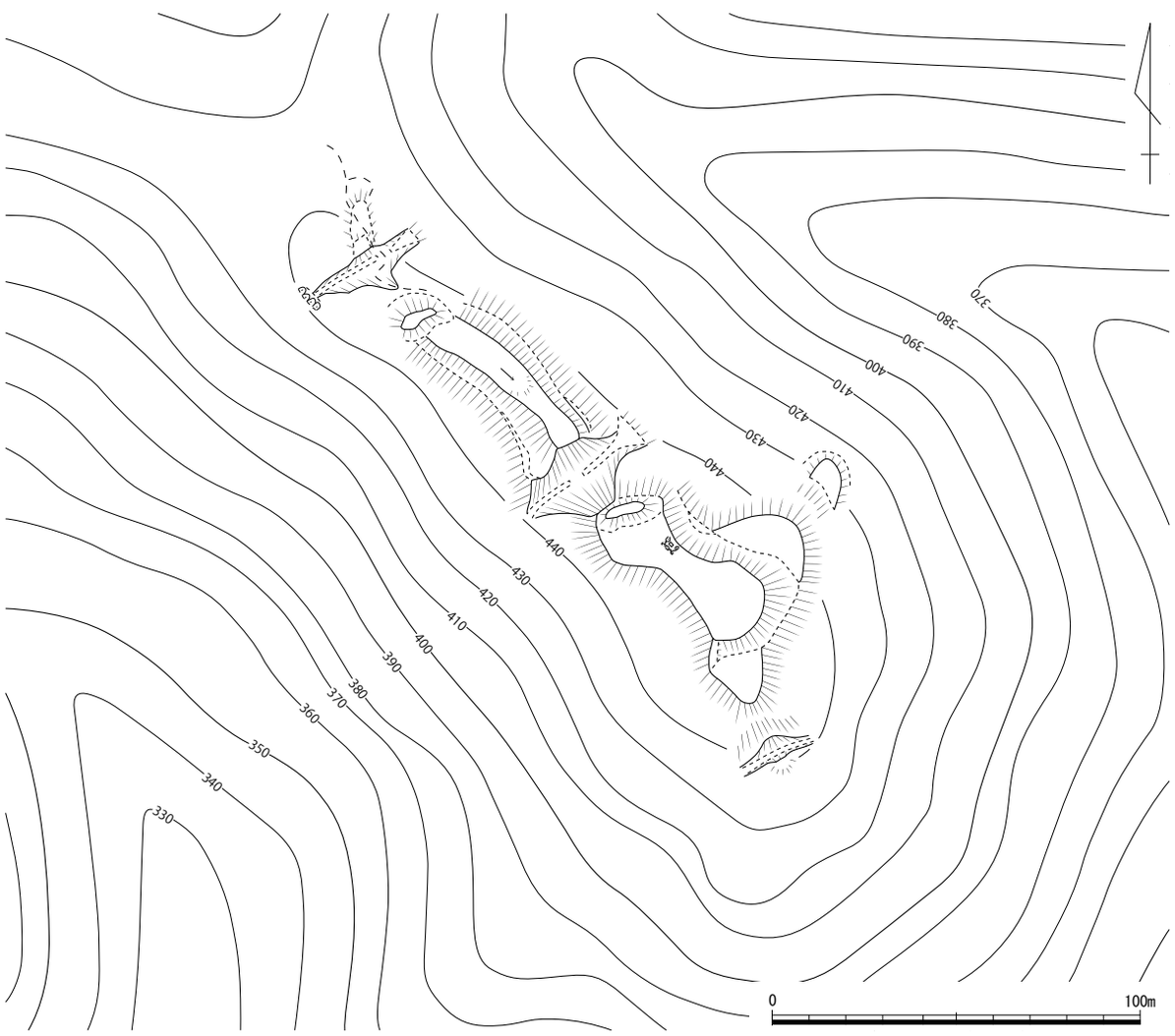
第 98 図　金子山城跡縄張り図（1/2,000）

115　大原田（おおはらだ）城跡　　高梁市備中町平川　　地図 16 左

立地　西から東へ流れる成羽川支流後谷川に向かって南東に延びる丘陵頂部、標高 450 mに位置する。狭い谷の奥にあって、南への眺望は限られ東西は山塊を見渡す格好である。直線距離で東約 2.7km には山根城跡、北西 2.3km に金子山城跡が位置する。

概要　南北 180 m、東西 60 mの規模で、頂部に 2 面の大きな曲輪を配置し、両端と中央を堀切で切断する。北から尾根鞍部を東西 32 m、深さ 3 mの堀切で切断し、高さ 4 m、長さ 15 mの土塁を設けてその南を長さ 50 m、幅最大 9 mの細長い曲輪にしている。続いて東西 37 m、深さ 5 mの堀切を掘りこみ、その南にまた高さ 1.5 m、幅 20 mの土塁があり、土塁の南の尾根頂部に長さ 40 m、最大幅 18 mのひょうたん形の曲輪 1 つを設けている。ひょうたん形曲輪の東側は、切岸を経て幅 25 m、長さ 11 mの爪形の曲輪があり、その下方にはもう 1 面曲輪が確認できた。ひょうたん形曲輪の南側は 1 つ曲輪を経て 5 mの切岸と深さ 5 mの堀切 1 条で端を画している。

文献・伝承　『古戦場備中府史』には城主として大原田又十郎の名がある。『備中村鑑』は城主として石井主計の名を挙げている。『備中集成志』では 2 名の後に宮脇玄蕃の名を記す。　　（氏平）



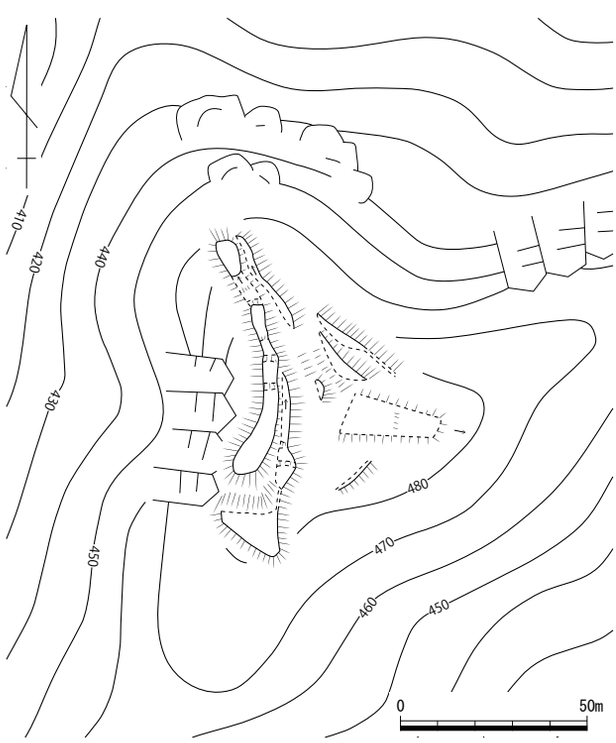
第 99 図　大原田城跡縄張り図（1/2,000）

116　勝負（しょうぶ）城跡　　高梁市備中町布賀　　地図 16 左

立地　南西から延びる山塊の頂部標高 480 mに立地する。北西側眼下に西から東へ流れる成羽川と南から北へ流れる長谷川の合流地点を望む。北・西は急峻な崖、東側も深い谷が入るため接近すら困難で、南西の尾根筋から近づくことになるが、現在の布賀集落から山道を約 2 km 進んで到達する。約 5 km 西に紫城跡、約 2.5km 北に中村城跡、約 5 km 西の成羽川中に徳治 2 年 (1307) に航路が完成したことを記載した碑文がある笠神の文字岩、約 2 km 南に市指定史跡応永銘方柱碑が位置する。

概要　南北 90 m、東西 50 mの小規模な山城で、南北に細長い尾根頂部全体を細長い主郭にして、最北端に 1 つ曲輪を築き、主郭の南に曲輪 1 つ、東側に帯曲輪 2 つ、さらに東側に曲輪 1 つを設ける。主郭は 20 × 5 mで南北に細長く、中央部が高い。北側は北端の曲輪との間に小規模な切岸を設けている。西側は天然の断崖である。人工的な加工は少なく、自然地形を生かしているものと思われる。北端の曲輪は眺望が良いが、尾根上は最小限の加工に止まる。頂部主郭に並行して帯曲輪が 2 か所存在するが、曲輪内は高低差もあり平坦ではない。頂部から東側へは小曲輪と切岸を設け、10 m下がった東側の尾根上には東西 25 ×南北 7 mの曲輪がある。さらに東の尾根先端へ進んでみたが、地形の改変は認められない。この曲輪の北・南側谷部に段状の加工があるが、植林のための段の可能性が高い。当城は眺望に優れるが、作為の跡が少ないことから、見張り台的な意味を強く意識した城と言えよう。

写真 37　勝負城跡登城口（南から）



第 100 図　勝負城跡縄張り図（1/2,000）

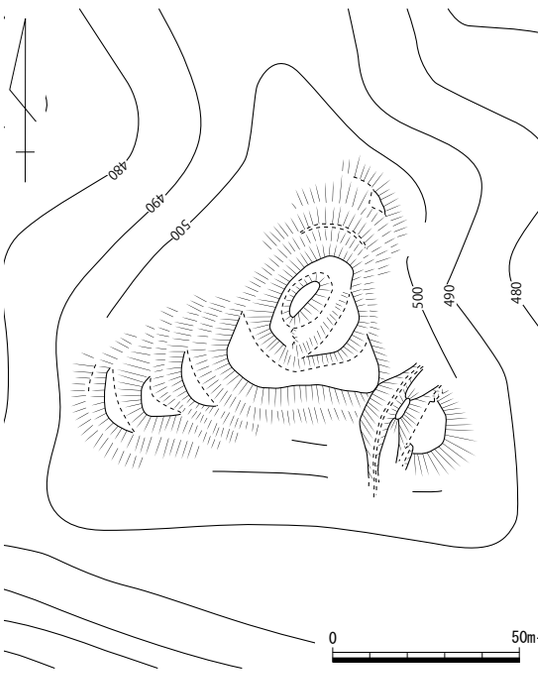
文献・伝承　『古戦場備中府志』によると、城名を菖蒲城と記し、城主を平川弾正忠正親としている。紫城主平川久親の養子で、備後国神石郡志摩利郷領主の高屋原氏から迎えたという。『備中府志』などでは平川久親は天文 9（1540）年尼子勢の侵攻を紫城で迎え撃ったとの記述があり、平川正親もこの頃勝負城に在城していた可能性が高い。なお、『川上郡誌』では城名を「勝負城址 (一ニ菖蒲城)」と記載しているが、城名が変わった理由は不明である。城跡は整備されていて、「菖蒲城址」の看板が城南側に設置され、登城路が付けられている。　（氏平）

117　中村城跡（なかむら）　高梁市成羽町布寄　地図 16 右

立地　成羽川の北東側にある標高約 520 m級の山塊頂部に位置する。

概要　頂部に長さ約 15 m、幅約５mの小さい主郭を置き、そこから３方向に派生した尾根筋に遺構を築いた全長約 100 mの山城である。主郭の南側は、長さ約 10 m、幅約 40 mと比較的大きい腰曲輪を廻らせ、そこから南西方向の尾根筋には３面の曲輪を築いている。南東側の尾根筋には、高さ約５mの掘切と土塁を築き、さらに高さ約３mの切岸と幅広い曲輪を配置している。このように現西布寄集落のある主郭の南側は、各種遺構によって固められ防御が優れている。これに反して主郭北側の尾根筋は、段のような曲輪が２面ほど造られるのみであり、造作を最小限にとどめている。

文献･伝承　『備中巡禮畧記』には、「布寄村中村城」は、武内宿稱三代孫が在城したとある。　（小林）



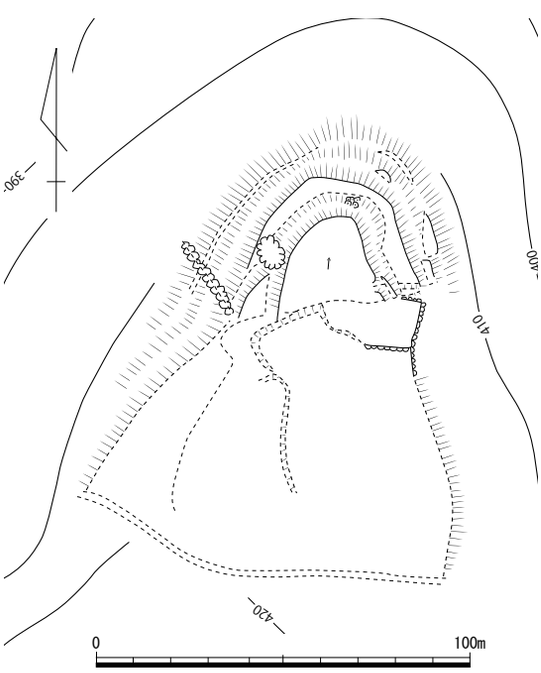
第 101 図　中村城跡縄張り図（1/2,000）

118　長地城跡（おさじ）　高梁市成羽町長地　地図 16 右

立地　成羽川北側の南西に張り出す高地の北部で、北へ下がる台地北端標高約 420 mに位置する。

概要　舌状に張り出す台地先端部に造成した主郭と帯曲輪からなる山城あるいは城館である。主郭は南北 20 m、東西最大 25 mを測る。主郭南東端に土橋と虎口状の部分があり、ここが登城口であったと思われる。主郭の２m下側に最大幅５mの帯曲輪が廻り、その下方に小規模な曲輪をいくつかと犬走りを配する。南側は平坦に造成され、曲輪の痕跡は確認できない。主郭虎口状部分の南に自然石を積んだ石垣を持つ平坦面があり、南側全体が近世以降に削平されていた可能性が高い。

文献・伝承　『古戦場備中府志』などでは赤木弾正景忠・赤木丹波久忠が城主で、大内義隆 (1507 ～ 51) に従い出雲に出兵して軍功があったため、出雲に知行を賜り景忠の子孫が相続したとある。（氏平）



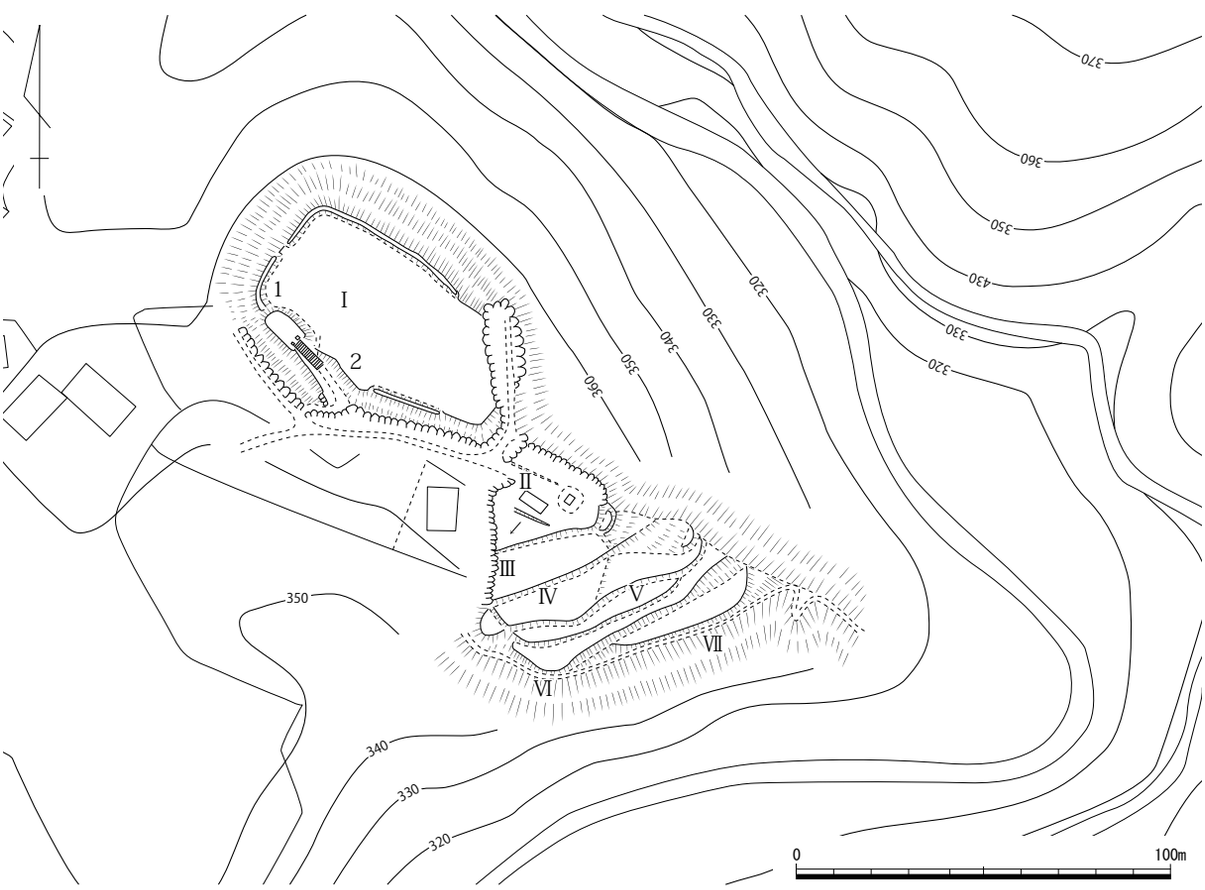
第 102 図　長地城跡縄張り図（1/2,000）

119　丸山城跡（まるやま）　　高梁市宇治町穴田　　地図 16 右

立地　宇治町穴田の郷上集落と郷下集落を南北に分断するように延びる、台地端頂部に位置する。穴田集落は中世の穴田郷に比定され、承久３（1221）年、承久の乱での功績により当地へ入部した赤木氏の本貫地である。城のすぐ東には島木川が南流し、川沿いの道を下れば成羽の中心街へ出ることができる上、道沿いには戦国期の三村氏居館跡が、成羽川との合流点正面には天文年間に三村家親が入城した鶴首城跡が位置する。これらのことから戦国時代においても赤木氏の本貫地である穴田郷と成羽中心部をつなぐ交通の要衝に位置する城であったと言えるだろう。

概要　本城は台地頂部を平坦に造成した曲輪Ⅰを最奥に、その正面にⅡからⅦの曲輪を階段状に連ねた連郭式の山城である。曲輪Ⅰは長さ最大長 70 m、最大幅 35 mを測る。北東隅を削平されているため断言はできないが、おそらくは長方形を基本プランとする曲輪であろう。周囲には高さ 0.5 から１mを測る土塁が巡る。曲輪西南隅には、比高２mを測る櫓台と思われる方形の高まり１がある。また、そのすぐ東に横矢２があり、ここと櫓台の間が城への入口であった可能性が高い。曲輪Ⅰの周囲には高さ約５mを測る切岸が見られる。

文献・伝承　『川上郡誌』には天正年中に赤木忠直が築城した伝承が紹介されている。周辺には「根小屋」という屋号を持つ家もあり、構造から見ても戦国時代後半に成立した赤木氏一族の山上居館と見ることが可能か。　（和田）



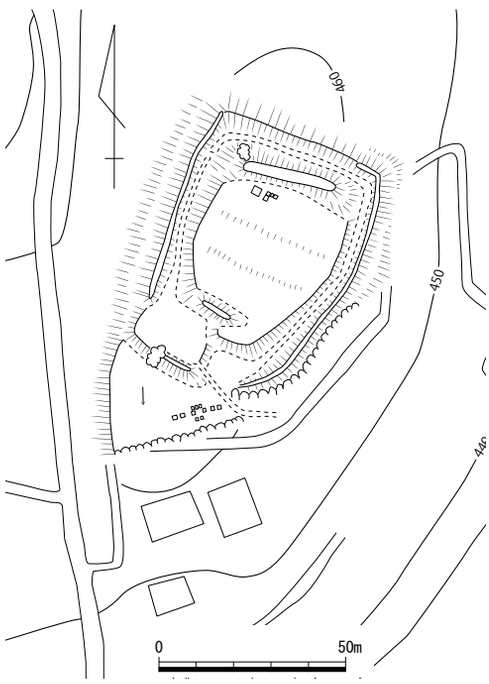
第 103 図　丸山城跡縄張り図（1/2,000）

121　馬之城跡（まん）　　高梁市松原町松岡　　地図 17 左

立地　陣山から東に続く高原の南縁部に立地し、標高は460 mを測る丘陵上に位置する。

概要　主郭の西・北・東側を囲んで堀を掘削し、南側に虎口を設ける城館。主郭は南北34 m×東西37 mを測り、緩やかに南に低くなる。堀の西側は堀底からの比高差２mで、堀底は南へ向かって緩やかに下がり、北西隅付近に土橋を１か所設ける。北側は主郭側に高さ最大1.5 m、堀底からは最大３mの比高になる土塁を設置する。堀底は東へ向かって下がる。堀の東側は比高差１mで、堀底は南側へ低くなる。主郭北西側に現代の祠があり、その東側に宝篋印塔の笠部と基礎が重ねられていた。本城の最大の特徴が、主郭南面の食い違い虎口である。最南端に高さ２mの土塁、続いて東西 18 m、南北 12 mの曲輪、その北側に高さ約 1.5 mの土塁を構築する。

文献・伝承　『高梁市史』では、永禄年間、尼子氏の侵攻に備えて築かれたという言い伝えを載せる。　（氏平）



第 104 図　馬之城跡縄張り図（1/2,000）

123　高ノ盛城跡（たかのもり）　　高梁市成羽町佐々木　　地図 17 左

立地　屈曲しながら東西方向に走る成羽川が領家川と合流する地点の東側隣の山塊に位置する。標高約 480 m級の鵄ノ森山山頂が該当する。

概要　山頂付近のみを造成した全長約 70 mの小さな山城である。頂部の曲輪は、南北約 30 m、東西約 20 mの規模であるが、平坦面はしっかりしていない。この曲輪の西側斜面は、露岩がむき出す箇所が多い。頂部曲輪を取り巻くように緩やかな斜面が続き、四周に帯曲輪状の狭い平坦地がある。この平坦地の南東側斜面に石積み遺構が一部に残存している。石積みのない斜面はほぼ全集が切岸で守りを固めている。本城のある山塊は絶好の眺望であり、規模の小さいことから見張り台のような役割があったと考えられる。

文献・伝承　『備中村鑑』には、佐々木村の「高森城」とあり、佐々木近江守在城とある。　（小林）

第 105 図　高ノ森城跡縄張り図（1/2,000）

124　三村氏居館跡（みむらしきょかん）　　高梁市成羽町成羽　　地図 17 左

立地　東西に走る成羽川の北側に位置し、現高梁市成羽町の町並みの中にある。ほぼ真南に鶴首城跡のある山塊を眺めることが出来る。

概要　南北約 200 m、東西約 120 mの範囲で、南東側が突出した形の居館跡である。「御茶屋」という小字を中心に、四周に「御茶屋北土手」「御茶屋東土手」「御茶屋南土手」「御茶屋西土手」の地名が残る。さらにその外側に、「北堀」「東堀」「南堀」「西堀」の地名が囲んでおり、本来は土塁と堀によって囲まれた大規模な居館であったことが窺える。現在では一部に土塁の跡が残るものの、地形区画のみがかつての名残を見せている。

文献・伝承　天文２(1533)年に三村家親が築城したと伝わる。「成羽城」という別称がある。「備中兵乱」により三村氏が滅ぶと、毛利方の山崎氏が代官として在城した。　（小林）

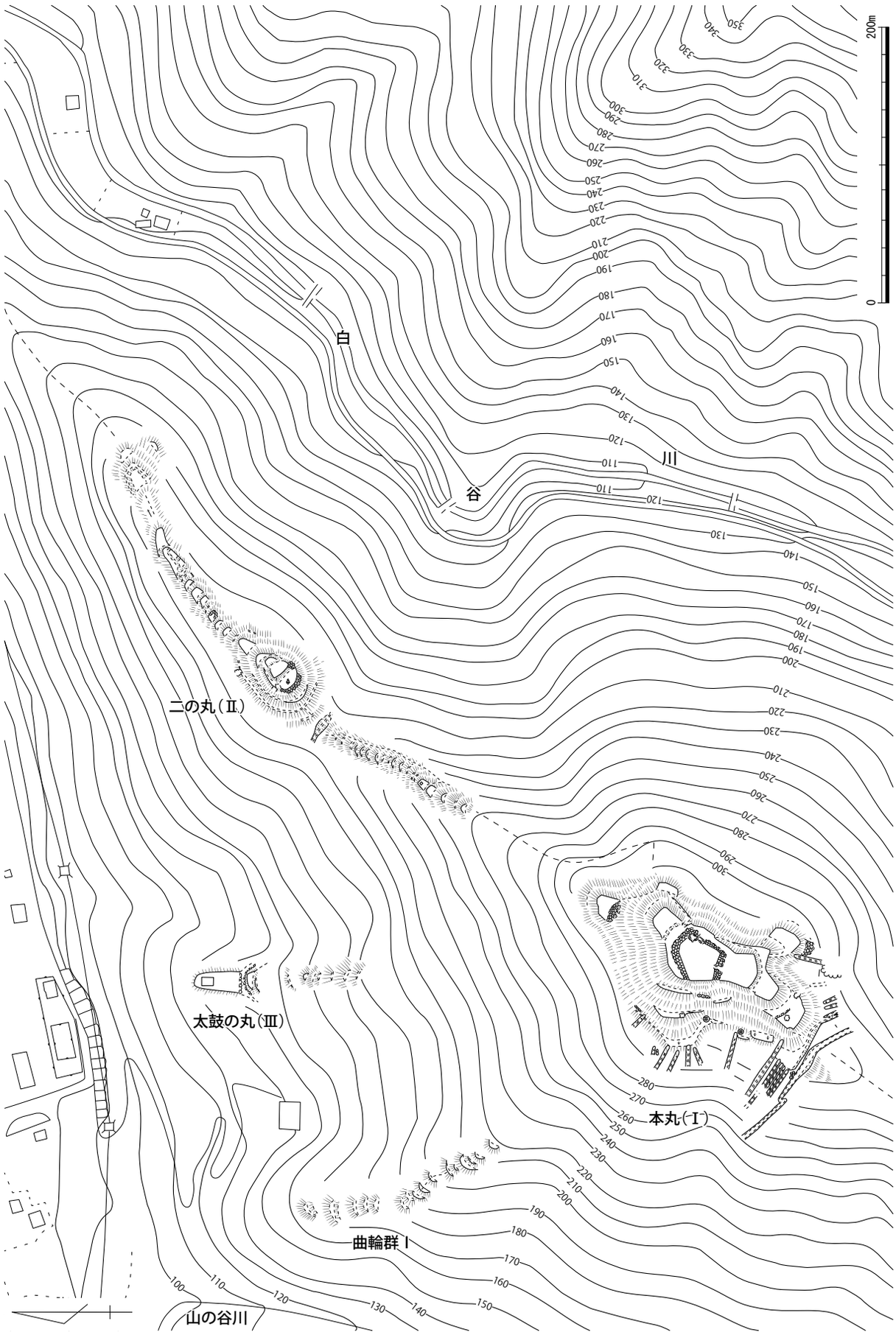
第 106 図　三村氏居館跡平面図（1/2,000）　文献 91 を加筆

126　鶴首城（かくしゅ）・古鶴首城跡（こかくしゅ）　　高梁市成羽町下原　　地図 17 左

立地　鶴首城跡は高梁市成羽集落を見下ろす、標高 320 mの鶴首山山頂から尾根筋にかけて位置する。成羽集落（中世当時は成羽郷）からの比高差は 240 mを測る。集落に近い太鼓丸からの入山路を経て本丸（Ⅰ）に至るには、二の丸（Ⅱ）を越え、尾根筋を伝って登坂する以外にない。城の北に面して成羽川が東流し、城から東 5.6㎞の地点で高梁川と合流している。成羽川沿いには古来、備中と備後をつなぐ要路が走り、東城、三次といった備後北部の要衝に通じていた。加えて成羽川は古くから河川交通が盛んであった。城から西へ約 13㎞ 遡った場所に重要文化財「笠神の文字岩」があり、鎌倉時代の徳治２（1307）年、難工事の末に船路開発に成功した経緯を記した碑文が刻まれている。中世前半には、後の高瀬舟に通じる船運が開かれていた証左と言えるだろう。さらに城の東から南にかけては成羽川へ向かい北流する、白谷川により東の愛宕山山塊から隔絶される。城の西は山の谷川が北流し、天然の堀となっている。この城はこれら谷河川を取り入れて防御線としているものと思われる。以上、鶴首城跡は備中国中央部の陸路・船路を押さえる、天然の要害として成羽郷に君臨していた。

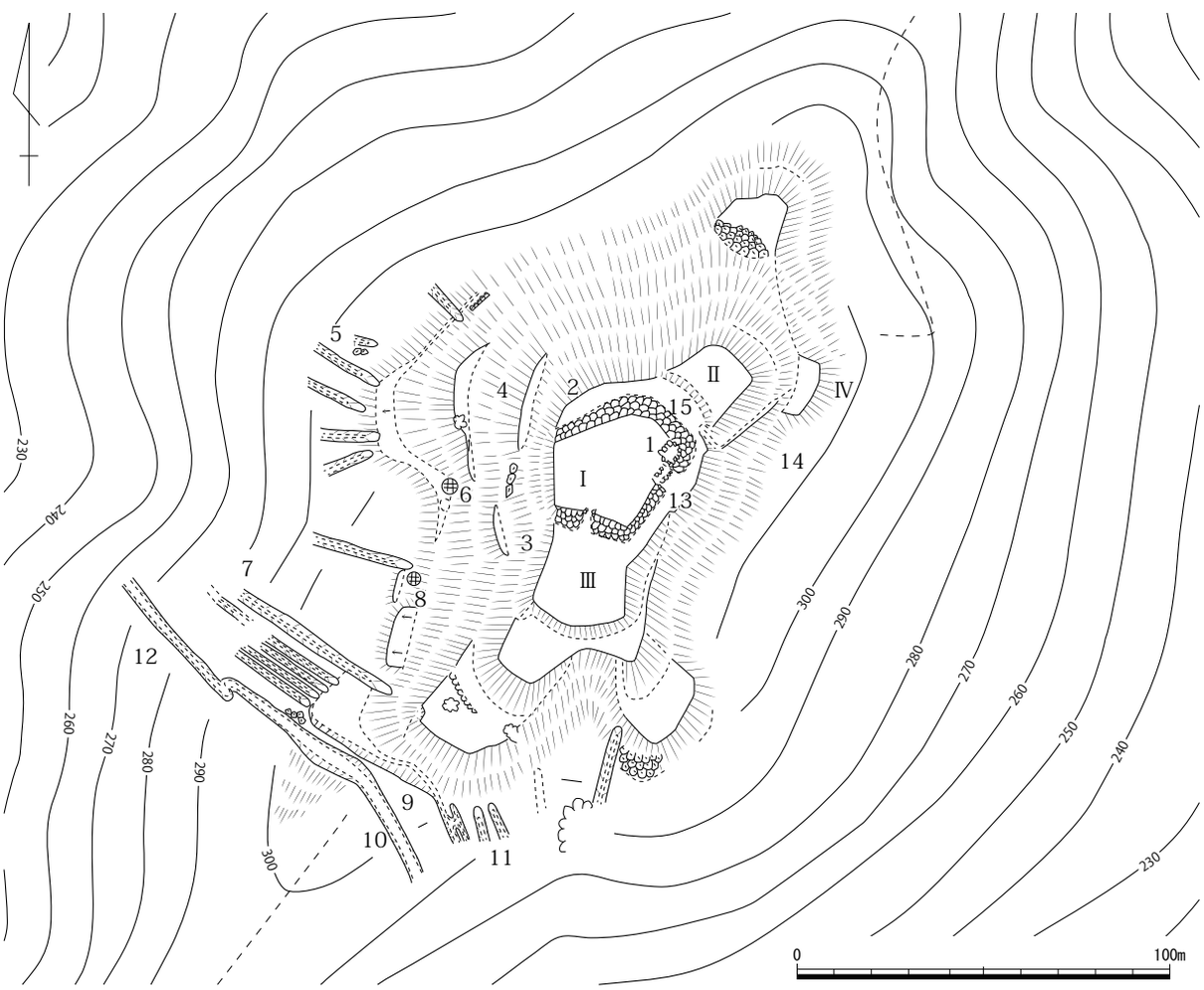
概要　城域は南北 500 m、東西 560 mを測り、備中国では備中松山城跡と並び最大規模の山城である。城は鶴首山山頂から北東方向に向けて扇形に展開する連郭式山城である。山頂に本丸（Ⅰ）を構え、その北東 400 mの地点に二の丸（Ⅱ）を、北 300 mの位置に太鼓の丸（Ⅲ）と呼ばれる曲輪を設けているが、これらは連接するのではなく、個別に 10㎡～ 30㎡の小さな曲輪群を伴い、相互に独立して築かれている。だが、このことはこれら曲輪群が別個に機能していたということを示すのではない。まず、二の丸は成羽川下流方向に向かって北東に位置し、30 を優に越える曲輪群を連ねている。明らかに高梁川下流方向への防御を目的とした曲輪群と言えるだろう。その西の太鼓の丸は、城内で唯一成羽川の上流、下流の両方向へ眺望がきき、敵軍の動きを知らせる見張り台的な機能を果たす曲輪と言えるだろう。なお、今回の調査で太鼓の丸の南側と、その西の尾根筋にも曲輪群が展開していることが明らかとなり、本丸から見て北西、北、北東の全ての尾根上に曲輪群が展開していることが判明した。このうち曲輪群Ⅰは西に山の谷川を望みながら登坂する尾根上に築かれ、現状で 15 の小曲輪からなる。これら曲輪群は最大でも 10㎡を超えることがなく、１、２名が籠もるか、旗指物を置く程度でのものであったと思われる。そして本丸はこれら曲輪群からはやや離れた鶴首山山頂に位置する。後述するとおり、本丸は高い切岸と虎口、畝状竪堀群、横堀、竪堀と連接する複雑な形状の堀切により防御される堅固な要害である。さらに本丸の主郭は野面の石積みにより区画され、礎石と考えられる石も点在することから、建物の存在を想定できる。と同時に、成羽集落から鶴首山山頂を見上げた本丸は、集落の拠点として人々の目に写り、支配のシンボルとしても機能したであろう。このように、鶴首城跡の曲輪群は山塊全体に展開しつつ、総合的に城全体の防御力・象徴性を高めていたことにこそ、その特性を見いだすことができる。

なお、本丸から南西におよそ１㎞離れた位置に、鶴首城の溜め井とされる通称「武士池」と呼ばれる池がある。しかし、後述するとおり本丸にも水の手として井戸が二つあり、城と「武士池」との間の山道には明確な防御施設が存在しない。「武士池」と鶴首城の間の距離は、備中松山城の小松山城と大池の間の距離の２倍超に相当することと合わせ不審な点も多く、両者の関係性についての判断は保留にしたい。



第 107 図　鶴首城・古鶴首城跡縄張り図（1/4,000）

次に本丸の構造を見ていこう。本丸は全長 140 mを測り全部で８面の曲輪群からなる。本丸は周囲から８～ 10 mを測る急峻な切岸により突出している。本丸中央にある主郭Ⅰは平面六角形で、南北とも 30 mを測る。現状で４つの礎石が見られ、そのうち三つは南北に並ぶことから、礎石建ちの建物が建っていた公算が大きい。主郭はその周囲に高さ１mの野面の石積みを伴う。石積みは主郭を全周せず、さらに立ち石の使用も見らない上、北側はシノギ積みとなっている。主郭北東隅には５m四方の石積みを伴う高まり１があり、形状から見て櫓台と見られる。主郭の北は２段に造成される曲輪Ⅱが、南には方形の曲輪Ⅲがある。曲輪Ⅲの南西から南東にかけて３面の曲輪が階段状に造成されている。比高差はそれぞれ７mを超える。主郭西側には幅２～５mの犬走り２、３、４がある。ここから一段下がった位置に畝状竪堀群５が展開する。本丸南西には全部で７本からなる畝状竪堀群７と井戸８がある。本丸は２条の堀切９、10 により後背の丘陵から切断される。堀切９の東端は横堀を交えて畝状竪堀群 11 と連接している。また、堀切 10 は全長 60 mを測る長大なものである。その北西側隅は竪堀 12 と連接してさらに 50 mも続き、ほぼ完全に丘陵を切断している。これら防御施設は極めて技巧的と言え、本丸の西から南に掛けての守りを固めている。一方、城の北の守りを固めるのは連続する虎口と櫓を組み合わせた強力な防御施設である。城北側からの進入路である北東隅の虎口 13 へ到達するには、曲輪Ⅳから犬走り 14 を通ることとなる。その間曲輪Ⅱから横矢がかかる。ここを突破しても虎口 15 が待ち受ける。主郭Ⅰに入るにはここで２回折れ、主郭Ⅰ北東隅下の隘路

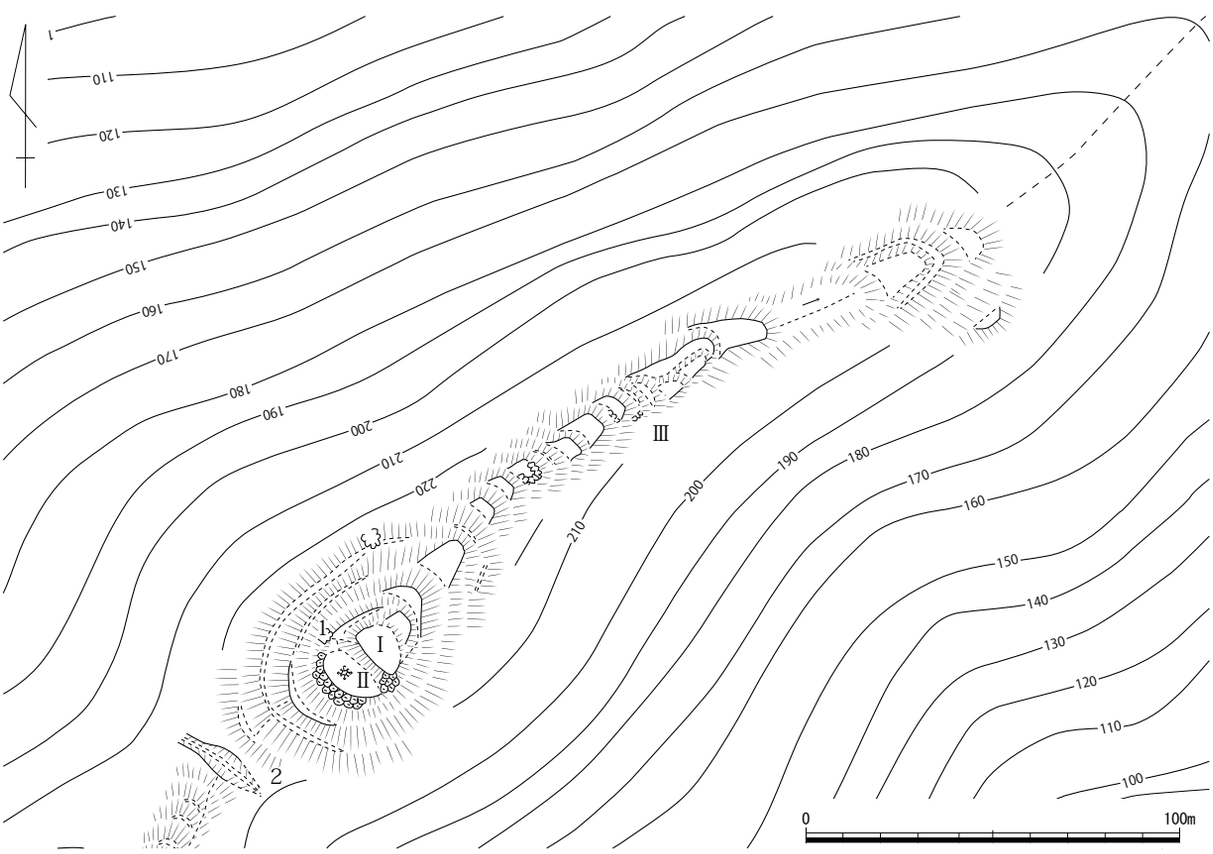


第 108 図　鶴首城跡本丸縄張り図（1/2,000）

を進む以外にない。さらに虎口 13 でもう一度折れ、進入路は都合３回折れることとなる。しかも曲輪Ⅱに進入以降、常に櫓１からの横矢に曝され続ける。加えて、虎口 13 のすぐ南側に礎石が見られ、この位置に門が建っていた可能性が高い。このように、北方向から主郭Ⅰへ入るのは極めて困難であったと想像できる。前述したとおり、本丸東方向は白谷川により隔絶されているだけでなく、極めて急峻であり、その登坂は困難であったと思われる。

次に二の丸について述べていこう。二の丸は標高 220 ｍの尾根上に位置する。主郭面は周囲から８ｍを測る切岸により突出し、曲輪Ⅰ、Ⅱの２面からなる。曲輪Ⅱには井戸１があり、その曲輪の南辺と北東隅に野面の石積みが見られる。主郭面の北西から南に掛けては３重の犬走りが巡る。二の丸の南西は比高２ｍを測る堀切２により丘陵から切断されるが、本丸方向に向かって曲輪は連続している。二の丸の北西方向には９つの郭面Ⅲが階段状に造成されている。各曲輪群の比高差は 1.5 ｍほどに収まり、地山の緩い傾斜に従って築かれていることがわかる。尾根の先端に向かうにつれ、曲輪の面積が大きくなる傾向にあり、最も大きな曲輪は長さ 20 ｍを超える。その先端は自然地形に近く、明確な造成の痕跡を見いだしがたい。

さて、位置関係から、二の丸は成羽川下流方向への守備を担った曲輪群と考えられる。先述したとおりほぼ山麓から本丸へ向かって、30 面を超える曲輪群を連ねて防御を固めている。二の丸の主郭面はその中核に当たり、尾根の鞍部に位置し眺望にも優れることから、この方面の指令所的な機能を担っていたと推察される。また、堀切を超えて本丸へ向かって曲輪が続くことから、鶴首城の基本的な縄張りにおいて二の丸と本丸をつなぐラインが防御線として最重視されていたと推察される。本丸についても北東方向からは２重の虎口と、連続する横矢により、その侵入を強力に防いでいたことは



第 109 図　鶴首城跡二の丸縄張り図（1/2,000）

先述したとおりである。つまり、鶴首城跡は北東方向からの進入に対して、その強固な防御機能を発揮できるよう縄張りされているのである。

ところで、二の丸の主郭についてその単純な構造から、鶴首城跡に先行する古い山城の痕跡であるとの教唆を島崎東氏から得た。確かに二の丸の主郭は、堀切と切岸のみで防御する中世前半期の城と見なせなくもない。島崎氏はまず鶴首山鞍部にこの二の丸の母体となる城が築かれた後、戦国期に至って本丸を山頂に移し、連郭式山城として改造したという。発掘調査を経ないとは詳細は明らかにはできないが、この説を採る場合、二の丸主郭を古鶴首城跡と呼ぶことは許されよう。

文献・伝承　『備中府志』では鶴首城の築城者として河村四郎清秀の名を挙げている。清秀は源頼朝による奥州征伐の際の軍功により、備中国成羽に知行を得、この城を築いたという。時に文治５（1189）年のことと伝える。ところで、この鶴首城と言う名称も、元和元（1615）年に成立したとされる軍記物、『備中兵乱記』が初出である。一次資料での呼び名は成羽城、成羽の城、あるいは成羽である。しかも、『備中兵乱記』中にも成羽城と呼称され、混乱が見られる。

『川上郡誌』では天文２（1533）年、備中国星田荘から成羽へ転進した三村家親が入城し、城域を拡張したとする。先述の島崎氏の説に従うなら、連郭式山城としたのはこの家親入城の際のことであろうか。家親は毛利氏傘下となり、この城を根城に備中国の制覇に乗り出す。永禄４（1561）年に、家親は備中松山城へ移り、この城を一門衆の親成に任せた。このころから一次資料にもその姿が見え始める。永禄２～４（1559 ～ 1561）年、安芸国の毛利隆元が側近の赤川元保・児玉就忠にあてた書状にその名が見えるのが初見である。

さて、鶴首城は天正２～３（1574 ～ 1575）年に勃発した備中兵乱の舞台として再び記録に登場する。天正２年 12 月 25 日付けで厳島神社神主の棚守左近衛将監あて発給された『小早川隆景書状』によれば、翌日中には手要害（国吉城）、成羽城（鶴首城）へ攻め寄せることを決めたと伝えている。翌天正３（1575）年正月７日付け『吉川元春感状』によれば同日までに成羽城（鶴首城）が開城・撤退していたことが記されている。同年６月には備中松山城が落城し、その後の論功行賞において鶴首城主の地位は親成に安堵された。

天正７（1579）年、備前国と美作国の一部を治めていた宇喜多直家は毛利氏と断交して、織田信長と同盟を結ぶ。ここに備前・備中・美作国は毛利・織田（宇喜多）両勢力の緩衝地帯として緊張状態となる。天正 10（1582）年 4 月 28 日付けで国吉城主の口羽少輔重郎宛に発給された『毛利輝元書状写』によれば、４月 25 日に賀陽郡冠山城が攻め落とされるにおよび、国吉城、成羽城、備中松山城の守りを固めるよう指示している。鶴首城本丸に見る技巧的な畝状竪堀群や堀切、石積みを伴う主郭、二つの虎口と櫓を組み合わせた防御線の構築は、その形態から見てこの際に改造されたものである公算がある。

鶴首城の廃城時期について記す一次資料はない。『川上郡誌』では元和３(1617) 年に鶴首城城下の成羽陣屋に山崎家治が入封したと同時に廃城となったとする。本丸主郭Ⅰの石積みの築石は、曲輪Ⅱ、Ⅲに散在している。石積みは特に隅角が集中的に破壊され、破城を受けたことは明らかである。これは元和元（1615）年に発布された一国一城令に対応した処置と思われる。一方、成羽陣屋の一部の石垣隅角部は算木積みと角脇石の充填が良く発達しており、築城開始は備中国が幕府領であった慶長期まで遡る可能性が高い。これらの状況から鶴首城は元和３年を遡り、元和元年までには廃城となっていた可能性が高い。（和田）

写真 38　遠景（北から）

写真 39　本丸主郭 I 石積み（南から）

写真 40　本丸畝状竪堀群 5（南東から）

写真 41　本丸堀切 10（北西から）

写真 42　本丸虎口 13（西から）

写真 43　本丸虎口 15（西から）

写真 44　二の丸曲輪 I（南から）

写真 45　太鼓の丸（南から）

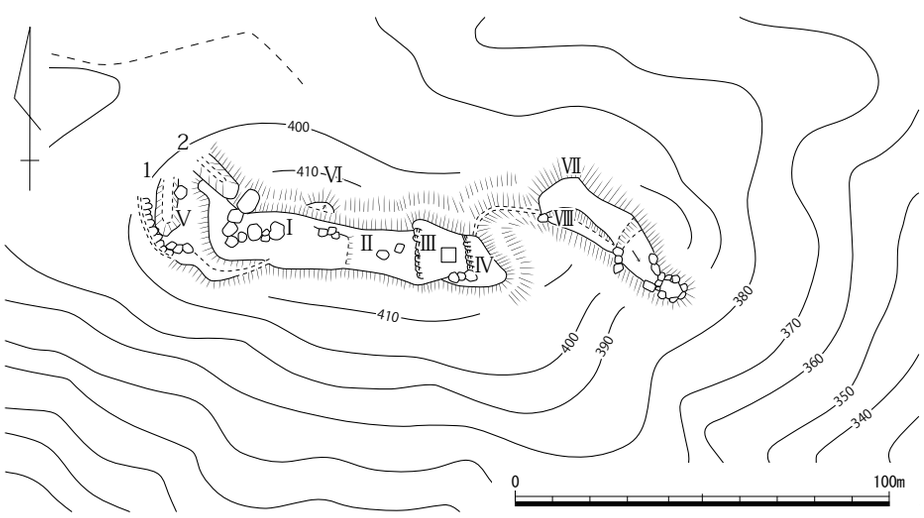
127　阿部深山城跡（あべのみやま）　　高梁市落合町阿部　　地図 17 右

立地　成羽川と高梁川の合流点地点から成羽川沿いに遡ること約２km、落合集落を南に見据える標高 420 mの山頂に位置する。集落からの比高は 240 mを測り、備中松山から成羽へ至る街道を見下ろす要衝にあると言える。ただ、成羽地区並びに備中松山城方面への眺望は開けておらず、その機能は街道警護の役割に集中していた公算が大きいのではないか。

概要　城は東西 140 m、南北 30 mを測る連郭式山城である。最高所に上郭を置き、その東に 10 mほど下がった位置に下郭と呼ばれる曲輪が展開している。上郭はⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの４つの曲輪からなるが、随所に露岩が見られ、これらを取り入れた縄張りとなっているものと見られる。特に曲輪Ⅰ北東には多数の巨石が見られる。そのすぐ北東並びに東側に竪堀１、２が見られ、いずれも深さ 1.5 mほどを測る。位置から見てこの二条の堀を持って堀切としている公算もある。曲輪Ⅰの南西には腰曲輪Ⅴが付随しており、この方面の防御を固めている。また、曲輪Ⅰの北側に、幅５m程の小曲輪Ⅵも見られる。曲輪Ⅱ、Ⅲは露岩によりその累線を画しており、それぞれ、幅 10 m、長さ 10 ～ 15 mを測る。主郭最東部にある曲輪Ⅳは平面くさび形を呈する。下郭はこの曲輪Ⅳから 20 m離れた位置にある。下郭は曲輪Ⅶ、その南に取り付く腰曲輪Ⅷからなる。曲輪Ⅶの南東端は見張り台のような施設であるか。

文献・伝承　『萩藩閥悦録』元亀２（1571）年正月 29 日付毛利元就・小早川隆景連名粟屋就方あて発給文書によれば、浦上・三好連合軍との戦いにおいて、備中衆（庄元資・三村元親）が児島へ渡海するに及び、敵勢の激しい児島、あるいは北の多治部城（塩置山城）のいずれにも軍勢を差し向けることができるよう、深山において陣を敷いた上、双方のうち急ぐべき方面に備後衆を引き連れ出陣せよ、と命じている。この深山に敷かれた陣所こそが阿部深山城のことと思われる。加えて『備中兵乱記』に見える天正３（1575）年６月、備中松山城落城に際して城を脱出した三村元親が数日さまよったとされる深山もこの城の付近を指すと思われる。　（和田）

写真 46　上郭状況（北から）

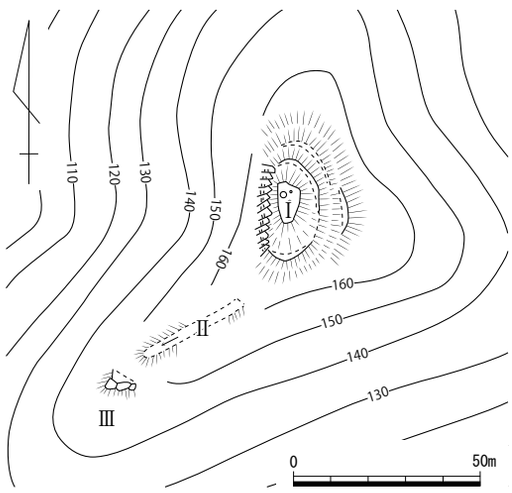


第 110 図　阿部深山城跡縄張り図（1/2,000）

128　鍋阪（なべさか）城跡　　高梁市落合町福地　　地図 17 左

立地　成羽地区中心街の入り口、成羽川が北へ流路を変える変換点へ向かって延びる山塊端頂部に位置する。鶴首城跡に正対し、成羽川上流方向の眺望に優れることから、鶴首城跡と連動して機能する見張り台、あるいは狼煙台のような機能を有する小砦であろう。

概要　基本的に単郭の城で、南北 60 m、東西 70 mを測る。主郭は南北 30 m、東西 20 mを測り、西壁は崖面となっている。主郭Ⅰ上面は南北 10 m、東西 5 mを測る。主郭の周囲には幅 1 mの 2 重の犬走りが見られる。主郭の南西には自然丘陵の形状を利用した小曲輪が配される。曲輪Ⅱはほぼ加工の痕跡が見られず、後述する曲輪ⅢとⅠとをつなぐ連絡路と見られる。城域南西端にある曲輪Ⅲは自然の岩脈を取り入れた小曲輪で、先述の通り成羽川上流方向の眺望に優れる。



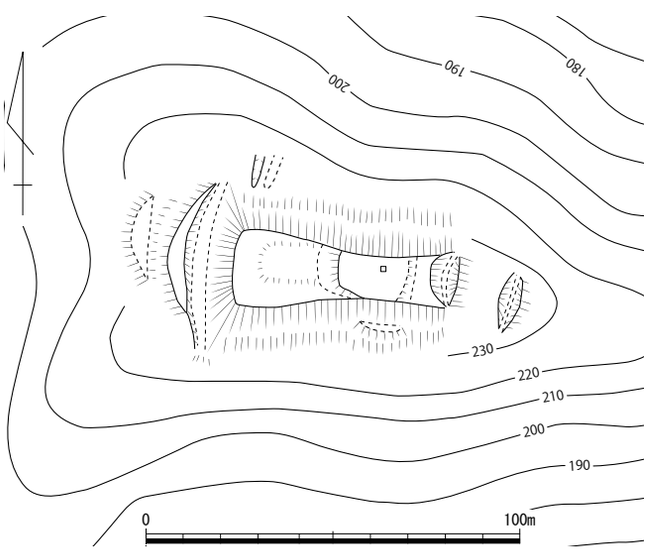
第 111 図　鍋阪城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　この城に関する文献・伝承を欠く。だが、鶴首城と同時に機能していた可能性を考慮すれば、天文年間（1532 ～ 1555）とされる三村家親による鶴首城入城と同時に築城されたか。　（和田）

130　玉の城山（たまのしろやま）城跡　　高梁市玉川町玉　　地図 17 右

立地　北の眼下に北から東へ屈曲する高梁川を、南に玉谷川と増原川の合流地点を望む尾根頂部。

概要　西を南北 50 mの長い堀切 1 条、東側の尾根を堀切 2 条で画する全長 110 mの単郭式山城である。主郭から西の堀切は南北 50 m、高さ 6 mで弧状を呈する。この堀切の西側にやや不明瞭な曲輪を 1 つ設ける。主郭は東西 55 m、南北 20 mの範囲で、不整形な長方形である。主郭内の東側は東西 20 ×南北 10 mの範囲が約 1 mほど高く作られている。東側は主郭より 5 mの深さで南北 15 mの堀切 1 条、その 10 m東に深さ 5 m、南北 15 mの堀切 1 条を設ける。それより東側は、尾根頂部は細く自然地形となる。



第 112 図　玉の城山城跡縄張り図（1/2,000）

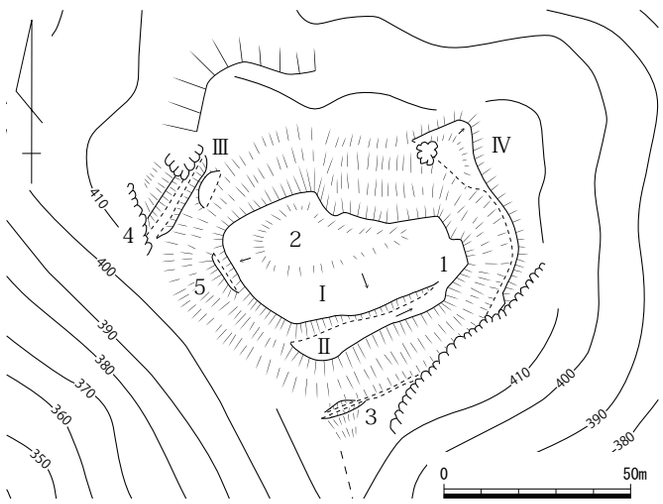
文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。『川上郡誌』に「城山」として瓦片礎石散在とされ、『岡山県遺跡地図』第 3 分冊高梁地区で瓦表採の記載もあるが、今回の踏査では瓦・礎石とも未確認である。（氏平）

133　小城山城跡（こしろやま）　　高梁市川上町七地　　地図 20 右

立地　高梁市川上町地頭から西谷川を遡り、同市川上町七地へ続く山塊端頂部に位置する。

概要　単郭式の山城で、主郭Ⅰの南東隅に腰曲輪Ⅱから続く坂虎口１を設けている。主郭Ⅰは平坦にはなっておらず、北側に高さ２m、幅 40 mの高まり２がある。主郭北側は複雑な折れを見せ、各方向から横矢を意図したものであろうか。主郭の南と北西にそれぞれ堀切３、４があり、丘陵鞍部沿いからの進入を遮断している。特に堀切４には曲輪Ⅲが付属しており、北への防御を固めている。主郭の西には小規模な犬走り５があり、北東には腰曲輪Ⅳを設けている。

文献・伝承　城主・築城時期について知られることはない。だが、特に北方面の防御に優れる構造から、天正２～３（1574 ～ 1575）年に勃発した備中兵乱に際して、200 m南に位置する国吉城跡と連動して北の守りを果たす城であったか。　（和田）



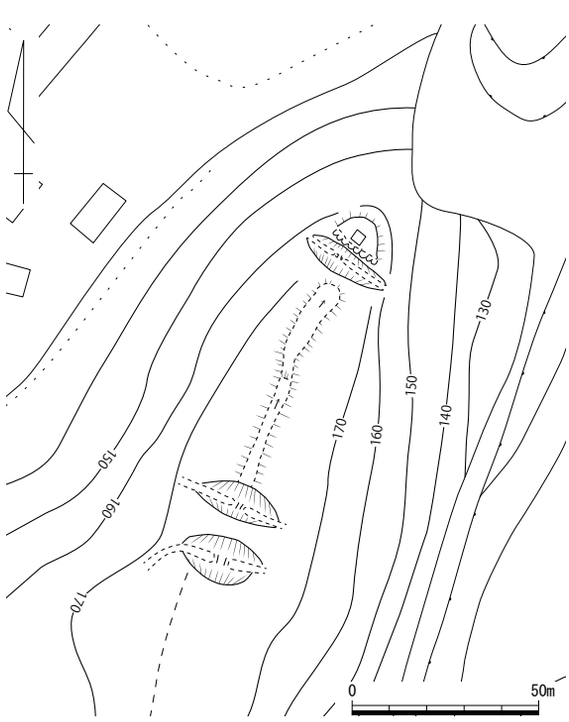
第 113 図　小城山城跡縄張り図（1/2,000）

134　小社森城跡（こそもり）　　高梁市川上町地頭　　地図 20 右

立地　北東約 20km に国吉城跡、北から東に地頭の中心部及び領家川と三沢川の合流地点を望む、南から北に細長い尾根上先端部に位置する。

概要　全長は約 100 mほどである。尾根北端に現代の堂宇があり、その南に東西 25 mで深さ３mの堀切が１条、さらに 60 m南に東西 25 mで深さ３mの堀切２条を配する。いずれの堀切も中央に土橋状の高まりを持つ。南北堀切間の頂部は先端付近で最大幅６m、長さ約 20 mの平坦面があり、南側へは幅２～３mの平坦な部分がゆるやかに南へ登っている。ただ、頂部に明瞭な加工は見られなかった。本城から南に尾根を 100 m登ってみたが、人為的加工の跡は見られなかった。堀ノ内遺跡に最も近い山城で、小規模ではあるが見張り台の役割を担っていたのであろう。

文献・伝承　故事来歴は不明である。　（氏平）

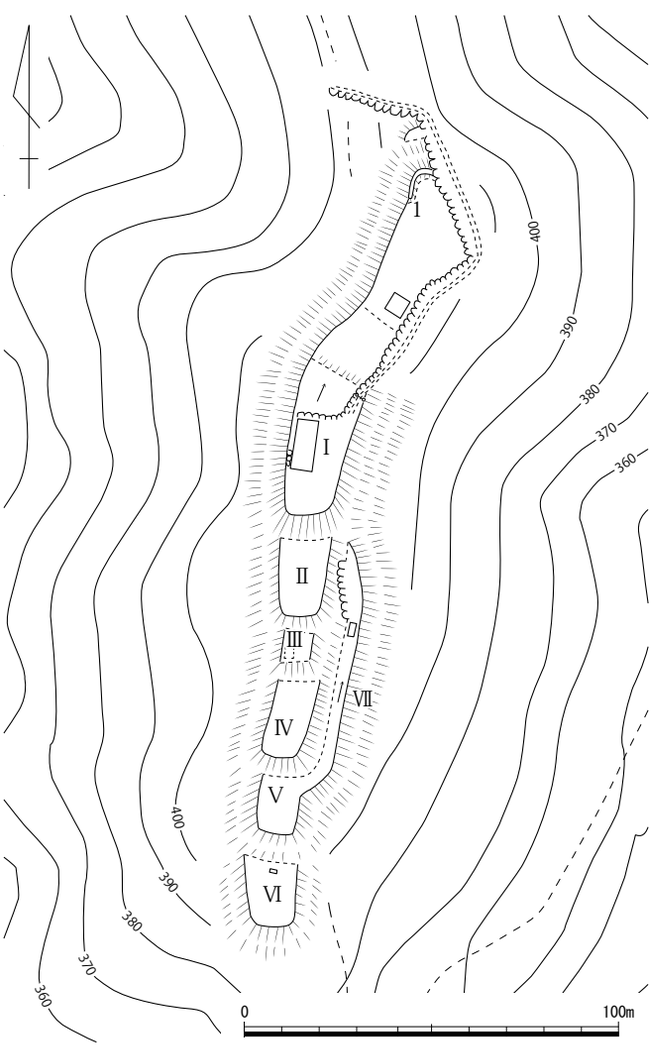


第 114 図　小社森城跡縄張り図（1/2,000）

135　国吉（くによし）城跡　　高梁市川上町七地　　＜市指定史跡＞　地図 20 右

立地　川上町地頭から西谷川を北西に遡ること約 1.5㎞、七地集落（旧手荘村）から南に延びる山塊端頂部に位置する。地頭集落の最奥部にあたり、特に南東方向の眺望に優れる。もともとはこの地に室町時代中期に成立したとされる、山城国相国寺領「手荘」の守りを固める役割を果たしていたものであろう。なお、この城の北 200 mの位置に小城山城跡があり、これと連動して機能していた公算がある。

概要　この城は現在、高梁市の史跡に指定されている。主郭Ⅰは荒神社として利用されており、参道により削平を受けている。当初の規模は不明ながら、現状南北 210 m、東西 40 mを測る連郭式山城である。旧地形に影響されてか、主郭Ⅰは北東方向に折れており、最北部には高さ約 1.2 mを測る土塁 1 が残る。北端から主郭中央へ向かって 5 m程の比高差があるが、切岸を切ることなく緩やかに上っていく。ただ、この部分には水道施設があり、この建築に伴う削平を受けている可能性もある。主郭Ⅰは南北 30 m、幅 20 m程の広さがあり、建物等が建つには十分な広さである。主郭Ⅰの南には高さ約 3 mの切岸を経て南北 20 m、東西 12 mの曲輪Ⅱが接続する。曲輪Ⅱから南へは曲輪Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵが連続して築かれる。曲輪Ⅵは曲輪Ⅴから 5 m下がった場所に位置している。曲輪群は山塊鞍部に沿って一列に並んでいるが、曲輪Ⅴの北東隅からは曲輪Ⅲ、Ⅳ、Ⅴの東に回り込む腰曲輪Ⅶが設けられている。主郭前面の各曲輪群は平坦に造成されているが、大きなものでも 20㎡を超えるものはない。さらに東西方向の支脈へ向かっての曲輪の展開も見られない。主郭北へも小さな曲輪が続いていたものと思われるが、先述の道路による削平のため、その形状は不明である。加えて現状、堀切も見られない。後述するとおり、厳しい戦いの舞台でありながら単純な曲輪構成と言える。なお曲輪Ⅵには三村一族の供養碑が建つ。加えて『日本城郭体系』では曲輪Ⅰ～Ⅵに沿って西に 8 m下がった位置に脇曲輪があるとするが、確認したところ山道造成による削平により判然としない状況であった。そのため今回は図示を見送ることとした。



第 115 図　国吉城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　築城年代については定かな資料はないが、『川上郡史』には元弘の乱の際に、六波羅探題方として戦い敗死した安藤太郎左衛門元理により築城されたと伝えられる。戦国時代に入り天文年間（1532 ～ 1555）までには備中国小田郡星田郷から川上郡成羽へ進出した、三村家親の支配するところとなったものと推察される。

さらに時代が下り、天正２～３（1574 ～ 1575）年に勃発した備中兵乱の際にはその舞台として、多くの文献に登場する。織田信長の誘いに応じて毛利方から離反した三村氏に対し、同年 11 月には三村氏追討のため毛利方の大軍が笠岡の浦に上陸する。『小早川隆景自筆書状』では隆景が成羽攻略に先んじて手要害（国吉城のこと）攻略を決め、12 月 26 日から城攻めを開始したと記される。城内からは降伏の申し出があったが、戦の初めであったため隆景はこれを許さず、城兵は討ち果たされたとある。なお、三村元親は国吉城主として一族の三村政親を入れたと『川上郡誌』等の地誌類や『備中兵乱記』などの軍記物には記される。さらに天正３年正月朔日で発給された『備中国手要害合戦頸注文』の中で、国吉城落城の際に打たれた首級と戦功者のリストが記されている。ここから国吉城は攻城戦開始からわずか数日で落城したことが読み取れる。また、同年正月朔日付け『毛利輝元書状写』は、粟屋彦右衛門あてに毛利輝元から発給された感状であり、国吉城戦の論功行賞が極めて早く行われていたこともわかる。

同年６月に備中松山城が落城した後、備中国の大半を手にした毛利氏は、『藩閥悦録』によると天正４（1576）年８月 23 日付で国吉城に宿老の口羽中務大輔春吉を入れた。その後口羽氏一族が代々守将となり、天正 10 年（1582）年の羽柴秀吉による備中国侵攻の際にも、国吉城の守りを固めるよう、毛利輝元から口羽少輔十郎にあて命令書が発給されている。

天正 10 年、備中高松城の戦いの後、羽柴氏（豊臣氏）と結ばれた和平により、国吉城は引き続き毛利領となったが、その後の城主等について知られることはない。しかし、慶長５（1600）年、関ヶ原の戦いに際して毛利氏が防長２ヶ国へ減封された後は、『川上郡誌』ほか地誌類に慶長７（1602）～ 15（1610）年の間に、糟屋武則が入城したことが記される。だが、糟屋武則は関ヶ原の戦いで西軍として戦い、戦後改易されており、矛盾している。廃城時期についても『川上郡誌』では慶長 16（1611）年に幕府直轄領となり、その後廃城となったと記される。しかしながら、幕府側の記録にそうした内容の文書は存在せず、裏付けは得られなかった。以上、天正 10 年以降の国吉城については不明な点が多く、廃城時期も不明である。　（和田）

写真 47　曲輪Ⅱ～Ⅳを望む（北から）

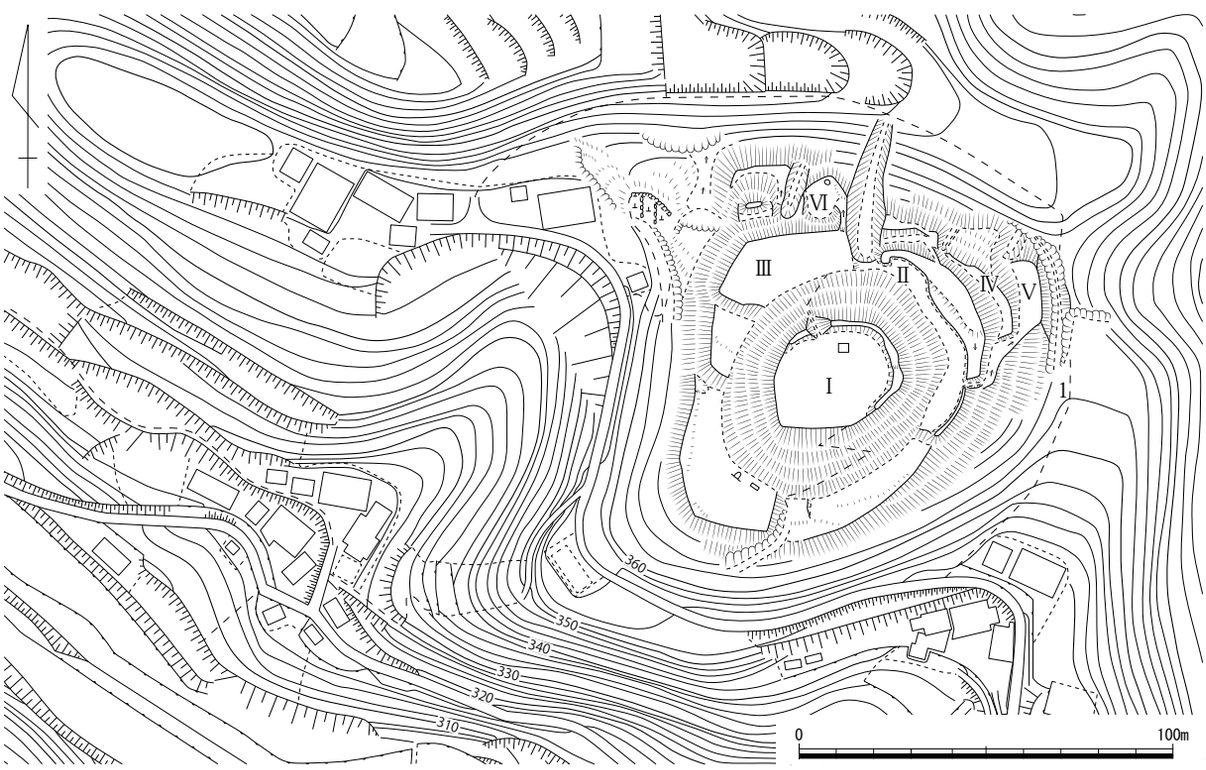
写真 48　曲輪Ⅵの三村政親供養塔（南から）

137　小笹丸（おざさまる）城跡　　井原市美星町黒忠　　＜市指定史跡＞　地図 21 左

立地　城は、西へ延伸する尾根の頂部平坦面に立地する。旧小田郡、旧川上郡、旧後月郡の３郡が接する境界を南西に一望する旧川上郡の南端に位置し、足下には成羽川水系と小田川水系の分水嶺地帯の北側に源を発する城平川が北流している。この城平川沿いに約７km 下ると、高梁市川上町地頭の平野を北西から望む国吉城跡が所在する。

概要　標高約 380 mの頂部に築いた曲輪Ⅰは、約 30 × 30 mの大きさを測り、その北及び東辺に高さ１～ 1.5 mの土塁が残存する。北辺土塁の中央部には、曲輪Ⅲから続く通路が取り付く坂虎口が認められた。曲輪Ⅰ周囲には、曲輪Ⅱ・Ⅲを含む５面の曲輪が帯曲輪状に築かれ、これらと曲輪Ⅰとの比高差は最大で約 10 mを測る。曲輪Ⅱの前面に築いた土塁は、高さ約１mで、竪堀と接する箇所を「L」字形に屈曲させた構造である。北東側尾根続きには、曲輪Ⅳ・Ⅴや、切り通し道によって改変を受けた堀切１が配置されていた。曲輪Ⅴから曲輪Ⅱに至る通路は、曲輪Ⅳ南辺からの横矢を意図したような鍵型を呈する。曲輪Ⅲとの比高差が約 4.5 mある曲輪Ⅵ北端には、内径が１～ 1.2 mを測る石組みの井戸が所在する。曲輪ⅡとⅢの間には、谷部まで続く幅約 10 mの竪堀を開削する。

文献・伝承　『備中誌』には、元弘年中に竹井掃部左衛門尉が城主と記し、さらに天文３年に竹井市郎左衛門光高、天正９年に竹井常陸介・同又三郎を城主としていると記載する。『美星町史通説編』に記載された城の略絵図には、曲輪Ⅰから西へ延びる尾根筋平坦面に室町時代のものとする五輪塔群が描かれている。城の南側の斜面地には「トノヤブ」・「トノヤシキ」、東側尾根続きには「トノノウラ」の地名が伝わる。　（小嶋）



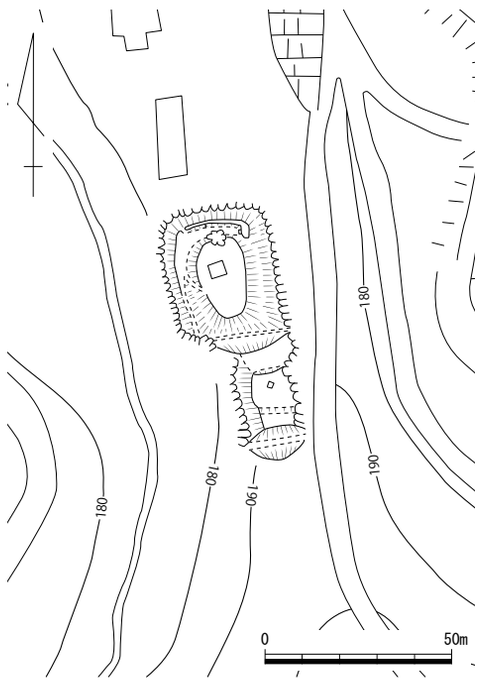
第 116 図　小笹丸城跡縄張り図（1/2,000）

138　野田（のだ）城跡　　高梁市川上町三沢　　地図 21 左

立地　北へ向かって流れる三沢川と城平川の合流地点を見下ろす標高 190 mの丘陵上に位置する。

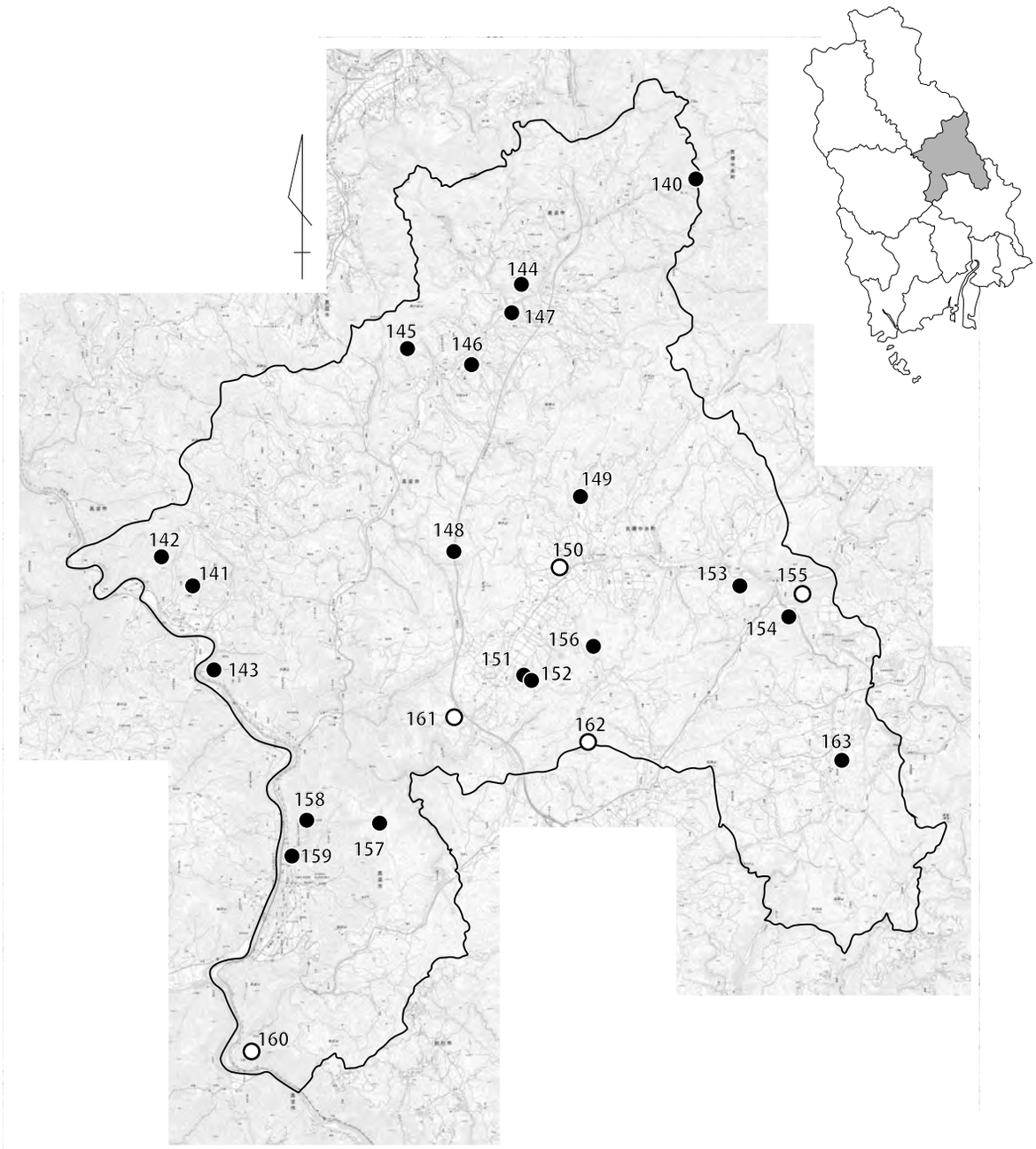
概要　丘陵先端部から約 100 m南までは宅地と耕作地になっていて旧地形は不明である。宅地南の丘陵に主郭とその北に帯曲輪 1 つ、南に堀切 2 条がある全長約 70 mの山城を確認した。主郭は 20 × 12 mの楕円形で、中央部に社が作られている。主郭北の帯曲輪は主郭から 4 m下にあり、主郭北側から西側に東西 20 m、南北 10 mを測る鍵の手状で、北側に高さ 0.5 mの土塁を巡らす。帯曲輪南端から犬走り状の道があり、主郭すぐ南の堀切に通ずる。この堀切は主郭から深さ 5 mを測り、南端の堀切との間が若干平坦な 10 m四方の曲輪となっている。南端の堀切は深さ 3 mで、その南は近世以降の開墾によるものと考えられる平坦面が 30 m続く。城の東側は道路により、西側は墓地や耕作地により削平される。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。　（氏平）



第 117 図　野田城跡縄張り図（1/2,000）

第４節　上房郡



140. 飯ノ山城跡
141. 寺山城跡
142. 城平城跡
143. 鳴戸城跡
144. 殿屋敷跡
145. 飯の山城跡
146. 台ヶ鼻城跡
147. 常山城跡
148. 粧田山城跡
149. 羽子田城跡
150. 上ヶ城跡
151. 野路山城跡
152. 陰地城跡
153. 大原城跡
154. 小谷城跡
155. 大畑城跡
156. 矢倉城跡
157. 高陣の陣跡
158. 備中松山城跡
159. 備中松山城尾根小屋跡
160. 広瀬固屋城跡
161. 離小屋城跡
162. 大和佐山城跡
163. 菅野城跡

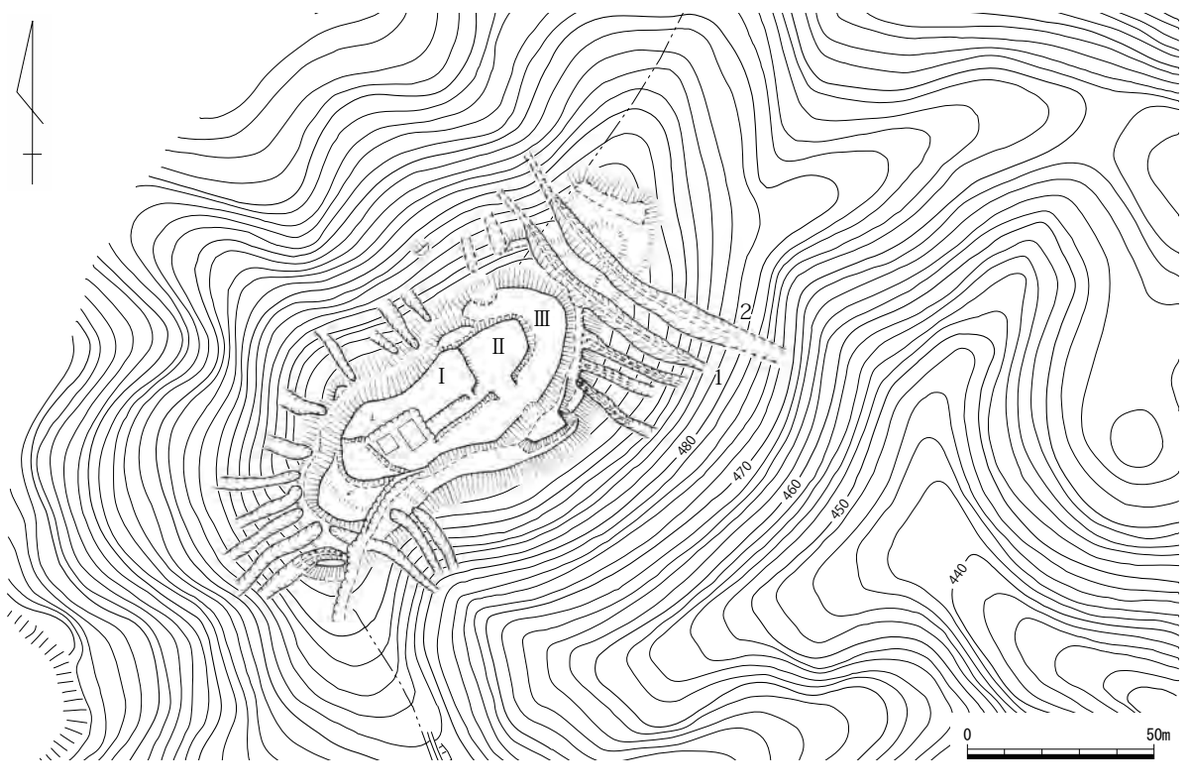
第 118 図　上房郡城館位置図

140　飯ノ山城跡（いいのやま）　　高梁市有漢町上有漢・加賀郡吉備中央町福沢　地図 11 右

立地　豊岡川と川関川の分水嶺にあたる標高約 490 mの山頂部に立地する。比高は約 60 mである。城が築かれた飯の山（いいやま）は、吉備中央町と高梁市の境、旧国では備前と備中の国境にあたるほか、美作との国境にも２㎞弱と程近いところに位置する。

概要　城域は東西 170 m、南北 100 mと規模は大きい。縄張りは頂部にある曲輪Ⅰ・Ⅱ、帯曲輪Ⅲを中心に構成される。頂部北西側の最頂部には 38 m× 10 mの曲輪Ⅰがあり、南東隅に虎口がある。曲輪の南西側には稲荷神社が鎮座しており、曲輪の一部が削平されている。その北東及び南東はやや低くなり、18 m× 15 mの曲輪Ⅱと幅５mの帯曲輪が配置される。曲輪の南辺中央は虎口が付き、曲輪Ⅰ・Ⅱの虎口は食い違いとなる。さらに頂部の南側から東側にかけては幅８m前後の帯曲輪Ⅲがめぐる。また、南側斜面には帯曲輪、櫓台状の曲輪と小曲輪が各１面配置されている。このほか、西側斜面から尾根上にかけて小曲輪が２面連続する。防御施設としては、堀切と畝状竪掘群がある。北東斜面は幅５m前後の堀切１・２を連続的に配置して区切り、その両端部はそれぞれ竪堀状に長く延びる。連続堀切より東側は不整形に平坦面が３面程度認められるが、城館関連遺構としての判断は難しい。また、主郭付近の斜面部は急な切岸となっているうえ、主郭周縁の斜面下方には夥しい数の竪堀が配置されている。特に南西斜面及び南東斜面は深い竪堀が顕著で、良好に残存する。竪堀は計 19 本である。全体的には頂部の曲輪及び帯曲輪群を中心に、東側を連続堀切、北、西、南側を畝状竪堀群で堅固に守る縄張りである。

文献・伝承　『備中村鑑』によると、築城は飯山氏、戦国期には山県三郎兵衛国吉が在城したと伝わるほか、新山玄藩允家、新山兵庫在城との説もある。　（米田）



第 119 図　飯ノ山城跡縄張り図（1/2,000）

141　寺山（てらやま）城跡　　高梁市川面町　　＜市指定史跡＞　地図 14 右

立地　蛇行しながら南東方向へ走る高梁川の北東側に位置する。標高約 340 m級の山塊から南方向へ派生した標高約 310 mの尾根頂部が該当する。当該地の尾根は東西に延びる地形であり、山城の遺構もその尾根筋に築かれている。頂部から見て眼下には、高梁川が流れ、新見往来を見渡すことが出来る。また「本丸」と呼ばれる主郭からは、備中松山城を望むことが出来る。

概要　東西に長い尾根筋に、「本丸」「西の丸」「東の丸」「馬場」と呼ばれる 4 つの曲輪群を配し、その間も曲輪や掘切などの遺構を配した全長約 650 mにも及ぶ大型山城である。

「本丸」と呼ばれる主郭（Ⅰ）は、西側から数えて 2 番目の曲輪群である。本城の中で最も高所に築かれている。頂部は長さ約 50 m、幅約 15 mと細長い。この頂部の南北側面には、それぞれ腰曲輪を配するが、切岸は 7 ～ 8 mもあり、非常に高くなっている。主郭から見て南西方向と南東方向に取り付く尾根には、連郭式に曲輪を並べている。特に南西方向の尾根には 9 面もの曲輪を連ね、大きいものでは長さ約 15 mになる。

最西部にある「西の丸」（Ⅱ）は、頂部が長さ約 25 m、幅約 20 mの規模である。頂部の北側～西側～南側にかけて腰曲輪を配している。頂部の側面は約 6 mの高い切岸によって守られる。Ⅰとの間は深さ約 7 mの掘切によって遮断する。また頂部から見て南側へ伸びる尾根筋には、曲輪を 2 つ連ね、さらにその先は深さ約 5 mの掘切によって遮断している。

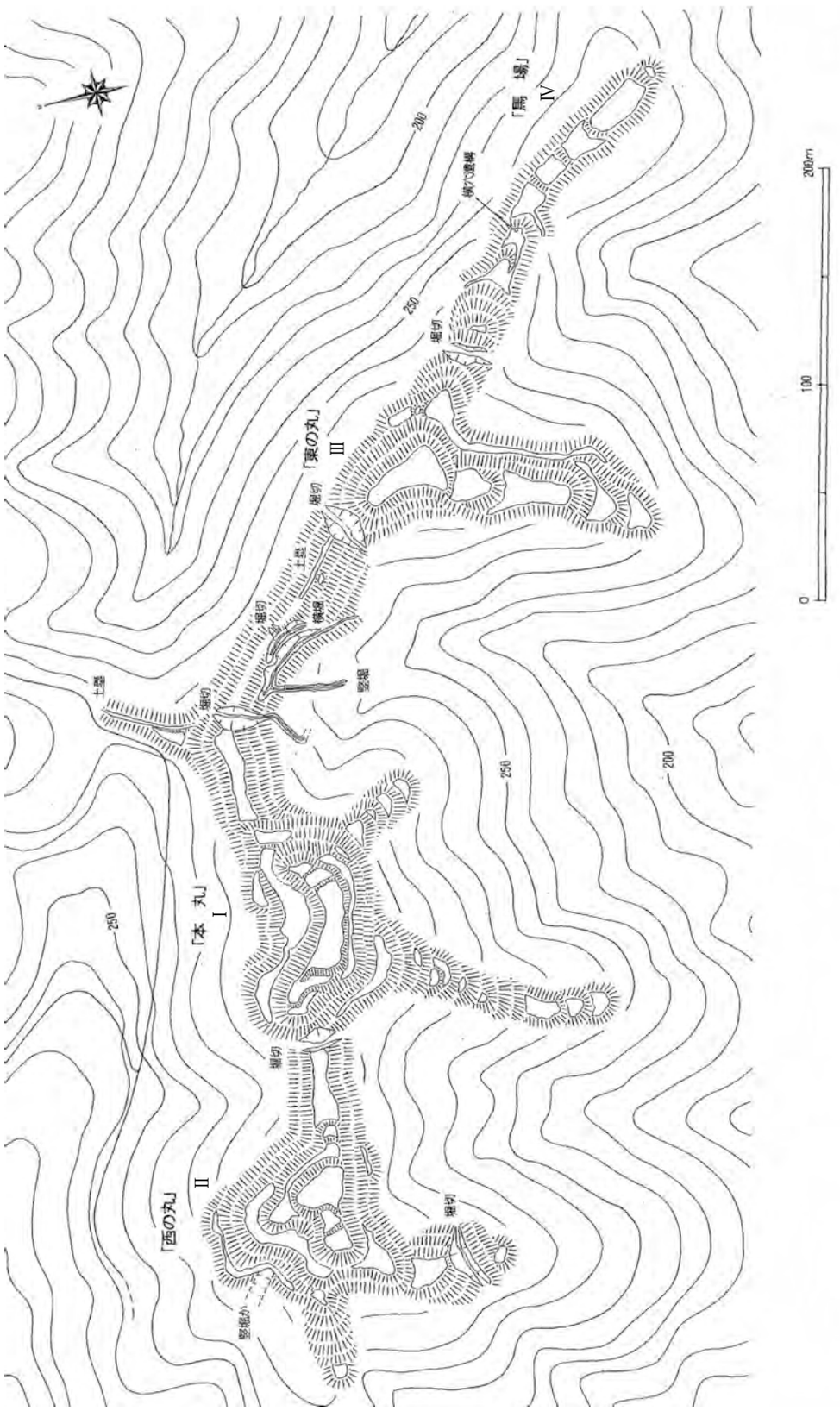
西側から数えて 3 番目の頂部は、「東の丸」（Ⅲ）と呼ばれる。頂部は長さ約 40 m、幅約 20 mの規模である。ⅠとこのⅢの間の尾根筋には、2 つの掘切によって遮断している。Ⅰ側のものは深さ約 8 mであるが、Ⅲ背後にある掘切は深さ約 12 mにも達する。この掘切の間の尾根筋には、土塁や横堀を尾根に平行して築いている。Ⅲ頂部の南側尾根筋には、大小 4 面の曲輪を連ねている。最大のものは長さ約 30 mもあり、また各曲輪間は 6 m前後の高い切岸によって守っている。これら曲輪群の東側は、腰曲輪が通路状に配され、「馬場」Ⅳへ向かう尾根筋の曲輪に繋がっている。なお亀山市歴史博物館所蔵の「備中川面古城」絵図には、Ⅲの北側に曲輪が描かれているが、現状では確認できない。

4 番目頂部の「馬場」（Ⅳ）は、本城の最東端にあたる。長さ約 30 m、幅約 15 mと細長い。Ⅲとの間は、高さ 10 mを超える切岸や掘切によって守られ、Ⅳ方向から高低差の低い曲輪が 3 面続く。両者間の鞍部付近には、横穴遺構が存在している。

当城は西側の 2 つの曲輪群は輪郭状に遺構が配されるが、東側 2 つの曲輪群は連郭状に遺構が続いている。両者間には築造時期に違いがあるのかもしれない。また東西方向に多くの遺構が連なる構造ではあるが、南北方向の施設は少なく側面攻撃に対しては必ずしも堅固でない。防御よりも多くの兵を駐屯させるのに適した山城といえる。

文献・伝承　『備中村鑑』には、川面村にあり難波六郎経俊が在城したと書かれる。また室町時代に三好氏が在城のいわれが残る。1575 年の「備中兵乱」の際には、毛利方の小早川隆景が在城したと言われるが、その期間は 20 日前後であったとされる。出土遺物の大半は、室町時代の土器であるが、一部鎌倉時代に遡るものもある。　（小林）

参考：文献 163『岡山県高梁市川面町寺山城跡測量調査報告書』　高梁市教育委員会　2009 年



第 120 図　　寺山城跡縄張り図（1/3,000）　文献 163 より引用

写真 49　遠景（南から）

写真 50　本丸（Ⅰ）（南東から）

写真 51　「東の丸」（Ⅲ）西の堀切（南西から）

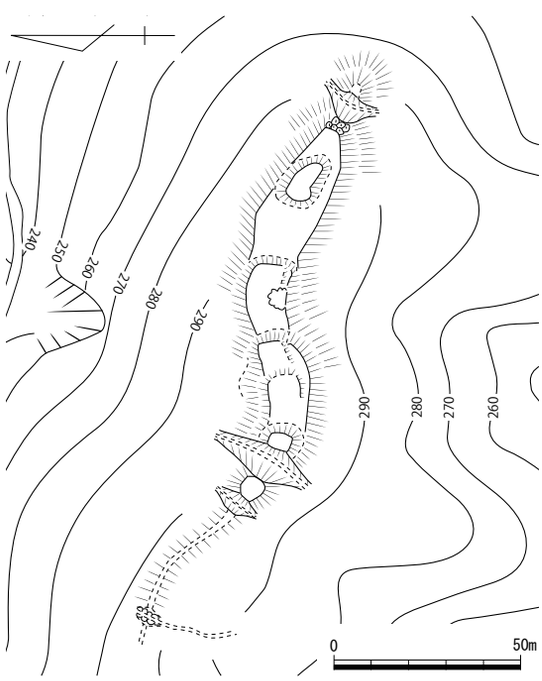
写真 52　「東の丸」（Ⅲ）主郭東の曲輪（南西から）

142　城平（じょうひら）城跡　　高梁市川面町　　地図 14 右

立地　蛇行しながら南西方向に走る高梁川の北側にある。標高約 500 m級の山塊から、南へ派生した標高約 300 mの尾根頂部に位置する。

概要　東西に細長い尾根筋に曲輪を並べた、全長約 120 mの連郭式山城である。頂部の主郭は、長さ・幅とも 10 mにも満たない小さな曲輪で、櫓台のような役割が考えられる。主郭から尾根先端方向に当たる東側には、曲輪を３面連ねる。各曲輪は細尾根上に築かれるため幅は 15 ～ 20 m程であるが、長さは約 30 ～ 40 mと規模が大きい。最先端の曲輪には、土壇状の高まりがあるが、平坦地を造成する際の掘り残しと思われる。鞍部方向は、２条の掘切によって城域を画している。また尾根先端方向に１条の掘切を配しており、細尾根筋に築かれた曲輪群を両脇から挟む構造となる。

文献・伝承　難波六郎左衛門経俊在城と伝聞。（小林）



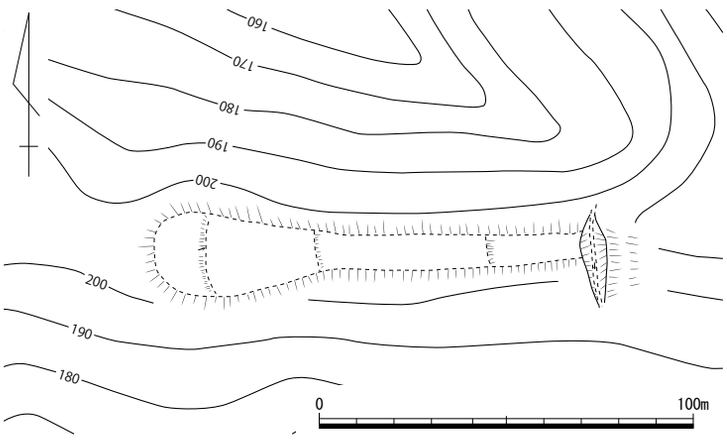
第 121 図　城平城跡縄張り図（1/2,000）

143　鳴戸（なると）城跡　　高梁市川面町　　地図 14 右

立地　高梁市川面地区に所在し、高梁川に対して東から突き出た丘陵鞍部に位置する。城の南には新見往来（現国道 180 号）を見据える交通の要衝に位置している。また、寺山城跡と大松山城跡の中間に位置し、相互に眺望がきく。両城をつなぐ見張り台のような機能も兼ね備えていたか。

概要　東側から延びる山塊から比高３ｍを測る堀切により城域を画し、尾根上に延びる東西 120 ｍほどの規模の城跡である。尾根上には明確な加工の痕跡が見られず、自然地形をほぼそのまま利用していたものと思われる。その構造から見て一時的な陣所であった可能性が高い。また、先述したとおり寺山城跡と大松山城跡の中間にある立地から、両者をつなぐ中継ぎの城と見ることもできる。

文献・伝承　本城に関する、文献、伝承等は知られない。だが、その立地から見て、天正２～３（1574 ～ 1575）年に勃発した「備中兵乱」に関連する城であるか。　（和田）



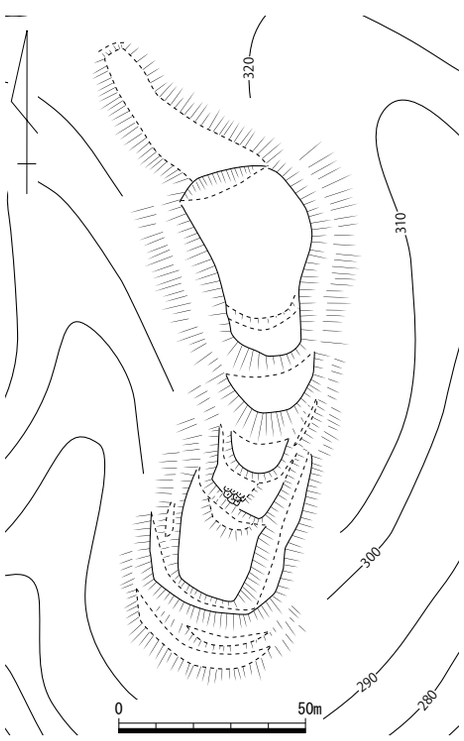
第 122 図　鳴戸城跡縄張り図（1/2,000）

144　殿屋敷（とのやしき）跡　　高梁市有漢町有漢　　地図 15 左

立地　標高約 370 ｍの土居山頂から南へ張り出す丘陵端部、標高 320 ｍ付近に立地する。南に眺望が開け、川関川を挟んで対岸に常山城跡が位置する。秋葉氏館跡と伝えられる正尺屋敷跡から直線距離で 200 ｍ北東にある。

概要　主郭とその南の４つの曲輪からなる山城あるいは城館である。主郭は北側から続く尾根を高さ３ｍの切岸で切断し、南北 45 ｍ、東西 30 ｍの平坦面を造り出している。主郭南の４つの曲輪は最も広い最下段が 20 ｍ四方を測る。上から３面目の曲輪には１ｍ程度の露岩が 10 個程度密集している部分がある。上から２面目の曲輪東側に虎口状に見える部分があり、ここから登城路が延びていたのかもしれない。４つの曲輪の南と東は幅の狭い腰曲輪と切岸で落差をつけ切断している。主郭の北側は平坦に見える尾根が北へ続くが、未加工の可能性が高い。さらに北側は現代の道路と加工段で削平される。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。　（氏平）



第 123 図　殿屋敷跡縄張り図（1/2,000）

145　飯の山城跡（いいやま）　　高梁市有漢町有漢　　地図 15 左

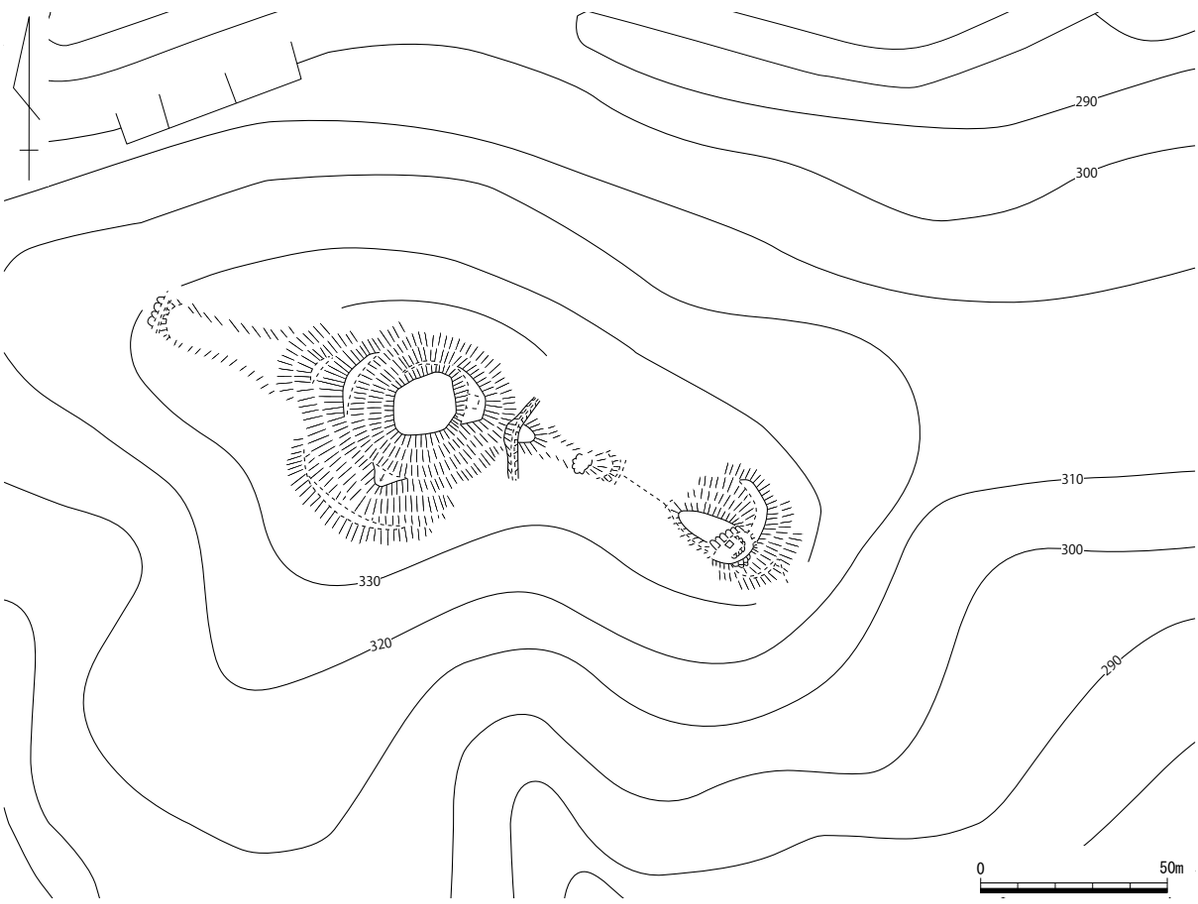
立地　標高約 480 mの陣が畝山から南へ派生した標高約 340 mの尾根頂部に位置する。旧有漢町から旧北房町さらに高梁市中井方面に向ける道筋を見渡せる位置にあり、交通の要衝を押さえる役割が考えられる。

概要　東西に細長い尾根筋に曲輪を連ねた全長約 170 mの山城である。長さ約 20m の主郭から３方向に曲輪を築いている。南東筋は主郭直下に長さ約５m、幅約 20 mのやや大きい曲輪１面を築き、高さ約６mの切岸を挟み１条の堀切が続いている。さらにその先約 50 m離れた箇所にも曲輪群が存在する。この曲輪群と主郭直下の曲輪には、現在祠が祀られている。この方面は麓の民家へと道が繋がっており、おそらく山城が機能していた時期も入口として意識していたことが窺える。

尾根鞍部方向に当たる北西方向には、やや造りがしっかりしている曲輪１面と、緩やかな造りの曲輪１面が築かれている。鞍部には切通があり、当時は堀切であったと考える。また主郭南西方向にも尾根筋があり、小さい曲輪１面と通路状の曲輪１面を築いて守りとしている。

当城は比較的広い主郭を、そこから派生した尾根筋に小さい曲輪を築いて守る構造である。この主郭と、南東側に降った曲輪群との２か所を重点に置く仕組みであったことが窺える。

文献・伝承　『備中村鑑』には、山縣三郎兵衛國吉が在城とある。また『萩藩閥閲録』には、毛利氏が在番として、桂就宣、粟屋元通を置いたと記されるが、140 飯ノ山城跡のことだろう。　（小林）



第 124 図　飯の山城跡縄張り図（1/2,000）

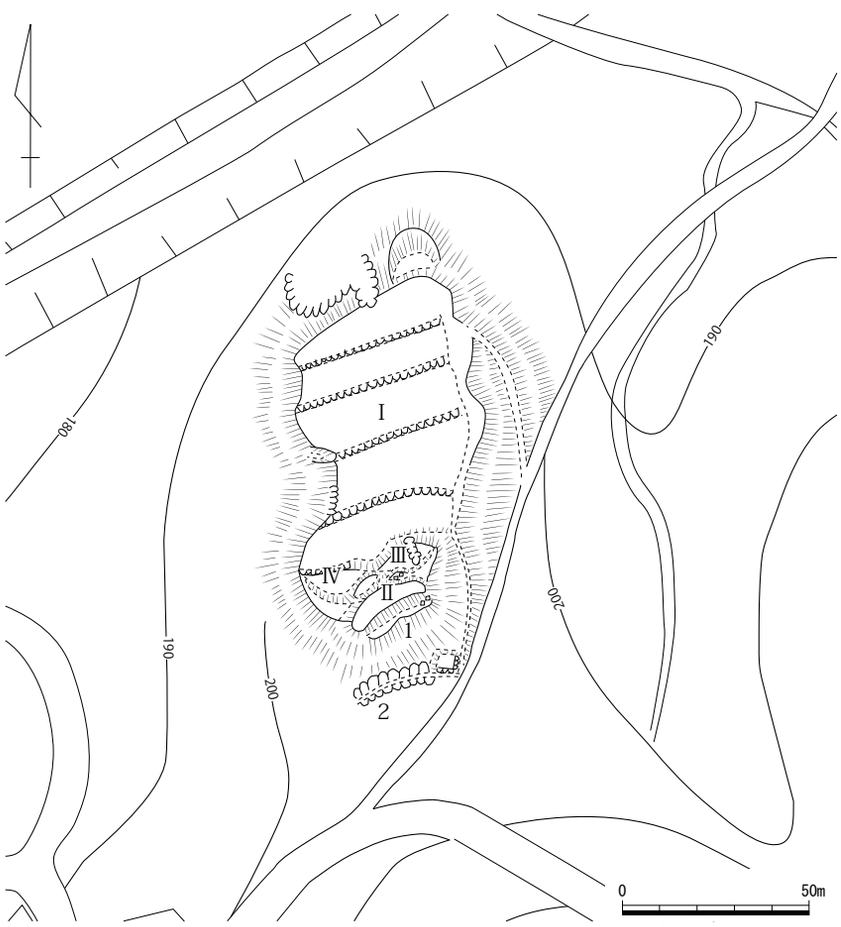
146　台ヶ鼻（だいがはな）城跡　　高梁市有漢町有漢　　＜市指定史跡＞　地図 15 左

立地　台ヶ鼻城跡は旧有漢町有漢、高梁川の支流である有漢川上流域を北に望み、標高 210 ｍを測る丘陵の端部に位置する。この有漢川沿いには、現在県道高梁・旭線が通っており、中世においても備中国から備前国へ抜ける交通の要衝であったと推測される。この城から有漢川を遡ること 1.5㎞の地点には常山城跡と、その向かいに高梁市指定史跡である秋庭氏館跡推定地「正尺屋敷」があり、秋庭氏の活動拠点の一角をなす城と言える。

概要　城域は南北約 110 ｍ、東西約 50 ｍを測る。現在城域の大半を占める曲輪Ⅰは北へ傾斜する休耕田となっている。その平面形は複雑な折れを見せ、東側で四ヶ所、西側でも六ヶ所の横矢を入れることが可能となっている。これに対して南端部の曲輪の残存状況は良好であり、最高部に長方形の曲輪Ⅱが位置し、その北にそれぞれ２、３ｍの比高差を持つ曲輪Ⅲ・Ⅳが造成されている。曲輪Ⅱの背後には長さ 20 ｍを測る犬走り１がある。その南の削平地２は形状から見て堀切の痕跡である可能性が高いが、現道により改変を受けているためその有無についてはその判断を保留にしたい。

写真 53　遠景（東から）

文献・伝承　承久３（1221）年、承久の乱で戦功のあった秋庭三郎重信が、新補地頭として赴任した際に築いた城の一つとされる。有漢は中世においては有漢保に比定され、秋庭氏の本貫地であった。また、周辺には城下の地名が残るほか、上市、古市など市場の存在を想定させる字名が残っている。城はこれら流通拠点を押さえる好位置にあるとも言える。中世期の城と城下の関係性を探る上でも重要な城と言えるだろう。　（和田）



第 125 図 台ヶ鼻城跡縄張り図（1/2,000）

147　常山（つねやま）城跡　　高梁市有漢町有漢　　＜市指定史跡＞　地図 15 左

立地　城跡は高梁市街から高梁川沿いに北上すること約２km、有漢川との合流点から東へ約 12km さかのぼった地点にある、南側丘陵頂部に位置する。北側正面には市指定史跡である正尺屋敷跡があり、周辺に残る弓馬場、馬場畝などの小字とともに城郭との関連が指摘できる。なお、この地点は東流する有漢川と、北へ谷沿いに流れる川関川の合流点にあたる。そのため、この城から川関川沿いに北東に遡り三飛峠を越えれば美作国へ、有漢川沿いにさらに東に遡り、笹目峠を越えると備前国へ入ることができる。つまり、この城は備前、備中、美作の三国に通じる交通の要衝に位置している。

概要　現状、城は北西～南東方向へ続く市道により分断されており、さらに城域北側も東から南にかけて公園整備により改変を受けており、城の全容は不明と言わざるを得ない。ここでは市道を挟んで北東側を北郭群、南西側を南郭群と呼んでその特徴を記述したい。

まず、北郭群から記述する。北郭群の主郭Ⅰは標高約 260 mの丘陵頂部に造成されており、東西約 70 m、南北約 30 mを測る。その中央には長径 20 m、比高 1.5 mを測る高まり１があり、形状から見て櫓台であった可能性がある。この高まりの南西方向には高さ 30㎝ほどの土塁が残存している。基本的には単郭の城と言え、３段に造成され、それぞれ 30 ～ 50㎝程度の比高差を持つ。主郭北側の曲輪に井戸跡かと思われる窪みが残存している。主郭の形状は入隅、出隅を形成しており、各方面からの侵入者に横矢を効かせることができる。さらに、主郭南の切岸下周囲は堀切、畝状竪堀群、横堀、土橋等を組み合わせた、技巧的な防御施設が設けられる。城域の南東は現在常山公園として整備され疑似天守が立つ丘陵から、深さ３mを越える３条の堀切２により切断される。中央の堀切底から西へ進むと深さ 1.5 m、長さ 20 mの横堀３の堀底に至り、その先は丘陵下へ向かってＬ字形に折れ曲がって竪堀となる。この横堀の北から東にかけては深さ 50cm 程度、長さ７～ 20 mを測る７本の畝状竪堀群４が掘削されている。ここを登坂する侵入者は土塁越しに主郭からの横矢に曝される。畝状竪堀群４からやや離れた位置にある竪堀５は他の竪堀と比べると大型で、最大幅 10 mを測る。ここを登坂すると切岸に突き当たり、さらに曲輪Ⅱ、Ⅲからの横矢に曝される。これを避けて左、右のいずれの方向に横堀６の底を進んでも、土橋に行く手を阻まれる。北郭の西側は、長さ 30 ～ 45 mを測る４本の畝状竪堀群７が有漢川側からの侵入を遮っている。主郭北側にも幅 45 mを測る大がかりな曲輪Ⅳが造成されている。基本的には単郭式である主郭の構造から考えて、中世前半の主郭造成後、おそらくは天正年間に大規模な改修の手が入っているものと見てよいであろう。南郭群は長さ 70 m、幅 20 mの長楕円形の主郭Ⅴを中心にして、曲輪Ⅵなどの曲輪が併設されているが、北郭から見たその防御機能は脆弱と言える。なお、南郭群の周囲には「馬場」の小字が残っている。

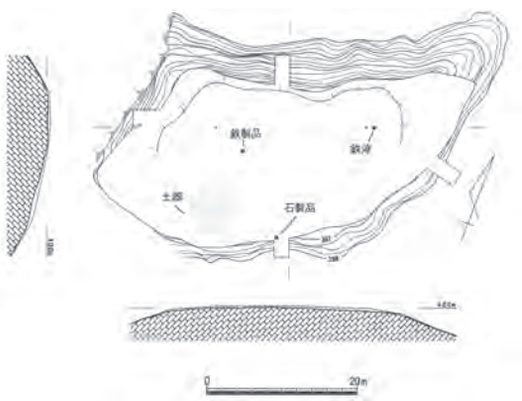
文献・伝承　鎌倉時代初頭に地頭職を務めた秋庭三郎重明により築城されたと伝える。これだけの規模の城ながら一次資料にはその名は見えず、地誌である『備中集成志』にも城主として肥田五兵衛尉の名を挙げるのみである。ほかにも『備中府志』には城主として新山玄蕃亮家健の名が挙げられている。家健は天正２～３（1574 ～ 1575）年に勃発した備中兵乱時に松山城に籠城したという。なお、常山城修築の契機は不明ながら、北４㎞に位置する天正７（1579）年に毛利・宇喜多氏間で勃発した四ツ畝城を巡る争いに際して成されたものか。　（和田）

第 126 図　常山城跡縄張り図（1/2,000）

148　粧田山城跡（しょうだやま）　　高梁市巨瀬町　　地図 15 左

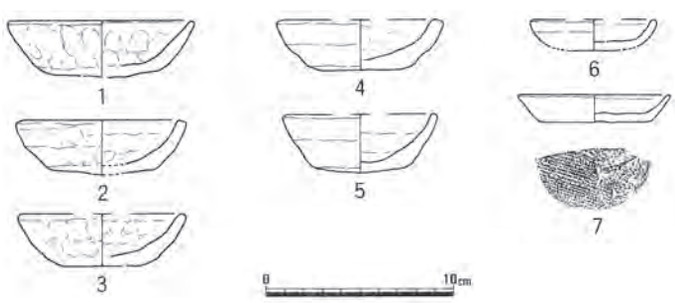
立地　吉備中央町の竹荘盆地と高梁市巨瀬町の間にある丘陵頂部から南西に下る尾根筋の頂部先端に位置する。

概要　1994 年中国横断道建設に伴い、丘陵頂部全面 850㎡の発掘調査が実施された。調査では、表土と包含層を除去して花崗岩風化土の地山を露出させた。その結果、曲輪内に柱穴は認められず、北側斜面に切岸を確認したが、南側斜面は緩やかな下りで加工が明瞭でない。城の構造は曲輪 1 面で、規模は東西 33 m、南北は 8 m程度と想定したが、南側はさらに広い可能性がある。遺物は土師器、鉄器、鉄滓などが出土した。土師器は手づくねおよび底面に糸切り痕を残す皿で、内面に煤が付着し灯明皿として使用されたものもある。鉄器は両端を折り曲げた鉄板状のもので、種類が特定できない。



第 127 図　粧田山城跡遺構配置図 (1/1,000)
文献 164 より引用

文献・伝承　『古戦場備中府史』では、源平合戦頃の城主を片岡八郎弘常とし、元亀 2（1571）年城主綱嶋兵部道久、城代を菅原氏と記す。『中国兵乱記』によると、天正 2（1574）年備中兵乱の折、中村（おそらく田中の間違い）掃部助が多気庄の「庄田山城」へ軍兵を配分したが、12 月 27 日頃「庄田山」の 4 か所の要害の軍兵も松山へ逃げ込んだとしている。『古戦場備中府史』では矢倉城跡（矢倉畦城）に天正年中に田中掃部介が在城したとされるので、その出城の 1 つと言えるだろう。　（氏平）



第 128 図　粧田山城跡出土遺物（1/4）文献 164 より引用

写真 54　遠景（東から）

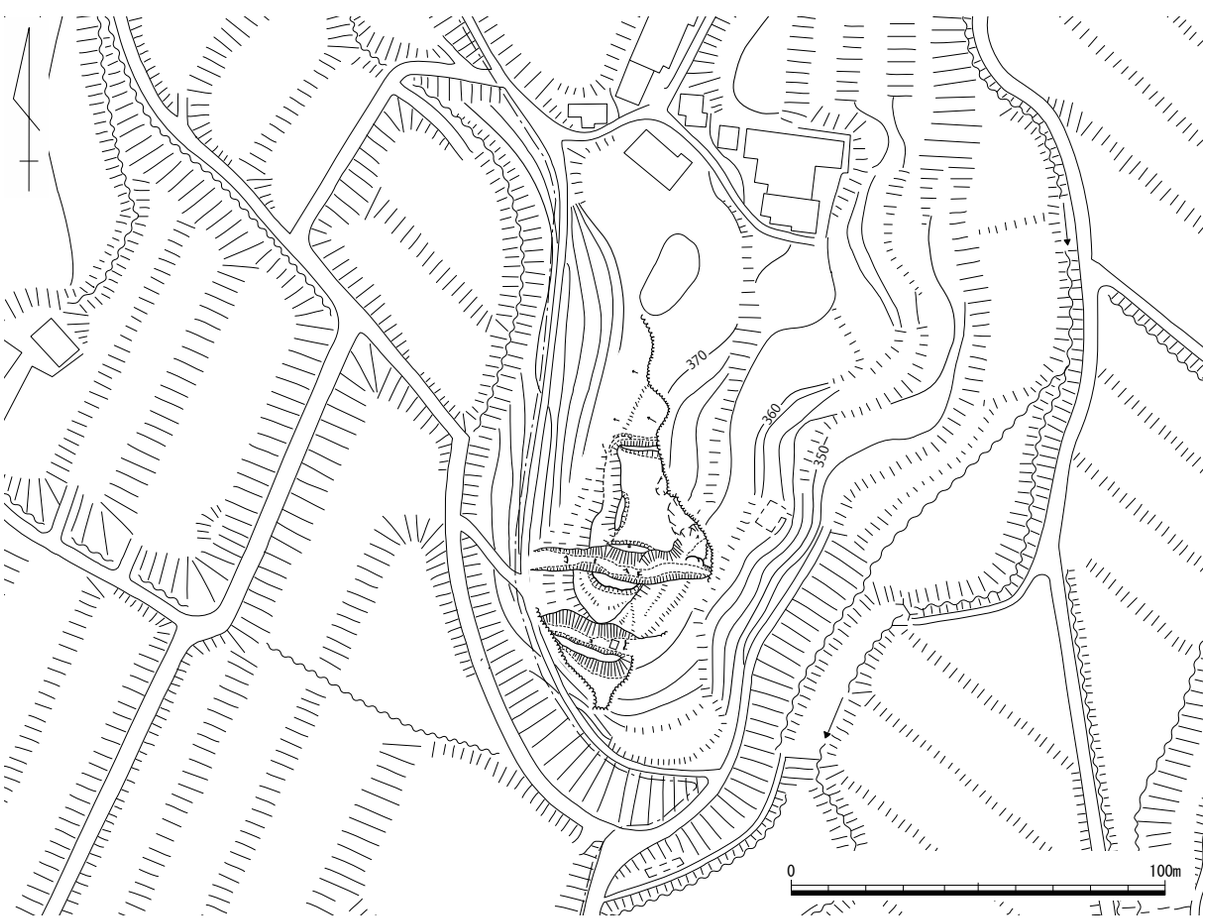
写真 55　曲輪（北東から）

149　羽子田（はねだ）城跡　　加賀郡吉備中央町豊野　　＜町指定史跡＞　地図 15 右

立地　羽子田城跡は南に延びる尾根先端頂部に位置し、南方は竹荘集落を一望できる。南約 1 ㎞の地点には江戸時代に山陽と山陰を結ぶ陰伯街道の下市一里塚が立つことから、羽子田城跡は交通の要衝を見据えた立地と言える。

概要　羽子田城跡は単郭の城郭である。曲輪の東側は削平されていたが、当初は平面方形に造成されていたと類推する。北・南・西辺に土塁が残存するが、東辺にも土塁を造成していた可能性が高い。曲輪内には平坦な礎石状の石材が散在するが、規則的な配置は確認できない。南辺土塁の上に宝篋印塔が 1 基ある。曲輪の南側は堀切で分断され、その南側にやや傾斜した台形状の平坦面がある。この平坦面北辺には土塁が造成されており、さらに南側を堀切で遮断して、その南側に土塁を造成する。曲輪の北側にも東側にやや下がる平坦面がある。『賀陽町史』の略図には、曲輪北側の平坦面の北東部に堀切が記載されているが、堀切が存在したであろう地点はすでに削平を受けていたため、今回の調査で確認することはできなかった。土塁で囲まれた曲輪の前後（南北）を堀切で分断し、西側は天然の斜面地を要害とするなど、細尾根という地形を活かした防御構造である。

文献・伝承　本城は元弘の乱に登場する田中藤九郎の一族の居城と伝わる。城内にある宝篋印塔は戦国時代頃のもので、田中一族の供養塔とされる。　（上栫）



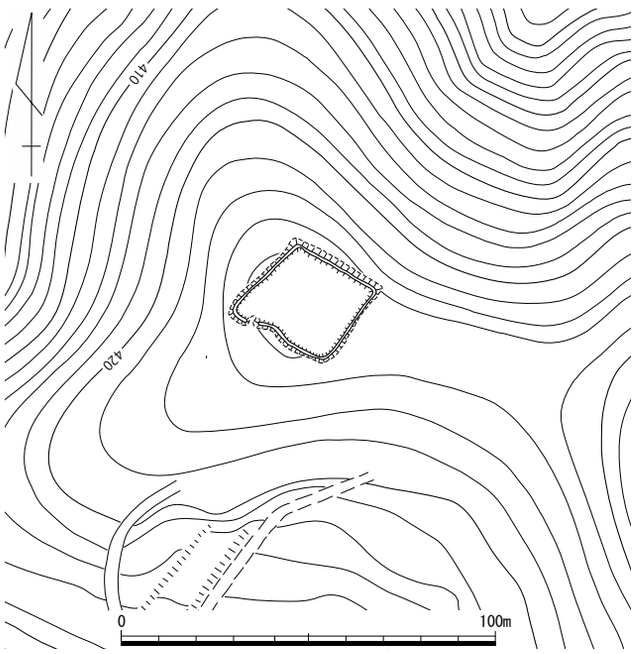
第 129 図　羽子田城跡縄張り図（1/2,000）

151　野路山（のじやま）城跡　　加賀郡吉備中央町上竹　　地図 15 左

立地　野路山城跡は西に延びる尾根上に位置する。尾根を約 200 m東に上がった地点には方形土塁で囲まれた陰地城跡が位置する。西北西約 1.7㎞の矢倉山頂上には矢倉城跡が、竹荘集落がある平地を隔てた南東約 1.8㎞に離小屋城跡が位置している。

概要　平面台形状に土塁が巡る単郭の城館跡で、「人枡」とも呼ばれている。規模は 30 × 24 m程度である。土塁は外面の高さが 0.5 ～ 1 mである。土塁は基本的に直線状に造成しているが、南辺のみわずかに歪む。南西部が途切れているが、後世の改変の可能性が高い。

文献・伝承　成羽城主三村家親に仕えた竹井直定が守ったという。　（上栫）



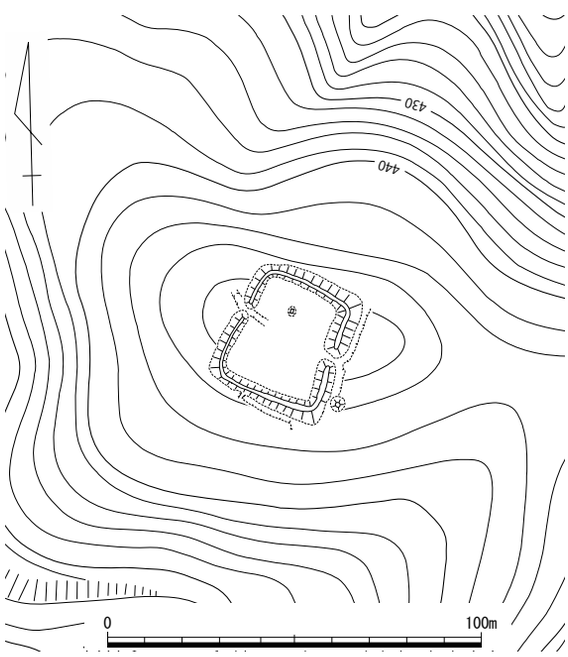
第 130 図　野路山城跡縄張り図（1/2,000）

152　陰地（おんじ）城跡　　加賀郡吉備中央町上竹　　地図 15 左

立地　陰地城跡は山頂部に立地し、西方に 200 m下った尾根上に野路山城跡が位置する。また北東約 1.6㎞の矢倉山頂部には矢倉城跡が位置している。

概要　南北 38 m、東西 33 mの平面長方形の単郭城館で、各辺に土塁が巡る。土塁の東・西辺は中央付近が開いた状態であるが、城館として機能していた当初の状況は判断できない。東・南辺土塁の外側には横堀が巡る。南辺の横堀の西端部は土橋状遺構で堰き止められている。土橋状遺構の正面の土塁は、やや高さを減じるが開いた状態ではない。なお土塁に囲まれた内側および東辺溝の南端に直径 1.5 ～ 2 m、高さ 70cm 程度の高まりがある。

文献・伝承　当城に関する史料や文献、伝承などは不明である。　（上栫）



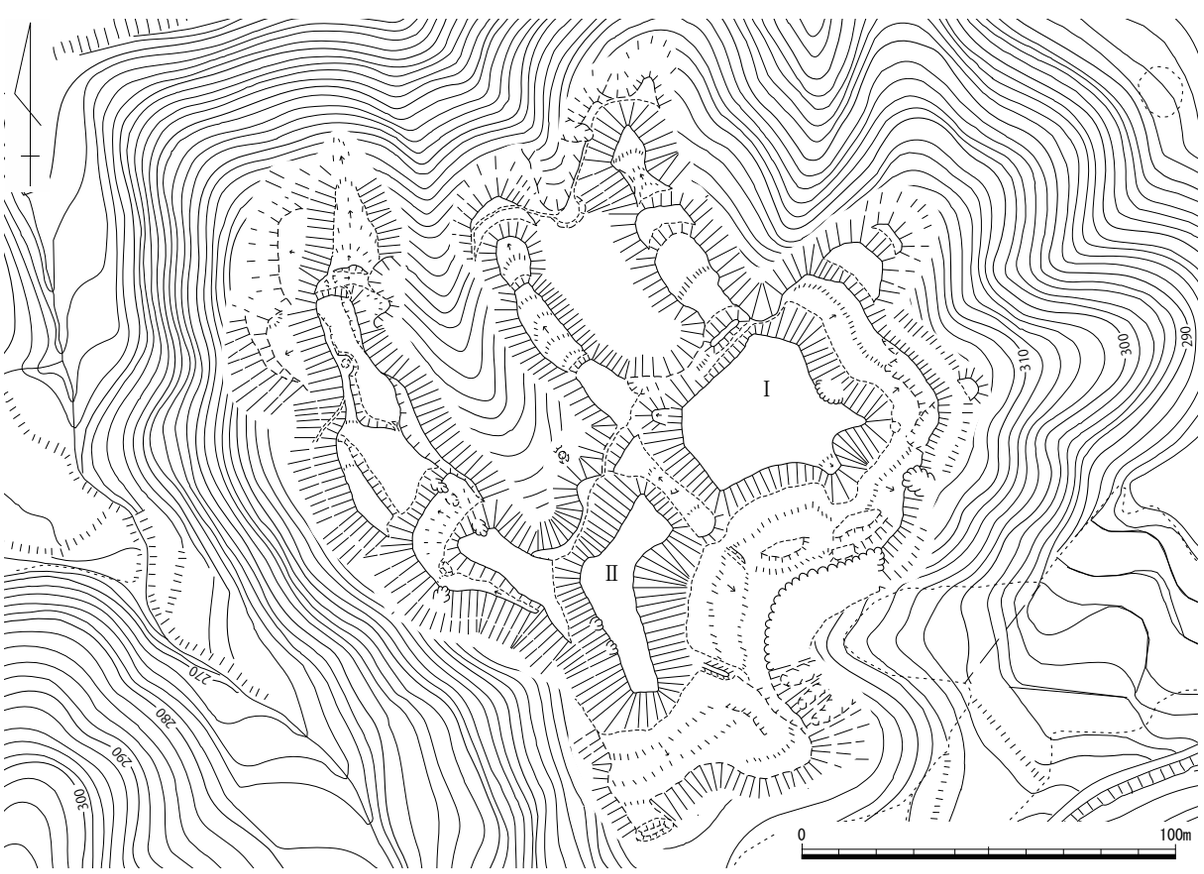
第 131 図　陰地城跡縄張り図（1/2,000）

153　大原（おおはら）城跡　　加賀郡吉備中央町田土　　地図 15 右

立地　大原城跡は宇甘川の南岸にある山の頂部に立地する。大原城跡の位置から２㎞ほど下った地点で宇甘川は北に大きく曲がっているが、その湾曲地点北側の山頂部には藤沢城跡が位置する。

概要　最頂部に幅 20 ～ 30 ｍの曲輪Ⅰを造成し、その周囲は切岸で守る。曲輪Ⅰには東西１か所ずつ横矢掛け状張り出しが認められ、東側のそれは下段の曲輪まで造作が及ぶ。曲輪Ⅰの南西側は堀切で分断して、その南西側に略Ｌ字状の曲輪Ⅱを造成している。山頂部から北に派生する４本の尾根には、傾斜に合わせて段切り状に曲輪を造成する。特に最西側の尾根には大きく造成を加え、西辺を土塁状に掘り残す曲輪が２面確認でき、尾根先端を堀切で分断している。東隣の細尾根は曲輪を段切り状に造成するのみである。これらの尾根の間の谷奥には円形状の水場がある。山城が機能していた当時の水場という確証はないが、可能性がある遺構と捉えたい。曲輪Ⅱ南側の一段下がった地点には土塁が造成されている。土塁がある地点から東にかけてはやや平坦な面が広がり、浅い谷が入る。この谷に面する斜面で竪堀群が確認できる。竪堀群が見られる谷の北側の尾根には段切り状に曲輪を造成している。その西隣の尾根も段切り状に曲輪を造成するが、こちらは尾根の基点を堀切で分断し、外側に低い土塁を造る。全体構造は、主となる曲輪を頂部に造成し、そこから北側に派生する尾根筋を段切り状に造成したもので、宇甘川が東流する北側谷部への防御意識が高いと考える。

文献・伝承　『備中誌』には大原城主として出雲尼子氏家臣の疋田元久がみえ、天正年間には神原隆好が城主としてみえる。　（上栫）



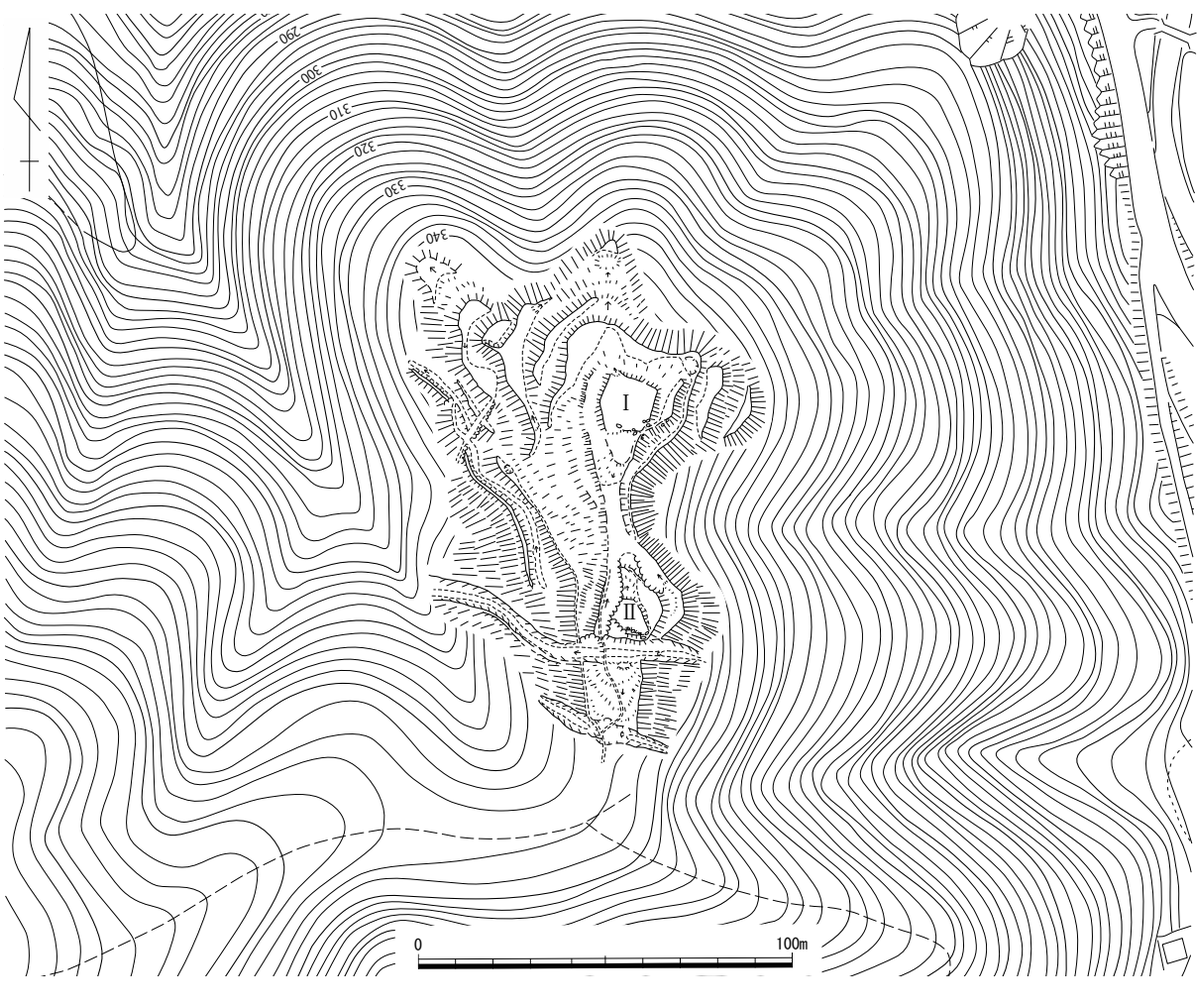
第 132 図　大原城跡縄張り図（1/2,000）

154　小谷城跡（こたに）　　加賀郡吉備中央町湯山　　地図 15 右

立地　小谷城跡は山頂から北に派生する尾根頂部に立地する。北から東側には南北を通る近世大山道を見下ろすことができる。

概要　幅狭い尾根頂部に小規模な曲輪２面を造成する。略五角形状の曲輪Ⅰには、帯曲輪が西・北・東側を取り巻き、帯曲輪の下方斜面にも複数の曲輪を造成する。自然地形の鞍部を挟んで南に位置する曲輪Ⅱは略台形状を呈しており、南辺に土塁を築く。曲輪Ⅱの南側には二重堀切を造成して尾根筋から遮断する。東側斜面は峻険な自然の要害である。西側斜面は帯曲輪を造成している地点は急傾斜であるが、特に鞍部西側は傾斜が比較的緩やかであり、この地点には横堀状の掘削とその土を斜面側に盛り上げた土塁状の高まりが認められる。この地点については、後世の改変の可能性もあるが、城館関連遺構の可能性も完全には捨てきれない。

文献・伝承　虎倉城主伊賀氏の幕下にあった森氏の居城という。天正７（1579）年、虎倉城の落城により大原城主神原惣右衛門は伊賀久良を連れて小谷城に入ろうとしたが、森氏の抵抗にあったため交戦した。この戦で森氏は討ち滅ぼされたという。　　（上栫）



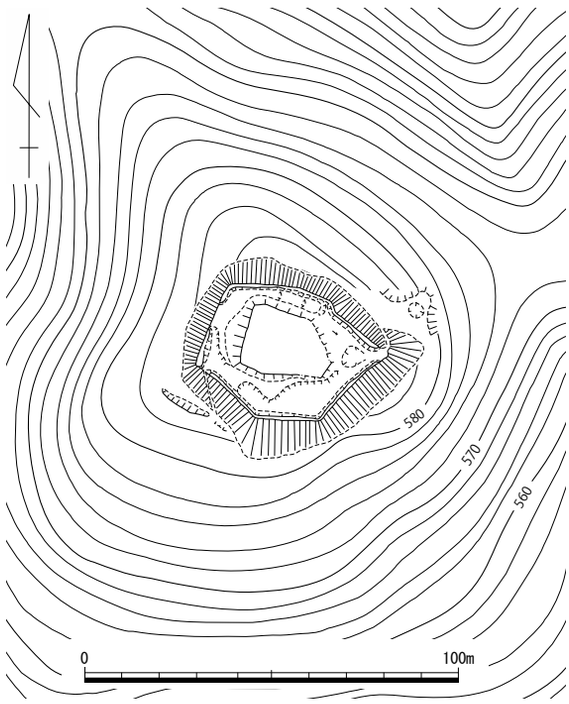
第 133 図　小谷城跡縄張り図（1/2,000）

156　矢倉（やぐら）城跡　　加賀郡吉備中央町上竹　　地図 15 右

立地　矢倉城跡は矢倉山の頂部に位置し、西側の眺望が優れた立地である。尾根を下った南西 1.6 ㎞には方形土塁の野路山城跡と陰地城跡が位置する。

概要　平面六角形を呈する単郭城館で、城域は東西 65 m、南北 55 mである。周囲を囲む土塁の角は明瞭で、北には折れも認められる。曲輪の中央には台形状の高まりを作り出しており、その南側はやや窪む。曲輪の周囲には切岸をめぐらせており、南西隅にはこれにかかわる窪みが堀状に残る。また、曲輪の北東には楕円形の窪地があり、井戸跡とされる。

文献・伝承　天正年中の中国兵乱に際して田中掃部介が在城したとされ、備中松山城落城後、毛利の部将である難波伝兵衛尉親俊が入城しているという。　（上栫）



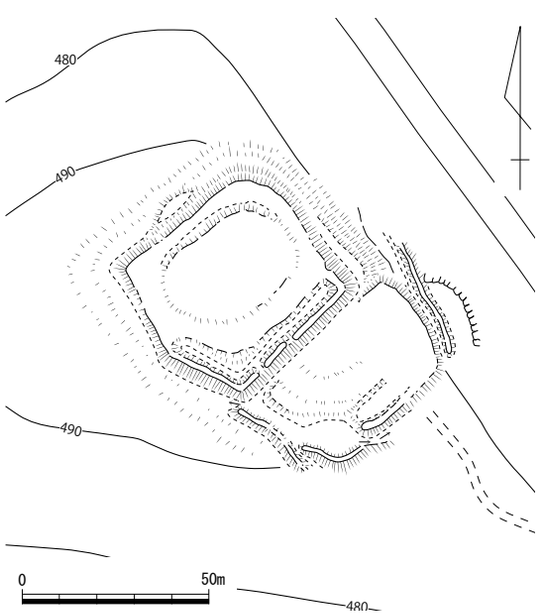
第 134 図 矢倉城跡縄張り図（1/2,000）

157　高陣（たかじん）の陣跡　　高梁市松山　　地図 18 左

立地　備中松山城跡が築かれた臥牛山から、東側へ延びた尾根伝いに繋がる小高い頂部が該当する。

概要　小高い頂部を利用した、長さ約 90 m、幅約 70 mの小規模な山城である。主郭とその南東側にある曲輪によって構成される。主郭は 50 m四方の正方形である。頂部付近は自然地形を生かし平坦地を造らず、端部のみ成形して角度を付ける。曲輪が連なる側の南東辺とそれに続いた南西辺に土塁を築き区画する。土塁の高さは約 1 mで、主郭内部側は横堀状の凹みが存在する。土塁から２m程下った箇所にあるもう一つの曲輪は、長さ約 30 m、幅約 50 mの規模である。やはり自然地形を生かして、頂部は成形していない。南東辺と南西辺に土塁を築くが、主郭の土塁ほど高くはない。またこの２つの曲輪の北東側に、曲輪と平行して土塁が 1 つ築かれている。

文献・伝承　故事来歴は不明である。　（小林）



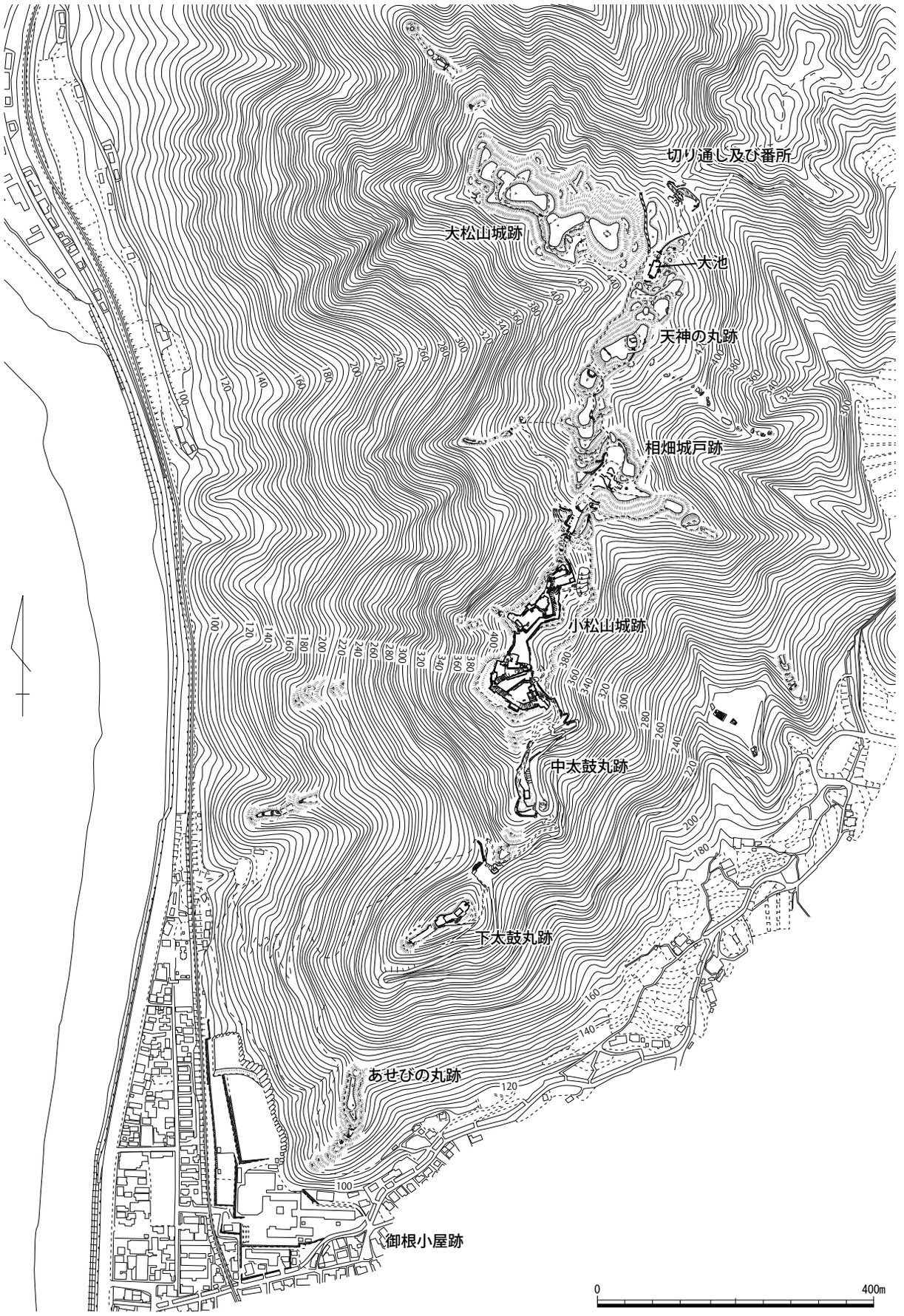
第 135 図　高陣の陣跡縄張り図（1/2,000）
作図：島崎　東

158 備中松山城跡（びっちゅうまつやま）・159 備中松山城御根小屋跡（おねごや） 高梁市内山下 <国・県指定史跡> 地図 17 右・18 左

立地　備中松山城跡、備中松山城御根小屋跡（以下、御根小屋跡）は、岡山三大河川の一つである高梁川中流域の左岸沿いに所在し、現高梁市街（旧松山城下町）を南に望む臥牛山の南山麓から標高 487 mの山頂へ向かって、尾根伝いに南北約 1.8㎞、東西への支脈を含めて約 0.8㎞に渡って展開する城郭群である。臥牛山の周囲は極めて急峻な断崖絶壁である。その北端は深い渓谷により吉備高原に連なる山塊とは隔絶されており、元々山城築城の適地であった。現在、高梁川沿いには国道 180 号が走り、近世には高瀬舟の往来により、備北地域と瀬戸内海を結ぶ河川交通の要地にあたっていた。また、市街地の南端にあたる落合地区は高梁川と備中国中部を東流する成羽川の合流地点にあたる。成羽川も古くから河川交通が盛んで、その上流域に今は沈む重要文化財『笠神の文字岩』の銘文に刻まれるとおり、鎌倉時代末の徳地２（1307）年にはその上流域まで船路の開削が進んでいた。さらに城域の北２㎞には、備前、備中、美作の三国国境地帯から西流する有漢川と高梁川の合流地点がある。以上、備中松山城跡は備中国中央部を抑える軍事的要衝であると共に、備中国を東西南北に貫く河川交通の結節地点にあたり、その地政学的地位は極めて高い。

概要　備中松山城跡は、大きく見れば北から大松山、天神の丸、小松山、前山という臥牛山を構成する４つの峰上に展開する城郭群と、臥牛山南山麓にある御根小屋（現県立高梁高等学校）と呼ばれる近世期の藩庁跡から構成される。なお、山城部分は国指定史跡、藩庁跡は県指定史跡となっている。

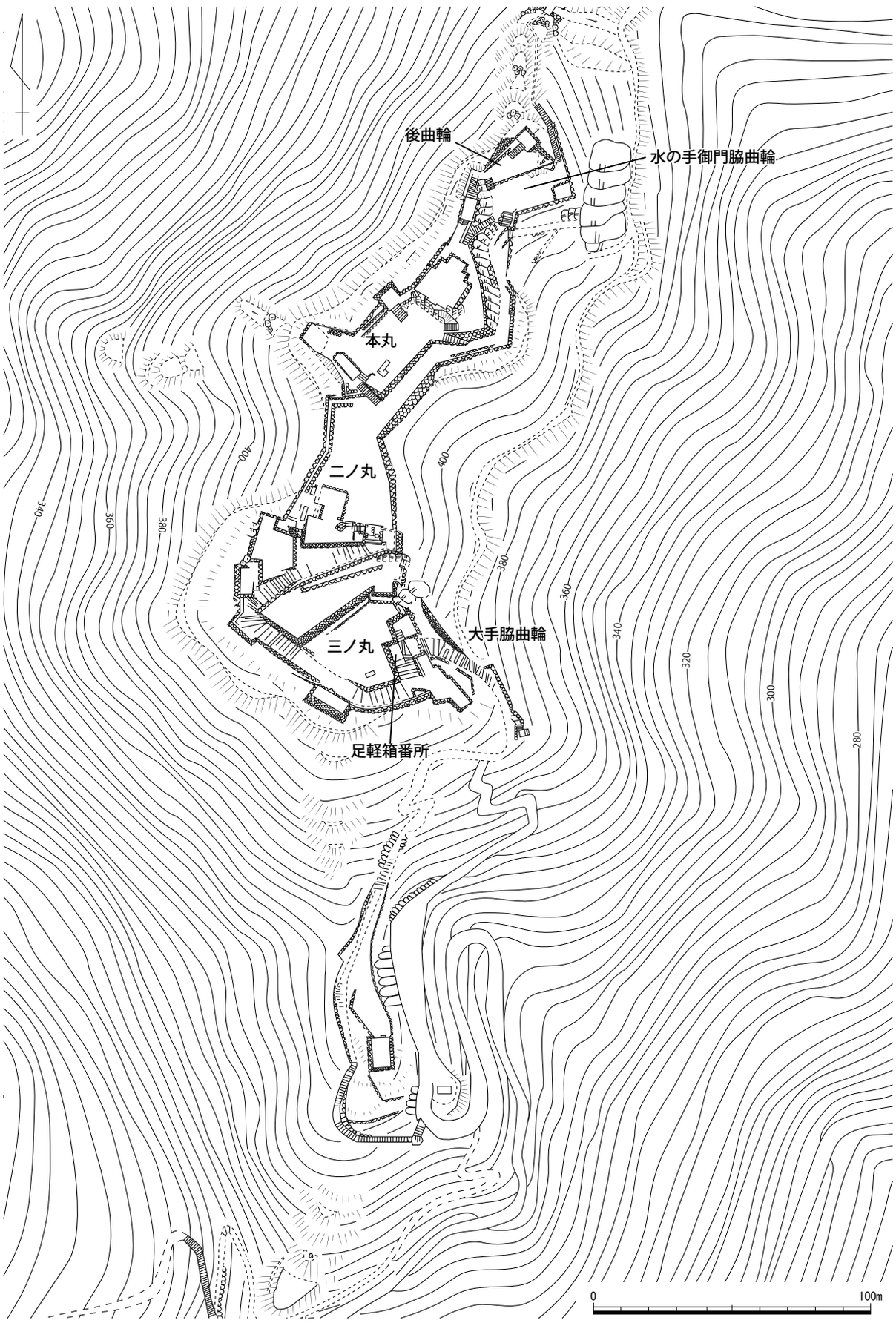
城域の最北部には吉備高原から城域を画絶する「切り通し」がある。滋賀県・弧篷庵に伝わる慶長年間の松山城を描いたとされる２種類の『備中松山城絵図』（以下、『慶長絵図』）に、「大たわの堀切」として描かれるものである。堀切南西には「大松山城跡」がある。詳細は後述するが、大松山城跡は東から「本丸」、「二の丸」、「三の丸」の三つの主要郭面と、その間を区画する堀切、切岸、及び周辺の腰曲輪から構成される。一つ一つの郭面が大きく、古式の山城の風格を見せる。「大松山城跡」の南東に位置する「天神の丸跡」は、その南端付近に三日月形の主郭があり、主郭中央部分に天神社跡がある。「天神の丸跡」自体は、主郭から北へ階段状に続いていく連郭式山城である。また、大松山城跡と「天神の丸跡」の間には、近世期の水の手である「大池」がある。「天神の丸跡」主郭の南にある堀切の南には「せいろうが壇」と呼ばれる「天神の丸跡」の出丸がある。このさらに南は８つの平坦面と腰曲輪からなる「相畑城戸跡」が連接している。「相畑城戸跡」の最南端にある平坦面には、列石や石囲いが残される。この場所は『慶長絵図』に番小屋が建っていた表現が見られることから、それに関する建物跡とみられる。「相畑城戸跡」から石垣化された土橋を隔てた南側には、近世城郭である「小松山城跡」が位置する。「小松山城跡」は本丸跡を中心に、二の丸跡、三の丸跡など８つの曲輪からなる。天然の露岩を巧みに取り込んだ石垣群、国指定重要文化財である「備中松山城天守閣（以下、天守）」、「二重櫓」や「三ノ平櫓東土塀」などが遺存している。「小松山城跡」から臥牛山を下った南斜面には、「中太鼓櫓跡」と「下太鼓の丸跡」の２つの櫓台跡がある。その他、「小松山城跡」の東及び西の標高 200 m付近の稜線上に、中世期に遡ると見られる曲輪群が４カ所遺存している。その一部は順正短期大学運動場建設に伴い発掘調査されており、16 世紀代の建物跡が検出されている。臥牛山南山麓には「あせびの丸跡」と呼ばれる曲輪跡と、近世期の備中松山藩の政庁にして藩主の居館である「御根小屋跡」が所在する。



第 136 図　備中松山城跡・大松山城跡・備中松山城御根小屋跡縄張り図（1/8,000）

「小松山城跡」は近世期の山城跡で、標高約 430 mの小松山上に位置する。その規模は南北約 230 m、東西約 120 mに及ぶ。天守、石垣、礎石建物を備えた山城としては、全国で最も標高の高い場所に位置することで著名である。寛延２（1749）年に城内の各施設について記した『覚』によると、小松山城は「本丸」、「二之丸」、「後曲輪」、「水の手御門脇曲輪」、「御膳棚」、「厠曲輪」、「三之丸」、「大手御角脇曲輪」の８つの曲輪から構成されていたとされる。また、「本丸」北にそびえる三重御櫓（天守、廊下部分を一階と見ている）を含めて十二の櫓が林立していたことも記される。現在は「天守閣」、「二重櫓」が残るのみで、「五の平櫓」、「六の平櫓」は 1997 年に復元、竣工されたものである。

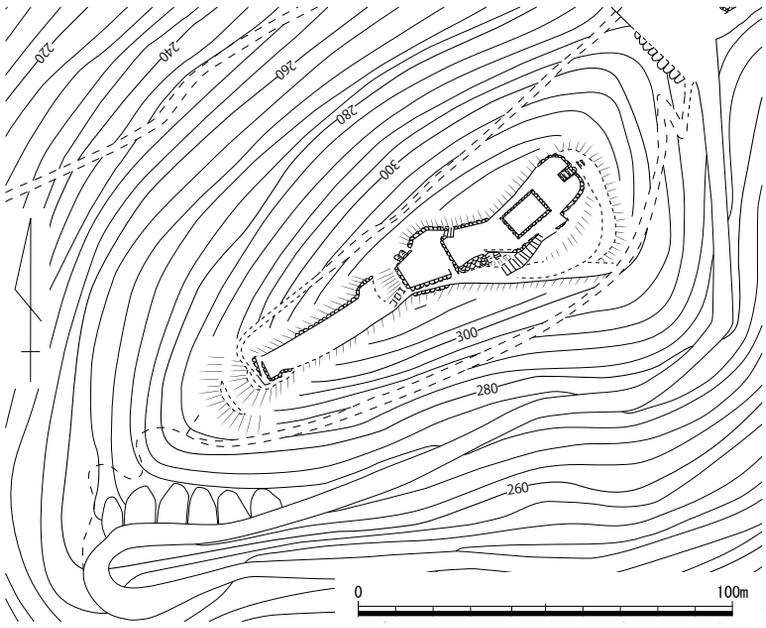
さて、「小松山城跡」は「本丸」を小松山山頂に配し、山の尾根地形を巧みに利用しながら石垣と建物群を配する連郭式山城である。城域の最南端は「大手角脇曲輪」とされる、城の大手門周辺の曲輪群からなる。「大手門」及び「大手櫓跡」は現状、高さ３m程度の櫓台及び礎石が遺存するに過ぎないが、先述の『覚』、『慶長絵図』（修理計画図）や、元禄年間以後の城絵図より、この上に櫓門があったことがわかる。この櫓門と「二の平櫓」は土塀により連接していたことが発掘調査により確認されている。大手門正面には「足軽箱番所跡」がある。その後背には「三の丸跡」を区画する高石垣がある。この高石垣は高さ 10 m近く、城内でも最も高い石垣の１つに数えられる。だがその築石は小さく、後述する水谷勝宗による改修に際して積み直されたものと考える。ここから向かって南に折れつつ石段を登ると、正面に「三の平櫓東土塀」が位置する。この土塀沿いに進むと、東側に「三の丸跡」が所在する。三の丸跡の北には高さ８mを超える高石垣に隔てられた「厠曲輪跡」がある。この高石垣は天然の露岩を巧みに取り入れたもので、その上部には土塀が一部残されている。城道は「四の平櫓」近くで大きく北東方向に折れる。この場所には「黒門跡」があり、礎石が遺存している。「黒門跡」から鏡石様の巨石が見られる高石垣を左手に城道を進むと、「厠曲輪跡」の北東隅でもう一度北方向へ折れ、「二の櫓門（鉄門）跡」に至る。この門を越えると、「二の丸」へ入ることができる。「二の丸」の北には高さ３mの石垣により突出した「本丸」が所在する。「本丸」の周辺の石垣隅角部は、算木積みの指向があまり見られない。しかし、その上部は直角に近く、緩い反りが見られる。「二の丸」からは「本丸」東に設けられた腰曲輪を通って、「搦手門曲輪跡」から城域の最北部にあたる「後曲輪」、「水の手御門脇曲輪」へ通じている。「二の丸」から「本丸」へは石段を登って北方向へ一度折れ、「五の平櫓」と「六の平櫓」跡の間を通り抜けて進入することとなる。「六の平櫓」のさらに西には北西方向に突出するように「七の平櫓」が位置する。「本丸」に入ると正面には、巨岩の上に築かれた天守台上に築かれる「天守」が位置する。「小松山城」の「天守」は木造本瓦葺き、二重二層の構造である。大壁は漆喰仕上げで、墨塗黒色の下見板張りである。大屋根上には鯱を掲げ、鳥衾瓦、丸瓦、平瓦が葺かれている。一階には御装束之間と、天守閣内の遺構としては全国的に見ても珍しい囲炉裏がある。二階には県指定重要文化財の宝剣を祀る御社壇がある。なお、「天守」はその南西にある「八の平櫓」と渡り廊下により結ばれた連接型天守であった。本来は「八の平櫓」が「天守」への入り口であったのである。「天守」の北には、二重二層の「二重櫓」がある。この「二重櫓」の櫓台も天然の巨石の上に築かれた石垣である。隅角部に見る算木積みの発達は弱く、築石も野面の石材が主体となっている。城域の最北部にあたる「後曲輪」、「水の手御門脇曲輪」周辺に見る石垣の築石は 30㎝程度の小形のものが主体である。隅角部はシノギ積みになっている部分も見られる。築石の加工度も低く、築石と間詰石の分化が不明瞭である。これが大手周辺の高石垣群との時期差を示しているかについては慎重になるべきである。だが、今回の調査で、「九の平櫓」周辺で内面にコビキ



第 137 図　小松山城跡・中太鼓櫓跡縄張り図（1/2,000）

Ａの痕跡を残す丸瓦が確認された。『慶長絵図』や『正保城図』には、この「九の平櫓」が既に描かれており、あわせてその普請が慶長期以前であったことの傍証となるか。

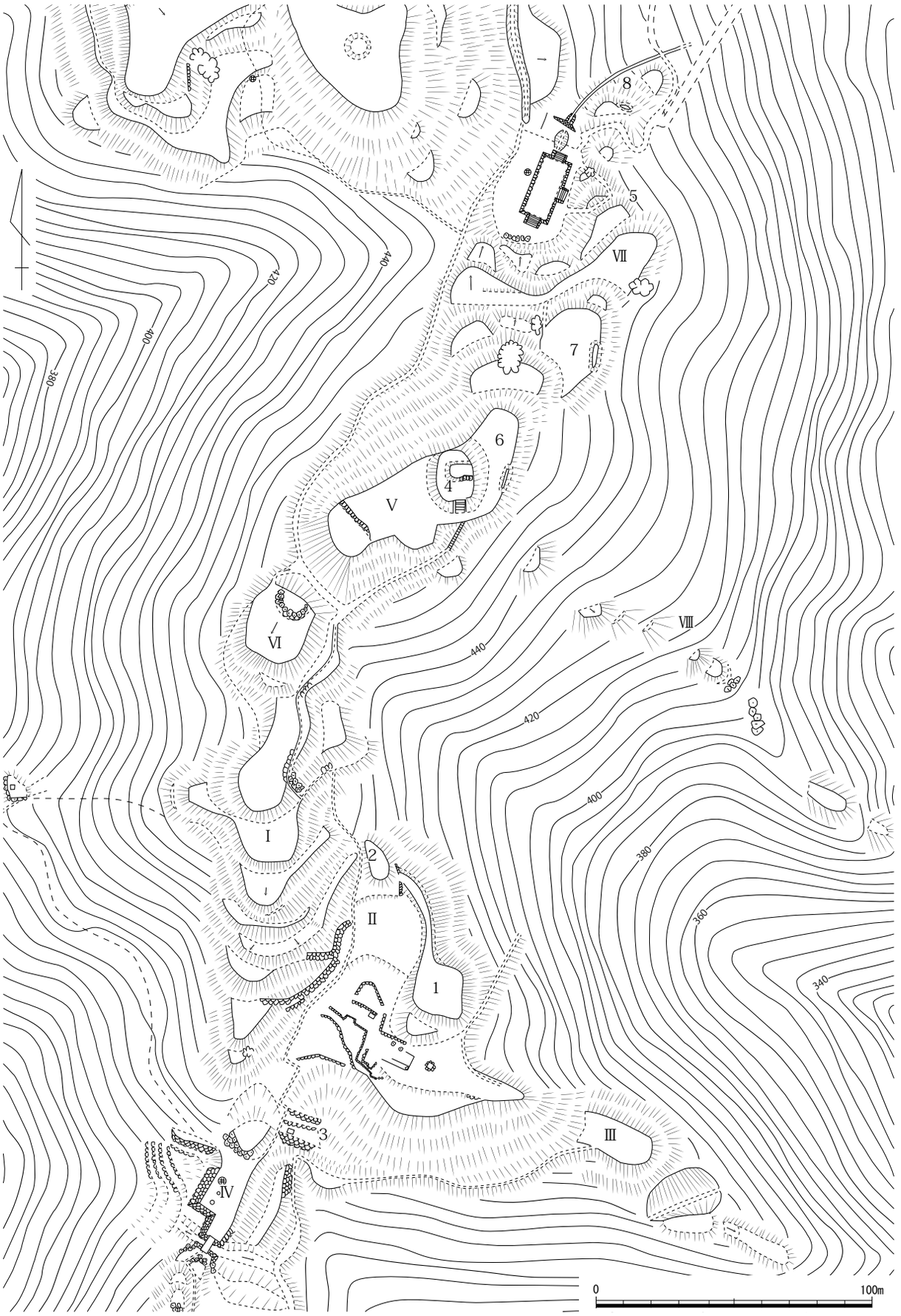
「小松山城跡」の南側に「中太鼓櫓跡」と「下の太鼓丸跡」の２つの櫓台跡があることは既に述べたが、いずれも石垣化されている。両者とも隅角部に見る算木積みの発達は弱く、築石は 30 ～ 60cm 大の野面の築石を用いている。櫓台から派生する石列も隅角が鈍角となるシノギ積みとなる。「中太鼓櫓跡」から 40 ｍの急勾配を上ると「小松山城跡」の「大手門」に至るが、その途中で道は二股に別れる。分岐した道は城域の東側を沿うように走る犬走りとなって、「小松山城跡」の城域北端にある堀切まで通じている。



第 138 図　下の太鼓の丸跡縄張り図（1/2,000）

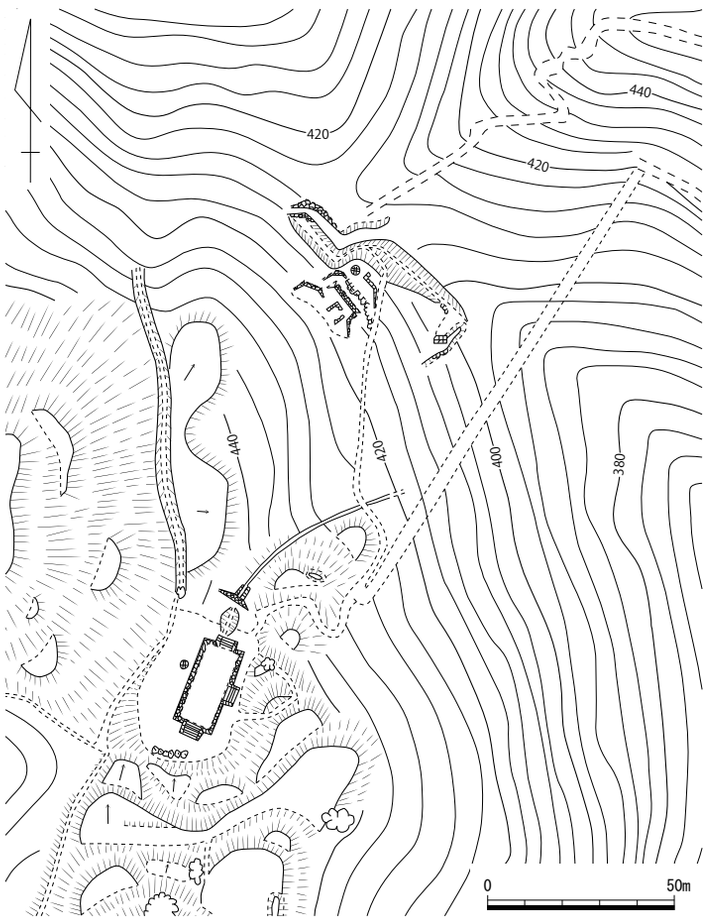
ところで、「小松山城」周辺には中世段階まで遡りうる小規模の曲輪群が点在している。これらは戦国期の「小松山城跡」に関連する遺構とみられる。しかし、戦国期の「小松山城跡」の中核部分は近世期における普請により消滅したようであり、その全容は不明である。

「小松山城跡」の北には、堀切を挟んで戦国期の山城跡である「相畑城戸跡」と「天神の丸跡」が続く。「相畑城戸跡」は臥牛山の最高地点にあたる、「天神の丸跡」から南に連続する尾根上に展開する。「相畑城戸跡」は大きく見れば、「天神の丸跡」から続く尾根上に築かれた曲輪群Ⅰとその南西に位置する平坦面Ⅱ、及びその東方向に展開する支脈上に築かれた曲輪群Ⅲ、そして南の「小松山城跡」に続く土橋Ⅳからなる。現状、全部で８面の平坦面が設けられている。曲輪群Ⅰは標高 420 ～ 400 ｍの尾根上に造成された平坦面とその周辺の腰曲輪群からなる。各曲輪は比高差３～４ｍを測る切岸により隔てられる。随所に天然の露岩が見られる他、その南端付近には高さ１ｍ弱の石積みが見られる。自然石をそのまま積むものであるが、築石面がよくそろってはいる。戦国期のものかは判然としない。曲輪群Ⅰの東には、備中松山城跡内では最大の平坦地Ⅱがある。この平坦地Ⅱの北には幅３ｍ、高さ 50cm の土橋状遺構により結ばれた、櫓台と思われる高まり１、２がある。平坦地Ⅱには随所に石列や井戸跡と思われる石囲いが残っている。『慶長絵図』にはこの場所に建物が描かれており、これに関連する遺構群と思われる。さて、平坦地Ⅱから東の支脈へは 20 ｍ程下がった位置に長さ約 25 ｍを測るやや大形の曲輪があり、そこから 10 ｍ程東へ下ると、高さ８ｍを測る大形の堀切が掘削されている。この堀切は堀底の幅が１～２ｍの薬研堀となる。この堀切を挟んでさらに東には、自然地形を取り入れつつ続く長さ約 40 ｍの平坦地がある。平坦地Ⅱの南西にあたる土橋Ⅳは近世に石垣化されている。付近には礎石が残る。正徳～延享（1711 ～ 1748）年中に制作されたとされる『備中松山城図』には、この場所に「山番」と記される番所があった。土橋Ⅳはこれに関連する遺構であろう。そのすぐ東に隣接する井戸３は「車井戸」と呼ばれる水の手である。



第 139 図　天神の丸跡・相畑城戸跡縄張り図（1/2,000）

「天神の丸跡」は臥牛山の最高峰に主郭Ⅴを据えた連郭式山城である。その中央には天神社跡４があり、周囲からは２ｍ程の比高差を持つ高まりとなっている。『慶長絵図』には天神社が描かれていることから、近世初頭には既に存在していたことは明らかである。なお、周囲の瓦溜まりの丸瓦はすべてコビキＢであった。主郭Ⅴから堀切を挟んで南には出丸Ⅵ、「せいろうが壇」がある。主郭Ⅴから北は堀切５を挟みつつ７面の曲輪群Ⅶが続く。面積的に見ると、主郭Ⅴに近い曲輪ほど大きく、北端に向かうにつれて縮小する。これは旧地形の制約を受けてのことと思われる。「天神の丸跡」には備中松山城跡では唯一となる土塁６、７、８が見られるが、最大でも長さ５ｍ、高さ50cmを測る程度である。主郭Ⅴの東側の支脈にも曲輪群Ⅷが展開するが、自然地形を取り入れた小規模なものが多い。以上、「天神の丸跡」は主郭Ⅴを防御の中心に据えた城塞であり、その北方面からの侵入を防ぐべく小曲輪群が尾根沿いに展開する構造となる。また、「天神の丸跡」の南側は「相畑城戸跡」と連接している。このことから見て、両者は相互に連携して南北両方向からの侵入者を阻む機能を果たしていたと見られる。



第 140 図　大池・堀切跡周辺縄張り図（1/2,000）

「天神の丸跡」と後述する「大松山城跡」の間にある平坦地には、近世期の水の手である「大池」が所在する。標高は約 450 m付近にあたる。大池は長さ約 23 m、幅約 10 mを測り、周囲はすべて石垣化されている。北東、東と南西方向に階段があり、水面近くまで降りることが可能である。隅角部は算木積みの発達こそ弱いものの、すべて矢穴を伴う打ち込み矧ぎとなっている。その他築石にも割石が多く用いられる一方、野面の石材も併用される。この大池は『慶長絵図』にも既に描かれており、その一部が石垣化されていたことがわかる。

備中松山城の城域最北端には、先述した「大たわの堀切跡」がある。比高差 10 mを優に越え、城内では最大規模の堀切である。その中央は鍵型に折れる。堀の北西端は石塁化された土橋により封鎖されている。さらに、堀切南東隅には石塁化された搦め手が築かれている。堀切の南西には番所がある。これは近世期のもので、石垣化された櫓台上に築かれている。周辺には天然の露岩を取り入れつつ石垣化された搦め手や、小曲輪がある。侵入者が堀切から番所に至るには３回折れを繰り返すが、経路の各所で横矢に曝され続ける。

「あせびの丸跡」は臥牛山の南山麓近く、標高 160 ～ 120 mにかけて位置する。舌状に張り出した尾根の地形に沿って北東方向から南西方向に向かって築かれている。最上部の曲輪は判然としない

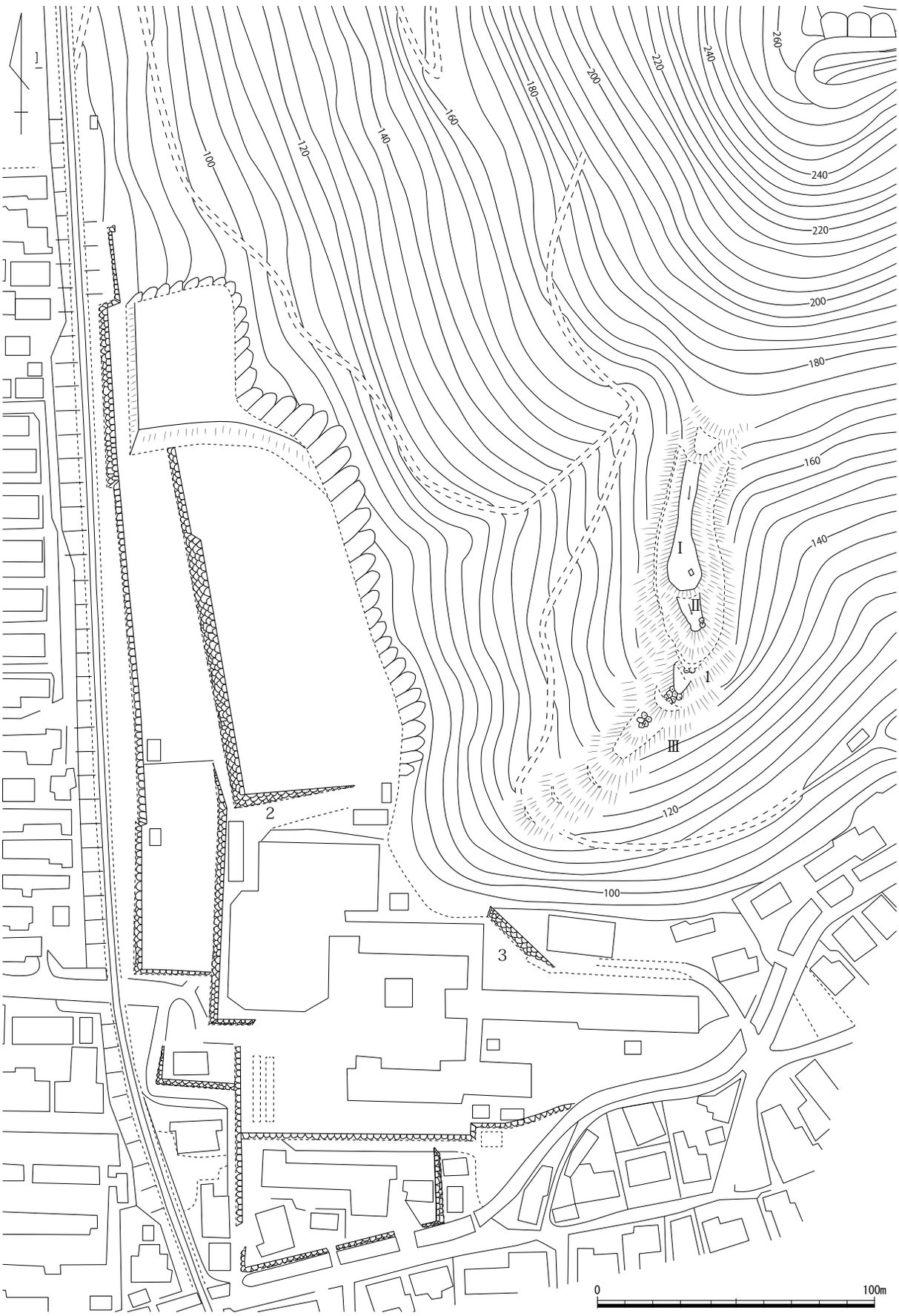
が、その下段には長さ約 40 m、最大幅 13 mを測る曲輪Ⅰがある。その下段には長さ 12 m、最大幅 10 mを測る曲輪Ⅱがあり、曲輪Ⅰと併せて周囲から比高差約３mを測る切岸により突出している。曲輪Ⅰ、Ⅱの周囲には、その形状に沿うように犬走り１が設けられている。郭面はここから南西方向に向かって折れつつ展開し、６面の平坦面からなる曲輪群Ⅲが続くが、先端に向かうにつれその形状は判然とはせず、旧地形や自然の露岩をそのまま取り入れて築かれているようである。この「あせびの丸跡」は『備中兵乱記』にその存在が記され、『慶長絵図』にも描かれている。慶長期からすでに建物などが建っていない平坦地であったようである。その形状から見て戦国期にまで遡る曲輪である可能性が高く、「小松山城跡」から派生する出丸と考えて良いであろう。その先端が「御根小屋跡」方向に曲輪を連ねることから、戦国期において、「御根小屋跡」の前身となる居館が存在していた傍証となるか。

「御根小屋跡」は臥牛山の南西麓に位置する近世期の政庁跡で、南北 380 m、東西 220 mを測る。現在は３段の高石垣により階梯状に縄張りされている。だが、板倉氏入封時に描かれた『延享元年五月城主交代引渡済根小屋絵図写』と、版籍奉還後に制作されたと見られる『旧松山藩板倉侯御殿建築配置図』を比較すると、板倉氏時代に城域が北方向に大きく拡張されたことがわかる。拡張された場所には「馬場」、「武具倉」や「武具門」など軍事施設が設けられていた。この拡張部分の石垣は、近世後半の石垣によく見られる隅落としとはならず、築石に自然石が交り古式の風格を見せる。城域全体の石垣と外観をそろえたものか。

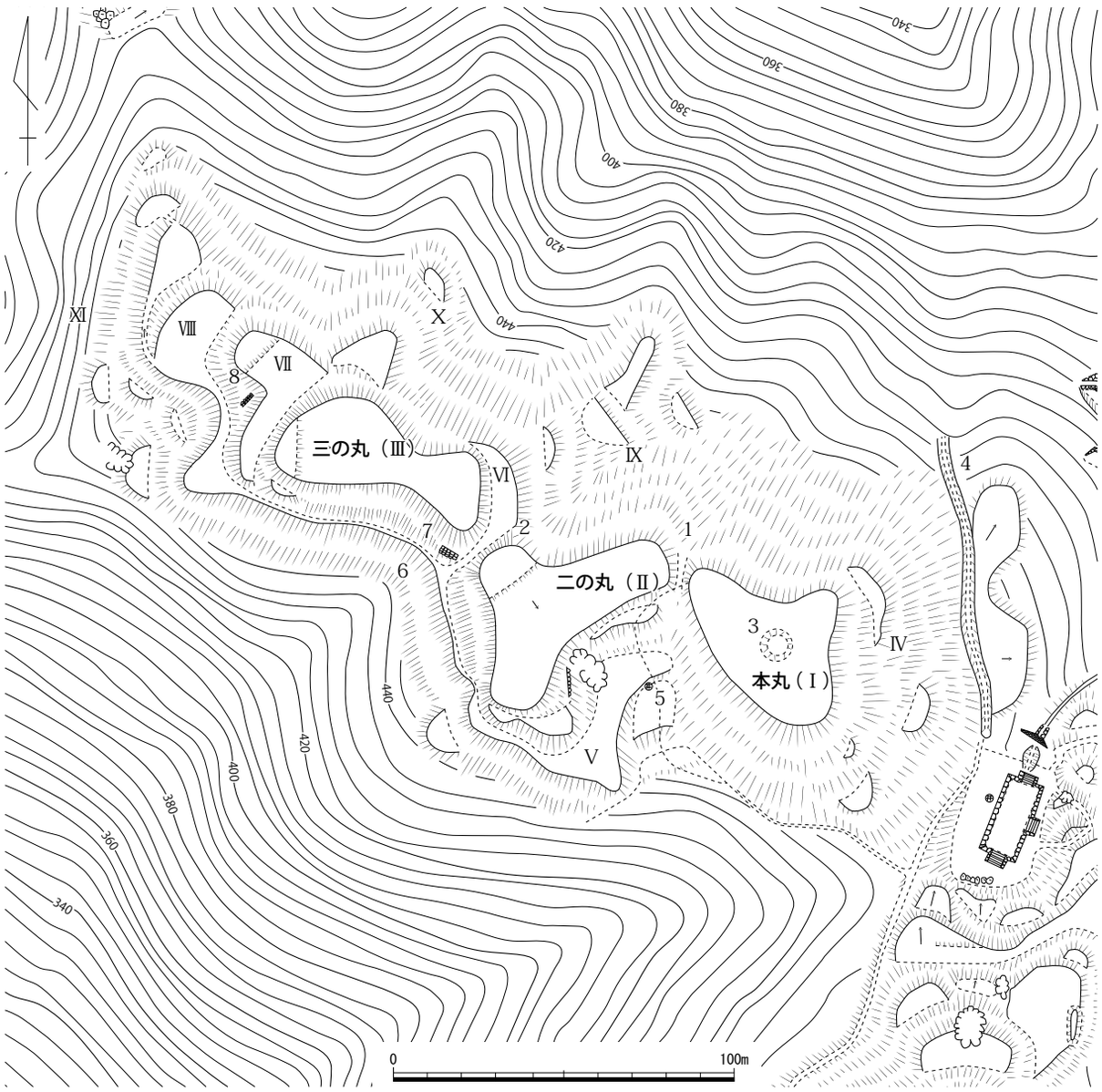
さて、『備中兵乱記』によると、天正初め頃には「御根小屋跡」の前身となる居館があったようである。天正２～３（1574 ～ 1575）年の備中兵乱の折には、毛利勢の攻撃に際して、三村勢が居館を焼き払って退去したこと記されている。だが、現状、戦国期に遡る曲輪の跡は見られない。一方、現在残る石垣に着目すると、いくつかの種類に分類できるようである。中でも古式を見せるのは石垣２、及び３である。２は隅角部の算木積みが徹底され、角脇石の充填も完全である。築石の一部に矢穴の痕跡が見られる。また、上に向かうほど傾斜がきつくなり、明確な反りを見せる。石垣２、３の築石部はいずれもノミによる加工の痕跡が顕著に見られ、築石同士が加工面を接して密着する、いわゆる「備前築き」となっている。こうした工法は慶長 10(1605)年を境に急激に発達したとされる。「御根小屋跡」は慶長 13（1608）年当時に備中代官であった小堀政一（遠州）により修築されたことが知られるが、石垣の特徴から見て年代に矛盾はない。

写真 56　備中松山城御根小屋跡の石垣２

写真 57　備中松山城御根小屋跡の石垣３

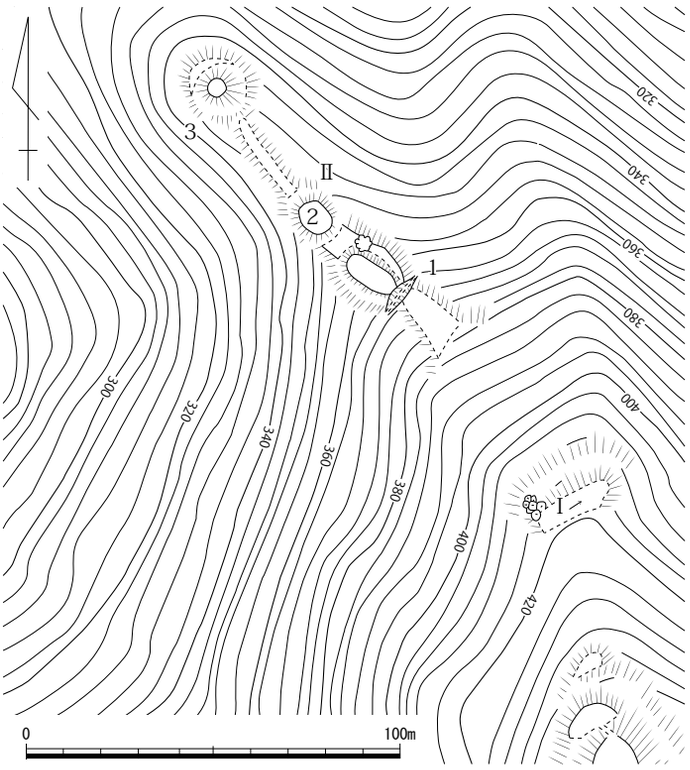


第 141 図　あせびの丸跡・備中松山城御根小屋跡縄張り図（1/2,000）



第 142 図　大松山城跡縄張り図（1/2,000）

「大松山城跡」は「天神の丸跡」の北西に隣接し、臥牛山の主峰の 1 つである大松山の山頂から北西へ続く尾根上に展開する。その規模は東西、南北とも約 400 mを測り、備中松山城域では最大規模の山城である。現状、東から「本丸（Ⅰ）」、「二の丸（Ⅱ）」、「三の丸（Ⅲ）」と呼ばれる 3 面の主要郭面と、その周囲の腰曲輪、及びこれらを取り巻く小曲輪群から構成される。城域全体を区画する堀切は見られない。一方、「本丸」、「二の丸」、「三の丸」の間はそれぞれ堀切 1 、 2 により切断されるものの、その深さは約 2 ～ 3 mの小規模なものである。「本丸」は東西 55 m、南北 40 mを測る曲輪である。標高は 470 mを測る。中央には高さ 1 m程の露岩 3 があるが、加工された痕跡はなく、櫓台であるとは考えにくい。「本丸」の東は比高差 15 mを優に越える切岸により、「大池」の所在する平坦面から突出している。また、「本丸」を取り巻くように曲輪群Ⅳが築かれる。「本丸」の麓付近には長さ 100 m近い竪堀 4 が見られる。「二の丸」は平面Ｙ字形の曲輪である。その規模は東西 55 m、南北 50 mを測り、面積的には城内最大の曲輪である。「二の丸」の南には腰曲輪Ⅴがある。この腰曲輪Ⅴから切岸を隔てて、一段降りた爪形の曲輪の北端に、井戸 5 が位置する。「三の丸」は平面瓢



第 143 図　大松山城跡北西曲輪群縄張り図（1/2,000）

箪形の曲輪であり、東西 60 m、南北 40 mを測る。「三の丸」の東西に腰曲輪Ⅵ、Ⅶ、Ⅷが位置する。この腰曲輪Ⅵ、Ⅷと腰曲輪Ⅴは、犬走り 6 により連接している。「二の丸」、「三の丸」の北から西にかけては、衛星状に曲輪群Ⅸ、Ⅹ、Ⅺが取り巻き、その防御を固めている。曲輪群の大きさと形状は多様であり、旧地形に規制されつつ築かれた状況が読み取れる。その他「三の丸」周辺には石積み 7、8 が遺存している。これは自然石を 2 ～ 3 段程度積んだ小規模なもので、曲輪を画するようなものではない。おそらくは切岸を登る侵入者の足止めを目的としたものか。

「大松山城跡」の北西尾根上にも曲輪群が連続して築かれている。その標高は 420 ～ 350 mで、周囲は急峻な崖面により取り巻かれている。曲輪Ⅰは大松山城の「三の丸」から 50 mほど下った位置にある。自然の露岩を取り入れつつ築かれたものであり、明確な加工痕跡は見いだしがたい。曲輪群Ⅱは標高 380 ～ 350 mにかけて階段状に築かれている。その南東端近くは比高差 1 mほどの小さな堀切 1 により区画され、北西端に向かって 6 面の曲輪が連続する。先端に向かうにつれ地山の加工の度合いが下がり、自然地形をそのまま曲輪として取り入れているようである。ただ、2、3 の円形の基壇状遺構は明確に造成されており、特に 3 は周囲から 3 mを測る切岸により突出している。その形状と位置から見て見張り台とその伝令所であった公算が大きい。

文献・伝承　備中松山城の正確な築城年代は不明ながら、『松山老牛山伏草城主歴代記』等によると延応 2（1240）年、有漢郷の地頭であった秋庭三郎重信が大松山に城を築いたのが始まりであるという。『備中府志』によると、鎌倉時代末までには小松山へも出城が築かれたとされる。元弘年中（1331 ～ 1334）には大松山に高橋九郎左衛門宗康が、小松山にはその弟である大五郎が入った。その後、『太平記』巻九及び第三十八巻によれば、文和 5（＝正平 10、1355）年に秋庭三郎重明に推戴された備中国守護、高師秀が入城した。しかし、師秀は貞治元（＝正平 17、1362）年に南朝方の山名時氏が備中・美作国へ進入すると、秋庭三郎重明の寝返りにより備中松山城を追われた。以後、室町期の備中松山城には秋庭氏が 4 代（6 代とする異説もあり）にわたって在城した。『蔭涼軒日録』には、応仁の乱に際して秋庭元明が細川勝元率いる東軍に与して軍功があり、乱後は備中国守護代に任じられたことが記される。しかし戦国期に入ると、細川氏の庇護を失った秋庭氏の威信は衰えた。

高梁市頼久寺に伝わる『天柱寺安国頼久禅寺由略記』によると、永正年間（1504 ～ 1520）に周防国の大内義興の支援を受けて、上野頼久が入城したとされる。時代が下って頼久の子、頼氏の代の天文 2（1533）年に、小田郡猿掛城主の庄為資が頼氏を打ち、その子の高資が備中松山城へ入った。相国寺鹿苑院主の日記である『鹿苑日録』には天文 8 年（1539）年に出雲国の尼子詮久が備中松山

城を攻撃したことが記されており、尼子氏の城番と相番したようである。しかし、永禄４（1561）年になると高資は尼子氏の加番であった吉田義辰と不和となり、備中松山城を退去した。この機をついて成羽の鶴首城主であった三村家親は安芸国の毛利元就の援軍を得て、同年に備中松山城を攻略し、これを手中に収めた。永禄９（1566）年、家親は久米郡興善寺に陣を移したところで、備前国の沼城主であった宇喜多直家の放った刺客により暗殺される。家親の子、元親は備中松山城主の地位を継いだ。天正元（1573）年、将軍足利義昭の斡旋により毛利氏と宇喜多氏の間で講和が成立すると、元親は父の敵を討つべく織田信長と手を結ぶ。元親離反の報を受けた毛利勢の動きは速く、三村氏傘下の備中国諸城は瞬く間に落城した。天正３（1575）年６月には毛利・宇喜多連合軍の攻撃により、備中松山城は落城。元親は自害して果てた。この戦いは後世に「備中兵乱」として伝えられるが、この際、備中松山城は全山城塞化したようである。元親は臥牛山麓の「根小屋」、尾根上の「馬酔木（あせび）丸」、「小松山」、「天神の丸」、「大松山」等（砦二十一丸）にそれぞれ兵を配したとされる。この時、元親は「小松山」を本城としていた。現在残る「あせびの丸」、「天神の丸跡」と「相畑城戸跡」はこの際に城塞化されたものであろう。三村氏滅亡後、備中国は毛利氏の治めるところとなり、備中松山城には毛利氏被官の天野元明、元信父子が在番した。ところが天正７（1579）年、直家が織田信長に与し、毛利輝元との対立が決定的になると、備中国は織田・毛利の両勢力の境目の国として緊張状態に置かれることとなる。翌８（1580）年６月 21 日、備中松山城に居たと見られる児玉元貫等あてに発給された書状によれば、普請に必要な石引き綱を新たに支給することと、必要な道具を改めて調えること、そして 24 日に輝元自らが備中松山城に入り普請について談合したい旨が記されている。天正 10（1582）年の備中高松城水攻めの後、羽柴（豊臣）氏と結ばれた国分けにより、毛利氏の勢力圏は高梁川以西まで退転した。しかし、備中松山城は毛利領として残された。

文禄５（1600）年、関ヶ原の戦いに敗北した毛利氏が防長二ヶ国へ減封されると、備中国総奉行として、小堀政次・政一（遠州）親子が赴任した。この時、備中松山城は荒廃状態にあったようである。小堀政一在任中に制作されたとされる『慶長絵図』（現状図）には現在の「天守閣」の位置に広さ五間半×七間の二層の天守があったが、石垣共々崩れているので、これを旧状に復したい旨が付記されている。この図によると、城の縄張りと石垣については現在の「小松山城跡」と変わるところがない。政一による備中松山城の修築は慶長 13（1608）年に始まる。政一が近江奉行に転任する直前の元和３（1617）年頃までには「天守」が竣工していたようである（小堀政一書状断簡／『佐治家文書』）。同年、鳥取から池田長幸が入城したが、寛永 18（1641）年に当主であった長常に嗣子がなく断絶。翌 19（1642）年に成羽から水谷勝隆が入城した。その子である勝宗は天和元（1681）年に「小松山城跡」と「御根小屋跡」の大修築に乗り出した。現在見られる「天守」、「二重櫓」、「三ノ平櫓東土塀」はこの際修築されたものとされる。元禄６（1693）年に当主の勝美に嗣子がなく再び断絶。赤穂藩家老、大石良雄の在番を経て上野国高崎から安藤重高が入城。しかし、その子重行の時に美農国へ移封となった。正徳元（1711）年に山城国淀から石川総慶が入城するも、延享元（1744）年に伊勢国亀山の板倉重澄と所替えとなる。以後、六代を経て板倉勝静の代に明治維新を迎えた。明治６（1873）年、太政官公達により廃城となり、現在に至る。（和田）

写真 58　相畑城戸跡曲輪群Ⅰ南端石垣（南西から）

写真 59　相畑城戸跡曲輪群Ⅲ東堀切（西から）

写真 60　天神の丸跡曲輪Ⅴ・Ⅵ間堀切（北西から）

写真 61　大たわの堀切跡（南東から）

写真 62　あせびの丸跡曲輪Ⅰ（北から）

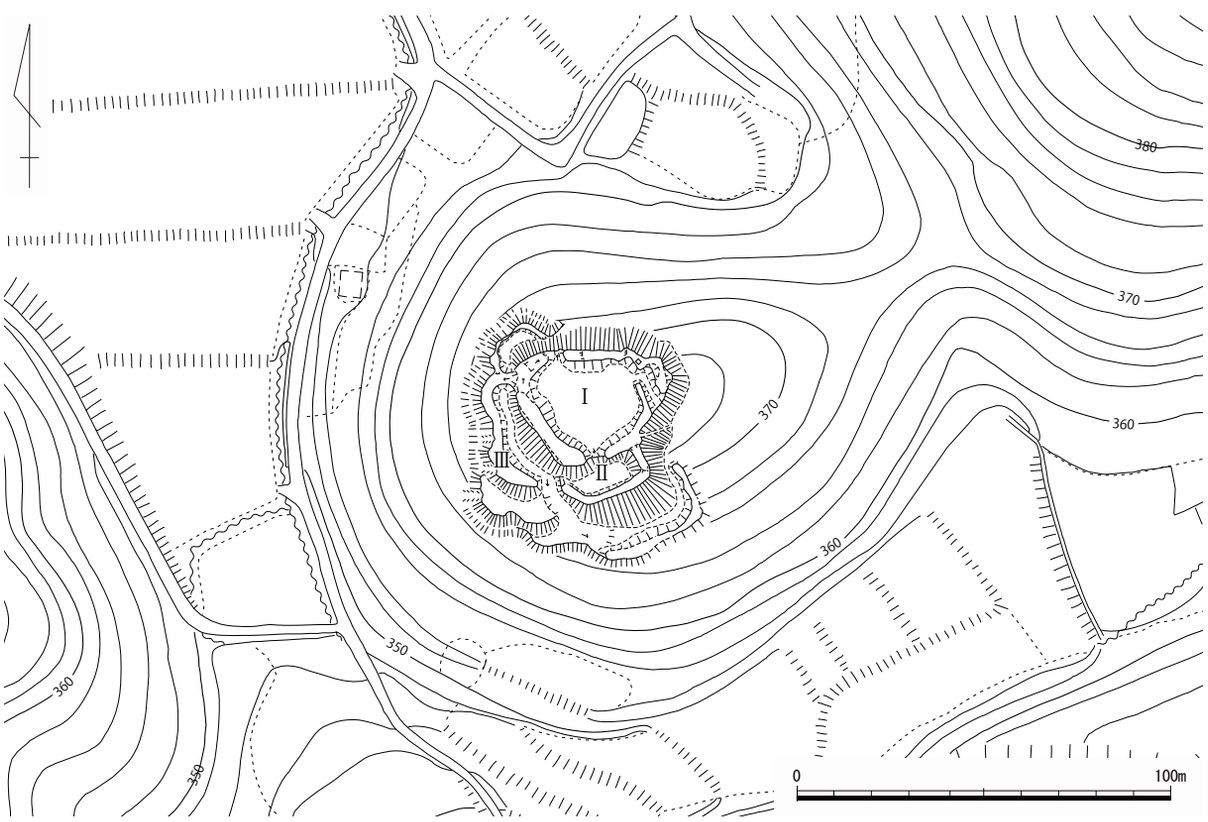
写真 63　大松山城跡三の丸石積み 7（南西から）

163　菅野（すがの）城跡　　加賀郡吉備中央町吉川　　地図 19 左

立地　菅野城跡は独立丘陵頂部に位置する。水田を挟んで 250 m西方を大山道が南北に通る。菅野城跡から南西 350 mの大山道沿いに吉川八幡宮が鎮座する。吉川は平安時代末頃から京都府石清水八幡宮の荘園地（吉川保・吉川荘）で、吉川八幡宮は石清水八幡宮の別宮として永長元（1096）年に創建されたと伝わる。宮内最古の建造物は本殿で、棟札から応永２（1395）年の再建とわかる。

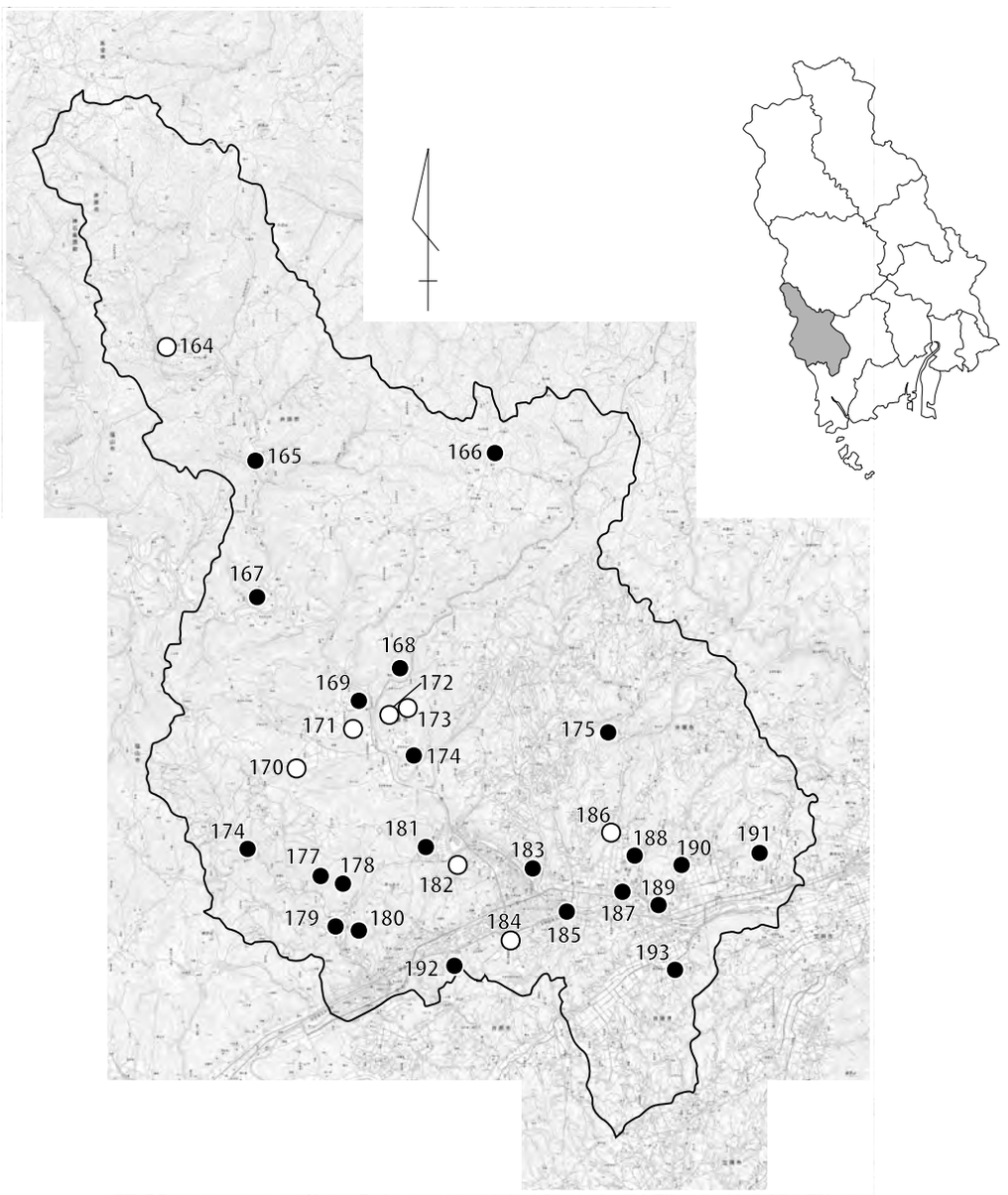
概要　丘陵頂部の曲輪Ⅰは略台形状に造成され、周囲には土塁を巡らせる。土塁の高さは 0.5 ～ 2.0 mで、最高所には小祠が祀られる。小祠を祀る部分は土塁が食い違いに開いており、虎口に相当すると考える。曲輪Ⅰを巡る土塁は、曲輪Ⅱ・Ⅲに隣接している箇所が途切れていた。曲輪Ⅰの西から南側には複数の小曲輪を配しており、大山道が通る谷筋への防御意識の高さがうかがえる。曲輪Ⅱは三方を土塁で囲んでおり、東辺となる土塁は曲輪Ⅰから延びて横矢掛けとしての機能を併せ持つと考える。曲輪Ⅱの東から南裾部には横堀と土塁を巡らせる。曲輪Ⅲは周囲に土塁を巡らせており、その南辺土塁は曲輪Ⅰからスロープ状に延びて横矢掛けの機能も果たすと考える。曲輪Ⅱ・Ⅲの間には横堀が巡り、その外側は曲輪Ⅲ南辺の土塁を南に屈曲させて巡らせていた。曲輪Ⅱを巡る土塁内壁には石列が散見され、外面の裾付近では石垣が確認できた。曲輪Ⅱ北壁でも石垣が認められ、曲輪Ⅱ中央付近には石材が散乱する。曲輪Ⅱの中央やや東寄りでは基壇跡のような石材の散在が確認できることから、曲輪Ⅱ周辺の石垣等は後世の祭祀関連施設の名残と評価する。

文献・伝承　城主は『古戦場備中府誌』『備中集成誌』『備中誌』に土師兵部尉と見える。　（上栫）



第 144 図　菅野城跡縄張り図（1/2,000）

第５節　後月郡



164. 高原城跡
165. 井戸橋城跡
166. 小屋の山城跡
167. 中山城跡
168. 木之山城跡
169. 正霊山城跡
170. 有井城跡
171. 大仙山古城跡
172. 能多ヶ丸城跡
173. 名称未定
174. 雄瀬山城跡
175. 小菅城跡
176. 落石城跡
177. 高屋城跡
178. 吉谷城跡
179. 山手城跡
180. 小見山城跡
181. 念堂山城跡
182. 横手山城跡
183. 青陰城跡
184. 鎌田城跡
185. 伊達氏館跡
186. 十蔵城跡
187. 中堀城跡
188. 亀迫城跡
189. 白実城跡
190. 米持城跡
191. 高越城跡
192. 戸木荒神山城跡
193. 才崎城跡

第 145 図　後月郡城館位置図

165　井戸橋（いどばし）城跡　　井原市芳井町下鴫　　地図 20 左

立地　小田川と鴫川の合流地点から鴫川の渓谷を約 2.5㎞遡った地点に位置し、鴫川に向けて北西から突き出す尾根先端に立地する。鴫川の上・下流域を見通すことができる。

概要　尾根筋に堀切（又は切岸）と、約 11 の曲輪を連ね、斜面に畝状竪堀群を配する。道路が高所にある社まで通じ、遺構を一部壊している。高所の曲輪（主郭）の西縁を小さく抉って、下の曲輪へ通じる通路を造っている。通路の途中には土留め状の石垣が見られるが、後世の造作かもしれない。主郭から西約 120 mの尾根筋に堀切（又は切岸）がある。深さ又は切岸高は約２mある。主郭から堀切までの間に６面の曲輪を配する。切岸高は１～ 4.5 mで、しっかりしている。上方３面の曲輪は上段の切岸直下に竪堀状の窪みが南北両側に観察され、北側のものは竪堀となって斜面下方へ延びてゆく。竪堀の幅４～５m、深さ 0.5 ～ 1.5 m。この他にも北斜面にはやや小規模な畝状竪堀群が配される。主郭から北東へ下る尾根には、道路から３～４m下がった地点に、幅約 50㎝、高さ約１mの土橋を残し、南北両側へ竪堀を穿った堀切がある。南側の竪堀は山側斜面を大きく削り、約４mの切岸を造る。北側の竪堀から主郭の北側斜面にかけて曲輪状の細長い平坦地が２面認められるが、道路の削平や盛り土により詳細は不明である。堀切下約 4.5 mの尾根筋に曲輪２面があり、石臼片が２点見られた。その下方北斜面に並ぶ溝は畝状竪堀群かもしれない。

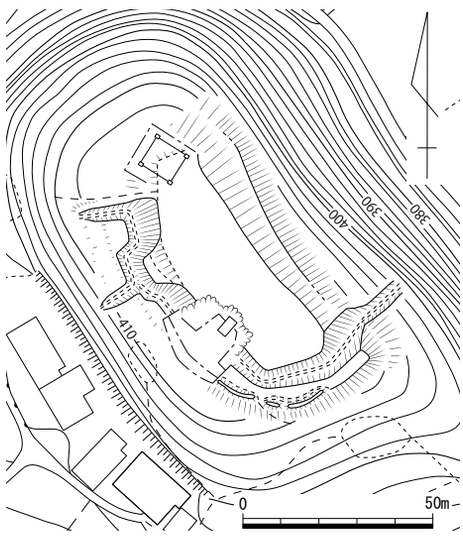
文献・伝承　『井原市芳井町史』・『岡山縣後月郡誌』では、源平合戦で平家に属した足利忠綱が寿永２（1183）年に井戸橋城に移り、天文年中（1532 ～ 55）の城主は宮実信であるとする。　（物部）

第 146 図　井戸橋城跡縄張り図（1/2,000）

166　小屋の山城跡（こやのやまじょうあと）　井原市芳井町種　地図 20 右

立地　吉備高原上の細く入り組んだ平地に囲まれた、比高差約 30 mの小さな独立丘陵上に立地する。

概要　鉄塔と氷川神社による削平があるが、頂部に広く平坦な曲輪が 1 面ある。平面形は約 60 × 20 mの長方形を呈し、北東斜面は 2 段階に傾斜をつけ落ちる。南西辺やや北寄りに幅 7 mで、曲輪上面より約 1.5 m低い突出部を設け、横矢を掛ける。南西側切岸直下には突出部に沿って屈曲する横堀がある。横堀底面から曲輪上面までの比高は 4.5 ～ 5 m、外方上面までの比高は 1 ～ 1.5 mを測る。横堀底面は屈曲部に傾斜を付けている。横堀の北端は西に屈曲し斜面に抜け、突出部の正面辺りでも西へ延びる横堀がある。神社は横堀を埋めていると推定され、北東側へ屈曲した横堀は、北東斜面で竪堀となる。横堀の南側には幅 3 ～ 5 mの平坦面があり、その外縁に沿って高さ 50㎝程度の土塁がある。



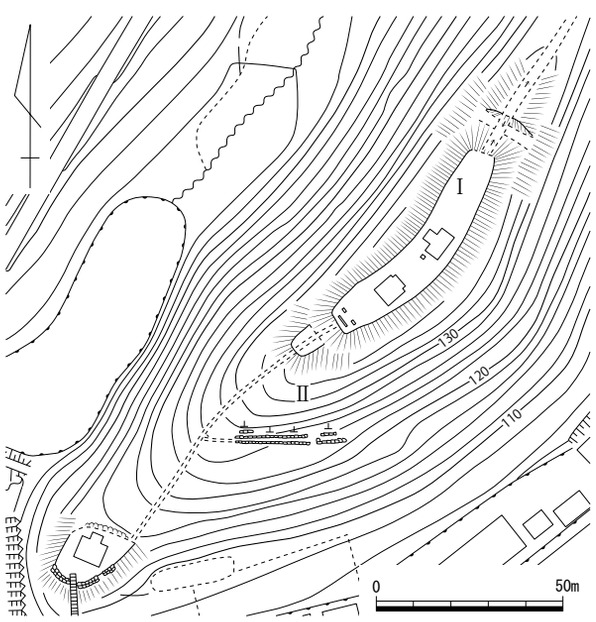
第 147 図　小屋の山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『井原市芳井町史』は、『刈谷氏系譜』（年不詳）や『土道荒神社由来』（1740 年）から、城主は刈谷左衛門太夫で、天正 2（1574）年に毛利氏により刈谷氏が敗走したとし、備中兵乱との関連を指摘する。　（物部）

167　中山城跡（なかやまじょうあと）　井原市芳井町川相　地図 24 左

立地　城は、北側の山塊から西方向に弧状に突き出した尾根の先端頂部に立地し、小田川と鴫川の合流地点を東方眼下に望む。

概要　山頂に設けた曲輪Ⅰと尾根続きに開削した堀切は、神社による改変が著しい。曲輪Ⅰの南西側に所在する曲輪Ⅱもまた、参道によって削平を受ける。尾根の南西端部には天神社が祀られた平坦面が所在するが、曲輪かどうか判然としない。堀切以北は防御施設が認められず、非常に緩やかな傾斜の尾根筋が続く。なお、南斜面中腹に河井氏墓所と伝えられる大小 37 基の五輪塔が祀られている。



第 148 図　中山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『備中集成志』は、毛利隆元旗下の川合勘解由左衛門尉清久を城主とし、天文 2（1572）年に三村政親の来攻を退けたと記載する。『川相誌』は、近隣に「射場」という地名が残っていると記す。　（小嶋）

168　木之山（きのやま）城跡　　井原市芳井町宇戸川　　地図 24 右

立地　宇戸川の北側に近接し、吉備高原から続く山塊から派生した尾根筋端部の頂点付近に位置する。宇戸川を挟んだ南側の丘陵頂部には雄瀬山城跡が並び立ち、また南西側に藤井氏の根拠地であった正霊山城跡が存在する。

概要　頂部に谷部を挟んで２つの曲輪を有し、南北長約 250 m、東西長約 110 mを測る比較的規模が大きい山城である。宇戸川からの比高差が約 150 mあり、当山城のどの方向を向いても急峻な斜面が巡る天然の城砦でもある。最高地点は標高約 250 mで山城の北側にある曲輪で、この箇所は尾根幅が 10 m未満と細くなる。南側の頂部は、約 10 mほぼ下った箇所に存在するが、規模が幅約 20 m、長さ約 50 mを測り比較的大きい。主郭は本来この南側頂部であったと思われ、北側の頂部と２極をなしていたと考える。

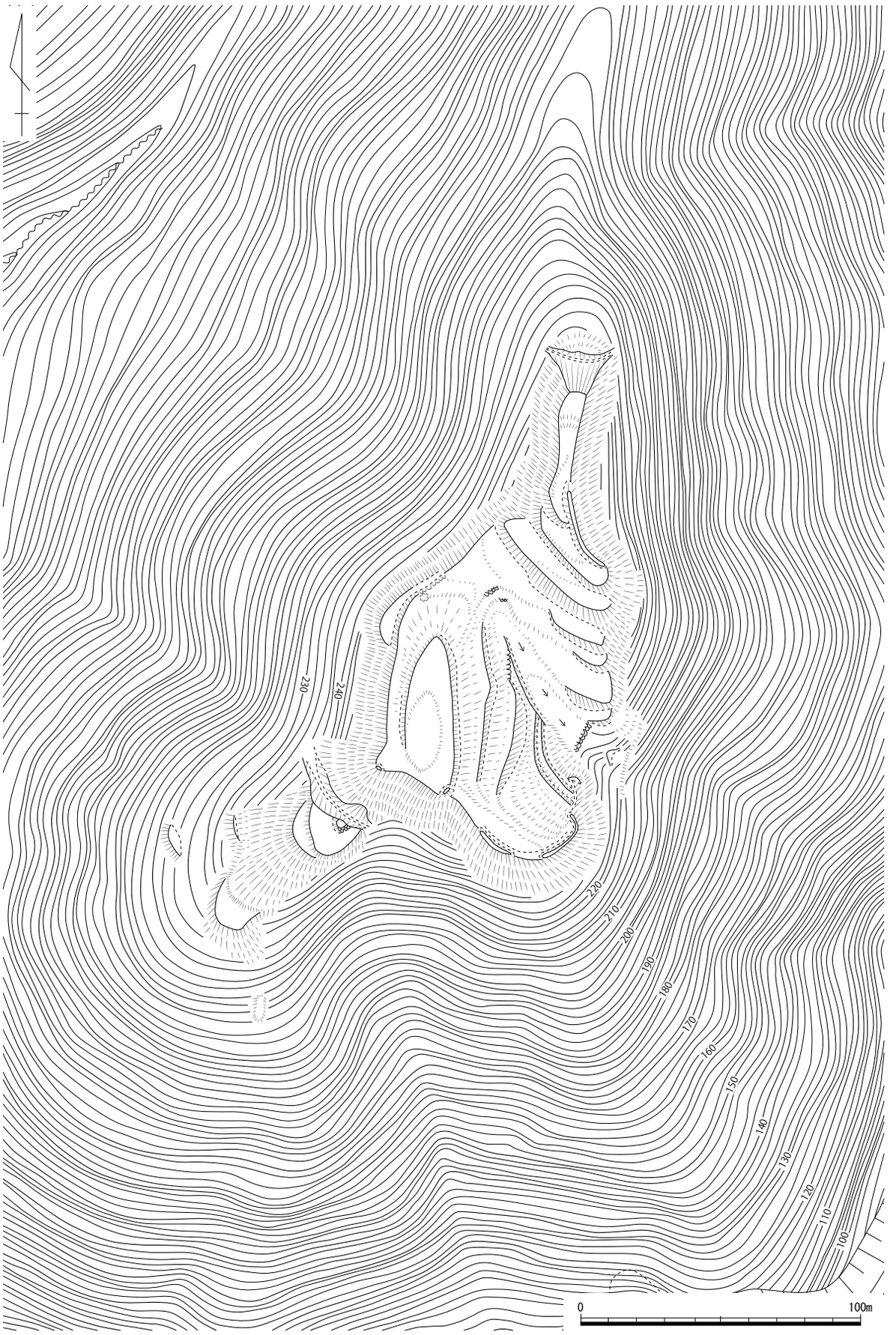
南側頂部の南西側には、２つの曲輪と堀切を配する。この方向には細い尾根が続く箇所も見られ、入口として意識していたと思われる。北側頂部の背後には、幅約 20 m弱の堀切が築かれ城域を画していた。この堀切は、尾根鞍部ではなく尾根の途中に築かれており、当山城の特徴の１つである。北側・南側の２つの頂部は鞍部を経てつながるが、鞍部南東側には小さな谷部が入り込む。この谷部に向けて北側から５面、南側から４面ほど幅の小さな曲輪を配していた。また北頂部の西側と南頂の南東には、端部に土塁が配されていた。特に南側の土塁は、曲輪の南側面から東側を経て谷部に下る位置にまで続くもので、当山城の最大の特徴と言えよう。

木之山城は、２つの頂部を有するものの途中に谷部が挟まるなど、山城の規模に比べて平坦面の面積はそれほど大きくない。また周囲の随所に土塁が築かれるなど、陣城としての役割を帯びていたものと思われる。

文献・伝承　『芳井町史』では、当地の国人である多賀氏の城館と伝えられている。中山城の河井氏との関係が考えられる。また正霊山城とは 0.8㎞しか離れていない距離であり、主郭背後の堀切が、尾根鞍部ではなく尾根途中に築かれるなどの共通点がある。あるいは築城に関して、藤井氏の関与も考えられるかもしれない。　（小林）

写真 64　遠景（南西から）

写真 65　外周沿いに巡る土塁



第 149 図　木之山城跡縄張り図（1/2,000）

169　正霊山城跡（しょうりょうざん）　　井原市芳井町吉井　　＜市指定史跡＞　地図 24 左

立地　小田川の西側に位置する独立丘陵の、南側先端頂部に位置する。山城の麓に現井原市役所芳井支所が存在し、また現在でも国道 313 号線の屈曲部分に当たり、また小田川と宇戸川の合流地点にも近いなど、交通の要衝に位置している。

概要　標高約 110 mの頂部に主郭を置き、規模は長さ約 40 m、幅約 15 mを測る。主郭は南側半分より北側半分の方は約 0.5 m高く、高所の入り口部分には一部石列が残り、虎口であったかもしれない。主郭の南側に長さ 10 m、幅約 25 mの大きめの曲輪を配する。東側にも同様の曲輪が 1 面ある。その下側の平坦地に畑が存在するが、当時曲輪であったかどうか判然としない。また山裾部には、城主であった藤井氏の墓所が存在する。主郭の北側には、斜面部のやや平坦付近に 2 条の堀切と土塁を配して城域を画していた。なお尾根鞍部には遮蔽施設は存在しない。

当城は、山城そのものの規模は小さいが、その前面は現井原市芳井町の中心地であり、屋敷地などの存在も想定できる。この現市街地をも施設の一部であったと考えれば、広範囲の城館である可能性が考えられる。旧芳井町域内での拠点的な城館であったと言えよう。

文献・伝承　藤井好重が築城し、『備中村鑑』ではその子の皓玄が城主とする。皓玄は、1558 年に中山城守の河井高列とともに毛利氏に抵抗する計画を立てるが、事前に露見して一度は京に逃げる。1569 年に再び反抗戦をおこし、一度は広島県神辺城を奪取する。しかし毛利氏の反撃の前に神辺城を追われ、正霊山城に帰ることなく笠岡市にて討たれたと伝えられる。　（小林）

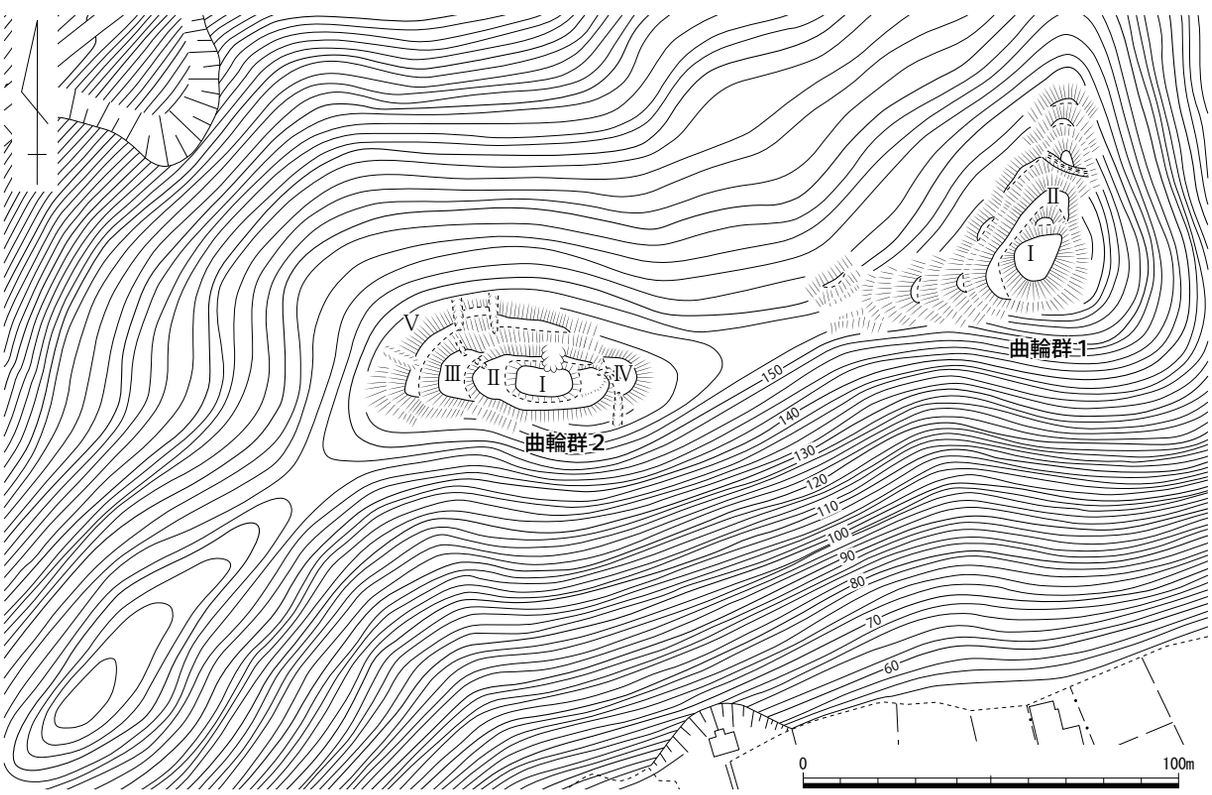
第 150 図　正霊山城跡縄張り図（1/2,000）

174　雄瀬山城跡（おおせやま）　井原市芳井町梶江・芳井町与井　地図 24 右

立地　井原市内を貫流する小田川は、井原市芳井町与井付近で北東から張り出している尾根によって大きく蛇行する。城はこの尾根上に所在し、小田川沿いの旧井原市と旧芳井町の境界を南眼下に一望する。

概要　３つの峰部がある尾根の東（曲輪群１）と中央（曲輪群２）の峰部に曲輪を構えた城である。曲輪群１は、標高 167 mの頂部に曲輪Ⅰを配し、その西辺から北辺を取り巻くように曲輪Ⅱを築いている。尾根続きの北側には、堀切状の狭い溝を挟んで小曲輪が３面連なる。曲輪群２へ至る尾根筋斜面に築いた２面の小曲輪以西は自然地形の尾根鞍部となるが、その北側斜面に小規模な平坦面が認められる。曲輪群２は、標高 164 mの頂部に造られた曲輪Ⅰとその周囲に配された帯曲輪状の曲輪から構成される。曲輪Ⅰとの比高差約１mの曲輪Ⅱは、東端に曲輪Ⅳと接続する通路が取り付く。曲輪Ⅳの南西端から南斜面へと下がる堀切状の溝が認められるが、山道の痕跡かもしれない。幅が狭い曲輪Ⅴには、横移動を防ぐためか竪堀状の溝が２本掘削されていた。曲輪Ⅱ西端から曲輪Ⅲの北西端に向けて続く後世の山道が観察される。なお、西端の峰部は人為的な加工痕跡が認められない幅が狭い平坦地であったが、何らかの用途で使用されていたかもしれない。

文献・伝承　『備中誌』は、池田掃部頭を城主とする。『後月郡誌』には、初め野海遠江守（下総守ともいう）が居城していたが、延文の頃に城を退き、永和の頃に池田掃部介が居城したと口碑は伝えると記載する。『芳井町史』には、慶応４年の与井村『明細書上帳』に、「野海」ではなく「海野遠江守」とみえると記す。　（小嶋）



第 151 図　雄瀬山城跡縄張り図（1/2,000）

175　小管（こすげ）城跡　　井原市西江原町　　地図 24 右

立地　西江原の集落から約３㎞谷筋を北側へ向かった、尾根先端部分の頂部にある。雄神川の西側に位置する。旧山陽道から見てかなり奥まった場所に立地しており、城の前衛にあたる箇所に十倉城跡と中堀城跡を配していたと伝えられる。

概要　当城は頂部に主郭を置き、尾根端部の東側に向けて曲輪を連ね、尾根鞍部にあたる南側は堀切と土塁によって画する構造である。主郭は長さ約 20 mの規模を持ち、虎口を要している。東隣には長さ 20 m弱の曲輪１面と堀切・土塁を設ける。この堀切の北側には井戸の存在が伝えられるが、現在では確認できない。ここまでで施設は一旦途切れており、規模やあり方が南北朝期に築城された井原市青蔭城跡に類似する。これより東側にはさらに曲輪が続くが、戦国期に増築された可能性も考えられる。これら東側の曲輪群は、最長で約 25 mの規模を持ち副郭のように築かれた曲輪があり、さらに尾根先端部分に向けて６面の曲輪を連ねていた。初めの２面は長さ 10 m以上の規模になり、その直下には横堀を配する。先端部分の３面が、長さ５m前後になり、段々規模が小さくなっていく。主郭南側の尾根鞍部にある堀切と土塁は、３条ずつある重厚な造りであり、堅固に城を画していた。当城は規模こそ中規模であるが、曲輪を複数連ねる典型的な造りであり、高越山城跡とともに地域の中核をなしていたと考える。

文献・伝承　那須与一宗隆が全国５ヶ所に与えられた地頭職の１つが当城のある荏原郷で、『備中村鑑』にも與一が在城したと書かれる。その後那須氏が代々居城する。　（小林）

第 152 図　小管城跡縄張り図（1/2,000）

176　落石（おちいし）城跡　　井原市高屋町　　地図 24 左

立地　旧山陽道筋から高屋川の谷筋を約３㎞遡った川沿いの東へ突出する尾根端部に立地する。高屋川の川筋を見通すことができる。

写真 66　遠景 (南東から)

概要　尾根筋と高所に曲輪群を配置し、そこに通じる尾根鞍部や尾根先端部に堀切を設ける。尾根鞍部の堀切は幅約６m、深さは西側で約 1.5 m、東側では約４mを測り、岩脈を掘り割った大規模なもので、北斜面に幅約５m、深約１mの竪堀を伴っている。この堀切から高所の主郭までに４面の曲輪と、その南辺に沿って通路を設けている。曲輪の切岸は高さ 1.5 ～３mあり、露岩を利用している箇所がある。主郭から東に下がる東斜面には２面の細長い曲輪を設け、下面の曲輪からは竪堀が３本ほど掘削されているように観察された。その下方尾根筋に岩盤を掘削し、高さ約５mの切岸を造り、その直下に北・東方向に竪堀を延ばし、尾根筋を遮断し、堀切としている。また主郭から北へ延びる尾根筋にも、主郭から約７m下がった地点に同様の堀切を確認した。

第 153 図　落石城跡縄張り図（1/2,000）作図：尾崎　聡
『井原市史Ⅰ』より引用

文献・伝承　故事・来歴は明らかでない。（物部）

177　高屋城跡（たかや）　　井原市高屋町　　地図 24 左

立地　蛇行しながら南東方向に流れる高屋川の北側裾に位置する。旧芳井町方面から続く標高 250 m級の山塊が高屋川と接する裾部端面にある。

概要　全長 100 m超の、それほど大きくない山城である。しかし堀切や竪堀などの防御施設が堅固であり、井原市域を代表する山城と言える。尾根先端頂部に約 30 mの主郭を築き、この北側辺に径 1.5 mほどの井戸が掘られている。主郭から高屋川方向に向けて 10 m弱の曲輪を３面配している。主郭から続くこの曲輪は、切岸があまり高くはなく 0.5 mほどである。主郭の西側には長さ 30 mほどの大きな曲輪があり、主郭とともに広い平坦面を有している。この北東側斜面には腰曲輪が 1 面築かれ、その縁辺には土塁が配される。主郭の南側斜面部は、通路状の腰曲輪が配されている。当城の最大の特徴は、尾根筋を断ち切る位置に築かれた堀切と土塁の壮観さである。堀切は５条あり、その間に土塁が４つ築かれ城域を画していた。土塁はそれぞれ２mほどの高さがあり、堀切は地山まで掘り込まれる。堀切の両側斜面部において竪堀と連なり、谷部に向けて絞り込むように下方まで続いている。特に北側の竪堀は、最終的には 1 本に集約され、100 m程続くことになる。また主郭北側斜面には、確認しただけでも 17 本以上の竪堀が築かれ堅固な守りとなっている。竪堀の中には長さが 70 m近くになるものもある。また竪堀群の上面は、犬走り状の平坦地によって繋がれている箇所もある。これら竪堀群と堀切群・土塁群の堅固さは、曲輪群の規模に比べて特記すべき内容である。本城が実戦的な山城であったことを示していよう。

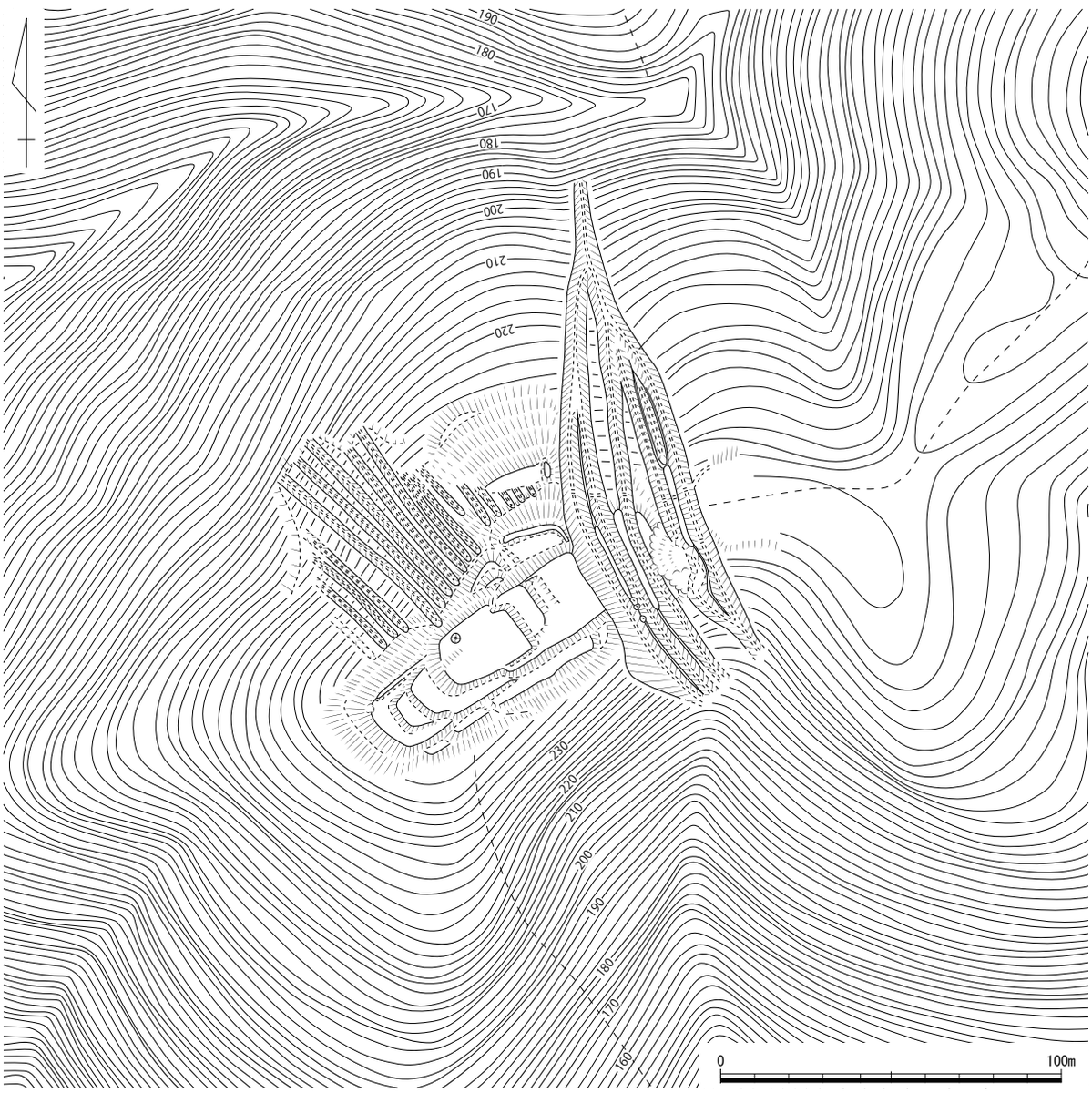
文献・伝承　『備中村鑑』では、高屋村にあり城主藤井能登守皓玄と伝わる。永禄 11（1569）年、皓玄が、尼子氏残党の蜂起に呼応して毛利氏と敵対する。藤井氏は備後の神辺城を奪取に成功し、毛利氏の反撃に対しては高屋川流域を防御線と考えていたようだ。当流域には数多くの山城が存在しており、当城はその中でも最も防御力が高い山城である。また当城は、『萩藩閥閲録』の毛利方小早川隆景の書状に「高屋要害」として登場している。当時当城は、皓玄の息子の広吉が守備したと言われ、善戦の末落城し、以後毛利方が在城する。　（小林）

写真 67　遠景（南から）

写真 68　井戸（南から）

写真 69　堀切 (南東から)

写真 70　堀切群東端 (北から)



第 154 図　高屋城跡縄張り図（1/2,000）

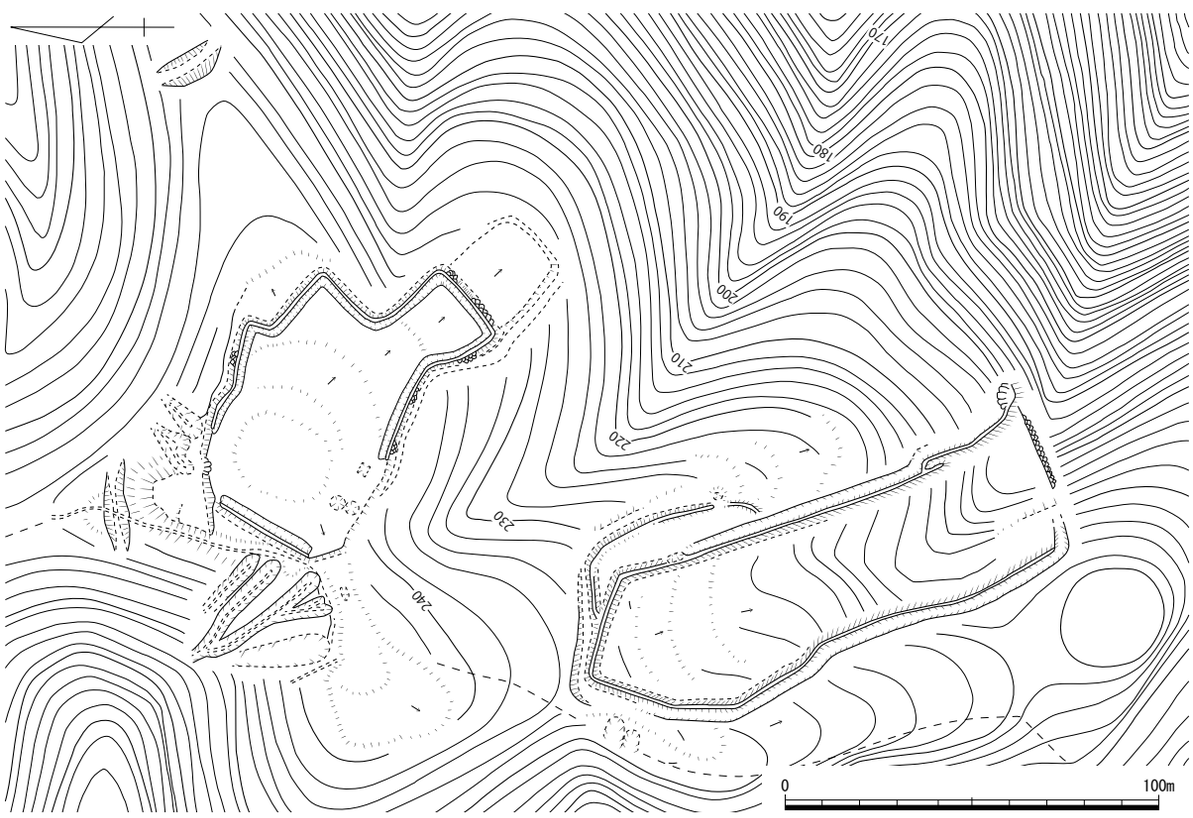
178　吉谷（よしだに）城跡　　井原市高屋町　　地図 24 左

立地　南流する高屋川の北岸に位置する山塊から南に派生する尾根上に立地。山腹から山裾にかけては急峻で、尾根上は広くなだらかな高原状の地形である。谷を挟んで北東の尾根に高屋城跡が所在。

概要　尾根高所から南東へ傾斜する緩斜面にかけて、約 80 × 40 mの範囲を土塁で囲んでいる。土塁は幅約 1.5 m、高さ約 0.5 ～ 1 ㎝、土塁の内側に幅約 2 ～ 0.5 m、深さ約 30㎝の溝が沿っている。土塁は 6 か所でほぼ直角に折れ曲がり、土塁の外面は石垣が部分的に残る。土塁で囲まれた内部は、自然地形である。高所から北側の尾根鞍部には、一部山道により改変を受けているが、深さ約 1 ～ 2 mの堀切があり、高所から東へ延びる尾根筋にも深さ約 0.5 ～ 1.5 mの堀切が確認できる。高所から北東側と北西側の斜面には竪堀状の溝群が認められる。北西側のものは、下方は雨水等の影響も考えられるが、畝状竪堀群と捉えたい。また、高所から西そして南に下る二股の尾根と斜面に、谷部を囲む土塁を確認した。谷から尾根への進入を阻む、あるいは谷に閉じ込めておくなどの役割が考えられなくもないが、城館関連の遺構と速断できない。

写真 71　土塁南辺（南東から）

文献・伝承　『井原市史Ⅰ』はこの土塁について、単なるシシ垣のような防獣柵ではなく、一時的な陣の遺構とし、高屋城に対する寄城の可能性を指摘する。　（物部）



第 155 図　吉谷城跡縄張り図（1/2,000）

179　山手城跡（やまて）　　井原市高屋町　　地図 24 左

立地　蛇行しながら南流する高屋川の西側裾に位置する。広島県境付近から続く山塊が、高屋川と接する裾部端面付近に当たる。高屋川を挟んだ東側向かいには小見山城跡、北側には吉谷城跡と高屋城跡が近接する。

概要　尾根頂部付近に約 40 × 20 mの主郭を築き、その南北方向の両脇に曲輪を配する山城である。尾根筋頂部方向に当たる南側は、堀切があり尾根筋を遮断し城域を画していた。主郭北側直下の曲輪には堀切と土塁が配されており、現在祠が祀られている。かつてはお堂があったらしく、周辺には瓦が散在していた。この北側尾根筋は麓に向かう方向であり、さらに長さ 5 ～ 10 m前後の曲輪が 2 面続いている。主郭南側の曲輪は 1 面しかないが、長さ 20 mを測り比較的大きく虎口状の施設も存在する。この曲輪の東側端には石塁が築かれ、重厚な造りとなっている。また主郭の東西斜面にも、腰曲輪状の施設が築かれていた。

文献・伝承　城主等は不明である。高屋川を挟んで向かいにある小見山城との間で、遠矢合戦をした伝承が残る。　（小林）

第 156 図　山手城跡縄張り図（1/2,000）

180　小見山（こみやま）城跡　　井原市高屋町　　地図 24 左

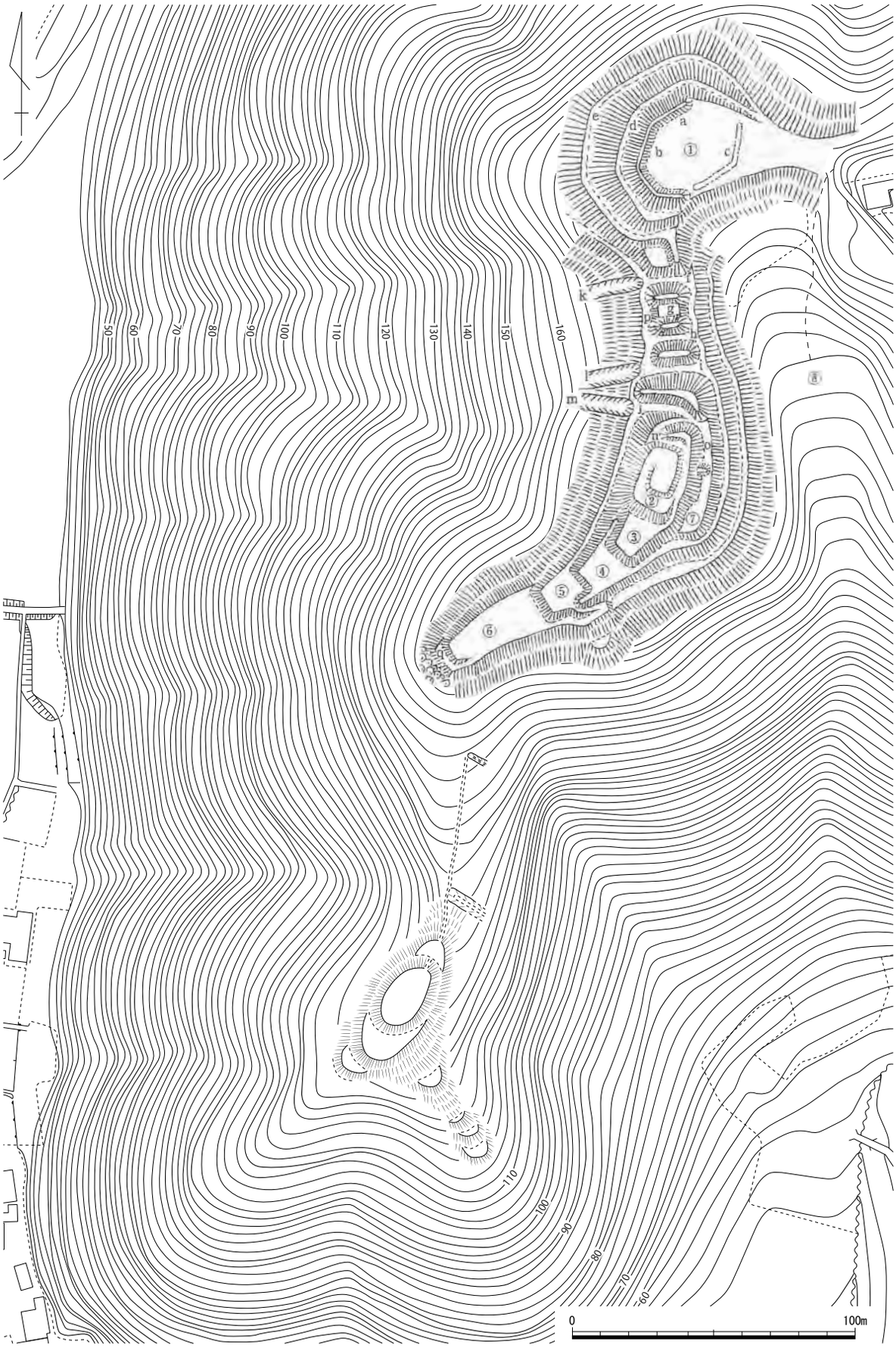
立地　標高 281 mの経ヶ丸山から南西へ派生する尾根に立地する。西～南山裾を高屋川が南流する。小見山城跡からは約 1 ㎞南に、高屋川谷筋と旧山陽道筋の合流地点周辺を眺望することができる。北西には高屋川の谷を挟んだ尾根上に山手城跡が所在する。

概要　高所の主郭には虎口を設けている。主郭の北西角から東へ溝を掘削し、この溝底の斜路を通って主郭の縁を時計回りに巡りながら主郭に達するようになっている。主郭から南に下がる尾根には 4 面の曲輪を連ね、切岸は 1.5 ～ 3 mの高さがあり、しっかりしている。主郭の北側の尾根鞍部にある堀切群の規模は、北から数えて 1 ・ 2 番目の堀切は、幅約 4.5 m、深さ 1 ～ 2 mを測る。 3 番目の堀切は幅約 5 m、深さは 1.5 ～ 2 mある。 4 番目の堀切は、東側を掘り切っておらず、堀底を西から東へ徐々に登る斜路とし、主郭の虎口と同様に南へ曲がり、東斜面の細長い曲輪に通じているようであるが、一部山道で削平され、曲輪への繋がり具合は不明である。それぞれの堀切の間に土塁を設けており、いずれも規模は幅約 2 ～ 2.5 m、高さ約 50㎝。 1 ・ 2 番目の堀切の間隔は約 20 mあり、土塁が 2 列連続する。竪堀は西側斜面にのみあり、 1 ・ 3 ・ 4 番目の堀切と接続し、幅約 4 ～ 6 m、深さ 1 ～ 1.5 mと大きい。堀切群のある尾根鞍部の北側は再び高所となり、ここに土塁がある。現在平坦な果樹園となっているが、その西縁に残存し、規模は幅約 2 m、高さ約 1 mである。『井原市史』では、直径約 30m の範囲を囲んでいたと推定されているが、地形改変があり、詳細は不明である。また、土塁外側下方斜面や曲輪群にかけて犬走り状の幅の狭い平坦面が階段状に廻るが、後世の改変の可能性が高いと考えられる。今回の踏査で、この曲輪群から比高約 25 m南へ下がった尾根筋の鞍部と高所に曲輪 8 面を新たに確認した。曲輪の切岸は約 2 m、二股に分かれた南東尾根筋には 6 m下がって小曲輪、さらに 5 m下がって、段差 50㎝の小曲輪が 3 面確認された。背後の尾根鞍部には尾根筋から東斜面に竪堀が 1 本、北上方の曲輪群から下がる途中にも同様の竪堀 1 本が見られた。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は、高屋村「小見山城」、当城開基を小見山二郎行忠とし、天正年中（1573 ～ 1592 年）、毛利方の領主三原豊後守藤原広吉が在城、その後、鳥越佐兵衛・猪木惣蔵が城代となったとする。『井原市史』は、現在も芳井町三原に名字・家系伝承を伝える家々があるとする。『太平記』は小見山二郎元忠は陶山氏らと後醍醐天皇の籠もる笠置山の城を夜討ちしたとする。　（物部）

写真 72　遠景 (南から)

写真 73　北から 4 番目の堀切 (西から)



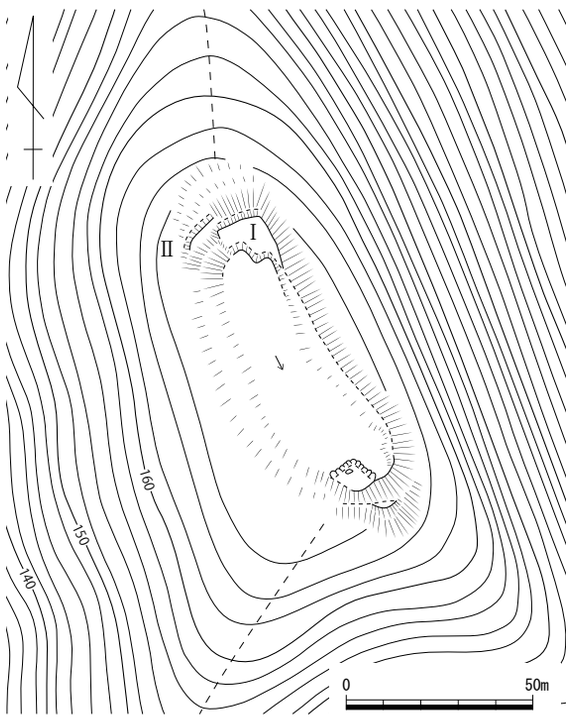
第 157 図　小宮山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：尾崎　聡・センター　『井原市史Ⅰ』に加筆

181　念堂山城跡（ねんどうやま）　　井原市井原町　　地図 24 右

立地　城は平野との比高が 110 mを測る標高約 180 mの尾根頂部に立地し、小田川が大きく蛇行している地点を東眼下に一望する。約 800 m南東には、横手山城跡が所在する。

概要　頂部は約 70 × 30 mの自然地形を残す平坦面であるが、その南端に石鎚権現を祀る小祠による削平段、北辺東半に屏風折れのように屈曲させた切岸が認められる。尾根続きとなる北側には、曲輪Ⅰ・Ⅱを配して守りを固める。城内に至る通路は、曲輪Ⅱの東辺から曲輪Ⅰの西辺を通るように作られており、折坂虎口状を呈する。なお、頂部平坦面の東側は小田川に向かって急崖となっているが、西側は緩やかな傾斜が続く。

文献・伝承　『井原の歴史』第 5 号には、一種の地区誌である『敷名抄』に「念堂山城」との記載があると記す。　（小嶋）



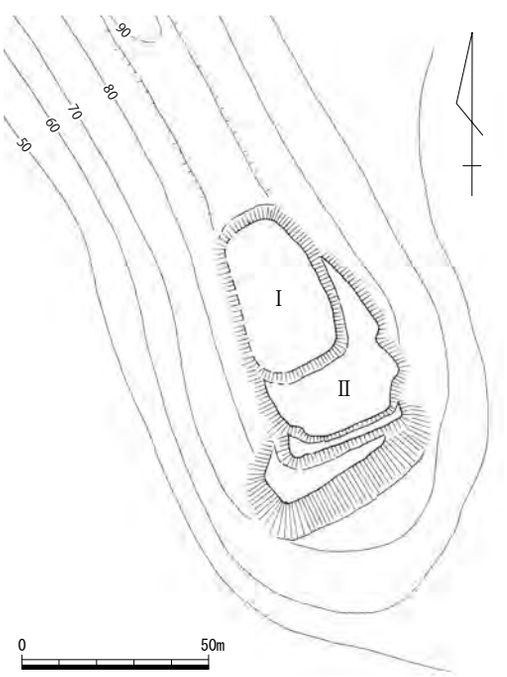
第 158 図　念堂山城跡縄張り図（1/2,000）

183　青蔭城跡（あおかげ）　　井原市西江原町　　地図 24 右

立地　城は、北山塊から派生した細長い尾根の先端部に所在する。南に山陽道を望み、小田川に沿うように芳井地域へと至る街道を西方眼下に視認する。小田川を挟んで約 1.5km 西に横手山城跡が築かれている。

概要　後世の改変により西側が 1/3 程削平されているが、約 40 × 25 mの規模に復元される曲輪Ⅰを頂部に配して主郭とする。背後の尾根続きには、堀切等の防御施設は認められない。曲輪Ⅰ前面には、曲輪Ⅰとの比高約 3 mを測る曲輪Ⅱを設ける。デジタル井原中継局建設に伴い井原市教育委員会によって曲輪Ⅰ中央部の発掘調査が行われており、14 世紀後半に比定される備前焼擂鉢、亀山焼甕、土師質土器椀・皿などが出土している。

文献・伝承　『古戦場備中府志』には大山右馬尉、『後月郡誌』には那須氏の一族である大山氏が城主であったと記す。　（小嶋）



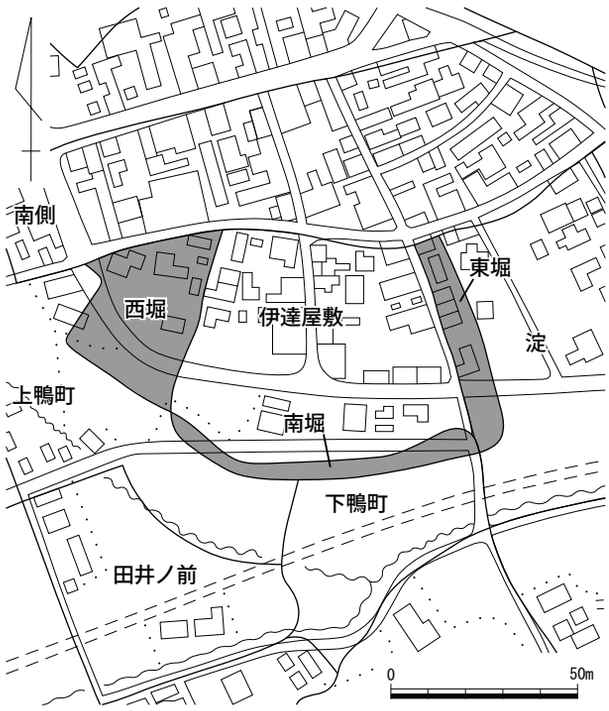
第 159 図　青蔭城跡縄張り図（1/2,000）
作図：島崎　東

185　伊達氏館跡（だてし）　　井原市七日市町　　地図 24 右

立地　現在の井原市街地東端の平地上に位置する。南側にある山塊と北西方向から南東方向に流れる小田川の間一帯に存在する。

概要　当地は現在宅地化しており、城館の痕跡を見つけることが難しい。しかし小字に「東堀」「南堀」「西堀」という地名がコ字状に残り、その真ん中が「伊達屋敷」である。この部分は、掘と呼ばれる小字箇所よりも 0.5 ～ 1 m程度ではあるが若干高い地形となっている。特に「南堀」部分は顕著に高低差があり、「東堀」部分も若干の差がある。おそらく３方向を掘で守られた東西約 150 m×南北約 110 mの長方形区画の居館跡であったと推定する。

文献・伝承　地名に残る伊達は、『備中村鑑』にある戸木荒神山城守伊達大蔵との関連が考えられる。この伊達氏の居館跡が当所であったとする説が存在する。　（小林）



第 160 図　伊達氏館跡平面図（1/2,000）

187　中堀城跡（なかぼり）　　井原市西江原町　　地図 24 右

立地　独立丘陵である甲山の麓にあたり、南側に小田川が西から東に向けて流れている。当城館周辺をかつて山陽道が走っていたと考えられる。

概要　現在は宅地化しているが、甲山八幡宮の南側で小字が「中堀」となっている箇所に、周辺より１段高い地形が残されている。この地点の南東側～南側～南西側にかけて、堀状に下がった地形が残り、周辺の小字は「堀下」という。特に南西側の段差は、約２mにも達している。１段高い箇所の北側に旧山陽道が走っており、城域はこれを包括し、さらに北側にある甲山八幡宮周辺にまで伸びていた可能性がある。その場合は、東西約 250 m、南北約 200 mの規模で、方形区画の館跡になるであろう。

文献・伝承　『備中村鑑』には、西江原村にあり那須形部左衛門が在城と書かれる。また当所の近くの正雲寺には、南北朝期に九州へ逃げる足利尊氏が当城に立ち寄ったとする宝篋印塔が残される。（小林）

写真 74　中堀城跡の高まり

188　亀迫（かめざこ）城跡　　井原市西江原町　　地図 24 右

立地　小田川北側の独立丘陵である冑山の北側端部の頂部付近に位置する。小菅城跡の麓付近を通っていた雄神川が当城の東側を流れて小田川に合流している。当城から南には甲山と中堀城跡が近接しており、これらと小田川までを塞ぐ防御線の要に位置したようである。現在の当地は、全体が公園化しており植樹による改変が著しい。

概要　当山城は全長が 200 m前後の中堅規模である。地形の改変が著しいが、各所で山城の名残を見ることが出来る。頂部に主郭を置き、３方向に派生する尾根筋にそれぞれ曲輪を配している。主郭からみて南西方向には 4 面以上、南東方向には 2 面以上、北方向には 1 面の曲輪を設けていた。

主郭自体の規模は、約 30 × 25 mを測り、その南側に長さ 10 m、幅約 40 mの規模の腰曲輪が配される。この箇所には、現在古墳の組み合わせ式石棺が残されている。そこから南東方向と南西方向の尾根筋に沿って曲輪が続く。山城の西側は急峻な地形であるが、こちらに面した南西側の曲輪群には土塁と見られる高まりがある。また竪堀状の施設も 1 本存在する。なお南西方向の曲輪群は、数も多く地形も緩やかであることから、本来は山城への入り口部分に当たると思われる。

文献・伝承　『井原市史』では、元亀年間に毛利氏家臣の木村氏・神田氏が在城したと書かれる。両氏は伊勢氏の当主又五郎が討ち死にしたのちは、高越山城をも接収することとなる。　（小林）

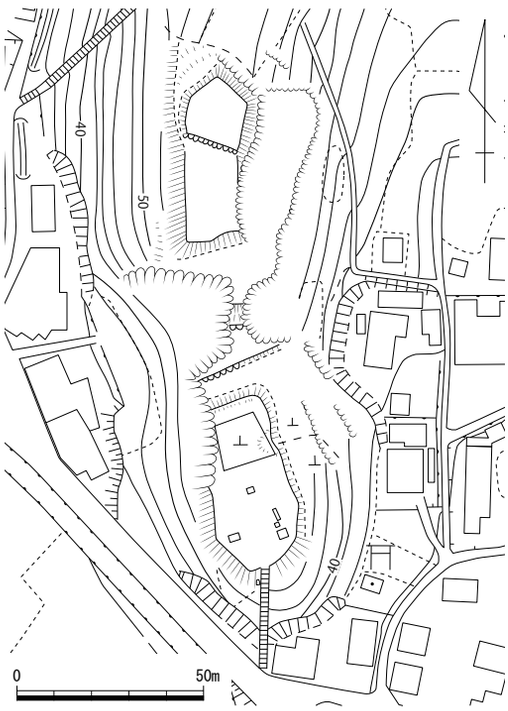
第 161 図　亀迫城跡縄張り図（1/2,000）

189　白実（しらざね）城跡　　井原市東江原町・西江原町　　地図 24 右

立地　東流する小田川に向かって北から突出する舌状の尾根に立地する。小田川の東西流域を眺望できる。

概要　尾根西側は土取り等により削られ、尾根筋から東側斜面にかけては畑や寺院、墓地等による地形改変が見られる。尾根筋に約 40 mの鞍部を挟み南北に高所がある。南の高所は寺院跡地で、南北 44 m、東西 20 mの平坦地となっている。北縁の切岸は高さ２mを測る。北の高所は畑跡地で、中程に約１mの段差をもつ、南北 40 m、東西 14 mの平坦地で、周囲の切岸は２～５mある。尾根鞍部には約１～ 1.5 mの段差が認められる。これらの段差の多くは石垣となっており、一辺約 40 ～ 50㎝大の比較的大形の石も使用している。これら石垣や切岸は畑地造成の際に造られた可能性があるが、もともとあった曲輪や切岸を利用した可能性も考えられる。

文献・伝承　『井原市史』は、天正年間、神田・木原氏ら毛利の代官が居座った伝承ありとする。　（物部）



第 162 図　白実城跡縄張り図（1/2,000）

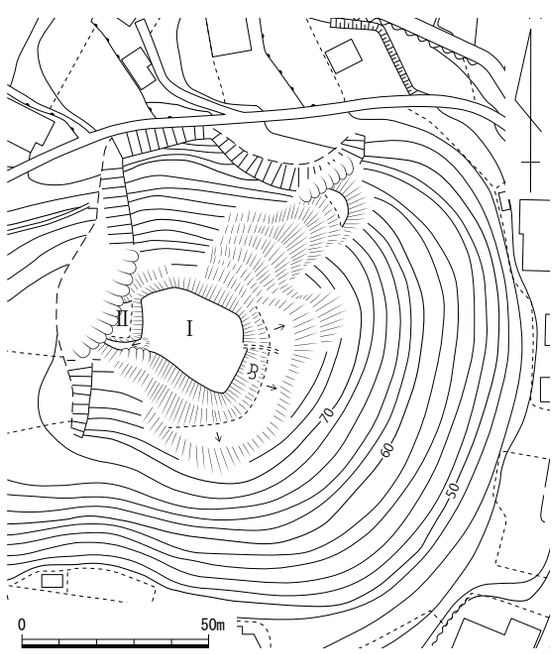
190　米持（よなもち）城跡　　井原市東江原町　　地図 25 左

立地　城は、南へ延びる尾根から東へ派生した支尾根の頂部に立地する。約 1.5km 東に高越城跡が所在している。

概要　西側尾根続きは、土取りによって削平されている。城は、畑によって改変されている頂部に約 30 × 20 mの長方形を呈する曲輪Ⅰを配する。曲輪Ⅱ南辺には、畑への通路かもしれない高まりが認められる。

文献・伝承　『備中誌』には、『中島兵乱記』に「泉山城」として北条早雲がいまだ伊勢新九郎といっていた時に縄張りをしたと伝えるとし、また『小田物語』では「此城山」が米持の北奥にあると言うと記載する。『後月郡誌』には「泉山城墟」として、城は「４畝歩許」の畑となっていると記す。

（小嶋）



第 163 図　米持城跡縄張り図（1/2,000）

191　高越城跡（たかこし）　井原市東江原町・神代町　＜市指定史跡＞　地図 25 左

立地　城は、旧小田郡と旧後月郡の境界をなす尾根から約 500 m西側に所在する。標高約 170 mの高越山に立地するこの城は、旧山陽道と小田川を南眼下に一望し、さらに笠岡から矢掛方面へ北上する往還が山陽道に合流する地点をも視認する。なお、小田川を挟んだ約２㎞南には、折敷山城跡が築かれている。

概要　山頂には、①の一辺約 15 mの方形の高まりがあり、その周囲をａからｂを経てｃに行くにしたがい徐々に高くなる曲輪が巡っている。①の西辺には、現在土で覆われている箇所が多いものの、高さ約１mを測り、おそらく５段積みと思われる石積みが認められた。以上の曲輪は、顕彰碑などが建立されるなど後世の改変が著しいため、往事の姿を推測するのが困難である。尾根続きの北西側は、擂り鉢状に窪んだ穴ｅがある曲輪や②曲輪が築かれ尾根鞍部へ至る。鞍部に図示しているｆ堀切やその北側に設けられていた③曲輪は、車道等により現在消失している。この鞍部から北側の尾根には、1999 年に井原市教育委員会が発掘調査を実施した通称「小丸」と呼ばれる広い峰部が所在していたが、この場所からは城館関連遺構の検出はなかった。山頂から南東に延びる尾根筋には２面の曲輪を設け、さらにこのうちの下の曲輪の北側谷部には径約１mの石組みの井戸が所在している。標高 125 m付近から緩やかな傾斜が 100 m程度続く北東に延びる尾根筋には、傾斜変換点以東に約 15 × 6 mの小曲輪や長軸が 80 mを越える長大な曲輪が築かれる。

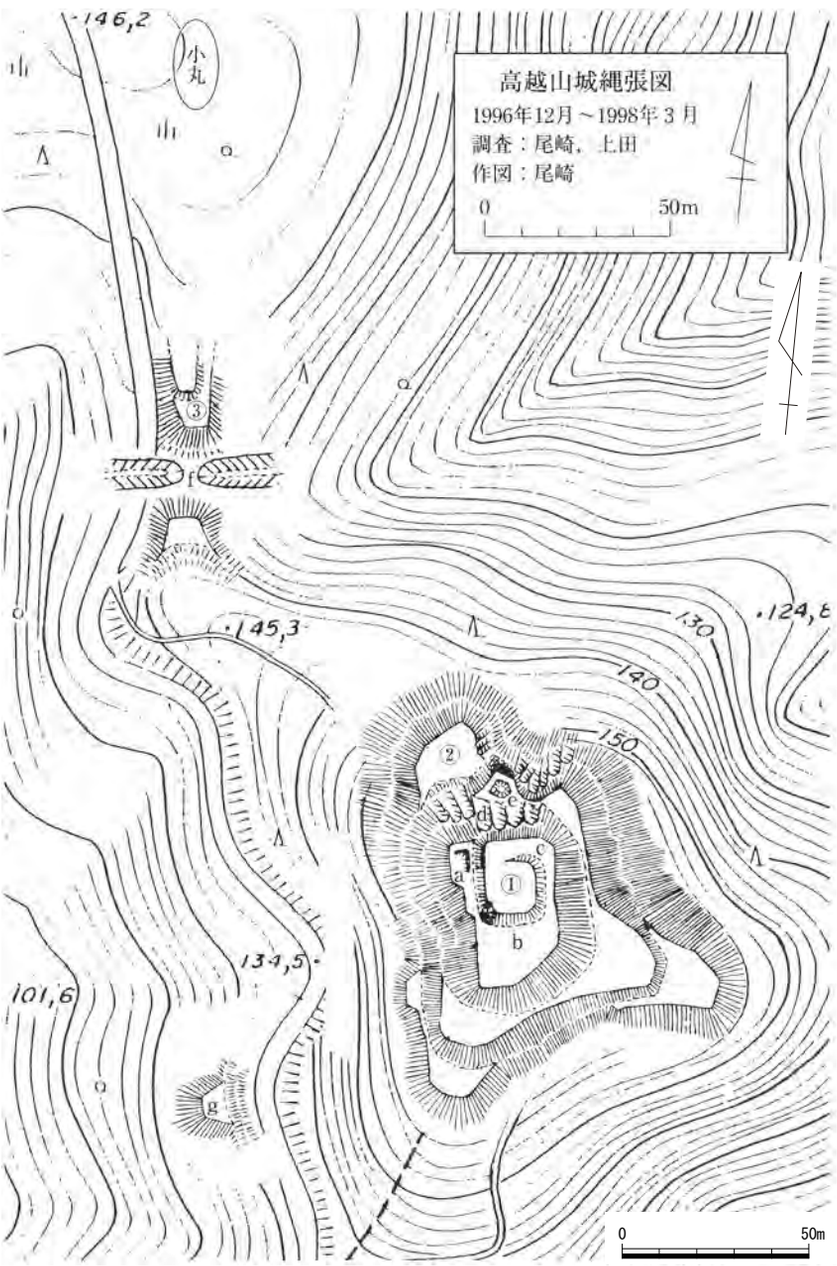
なお、高越城跡がある山塊の南西及び南東に延びる尾根筋には、山上山城跡と横畑城跡の２城が所在すると伝えられている。高越城跡から約 300 m南西の標高約 150 mを測る尾根頂部に立地するとされる山上山城跡は、頂部に自然地形の平坦地が広がり、そこから南西に下る尾根筋に数面の加工段が存在している。この加工段は、削平が甘くかつ切岸も明瞭ではないため、城館関連遺構ではないかもしれない。また、高越城跡へ至る鞍部には堀切状の溝が認められるが、鞍部の北半分のみしか開削しておらず、後世の山道の可能性も否定できない。山上山城跡から南東に延びる尾根の頂部に所在するとされる横畑城跡には、城館関連遺構かどうか判然としない加工段が認められる。

文献・伝承　築城時期は、「於備中國荏原高越城」とある正平６（1351）年の史料 16 から南北朝時代以前と思われる一方で、実態は不明なもののそれより古くに宇都宮貞綱が弘安４年の蒙古襲来時に築いたと『古戦場備中府志』に記載される。これ以後の様子は不明であるが、『備中誌』には享徳２（1453）年に伊勢新左衛門が居城したとされ、天文・永禄年間に起こった合戦を記した軍記物には、備中諸将とともに伊勢氏の名が登場する。史料 69 から、元亀２（1571）年までには毛利氏の支配下に置かれていたと思われ、『古戦場備中府志』等では天正９（1581）年に宍戸安芸守家臣の木村平内・神田六兵衛が郡代として入城したと記す。　（小嶋）

写真 75　遠景 (南東から)

写真 76　頂部①高まり (南東から)

写真 77　井戸 (東から)



第 164 図　高越城跡縄張り図（1/2,000）　作図：尾崎　聡　『井原市史Ⅰ』より引用

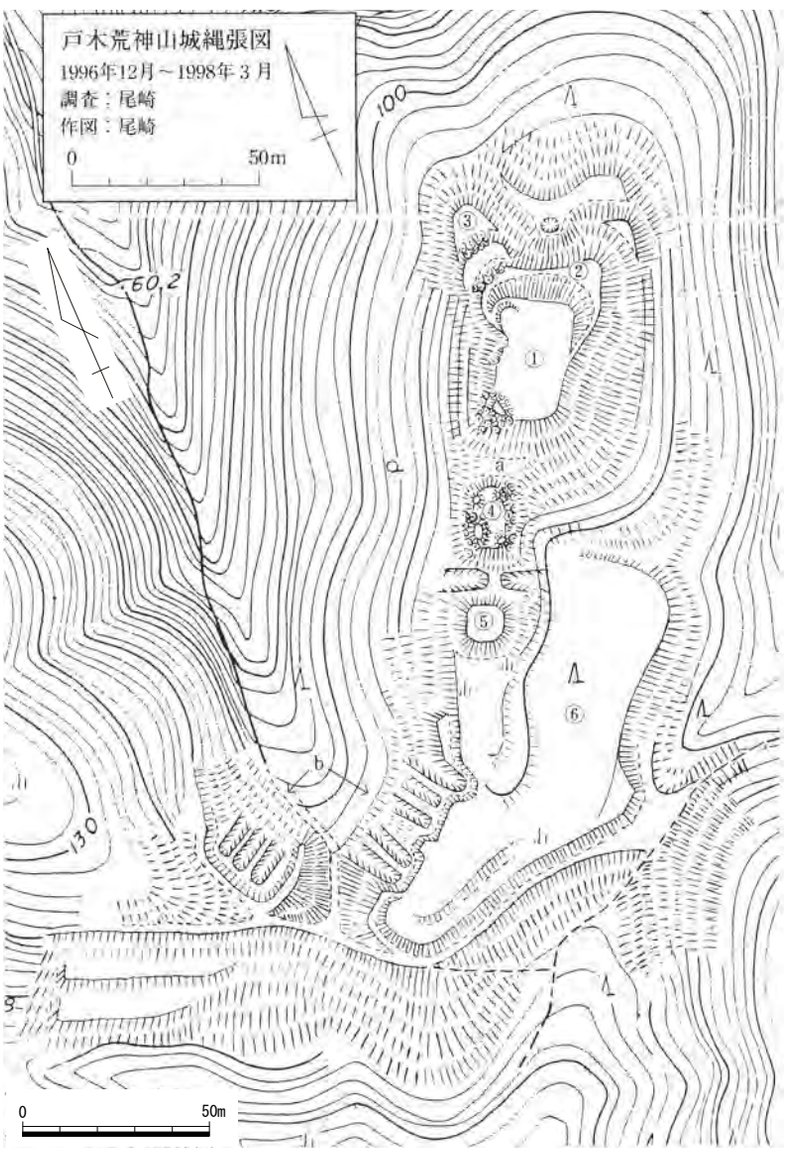
192　戸木荒神山城跡（とぎこうじんやま）　井原市下出部町　地図 28 右

立地　旧山陽道の南に沿って連なる山塊から北に張り出す尾根先端部に立地する。北方の眺望は良好であるが、やや南に引っ込んだ位置にあるため東西方向の視界がやや制限される。

概要　尾根先端高所に造られた広い曲輪（主郭）を中心に、北斜面に曲輪５面、南尾根筋に堀切２条と曲輪を配置している。主郭は平坦で、切岸の高さは北側で約４m、南側で約６mを測り、断面形が突出した形状を呈する。主郭北斜面には切岸の下に細長い曲輪があり、そこから下方は北東と北西方向へ小さな尾根が二叉に張り出しており、北東尾根には約 1.5 mの切岸下に小さな曲輪、その下約３mに西の谷まで延びる曲輪があり、その谷の部分に井戸状の窪みがある。北西の尾根には約 1.5 ～２mの切岸を持つ小さな曲輪が階段状にある。主郭の南側には箱堀の堀切があり、底幅約２m、その南には曲輪状の尾根が 10 数mあって再び堀切があり、深さは２～ 2.5 mを測る。その南に曲輪があり、南縁は高さ 2.5 mの切岸となる。切岸から南の尾根筋はなだらかに下り、自然地形と考えられ、東斜面はかつて畑地として階段状に開墾されており、詳細不明である。西斜面には谷頭を取り囲むように連続する竪堀状の起伏が見られるが、山道の掘削などにより詳細不明である。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は、当城開基、伊達大蔵とし、弘治年間（1555 ～ 58 年）に備中伊勢氏と合戦して滅亡したと記す。その後、尼子氏配下の吉岡新左衛門尉・田中清左衛門尉が在城したとする。その後、楢崎弾右衛門・大橋左門が在城したとする。(物部)

写真 78　遠景

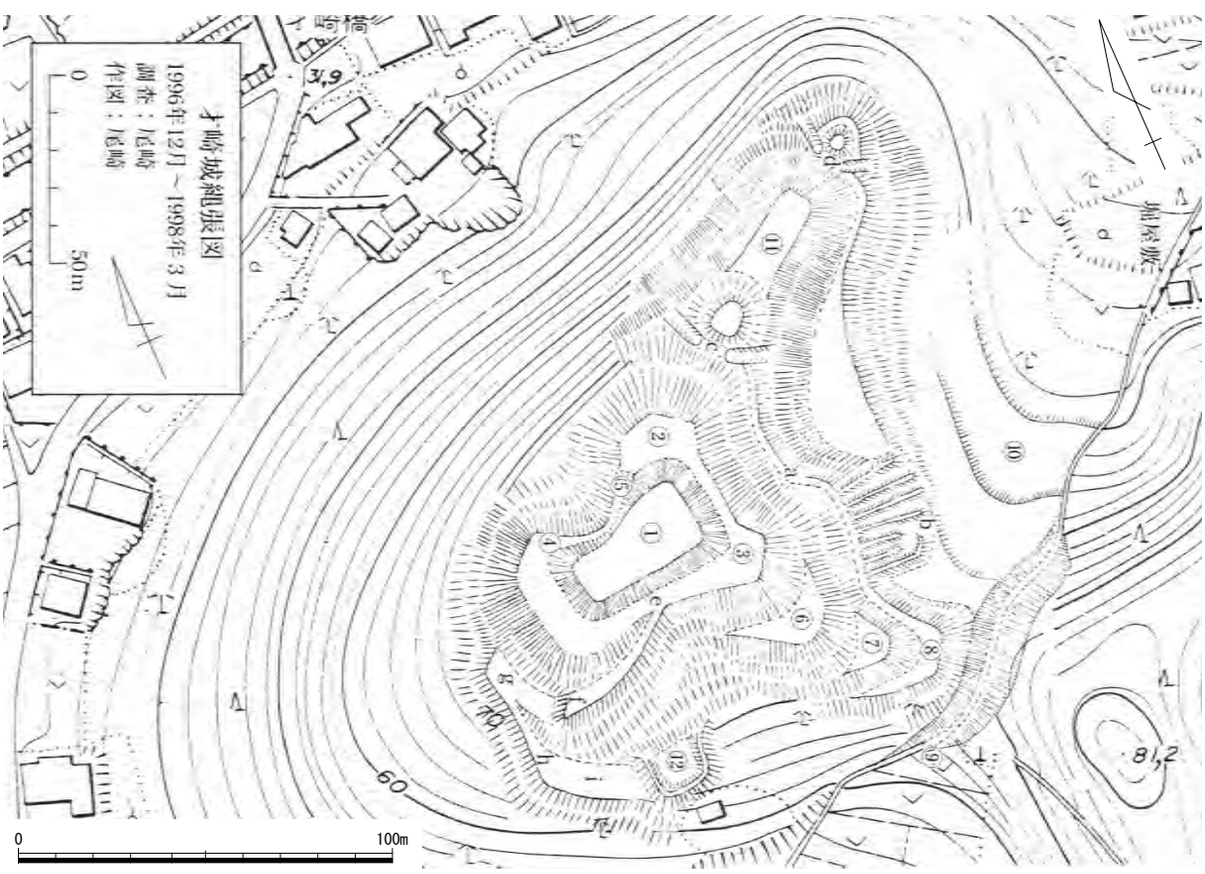


第 165 図　戸木荒神山城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：尾崎　聡
『井原市史Ⅰ』より引用

193　才崎（さいざき）城跡　　井原市木之子町　　地図 29 左

立地　城は、井原市と笠岡市の境をなす山塊から北西に張り出した尾根の先端頂部に立地し、小田川に注ぎ込む稲木川が形成した平野を一望する。この平野の西奥には工ヶ城跡が所在し、小田川を挟んだ北の山塊には白実城跡が築かれている。

概要　麓との比高差約 40 mの山頂に築いたこの城は、高さ３～４ mの切岸を備えた長方形を呈する①曲輪を主郭としている。①曲輪の周囲には、幅２ m前後の通路によって結ばれた②・③曲輪などが帯曲輪状に取り囲む。東へ向かって緩やかに登っていく幅約１ mの④通路は、「く」字の屈曲点が①曲輪との比高差約１ mの最高所となり、⑤に向かって下がっていく。この屈曲点から①曲輪へと続く通路は現状で確認できず、また①曲輪の北西辺に虎口状の遺構痕跡も認められていない。②曲輪北東辺から急斜に８ m近く下がると、竪堀状に斜面部も掘削されたｃ堀切底面に至る。この堀切から北東側には、自然地形の平坦面を挟んで、約 25 × 10 mを測り、丁寧に造成された⑪曲輪が築かれる。南東側の山塊と尾根続きとなる南東側尾根筋には、⑥～⑧の曲輪３面と堀切を利用したものと思われる後世の⑨切通道が所在する。各曲輪の比高差は③と⑥が約６ m、⑥と⑦が約４ m、⑦と⑧が約３ mを測り、いずれも切岸が高く急峻である。北東と南東に延びる尾根筋の間の谷地形部に小さく張り出した小尾根には、各々幅約４ m、深さ約１ mの竪堀が数本開削されており、この方向からの攻撃に対



第 166 図　才崎城跡縄張り図（1/2,000）　作図：尾崎　聡　『井原市史Ⅰ』より引用

し守りを強固にしている。g 曲輪の南端から比高差約 1.5 mを測る f 平坦面を経て e に続く通路が存在している。i 曲輪から南西斜面部には、後世の畑作による加工段が認められるが、曲輪を再利用しているのか判然としない。なお、①曲輪の北東及び南東隅には拳大の川原石の集積が認められ、つぶて石として持ち込まれたものかもしれない。

文献・伝承　築城年代は伝わっておらず、不明である。城主は、『備中集成志』に木子村の「才崎城」として渡邊大隅または住江大隅と称するものが在城し、渡邊六兵衛尉が相続したと記す。『備中誌』には、木之小村「才崎の城」として、城の東を堀というと記載している。北西の谷部には「堀屋敷」、南側には「小鍛治」という地名が伝わる。（小嶋）

写真 79　遠景 (北から)

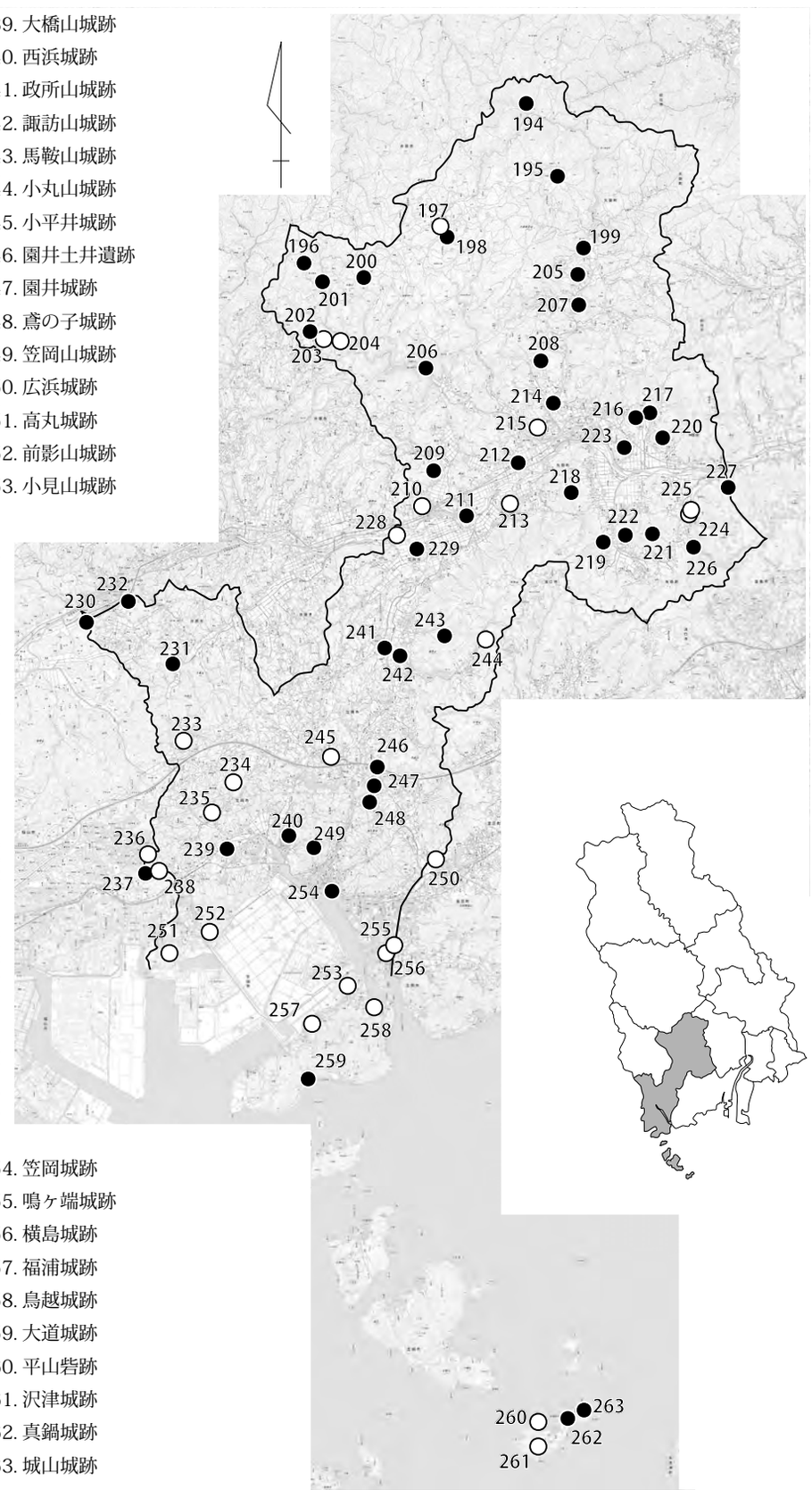
写真 80　②曲輪と主郭部分の切岸 (南から)

写真 81　c 堀切 (東から)

写真 82　b 畝状竪堀群 (西から)

第６節　小田郡

194. 宇戸谷茶臼山城跡
195. 土居山城跡
196. 茶臼山城跡
197. 城山城跡
198. 土井の前城跡
199. 殿ヶ市城跡
200. 三村氏居館跡
201. 金黒山城跡
202. 法雲山城跡
203. 岩崎城跡
204. 尼子城跡
205. 下高末城跡
206. 瀧山古城跡
207. 薬師山城跡
208. 小林山城跡
209. 神戸山城跡
210. 岩屋山城跡
211. 龍山城跡
212. 川面館跡
213. 太郎丸城跡
214. 神子山城跡
215. 蓮池城跡 .
216. 中山城跡
217. 山本城跡
218. 伽藍山城跡
219. 山田古城跡
220. 要害山城跡
221. 中山城跡
222. 船が迫山城跡
223. 茶臼山城跡
224. 庄氏館跡
225. 花房氏館跡
226. 原砦跡
227. 猿掛城跡
228. 楢村氏居館跡
229. 折敷山城跡
230. 滝山城跡
231. 工ヶ城跡
232. すくも山城跡
233. 仮名沢城跡
234. 入田城跡
235. 有田城跡
236. 明知城跡
237. 明知山城跡
238. 森山城跡
239. 大橋山城跡
240. 西浜城跡
241. 政所山城跡
242. 諏訪山城跡
243. 馬鞍山城跡
244. 小丸山城跡
245. 小平井城跡
246. 園井土井遺跡
247. 園井城跡
248. 鳶の子城跡
249. 笠岡山城跡
250. 広浜城跡
251. 高丸城跡
252. 前影山城跡
253. 小見山城跡



254. 笠岡城跡
255. 鳴ヶ端城跡
256. 横島城跡
257. 福浦城跡
258. 鳥越城跡
259. 大道城跡
260. 平山砦跡
261. 沢津城跡
262. 真鍋城跡
263. 城山城跡

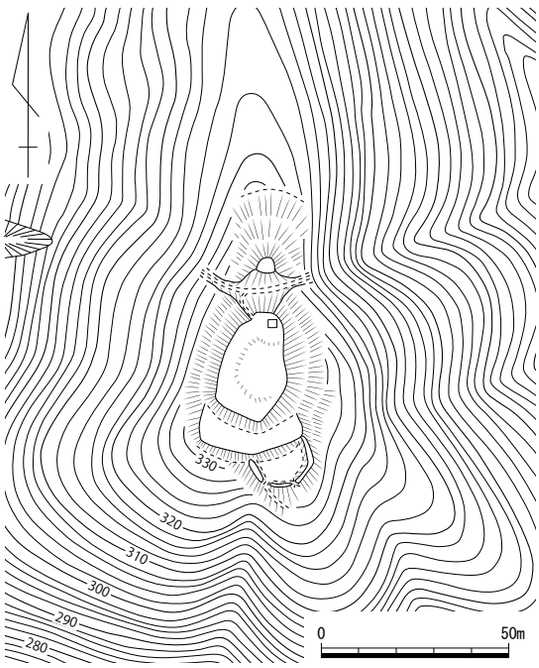
第 167 図　小田郡城館位置図

194　宇戸谷茶臼山城跡（うとだにちゃうすやま）　　井原市美星町宇戸谷　　地図 21 右

立地　吉備高原上の山塊端部頂点付近に位置する。美山川の北側にあり、旧美星町から高梁市成羽と同広瀬に抜ける谷筋が合流する付近に存在する。

概要　頂部付近に 30 × 20 mの主郭を築き、その南側前面には、２つの曲輪を配する。切岸の高さは３mに及ぶ。１面目は長さ５m、幅 30 m程あり、比較的大きい。２面目は幅５m、長さ 15 m程で、１面目の半分の規模であり、尾根筋にあたる南東側に向けて配される。この曲輪には、前面端部に高さ 0.5 mの土塁が築かれていた。主郭北側にあたる背面は、高さ４m前後の堀切によって城域を画している。その北側には高さ１mの土塁を配し、自然地形の緩斜面へと続く。また主郭北側には、現在でも祠が存在する。

文献・伝承　城主等は不明であるが、地名に「本丸跡」「二の丸」「三の丸」が残されている。　（小林）



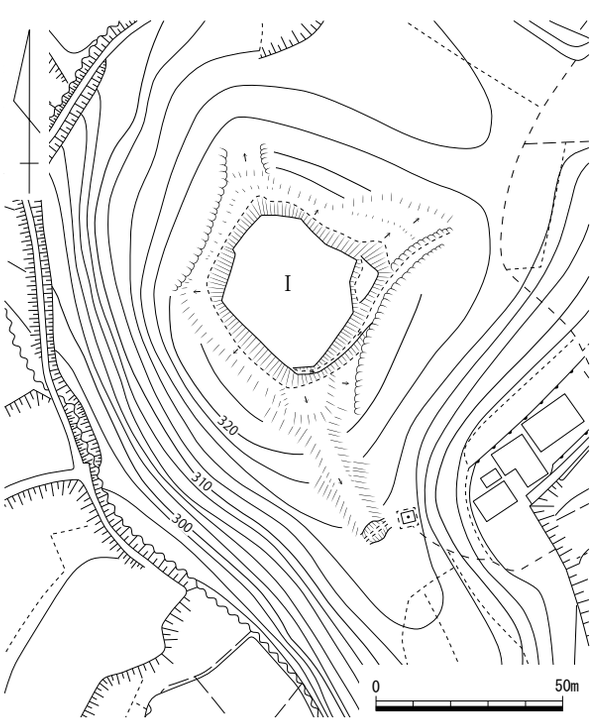
第 168 図　宇戸谷茶臼山城跡縄張り図（1/2,000）

195　土居山（どいやま）城跡　　井原市美星町鳥頭　　地図 21 右

立地　城は、井原市美星町鳥頭から美星町宇戸にわたる小盆地の中央に所在する丘陵上に立地する。

概要　頂部に最大高４mの切岸が施された曲輪Ⅰのみを配した単郭の城で、この切岸下場には 30 ～ 50cm 大の石が据えられている場所がいくつか認められた。曲輪Ⅰ南端には、後世のものかもしれない通路が取り付く。南東に向かって緩やかに下がる尾根筋には、幅約５m、深さ約 1.5 mの堀切を開削している。

文献・伝承　城主や築城時期などは不明である。『美星町史通説編』には、古老の話として、この城の周辺に堀状のものが残っていたと記す。なお、城の近辺には、応永 24（1417）年や同 29（1422）年の銘を含む大小 10 基の宝篋印塔が所在すると伝わる。　（小嶋）



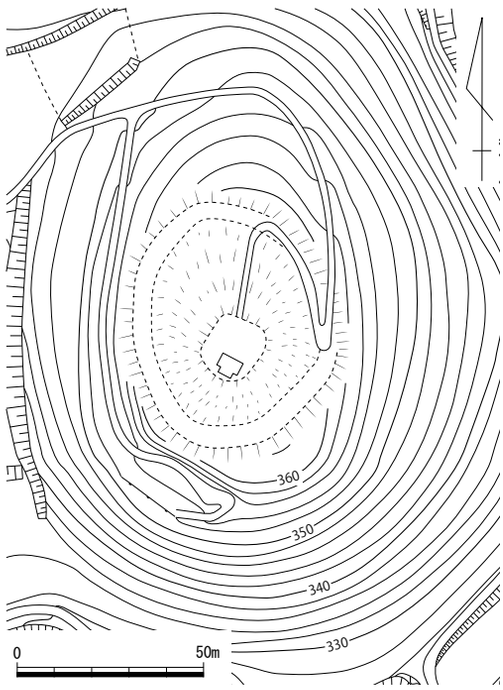
第 169 図　土居山城跡縄張り図（1/2,000）

196　茶臼山城跡（ちゃうすやま）　　井原市美星町星田　　地図 21 左

立地　吉備高原上の小独立丘陵頂部に立地する。山裾には谷水田が廻り、比高は約 30 ｍである。周囲には同標高かやや高い丘陵に囲まれ、見通しは良くない。

概要　丘陵頂部は杵築神社境内となり、一辺約 15 ｍの方形を呈する平坦地となっている。平坦地周縁に切岸は見られず、非常に緩やかな斜面である。頂部から比高で４～６ｍ下がった斜面に幅５ｍ前後の平坦面が一周する。一部道路により削平されているが、この平坦面は全くの水平というわけではなく、数mの傾斜がある。植林関係や畑地の開墾とも考えにくく、可能性としては神社の参道などが考えられるが、やや幅が広いように思う。詳細不明である。明確な城館関連遺構は認められなかったが、俗に茶臼城と伝える。

文献・伝承　1975 年の分布調査所見に、周辺に中世墳墓が点在し、杵築神社のある独立丘陵を俗に茶臼城と伝えるとある。　（物部）



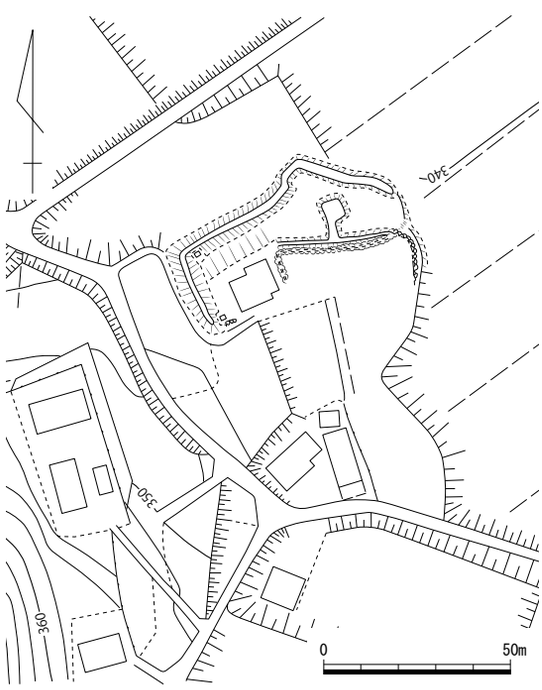
第 170 図　茶臼山城跡現状図（1/2,000）

198　土井の前（どいまえ）城跡　　井原市美星町三山　　地図 21 左

立地　吉備高原上に、標高 420 ｍ級で弥生時代の五万原遺跡が存在する山塊がある。本城館は、この山塊の北側端部麓に立地する。比高差は、ほぼ０ｍである。

概要　本城館は土塁によって守りを固めた屋敷地であったと思われる。現在土塁は、西側辺に約 20m、北側辺に約 60 ｍのみが残存している。現在は宅地と畑地により、土塁以外は半壊状態であるが、本来は 60 × 60 ｍを測る範囲であったと推定する。土塁は、最高地点で２ｍ前後の高さがあり、平均では１ｍ前後を測る。土塁に囲まれた部分は必ずしも方形にならず、特に北側辺では地形に沿って築かれていた。この土塁の内側にも土塁が築かれた箇所があり、土塁間に幅５ｍ弱の高まりが存在する。また外側土塁の屈曲部内側３箇所に、祠が祀られる。

文献・伝承　故事来歴などは不明である。　（小林）

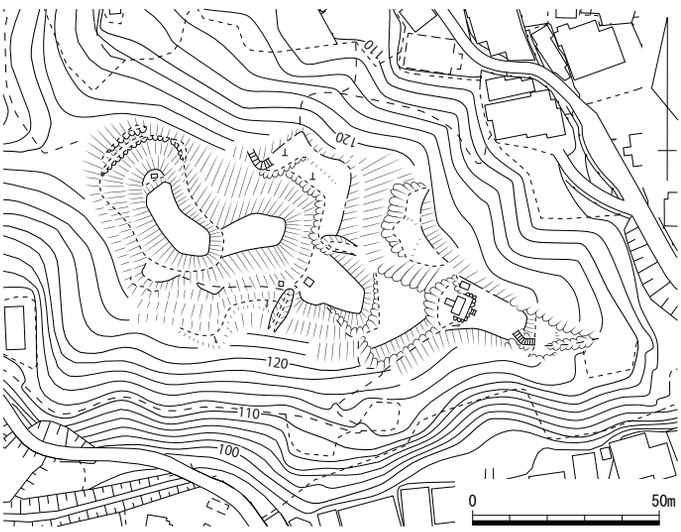


第 171 図　土井の前城跡縄張り図（1/2,000）

199　殿ヶ市（とのがいち）城跡　　小田郡矢掛町上高末　　地図 21 右

立地　南流する美山川に向けて東へ張り出す丘陵尾根に立地する。美山川流域の平地を見通せる。

概要　尾根上は神社地や墓地、畑地造成による地形改変が大きいが、尾根鞍部のすぐ東側の高所を主郭とし、そこから東に下る尾根筋に４面の曲輪を配すると推定できる。それぞれの切岸の高さは、主郭から約２m、約６m、約 3.5 m、約４mである。主郭の周囲の斜面には山道が一周しており、犬走りの痕跡とも考えられる。主郭の南側斜面に小さな曲輪が２か所ある。主郭の下の下の曲輪は竪堀が認められ、北側の竪堀のさらに北に広い墓地があるが、地形からすると曲輪を利用した可能性がある。



第 172 図　殿ヶ市城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『矢掛町史』は『矢掛の城跡』（中山和編）を参照して、「上高末の城山」は、元禄２年の文書に吉川右馬助居城とあり、古老が伝える殿ヶ市の城跡は三段であるとする。（物部）

200　三村氏居館（みむらしきょかん）跡　　井原市美星町星田　　＜市指定史跡＞　地図 25 左

立地　吉備高原上の小さな谷に向け突出した台地状の低丘陵尾根に立地。谷部との比高差は約 10 m。

概要　全体に畑地として開墾され、詳細不明であるが、尾根上に幅 30 m、長さ 70 mの長方形を呈する広い平坦地がある。その東縁の南半に長さ約 35 mにわたって、幅１～ 1.5 m、高さ約 30㎝の土塁が残存する。土塁の西側は浅い溝状になっている。平坦地の南東角に下の段と通じる斜路が掘削されているが、新しいものかも知れない。平坦地の南側は段差約 1.5 m下に平坦地があり、その南は現道や人家により地形改変が大きい。平坦地の西側は０～３mの段差がある。平坦地の東側は２段の平坦地がありそれぞれ約 1.5 mの段差をもつ。その２段の平坦地の内、上段の平坦地（現状竹林）に直径２mの石組み井戸がある。この２段の平坦地のほぼ中央を東西方向の道が掘削されている。市指定史跡。

写真 83　平坦面東縁（竹林の横に土塁あり）

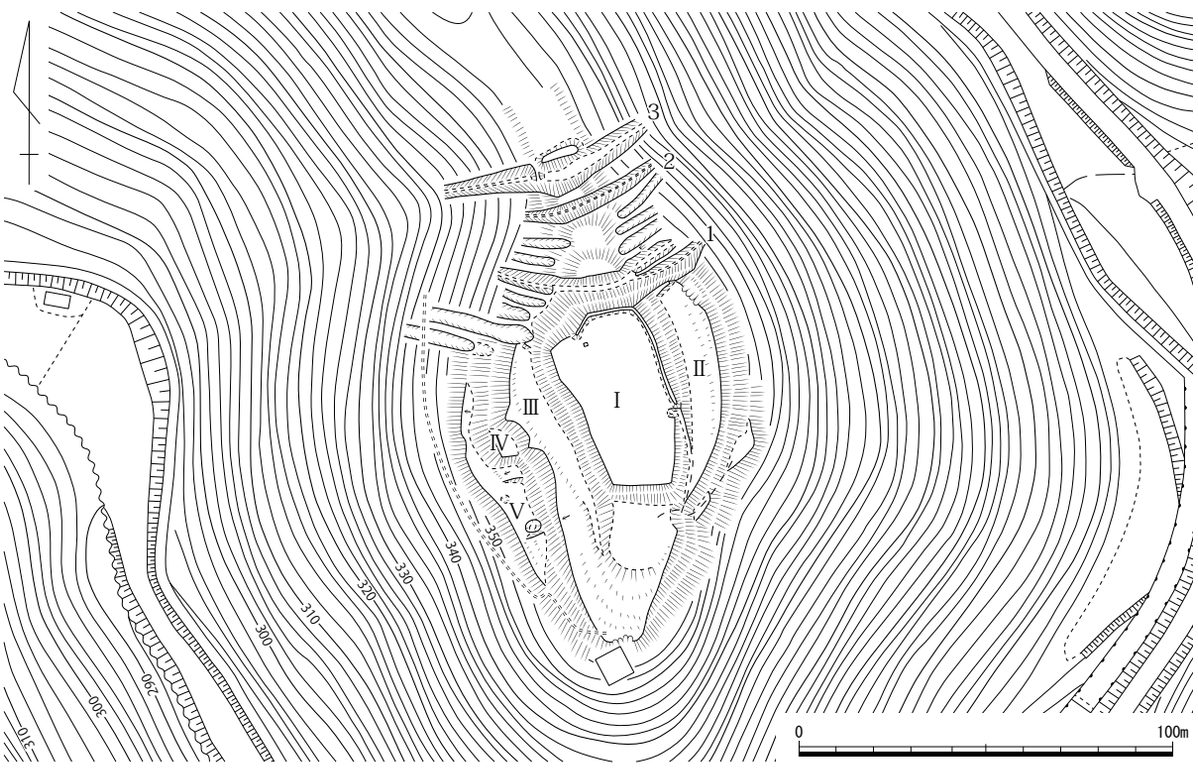
文献・伝承　『美星町史』は、建武年中に三村氏が星田を知行した可能性を指摘し、「城の内」と呼ぶ台地と周辺に堀の跡が残るとし、三村氏の館跡と伝わるとする。（物部）

201　金黒山城跡（かなぐろやま）　　井原市美星町星田　　＜市指定史跡＞　地図 25 左

立地　城は、山塊から南に延びる尾根の先端頂部に立地し、尾根の東裾及び南西裾には小河川が流走している。約 1.5km 南に法雲山城跡、約 3.5km 北に小笹丸城跡が所在している。

概要　諏訪神社が祀られた標高約 370 mの頂部に、高さ約 1 mの土塁を北・東辺に築いた曲輪Ⅰを配する。この東辺土塁の南端に所在する虎口には、曲輪Ⅱ南半から斜めに斜面を登る通路が取り付く。北辺土塁は曲輪外形に沿って、その西端で南西方向に屈曲していた。北側尾根続きには堀切 1 ～ 3 を掘削しており、堀切 1 は幅約 10 m、深さ約 4 m、堀切 2 は幅約 5 m、深さ約 1 m、堀切 3 は幅約 10 m、深さ約 4 mを測り、いずれも竪堀として斜面へ続く。堀切 3 には幅 50cm の土橋を設け、この土橋から堀切 3 北辺に築いた高さ約 1 mの土塁西端を回り込む通路が認められる。自然地形の平坦地が 2 面認められる堀切 1 と 2 に挟まれた尾根筋の東西両側は緩斜面であり、現状では非常に浅いものの東側に 3 本、西側に 2 本の竪堀を開削している。堀切 1 と曲輪Ⅲの間も緩斜面であり、そこには 4 条の竪堀を設け、さらにその竪堀に対面するように曲輪Ⅰ北辺を屈曲させることで守りを固める。曲輪Ⅱの北辺には、高さ約 1 mの土塁が残存する。曲輪Ⅲ南半は削平が甘く自然地形が残っているものの、切岸は急斜で高い。曲輪Ⅳは、曲輪Ⅲ西辺にある 2 か所の突出部に挟まれている。曲輪Ⅴの中央と南半には、円形の凹みが認められるものの、井戸かどうかは判然としない。

文献・伝承　『備中誌』には、三村左衛門太輔の子内蔵介が城主であると「小寺」は伝えると記す。『美星町史通説編』には、蔵光を中心とした三村氏が築いたといわれているとし、この城の北隣の山地で中国の古銭が 360 余枚発見されたと記載する。　（小嶋）

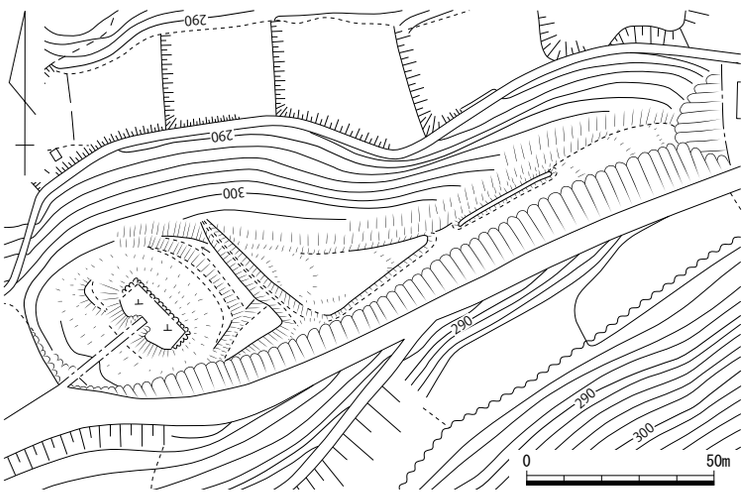


第 173 図　金黒山城跡縄張り図（1/2,000）

202　法雲山城跡（ほううんざん）　　井原市美星町星田　　地図 25 左

立地　小田川に合流する星田川の上流部に位置し、吉備高原上の舌状尾根に立地する。尾根先端山裾との比高差は 30 m。周囲の小さな谷筋を見渡せる。

概要　高所に平坦な墓地があり、南西辺は高さ約２mの切岸状を呈するが、墓地造成に起因すると考えられる。西斜面に小曲輪、東側斜面に細長い２面の曲輪と、その南に曲輪１面があり、その東に堀切（幅約６m、深さ約１～２m）を配する。その先の尾根北縁は切岸状で、部分的に土塁（高さ約 50㎝）が延びるが、尾根南半分は車道により削平されているため、詳細不明である。西端の尾根先端部も削平を受ける。墓地の片隅に宝篋印塔・五輪等片が約 30 個集められている。



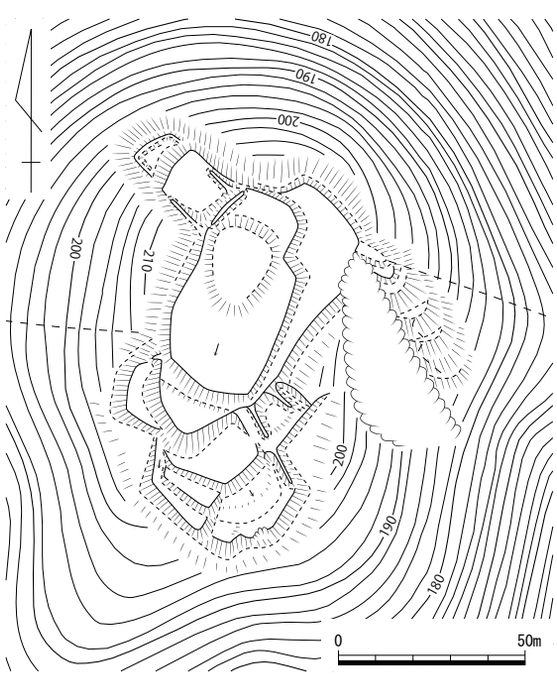
第 174 図　法雲山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『備中村鑑』は星田村法雲山城の城主として三村内蔵介貞親の名を記す。　（物部）

205　下高末城跡（しもこうずえ）　　小田郡矢掛町上高末　　地図 25 右

立地　美山川の西側にあり、標高 500 m級の山塊から西側に派生した尾根先端頂部に位置する。高梁市成羽に抜ける南北の谷筋と、総社市新本に抜ける東西の谷筋が交差する要衝にあたる。

概要　長さ約 50 m、幅約 30 mの大きい主郭の中央よりやや北側には、長さ約 20 mの高まりが存在する。主郭の北西端にのみ土塁が築かれ、さらにその先の尾根筋に土塁を伴った長さ 20 mと 10 m前後の曲輪が２面続く。主郭の東側から南側にかけて腰曲輪が廻り、さらにその南側尾根筋に曲輪が築かれる。この曲輪群は折れや土塁を伴っており、方形になるものが多い。また主郭から見て東側の尾根筋にも曲輪状の施設が続いている。当城は全長が 100 m前後と小規模ではあるが、各曲輪は方形気味に造られ精美な感がある。



第 175 図　下高末城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　城守は吉川右馬助とされる。（小林）

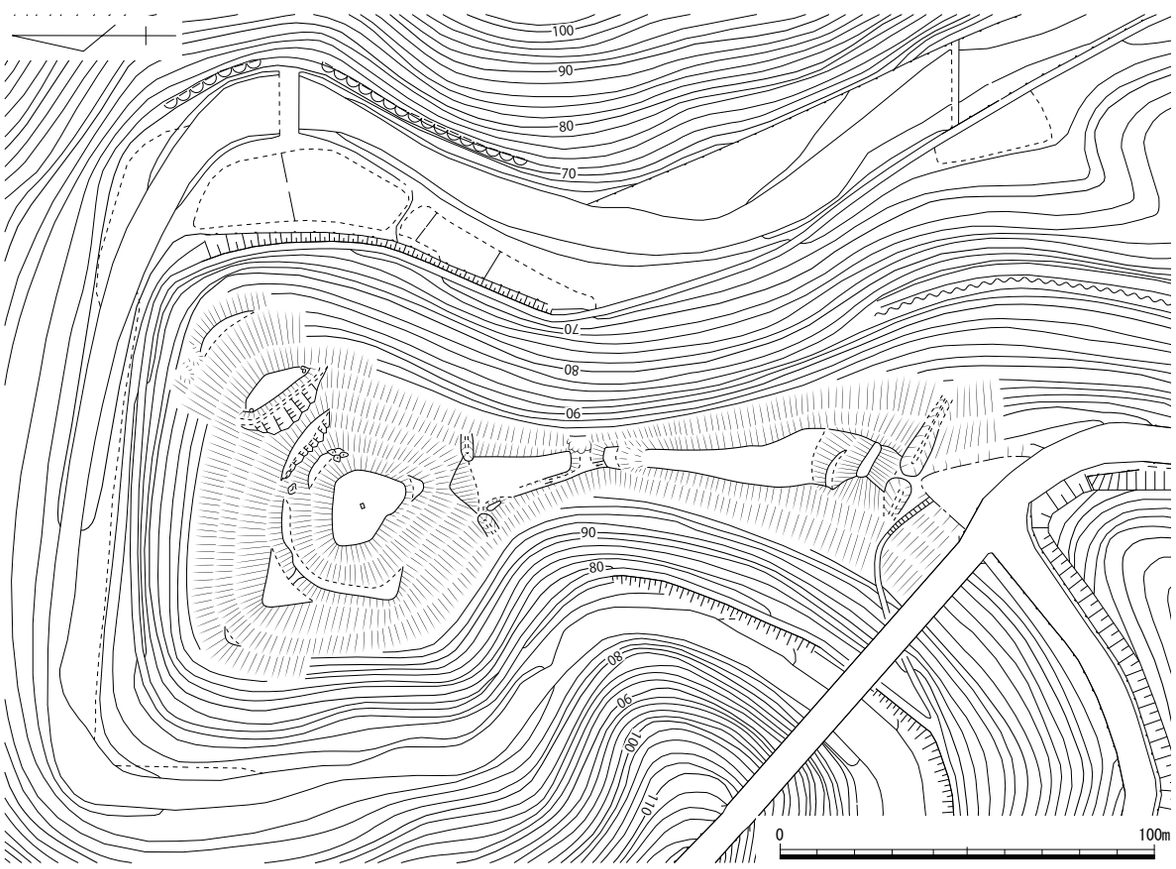
206　瀧山古城跡（たきやまこ）　　小田郡矢掛町宇内　　地図 25 左

立地　吉備高原に端を発する星田川中流域に位置し、星田川湾曲部の内側へ南から突き出す尾根に立地する。

概要　尾根突端の頂部に主郭を造り、主郭から北東及び北西に下る尾根筋に曲輪や犬走りを築く。北東尾根の上から３面目の曲輪は堀切状に岩盤を掘削し、平坦面の南北両端に石列を配置している。主郭の南の尾根鞍部には細長い曲輪がある。中央部が２～４ｍ低くなるが、全長約 90 ｍあり、その南端に北側で約 5.5 ｍ、南側で約４ｍの高さがある大規模な土塁を造る。土塁の南には土橋を残して竪堀を掘削した堀切がある。その南は現道の造成により地形が改変されている。

文献・伝承　『御登極記念　小田郡誌』(1924 年) で、川面村の古城山として城主を渡邊左衛門蔚幸とするのが本城のことか。『矢掛町史』は「宇内の瀧山城」とし、宝暦（1751 ～ 1764 年）頃の文書に渡辺左衛門幸久が城主とあるとする。　（物部）

写真 84　頂部主郭（北東から）



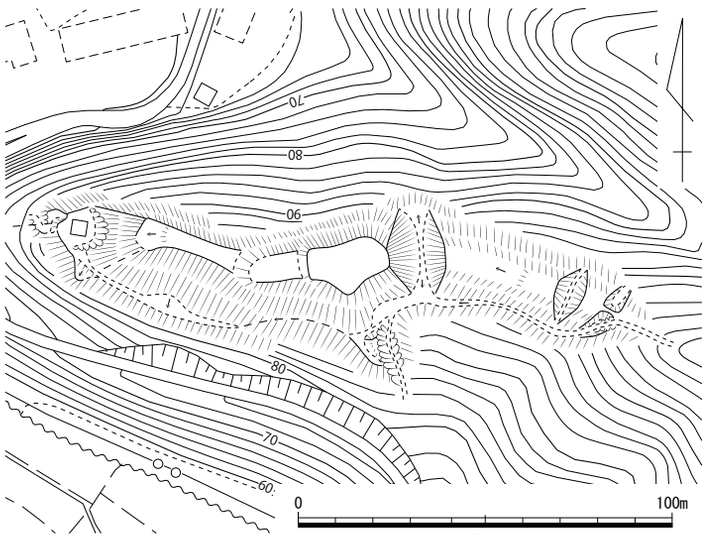
第 176 図　瀧山古城跡縄張り図（1/2,000）

207　薬師山（やくしやま）城跡　　小田郡矢掛町下高末　　地図 25 右

立地　南流する美山川に向かって、東から舌状に張り出す丘陵上に築かれた城郭である。

概要　城域は尾根筋に沿って東西に細長く展開する。頂部に東西約 20 m、南北約 15 mの主郭があり、西側に３面にわたり曲輪が設置される。上位２面は主郭に比べて郭面の造成が甘い傾向がある。最下段の曲輪は仏堂の敷地として造成されている。主郭の東辺は落差約６mの堀切となるほか、背面の尾根筋にも２条の堀切を設けて遮断している。主郭の南側下方にも、山道によって損壊しているが不整形な曲輪が１面認められる。さらに城域の南側斜面では、曲輪群の７mほど下方に尾根筋と平行する山道が通じており、犬走りを踏襲した可能性がある。

文献・伝承　近世地誌類には見えない城で、『矢掛町史』に写真のみが掲載されている。　（岡本）



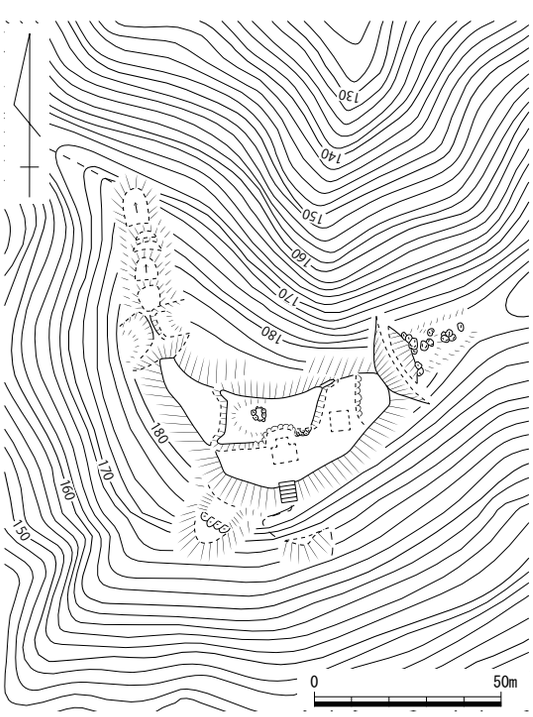
第 177 図　薬師山城跡縄張り図（1/2,000）

208　小林山（おばやしやま）城跡　　小田郡矢掛町小林　　地図 25 右

立地　美山川の西岸、小林地区の平野の北側にある標高約 190 mの丘陵頂部に立地する。

概要　山頂に主郭を置き、尾根筋に沿って湾曲した城域を有する。主郭は不整な長方形を呈し、南辺の一部は木野山神社の造成で改変を受ける。郭面に石で囲まれた窪みが認められたが、城の遺構かどうかは不明である。主郭の南側と西側には大小２面の曲輪があり、前者は主郭との段差が約２mを測り、木野山神社の社地となっている。城域の東端は深さ約５mの堀切で画される。西端には切岸と土橋状の遺構が確認できるが、堀切は明瞭でない。土橋状遺構から北へ延びる尾根上や、主郭の南側にも不明瞭な平坦面がみられるが、曲輪かどうか判然としない。

文献・伝承　『矢掛町史』では小林又三郎の居城とする。『虎倉物語』によれば、又三郎は天正年中に毛利輝元に仕えたという。　（岡本）



第 178 図　小林山城跡縄張り図（1/2,000）

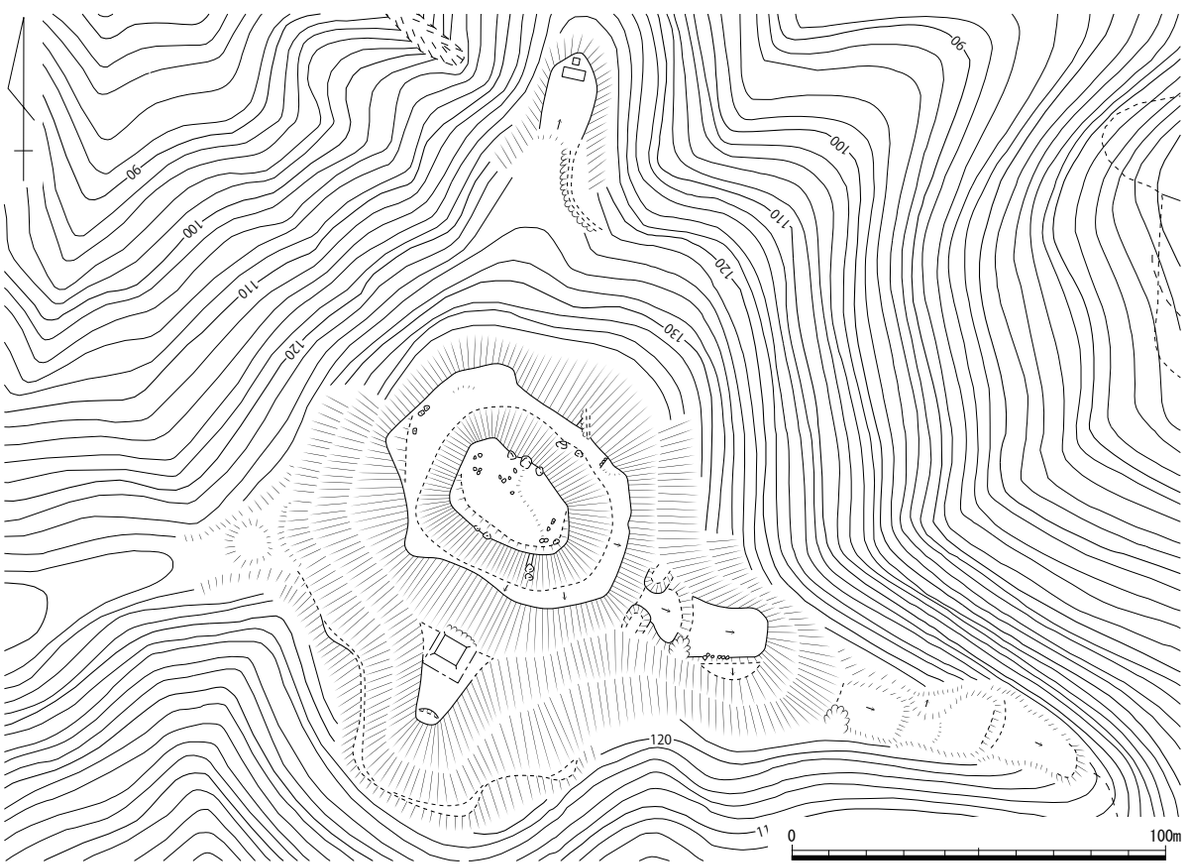
209　神戸山城跡（こうどさん）　　小田郡矢掛町小田　　地図 25 左

立地　小田川に注ぐ林田川の西側にある山塊の北端部に位置する神戸山山頂に立地する。南方約 1.5 ㎞に旧山陽道が通る。

概要　山頂部に広さ東西約 30 m、南北約 20 mの主郭を造成し、その約 4 ～ 6 m下方斜面に帯曲輪を一周させている。帯曲輪の北東部に長さ約 3 mの低い石垣が認められる。山頂を中心に東西南北四方向に尾根が延びる。北尾根には帯曲輪から約 700 m離れて八幡宮があり、その敷地が曲輪の可能性がある。東尾根には、帯曲輪から約 5 m下がって二面の曲輪がある。その先の下方尾根筋にも平坦地があるが、自然地形に近い。南尾根には、帯曲輪から約 6 m下がって鉄塔が建つ平坦地があるが、ここも曲輪の可能性がある。西側には山塊に連なる尾根鞍部には、深さ約 1 mの溝状を呈する部分があるが、堀切かどうか不明である。また、その鞍部から南斜面にかけて犬走りが認められる。

文献・伝承　『備中集成志』は「神戸山城」とし、城主は床ノ上小松のあと、小田氏が代々居城し、小田小治郎隆清は小早川隆景から一字を得たとする。　（物部）

写真 85　遠景（南から）



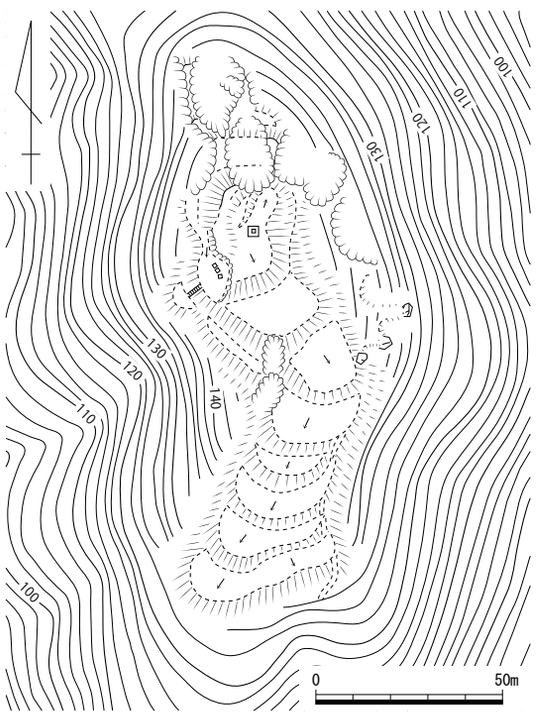
第 179 図　神戸山城跡縄張り図（1/2,000）

210　岩屋山城跡（いわややま）　小田郡矢掛町小田　地図 25 左

立地　東流する小田川を南に見下ろす、標高約 150 mの観音山の頂部に立地する。

概要　頂部には南北約 25 m、東西約 15 mの不定形の平坦面がある。南側の尾根筋上には、高さ１～２mの段差を介して複数の削平面が連なるが、いずれも輪郭が不明瞭で面も傾斜しており、曲輪としての造成は甘い。また、背面にあたる北側は後世の採石作業のために地形が大きく破壊され旧状をとどめない。人為的な地形改変の存在は間違いないが、形状の不明確さに加え堀切や土塁の存在も確認できず、かなり簡易なつくりの山城と考えられる。

文献･伝承　『備中小田物語』には、弘治元（1555）年、小田政清が岩屋山の頂部に出城を築き、走出村城主の有岡新之丞を狙ったが、庄氏・三好氏らの軍勢に攻撃を受け、神戸山城とともに岩屋山城も落とされた、と記す。　（岡本）



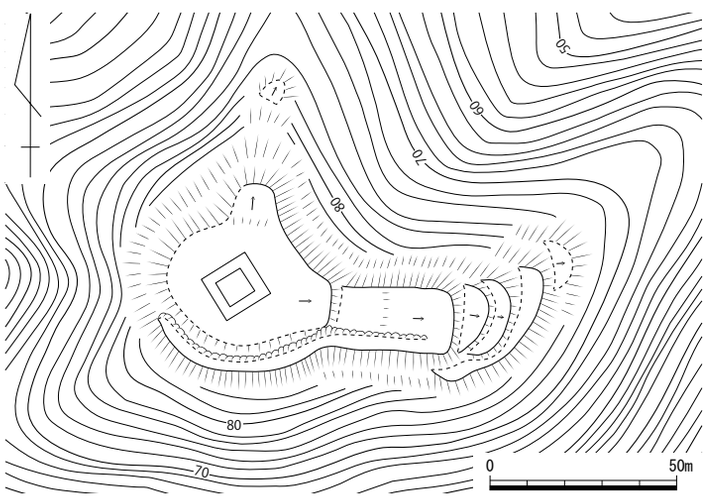
第 180 図　岩屋山城跡縄張り図（1/2,000）

211　龍山城跡（たつやま）　小田郡矢掛町小田・浅海　地図 25 左

立地　小田川の左岸に接する独立丘陵、田鶴山の南端付近の頂部に立地する。

概要　送電線の鉄塔が立つ標高約 90 mの頂部に、東西・南北とも約 45 mの不定形を呈する平坦面があり、ここが『矢掛町史』では本丸とされている場所にあたる。その東側には約 1 mの段差の下に、全長約 30 m、幅約 15 mの長方形の平坦面がある。この２面の南側には犬走り状の細長い平坦面が巡るが、後世の改変と考えられる。さらに北東側尾根筋の先端側には、三日月形を呈する平坦面が 4 面程度確認でき、曲輪の可能性がある。本地点は人里に近いため、現在観察できる遺構が城郭に伴うものとしても、後世の地形改変を少なからず受けていることが想像される。

文献・伝承　『中国兵乱記』では、永禄年中に小田岩屋城を小田孫兵衛政清、浅海村龍山城を一族譜代が守ったとする。　（岡本）



第 181 図　龍山城跡縄張り図（1/2,000）

212　川面館跡（かわもやかた）　　小田郡矢掛町西川面　　地図 25 右

立地　小田川北岸の沖積平野に立地する平地城館である。現状は水田で、中央を井原線が東西に通る。近世山陽道（現在の国道 486 号線に相当）からは北へ約 100 mの位置にある。

概要　東西約 100 m、南北約 130 mの長方形の区画が城館跡と想定される。現在でも中央部の水田は周囲より若干高く、幅 10 ～ 20 mの堀が全周した城館が復原できる。かつて小田郡衙と考えられており、現地に「郡家址」の碑があるが、1973 年度に井原線建設に伴い一部が発掘調査され、中世城館と判明した。調査では、堀の一部や柱穴列などが検出され、備前焼・亀山焼・土師質土器などが出土した。また、堀の内側に土塁があった可能性も指摘されている。調査成果から室町～戦国期の城館跡と推定できる。

文献・伝承　特に知られていない。本地点とその周囲には、「城ノ内」「東堀」「城ノ上」「城下」「城ノ東」といった城館関連小字名が多数残っている。（岡本）

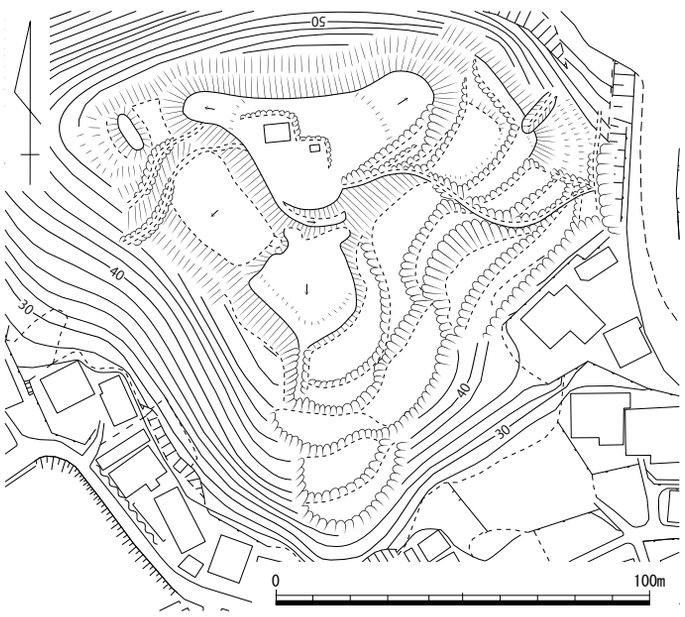
第 182 図　川面館跡平面図（1/2,500）

214　神子山城跡（みこやま）　　小田郡矢掛町小林　　地図 25 右

立地　現在の矢掛町中心部の北方で、美山川の蛇行箇所の内側にある標高 63 mの小丘陵上に立地。

概要　丘陵頂部に主郭を置き、南側斜面に曲輪群が展開していたと思われる。主郭は不定形で稲荷神社の社地となっている。現在、主郭には 4 本の山道が取り付いており、虎口跡が含まれるかもしれない。南側斜面には多数の平坦面が連なるが、特に斜面下半では段々畑の造成による地形改変が著しく、真の曲輪と畑の段との区別が難しい。城域の西端には幅の広い堀切状の遺構があり、また北東端には 1 条の竪堀らしき遺構が認められる。

文献・伝承　『古戦場備中府志』では小林村の神子山城として、城主は毛利氏の家来、武野宗圓とする。　（岡本）



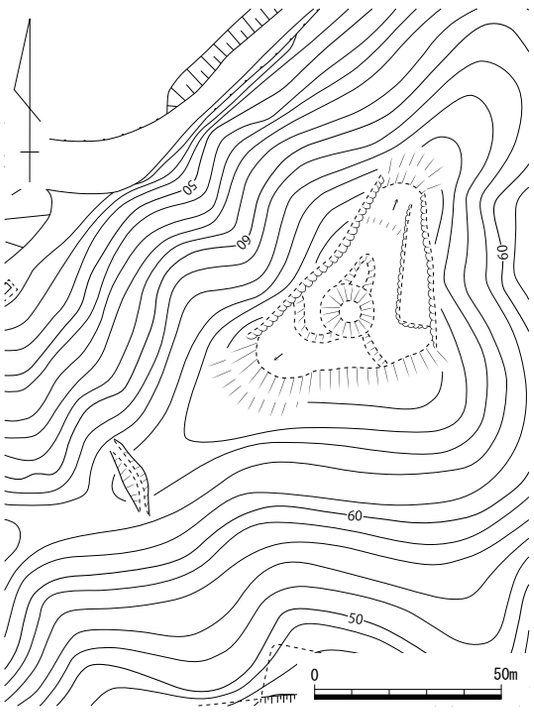
第 183 図　神子山城跡縄張り図（1/2,000）

216　中山城跡（なかやま）　　小田郡矢掛町東三成・矢掛　　地図 25 右

立地　茶臼山城跡の所在する丘陵の北端付近に位置し、北東に延びる尾根上に立地する。

概要　南西側の尾根筋を堀切で遮断して城域を画する。主郭に相当する頂部平坦面は、現状では全長約 60 m、幅約 30 mの不定形で、切岸は明確でなく、東西の斜面は耕作や植林によってかなり改変を受けている。ほぼ中央に、直径約 15 m、高さ約２mの円墳が所在する。平坦面上には不明瞭な段差や隆起が認められるが、城の遺構かどうかは不明である。背後に堀切を設けるのみで、他の造成工事は最小限にとどめた城郭であると考えられる。

文献・伝承　『矢掛町史』に遠景写真が掲載されている地点である。『古戦場備中府志』には西三成村の「中山城」があり、歴代の城主は庄為資、穂井田實近、毛利元清などとするが、本地点を指すという確証はない。　（岡本）



第 184 図　中山城跡縄張り図（1/2,000）

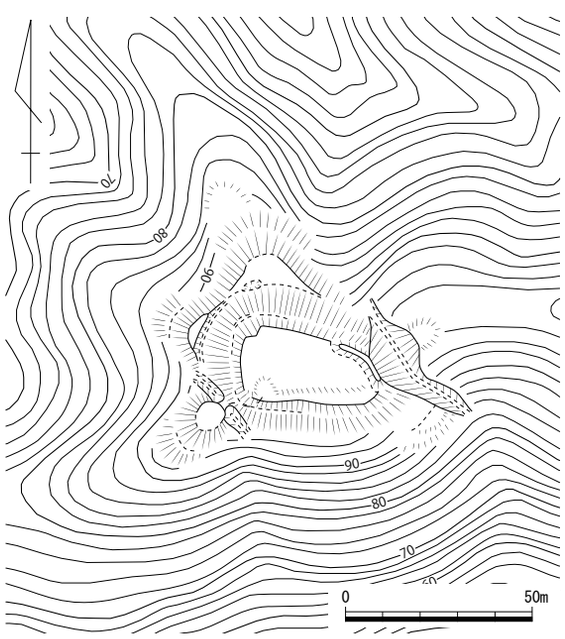
217　山本城跡（やまもと）　　小田郡矢掛町矢掛・東三成　　地図 25 右

立地　標高約 140 m級の山塊から南へ派生した尾根先端頂部に位置する。

概要　約 40 × 20 mと主郭は広く、南西側には凹みが存在し、虎口の可能性がある。背後は、高さ約１mの土塁と深さ約 10 mの堀切で守りを固めている。尾根先端方向は、３方向に派生する筋にそれぞれ１面ずつの曲輪を配しており、この間の切岸は 10 m程あり急峻である。北側の曲輪は、長さ約 10 m、幅約 20 mとやや大きい。西側の曲輪は、切岸との間が横溝状に凹む。南西側の曲輪は径 10 m程の円形を呈し、切岸との間に堀切状の竪堀が配される。この曲輪は古墳を転用したものと考えられる。

この山城は、全長こそ小さいが、大きい主郭と高い土塁、また幅が広く深い堀切など、しっかりした造りであるのが特徴的である。

文献・伝承　城守等は不明である。　（小林）



第 185 図　山本城跡縄張り図（1/2,000）

218　伽藍山城跡（がらんやま）　　小田郡矢掛町江良・里山田　　地図 25 右

立地　東西に流れる小田川が、現矢掛町の街並付近で一度北側へ屈曲する箇所の南側山塊に位置する。突出した位置になるため、小田川流域を広い範囲で眼下に収めることが出来る。また矢掛町域を広く見渡せる場所であることから、この山を基準として条里を行ったと伝えられている。

概要　南北に並んだ２つの頂部に、それぞれ曲輪群をもった山城である。北側の曲輪群の方が規模も大きく、造りも精美であるため主郭になると想定する。

北側の曲輪群は、頂部にある主郭は約 30 m四方で、かつて寺院の伽藍があり当城の名前の由来となっている。この主郭を１重の帯曲輪で囲み、さらに北西と南東側に腰曲輪を連ねる。特に北西側の腰曲輪は、土塁の築かれた幅３mほどのものを含め、大小３～４面が配される。この方面は江良峠へと続く筋であり、主郭西側に向かうと虎口状の施設に達する。このことから城の入口は、主郭北西側から西側へかけて意識していたと考えられる。南側の尾根筋は、約８mの切岸の下に曲輪が３面存在する。主郭直下の曲輪を起点に南東側と南西側に曲輪が１面ずつ派生する。この２面の曲輪は、それぞれ周囲を土塁で囲まれていた。さらに下った尾根鞍部付近に、幅 10 mほどの大きめの曲輪を配している。また主郭から見て南西側の斜面に２本以上、南東側の斜面に８本以上の竪堀を配している。

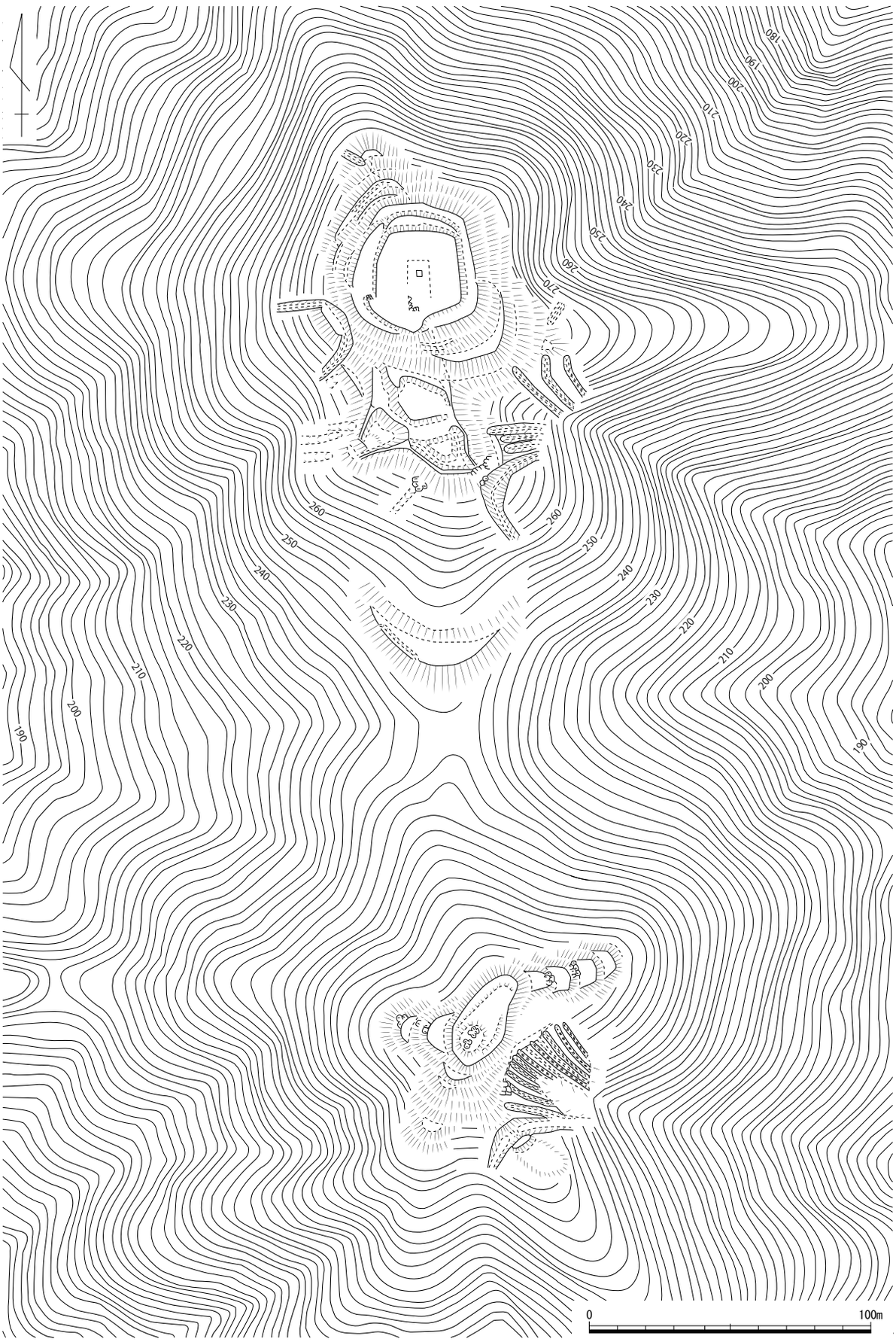
南側の曲輪群は、頂部が長さ約 40 mほどで細長く、平坦の造りもあまく自然地形に近い。この曲輪から３方に伸びる尾根筋に向けて曲輪を連ねている。北東方向の尾根筋には、４面ほどの曲輪が続く。西側の尾根筋は比較的広い曲輪が配されている。また尾根鞍部にはU字形の堀切、それに続くように頂部東側にある谷筋に向けて８本以上の竪堀を配している。北側と南側の曲輪群は、一見別の城のように感じるが、U字形の堀切と谷筋を固めた竪堀のあり方は、全く同じである。あそらく両方とも同時期に同じに発想のもとで築城されたことが推測される。

当城の中での特に北側の曲輪群は、条里の基準になったように眺望にすぐれており、広い範囲で旧山陽道沿いを見渡せる。この眺望の良さこそが、頂部の平坦地がそれほど大きくないのにも関わらず、しっかりした施設を造った理由でもあろう。

文献・伝承　『備中府史』には、毛利氏配下の「宍戸安芸守舎弟宍戸備前」が城主であったと記される。また渡辺左衛門太夫が在陣したともある。　（小林）

写真 86　遠景（北から）

写真 87　伽藍山城跡から西を望む



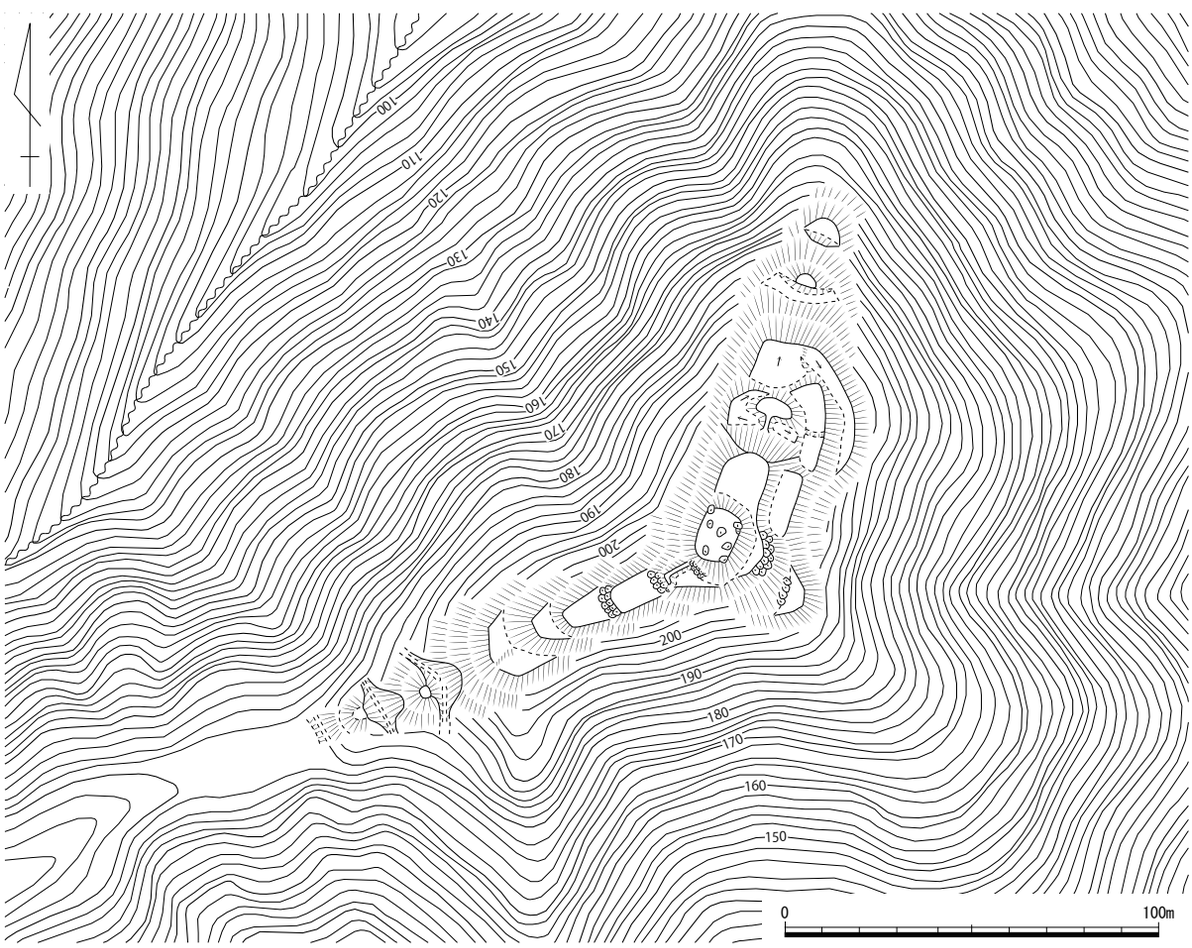
第 186 図　伽藍山城跡縄張り図（1/2,000）

219　山田古城跡（やまだこ）　　小田郡矢掛町里山田　　地図 25 右

立地　遙照山北麓の小規模な平野から立ち上がる標高約 210 mの丘陵頂部に築かれた城郭で、道々川を挟んで中山山塊の船が迫山城跡と正対する。城の周囲は極めて急峻な斜面である。

概要　城域は尾根筋に沿って約 300 mにわたり細長く展開し、主郭のある中央部で屈曲した「く」の字状を呈する。主郭は長方形を呈し、内部は平坦であるが露岩が多い。主郭の北側尾根筋に並ぶ曲輪群のうち、上から 1 面目と 2 面目の曲輪との間は土橋を伴う堀切があり、土橋の先端は 2 面目の曲輪の郭面に接続している。 1 面目と 3 面目の曲輪は、東端部が尾根の東斜面に回り込み帯曲輪状を呈する。北端付近には落差約 8 mの堀切があり、さらに外側にも小規模な曲輪が 1 面認められる。また、尾根筋の曲輪とは別に、東斜面にも長方形の曲輪が 2 面設置されている。主郭南西側の尾根筋には曲輪が 5 面連なり、間の切岸の高さは 1 ～ 3 mである。上部 2 面分の切岸は自然の岩盤を利用している。最上段の曲輪には、北辺から西辺にかけて高さ 0.5 mほどの土塁らしき高まりが認められる。最下段の曲輪の先端は高さ 10 mほどの急傾斜となり、城域の西端には 3 条の堀切を設けて尾根筋を遮断している。主郭から南東に延びる尾根筋にも小規模な曲輪が 1 面確認できる。

文献・伝承　『古戦場備中府志』には里山田村の「奥之城」として、船が迫城の端城であり、山麓を「やけ山」と呼ぶとする。『小田郡誌』では「里山田城」として、猿掛城の属城かとする。　　（岡本）



第 187 図　山田古城跡縄張り図（1/2,000）

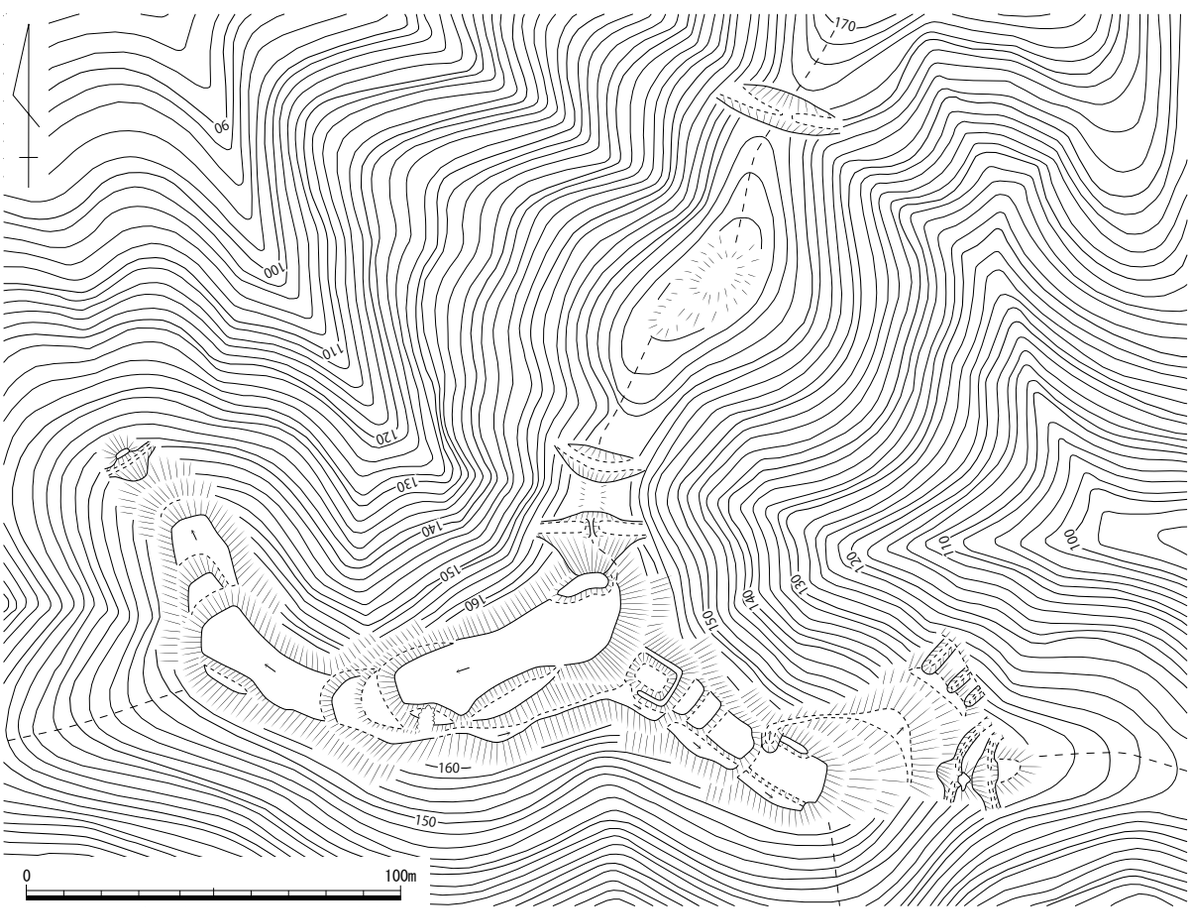
220　要害山城跡（ようがいやま）　　小田郡矢掛町東三成　　地図 25 右

立地　鷲峰山から南西へ派生した標高約 160 mの尾根筋頂部に位置する。小田川と大谷川の合流地点の北東側に近接する。

概要　主郭から東西２方向の尾根筋に向けて曲輪を連ねる山城である。主郭は約 50 mを測り長大であり、北側尾根筋の際に高さ 0.5 mの土塁を設けている。南斜面には窪みが存在し、虎口の可能性がある。北側尾根筋には、２条の堀切を配し、さらに一つの頂部を挟んで先の鞍部にも堀切が１条存在する。主郭から見て西側の尾根筋には、４面の曲輪が続く。この内２面目の曲輪は、長さ約 40 mと大きい。また各曲輪間の切岸も高くしっかりしている。なおこの尾根筋をさらに下ると堀切と土塁が配されている。主郭からみて東側の尾根筋には、３面の曲輪が続く。特に主郭からの約８mにも及ぶ切岸直下に築かれた１面目は、３周囲を高さ２mの土塁で囲んだ構造である。西側曲輪群を下ると２条の堀切があり、さらに北側斜面にはこの堀切に連続して３本の竪堀が築かれている。

当城は、長大な主郭や曲輪を有し、３方の尾根筋を堀切によって画するしっかりした山城で、眼下に旧山陽道を見据えることのできる要衝に築かれている。茶臼山城跡や猿掛城跡といった大規模な山城の中間に位置しており、この２城の次に序列されるような山城であろう。

文献・伝承　『小田物語』には、城主は江木平四郎であると書かれる。　（小林）



第 188 図　要害山城跡縄張り図（1/2,000）

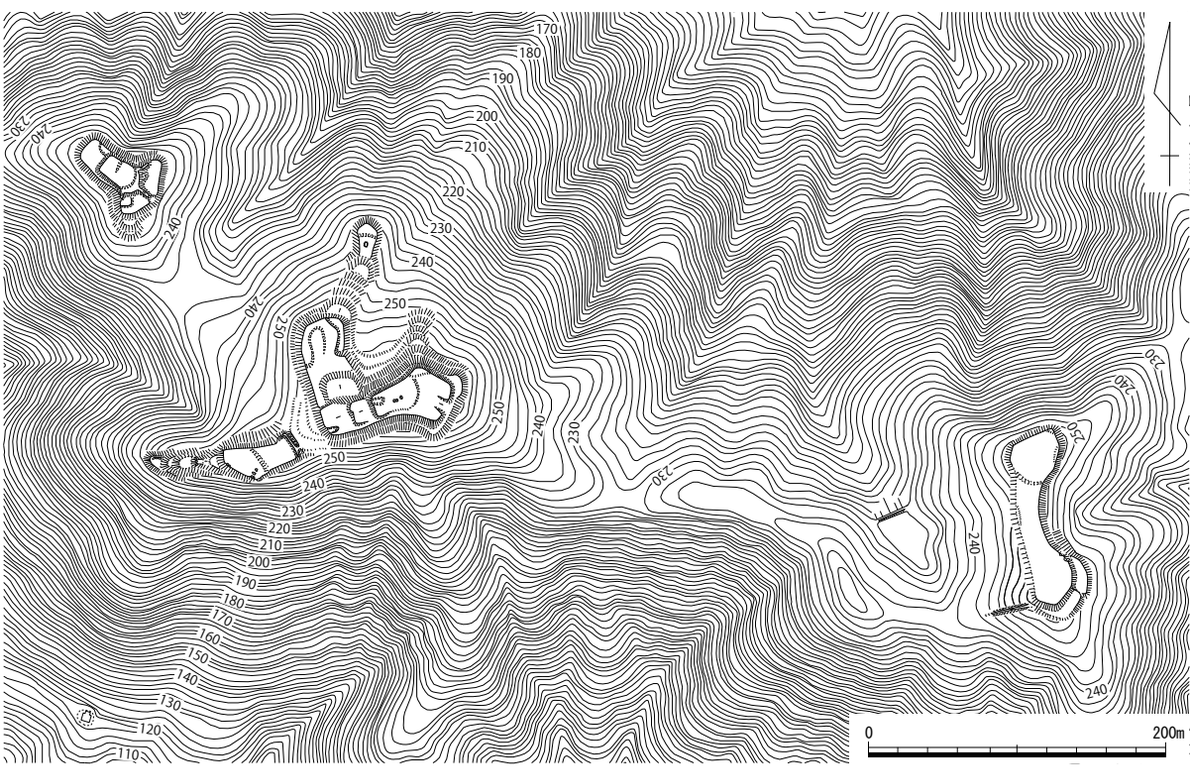
221　中山（なかやま）城跡　　小田郡矢掛町南山田・中・横谷　　地図 25 右

立地　遙照山山塊と小田川の間に位置する独立丘陵、中山（標高 270 m）の山頂を含む東西方向の尾根筋上に築かれた城郭である。山の東西麓は狭長な平野であり、小田川の支流である大渡川と道々川がそれぞれ北流する。北麓には標高約 120 mの低丘陵が接している。本城から尾根続きの西方には船が迫山城跡が所在する。

概要　城域は､山頂を含む三つの頂部に分散している。各々を独立した城郭と考えることもできるが、間の尾根筋に堀切などの遮断施設が認められず、一体として機能した可能性があるため、ここでは単一の城郭として扱う。そのため、城域の全長は約 720 mに達する。この解釈によれば、山頂に主郭を含む城の中枢部、その東西に出城を置いた構造かと推測される。一方、西方の船が迫山城については背後にしっかりした堀切を伴うことから、本城とは別の城郭と判断している。

写真 88　遠景（北から）

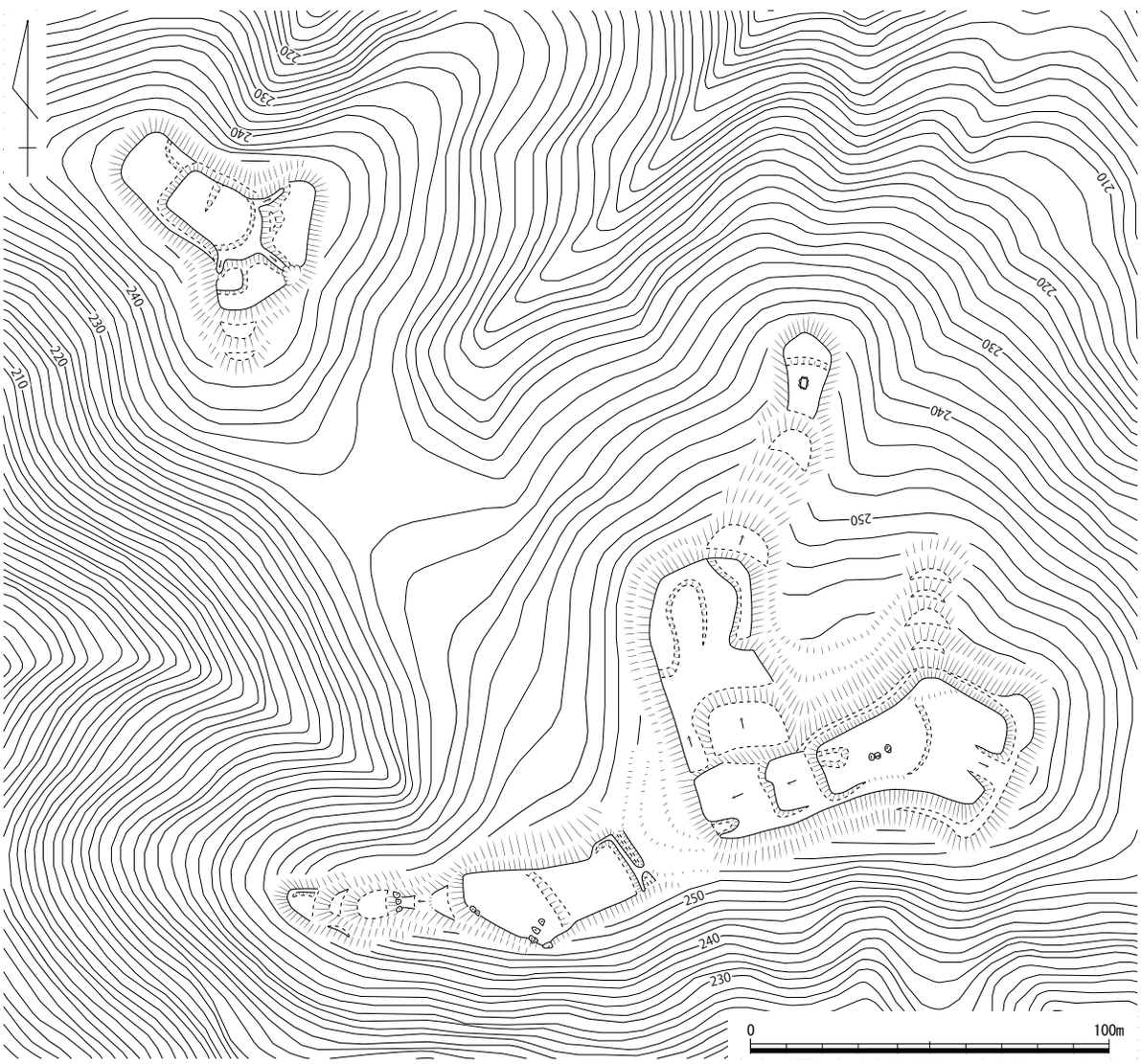
中枢部は中山山頂に置かれており、西側と北側に延びる尾根筋にも曲輪群が展開し、全体としては東西約 210 m、南北約 130 mの規模である。主郭は東西約 50 m、南北約 30 mの不整な五角形を呈し、東辺には虎口を思わせる開口部が認められるが、後世の改変の可能性もある。また、西端部にある浅い溝状の窪みも虎口の痕跡かもしれない。主郭の周囲は 2 ～ 3.5 mの切岸となり、そ



第 189 図　中山城跡縄張り図（1/5,000）

の下を細長い犬走りないし帯曲輪が取り巻いている。主郭の西側には方形の曲輪が２面置かれ、それぞれの南辺は斜路によって主郭に接続している。曲輪群はここから直角に折れて北に続くものと、いったん途切れて西に連なるものとに分岐する。北に張り出す尾根筋には、かなり傾斜のある不明瞭な面に続いて、全長約 55 m、幅約 30 mの大規模な曲輪が置かれる。さらに北に派生する尾根筋にも複数の曲輪が確認でき、先端の曲輪には、郭面に後世の祠跡と思われる石組みの基壇が残っている。一方、西側に延びる尾根筋は、土橋を伴う浅い堀切と土塁で遮断され、その先に全長約 50 m、幅約 20 mの不整な五角形の曲輪が置かれている。この曲輪の西端から尾根下方には、高さ 0.5 ～２mの切岸を伴う小規模な曲輪が５面連なり、先端の曲輪は北辺にごく低い土塁を伴っている。

中枢部の北西側には、全長約 60 m、幅約 40 mにわたる曲輪群が所在し、全体としてはまとまったＴ字形を呈する。中心の曲輪は全長約 30 m、幅約 15 mの不整な長方形で、南東辺は輪郭に沿って土塁状のわずかな高まりがある。周囲は高さ２m前後の切岸である。郭面の南東辺からは土塁が三方に延び、それによって仕切られた空間が腰曲輪となる。北西側にも方形の曲輪が１面設けられており、その南端は南東に延びて犬走り状となる。

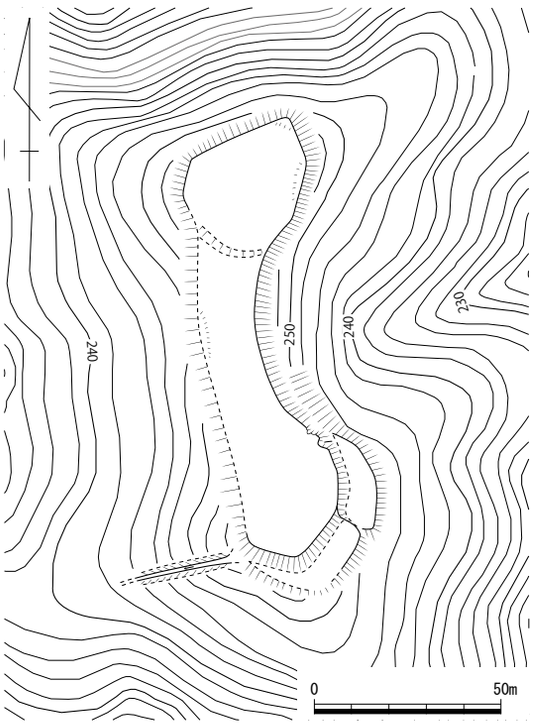


第 190 図　中山城跡西部縄張り図（1/2,000）

城域の東端は、南北約 110 m、東西の最大幅約 30 mの細長い曲輪である。主郭からの尾根筋は南端に取り付き、この部分の山道は直線的な土塁状をなすが城郭に伴う土塁かどうかは判然としない。曲輪の北端は 0.5 mほどの高まりとなるほか、曲輪縁辺のごく一部に土塁の痕跡ともみられるわずかな高まりが確認できる。曲輪の南側には、高さ 1.5 ～２mの切岸の下に２面の曲輪が設置されている。

中山城跡は、山陽道が通る小田川沿いの平野を見渡せ、かつ南側の浅口地域から遙照山山系を越えるルートの出口付近にあたることから、交通の結節点を押さえる位置に築かれた城と考えられる。

文献・伝承　本城に関する史料は乏しい。『小田物語』には、船が迫山城の別名を「江本の城」とも「中山」ともいい、本丸・二の丸・小丸があり、小丸は 42 とも 48 とも言われるほど多いと記し、三好権左衛門尉の居城とする。これは、本書でいう船が迫山城跡と中山城跡を合わせた、中山に展開する城郭全体を指していると解釈すべきであろう。『小田郡誌』では、三好氏の退去後は猿掛城の属城になったものか、と記す。　（岡本）



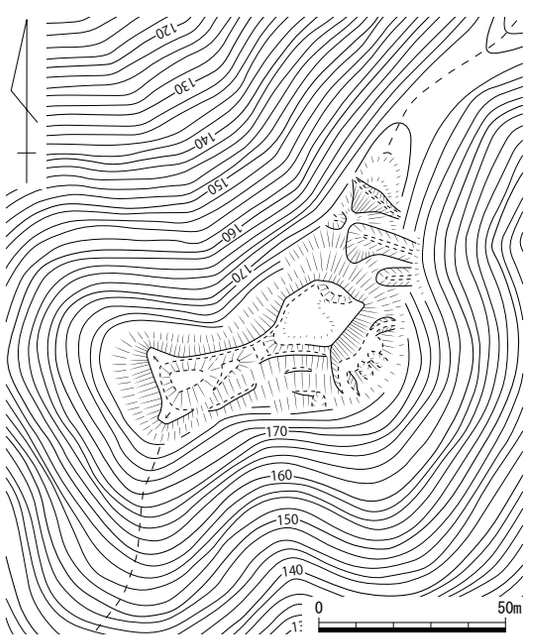
第 191 図　中山城跡東部縄張り図 (1/2,000)

222　船が迫山城跡　（ふなさこ）　小田郡矢掛町南山田　地図 25 右

立地　小田川の支流道々川の東岸、中山山塊の西端に位置する尾根突端に立地する。

概要　山塊に続く尾根を２条の堀切で画し、尾根先端高所を東西 60 mの細長い曲輪とする。中央の浅い鞍部の東側は比較的平坦だが、西側は尾根筋を削平せず残し、周囲の斜面に犬走りを巡らせ足場としている。曲輪の東縁に高さ約 0.5 ～１mの高まりがある。その上面と堀切の土橋部分との比高は約６m ある。土橋東側の竪堀の南隣にも竪堀がある。北側堀切の深さは約 3.5 ～ 0.5 mである。また、曲輪の東縁の約４mの切岸下に「U」字形の堀切が２つ重なったような遺構が認められる。しっかりした堀切で尾根を切断していることから、中山の峰々にある中山城跡とは切り離して考えたい。

文献・伝承　『小田物語』は「城山ふなかさこ」とし、城主不詳、或いは天文 21（1552）年頃、三好権左ヱ門かとする。これは中山城跡を示すか。　（物部）



第 192 図　船が迫山城跡縄張り図 (1/2,000)

223　茶臼山城跡（ちゃうすやま）　　小田郡矢掛町東三成・矢掛　　地図 25 右

立地　現在の矢掛町市街地の東側に隣接し、小田川北岸の平野を分断するように南北に横たわる独立丘陵、茶臼山（標高約 115 m）の山頂と、その南側に延びる尾根筋一帯に広く曲輪を展開する城郭である。城からは、東・西・南に広く展望が開け、周囲の平野や南麓の小田川、山陽道なども見渡すことができる。

概要　城域は全長約 540 mにわたって多数の曲輪が連なり、備中地域では高梁市の備中松山城に次ぐ規模を誇る城郭である。山頂部に主郭（「本丸」）を置き、そこから南東に延びる尾根上に「太鼓丸」、主郭から南側に派生する尾根上に「鎮守丸」「二の丸」「爺ヶ段」「三の丸」と呼ばれる曲輪群が展開する。丘陵の南東麓には、山裾に接して水堀の跡が現在も残る。なお国土地理院の空中写真によれば、二の丸・三の丸一帯は戦後に畑として開墾されていたようであり、さらに 1985 年以降には「茶臼山文化の丘」として整備され、道路や駐車場の造成によって城内の遺構は改変を受けている。現地で確認できる平坦面や斜路の中には、本来の形状かどうか判断に迷うものも含まれている。

山頂の主郭は、城域の北端近くに位置しており、全長約 40 m、幅約 25 mを測る不整な長方形を呈し、郭面には現在テレビ塔が立っている。郭面の周囲は高さ 5 ～ 7 mの切岸であり、下方を帯曲輪が取り巻いている。曲輪の西辺及び南辺の切岸上端には自然石の角礫を用いた石垣が築かれているが、城郭に伴うものかどうか判然としない。主郭北側の尾根筋は土橋を伴う落差約 5 mの堀切で遮断され、その外側にも落差約 4 mの切岸が確認できる。主郭の北西側には、石垣を伴う小規模な平坦面と 1 本の竪堀が認められる。

主郭の南東に延びる尾根筋が「太鼓丸」と呼ばれる曲輪群である。現在は舗装道路によって寸断されており、道路より上方に 2 面、直下には 1 面の曲輪が現存し、さらに尾根の下方には全長約 60 m の大規模な不整台形の曲輪がある。さらに尾根筋の先端付近や、南西側の谷筋にも多数の平坦面が現存するが、ほとんどが後世の畑の段と考えられる。

「鎮守丸」と呼ばれる曲輪は、主郭から南側に延びる尾根上に置かれ、城域全体のほぼ中央に位置している。尾根筋に沿って南北に細長く延び、さらに東西に派生する尾根も含めて、南北約 120 m、東西約 100 mの不整な十字形を呈する城内最大規模の曲輪である。曲輪の北端には、主郭方面から続く舗装道路が取り付いて郭面が大きく削平され、西端の突出部は道路からつながる駐車場となり地

写真 89　遠景（東から）

写真 90　東麓の堀池（北東から）

形改変が著しい。郭面の頂部は「経王大菩薩」の社地であり、社殿西側には高さ 0.5 mほどの高まり、北側には直径約２mの石組みの井戸が現存するが、城の遺構かどうか不明である。

「鎮守丸」の南側では尾根が二つに分岐し、東側の尾根が「二の丸」、西側の尾根が「三の丸」、両者の間が「爺ヶ段」と呼ばれる曲輪群にあたる。

「二の丸」は、鎮守丸の南端から南に延び、さらに東や南西に分岐する尾根筋や斜面に展開する曲輪群である。頂部は、鎮守丸から南側に続く尾根上に立地する、全長約 45 m、幅約 20 mの不整楕円形を呈する曲輪である。ここから南側への展望は主郭を凌いでおり、平野部を監視する重要な機能

第 193 図　茶臼山城跡縄張り図（1/4,000）

を担ったと考えられる。現状では鎮守丸側から郭面に登る斜路が付設されているが、これは公園整備の一環として造成されたものである。西側から南西側の下方には大小の曲輪が数面設けられている。南東側下方には、高さ７～８ｍの切岸を挟んで３面の曲輪が連なる。これら南東側の曲輪群は最大幅５ｍほどの斜路によって連結されているが、本来の形状かどうかは不明である。また、上から２面目と３面目の曲輪の南端付近から「三の丸」の方向に向かって、犬走り状の細長い平坦面が３面続いているが、これらも城郭遺構かどうかはっきりしない。

「爺ヶ段」は、二の丸と三の丸との間の谷筋に分布する曲輪群であり、５段の曲輪からなる。曲輪列の北西側には、「鎮守丸」の南端から「三の丸」へつながる通路が通っているが、「二の丸」と同様に、本来の形状かどうか不明である。上位３段分は、三角形に近い形状の曲輪を、２～３ｍの切岸を伴いながら全体として弧状に湾曲した配置である。最下段の曲輪は、全長約 40 m、幅約 30 mの比較的大規模な平坦面をなし、郭面の北端に石組みの井戸が１基現存している。

第 194 図　茶臼山城跡北半部縄張り図（1/2,000）

「三の丸」は、城域南西部に位置する曲輪群である。最上段の曲輪は、「爺ヶ段」の最下段の曲輪の西隣に位置する、西に張り出す半円形の平坦面であり、そこから南へ延びる尾根上に平坦面が連なっている。尾根の先端付近は現在も段々畑として耕作されており、曲輪と畑の段との区別が難しい部分もある。図示した平坦面のうち、下から 4 面目までは法面に小規模な石垣を伴い、現在は山林であるが、畑として再利用された名残と考えられる。三の丸の曲輪群の西側下方には、山麓から二の丸方面へと続く山道が通るが、城の犬走りなどをある程度再利用した可能性も考えられる。

第 195 図　茶臼山城跡南半部縄張り図（1/2,000）

城の南東麓には現在も水堀の跡が残り、想定される全長は約 600 m、幅は 20 m前後を測る。この水堀は河川の流路を利用したと考えられるが、一部に意図的に屈曲させた箇所も認められる。北西端のみが現在も「堀池」という名前の池として残り、それ以外の箇所は周辺よりやや低い水田となっている。『矢掛町史』によると、水堀内側に茶屋敷・郭内屋敷・大手（桝形）、水堀の西端には船屋敷が所在するとされ、現地表では視認できないものの各種施設の存在は十分考えられる。一方、城域の南西側は小田川自体が急峻な地形と相まって、強固な守りを形成したと想定できる。

茶臼山城跡では、1984・85 年度に公園整備と道路建設に伴う発掘調査が行われている。調査の結果、太鼓丸では幅約 4 m、深さ 0.7 mの堀切が検出され、亀山焼の擂鉢・甕・土鍋、小皿、青磁、鉄釘などが出土した。鎮守丸では柱穴周辺から嘉祐元宝 1 点、爺ヶ段では柱穴・礎石・石列・版築面などが検出され、備前焼の擂鉢・大甕などが出土した。

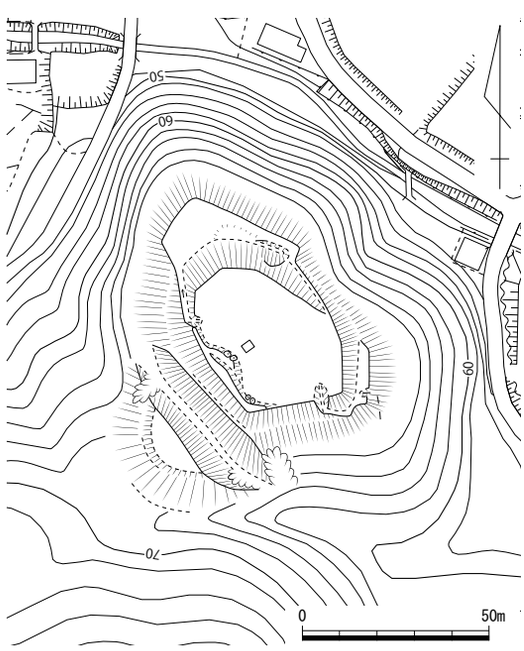
茶臼山城跡は存続期間が短く、またその間に大幅な改修も受けていないことから、戦国末期における城郭の形態を残す貴重な事例といえる。

文献・伝承　天正 11（1583）年、猿掛城主の毛利元清は茶臼山城へと居城を移した。ただし茶臼山城は元清の築城ではなく、元清の部将であった江木半四郎がいた城に拡張工事を加えたものともいわれる。この江木半四郎が居住した場所と伝えられるのが、現在「爺ヶ段」と呼ばれる曲輪である。同 13（1585）年、元清は毛利輝元の命令で二男の宮松丸とともに安芸の桜尾城に移り、茶臼山城には城代を置いて守らせた。同 15（1587）年、豊臣秀吉は九州出陣の途上で茶臼山城に立ち寄ったとされる。慶長 2（1597）年 7 月に元清は病没し、茶臼山城及び領地の大部分は毛利輝元の直轄地となったが、同 5（1600）年に関ヶ原の戦いで毛利氏は敗北し、茶臼山城も廃城となった。　（岡本）

226　原砦跡　　小田郡矢掛町横谷　　地図 26 左

立地　小田川に向けて北へ流れる大渡川を眼下にする山塊端部の小丘陵に立地する。

概要　頂部に、南北約 40 m、東西約 30 mの曲輪を造成している。南西縁には高さ最大で約 1.5 mの土塁を配する。土塁の形状は、後世の祠の設置等により若干改変されている可能性がある。主郭の北と東、それぞれ約 6 mと 3.5 m下に腰曲輪を設け、それらを繋ぐ通路が良く残る。東の曲輪への通路は、主郭の端を溝状に掘削し虎口とし、南→東→北へと二度屈曲する。また、北の曲輪への西側の通路も、主郭端部を溝状に掘削し、一度屈曲する。山塊に繋がる主郭の南西側斜面には大きな堀切を掘削している。深さは約 5 mで、堀底と主郭の土塁上面との比高は約 8 mを測る。



第 196 図　原砦跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　玉島から富の峠を越えて横谷に抜ける街道に位置し、『岡山県遺跡地図　第四分冊　井笠編』では、猿懸城の砦と伝えられているとする。（物部）

227　猿掛（さるかけ）城跡　　小田郡矢掛町横谷・倉敷市真備町妹　＜町・市指定史跡＞　地図 26 左

立地　標高 300 m級の山塊から北方向に派生した、標高約 240 mの尾根先端頂部に位置する。東西に流れる小田川が両脇の山々によって最も狭くなった付近の南側端に当たり、現在倉敷市と矢掛町の境となる。かつても郡・村境であったようで、近世以降に築かれた思われる石塁が頂部中央を縦断する。突き出た尾根上にあるため、東側は倉敷市真備町、西側は矢掛町が広く見渡せる。

概要　屈曲しながらではあるが、南北方向に６つの曲輪を並べた連郭式の山城で、さらに西側に派生した尾根筋にも曲輪を２面配置し、各曲輪を帯曲輪によって結んで本城部分（Ⅰ）を構成している。主郭の背後は高さ約３mの土塁と幅約 30 m、高さ約 15 mと規模の大きい堀切によって守りを固めている。土塁と堀切の間には、放射状に竪堀が確認できただけで 11 本配されている。竪堀は、特に東西両端のものが深くしっかり造られており、その間の竪堀の基準としていたと考えられる。以上のように主郭背後の守りは、特に厳重な造りとなっている。

６つある曲輪の中でも最南端にある主郭と、主郭から数えて３面目と５・６面目は特に規模は大きい。主郭は長さ約 30 m・幅約 25 m、３面目は長さ約 70 m・幅約 40 m、５面目は長さ約 30 m・幅約 25 m、６面目は長さ約 25 m・幅約 35 mを測る。また各曲輪は方形気味に造られ、３面目には井戸状の窪みが残る。主郭の東側斜面と３面目の南側斜面には、明瞭に石垣が残る。本来はもう少ししっかりした石垣が築かれていたと思われるが、おそらく郡境に使われた石塁製作時に抜き取られたのではないか。３面目の東側と６面目の東側には、虎口が存在する。帯曲輪は主郭～３面目の両側と、４～６面目の北側から東側にかけて巡っている。また３面目と４面目の間の切岸が約４mと他の箇所より高く、虎口の位置なども考えると、主郭～３面目と４面目～６面目が分けて使用されていた可能性がある。これらの曲輪群は、広く方形を呈することから、かつては館が建てられていたことが彷彿させる。

この本城部分から北東側に派生した尾根筋には、「太夫丸」（Ⅱ）と呼ばれる曲輪群がある。背後を土塁と竪堀で守りを固め、前面には石列のある曲輪と長さ約 30 m・幅約 20 mの曲輪が連なる。さらに尾根先端方向と側面にも曲輪を配している。側面部分の曲輪には井戸状の窪みがあり、北東方向の曲輪の先には、６本の竪堀が築かれている。

本城北西方向に派生した尾根筋には、「寺丸」（Ⅲ）と呼ばれる曲輪群がある。各曲輪は小さいが、先端部分の曲輪は長さ約 10 m・幅約 20 mの規模があり、石列によって画されている。

猿掛城は、本城だけでも全長が約 250 m、「太夫丸」「寺丸」を含めると約 440 mにもなる大型の山城である。連郭式に曲輪を並べ背後の守りを厳重にする特徴は、中世山城の典型とも言える。また各曲輪は大きく方形で、その斜面は石垣や高い切岸を配するなど、しっかりした建物を築くことを前提とした造りでもあったと考えられる。軍事的な側面だけはなく、同時に政務を行うための山城であったことが想定される。

文献・伝承　『太平記』にその名が登場しているが、戦国期に代々備中守護代であった庄氏の本城として使われる。1492（延徳４）年と 1494（明応３）年、元資の時、備中守護である細川勝久と対立し、一時失脚するも再び細川管領家の力を背景に返り咲く。「寺丸」には、この時庄氏方として戦い死去した香西氏の供養位牌堂があったとされる。庄氏は為資の頃尼子氏に与していたため、天文21（1552）

年に毛利氏の力を借りた備中有力国人の三村氏に攻撃される。一度は退けたものの、永禄２（1559）年再度の攻撃の際に三村氏の長男を養子に迎えることで和睦する。本城には三村氏が入り、為資は「太夫丸」に移ったとされる。『備中兵乱記』には、1574 年毛利氏から攻撃を受けてこれに下り、乱後に毛利元就の四男元清が入ったとする。1582 年羽柴秀吉による備中高松城水攻めの際には、毛利家当主の輝元が本陣とする。『萩藩閥閲録』には、この時輝元が清水宗治の子息に出した感状が残っている。1584 年毛利氏と秀吉との国分けにより、高梁川以西が毛利領と定められると、元清は本城より少し西側で比高差の低い茶臼山城へ本拠を移す。本城は、その後も関ヶ原戦ごろまで維持されたようである。（小林）

写真 91　遠景（西から）

写真 92　主郭南側の土塁（北東から）

写真 93　主郭から３段目の曲輪（南東から）

写真 94　主郭東斜面の石垣（北西から）

写真 95　主郭南側の堀切（東から）

写真 96　「寺丸」先端の曲輪（南西から）

第 197 図　猿掛城跡縄張り図（1/2,000）

229　折敷山（おしきやま）城跡　　笠岡市走出　　地図 25 左

立地　笠岡市西浜泊から矢掛町へ至る往還が旧山陽道に合流する地点を北東に望むこの城は、標高 85 mの南頂と標高 65 mの北頂が低い鞍部で繋がっている独立丘陵上に立地する。この丘陵裾には、小田川に合流する井立川と浅香川が流走している。

概要　北頂は、通称「本丸」・「西の丸」・「北の丸」で構成されている。「本丸」に所在する曲輪Ⅰは、約 50 × 40 mの多角形を呈し、西半縁辺に野面積みを基本とした高さ 50cm 前後の石積みが築かれている。この石積みの前面には幅２m前後のテラス面があり、そのテラス面縁辺からの高い切岸で守りを固めている。曲輪Ⅰ南辺の一部には、下半が崩落していると思われる高さ約 30cm を測る石積みが残存していた。南に延びる尾根筋には、長さ約 50 mを測る長大な曲輪が２面築かれている。切通し道や畑地造成によって改変を受けた堀切１西側には、約 50 × 25 mの規模である曲輪Ⅱを頂部に築き、この曲輪を取り巻くように幾面もの曲輪を配した「西の丸」が所在する。これらの曲輪は高い切岸を備えており、最大のものは約７mの高さがある。傾斜が緩い「西の丸」南西斜面には、５本の竪堀と、それに接する曲輪で敵の侵入を防ぐ。なお、曲輪Ⅱ南辺西半の屈曲は、曲輪Ⅱ下方から開削されている竪堀と一体化した横矢掛かりを意識したものかもしれない。「北の丸」にある曲輪Ⅳは、造成が甘く内部に自然地形を残すものの、その切岸は非常に高い。南頂の北東に延びる尾根筋には、２か所の平坦地が認められた。南側の平坦地は「弓場」、北側の平坦地は「的場」と云うと伝えられている。

文献・伝承　『古戦場備中府志』には、走出村の「尾鋪山城」として、別名「有江山」・「有岡山」とも言い、天文・弘治の頃に有岡新之丞、永禄９年より小田政清が領し、文禄４年より毛利家蔵入、慶長３年より毛利元康、慶長５年から代官が置かれ、慶長８年から楢村監物が領すと記す。　（小嶋）

写真 97　遠景（北西から）

写真 98　曲輪Ⅰ石積み（南から）

写真 99　曲輪Ⅱ切岸（東から）

第 198 図　折敷山城跡縄張り図（1/2,000）

230　滝山（たきやま）城跡　　井原市大江町　　地図 28 左

立地　広島県との境に所在するこの城は、北に向かって張り出した尾根の先端頂部に立地し、芦田川に注ぎ込む高屋川が形成した平野を眼下に一望する。この平野を挟んだ北側の山塊には、小見山城跡や高屋城跡が所在する。

概要　城は、西側を採石によって、主郭部分を果樹園等によって改変を受けている。比高約 70 mの頂部に①曲輪を構え、主郭としている。この曲輪の南辺から南西辺には、復元高約２mで野面積みのｂ石垣が築かれているが、その他の縁辺は高さ２m程度の切岸となっている。石垣に使用されている石の大きさは、基底石で１m～ 50㎝大、それ以外で 40 ～ 30㎝大を測る。主郭北辺には、高さ約 50cm の土塁が残存していた。①曲輪東側には、高さ約２mの切岸をもつ②曲輪を設ける。尾根続きとなる②曲輪以東は緩やかに下がって鞍部へと至るが、この鞍部周辺に堀切等の防御施設は認められない。主郭から南に下る尾根筋には、城館関連遺構かどうか判然としない平坦面や加工段が幾面も所在している。

文献・伝承　『井原市史』には、滝山城のもっとも古い伝承として『西備名区』に記載された「明応元（1491）年宮三郎義兼が山野村（現福山市）戸谷が丸城から御領村瀧山城へ移った」という文章を紹介して備後の宮氏との関連を示唆し、さらに『大江村明細帳』に「字瀧山　一　古城跡壱ヶ所　天文年中宍戸孫六居城之由」と毛利氏の姻戚宍戸氏が在城したことを記していると記載する。　（小嶋）

第 199 図　滝山城跡縄張り図（1/2,000）作図：尾崎　聡
『井原市史Ⅰ』より引用

写真 100　遠景（東から）

231　工ヶ城跡（たくみが）　　井原市下稲木町・上稲木町　　＜市指定史跡＞　地図 28 右

立地　稲木川西岸の、東へ延びる尾根先端部に立地する。旧山陽道筋から南方へ通じる谷筋に位置する。稲木川上・下流域を見通せる。

概要　尾根先端高所に造られた曲輪（主郭）は方形を呈し、主郭の西辺中央に直径約２ｍ、高さ約１ｍの塚状の高まりを残している。主郭の西側下に曲輪１面を設け、主郭との比高は約２ｍを測る。主郭の北～東～南側下方に帯曲輪を配しているが、東側は幅が狭く犬走り状となっている。主郭との比高は約４ｍを測る。南に下がる尾根筋には、さらに３面の腰曲輪を設ける。これらの曲輪上面は水平

第 200 図　工ヶ城跡縄張り図（1/2,000）作図：尾崎　聡　『井原市史Ⅰ』より引用

ではなく傾斜を残している。また、各曲輪の周縁部のやや下がった位置に浅い溝と土手が巡っているが、畑の畦と推定される。また、各曲輪の切岸直下にも深さ 50㎝前後の溝があり、その溝は犬走りの部分では深さが 80㎝にもなるが、これも耕作に伴う排水用の溝と推定される。主郭西にある曲輪の西端は直線的に切り落とされ、高さ約３ｍの切岸となっている。切岸の西に約 1.5 ｍの間隔を開けて、高さ約１ｍの土塁を切岸と平行に築いており、この部分は堀切状を呈する。土塁以西はなだらかな尾根筋が約 160 ｍ延びている。その尾根筋の北縁の若干下がった位置に、溝と土手が尾根筋に沿って長く延びている。内側の溝は幅約 1.5 ｍ、深さ 50 ～ 80㎝、外側の土手の規模は幅約 1.5 ｍ、高さ約 50㎝を測る。溝の西端部は南に湾曲して自然と無くなっているが、そこに直径約１ｍの井戸もしくは水溜を掘削している。この溝・土手の東半部では、その内側にさらに溝・土手があり、二重になっている。内側の溝は幅約１ｍ、深さ約 30㎝、土手は幅約１ｍ、高さ約 30㎝で、外側に比べ規模がやや小さい。また、西尾根西半の南へ下がった斜面にも同様に小規模な溝と土手が確認された。西尾根西半の南斜面には、高さ１ｍ前後の切岸状段差が数段認められる。これら西尾根の遺構について、『井原市史』では、規模の大きい溝を塹壕、土手を土塁、段差を切岸と捉え、かなりの人員が野営できる陣地と捉えている。昭和 36 年撮影の空中写真を見ると、西尾根の遺構のある範囲がちょうど畑地として開墾されている事から、少なくとも規模の小さい溝と土手、井戸（水溜）は畑に伴うものの可能性が高いと思われるが、南斜面の切岸や、北縁の規模の大きい溝・土手が城館関連遺構を反映している可能性はある。詳細不明である。

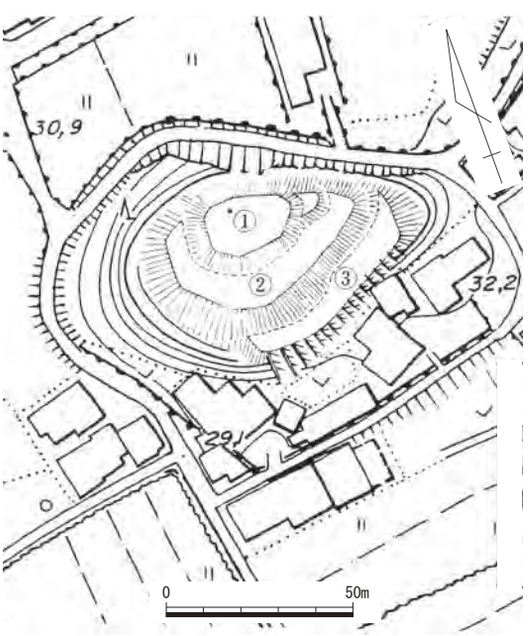
文献・伝承　『井原市史』は、近世地誌などによると、『太平記』に城主として陶山八郎吉次の名が伝えられているとする。　（物部）

232　すくも山（やま）城跡　　井原市大江町　　地図 28 右

立地　北東方向から南西方向に流れていた高屋川が、西方向に向けて屈曲する地点の南側に近接して立地する。東側から続く山塊の西端部付近で、独立丘陵状の小山が当山城となる。

概要　当山城は、標高約 40 ｍの頂部に主郭を置き、主郭を中心に腰曲輪を巡らしている。主郭の東側には小さな斜面状の曲輪を配しており、腰曲輪は主郭の南側から東側にかけて２面築かれていた。上記以外には主だった施設はなく、全長も 100 ｍ前後の小さな山城である。だが主郭や腰曲輪はある程度の規模を有しており、小型ながらまとまりのある造りとなっている。現在主郭には祠があり、また主郭の西側に当たる腰曲輪上には墓地が築かれている。

文献・伝承　城主等は不明である。『井原市史』では、備中国と備後国との境目にある滝山城の出城ではないかと記されている。　（小林）

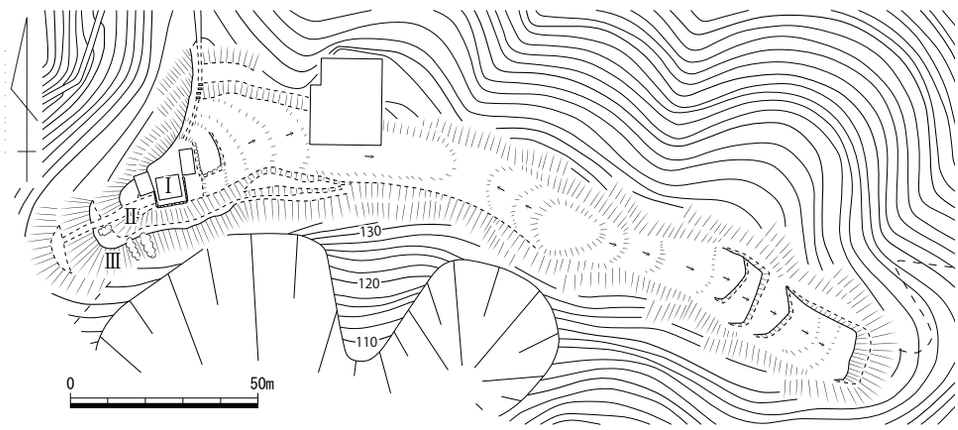


第 201 図　すくも山城跡縄張り図（1/2,000）
作図：尾崎　聡『井原市史Ⅰ』より引用

237　明知山城跡（あけちやま）　　笠岡市用之江・福山市大門町　　地図 28 右

立地　城は、福山平野の東半を眼下に一望する尾根の頂部に立地する。

概要　無線局等によって大規模に改変を受けている城である。頂部に曲輪Ⅰを配し、西側尾根筋には曲輪Ⅱ・Ⅲを設けている一方で、曲輪Ⅰから東側に延びる尾根上には明瞭な城館関連遺構が認められない。しかしながら、南斜面に幅の狭い平坦面、峰部から東に向かって下がる尾根筋に人為による段差が認められる。なお、境界土塁と思われる土塁が尾根上に築かれている。



第 202 図　明智山城跡縄張り図（1/2,000）

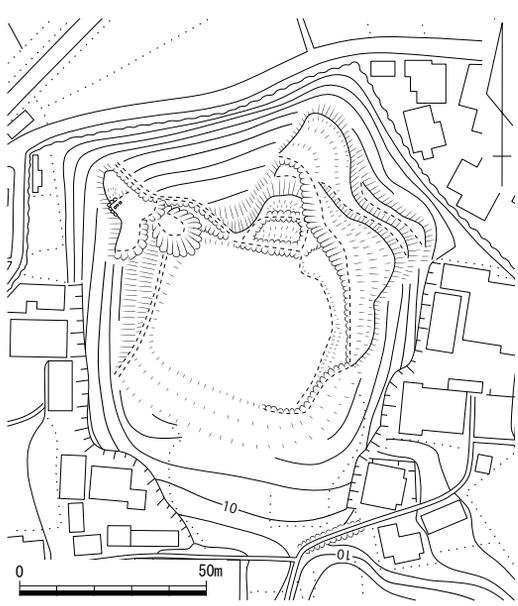
文献・伝承　近世地誌類などに記載がなく、城主や築城時期などは不明である。　（小嶋）

239　大橋山城跡（おおはしやま）　　笠岡市大宜　　地図 28 右

立地　金浦の港から西約２㎞、低丘陵尾根先端の高所に立地する。標高 20 ｍを測る。

概要　丘陵全体が畑地として開墾され、地形改変が大きい。頂部には 50 × 40 ｍの方形を呈する広く平坦な畑地がある。その北縁に北へ延びる小さな張り出しがあるが、開墾のため詳細不明である。畑地の西～北～東側は、切岸状の崖となっている。北東斜面下方に見られる段は畑地の造成に伴う可能性が高い。南側の斜面はなだらかで、切岸等認められない。南方の尾根鞍部には、尾根を深さ１～１．５ｍで切断した生活道が付設されているが、堀切かどうか判断できない。

詳細不明ながら、北に張り出しと、西～北～東に高い切岸をもつ単郭の城館と考えられる。小字「城山」､東の低地「前田」その南の丘陵が「馬場」「要害」､南西側に「堀」の地名が残る。



第 203 図　大橋山城跡縄張り図（1/2,000）

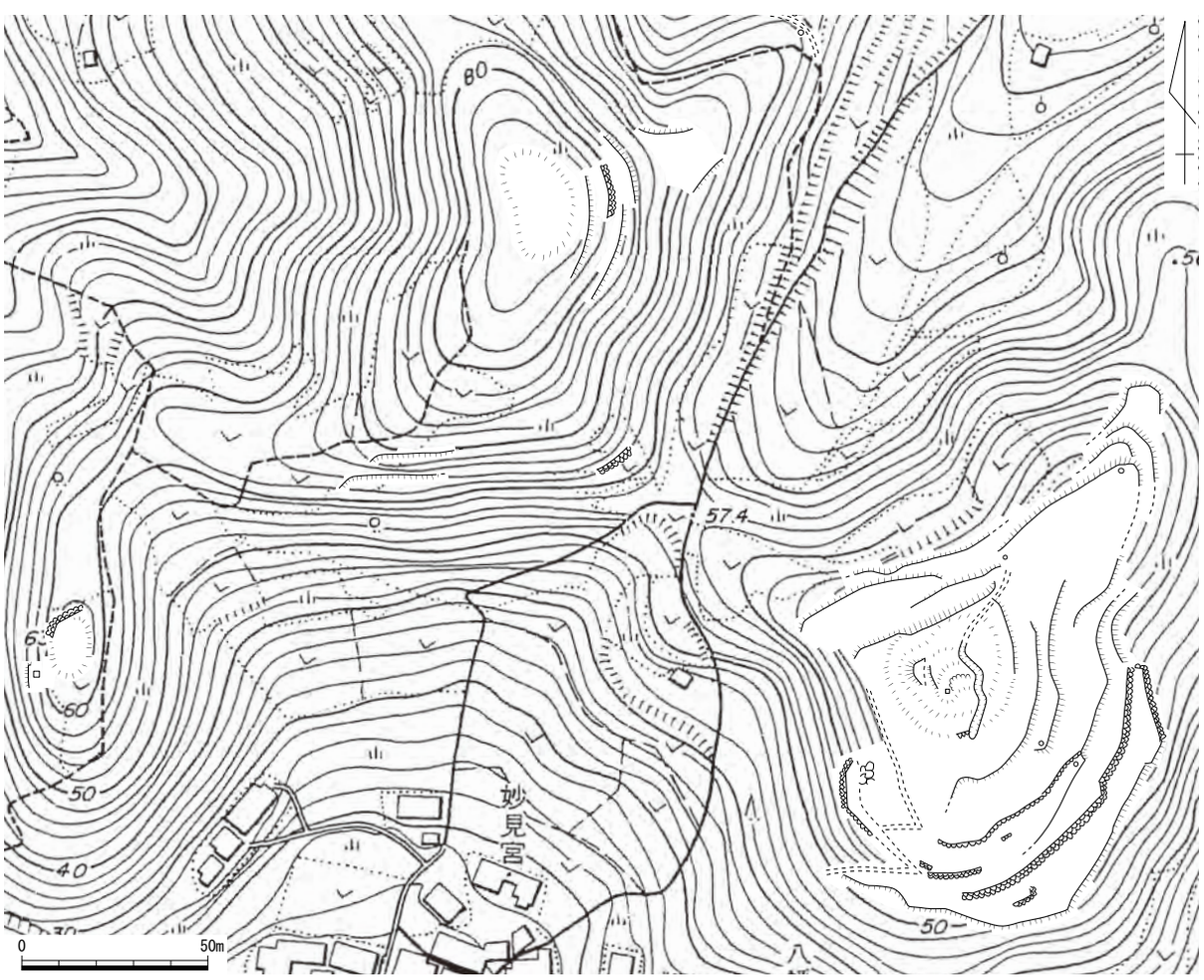
文献・伝承　『笠岡市史』は、『備中誌』に城主高田河内守正重、『備後太平記』に小田郡大宜村大橋山城主高田豊後守の後裔重近入道常閑等の名が見えるとする。　（物部）

240　西浜城跡（ようすな）　　笠岡市金浦　　地図 28 右

立地　金浦の集落背後の山塊の山頂部一帯に立地するとされ、標高 87 mの最高所を中心に、南東に標高 80 mの高所、南西に標高 63 mの高所があり、集落から見上げると、3つの高所が並んで見える。南方の笠岡湾を眺望できる。

概要　部分的な状況ではあるが、山塊各所に高さ 0.5 ～ 4 mの石垣や段差が認められる。特に南東高所の南斜面に多く、長さ 100 mを越えるものや、小さく折れ曲がる石垣もある。段差・石垣の上方・下方とも傾斜面で、平坦面はほとんど無い。かつて山全体が開墾されており、これらの段差や石垣も開墾に伴うものと判断される。南西高所には祠が祀られ、その背後に高さ 1 ～ 1.5 mの石垣が築かれている。また、南東高所にも祠が祀られ、その周辺に浅い掘削や、小さな平坦面の造成が認められるが、いずれも明確な城郭関連遺構とは断定できない。中央最高所の南山麓に「妙見宮」があり、同じ敷地に観音堂と井戸がある。

文献・伝承　『在田軒道貞（吉岡信元）著作全集』収載『備中小田物語』は「陶山の城」は金崎の北、西浜の上にあり、その山は三つの峰があり鉄輪のごとくしてすあまの形に似ている。現在のいおすなの町の上にあるのが昔の陶山の城というとする。　（物部）

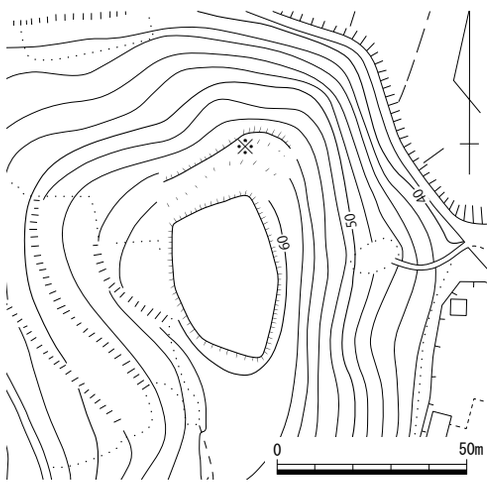


第 204 図　西浜城跡現状図（1/2,000）

241　政所山城跡（まどころやま）　　笠岡市新賀　　地図 29 左

立地　北流する尾坂川の西岸、北へ延びる舌状の尾根先端部に立地する。尾坂川を挟んで東約 400 mの丘陵に諏訪山城跡がある。

概要　高所は 40 × 25 m程の広い平坦地で、周囲は高さ 1 ～ 1.5 mの切岸状を呈する段差がある。高所平坦地の西から北にかけては広い緩傾斜地で、低い段も見られるが、ほぼ全山畑地として開墾されているため、曲輪の形状を残しているものか判別できない。ただし、地元では、高所から 1 段下がった北東の畑地（図中※印）で刀が多数出土したと伝え、尾根筋から西側の谷に「城平」の地名が残る。県道を越えた南方の尾根筋には、「地蔵峠」と呼ばれる切り通しの旧道とその南に土塁や石垣のある平坦地群を確認したが、「妙見宮」の鳥居等あり、神社・畑に関するものと考える。



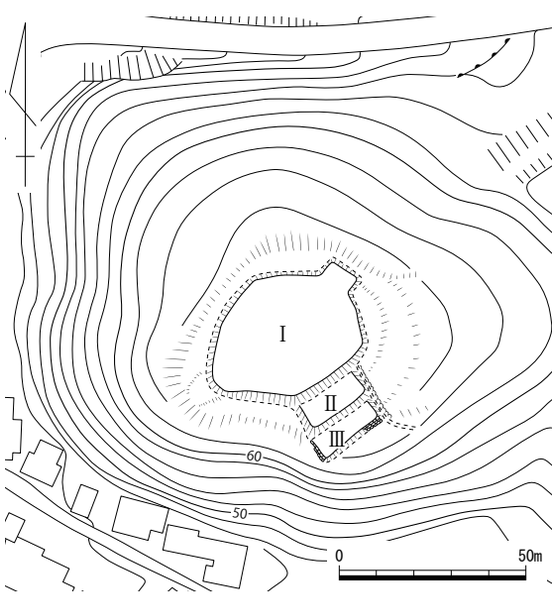
第 205 図　政所山城跡現状図（1/2,000）

文献・伝承　『備中小田物語』は、この城山を河原田山、政所山、長畝の城山ともいい、街道より西、小川の崎で、新賀・山口両村境とし、笠岡の村上氏と小田氏の戦の時に築城したとする。また、有岡右京がこの城に住し、新賀を領有したとする。　（物部）

242　諏訪山城跡（すわやま）　　笠岡市山口　　地図 29 左

立地　尾坂川が形成した南北に長い平野の中央部には、地峡を呈するように東と西から尾根が突き出している。このうち、東側の尾根の先端頂部に諏訪山城跡は所在し、相対する西側尾根の先端部には政所山城跡が築かれている。

概要　頂部に曲輪Ⅰを配し、そこから南東に張り出す小尾根上に曲輪を２面構えたのみの城で、いずれも畑地造成等により大規模に改変を受けている。曲輪Ⅰの北東部には、方形の突出部が認められるが、往時のものか判然としない。曲輪Ⅱ・Ⅲは、畑地拡張のため山側を削り、その排土を谷側に押し出して長方形に改変されたと想定される。曲輪Ⅲの南西・南東辺には、その際に築かれたと思われる石積みが認められる。



第 206 図　諏訪山城跡縄張り図（1/2,000）

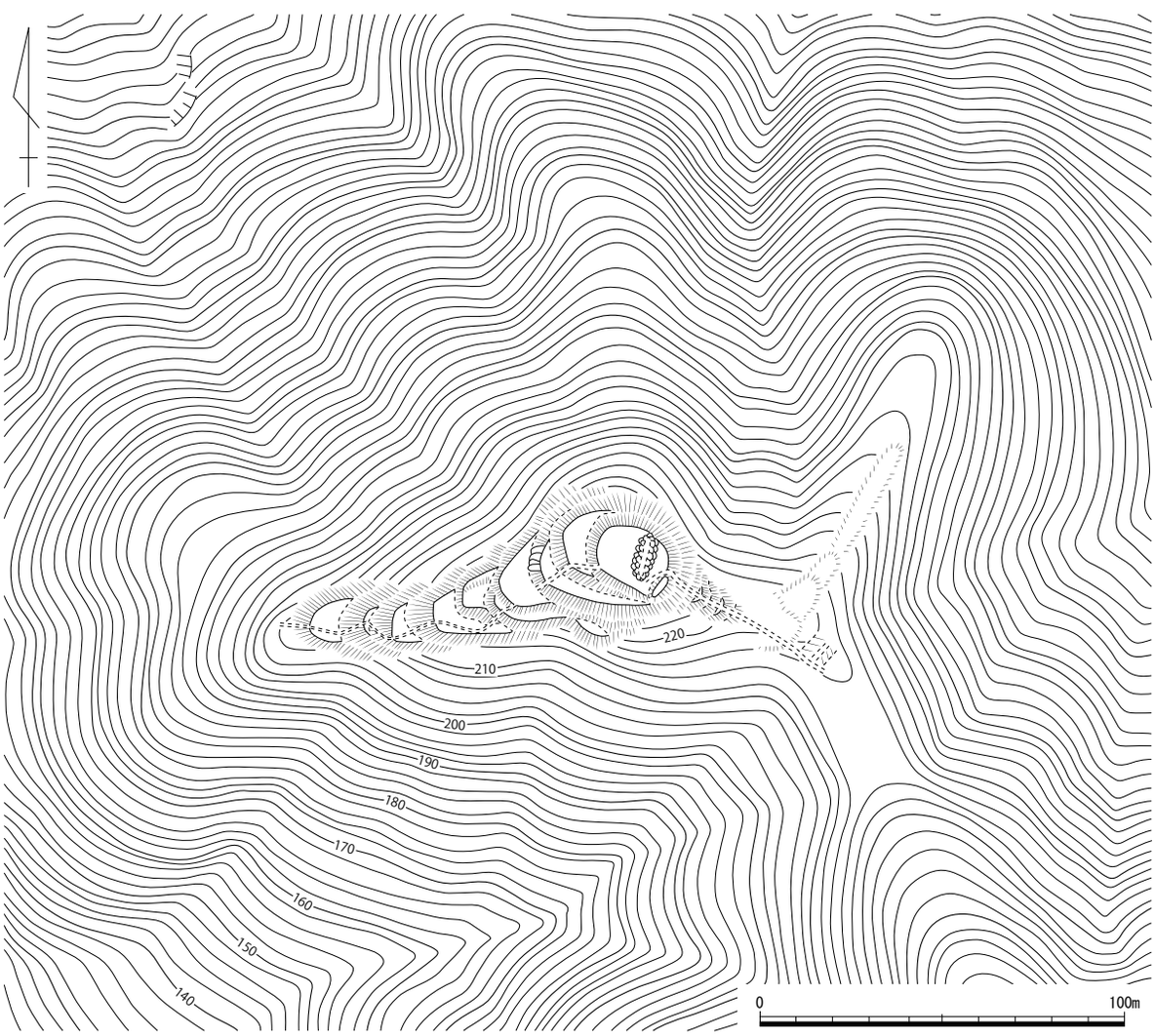
文献・伝承　元文２（1737）年の山口村古地図には、「大間（だあま）古城」と書かれている。『笠岡市史』には、村上氏と小田氏の争いに際して、馬鞍山城の支城として小田氏が築いたと記す。　（小嶋）

243　馬鞍山城跡（まくらやま）　　笠岡市山口　　地図 29 左

立地　南北に流れる尾坂川の東側にそびえる標高 260 m級の龍王山の山塊から北側に派生した尾根先端頂部に位置する。頂部からは、現在の笠岡市街地から小田郡矢掛町に抜ける道筋を見下ろせる絶好の眺望である。

概要　頂部の主郭から西側に派生する尾根先端部分に向けて曲輪を連ね、東側の尾根鞍部に堀切状の施設を配した全長約 140 mの山城である。主郭背後には、現存高 1 mほどの土塁と石塁を喰い違いのように配置し防御を固めていた。尾根筋に連ねた曲輪は 9 面ほどを数えるが、切岸が曖昧であり平坦面も斜面状になる箇所があるなど不明瞭なものが多い。各曲輪の長さは、5 ～ 10 mぐらいの規模である。主郭部分の南側斜面は、腰曲輪状に平坦面が 2 面ほど存在する。主郭の東側も不明瞭な施設が多く、堀切もはっきりとしていない。

文献・伝承　『備中村鑑』では、山口村にあり城主小田治部太夫とある。小田氏は、毛利氏が備中地域を把握すると毛利氏に属し、朝鮮にも出兵した。　（小林）



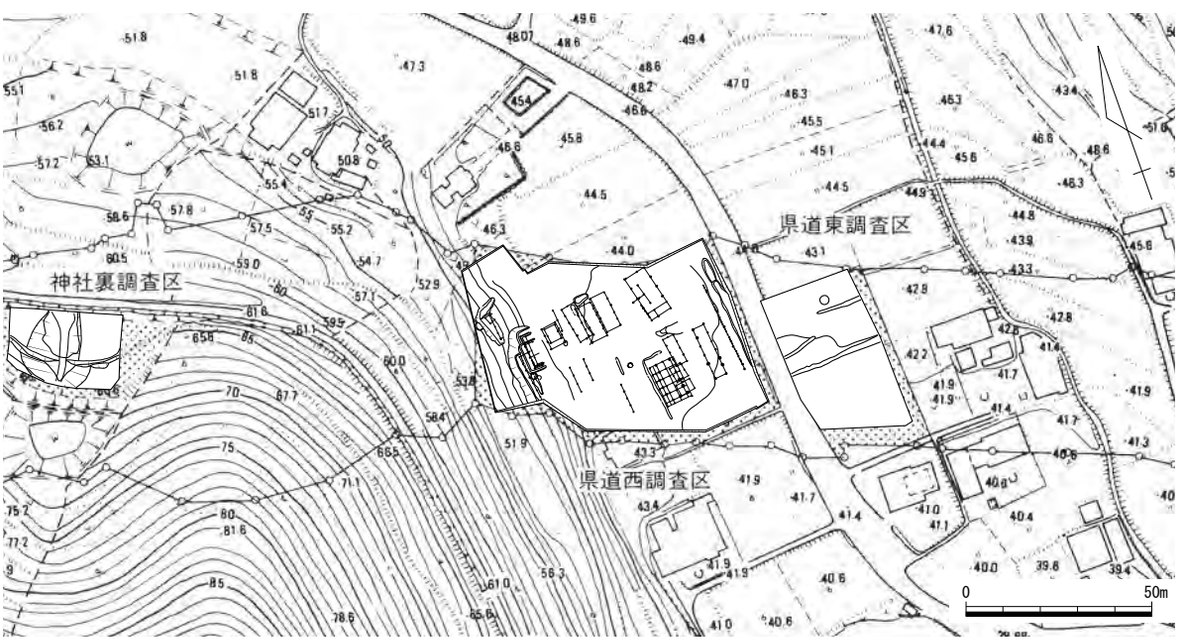
第 207 図　馬鞍山城跡縄張り図（1/2,000）

246　園井土井（そのいどい）遺跡　　笠岡市園井　　地図 29 左

立地　今立川の上流、谷奥の山裾に立地する。

概要　1984・85 年度に山陽自動車道建設に伴って岡山県教育委員会が発掘調査を行った。「県道西調査区」の東部で、南北に 25 m以上直線的に延びる柵の痕跡や、その東側に平行する長さ 30 m以上、幅 2.5 m以上、深さ 50㎝以上の堀跡が発見された。また、堀跡と山裾の間に、約 11 × 7 mの礎石建物を含む 17 棟の建物跡が見つかった。柱穴列や礎石列も確認され、建物の実数はさらに多かったと考えられるが、これらの建物は重なりもあることから全てが同時期に存在したわけではない。遺構の検出状況などから、一辺約 60 m四方の館と想定される。出土遺物は土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・備前焼・貿易陶磁器・土錘・硯・碁石・釘・金具・古銭などがあり、その特徴から館の中心時期は 15 世紀後半から 16 世紀前半と推定されている。

文献・伝承　当該地の小字は「土井」、県道東側は「馬場」である。　（物部）



第 208 図　園井土井遺跡遺構配置図（1/2,000）　文献 172 に加筆

写真 101　堀・柵・建物（北から）

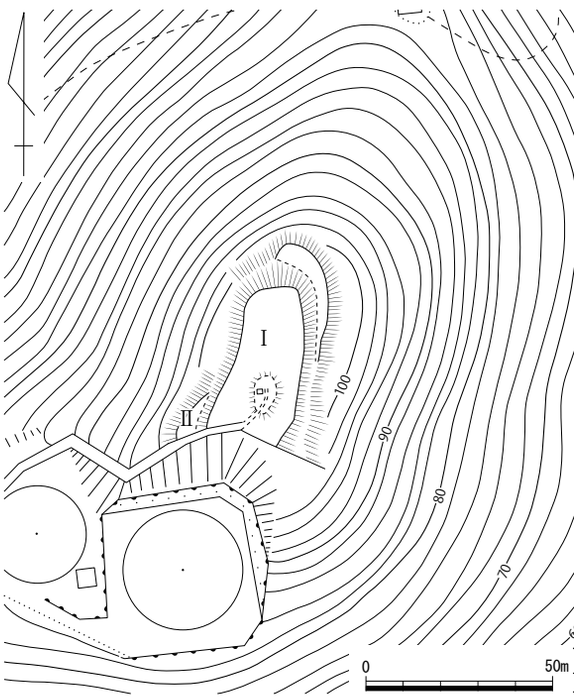
写真 102　建物群（西から）

247　園井（そのい）城跡　　笠岡市園井　　地図 29 左

立地　城は、逆「L」字を呈する尾根筋をもつ独立丘陵頂部に立地する。城山と呼ばれているこの丘陵は、笠岡湾に注ぎ込む吉田川や今立川の上流部にあたり、今立川沿いに約 3 km 南下すると広浜城跡が所在する。

概要　城は、高さ約 1.5 mの切岸を設けている曲輪Ⅰを頂部に配して主郭とし、北側と西側に腰曲輪を構える。曲輪Ⅰ・Ⅱの南側は、配水池によって大規模に削平を受ける。曲輪Ⅰの中央やや南側には、碑の基礎が残存している高さ 1 m弱の土壇状の高まりが認められる。

文献・伝承　近世地誌類や軍記物などにも記載がない城で、城主や築城・廃城時期などは伝わっていない。なお、配水池が造られた場所には、かつて 20 ～ 30 mの長さの土塁が築かれた平坦面が存在していたと伝えられている。　（小嶋）



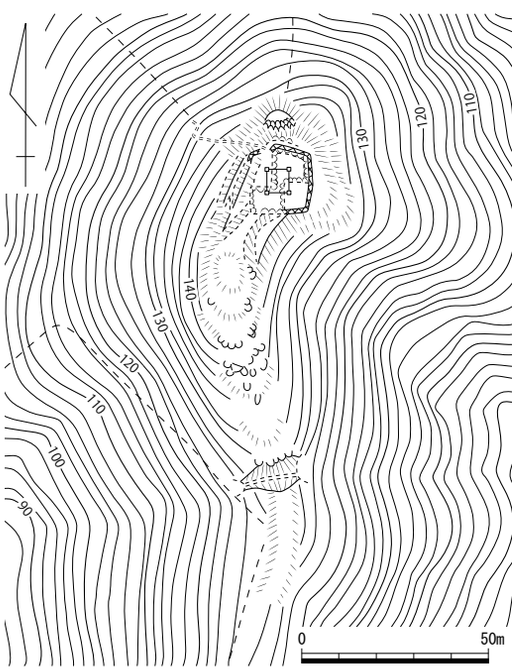
第 209 図　園井城跡縄張り図（1/2,000）

248　鳶（とび）の子（こ）城跡　　笠岡市笠岡・園井　　地図 29 左

立地　現笠岡市街地の北側にある加入堂山の北隣に位置する山塊頂部に立地する。笠岡・園井の字境に当たり、北は園井城跡や園井土井遺跡、南は笠岡市街地・笠岡山城跡や青佐山城跡、また備後の鞆の浦まで望める絶好の眺望である。

概要　頂部は 20 m前後の広さを持っていたと思われるが、現在は鉄塔が建っており、主郭はほぼ現存していない。この鉄塔の南側に平坦面が続いており、曲輪と思われる。主郭の東西両脇には、腰曲輪が 1 面ずつ築かれる。また北側は 3 mほどの露岩が切り立った先に、小さな曲輪が 1 面存在する。主郭の南側は曲輪の先に露岩の露出による自然地形で、尾根鞍部付近に堀切が築かれ城域を画していた。

文献・伝承　『笠岡市史』には、建武年間に陶山氏もしくは、小見山左衛門などが築城したと記される。また宗雲入道とも言われる。　（小林）



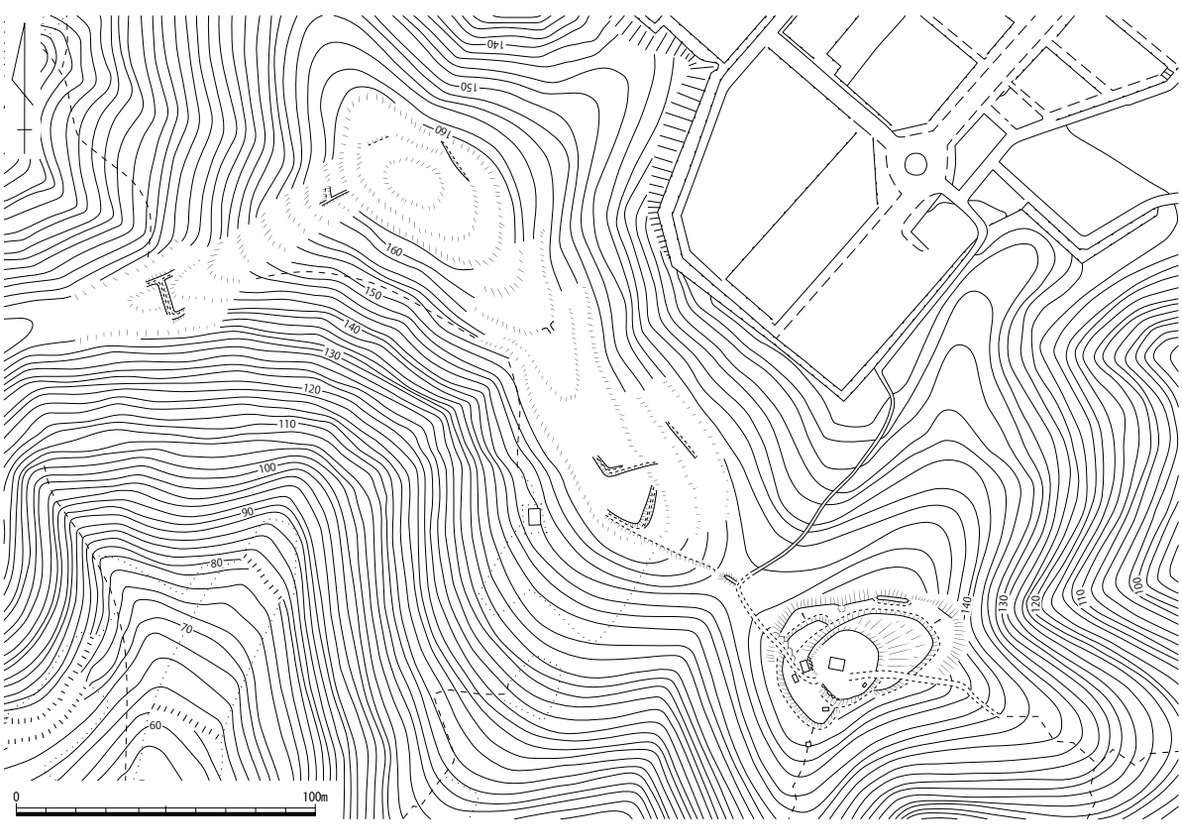
第 210 図　鳶の子城跡縄張り図（1/2,000）

249　笠岡山城跡（かさおかやま）　　笠岡市笠岡・金浦　　地図 29 左

立地　笠岡干拓地に近接する標高 170 m級の竜王山山塊一帯が山城の範囲とされる。この山塊の東側眼下には現笠岡市街地があり、当時は笠岡城や瀬戸内海を見渡せる絶好の眺望であったと思われる。

概要　竜王山頂部は自然地形に近い傾斜が今も残り、切岸状の施設が一部に見られる。鞍部に堀切状の窪みも見られるが、判然としないものが多い。この山塊の中でも、最も顕著に山城跡が残るのは、頂部から東に延びる尾根先端である。この地点の頂部に主郭を置き、帯曲輪状の施設を２～３面に巡らしていた。主郭は 25 m程度の規模を持ち、現在「八大竜王善社」の境内となっている。主郭東側は 20 m幅を比高差２mで緩やかに下り切岸に至っていた。主郭西側に腰曲輪を築き、さらにその下段は主郭の東側～北側～西側にかけて帯曲輪が巡っていた。この東端部の主郭部分のみが山城であった場合、全長 70 × 50 mほどの小さな規模になる。なお主郭の北東側方向に伸びる尾根線を遮断するように土塁が存在する。しかしこの土塁は、尾根線に平行する形でほぼ直角に屈折して下方に伸びている。竜王山山塊一帯に延びている土塁との関連性があるかもしれない。竜王山頂部から東側にかけて平坦面が若干存在する。また山頂の南西側にかけて、笠岡山城と同等の標高になる尾根頂部が４つ続く。これらの頂部にも平坦面と多少の切岸状遺構が存在するものの判然としないものが多い。なおこれらの尾根線上にも、土塁が延々と続くことが確認できた。

文献・伝承　『備中村鑑』では笠岡村にあり城主陶山藤三義高と言われる。付近には、義高の菩提寺と伝えられる威徳寺が存在する。　（小林）



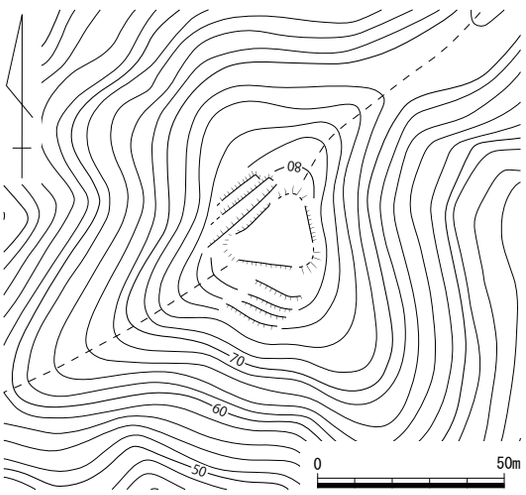
第 211 図　笠岡山城跡縄張り図（1/2,500）

250　広浜（ひろはま）城跡　　笠岡市広浜・浅口郡里庄町新庄　　地図 29 左

立地　今立川に新庄川が合流する地点に形成された小平野を見下ろす標高 80 mの山塊の山頂尾に立地する。尾根筋は里庄町との境界であり、小田郡と浅口郡の境でもある。北西に今立川流域の広浜の平野を見下ろし、南東に新庄川流域の新庄平野を望み、南西に富岡の港を見渡せる。

概要　幅 1 m程の細尾根が続き、その尾根筋には小さな高所が 5 か所連続する。先端部の最高所に 1 辺約 20 mの三角形を呈する平坦地が認められ、人為的に加工したものと考えられる。その周囲の斜面に約 50㎝の段が 5 段以上巡る。これらの平坦地や段は、畑・果樹園等の開墾の跡と考えられる。明確な城館関連遺構は未確認であるが、高所平坦面は曲輪を利用した可能性はある。尾根筋から北斜面にかけて「城山」の小字名が残る。

文献・伝承　『笠岡市史』は、『萩藩閥閲録』に収載された文書に、天文 21（1552）年小早川隆景が、家臣小寺十郎左衞門尉に広浜の畠 2 町 7 反を与えたと記されているとする。（物部）



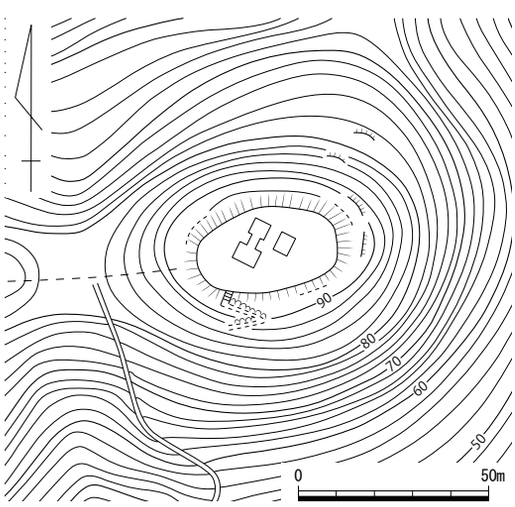
第 212 図　広浜城跡現状図（1/2,000）

253　小見山（こみやま）城跡　　笠岡市神島　　地図 32 左

立地　神島の北端に位置する七面山山頂部に立地する。現在は干拓地に取り込まれているが、以前は南の神島と地続きで海に突出した独立丘陵である。海峡を挟んで東に横島、北に片島が位置する。

概要　最高所は七面神社が鎮座し、敷地は 35 × 20 mの楕円形を呈する平坦地となっている。平坦地の周囲は、部分的に切岸状の高さ約 2 m の段差が見られる。この平坦地は神社の敷地造成によるものと考えられる。高所周囲の斜面に切岸状の細かな段差が認められるが、畑の開墾等に伴う可能性が高い。明確な城館関連遺構は認められないものの、七面神社の平坦地から北斜面にかけては「城ノ后」の小字名が残っている。南山裾には南東へ張り出す高台があり、その東半部に小字「中村殿土井」の地名が残り、居館等の存在した可能性が高いが、現在、神内小学校校舎とグランドとなっており、詳細不明である。高台の南端の墓地に石碑「小見山家家祖之塚」が建っている。

文献・伝承　『備中誌』は「古城」神島内浦で、城主河野三郎通治、次に小見山三郎、次に池田主殿正とする。『笠岡市史』はいずれも確証はないとする。（物部）



第 213 図　小宮山城跡現状図（1/2,000）

254　笠岡城跡（かさおか）　　笠岡市笠岡　　地図 32 左

立地　標高 210 m級の応神山から西に下った山塊先端部付近に当たり、笠岡湾と接している。かつては陸地から島状に分離する描き方をしていた絵図も存在する。現在でも、北側、東側、南側は海に接しており、東側のみ陸地と繋がっている半島状の立地である。

概要　かつては本丸・二の丸・三の丸が築かれていたようだが、現在は公園として整地されており、その存在を把握することは困難である。公園内には最高点 68 mの高まりが展望所として残されている。ここが本来長さ約 60 m、幅約 50 mの規模をもつ主郭であったと思われる。この地点から見て、北東側に長さ約 100 m、幅約 50 m、南側の長さ約 60 m、幅約 40 mの 2 つの平坦面が存在し、当時は曲輪であったと考えられ、主郭を中心に「く」字形の平面形状になる。

南側平坦地の南端部分には、長さ 10 m弱で幅約 40 mの曲輪が 1 面残されている。この曲輪のさらに先は、現在崖面になっており曲輪が先端まで連なるかどうかはわからない。北東側曲輪の先には現在稲富稲荷神社が建っており、ここまで本来は曲輪であった可能性が高い。そうすると、この稲荷神社から南側先端部分曲輪が城館範囲になり、全長 350 mを超える規模であったことが推定される。

当城の側面にあたる北西部分は、急峻な地形のため、遺構は存在しない。南東部分はやや緩やかな斜面地である。この部分には、現在段々に後世の改変が見られる。これらの段が帯曲輪を基に改変された可能性もある。また 3 段の石垣が帯曲輪状を呈して残っている。しかし石垣自体は後世のものである可能性が高く、段差のある地形が当時からのものかどうか判然としない。

いずれにしても当城は、笠岡湾内のどこからでも望める絶好の占地であり、また城館自体も大規模になることが想定されるなど、地域の代表的な城であった可能性が高い。

文献・伝承　元徳年間に陶山藤三義高によって築城と言われ、永正年間ごろまで同氏が在城したようである。大内氏が当地を支配していた時には、その配下の井上伯耆守春忠が城主であった。また弘治年間ごろから村上水軍の村上隆重が宗家の掃部のために改築し、以後同氏が慶長年間まで在城したと伝えられる。　（小林）

写真 103　遠景（西から）

写真 104　主郭付近（南西から）

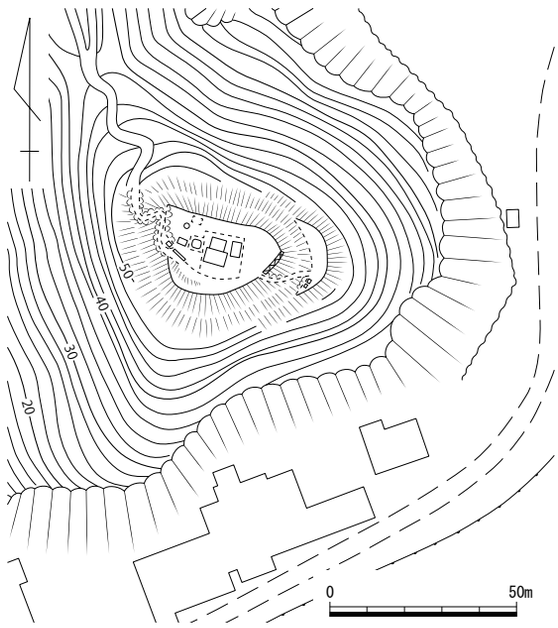
第 214 図　笠岡城跡縄張り図（1/2,000）

259　大道（おおみち）城跡　　笠岡市神島外浦　　地図 32 左

立地　標高 300 m級の栂丸山山塊から南側に派生した尾根先端部分に位置し、瀬戸内海に面した箇所に当たる。頂部からは、南側正面に高島が望めるだけではなく、笠岡諸島全体や四国までも見渡せる絶好の眺望である。頂部の主郭部分には、現在寺院が建てられている。

概要　本来は 30 × 20 m前後の主郭であったと考えられるが、寺建設時にかなり改変を受けたと考えられる。主郭の南西側に、高さ 0.5 mほどの高まりがあり、これが城館当時の地形であったのかもしれない。曲輪は主郭の東側尾根筋にある 1 面のみで、斜面の 4 mほど下った箇所に築かれていた。また主郭の尾根鞍部には、現状では堀切等を確認できない。当城はその立地条件から、見張り台のような役割ももっていたと推定する。

文献・伝承　『笠岡市史』では、村上氏配下の稲住氏の城と書かれる。　（小林）



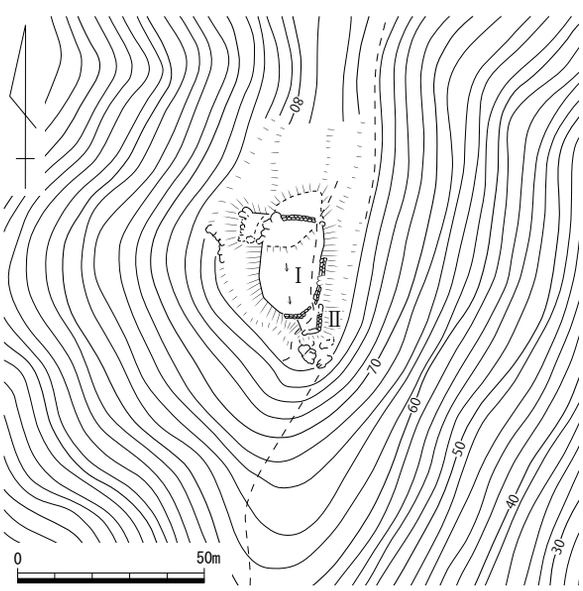
第 215 図　大道城跡縄張り図（1/2,000）

262　真鍋（まなべ）城跡　　笠岡市真鍋島　　＜市指定史跡＞　地図 33 右

立地　城は、島東端に所在する城山城跡から西へ延びる尾根筋の頂部に立地する。

概要　標高約 80 mの頂部に長方形を呈する曲輪Ⅰを設けた城で、地山中に巨石を多く含んでいるためか、曲輪内は平坦に造成しておらず、巨石が露出した自然地形が残る。この曲輪の北辺・東辺南半・南辺東半には、地山由来の巨大な自然石をそのまま取り込みつつ築いた高さ 1.5 ～ 2.5 mの石垣が残存している。西辺は地山中の巨石を露出させることで、切岸の代わりとしているようである。曲輪Ⅱ東辺北端及び南辺も石垣が築かれている。麓から続く山道が曲輪Ⅱ西辺から曲輪Ⅱ内に入り、90 度方向を変えて曲輪Ⅰ南辺東端に取り付いているが、この付近は崩落・改変が著しく往時の状況を反映しているのか判然としない。

文献・伝承　真鍋氏の城と伝わり、城山城跡の麓にはこの一族の五輪塔が所在する。　（小嶋）

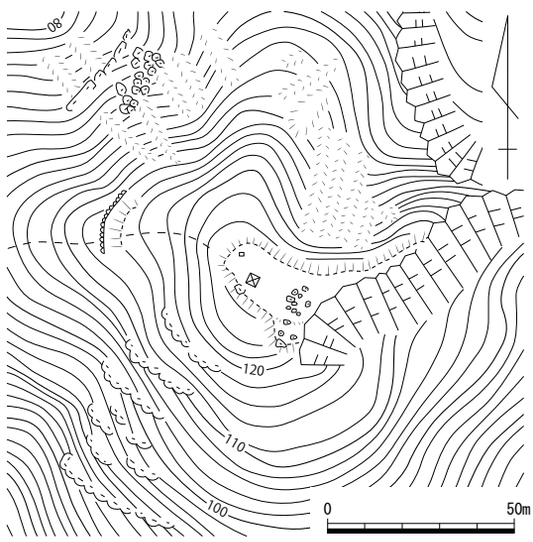


第 216 図　真鍋城跡縄張り図（1/2,000）

263　城山（しろやま）城跡　　笠岡市真鍋島　　地図 33 右

立地　真鍋島東端の山頂に立地する。南東の塩飽諸島や周囲の海域を眺望でき、西方の尾根づたいにある真鍋島城跡や真鍋島のほぼ全域を見下ろすことができる。

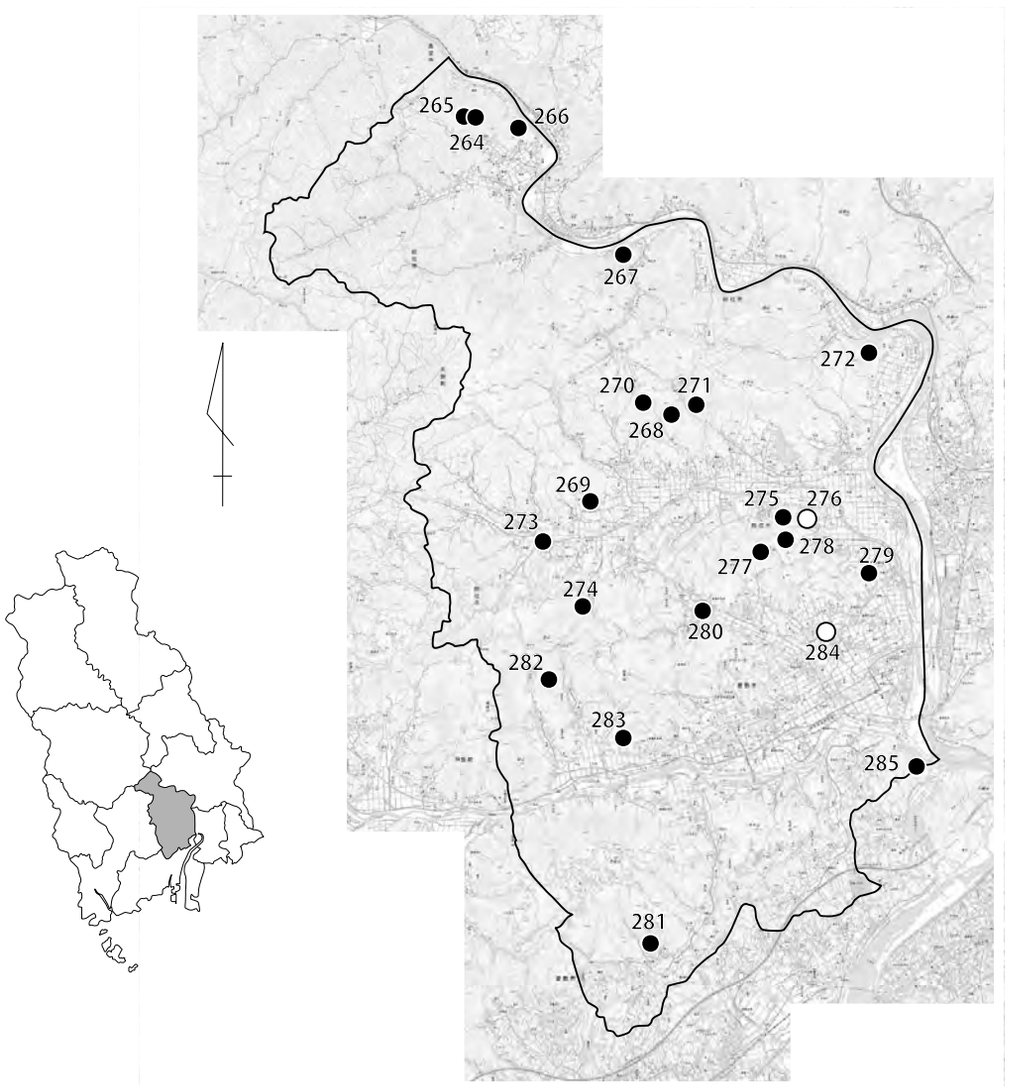
概要　頂部は露岩が点在し、平坦であるが、展望所整備による削平や風雨による浸食が考えられるため、曲輪として造成されたかどうかわからない。周囲の斜面は西尾根筋以外急傾斜で、特に東側は断崖である。この断崖は自然の崩落と推定されるが、中世当時、既に崩落していたのか、後世に崩落したのか定かでない。西尾根には割石を使用した高さ 50㎝の石垣が等高線に沿って約 20 m延びているが、畑地の開墾に伴う土留めのようである。北側斜面から北西斜面にかけて等高線に直交する竪堀状の溝が 13 条確認されたが、島内の急斜面地でも同様の溝が見られたことから、雨水による浸食溝と判断した。明確な城館関連遺構は未確認である。



第 217 図　城山城跡現状図（1/2,000）

文献・伝承　山頂部に「城山」の地名が残る。（物部）

第７節　下道郡



第 218 図　下道郡城館位置図

264. 要害山城跡
265. 三本松城跡
266. 山本城跡
267. 下倉城跡
268. 田広木城跡
269. 殿砂遺跡
270. 鬼身城跡
271. 高丸古城跡
272. 荒平山城跡
273. 市場古城跡
274. 馬首城跡
275. 襄越城跡
276. 名称未定
277. 馬入道山城跡
278. 木村山城跡
279. 夕部山城跡
280. 桜城跡
281. 陶山城跡
282. 諏訪山城跡
283. 鳥ヶ岳城跡
284. 岡田藩陣屋跡
285. 南山城跡

264　要害山城跡（ようがいやま）　265　三本松城跡（さんぼんまつ）　総社市原　地図 22 左

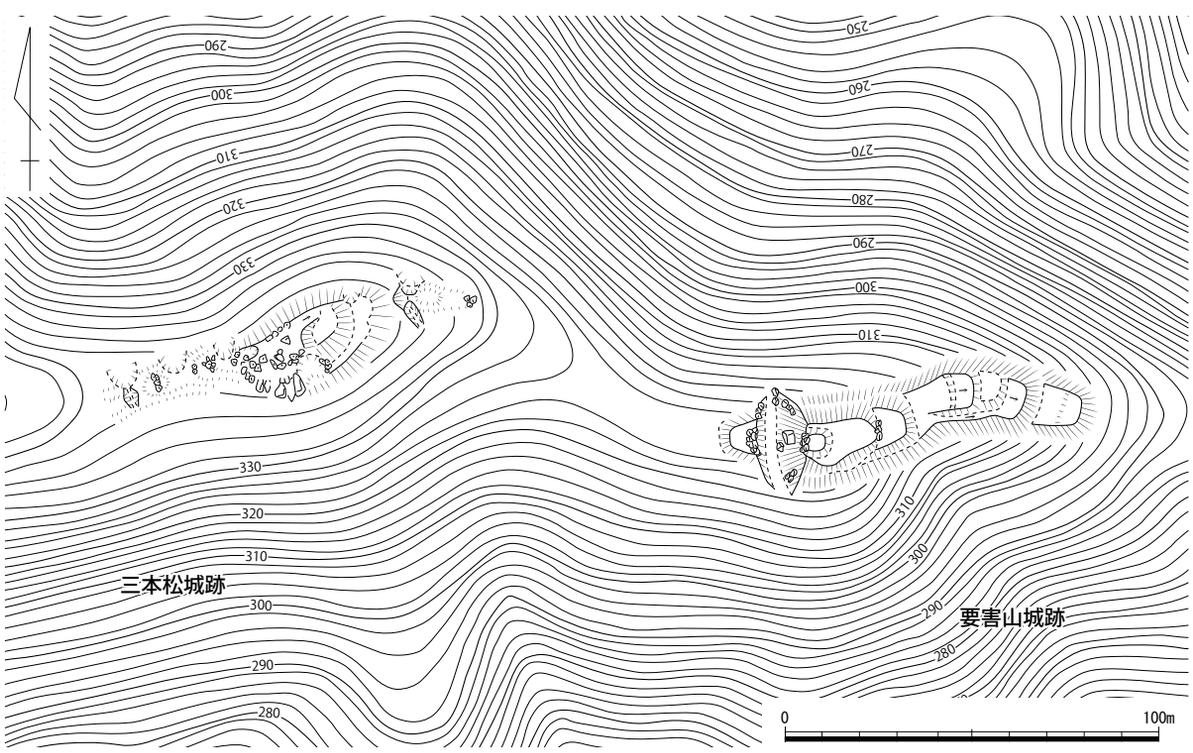
立地　高梁川右岸の総社市原地区を南東に見下ろす山塊の尾根筋上に、東西に並んで立地する城である。尾根筋を南東に下ると山本城跡に至る。

概要　近接して築かれた城であり、実際には一体で機能した可能性が高いと考えられるが、ここでは従来の扱いに従って別個の城郭として記載する。

要害山城跡は、標高約 320 mの地点に主郭を置き、西側を堀切で遮断し、東側尾根筋に 5 面の曲輪を連ねた構造である。主郭は東西約 20 m、南北約 10 mの規模で、西端には高さ 1 m強の高まりがあり、櫓台と考えられる。背面の堀切は主郭からの落差約 6 mを測り、法面に花崗岩の巨石が多数露出している。これらの巨石は周辺の地山に含まれるもので、意図的に置かれたとは考えにくい。主郭東側の曲輪群は造りがしっかりしており、西から 3 番目と 5 番目の曲輪は斜路で連結されている。

三本松城跡は要害山城跡から約 100 m西に位置する。標高約 340 mの頂部に曲輪を造成し、東西を小規模な堀切で画する構造である。曲輪は 3 段程度かと思われるが、いずれも小規模かつ不定形であり要害山城跡とは対照的である。さらに曲輪内には巨岩が多数露出し、十分な広さの平坦面は確保できない。このような特徴からみて、単独で機能する城ではなく、要害山城に対応する詰め城のような性格が想定できよう。

文献・伝承　いずれも近世地誌類には記載のない城である。『吉備郡誌』では要害山城について、山本城の西方八丁ばかりの位置にあり展望が良く、城主は不詳とする。また三本松城については、城主は不詳とした上で、山本城・要害山城と一連の尾根にあるため一族ないし一味の拠ったものか、そうであれば上田氏または山本氏一党の拠点か、と記す。　（岡本）



第 219 図　要害山城跡・三本松城跡縄張り図（1/2,000）

266　山本城跡（やまもと）　　総社市原　　地図 22 左

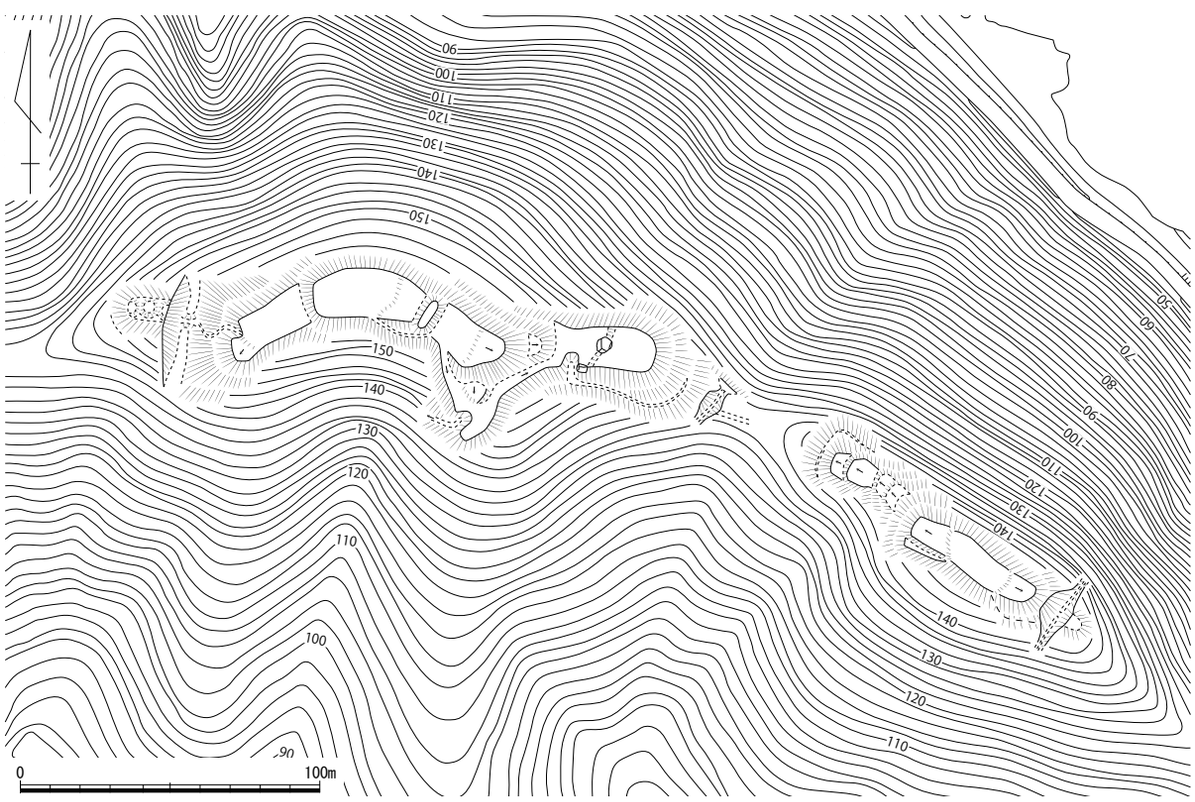
立地　高梁川の右岸に向かって北西から延びる尾根上に築かれた城で、周囲は急峻な斜面となり、北東麓は高梁川に接する。尾根続きの北西方向には要害山城跡・三本松城跡が所在する。

概要　城域は、尾根筋に沿って約 340 mにわたって曲輪を連ねた構造であり、中央の鞍部によって東西に二分されている。

西半部の曲輪群は全長約 200 mを測り、主として尾根筋に並ぶ 4 面の曲輪と、南へ突出した 1 面の曲輪から構成される。いずれも郭面はよく整地されている。西から 2 番目が主郭で、東辺には高さ 1 m強の土塁が築かれている。東西両端及び南側の曲輪には、縁辺を切り欠いて山道が取り付く箇所があり、虎口の存在を示唆するのかもしれない。東側 2 面の曲輪は、高さ約 10 mに及ぶ切岸で隔てられるが、南側の曲輪を介して斜路で連結されている。東端の曲輪の中央には花崗岩の巨岩が残置されている。曲輪群の東西両端は堀切によって遮断され、西端のものは郭面からの落差 10 m以上に及ぶ大規模なものである。なお、西端堀切の外側にある小規模な平坦面には、古墳の可能性のある小規模な円形の隆起が 3 基連なっている。

東半部の曲輪群は全長約 100 mを測り、最高所の平坦面に細長い主郭を置き、北西に向けて小規模な曲輪を 4 面連ねている。南東端には落差約 6 mの堀切を設けている。

文献・伝承　『古戦場備中府志』には水内村の「山本城」として、備中兵乱において山本左馬介らが最初「此手嶋」を守り軍功を挙げ、その後、鬼身城寄手の芸州勢はここを向城として軍を移したと記す。『備中誌』には、三村元親の臣、山本左馬介兼一が在城し、天正 2 年に落城したと記す。（岡本）



第 220 図　山本城跡縄張り図（1/2,500）

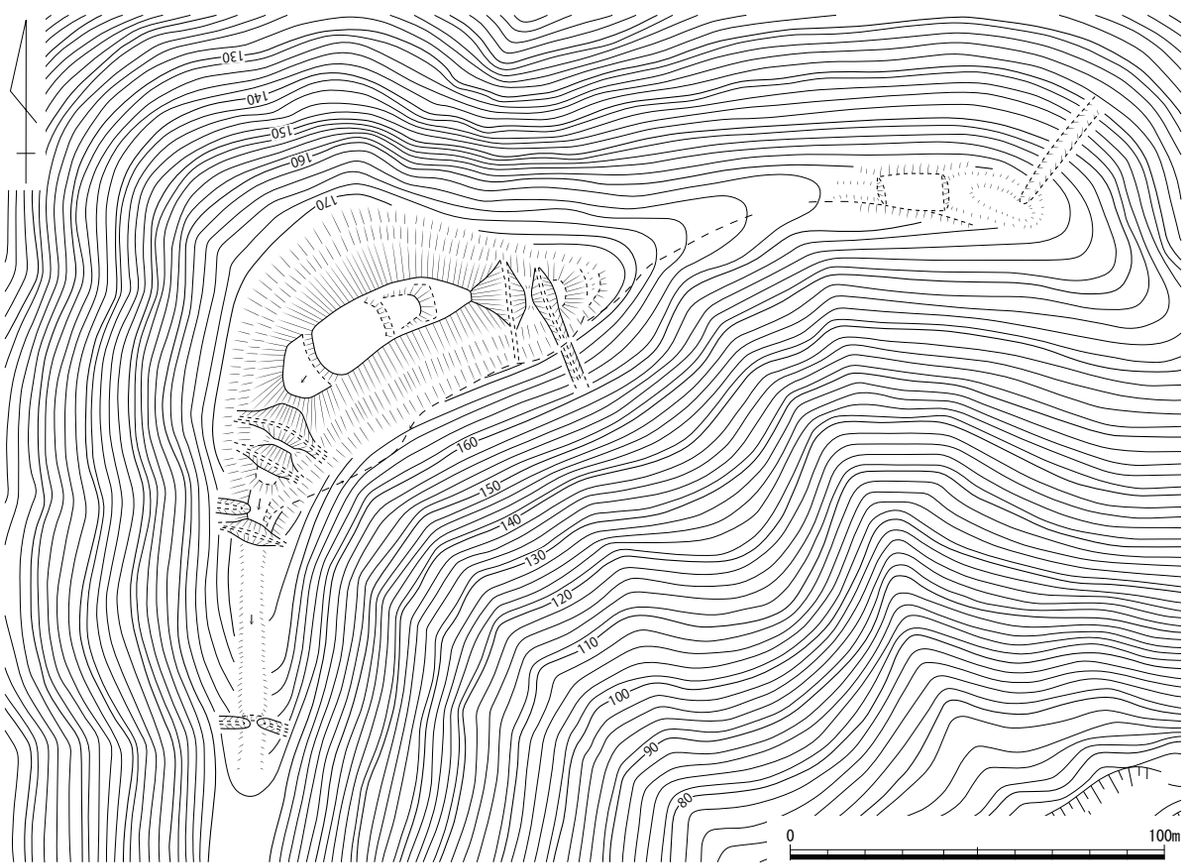
267　下倉（したぐら）城跡　　総社市下倉　　地図 22 左

立地　高梁川の南岸に位置し、下倉谷川が高梁川に注ぐ合流地点を眼下にする尾根高所に立地する。下倉谷川の谷筋を南にさかのぼり、峠を南に下ると新本川流域の平地に通じる。

概要　尾根高所の東西約 55 m、南北約 15 mの範囲に３面の曲輪を造成している。東西両側の曲輪は中央の曲輪より約 1.5 m低い。中央の曲輪と東の曲輪とは南北両縁部に設けられた通路で繋がっている。堀切は、曲輪群から南に下がる尾根に４条、東に下がる尾根に２条掘削されている。曲輪に隣接する堀切は曲輪の端部を大きく削って、深さ約 5.5 ～ 7 mの切岸を造っている。南側の堀切群には竪堀も配されている。東へ下る尾根筋は堀切から東へほぼ水平な細尾根が約 100 m続き、先端部がわずかに高くなる。この高所は自然地形であり、ここから北東へ下る溝が認められるが、深さが 0.3 ～ 0.5 mと浅く、竪堀かどうか不明である。その高所の西に接して、尾根筋を約0.5 ～ 1 m掘削して 15 × 10 mの曲輪を拵えているが、その性格は不明である。

写真 105　遠景（北から）

文献・伝承　『備中誌下編』は「古城」とし、（城主を）筒井順齊、天正中落城（中略）覚束なしと記す。（物部）



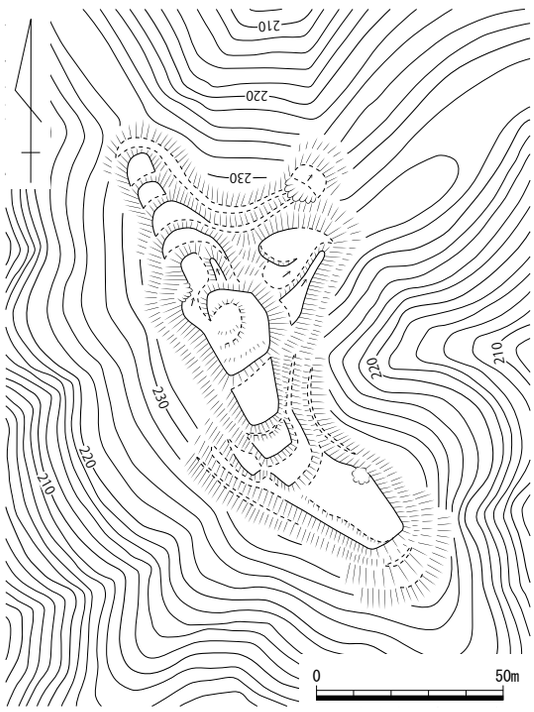
第 221 図　下倉城跡縄張り図（1/2,000）

268　田広木城跡（たひろき）　　総社市久代　　地図 22 左

立地　新本川沿いの平野の北に横たわる山塊の一角で、南に向かって派生する尾根上に立地する。鬼身城跡からは南東へ約 600 mの位置にある。

概要　南北方向の尾根筋に沿って曲輪が直線的に連なるが、全体的に造成はやや甘い傾向がある。主郭は全長 20 m、幅 15 mほどの不整長方形で、北隣の曲輪と斜路で連続する。主郭の南北には曲輪が段状に配置され、城域の南端には全長約 30 m、幅約 15 mの大規模な曲輪が置かれる。曲輪の端から延びる細長い犬走りが随所にみられるのも特徴的である。また、主郭から東に延びる尾根筋にも不整形の曲輪があり、その南東辺は土塁状の高まりとなっている。なお本城は、『岡山県遺跡地図』では誤って別地点に所在する「高丸古城」（本書 271）に当てられていたため、今回新たに命名した。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。　（岡本）



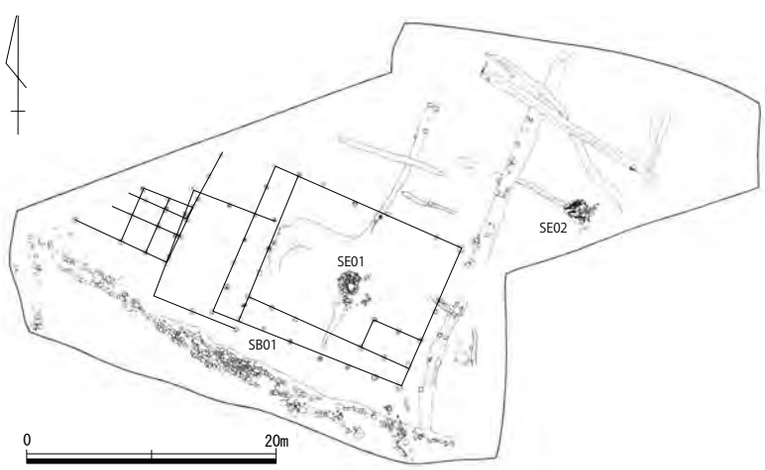
第 222 図　田広木城跡縄張り図（1/2,000）

269　殿砂遺跡（とんざこ）　　総社市新本　　地図 22 左

立地　新本川の支流が南東に流れる谷の最奥部付近にあり、丘陵裾部の南向き緩斜面上に立地する。

概要　1994 年度に圃場整備に伴う発掘調査が実施され、中世居館の存在が判明した。全体の規模は不明であるが、溝と石垣状遺構によって構成される方形区画と、掘立柱建物６棟、井戸２基などの遺構が検出されている。掘立柱建物は切り合いなどから３時期あったと考えられ、うち最大の SB01 は桁行６間、梁行５間で南と西に庇が付属し、約 16 m × 12 mの規模である。出土遺物には土師器・備前焼・亀山焼・磁器等があり、特に青磁・白磁の種類・量の多さが注目される。これらの遺構群の時期は、出土遺物からみて 13 世紀末から 14 世紀前半と考えられる。

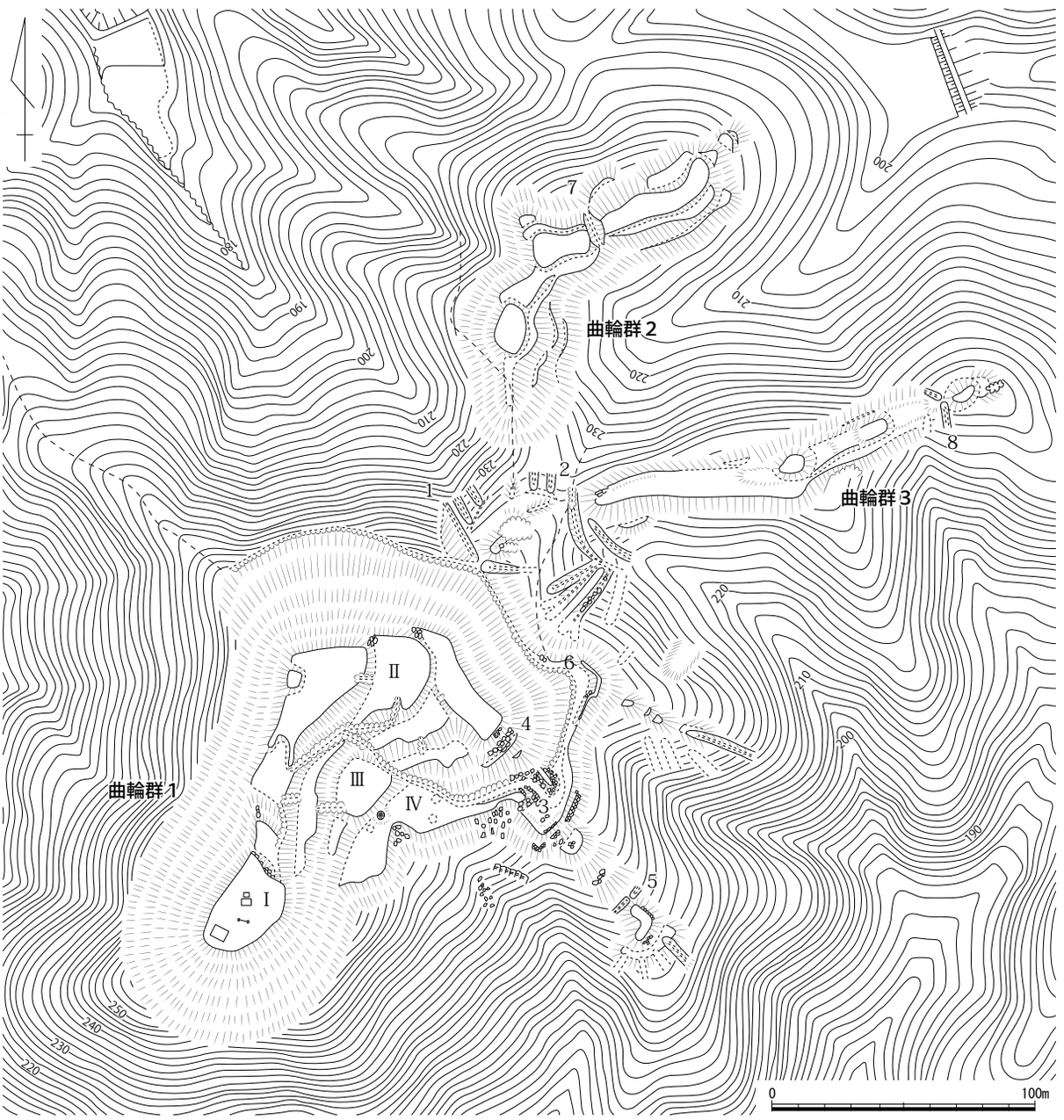
文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。　（岡本）



第 223 図　殿砂遺跡遺構配置図（1/600）文献 173 に加筆

270　鬼身（きのみ）城跡　　総社市山田・下倉・久代　　＜市指定史跡＞　地図 22 左

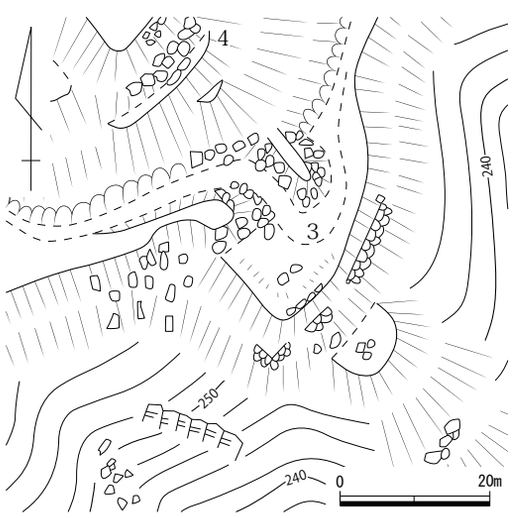
立地　城は総社市山田・下倉・久代にまたがる山頂部に位置する。城域最高所にある曲輪Ⅰからは新本川流域から総社平野までをも一望でき、遠くは児島、玉島灘まで見据えることができる格好の位置にある。城の西麓には、戦国時代当時海浜部であった玉島から美袋までを南北につなぐ間道（通称「玉島往来」）が位置している。戦国時代の玉島は高梁川の河口域にあたっており、その対岸には室町時代に守護倉があった西阿知が所在する。さらに城の南の平野を流れる新本川を遡れば、山陽道の要所、矢掛へ通じる美山川中流域へ出ることも可能である。このように、鬼身城跡は山陽道を交差、あるいは平行して備中国中南部から瀬戸内海までを貫く間道を押さえる要衝にある。



第 224 図　鬼身城跡縄張り図（1/2,500）

概要　城は諏訪神社の位置する曲輪Ⅰを最高所に据えた扇形の縄張り（通称「扇の縄」）を持つ連郭式山城とされてきた。しかし、このたびの調査により、堀切1を超えて北に派生する二つの尾根上にも城域が広がっていることが判明した。従ってその規模は南北360 m、東西180 mにも及び、備中国では有数の規模を誇る。ここではこれまで認識されていた諏訪神社周辺に位置する曲輪群を「曲輪群1」、「曲輪群1」の北、北東方向に連なる尾根上に展開する曲輪群を「曲輪群2」、そして堀切2を挟んで東西方向に続く曲輪群を「曲輪群3」と命名し、それぞれ記述する。

「曲輪群1」は曲輪Ⅰを要とする求心的な縄張りであるが、随所で横矢掛けを意識した曲輪配置となっているだけでなく、要所には石垣が構築され防御を固めている。石垣の多くは崩壊しているが、城内全域で転石が見られることを勘案すれば、相当数の曲輪が石垣により防御されていたことを想定すべきであろう。現在、諏訪神社の境内となっている曲輪Ⅰからは北東方向に4面の曲輪が逆L字形に連なる。ここでは『日本城郭体系』に習い、この4面の曲輪を「第一連郭」と呼ぼう。「第一連郭」の東側に帯曲輪となる曲輪Ⅱが配される。「第一連郭」と曲輪Ⅱの間は高さ3～5 mの切岸により隔てられる。また、曲輪Ⅱに対しては、その上段にあたる「第一連郭」から横矢を浴びせることが可能となっている。同様に曲輪Ⅱからは一段下の曲輪Ⅲから北東方向へ続く3面の曲輪に対して横矢を掛けることが可能である。「第一連郭」と併せ、重層的な防御構造をなす縄張りと評価できるであろう。最下段となる曲輪Ⅳには井戸と考えられる窪みがいくつか認められ、少なくとも一つは石組みを伴うものであった。さて、「曲輪群1」の中でも特に注目すべきは、城内への入り口となる虎口3である。虎口3は曲輪Ⅳの東に位置し、城外側へ北から突出するものと、これに対して虎口受けとなり、東西方向に突出する二つの土塁から構成されている。虎口受けとなる土塁は、その先端で南北方向にその向きを変えている。結果、この二つの土塁は枡形状空間を形成することになる。城内へ入るにはこの土塁の間にある隘路を進まなければならない。従って、その導線は虎口3の中央に入ったところで西へ折れ、さらに進んで曲輪Ⅳの平坦面に入る地点でもう一度北へ向って折れる。その間、虎口3の北に造成され武者走り4から横矢が掛かり続けることになる。また、両土塁の周辺は多数の転石が見られる。転石は0.5～1.5 mを測る大形の石材と、拳大～0.3 m程の小形の石材が認められた。これらは元々土塁を覆う石垣を構成していたと推察できる。さらに虎口3の南側には東西20 m、幅10 mを測る広場があり、城内から出撃の際に利用される馬出的な機能を持っていたものか。さらに、この広場の下の斜面には高さ0.5～0.8 mを測る石垣が認められた。この石垣は隅角をもつもので、高さこそ低いが、栗石を伴う本格的な石垣である。虎口3から南東方向へ向かって下る尾根筋には堀切5が掘削され、その先にも、東側を石積みで固めた曲輪が続く。この曲輪には少なくとも1本の竪堀が掘削されていた。また、虎口3の南西に位置する谷には、城内で使われる石垣の石材を切り出したとみられる露岩があり、その周辺に多量の転石が見られる。「曲輪群1」の北西には土塁6が構築されている。土塁6は複雑な折れ線を見せる。これは土塁6の北及び東側に掘削



第225図　虎口3拡大図（1/1,000）

されている、畝状竪堀群に対する横矢を意識したものであろう。「曲輪群Ⅰ」の北には堀切1が掘削され、北から続く尾根筋に沿って進む進入者に対して防御線をなす。堀切1の中央は諏訪神社への参道造成に伴い埋められている。さらに西側も崩落によりその形状が判然としないが、堀切底には明確な掘削痕跡があり、本来はかなり大規模な堀切であった可能性が大きい。堀切1から尾根筋を進むと小曲輪が造成されており、その周囲に竪堀が掘削されている。なお、堀切1から西へ進んだ場所に谷筋の鞍部がある。この鞍部の周囲は地形の崩落が激しく確証は得られなかったが、この位置にも堀切が存在していた可能性を指摘しておきたい。このように、「曲輪群1」は主郭となる曲輪Ⅰを要とし、曲輪配置そのものが横矢を意識した防御構造をもっていた。さらには石垣化された枡形状空間や、土塁、堀切、竪堀を組合わせた技巧的な縄張りを持つ。

「曲輪群2」は4面の主要郭面とその周囲に造成された腰曲輪からなっている。主要郭面の中央付近に堀切7が掘削されている。加えて、周囲に幅5m程度の小曲輪が階段状に造成されている。各曲輪の平面形は不整形で、各曲輪間を隔てる切岸も高さ2～3mと低い。

「曲輪群3」は東西に延びる尾根上に展開する。曲輪には自然地形や、古墳の痕跡かと思われる高まりが3か所遺存しており、その造成は完全とは言えない。また、確実な防御施設は堀切2周囲に設けられた土塁と竪堀、及び東端近くにある堀切8のみである。

以上のように、堅い防御線を持つ「曲輪群1」に対して、「曲輪群2」及び「曲輪群3」の防御機能は、一段劣るものと言わざるを得ない。最大となる曲輪の幅を比較すると「曲輪群1」では30mを測るのに対し、「曲輪群2」、「曲輪群3」ではいずれも10mを測るに過ぎず、その差異は明らかである。

文献・伝承　本城の築城時期について記す文献を欠く。『備中府志』並びに『備中集成誌』とも、本城の名を「高見鬼身ノ獄」とした上で、神代において吉備ノ冠者に与力した有木の冠者が居住していたとの伝承を記す。時代が下って天正2～3（1574～75）年に掛けて勃発した、「備中兵乱」の舞台として再登場する。『備中兵乱記』には天正3年1月14日に鬼身城攻めが開始され、同月29日に城将である上田実親が自刃、開城したという。上田実親は備中松山城主の三村元親の弟で、上田氏に養子に入っていた。乱後、城は毛利氏の重臣である宍戸隆家に与えられ、在番として佐々部氏が入城した。天正7（1579）年以降、高梁川流域が毛利氏と宇喜多氏・羽柴（豊臣）氏の境目地域となり、緊張状態となる。天正11（1583）年12月5日付け小早川隆景書状では、鬼身城が境目の城として認識され、軍勢、兵糧、弾薬などを保持するよう、五竜（宍戸氏）に言い聞かせたとする。天正13（1585）年に国分けが確定し、翌天正14（1586）年、秀吉は毛利輝元に対して朱印状を交付した。その中で一条を設けて重要な城の守りを固める一方、不要な城から立ち退きを命じている。これを受けたものか、天正19（1591）年、輝元が鬼身城や猿掛城他、備中国境に位置する諸城に対して心使いを務めるよう指示している。その具体的な内容は不明ながら「曲輪群1」に見る技巧的な縄張りはこうした城主交代、あるいは境目の城として守りを固めた際に改修を受けたものではないか。なお、正確な廃城時期は不明ながら、毛利氏の防長移封に伴い、慶長5（1600）年頃のことかと思われる。（和田）

写真106　虎口3南の石垣（南西から）

271　高丸古城跡（たかまるこ）　　総社市久代　　地図 22 左

立地　新本川流域の平野の北側に連なる山塊の一角に位置し、標高 255 mの山頂とその周辺に曲輪が展開する。西へほぼ 1 km の地点には鬼身城跡が所在する。

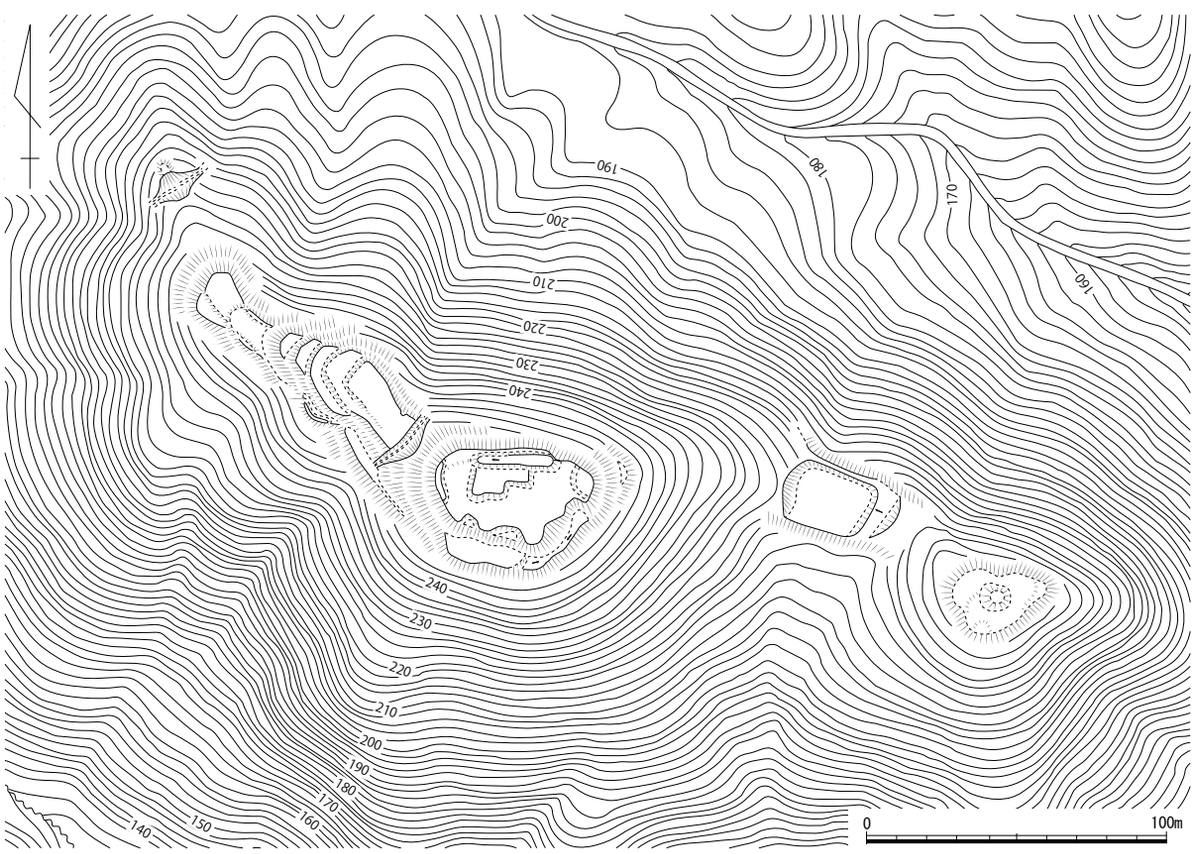
概要　城域は、東西に並ぶ二つの山頂と、その中間の鞍部にある曲輪群から構成される。

西側の山頂は標高 255 mで、本城の中枢と考えられる。主郭は東西約 50 m、南北約 30 mの不定形を呈し、東辺から南辺にかけては多数の屈曲、突出部を作り出し、北辺と西辺には土塁を設けて防御を固めている。北辺の土塁は地山の削り出しで、曲輪内にある高さ 1 ～ 1.8 mの高まりと接している。主郭から北西に延びる尾根筋には、両端に堀切を設け、その間には 7 面程度の曲輪が高さ 0.5 ～ 3 m程度の切岸を伴って連続している。一部の曲輪には土塁を伴っている。また城域全体の南斜面には、犬走りや腰曲輪が断続的に設けられている。本地点は『備中誌』にいう大高丸に相当するであろう。

東側の山頂はやや低く、標高約 230 mである。頂部の平坦面は東西約 30 m、南北約 20 mの不定形で、中央には直径約 10 m、高さ約 1.5 mの高まりがあるが、古墳の可能性もある。削平は弱く、曲輪と断定はできないが、『備中誌』にいう小高丸に相当すると考え城域に含めることとした。

両者の間にある標高約 210 mの鞍部にも遺構が確認された。鞍部を削平し、東西 25 m、南北 20 m前後の方形の平坦面を造成し、北側には地山削り出しによる高さ 1.5 mほどの土塁を設けている。

文献・伝承　『備中誌』には、「高丸古城」として、大高丸と小高丸とにその跡があり、かつて久代殿という人が居住したという地元の伝承を載せる。　（岡本）



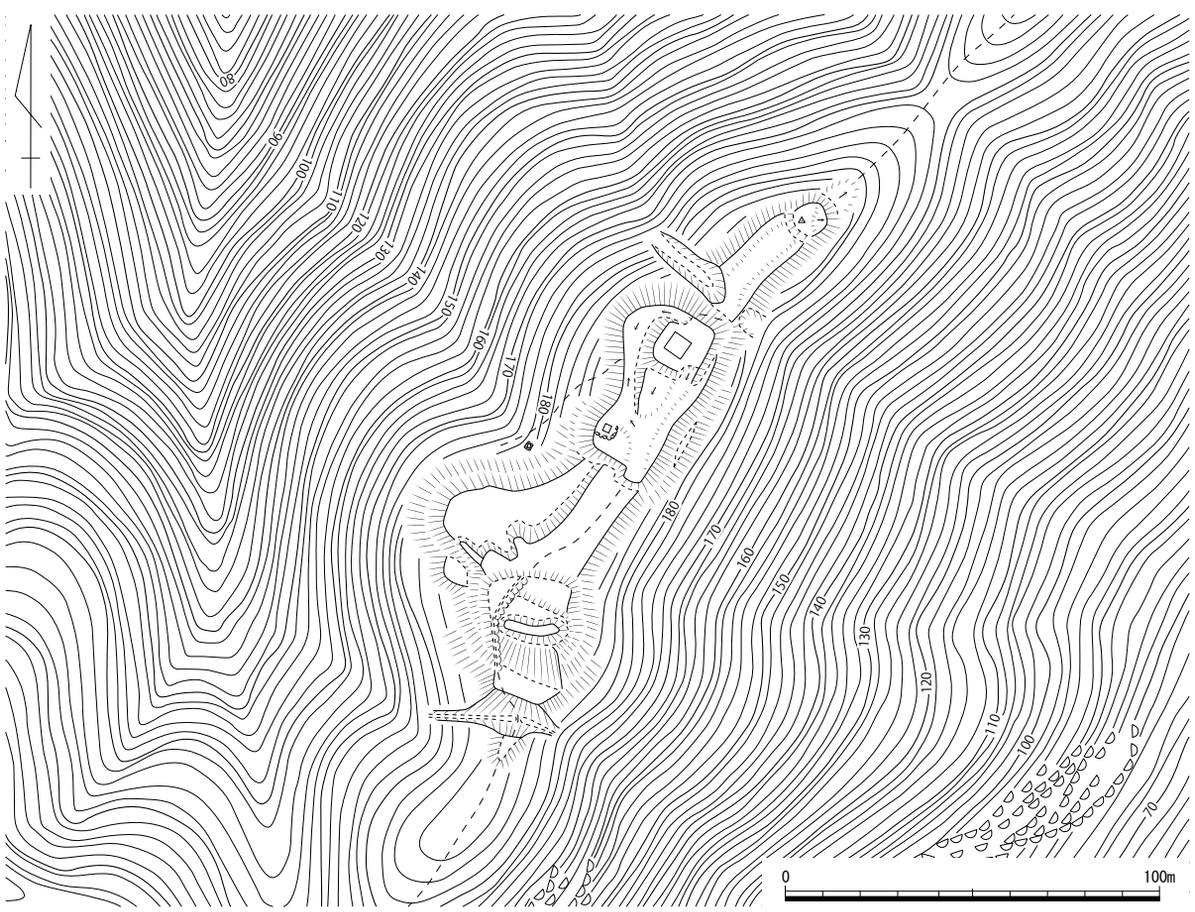
第 226 図　高丸古城跡縄張り図（1/2,500）

272　荒平山城跡（あらひらやま）　　総社市秦　　地図 22 右

立地　標高約 380 mの正木山から北東方向へ派生した尾根先端頂部に位置する。この地点は、東西に流れていた高梁川が南側に向けて屈曲する角部端に当たるため、頂部からは上流の美袋方面や下流の総社市域と倉敷方面が広く見渡せる。また志良計城跡が高梁川を挟んで正面に位置している。

概要　北東方向に伸びる尾根筋に曲輪を連ねた山城である。城域は約 200 m前後と必ずしも大型には属さないが、各曲輪は大きく造作もしっかりしている。頂部の主郭は、規模が約 15 m四方と大きくないが、南西側に２面と２面目の西側下の１面は、規模が長さ 30 ～ 40 m前後と比較的大きな曲輪である。それぞれの接続部分には虎口状の施設も付随している。さらに尾根鞍部方向に向けて、高さ約１mの土塁と高さ約７mの切岸､深さ約３mの堀切によって守りを固めている。主郭の北西側は、高さ４mの切岸直下に堀切を築き、さらにその先にも細長い曲輪を築いている。また頂部から北西方向に下った箇所には石組の井戸が存在する。

文献・伝承　『備中集成志』には城主は川西三郎左衛門之秀入道と記される。『備中兵乱記』に記された「荒平の城」であると想定できる。1575 年、三村氏と毛利氏の争いの時、川西氏は三村方として戦い、一度は毛利氏の大軍を退ける。しかし毛利方は輝元の檄により力押しではなく調略に切り替えたため、川西氏はこれに応じ備前児島に流され、城は毛利方に下る。　（小林）



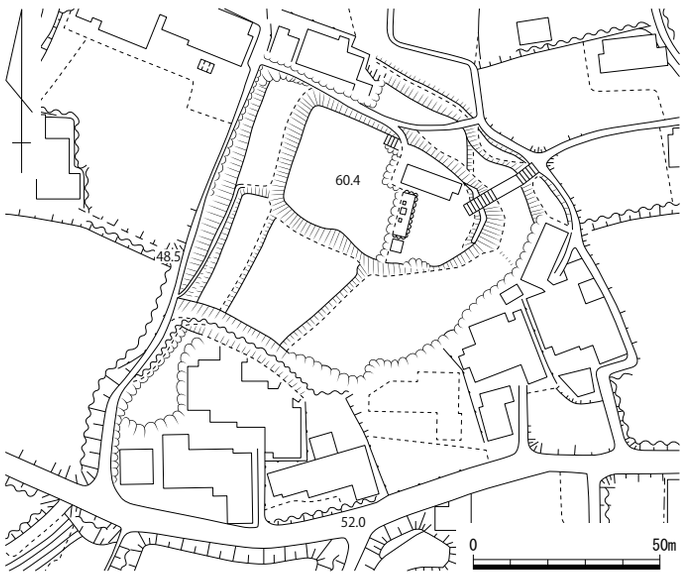
第 227 図　荒平山城跡縄張り図（1/2,000）

273　市場古城跡（いちばこ）　　総社市新本　　地図 26 左

立地　新本川に向けて張り出す低丘陵の尾根突端の高所に立地する。平地との比高差は約 10 mと低いため、畑地や宅地造成による地形改変が及んでいる。

概要　最高所に広さ約 30 × 30 mと、その東側約 2.5 m下に広さ約 25 × 15 mの曲輪を造成し、東側の曲輪の東縁に高さ約 0.3 mの土塁状の高まりがある。この曲輪群の周囲に高さ５～９mの切岸を造っている。切岸の周囲には帯曲輪が配される。

文献・伝承　『備中誌下編』は「市場山古城」、新本村「市場古城」とし、城主長井越前守一虎または右衛門太夫で、『後太平記』によると一虎は天正３年までは安芸の人で、川上郡国吉城で法行六左衛門之勝を討ち、その賞として毛利から当城を賜った。　（物部）



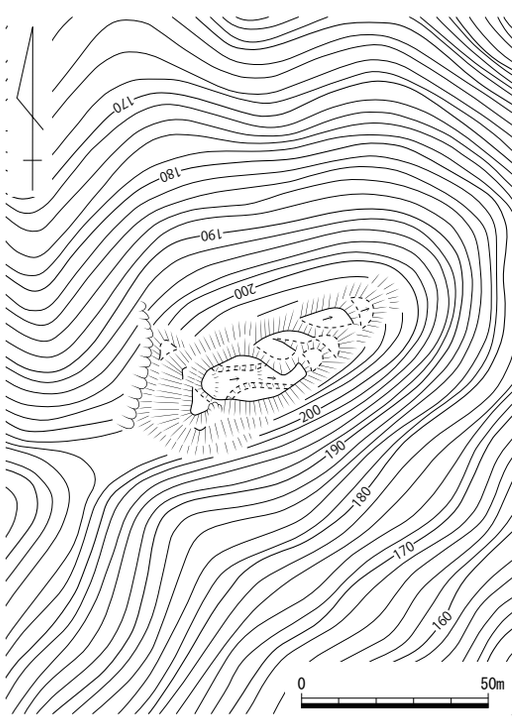
第 228 図　市場古城跡縄張り図（1/2,000）

274　馬首城跡　　総社市新本　　地図 26 左

立地　倉敷市との境界に位置する高山（標高 384 m）から、北東に派生する尾根筋の先端付近に位置し、新本川沿いの平野を一望できる。

概要　北東へ突出した標高約 210 mの尾根筋頂部が主郭にあたり、斜面下方に曲輪を連ねた構造と思われるが、遺構は概して不明瞭である。主郭は不定形で、郭面も平坦化されず自然地形とほとんど同じ傾斜である。北東側尾根の曲輪群は、小規模な平坦面を互い違いに並べたように配置される。また、主郭の南西側にもごく小規模な平坦面が複数散在している。土塁などの防御施設は全く認められず、背後の鞍部にも堀切などは確認できなかったため、ごく簡素な造りの山城といえる。

文献・伝承　『古戦場備中府志』では、城主を荒木兵庫頭とする。荒木兵庫頭は上田家に与力して精強な勇士であったという。　（岡本）



第 229 図　馬首城跡縄張り図（1/2,000）

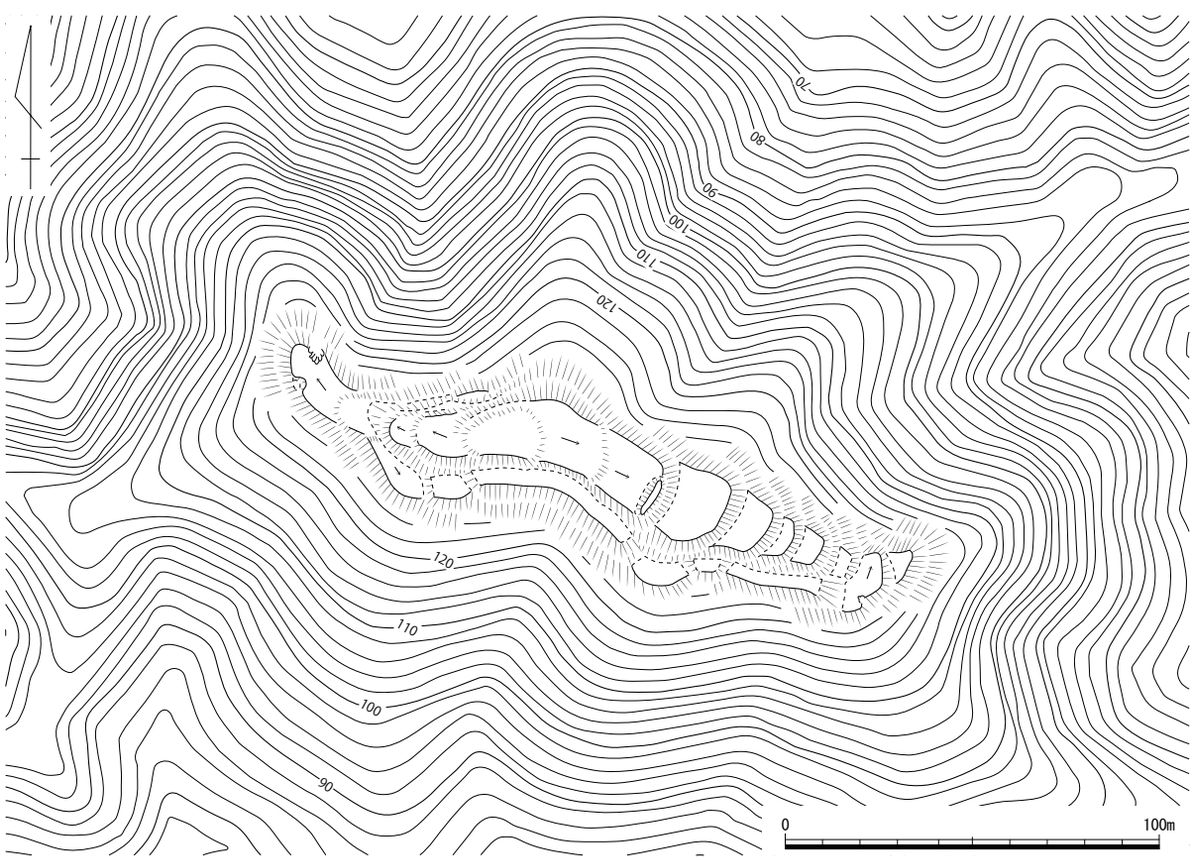
275　蓑越（みのこし）城跡　　総社市八代・久代　　地図 26 右

立地　新本川の南にある馬入山の山塊から、北方向へ派生した尾根頂部に位置している。当城の背後には、馬入道山城跡と木村山城跡が立地しており、また同じ尾根筋の東側には、276 名称未定が存在する。

概要　東西に細長い尾根筋の両側に曲輪を築いた連郭式山城である。頂部は長さ約 50 m、幅約 20 mと細長いが緩く傾斜しており、精美な造りには見受けられない。頂部の東側端辺には、高さ約 0.5 mの土塁が築かれている。またこの土塁の先には、比較的切岸がしっかりしている曲輪が 7 面ほど続いている。東側先端付近の曲輪には、虎口状の遺構も付随している。頂部西側尾根筋は、東側ほどしっかりしたものがなく、なだらかに先端方向へ下っている。これら頂部と東西両側にある曲輪群は、南側に築かれた帯曲輪によって結ばれている。この曲輪は凹凸があるものの総延長は約 150 mになり、それぞれの端部は尾根筋から続く曲輪に繋いでいる。この帯曲輪と頂部東側の曲輪群が、本城において最も造作がしっかりしている。

本城は特に頂部東側の遺構が充実している。これら遺構の尾根筋の先にも、若干の遺構がある 276 名称未定があり、それらの施設とともに細長い防御線を構築することが築城の目的であったと推測される。

文献・伝承　『備中府志』では「箕越山ノ砦」とあり、「備中兵乱」時に「備中備後ノ勢責メ」ると書かれる。三村方の前衛であったのだろう。　（小林）



第 230 図　蓑越城跡縄張り図（1/2,000）

277　馬入道山城跡（ばにゅうどうさん）　　倉敷市真備町市場　　地図 26 右

立地　標高 186 mの馬入山山頂に立地する。山塊の最高部ながら南東に突出しており、頂部の主郭からは南に旧山陽道の通る真備町市場付近の平地部を広く見渡せる。尾根続きの北東側、直線距離で 400 mに木村山城跡が位置する。

概要　全域は東西 310 m、南北 100 mの範囲である。頂部に主郭を中心にして北西側に３面、南東側に１面曲輪を配し、その南東側 30 m離れた尾根上に８面程度の曲輪を階段状に連ねる。

頂部の主郭を中心とする曲輪群は全長 160 m、幅 40 mを測る。主郭は長さ 28 m、幅 18 mを測る楕円形で、中央北側に井戸と伝えられるくぼみが存在する。主郭上南側には約２～３m大の自然礫による虎口状の囲いが認められる。

主郭の北西側には５mの切岸を経て長さ 25 mで幅 14 m、続いて８mの切岸の下に長さ 20 mで幅 13 m、最後は３mの切岸の後に長さ 15 mで幅 16 mを測る曲輪３面を配する。それより西は自然地形の緩やかな傾斜が続き、約 40 m先に深さ 1.5 m、南北約 40 m程度の堀切１条がある。掘切中央には土橋状の高まりがある。主郭の北西側の曲輪から８m南には幅 15 mを測る爪形の曲輪がある。曲輪中央に土塁状の高まりがあり、曲輪の斜面下方には竪堀２本と長さ約５mの石列が存在する。

主郭南東側には、３mの切岸の下に長さ 20 m、幅 20 mの曲輪がある。この曲輪の北は主郭まで回り込む帯曲輪になり、西端に土塁の跡かと思われる 0.5 mほどの高まりを残す。

頂部の曲輪群から南東側８m下に自然の露岩が乗る曲輪１面があり、さらに 15 mほど下がって曲輪５面が東方向に連なっている。この曲輪群は爪形を基本としているが、不規則な形をしているものが多く、後世の地形改変の影響を受けている可能性が高い。切岸の幅は広めで、高さは２～５mを測る。５面の曲輪群南側に別の尾根筋があり、深さ２m、南北 20 mの掘切１条を経て南北 20 m、東西 16 mを測る曲輪に達する。掘切との間に高さ 0.5 mの土塁を残すほか、この曲輪の西側には切岸、南東側には爪形の曲輪を２面設けている。

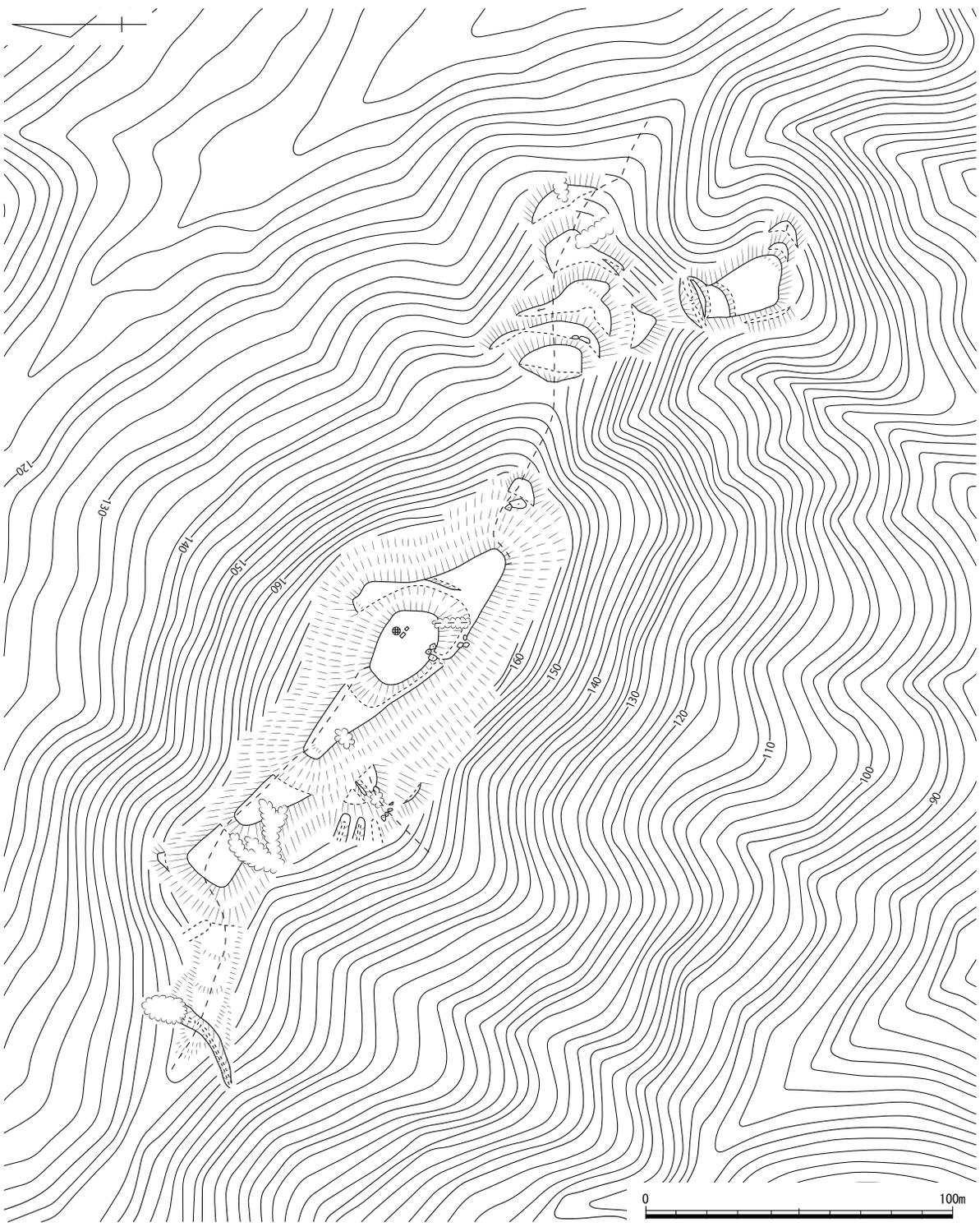
城跡の南東側、北西側尾根上には、深さ最大２mに達する古道状の溝が複数条見られるが、これは近世以降の石材採取跡であるかもしれない。

文献・伝承　『古戦場備中府史』は「場入堂山城」として、「天正年中城主三村源五郎高秀」と記載する。古川古松軒『吉備之志多道』の「馬入道山の古城」では、『古戦場備中府史』の記事を「大いな

写真 107　遠景（南から）

写真 108　主郭（南東から）

る妄説を顕す」として否定し、上野肥前守を城主とし、配下で「三宅左馬允・佐々井伊賀・塩見河内・白神右京等」が在城したと記している。『日本城郭大系』13 によると、上野肥前守は馬入道山城跡ではなく木村山城跡の城主で、大永から享禄年間（1511 ～ 32 年）在城したと考察している。『中国兵乱記』では、天正 3（1575）年鬼身城跡の上田実親攻略のため宍戸備前守 (隆家) が「羽入堂山」に陣を構えたというが、当城のことであろうか。（氏平）



第 231 図　馬入道山城跡縄張り図（1/2,000）

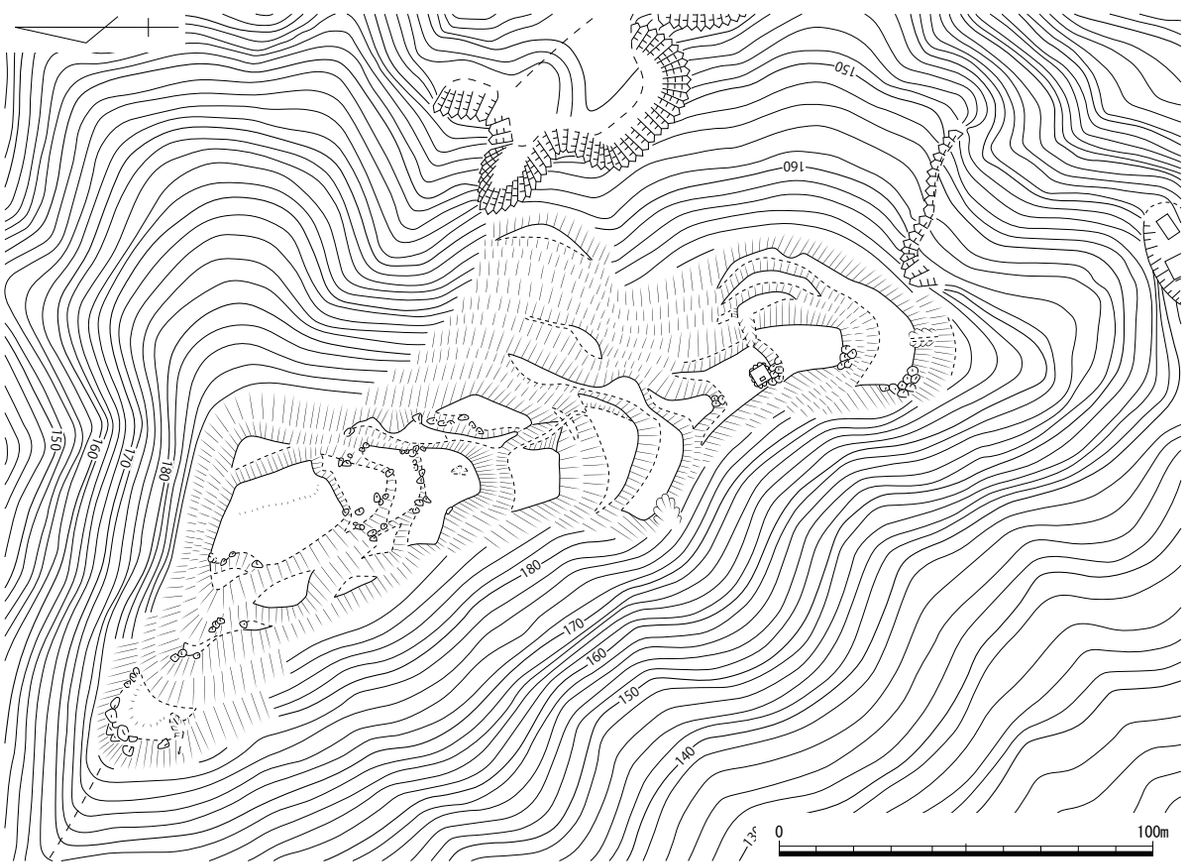
278　木村山城跡（きむらやま）　　総社市八代　　地図 26 右

立地　新本川と小田川の間にある山塊中に位置し、幾つかある山頂部の中で、標高が一番高い山頂部に立地する。北西に鬼身城跡、南東に夕部山城跡を眺望でき、北の新本川・南の小田川の両流域を見渡せる。

概要　山頂に、広さ約 35 × 20 mの曲輪（主郭）を築き、そこから南の尾根筋に 10 面の曲輪を連ね、北西の尾根に２面の曲輪を造る。主郭の東西両側の斜面や、東方へ張り出す尾根に下方にも曲輪が見られる。堀切や竪堀等は無く、曲輪の輪郭に露岩をうまく利用したり、尾根筋から曲輪を尾根側面の両斜面へ延ばしたりするものが多い、という特徴がある。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は薗村「喜村山城」とし、城主土肥二郎實平と記す。『吉備郡史中巻』は神在村大字八代の「木村山城」とし、城主は、元暦中（1184・1185年）、播磨美作備前備中備後五か国守護土肥二郎實平、永正中（1504～1521年）、上野民部大輔信孝之で、永正16（1519）年６月３日、領主上野四郎次郎高直が見えるとする。『中国兵乱記』は天正３年、備中兵乱時に毛利元清が鬼邑山へ入場したと記す。　（物部）

写真 109　遠景（東から）



第 232 図　木村山城跡縄張り図（1/2,000）

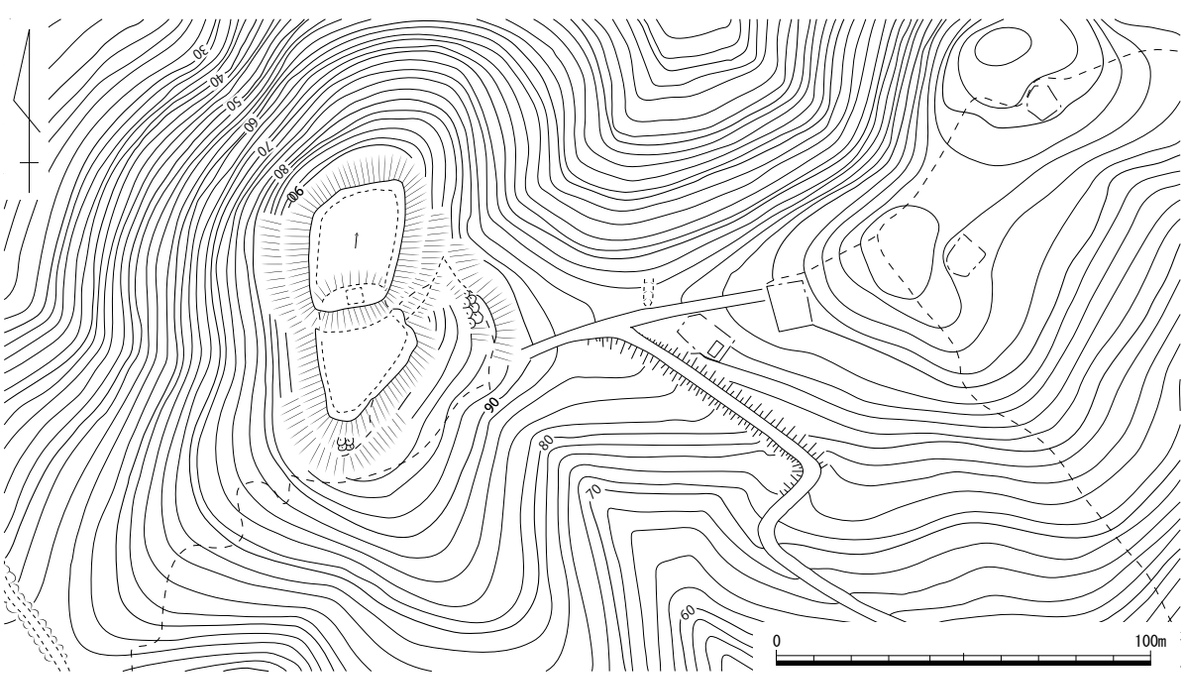
279　夕部山城跡（ゆうべやま）　　総社市下原・倉敷市真備町辻田　　地図 26 右

立地　高梁川と新本川の合流地点近くの西側裾部付近に立地する。標高約 220 mの木村山から西側へ向けて派生した尾根先端頂部にあたる。山城のある尾根筋は、他の尾根よりも高梁川へ向けて顕著に突出しているため、約 100 mしかない標高でも四周に対する見晴らしが効く。北側は鬼身城跡・荒平山城跡・経山城跡、東側は幸山城跡、南側は南山城跡、西側は木村山城跡と、周辺にある主要な山城をすべて見渡すことができる。また本城の東隣の頂部には、弥生墳丘墓と古墳が築かれる。

概要　伊予部山山頂に築かれた曲輪群の規模だけなら約 70 m足らずの小さな山城である。頂部の主郭は、長さ約 35 m、幅約 25 mの方形を呈している。南側端が土塁状にやや高まっている。主郭の南側にある曲輪は、長さ約 25 m、幅約 25 mの規模であり、両者間の切岸は高さ約 2.5 mである。施設はほぼこの２面のみであり、両方とも広い平坦地を有しているのが特徴である。また、主郭の東側尾根伝いに、小さい曲輪状の施設が１つ存在する。この尾根鞍部には溝状の凹みがあり、また主郭から西側へ離れた尾根鞍部には現在切り通しが存在している。これらを堀切と判断した場合、城域はかなり広がることとなる。

当城は、防御施設がそれほどあるわけではなく、曲輪の数も少ない。しかし主郭は比較的広い平坦地を有しており、眺望が開けていることから陣所としての役割が強かったものと考えられる。

文献・伝承　『備中村鑑』では、「伊予部山城」で下原村にあり城主明石兵部とある。『備中集成志』には、「備中兵乱」時に毛利方の小早川隆景が入城したと書かれる。　（小林）



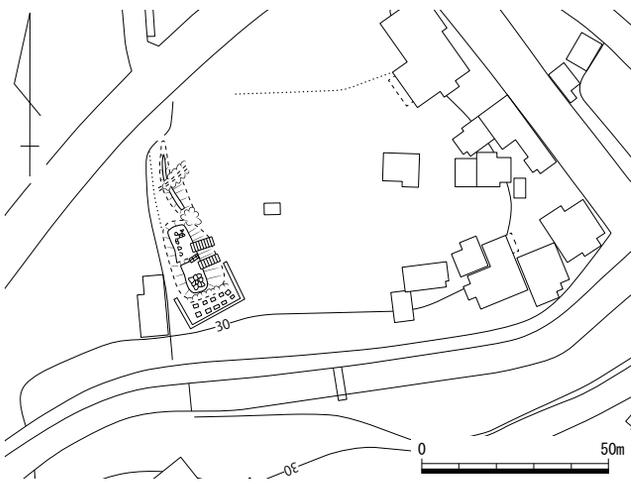
第 233 図　夕部山城跡縄張り図（1/2,000）

280　桜（さくら）城跡　　倉敷市真備町市場　　地図 26 左

立地　倉敷市真備町市場の平野部に位置する。小田川水系末政川の北岸に接しており、これを外堀として取り込んだものか。周囲は市場の字が残っており、中世には商業地として利用されていた区域の一角かとも思える。城は市を取り込む形で築かれた、中世平地城館の一類型ではないか。

概要　現状、高さ約２mの土塁が部分的に残るのみで、城域の全容は明らかではない。この土塁残欠が城域の北西隅にあたると見られ、その西側は一段水田が下がっている。土塁の南側は削平を受け、総社市井山宝福寺の末寺であった瑞祥院の境内及び墓地となっている。この地点は周囲から約２mの高さをもって突出しており、これが土塁の痕跡である可能性も指摘できよう。周囲に残る地形を考慮に入れれば、東西南北とも約 70 mを測る方形の居館として復元が可能かと考える。

文献・伝承　『日本城郭体系』では桜城主として桜喜右衛門武定を挙げ、その築城は鎌倉時代に遡るとする。　（和田）



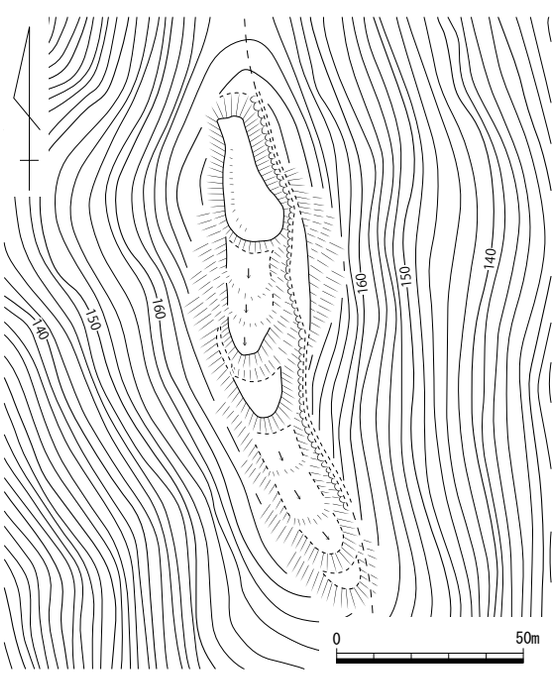
第 234 図　桜城跡縄張り図（1/2,000）

281　陶山（すやま）城跡　　倉敷市玉島陶　　地図 26 左

立地　湾曲して流れる真谷川の内側にそびえる尾根先端頂部に位置する。この箇所は、標高約 220 mの山塊から南へ派生した尾根筋にあたり、頂部の標高は約 170 mである。

概要　南北に細長い尾根筋に曲輪を連ねた連郭式山城で、全長は約 140 mである。頂部にある主郭は、長さ約 35 m、幅約 20 mあり、やや段差をもってさらに南にも 30 mほど平坦地が続く。しかし造りは甘く、特に南側は自然地形を生かしたままの箇所も多い。この曲輪群の東側と南西側に帯曲輪を、南側に１面の曲輪を配している。さらに南側に曲輪状の平坦地が数面続いている。また鞍部には堀切が見られない。今回の調査時には、当地の草木の繁茂が激しく、細部の状況を正確に見切れることが出来なかった。

文献・伝承　故事来歴は不明である。　（小林）



第 235 図　陶山城跡縄張り図（1/2,000）

282　諏訪山城跡（すわやま）　　倉敷市真備町妹　　地図 26 左

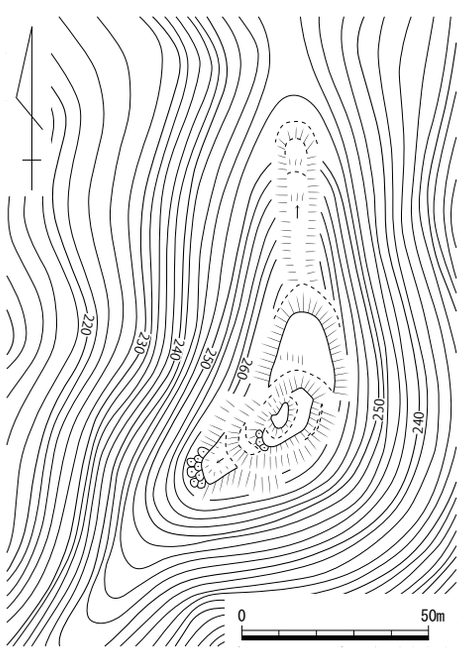
立地　小田川の北、独立丘陵である標高 385 mの高山から派生して南に延びる尾根上、標高 270 m（北部）、240 m（南部）に立地する。南東約 1.8㎞に鳥ヶ岳城跡、南約 3.1㎞に猿掛城跡がある。

概要　穴戸山神社の南約 400 mにある北部と、さらに南へ約 300 mにある南部の２か所に分かれる。

北部は逆「く」の字状に折れ曲がる尾根頂部に位置し、南北 100 m、東西約 30 mの規模を測る。頂部に南北７m、東西約５mの曲輪があり、１mの低い切岸下に帯曲輪がある。この北は南北 15 m、東西 17 mの爪形曲輪を配し、高さ５mの切岸からは約 40 m自然の緩やかな頂部が続き、最後に高さ５mほどの切岸で終わる。帯曲輪の南は幅８m程度の曲輪２面の後、尾根が狭まり露岩で終わる。

南部の城域全体は「く」の字をしており、全長は 300 mに及ぶ。中央最高所に長さ 40 m、最大幅 13 mの曲輪Ⅰを置き、北西側に深さ最大８m、南北 12 mの箱堀を掘削して長さ 35 m、幅 18 mの曲輪Ⅱへ続く。この曲輪Ⅱから尾根が北東方向に曲がり、まず東西 16 m、深さは南側で 10 mになる箱堀、さらに東西 11 m、深さ 1.5 mの掘切を掘削する。この２本の掘切から北へは緩い斜面を経て尾根が狭まり、掘切状に見える痩せ尾根を経て爪形の曲輪を３面確認している。その先は尾根鞍部まで切岸が不明瞭で、鞍部で掘切かと思われる地点がある。その先は北部との間に曲輪はないようだ。曲輪Ⅰから南は切岸５m下、さらに 10 m下に曲輪を配する。南東の尾根続きには自然露岩が密集し、西側斜面には帯曲輪と切岸を細かく施している。露岩密集地点から曲輪を３面過ぎ、頂部曲輪からは 110 m南東の所で深さ５m

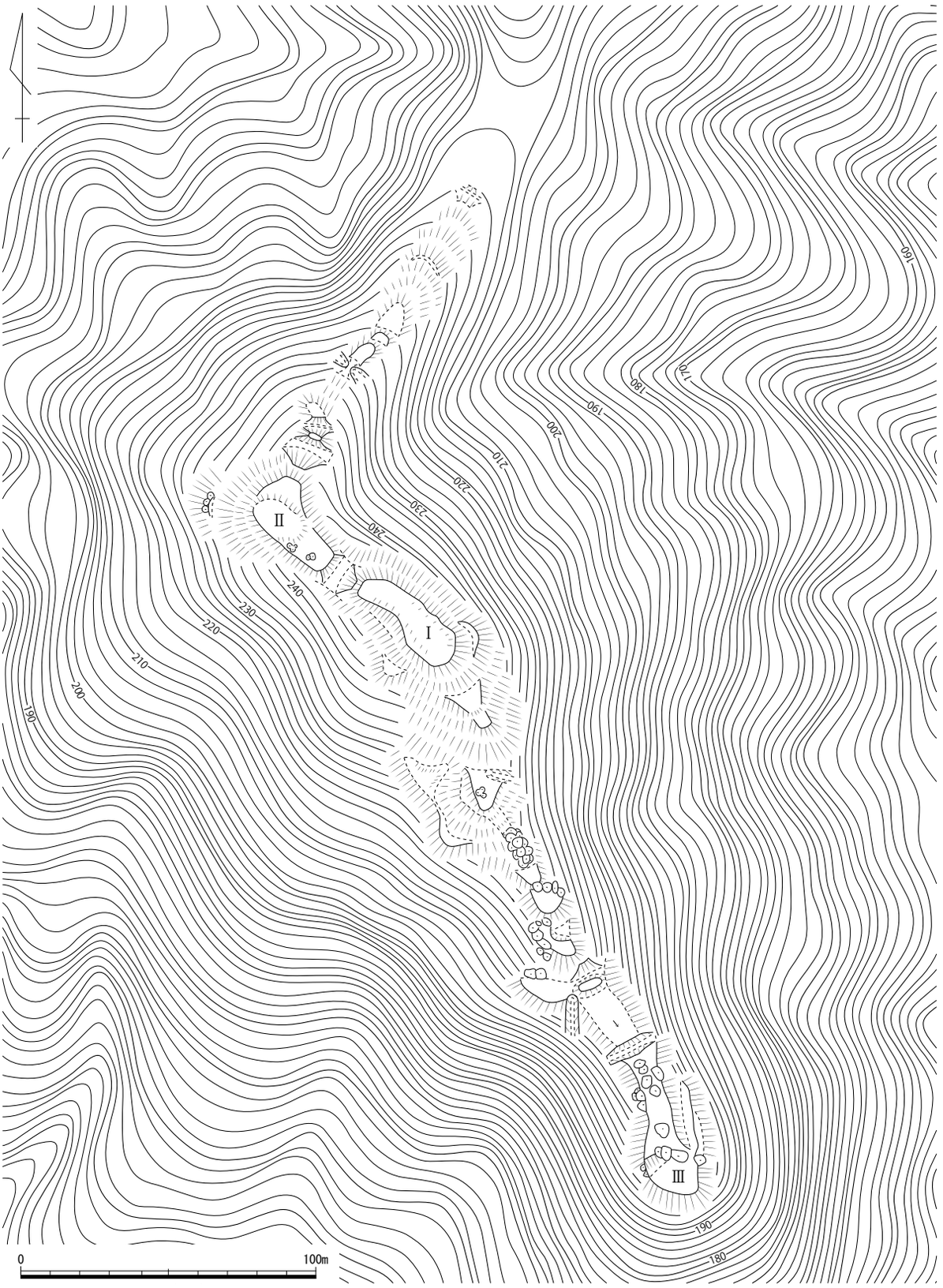
第 236 図　諏訪山城跡縄張り全図（1/5,000）



第 237 図　諏訪山城跡北部縄張り図（1/2,000）

の掘切と高さ２ｍの土塁、さらに 20 ｍ先に東西 18 ｍ、深さ１ｍの掘切があり、掘切からは南へ 50 ｍ緩やかな下りの曲輪Ⅲが続いて急斜面で終息する。曲輪Ⅲの東側には長さ 25 ｍの腰曲輪を設ける。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。『真備町史』には遠景写真が掲載されている。　（氏平）



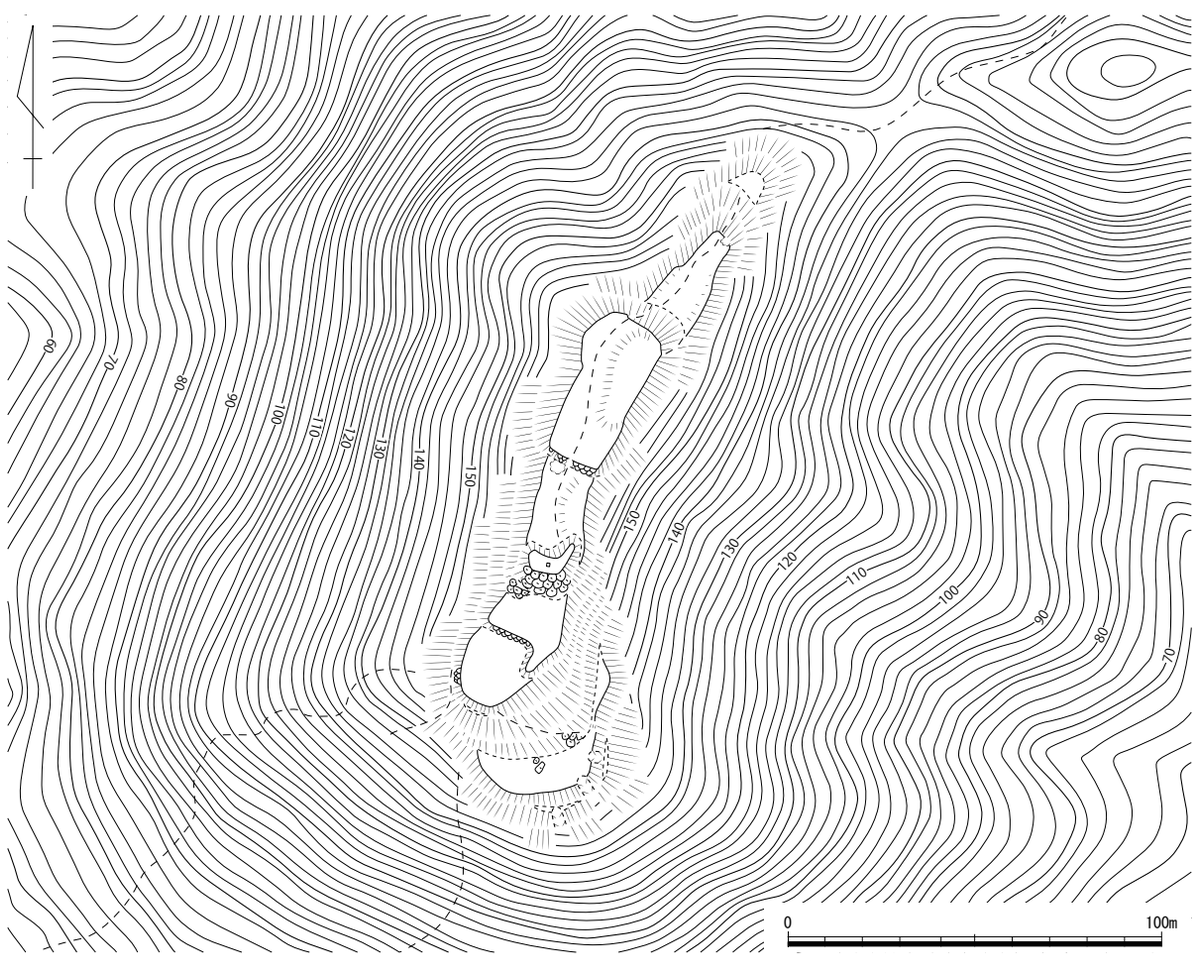
第 238 図　諏訪山城跡南部縄張り図（1/2,000）

283　鳥ヶ岳（とりがたけ）城跡　　倉敷市真備町尾崎　　地図 26 左

立地　東西に流れる小田川の北側にあり、高馬山から南へ派生した尾根の先端頂部に位置する。当地から旧山陽道沿いが広く見渡せる、絶好の眺望である。

概要　南北方向に細長い尾根筋に、曲輪を配した全長約 180 ｍの山城である。頂部にある主郭は、長さ約 40 ｍ、幅約 15 ｍと比較的大きい。その南斜面には石列が築かれ、さらに長さ約 25 ｍの曲輪が続く。その前面には幅約５ｍと広い土塁が配され、この地点が最も高所となり見晴らしも良い。この頂部付近にある２面の曲輪は、規模が大きいにもかかわらず平坦地の造作はやや甘いのが特徴である。これらの前面には、６ｍの露岩による高低差を設け、さらに２面の曲輪が置かれる。この曲輪の間には､石列を築いて段差としている｡さらに南東が伸びる尾根筋に８ｍの落差の後に長さ約10ｍ、幅約 30 ｍの曲輪を置く。この曲輪から頂部の西側斜面方向に帯曲輪が伸びている。この方面は比較的緩やかな斜面であるため、さらに竪堀状の遺構も築かれている。主郭の背後は長さ約 25 ｍ、幅約 10 ｍの曲輪が高さ約６ｍの切岸下に築かれる。なおこの先の尾根鞍部方向には、堀切などは存在しない。

文献・伝承　『備中村鑑』には、鳥嶽城として八田村にあり、吉備大臣が在城したと書かれている。地元では、石田二郎為久が在城し、後に山の麓に居を構えたと伝えられている。　（小林）



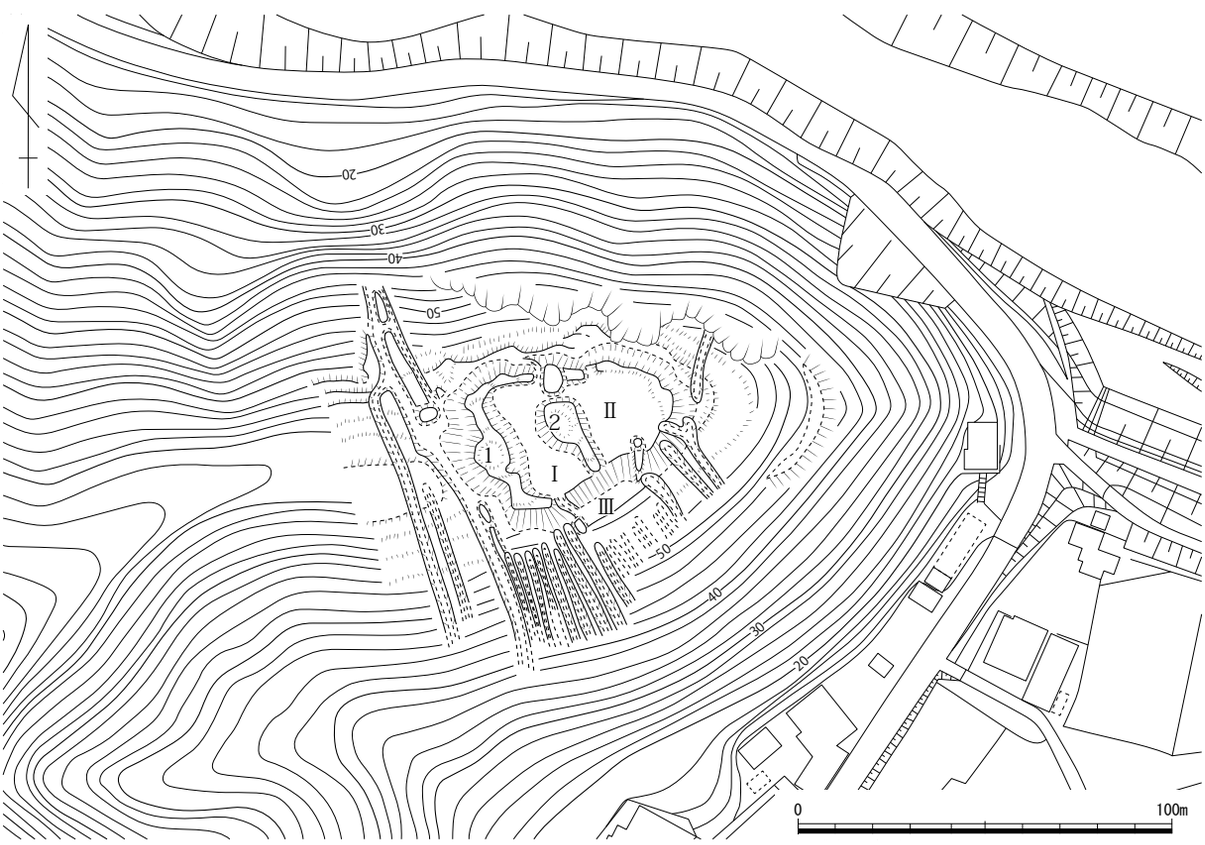
第 239 図　鳥ヶ岳城跡縄張り図（1/2,000）

285　南山城跡（みなみやま）　　倉敷市真備町川辺・船穂町柳井原　　地図 26 右

立地　倉敷市真備町川辺と船穂町柳井原の境界線上に位置する。現在は城の北東で小田川と高梁川が合流しているが、戦国時代当時は城の麓で高梁川が東西二つの流れに分かれていた。また、城は下道郡と浅口郡の境にまたがり、さらに城の東の高梁川は窪屋郡との境にあたっている。城からは北の山陽道方面の眺望が開けるだけでなく、城の東南側には高梁川の渡し場である「明知の渡し」が所在していた。城はこうした要地を一挙に押さえる格好の立地と言える。

概要　城内には曲輪Ⅰ及びⅡとその南に腰曲輪となるⅢの計３面の曲輪が見られる。尾根に面する曲輪Ⅰは、高さ１～３ｍを測る土塁１、２により完全に囲まれている。土塁１の中央は櫓台であったと思われ、城外へ突出する出隅となる。この櫓台の前面には３条の堀切が掘削されている。最も城に近い堀切はｈ字形に分岐し、この分岐点に対しては櫓台、及び土塁１から横矢がかかる。曲輪Ⅰの北及び、南に取り付く虎口が見られるが、いずれも主郭と見られる曲輪Ⅱへは直線的に入ることができず、さらに土塁２の北の隘路を進む以外にない。また、城の南側は緩傾斜となってるが、この地点には 10 本を越える畝状竪堀群が掘削されている。このように、本城は極めて技巧的な縄張りを持っており、その防御線は堅い。なお、平成 29 年度から小田川付け替え工事に伴う発掘調査が行われている。

文献・伝承　『備中府志』では神代に川辺臣百依が築城したとし、天正年中（1573 ～ 93 年）に毛利方の領主、鹽尻縫殿が城代を務めたとする。『浅口郡誌』では堀の構造が猿掛城に似ると指摘した上で、南山城を猿掛城の出城であると記している。　　（和田）



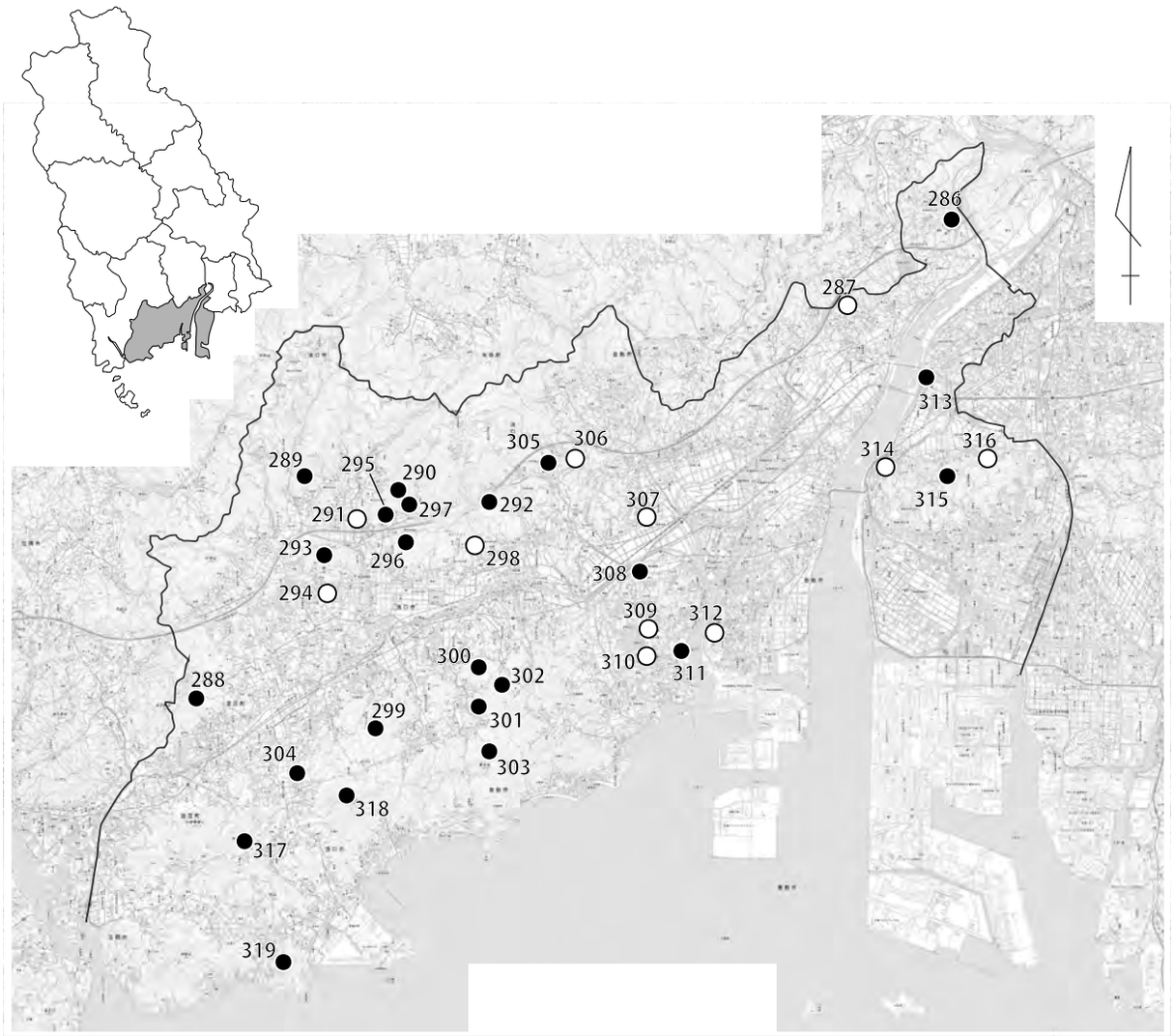
第 240 図　南山城跡縄張り図（1/2,000）

写真 110　曲輪Ⅰ・Ⅱ、土塁１・２（北東から）

写真 111　北側の堀切群（南東から）

写真 112　最も規模の大きい堀切（北から）

第８節　浅口郡



286. 梁場山城跡
287. 后王城跡
288. 鳶尾城跡
289. 杉山城跡
290. 西知山城跡
291. 名称未定
292. 城山城跡
293. 鴨山城跡
294. 石井山城跡
295. 益坂城跡
296. 安芸守山城跡
297. 片山城跡
298. おどえ屋敷跡
299. 泉山城跡
300. 長山城跡
301. 佐方城跡
302. 須恵竜王山城跡
303. 竜王山城跡
304. 土居遺跡
305. 上竹城跡
306. 名称未定
307. 要害山城跡
308. 亀崎城跡
309. 小山崎城跡
310. 畑山城跡
311. 森本松山城跡
312. 水島城跡
313. 片島城跡
314. 西山城跡
315. 大平山城跡
316. 丸山城跡
317. 茶臼山城跡
318. 竜王山城跡
319. 青佐山城跡

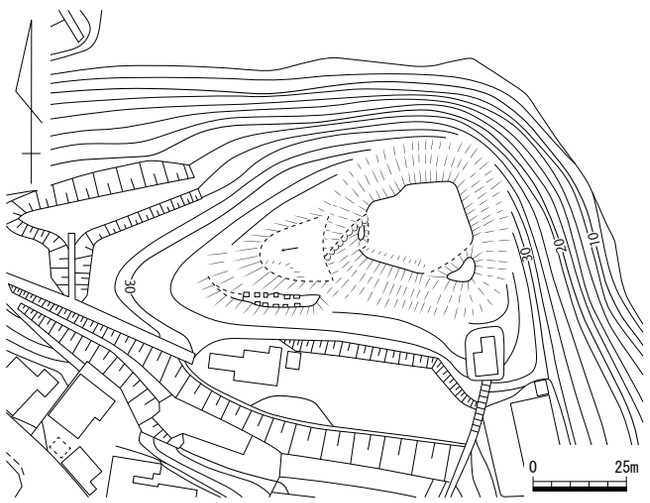
第 241 図　浅口郡城館位置図

286　梁場山城跡（やなばやま）　　倉敷市船穂町柳井原　　地図 26 右

立地　倉敷市船穂町柳井原にある柳井原貯水池沿いの丘陵頂部に位置する。この貯水池は旧小田川の流路にあたっており、以前は城から南へ２㎞の地点で高梁川本流と合流していた。この合流点は『兵庫北関入船納帳』にその名が記される港町、西阿知の北岸にあたっている。

概要　南北約 40 m、東西約 55 mの小規模な城郭である。最高所に平面方形を呈する主郭を据える。主郭の西端、及び南東隅にはそれぞれ高さ２m、1.5 mを測る土塁が遺存している他、主郭南にも土塁の残欠と思われる高まりがあり、南方向への守備を固めていたものとみられる。主郭の西には比高５mの切岸を隔てて爪形の平坦地があるが、造成の痕跡は明確ではなく、自然地形をそのまま利用しているようである。

文献・伝承　『備中府志』には城主として横溝五忠允の名を挙げている。この城を鴨方（鴨山城）の砦とした上で、横溝氏が代々武功を成したことを記す。（和田）



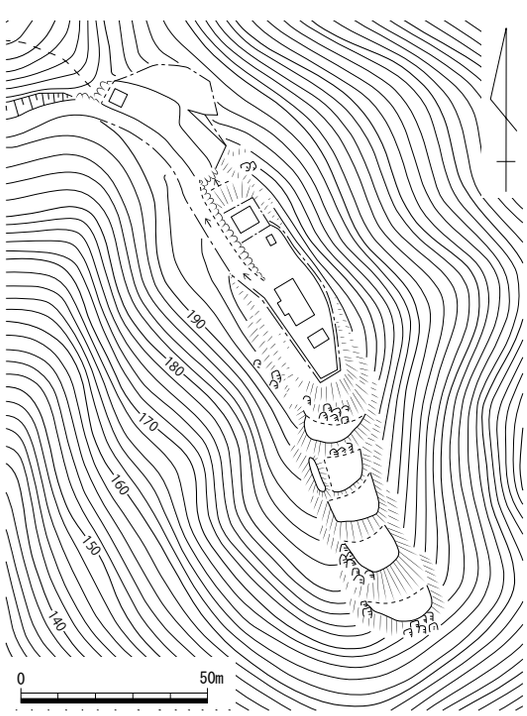
第 242 図　梁場山跡縄張り図（1/2,000）

288　鳶尾城跡（とびのお）　　浅口郡里庄町里見　　地図 29 左

立地　虚空蔵山山塊の南東部に位置する南へ延びる尾根に立地する。南東下の平野や南方の山並みを眺望でき、青佐山城跡の峰を望める。

概要　現在、尾根高所は平らに整地され観音像や拝所、復元された櫓等が設置されているが、ここに長さ約 50 m、幅 10 m前後の主郭を想定できる。主郭から南へ下る尾根筋に階段状に５面の曲輪が認められる。曲輪の切岸の高さは主郭から約８m、２m、0.5 m、0.8 m、６m、２mで、岩盤を掘削した部分もあり、しっかり造っている。下から数えて４面目の曲輪の西縁部には土塁が設けられている。規模は幅約４m、高さ約 50㎝を測る。主郭北側の鞍部は駐車場に造成され、堀切等の有無は不明である。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は、「鳶尾城」口林村とし、当城開基は大内左京太夫義隆、城主井上伯耆守春忠とする。（物部）



第 243 図　鳶尾城跡縄張り図（1/2,000）

289　杉山（すぎやま）城跡　　浅口市鴨方町小坂東　　地図 29 右

立地　現浅口市と矢掛町の境付近にある、標高 300 m級の山塊から南に派生した尾根の先端頂部に位置する。頂部は標高 226 mで「杉山」と呼ばれる。この山城の東西両脇には、合流してやがて鴨方川にかわる谷川が南流している。当城の南側には、鴨山城跡が対峙するような形で立地する。

概要　頂部にある長さ 50 m、幅 20 mを測る大きな主郭を中心に、３方向に派生する尾根筋に曲輪を連ねる山城である。当城の規模は、主郭南西側の曲輪群の先端から、主郭北側曲輪の先にある堀切までの約 300 mになると思われる。当城はかつて石取り場であったらしく、主郭の北側から北側曲輪にかけて大規模に削平されている。そのため主郭の北側斜面も大きく失われている。主郭の四周は露岩が切り立っており、約 10 m前後の高さを持っている。現在主郭には、軍神社が建っている。

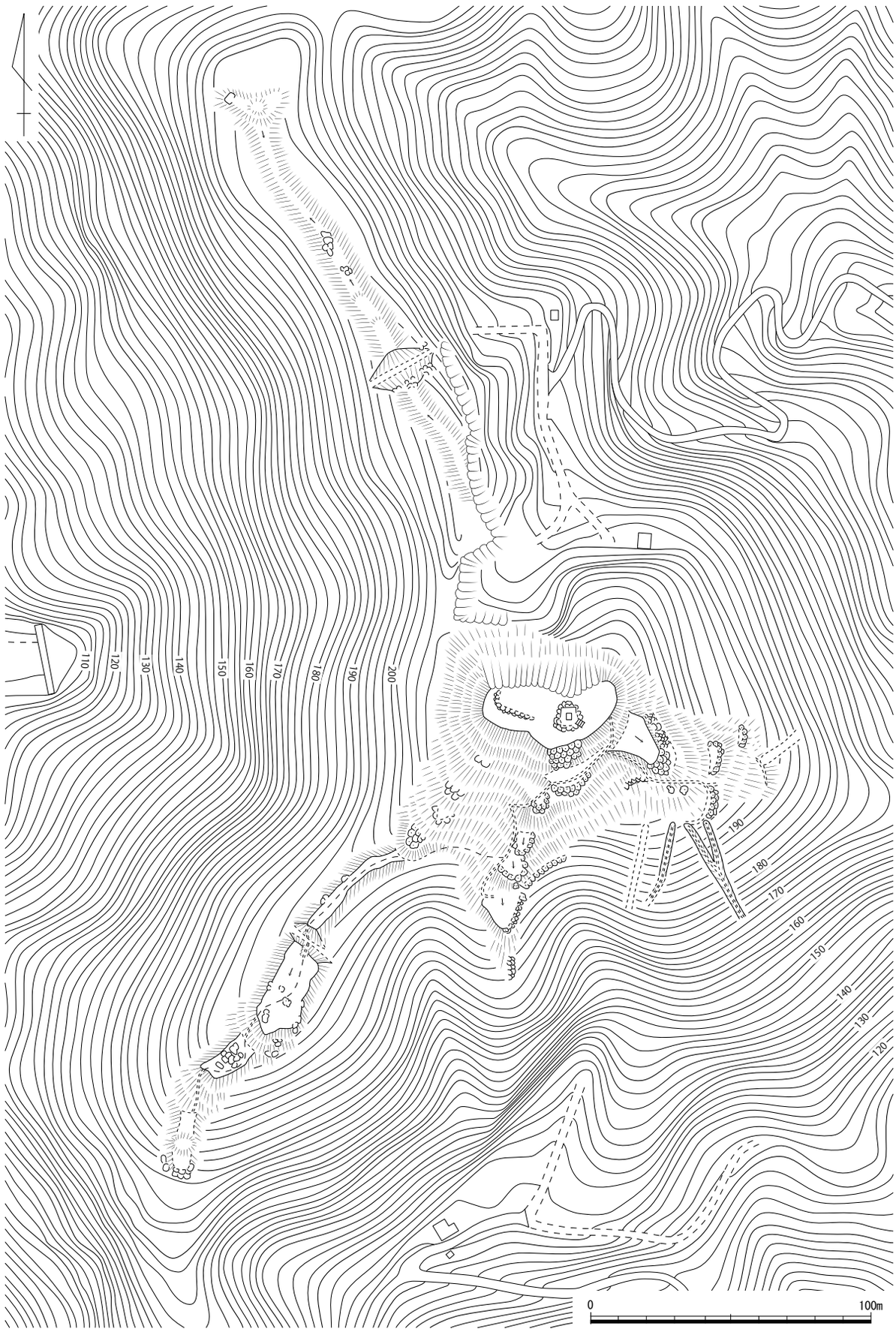
主郭南西方向の曲輪群は、細尾根上に立地する。主郭から約 20 m下った箇所から始まり、約 40 mの長さの曲輪があり、幅約８mの堀切が配される。その先にも長さ約 35 m、幅約 15 mと大きい曲輪が築かれ､その先にも２面ほど曲輪が続いている｡この尾根筋を下ると麓には現在の軍神社が建っており、この方向が本来入り口として意識されていた可能性がある。主郭南東側の尾根筋には、約 10 mの切岸直下に長さ約 15 m、幅約 15 mの曲輪があり、露岩によって切岸としている。その先にも露岩を利用した小さい曲輪が続き､最終的には南斜面に向けて４本の竪掘が配され守りとしている。またこれら南西方向と南東方向の尾根筋の間の中間にある張り出し部分にも曲輪群が続く。その先端部の曲輪は、長さ約 15 m、幅約 15 mの曲輪が配され、この曲輪の東岸には、約 1.5 mの石垣が残されている。この石垣の脇には虎口状に開いた露岩があるが、これがこの城の入り口であったかどうかは判然としない。主郭北側の曲輪は、堀切に至る手前に１面のみ存在する。丁度この部分は石取りによるかく乱に当たっており、本来は、さらに主郭側に曲輪があった可能性が高い。

当城は全長が 300 m前後になる大型の山城であり、また大型の主郭をも備えた地域の拠点的な城館であったと思われる。当城は、主郭に露岩を利用して高い切岸を構成するのが最大の特徴である。

文献･伝承　別名「要害山城」と言われる。『備中村鑑』では､東小坂村にあり城主小坂越中守とされる。細川氏が備中国守護の際には、河田紀伊守陸長が在城した。また細川通董が竜王山城から移ったとされる。備中が毛利氏の支配であった時期は、小坂宗左衛門経通が在城した。　　（小林）

写真 113　遠景（南から）

写真 114　主郭南西曲輪群の石垣（南から）



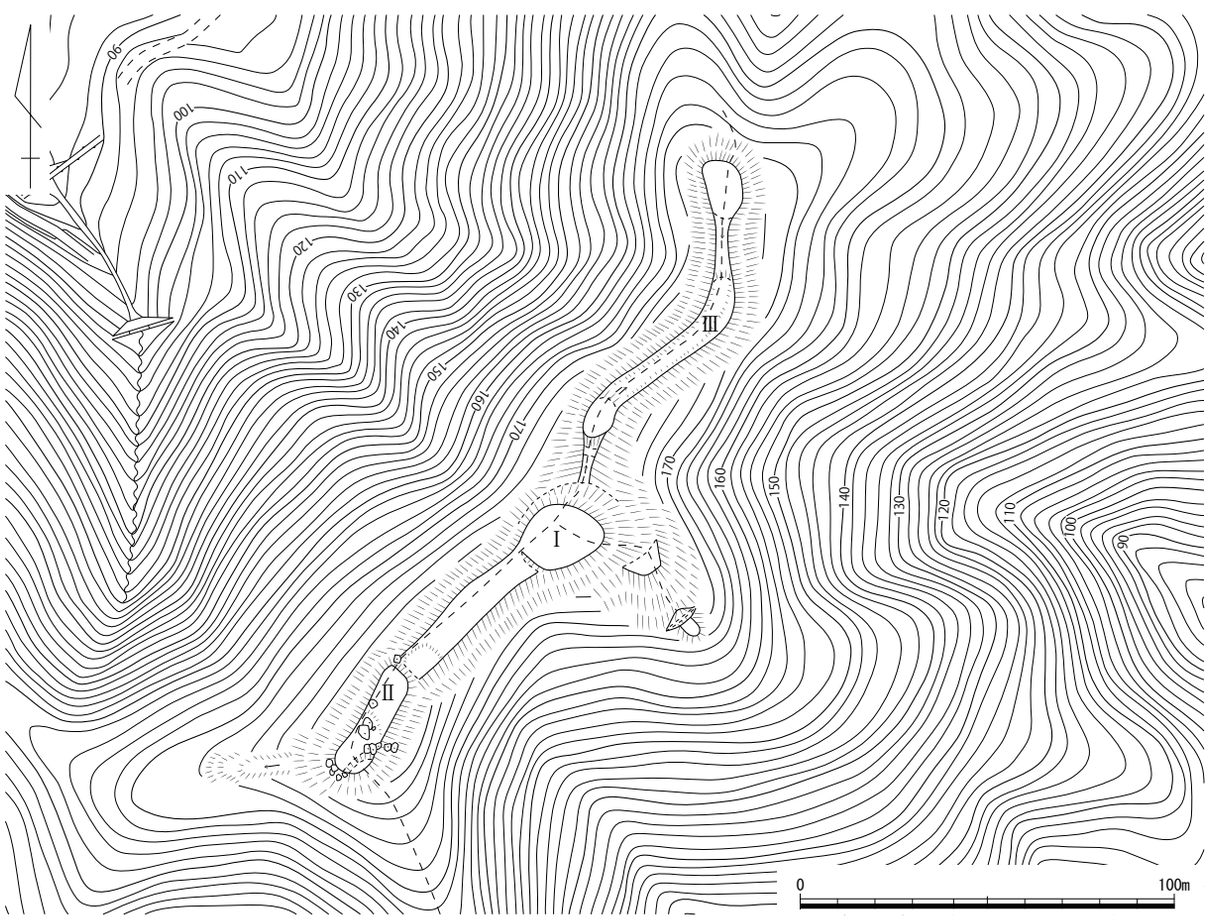
第 244 図　杉山城跡縄張り図（1/2,000）

290　西知山（にしちやま）城跡　　浅口市鴨方町地頭上・益坂　　地図 29 右

位置　浅口市鴨方町地頭上、益坂地区にまたがる標高約 180 mの山塊頂部に位置する。城の西から北にかけての山麓に県道 64 号線が走る。この道は鴨方地区中心部を東西に横切る鴨方往来から矢掛町中心部、すなわち山陽道へ向かって南北に抜ける間道である。城はこの間道を見下ろす要衝にある。

概要　城は東西 180 m、南北 120 mを測る中規模の山城である。その中央に主郭となる曲輪Ⅰを据える。曲輪Ⅰは東西南北とも約 20 mを測る小形の曲輪である。この曲輪を中心にして、城域は細長い尾根上を南北方向に展開している。主郭のすぐ東に台形の曲輪が一面見られ、そこから 5 mほど下った位置に堀切を設ける。主郭から南西方向に向かっては、40 m程平坦面が続き、さらにその先端に曲輪Ⅱが位置する。周囲には多数の露岩が見られ、一部が列石状をなす。しかし、今回の調査の結果、これらは横穴式石室の石材を転用したものであることが判明した。主郭北東には堀切様に見える地形の下がりがある。さらに北へ向かって曲輪Ⅲが続く。この地点の造成はやや不明瞭であった。城域北端には、幅 10 m、長さ 15 mほどの隅丸方形の広場があるが、南側の境は明瞭でない。

文献・伝承　『備中府志』では城主として生石中務の名が挙げられている。ここでは、天正 10（1582）年に加茂城の城将であったとする。『浅口郡誌』では『別所長治記』等を引き、中務が芸州（安芸国）の住人であったと記している。　（和田）



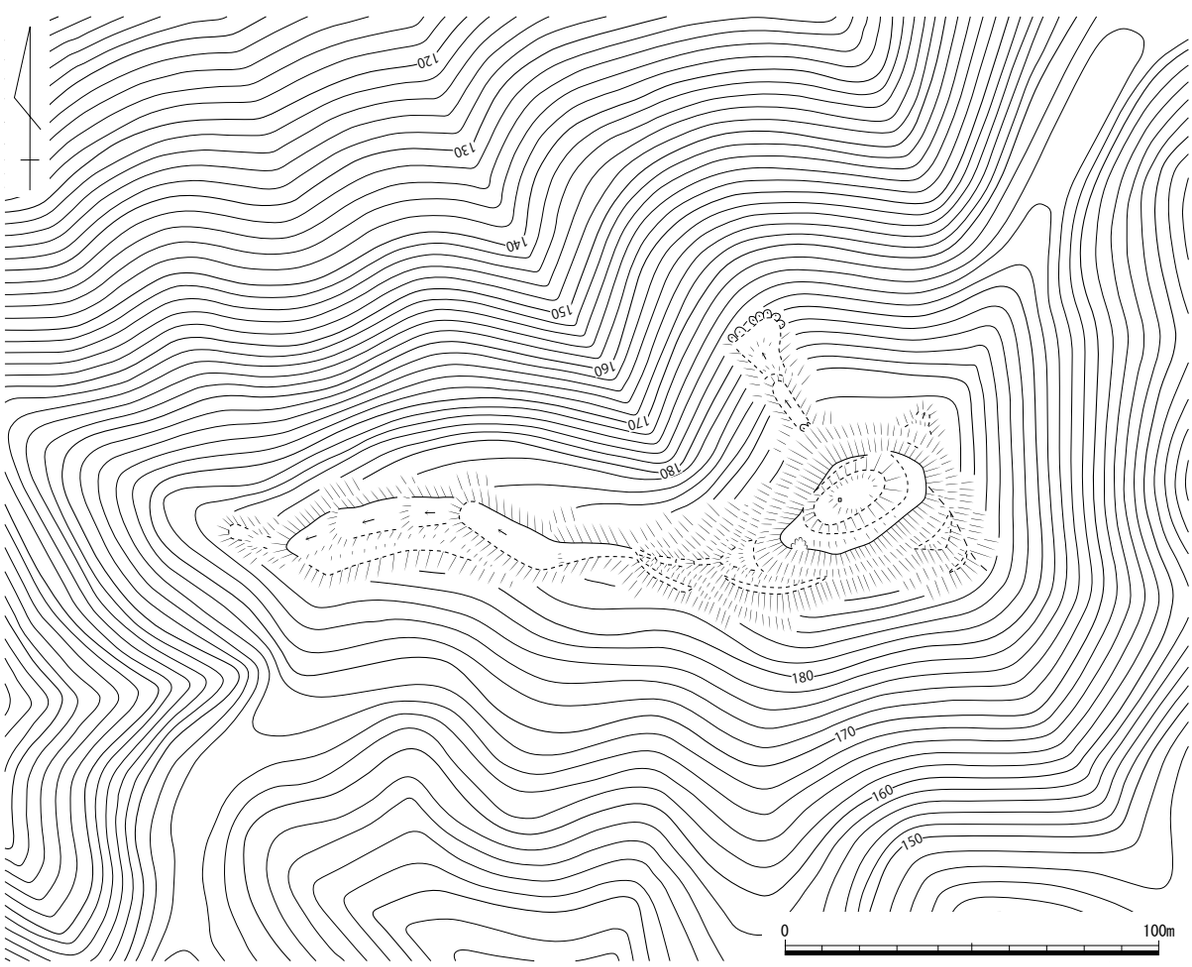
第 245 図　西知山城跡縄張り図（1/2,000）

292　城山城跡（じょうやま）　浅口市金光町占見新田・金光町上竹　地図 29 左

立地　遥照山から南に下った箇所で、鴨方町阿坂の谷筋と金光町阿坂の谷筋に挟まれた標高約 190 mの城山頂部が該当する。頂部からは、南側にある現浅口市金光町の町並みが広く見渡せる。

概要　東西に細長い尾根筋に曲輪を築いた全長約 200 mの山城である。頂部にある主郭は、長さ約 40 m、幅約 20 mの規模である。規模の割には平坦面をしっかり作り出すことはせず、中央付近には高まりが残り､その周辺を曲輪として造成している。城全体を見ても自然地形のままの部分が多く、全長の割に各曲輪の造作ははっきりしないものが多い。城の構造としては、主郭の西側へ張り出す尾根筋に曲輪を連ねている。主郭直下は 10 数mの落差間に小さい曲輪状の段差がいくつかあり、南側には帯曲輪状の施設がある。これらのさらに西側に、長さは約 50 mと約 40 mの平坦面が曲輪状に連なっている。両者とも、北側辺の造作はしっかりしているが、南側辺は曖昧である。また主郭の北側と南東側の尾根筋にも曲輪状の施設が続いている。当城は全長こそ大きいが、各施設の造りは甘い箇所が多い。自然地形を生かして簡単な造作のみですました感がある。このような造りの山城は、浅口市内の竜王山城跡、杉山城跡、西知山城跡なども共通した要素であり、関連性が考えられる。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。　（小林）



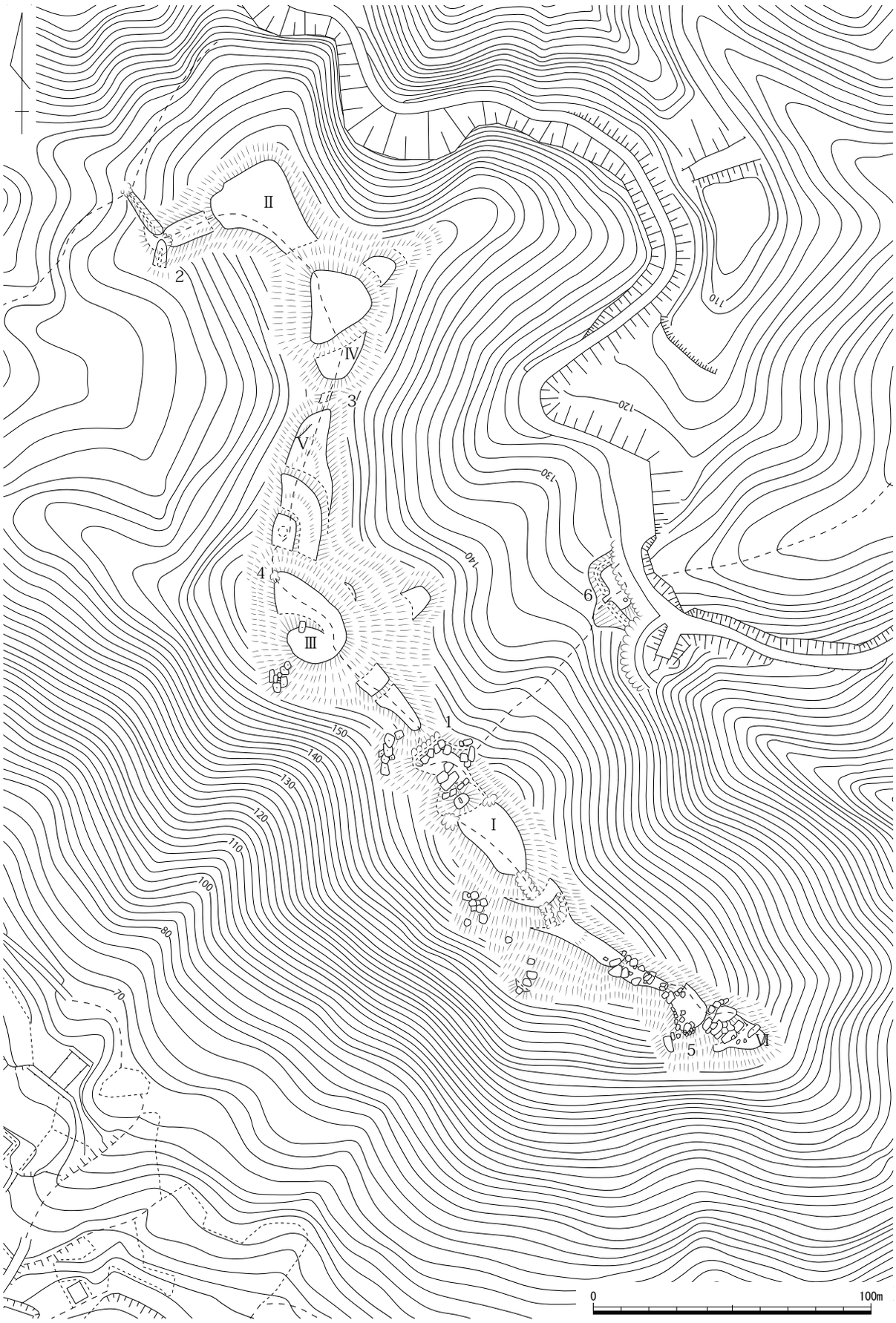
第 246 図　城山城跡縄張り図（1/2,000）

293　鴨山（かもやま）城跡　　浅口市鴨方町鴨方・深田・小坂東・本庄　　地図 29 左

立地　浅口市鴨方町鴨方の旧市街の北嶺、標高 160 mの鴨山山頂に位置する。後述するとおり、本城は毛利氏の庇護下で浅口郡及び小田郡の一部を領した細川野州家当主、細川通董の居城である。城からは特に南方向に対する眺望に優れ、通董が鴨山城入城前に居城とした青佐山城跡、竜王山城跡だけでなく、支城とされる泉山城跡、佐方竜王山跡城等を見据えることができる。城下南麓には通董の菩提寺である長川寺が所在し、さらに下れば、江戸時代に山陽道側道として機能していた鴨方往来へ至る。加えて城域南東麓には矢掛、すなわち山陽道へ通じる間道と鴨方往来との交差点も所在している。本城はこうした街道筋の押さえを睨んだ、浅口郡域でも随一の要衝にあると言える。

概要　本城の城域は東西約 150 m、南北約 350 mを測り、浅口郡域では最大の山城である。城は最高所に主郭となる曲輪Ⅰを配し、南北に階段状に曲輪を連ねる連郭式山城である。南北に延びる鴨山山頂を尾根筋に沿ってほぼ完全に城域化しているが、城域中央にある地形の下がり１（これを堀切と見る見解もある）を境に、その様相はかなり異なっている。端的に述べれば、北半は大規模に造成を行い、面積の大きな曲輪を連ねるが、南半は曲輪Ⅰを除くと明確な造成痕跡を見いだしがたく、自然地形をそのまま利用している状況が見て取れた。ここでは北曲輪群と南曲輪群と呼称し、その詳細について述べる。まずは北曲輪群から見ていこう。北端には堀切２を掘削して、城域を画している。堀切２の中央は土橋状に掘り残されている。その東に一面曲輪を挟み、城域最大となる曲輪Ⅱ（通称大曲輪）が位置する。その規模は東西、南北とも 30 mを測る。この曲輪から北曲輪群の最高所となる曲輪Ⅲまで､都合６面の曲輪が設けられている。いずれも長さ 30 m近い曲輪であり､曲輪Ⅲの北には、井戸かと見られる窪み４も見られることと併せて考えれば、兵の駐屯地、あるいは居住域であった可能性が想起される。なお、曲輪ⅣとⅤの間にも地形の下がり３があるが、ここを堀切と見ることも可能かもしれない。続いて南曲輪群について述べる。最高所にある曲輪Ⅰの北に接して高さ約２mの高まりが見られるが、これは形状から見て櫓台として機能したものであろう。曲輪Ⅰから城域南端へ向かって６面の曲輪が続く。だが、尾根の形状に合わせるかのように、先端に向かうにつれ細長くなっている。この地点には露岩が多数見られ、明確な造成の痕跡は見いだしがたい。最南端の曲輪Ⅵ後背の露岩には磨崖仏が刻まれており、修験道に関連する信仰施設となっていたようである。また、高さ 0.5 ～ 1 mを測る石積み５が見られる。この石積みの天端は、曲輪上面に達している。こうした、北曲輪群と南曲輪群の差異はいかなる要因により生じたものであろうか。一つの可能性として、もともと信仰施設、あるいは自然地形をそのまま取り入れた古様の城郭が存在していたものを、新しい時期に北半部のみ改修した可能性が想定できるのではないか。なお、東から続く尾根を切断する様に堀切６が掘削されている。この堀切は深さ５mを測り、城域では最大規模の堀切となっている。

文献・伝承　意外なことではあるが、本城に関する一次文献は知られていない。長川寺に伝わる『鴨山城由緒』に拠れば、応仁年間から永禄年間に備中国細川氏被官団が、伊予国川之江城にいた細川通董を浅口郡の太守として、天正３（1575）年に鴨山城へ迎えたとされる。通董は細川満国に始まる細川野州家７代目の当主である。通董は元亀元（1570）年頃には安芸国毛利氏の被官となっていたことがわかっている。なお、前掲の『鴨山城由緒』には、通董が鴨山城に入城した際、城の改築が行われたことが記されている。　（和田）



第 247 図　鴨山城跡縄張り図（1/2,000）

写真 115　遠景（南から）

写真 116　石積み 5（南から）

写真 117　曲輪Ⅰ（南から）

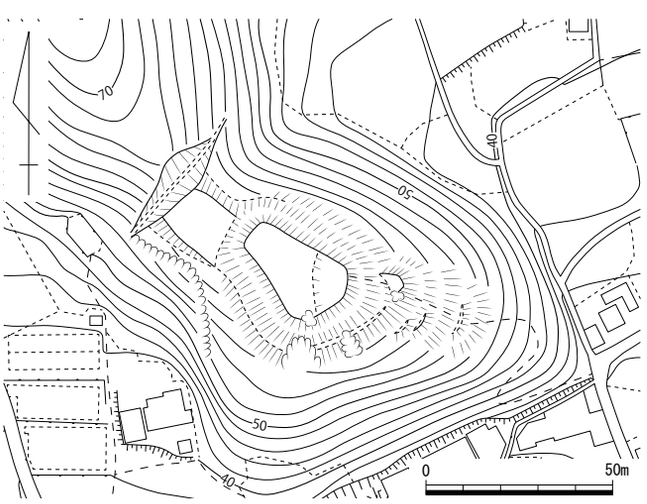
写真 118　北東端の曲輪（南西から）

295　益坂（ますさか）城跡　　浅口市鴨方町益坂　　地図 29 左

立地　浅口市鴨方町益坂の標高 60 mを測る山塊端部に位置する。この地点の小字は城山であり、古くから城跡として認知されていたものと見られる。城は益坂集落に対して北から突出するように築かれている。益坂集落は、鴨方から矢掛へ抜ける南北の道と、現在は広域農道となっている、玉島と笠岡をつなぐ間道の交差点近くにあたっている。さらに城の後背には西知山城跡が所在し、これと連動して機能していた可能性を想定できる。

概要　城域は東西約 80 m、南北約 60 mを測る小形の城郭である。最高所に東西約 30 m、南北約 25 mの主郭を設ける。主郭は比高 5 mを測る切岸により突出している。主郭南側から西にかけては犬走りが見られる。主郭西側にも一面曲輪が見られる。この曲輪後背は深さ 4 mを超える堀切により、城域を画している。

文献・伝承　『日本城郭全集』10 巻ではこの城の城主として原田和泉守忠次の名を挙げている。　（和田）

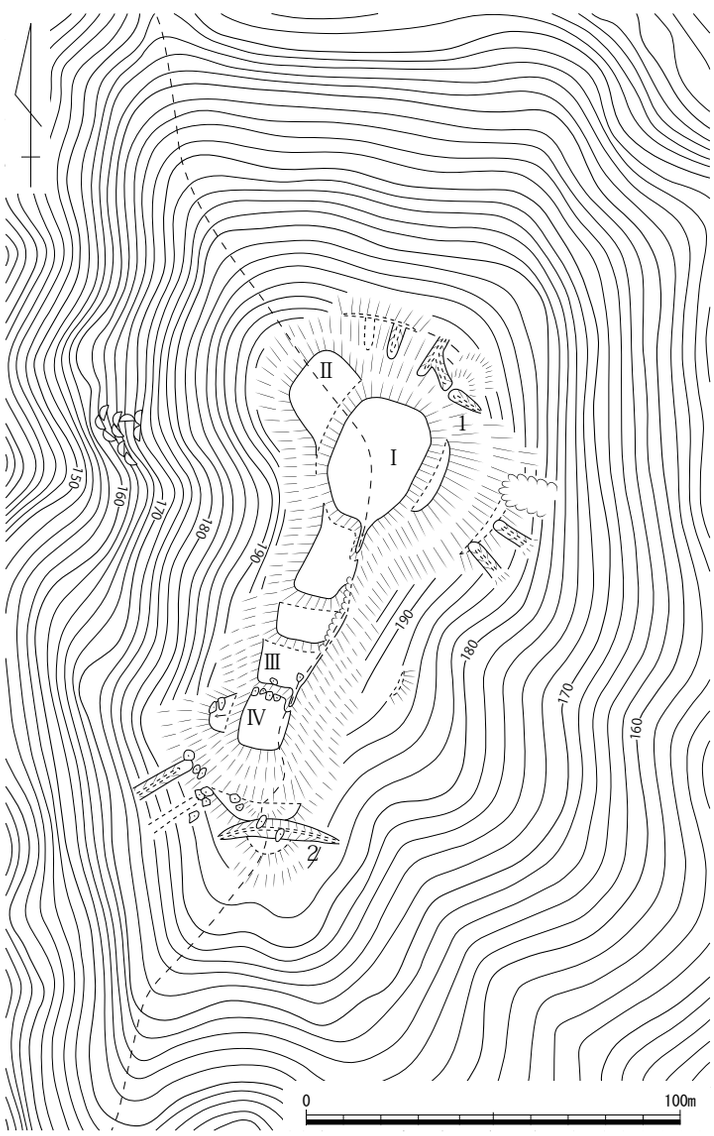


第 248 図　益坂城跡縄張り図（1/2,000）

296　安芸守山城跡（あきのかみやま）　浅口市金光町地頭下　地図 29 右

立地　浅口市金光町地頭下に所在する、標高 200 ｍを測る山塊頂部に位置する。城は城下にあたる地頭下集落に対する眺望に優れ、旧鴨方往来に対して突出している。城の西には矢掛、すなわち山陽道へ抜ける間道が所在し、城の南西で旧鴨方往来と交差している。さらに西へ２㎞の山塊頂部には、浅口郡域では最大となる鴨山城跡が位置しており、これとの結びつきを想起させる。ただし、鴨山城跡に比して安芸守山城跡の標高は高く、安芸守山城跡からは鴨山城跡を見下ろす状況となっている点は注視すべきである。以上、安芸守山城跡は備中南部における陸上交通を押さえる要地に当たり、鴨山城跡とも連動した軍事的機能を有していたものとみられる。

概要　城域は南北約 140 ｍ、東西約 100 ｍを測り、その北端と南端をそれぞれ堀切により画している。全部で７面の郭面と腰曲輪からなる連郭式山城である。城域最北にある堀切１は深さ１ｍ程の小規模なものである。その中央部分は土橋状に掘り残されている。さらに西端は竪堀と連接している。城域の最高所に主郭Ⅰを据え、その北西に一面の曲輪Ⅱが接している。主郭Ⅰの東には約３ｍ下がった位置に腰曲輪が設けられている。この腰曲輪の東には、これへ向かうように竪堀が２本掘削されている。主郭から南に向かって連続的に曲輪が続いており、それぞれ比高差約２～３ｍを測る切岸により画されている。各曲輪面の長さは約 10 ～ 15 ｍ程で、平面は台形を呈している。南端の曲輪ⅢとⅣの間の切岸下端には自然石を並べた列石が残る。その一部が立石となっている点は見逃せない。曲輪Ⅳの南は比高差約８ｍを測る厳しい切岸となっている。さらにその先に堀切２を設け、南からの侵入者を遮断する。



第 249 図　安芸守山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　『備陽国誌』では城名を城山城とした上で、城主として安芸守の名を挙げている。『浅口郡誌』では毛利氏旗下の武将、宍戸安芸守隆家を城主とするが、字は益坂とあり、この城のことを指すかは判然としない。（和田）

写真 119　遠景（南東から）

写真 120　曲輪Ⅲ下端列石（南西から）

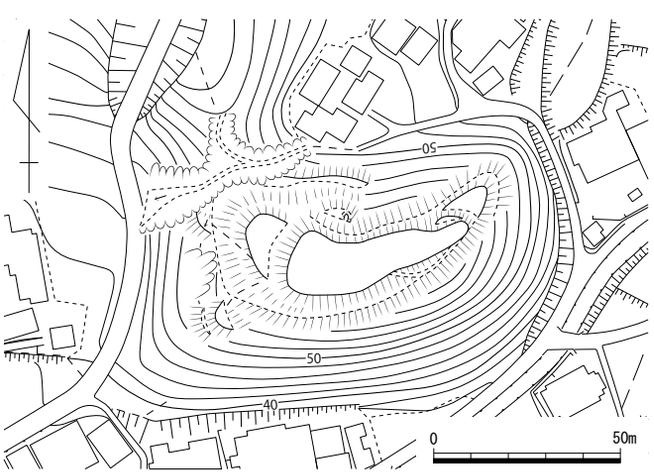
写真 121　曲輪Ⅰ（北東から）

写真 122　曲輪Ⅰから南西を望む

297　片山（かたやま）城跡　　浅口市鴨方町益坂　　地図 29 右

立地　西から東へ延びる丘陵端頂部標高 64 mに立地する。比高差は 20 mと高くないが、南側の阿坂川に対して見通しが利く位置にある。直線距離で北東側 400 mの山頂に西地山城跡、阿坂川対岸で南側 700 mの山頂に安芸守山城跡が位置する。

概要　頂部は東西の長さ 50 m、南北が最大 17 mの曲輪である。その西２m下に南北 16 m、東西７mの曲輪、東４m下には長さ７mの曲輪を設ける。これらの周囲の斜面は切岸を構築しており、傾斜の緩い部分には爪形の曲輪や腰曲輪状の段を設けている。北東側の丘陵と接する尾根鞍部には、現在深さが最大８mになる切り通しの道が東西に通っている。元々この位置にあった堀切を拡張して道にした可能性が高い。当城は西地山城跡から山を下った位置で、安芸守山城跡とも近く、それらとの緊密な関連が想定できる。



第 250 図　片山城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　故事来歴は不明。　（氏平）

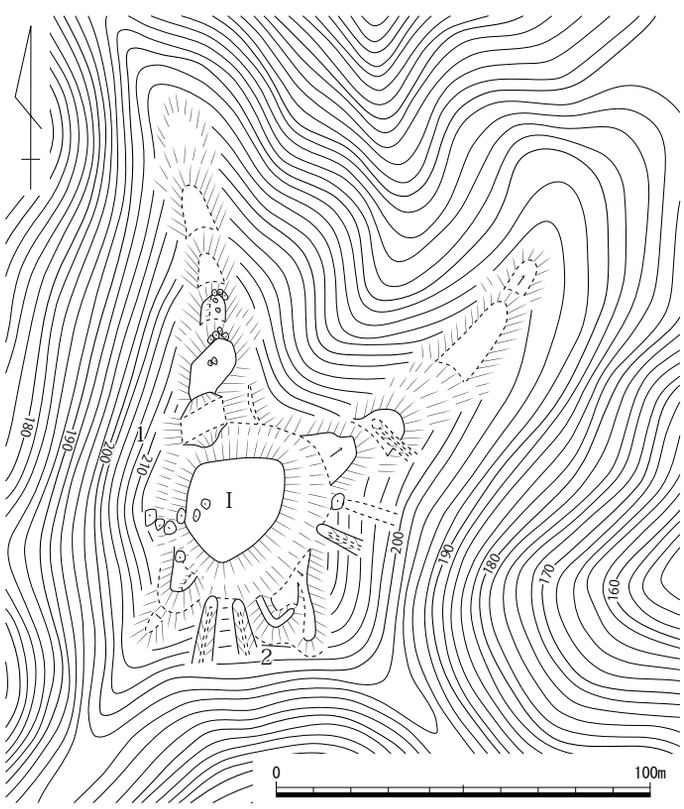
299　泉山城跡（いずみやま）　浅口市鴨方町六條院中　地図 29 右

立地　鴨方町浅口市六条院中の通称城山の山頂に位置する。城の北麓には備中国でも有数の規模を誇る天台宗寺院明王院があり、これとの関係が想起される。なお、浅口市域で最大規模の山城である鴨山城跡が北 3.5㎞の位置にあるが、この方向への眺望は開けていない。城の東は六条院東地区にあたり、ここには現在の浅口市鴨方町中央部から、寄島町の海岸部へ抜ける間道が南北に延びている。本城はこうした陸上交通を押さえるだけでなく、宗教施設の防御も兼ねた要地にあたると考えられる。

概要　城山山頂に主郭となる曲輪Ⅰを据え、そこから北と北東方向及び南西と南の曲輪を連ねる連郭式山城である。主郭となる曲輪Ⅰは平面五角形を呈し、全方位に対して防御面をなしている。曲輪Ⅰは周囲から比高８ｍを測る切岸により突出している。曲輪Ⅰの北には堀切１が掘削されている。主郭からの比高差は６ｍを超える。堀底が平面となる箱堀で、この方向からの侵入者を強力に遮断している。堀切１から北へも曲輪が連続しているが、先端に向かうにつれ、その造成は不明瞭となる。主郭の北東へも何面かの曲輪が見られるが、こちらも先端の曲輪の造成は不明瞭となる。いずれも自然地形を取りいれつつ、郭面を構成しているものだろう。主郭の南側にも曲輪が見られるが、竪堀と連動して機能していたものとみられ、特に土塁２は竪堀に対して横矢が掛けられるように築かれている。このように、本城は主郭を防御の中核に据え、尾根地形と堀切、竪堀と土塁を組合わせた、効果的な防御線を形成していると言えるだろう。

写真 123　遠景（南から）

文献・伝承　この城の城主として、江戸後期に成立した『備中誌』で「秋田左衛門尉同九右衛門」の両名が挙げられている。『六条院町史』では、秋田左衛門尉を細川通董家臣一覧に見える、秋田三河守に擬している。この一覧には同じく秋田右衛門尉の名が記されており、これが血縁関係にあったとみられる同（秋田）九右衛門のことを指すか。いずれにせよ、鴨山城を本城とする細川通董の被官であったものと考えられている。（和田）



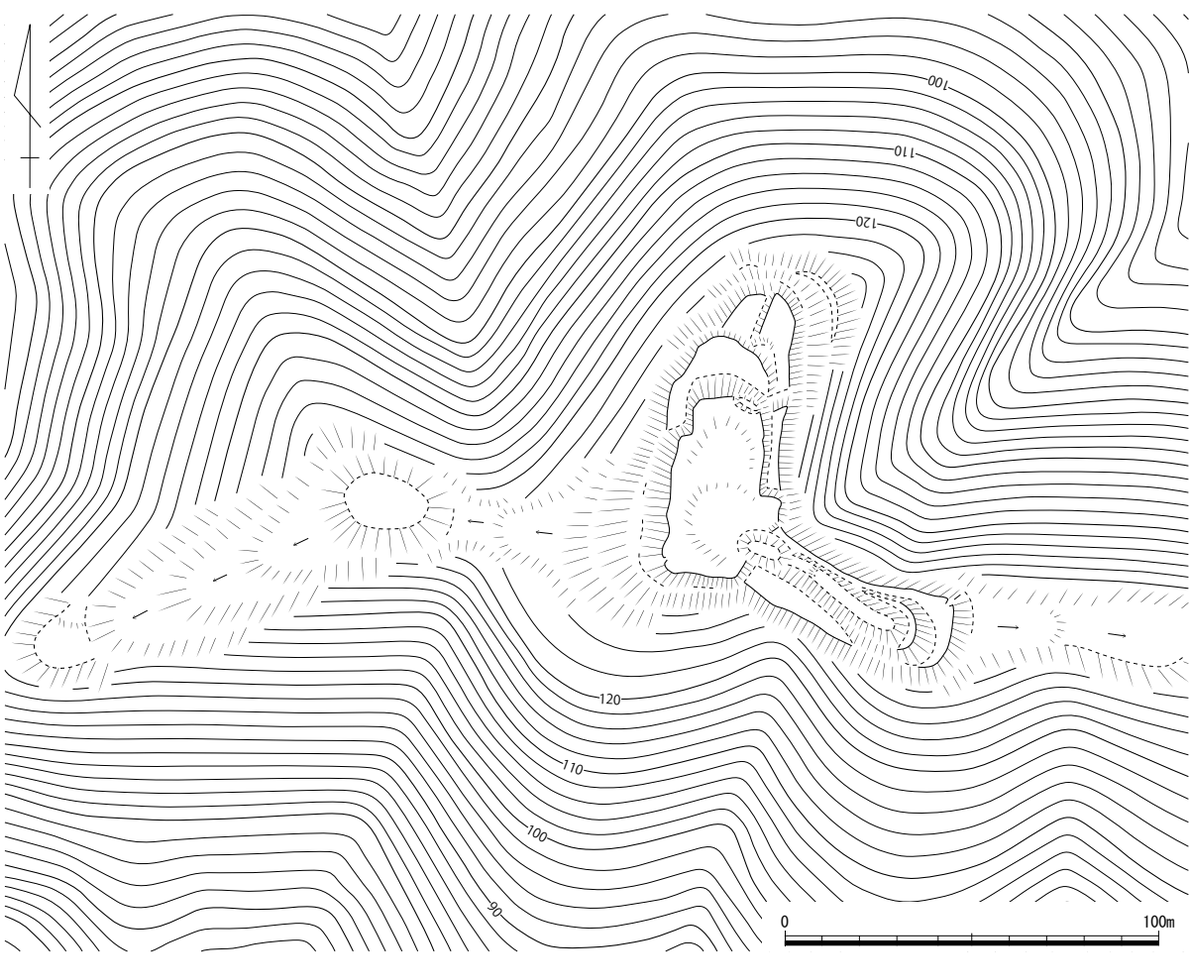
第 251 図　泉山城跡縄張り図（1/2,000）

300　長山城跡（おさやま）　浅口市金光町佐方・金光町須恵　地図 29 右

立地　金光町佐方と金光町須恵の谷筋を流れる小川に挟まれた寄島山地の北端にある尾根頂部に位置する。当地より南側背後にある山塊には、須恵竜王山城跡、佐方城跡、竜王山城跡が密集して存在する。

概要　頂部に主郭を置き、そこから派生する北側尾根筋と東側尾根筋上に曲輪を配した連郭式の山城である。全長は東西長約 100 m、南北長約 90 mを測る。主郭の規模は、長さ約 50 m、幅約 25 mと大きく方形を呈する。しかし随所に自然地形が残り、造作は甘い。北側端には土塁状の高まりが残る。主郭から北側の曲輪群は大きくは２面で構成される。１面目は長さ約 10 m、幅約 30 mで、帯曲輪状に主郭を挟んでいる。主郭との間の切岸は、高さ約 2.5m としっかりしている。２面目は長さが約 20 mあり、自然の地形を残すが、先端部分は切岸をしっかり造る。東側筋の曲輪群は、大きくは２面で構成される。特に１面目には主郭端から続いた高まりが約 45 mの長さで伸びる。幅は５m弱あり、高さは 1.5 mほどである。土塁状を呈している施設であるが、地形を遮断しておらず、地山掘り残しの可能性もある。なおこの曲輪群の東側先にも尾根筋が続いているが、自然地形に近い平坦地である。また主郭西側にはもう一つの頂部があるが、あまり造作は激しくない。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていないが、当地は地元で「城が平」と呼ばれている。　（小林）



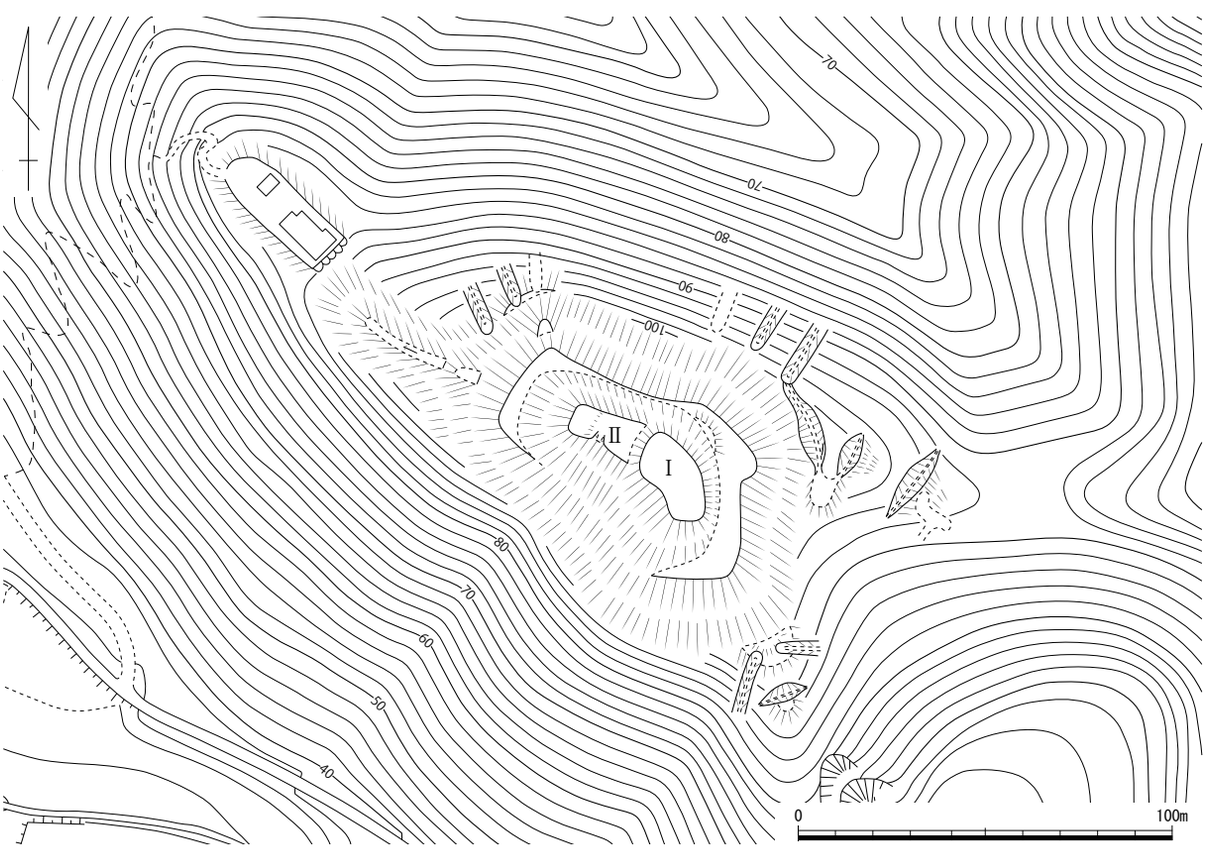
第 252 図　長山城跡縄張り図（1/2,000）

301　佐方（さがた）城跡　　浅口市金光町佐方　　地図 29 右

立地　浅口市金光町佐方の通称城山の山頂に位置する。本城の北１㎞には長山城跡が、南に続く山塊上に竜王山城跡が位置し、同じ佐方地区に三つの城がひしめいている。この３城はいずれも県道471 号、すなわち鴨方町六条院東から寄島町南浦へ抜ける間道沿いにあり、浅口郡中枢部から海浜部へ至る道筋を押さえる要衝にあたると言えるだろう。

概要　城域は東西約 180 m、南北 150 mを測る。最高所に主郭となる曲輪Ⅰを据え、北西に一段下がった場所に台形の曲輪Ⅱがある。この二つの曲輪が本城の主要郭面であったようで、その西、北、東方向に腰曲輪が取り付いている。腰曲輪からは比高５mを測る切岸により突出している。曲輪Ⅱの南面には虎口が設けられてるが、これに取り付く城道が見られず、後世の改変である可能性もある。曲輪Ⅰ東には腰曲輪を挟んで３条の堀切が掘削されて、後背の丘陵からは完全に切断されている。さらに北側にも竪堀を巡らし、守りを固めている。曲輪Ⅱの北西にも腰曲輪を挟んで２～３本の竪堀が掘削され防御線をなす。また、主郭北西の尾根筋にある石鎚権現社も元々は城域の一角を成していたか。

文献・伝承　本城は『浅口郡誌』に見える「山麓に諏訪神社あり」とされる、佐方古城のことだと考えられる。ここでは城主不明とされるが、『備中府志』には佐方村の古城を挙げ、建武年間に佐井七郎、天正年中には村上源三郎武満が城主であったとする。なお、この佐方村の古城であるが、竜王山城のことを指す可能性もある。なお、『金光町史』ではこの説を採用した上で、地元では鴨山城主細川通董の被官であった、藤沢姓の一族が在城したと伝わることを紹介している。　（和田）



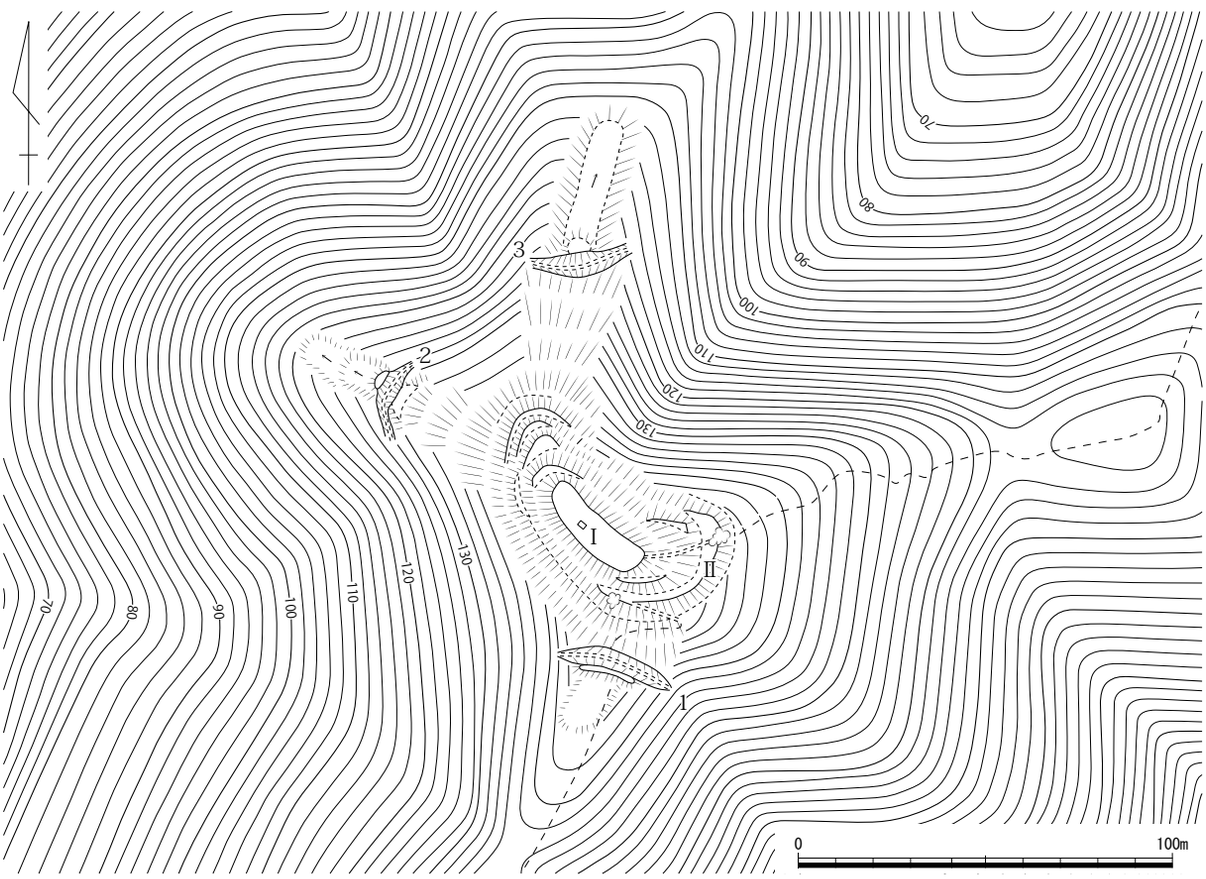
第 253 図　佐方城跡縄張り図（1/2,000）

302　須恵竜王山城跡（すえりゅうおうざん）　浅口市金光町大谷　地図 29 右

位置　浅口市金光町大谷の山塊頂部に位置する。金光町須恵集落の南最奥部に位置しており、この集落方向への眺望に優れる。また、本城は戦国時代当時の海岸線付近と想定される倉敷市柏島から直線距離で約３㎞の位置にある。加えて、城の南東麓に所在する寂光院の庫裏は、塩飽諸島の牛島にあった塩飽水軍屋敷を一部移築したと伝わる点も興味深い。本城は須恵集落の守りの要であっただけでなく海岸線付近の押さえをも睨んでいたか。

概要　最高所に主郭となる楕円形の曲輪Ⅰを配し、ここを中心にして、北、北西、南の三方向へ曲輪を連ねる山城である。主郭周囲は、比高３ｍを測る切岸を切り、突出している。曲輪Ⅰの東から南にかけて、腰曲輪Ⅱが見られる。曲輪Ⅰの南には堀切１が掘削されている。その高さは２ｍ程で、その南側は土塁状に高まっている。土塁から南は自然地形となるようで、明確な造成痕跡は見いだしがたい。主郭北東にも曲輪が連なる。これらは犬走り状の小曲輪であり、城域北、及び北東方向からの侵入者に備えたものであろう。この小曲輪群を防御の起点として、北東方向に約５ｍ下った位置に堀切２が、北方向に約８ｍ下った位置に堀切３が掘削されている。いずれの堀切も城外側は土塁状の高まりが見られる。いずれの土塁状の高まりのさらに外側にも平坦面が続いている状況を見て取れたが、切岸の造成など、加工の痕跡は判然としない。自然地形を曲輪として取り入れたものと考えたい。

文献・伝承　本城に関連する文献、伝承等は知られていない。　（和田）



第 254 図　須恵竜王山城跡縄張り図（1/2,000）

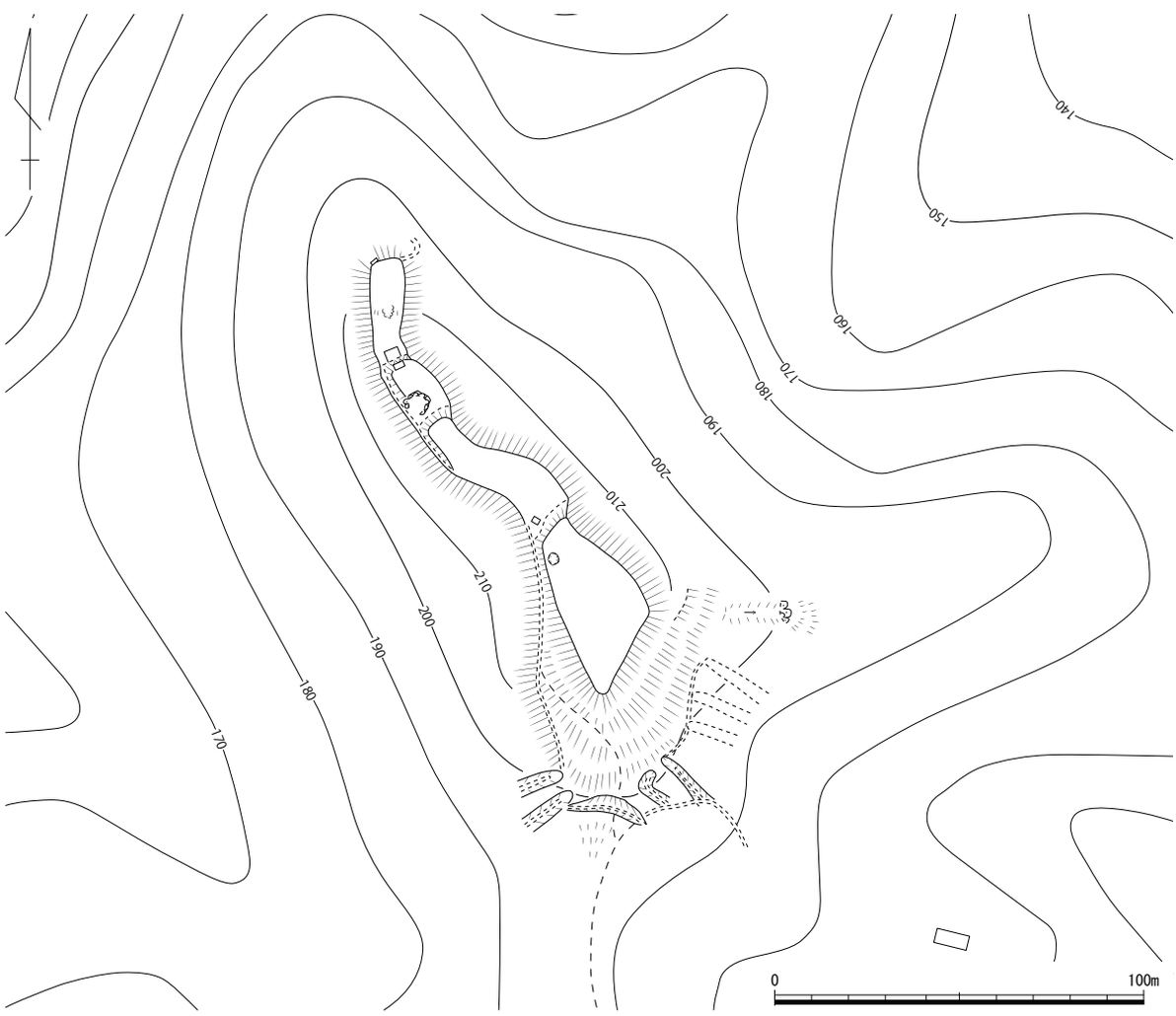
303　竜王山城跡（りゅうおうざん）　　浅口市金光町佐方　　地図 29 右

立地　金光町佐方の集落から南東へ約 800 m、竜王山頂より北東へ約 300 m離れた標高 218 mの山頂に位置する。南東側に高梁川の河口と塩飽諸島、東に連島を望むほか、ほぼ全周の眺望に優れる。

概要　南から北へ下る山頂平坦面に 4 つの曲輪を設ける連郭式山城で、南端に深さ 2 mの堀切 1 条、その東西に山塊を取り囲むように竪堀が 4 本程度確認できる。最南端の曲輪は南北 50 m、東西 23 mの三角形状を呈し、その北の曲輪は長さ 40 m、幅 13 mの不整形、もう 1 つ北側の曲輪は長さ 18 m、幅 11 mの方形、最北端の曲輪は長さ 27 m、幅 9 mの方形である。北端とその南側の曲輪である 2 つの曲輪は、竜王宮の社と石碑の構築に伴い削平・改変を受けている。現在北端に登り口があるが、これは北端とその南側の曲輪に作られている竜王宮に伴うものと考えられる。本来は最南端の曲輪とその北側の曲輪の間に南からつながる山道が登城路であった可能性が高い。

文献・伝承　『備中府史』では「佐方村　古城」として「城主建武年中佐井七郎」「天正年中城主村上源三郎武満」と記載がある。「佐方村　古城」は佐方城跡など他に候補があり当城かどうか明確ではない。『金光町史』本編では、天正年間に村上水軍関連の在番があった可能性が指摘されている。

（氏平）



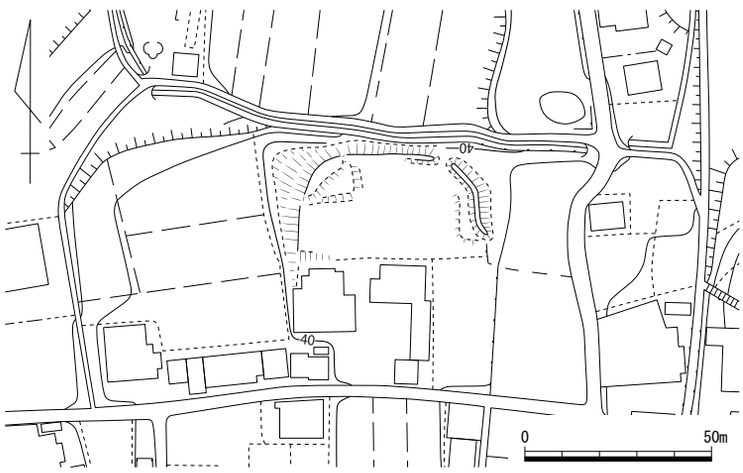
第 255 図　竜王山城跡縄張り図（1/2,000）

304　土居（どい）遺跡　　浅口市鴨方町六条院西　　地図 29 右

立地　浅口市鴨方町の六条院西地区を南北方向に流れる小川によって形成された東側段丘上に位置している。東側背後の山塊には、泉山城跡や竜王山城跡が位置している。また当地の北東側約 200 m の「城殿山」という場所に、頓宮又次郎墓とされる宝篋印塔がある。

概要　東西幅約 130 m、南北幅約 70 mほどの区画が、今でも周辺より 1 ～ 2 m程やや高くなっている。この区画の北東辺～北辺の一部には、わずかに土塁の跡が残る。土塁の高さは約 0.5 mで、幅も 1 ～ 2 m程である。北東辺あたりの残りがよく、北辺までいくと曖昧になる。またこの土塁のある東側に、かつて堀跡があったと伝わる。山塊側にあたる東側を堀や土塁などで遮断し、谷側の西側は盛土で整地したのではないか。

文献・伝承　頓宮又次郎の屋敷があったと伝わっている。　（小林）



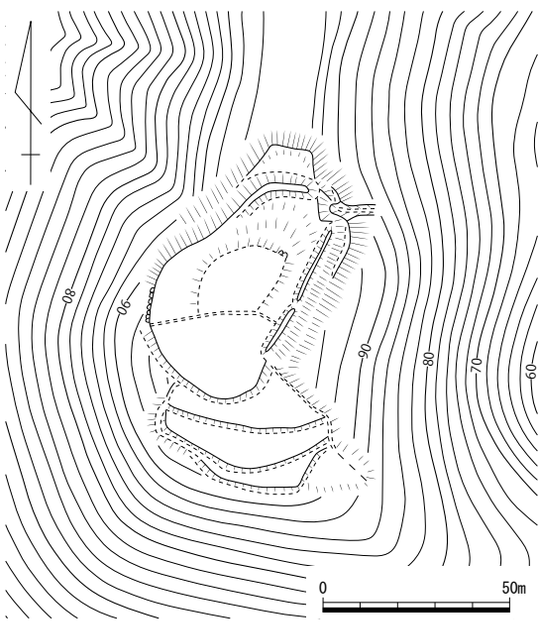
第 257 図　土居遺跡縄張り図（1/2,000）

305　上竹城（かみだけ）跡　　浅口市金光町上竹　　地図 30 左

立地　南へ延びる丘陵端頂部標高 100 mに立地する。南側を南流する竹川に西から流れこむ阿坂川が合流する地点を望む。比高差は 60 mを測る。直線距離で南西側 1.4km に城山城跡が位置する。

概要　最頂部が主郭となる曲輪で、南北 60 m、東西 35 mを測る。曲輪内南側は溝を伴う畑として開墾されているが、北側は中央が最も高く北・西・東へ緩やかに下がる傾斜を残している。東側面から北端にかけて高さが 50cm の土塁が残る。この土塁は北東端と東側面の一部が切れている。主郭の北側には幅 15 mほどの曲輪 1 面、北東端には竪堀 1 条がある。竪堀の上部分は北へ折れ曲がり虎口状の作りである。また、北側の曲輪から北へは自然地形が続く。主郭南側は 3 段の畑地に開墾されるが、曲輪転用の可能性を考え図に加えた。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていない。『金光町史』本編には「上竹の城山」と記載。　（氏平）



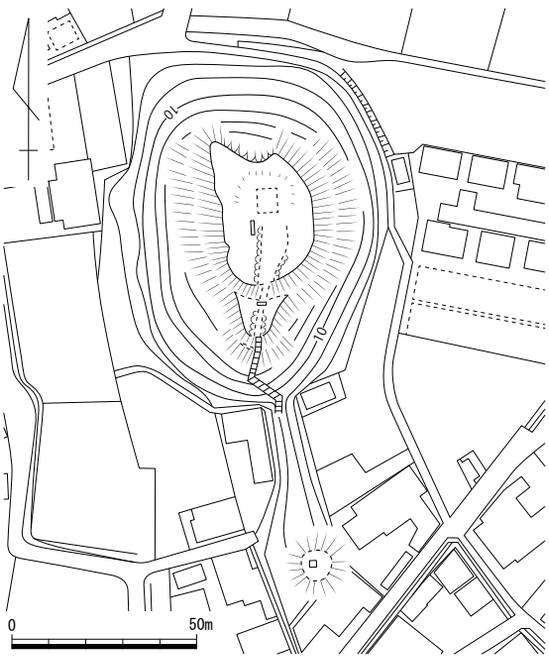
第 256 図　上竹城跡縄張り図（1/2,000）

308　亀崎（かめさき）城跡　　倉敷市玉島阿賀崎　　地図 30 左

立地　里見川の南側にある独立丘陵の頂部に位置する。本来は玉島栢島の南東部にあたり、その端部付近であったことが推測される。

概要　頂部の主郭にあたる部分に、現在亀崎神社が建っている。この神社の前面から南側斜面に向けて、参道が築かれており、一部遺構が削平されている。主郭の規模は、長さ 35 m、幅 25 mで、比較的大きい。ここから南側に 1 面の曲輪を配している。この曲輪の規模は、長さ約 10 m、幅約 10 mである。城の主要施設は、この２つのみで、全長約 50 mの小さな山城である。またこの城から南側の尾根伝いに小さな祠があり、遺構の一部であった可能性がある。この山城は本来島の先端であり、見張りとしての役割が考えられる。

文献・伝承　『備中村鑑』には、赤崎村にあり、赤澤兵庫頭が在城したと書かれる。　（小林）



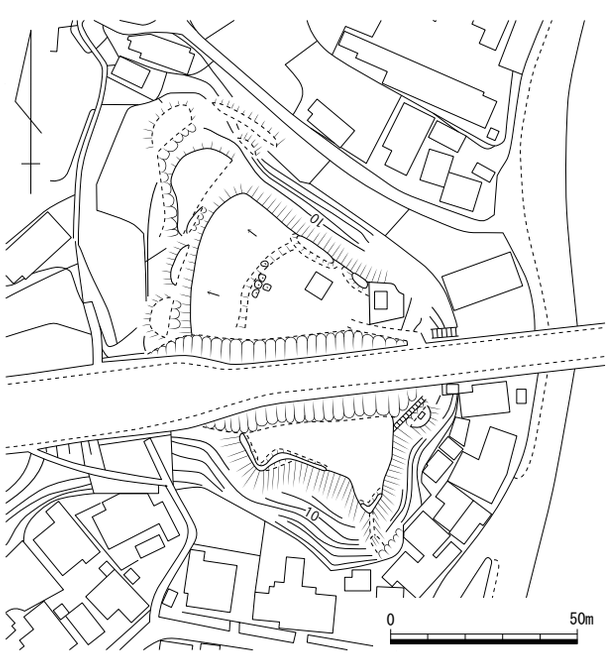
第 258 図　亀崎城跡縄張り図（1/2,000）

311　森本松山（もりもとまつやま）城跡　　倉敷市玉島柏島　　地図 30 左

立地　かつては島であった柏島の東岸で、乙島との間の海峡に向かって突き出す半島の頂部に立地。

概要　頂部主郭は元来南北 90 m、東西 50 mの 1 つの菱形曲輪だったが、県道建設により南北に分割された。道路北側の主郭は、北端に高さ 1 mの土塁を設け、郭面の北西側が 1 段低くなる。この北西側には曲輪 2 面、西側には曲輪 2 面を設ける。道路南側の主郭は、南東・南西隅が南へむかって突出する。南東の突出部端に高さ 50cm、中央～南西端に高さ最大 1.5 mの土塁が巡る。

文献・伝承　『新修　倉敷市史』では、天文 18(1549) 年 11 月 26 日付細川道頼書下写「去 (十一月) 十五日於柏嶋政所山及一戦」の政所山を小字満所所在の当城と考察する。『備中府史』では城主を南北朝期藤田小次郎、応仁年中赤澤修理亮と記載する。　（氏平）



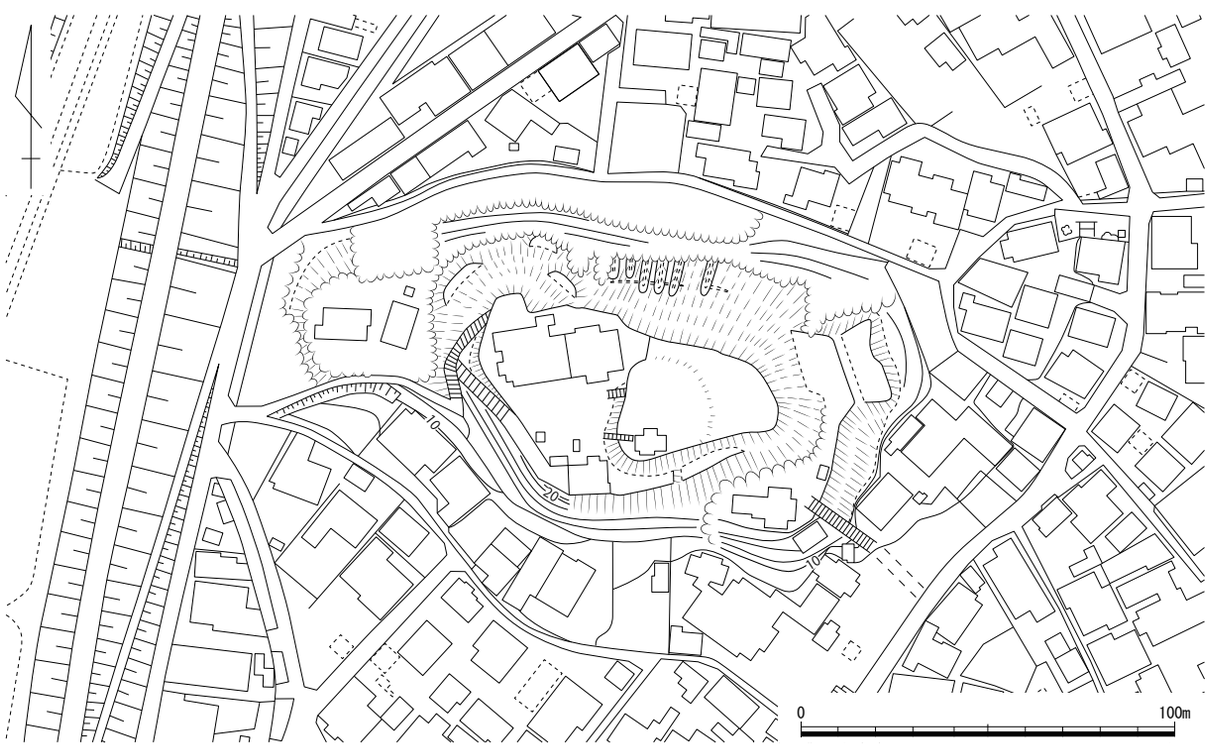
第 259 図　森本松山城跡縄張り図（1/2,000）

313　片島（かたしま）城跡　　倉敷市片島町　　地図 30 右

立地　倉敷市片島町の標高 26 ｍを測る独立丘陵上に位置する。築城当時は備中国浅口郡に属し、南東に位置する備前国児島郡との境目にあたっていた。城の周辺は宅地化されており旧観を留めないが、戦国時代当時は旧高梁川河口近くにあり、吉備穴の海の西側入り口にあたっていた。また、城の北東約２㎞には西阿知集落が所在し、南３㎞には連島が位置する。いずれも『兵庫北関入船納帳』にその名が見える港町であり、『倉敷市史』では備中国の海の玄関口として、備中国各地の荘園から徴収された年貢の集積地であったと考えられている。城はこうした経済拠点を押さえる好位置にある。このように片島城跡は吉備穴の海の制海権を握る上で、要衝にあたっていたと考える。

概要　城域北側には墓地、丘陵上は妙任寺及びその墓所、南東は法源寺墓所や片島神社が所在している。さらに東端も宅地化されており、改変が著しい。しかし、これら墓地や寺社、あるいは宅地はその形状から考えて、もともと所在していた城の曲輪を利用しながら造営された可能性が高いと思われる。そのため、片島神社の所在する最高所が主郭であったと考える。主郭から西へ一段下がった位置にある妙任寺境内も曲輪の跡と考えたい。城の東端付近には、かつて堀切状の遺構があったとされるが現状確認できない。また、城の東西、及び南側は切り立った崖となっている一方、北側斜面はやや緩くなっており、この地点に６本の畝状竪堀群と、爪形の小曲輪が３面遺存している。

文献・伝承　『中国兵乱記』では永正６（1509）年に将軍足利義稙の命を受けて、二階堂大蔵少輔政行が入城したとする。さらに元亀２（1571）年にも毛利氏旗下にあった細川下野守（通董）が、尼子氏の備中国進入に際して片島へ進軍し、要害を背後に防戦に努めたが敗北を喫した。その後、敗残兵は窪屋郡の幸山城に籠もったとする。この要害は片島城のことを指すか。　　（和田）



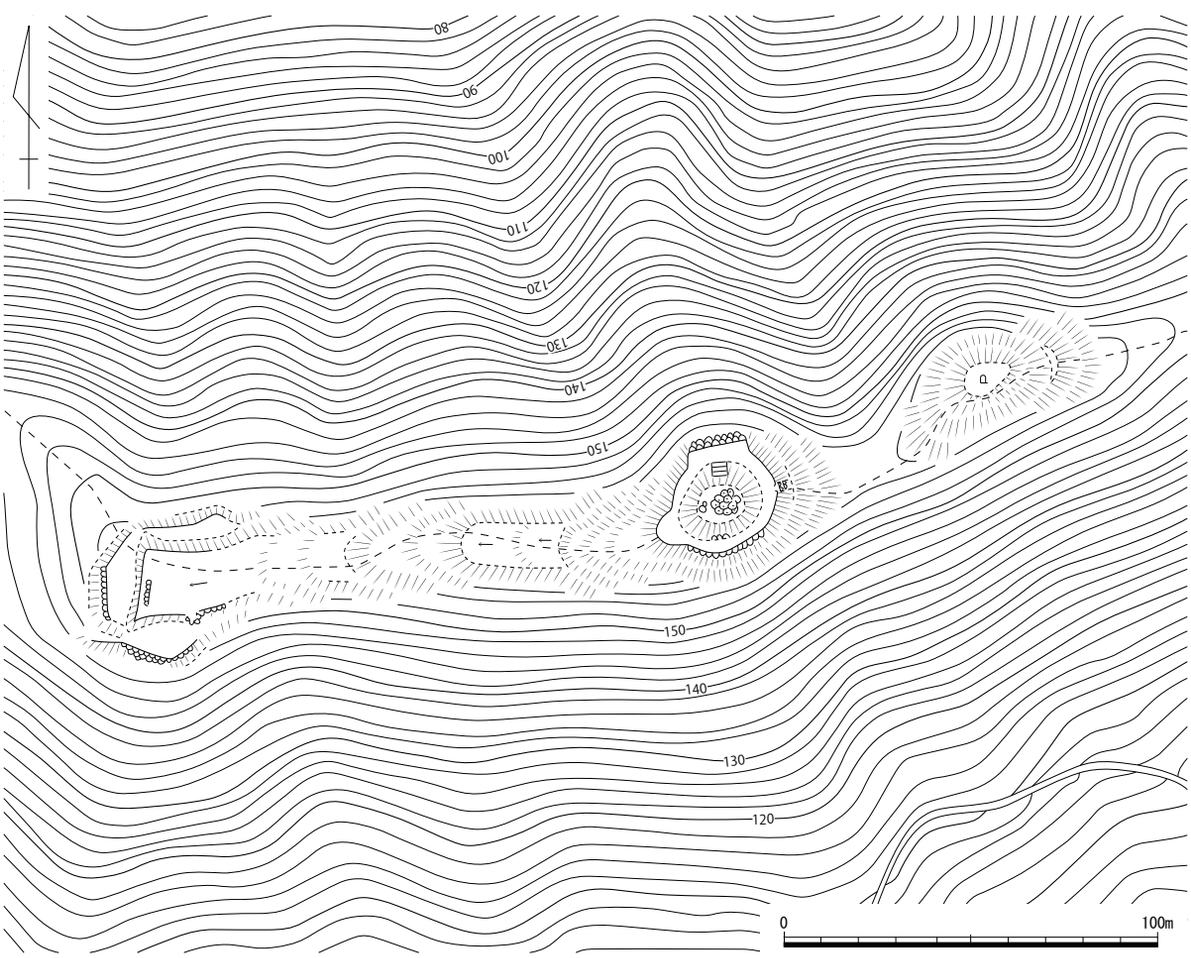
第 260 図　片島城跡縄張り図（1/2,000）

315　大平山城跡（おおひらやま）　　倉敷市矢柄　　地図 30 右

立地　元々連島と呼ばれた山塊の最高峰、大平山山頂とその西側に延びる尾根筋が該当する。連島の中央北側辺にあり、北側斜面は急峻な地形である。また頂部から、北側は吉備穴海、南側は瀬戸内海が広く見渡せたものと思われる。

概要　東西方向に 300 m弱ある細い尾根上に遺構を築いている。特に尾根筋東側端にある大平山山頂と、その西側にある尾根の中央付近の頂部に小さな曲輪を築いている。中央付近の曲輪の方が大きく、主郭になると考えている。その規模は 10 m強であるが、帯曲輪状の施設を含めると 30 m強となる。ただし頂部には石組がおかれ、あまり広い平坦地ではない。大平山山頂は、やはり 10 m前後の平坦地と東側に小さな曲輪状の段があるのみである。また中央頂部より西側へ伸びる尾根部分にも、いくつか平坦地を造っている。しかし尾根頂部の西側端に比較的しっかりした曲輪 1 面と帯曲輪 1 面がある以外は、曖昧な造作が続いている。中央頂部と尾根西側端の曲輪には、一部に後世のものと考えられる石垣が築かれている。

文献・伝承　『連島町史』は、『備中村鑑』に書かれた「北茂城」が当城であると想定している。北茂城は、連島にあって右京太夫光？が在城したとある。　（小林）



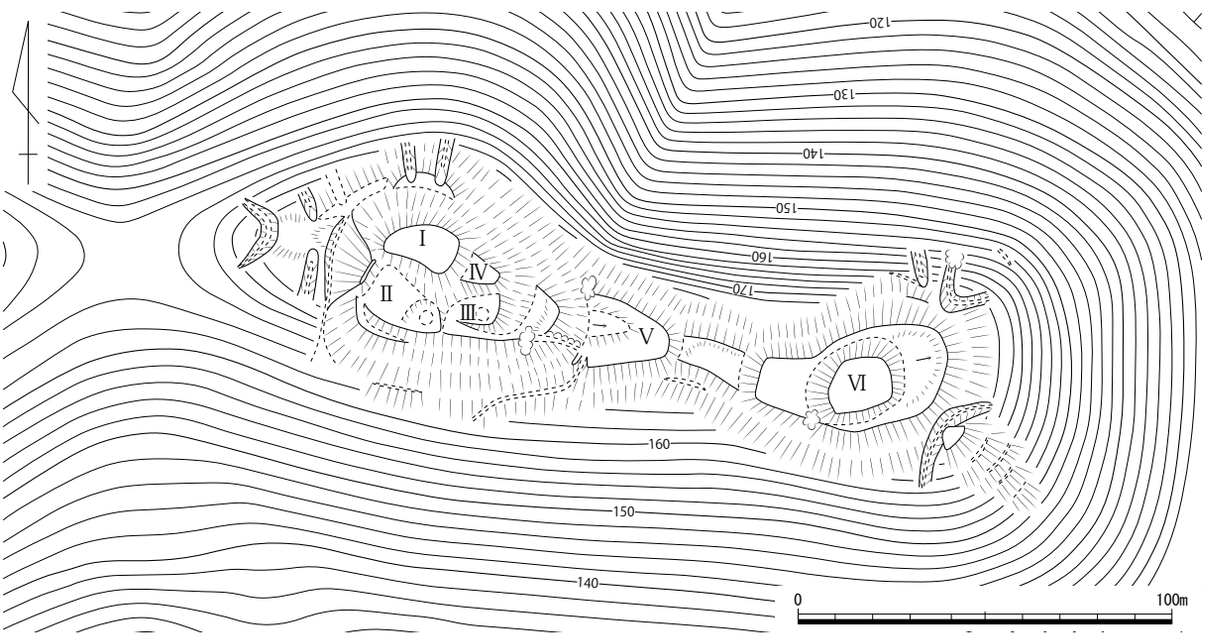
第 261 図　大平山城跡縄張り図（1/2,000）

317　茶臼山（ちゃうすやま）城跡　　浅口市寄島町柴木　　地図 32 右

立地　城は浅口市寄島町柴木の山塊頂部に位置する。城の東側は浅口市六条院から、寄島の海浜部へ向かって南北方向に延びる間道が所在し、城はこの道に対して西から突出する。その標高は 190 m を測り、道の所在する平野部との比高は 130 mを超える。山麓にある福井山龍城院は寛文６（1666）年に実施された岡山藩による寺院淘汰の際に、周囲にあった 12 坊の寺院をここにまとめたとされる。従って、戦国時代の茶臼山城の城下には一山多院制を敷く寺院が存在したこととなる。本城は間道を押さえる要衝であっただけでなく、これら寺院の防備も兼ねた戦国期城館の一様相を示すか。

概要　城域は東西約 200 m、南北約 100 mを測る。城域の最西部をＶ字形の堀切により区画する。そのすぐ東に南北から２本の竪堀が掘削されているが、これも堀切である可能性がある。さらに主郭面と考えられる曲輪Ⅰから一段下がった曲輪Ⅱの後背も比高５mを超える堀切となっている。曲輪Ⅰの北には２本の竪堀も見られるほか、曲輪Ⅱの西端には土塁が設けられている。曲輪Ⅱから一段下がったところにある曲輪Ⅲに対しては、曲輪Ⅱ、及びⅣから横矢を掛けることが可能である。曲輪Ⅴの南西隅は虎口が存在しており、現在の城道がこれに取り付いてる。曲輪Ⅵは城を防御する上で橋頭堡となる曲輪と見られる。周囲の地形からは比高３mを測る切岸により突出している。その中央には２m程の高まりがあるが、これが櫓台である可能性もある。曲輪Ⅵの北東、並びに南東側には、いずれも平面Ｖ字形を呈する堀切により城域を区画している。この堀切には竪堀も組み合わされ、その防御は堅い。まとめると、茶臼山城跡には堀切、竪堀、土塁を組合わせた強力な防御線が設けられていることがわかる。横堀こそ見られないが、横矢掛けとなる曲輪配置など、技巧的な縄張りであると言える。

文献・伝承　天保年中に成立した『備中誌』には、城主は大内義隆の幕下である大内摂津守としている。義隆が天文 12（1543）年に尼子氏の本拠地、出雲国の月山富田城を攻めた際に備中国からも国人集が出陣したとされる。しかし、本城に見る発展的な縄張りはそれ以降の改修を想起させる。（和田）



第 262 図　茶臼山城跡縄張り図（1/2,000）

318　竜王山城跡（りゅうおうざん）　浅口市鴨方町六條院西・寄島町　地図 32 右

立地　標高 289 mの竜王山山頂に位置する。当山は、旧浅口郡大島郷の大半を占めていた寄島山地の中にあって、御嶽山に次ぐ二番目に高い山である。山頂からは倉敷市の児島・連島・玉島方面から浅口市の中心部、笠岡市、広島県福山市はもとより南側には瀬戸内海が一望でき、寄島や笠岡諸島まで望める。また南側には青佐山城跡がよく見える位置関係にある。

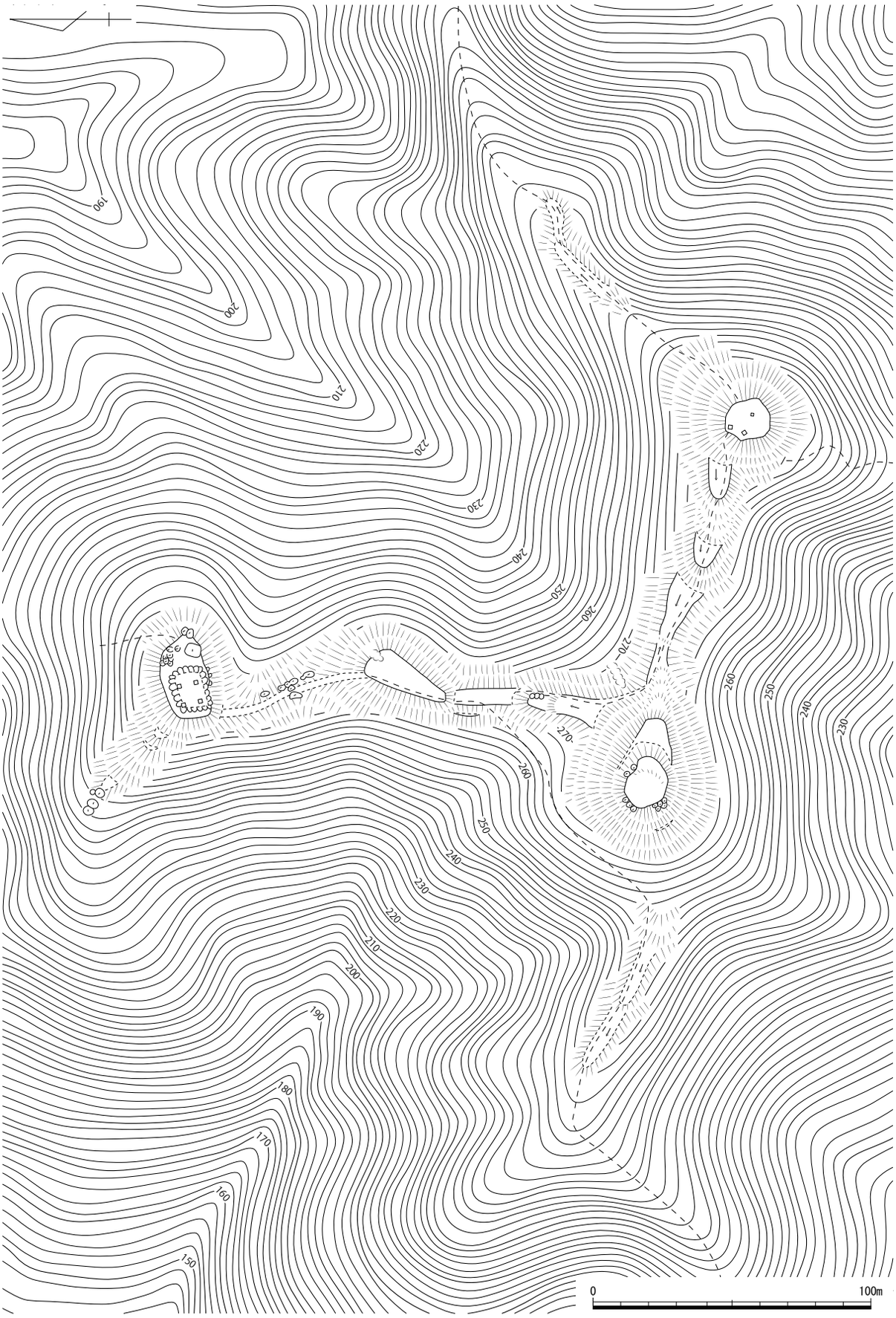
概要　山頂付近には３つの頂部が存在し、その箇所を中心とした全長 300 mを超える山城であったと思われる。頂部は北側、南西側、南東側に存在し、これらを繋ぐ尾根筋は南西側を中心に基点として、平面形はＬ字形を呈している。

頂部の規模は、北側が長さ約 30 m、幅約 15 mであるが、現在鉄塔が立っており、平坦地の一部が消失している。南西側は長さ約 20 m、幅約 15 mで南東側頂部方向に長さ約 10 mの曲輪が付随している。南東側頂部は、長さ・幅ともに約 15 mである。それぞれの頂部は、側面には露岩が目立っており、切岸状施設の役割を果たしていたのだろう。しかしこれら頂部は 20 m前後の規模しかなく、必ずしもしっかりした平坦地をもっていない。この頂部間を繋ぐ尾根筋には曲輪を設けている。南東側から南西側頂部に向けての尾根筋には、長さ約 10 ～ 15 mの曲輪が２面続き、両頂部の鞍部付近の平坦地を形成している。２面ある曲輪も、造作はそれほどしっかりしていない。南西側から北側頂部に向けての尾根筋には、細長い曲輪が２面続き、その先に長さ約 30 m、幅約 10 mの曲輪が高まりとなって存在する。そしてこの高まりから北側頂部の間は、通路状の細い尾根筋によって連結されている。また南西側頂部の西側尾根筋と、南東側頂部の北東側尾根筋に細長い平坦地が存在しており、曲輪として使用していた可能性もある。先に挙げた当城の全長は、この細長い曲輪を含めた数値で、頂部間のみの規模は、北側頂部～南西側頂部は約 190 m、南西側頂部～南東側頂部は約 160 mである。

文献・伝承　『備中村鑑』には「龍王山城」として、西六條院村にあり、城主は頓宮又次郎であったとされる。また『長川寺由緒記』には、伊予から備中国浅口郡に移ってきた細川通董が、青佐山城に次いで本城に９年間在城し、天正３（1575）年に鴨山城に移ったとしている。　（小林）

写真 124　遠景（北西から）

写真 125　南西側頂部（南東から）



第 263 図　竜王山城跡縄張り図（1/2,000）

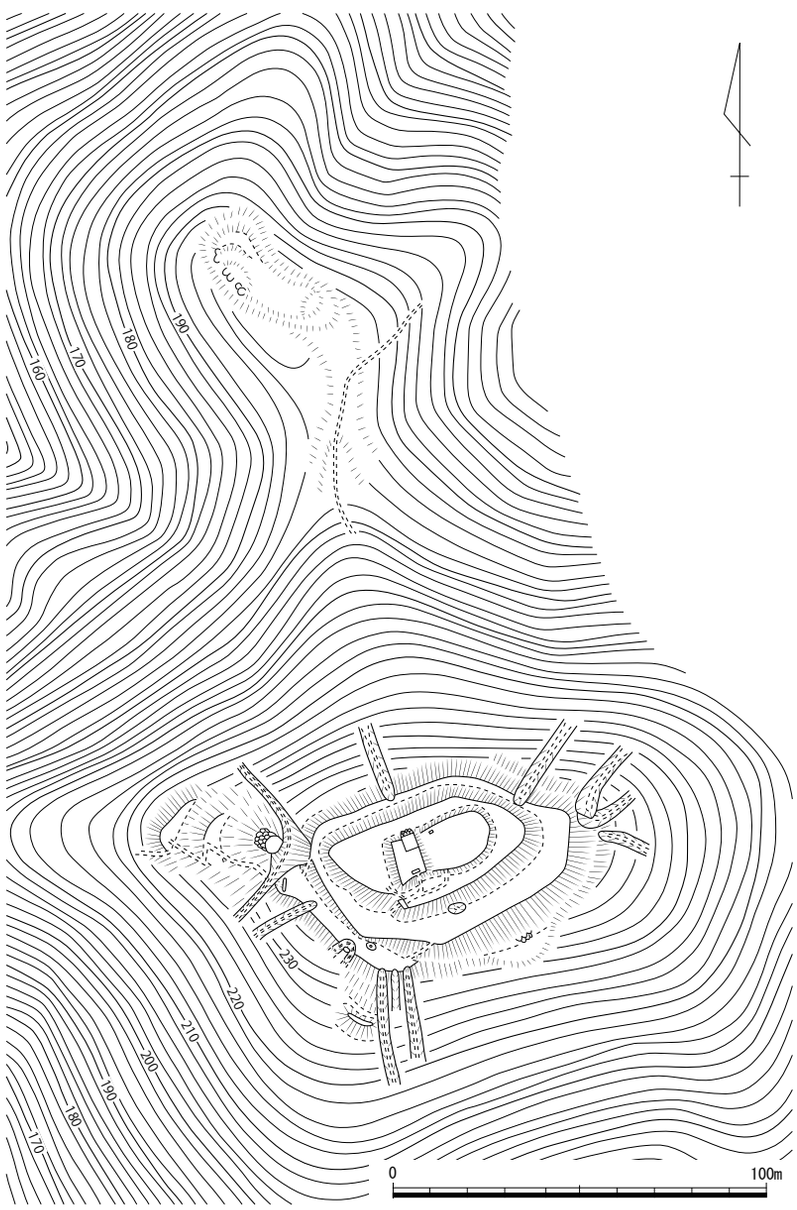
319　青佐山城跡（おおさやま）　笠岡市大島中・浅口市寄島町　地図 32 右

立地　寄島山地の南側、瀬戸内海に面する独立丘陵である青佐山の山頂に位置。南側は瀬戸内海を一望でき、北側は浅口市の竜王山城跡・茶臼山城跡と里庄町の鳶尾城跡が見渡せる絶好の展望である。

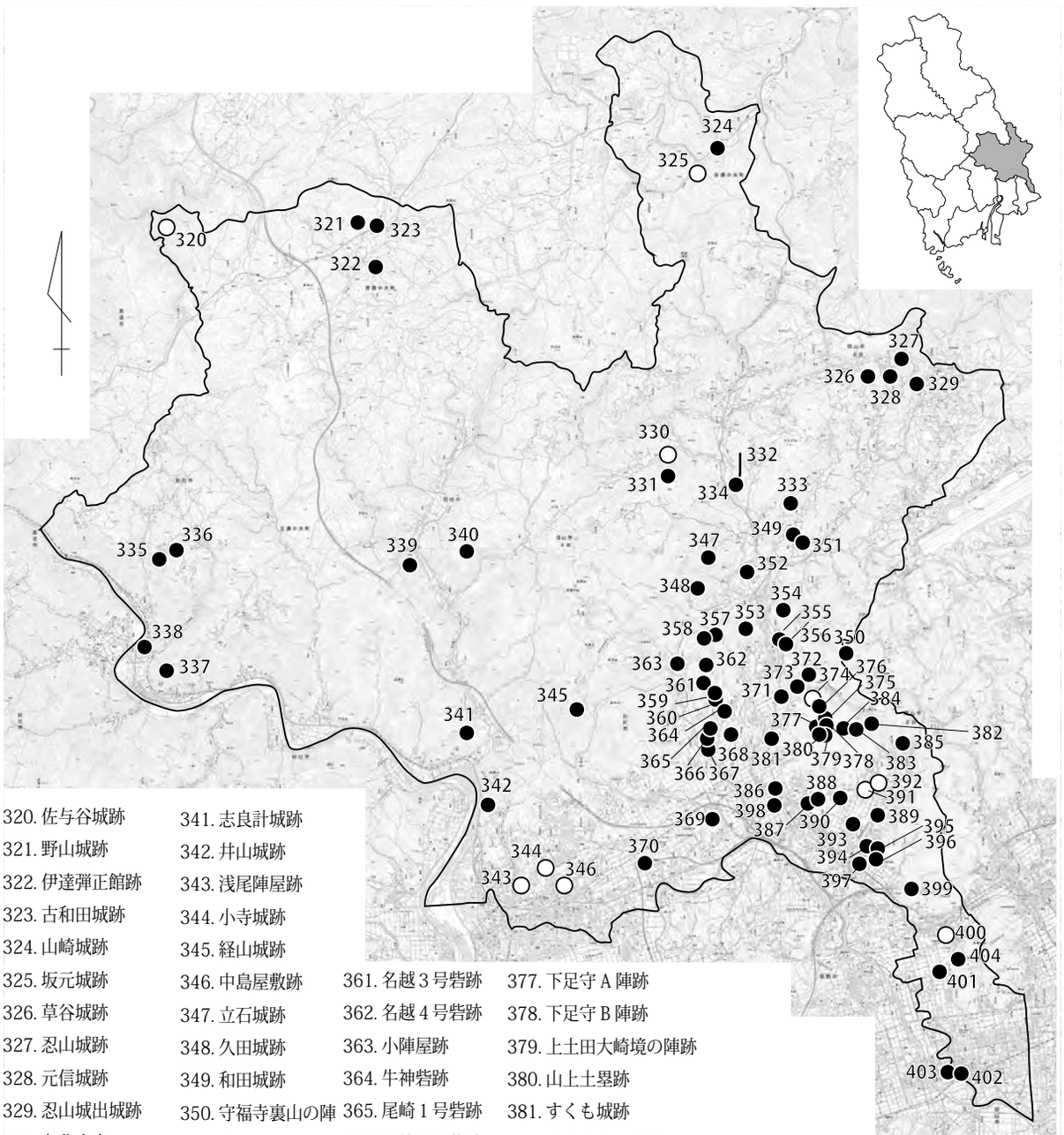
概要　頂部に約 25 × 15 mの主郭を置き、２面の帯曲輪を配する城館である。主郭の西側は、現在稲荷が建っており、周囲より 0.5 mほど高い。この高まりが、城館建築時の高まりかどうかは判然としない。帯曲輪１面目は、幅５mほどで、尾根筋に当たる西側と東側が 10 ～ 15 mほどとなり広くなる。２面目は北側が３m、南側が７～８mの幅でやや南側が広い。１・２面とも切岸の高さは２～３mであり、しっかりした造りである。なお南側の切岸斜面には井戸状の窪みがある。この帯曲輪のさらに西側には、幅約５mの曲輪が続く。この曲輪から北西側と南西側の尾根筋に、それぞれ２面と１面の小さな曲輪が連なる。北西側の曲輪にはU字形の竪堀と土塁が付随しており、当山城の入り口に当たると思われる。南西側の曲輪には、土塁が築かれ守りを固めている。当城周囲の斜面には、南東側を除いて計 11 本の竪堀が散在的に築かれていた。南東側に竪堀が存在しないのは、この方面が瀬戸内海に直下でつながる尾根筋のためと考える。

　また当山城の北側尾根筋には、出丸状の平坦面が存在する。判然としない地形ではあるが、北側斜面は人工的な加工である可能性が高い。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「大佐山城」とあり大島村にあって阿部清明在城とあるが、『長川寺由緒記』には、永禄年間に細川通董が７年間在城したと伝わる。のちに通董は本拠をより内陸にある竜王山城・鴨山城へ移す。（小林）



第 264 図　青佐山城跡縄張り図（1/2,000）



320. 佐与谷城跡
321. 野山城跡
322. 伊達弾正館跡
323. 古和田城跡
324. 山崎城跡
325. 坂元城跡
326. 草谷城跡
327. 忍山城跡
328. 元信城跡
329. 忍山城出城跡
330. 名称未定
331. 亀石山城跡
332. 名称未定
333. 亀山城跡
334. 堂坂の対岸の陣跡
335. 名称未定
336. 延原城跡
337. 金頭山城跡
338. 大渡城跡
339. 鍋坂城跡
340. 高馬城跡
341. 志良計城跡
342. 井山城跡
343. 浅尾陣屋跡
344. 小寺城跡
345. 経山城跡
346. 中島屋敷跡
347. 立石城跡
348. 久田城跡
349. 和田城跡
350. 守福寺裏山の陣跡
351. 日近城跡
352. 構跡
353. 宮路山城跡
354. 鍛冶山城跡
355. 植之町西陣跡
356. 植之町東陣跡
357. 大陣屋跡
358. 千引砦跡
359. 名越１号砦跡
360. 名越２号砦跡
361. 名越３号砦跡
362. 名越４号砦跡
363. 小陣屋跡
364. 牛神砦跡
365. 尾崎１号砦跡
366. 尾崎２号砦跡
367. 尾崎３号砦跡
368. 鳥越山城跡
369. 長良山城跡
370. 総社遺跡
371. 土居武家屋敷跡
372. 一国山城跡
373. 冠山城跡
374. 名称未定
375. 南坂北陣跡
376. 南坂南陣跡
377. 下足守Ａ陣跡
378. 下足守Ｂ陣跡
379. 上土田大崎境の陣跡
380. 山上土塁跡
381. すくも城跡
382. 三上山東の陣跡
383. 三上山の陣跡
384. 三上山西の陣跡
385. 龍王山陣跡
386. 生石城跡
387. 小山城跡
388. 大崎城跡
389. 坂古田陣跡
390. 八幡山陣跡
391. 岡之鼻陣跡
392. カジヤマの陣跡
393. 備中高松城跡
394. 御崎山陣跡
395. 石井山陣跡
396. 蛙ヶ鼻陣跡
397. 高松城水攻め築堤跡（蛙ヶ鼻）
398. 高松城水攻め築堤跡（副堤跡）
399. 鼓山城跡
400. 板倉枡形城跡
401. 伝賀陽氏館跡
402. 庭瀬城跡
403. 撫川城跡
404. 宮内城跡

第 265 図　賀陽郡城館位置図

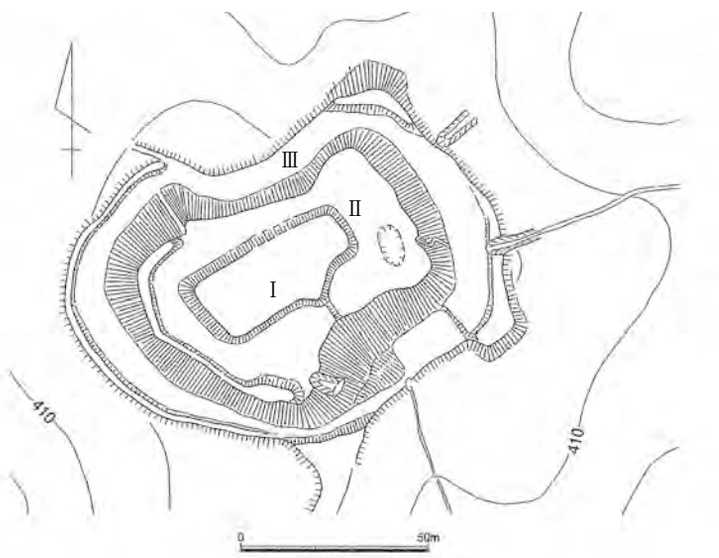
321　野山（のやま）城跡　　加賀郡吉備中央町北　　地図 18 右

立地　大和山から南東に延びる尾根先端の頂部に位置する。南南東約 1 ㎞には伊達弾正館跡（野山古城ともいう）が位置する。伊達弾正館跡の谷水田を挟んだ北側の尾根上には具足山妙本寺が位置する。妙本寺の創建は弘安 4（1281）年で、伊達弾正朝義の発願という。

概要　頂部に曲輪Ⅰ・Ⅱが確認できる。曲輪Ⅰは頂部中央に配置され、平面形は長方形を呈する。石列で囲まれた基壇が 2 か所で確認され、北側の基壇には祠が建つ。曲輪Ⅱの南側には文久元年銘の手水鉢が配置されていることから、基壇は近世の神社に伴うもので、北側の基壇は本殿、南側の基壇は拝殿があったものと推測される。また北側の基壇の北東隅は曲輪Ⅰの北側を拡張して石垣を構築しているが、これも神社に伴うものと考えられる。曲輪Ⅱは曲輪Ⅰを全周するような曲輪である。平面形は歪な長方楕円形で、西端に土塁が巡り、南東隅には楕円形の小規模な窪みがある。比高差 6 ～ 7 m の切岸を造成した曲輪Ⅱの下段には曲輪Ⅲが全周する。曲輪Ⅲの西側には土塁が巡るほか、北東隅及び南東隅にも土塁が残る。曲輪Ⅲの周縁は自然に緩やかに傾斜するが、東端中央では浅い竪堀状の窪みが 2 か所確認できる。野山城跡の明確な防御施設は西側の土塁のみであるが、曲輪Ⅰ・Ⅱを全周する切岸で全面的に守る構造と言える。

文献・伝承　『古戦場備中府志』によると、永禄 11（1568）年の宇喜多との合戦には、野山宮内少輔圧勝が三百騎を従えて守ったとされる。野山氏は奥州藤原の地を引く伊達弾正正朝が弘安年間に野山に移ってから地名をもとにそれを名乗ったという。

（上栫）



第 266 図　野山跡縄張り図（1/2,000）文献 115 より引用

写真 126　曲輪Ⅱ西辺土塁（東から）

写真 127　曲輪Ⅱ北東部切岸（北西から）

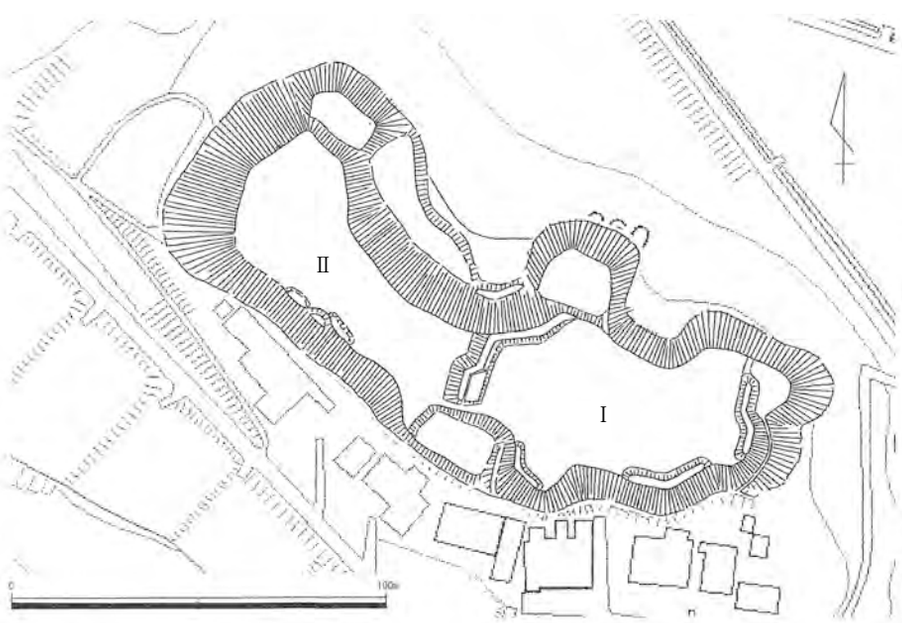
322　伊達弾正館跡（だてだんじょう）　　加賀郡吉備中央町北　　＜町指定史跡＞　地図 18 右

立地　伊達弾正館跡は山塊から北西に延びる尾根先端のやや高まった地点に位置する。谷水田を挟んだ北側の尾根上には具足山妙本寺が位置する。妙本寺の創建は弘安４（1281）年で、当館跡の主とされる伊達弾正朝義の発願という。北北西約１㎞には野山城跡が位置する。

概要　城館跡は尾根筋を堀切で画すことなく、鞍部に切岸を造成することで独立させた造りである。曲輪Ⅰは尾根の最頂部に位置する。南・東・西側には土塁が巡り、いずれにおいても折れを造成していた。土塁の折れ構造や散見する備前焼の特徴から、造成は織豊期の改変と想定されている。東側土塁の東側には腰曲輪を造成する。曲輪Ⅰ西辺土塁の西側に位置する曲輪Ⅱは略長方形状で、西端付近が北にやや張り出す。曲輪Ⅱでは土塁を確認できなかった。曲輪Ⅰ・Ⅱの北側には腰曲輪が３か所あり、南側にも１か所確認できた。曲輪Ⅰの土塁を織豊期における改変とみると、伊達弾正館跡の防御施設は切岸のみで、防衛意識はそれほど高くない。周辺平野部との比高差は約 20 ｍということも考え合わせると、伊達弾正館跡は遺跡名の通り日常の館としての活用が想定される。

写真 128　遠景（北から）

文献・伝承　『備中誌』に具足山妙本寺の前方に伊達弾正正朝の墓と伊達氏代々の城跡が存在したことが記述され、『吉備郡史』にも野山古城として具足山妙本寺の前方にあって伊達弾正朝義以来代々の館跡とする。（上栫）



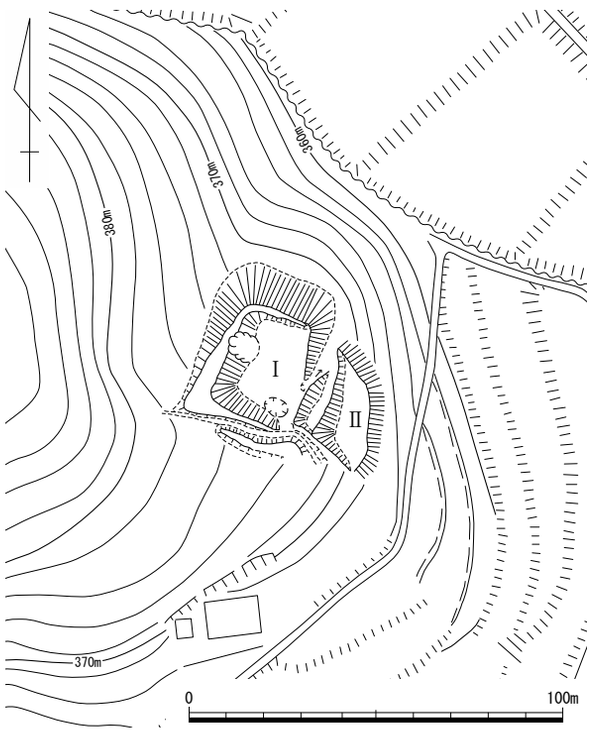
第 267 図　伊達弾正館跡縄張り図（1/2,000）文献 115 より引用

323　古和田（こわだ）城跡　　加賀郡吉備中央町北　　地図 18 右

立地　大和山から南東に延びる尾根東裾付近に位置する。尾根頂部に野山城跡が所在する。

概要　曲輪Ⅰは北・西・南側を土塁で長方形状に区画し、東側は切岸で守る構造である。北・西側土塁は良好に残存し、内部での高さは 2.5 ～ 4 m程である。外側は西角が最も低く、北に向かって高くなり、最高部は高さ約 7 mである。南側土塁は山頂に続く山道の造成により開削されている。土塁の西角は幅広くなるが、これも山道造成による改変の影響と考える。曲輪Ⅰの東辺中央付近から東側に下るスロープで帯曲輪と連結し、その東側下段に曲輪Ⅱが位置する。

文献・伝承　古和田城跡に関する史料・文献、伝承は確認できない。　（上栫）



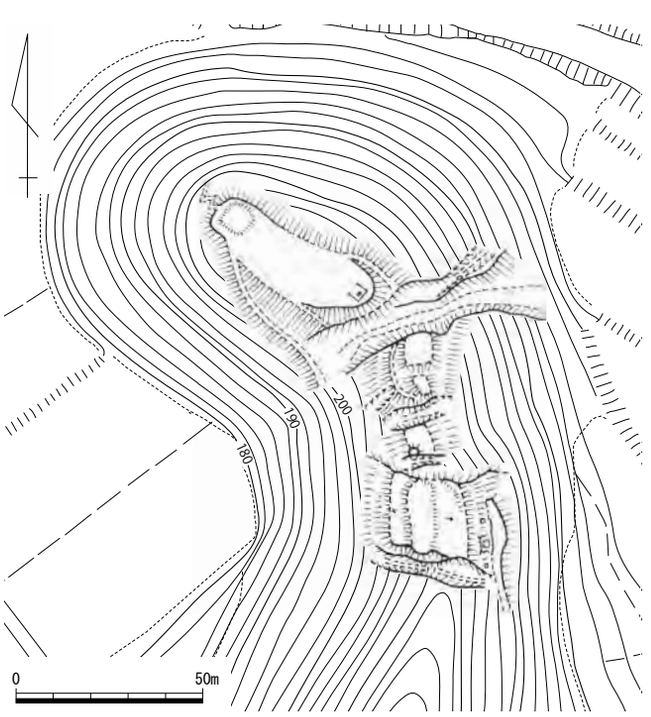
第 268 図　古和田城跡縄張り図（1/2,000）

324　山崎（やまさき）城跡　　加賀郡吉備中央町竹部　　地図 19 左

立地　加茂川右岸の北に延びる標高約 200 m、比高約 20 mの丘陵端部に立地する。加茂川沿いの北・東西の眺望が良好である。

概要　城域は東西約 70 m、南北約 120 mで、中規模でも小さい。丘陵北端には 45 m× 17 mの曲輪があり、切岸は急である。曲輪の北西端には一辺約 7 mの方形を呈する高まりがある。南側の尾根筋には小曲輪を挟みながら、 4 条の堀切が連続して配置されている。特に北端の堀切は幅約 10 mの大規模かつ深い堀切で、尾根を断絶する。

文献・伝承　故事来歴は不明である。　（米田）



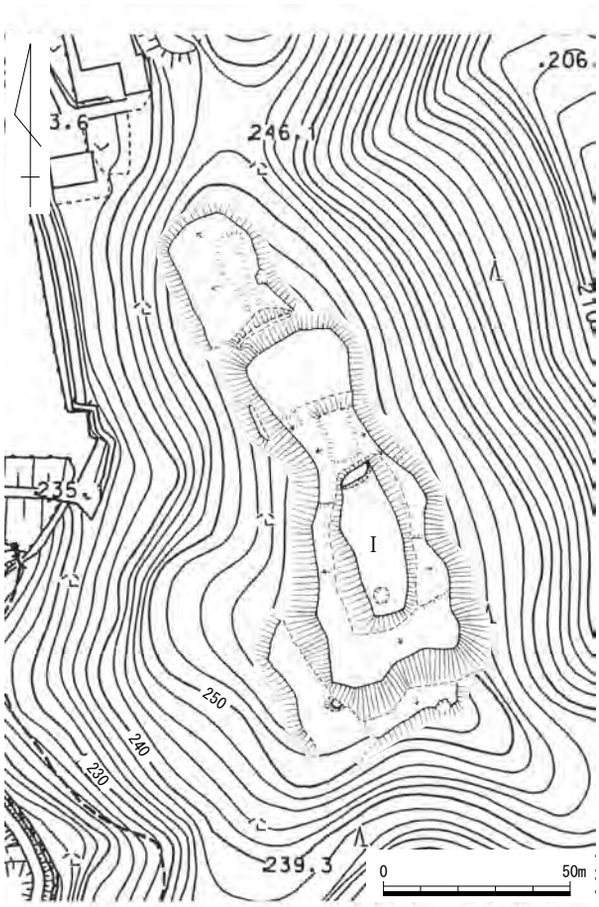
第 269 図　山崎城跡縄張り図（1/2,000）

326　草谷城跡（くさたに）　　岡山市北区上高田　　地図 19 右

立地　吉備高原の南端、日近川上流域左岸の丘陵頂部に立地し、東約 500 mに元信城跡、東約 800 mに忍山城跡が位置する。丘陵頂部は標高約 280 m、比高 40 mである。

概要　城域は東西 60 m、南北 150 mの中規模で、頂部の曲輪Ⅰを中心とし、尾根筋に腰曲輪や帯曲輪を配置した連郭式山城である。頂部の主郭となる曲輪Ⅰは東西 15 m、南北 40 mの長方形を呈し、北辺に低い土塁、南端に径 4 mほどの浅い窪みがある。周縁の切岸は急で、高低差が 3 m前後あるが、虎口は確認できない。頂部の曲輪の下段は、北側尾根に 15 m四方と 20 m四方の曲輪が連続するほか、東、南、西側には幅 8 m前後の帯曲輪が配置されている。北側尾根の曲輪及び帯曲輪の切岸も急である。さらに、尾根の北側及び南側では人工的な平坦面が認められるが、城館に伴うものかは判断が難しい。

文献・伝承　故事来歴は未確認である。（米田）



第 270 図　草谷城跡縄張り図（1/2,000）

写真 129　遠景（南西から）

写真 130　曲輪Ⅰ北辺切岸（北西から）

327　忍山（しのぶやま）城跡　　岡山市北区上高田　　地図 19 右

立地　足守川の支流日近川の上流部の谷奥、吉備高原から南東に派生する山の尾根頂部に立地し、備中と備前との国境付近にあたる。城跡は南北に細長く延びた尾根上に築かれており、標高 290 m、比高 140 mである。忍山城跡から谷を隔てた東 500 mには勝尾山城跡、南東 600 mには忍山城出城跡が位置する。

概要　城域は東西 95 m、南北 390 mと長大である。縄張りは尾根中央を２条の堀切で区切り、その南北の尾根にそれぞれ曲輪を連続して配置した連郭式の構造である。

尾根中央の連続堀切の南側は主郭の曲輪Ⅰがあり、20 m× 15 mの長方形を呈する。曲輪の南辺中央には幅狭の斜路があり、南側の帯曲輪に繋がる虎口と考えられる。主郭の北西側の尾根上には細長い曲輪Ⅱがあり、南東側の一部に低い土塁がある。また、主郭の北東側下方の緩斜面には方形の曲輪があり、備前焼の甕片が散布していた。その北辺の谷部は竪堀、東側斜面は堀切で区切り、守りを固めていた。主郭の東西斜面には帯曲輪ないし犬走りを配し、南側の尾根上には細長い曲輪を構えている。さらに尾根南端にかけては小曲輪２面と土塁、東辺に犬走りがある。南端頂部には南北 30 m、東西 15 mの細長い曲輪Ⅲがあり、北辺と東辺の一部には石列が確認できる。また、南斜面には腰曲輪を配置し、北東側は犬走りと繋がる。

尾根中央の堀切は２条連続している。東側の堀切は幅５m、長さ 60 mと深い。一方、西側の堀切は幅４m、長さ 60 mで、やや浅い。堀切周辺の尾根は自然に近い平らな面が続く。尾根北側の頂部には 10 m前後の小曲輪を２面、南斜面に腰曲輪を配置し、東側は尾根筋を土橋状に残して堀切で区切る。尾根北端は、細長い曲輪Ⅳ・Ⅴが２面連続し、東斜面に帯曲輪がある。西斜面には犬走りと６本の竪堀があるうえ、西端を堀切で区切り、堅固に守る。さらに尾根北端の北斜面は弧状の堀切と西斜面に２本の竪堀、北端に堀切２条を配置し、北側の尾根伝いからの敵の侵入に備えて強固に守っている。

全体的に、尾根上に細長い曲輪を連続させ、北側及び北西側の守りを堅固にした縄張りである。さらに尾根中央に配置された堀切の配置や規模から、尾根南側の主郭周辺の縄張りが当初に築かれ、後に尾根中央の連続堀切以北を改修した可能性も考えられる。

写真 131　尾根中央　堀切（南西から）

写真 132　尾根南側　曲輪東斜面切岸（東から）

文献・伝承　『備前軍記』によれば、忍山城には宇喜多直家の領下にあった宇喜多信濃守・岡剛介が在城していたと伝え、天正６（1578）年もしくは同７（1579）年に毛利勢による攻城を受ける。その攻城においては内通者もしくは吉川経言傘下の下清左衛門により火が放たれ、この混乱に乗じた毛利方の攻撃により落城したとされる。落城後には毛利方により桂左衛門大夫、岡宗左衛門が置かれることになる。なお忍山城跡の山裾には「平城」「土井」などの地名が残る。　（米田）

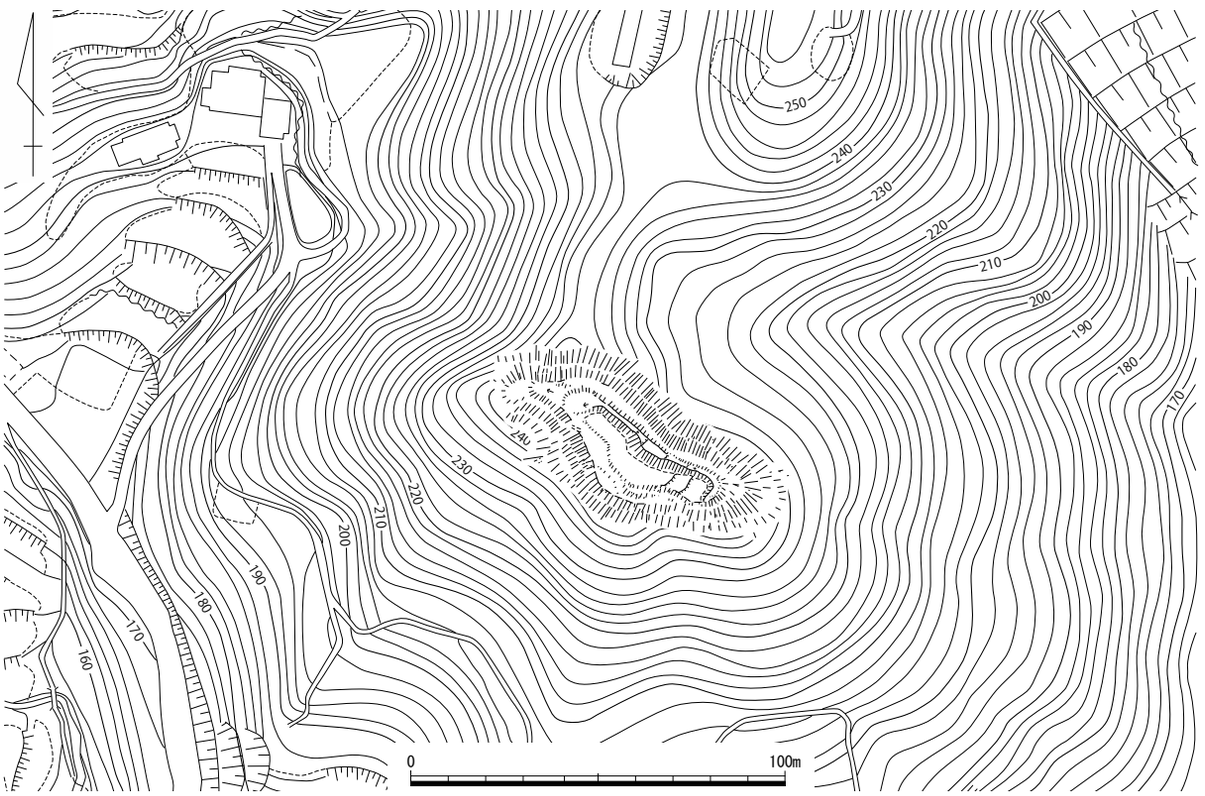
第 271 図　忍山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

328　元信（もとのぶ）城跡　　岡山市北区上高田　　地図 19 右

立地　本陣山から南東に延びる尾根の先端頂部に立地する。谷を挟んで北東側には忍山城跡を望むことができる。

概要　北辺に土塁を残すように平坦面を削出し、南側は自然地形のまま下がる。土塁はコの字状を呈し、北辺から東・西辺への屈曲部の掘り込みは明瞭である。土塁西辺の南から西側は自然地形を残す。土塁の最高所は平坦面から 2.5 m程の高さで、その地点のみ南に幅広くなる。平坦面の東側は二段下がるが、これは東に緩やかに下がる地形で土塁の高さを確保するための造作と考える。当城は、北辺にのみ土塁を削出する構造や位置関係から、忍山城攻めにおける攻め手の陣城と推察する。

文献・伝承　当城に関する史料・文献・伝承は確認できない。　（上栫）



第 272 図　元信城跡縄張り図（1/2,000）

写真 133　土塁東側屈曲部（南東から）

写真 134　土塁（南東から）

329　忍山（しのぶやま）城出城跡　　岡山市北区山上・上高田　　地図 19 右

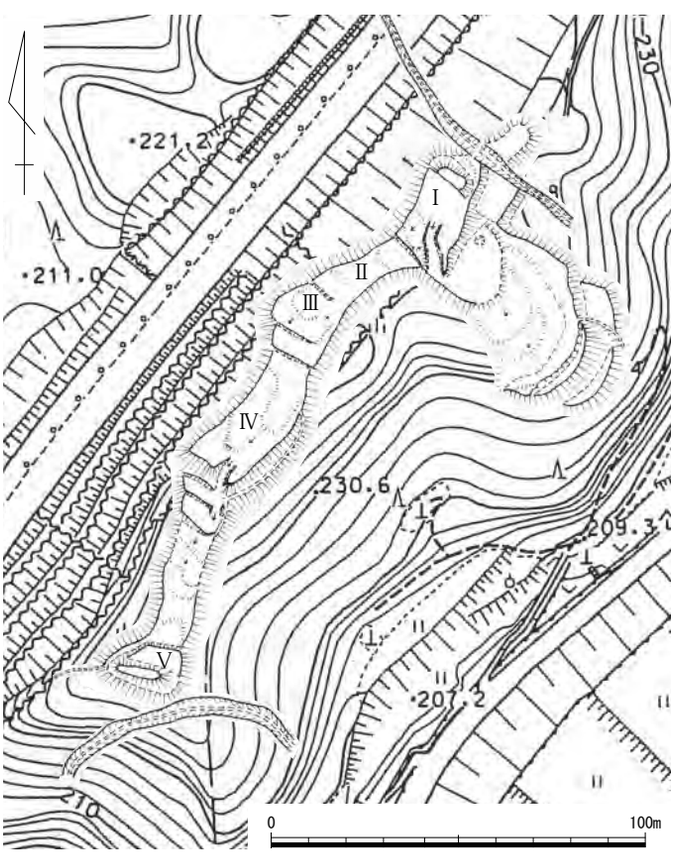
立地　吉備高原の南端、日近川上流域左岸の山頂部に立地する。標高約 240 mで、比高は約 100 mである。谷を挟んで北西約 600 mに忍山城跡、北 500 mに勝尾山城跡が近接する。

概要　城域は東西 70 m、南北 190 mと狭長ながら規模が大きい。北東から南西に延びる尾根筋に曲輪を連続して配置した連郭式である。城跡のうち、東に延びる尾根及び南端の堀切を除いた主要範囲は、1987 年度に一般県道岡山賀陽線改良工事に伴い発掘調査が行われた（文献 174 岡山県教育委員会「忍山城出城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』72　1989）。曲輪は 5 面（第 1 ～ 4 郭を含む）が連続しており、いずれも幅 12 m前後で、小規模である。北端の曲輪Ⅰ（第 1 郭）は、北側に土塁を設けるとともに北側の尾根筋を堀切で区切る。堀切は幅 3.4 m、深さ 4 mで、断面形はＶ字形の薬研堀を呈する。曲輪Ⅰの南西側、曲輪Ⅳ（第 4 郭）の南側中央には幅３mの坂虎口がある。南端の曲輪Ⅴには幅 5 m、高さ 60㎝の土塁がある。尾根の南西側の斜面部には、幅６mほどの堀切が弧状に延びる。城跡に伴う出土遺物は、土師器鍋、備前焼擂鉢・壺、陶磁器、鉄製品（鏃、釘）がある。全体的にみると、北側と南東側の守りを固めた縄張りである。

文献・伝承　天正９（1581）年の忍山合戦に際して、忍山城に対する付城として、勝尾山城とともに機能していたと考えられる。（文献 138　山本浩樹「天正年間備中忍山合戦について」『岐阜工業高等学校紀要』第 29 号　1994）　　（米田）

写真 135　曲輪群（北東から）

写真 136　堀切の完掘状況（南東から）



第 273 図　忍山城出城跡縄張り図（1/2,000）

331　亀石山城跡（かめいしやま）　　岡山市北区粟井　　地図 19 左

立地　足守川の支流である浮田川右岸の山頂部に立地する。標高 280 m、比高 175 mで、急峻かつ岩盤が部分的に露出しているところが多く、自然の要害と言える。頂部からは浮田川沿いの東西の眺望が良好である。付近には北へ約 500 mにあるサガジョウと呼称される 330 名称未定のほかは、東へ約 1.5㎞の足守川左岸に 334 堂坂の対岸の陣跡が位置するのみで、足守川上流域における最北の城跡に位置付けられる。

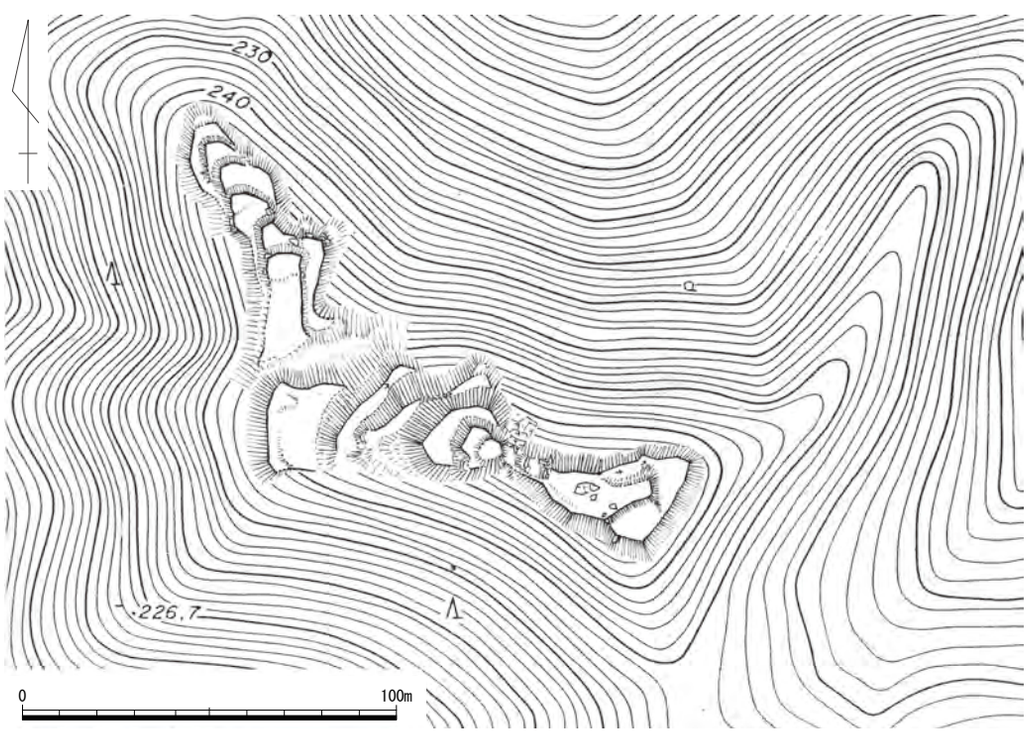
概要　城域は東西、南北ともに約 125 mで中規模である。山頂部は東西に延びて北西側と北東側に尾根が張り出すが、城館関連遺構は頂部と北西の尾根に展開する。縄張りは頂部の曲輪を中心に構成される連郭式である。

頂部東半には中心的な曲輪、その東側には北・東・南に一段下がった小曲輪を構える。頂部中央は岩の露出が著しいうえ、尾根が特に狭くなっている。

さらに頂部西側は不整円形と方形の小曲輪がある。西斜面には細長い曲輪を３面連続して構え、西斜面の西端はやや広い方形の曲輪を配置している。北西に延びる尾根上は狭長の曲輪と北東に帯曲輪を配し、北側に４面の小曲輪及び西端に通路を設けている。

防御施設としては、堀切や土塁は認められず、各曲輪周縁の切岸と露出した自然の岩や急峻な斜面を利用するにとどまる。全体的に北西側の守りを重点的に固めた縄張りである。

文献・伝承　地侍層の盟主とされる長門右衛門景成ないし土師刑部少輔の居城とされ、備中戦役の際に足守川上流域の地侍層が結集したことが畑和良氏（文献 117）により明らかにされている。（米田）



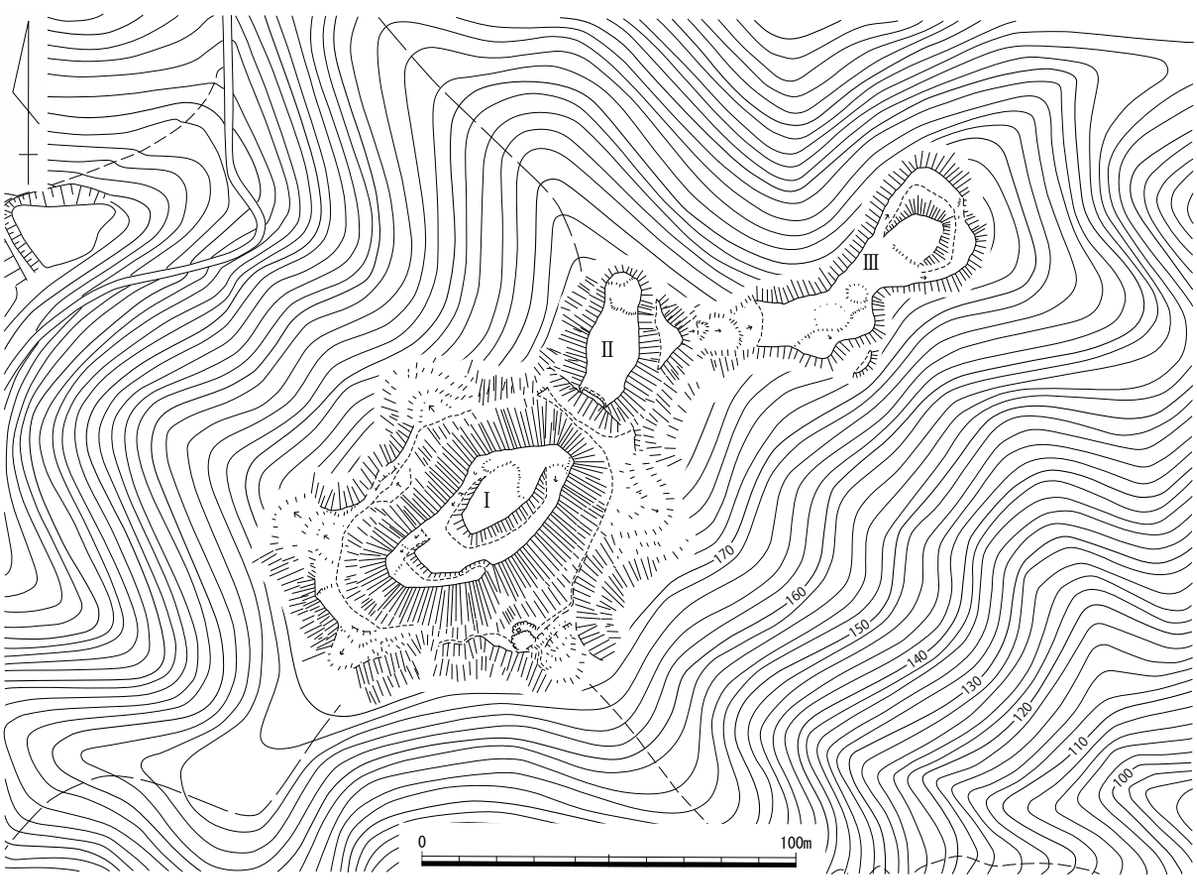
第 274 図　亀石山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

333　亀山（かめやま）城跡　　岡山市北区吉　　地図 19 左

立地　足守川と日近川の合流点の北側 2.5㎞の山頂部に立地する。南側 0.9㎞に和田城跡、1.1㎞には日近城跡が位置する。足守川を挟んで南西 2.5㎞には立石城跡が位置する。

概要　頂部を削平して曲輪２面を造成し、曲輪相互は堀切で分断する。曲輪Ⅰは略菱形状を呈する。北東から南西にかけて三段の平坦面を造出しながら下がる。上段平坦面の北・南側にはスロープが取り付き、中段平坦面に続く。中段平坦面には北側のみスロープを造り出し、下段平坦面に継続する。曲輪Ⅰの周囲は高さ 10 m程の切岸を削出していた。曲輪Ⅰからは北・南東・北西・南西方向に尾根が派生しているが、切岸削出の影響で各尾根の付け根はやや平坦となる。ただ、いずれの尾根筋も人の手は加えられておらず、自然地形のままである。曲輪Ⅱでは、堀切に面する辺で一文字状の土塁を確認している。曲輪Ⅱの北東側斜面には腰曲輪を作り出す。曲輪Ⅱから東側に派生する尾根上にある曲輪Ⅲの北東端部には高さ１m程の高まりがあり、その南北両側からスロープが東側に下りて平坦面に連結していた。この構造は曲輪Ⅰと近似する。南・西側に眺望が優れ、北側の谷筋から城を望むことが可能であることから、高い切岸を削出して全方位に対して防御を固めた構造と言える。

文献・伝承　当城跡に関する史料・文献・伝承は確認できない。　（上栫）

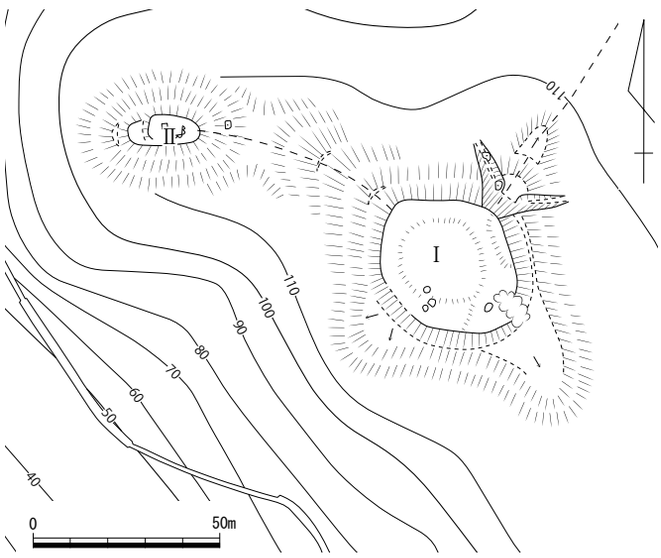


第 275 図　亀山城跡縄張り図（1/2,000）

334　堂坂（どうざか）の対岸の陣跡　　岡山市北区粟井・苔山　　地図 19 左

立地　苔山の尾根南先端頂部に立地する。東側 1.4㎞には亀山城跡が、足守川を挟んで西南西 2.2㎞の山頂部には立石城跡が位置する。

概要　尾根の先端頂部に立地する曲輪Ⅰは略方形状で、周囲を高さ 2.0 ～ 2.5 mの切岸で守る。曲輪Ⅰの東側には、切岸の造成に伴って発現した犬走り状の平坦面が確認できる。内部の造作はあまり行っておらず、自然地形を残す。北に続く尾根はU字状の堀切で分断する。曲輪Ⅰから西に派生する尾根の先端で狭い曲輪Ⅱを確認している。曲輪Ⅱには稲荷を祀った社跡があり、社跡が鎮座する平坦面の西側にも１～２段の平坦面がある。曲輪Ⅱからは、城館の西方を南流する足守川の流れや北側の集落を一望することができ、見張り所としての機能を考えたい。



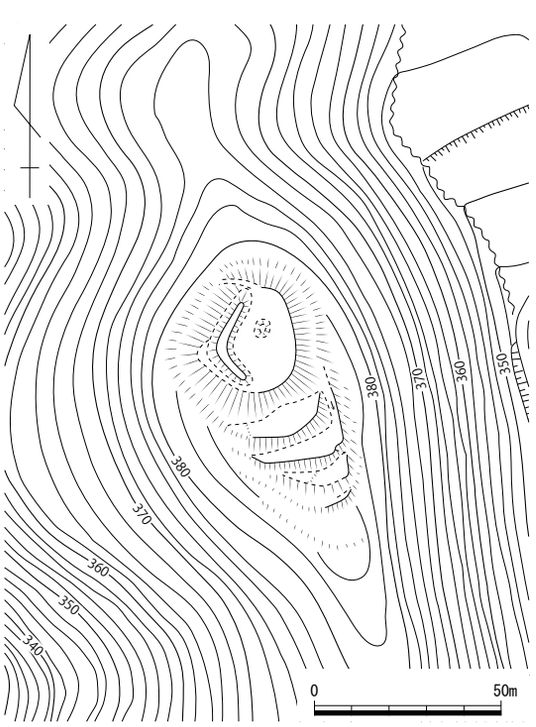
第 276 図　堂坂の対岸の陣跡縄張り図（1/2,000）作図：和田　剛

文献・伝承　故事来歴は不明。　（上栫）

335　名称未定　　総社市延原　　地図 22 左

立地　延原の本村集落から南に派生する尾根上に立地する。集落からの比高は約 20 mだが、西麓の谷筋からの比高は約 250 mに達する。

概要　尾根頂部に南北約 30 m、東西約 20 mの主郭を造成し、その南側に曲輪が連なる構造である。主郭の西縁には、「く」の字状に屈曲し、上面の幅１～ 2.5 m、郭面からの高さ１～ 1.5 mを測る土塁が構築されている。主郭内には、縁石が一部残存した高さ約 0.6 mの土壇が確認できるが、周囲に手水鉢が残ることから祠などの基壇跡と思われ、城とは無関係かもしれない。また、主郭の北端には参拝用の山道が取り付いている。南側尾根筋には、高さ２～ 2.5 mの切岸を伴う曲輪が４段にわたって連なるが、最下段では一部埋没して不明瞭な箇所もある。周囲に竪堀や堀切などは確認できなかった。



第 277 図　名称未定城跡縄張り図（1/2,000）

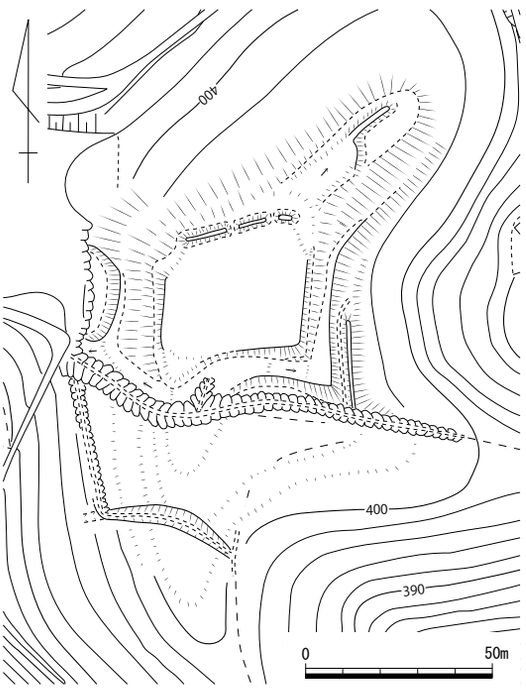
文献・伝承　近世地誌類などには記載がない。（岡本）

336　延原（のぶはら）城跡　　総社市延原　　地図 22 左

立地　吉備高原上の本村集落内の高所に立地。南西側山麓の種井集落との比高差は 360 mを測る。

概要　高所中央に約 30 × 35 mの方形の曲輪を造成している。周囲は 1 ～ 2 mの切岸で、北縁に高さ約 0.5 mの土塁を配する。方形曲輪の北東角から北東へ延びる尾根には、尾根筋の北西側を土塁状に掘り残した曲輪がある。方形曲輪の南から東斜面にかけて犬走りがあり、その下方に、後世の山道かも知れないが、狭い横堀状の溝が部分的に見られる。また、南に延びるなだらかな尾根筋を後世の山道が横断しているが、堀切を利用した可能性がある。

文献・伝承　『昭和町史』は「延原古城跡」とし、旧富山小学校敷地の東方丘陵上を「殿ろ」と呼び、女房屋敷・嬢山（じょうやま）の地名が附近にあるとする。また、元禄中（1688 ～ 1704 年）の古文書に、この地は豊岡宗清の居城跡であると述べているとする。（物部）



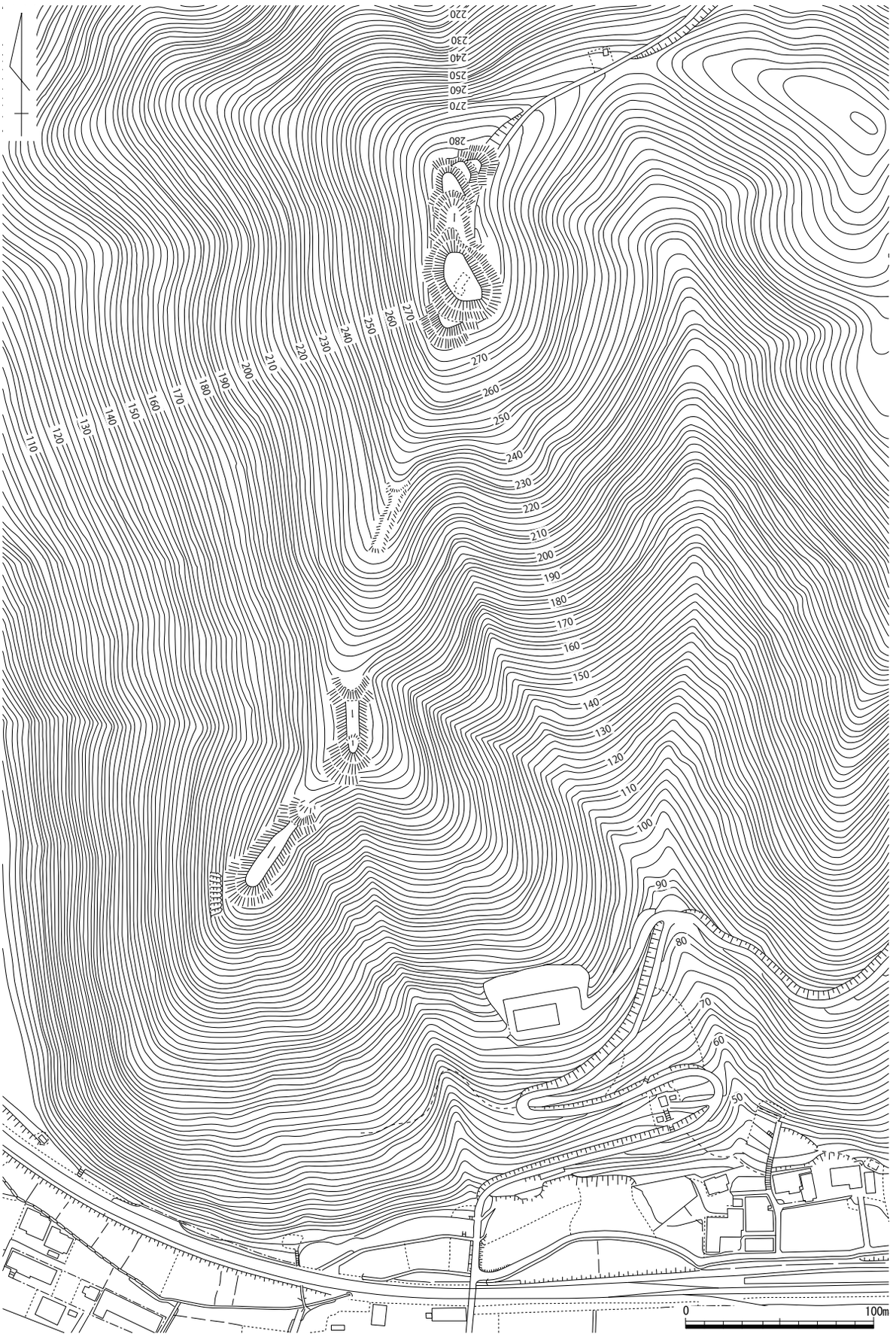
第 278 図　延原城跡縄張り図（1/2,000）

337　金頭山（きんとうさん）城跡　　総社市美袋　　地図 22 左

立地　東西方向に流れる高梁川の北側隣にある、標高約 290 mの山頂に位置する。屈曲して流れていた高梁川が東方向に流れを変えた付近の北側に当たる。現ＪＲ伯備線の美袋駅の裏山になり、頂部からは美袋地域が一望できる。北西隣には大渡城跡、高梁川を挟んだ南東側には下倉城跡が近接する。

概要　頂部から南北方向に派生する尾根筋に曲輪を数面築いている。頂部の主郭は、長さ約 30 m、幅約 15 mの規模である。この主郭から北側に延びる尾根筋に 4 面の曲輪を築いている。これら曲輪の規模は、最大でも長さ約 10 mとそれほど大きくはなく、鞍部付近にも堀切などは築かれていない。主郭南東側にも小さな曲輪を一面配している。この頂部付近は 1996・1997 年にテレビ中継局の建設に伴い総社市教育委員会によって発掘調査が行われている。この際、アンテナ予定地内の範囲では、柱穴等の遺構は発見されていない。また主郭から南側に約 100 m下った尾根筋には、長さ約 30 ～ 40 mの細長い曲輪が 2 面存在する。これら曲輪は、麓から見ても段をなして連なっていることが確認できる。しかしどちらの曲輪も幅 10 mに満たない細尾根である。

文献・伝承　現在の美袋地域の中心部背後に立地していることから、『備中兵乱記』に記された「美袋の城」の可能性がある。しかし発掘調査の成果でも遺構の状況は必ずしもしっかりしておらず、また前面に張り出す尾根平坦地も幅が細い。これらのことから当城は「美袋の城」ではなく、隣接した位置に当たる大渡城跡が該当するのでないか。（小林）



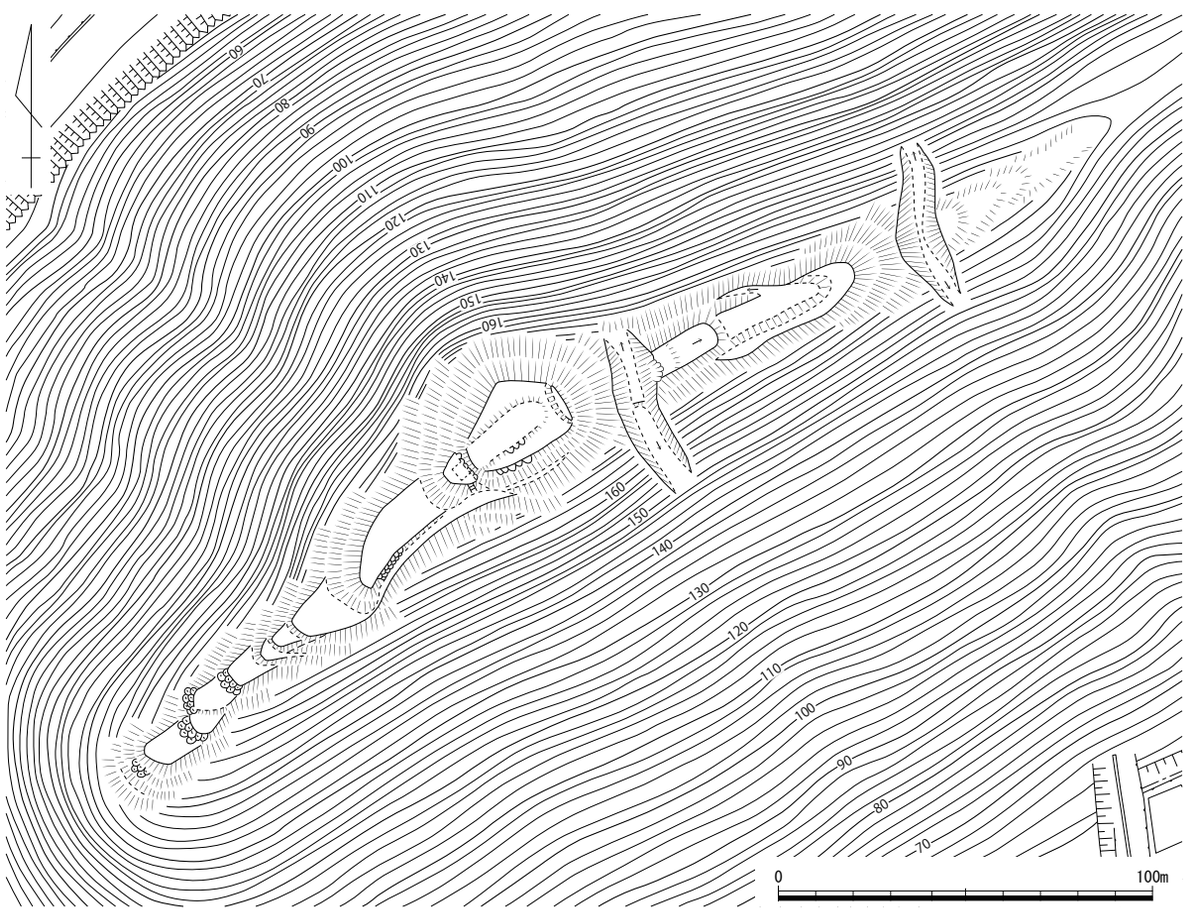
第 279 図　金頭山城跡縄張り図（1/3,000）

338　大渡城跡（おおわたり）　　総社市美袋・種井　　地図 22 左

立地　標高約 320 m級の山塊から南西方向へ派生した標高約 170 mの尾根先端頂部に位置する。南北方向に流れていた高梁川が本城の尾根にぶつかり屈曲して流れる。志鳥谷川が高梁川との合流する地点の近くで、両川に挟まれた位置に当たる。また南東側に近接して金頭山城跡が存在する。

概要　南西方向に細長い尾根筋に曲輪を配した連郭式の山城である。頂部に長さ約 30 m・幅約 20 mの主郭を置き、尾根先端方向の南西側に向けて大小９面の曲輪を配する。主郭背後は土塁と深さ約９mの堀切で守りを固める。さらに尾根鞍部に向けて不明瞭な曲輪を置き、もう１条の堀切で画している。主郭の内側には、石列を伴う高まりがある。主郭からみて２面目には、現在社が建っている。３面目と４面目は、それぞれ長さ約 30 m・幅約 15 m、長さ約 15 m・幅約 15 mと他の曲輪より大きく、特に３面目の側面には石垣が明瞭に残る箇所が存在する。これら主郭から４面目までは、帯曲輪によって連結している。当城は高梁川流域を広く見渡せる位置に築かれ、また美袋地域で最も整った構造の山城である。

文献・伝承　『古戦場備中府志』には永禄年間ころ田辺氏が居城していた。天正年間には結城忠秀が入り、「一戦の後児島に被立退ける」とある。当城は、この記述と美袋地域にある山城であることから、『備中兵乱記』に記された「美袋の城」の可能性が高い。　（小林）



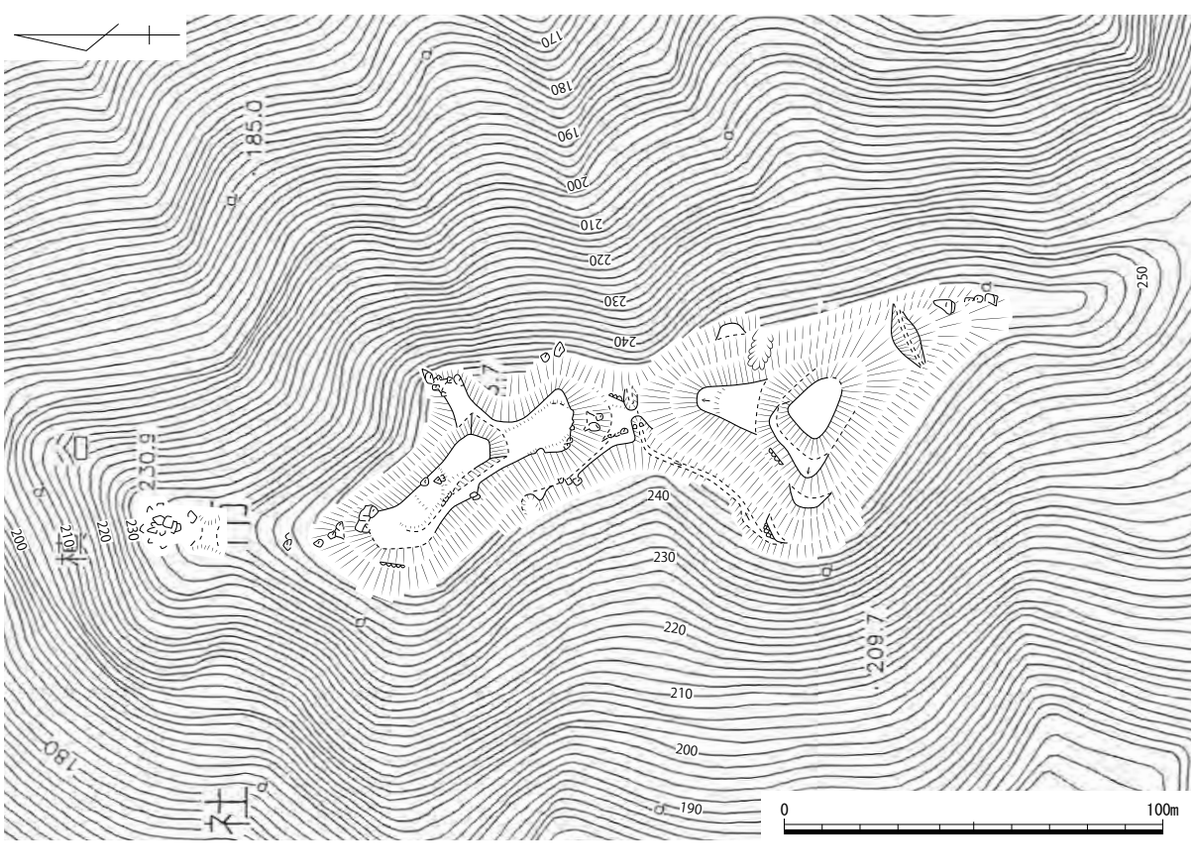
第 280 図　大渡城跡縄張り図（1/2,000）

339　鍋坂（なべさか）城跡　　総社市槙谷　　地図 22 右

立地　槇谷川の西岸に沿って北へ延びる尾根筋に立地する。北に槇谷川と落合川の合流地点、東に槇谷川流域、南東に槇谷川と畑ヶ野川の合流地点を見下ろす。尾根は花崗岩地帯のため露岩が多い。

概要　尾根筋に深さ約 1.5 ～２ｍの堀切を設け、そこから北、尾根先端方向にある２か所の高所を中心に郭を配置している。高所の間は浅い鞍部になっているが、ここも平坦に加工し曲輪を造っている。この鞍部の曲輪の南端部に、竪堀状の溝を東西両斜面へ延ばした堀切状の遺構がある。西側の溝を伝って南西へ下りると、南側高所から西に張り出す尾根筋に造られた腰曲輪へ通じている。また、反対側の溝を下ると南方へ曲がって犬走りとなるように観察されたので、これらの溝は通路の可能性がある。西に下る溝の下がり口には間隔を約１ｍ開けて石を並べているようにも観察され、虎口と考えられる。また、曲輪の縁辺に石垣や石列が５か所に確認できた。石垣は、鞍部や南の高所の曲輪の端から斜面へ少し下がったところに築いており、曲輪が崩れないように土留めしたものと推定される。長さは長いもので５ｍほど、30㎝大の石を積み、高さは高いもので 1.8 ｍある。石列は北の高所の曲輪内と、先端斜面に認められ、現状では１段であるが、２段以上積んで石垣としていた可能性はある。曲輪内の石列は３石が並び、石は比較的大きい。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は槇谷村「鍋坂城」とし、城主鎮西八郎為朝とする。『備中誌下巻』は「鍋坂城跡」とし、城主不詳とする。『中国兵乱記』は、元亀２（1571）年に尼子勢が経山城を攻めた記事に「鍋坂」を記す。　（物部）



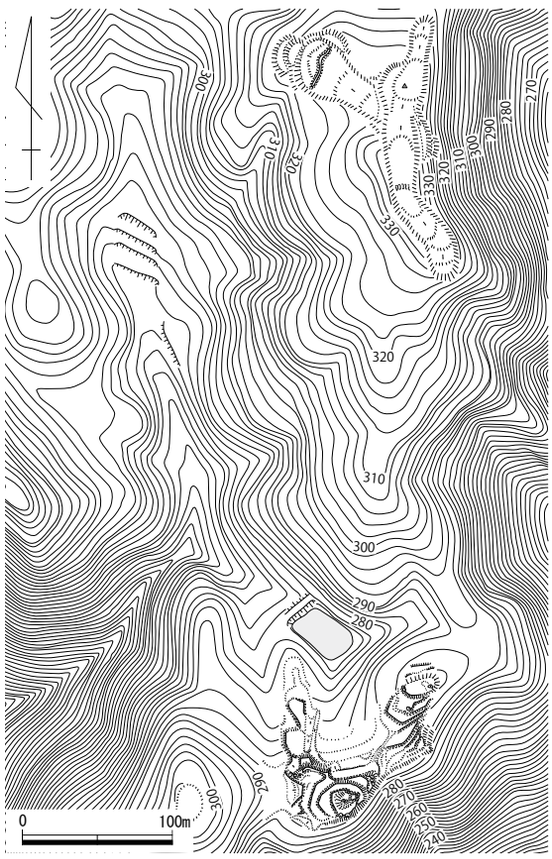
第 281 図　鍋坂城跡縄張り図（1/2,000）

340　高馬城跡　　総社市槙谷　　地図 22 右

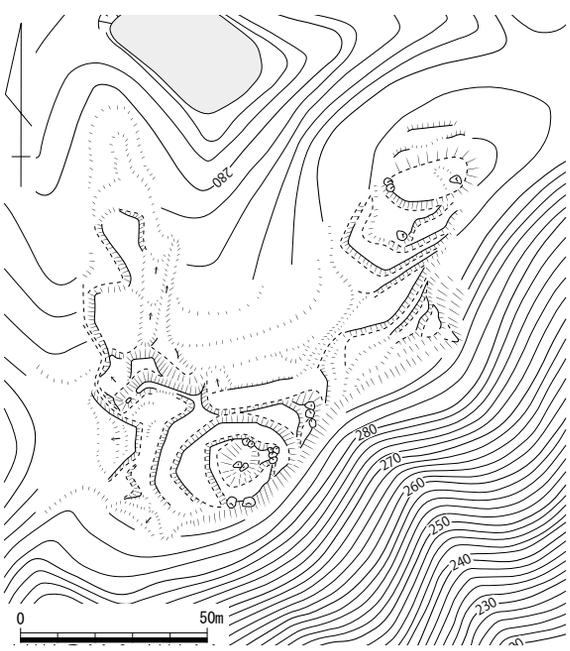
立地　槙谷川に注ぐ畑ヶ野川北岸に切り立つ山塊頂部に立地する。山上は高原状を呈する。

概要　南に延びる尾根筋に見られるいくつかの高所の中で、北部の最高所（標高 330 m）上部は平らだが自然地形と考えられる。そこから北西に派生する尾根に高さ 0.5 ～ 1.5 m、長さ約 30 mの土塁を確認した。直線ではなく、微妙に曲がっているが、尾根筋に対し直交し、尾根を遮断しているようにも見てとれる。また、最高所から 400 m程南の尾根続きにある高所やその周辺、そこから派生する尾根に、細かな平坦地を多数設けた場所がある。段差は 1 m前後と小さく、垂直に掘削している。高さ約 0.3 mの土塁状の盛り土が見られる平坦地も 1 面あるが、新しい時期の造成とも考えられる。

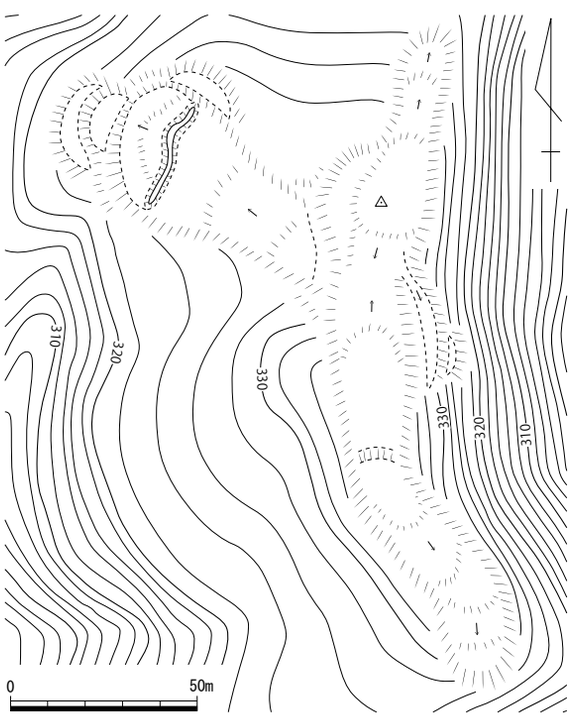
文献・伝承　『吉備郡史中巻』は、池田村大字槇谷の「高馬城」とし、「鍋坂」の東方渓谷を隔て、八重栗の山頂で、鍋坂城と高馬城は東西 15 町隔たり、指呼の間にあるとする。『日本城郭大系』13 は「標高 300 m余り」とする。　（物部）



第 282 図　高馬城跡縄張り図（1/5,000）



第 283 図　高馬城跡南部縄張り図（1/2,000）



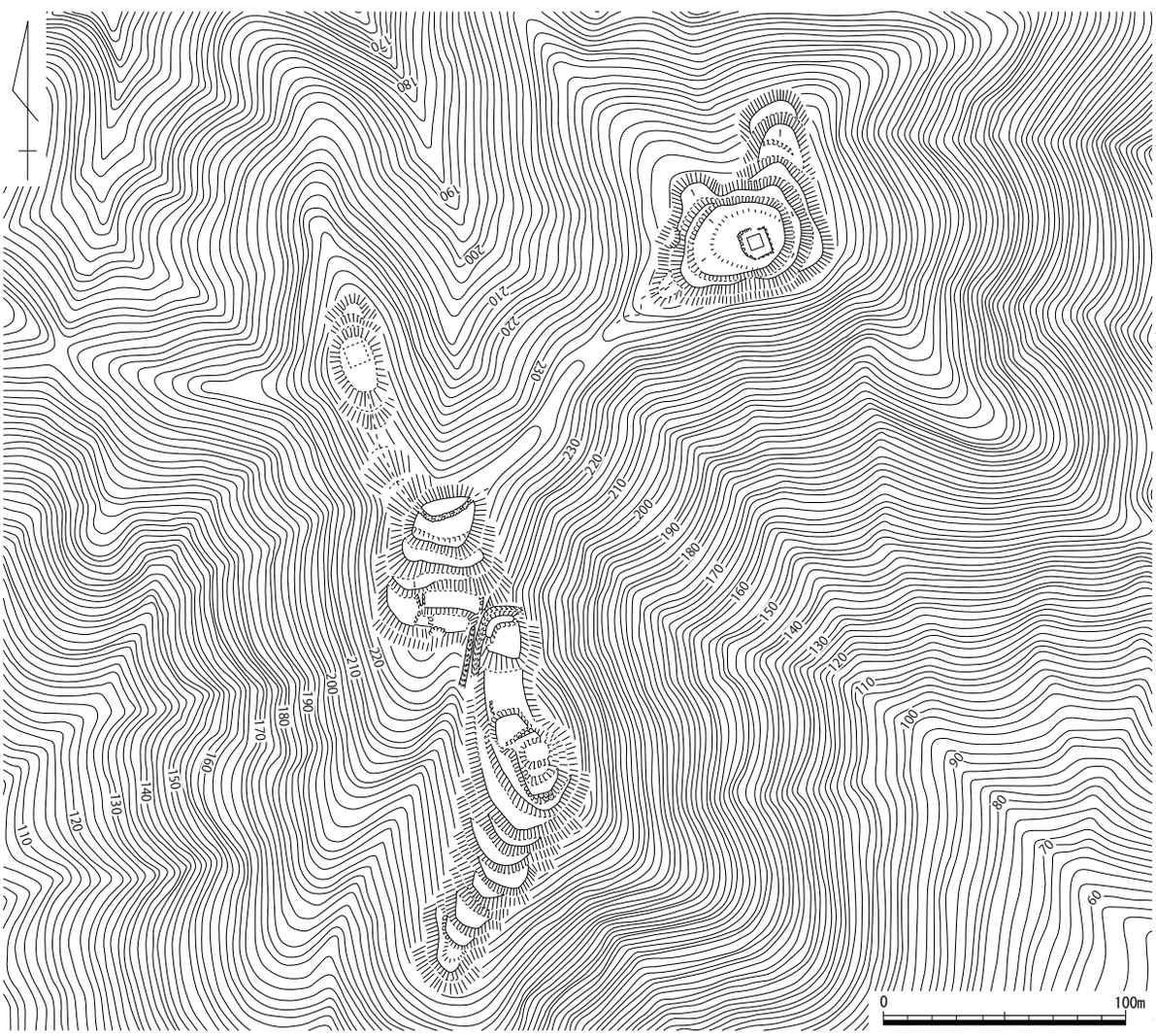
第 284 図　高馬城跡北部縄張り図（1/2,000）

341　志良計（しらけ）城跡　　総社市宍粟・見延　　地図 22 右

立地　高梁川を南に見下ろす城山の山頂（標高 252 m）とその周辺に展開する城郭である。城の東麓を支流の槙谷川が南流し、南麓で高梁川に合流する。高梁川の対岸に荒平山城跡が立地する。

概要　城域は、城山の山頂に置かれた主郭と、その南西にある南北方向の尾根筋上の曲輪群とに二分される。山頂の主郭は、長径 40 m、短径 30 mのいびつな楕円形を呈し、郭面は自然地形を残している。主郭の周囲は帯曲輪が取り巻き、さらに北側の尾根筋にも 2 面の曲輪が設けられている。一方、山頂の南西側にある南北方向の尾根筋では、頂部に全長約 30 m、幅約 20 mの曲輪を置き、北側には不明瞭な平坦面、南側には一部に土塁や堀を伴う多数の曲輪を連ねており、その全長は約 280 m に達する。これらの曲輪は、地形に規制された不定形なものが多いが、南側尾根筋の途中にはやや不明瞭ながら周囲から盛り上がった正方形の曲輪があり、櫓台の可能性が想定される。

文献・伝承　『備陽国誌』では宍粟村の「米城山」とし、城主を赤木但馬守とする。『古戦場備中府志』では、「しらけヶ城」として、城主を赤木左衛門尉忠興とする。　（岡本）



第 285 図　志良計城跡縄張り図（1/3,000）

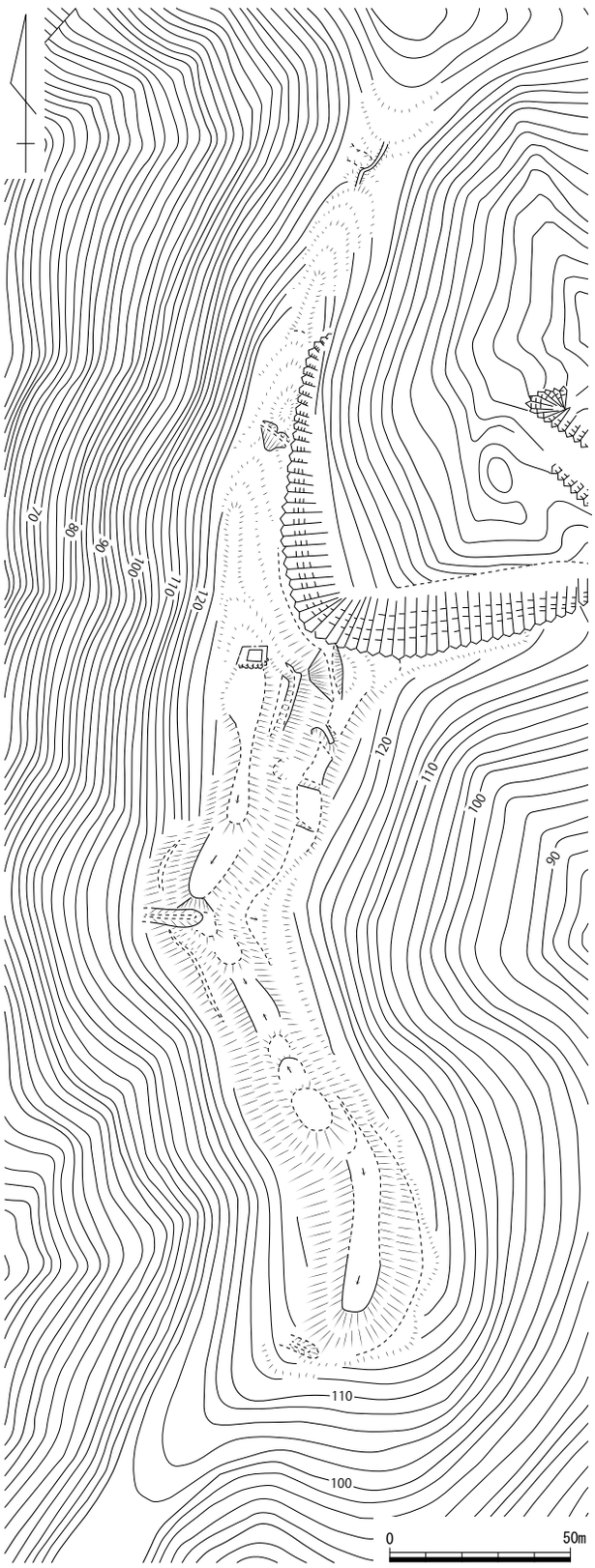
342　井山（いやま）城跡　　総社市井尻野　　地図 22 右

立地　高梁川の東岸に沿って南北に延びる丘陵の尾根筋に立地する。尾根の西側斜面は崖となって高梁川に落ち、東側には宝福寺が所在する谷がある。

概要　細い尾根筋に約 200 ｍにわたって曲輪を連ねている。概して削平は甘く、自然地形を残し切岸も不明瞭である。堀切は尾根筋に３か所確認した。曲輪群の北約 50 ｍにある堀切は、南側の尾根を掘削して高さ２ｍの切岸を造っている。曲輪群の中央あたりに配された堀切は北側の曲輪端部を掘削して約２ｍの切岸を造り、西斜面に竪堀を延ばしたもの、曲輪群の南端部の堀切は急斜面の下端部に西斜面に竪堀を延ばしたものである。また、北の堀切から北約 80 ｍの尾根鞍部に土橋が確認される。尾根筋から約５～ 10 ｍ少し下がった東斜面には、北端と南端の堀切を繋ぐ犬走りがあり、その途中、ちょうど尾根筋の高所の東側にあたる場所に３面の曲輪を並べ、境には土塁も造っている。そのすぐ北に、東に延びる尾根を遮断する堀切があり、堀切の底を犬走りと繋げ通路としている。犬走りは、尾根の西斜面にも一部に確認される。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は城主八尾入道とするが、『備中誌』はいずれの紀伝に因るか不明のため信じがたしとする。（物部）

写真 137　遠景（北西から）



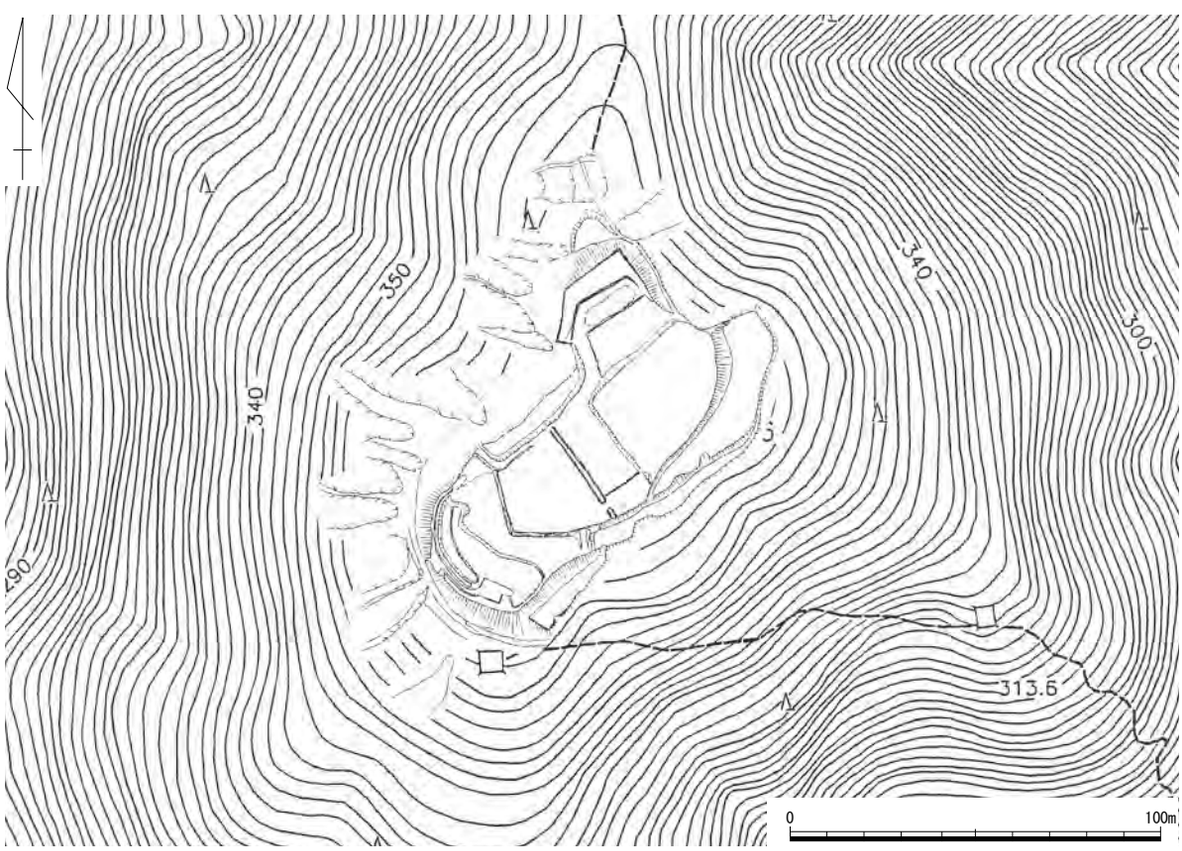
第 286 図　井山城跡縄張り図（1/2,000）

345 経山城跡（きょうやま）　総社市黒尾　＜市指定史跡＞　地図 23 左

立地　総社平野の北縁山塊の山頂に立地する。麓との比高は 340 mあり、南に総社平野を一望できる。

概要　山頂部を大規模に削平し、約 100 m× 50 mの範囲に曲輪を配置している。概して、曲輪の平面形は方形を呈し、輪郭は直線的で、石垣が多く残る。中心となる曲輪は約 70 × 30 mの広さがあり、約 50㎝の段差によって北西と南西に区画される。南西側の区画にはさらに、周囲に土留めとして石を並べた幅約 2 m、高さ約 50㎝の土塁（石塁か）があり、約 10 × 30 mの空間を造っている。北西側の区画の北西側には広さ約 25 m四方の区画を設け、その北～西縁に、幅 3 ～ 5 mで、周囲に高さ約 1.5 mの石垣を築いた曲輪を造成し、尾根鞍部方向を固めている。南西側の区画の西・南縁にも石垣を築いており、その高さは約 1.5 ～ 2 mを測る。この石垣の外側（西～南側）にも約 35 × 20 mの区画があり、西～南縁に食い違い虎口を持つ土塁を設けている。この土塁は縁部を掘り残して窪地を掘削して造った土塁であり、高さは掘削の深さと同じで約 0.2 ～ 2 mある。さらに、土塁から 3 mほど斜面下方に深さ約 1 ～ 1.5 mの横堀がある。その横堀を西から北へたどると犬走りとなり、尾根鞍部まで続く。横堀から犬走りにかけての下方斜面には大小の溝状地形が観察されるが、自然の崩れによるものと考えられる。

文献・伝承　『古戦場備中府志』は、中島村「経山城」として、城主中島大炊介と記す。『備中誌』は経山城築城を大内義隆とし、その後、小早川隆景の城代中嶋大炊介元行とする。『中国兵乱記』は、天文 12（1543）年に赤松勢、元亀 2（1571）年に尼子勢との合戦を伝えている。　（物部）



第 287 図　経山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：島崎　東

347 立石城跡（たていし）　岡山市北区粟井　地図 23 左

立地　足守川右岸の山頂部に立地する。山塊は吉備高原の南端付近にあたり、西側の山塊から東・南東・南西に尾根が派生する。頂部の標高は約 262 m、比高は約 240 mである。本城の南西 800 mには 348 久田城跡、南 1.8㎞には 353 宮路山城跡が位置する。

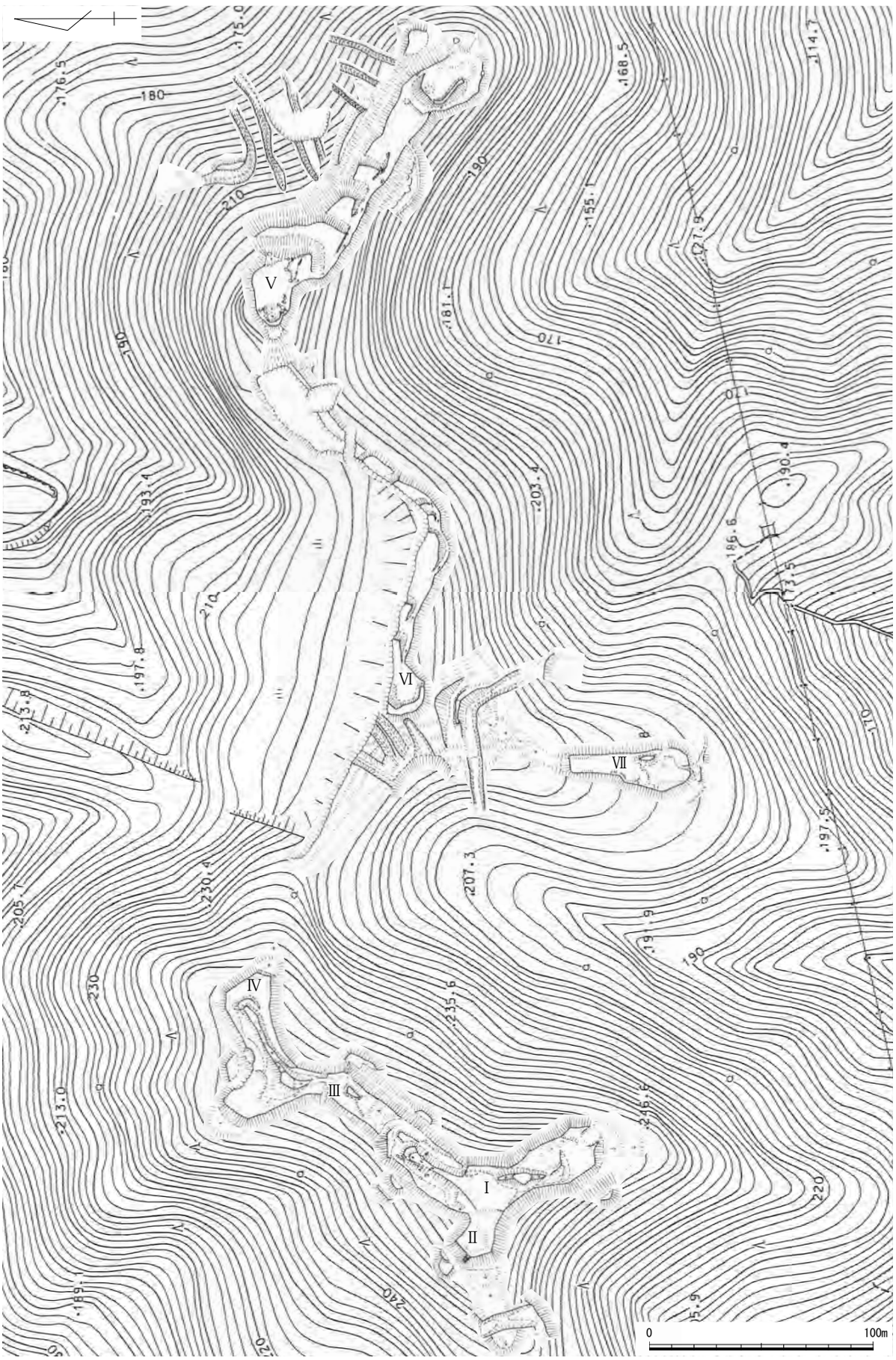
概要　縄張りは西側と中央の南側から東側に延びる尾根の２か所に大きく分かれ、城域は大規模で東西 600 m、南北 240 mに及ぶ。

西側に延びる尾根には、大きく南西、南東、中央、北に曲輪が配置されている。南西側の曲輪Ⅰは東西 20 m前後、南北約 61 mの長方形を呈し、中心的な曲輪と考えられる。東西の縁辺は幅５m程度の平坦面が延び、中央部分は自然の緩やかな頂部を残すほか、部分的に岩が露出している。さらに曲輪の西側に一辺 10 m前後の台形状の曲輪Ⅱが張り出し、その北側下方には小曲輪が２面、西側斜面部に幅８m、深さ 2.5 mほどの堀切が配置されている。南東側の曲輪の北側には岩盤の高まりが露出しており､その南側は３面ほど造成のあまい平坦面が連なる。その南東端は平入りの虎口状となる。中央の曲輪Ⅲは東西約 30 m、南北約 11 mの長方形を呈する。曲輪の中央部分には長さ６m、幅２mの土塁状の高まりがある。曲輪Ⅲの南半は緩やかに北側へ下がる。北側の曲輪Ⅳは東西約 55 m、南北約 15 mの不整長方形を呈し、周縁は幅５m前後の平坦面がめぐるように造成されているが、中央部分は自然の緩やかな頂部を残す。その北西には小曲輪が配置されるほか、東西の斜面部には小曲輪が点在する。南西側に延びる尾根は、全体的に南北方向に細長い曲輪を連続して配置し、南西端のみに堀切を配置して守りを固めているが、総じて自然地形を多くとどめるのが特徴である。

東側に延びる尾根は屈曲しながら東西に長く延び、東西と中央に頂部がある。中央の頂部には東西 28 m、南北 25 mの台形を呈する曲輪Ⅴがあり、中心曲輪と考えられる。曲輪Ⅴの南半には岩が所々に露出している。曲輪の西辺は幅２m、高さ１mの土塁があり、その東側には径３m、深さ１mほどの窪みがある。曲輪周辺の切岸は勾配がきつく、特に東西側は急崖となっている。曲輪の南東隅には石列が断続的に確認でき、南側に小曲輪がある。曲輪Ⅴのすぐ南側は等高線に沿うように長さ 40 m、幅８m前後の帯曲輪があり、その南側は石列及び通路がある。さらに南東下方には一辺 10 m前後の方形を呈する曲輪が２面連続し、同じく南側に石列及び通路がある。尾根の鞍部は東西 30 m、南北 15 mの長方形の曲輪があり、その東側は一段高まる。南斜面には巨岩が露出している。南東端の頂部は東西 15 m、南北 30 mの楕円形を呈する曲輪がある。曲輪の北端には径４mほどの窪み、西辺には土塁と通路が配置される。中央の頂部から南東端の頂部にかけて延びる尾根の北斜面には小規模な曲輪が２面、竪堀を３条ずつ２単位で配置するとともに北端に弧状の堀切を１条設けて北方向を堅く守る。

曲輪Ⅴのある中央の頂部から曲輪Ⅵのある西側頂部にかけては細い尾根が延び、少なくとも７面の曲輪が連続して配置されているが、北半は土取りにより著しく削平されている。西側頂部には東西 30 m、南北 10 mの細長い曲輪Ⅵがあり、西辺は幅４m、高さ 1.5 mの土塁がコ字状に築かれている。西側頂部より西側の鞍部には幅広の堀切が連続するように３条、南斜面には竪堀が１本、深さが５mもある弧状の堀切を２条連続させており、西及び南方向を堅固に守る。

南側の尾根は南北 50 m、東西 15 mの曲輪Ⅶがあり、南端がやや高い。また、南辺と西辺にわず



第 288 図　立石城跡縄張り図（1/2,500）

写真 138　西の尾根　南西端の堀切（南から）

写真 139　西の尾根　曲輪Ⅰ南端の高まり（南東から）

写真 140　中央尾根鞍部　西端堀切（南西から）

写真 141　中央尾根　曲輪Ⅵ（西から）

写真 142　東尾根頂部曲輪Ⅴ南辺石列（南西から）

写真 143　東尾根頂部　曲輪Ⅴ西端の窪み（北から）

かな高まりが断続的に確認できることから、本来は土塁がめぐっていた可能性がある。

全体的に縄張りは、南西側の尾根と東側及び南側の尾根で構造が異なる。南西側の尾根にある曲輪群は自然地形を多くとどめ、堀切も南西隅のみに 1 条配置されるのみで、古い様相を示す。一方、東側及び南東側の尾根は、土塁を伴う曲輪をそれぞれの頂部に配置し、尾根筋に小曲輪を連続させ、北東斜面と西・南斜面を堀切や畝状竪堀群で堅守する縄張りで、新しい様相を示す。

文献・伝承　文献 55『吉備郡史』によれば、天正年中、毛利輝元の命により、長門右衛門尉昌成（又作景成）が居城したとされる。（米田）

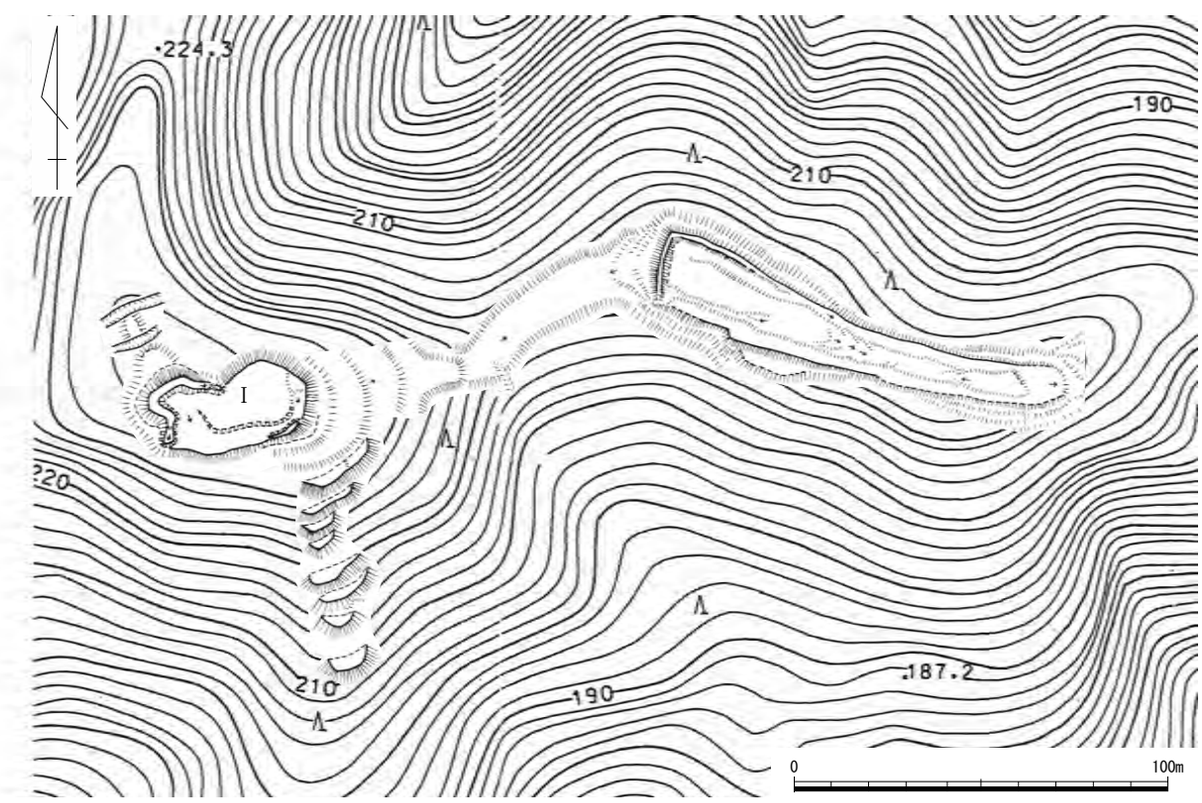
348　久田（くた）城跡　　岡山市北区粟井　　地図 23 左

立地　足守川の支流である百田川上流域左岸の山頂部に立地し、標高約 235 m、比高約 180 mである。本城より北東 800 mには立石城跡、南東 1.4㎞には宮路山城跡が位置する。

概要　城域は東西約 260 m、南北約 110 mに及び、規模は大きい。縄張りは頂部周辺と東側尾根の曲輪を中心に構成される。頂部は東西 40 m、南北 20 mの不整楕円形の曲輪Ⅰがあり、南側は 1 m弱下がった段がある。曲輪面は削平が甘く、自然地形に近い。曲輪の北西側と南東側には土塁が設けられている。北西側の土塁は全長 40 m、幅 7 m、高さ 1 m前後であり、北西に横矢状に屈曲する。北西側の尾根鞍部には幅 3 mの浅い堀切が 2 条連続し、土塁とともに守りを固める。一方、南東側の土塁は全長 10 m、幅 2 m、高さ 30㎝程度と低く、残存状況は良くない。曲輪の切岸は緩やかで、自然に近い。頂部から南側尾根に続く南斜面部には、小曲輪が 8 面連続し、南方を防御する。

東側尾根は東西に長く延びており、頂部の西辺と北辺西半は土塁、周縁は幅 2 m前後の平坦面がめぐる。土塁は上端幅 1 m、下端幅 5 m、高さ 2 m前後で、L 字状に造られており、北西側を堅固に守る。犬走り状の平坦面のうち、北辺東半と南辺は幅 2 m前後であるが、東辺は幅 10 mあり、頂部東端を曲輪状に造作している。また、尾根頂部は、削平が甘く、自然地形に近い。全体的には北西側と南側の守りを固めた縄張りである。城の範囲は大規模であるが、遺構の造作が甘く、自然地形を多くとどめている。

文献・伝承　文献 130『全国遺跡地図　岡山県』では「久田城」、ほかは百田城跡と呼称される。（米田）



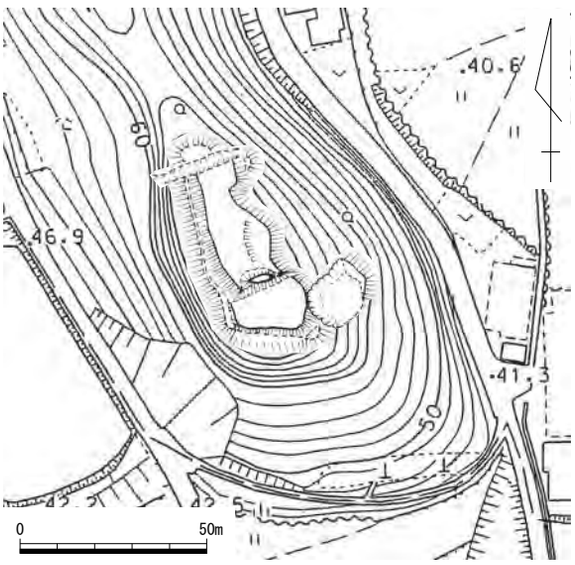
第 289 図　久田城跡縄張り図（1/2,000）

349　和田（わだ）城跡　　岡山市北区吉　　地図 23 左

立地　日近川右岸の丘陵尾根先端に立地する。備前と備中の国境である勝尾峠と足守川流域を繋ぐ交通の要衝に位置する。付近には南東約 250 mに日近城跡、北約 800 mに亀山城跡、南へ約 1.5㎞に鍛冶山城跡が位置する。

概要　城域は東西約 25 m、南北約 55 mと小規模である。頂部の曲輪は狭小で、南東側にわずかに下がる段、南辺には低い土塁が造られている。頂部の曲輪の南側には腰曲輪、東斜面には後世の炭窯が造られた平坦面がある。尾根鞍部は幅が狭くて浅い堀切 1 条で区切り、西斜面の犬走りと繋がる。小規模ながら、コンパクトにまとまった縄張りである。

文献・伝承　故事来歴は不明である。　（米田）



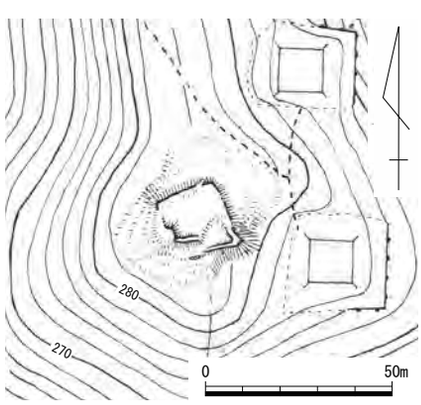
第 290 図　和田城跡縄張り図（1/2,000）

350　守福寺裏山（しゅふくじうらやま）の陣跡　　岡山市北区下足守・横尾　　地図 23 右

立地　足守川流域を西に見下ろせる山頂部に立地する。南西 1.0㎞に一国山城跡が、1.8㎞に冠山城跡が位置し、いずれも視認できる。

概要　略台形状の単郭陣城である。南西角に櫓台を設けており、そこから東に土塁を延ばす。曲輪の西・北辺にも低い土塁状の高まりが認められる。南東部にはスロープ状に下がる虎口が開く。虎口の南東側でも土塁を確認している。虎口から西に下った地点は、南側の加工が不十分な平坦面があり、一部石列を構えている。

文献・伝承　『桂岌円覚書』には、天正 10 年 4 月 7 日、羽柴秀吉は「しふくし山」に出張り、その日のうちに兵を収めたことが記録されている（文献 117）。この文書をもとに畑和良氏は足守盆地の東山塊を踏査して、守福寺の裏山で当城を発見した。なお『中国兵乱記』には、天正 8 年 9 月に宇喜多直家が冠山城に攻め寄せるも、敵方の増兵により朱福寺山に引きあげたと記述される。また天正 10 年 3 月 17 日、羽柴秀吉勢は冠山城攻めに際して朱福寺山に人数を揃えたとある。　（上栫）



第 291 図　守福寺裏山の陣跡縄張り図（1/2,000）
作図：畑　和良

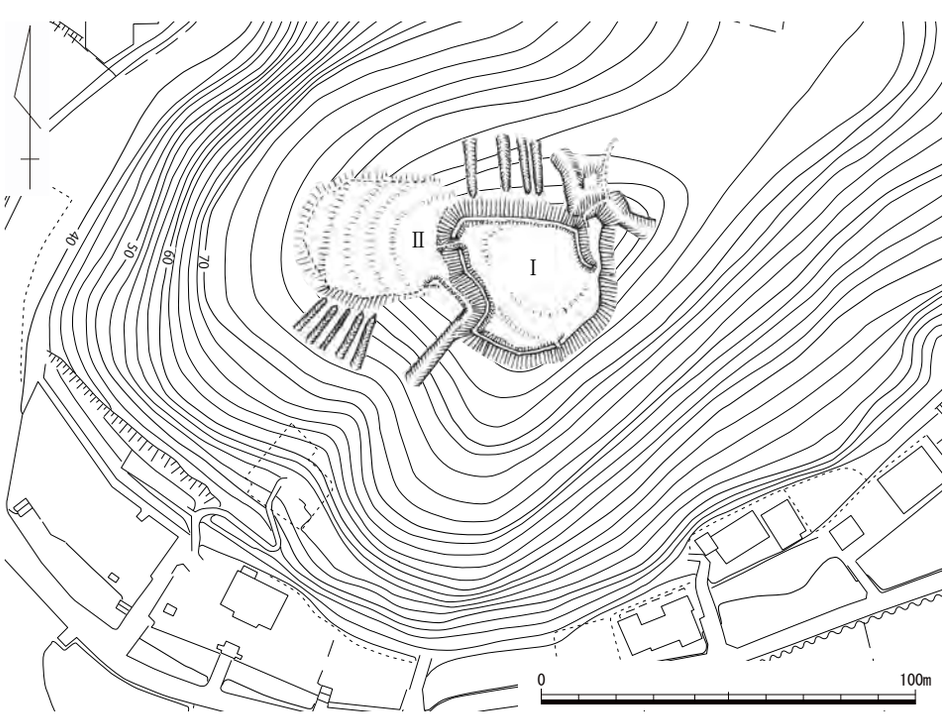
351　日近城跡（ひじかい）　　岡山市北区日近　　地図 23 右

立地　日近川およびその流れにより形成された谷平野を南に見下ろす山頂部に立地する。平野を挟んで北約 250m の地点には和田城跡が、南約 1.4㎞の地点には鍛冶山城跡が位置する。南流した日近川が足守川と合流する地点には近世大山道が通り、谷平野は大山道から勝尾峠を抜ける経路に相当する。なお勝尾峠の頂部には勝尾山城跡が位置する。

概要　不整形の曲輪Ⅰは北・西・南側を土塁で囲繞する。北側土塁の東端は南にほぼ直角に折れ曲がって延び、虎口に至る。西側土塁は折れを多用しており、南西角を直角に突出させる形状を造出している。曲輪Ⅰの東側下方には堀切がある。堀切の南東斜面は竪堀状に下り、北斜面は１m程一段下がった地点から山道に継続する。この一段下がった地点には東に屈曲した虎口に平行する横堀とそれに平行する土塁が確認できる。横堀西端から竪堀が北斜面を下る。北斜面にはさらに４～５条の竪堀が確認できる。曲輪Ⅰの西側には西に緩やかに下る斜面地があり、西側土塁の虎口で繋がる。西緩斜面の南側にも５条からなる畝状竪堀群が確認できることから、曲輪Ⅰの西緩斜面も城郭相当部分と評価されている（曲輪Ⅱ）。南斜面の畝状竪堀群から東に離れた地点にもやや大形の竪堀があるが、この上端は横堀に連結して曲輪Ⅱに繋がる。横堀と竪堀が連結する地点の東側にある曲輪Ⅰの土塁は、西側土塁から南側土塁に直角に折れ曲がる地点に相当する。南斜面に畝状竪堀群を構えることから曲輪Ⅱも城郭関連施設と評価できるが、さらに自然地形も取り込んだ二重構造という特徴から畑和良氏は日近城を在地人の居城ではなく、備前・備中境目地域の戦乱に関わる陣城の可能性を指摘し、さらに立地も踏まえて毛利方が鍛冶山城攻略に際して使用した可能性にも言及している。

文献・伝承　日近城が立地する山の南麓にある善修寺の記録によると、善修寺は「天文年中より日近修理進秀直の城地の内にして当城鎮守の修験者文珠坊と云へる山伏居住せり」（『吉備郡誌　中巻』）とあり、安永９（1780）年に古川古松軒が著した『吉備の志多道』には日近修理進の居城とする。城跡が位置する山は古城山という地名を持つ。

（上栁）



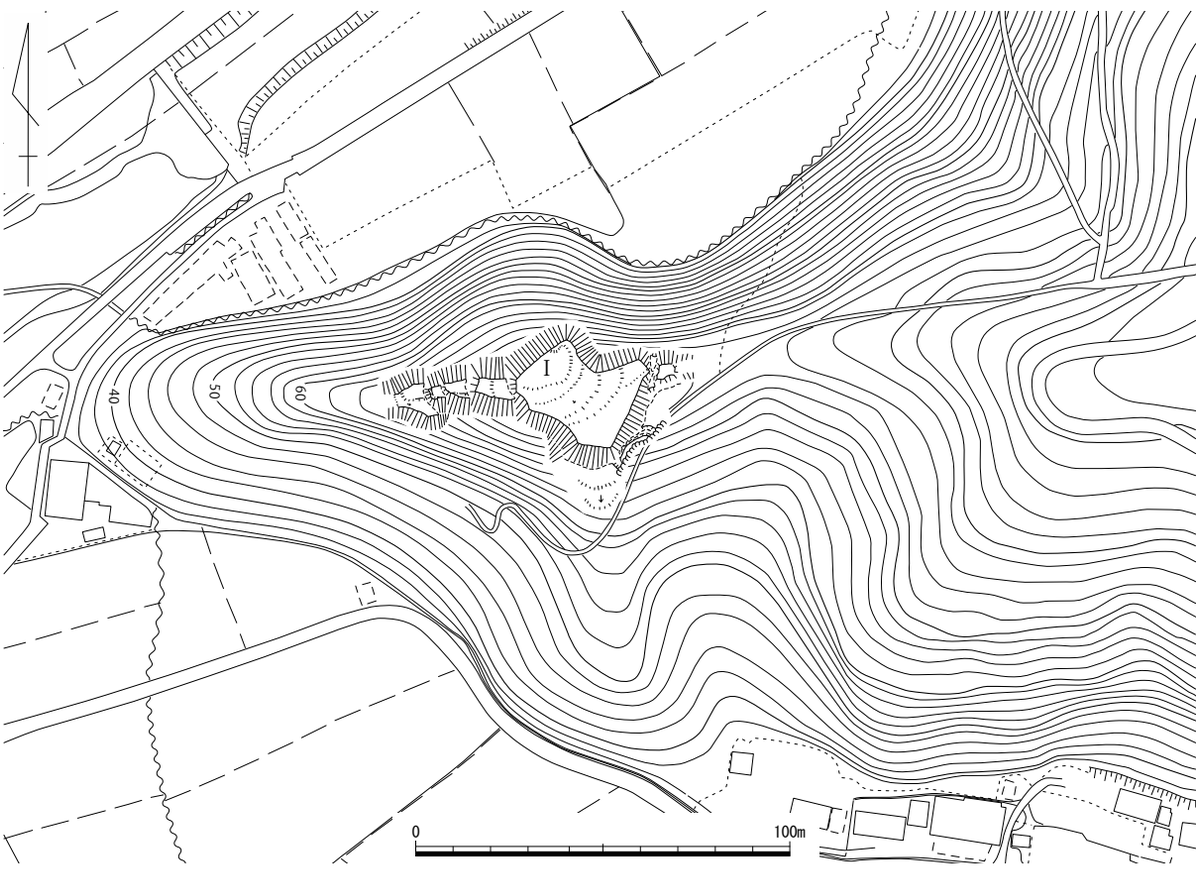
第 292 図　日近城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

352 構跡（かまえ）　岡山市北区大井　地図 23 右

立地　大井神社が位置する山頂部から西に派生する尾根先端付近に立地する。山の南裾に位置する大森遺跡では規則的な方向性を示す古代末～中世の溝が検出され、条里地割の可能性が指摘されている。また『備中足守庄絵図』から大井地区には、少なくとも嘉応元（1169）年には大井庄が形成されていたことが窺える。山の北から西に流れる足守川および谷平野を挟んで西側約 800 mの山頂部には立石城跡が位置する。

概要　尾根先端付近の高まりに曲輪Ⅰが造成されている。やや潰れたＬ字形を呈する曲輪Ⅰは、平坦面を造成した尾根頂部から南東に向かって自然傾斜で緩やかに下がり、南端付近で再び狭い平坦面が確認できる。曲輪Ⅰで確認できた明確な平坦面は狭いものの、自然の急傾斜を利用した北側斜面以外については切岸を造成していることから、緩斜面地も曲輪として機能したと評価する。曲輪Ⅰ東側の尾根筋は堀切で分断する。堀切の南西下側には土塁と横堀からなる狭い平坦面で守りを固めている。横堀は北端でほぼ直角に折れ曲がり、この部分のみ土塁が途切れる。頂部から西側は細尾根が続き、そこに 4 段の狭い平坦面を確認している。尾根は曲輪Ⅰの南側にも派生しているが、図化した緩斜面以南には後世のものと考えられる複数の平坦面が段状に続くものの、明確な城館関連遺構は確認されていない。

文献・伝承　構跡に関する史料や文献、伝承などは不明である。　（上栫）



第 293 図　構跡縄張り図（1/2,000）

353　宮路山城跡（みやじやま）　　岡山市北区足守・大井　　地図 23 左

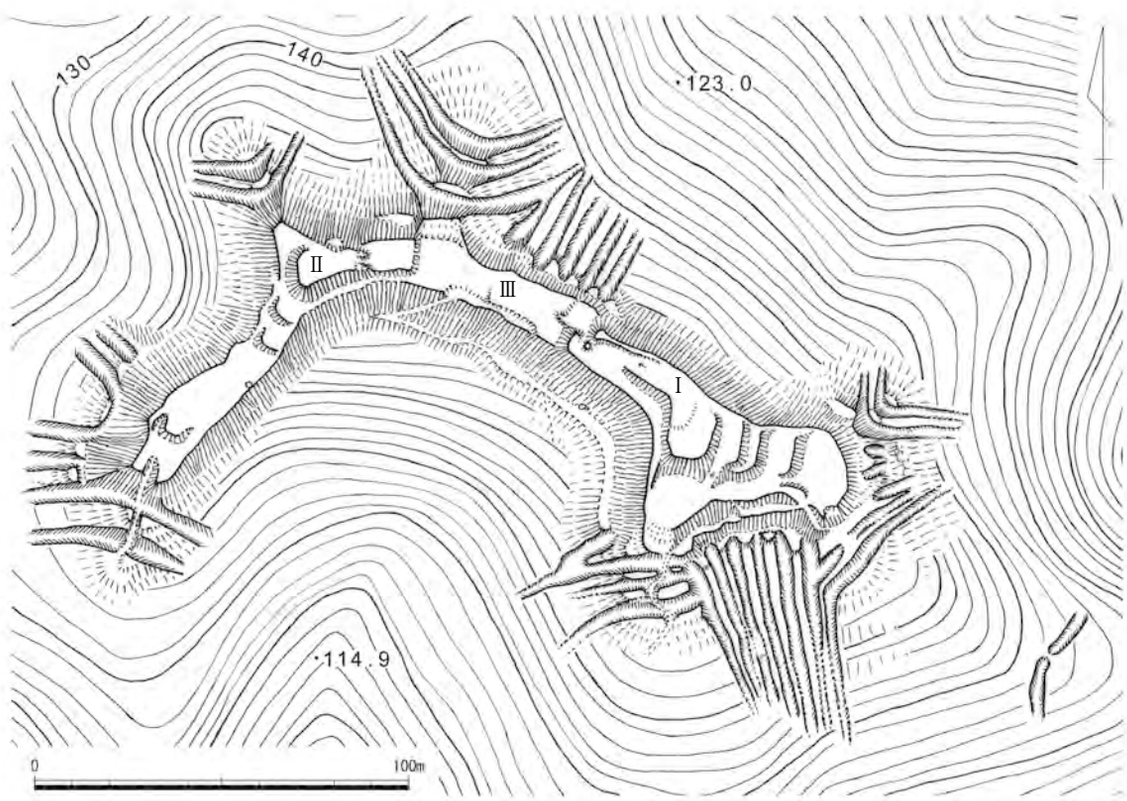
立地　足守川右岸の標高 164 m、比高約 140 mの山頂部に立地する。足守川を挟んで東約 1㎞の鍛冶山山頂に築かれた鍛冶山城跡と対峙する。毛利氏による「境目七城」のうち、最北に位置づけられる。

概要　縄張りは山頂南半の東西に延びた尾根全体に配置された曲輪を中心に構成される。城域は東西 230m、南北 150m に及び、大規模である。

尾根東側の頂部にある曲輪Ⅰは主郭と考えられ、北辺の西寄りに土塁を設け、南側の切岸は高低差が 4 m近くある。曲輪の北西側には食い違い虎口があり、複雑に様相を示す。また、東へ延びる尾根の張り出しには北端を通路とする小曲輪が 4 面連続して配置され、南側の張り出しにも台形の曲輪を配置する。南東側の斜面部には 7 本の長くて深い竪堀があり、その両側はそれぞれ尾根上に 2 、 3 条の長い連続堀切と連結させており、城内で最も堅固に守る。さらに北東側の斜面部には弧状の連続堀切と小さな谷部に 3 本の竪堀が配置されているほか、北斜面は急峻な地形となる。このほか、東へ延びる尾根には堀切が 1 条あり、これより東は緩やかな地形が続く。

頂部中央はやや鞍部となっており、幅 10 mの長大な曲輪Ⅲがある。頂部の南斜面は谷地形が険しいため、防御施設は認められない。それに対し、北斜面はやや傾斜が緩くて尾根が続くことから、尾根筋には 3 条の堀切、谷部に 5 本の竪堀を配置し、守りが堅い。これより北は尾根がさらに長く延びるが、整形があいまいな曲輪状地形が続くとされる（文献 182 岡山市教育委員会 1998）。

尾根西側の頂部は高さ 4 m程度の切岸をもつ曲輪Ⅱがある。北西の張り出しに台形の小曲輪を設け、



第 294 図　宮路山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

その北西斜面は岩盤が露出するなどの険しい地形で、その北西端を連続堀切で区切る。さらに北西に続く尾根先端は緩やかな地形が延びる。

また、尾根の南西の張り出しには大小４面の曲輪を連続して配置しているが、いずれも造成はあまい。尾根南西端は尾根筋に土橋を残しながら、東西斜面に堀切を２条連続させるだけでなく、西斜面はさらに４本の竪堀で堅く守る。

文献・伝承　『中国兵乱記』等によれば、城主は賀陽義藤、天正年間は乃美元信が在城したとされる。また、文献 117 によれば、「桂岌円覚書」や「江系譜」の表現から、本城は、宇喜多氏の鍛冶山城に対抗するために、毛利氏が新規築城した可能性が高いと考えられている。このほか、文献 147 では、天正 10（1582）年４月 16 日に織田勢が宮路山城の攻撃を開始（「岡家文書」）、４月 19 日に毛利氏は宮路山城を堅持（「毛利元清書状」）、４月 24 日に毛利方が宮路山を防戦（「吉川元長書状」）するが、織田勢が城を取り巻んだとされる（「萩藩閥閲録」「米蟲氏所蔵書」）。　（米田）

写真 144　宮路山城跡・鍛冶山城跡遠景（北から）

写真 145　曲輪Ⅱ（東から）

写真 146　頂部北側の三重堀切北端（北西から）

写真 147　南東の二重堀切（南西から）

354　鍛冶山（かじやま）城跡　　岡山市北区足守・大井　　地図 23 左

立地　南北に細長い山頂部に立地する。山頂から南に派生する尾根先端頂部には植之町西陣・植之町東陣跡が位置する。足守川とその河岸段丘を挟んで西 1.0㎞に位置する宮路山城跡と対峙する位置関係にある。

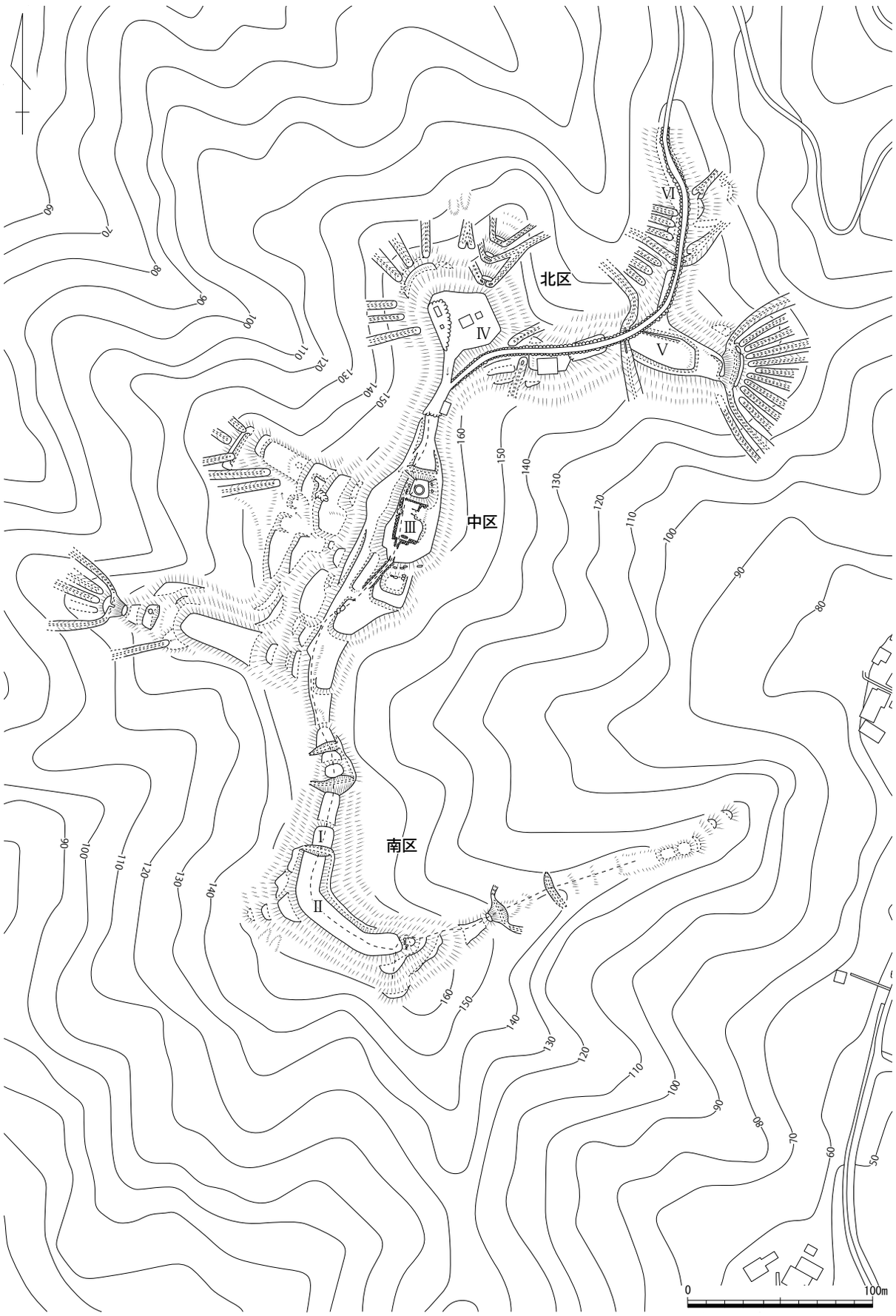
概要　鍛冶山城跡は自然地形をほぼ残した鞍部を挟んで南・中・北に３区分でき、時期差を想定する。南区の最高所の曲輪Ⅰは、北側に２面の曲輪を挟んで２条の堀切を、南側に１条の堀切を持つ。地形に即して「く」の字状を呈する曲輪Ⅱからは足守平野が一望でき、このことが鍛冶山城築造に際しての選地の根拠と推察する。中区は後世の改変が著しいが、曲輪Ⅲを中心に西側に複数の曲輪を段取りした構造である。背後にあたる北側については、堀切１条を掘削し、さらに高い切岸で守るが、南側には明確な防御施設はなく、南区を包摂した構造と考える。北区は最高部の曲輪Ⅳ、東に派生する尾根上の曲輪Ⅴ、北に派生する尾根上の曲輪Ⅵから構成され、いずれも堀切や畝状竪堀群で守りを固める。特に曲輪Ⅴが位置する東尾根は「コ」の字状の堀切と 13 条もの竪堀を掘削して、特別に警戒を強くしている。鍛冶山城跡の東側には南北に抜ける峠道があり、さらに峠を北に下りきった地点は勝尾峠へと続く谷筋にあたる。勝尾峠の周辺には勝尾山城跡や忍山城跡など毛利方に落ちた山城が複数存在することから、曲輪Ⅳ以北については後述の宮路山城攻めに際して警戒を強めて構築した可能性を考える。

文献・伝承　『備中集成志』には城主として大森次郎左衛門盛清の名が見える。天正年中は宇喜多領とあるが、『中国兵乱記』には羽柴秀吉の播磨攻めに際して小早川隆景が備前備中国境に近くに普請等を命じた諸城に鍛冶屋山がみえる。しかし、天正８（1580）年宇喜多直家が冠山城を攻撃した際、宇喜多勢の信原内蔵允、岡平内は鍛冶屋山城に敗走していることから、この頃には鍛冶屋山が宇喜多勢の勢力下にあったことが窺える。「宇喜多直家書状」には、９月 17 日には鍛冶屋を修築したことが見え、書状作成は天正７年と推察されていることから、上記の事象を裏付ける。天正 10 年３月 15 日に備前一宮に着陣した織田秀勝、羽柴秀吉勢は、16 日に鍛冶山城に入城し、同日には宮路山城に攻撃を仕掛けたとある。ただ『桂岌円覚書』によると秀吉は４月７日に「宮路山のうへしふくし山」に登ったことが見える。『陰徳大平記』には宇喜多勢は宮路山の上の渋櫛山に押し上がったとあり、『備前軍記』には宇喜多勢は宮路山の上手の柿渋山に押し昇って陣取ったとする。近隣にある守福寺は鍛冶山城の東にある龍王山から南に派生した尾根の西裾に位置し、その背後を守福寺山と呼称した可能性がある。ただ、その位置は宮路山の南東側になり、宮路山の上とする記述に合致しないと考える。

（上栫）

写真 148　曲輪Ⅳ北側堀切（南東から）

写真 149　曲輪Ⅴ東側竪堀（西から）



第 295 図　鍛冶山城跡縄張り図（1/3,000）　作図：和田　剛

355・356　植之町西（うえのちょうにし）・東（ひがし）陣跡　　岡山市北区足守　　地図 23 左

立地　植之町西・植之町東陣跡は、鍛冶山城跡が位置する山頂部から南西に派生した尾根先端の頂部に立地する。南 1.2㎞には冠山城跡が位置する。

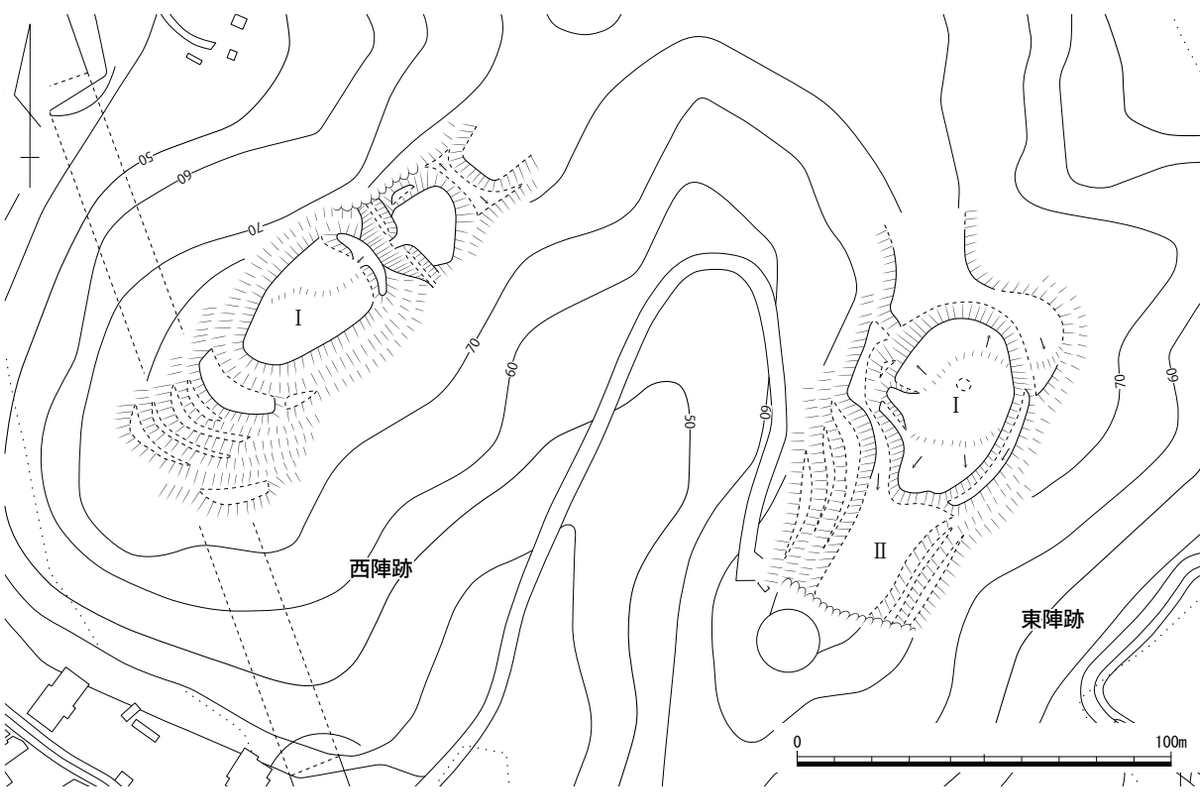
植之町西陣跡

概要　尾根筋を堀切で分断して曲輪Ⅰを造成する。堀切の中央付近は土橋状に高まっていた。曲輪Ⅰは歪な台形状を呈し、堀切に面する辺にのみ一文字状の土塁を築く。土塁は高さ 1 ～ 1.5 ｍで、幅広い。曲輪Ⅰ内はやや傾斜を持ち、平坦面の造成に熱心な様子は窺えない。曲輪Ⅰの南側から東側斜面にも複数の平坦面を段切り状に造成するが、裾付近まで段が続くことから、後世の改変を受けたものと考える。堀切の北側にも歪な台形状の平坦面があり、その北端は人工的に切られている。切岸もしくは堀切の可能性も窺えるが、この周辺にも後世の段切りが複数認められ、評価が難しい。

植之町東陣跡

概要　尾根頂部の周囲を切って曲輪Ⅰを造成している。ただ、曲輪Ⅰ内は自然地形を残す。曲輪Ⅰは南西角が大きく凹んだ略長方形状を呈する。西端部には自然の高まりがあり、その南北両側にスロープが造成されている。両スロープの先端は、1 ～ 1.5 ｍ下がって小規模な平坦面に取り付く。曲輪Ⅱの北側は伸びたＳ字状を呈する帯曲輪で、曲輪Ⅰの凹み部分に沿う形状である。曲輪Ⅱの北端は尾根から２ｍ程下がる。大掛かりな防御施設が確認できず、平坦面の造成も不十分であることから、陣城としての機能を考えたい。

文献・伝承　両陣跡に関する史料・文献・伝承は確認できない。　（上栫）



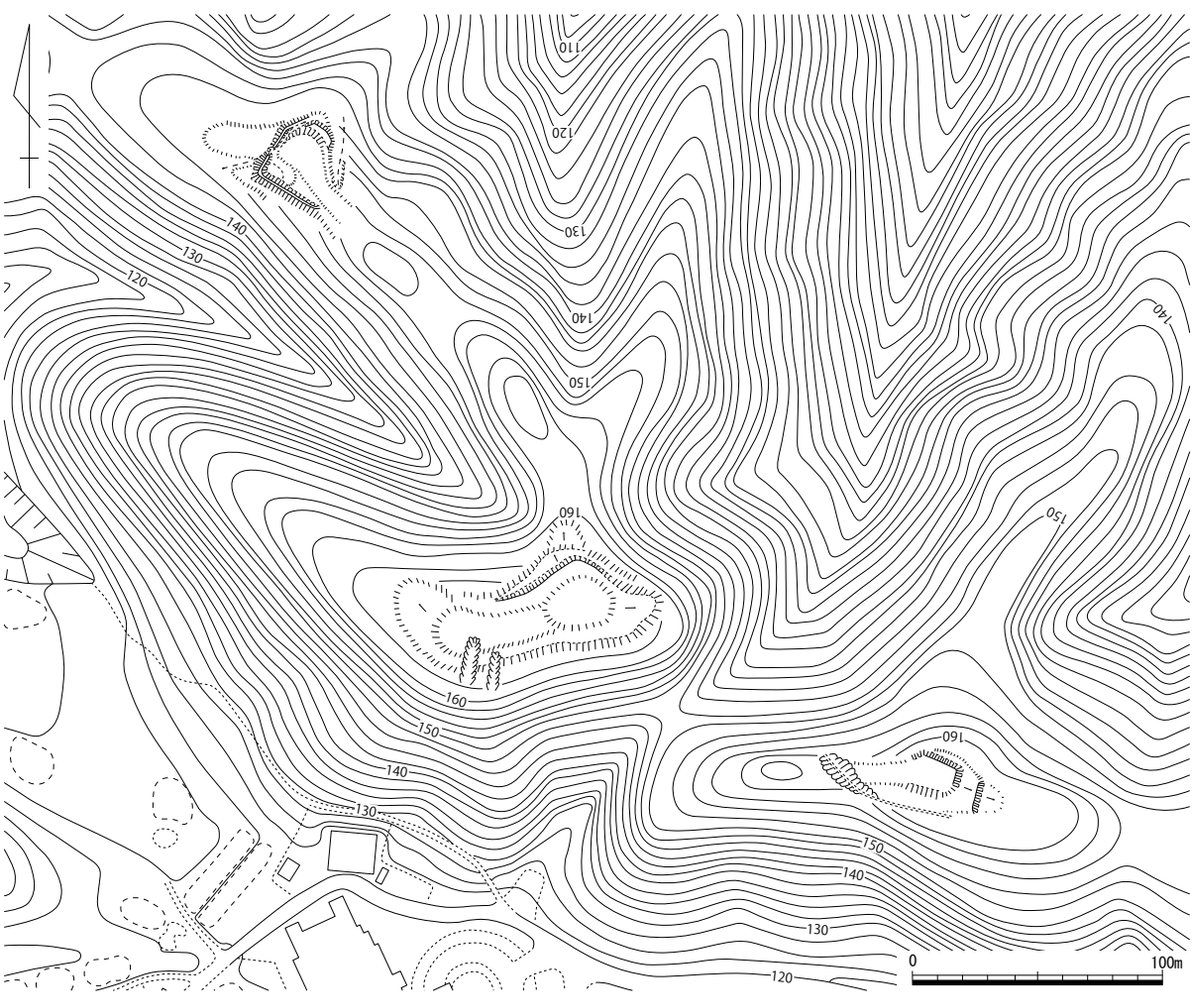
第 296 図　植之町西陣跡・植之町東陣跡縄張り図（1/2,000）　作図：和田　剛

357　大陣屋跡（おおじんや）　　総社市奥坂・岡山市北区粟井　　地図 23 左

立地　現在、鬼ノ城ゴルフ倶楽部がある奥坂地区の低丘陵上に所在する砦群のひとつで、地元で「千引尾根」と呼ばれる尾根上に立地する。西方にはかつて千引砦跡が所在した。

概要　遺構は尾根筋上の３か所にあると考えられ、ここでは一括して大陣屋跡として扱う。中央の標高約 160 mの丘陵頂部は、大陣屋跡として周知されていた地点である。踏査の結果、明瞭な曲輪は確認できなかったが、一部に人為的な改変もみられる。頂部から尾根続きの約 130 m北西側には、Ｌ字形を呈する高さ約１mの土塁で囲まれた方形区画があり、西方尾根筋からの攻撃に対応している。一方、頂部から六道峠を経て約 100 m南東の地点には、全長約 20 m、幅約 15 mの長方形を呈する平坦部があり、東側に高さ１mほどの切岸を伴う。以上の遺構群は、近隣の小規模城砦と同じく、備中高松城の合戦時に築かれた陣城群の一角をなすものと考えられる。なお具体的な場所は不明だが、昭和初期に開墾を行った際に数本の鉄刀が出土したと伝えられる。そのため、開発が及ぶ南側の裾部で総社市教委による試掘がなされたが、開墾による地形改変が著しく、遺構は確認されていない。

文献・伝承　文献・伝承は知られていないが、「大陣屋」という名称は地元での呼称である。（岡本）



第 297 図　大陣屋跡縄張り図（1/3,000）

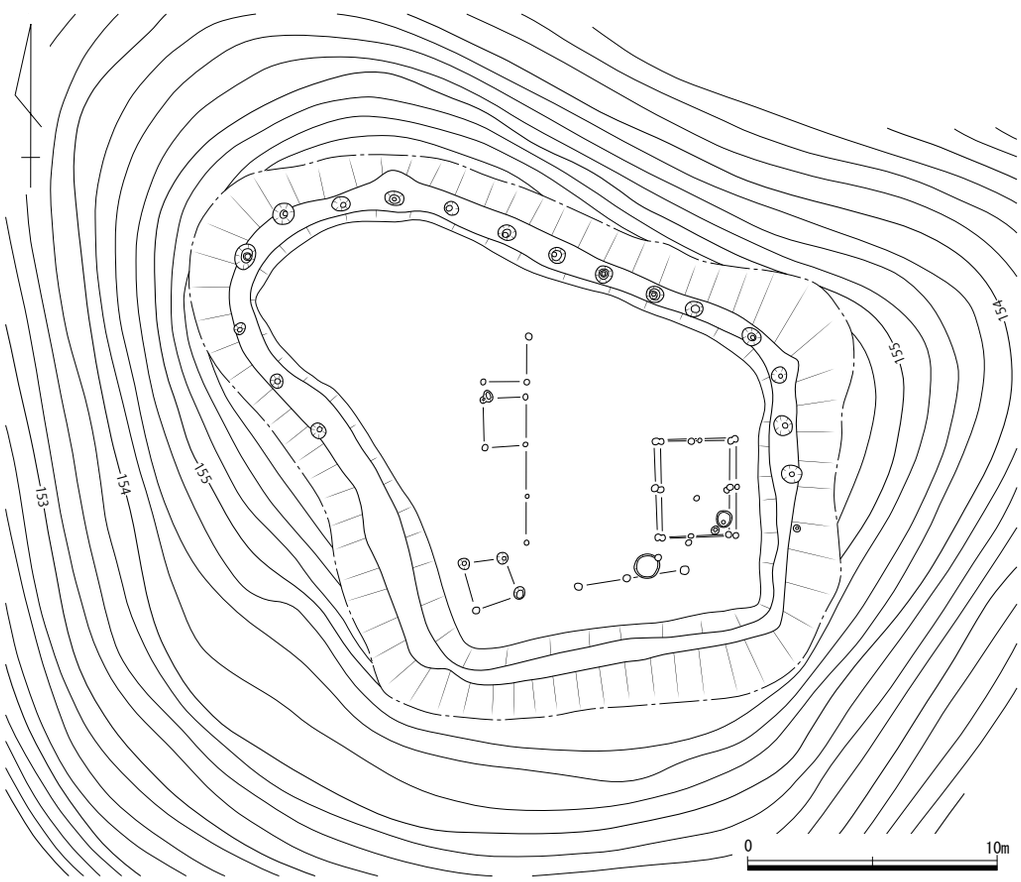
358　千引砦跡（せんびき）　　総社市奥坂　　地図 23 左

立地　岡山市との境界から南西に延びる「千引尾根」の東端付近、標高約 160 mの頂部に所在していた城砦である。ゴルフ場の造成工事に伴い全面調査がなされ、遺構は完全に消滅している。

概要　尾根頂部に造成した平坦面を、土塁で囲繞する構造である。城域は東西約 25 m、南北約 20 mを測り、方形の北西端が突出したような形状を呈する。土塁は切れ目なく巡り、基底部の幅は 2.5 ～３mを測る。残存する盛土の高さは、土砂の流失により１mに満たないようである。土塁の北半部には、頂部に２～ 2.5 mの間隔で円形の柱穴が 17 個並び、長さ 36 mにわたって柵が設置されていたと推測される。土塁内部の面積は約 240㎡で、東西・南北方向の小規模な柵列、建て替えのある２×２間の掘立柱建物、１×１間の櫓状の掘立柱建物などが検出された。遺物は出土していない。

本砦跡は、付近に所在する小陣屋跡や名越３号砦跡などと同じく、尾根上の頂部を土塁で囲繞するのみの簡易な構造であり、遺物の出土がない点からも、ごく短期間の応急的な城砦であったと推測できる。総社市教育委員会の調査報告書では、天正 10（1582）年の備中高松城の合戦に際し、毛利方の諸城と対峙する羽柴方の軍勢によって築かれた多数の陣城のひとつと推測している。なお、本砦跡の東側で１か所、西側で２か所の土塁状遺構が調査されており、確証はないものの本砦跡との関係も想定できる。

文献・伝承　1988 年度の分布調査で発見され、文献・伝承は特に知られていない。　（岡本）



第 298 図　千引砦跡測量図（1/300）文献 178 を加筆

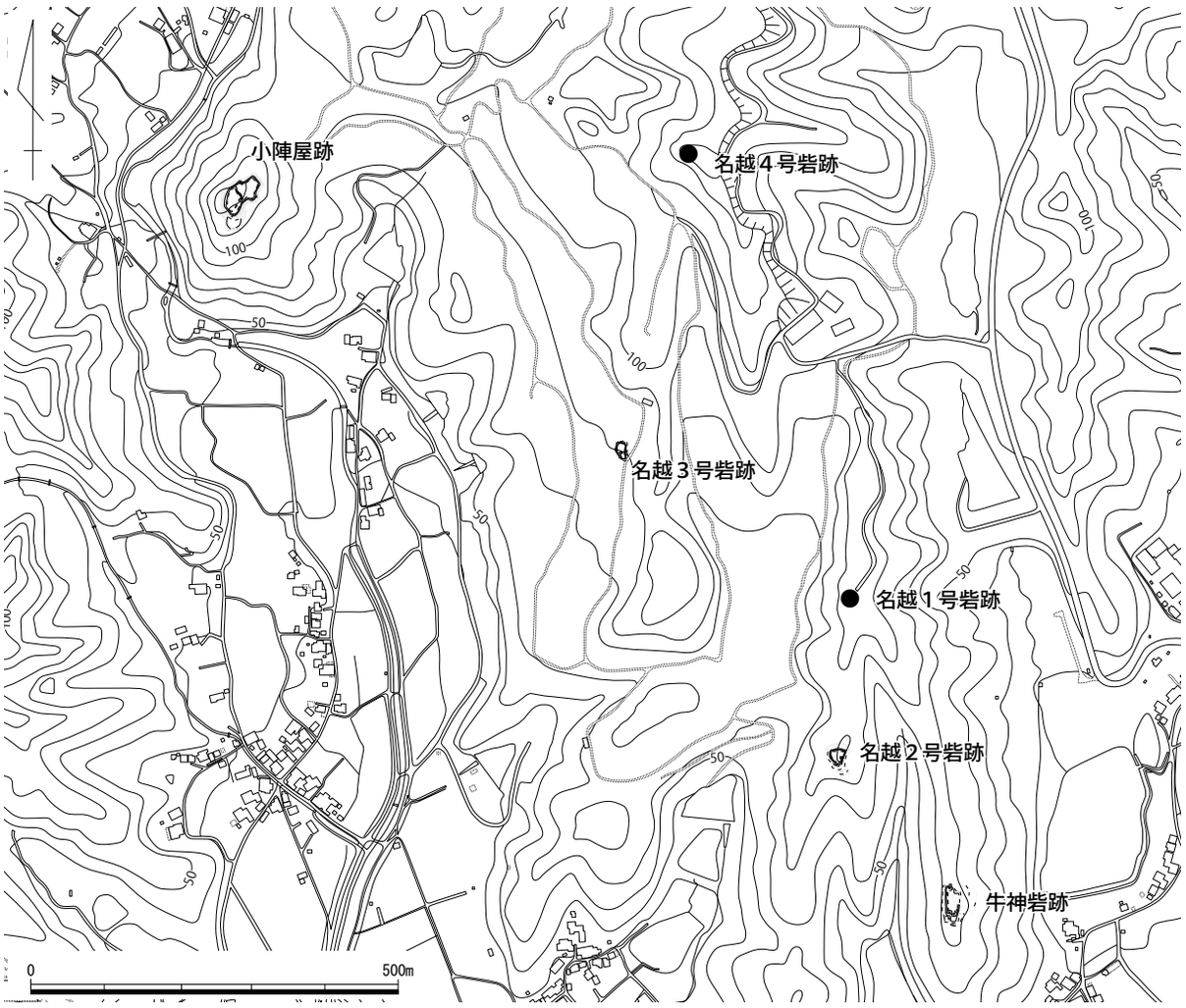
359 ～ 362　名越（なごし）砦群跡　　総社市東阿曾・奥坂　　地図 23 左

立地　血吸川と足守川の間に挟まれて存在する標高約 160 mの六通峠付近から南方向へ派生した２つの尾根上に立地する。各尾根に２つずつ、計４箇所に砦跡が確認されている。東側の尾根筋には１号砦跡と２号砦跡が、西側の尾根筋には３号砦跡と４号砦跡が築かれていた。また周辺の尾根筋には、千引砦跡・大陣屋跡・小陣屋跡・尾崎砦群跡・牛神砦跡など、同様の施設が点在している。

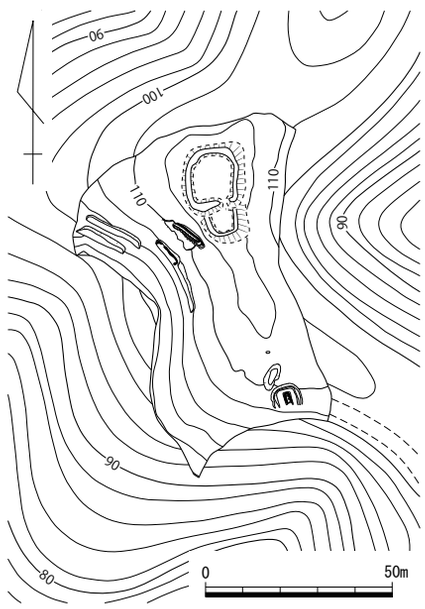
概要　２号砦跡は、尾根頂部に約 20 m規模の曲輪を設けて、その四周を土塁で囲んだ構造である。南側部分は、虎口状に突出させている。曲輪内側から見た場合、土塁の高さは 0.5 mで、南側の外側から見た場合２mに達している。この施設は、必ずしも尾根幅の全体を利用して造られたわけではなく、その中央部付近に置かれるようにして立地している。３号砦跡は、1991 年に総社市教育委員会によって発掘調査が行われた。その結果、尾根頂部に約 15 mの曲輪を設け、その四周を土塁で囲み、さらに南側辺に約５m四方の土塁で囲んだ曲輪を付随させる構造が明らかとなった。土塁の高さは 0.5 ～ 0.7 m程で、基底部は２～ 3.5 mを測る。土塁は約 10㎝の厚さの土色の異なる土を交互に積み上げて構築しているが、それほど強く突き固めてはいないようである。この砦も２号砦跡同様、尾根幅の全体を利用して造られたわけではなく、その中央部付近に置かれるようにして立地している。

文献・伝承　故事来歴は伝わっていないが、２号砦跡・３号砦跡の構造と規模は、天正 12（1584）年に行われた毛利方の将中村氏が守る津山市岩屋城に対し、宇喜多方の将花房氏が仕掛けた攻囲線時の陣城に類似する。この年代に近い周辺の出来事として天正 10（1582）年の備中高松城水攻めが考えられ、この時に関連した陣城と指摘されている（文献 178）。　（小林）

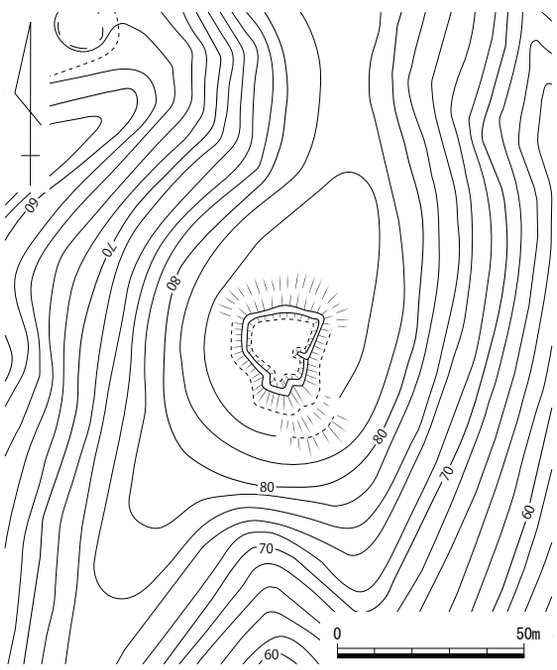
写真 150　名越３号砦跡調査状況（北西から）　総社市産業部文化財係提供



第 299 図　名越砦群跡配置図（1/10,000）



第 300 図　名越３号砦跡縄張り図（1/2,000）



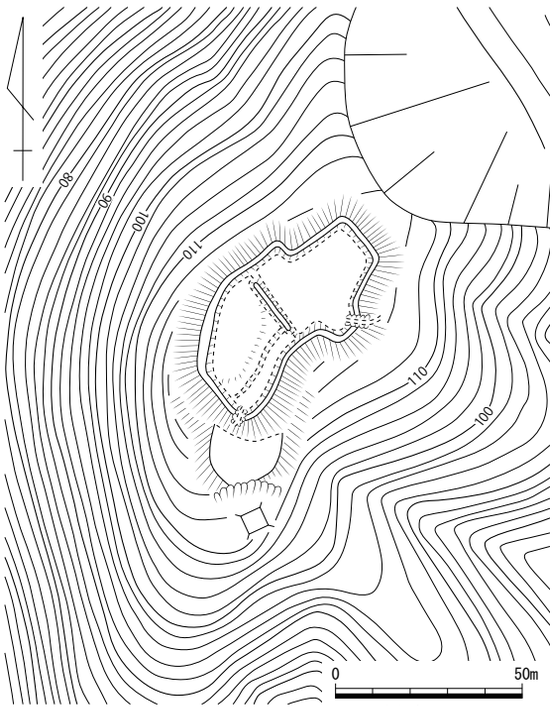
第 301 図　名越２号砦跡縄張り図（1/2,000）

363　小陣屋跡（こじんや）　　総社市奥坂　　地図 23 左

立地　古代山城のある鬼城山の東麓で、血吸川に向けて東から張り出す丘陵の尾根先端付近に立地している。

概要　丘陵の頂部を土塁で囲繞する構造である。土塁は延長約 200 mにわたって巡り、上面の幅 1 ～ 2 m、城内側での高さ 0.3 ～ 0.8 mを測る。北西側には折れ、南東側には突出部が設けられ、防御のための工夫が認められる。内部はごく低い土塁を伴う段差によって北東側、南西側に二分され、南西側のほうが 1 ～ 1.5 m高く、郭面に若干の起伏がある。南端部には、高さ約 4 mの切岸の下に曲輪らしき平坦面がある。立地や形状から、周辺にある小規模な城砦と同じく、備中高松城の合戦に際して築かれた陣城のひとつと考えられる。

文献・伝承　特に知られていないが、小陣屋という名称は地元での呼称である。　（岡本）



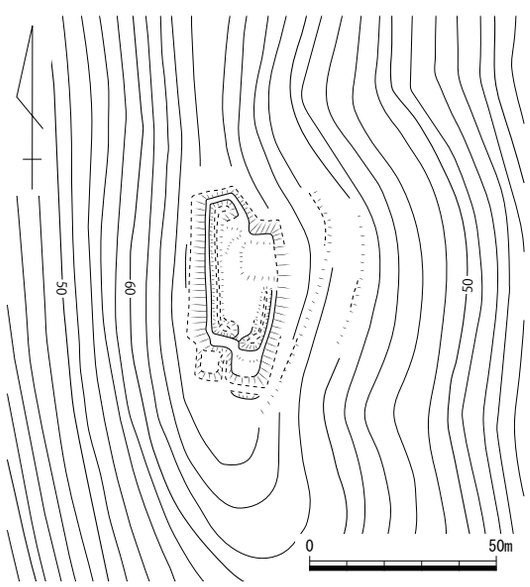
第 302 図　小陣屋跡縄張り図（1/2,000）

364　牛神砦跡（うしがみ）　　総社市東阿曽　　地図 23 左

立地　足守川と血吸川に挟まれた低丘陵地帯に位置し「宮原大池」の西に接する南北方向に延びる尾根筋に立地する。北に尾根筋をたどると、約 400 m離れて名越 1 号砦跡が所在する。東方に足守川流域の足守から東阿曽の平野を眺望し、東約 1.3㎞に冠山城跡を望むことができる。

概要　尾根先端近くの尾根筋の 40 × 20 mほどの長方形の範囲を、土塁で囲んでいる。土塁の内側に沿って溝状に掘削し、盛り土して土塁を造っていると考えられる。土塁の高さは内側で約 0.5 ～ 1 m、外側で約 0.5 ～ 1.5 mを測る。北辺と南片には小さな突出部を造って、土塁もそれに合わせて折れている。南辺の突出部の南側には浅い堀切を掘削しているように観察された。また、突出部の西側に沿っても浅い溝が見られる。

文献・伝承　故事来歴等未確認であるが、天正 10 年、備中高松城周辺で繰り広げられた織田方と毛利方との攻防で使用された砦跡と推定されている。（物部）



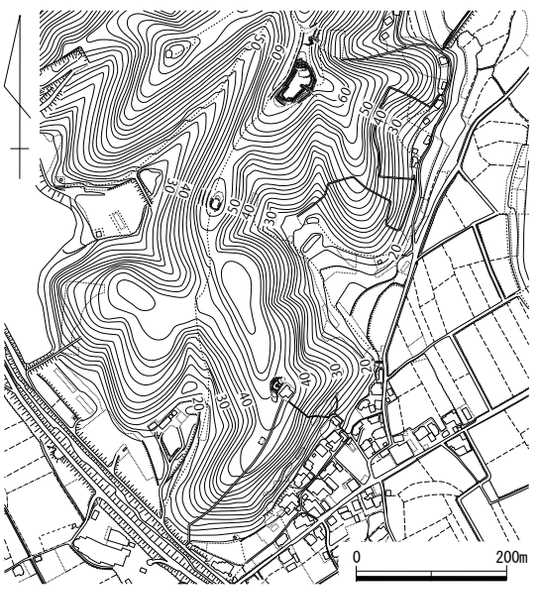
第 303 図　牛神砦跡縄張り図（1/2,000）

365 ～ 367　尾崎（おざき）砦群跡　　総社市東阿曽・西阿曽・奥坂　　地図 23 左

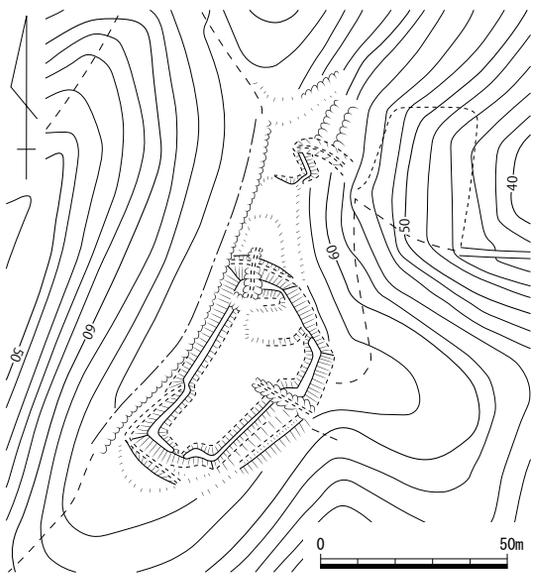
立地　足守川と血吸川に挟まれた低丘陵地帯の南端部に位置し、南北方向に延びる尾根筋に立地する。尾根の南端部は血吸川に接している。東方に東阿曽の平野を眺望し、約 400 m東に鳥越山城跡が所在する独立丘陵がある。約 250 mの間隔を開けて３か所に遺構があり、北から尾崎１・２・３号砦跡とする。

概要　１号砦跡は浅い堀切で区切られた 50 × 20 mの範囲を土塁が囲む。土塁には小さな折れが各所にある。北東・南東斜面に犬走り、北の鞍部に平坦地と土塁が見られる。２号砦跡は尾根筋のわずかな高所の南半部を掘削して 10 × 10 mの平坦地を造成している。その平坦地の東西両辺に土塁と思われる高まりが残り、平坦地の周囲は１～ 1.5 mの切岸となっている。３号砦跡は直径約 25 mの古墳頂部を平らにし北縁に土塁を築いたもので、その後、神社によって東部を削平されている。平坦地の広さは 10 × 10 mほどと推定される。

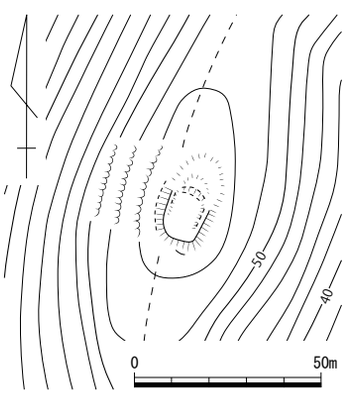
文献・伝承　未確認。天正 10 年、織田・毛利の攻防で使用された砦跡と推定されている。　（物部）



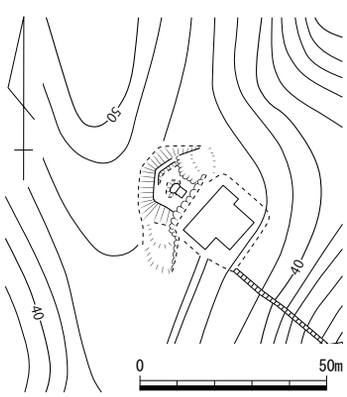
第 304 図　尾崎砦群跡位置図（1/10,000）



第 305 図　尾崎１号砦跡縄張り図（1/2,000）



第 306 図　尾崎２号砦跡縄張り図（1/2,000）



第 307 図　尾崎３号砦跡縄張り図（1/2,000）

368　鳥越山城跡（とりごえやま）　　総社市東阿曽　　地図 23 左

立地　血吸川と足守川の間にある標高約 50 mの城山という名の独立丘陵上に立地している。足守川の川岸向こうには、宮路山城跡・冠山城跡など、備中高松城水攻めの時の境目の城が建ち並び、それらを見据えた位置取りになる。

概要　南北に長い独立丘陵の全体に曲輪を築いた連郭式の山城で、全長は約 290 mにもなる。頂部に築かれ丘陵上の南側に位置している主郭から、南北両側に向けて派生する尾根筋に一直線上に曲輪を設けている。主郭の規模は長さ約 50 m、幅約 25 mと大きい。この主郭から南側に向けて、小さい曲輪 1 面と長さ 10 m前後の曲輪が 2 面続いている。これらの南西斜面には、長さ 5 ～ 10 m前後の腰曲輪が 3 面ほど続いている。

主郭の北側は約 10 mを超える高い斜面で、この上には、幅の小さい曲輪が 2 面続く。下った尾根筋は、一度やや平坦な地形となり、ここに規模の大きな曲輪が続いている。南から 1 面目は長さ約 20 m・幅約 30 m、2 面目は長さ約 50 m・幅約 30 m、3 面目は長さ約 25 m・幅約 20 m、4 面目は長さ約 15 m・幅約 25 m、5 面目は長さ約 30 m・幅約 30 mを測る。各曲輪は平坦に造作されており、切岸も 3 ～ 4 mほどあり精美である。ただし 2 面目は畑地として使用された跡が残り、改変が行われたと想定される。また 1 面目にも畦の跡が残っており、やはり多少の地形変化があると思われる。

主郭には、北側と南西側に虎口状の窪みが存在する。北側の施設がその先の曲輪群への連絡用に使われたようであるが、南西側に腰曲輪が続くのは、もう一つの連絡口がこの方面にあったためと予想される。

当城は、全長自体も大きく主郭を含めた各曲輪の規模も大きい。曲輪上には屋敷地の存在が想定される。その反面堀切や竪堀といった防御施設がなく、陣城というより本拠地の城としての役割が考えられる。

文献・伝承　城主は、天正年間に鳥越若狭・鳥越左兵衛とある。また備中高松城の境目の城の裏側にある立地条件から、1582 年の合戦時にも使用された可能性がある。　（小林）

写真 151　遠景（南西から）

写真 152　主郭（南から）

第 308 図　鳥越山城跡縄張り図（1/2,000）

369　長良山（ながらやま）城跡　　総社市長良・総社市窪木・岡山市北区高松田　地図 23 左

立地　総社平野の東部に位置する南北に細長い独立丘陵、長良山の稜線に沿って展開する城郭である。丘陵の北側を砂川、南側を前川が東流し、東側で合流している。丘陵は鞍部によって南北に二分され、北側は標高 88 mの頂部を有し、南側は標高 40 m前後のなだらかな地形が続く。

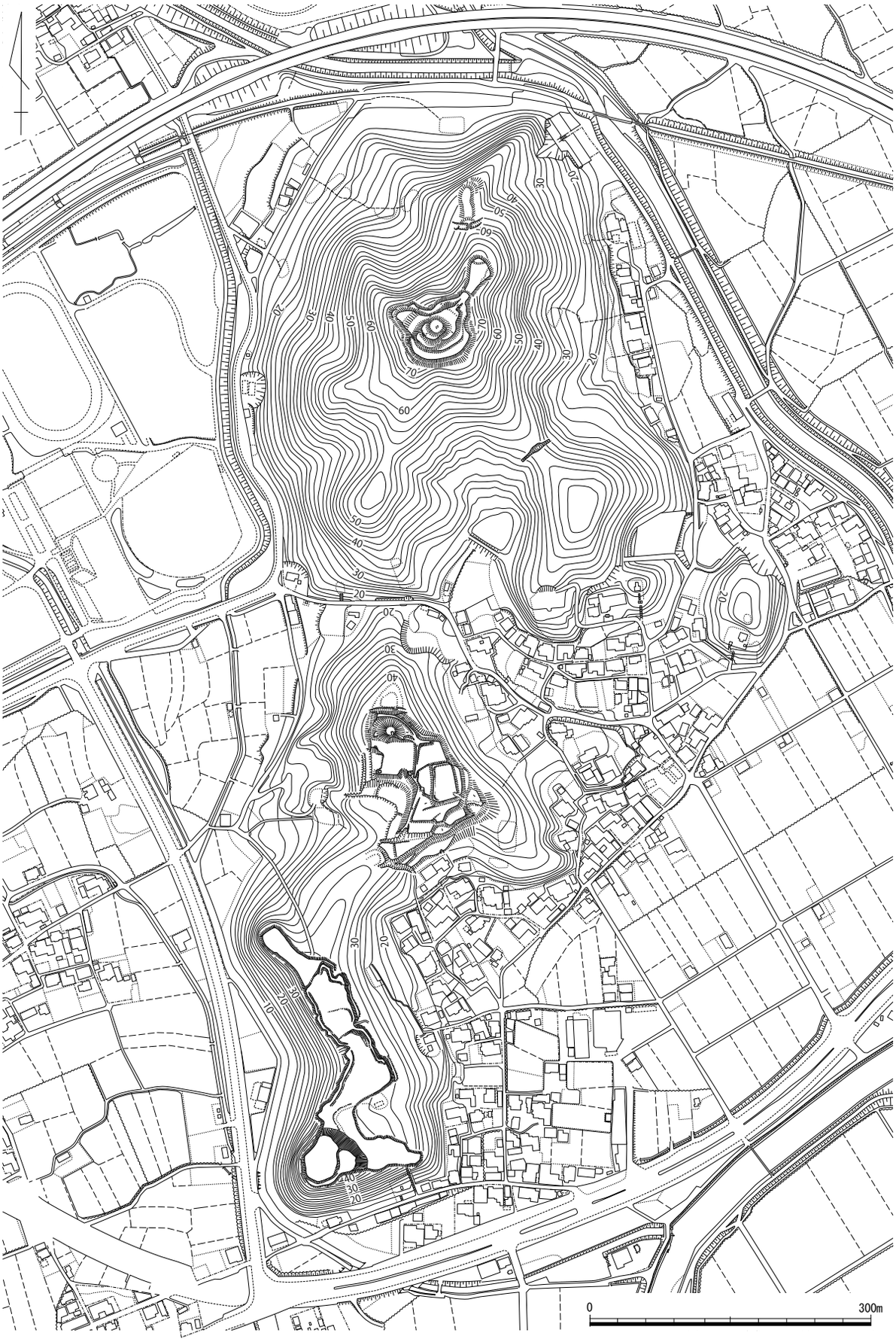
概要　城の遺構は、北側の丘陵では 1 か所、南側では南北 2 か所で確認され、合計 3 か所に曲輪群が存在する。従来は、南側の丘陵のみが城跡として周知されていた。城域の南北両端間の距離は約 1 ㎞に達し、各曲輪群の間には土塁や堀切などは確認できなかった。 3 か所の曲輪群はそれぞれ特徴が異なり、別個の城郭と考えることも可能だが、ここでは長良山城跡として一括し、各地点を北部、中央部、南部として説明する。

北部の曲輪群は、全長約 300 m、幅約 90 mの規模である。丘陵頂部にある直径約 20 mの円墳を取り込み、周囲には複数の帯曲輪が高さ 2 ～ 5 mの切岸を介して連なり、全体として同心円状に取り巻いている。頂部の北東側と北西側にあるやや広い曲輪は斜路によって接続しており、さらに北東側の曲輪は斜路で最下段の帯曲輪に繋がる。最下段の帯曲輪は、西端部を除く城域全体を囲い込み、途中に段差や傾斜はあるものの、基本的には同一面と考えられる。頂部の南西側斜面には花崗岩の岩塊が多数露出するが、自然の転石と考えられる。北側に延びる尾根筋は、いったん狭まった後に再び広く平坦な曲輪となり、さらに 30 mほど北側には浅い堀切と、続いて細長い不明瞭な平坦面が存在する。南東側尾根筋には、城域本体から約 120 m離れた位置に堀切が設けられる。南南西方向への尾根筋には遺構は確認できなかった。

中央部の曲輪群は、全長約 180 m、幅約 130 mの規模である。北端は約 25 mの円墳を取り込んでおり、標高約 47 mで最も高く、南側斜面上に曲輪群が展開する構造である。円墳の北側には土塁を築くことによって、周溝を横堀として利用し、さらに北側に接して土橋を伴う深さ約 2.5 mの堀切を設けて尾根筋を遮断している。円墳周囲の土塁は円弧状に湾曲し、南と東に分岐して、隣接する不整方形の曲輪の土塁に続いている。円墳の南側及び南東側には、方形を基調とする曲輪が数面接している。特に、円墳から南東方向へ 2 段目にあたる曲輪は、北側と西側に土塁をもち、南北約 40 m、東西約 25 mの長方形を呈し周囲よりも高く、本地点の中心となる曲輪と考えられる。さらに南側の曲輪群は、地形の制約もあってかやや不整形で、後世に畑として再利用された形跡もあり、評価が難しい面もある。西側斜面の下方にも平坦面が続くが、ほとんどは後世の改変と判断した。南端は鞍部となるが、後世の切り通し道によって堀切の有無は確認できない。

南部の曲輪群は、全長約 300 m、幅約 80 mの規模で、地形に沿って湾曲しており、神社や遊歩道の造成による地形改変も認められる。本地点は、面積のほとんどを占める細長い曲輪と、南端に位置する不整楕円形の曲輪から構成されている。前者は、もともと高低差の少ない地形であるため、段差によって複数に細分できるものの、基本的には細長い同一平面からなる曲輪と考えられる。周囲には、郭面からの高さ約 0.5 m、高いとこ

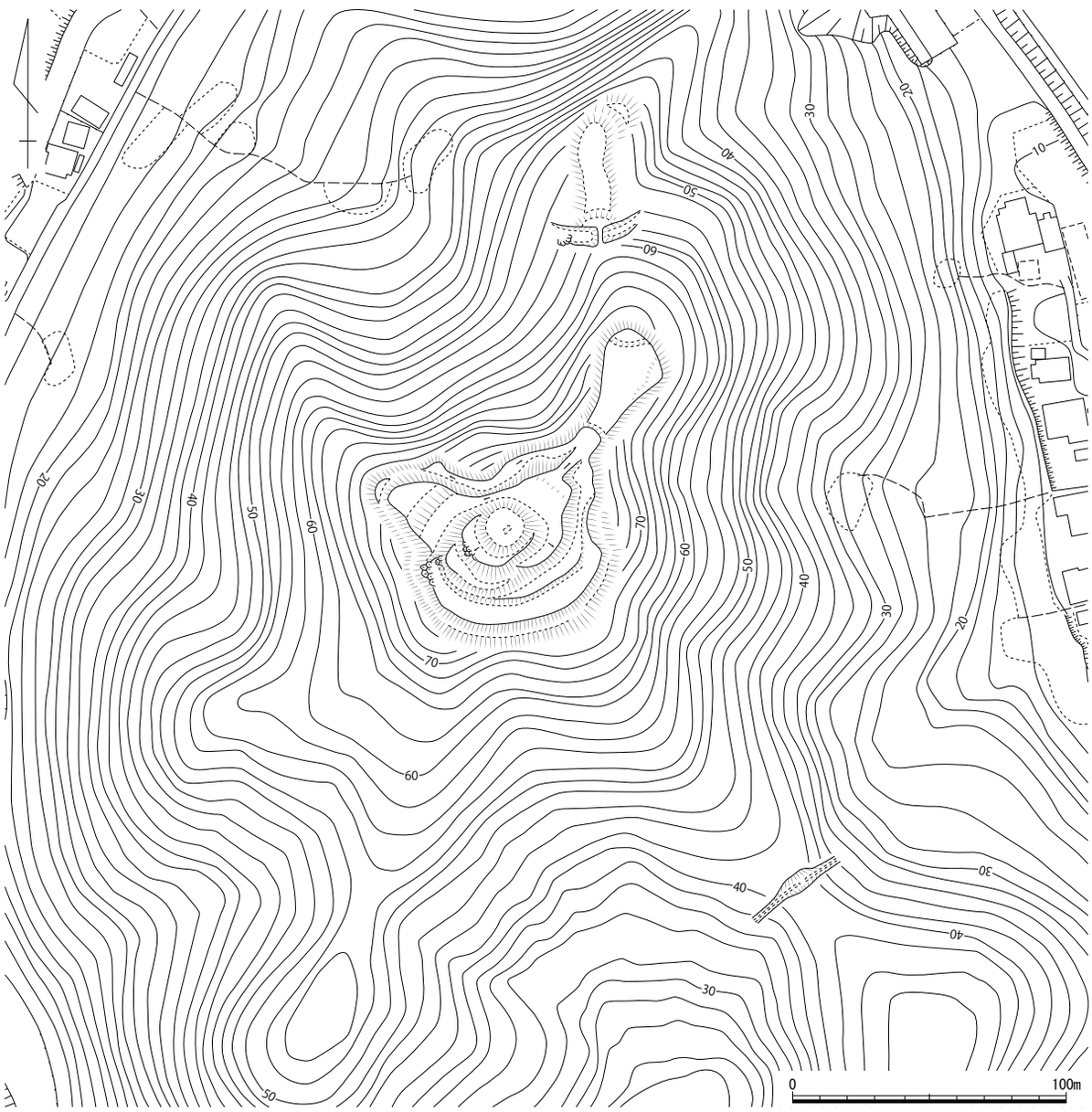
写真 153　遠景（西から）



第 309 図　長良山城跡縄張り図（1/6,000）

ろで約２mの土塁が巡る。土塁には随所に屈曲部や突出部を設けて防御力を強化し、西辺には竪堀状の窪みも確認できる。八幡神社の社地として整地された北端部では、郭面先端の直下に自然石を積み上げた高さ約 2.5 mの石垣が残る。南端部の曲輪は、標高約 47 mを測る頂部とその東側下方の曲輪の２段からなり、北東側に高さ４～７mの切岸を有する。頂部の郭面は、現在石鎚神社の社地として整地されている。郭面の南からは斜路が延び、東側下方の曲輪に接続している。

文献・伝承　『古戦場備中府志』では、窪木村の「古城」として、城主を瀬川左衛門入道祐憐とする。祐憐は建武３（1336）年に細川定禅の執事として楠木正成の首を千早城に持参し、その子孫が根屋と改姓したと記す。『備中集成志』は、窪木村の「八幡山城」とし、また禰屋七郎兵衛は代々服部郷三千貫、その他二千貫の地を領し、八幡山の城主であるとする。『中国兵乱記』では、龍ノ口城や冠山城の合戦記事に禰屋氏の一族の名が見えるが、長良山城自体については特に記していない。（岡本）



第 310 図　長良山城跡北部縄張り図（1/2,500）

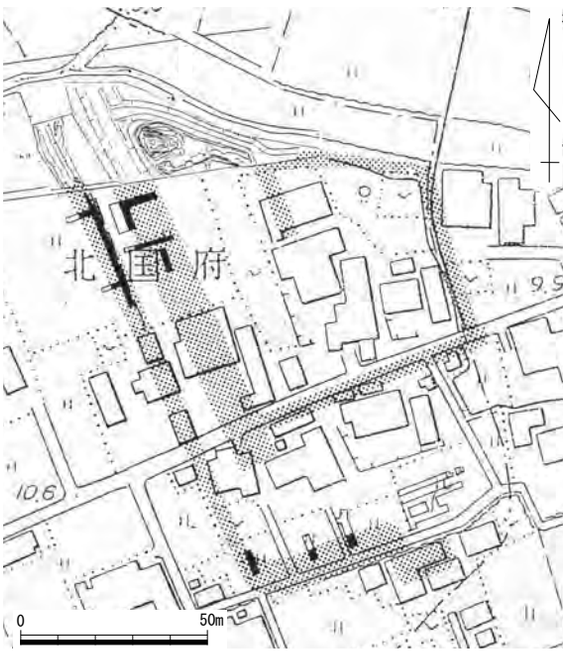
第 311 図　長良山城跡中央部・南部縄張り図（1/2,500）　作図：島崎　東・センター

370　総社遺跡（そうじゃ）　　総社市総社・金井戸　　地図 23 左

立地　国府川の西側隣に位置し、周辺よりやや高く現在宅地になっている。当地点の東側近くに、栢寺跡が存在する。

概要　1985 年の総社市教育委員会の確認調査、2001 年の岡山県教育委員会の発掘調査により、約 150 × 100 mの範囲内に、2 条の堀が巡ることが確認された。外側の堀は幅約 7 m、深さ約 5 mで、内側の堀は幅約 10 m、深さ約 5 mの規模である。外側は南北約 150 mで、内側では南北約 90 mの長さが想定され、これらの堀の内側は屋敷地として使用されたと考えられる。堀から見つかった出土遺物は 16 世紀代を示す。また内側堀の北西隅内には塚があり、この地点に規制されて堀は鋭角に曲がっている。

文献・伝承　当地点の中央部の地名が「国府」であり、備中高松城の城主清水宗治の配下であった国府市正の屋敷跡になる可能性が高い。　（小林）



第 312 図　総社遺跡平面図（1/2,000）文献 181 より引用

371　土居武家屋敷跡（どいぶけやしき）　　岡山市北区下足守　　地図 23 左

立地　冠山城跡の北東側 300 mの水田地に位置する。

概要　宅地の西側と南側を直角状に取り巻く水田が確認でき、館跡とそれを囲む堀跡の可能性が推測される。西側水田は東西幅 5.5 ～ 7.5 m、南北長 55 mで、南側水田は東西長 40 m、南北幅 9.0 mである。これらの水田等に沿う形で車道も造成されている。宅地の西辺には生け垣で囲まれているが、生け垣と家の間にあたる、宅地の北西角に土の高まりが外部から視認できた。宅地内で実見していないため詳細は不明であるが、館を取り巻く土塁の残痕という可能性が考えられる。なお、東側は複数の宅地や鶏舎、水田が続いているため、範囲を想定することができなかった。

文献・伝承　冠町町内会長林泰雅氏より提供いただいた「天正十壬午　備中國冠兵山城第合戦之図」とされた絵図に、冠山城の東側に長方形区画が描かれていた。その内部には「土居武家屋敷」と記述がある。周辺の状況を畑和良氏に尋ねたところ、航空写真で方形状に水田が巡る宅地があると教示を受け、現地で確認した。　（上栫）

写真 154　西側の堀跡（南から、右が館跡）

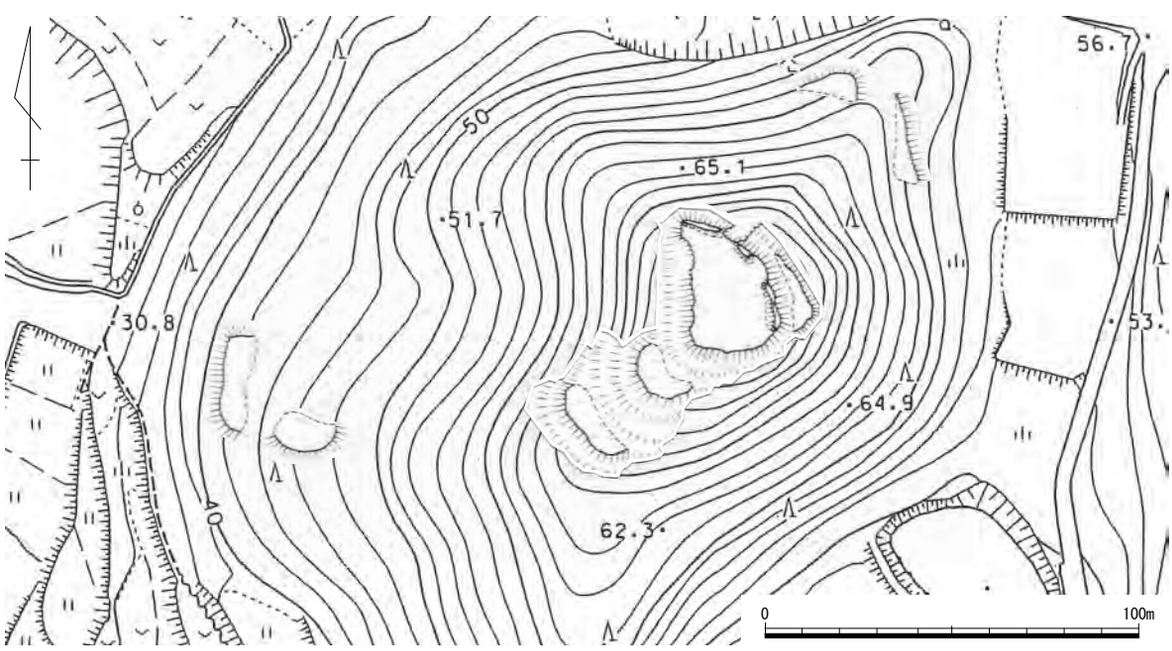
372　一国山城跡（いっこくやま）　　岡山市北区下足守　　地図 23 右

立地　龍王山山塊から西に派生し、寺谷川と三井谷川に挟まれた独立丘陵頂部に立地する。標高約 85 m、比高約 45 mである。南西約 800 mに冠山城跡、北東約 1.0㎞に守福寺裏山の陣跡が隣接する。

概要　頂部及び南斜面は岡山市教育委員会によって発掘調査が実施され、弥生時代から中世の遺構、遺物が確認されている（文献 181 岡山市教育委員会『一国山城跡ほか』2006）。このうち、城跡に伴う遺構は曲輪 4 面及び土塁がある。頂部に主郭となる第 1 郭、西斜面に第 2 ・ 3 郭、東斜面に第 4 郭が配置されている。第 1 郭は約 33 m× 25 mで、南北にやや長い梯形を呈している。肩部には基底幅が 4 m程度の低い土塁がめぐる。土塁は出土遺物から 16 世紀前半以降に位置付けられる。また、第 1 郭では集石を伴う方形基壇状遺構や被熱面が確認されている。第 2 郭は約 16 m× 8 mの規模で、南東隅で石列及び集石が見つかっている。第 3 郭は約 21 m× 7 mの規模で、古墳を削平して造られており、西側肩部で石列が確認されている。第 4 郭は約 21 m× 5.5 mの規模である。発掘調査区外では、南西側斜面の張り出しで 2 面の平坦面、北側斜面では小規模な平坦面、北東側の斜面では帯曲輪状の平坦面が認められる。

中世の遺物として、亀山焼、土師質土器皿、土師器、瀬戸･美濃焼、鉄器（鎌、鏃、釘、鑿）、銅銭、硯、砥石などが出土している。これらは、14 ～ 15 世紀代に比定される遺物も多く、城に利用される以前にも一時的な居住場所であった可能性が指摘されている。

文献・伝承　「中国兵乱記」に「一国山の峰、朱福寺山へ人数を備へ」と記されていることから、一国山城は冠山城攻略の際に織田・秀吉方が陣を構えた場所とされるほか、一国山の背後にある朱福寺山は兵の集結及び避難する場所として認識されるため、一国山は冠山城あるいは毛利方からの視線を遮る役割も果たしていたことが想定されている（文献 181）。　（米田）



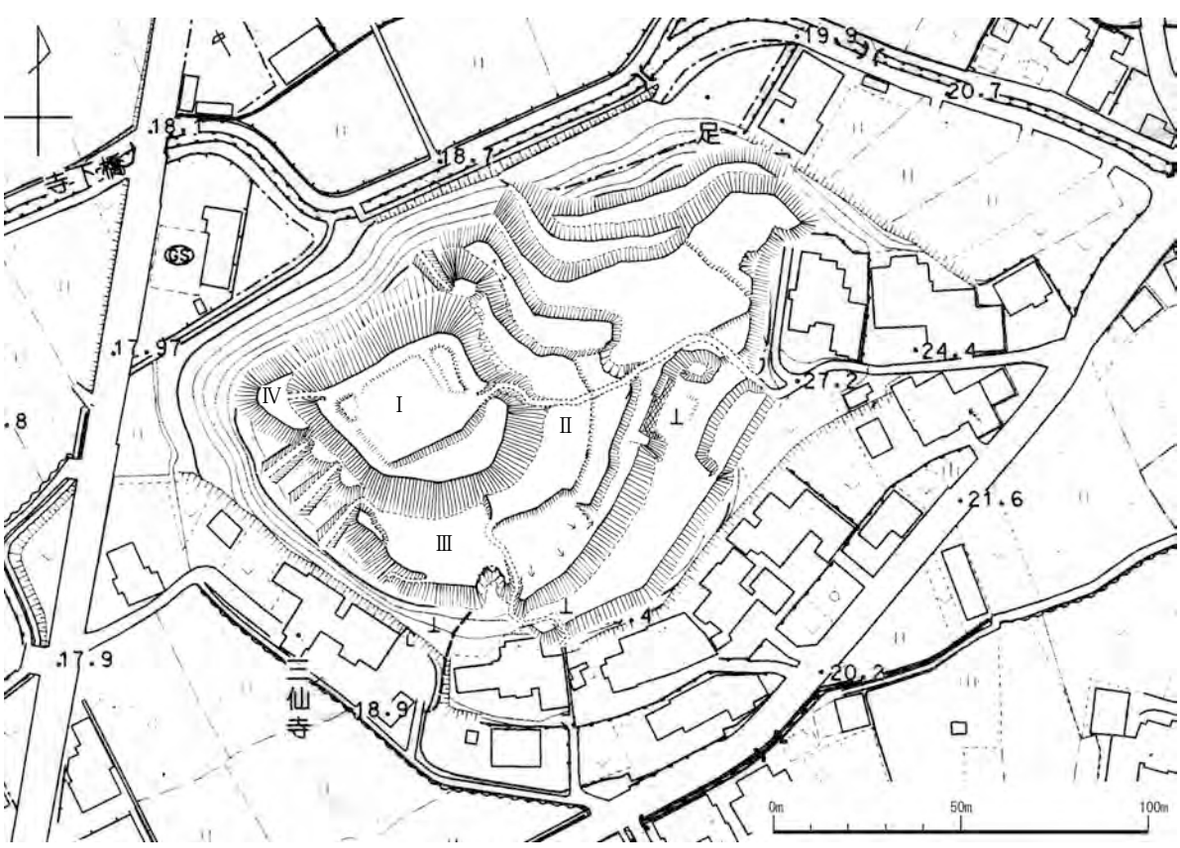
第 313 図　一国山城跡縄張り図（1/2,000）

373　冠山城跡（かんむりやま）　　岡山市北区下足守　　地図 23 左

立地　足守川中流域東岸の独立丘陵上に位置する。丘陵の東麓を近世大山道が通り、街道に面した選地となる。大山道から北に参道が延びる葦守八幡宮には花崗岩製の両部鳥居があり、康安元（1361）年の銘が刻まれる。東側の山塊一帯には羽柴方と推察されている複数の陣城跡と相互を繋ぐ土塁が確認できる。約 1.0㎞南にはすくも山城跡が位置する。

概要　最高所にある略長方形状を呈する曲輪Ⅰの周囲は高い切岸で守り、北西角には腰曲輪（曲輪Ⅳ）を設置して登城への警戒を強めている。曲輪Ⅰの西斜面には３条からなる竪堀群を掘削する。竪堀上部には平坦面を造成している。曲輪Ⅰの南側は三角形状に一段下がり、その南東側には尾根頂部に幅広の曲輪Ⅱを造成し、その北側斜面には帯曲輪を複数造成する。曲輪Ⅲの北西側には前述の竪堀群が掘削されており、曲輪Ⅳへの移動を禦ぐ。曲輪Ⅲの北西端には土塁を造成しており、土塁部分は曲輪の幅が極端に狭くなっている。竪堀を城道として用いた際に、通路を折れの虎口とするために土塁を造成した可能性が指摘されている。なお、城域の東側は宅地や畑、墓地による造成が著しく原型を留めない。

文献・伝承　築城者については諸説あるが、天正年間までは林三郎左衛門尉重真が在城したようである。『中国兵乱記』によると、天正８（1580）年９月に宇喜多直家が攻め寄せてきたが、宇喜多勢は撃退される。天正 10 年３月には羽柴秀吉勢が攻め入る。城内では、城主祢屋七郎兵衛や同孫市郎、鳥越左兵衛、林三郎左衛門、岩田内膳らが籠もって守りを固める。最初に攻城を試みたのは宇喜多勢



第 314 図　冠山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

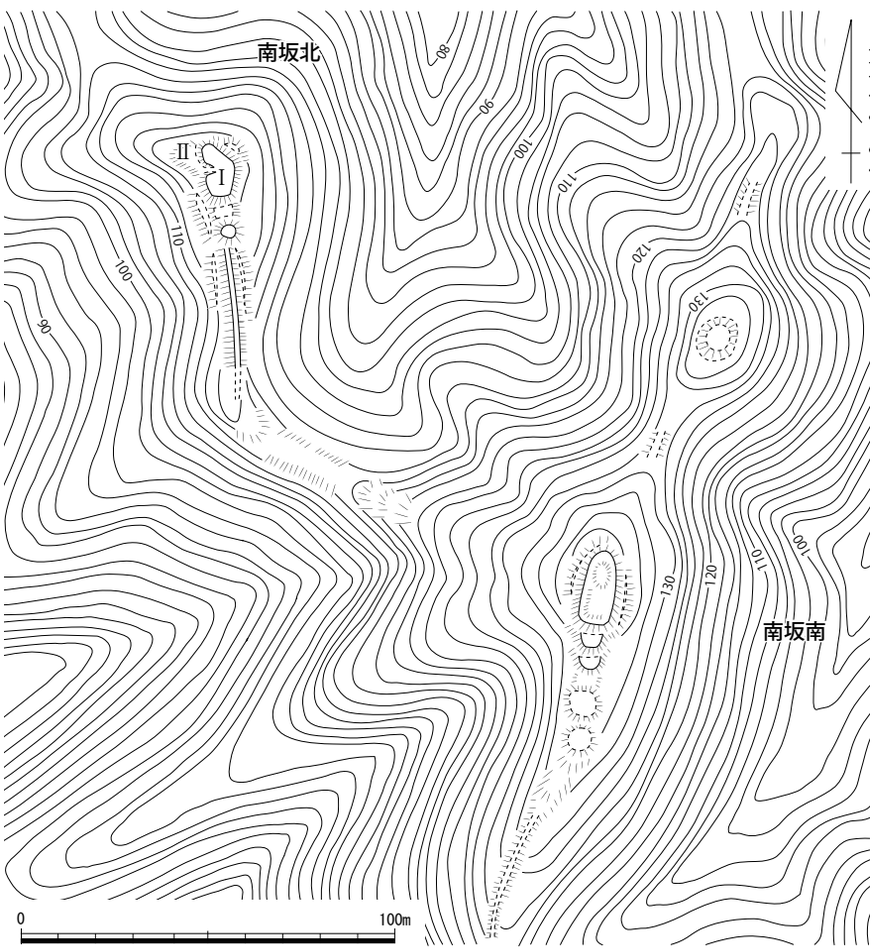
であるが、城内の応戦に多数の死傷者が出たという。しかし、城内の柴垣に火縄銃の火が燃え移り、それが藁屋に飛び火して城内は騒然となる。この事態に乗じて加藤虎之助（清正）が一番入りを果たし、宇喜多勢も城戸を破って侵入して乱戦となった。なお、冠山城跡の南東麓には城ノ根という城館関連地名が確認できる。（上栫）

375・376　南坂南（みなみざかみなみ）・北（きた）陣跡　　岡山市北区下足守　　地図 23 右

南坂南陣跡

立地　冠山城跡を西0.9㎞の地点に見下ろすことができる山頂部に位置する。尾根伝いに北西 220 m程の地点には南坂 12・13 号墳と重なる南坂北陣跡が位置する。

概要　略長方形状の曲輪で、北寄りの地点が一段高い。西側から南側にかけてＬ字状に屈曲する土塁を造成しており、南側土塁には虎口を開く。北側は自然地形のまま下がる。構造から南西側への防御意識を具現した陣城と理解できよう。



第 315 図　南坂北・南陣跡縄張り図（1/2,000）　作図：和田　剛

南坂北陣跡

立地　冠山城跡を西0.8㎞の地点に見下ろすことができる山頂部に位置する。尾根伝いに南東 220 m程の地点には南坂 21 号墳と重なる南坂南陣跡が位置する。

概要　地形に即して北西に延びる略三角形状の曲輪で、北西側が一段下がる。曲輪Ⅰは略台形状で曲輪Ⅱとの境および北側斜面は切り出すが、西側から南側にかけては自然地形のまま下がる。曲輪Ⅱについては北・東側斜面に切岸を造成する構造である。南に伸びる尾根には方墳が位置するが、陣としての利用が想定できる。当陣跡は北から東側にかけての防御意識が高い陣城と評価できる。

文献・伝承　両陣跡に関する史料・文献・伝承は確認できない。（上栫）

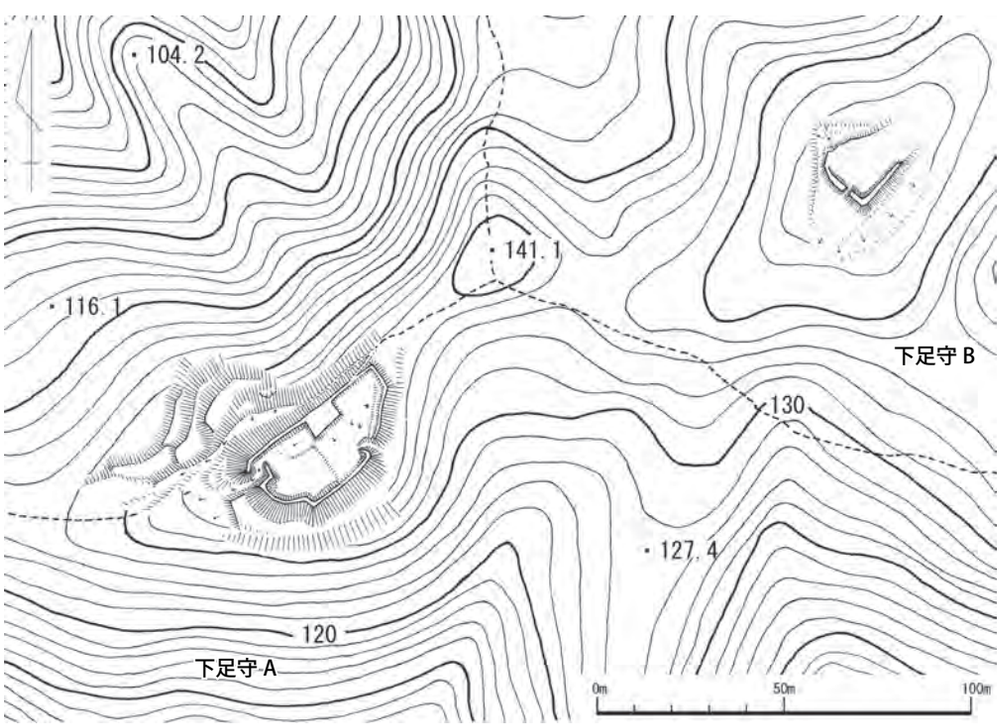
377・378　下足守Ａ・Ｂ陣跡（しもあしもりえー　びー）　岡山市北区下足守　地図 23 右

立地　西に 1.0㎞離れた冠山城跡を見下ろすことができる山頂部に立地する。

下足守 A 陣跡　概要　土塁囲みの陣城跡である。北辺の土塁は直線状に伸び、中程に長方形の櫓台状の施設を設けている。南辺土塁の中程と西辺土塁の北寄りに虎口が設けられており、南辺土塁の開口部では土塁を曲輪内に屈曲させていることから、築城当初から意図した虎口と評価できる。南側虎口からは屈曲したスロープが設けられ、南側の平坦面に繋がる。南辺土塁は折れを設け、南側虎口からの侵入を警戒する。また、南側平坦面は曲輪の西側に回り、その北辺は西側虎口から下りるスロープに接する部分で切岸を造成していた。西側虎口への警護の意図が読み解ける。西側虎口は、南から続く土塁を曲輪の内側に屈曲させて内枡形を形成する。土塁に囲まれた曲輪は、東半部は自然地形を残すが、西半部は段を切り平坦に造成している。内枡形虎口から内部に侵入した場合、曲輪の段と櫓台状施設の段が目立つ。本曲輪の北側斜面には複数の小規模な平坦面を造成している。下足守 A 陣跡は小規模でありながらも複雑な虎口を設け、さらに折れを造りつつ土塁を全周させるなど、手の込んだ造作が注目される。冠山城跡が位置する方角のみ斜面地にも小曲輪を造成し、その方面に続く尾根に複雑な構造の虎口を設けており、冠山城をめぐる攻防戦との関わりが示唆される。

下足守Ｂ陣跡　概要　南西から南東にかけて直角に屈曲する土塁を造成している。南西辺土塁は中央付近が開口する。土塁が設営されていない北側は自然地形に則して不整形に切岸を造成する。北東側には土塁を造成することなく、完全に開いた状態で自然地形のまま尾根を下がる。西から南方への防衛意識が高く窺える陣城と評価できよう。畑和良氏は下足守Ａ陣跡と一連の施設と評価している。

文献・伝承　両陣跡に関する伝承は確認できない。　（上栫）

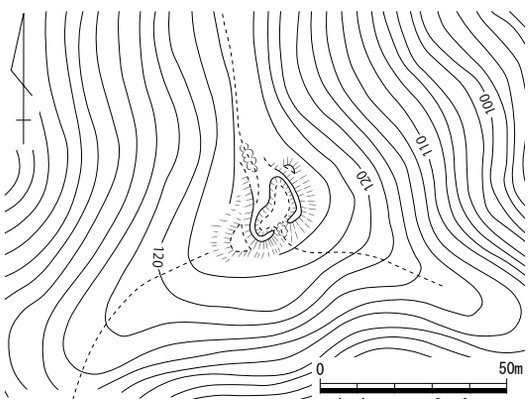


第 316 図　下足守 A・B 陣跡縄張り図（1/2,000）　作図 : 畑　和良

379　上土田大崎境の陣跡（かみつちだおおざきさかい）　岡山市北区大崎・上土田　地図 23 右

立地　足守川左岸、三上山の西に延びる山塊に立地し、頂部の標高は 126 m、比高は 100 mである。頂部からは北西約 1.3㎞の麓に冠山城跡、南西 1.3㎞にすくも山城跡、南東 2.2㎞に備中高松城跡を望むことができる。また、同一山塊には、本陣跡以外に南坂北、南坂南、下足守Ａ、下足守Ｂ陣跡が尾根伝いに点在し、本陣跡はこれらの最南端に位置する。

概要　曲輪と土塁のみで構成される単郭である。曲輪は東西 10 m、南北 15 mと極めて小規模で、平面形は不整楕円形に近い。曲輪の造作はあまく、自然地形を多分に残す。周辺は幅 5 m、内高 1 mほどの土塁が築かれ、北辺中央は尾根の高まりに繋がる。土塁の南辺中央は開放し、傾斜をもつ虎口となる。縄張りは周囲の守りを固めているが、特に南に虎口を設けており、防御意識が窺える。



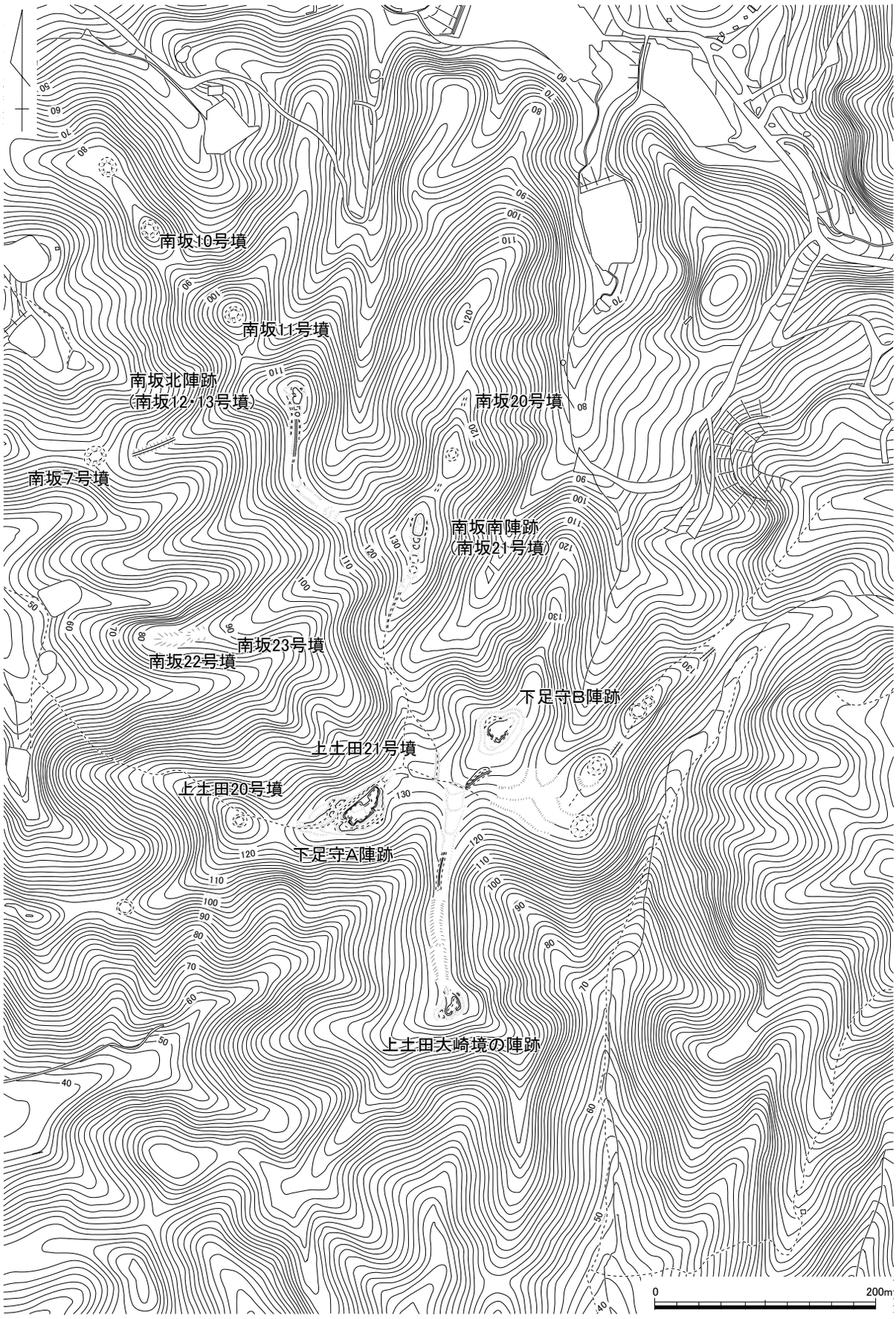
第 317 図　上土田大崎境の陣城縄張り図（1/2,000）作図：和田　剛

文献・伝承　文献 147（乗岡実「備中高松攻めの陣城群」『織豊系城郭の陣城』2012 年）では、上土田大崎境の城と呼称され、天正 10（1582）年に備中戦役の際に築かれた織田方の陣城跡で、敵城を冠山城跡とすくも山城跡と想定されている。　（米田）

380　山上土塁跡（さんじょうどるい）　岡山市北区下足守・大崎・上土田　地図 23 右

立地　足守川左岸の山頂部に位置する。山は最頂部標高約 150 mの南北に延びる山塊で、比高は約 100 mである。山塊には北から南坂北、南坂南、下足守Ａ、下足守Ｂ、上土田大崎境の 5 か所の陣城跡が尾根伝いに連続するように各頂部に築かれている。なお、南坂北陣城跡は南坂 12・13 号墳、南坂南陣城跡は南坂 21 号墳が利用されている。

概要　山上土塁は、文献 147 によってその位置や範囲が示されている。山塊は草木の繁茂が著しく、遺構の断片的な確認にとどまったが、上記した陣城跡の間をつなぐ尾根の稜線には幅狭の平坦面や土橋状、低土塁状に造成した痕跡が断続的に認められる。土塁状地形の北端は、南坂北陣跡を起点とする。南坂 7 号墳へ向かって西に延びる尾根はやや平坦であるのに対し、南坂北陣跡や南坂 20 号墳から南坂南陣跡の間に延びる尾根は幅が狭く、鞍部は部分的に土橋状を呈する。南坂南陣跡から南坂 22・23 号墳へ延びる西側の尾根や上土田 21 号墳へ続く南側の尾根、下足守Ｂ陣跡の東側の尾根はやや幅広で平坦である。さらに、下足守Ｂ陣跡より南にある上土田大崎境の陣跡との間の尾根は幅狭で、土橋状に削平されており、一連の土塁状地形の南端にあたる。土塁状地形は断続ながら、南北 490 m、東西 450 mの延長に及ぶ。これらの陣城跡を繋ぐように尾根稜線にみられる幅狭の平坦面や土橋状の地形は、遺構の現認や評価が難しいが、文献 147 によれば、駐屯や兵力の移動に有効に機能したと考えられている。　（米田）



第 318 図　山上土塁跡ほかの縄張り図（1/5,000）　作図：和田　剛

381　すくも山城跡　　岡山市北区足守　　地図 23 左

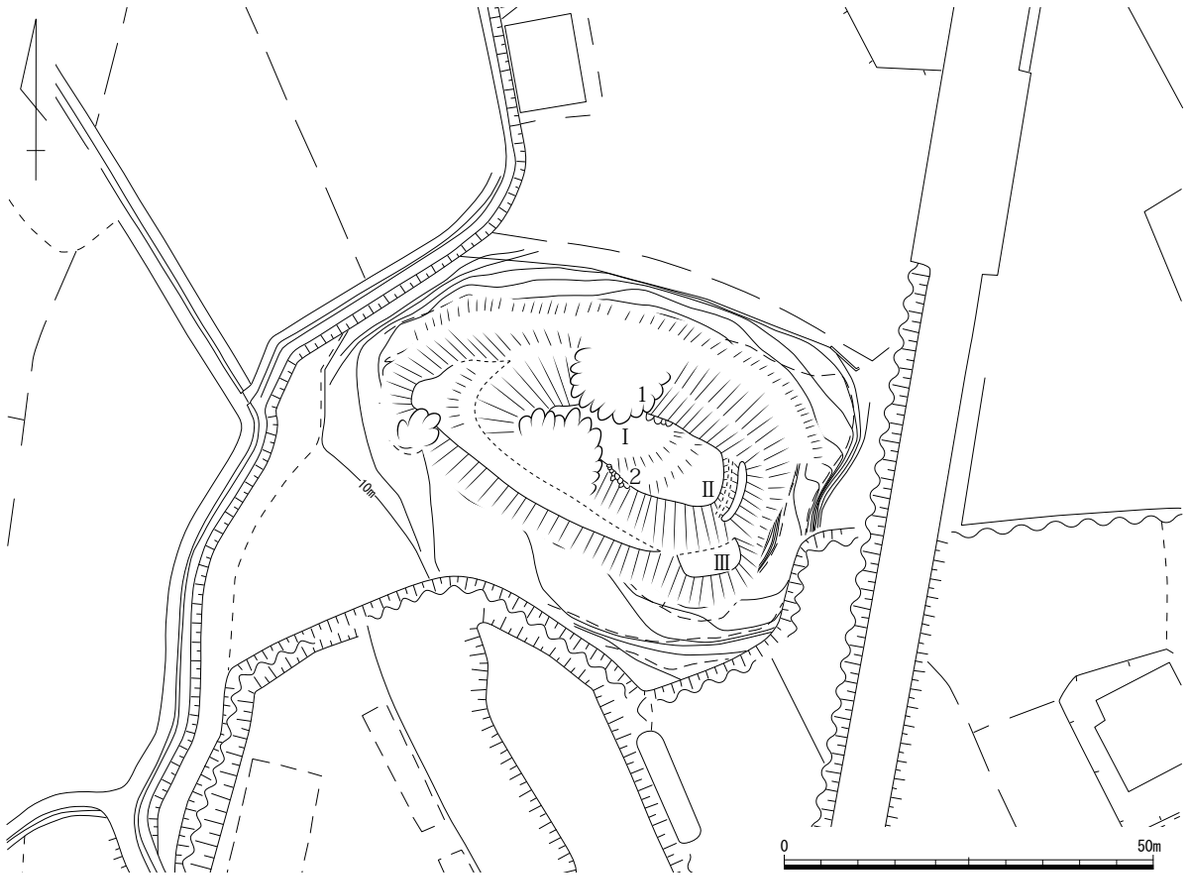
立地　足守川の東岸に所在する独立丘陵上に築かれている。北約 1.0㎞には冠山城跡が、南約 1.5㎞には生石城跡が、足守川を挟んで西 0.9㎞には鳥越山城跡が位置する。すくも山城跡が所在する平野東端の山裾には近世大山道が南北に通る。また、付近には遅くとも嘉応元（1169）年には足守庄が営まれていたことが、「備中国足守庄絵図」から明らかになっている。

概要　すくも山城跡は、農地開発の土木工事に伴い発掘調査が実施され、三段の曲輪が確認された。曲輪Ⅰは丘陵頂部を削り出して、東西 18 m、南北 12 mの平坦面を造出している。南北側面に石積みが確認されているが、南北で様相が異なる。北側斜面の石積み 1 は 30 ～ 40㎝大の長方形角礫を横方向に積んでおり、背後には小角礫を入れている。南側斜面の石積み 2 は不整形の角礫が斜面に貼り付くような状況で並んでいたが、石材の様子は石積み 1 の裏込めと共通する。曲輪Ⅱは東西 5.5 m、南北 7.5 mである。東端には幅は 2.3 m、深さ 1.4 mの堀切を掘削する。曲輪Ⅲは長さ 7.5 m、幅 3.5 mの長方形状を呈する。曲輪Ⅱ・Ⅲが東側斜面に造成されていること、曲輪Ⅱの東側斜面は急峻であるにもかかわらず堀切を掘削していることなど、東側への守りの意識が強く感じられる構造である。ただ、西側には足守川が南流しているが、当時は丘陵の西裾を流れていた可能性が指摘され、当初は足守川も天然の堀として認識していた可能性も考えられている。すくも山には中世墓も検出されている。中世墓は山頂部から南斜面および裾部で 33 基確認され、さらに北側でも骨蔵器と考えられる備前焼片などが多数出土していることから、丘陵全体を墓地としていたことが窺える。出土遺物から 14 世紀前半を上限に、16 世紀後半には造墓活動を終了している。すくも山城跡は墓地がある丘陵を掘削して造営した急拵えの城郭で、冠山城跡の南の出城と評価されている。

写真 155　すくも山城跡遠景（南から）155・156 は岡山市教育委員会提供

文献・伝承　すくも山城跡については一次史料が散見される。羽柴秀吉が高松城攻めにおいて出した書状には、「すくも塚の城」・「すくも城」を落とした、あるいは高松城を攻める前に「すくも塚」を取り囲んだことを書き綴ったものが認められる。また、『信長公記』にも「すくも塚の城」を攻略したことが見える。落城は天正 10(1582) 年 4 月 25 日とされる。ただ、すくも塚を冠山城の別称と捉える文献もいくらか見られ、留意すべきである。　（上栫）

写真 156　石積み 1（東から）

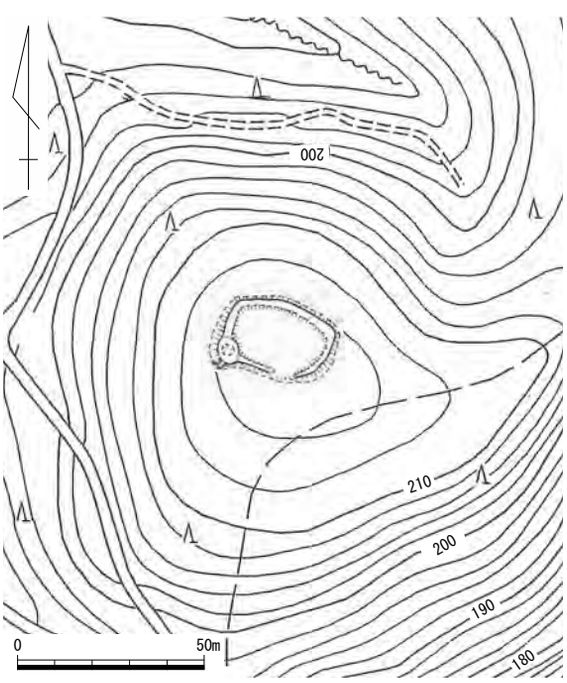


第 319 図　すくも山城跡縄張り図（1/1,000）　作図：和田　剛・文献 183 を加筆

382　三上山東（みかみやまひがし）の陣跡　　岡山市北区大崎　　地図 23 右

立地　足守川左岸の標高 215 m、比高約 185 mの三上山の頂部東側に立地する。同一の山頂には本城から西 300 mに三上山の陣跡、西 600 mに三上山西の陣跡が所在する。また頂部から約 2.4 ㎞の南麓に広がる平野に備中高松城跡がある。

概要　城域は東西 30 m、南北 22 mと小規模である。曲輪と土塁のみで構成される単郭である。曲輪は東西 23 m、南北 14 mで、平面形は長方形に近い。曲輪の削平はあまくて自然地形を残し、土塁がほぼ全周する。土塁は幅３m前後で、高さは南西側が 1 m程度、東辺は約 50㎝、北辺は約 20㎝ある。南辺土塁の中央部分は土塁が途切れており、虎口の可能性がある。曲輪の南西隅角には、土塁と連結して周囲を囲んだ径２m程の窪みがある。立地や規模から三上山の陣跡や三上山西の陣跡と関連が深いものと考えられる。　（米田）



第 320 図　三上山東の陣跡縄張り図（1/2,000）
文献 137 を加筆

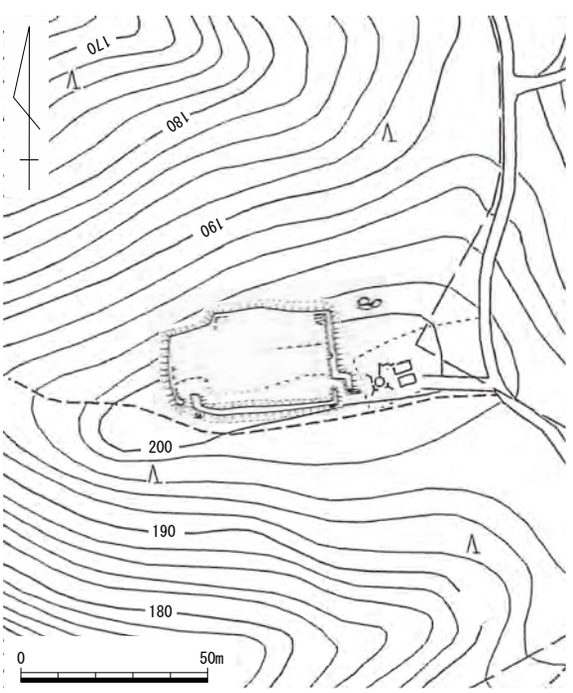
383　三上山（みかみやま）の陣跡　　岡山市北区大崎　　地図 23 右

立地　足守川左岸の三上山の頂部に立地する。頂部の標高は 202 m、比高は 175 mである。三上山頂部は東西に細くのび、同一の山頂には東 300 mに三上山東の陣跡、西 300 mに三上山西の陣跡が所在する。頂部から約 2.2㎞の南麓に広がる平野には備中高松城跡、北西 2.0㎞の麓には冠山城跡を良好に望むことができる。

概要　城域は東西 53 m、南北 33 mと小規模である。曲輪、土塁、虎口で構成される単郭の構造である。曲輪は東西約 44 m、南北約 25 mの長方形を呈する。平坦の造成はあまく、尾根筋から南北にそれぞれわずかに下がり、自然地形を多く残す。曲輪の北東隅角には径２mほどの円形の窪みがある。曲輪の周りは土塁で囲まれている。土塁は南辺が良好に残り、内側の高さは約１mと最も高い。それに対して、東辺の土塁の高さは約 50㎝と低い。西辺の土塁は虎口付近にのみ認められ、北辺に向かって収束する。北辺の土塁は明確でないが、曲輪の北辺中央で折れが確認できる。虎口は、南辺土塁の西寄りと東辺土塁の南寄りの２か所で確認できる。南辺土塁の西寄りの虎口は、土塁を内側へ２mほど直角に屈曲させ、曲輪よりもわずかに低く区画する。また、東辺土塁の南寄りは土塁が外側へ張り出し、南に向かって食い違い虎口を形成している。ここの虎口周辺には部分的に石積みされている。縄張りは長方形の曲輪の南半を中心に土塁で囲み、２か所にやや複雑な虎口を設けており、特に南側の防御を意識している。

文献・伝承　本陣については、文献 137 山下晃誉氏、文献 147 乗岡実氏によって概説されている。本陣は天正 10（1582）年の備中戦役の際に織田・羽柴方によって築かれた可能性が高く、文献 147 は敵城を冠山城と想定している。また、文献 137 は本陣に加え、三上山西側の山系に土塁囲みの遺跡が複数点在することは、冠山城、宮路山城などが築かれた足守地域での戦闘や羽柴軍と毛利軍との対陣を考えるうえで重要であると指摘する。（米田）

写真 157　南辺の土塁（西から）



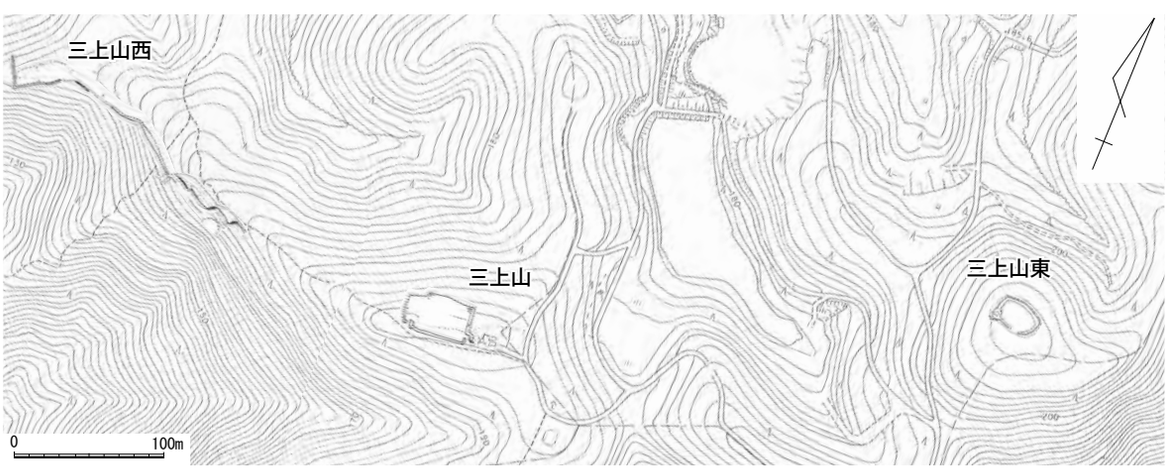
第 321 図　三上山の陣跡縄張り図（1/2,000）
文献 137 を加筆

384　三上山西（みかみやまにし）の陣跡　　岡山市北区大崎　　地図 23 右

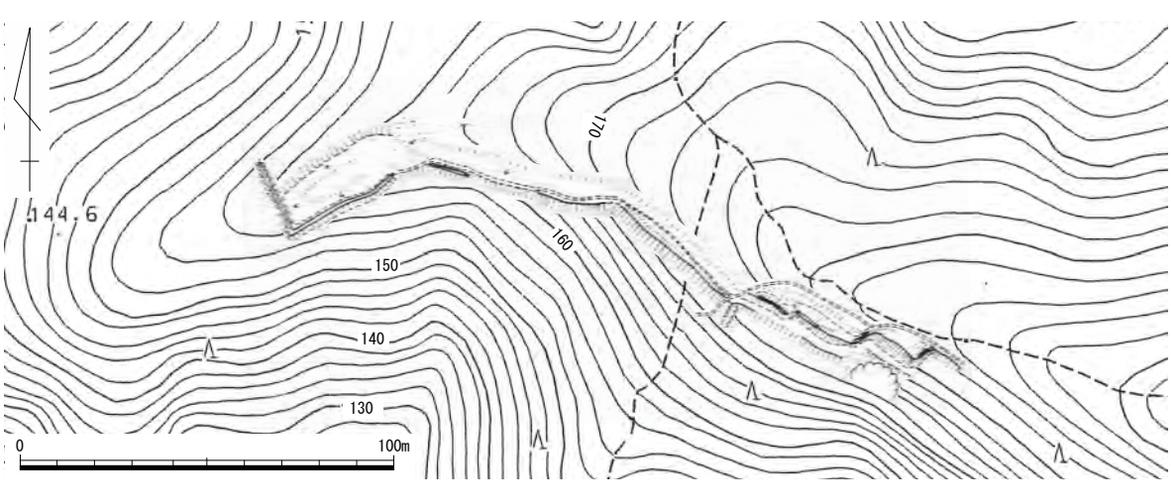
立地　足守川左岸の三上山頂部から西に延びた標高約 184 m、比高約 150 mの頂部尾根の半ばに立地する。同一の山頂には東 300 mに三上山の陣跡、東 600 mに三上山東の陣跡が所在する。頂部から約２㎞の南麓に広がる平野には備中高松城跡、北西 1.4㎞の麓には冠山城跡を良好に望むことができる。

概要　城域は東西 200 m、南北 23 mである。Ｌ字状の土塁を伴う曲輪を中心とし、東から続く尾根はやや平坦に造作しているが、西に向かうにつれて削平はあまい。曲輪の規模は東西約 20 m、南北 10 mと小さい。土塁は曲輪の南辺と西辺にＬ字状に配置されている。土塁は幅３m程度で、外高約 80㎝、内高約 30㎝と低い。西辺の土塁北端は曲輪の緩斜面よりも北側斜面にまでやや長く延びる。また、曲輪の南東隅角より東側の尾根南斜面には、幅１mの道が東側に向かって等高線に平行するように延び、南縁には低い土塁が部分的に確認できる。これは曲輪の南東隅角に取り付き、本陣から東へ 300 m離れた頂部にある三上山の陣跡までの間には折れを伴う土塁が断続的に認められる。

文献・伝承　文献 147 は、本陣を織田方の陣城とし、敵城を冠山城と想定している。　（米田）



第 322 図　三上山東、三上山、三上山西の陣跡縄張り図（1/5,000）文献 137 を加筆



第 323 図　三上山西の陣跡縄張り図（1/2,000）

385　龍王山陣跡（りゅうおうざん）　　岡山市北区高松稲荷　　地図 23 右

立地　龍王山から南に派生する尾根先端頂部に位置する。南２㎞地点にある高松城跡を一望することができ、その間に所在する陣城を眼下に収めている。また日差山城跡（南６㎞）や庚申山城跡（南西3.5㎞）も望むことができる。

概要　南北に複数の曲輪が連なる連郭式山城である。最頂部の曲輪Ⅰは略台形状を呈し、北辺に高さ50㎝程の土塁を設ける。曲輪Ⅰから北側 20 mの地点には堀切状に尾根筋を分断する窪みがみられたが、浅く法面も緩やかである。曲輪Ⅰの南側は曲輪Ⅱ・Ⅲと平坦面が続いて、曲輪Ⅴに到達する。曲輪Ⅴの南側には２m程高い曲輪Ⅳが連接する。最南端にある曲輪Ⅳからは高松城跡が一望できる。東西斜面は急傾斜で、おおよそ自然地形のままと考える。逆「く」の字状に屈曲した曲輪で、東西斜面は自然地形をほぼ利用している。

文献・伝承　『中国兵乱記』によると、天正 10(1582) 年３月 15 日に備前一宮に着陣した羽柴秀吉は、鍛冶屋山城に入城して宮路山城攻めに着手した。宮路山城陥落の２日後、羽柴秀勝が龍王山に陣を構えたとみえる。秀吉は四塚、門前、妙現山の峰々に陣を構えて冠山城を遠巻きにしたという。冠山城陥落後の４月 11 日、秀吉は辻村のうちの石井山に陣替えを行った。４月 20 日には小早川藤四郎らが生石村妙現山から龍王山の秀勝本陣に攻めかかったという記述がある。４月 27 日、秀勝は小山村の宮山に陣替えしており、龍王山陣城が本陣として機能したのは 40 日程ということになる。

『陰徳太平記』には４月 25 日の冠山城陥落の後、秀吉が総軍８万余騎を高松の上の龍王山に上げたという記述がみえる。ここで地勢を見切り、水攻めが上策と判断したとする。そして５月７日に本陣を尾崎の蛙之鼻に移したという。この場合、龍王山が陣として機能した期間はわずか12日程である。

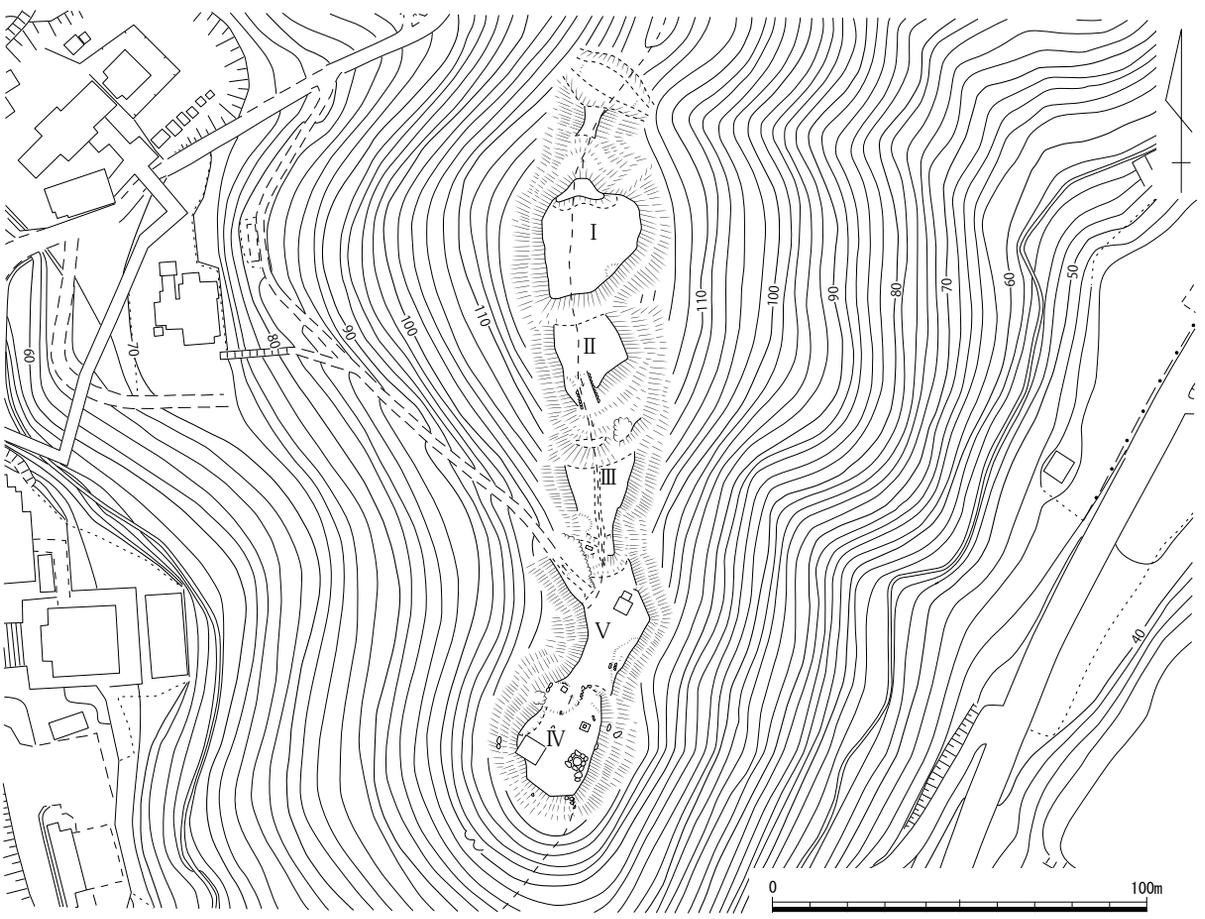
『備前軍記』にも秀吉が龍王山を本陣とした記述がみえるが、３月 19 日に備前福岡を発して沼村、岡山を経由して直接龍王山に陣を構えた様子が窺える。それから宮路山城、冠山城の攻略に取りかかっている。そして龍王山陣で高松の地勢を判断して尾崎の蛙之鼻に陣を移して、５月７日から築堤に着手したとする。

寛政３(1791)年の古川古松軒の手による『備中国加夜郡高松城水攻地理之図』(ＫＭ391/1)には「龍王山　秀吉本陣　人数五千人　高松城十町余、眼下ニ見シ　地ノ利ヨシ」とあり、『備中国高松水攻之図』（ＫＭ391/8）には「此山ヲ龍王山ト云秀吉公御本陣　人数　高松見通十町余眼下ニアリ」と記述がある。しかしながら、作成年未詳の『備中高松城水攻め図』（池田家文庫Ｔ 12-28）には「龍王山　織田御次丸」とある朱字で「高松　三十町　冠　弐十町」と記されている。同様に『備中国高松城水攻之図』（ＫＭ391/4）にも「龍王山　御次丸本陣　城ヨリ廿三丁」とあり、龍王山を織田秀勝の陣とする。　（上栫）

写真 158　曲輪Ⅰ（東から）

写真 159　堀切状窪み（南から）

写真 160　眺望（曲輪Ⅳから）



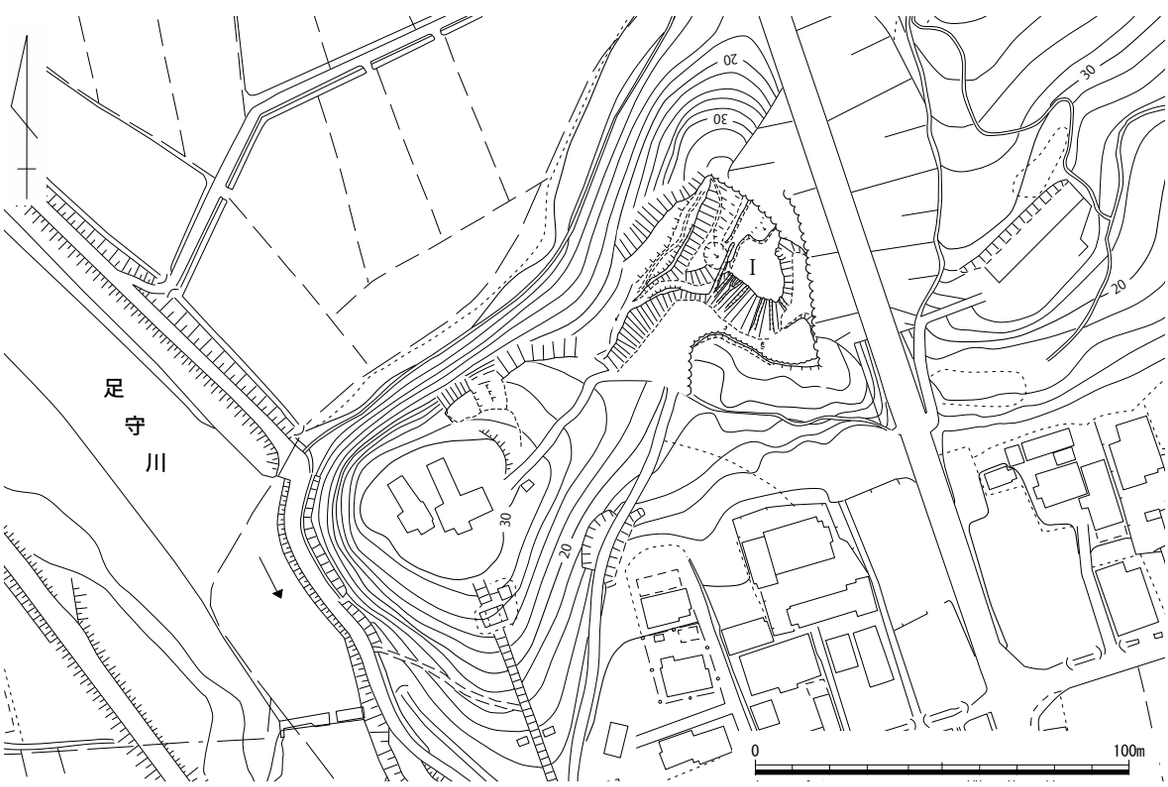
第 324 図　龍王山陣跡縄張り図（1/2,000）

386　生石（おいし）城跡　　岡山市北区門前　　地図 23 左

立地　足守川の東岸に位置する独立丘陵から西に延びる尾根頂部に位置する。足守川を挟んで約 200 m南西には、高松城水攻めの際に足守川を堰き止めた堤防状遺構が確認できる。生石城跡が位置する尾根の西端頂部には生石神社が建つ。生石神社は大正 4（1915）年に周辺 6 か村の諸社を合祀したもので、その前身となる八幡宮の創建は天文 5（1536）年とされる。生石城跡が位置する丘陵の南裾を近世大山道が東西に通る。

概要　丘陵から延びる尾根は国道 429 号により分断されているが、遺構は国道以西でのみ確認した。国道以東は城外と判断でき、国道部分に堀切が存在していた可能性も示唆される。遺構は尾根の国道以西全域で確認できたわけではなく、鞍部を挟んだ東西で様子が異なっている。西半は生石神社やその駐車場、道路により大きく改変を受けており、境内の北側斜面で曲輪状の平坦面を 1 面確認している。国道以西の東半では城館関連遺構を確認している。尾根筋には山道が通るが、頂部付近では南斜面を削平して平坦面を造成する。曲輪 I は南側を堀切で分断し、周囲は切岸で守る。堀切の北側斜面には竪堀状の溝が複数確認できる。ただし、堀切の南側斜面は地山が露出し、比較的新しい時期に改変を受けた可能性がある。曲輪 I 北側には低い土塁を造成し、その背後に横堀・竪堀を掘削している。

文献・伝承　生石城は生石氏が築城したと伝わるが、詳細は不明である。天正 10（1582）年、高松城水攻めの際には加藤清正が陣を敷いたという。備中高松城水攻めにおいては、足守川を堰き止めて水を築堤内に取り入れたのであるが、関連する堤防遺構が足守川西岸、生石城跡の南約 200 mの地点にあり、生石城跡には土堤の防備という役割が想定されている。　（上栫）



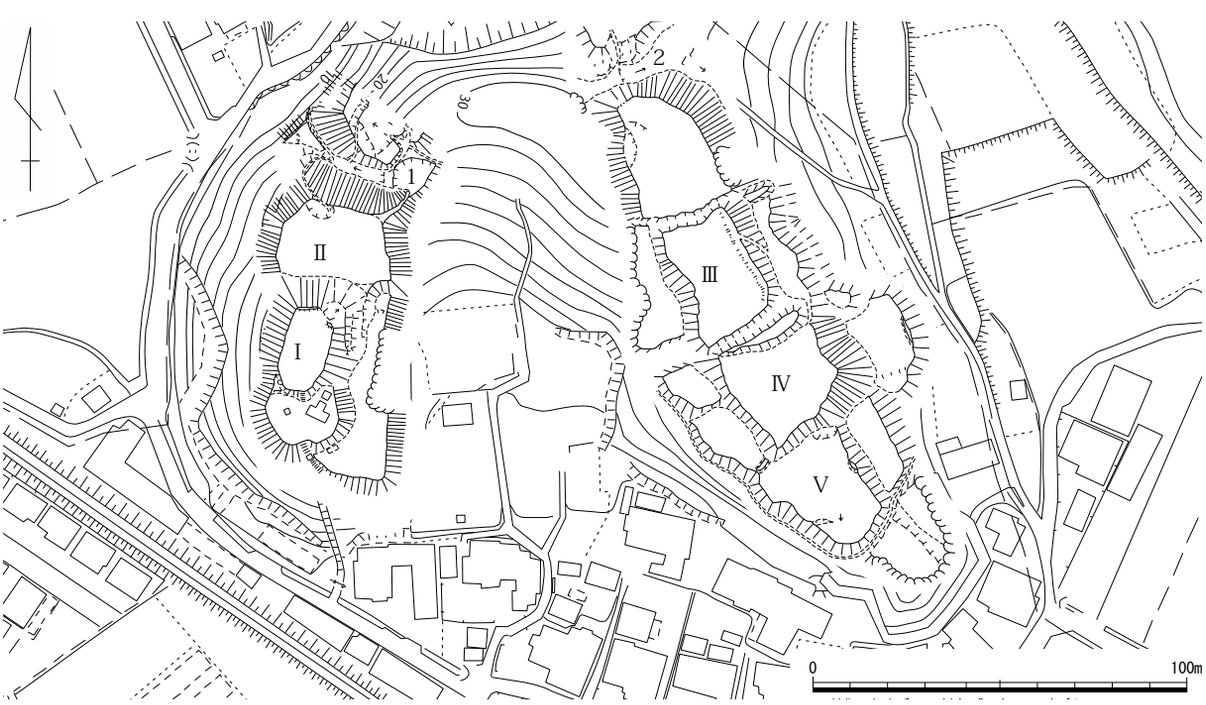
第 325 図　生石城跡縄張り図（1/2,000）

387　小山（こやま）城跡　　岡山市北区小山　　地図 23 右

立地　八幡山から南に延びる尾根の先端に位置する。尾根の東麓約 150 mには大崎城跡が位置する。小山城跡の南約 80 mの地点に備中高松城の水攻めに際して築かれた土堤が想定されている。

概要　尾根の先端は東西二叉に分かれており、それぞれで城館関連遺構が確認できる。東西尾根とも最高所の曲輪を取り囲むように複数の曲輪を造成し、北端部を深さ約 10 m以上の堀切で分断して守りを固める点で共通することから、東西尾根を包含した一城と判断できる。ただ、曲輪の造成には東西尾根で差がある。木野山神社が鎮座する西尾根は曲輪を 4 面造成する。最高所の曲輪Ⅰのみ北辺に土塁を設ける。曲輪Ⅰ北側の切岸を下った地点にある曲輪Ⅱでは、北東角から堀切 1 に下がりながら延びる張り出しがみられ、横矢掛けとしての役割が考えられる。曲輪Ⅰの東斜面にも南北に長い曲輪を造成する。東尾根上には曲輪を 4 ～ 5 面造成し、東西斜面に小規模な曲輪を複数構えている。最高所の曲輪Ⅲは略長方形状で、南北辺を浅い溝で分断する。曲輪Ⅲの南側の曲輪Ⅳ北辺には、高さ 80 ㎝程の土塁を造成し、曲輪Ⅳの北側下方にある帯曲輪の北辺及び東側下方にある曲輪の東辺には土塁を造成する。また、曲輪Ⅴの北西側には帯曲輪が連接するが、その境界に土塁を造成して両者を分断している。小山城跡は、背後に相当する北側の尾根筋を大規模な堀切で分断しており、尾根筋伝いの侵入に対する強い防御意識が看取される。

文献・伝承　高松城の水攻め決定により羽柴勢は布陣を大きく変更し、羽柴秀勝の本陣が龍王山から移動することになった。このとき秀勝の陣は小山村の宮山に置かれたことが『中国兵乱記』にみえる。『中国兵乱記』には、近隣の大崎山麓は秀勝の御陣前とあるが、ここには大崎城跡がある。小山城跡の西尾根先端頂部には木野山神社が位置し、さらに大崎城跡との位置関係から、『中国兵乱記』が示す秀勝本陣は小山城跡に比定される。　（上栫）



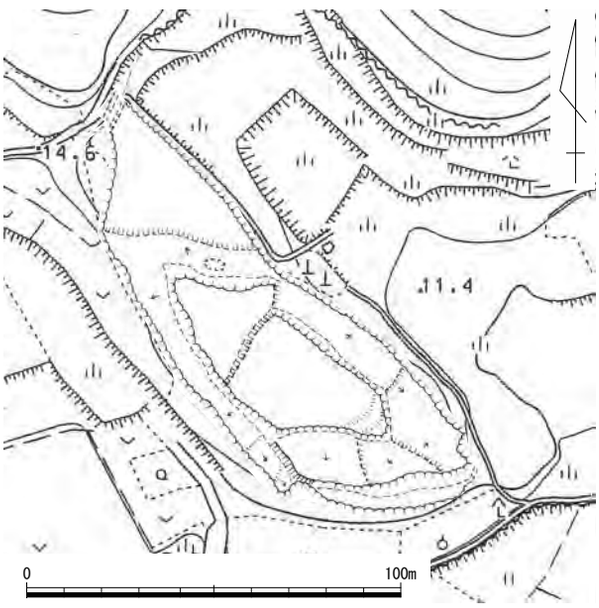
第 326 図　小山城跡縄張り図（1/2,000）

388　大崎（おおざき）城跡　　岡山市北区大崎　　地図 23 右

立地　足守川左岸の標高約 15 m、比高約 8 mの丘陵頂部に位置する。周辺には西約 150 mに小山城跡、東約 500 mに八幡山陣跡、南東約 900 mに備中高松城跡が位置する。

概要　城域は東西約 50 m、南北約 140 mと中規模でも小さい。頂部には曲輪が２面あり、周縁は後世に削平されている。その下段には曲輪の東から南、西にかけて帯曲輪状の狭長の平坦面がめぐる。尾根北側の鞍部には尾根筋を切って山道が通っているが、かつての堀切の名残りである可能性もあろう。

文献・伝承　『中国兵乱記』によれば、天正 10（1582）年の備中高松城水攻めの際、織田方についた津田与左衛門、生駒市左衛門、牧村長兵衛、蜂谷五郎助が陣を構えたと伝える。　（米田）



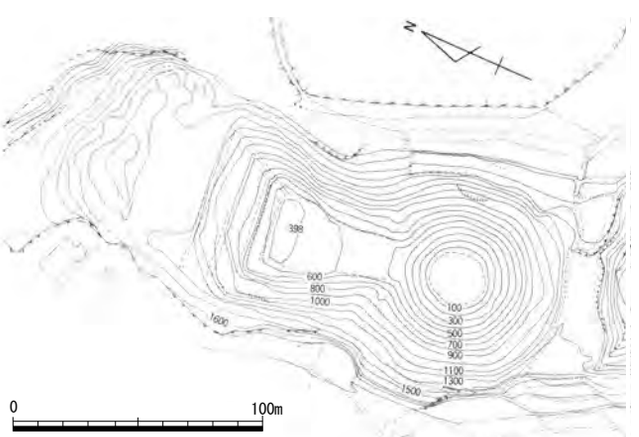
第 327 図　大崎城跡縄張り図（1/2,000）

389　坂古田（さこた）陣跡　　岡山市北区平山　　地図 23 右

立地　足守川左岸の標高 42 m、比高 33 mの丘陵頂部に立地する。頂部から南西方向には、約 900 mの近距離に備中高松城跡を望むことができる。

概要　丘陵上には佐古田堂山古墳が築かれている。佐古田堂山古墳は全長 150 mの前方後円墳で、丘陵の北側に前方部、南側に後円部がある。古墳の後円部は径 88 m、高さ 12 mで、墳頂は平坦で径 30 m× 25 mの円形を呈する。前方部は長さ 75 m、幅 90 m、高さ９mであり、後円部の頂部より３mほど低い。前方部の頂部はやや平坦で南北 47 m×東西 29 mの長台形を呈する。また、後円部の南側は尾根切断のための堀割りが確認できる。前方部の北側には幅 25 mの削平地と幅 10 m程度の高まりが認められる。

ここは備中高松城跡を近距離に望むことができる立地や古墳前方部の斜面下に曲輪状の削平地、先端に土塁状の人為的な地形改変が認められることから、陣城跡と推定されている（文献 129）。　（米田）



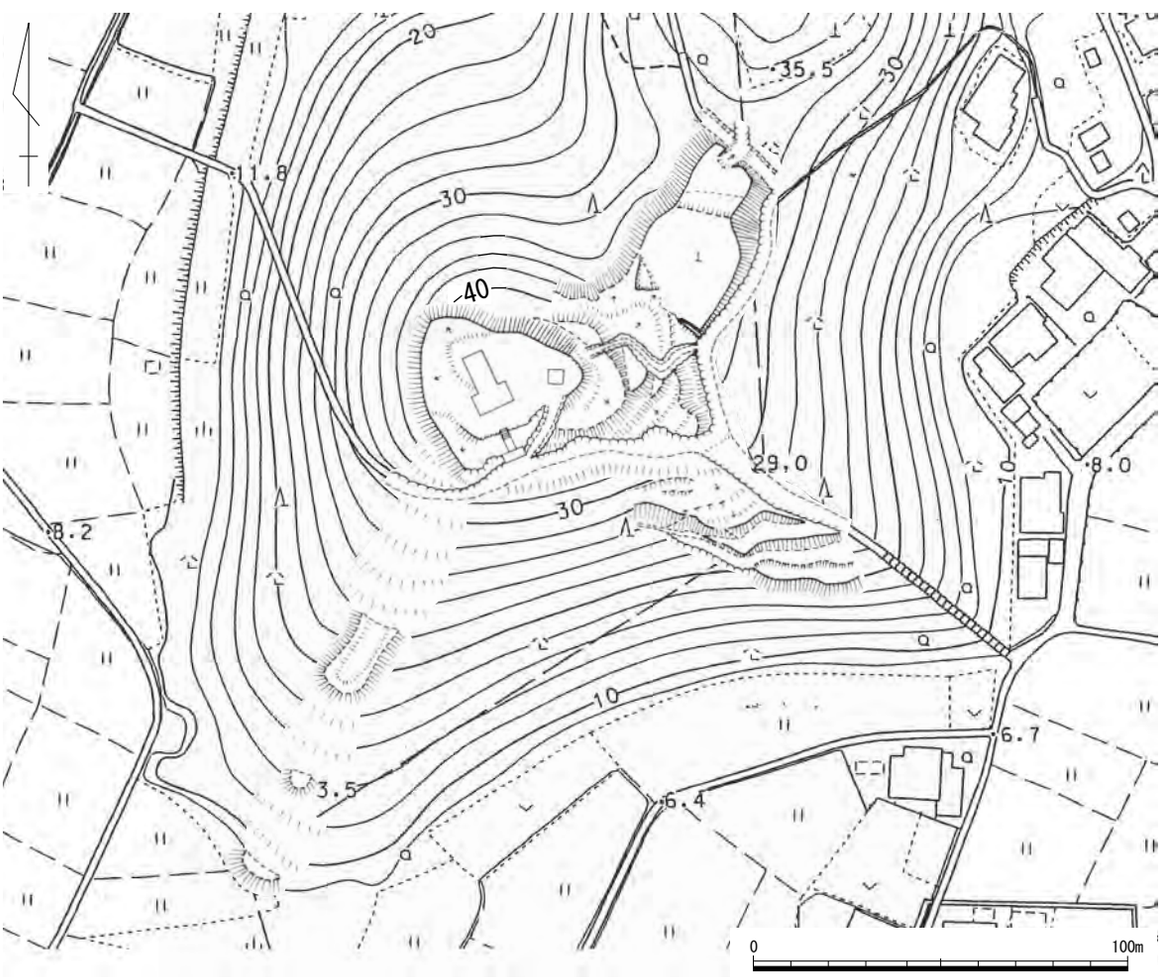
第 328 図　佐古田堂山古墳測量図（1/3,000）

390　八幡山陣跡（やはたやま）　　岡山市北区大崎・和井元　　地図 23 右

立地　足守川左岸の標高約 42 m、比高約 30 mの丘陵先端部に位置する。周辺には西約 500 mに大崎城跡が位置するほか、頂部からは南約 600 mに備中高松城跡を眼下に望むことができる。

概要　城域は東西 70 m、南北 80 mで中規模でも小さい。頂部の曲輪を中心に構成される陣跡である。丘陵頂部には八幡神社が祀られており、地形改変がなされているものの、神社周辺の平坦面は曲輪と考えられる。曲輪は本殿と拝殿周辺に一面、門周辺に一面ある。規模はおよそ東西 40 m、南北 40 mで、地形に沿うように不整三角形を呈する。曲輪の縁辺に土塁は確認できない。また、頂部から続く東側尾根上には墓地造成による規模がやや大きい平坦面があり、もともと曲輪であった可能性がある。さらに頂部南斜面には帯曲輪状の平坦面、南西に延びた尾根先端に小曲輪状の平坦面が確認できる。このほか、尾根の鞍部には幅広の山道が現在横断しており、かつての堀切を利用した可能性もあるが、推定の域をでない。全体的に見て、縄張りは曲輪と考えられる平坦面が複数確認できるが、防御施設はほとんどない。

文献・伝承　『中国兵乱記』によると、天正 10（1582）年の備中高松城の水攻めの際に、織田方の宇喜多忠家が陣を敷いたと伝わる。　（米田）



第 329 図　八幡山陣跡縄張り図（1/2,000）

391　岡之鼻陣跡（おかのはな）　　岡山市北区平山　　地図 23 右

立地　南に緩やかに延びる丘陵頂端部に立地する。備中高松城跡の北側 1 ㎞に位置しており、遠望することができる。南西 700 mには宇喜多忠家の陣跡とされる八幡山陣跡がみえる。

概要　丘陵を大きく削平して平坦面が造成され、その中央付近に妙義山古墳が残存する。古墳の周囲は畑として利用された平坦面が広がり、古墳を中心に残した曲輪のような様相を呈する。古墳は二ないし三段築成の円墳で、直径は約 40 mである。段築が明瞭なことから、後世の改変は少なく、周辺の平坦面の造出は古墳築造の 5 世紀後半頃にある程度実施されたと考えられる。南斜面には平坦面が二段造成されている。また北側にも平坦面が造成されており、畑地として活用されている。南側斜面の平坦面についても畑地の可能性が推測される。ただ、高松城跡を遠望することができ、八幡山陣跡と近い距離に位置することから、陣城として斜面に平坦面を削出した可能性を完全に否定することは難しい。

文献・伝承　高松城水攻めに際して、羽柴秀勝が陣を敷いたと言われているが、その論拠は曖昧である。『中国兵乱記』によると、天正 10（1582）年 3 月 15 日、羽柴秀勝は羽柴秀吉とともに備前一宮に着陣し、16 日には秀吉と鍛冶屋山城に入城しているが、その翌日にはやや東に退いて龍王山に陣城を構える。4 月 20 日の陣決めでも秀勝は龍王山に在陣するが、27 日には小山村の宮山に陣を移している。なお、4 月 26 日には中島大炊介ら 2,500 が平山周辺に兵を潜めており、秀吉軍に対する警護を務めていることから、この段階で岡之鼻陣周辺は秀吉方の手に落ちていないことが窺えよう。5 月 5 日の事項として、大崎山麓は秀勝の御陣前とされている。小山の宮山のすぐ北東麓に大崎山麓は位置することから、この時点で秀勝本陣の移動は認められない。5 月 13 日には門前村より大井川を堰き止めて水を引き入れたとする記述があるため、これ以降に秀勝が岡之鼻陣を陣所にすることは考えにくい。

岡之鼻陣を秀勝の陣とする資料は絵図に認められる。宝永 7（1710）年作成の『備中高松城水攻の図』（池田家文庫 T 12-32）には、平山村のすぐ上に「次丸本陣」とある。また作成者、作成年月日不詳の『備中国高松水攻図』（ＫＭ 391/3）には和井元村と稲荷村の間に位置する平山村に「御次丸本陣　城ヨリ廿三丁」と書かれており、岡之鼻陣跡の位置とおおよそ合致する。

1965 年に岡山県教育委員会が刊行した『岡山県遺跡地図』、1983 年に岡山市教育委員会が刊行した『岡山市埋蔵文化財分布地図』、1985 年に文化庁が編集した『全国遺跡地図　33　岡山県』では包蔵地として周知されていない。1987 年に刊行された『図説　中世城郭事典　三』では、池田誠が羽柴秀勝との関わりを示した。池田は「天正十年高松城水攻之図」に「御次丸本陣」という記載を見出し、さらに『近世日本国民史』に「信長第四子にして秀吉の養子羽柴秀勝は五千人を率いて平山村へ陣し」という記述があることから、岡之鼻陣跡を秀勝陣所として位置比定したと考えられる。2003 年岡山県教育委員会刊行の『改訂　岡山県遺跡地図』には名称未定で陣跡とされ「高松城水攻めの際の陣城」とする概況のみが記されている。　（上栫）

写真 161　平坦面と妙義山古墳（南から）

393　備中高松城跡（びっちゅうたかまつ）　　岡山市北区高松　　＜国指定史跡＞　地図 23 右

立地　備前と備中の国境付近を南流する足守川左岸に広がる沖積平野に立地する。ここは備中国の東端に位置し、備前まで２㎞余りと国境付近にあたるだけでなく、西国の東西の中間地点にもあたる。城内の標高は７ｍ前後、比高は１～２ｍであり、かつて城跡は旧河道や沼地に囲まれていたと考えられる。岡山市北区足守から庭瀬に至る足守川下流域の両岸には、南北約 11㎞にわたって北から宮路山城、冠山城、高松城、加茂城、日幡城、松島城、庭瀬城の七城を要所に配置することで、毛利氏は防衛ラインを形成し、備前との国境及び宇喜多氏、ひいては上方の織田勢に対して防御を固めた。

なかでも高松城は天正 10（1582）年には織田信長から中国計略の命を受けた羽柴秀吉が毛利氏と激しく攻防を繰り広げた備中戦役の最前線となった。周辺の山頂及び丘陵頂には蛙ヶ鼻陣跡、石井山陣跡、御崎山陣跡、龍王山陣跡、八幡山陣跡、大崎城跡などの陣城跡が高松城跡の周りを取り囲むように置かれたほか、城跡から南東 900 ｍの蛙ヶ鼻を起点として、高松城跡から西 1.4㎞にある岡山市北区福崎の足守川沿いまで水攻め築堤跡が延長約 2.5㎞にわたって弧状に築かれた。

概要　城域は東西 160 ｍ、南北 390 ｍと大規模である。城跡は北西から南東にかけて弧状に広がる微高地上に築かれており、その周辺は旧河道や沼地に囲まれていたと考えられる。城跡周辺には「本丸」「城南」「城ノ下」「東沼」「北沼」「大池」「西沼」「大沼」「沼田」「八反堀」などの小字が残っていることから、おおよその縄張りを推定することができる。「伝高松古城の図」（文献 132 高田 1965）によると、微高地の北西側に土壇をもつ本丸、中央部分に二の丸、南東側に三の丸があり、これらを取り囲むように微高地の北側には堀又は低湿地を挟んで家中屋敷があるほか、微高地の周辺は沼地に囲まれていることが推定されている。現在、本丸と二の丸は高松城址公園、三の丸や家中屋敷の辺りは宅地、田畑などに利用されている。

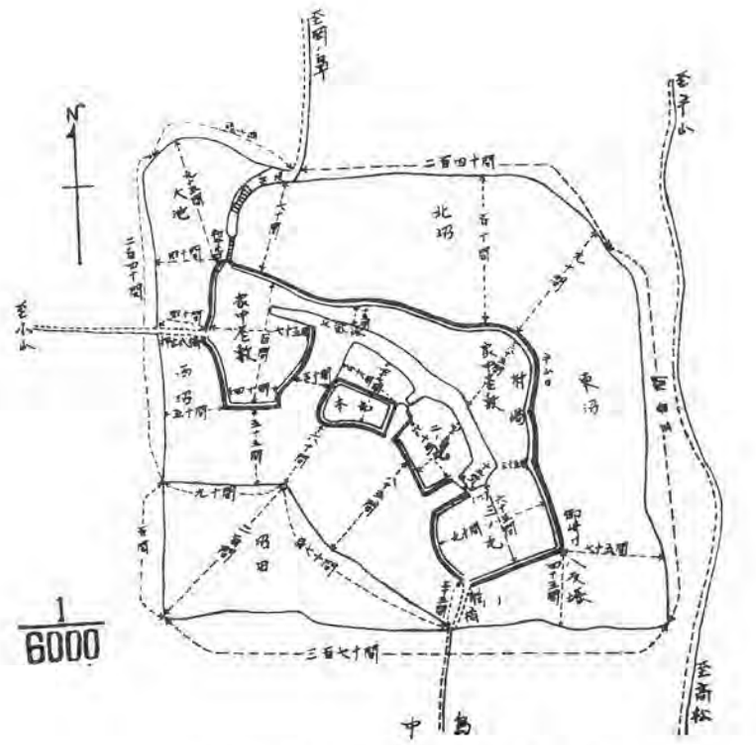
本丸跡と二の丸跡の縁辺は 1975 年に岡山市教育委員会と岡山市遺跡調査団、三の丸跡の南側は 1997 年度に岡山市教育委員会によって発掘調査が実施された（文献 185・186　岡山市教育委員会 1976・2000）。本丸跡は一辺 100 ｍ前後の方形を呈し、標高 7.7 ｍ、比高 1.8 ～ 2.3 ｍである。本丸跡土壇外周縁では捨石が確認されている。微高地の末端局部付近に設けられた捨石は、旧自然堤防の微高地を利用して城郭を構築するにあたり、城郭構造の基底部の崩壊や浸食を防ぐための工作物と考えられている。本丸跡と二の丸跡の間は幅 50 ｍ前後の堀で区切られている。二の丸跡は東西 100 ｍ、東辺 80 ｍ、西辺 60 ｍの梯形を呈し、標高５～６ｍである。周縁部では捨石は設けられていないことが確認された。二の丸跡と三の丸跡との間は幅 20 ｍの堀で区切られている可能性がある。三の丸跡は一辺 140 ｍ前後の不整方形を呈する。三の丸跡の発掘調査では弥生時代、古墳時代、中世、近世の遺構・遺物が見つかった。特に三の丸跡の南側では城郭の外周に掘られた堀と推定される溝８・９、その南東側は湿地であることが確認された。加えて、『萩藩閥閲録』には城内に「木屋」を急造したことが記されている。

また、水攻め関連遺跡として、水を堰き止めたと考えられる高松城水攻め築堤跡（岡山市北区立田・高松・福崎）、鳴谷川を堰き止めて峠を切り開く工事を行った高松城水攻め鳴谷川遺跡（同市北区長野）があげられる。さらに近隣には城主清水宗治の首塚や胴塚、自刃の地、「ごうやぶ」遺跡などの縁の場所がある。このうち、首塚については、明治 42（1909）年に和気房右エ門氏らが発掘し、骨片、

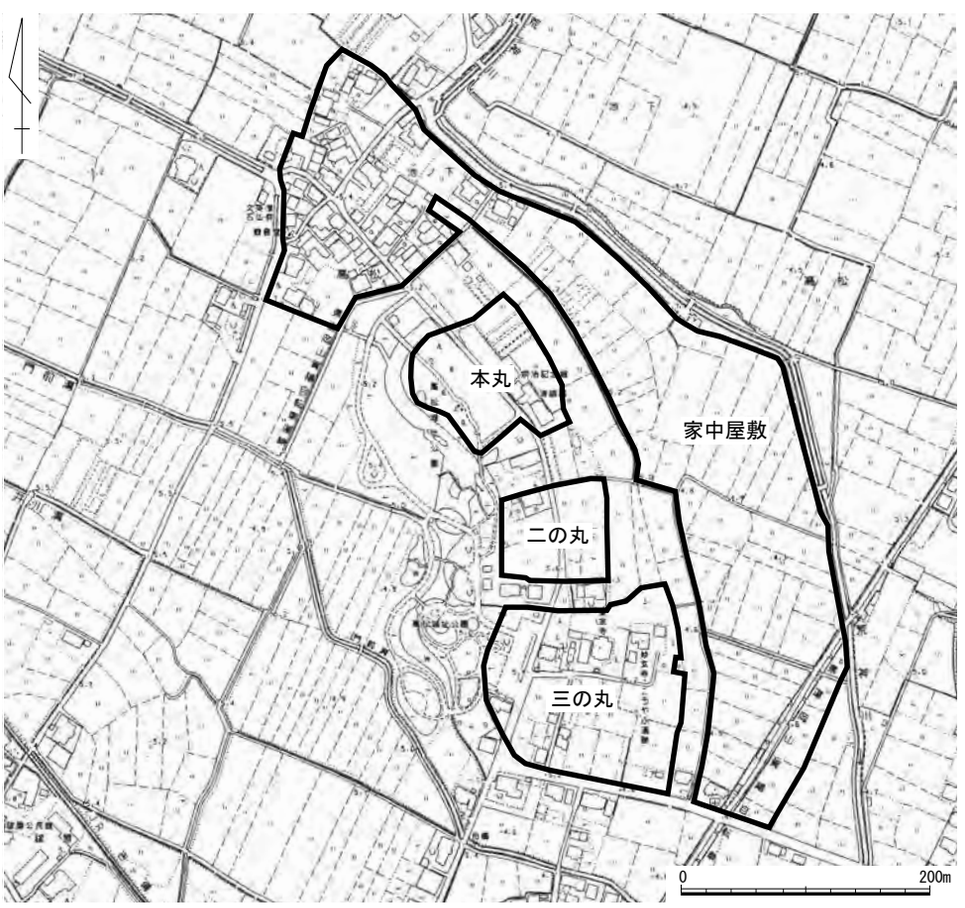
素焼の酒盃、懐剣、擂鉢、首瓶などが見つかったようである。

遺物としては、本丸跡と二の丸跡周辺では瓦類、灯明皿、陶磁器、木製食器、建材、文英の石仏、小石仏、五輪塔、弥生土器、土師器、須恵器などがある。なかでも本丸跡南側で見つかった 1590 年に比定される五三の桐文様の軒丸瓦は注目される。

このほか、高松地区やその周辺で採集された遺物のうち、高松城関連の瓦や陶磁器がある程度含まれる。本丸跡や三の丸跡で採集された近世初頭の瓦の整理によって、天正元（1573）年からの清水宗治期に葺かれて



第 330 図　高松城図　原図：高田馬治

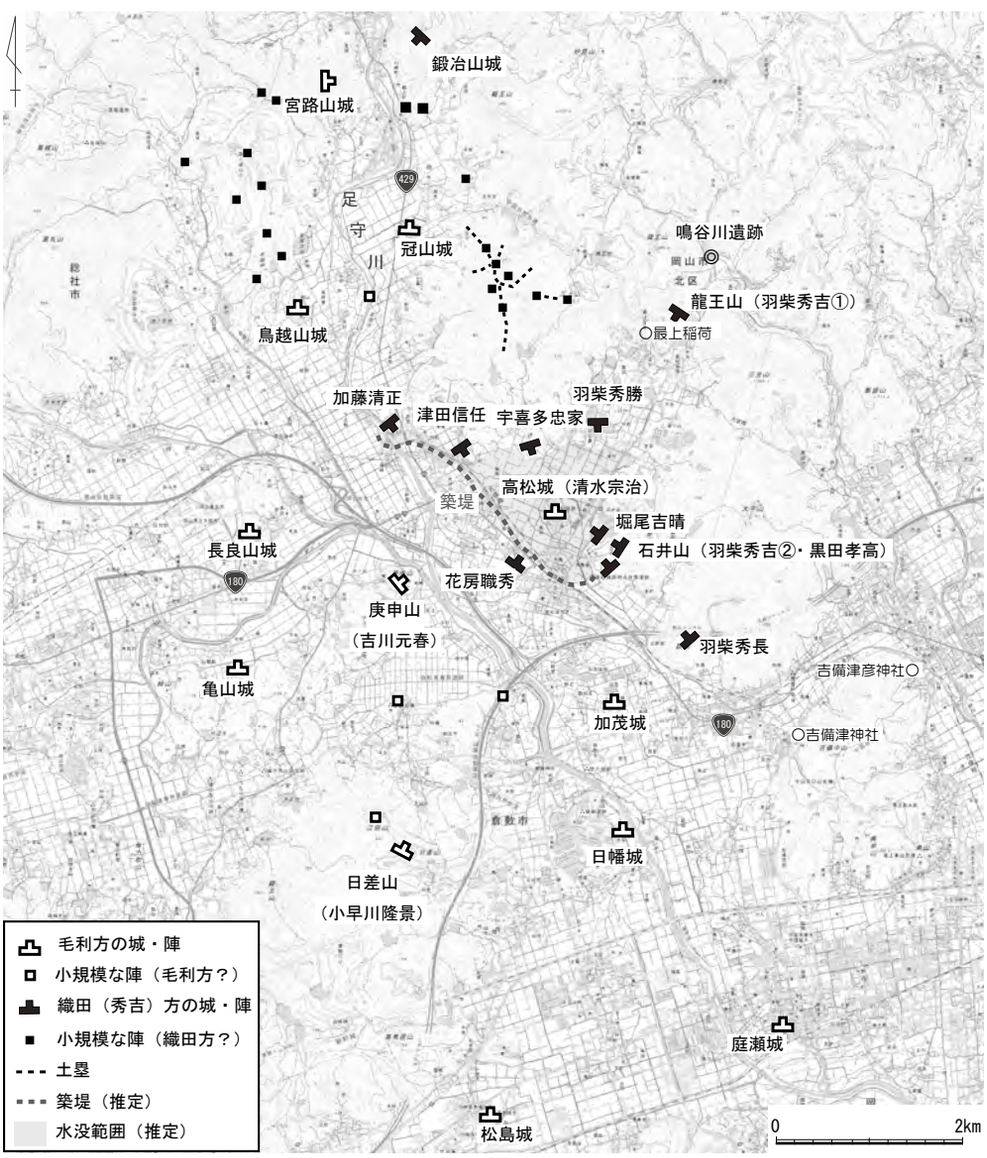


第 331 図　備中高松城跡の推定城郭域（1/6,000）　文献 186 をもとに作成

いた確実な瓦はなく、仮に瓦葺き建物があったとしても本丸の南側の一画に限定的であった可能性があること、天正 10（1582）年を経て続く花房正成期の瓦は本丸跡を中心に認められること、慶長 5（1600）年の関ヶ原の合戦を経た花房職之期に瓦が膨大に増え、瓦葺き建物が飛躍的に進んだことなどが示唆されている（文献 187）。なお、二の丸跡や家中屋敷跡では瓦は採集されていないようである。

文献・伝承　備中高松城は天正年間以前、三村氏の武将であった石川氏によって築城されたと伝わる。その後、石川氏の娘婿となった清水宗治が城主となった。

天正 10（1582）年、織田信長は西国の毛利氏を制圧するため、羽柴秀吉を総大将として高松城攻めを進めた。同年正月下旬、小早川隆景は備前との国境を守る七城の諸城主を備後の三原城に招集し、信長の中国攻めに対して警戒を命じるとともに、順次勤番する手立てなどを評議した。3 月 15 日、秀吉は備前に出向き、高松城攻めに先立ち蜂須賀正勝と黒田孝高を使者として送り、宗治に備中・備後二か国を与えることを条件に味方するように交渉したが、宗治は承諾せず、毛利氏に忠義を尽くした。同年 4 月上旬、秀吉は軍勢を整え、高松城から北西に 3.3㎞ほど離れた備中国賀陽郡足守（岡山市北区足守）へ先陣として宇喜多勢を送って毛利勢と対峙した。そして、4 月 14 日に龍王山に陣を



第 332 図　備中高松城水攻め陣営配置図（1/80,000）　文献 117、147 をもとに作成

置いた秀吉は、激しい攻防の末、周辺の毛利方の諸城を攻略し、やがて冠山城を落城、宮路山城を開城させた。それから秀吉は龍王山から石井山に陣を移し、周辺に羽柴秀長、堀尾吉晴、黒田孝高、仙石秀久、羽柴秀勝、宇喜多忠家、津田信任、加藤清正らを布陣させ、５月には高松城を完全に包囲した。その間、４月 27 日、秀吉は高松城を包囲し、多くの軍勢をもって攻略しようとしたが、討死は数百人に達したと伝えられる。また、周辺では５月３日ごろには鴨庄城の東の丸が落ち、間もなく日幡城も落城した。

一方、高松城は沼に囲まれた自然の要害で難攻不落とされ、小早川隆景の援護を得て応戦し、堅守していた。秀吉は兵の消耗を避け、長期戦に持ち込むべく、高松城の南面の蛙ヶ鼻（岡山市北区立田・高松）から足守川（同市北区福崎）まで約 2.5㎞にわたって、幅 12 間、高さ４間の堤を築いたうえ、足守川の水を引き込んで堰き止めるだけでなく、龍王山北東麓の峠を開削して鳴谷川からも導水することで、高松城を水攻めする策を講じた。ちょうど梅雨の時季とも重なり、日ごとに水かさが増した結果、高松城の周囲は水没していった。これに対し、毛利勢は岩崎山に吉川元春、日差山に小早川隆景が陣を構えたほか、天神山、寺山、服部山、幸山にも配置され、さらに後詰めとして毛利輝元が猿掛城に入ったが、高松城は通路を断たれて孤立していった。そこで、毛利氏は安国寺恵瓊を秀吉のもとに遣わして講和交渉に入った。秀吉は「伯耆は矢走川に限り、備中は河辺川に限る」と主張したほか、毛利側が中国から撤退した後に清水長左衛門（宗治）の切腹を要求するという厳しい条件を出したが、輝元は聞き入れることができずに交渉は行き詰まった。

天正 10（1582）年６月２日、京都の本能寺では謀反を起こした明智光秀によって織田信長が討たれた。この本能寺の変を契機に高松城水攻めは急展開を迎える。信長の横死を知った秀吉はただちに講和を結ぶべく、領地の譲歩や城兵の助命などを条件に恵瓊を介して毛利氏と再び交渉を進めた。そして、６月４日に宗治が自刃することで和睦が成立し、高松城は開城となった。その直後、秀吉は光秀を討伐するため、高松から引き上げて京に向けて軍勢の大移動を行い、天下統一への道を切り開いていった。

写真 162　本丸跡（南東から）

写真 163　三の丸跡溝９（北から）
岡山市教育委員会提供

高松城水攻めの末、和睦となってからは、高松城には秀吉方の杉原七郎左衛門尉が城番として在城した。その後、宇喜多氏の武将である花房正成が居城し、城を大幅に改修していったとされる。慶長５（1600）年の関ヶ原合戦後はかつて宇喜多氏の武将だった花房職之が徳川氏の旗本として入部した。

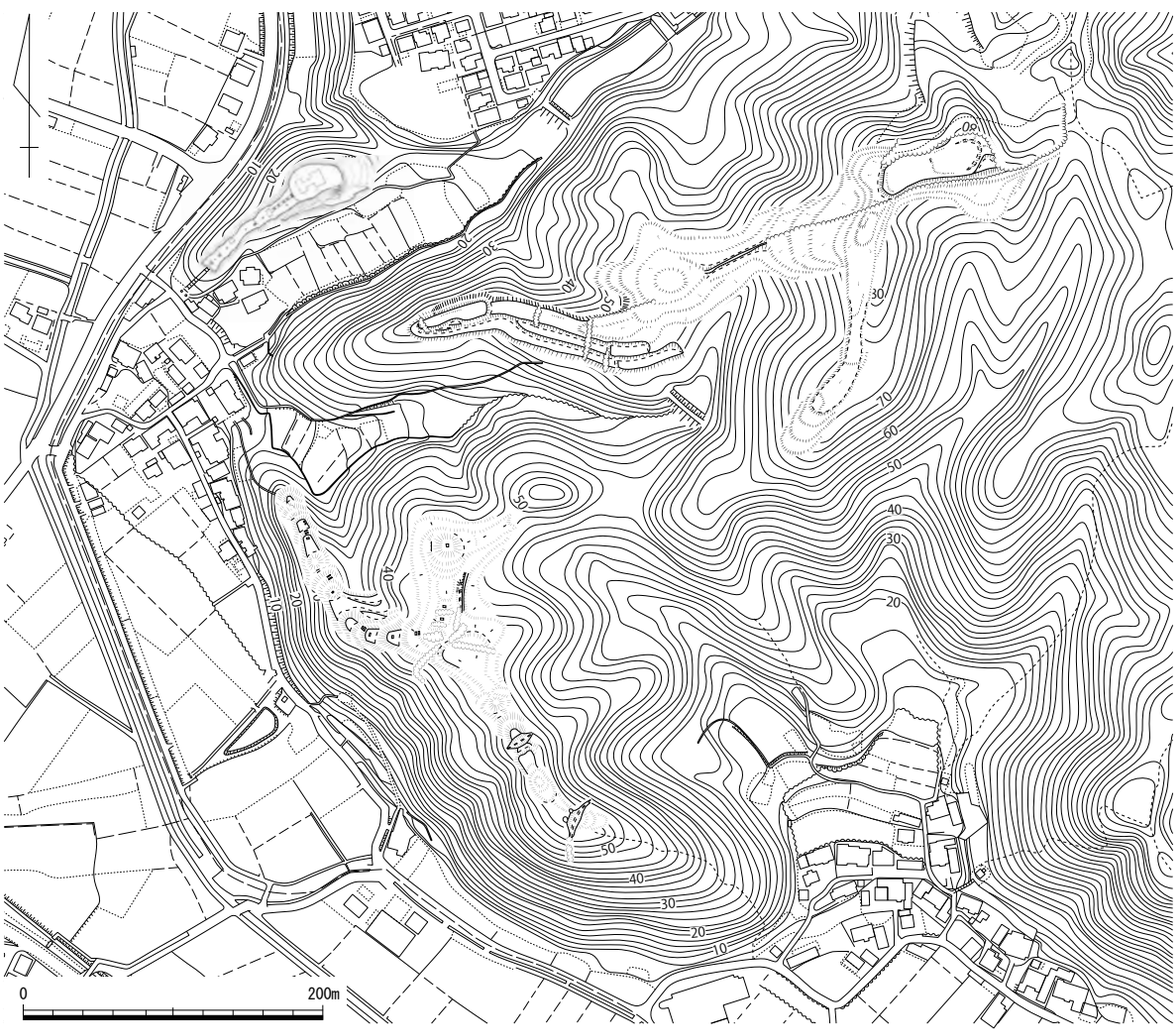
高松城や水攻めに関わる文献は多いなか、毛利氏と備中南部の国人層の動向については『萩藩閥閲録』に詳しく記されているほか、高松城水攻めの様子は『中国兵乱記』や『陰徳太平記』などで伝えられている。（米田）

394　御崎山陣跡（みさきやま）　　岡山市北区立田　　地図 23 右

立地　足守川左岸の標高約 26 m、比高約 19 mの丘陵頂部に立地する。近隣には約 250 m東に石井山陣跡、約 350 m南東に蛙ヶ鼻陣跡が位置し、約 500 m西の眼下に備中高松城跡を望む。

概要　城域は東西約 140 m、南北約 40 mで、中規模でも小さい。丘陵頂部に御崎宮が祀られており、地形は部分的に改変されている可能性が高い。神社の参道から本殿に至る尾根上の狭長な平坦面は曲輪と考えられる。丘陵頂部にある本殿と拝殿周辺の曲輪はおよそ東西 35 m、南北 20 mで、地形に沿

第 333 図　御崎山陣跡縄張り図（1/2,000）



第 334 図　御崎山陣跡、石井山陣跡、蛙ヶ鼻陣跡縄張り図（1/5,000）　作図：和田　剛に加筆

うように楕円形を呈する。曲輪の縁辺に土塁は確認できない。頂部から尾根上南側の参道にかけては延長 30 m、幅８m前後の狭小な曲輪が２面、南端に小規模な曲輪が確認できる。頂部の南斜面には帯曲輪が２面あり、犬走りで繋がる。一方、備中高松城跡に面した北斜面には切岸以外に防御施設は確認できない。さらに頂部北東側の鞍部には東西の谷部が繋がるように尾根筋が大規模に切られている。この切り通しは現状で岩盤が露出しているため、大部分は後世の改変によるものと考えられるが、切り通しの南西側の肩口は堀切の名残をとどめている可能性もあろう。全体的に見て、縄張りは狭長の曲輪を配置する程度で、防御は堅くなく、臨時的な施設と見受けられる。

文献・伝承　『中国兵乱記』によれば、天正 10（1582）年の備中高松城の水攻めの際に、織田方の堀尾茂助が陣を張ったと伝わる。（米田）

395　石井山（いしいやま）陣跡　　岡山市北区立田　　地図 23 右

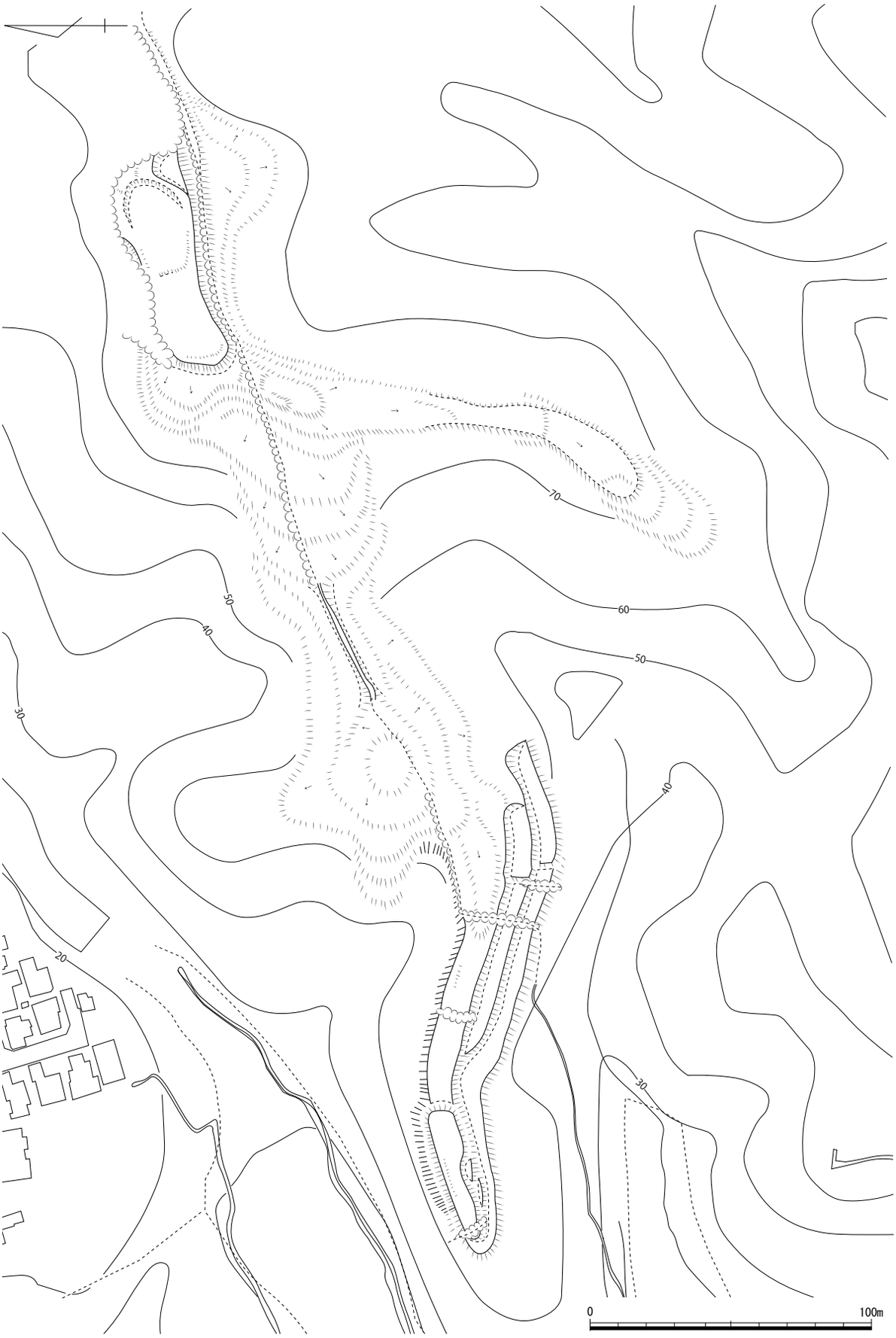
立地　足守川左岸の標高約 80 m、比高約 70 mの山頂部に立地する。隣接して西約 250 mに御崎山陣跡、同一山塊には本陣跡から谷を挟んで南側 270 mの頂部に蛙ヶ鼻陣跡が接する。さらに、西の眼下には足守川下流域の平野部を見下ろし、北西約 800 mに備中高松城跡が位置する。

概要　縄張りは山頂部から南側と西側に延びる尾根上に曲輪を連ねる構造をもつ。城域は東西 450 m、南北 190 mと大規模である。頂部には長大な曲輪が３面連続して配置されている。最頂部の曲輪は東西 120 m×南北 30 mと大規模で、北辺は幅 10 m程度、高さ 30㎝の低い土塁状を呈する。また、山頂部の東寄りには「太閤岩」がある。さらに南側の尾根にかけては、造作のあまい狭長の曲輪が２面連続しており、それぞれ東西 15 m×南北 70 m、東西 15 m×南北 60 mの規模を有する。西側の尾根には大小の曲輪が３面連続する。頂部の曲輪は東西 50 m×南北 30 mであり、備中高松城がある北西の眺望が良好である。また頂部の南西には小規模の平坦面があり、清水宗治の首塚が祀られている。さらに西側には東西 50 m×南北 20 mの長方形の曲輪、西端に東西 70 m×南北 15 mの狭長の屈曲した曲輪が連なる。西端にある曲輪の北辺には幅 10 m、高さ 50㎝の土塁状の高まりがある。また、西側尾根の南斜面には狭長の平坦面が２段程度あり、谷部の防御を固める。

文献・伝承　『桂岌円覚書』によれば、天正 10（1582）年の高松城攻めの際、龍王山、高松城水攻陣跡から移り、同年５月８日より羽柴秀吉が陣を敷いたとされる（文献 147　乗岡実「備中高松攻めの陣城群」『織豊系城郭の陣城』2012 年）。（米田）

写真 164　石井山陣跡から備中高松城跡を望む（東から）

写真 165　清水宗治の首塚（南から）



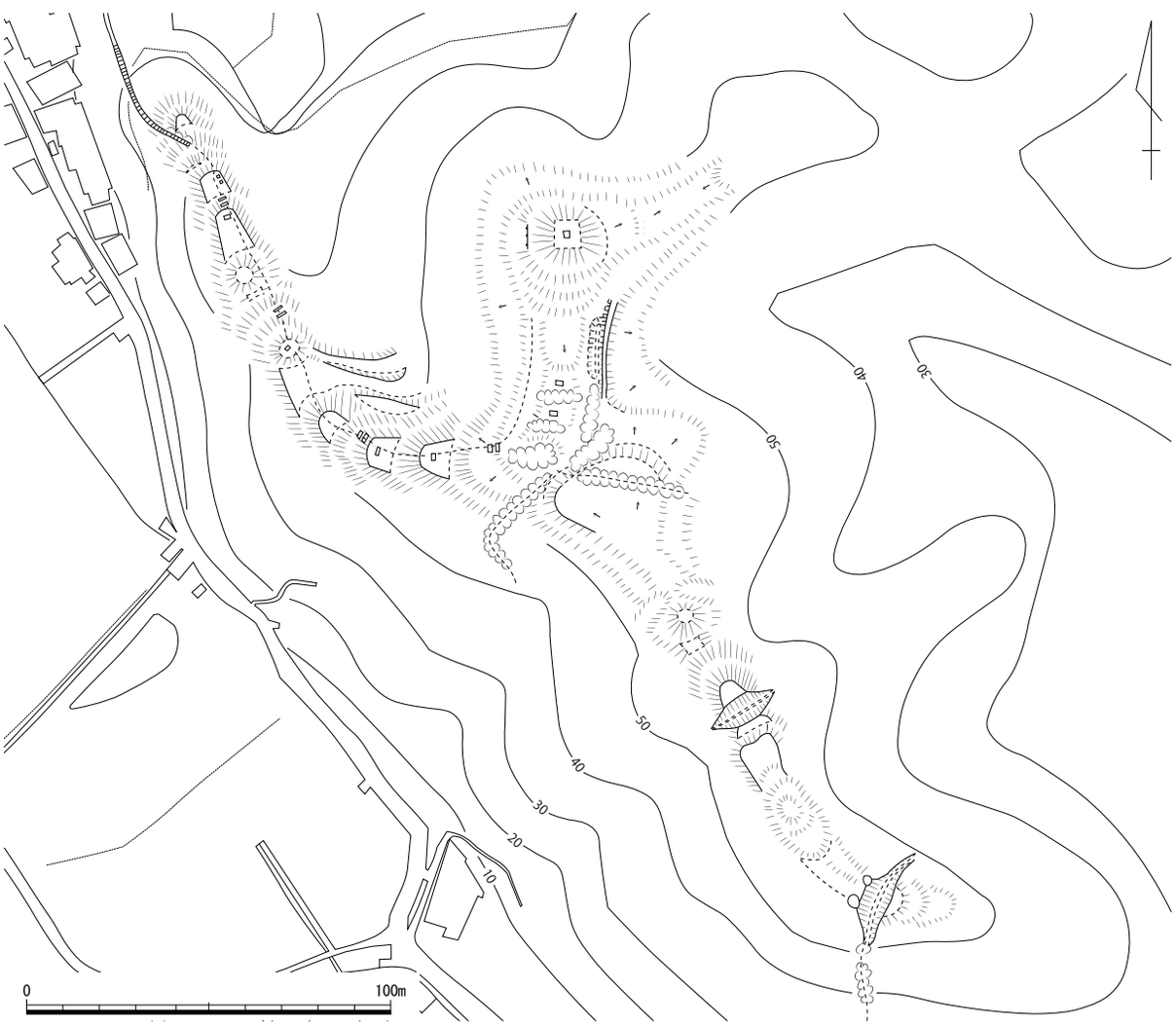
第 335 図　石井山陣跡縄張り図（1/2,000）　作図：和田　剛

396　蛙ヶ鼻（かわずがはな）陣跡　　岡山市北区立田　　地図 23 右

立地　足守川左岸の標高 56 m、比高 55 mの山頂部に立地する。同一山塊には本陣跡から谷を挟んだ北 270 mに石井山陣跡が近接するほか、南麓 100 mには備中高松城水攻め築堤跡が位置する。

概要　縄張りは頂部の曲輪２面を中心とし、北西と南東に延びる尾根にそれぞれ小曲輪を連続させる構造をもつ。城域は東西 330 m、南北 110 mと大規模である。頂部にある北側の曲輪は東西 30 m×南北 80 mの長方形を呈する。曲輪の北辺は地山を３mほど高まりになるように残し、その南側を平坦に造成している。また頂部の南側の曲輪は東西 35 m×南北 70 mで、平面形は屈曲した長方形を呈する。頂部から北西に延びる尾根は長さ 10 ～ 30 mの小曲輪を９面連続して配置しており、北西 1㎞の平野部には備中高松城跡を良好に望むことができる。一方、南東に延びる尾根には古墳１基の高まりと曲輪３面が連続しており、尾根半ばの鞍部と東端の２か所に堀切を設けて、守りを固める。

文献・伝承　「桂岌円覚書」は天正 10（1582）年の高松城攻めの際、羽柴秀吉の陣と伝える（文献 147　乗岡実「備中高松攻めの陣城群」『織豊系城郭の陣城』2012 年）。　（米田）



第 336 図　蛙ヶ鼻陣跡縄張り図（1/2,000）　作図：和田　剛

397･398 高松（たかまつ）城水攻め築堤跡 岡山市北区立田・高松原古才・福崎 ＜国指定史跡＞ 地図23右・左

立地 足守川左岸に広がる平野部東端に位置し、標高は５m前後である。付近では北隣の山塊には蛙ヶ鼻陣跡、石井山陣跡、御崎山陣跡が近接するほか、北西約900 mには備中高松城跡が位置する。

概要 備中高松城水攻め築堤跡は、天正10（1582）年に織田氏と毛利氏が戦った「高松の役」において、織田信長の命を受けた羽柴秀吉が高松城を水攻めするために築いたと伝えられる堤防遺構である。堤防は岡山市北区立田の通称「蛙ヶ鼻」を起点とし、足守川が流れる岡山市北区福崎付近までの延長約2.5㎞にわたって、幅12間、高さ4間の規模で築かれたと伝えられている。現在は岡山市北区立田に所在する「蛙ヶ鼻」の築堤跡と岡山市北区福崎の「副堤跡」が国史跡に指定されている。

「蛙ヶ鼻」付近では北側の丘陵裾部を起点として現状で幅15.2 m、高さ4.5 mの築堤跡が南西へ延長24.4 mほど残存するほか、「蛙ヶ鼻」周辺から国道180号付近に広がる水田のなかに、堤防跡の基底部と考えられる弧状に延びる地割りが幅20 m、延長250 mにわたって確認できる。JR備中高松駅の南側から足守川付近までは市街化が著しく、築堤の痕跡を現認することが難しいが、JR吉備線や国道180号線付近において断続的に認められる標高５m台の微高地が堤防の一部に利用された可能性も指摘されている。

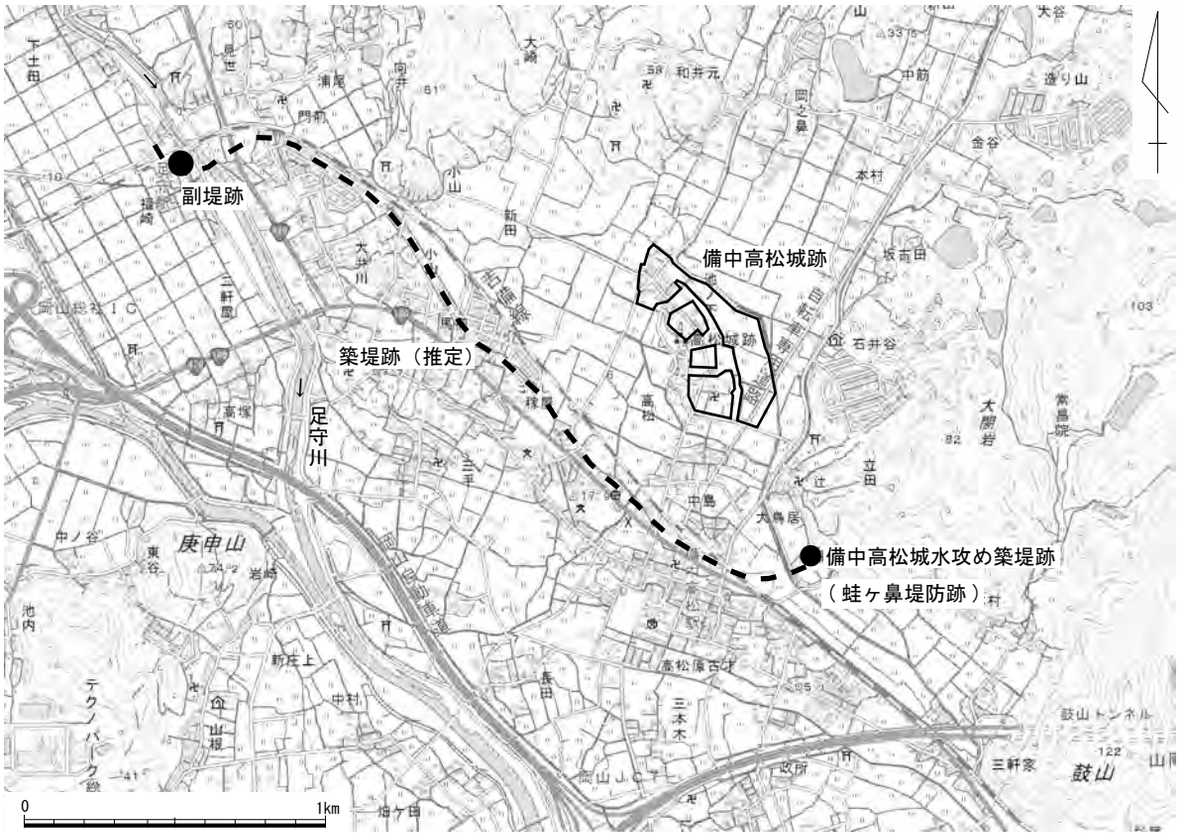
1998・2002年度に実施された岡山市教育委員会による「蛙ヶ鼻」の堤防跡の確認調査（文献188岡山市教育委員会『備中高松城水攻め築堤跡』2008年）では、Ｔ１～３では多数の俵（土嚢）を用いて築堤が造成されたこと、Ｔ４では筵状の編み物が敷かれたうえに盛土されていること、Ｔ５では築堤造成土と時期不明の多数の杭などが確認された。Ｔ１からは基底部の俵痕跡から備前焼壺片、石灰岩製の五輪塔片が見つかり、時期は15～16世紀頃とされる。調査の結果、当初の築堤幅は26.5 mと推定され、底面は標高3.5 m前後、現存する堤防跡の最高点は標高8.8 mであるため、築堤の高さは５m前後あったと推定された。なお、備中高松城跡の本丸の最高点は標高7.7 mである。

一方、岡山市北区福崎に所在する「副堤跡」は、JR吉備線足守駅南隣の足守川西岸に築かれている。「副堤跡」は幅5.2 m、高さ1.4 mの堤防遺構が延長10 mほど残存しており、主軸はＮ－60°－Ｗで、足守川の現在の流れに対してほぼ平行する。

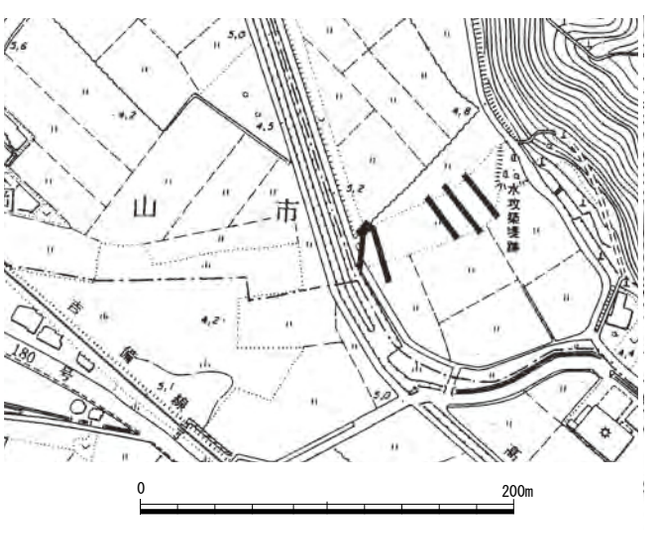
このほか、備中高松城水攻めに関連する遺跡としては、鳴谷川を堰き止めて峠を切り開く工事を行った高松城水攻め鳴谷川遺跡（岡山市北区長野・県史跡）がある。また、備中高松城跡から北東約3.2㎞に位置する総社市千引遺跡では、備中高松城水攻め築堤跡の堤防跡と同規模の土塁が確認されており、築堤の一部であることも検討されている。

文献・伝承 備中高松城の水攻めについては、（天正10年）10月18日の羽柴秀吉披露状（備中史料番号195）などの限られた文献史料で窺えるのに対して、数多くの軍記物や関連研究がある。なかでも、『太閤記』には堤防が蛙ヶ鼻を起点に足守川まで約2.6㎞にわたり、幅12間、高さ4間の堤防を12日間で築いたと伝えられている。また、「蛙ヶ鼻」の築堤跡の南西側、JR吉備線備中高松駅の北側には「土手後」の字名が認められ、築堤との関連が示唆される。（米田）

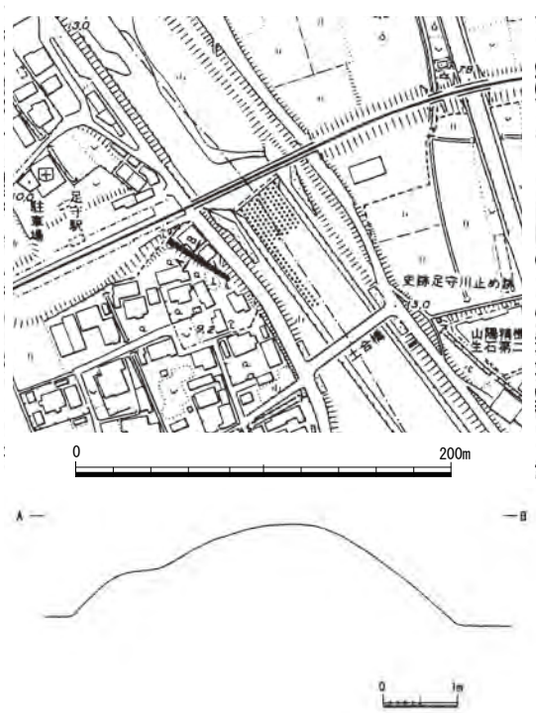
写真166 備中高松城水攻め築堤跡（南から）



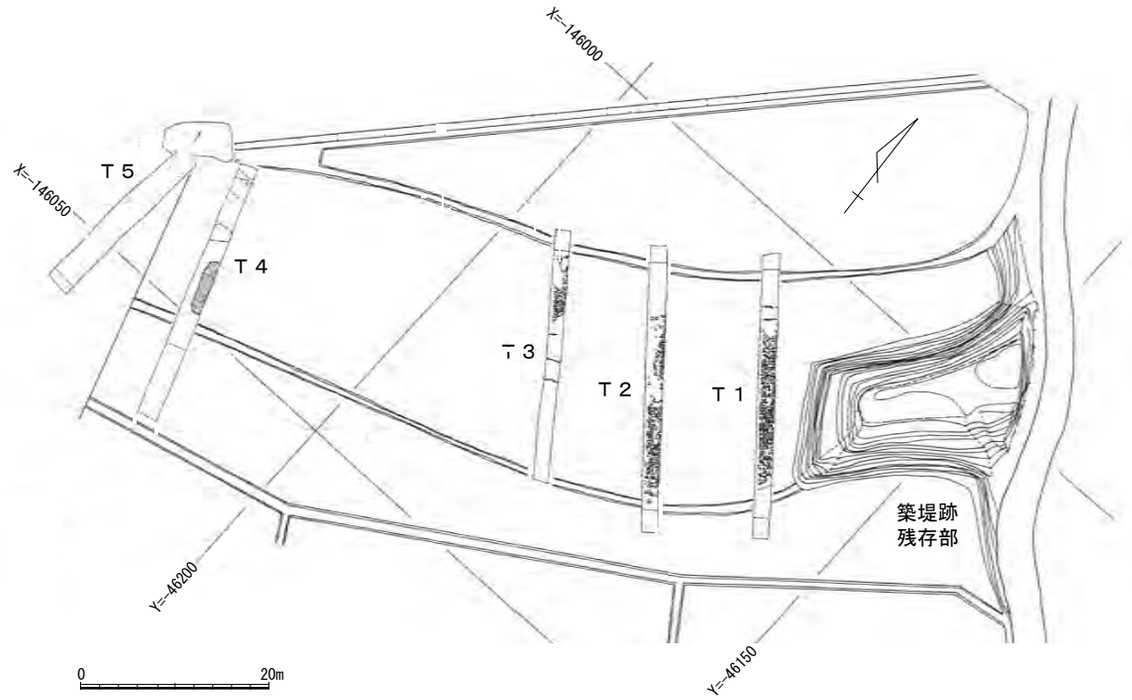
第 337 図　備中高松城跡、備中高松城水攻め築堤跡、副堤跡の位置図（1/25,000）



第 338 図　備中高松城水攻め築堤跡の調査区位置図
（1/4,000）



第 339 図　副堤跡の位置図（1/4,000）、
断面図（1/100）



第 340 図　備中高松城水攻め築堤跡の調査区区域図及び T1~5 平面図（1/800）
文献 188 をもとに作成

写真 167　備中高松城水攻め築堤跡（南東から）

写真 168　副堤跡（南東から）

写真 169　T1 俵跡　岡山市教育委員会提供

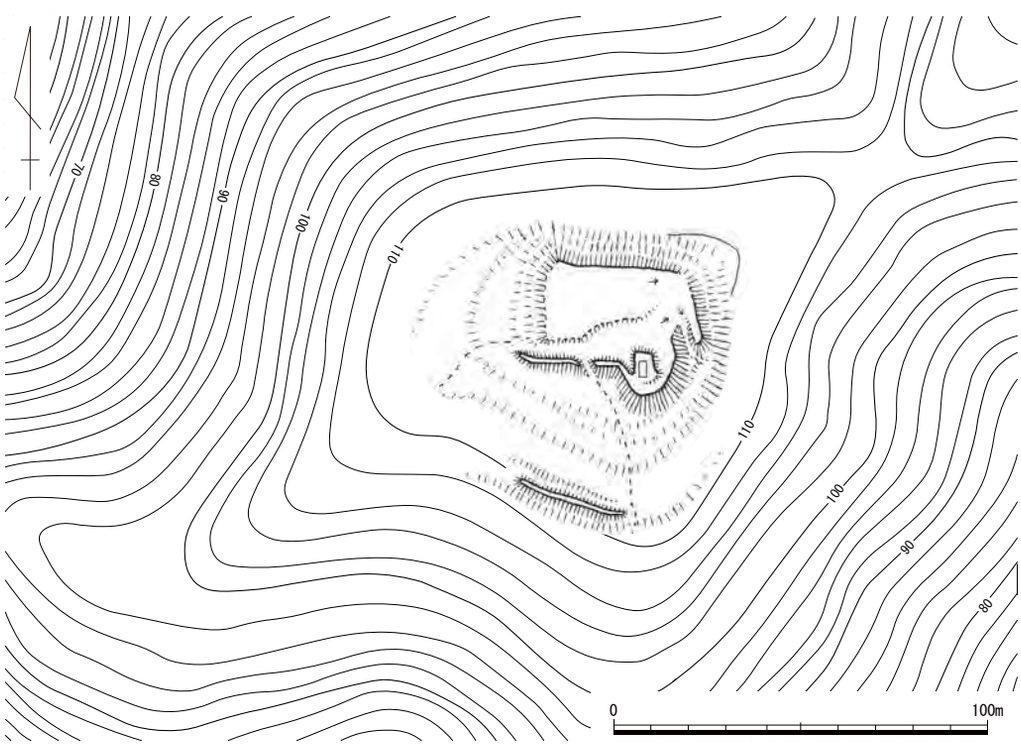
写真 170　T1 土層断面　岡山市教育委員会提供

399　鼓山城跡（つづみやま）　　岡山市北区吉備津・立田　　地図 23 右

立地　鼓山山頂に位置する。北西約 1.2㎞の山頂部には羽柴秀吉の石井山陣跡があり、その南麓に蛙ヶ鼻築堤跡が確認できる。また、南西約 1 ㎞の水田域には加茂城跡が位置し、遠望できる。

概要　山頂を削平して曲輪Ⅰを造成する。曲輪Ⅰの北・東辺はわずかに岸を切るが、西辺は緩やかに下がる。南辺には土塁を造成している。土塁のすぐ北側は頂部平坦面の北側より下がっていることから、土塁の造成は削り出しによると推察する。土塁東端は南に突出しているが、この部分は鼓山３号墳に取り付いていることから、古墳を突出部として利用したと考えられる。突出部と曲輪Ⅰ東辺との間には、東辺と平行するスロープの虎口が認められる。スロープの東辺は土塁状を呈する。曲輪Ⅰ土塁の南側緩斜面を 30 m程下った地点には、曲輪南辺土塁と近い方向の土塁が確認できる。この土塁の北側には横堀状の窪みがあり、削り出しにより土塁を造成したことが窺える。明確な防御施設は曲輪Ⅰの南側に設えた二段構えの土塁のみで、南東に延びる尾根筋からの侵入に備えたことが窺える。

文献・伝承　『中国兵乱記』によると、天正 10（1582）年３月 12 日に備前入りした羽柴秀吉は、15 日に備前一宮に着陣するが、その際に羽柴秀長が板倉郷の鼓山に陣を敷いたとする。「備中国高松城水攻図」などに「鼓山　陣所東西十九間南北十八間□見切場豆腐ヶ平ト名付、東西二間半、南北一間半、秀吉公始此山二陣取給ヒ、毛利方ノ旗下五ヶ城ヲ見切テ、攻城ノ策ヲ運レ給フト云」、「初ハ秀吉此山本陣アル後、龍王山本陣営有アリ」という記述がみえ、秀吉が最初に本陣を構えた場所とされる。　（上栫）



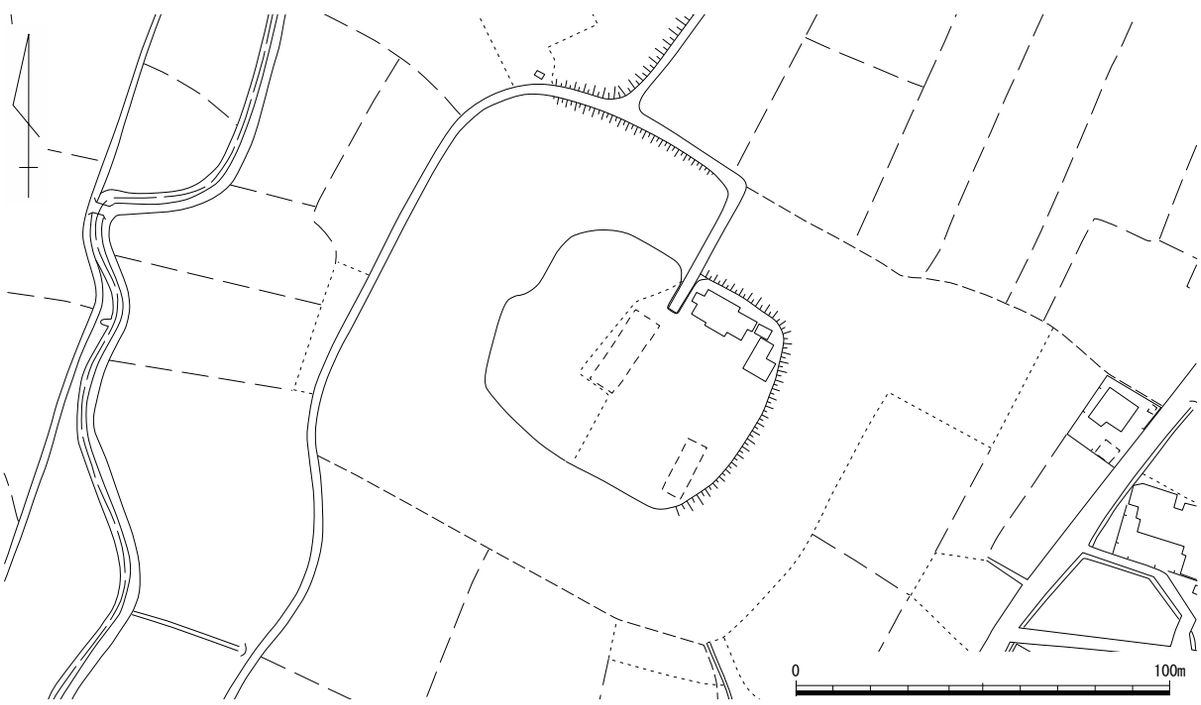
第 341 図　鼓山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

401　伝賀陽氏館跡（でんかやし）　　岡山市北区川入　　＜県指定史跡＞　地図 27 右

立地　吉備中山の西裾付近に位置し、西側を足守川の旧河道が流れていたと推測されている。館跡を含む中山西麓には東山遺跡が所在し、調査で中世集落跡が確認された。300 m東に位置する真如院には宝治２（1248）年の胎内銘文をもつ木造阿弥陀如来立像があり、その銘文には「（前略）結縁衆加陽高親法師（後略）」とある。なお、寺域からは 12 世紀中葉頃の瓦が採取されている。

概要　南北 61 m、東西 76 mの長方形状の館地が残り、それ取り囲む幅 26 ～ 31 mの休耕田は周辺の田地より低く、堀の痕跡と推測される。館地の南端中央付近では高さ 1 m、幅 1 m、長さ 1 m程の高まりが確認でき、土塁の残痕と考える。昭和 11（1936）年刊行の『岡山市史』（第一）やその翌年刊行の『吉備郡誌』（中巻）には館跡南辺および東西両辺の南寄りで土塁の存在が記述され、その規模は南辺の西半が高さ 3.6 m、幅 7.2 mで、東半が高さ３m、幅９mであり、東・西辺は高 1.8 m、幅 3.6 mと報告されている。ただ、昭和 57（1982）年刊行の『岡山県の文化財Ⅲ』には、土塁の痕跡は南辺にわずかで、規模は高さ 1.8 m、幅６mとある。館地の北側には休耕田を渡る通路があるが、当初の遺構か判別できない。なお、堀跡の田地で岡山市教育委員会が確認調査を行い、堀の西コーナーを渡って館地に入る陸橋状施設が確認された。また、堀の底が現地表下 180㎝に位置することも判明している。

文献・伝承　『吉備郡誌』から、古老の口碑や吉備津神社に近接していること、城館跡の規模形式等をもとに、吉備津神社神官を務めた在地豪族賀陽氏の館跡と評価されたことが窺える。なお、『岡山市史』では賀陽屋敷館跡、『吉備郡誌』では賀陽城と呼称されるが、昭和 34（1959）年に伝賀陽氏館跡として県指定史跡に指定された。なお、遺跡所在地の小字は「城」で、付近一帯を「城廻り」と称する。　（上栫）



第 342 図　伝賀陽氏館跡平面図（1/2,000）

402・403　庭瀬（にわせ）城跡・撫川（なつかわ）城跡　　岡山市北区庭瀬・撫川　＜県指定史跡＞　地図 27 右

立地　足守川左岸及び法万寺川右岸の標高２～３ｍの平地に立地するが、中世には足守川河口に広がる沼沢地に立地し、臨海部にも近かったと考えられる。そのうえ、備中国の南東端、都宇郡撫川郷と賀夜郡庭瀬郷にまたがり、備前との国境付近に位置したほか、江戸時代には城跡の北側を岡山城下と支藩の鴨方を結ぶ鴨方往来が通っていたことから、水陸交通の要衝として重要な位置を占めていた。撫川城跡と庭瀬城跡はお互いに隣接しており、撫川城跡は西側、庭瀬城跡は東側にあたる。現在は堀跡を境にそれぞれ２つの城跡に分かれているが、かつては「庭瀬城」として一つの城跡であったとされる。周辺には北西約 2.7㎞に日幡城跡、西約 3.5㎞に松島城跡が位置する。

概要　撫川城跡は現在曲輪の中央に三神社が鎮座し、曲輪全体が撫川城址公園として利用されている。城域は東西 130 m、南北 80 mである。曲輪は東西 75 m、南北 55 mの長方形を呈し、北辺及び東辺では土塁の痕跡が部分的に確認できる。また、曲輪の外周には幅約 15 mの堀をめぐらす。曲輪の西、南北辺の一部には石垣が築かれており、特に曲輪西辺の石垣は残存状態が良好である。石垣は自然石を利用した野面積みで、その勾配は比較的緩い。石垣の上面は部分的に石材が露出しており、面が整っていない。このほか、曲輪の南辺中央は渡り土手を築いた出入口を設けている。

一方、庭瀬城跡は清山神社周辺に位置する。城域は東西 200 m、南北 200 mと推定される。江戸時代には慶長７（1602）年に庭瀬藩主戸川達安によって撫川城跡の東側に庭瀬藩陣屋が構えられ、「庭瀬城跡」の一部が改修された。また、城跡及び陣屋周辺は現代の市街化が著しい。そのため、城跡や陣屋跡の確認や両者の区別が難しいが、清山神社周辺の水路はかつての水堀、市街に細い路地が入り組む様子は陣屋の様子を残すと考えられる。

文献・伝承　撫川城跡は永禄２（1559）年に三村家親によって築かれたと伝えられる。そして、天正３（1575）年に三村氏が毛利氏に滅ぼされてからは毛利氏の出城となったと考えられる。

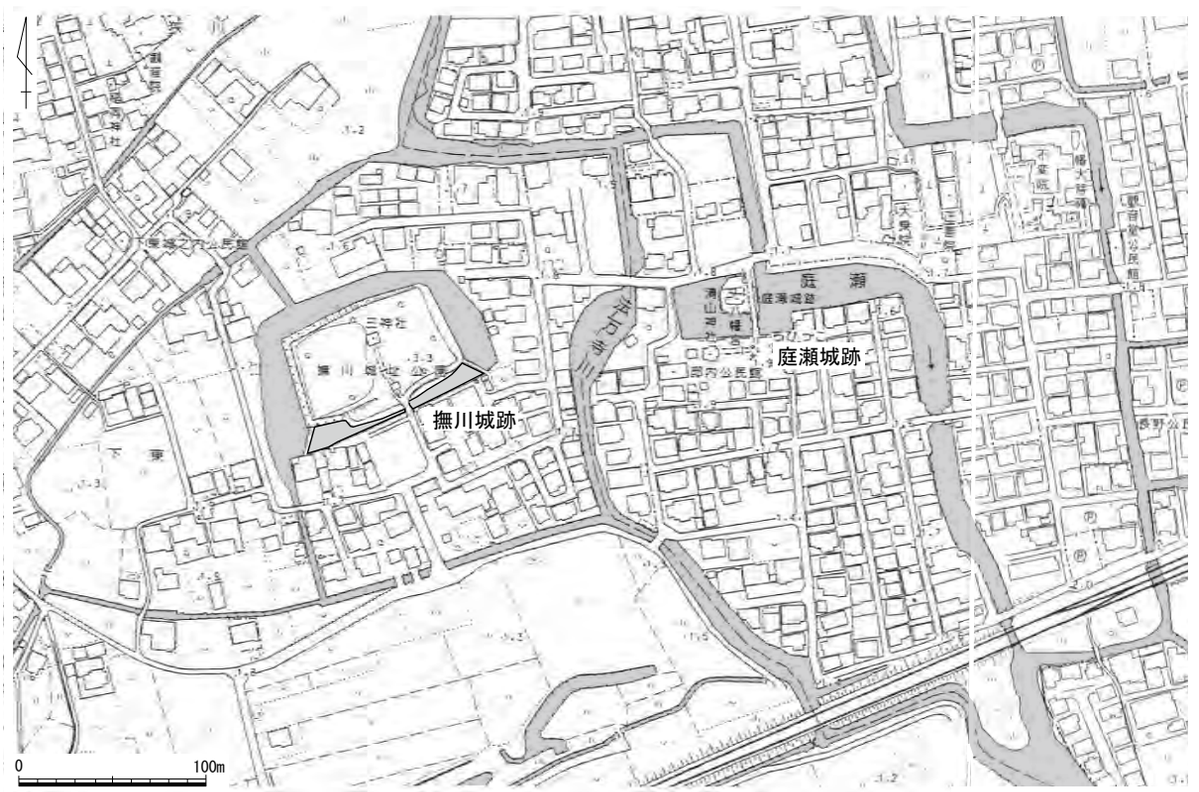
天正８（1580）年閏三月九日、小早川隆景の重臣である桂右衛門大夫景信が湯浅将宗・長井就安・栗原某に送った書状には、三月十三日に日幡・鴨・松島城の守備隊が辛川口に進軍したものの、作戦の不備で宇喜多軍に敗退した際、景信配下の庭瀬城衆と湯浅氏らの家来衆とが協力して今保に攻め込み、比類ない働きをしたことが記されている（史料 218）。また、天正９年十二月十二日、荒木田（村山）武親伊勢神宮の御師村山武親が作成した記録には、備中国の庭妹城の桂景信（右衛門大夫）を城主と記す（史料 260）。

「中国兵乱記」などによれば、天正 10（1582）年の備中高松城水攻めの際には「備中境目七城」の一つとして国境を守る毛利方の重要な城として位置づけられたが、織田方に攻められて落城し、宇喜多方の城となったと伝えられる。宇喜多領となってからは、その重臣である岡利勝が入城し、撫川城跡の曲輪と推定される「本壇」を整備したとされる。

延宝７（1679）年、名跡を継いだ戸川達富は旗本として、撫川城跡に知行所を置いた。この時、撫川城跡と庭瀬城跡の間にある堀を境に「庭瀬城跡」は２つに分けられ、東側の庭瀬城跡は一時廃城することとなる。その後、戸川家が改易されてから、しばらく庭瀬藩領は天領となるが、藩主が久世氏、松平氏、板倉氏と変わりながら陣屋は整備が加えられ、明治時代まで存続した。

関連地名としては、撫川城跡の北側に「城之内」、庭瀬城跡にある清山神社の南側に「邸内」、その

南東側に「西城丸」の字名が残る。また、安政４（1857）年に描かれた「古絵図写」を参考にすると、清山神社と公園周辺が「内屋敷」、「御馬場」、「庭園」を配置した「御殿」にあたるものと考えられる。また、清山神社の周囲には内堀、そらにその北側にある「表御門」前には外堀がめぐっていたことが窺える。このほか、「家中屋敷」「御蔵屋敷」「番所」「作業場」「馬屋」「勤番部屋」「鐘鐘堂」なども写実的に表現されており、堀や屋敷などの区画は現代の地割に踏襲されている部分も多いとみられる。（『吉備町誌』岡山大学教育学部内地域研究会　1973 年、『岡山県の文化財』（三）岡山県教育委員会 1982 年、文献 33・143 参照）　（米田）



第 343 図　撫川城跡・庭瀬城跡の位置図（1/4,000）

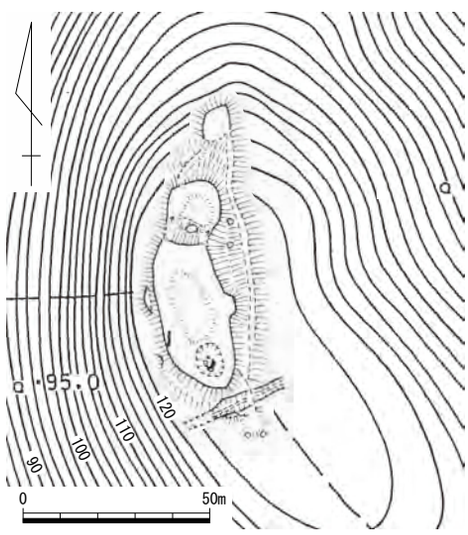
写真 171　撫川城跡 (南西から)

写真 172　庭瀬城跡［清山神社周辺］(西から)

404　宮内城跡（みやうち）　　岡山市北区吉備津　　地図 27 右

立地　備前と備中の国境にある吉備中山の北西側、茶臼山の北西頂部に立地する。標高は約 127 m、比高約 120 mで、北東から北西、西の眺望に優れる。近隣では北西 1.8㎞に鼓山城跡、北東 2.3㎞には辛川城跡が位置する。このほか、吉備中山の北麓には備中一宮の吉備津神社が鎮座する。

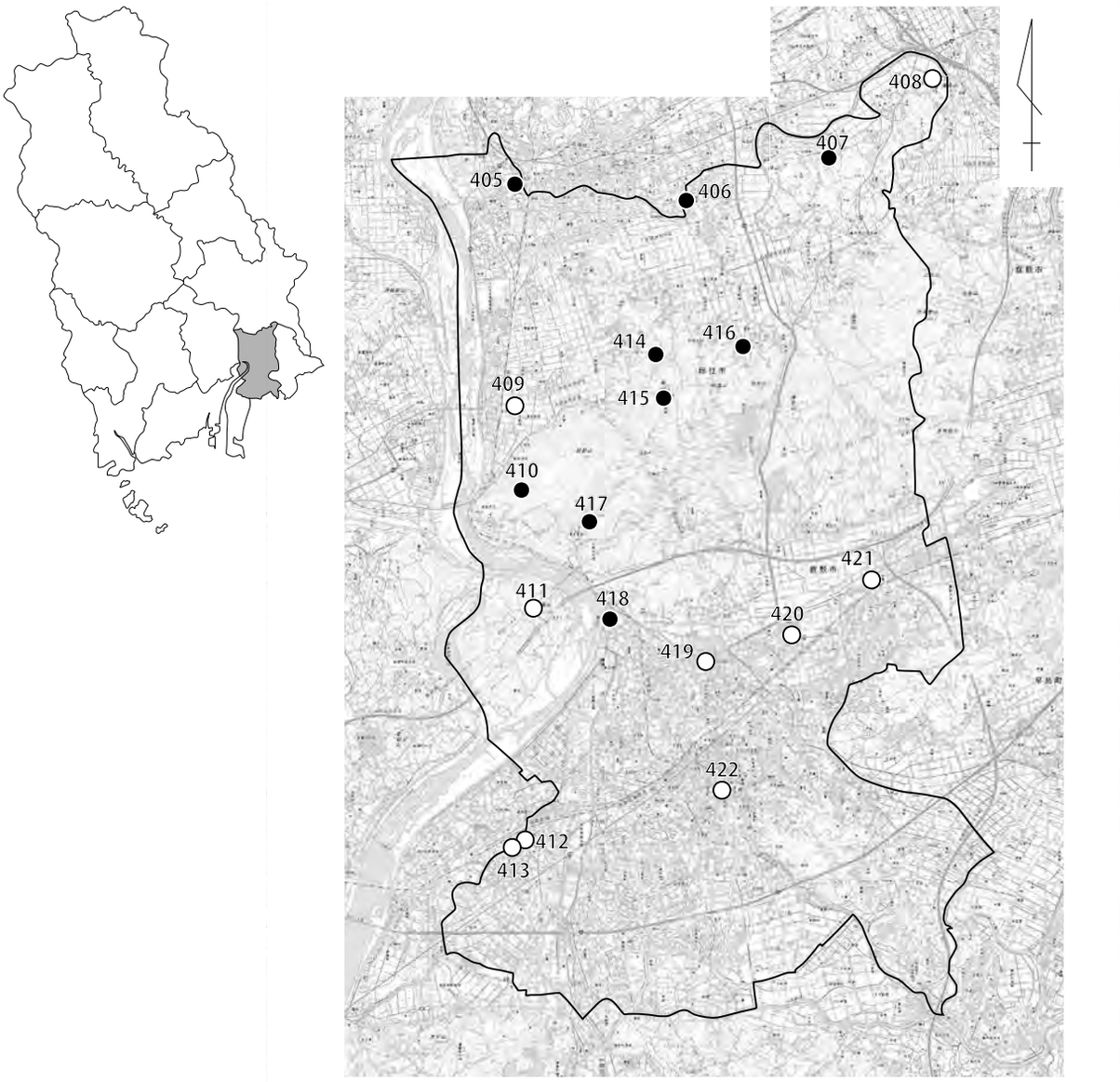
概要　城域は東西約 40 m、南北約 90 mと小規模である。頂部の主郭と考えられる曲輪は南北 38 m、東西 18 mの楕円形を呈し、東辺中央に横矢が設けられている。曲輪の中央部分は造成があまく、南側には古墳の石室（岡山市 2112）が露出している。主郭に北接して東西 14 m、南北 11 mの腰曲輪があり、周辺に幅３m前後の土塁がめぐり、切岸は急である。さらにその北側には一辺７mの方形を呈する小曲輪が配置されており、東斜面の犬走りにより鞍部の堀切と繋がる。堀切は幅４mで浅く、南肩に低い土塁をもつ。全体的に曲輪の造成はあまく、臨時的な施設であった可能性がある。



第 344 図　宮内城跡縄張り図（1/2,000）

文献・伝承　吉備城、鯉山城、吉備中山城の別称をもち、文献 37『岡山県通史』によれば、吉備中山城は羽柴方の陣城とされる。（米田）

第 10 節　窪屋郡



405. 真壁城跡
406. 三須城跡
407. 亀山城跡
408. 赤浜城山城跡
409. 下軽部遺跡
410. 軽部山城跡
411. 流山城跡
412. 上河原城跡
413. 中大道城跡
414. 幸山城跡
415. 福山城跡
416. 岡谷城跡
417. 黒田古城跡
418. 青江城跡
419. 宮前城の内城跡
420. 平田城の内城跡
421. 万寿城跡
422. 小野城跡

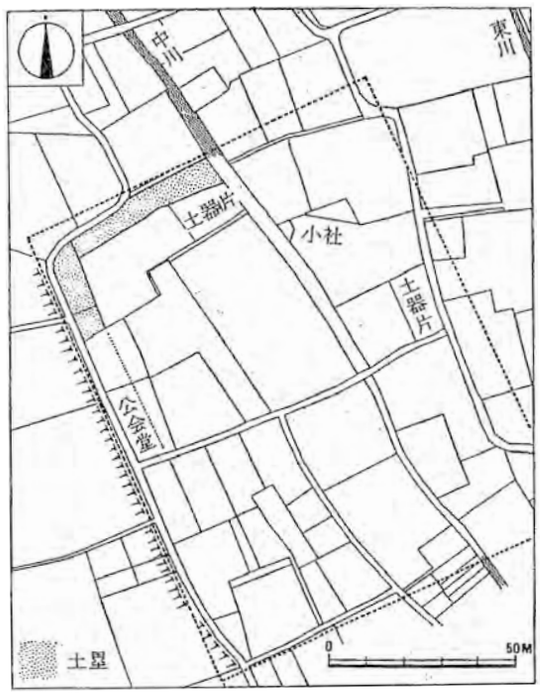
第 345 図　窪屋郡城館位置図

405　真壁（まかべ）城跡　　総社市溝口　　地図 22 右

立地　ＪＲ伯備線総社駅の西側にあり、南北に流れる高梁川の東側畔に位置する。ほぼ真北に浅尾陣屋跡が存在する。推定地内を南北方向に中川が流れる。

概要　約 130 × 110 m四方が推定地であるが、現在宅地化している。北側辺と西側辺の現道路が屋敷の境に近いと考えられ、北西辺付近はかつて土塁があったとされ、その上に椋の木が植えられていた。四周を土塁で囲んだ屋敷地であったと想定できるが、現在は削平され椋の木も根の部分のみが残されている。しかし北側辺と西側辺の一部に、４～５ｍ前後の敷地区画が残っている。かつての土塁幅を彷彿させる。

文献・伝承　地元では一体を「しろんち（城の内）」と呼んでいた。『吉備群書集成』には、城主は薬師寺次郎右衛門とある。天正年間の城主は真壁彦九郎で、播州上月の合戦で戦死した。　（小林）



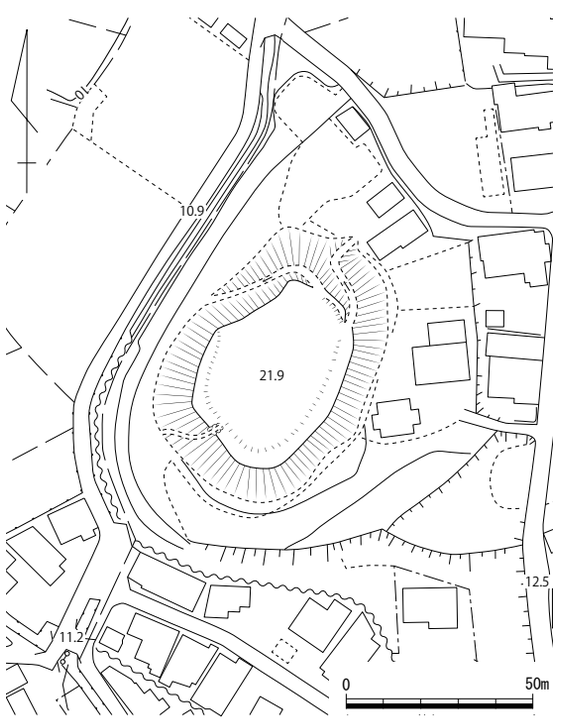
第 346 図　真壁城跡平面図（1/2,000）
文献 143 より引用

406　三須（みす）城跡　　総社市三須　　地図 23 左

立地　三須地区の低丘陵から、北麓の平地に張り出す尾根の端部付近に立地する。

概要　主郭と、その下段の帯曲輪の２段からなると推測される。主郭は丘陵頂部を削平し、周囲に高さ５～７ｍの切岸を削り出して造成され、全長約 50 m、幅約 35 mの不整な楕円形を呈する。縁辺部は中心部に比べて若干盛り上がり、土塁の存在を示唆する。郭面の３か所に道が取り付くが、本来伴うものかどうかは不明である。帯曲輪は、畑や宅地となり改変が著しいものの、幅 10 ～ 20 mで全周しており、現在でも周囲の平地より高い。

文献・伝承　松岡進氏によれば、「古城」「城ノ越」の小字名が残り、城跡との伝承もある（『中世城郭研究』第 25 号）。「西荒木家文書」では、足利義稙の頃に荒木道祐が西三須村に城郭を構えたとするが本城のことかどうかは不明。　（岡本）



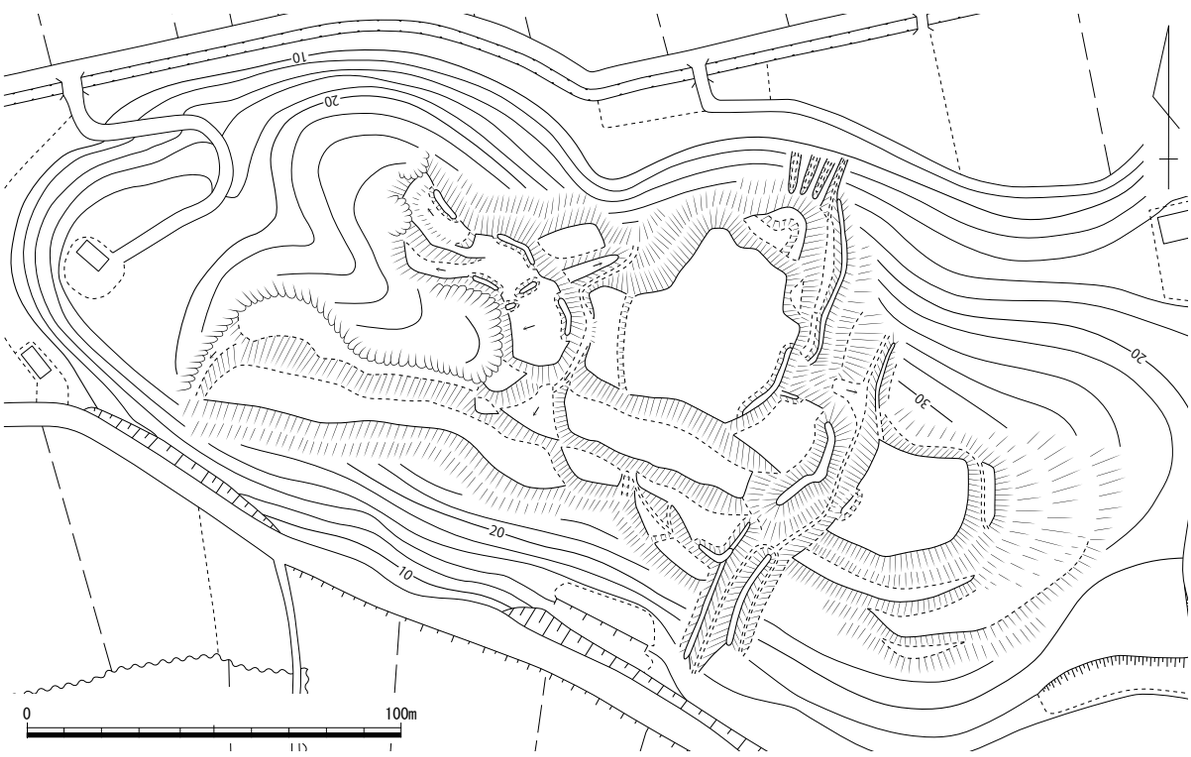
第 347 図　三須城跡縄張り図（1/2,000）

407　亀山城跡（かめやま）　　総社市下林　　地図 23 左

立地　総社平野の南側に連なる三須丘陵の縁辺にあり、平地に向けて突出した尾根筋の端部付近に立地する城郭である。

概要　本城は人里に近いため、城の遺構と後世の地形改変との区別が難しい部分もある。また城域の西端は、土砂採取のため大きく破壊されている。主郭は、全長・幅ともほぼ 50 mの不整な方形を呈し、東辺の一部に土塁跡が残るほか、折れや突出部も設けることで防御性を高めている。北側下段には虎口を伴うとみられる曲輪があり、側面を 4 条の畝状竪堀群で防御している。主郭の東側は堀切となり、そのまま南北方向の竪堀に繋がる。これらの竪堀は、分岐や土塁を随所に伴う構造である。なお、主郭南東側の 4 ～ 5 m下方には一辺 10 ～ 20 mの不整な方形の曲輪が置かれ、東辺に高さ約 4 mの屈曲する土塁を伴っている。この曲輪は、堀切・竪堀・土塁と一体化した防御施設の可能性が高い。これらを合わせた堀全体の規模は、幅約 30 m、全長約 130 mに達する。さらに、東端にも全長約 30 mを測る不整な方形の曲輪が 1 面確認できる。主郭西側の鞍部には現在山道が通っているが、ここにも堀切の存在が想定でき、北端はＬ字状に屈曲し、東西方向の土塁を伴う。北西に延びる尾根筋は、不定形で内部の削平も甘いが、低い土塁が断片的に残存し、尾根先端への防御を担う曲輪群の存在が考えられる。城域の南側斜面には、耕作等による改変の可能性はあるものの、地形に沿った細長い曲輪が多数確認できる。

文献・伝承　『備中誌』では城主を佐野和泉守忠綱とし、永禄２（1559）年に落城とする。『吉備郡誌』では、天正年間の城主を佐野和泉守忠職とする。「吉備津宮文書」には、幸山城主石川氏の家臣として忠職の名が見える。　（岡本）



第 348 図　亀山城跡縄張り図（1/2,000）

410　軽部山城跡（かるべさん）　　総社市清音軽部・清音古地　　地図 26 右

立地　標高約 240 mの軽部山から南西方向へ派生した標高約 190 mの尾根頂部に位置し、高梁川の東側隣に当たる。高梁川を挟んだ南東側には、南山城跡が位置している。

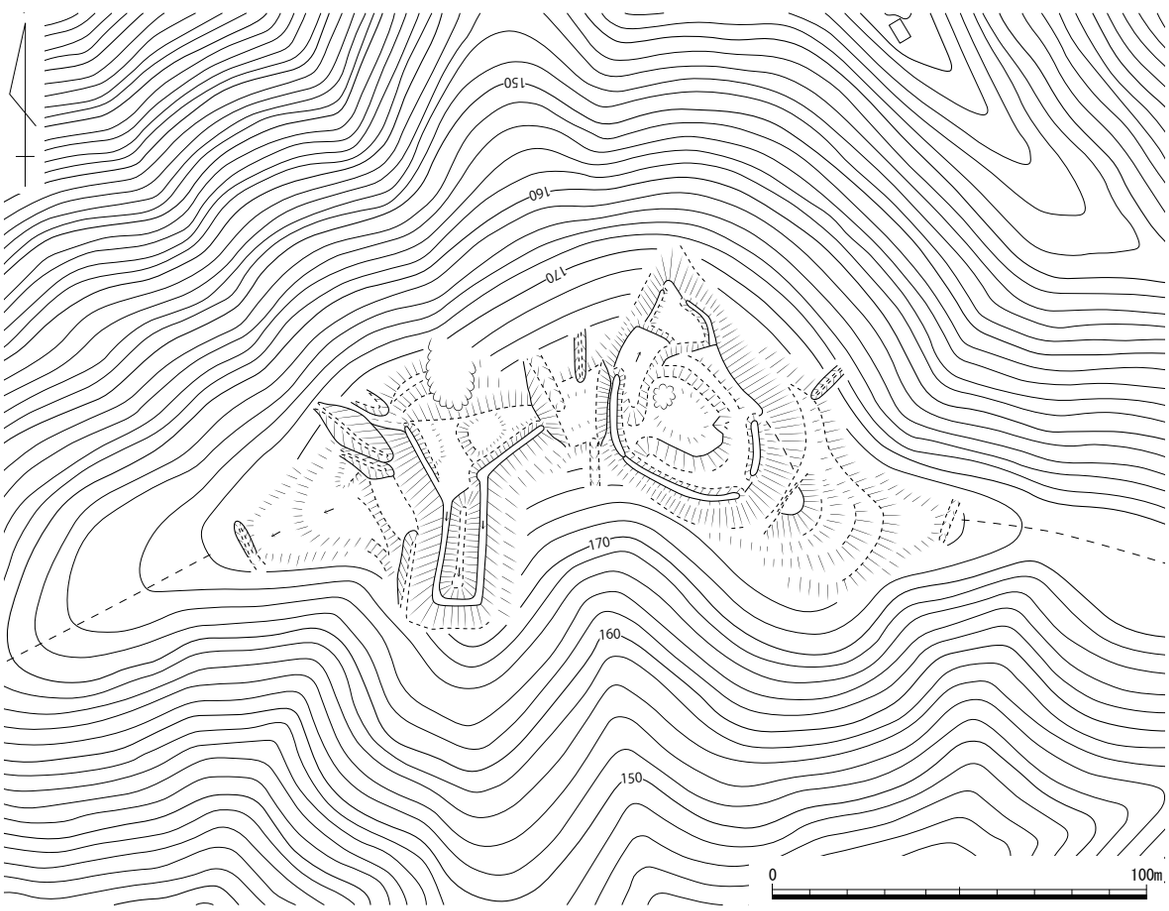
概要　頂部に２つの曲輪群を並べた山城で、全長は約 190 mである。それぞれの規模は、東側が全長約 90 m、西側が全長約 70 mで、どちらも四周を土塁で囲んでいる。また両者の間は、幅約 15 mの堀切状の施設で区分している。

東側の曲輪群は、頂部の曲輪の中央部約 30 mが、四周を囲んだ土塁上面よりも高くなる。この曲輪の東側には虎口状に土塁が開いている箇所があり、その下方にあたる南東側にある曲輪状の高まりに繋がっている。頂部曲輪の四周は、５～８m前後の高い切岸によって守られている。

西側の曲輪群は、頂部の造りが不明瞭である。南側に張り出した尾根筋に土塁で囲んだ施設が付随する。長さは約 30 mになる。この施設の延長線上側に土塁が伸びている。四周の切岸が高いのが特徴で、尾根先端部分に当たる西側には、U字状に近い形で竪堀が築かれている。

２つの頂部を比較した場合、東側頂部の造りがしっかりしており、また高所にあることから主郭になると思われる。

文献・伝承　城主等は不明である。　（小林）



第 349 図　軽部山城跡縄張り図（1/2,000）

414　幸山城跡（こうざん）　　総社市西郡・清音三因　　＜市指定史跡＞　地図 27 左

立地　総社平野の南側に連なる山塊のひとつ、福山の山頂（標高 302 m）から北へと下る尾根筋の途中に立地する城である。城からは、山陽道が通る総社平野や、西方の高梁川という主要な交通路を広く視界に捉えることができる。なお、南方の山頂には南北朝時代の城郭として有名な福山城跡が所在する。

概要　尾根筋上に盛り上がった花崗岩の残丘頂部を利用して築かれた城である。城域の周囲は極めて急峻な斜面であり、一部は垂直な断崖となっている。このような立地条件のため、極めて防備の堅い城といえる。

城域は、先端部にあたる北西側頂部の曲輪（通称「西の丸」）と、南東側頂部の曲輪（通称「東の丸」）、その間の鞍部から東と北へ延びる曲輪の、大きく 3 面の曲輪から構成される。北西側頂部の曲輪は主郭に相当すると考えられ、長さ約 50 m、幅約 30 mの不定形である。縁辺部に比べて中央部が若干窪んだ地形であり、郭面には花崗岩の岩塊が多数散在している。北西と北東に向けた突出部があり、自然地形を防御に活用した可能性が想定できる。背面にあたる郭面の南辺には高さ 1 m強の土塁が残る。南東側は高さ約 4 mの切岸である。

一方、南東側頂部には長さ約 65 m、幅約 25 mの不定形の曲輪が設置されている。曲輪は自然地形を反映して、北側が窪んだ不整な「コ」の字状を呈する。郭面の東辺から南辺、西辺にかけては、

第 350 図　幸山城跡縄張り図（1/2,000）

地山の削り残しによる土塁が巡る。土塁は南東隅が高さ・幅ともに最大であり、両端に向けて高さと幅を減じている。南東隅では郭面からの高さは約４mに達しており、その上面は背面からの攻撃に対応する櫓台としての機能を担った可能性が高いと考えられる。土塁の南辺には開口部があり現在の山道が取り付くが、この場所に元々は城全体の入口にあたる虎口があったと想定できる。北側の切岸の高さは約５m、南側の鞍部との比高は 10 mほどに達する。

二つの曲輪間の鞍部は平坦面となり、両側を切岸に挟まれた大堀切の形状を呈する。この平坦面はそのまま主郭の東側と、南東側の曲輪の北側へと連続しており、全体として帯曲輪のような形状を呈している。ただ曲輪内には若干の段差もあり、複数に細分できるかもしれない。この曲輪の西辺には虎口の可能性がある窪みが認められる。

城域背後にあたる南側の尾根筋鞍部には、『山手村史』においては幅約 70 mの箱薬研堀と土橋が設置されているとする。鞍部北東側では、鞍部近くで上面が 12 mと 22 mを測る２条の溝状遺構を確認したが、これらは斜面下方に行くにつれて形状が曖昧になる。鞍部南西側では、東端で北東側の溝状遺構と対になる窪みが見られるものの、全体は緩い段状になって下る斜面である。溝状遺構と窪みなどは、現状では明瞭な竪堀とは認めがたいが、竪堀の痕跡である可能性がある。

本城では発掘調査は実施されていないが、これまでに中世に属する土師質の擂鉢、石臼の破片、灯明皿、小刀、丸瓦などが採集されている。

本城はさほど大規模な城ではないものの、交通の要衝を睨む位置にある戦略上の拠点として重視され、その名を歴史にとどめている。

文献・伝承　鎌倉時代後半の延慶年間、庄左衛門四郎資房による築城と伝わり、応永年間に城主が石川氏に交代したようである。永禄 10（1567）年のいわゆる明禅寺合戦の際、城主の石川久智は三村方として参戦したが戦死、息子の久式が跡を継いだ。元亀２（1571）年正月には毛利三家が栗屋木工允就方に対し幸山城の防備を要請している。同年２月には尼子氏の軍勢が、久式が留守にしていた幸山城を攻め降伏に追い込むが、のちに毛利氏の援軍を受けた久式によって奪回される。天正３（1575）年の備中兵乱において、久式は三村元親に加勢のため備中松山城に赴くも敗北し自刃。備中が毛利氏の領国となると、本城は小早川隆景の領有に帰した。「穂田元清書状案」によると、天正４（1576）年または翌年に古堀の拡張工事を行ったとの記事が見える（ただし『萩藩閥閲録』巻 25 には「高山（幸山）は清水（宗治）か居城なり」とある）。備中高松城の戦いの後、本城は宇喜多秀家の直轄となり城番が置かれた。関ヶ原の戦いで秀家が敗北した後、その所領は接収され幸山城も廃城となった。（岡本）

写真 173　遠景 (西から)

写真 174　主郭 (南から)

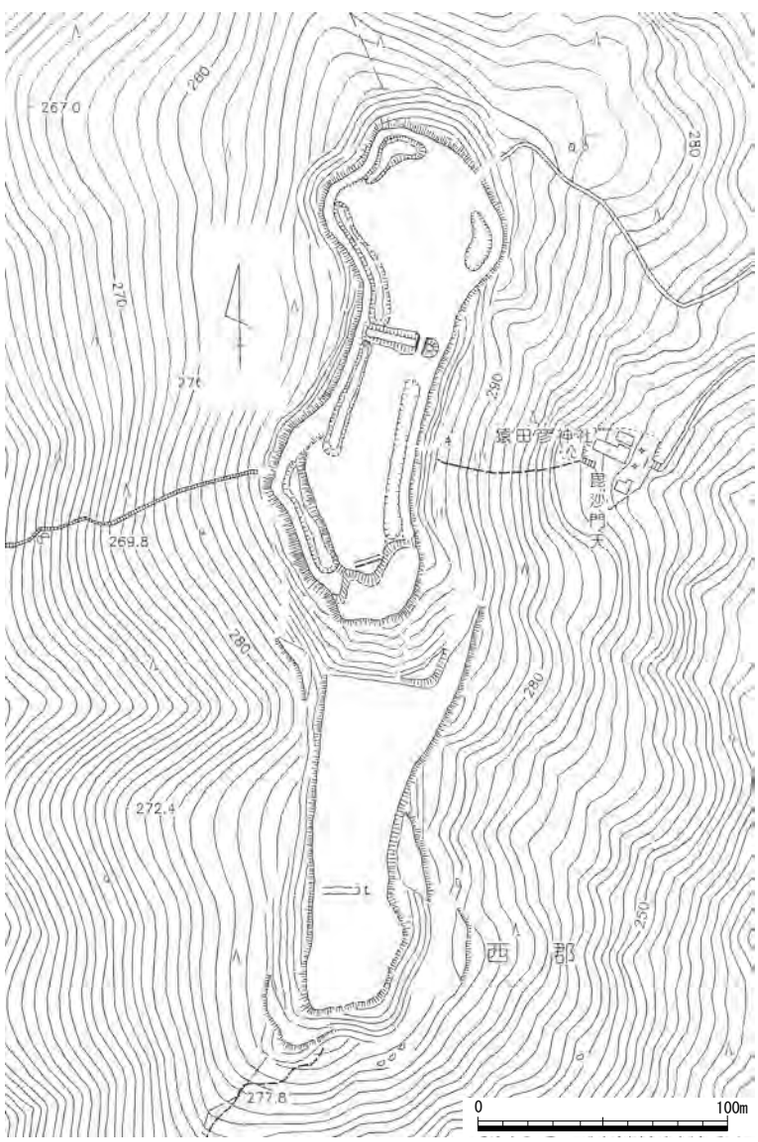
415　福山城跡（ふくやま）　　総社市西郡・清音三因　　＜国指定史跡＞　地図 27 左

立地　福山（標高 302 m）の山頂に広がる平坦な地形を利用して築かれた城郭である。城からは北に総社平野全域、南に瀬戸内海までを広く視界に収めることができる。また北麓は山陽道、西方は高梁川という水陸の重要な交通路であり、さらに西麓の浅原峠には瀬戸内海から総社平野を結ぶ道が通るという、交通の結節点を押さえる位置に築かれた城郭といえる。なお、北側の尾根下方に幸山城跡が立地する。

概要　城郭が所在する山頂周辺には平安時代以降､福山寺という寺院が先行して存在していたとされ、福山城跡はその伽藍を利用する形で築城されたと考えられる。城域は南北に大きく二分でき、両者の間は比高 4 ～ 5 m程度の法面となっている。全体として大規模な地形改変はなされておらず、郭面には自然地形の起伏をかなり残している。周囲は比較的緩やかな斜面であり、堀などの防御施設は確認できない。

北半部は全長約 200 m、幅約 70 mの規模である。郭面はほぼ中央に設けられた東西方向の土塁によってさらに南北に二分割され、城内最高所を含む南側が主郭と目される。この土塁には、石積みを伴った幅約 1.8 mの開口部があり門跡と考えられるが、元来は寺院に伴う遺構かもしれない。土塁南側の西端には長径約 1.5 m、短径約 1.3 mの石組みの井戸が残る。南側の主郭には多数の岩塊が散在しているが、中には寺院の礎石の可能性をもつものもある。郭面の南端にも石列を伴う土塁状の高まりがあり、その南側は不定形の曲輪状をなすが、内部は整地されず起伏が顕著である。

この曲輪を特徴付けるのは、曲輪の縁辺部から 2 ～ 3 mほど内側に断続的に掘削された溝状の遺構である。現在 6 か所で観察でき、郭面の西辺に集中する傾向がある。最長のものは長さ



第 351 図　福山城跡縄張り図（1/3,000）　作図：島崎　東

約 60 mを測る。幅は 4 ～ 10 m、深さは最大で 1 m内外であり、幅のわりに浅い。ただし南西隅のものは、郭面からの落差が 2 m程度を測る。この溝の掘削の結果として、縁辺部との間は土塁状をなしている。同様の遺構は、同じく南北朝時代の城である鏡野町の城峪城跡でも知られており防御施設の一種と考えられる。

南半部は、全長約 130 m、幅約 50 mの規模であり、郭面は南端部付近が最も高い。図示していないが、郭面の北端には寺院の建物跡とされている方形の平坦地が観察できる。また中央からやや南寄りの位置には、石列を伴う東西方向の低い土塁が残り、幅約 1.5 mの開口部がある。北半部のような縁辺部の溝は掘削されておらず、周辺に小規模な曲輪が散在している。

なお、本城は近代に入って南朝方の忠臣に関わる遺跡として脚光を浴び、昭和 11 年には国史跡に指定され、城域内には福山合戦を顕彰する多数の石碑が建立されている。

文献・伝承　鎌倉時代の末頃、真壁小六是久の築城と伝わる。本城は『太平記』に記されたいわゆる「福山合戦」の舞台として著名である。『太平記』は以下のように記す。建武 2（1335）年、足利方の佐々木信胤らが福山城に立て籠もったため、後醍醐天皇方につく備前の地頭・御家人らが攻撃を加えたが撃退された。翌年、九州から進軍してきた足利直義の軍勢と、福山城を奪取して立て籠もっていた後醍醐方の大井田氏経の軍勢との間で激戦となり、敗北し城を脱出した氏経は、10 数回にわたる追撃軍との戦闘の末、備前の三石まで逃げ延びたという。当時の一次史料からは、九州や安芸・備後の勢力が足利方に、石見の勢力が後醍醐方に付いて参戦していたことが知られる。『中国兵乱記』によれば、元亀 2（1571）年の尼子勢の備中侵攻の際に、幸山城の留守を預かっていた日幡六郎兵衛らは農民を率いて福山城に繰り出し、浅原峠を切り塞いで守備にあたったという。（岡本）

写真 175　遠景（西から）

写真 176　北半部の門跡（北西から）

写真 177　南半部全景（北から）

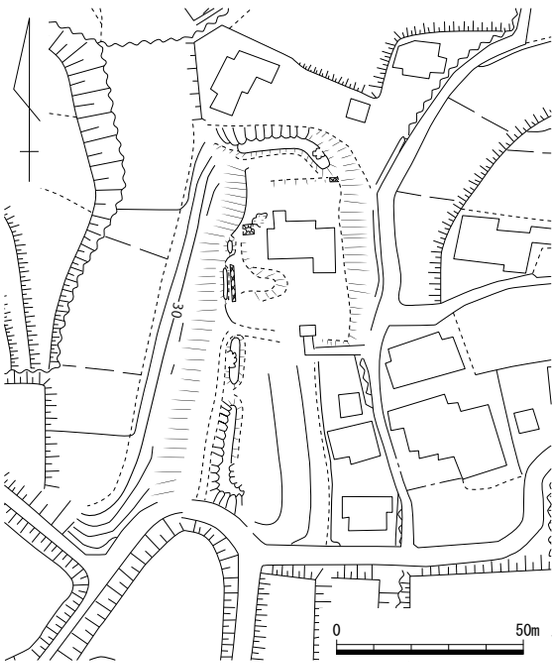
写真 178　井戸跡（南西から）

416　岡谷（おかだに）城跡　　総社市岡谷　　地図 27 左

立地　標高約 220 m級の和霊山から北方向へ派生した尾根の麓付近の小高い丘の上に位置する。福山城跡のある山塊からは、北東側の近くである。

概要　長さ約 50 m、幅約 30 mの曲輪を中心に、その北側と西側の一部に土塁の跡が残っている。曲輪はかつて宅地として利用されており、若干の削平が予想される。北側辺にある土塁は、高さ約 1.5 m、幅約３mありしっかりした造りである。旧宅地の西側辺にある土塁は、高さ 0.5 mと低く、また途切れ途切れである。この土塁の線上に当たる南側にも土塁状の高まりがあり、高さは 2.5 ～３mとしっかりしている。また旧宅地の敷地内に、径３mを超える大石があり、現在も祀られている。

文献・伝承　『備中村鑑』には、城主は友野岩見守とある。友野氏は、幸山城主石川氏の重臣である。　（小林）



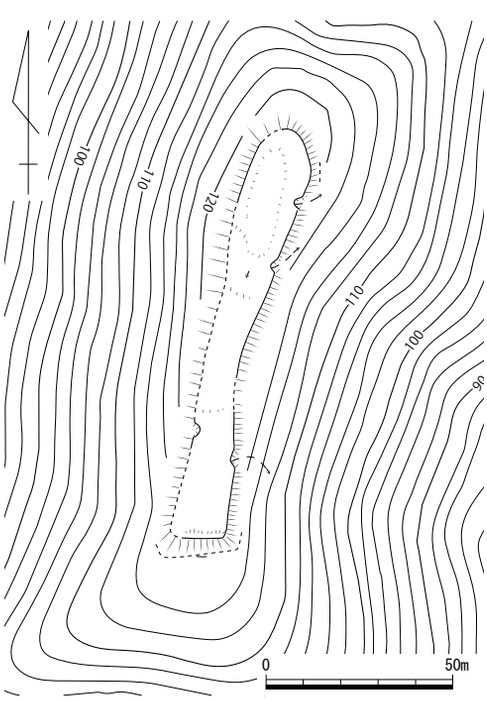
第 352 図　岡谷城跡縄張り図（1/2,000）

417　黒田（くろたこ）古城跡　　総社市清音黒田　　地図 27 左

立地　高梁川に注ぐ西山川が造った小さな谷平野の奥に位置する尾根端部の高所に立地する。ここからの視界は谷の入り口にあたる南西方向に限定されている。谷を北東へ遡ると清音と倉敷を南北に繋ぐ浅原峠に出る。

概要　尾根筋に細長く、南北約 110 m、東西約 10 ～ 15 mの平坦地が造成され、平坦地は北に向けて徐々に標高が高くなる。平坦地周縁の切岸は東縁が明瞭で２m前後ある。平坦地南縁は僅かに盛り上がり、土塁痕跡と見ることもできる。また、周縁の所々に斜面下方から道が通じている。後世の畑地の開墾が入っている可能性があるが、この尾根の東の谷筋一帯を「城平」、南斜面下方に「城之下」「土居ノ内」という地名が残ることから、城館関連遺構と捉えたい。

文献･伝承　『備中誌上編』に軽部郷の黒田の『古城』とし、城主不詳としている。あるいは、この遺構を指すものか。　（物部）



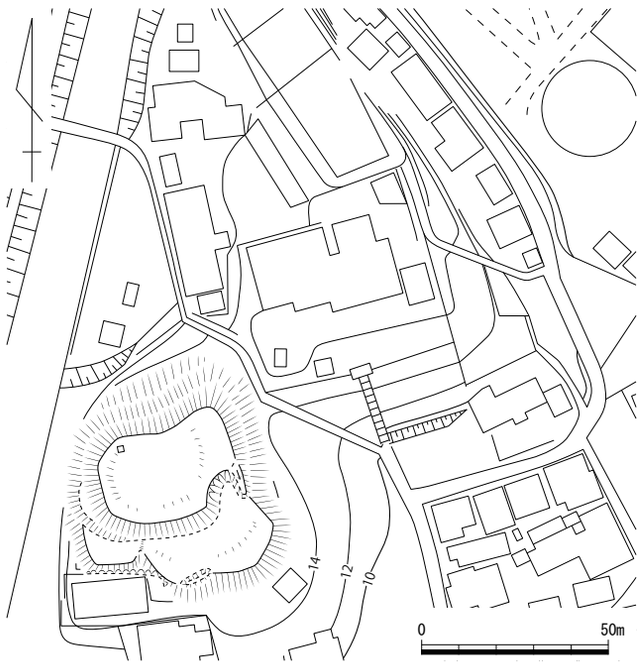
第 353 図　黒田古城跡縄張り図（1/2,000）

418　青江（あおえ）城跡　　倉敷市酒津　　地図 27 左

立地　今は廃川となった旧東高梁川と現高梁川の分岐点を南に望む小高い丘に立地する。

概要　東西約 120 m、南北約 200 mの独立丘陵の東側には、現在済興寺が建つ。その裏山は寺よりも高く、地形が改変されず残る。この頂部とその南側に 1 面の、計 2 面の曲輪が存在する。頂部の曲輪は、長さ約 30 m、幅約 40 mの規模である。しっかりした平坦面を造っている。その南側にある曲輪は、長さ約 15 m、幅約 50 mの規模であり、その南側辺の一部に土塁状の高まりが残る。これらの南側は民家によって改変されている。現在遺構が残る範囲は全長約 60 mであるが、本来は東側の寺域をも含んだ城であった可能性がある。

文献・伝承　『備中村鑑』は、酒津村にある「青江山城」とし、小野出羽守が在城したとある。　（小林）



第 354 図　青江城縄張り図（1/2,000）

第 11 節　都宇郡

423. 庚申山陣跡
424. 造山城跡
425. 津寺遺跡
426. 甫崎天神山城跡
427. 加茂城跡
428. 鷹巣城跡
429. 河屋城跡
430. 楯築陣山跡
431. 日畑城跡
432. 庄城跡
433. 日差山城跡
434. 練尾氏城跡
435. 高鳥居城跡
436. 松島城跡
437. 平松城跡
438. 鳥羽城山城跡
439. 坪井城跡
440. 早島城跡
441. 戸川家陣屋跡
442 名称未定

第 355 図　都宇郡城館位置図

423　庚申山陣跡（こうしんやま）　　岡山市北区新庄上　　地図 23 左

立地　三手丘陵の西端にあたる庚申山頂部に位置する。南 1.3㎞には陣として手が加えられた造山古墳が、３㎞南の日差山頂部には小早川隆景が陣取ったとされる日差山城跡が位置し、庚申山から望める。また、高松城跡や羽柴秀吉が陣取った石井山陣跡も遠望できる。なお、元禄４（1691）年には本隆寺の住持日正が拝所を創立し、現在に至る。

概要　頂部のほぼ中央に高まりが残り、そこに花崗岩の巨岩が集まっている。この北西側は平坦面を造成し、曲輪と考える。巨岩が集まる高まりの南東側にも平坦面が造成され、現在は梵天拝所が建つ。さらにその東斜面には段を造成して帝釈天拝所が建つ。帝釈天拝所が位置する平坦面の東斜面にはさらに２～３段の平坦面があり、それぞれに小祀が建つ。頂部および東斜面の平坦面は羽柴秀吉による高松城攻めの際の陣城を構成する曲輪と評価されており、その可能性が高いと判断できる。頂部から東にのびる尾根筋は比較的緩やかであるが、傾斜変換点を人為的に掘削している状況が確認できる。緩斜面地を含めて曲輪としての活用が推察される。ただ、明確な防御施設は確認できなかった。

岡山市教育委員会は庚申山東遺跡の発掘調査を実施し、時期不詳のピットや浅い溝を検出している。この溝とは別の断面Ｖ字状の溝が山頂部を巡っていることが判明し、浅い溝はそれに流入する溝と位置づけられている。調査報告ではＶ字状溝を城跡に伴う遺構と考え、調査で検出した遺構も同様の評価をしている。ただ、今回の踏査では断面Ｖ字状溝を確認することができなかった。

文献・伝承　『中国兵乱記』によると、天正９（1581）年 10 月下旬、岩崎城に赤浜新之丞や芸州方の児玉三郎右衛門らが籠もり、岩崎山に楢崎十兵部、木原兵部、井上伯耆守が控えたとみえる。そして、小早川隆景の言として「秀吉が高松城攻めに着手した際には、元清が岩崎城に入城する」予定が記されている。『陰徳太平記』によると吉川元春親子３人、小早川隆景勢の合計４万騎は、備中国庇山に陣を据えていることを記す。

「備中国高松城水攻図」（著者・出版年不明）には小早川隆景の陣所とされた庇山西方に「此山ヲ帝釈山ト云　吉川駿河守元春　同蔵人元長　人数三千人」とある。別の「備中国高松水攻図」（著者・出版年不明）には岩崎山として「宍戸豊前　高松城ヨリ拾七丁」とあり、同図には小早川の陣東方に吉川の陣を位置づける。「備中国加夜郡高松城水攻地理之図」（古川古松軒筆・寛政３年）には帝釈山として吉川元春・元長の陣が描かれる。なお、「備中国高松水攻図」のなかには帝釈山を陣取った勢力として尼子勢と書かれているものもあり、これには庇山を「毛利方後詰陣所」とする。　（上栫）

写真 179　遠景（造山城跡から）

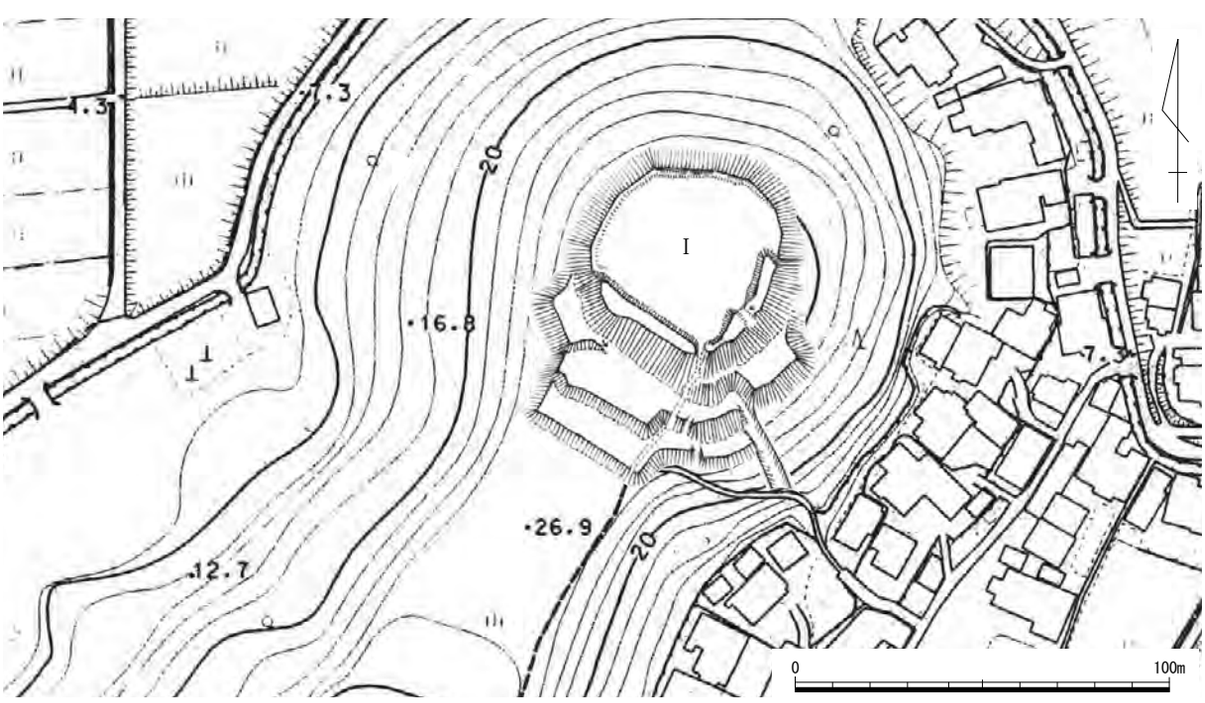
写真 180　備中高松城跡を望む（南西から）

424　造山城跡（つくりやま）　　岡山市北区新庄下　　地図 23 左

立地　造山城跡は足守川右岸の平野に位置する。北側 1.2㎞には尾根頂部には庚申山陣跡が、東約 1.1㎞の丘陵頂部には甫崎天神山城跡が、南 1.7㎞の山頂部には日差山城跡がそれぞれ所在する。北東約 2.6㎞の地点に備中高松城跡は位置する。

概要　平野に延びる独立丘陵は造山古墳として成形されているが、この古墳を改変して陣城が整備されている。曲輪Ⅰは後円部頂部を削平して造成している。曲輪Ⅰの東・南側には土塁を巡らせる。土塁はＬ字状に屈曲し、屈曲部は通路により分断されていた。東側土塁の中央付近も分断されている。曲輪Ⅰの周囲は古墳斜面をそのまま利用するが、前方部に繋がる南側のみ切岸を造成して腰曲輪を二段削出する。曲輪Ⅰの南西および南東側にも腰曲輪を造成する。曲輪Ⅰ南西側の腰曲輪には東側にスロープが付設され、曲輪Ⅰ南側の上段曲輪に繋がる。曲輪Ⅰ南東腰曲輪の南側には墳丘裾に向かって竪堀が 1 条掘削される。精緻な地形測量によると、防御施設が皆無である曲輪Ⅰ北側にも竪堀状の窪みが 1 条認められる。前方部頂部は平坦に整地して荒神社が建ち、また前方部の後円部側斜面は平坦面が二段造成されているが、明確な防御施設は確認できない。

文献・伝承　『中国兵乱記』には、天正８（1580）年に織田勢の備中進出に対して毛利勢は備中において城の普請を行ったことが記載される。合戦になった際には輝元が猿懸山に出陣し、その他一門大将衆が陣を敷く場所を決めており、その中に「作山」がみえる。しかし、天正 10 年 4 月に輝元が猿懸山に出陣し、大将衆にも陣取らせた中に「作山」は明示されていない。『好事雑報』第 18 号（弘文社、1879 年）所収の守屋惟質による解説には「ツクリ山　雲州勢陣所一千人」とある。造山城跡は毛利勢が陣取った岩崎山・日差山に至近の距離で囲まれており、高松城水攻めの際に毛利勢の陣が敷かれた可能性は高い。なお、新庄右衛門の居城を伝えるものもある。　（上栫）



第 356 図　造山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：畑　和良

425　津寺（つでら）遺跡　　岡山市北区津寺・加茂　　地図 23 右

立地　足守川左岸の沖積地に立地し、足守川を挟んで南西 400 mに甫崎天神山城跡が位置する。

概要　津寺遺跡は弥生時代から近世の複合集落であり、1986 年度、1988 年度から 1992 年にかけて、岡山県教育委員会が山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。この遺跡では土筆山、野上田、西川、中屋、高田の各調査区で中・近世の集落跡が確認された。

土筆山調査区では区画溝を伴う掘立柱建物群が整然と配置された屋敷地が南北方向に並んで確認され、調査区内では 7 区画の屋敷地が想定されている。また、野上田調査区では 12 世紀後半から 13 世紀前半の集落が確認されている。西川調査区では西・南北が溝に囲まれた区画内で掘立柱建物が 22 棟確認された。時期は 16 世紀～ 17 世紀初頭の範疇で比定される。建物群は遺構密度、企画性、身舎構造、配置関係などから通常の農村形態を示すものとは考えにくく、時期や立地を考慮して、西隣する甫崎天神山城跡と関連するような特殊な機能をもっていた可能性も示唆されている。また四面に庇をもつ複数の大形建物も認められる。中屋調査区では 12 世紀後半から 13 世紀前半、14 世紀後半、16 世紀末から 18 世紀中葉に集落が展開している。集落は四方を溝で囲まれており、その区画は約 40 mの間隔をとる。掘立柱建物や土壙墓は溝に規制されるように計画的に配置されている。高田調査区では 13 世紀後半から 14 世紀後半、16 世紀末から 17 世紀前半に集落が営まれている。集落は南と西を溝で区画しており、区画内で掘立柱建物 3 棟、井戸 1 基、土坑が確認された。西川、高田調査区の集落は中世から続くが、17 世紀初頭に廃絶している。この頃、榊原職直が花房職之の遺領から 1000 石を分知され、1617 年に津寺知行所を置いており、集落の廃絶がこうした政治的な動きと関連することも考えられる。

文献　文献 189 ～ 193　岡山県教育委員会『津寺遺跡』、『津寺遺跡』2 ～ 5　1994 ～ 1998 年

（米田）

第 357 図　津寺遺跡における中近世の遺構全体図（1/4,000）

426　甫崎天神山城跡（ほさきてんじんやま）　　岡山市北区津寺　　地図 23 右

立地　足守川右岸に面した標高 42 mの丘陵頂部に立地する。比高は 37 mで、足守川流域の東及び南北に広がる平野の眺望が良好である。本城から周辺 2㎞前後の範囲には毛利方が陣を取ったとされる日差山城跡、庚申山陣跡、加茂城跡、楯築陣山跡があるほか、北 2.2㎞に備中高松城跡が位置する。

概要　城域は東西約 300 m、南北約 50 mと大規模である。縄張りは頂部の郭－ 1 を中心とし、東に延びる尾根筋に大小 8 面以上の曲輪を配置した連郭式の山城である。また、丘陵の東端にも堀切を隔てて出丸状の曲輪がある。なお、調査区西部や調査区外の西方の丘陵には城館関連遺構は認め難い。

本城は 1987 年から 1989 年にかけて、岡山県教育委員会が山陽自動車道建設に伴って発掘調査を実施した。発掘調査は城域の 7 割近くが対象となった。

頂部中央は郭－ 1 、西側に郭－ 2 、東側に郭－ 3 がある。主郭と考えられる郭－ 1 は東西 40 m、南北 23 mの曲輪で、東西両端で柵、南東斜面で横堀、北東側で掘立柱建物 2 棟が確認されている。郭－ 2 は一辺 25 mの方形曲輪で、郭－ 1 より 1.5 mほど低く、柵や土坑がある。郭－ 3 は東西 11.5 m、南北 22m の曲輪で、西辺に柵、中央に掘立柱建物 2 棟が配置されている。

郭－ 4・5 は郭－ 3 の東側下方に位置し、郭－ 4 は一辺 11 mの方形曲輪で、不明瞭な平坦面ながら、南側に土橋状の高まりがある。郭－ 5 は東西 27 m、南北 16.5 mの長方形を呈する曲輪で、北隅に土橋が設けられているほか、土坑や溝、多数の柱穴が確認されている。また角礫の出土状況から、一部に小規模な石垣がつくられていた可能性がある。

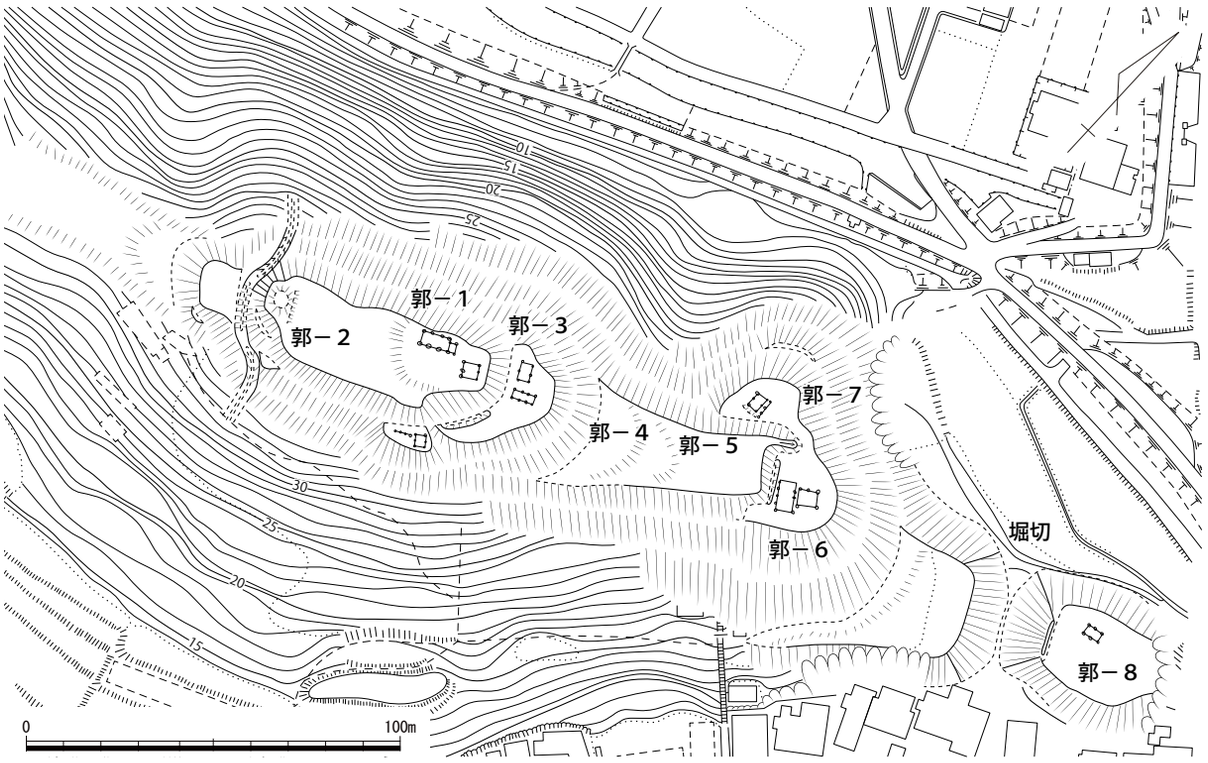
郭－ 6 は郭－ 5 の東下側にある東西 20 mの曲輪で、中央に掘立柱建物 2 棟、西辺に柵がある。また、郭－ 6 南側や東側の調査区外にもそれぞれ曲輪が配置されている。郭－ 7 は尾根の北斜面にあり、東西 24 m、南北 15 mの曲輪である。中央には掘立柱建物 1 棟と排水溝、南辺と西辺は溝をめぐらす。

頂部から堀切を隔てた尾根東端の小丘陵には郭－ 8 が配置されている。郭－ 8 は一部が調査され、東西 50 m、南北 28 mの曲輪であり、西辺に幅 2.2 mの土塁、北側に掘立柱建物 1 棟のほか、多くの柱穴が確認された。堀切は狭い谷を利用しており、表土から底面までの深さは約 4 mである。

遺物の出土量は少ないが、土師器の皿、備前焼の小壺、亀山焼の擂鉢、陶磁器、鉄釘、銅銭、鉛玉などがあり、おおむね 16 世紀後半に収まるものと考えられている。

防御施設は主に柵と土塁であり、頂部と尾根東端との間に堀切、郭－ 1 南東斜面に横堀が認められるのみで、側面や後方の防御は重点的に行われていないことから、出撃拠点としての性格が強いことが想定されている。また、調査された掘立柱建物の大部分では、柱痕に焼土や炭が含まれていることから、廃城に際しては城全体に火が放たれた可能性が指摘されている。

文献・伝承　『中国兵乱記』によると、織田信長の中国攻めに際して、「天神山の峰」「天神山の砦」に毛利方が陣をとったことや天正 8（1580）年には天神山や庚申山に陣を敷くことが決まったと伝えられている。また、天正 10（1582）年 4 月 16 日の鴨庄城合戦の際には、天神山から援軍が出たらしいため、築城は天正 8 年末から 9（1581）年頃と考えられる。さらに、天正 10 年 6 月 4 日の織田・毛利両軍の講和後、すぐに撤収して廃城となったと考えられるため、城の存続期間は 2 年足らずの短期間であったようである（文献 194　岡山県教育委員会「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　1994 年）。　（米田）



第 358 図　甫崎天神山城跡縄張り図（1/2,000）　作図：和田　剛

写真 181　郭－３から備中高松城跡方面を望む（南から）

写真 182　郭－３　建物３・４（北西から）

写真 183　郭－８　土塁（北から）

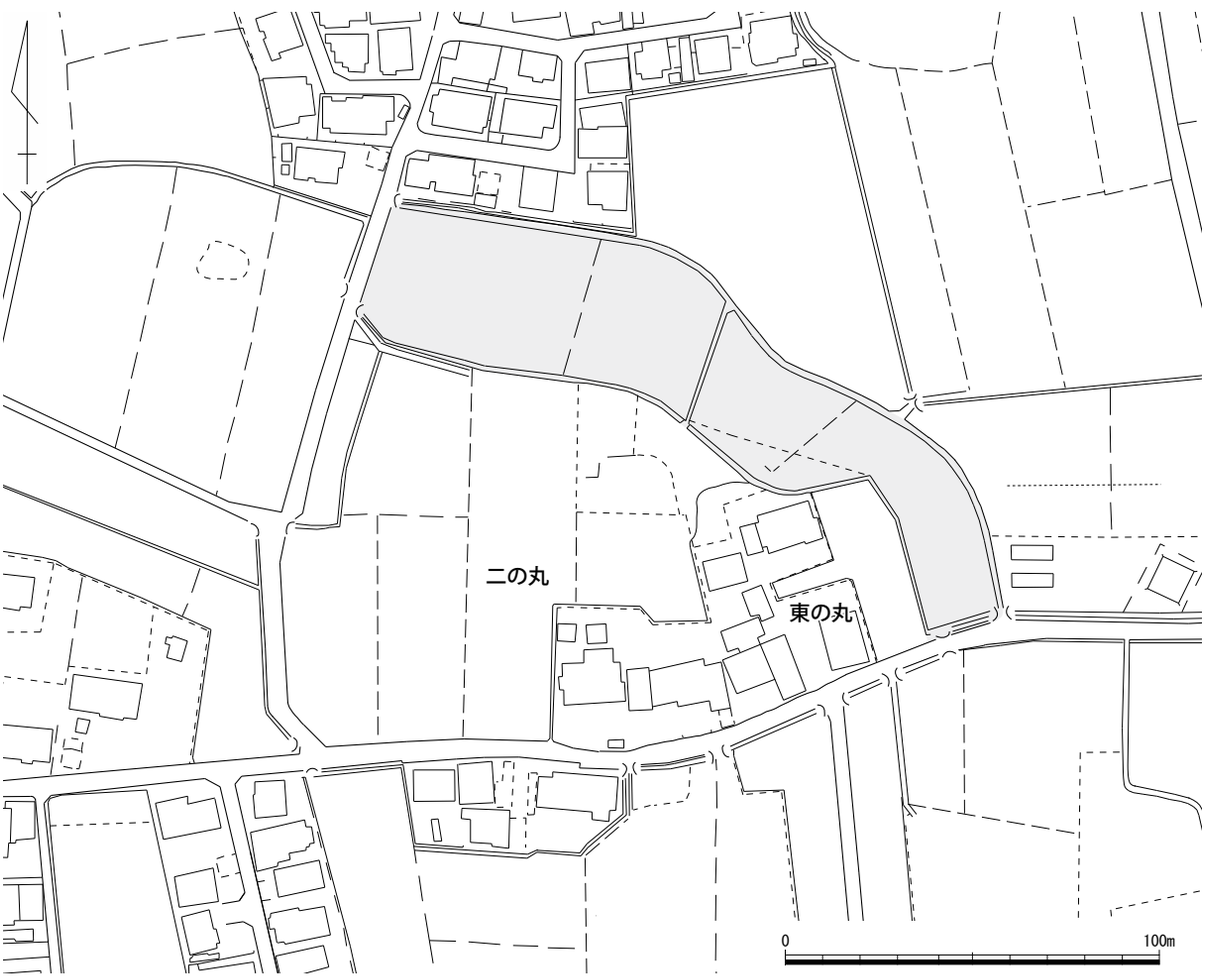
写真 184　堀切　埋土断面（北西から）

427　加茂城跡　　岡山市北区加茂　　＜市指定史跡＞　地図 23 左

立地　足守川の中流域、賀陽デルタ地帯に広がる水田域に位置する。城の北東 700 mほどの位置を山陽道が東西に通り、北北西約２㎞に備中高松城跡が位置する。

概要　水田や宅地の造成のため、現状では明確な城館関連遺構を確認することはできないが、地図などを参考に城域が比定されている。「東の丸」・「二の丸」という地名を持つ区域の北側を取り巻くように弧状を描く水田が存在し、堀の痕跡とされている。

文献・伝承　加茂城は、天正 10（1582）年の備中高松城水攻めの際に羽柴秀吉方と対峙した城で、「桂景信書状」から少なくとも天正８年には毛利勢に与していたことが窺える。『中国兵乱記』、『備前軍記』、『陰徳太平記』、『桂笈円覚書』、『萩藩閥閲録』などによると、攻城の際に籠城していたのは桂広繁（広重）、生石中治家、備後国衆上山元忠らで、東の丸に生石が、西の丸に上山が在番していたという。５月２日未明、秀吉自らが指揮を執り加茂城に攻め寄せる。この戦いで在番の生石は羽柴勢側に寝返り、羽柴勢・備前勢を二ノ丸に引き入れて攻めるも、主将の桂広繁は内応者を城外に押し出して城を堅守した。この戦闘を持ちこたえた加茂城も、羽柴方と毛利方が和睦したのちには廃城となった。　（上栫）



第 359 図　加茂城跡周辺地形図（1/2,000）

428　鷹巣（たかのす）城跡　　岡山市北区新庄下　　地図 27 左

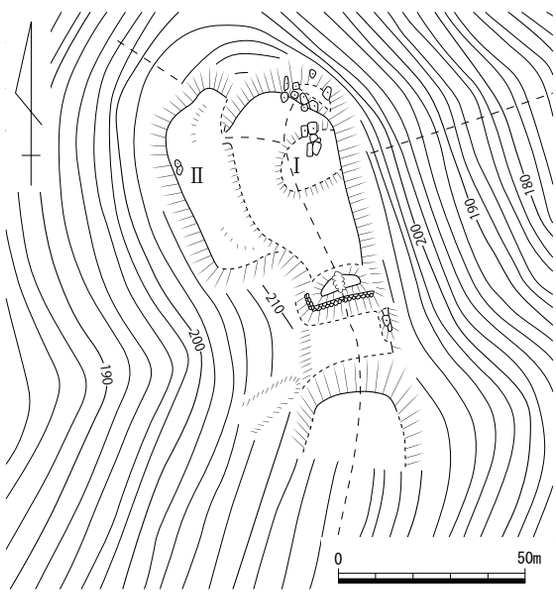
立地　日差山山塊の鷹巣山頂部に立地する。南東側 600 mの日差山頂部には日差山城跡が、尾根伝いに南側 800 m離れた仕手倉山頂部には練尾氏城跡が位置する。城の北側には造山城跡や庚申山陣跡を見下ろすことができ、さらに北東方向に備中高松城跡や石井山陣跡等を視認できる。

概要　城は大きく二面の曲輪で構成されるが、いずれも削平がやや弱く自然地形を多く残す。北側の眺望に非常に優れており、これが立地の主要因と考える。略長方形状の曲輪Ⅰは南側背後を幅広い堀切で分断し、郭面の南端に幅広の土塁が築かれていた。土塁の南側から東側にかけては、石材を４～５野面積みにした石積みを設ける。南側から東側にかけて、石積みは鈍角に屈曲する。ただし、この地点には日差寺の行堂が所在したという伝承もあり（文献 69『庄村誌』など）、石積みが築城に伴うか否かについては不詳とする見解もある（文献 73『新修倉敷市史　第二巻』）。曲輪Ⅰの西側２～３ｍ下方にある曲輪Ⅱは南側が 50㎝程一段高くなり、さらに南端は土塁状にやや高まっていた。北方は崖面となるため、なだらかな背後側のみ幅広く深い堀切で遮断して守りとした構造と評価する。

文献・伝承　『中国兵乱記』『陰徳太平記』には、天正 10（1582）年高松城攻めに際して毛利軍は日差山城に陣を置いたことがみえる。鷹巣城は日差山城と尾根伝いであり、距離も近く、高松側への眺望に優れていることから、当城に関しても天正 10 年の高松城攻めとの関わりが示唆される。（上栫）

写真 185　頂部から北東を望む

写真 186　土塁南西隅の石積み



第 360 図　鷹巣城跡縄張り図（1/2,000）

431　日畑（ひばた）城跡　　倉敷市日畑　　地図 27 右

立地　独立丘陵である向山から東へ派生した尾根頂部にあり、足守川に突き当たった麓に位置する。いわゆる「境目七城」の一つで、本城の南側に松島城跡・庭瀬城跡が、北側に加茂城跡が位置している。

概要　足守川の麓にある小高い丘が該当地で、頂部に比較的広い主郭を築き、その北西側と南東側に曲輪を配する。主郭の規模は、長さ約 50 m、幅約 25 mと比較的広い平坦面を有する。主郭両端の曲輪は小さく、現状で確認出来る遺構の全長は、約 80 mしかない。しかし『日本城郭大系』などでは、当地を「東ノ丸」といい、現在宅地と水田になっている西側を「西ノ丸」と言って評価している。その場合の城域は、200 m弱に達する。また周辺には「大手」「向屋敷」などの地名が残る。

文献・伝承　『備中村鑑』には、「日幡城」として日幡村にあり、日幡六郎兵衛景近が在城とある。『備前軍記』『中国兵乱記』『備中集成誌』などには、備中高松城水攻めの直前に、当城に毛利方から遣わされた上原右衛門大夫元祐（元将）が、羽柴方から遣わされた花房助兵衛と戸川平右衛門によって懐柔されている。上原氏は城主である日幡六郎兵衛をも引き入れようとしたが、反対されたためこれを討ち果たしている。

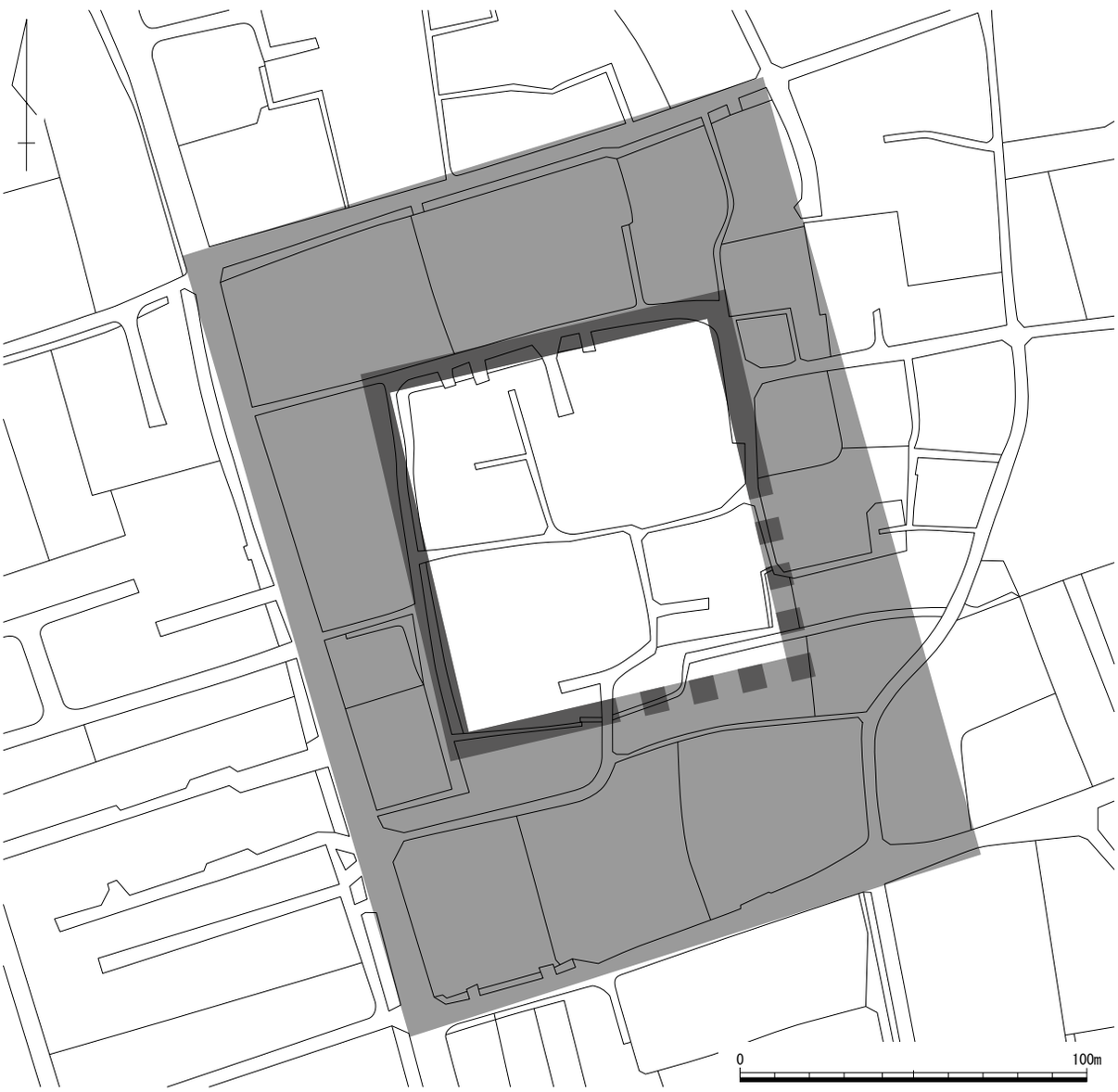
毛利輝元書状には、元亀３（1572）年に「日幡・賀茂・蛙鼻間被見合」と、当地周辺を伺う様子が書かれる（表 5 史料 92）。桂景信書状には、天正８（1580）年に辛川口の合戦の際に当城と鴨・松島城から出兵したと書かれる（表 5 史料 218）。羽柴秀吉書状には、天正 10（1582）年に羽柴方に寝返った上原元将の子を宇喜多氏が預かるように書かれている（表 5 史料 339）。　（小林）

第 361 図　日畑城跡縄張り図（1/2,000）

432　庄（しょう）城跡　　倉敷市上東　　地図 27 右

立地　倉敷市上東の平野部に位置する。城域の南約 500 mの位置に平松城跡が位置している。また、城域中央に現在、西方院という寺院が所在するが、この周辺の小字は「城の内」であり、その東は「南屋敷」と呼ばれ、何らかの城館に由来する地名と見られる。さらに東側には「右京進」、「左馬ノ介」など、家臣団の屋敷地であったことを類推させる小字の他、「鍛冶屋」など手工業者の存在を推定される小字も見られる。平地城館とそれに付随して家臣団や手工業者が集住するという、戦国期城館のありかたを探る上でも興味深い。

概要　城域周辺は現在住宅地となっており、旧観をほぼ失っている。しかし、城域西側には、条理区画に由来すると見られる水田地割が残るほか、西方院を南西の隅とする 100 m（1 町）四方の区画の一部も遺存している。城域の東側端のラインがどのあたりまで広がるか推定は難しいものの、「南



第 362 図　庄城跡平面図（1/2,000）

屋敷」の小字が残る、上東本村公民館付近で南へ折れる道筋があり、この地点を北東の隅と考えておく。従って、庄城は中央に 100 m四方の居館を構え、周囲に土塁（土居）、あるいは堀を構えた南北 200 m、東西 170 mほどの平地城館として復元可能である。ただ、平地城館として、その規模は備中国でも有数のものである。戦国時代後期に備中国に覇を唱えた三村氏の居館跡がほぼ同規模（東西 160 m、南北 250 m）であることから見ても、かなり有力な国衆・土豪層の居館と見るのが妥当であろう。

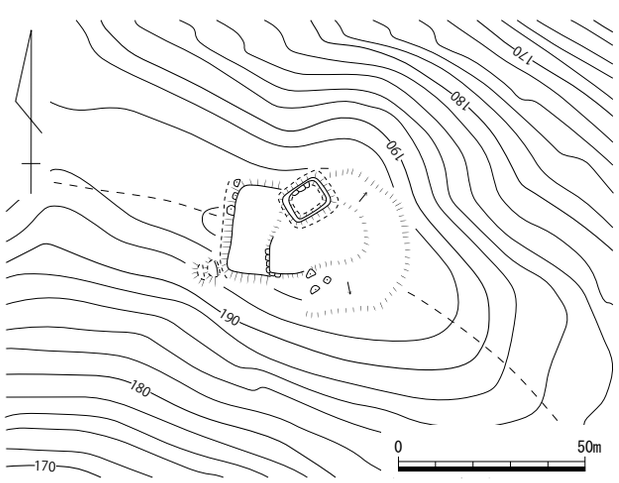
さて、庄城跡内では、西方院の本堂・客殿造営に先立って、倉敷市埋蔵文化財センターによる確認調査が実施されている。その成果によれば、当地点では鎌倉時代（13 世紀）以降に大規模な造成が行われ、掘立柱建物を伴う屋敷地となったとする。中世末までには瓦葺きの建物があったとされ、これに伴い、青磁や美濃焼など、上流階層の人々の嗜好品が出土している。以上を合わせて、この時期に「城の内」という小字に示される城館（庄城）が存在していたと推定している。その後寛永 13（1636）年に西方院の移転に伴い、庄城があった時期の遺構面は失われたと結論している。なお、中世末の時点ではまだ瓦葺きの建物は珍しく、特に平地城館で用いられた例はほぼない。続く近世初頭（天正末～文禄期）に下れば、岡山城跡を初めとして備中高松城跡（高松陣屋の前身）にも瓦の使用が見られる。庄城跡出土の瓦も、城郭建築に伴うものと見るか、城域に何らかの宗教施設があったと見るかにより、その重要性は変わってくるだろう。

文献・伝承　庄城跡について記す文献は存在しない。しかし、先述したとおり平松城跡に隣接している立地状況を鑑みれば、これとの有機的な関係を想定することは可能であろう。平松城は毛利氏に仕えた国衆、平松氏の居城と伝えられている。庄城跡についても同様に、戦国期に台頭した、在地有力国衆の城館と考えておきたい。　（和田）

433　日差山（ひさしやま）城跡　　倉敷市山地　　地図 27 左

立地　足守川西岸、総社平野の出口にそびえる仕手倉山から尾根伝いに北東 700 mにある日差山の頂部標高 200 mに立地。仕手倉山に練尾氏城跡、尾根続き 600 m北西の北端には鷹巣城跡がある。

概要　南北・東西 40 mの範囲に曲輪が 3 面存在する。中央部北側の曲輪は南北 15 m、東西 12 mの規模で、高さ 0.5 mの土塁で囲まれている。その南側曲輪は東西 25 m、南北 12 mほどで、南西隅には高さ 0.5 mの石積みが確認できる。さらにその西に南北 24 m、東西 10 mの方形の曲輪があり、その南西端には土塁かと思われる高まりが 2 か所認められる。曲輪群東側の地形改変は顕著ではない。土塁と石積みはこの地点に所在したとされる日差寺行堂跡に伴うものかもしれない。



第 363 図　日差山城跡縄張り図（1/2,000）

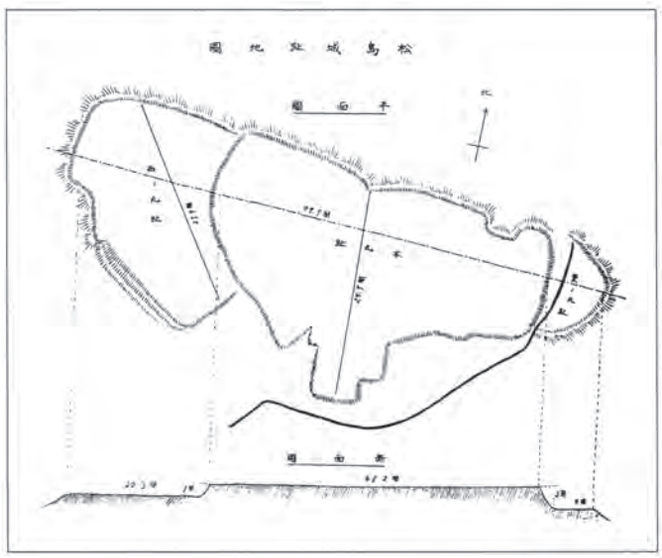
文献・伝承　『陰徳太平記』『中国兵乱記』などの近世軍記物には天正 10(1582) 年高松城水攻めの時に小早川隆景の陣が庇山（日差山）に置かれたという記載がある。　（氏平）

436　松島（まつしま）城跡　　倉敷市松島　　地図 27 右

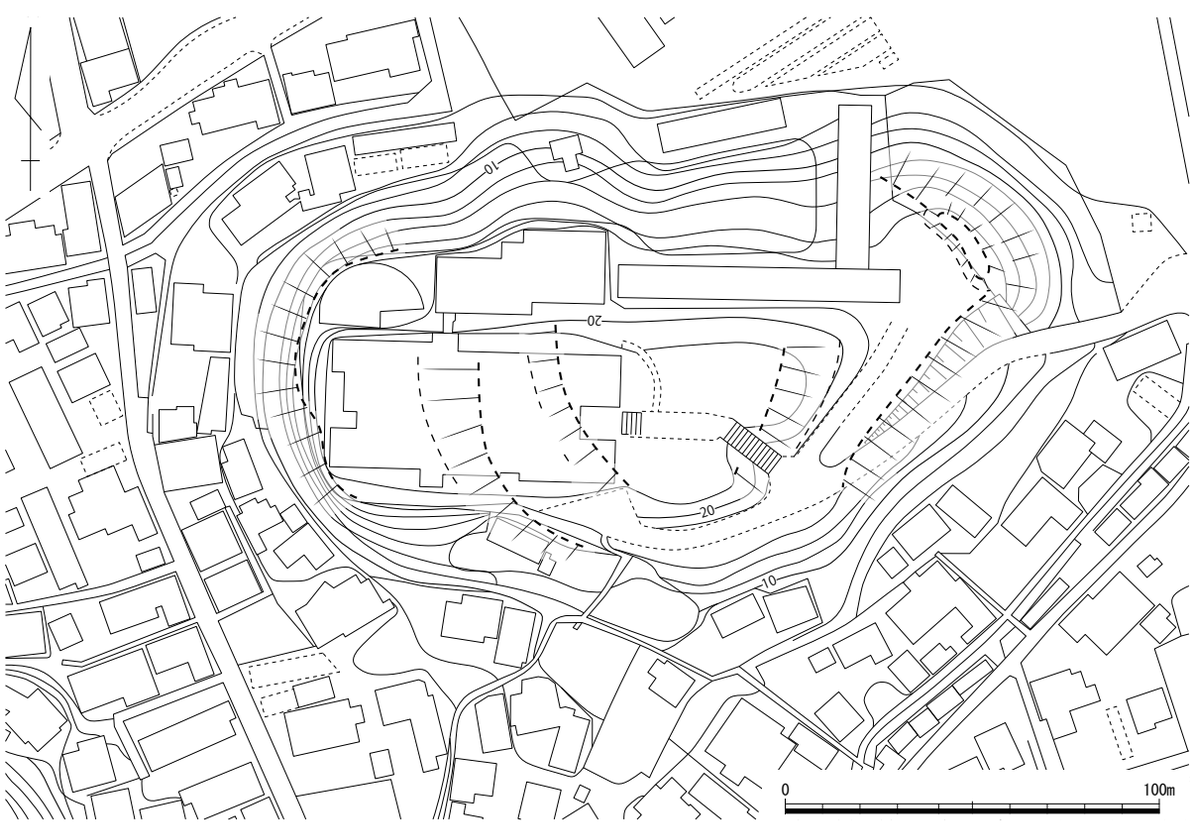
立地　川崎医療短大が建っている小高い丘の頂部が該当する。

概要　全域が地形改変されているが、1936 年の図面からは主郭がありその東西両脇に 1 面ずつ曲輪を配した計 3 面の城であったことが窺える。現在の地形から復元してみると、頂部の主郭は長さ約 90 mの規模で、主郭の東側の曲輪は、長さ約 40 mを測る。西側の曲輪は約 30 mを測り、これらの 3 つの曲輪の全長は、200 m前後になる。

文献・伝承　いわゆる備中の「境目七城」の一つである。『備中集成誌』には津宇郡松嶋村の「松嶋城」とあり、梨羽中務丞・番庄五郎が在城したとある。桂景信書状には、天正 8（1580）年に辛川口の戦いに当城から進軍したと書かれ、また吉川元春書状の内容から、天正 11（1583）年まで毛利方の城であったようだ。　（小林）



第 364 図　松島城跡 (犬飼孝平作成)　文献 73 より引用



第 365 図　松島城跡縄張り図（1/2,000）

第４章　歴史史料調査

凡例

・城が機能していた当時、関係者や見聞した人間が記した書状・日記その他の記録については、一次史料一覧表にまとめた。
・関係者自身やその子・孫が近世初頭に入って記述した覚書、比較的信頼できる中世軍記、近世初頭段階の地域住民の記憶を伝える文書など、リアルタイムの記録ではないが一次史料に準じる価値をもつ史料については、参考史料一覧表にまとめた。
・近世軍記については、史実に対する編集・改変や誤解・創作などを多く含んでおり、安易な利用が遺構の編年に齟齬を生じさせる恐れがあること、一つの出来事に関する叙述が大部に及び抽出自体が困難であることなどを踏まえ、本一覧表では調査・採録を行っていない。本報告書には軍記類の目録も掲出されると思われるので、その目録にしたがって各自で掲載書を読書されることをおすすめする。
・史料の配列と年月日について。史料には作成年代と内容年代とが一致しないものがある。例えば、史料の作成者が去年または数年前の出来事を振り返って記したもの（『鵜庄引付』など）、史料の作成者が老年になって自身の履歴や自身の関与した出来事についてまとめたもの（『赤松記』『牧左馬助覚書』など）、領主から依頼された禅僧などがある時点でその領主の履歴をまとめて記した賛文（『宇喜多能家寿像賛』）などがある。書状であっても、部下の去年の武功を翌年になって賞したようなものは、当然作成年と内容年にズレが生じる。こうした性質の史料が存在する点を考慮し、本一覧表では史料の配列・年月日覧の記載について、以下のような統一基準を設け、配列・年代記入を行っている。
　１.一次史料･参考史料ともに、史料内に記されている出来事の発生年次（以下、内容年）に沿って配列した。
　２.一次史料のうち、作成年と内容年にズレのあるもの、および参考史料の全てについて、年月日覧に（内容年）／（作成年）を記入した。
　３．賛文や覚書のように、一つの史料中に特定の人物が経験した出来事が一括して記述されているような史料については、出来事ごとに抽出した内容をそれぞれの発生年次に割り振った。
・史料の採録範囲について。古いものは平安末期の源平争乱期の記録（1,100 年代後半）、新しいものは織豊期から近世初頭に活躍した人物がおおむね死去する 17 世紀中盤ごろ（1,650 年代）までの史料を取り扱った（宇喜多秀家が死去するのが明暦元年＝ 1,655 年である）。新しいもののうち、内容が一次史料と一致し信憑性の高さが窺える記録については、一部 17 世紀後半にかかるものも採録した。特に池田家文庫に含まれる岡山藩士奉公書のうち、寛永～貞享年間に作成されたものには城館関係の有益な情報が豊富に含まれていることから、積極的に採録を行っている。
18 世紀以降については、それ以前に成立した各種史料・伝承の編纂期に当たり、完全に二次的史料の範疇に入るため、調査・採録ともに見送った。

・近世まで存続する城館に関する史料の扱いについては、城の起源が確実に中世・織豊期に遡るものに限定して収録対象とした。近世を通じて存続した岡山城については、全時代の史料を網羅することは困難かつ本書の扱う範囲を超えているので、中世・宇喜多・小早川氏段階の史料に限定して収録している。備中松山城についても、今のところ中世・毛利氏段階までの史料に限って収録している。津山城については、中世史料が全く残されておらず先行する中世城館があったかどうか確証がないこと、実質的に近世初頭の新規築城であることを鑑み、史料の採録を見送った。下津井城のごとく近世初頭の段階で廃絶した事例については、現在把握できる史料を悉皆的に採録した。なお、陣屋・代官所・台場については、今回史料の採録そのものを実施していない。
・中世文書においては、城名をもって城主の代名詞とする文法がしばしば用いられる。これらは本来城主の動向を示す史料ということになるが、城主の動向は城の歴史・使用主体と直結するものであるため、こうした文法で城名を記す史料についても全てではないがその多くを収録している。
・加茂崩れ・八浜合戦など、一部の著名な合戦関係史料については、文中に城名が記されていないものも参考までに収録している場合がある。
・都市・城下町にかかわる史料、城・陣として利用された実績のある山岳寺院の史料、荘園経営の拠点である政所に関する史料も一部収録した。特定の領主と結びつく可能性のある屋敷・土居などの記述がみえる史料も採録したが、必ずしも居館的なものを表現したものではない可能性もあり、あくまで参考史料と考えていただきたい。
・中世文書のうち、書状類のほとんどには年紀が記載されていない。一覧表収録にあたっては、これらの史料を収載する資料集の年代比定に従って各史料の年代を決め配列しているが、近年の研究進展で年代比定がより確実なものに改められたものについては、最新の成果を反映させて配列を行った。また、特に研究成果のないもの・既存の研究成果が存在するものでも編者の検討の結果従来の年代比定を改めるべきと判断したものについては、適宜よりふさわしい年代を与え、配列を行った。
・上述のような作業によっても現状では確実な作成年を特定できない史料については、発給者の死去・没落時や勢力交代の画期など適宜の時点で、年未詳文書としてまとめて掲載している。
・本来縦書きの史料を横書きで表記するため、次のような基準を設けた。
　1．引用した史料原文に割注・傍注・挿字が含まれる場合は、割注・傍注が付されている語句の直後に《割注：○○》《傍注：○○》、挿字箇所に《○挿字：○○》と表示した。
　2．古文書独特の長い繰り返し記号（「く」を縦長にしたような記号）は、「〳〵」に置き換えて示した。
　3．刊本に編者による注が施されている場合は、注の対象となる文字列の直後に〔　〕で括った注記を挿入している。校訂注によって異本の語句を示している場合は、〔異本：○○〕と表記した。底本の本文に異本にしかない語句を挿入している場合は、挿入箇所に〔○異本：○○〕と表記した。
　4．本資料編の編者が独自に注を付す場合は、注の対象となる文字列の直後に【　】【異本：○○】と記述して示した。底本の本文に異本にしかない語句を挿入する場合は、挿入箇所に【○異本：○○】と表記した。
　5．見せ消しについては、訂正後の語句のみ二重下線引きで表示した。訂正前の語句については出典書を確認願いたい。

・各史料については、専門家・研究者のみならず広く一般の読解の便をはかるため、抄録部分について逐一現代語訳を載せている。わかりやすさを優先して大きく意訳を進めており、編者の能力の問題もあって万全の訳となっていないと思われるが、史料内容の大まかな把握は可能になっているはずである。

・以上のような編集状況をふまえ、利用者諸賢におかれては、年代比定・内容意訳など各自適否を検討された上で利用されることを希望する。

・一次史料一覧表、参考史料一覧表に続いて、引用文献一覧表を掲載した。一次史料一覧表、参考史料一覧表の再右列にある文献番号は、この引用文献一覧表の文献番号に準じている。なお、引用文献番号は史料読み仮名を 50 音順に並べたものである（順不同）。　　（畑　和良）

表 5　一次資料　一覧表

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
1	俊増書状／山城三聖寺文書	備中二万郷地頭殿 御政所 ※当文書の宛所	児島新熊野在庁の俊増が、自身の領有する二万郷内の新熊野社神領の作物が郷内の人間に刈り取られたことを、二万郷地頭の政所に訴え出たもの。	備中二万郷地頭殿 御政所（場所未詳）	□（新）熊　野在庁俊増	文永元年八月六日	1264年	13・25
2	六波羅下知状／熊谷家文書	庄松王丸代国秀与伯父又太郎親資相論亡父敬願遺領事、（中略）敬願遺領等、不漏壱所、以参分弐、為松王丸分領、以参分壱、可為親資分領、（中略）但、遺領内摂津国久貞名御位田下司職并備中国草壁庄東方之地頭屋敷《割注：但、就屋敷畠壱町余在之、》者、参分壱之外也、親資可令領知之	庄敬願の没後、その遺領相続をめぐって敬願の子庄松王丸と敬願の兄弟庄親資とが争った。これを鎌倉幕府の六波羅探題が裁定したもの。遺領の３分の２を松王丸が、３分の１を親資が相続し、これとは別に摂津国久貞名の権益および備中国草壁庄東方に存在する地頭屋敷を親資が相続することが決められている。	備中国草壁庄東方之地頭屋敷（場所未詳。224庄氏館跡に関連）	遠江守平朝臣（北条時範）・越後守平朝臣（金沢貞顕）	嘉元三年六月十二日	1305年	77
3	六波羅下知状／九条家文書	東福寺領備中国上原郷地頭代宗覚申、当国在庁重氏（中略）以下輩乱入当郷、致刃傷追捕狼藉由事（中略）右、当郷地頭職者、去永仁七年自関東御寄附地之間、長日不退御祈祷、無退転者也、至国衙年貢者、為地頭請所、国衙使者入部之儀無之、而在庁重氏以下輩、引率数多人勢、乱入当郷、追捕地頭政所并民屋、剰刃傷寺家下部松夜叉法師之旨、宗覚就訴申	備中国上原郷地頭職は永仁七年に鎌倉幕府から寄付されて以来東福寺の荘園で、その見返りとして幕府に対する祈祷を怠らなかった。国衙に納付すべき年貢も、地頭である東福寺側が請負っているから、国衙側の使者が取り立てのために入部してくることはなかった。それなのに、国衙在庁の重氏らが多人数を率いて上原郷に乱入し、地頭政所と百姓の家屋を制圧した上、東福寺の下部を刀で傷つけた。当文書は、この事件について、東福寺側の地頭代宗覚からの訴訟を受理した鎌倉幕府の裁決書。	地頭政所（場所未詳）	武蔵守平朝臣（金沢貞顕）・越後守平朝臣（北条時敦）	正和二年七月二十七日	1313年	13・96
4	氏名未詳申状案／壬生家文書（官務所領関係雑文書二）	殿上熟食米料所備中国隼嶋保間事　右、当保者国衙進止本所一円之地、吉備津宮神供幷殿上熟食米之料所也、（中略）先雑掌定宗・観成已下輩、籠置悪党於城墎、不入立使者之間、可沙汰居当雑掌之旨、被仰武家畢	備中国隼嶋保に関する史料。隼嶋保は備中国衙が一円支配する場所で、吉備津神社の神供・殿上熟食米の料所に指定されていた。しかし、以前隼嶋保の雑掌を勤めていた定宗や観成らが悪党を集めて城郭に籠もらせ、使者の入部を拒んだため、現在の雑掌に隼嶋保を引き渡すよう鎌倉幕府より命令が出された、という。	城墎（場所未詳）※現実に存在する城館ではなく抽象概念としての「城郭」である可能性もある		元亨三年ごろ	1323年	13・97
5	足利尊氏御判御教書／肥前深堀文書	備中国福山・備前国三石・播磨国赤松凶徒等、去十八日没落	備中国福山城・備前国三石城・播磨国白旗城を囲んでいた敵軍が、去る五月十八日に撤退した。	備中国福山（415福山城跡） 備前国三石（〈備前162〉三石城跡）	（足利尊氏）	建武三年五月二十五日	1336年	13・53・101
6	少弐頼尚書状案／肥前深堀文書	備中国福山・備前国三石・播磨国赤松凶徒等、十八□〔日〕没落	備中国福山城・備前国三石城・播磨国白旗城を囲んでいた敵軍が、五月十八日に撤退した。	備中国福山（415福山城跡） 備前国三石（〈備前162〉三石城跡）	太宰少弐頼尚	（建武三年）五月二十五日	1336年	13・53・101
7	吉川経時軍忠状案／吉川家文書	吉河小次郎経時申、右、今年《割注：建武三》五月十八日、於備中国福山城大手、懸先致合戦、追落候了、（中略）然早為後証下給御判	吉川経時（小次郎）は建武三年五月十八日、備中国福山城の大手で先駆けして合戦を挑み、敵方を追い落とした。こうした武功を足利氏重臣の高師泰に報告し、後の証拠となるよう御判（花押）を捺してくれるよう願ったもの。	備中国福山城（415福山城跡）	吉河小次郎経時	建武三年六月十六日	1336年	13・53・72

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
8	楯原光良軍忠状写／正閏史料一之下	楯原小三郎光良申、（中略）一五月十八日、備中国福山合戦抽忠節候条、高尾張権守見知了、（中略）然早賜御証判、欲備末代亀鏡、以此旨可有御披露候	楯原光良が足利尊氏に対し、建武三年上半期に自らが立てた武功を上申し、確認の証判（花押）を捺してくれるよう願ったもの。五月十八日の備中国福山城合戦の際、光良は足利氏重臣の高師泰（尾張権守）の指揮下に入って活躍したという。	備中国福山（415福山城跡）	楯原小三郎光良	建武三年七月五日	1336年	53・102
9	斯波高経吹挙状／前田尊経閣文庫所蔵天野文書	天野安芸三郎遠政申、去五月十八日奉属当御手、押寄備中国福山城、致合戦之条、須山二郎・小蔵大弐房、同所合戦之間、所令見及也、然者賜御判、可備後証候	足利氏重臣の斯波高経が、配下の天野遠政（安芸三郎）の武功について足利尊氏に上申し、後日の証拠とするため御判（花押）を捺してくれるよう依頼したもの。これによれば、天野遠政は足利軍に味方して五月十八日の備中国福山城攻撃に参戦し、須山・小蔵氏と一緒に奮戦したという。	備中国福山城（415福山城跡）	（斯波高経）	建武三年七月日	1336年	53・102
10	周布蓮心軍忠状写／『閥閲録』巻百廿一之一　周布吉兵衛	備中国於福山合戦《割注：建武三五月十八》、致散々合戦之時、蓮心被射貫右膝被疵畢是一、次家子大弐法橋頼丹若党荒木刑部太郎宗澄等令討死畢是二、（中略）御見知之上者、任実正可有御注進候	後醍醐天皇方に味方した石見国の武士周布蓮心が、脇屋義助に自らの武功を報告し、朝廷への注進を願ったもの。蓮心は五月十八日の備中国福山城合戦で城方として奮戦し、自身が右膝を射抜かれて負傷した他、従者が討死したという。	福山　（415福山城跡）	石見国周布郷惣領地頭彦次郎入道蓮心	延元元年七月日	1336年	53・108
11	小早川頼重請文写／『閥閲録』巻百廿一之一　周布吉兵衛	石見国周布彦次郎入道蓮心、備中国福山城軍忠事、所進目安無相違候、若此条偽申候者、可蒙仏神御罰候	小早川頼重（民部丞）が、備中国福山城合戦での周布蓮心の活躍が、本人の言うとおり間違いないことを保証したもの。	備中国福山城（415福山城跡）	（小早川）民部丞頼重	（延元元年）七月二十九日	1336年	53・108
12	周布蓮心軍忠状写／『閥閲録』巻百廿一之一　周布吉兵衛	備中国福山合戦之時、被自身疵《割注：右膝被射貫》、家子大弐法橋頼丹若党荒木刑部太郎宗澄打死、中間両人被疵畢、（中略）為斎藤五郎兵衛尉奉行上者、重給御挙状、申進存候	周布蓮心が、以前報告した備中国福山城における自身の活躍について、再度軍忠状を書いて脇屋義助に提出し、担当奉行の斎藤五郎兵衛尉への取次を頼んだもの。	備中国福山（415福山城跡）	（周布彦次郎入道）沙弥蓮心	（延元元年）九月二十七日	1336年	53・108
13	山内土用鶴丸代時吉言上書／山内首藤家文書	土用鶴丸依為幼少、差進代官時吉於御方、備中国福山御合戦以下、去年六月山門責、其後度々御合戦之時、属尾張守殿御手、抽軍忠之条	山内家当主土用鶴丸が幼少なので、代官の時吉を味方に参上させ、備中国福山合戦から去年六月の比叡山攻めまでの度々の合戦において、尾張守（高師泰）の指揮下に入って軍忠に励んだ。	備中国福山（415福山城跡）	山内土用鶴丸代時吉	建武四年三月	1337年	53・78・80
14	新熊野長床雑掌勝慶言上状／古文書集二	於当社領備中国万寿本庄、同国守護南遠江守宗繿〔継〕代赤見兵衛尉時基率松本左衛門二郎種門□〔已〕下悪党等数多人勢、去月廿五日乱入当庄名主百姓等住宅数十宇、令追補灯油仏聖已下神用米銭并資財雑具、結句居住政所押妨所務条、希代悪行狼籍也、	新熊野社領の備中国万寿本庄に、守護代赤見時基の率いる悪党らが乱入し、名主百姓の住宅や神用の米銭・資材道具を奪い、最終的には政所に居座って強引に荘園を支配した。	（万寿本庄）政所（場所未詳）	新熊野長床雑掌勝慶	貞和二年閏九月	1346年	13・53
15	足利尊氏御判御教書写／相州文書廿二	備中国笠岡凶徒退治事、被聞召訖、尤以神妙也	備中国笠岡において佐藤中務丞が敵を退治したことにつき報告を受けた尊氏が、その働きを褒めたもの。	備中国笠岡（249笠岡山城ヵ・254笠岡城跡ヵ）	（足利尊氏）	観応元年十二月十八日	1350年	13・81
16	岩松頼宥書状写／『福山志料』三十二所収鼓氏文書	於備中国荏原高越城、自去十月廿九日、迄于同十二月二日度々合戦（中略）致軍忠之条尤神妙	備中国荏原の高越城で、去る十月二十九日から十二月二日まで合戦し、軍忠を尽くした三吉覚弁の働きを褒めたもの。	備中国荏原高越城　（191高越城跡）	僧頼宥（岩松頼宥）	正平六年十二月十九日	1351年	82
17	岩松頼宥書状／毛利家文書（『閥閲録』巻八之二　福原対馬にほぼ同文あり）	荏原城事、既自去廿一日取廻、万方合戦最中候処、上楯五郎、宮平太郎以下、為後詰寄来之由風聞候歟、早々御出対候者可宜候哉	備後国守護の岩松頼宥が、長井貞頼（出羽前司）に与えた書状。荏原城を去る二十一日から包囲し手を尽くして合戦している最中だが、上杉五郎・宮平五郎（盛重）らが後詰のため来襲するとの風聞があるという。そうだとすれば、早々に出陣して対応してくだされればありがたいがどうだろうか、と述べている。	荏原城　（191高越城跡ヵ）	僧頼宥（岩松頼宥）	正平六年十二月二十六日	1351年	13・70・82・106
18	山名時義書状写／臼杵稲葉河野家文書	庄四郎□要害則令退治候之間、就公私悦存候、今月二日罷着当浦候、（中略）児島発向之事、時分自是可令申候、程近候へハ、細々可申通候	山名時義が伊予国の河野通直に送った書状。備中国の庄四郎の要害をすぐに攻略できたことを喜んでいる。また、八月二日に瀬戸内沿岸のどこかの浦に着陣したことを伝え、児島に出陣する際はこちらから河野氏に連絡し、お互い距離も近いので細々としたことまで申し入れたい、と述べている。	庄四郎□要害（227猿掛城跡ヵ）	（山名）伊予守時義	（康暦元年ヵ）八月六日	1379年	6・53

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
19	長井能里申状案／田総家文書	今度御進発于当国之由就承及、閣鎮西九箇年之軍忠、上鞭馳参之刻、奉逢備州庄入道城攻之御合戦、致涯分之忠節者也	備後国の国衆長井能里が幕府に提出した言上書。このたび幕府軍が備後国に進発すると知った能里は、九州での九ヶ年にわたる苦労を顧みず、幕府軍の陣に馳せ参じた。すると、ちょうど幕府軍が備中国の庄入道の居城を攻撃しているところに行き逢ったので、この城攻めに参戦してずいぶん忠節を尽くした、とある。	備州庄入道城（227猿掛城跡ヵ）	（長井）能里	康暦三年二月	1381年	54・132
20	猿吟集	細川右典厩源公是歳屯兵備中二万山側城未及攻蟊賊既平然宿留久矣	この年、細川右馬頭が備中国二万山へ軍勢を駐屯させ、付近の城を攻めようとしたが、まだ攻撃が始まる前に敵方の動きが収まったため、しばらく宿営していた。	備中二万山側城（備中国二万郷の近在にある城、の意ヵ）	惟忠通恕	南北朝末期	14世紀後半	63
21	竜谿院永広書状案／九条家文書	栄松和尚も守護所へ御出候て、堅御侘事共被召候、一途候て追而注進可申候	永広が東福寺に宛てて出した書状の案文。栄松和尚という僧侶が、備中国守護所に出向き、何事か申請を行っており、それがうまくいったら追って報告する、と述べている。	守護所（場所未詳）	（竜谿院）永広	（享徳三年ヵ）十一月五日	1454年	59・96
22	新見庄上使乗観祐成・乗円祐深連署注進状／東寺百合文書え函二八	一、当庄の界ハ、長さは七里也、よこは一里、皆＼／山家也、中に川有之、西・南御寺領、東ハ地頭方也、守護所へハ十五里の山をへたつ、（中略）一、国衙の御代管事、以前ハ安富入道、当年よりハ薬師寺方也、（中略）たちめと□〔申〕所に、国衙政所候也	東寺の上使二人が、備中国新見庄の概要についてまとめたもの。荘園は長さ７里・横１里の大きさで、中央に川がある。西と南が寺領で、東は地頭方の支配地域である。守護所は新見庄から１５里（約５８キロ）ほど離れた場所にある、という。備中国衙領の代官は以前安富氏が務めていたが、今年からは薬師寺氏が務めている。たちめ（多治部）という場所に国衙政所が設けられているという。	守護所（場所未詳） 国衙政所　（60田治部国衙政所跡）	（乗観）祐成・（乗円）祐深	寛正二年十一月十五日	1461年	11
23	『雅久宿禰記』	備中国御室領吉備津宮神主職事、細川守護給之地也、而御室理称院相語松田菅宗□【徒ヵ】□□暁強入部、両方死人手負在之、猶不引退、弐千余人取上山上張陣云々	備中国の仁和寺領である吉備津宮神主職は、もともと守護細川氏が掌握していた。ところが仁和寺理性院が松田菅氏と語らって強引に入部し、松田・細川両軍に死傷者が出た。松田軍はなお退却せず、二千余の兵が山上に陣を張っている。	山上張陣（場所未詳） ※松田軍の陣		文明八年九月十三日	1476年	13・84
24	『蔭涼軒日録』	就備中之事有広説云。去月廿八日有大合戦。太守上総介殿見獲勝利。庄伊豆守捨城没落。玄蕃亦被五ヶ所疵。与庄同没落。香西五郎左衛門尉於城切腹。自讃岐香西所召具之軍兵大半討死。備前之合力勢致功如此云々。然者菅城亦可敗績云々。	三月二十八日、備中国で大合戦があり、守護細川勝久（太守上総介）が勝利した。庄元資（伊豆守）は城を捨てて没落し、上野元氏（玄蕃）も五か所の傷を負って庄と一緒に敗走した。香西五郎左衛門尉は、城に残って切腹した。讃岐国から香西氏が連れてきた軍勢の大半が戦死した。備前国浦上氏の援軍が手柄を立てたのだと言う。そうであれば、菅城もまた敗北するだろうと言われている。	庄伊豆守城（227猿掛城跡ヵ・224庄氏館跡ヵ） 菅城　（〈備前178〉富山城跡ヵ・〈備前43〉金川城跡ヵ）	亀泉集証	延徳四年四月六日	1492年	53・62・134
25	『蔭涼軒日録』	夜来茂叔来話。勧盃打話。々及備中事。香西五郎左衛門討敵三人切腹。同朋一人猿楽一人相伴切腹。自余衆皆北失云々。玄蕃頭被疵在城云々	夜来、茂叔和尚が来て話していると、話題が備中のことになった。香西五郎左衛門は敵三人を討って切腹し、同朋一人と猿楽の役者一人が一緒に腹を切った。他の人々はみな脱走したが、上野元氏（玄蕃頭）は傷を負いながら城にとどまっている、という。	城　（227猿掛城跡ヵ・224庄氏館跡ヵ）	亀泉集証	延徳四年四月七日	1492年	53・62・134
26	氏未詳明重書状／東寺百合文書サ函二八一	新見殿、徳光殿と御喧[口＋花]、時宜共付、今分ニ候ハヽ、西方も定可及破候哉、（中略）多治殿〔マヽ〕ハ徳光殿と御合力可有ニて候、旁左様のため城をこしらへ候	明重が妹尾重康（太郎左衛門尉）・堀辺弥四郎に送った書状。当時備中国北部では新見氏と徳光氏とが抗争（喧嘩）しており、今のような状況だと新見庄西方も混乱に巻き込まれるだろうと述べている。また、多治部氏は徳光氏側に味方しており、こうした紛争に備えて各人が城を築造しているという。	城 ※新見庄内の諸城を指す	大和守明重	（年未詳）卯月三日		11

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
27	新見国経書状／東寺百合文書ゆ函七八	国方にて候つれ共、当城まてハ不取懸候、可御心安候、（中略）去八月十六、国方并多治部申合、伊達方与我等かたへ取懸候、九月十三、当庄於西方、及合戦、敵猛勢候条、失利、弟候三郎討死仕候、然間、伊達方城、唐松も落居候、爰元一向、無正躰式候処、伊達方申合、去月廿八日夜、唐松要害切取、敵伊達遠江守子両人討捕、其外数多討捕候間、先弓箭之趣、可然成行候、九月十三日、領家三職衆之家、其外悉放火候、無是非躰候、三職衆も未当城籠候、西方里分悉小屋ニ籠候、地頭分も同前候	国経が東寺に新見庄周辺の情勢を報じた書状。去る八月十六日、国方（守護勢力）と多治部氏が共謀して、伊達氏と新見氏の支配地域に攻め込んできた。九月十三日、新見庄西方で合戦してこれを防いだが、敵の勢いは激しく、味方は利を失って敗北し、国経の弟新見三郎が討死してしまった。伊達氏の居城唐松城も落城してしまった。このため、当地方は混乱した状態だったが、国経らは伊達氏と相談して十一月二十八日の夜、唐松城を攻撃して奪還し、敵方についていた伊達遠江守の子息二人をはじめその他数多の将兵を討ち取って味方有利の情勢となった。しかし、九月十三日には新見庄領家方の三職衆の家が放火され、残念な状態になっている。三職衆もいまだ当城（新見氏の居城）に籠っており、新見庄西方・地頭方の住民もことごとく小屋（戦時の避難用の施設）に立て籠もっているが、今のところ守護勢力の軍勢が当城に攻めてくる様子はないので、安心してほしいと伝えている。	当城　（8楪城跡ヵ） 唐松要害　（66甲籠城跡） 三職衆之家（24金子氏屋敷跡など） 小屋　（26宮田山城跡ヵ）	新見蔵人国経	（永正十二年）十二月十三日	1515年	11
28	新見国経書状／東寺百合文書ゆ函五七	去年者、此方不思議ニ弓箭出来候、三職衆、其外之地下人等、于今無還住、小屋籠仕候躰候間、御公用等、最少分寺納申候	上記に関連して、国経が東寺に送った書状。去年は当地方で思わぬ合戦が発生し、三職衆やその他の住民たちがいまだに集落へ戻ってこず、小屋（戦時の避難用の施設）に立て籠もったままだという。そのため、東寺への年貢（御公用）も少量のみの納付になってしまった、と述べている。	小屋　（26宮田山城跡ヵ）	新見蔵人国経	（永正十三年）三月二日	1516年	11
29	新見国経書状／東寺百合文書ニ函二四〇	此方之儀、于今無意途、小屋こもり仕候式候、無為之在所之様被仰候事、不被御心得分候哉、無御心元存候	上記に関連。国経は東寺に対し、新見庄周辺での戦乱が終息せず、庄民が小屋籠りしていることを再度報告し、東寺側が新見庄を特に問題のない在所であるかのように言うのは、事情をよくわかってないのではないか、心許無く感じる、と苦言を述べている。	小屋　（26宮田山城跡ヵ）	新見蔵人国経	（永正十三年）三月二十六日	1516年	11
30	新見国経書状／東寺百合文書ゆ函六七	去七月までハ、領家、宮田近所候、相城申付、日夜国方与取相候、其段者三浦方調法候て、多治部徳光以下とハ和与仕候へとも、于今国方衆競望之子細共候て、取相事候	新見国経は、去る七月まで新見庄領家方に「相城」を設け、日夜備中国守護の勢力と合戦していた。三浦氏の調停のおかげで多治部・徳光氏とは和睦できたが、今はまた守護勢力の人たちと競合している。	相城　（場所未詳）	新見蔵人国経	（永正十三年）十月十九日	1516年	11
31	新見国経書状／東寺百合文書ゆ函七九	尚々、当年も七月まて、領家分ニも、相城申候て、取相候つる間、敵味方両方共不作候、（中略）去年以来、此方取相事、（中略）自国方、内郡悉皆仕詰、領家分事も、三村与次ニ為守護、被出候間、以其筋目、可有押領、覚悟候而、于今、不捨置、違乱候	上記に関連。去年以来この七月に至る備中国の紛争について、国経が東寺に伝えたもの。国方（守護）が備中国内郡（備中国を南北に分けた北半分）に進出し、新見庄領家分も守護から三村与次に所領として給与されてしまった。三村氏はこれを根拠に新見庄の押領を企て、今もあきらめずに侵犯を繰り返しているという。そのため今年も七月まで新見庄の人間は領家分に相城を設けて守護側と合戦しており、敵味方とも不作に陥っている、と伝えている。	相城　（場所未詳）	新見蔵人国経	（永正十三年）十二月十五日	1516年	11
32	新見政直書状／東寺百合文書ゆ函八〇	当国寺社本所、不残一所、自国、押領仕候、西方へも、去年上候て、所務仕候ハんと申処を、此方相支、及合戦候て、三郎方、其外親類被官、悉討死仕候て、剰在所を悉発向仕候而、一向不作候、雖然、当座敵をしのけ、于今、在城候て、去年者、少々分にて候へ共、寺納被申候	新見政直が備中国新見庄の去年の状況について、東寺に報じたもの。備中国の寺社本所領は残らず国方（守護側の勢力）が押領し、新見庄西方にも支配の手を伸ばしてきた。そこで自分たちが防衛のため合戦に及び、新見三郎をはじめ多くの親類・被官が討死してしまった。また、在所の人間をことごとく動員したので、その年は不作になってしまった。しかし、当座のところは敵方を退け、今に至るまで在城し、去年は少量ながら東寺に年貢を納入できた、という。	（8楪城跡ヵ）	新見又三郎入道政直	（永正十三年）十二月十六日	1516年	11
33	新見国資（国経ヵ）書状案／東寺古文零聚二	国衆三村、拙者知行分所可押領仕之由申、去九月末時分より、内郡へ打上候、去六日及合戦、依仍敵猛勢失利、弟候善成寺、其外親類、被官人数多討死仕候、然間其競ニ、西方里分悉地頭分も、当城麓迄発向仕候、三職之内金子左兵衛尉討死仕候、（中略）雖然当城堅固相拘候間、雲州伯州以合力、可達本意覚悟候	九月末に三村氏が新見国資の所領に攻め込み、去る閏十月六日合戦となった。三村軍の勢いが激しく、国資の弟をはじめ一族家臣が討死した。これに乗じて新見庄内西方里分・地頭分も、当城の麓まで出陣し、新見庄三職の一人金子左兵衛尉も戦死した。この状況に対し、国資は城を堅固に守り出雲・伯耆の協力を得て本願を達する決意を示している。	当城　（8楪城跡ヵ）	新見国資（国経の誤写か。『岡山県史』家わけ史料658頁所載の包紙を参照のこと）	永正十四年閏十月二十四日	1517年	85

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
34	陶興房書状／平賀家文書	備後両宮、并備中衆已下相動、野部新城八鳥両城切捕由候、先以可然候、此砌可加勢之旨、従直通切々申来候	大内義興の宿老陶興房が、安芸国衆の平賀弘保（平賀尾州）に送った書状。大内方の備後両宮（久代宮氏・小奴可宮氏）と備中衆が共同作戦を行い、備中国内の野部新城・八鳥城を攻略した。この戦勝について興房は満足の意を示し、備後国衆の山内直通から大内氏に対し加勢依頼が来ていることを平賀弘保に伝えている。	野部新城　（38育野古城跡） 八鳥　（37西山城跡）	（陶）興房	（大永八年ヵ）三月二十三日 ※年次は魚屋翔平論文の見解に従った	1528年	3・77・108
35	短刀銘	備中国高山住石川左衛門尉幸久作	備中国幸山城（高山）に住む石川幸久が、自ら作刀したことを示す銘文。	高山　（414幸山城跡）	石川左衛門尉幸久	天文二年八月	1533年	53・134
36	日近村善修寺領坪付／福武家文書	一反廿代　日近屋敷	善修寺領となっていた土地の一筆ごとの面積と耕作者ないしは用益を記したもの。この項目は日近氏の屋敷として使われていることを示す。	日近屋敷（542善修寺館跡ヵ）		天文三年閏正月二十日	1534年	9・13
37	渡辺氏先祖覚書／川合家文書	可さ岡陣を直通御取退候而、十日計より陶山方ヲ取繰既三吉殿息女を以縁変ニ取成、剰於草土直通其外作日今日至責詰候、強敵之陶山方与太参会候、彼祝言参会以下のくらふ〔苦労〕一分にて取賄申候	備後国草戸の国衆渡辺兼が、先祖と自身の体験について書き留めた記録。十六世紀初頭ごろ、備後国衆山内直通が笠岡城を包囲したものの攻めきれず陣を解いて撤退する事件があった。山内軍撤退から十日ほど経ったころ、渡辺兼は笠岡城主陶山氏と交渉し備後国衆三吉氏の息女を陶山氏に嫁がせることで備後衆と備中衆との講和を取り持った。そして、自身の本拠である草戸（草土）において、山内直通と昨日今日まで直通が包囲していた強敵の陶山氏との参会を実現させた。こうした婚姻や山内・陶山氏の会見は、渡辺兼が一人で取り仕切った、という。	可さ岡陣　（254笠岡城跡）	渡辺越中守兼	天文三年午六月二十日	1534年	45
38	刀銘	備中国高山住石川左衛門尉幸久作	備中国幸山城（高山）に住む石川幸久が、自ら作刀したことを示す銘文。	高山（414幸山城跡）	石川左衛門尉幸久	天文六年八月二日	1537年	53・134
39	尼子氏奉行人連署奉書写／『美作国諸家感状記』真島郡栗原村杉小左衛門所持文書	今度吉固屋表忠儀之条、於訾部内何之名職より共扇分所弐拾俵、辻可申遣候由御意候	吉固屋における合戦で尼子氏に味方して手柄を立てた杉氏に対し、訾部のうちで所領を給与するとの尼子氏の意思を伝達したもの。	吉固屋　（場所未詳。吉に所在の城館＝333名称未定城跡・349名称未定城跡などを指すか）	阿部左近亮久職・屋葺七兵衛幸保	天文六年十一月二十日	1537年	36
40	『鹿苑日録』天文八年九月十二日条	金書記来云。自備中検校上洛云。尼子自七月至備中松山之城責之。国中錯乱。下向事相延云々。（後略）	相国寺鹿苑院主の日記。鹿苑院主のもとに金書記が訪れ、備中国から上洛してきた検校からの報告がもたらされた。それによれば、尼子詮久が天文八年七月から備中松山城を攻撃しており、備中の国中が錯乱状態になっているとのことだった。	備中松山之城（158備中松山城跡・大松山城跡）		天文八年九月十二日	1539年	137
41	岩屋寺快円日記	此砌、作州篠尾中村殿没落、追討八百人、築田ノ城三浦殿落居、大勢被討畢、アサ井ノエキ殿大勢被討畢、尼子民部様、如此御高名、同亀井殿・河本殿ナリ	天文十年五月ごろ、尼子詮久が亀井・河本氏らを率いて美作・備中国へ攻め込み、篠尾の中村氏、月田城の三浦氏、訾部の植木氏を破って大勢を討ち取った。	作州篠尾（場所未詳） 築田/城　（〈美作54〉月田城跡）	快円	天文十年五月三日	1541年	1・36
42	細川通頼（通董）感状写／『備中記』浅口郡道越村大嶋猪介所蔵文書（『黄薇古簡集』巻第十五・備中浅口郡にも同文の写しあり）	去十五日於柏嶋政所山及一戦、太刀打頸討捕、粉骨働無比類候	十一月十五日、備中国浅口郡柏島の政所山で細川通頼が敵（大内義隆軍ヵ）と戦った際、敵と太刀打ちして首級を挙げた大島彦十郎の手柄を褒めたもの。	柏島政所山（311森本松山城跡）	通頼（細川通董）	天文十八年十一月二十六日	1549年	15・114
43	毛利元就書状／小寺家文書（『閥閲録』巻四十六　小寺忠右衛門に写しあり）	就備中表之儀、従沼田生口・瀬戸・末長其外人数、急度至手城差上候、龍王相談可相動由候、此時其方之儀罷上、彼儀調略肝要候	元就が備後国衆の小寺武盛（十郎左衛門尉、のち元武）に指示を与えた書状。備中国に対する経略は、小早川隆景（沼田）が手城（広島県福山市）に派遣した生口・瀬戸・末長氏ら水軍衆と、龍王山城の細川通頼（通董）とが相談して実施することになった。元就はこのことを小寺氏に報じ、小寺氏もこの機会に備中方面へ出張して調略に努めるよう命じている。※参考文献の魚屋論文を参照	龍王　（318竜王山城跡）※参考文献魚屋論文に基づく	（毛利）元就	（天文十九年）五月二十七日 ※年次比定は参考文献魚屋論文に依拠	1550年	3・95・107
44	氏名未詳書状断簡／佐野家文書	立石城へ弥三郎、其外日幡四郎次郎・長山与三兵衛・軽部宗左衛門相籠由候、尤神妙候（中略）渋江衆・徳芳衆福嶋浜事、此砌立石城へ不籠候者向後可加成敗候、堅被申付、在城させらるへく候	立石城に佐野弥三郎・日幡四郎次郎・長山与三兵衛・軽部宗左衛門が立て籠もったことを聞いた書状の筆者は、これを喜んでいる。筆者は宛先の人物に対し、立石城に籠城しない者は今後処罰する方針なので、渋江衆・徳芳衆・福島・浜の住人などに対しても厳命して在城させるよう伝えている。	立石城　（347立石城跡）	（差出人不明）	年月日欠（戦国期）		9・53・134

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
45	中尾久隆・高塚貞連署書状／吉備津神社文書	昨日者高松へ被成御尋候、御懇之至、書状を以被申入候、弥々相心得可申上旨候	昨日、高松城のあるじ（中尾・高塚氏の主君）に対し質問してきた吉備津宮神主に対し、あるじが書状をもって返答したことを伝えたもの。	高松　（393備中高松城跡）	中尾又三郎久隆・高塚右衛門尉貞	年未詳五月十九日		8
46	高塚弘貞・中尾春隆連署書状／吉備津神社文書	昨日立石へ治家登城候而、三郎五郎殿被遂面談候	昨日、立石城に生石治家が登城して、石川久智（三郎五郎）と面談したことについて。	立石　（347立石城跡）	高塚宗右衛門尉弘貞・中尾佐渡守春隆	年未詳十二月二十七日		8
47	毛利元就・隆元連署書状写／山口県文書館所蔵近藤文庫『大内氏実録土代』所収文書	当秋者雲州衆必定備中口可罷出候、其時者三村・松山可為滅亡存知□実之儀を存度物候哉と聞へ候、就中松山之事、家中兵粮等はたと事尽候之条、雲へ懇望候ハて不叶趣候歟、雖然至今日三村色々申なためたる事候、然間某元様へ申上兵粮可被出之由申事、遠路之儀候之条、米銭等難被遣候、御屋形様へ御申沙汰候而黄金被遣候者肝要候、於中国者松山肝心候之条可被仰付候、（中略）定従松山不日爰元へ使者可罷下候之条、御入魂所仰候、何かと申松山越度候は三村之儀可為同前候之間、御分別干要候	毛利元就・隆元父子が、陶晴賢の重臣江良房栄（丹後守）に送った書状。今年の秋に尼子軍（雲州衆）が備中国へ進出してくるのは必定で、そうなった時は三村氏も松山城の庄氏も滅亡するだろうと予測を述べる。特に松山城内の兵糧は欠乏しており、尼子氏（雲）に降伏を願い出るほかない状況のようだが、今のところ三村家親の説得で松山城は持ち堪えているという。この状況を踏まえ、元就父子は江良房栄に対し、遠路兵糧を搬送するのは難しかろうから、大内義長（御屋形様）に頼んで兵糧購入用の黄金を送ってもらえないかと依頼している。中国地域において松山城は肝心の拠点なので、頼めば義長も応じてくれるはずだ、そのうち松山城から援助を請う使者が到来すると思うのでよろしく頼む、松山城が落ちれば三村氏も尼子氏になびいてしまうので分別してほしい、と述べている	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）元就・（毛利）隆元	（天文二十一年）五月二十八日 ※年次比定は参考文献畑論文に依拠	1552年	112・119
48	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻四十六小寺忠右衛門	笠岡之儀付而、最前已来別而辛労候之条、広浜田畠弐町七反余之事進之候	笠岡のことで以前から毛利氏のために尽力した小寺十郎右衛門尉に対し、備中国小田郡広浜で所領を与えたもの。	笠岡（249笠岡山城跡・254笠岡城跡）	（小早川）隆景	天文二十一年九月八日	1552年	13・107
49	吉川元春書状写／御書感状写	穂田表動付、其表事々敷聞え候哉、（中略）此方之足軽共深々と罷越候間、敵少々付候、然者志道二郎四郎越度候、不及是非候、（中略）左候間備中表逗留候而も只今無諸詮事候条、内郡表打廻山中表可調略との事候、（中略）備中之事ハ穂田迄候、是ハ軈而可有一途候、此方へ一味候衆中要害へ番衆被差籠、人質指出、何方も堅固ニ被申付候	元春が重臣の田中左近大夫・福原下総守・森脇祐有（和泉守）に備中の戦況を報じた書状。穂田氏攻略の様子について、そちらに大げさな伝聞が伝わっているかも知れないと述べ、毛利方の足軽が深入りして敵軍に付け入られ、志道元信（二郎四郎）が戦死してしまったことを伝えている。このような状況で備中方面に留まっていてもどうしようもないので、備後国内郡に転じるよう毛利元就から指令を受けた、と述べている。備中国の敵は穂田氏だけなので、やがて落着するだろうから、毛利氏に味方する国衆の要害に番衆を入れ、人質を取り、堅固に守るよう命じた、と述べている。	（227猿掛城跡） 此方へ一味候衆中要害	（吉川）治部少輔元春	（天文二十一年）九月九日	1552年	103・112
50	毛利元就・隆元連署書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十二　岡六兵衛に写しあり）	猿懸懇望之儀、三村分別之条、定可相調候哉	毛利元就・隆元父子が、岡七郎兵衛尉と情報交換した書状。猿掛城の庄氏が和睦（懇望）を申し出てきているが、庄氏と敵対する三村家親もこのことを了解したようなので、講和が成立するかもしれない、と伝えている。	猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）元就・（毛利）隆元	（天文二十二年）四月十八日	1553年	107・132
51	毛利元就・隆元連署書状写／『譜録』渡辺三郎右衛門直	一小坂之事、去二日城切崩猿懸衆少々討捕候、太慶此事候、笠岡辺弥可競条肝要候、　（中略）一沖口之儀宇賀島弥武略候哉、推量候、当城御用心御心遣之趣尤無余儀、貴所之御事笠岡・山田・当城かけ候而之御心遣、中＼＼申も愚候、	毛利元就・隆元父子が、備後国衆の渡辺房（出雲守）に与えた書状。毛利方の軍勢が小坂城を切り崩し、城を守っていた「猿懸衆」（猿掛城主庄氏の軍勢）を少しばかり討ち取った。このことを元就父子が喜び、笠岡付近の味方が勢いづくことを期待している。また、渡辺房が備後宇賀島水軍の調略に努めていることにも触れ、渡辺氏が当城（備後鞆城カ）・山田（備後一乗山城）・笠岡城の防衛を掛け持ちで担当している苦労をねぎらっている。	小坂　（289杉山城跡または番号なし小丸山城跡カ） 猿懸衆　（227猿掛城跡に関連） 笠岡　（254笠岡城跡）	（毛利）元就・（毛利)隆元	（天文二十二年）六月六日	1553年	46・119
52	毛利元就書状写／『防長風土注進案』大島宰判第三西方村（『閥閲録遺漏』巻五之一　二宮兵左衛門にも写しあり）	神辺書状共ニ石川源三要害忍山江可取懸之由候、見懸共候而外郡衆同心候や、不然は取詰之儀は大事之儀と存候＼＼	元就が吉川元春に近況を報じた書状。元就のもとに届いた神辺＝杉原盛重からの書状によると、盛重らは石川源三の持ち城である忍山城へ攻め寄せようとしていたという。元就は、この様子をみた備中国外郡衆（備中南部の国衆）が味方してくれればよいが、そうでない場合は城の包囲は大変になりそうだ、と感想を述べている。	忍山　（327忍山城跡）	（毛利）右馬元就	（弘治二年カ）十二月一日 ※文献番号所載の畑論文による推定	1556年ごろか	110・113・119・122

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
53	氏未詳元久感状写／『黄薇古簡集』巻第十五・児島郡味野村左五兵衛所蔵文書	今度於片嶋表合戦無比類候刻、別太刀下合力可申者也	片島での合戦に参加した宇利新介の手柄を褒めたもの。	片島　(313片島城跡ヵ)	元久	永禄二年四月一日	1559年	15・53
54	尼子晴久感状写／室家資料	今度松山現形之節、頓有入城粉骨之由、神妙之至感悦候	備中松山城が尼子氏に味方した際、備中国中津井の室孫三郎はすぐに松山へ入城して奮戦した。本感状は、このことを伝え聞いた尼子晴久が、室氏の活躍を褒め称えたもの。	松山　(158備中松山城跡)	晴（尼子晴久）	(天文十年～永禄三年）十月二十三日 ※出典書は永禄元～三年に比定年代を絞っている	1541～1560年（1558～1560年ヵ）	125
55	毛利隆元書状／妙蓮寺蔵末國家文書（『閥閲録』巻百廿八　末国与左衛門に写しあり）	至小松山罷出之由候、早々見合候て可罷帰事待入候、度々注進之通、至吉田も申下候、一和智方其外之衆、至成羽可有陣替事候之由、両人申通於隆元者不能分別候、其故ハ其方両人罷出候事ハ、福原至成羽陣替させ候へとの儀をこそ申候て罷出たる事候、然処ニ福原所之儀をハ不申調候て、内郡衆計を出候ハてハなとゝ申候事曲事候	毛利隆元が側近の赤川元保（左京亮）・児玉就忠（三郎右衛門尉）に指示した書状。両人が小松山に出陣したことを聞き、早々に見合わせて帰還するのを待っていると伝えている。また、和智氏ら備後内郡衆の軍勢を成羽に陣替えさせてほしいとの赤川・児玉氏からの要請に難色を示し、そもそも両人は小松山出陣の前提として福原貞俊の成羽転陣を献言していたのに、福原の出陣を調整しないまま備後内郡衆だけを出陣させてはどうかなどと言い出すのはけしからん、と注意している。	小松山　(158備中松山城跡) 成羽　(124三村氏居館跡・126鶴首城跡)	(毛利）隆元	(永禄二年）三月十七日	1559年	13・108・132
56	小早川隆景感状写／浦家文書（『閥閲録』巻十一之二浦図書にも収録あり）	去六日、備中国松山落居之時、敵一人僕従小三郎討捕之、誠神妙者也	四月六日、毛利軍が備中松山城を攻め落とした際、敵一人を討ち取った井上春忠の従者小三郎の手柄を褒めたもの。	備中国松山(158備中松山城跡)	(小早川）隆景	永禄四年四月二十日 ※永禄四年の元号は写本作成時の補入の可能性大。永禄二年の文書と考えられる	1559年	13・76・106
57	石川久智書状／正宗文庫所蔵文書	今度庄方敵心被仕ニ、旁親類者共悉河西へ罷退候処ニ、旁無二之以覚悟、其構親類共先引仕、庄方人数悉被打出、堅固ニ被相抱付而、弓矢任存分、大慶迄候	庄氏が敵対行動に出た際、自身の構に親類を導き入れ、庄氏の軍勢を追い払って堅固に守った中島新左衛門尉の武功を、石川久智が褒めたもの。	其構　(番号なし中島氏館跡)	(石川）久智	(永禄六年カ）五月三日	1563年	9・59・134
58	毛利元就書状写／『閥閲録』巻百二十　粟屋清次郎	従香川所書状候、此状見候之間為披見差遣候、家親者至月迫、備中宮内迄可有陣替之様見へ候、則松山帰宅候而来二月二日伯州表江可罷出之由、此状見之候之間遣候	毛利元就が家臣の粟屋就方（木工允）に送った書状。三村家親に随伴して行動している香川光景から、最近の三村氏の動向につき書状が届いたので、その書状を就方にも回覧し要点を説明している。それによると、三村家親は１月末日に備中国宮内まで陣替えし、すぐに松山城に帰宅して来たる２月２日には伯耆国へ出陣する予定だという。	松山　(158備中松山城跡)	(毛利）元就	(永禄七年）正月十三日	1564年	108
59	毛利元就書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	一　然間、先以一日茂早く家親罷出候事肝要迄ニて候、　一庄四事者、家親存分次第ニ則可被罷出候、石川事備前表可為手当由候歟、是非此時伯州表罷出候ハてハ、無曲由堅申候へとの事ニて候や、是又内儀之段肝要候＼／、一　就其甲山へも猿懸へも可罷越之由、辛労之至候、乍去其段堅申候而可然候	元就が三村氏に対する援軍督促のため、備中国にいる家臣粟屋就方に指示したもの。一日も早く三村家親が伯耆国に出陣するのを待っていること、庄元資（庄四）は家親の考えに従って出馬するだろうこと、石川久智は備前表の押さえとして残すべきか、伯耆国に出陣させるか、内々に相談するのがよいことなどを伝え、この件で幸山城へも猿掛城へも出かけた就方の労をねぎらっている。	甲山　(414幸山城跡) 猿懸　(227猿掛城跡)	(毛利）元就	(永禄七年）正月二十一日	1564年	13・106・134
60	毛利元就書状／原川家文書（『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛に写あり）	一家親出張相定、旧冬至松山帰宅之由、香左被申越候之間、誠可然本望候（中略）一従家親就児嶋天神山之儀、対光景以ケ条疑心之趣被申候間、弥以神文申遣候、此半何と様ニ申妨和讒候て、家親ハ疑候共、於此方者些子毛頭程も表裏有間敷候之間、心安可申分事肝要候	三村家親が伯耆国出陣を決心し、旧冬松山城に帰宅したとの報を受けた元就が、これを調整した粟屋就方に喜びを伝えたもの。また、家親が児島郡や天神山＝浦上宗景の処遇について、毛利方の香川光景に疑念を抱いているとのことだったので、毛利氏として毛頭も表裏をかまえるつもりはない旨の起請文を家親に送ることを伝えている。	松山　(158備中松山城跡) 天神山　(〈備前137〉天神山城跡)	(毛利）元就	(永禄七年）二月三日	1564年	13・106・132
61	備中国新見庄使入足日記／教王護国寺文書	廿一日・二日　□〔十〕六文新見より松山へ参候、同日やすミ廿八日　卅文　人夫　高山より舟付迄	東寺の使僧が新見庄を訪れた帰路で発生した必要経費を記したもの。松山城・高山城に立ち寄っている。	松山　(158備中松山城跡) 高山　(414幸山城跡)		永禄九年九月二十一日	1566年	13・34・53
62	短刀銘　冬広	備中国松山冬広 三村□郎兵衛親正 永禄十年八月吉日	若狭国の刀工冬広が、三村氏の居城備中松山城下にて駐槌し、三村親正（元親の一族）のために短刀を作ったことを示す銘文。	備中国松山(158備中松山城跡)	冬広	永禄十年八月	1567年	136

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
63	小早川隆景書状／乃美文書	藤井事、山野・吉井之間□□【一城】取付候、□□二三日以前より至高屋要害被打出、雖被相催候、以後才覚計追散候事不成候条、一勢吉田此方令相談、急度可差出之由、□□【重畳】被申越候、従吉田も勢衆被差出候、爰元事可被申付候、其上ニても不成候者、御方之事可有御上候※『新熊本市史』所載の原文の欠字を、『広島県史』古代中世資料編Ⅴ所載の写本（乃美文書正写）で補った	隆景が備中国の情勢について某（宛名欠。乃美宗勝か）に報じた書状。毛利氏に刃向う藤井皓玄が、山野と吉井（芳井）との間に城を築いた。そこで毛利方の軍勢は二三日前に高屋城まで出陣したが、藤井軍を追い払うことが出来ず、毛利元就と隆景で相談の上、援軍を派遣してほしいと要請してきた。これを応諾して元就も隆景も援軍を出すことにしたが、それでも藤井軍を退けることが難しい場合は、宛名の某にも出動を頼むことになるだろう、と伝えている。	山野・吉井之間一城　（169正霊山城跡ヵ） 高屋要害　（177高屋城跡）	（小早川）隆景	（永禄十二年）十月十五日	1569年	51・119
64	毛利元就書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	児嶋表江動儀定候て、今日廿八日元資其外渡海之由、如此申来候、此時者先諸勢之儀、彼表江差出可然候、鼻高之儀、則時落去候へ者尤珍重候、自然少も相支候者、至幸山表備前衆可罷出事眼前候、幸山表弱々敷事共候へハ、一大事之儀候間、此方人数迫々差つゝけ、児嶋表任存分候ハて不叶儀候、得其心備後衆へ之事、一時片時茂催促仕立可罷出事、千万＼／肝要迄候＼／、一　一昨日申所ハ、児嶋へ共、多治部へ共すめ候ハて、於深山両方を相伺、可急方へと申事ニ候つれ共、此分申来候間、重々申遣候、其方所より元資・元親江早飛脚を遣、はや渡海候者何かも不入、備後衆之事うつしかけ、幸山表江可罷出候、如是ハ被申候へ共、もし旨儀相違候而、五三日も延引候て、未無渡海候者、備後衆之事も先深山表在陣候て、彼渡海之節、幸山へ被出候て可然候	毛利氏と浦上・三好連合軍との戦いにつき、元就・隆景が現地にいる家臣粟屋就方に作戦を指示したもの。備中衆の児島出兵が決定し、庄元資らの軍勢が渡海するとの報告を受けた元就・隆景は、鼻高山城を早期に落城させることを重視し、この城が少しでも持ち堪えたらその間に浦上軍（備前衆）が幸山城へ攻め寄せるに違いないと予測する。幸山城が弱体では一大事なので援軍を差し向ける予定だが、児島での合戦が上手くいかねばそれも難しいから、備後国衆を催促して出陣させるのが肝要と述べる。毛利氏は、児島にも多治部城（＝塩城山城）にも軍勢を差し向けず、深山に陣取って急ぐべき方面を見極めてから進軍する予定だった。しかし、庄元資・三村元親には早急に児島へ渡海するよう命じ、備後衆は幸山城救援に向かわせることとし、もし備中衆の渡海が遅れる場合は備後衆も深山へ向かわせ、備中衆が渡海する際に幸山城へ向かわせるのがよいことなどを指示している。	鼻高　（〈備前229〉鼻高山城跡） 幸山　（414幸山城跡） 多治部　（58塩城山城跡） 深山　（127阿部深山城跡ヵ）	（毛利）元就・（小早川）隆景	（元亀二年）正月二十八日	1571年	13・53・106・134
65	毛利元就・小早川隆景・毛利輝元連署書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	児島表江働之儀、今日廿八日ニ儀定候て、元資其外渡海之由、如此申来候、此時者先諸勢之儀、彼表江差出候て可然候、鼻高之儀、則時ニ落去候へ者珍重候、自然五日十日茂相支候者、至幸山表備前衆可罷出事可為案中候、（中略）今度児島表之儀、三家仕損候者、諸口覚可為相違候条、備後衆之事、其方催促候て継夜於日、被懸付候様可申達候、（中略）遅候て幸山表弱々敷之儀共候ハヽ、一大事之儀と存候、（中略）一昨日申所者、児島表へ共、多治部表へ共すめ候ハて於深山両方を相伺、可急方へと申事ニ候つれ共、此分ニ申来候条、重々申事候、従其方所早飛脚を元資・元親江遣之、はや渡海候者何かも不入、備後衆うつしかけ幸山表江可差出候、（中略）五三日も延引候て、いまた無渡海候者、備後衆之事茂先深山ニ在陳候て、彼表渡海之節幸山表江被出候て可然候	毛利氏と浦上・三好連合軍との戦いにつき、元就・隆景が現地にいる家臣粟屋就方に作戦を指示したもの。前出史料と多少語句・表現は異なるが、内容はほぼ同じ。	鼻高　（〈備前229〉鼻高山城跡） 幸山　（414幸山城跡） 多治部　（58塩城山城跡） 深山　（127阿部深山城跡ヵ）	（毛利）元就・（小早川）隆景・（毛利）輝元	（元亀二年）正月二十九日	1571年	53・106・134
66	三村元親書状／福武家文書	其元伯父三郎右衛門殿当表へ御打出之趣承候、我等一城引請無別心、不及御賢意、必御無用、近日備後衆出張候、久式等同意罷有	毛利氏のもとから児玉三郎右衛門が備中国へ派遣されてきた。これを聞いた三村元親が、自分が一城を別心なく担当しているので、配慮は無用であると児玉（福武）新介に伝え、備後衆の出陣などについても触れたもの。	一城　（〈備前229〉鼻高山城跡ヵ）	三村修理進元親	（元亀二年ヵ）二月二十日	1571年	9
67	毛利元就・輝元連署書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	佐井田表三村働之事差急度由申越候、尤無余儀候	元就・輝元が、備中方面に在陣中の粟屋就方（木工允）に送った書状。三村元親が浦上方の備中国佐井田城の攻略を急ぎたいと言ってきたので了承したと就方に伝えている。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）元就・（毛利）輝元	（元亀二年）三月晦日	1571年	13・36・106

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
68	毛利元就書状写／『閥閲録』巻九十六　岡与三左衛門	浦上重而幸山表罷出、可致行之由候付而度々示給候、御懇之儀候、然間庄元資事、早々帰宅候て、幸山表外郡之覚悟可為肝要候通、従我等も申遣候、又細川野州人数被残置、此砌無異儀候之条、可被打帰之由示給候、尤ニ候へ共迎御入魂之儀候間、今聊御在陣候而、幸山表之趣可被御覧合候、浦上行実否可見候と御返事申候、（中略）就中今度警固事、各馳走候由承候、（中略）唯今之儀、児嶋高畠表江せめて警固懸置度と高畠申由候、何とそ御思案候て、両人御操候て　可有御覧候、（中略）是非共高畠所にハ警固少成共懸置度事候、（中略）従此方も備後衆数人、敷名兵部大輔為大将差出候条、警固之段御短息可為祝着候	浦上軍が幸山城を攻撃するため出陣したとの報告を受け、元就が水軍の将岡就栄（和泉守）・渡辺房に対応を示したもの。常山・鼻高山城にいる庄元資は早々に猿掛城へ帰宅させ、幸山城や備中国外郡の守備を任せること。細川通董（野州）は兵のみを常山・鼻高山城に残して帰宅したいと言ってきたが、もうしばらく在陣して幸山城をめぐる情勢がどうなるか、浦上軍が実際に動くかどうか見極めるよう返事したこと。高畠氏が自分の支配領域に水軍を配置して守りたいと言っているとのことなので、水軍担当の両人で思案して少しでも高畠氏のために水軍を配置できるよう工夫してほしいこと。こちらからも敷名元範（兵部大輔）を大将とする備後衆を派遣したので、海上での活躍を期待する旨伝えている。	幸山　（414幸山城跡） 高畠　（〈備前224〉小串城跡ヵ・〈備前257〉番田城跡ヵ・〈備前258〉胸上城跡ヵ）※水軍配置が可能な高畠氏関連城館跡を仮に列挙	（毛利）右馬頭元就	（元亀二年）五月十三日	1571年	13・53・108
69	毛利元就・輝元連署書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	備後旁之儀、頓被出候哉、誠辛労之至、中々不及言語候、就夫児嶋表弥大急之由候、隆景事既中途出張候、爰元可為同前候、然間各之儀、西阿地着陳之儀、先書ニ茂委細申遣候ツ、（中略）同者片時茂頓西阿地着陳被差急候様、其方として何と様ニ茂町申理候、其方先日之返事ニ、小田・高腰辺ニ少々可被控之様申越候ツ、左様候て先様之儀、不慮眼前候、又頓着陳候者、一味中力を得、可為堅固之条、是非共此度短息之段、其方気遣馳走之浅深たるへく候	備後衆が出兵したことを聞いた元就・輝元が、粟屋就方に送った書状。児島方面が火急の状況で小早川隆景もすでに途中まで出動していることを伝え、就方に急いで備後衆を西阿知まで出陣させるよう命じている。先日の返事によると、現在備後衆は小田・高越城付近で控えているとのことだが、そんなことをしていたら児島で不慮の事態が発生するのは明白で、少しでも早く着陣してくれれば、味方は力を得て堅固になるので、備後衆が本気で動くよう調整せよと命じている。	高腰　（191高越城跡）	（毛利）元就・（毛利）輝元	（元亀二年）五月十五日	1571年	13・53・106
70	毛利元就書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	多治部城事取詰度由、三村兄弟申事候、雖然多治部事、内々取操之儀候て、従隆景所香川美作守・長左衛門尉両人差上せ候	毛利元就に対し、庄元資・三村元親兄弟が多治部城を包囲したいと申し出た。しかし、元就は多治部に対して内々に調略を進めており、小早川隆景のところから香川光景・長就連を出させて交渉に当たらせていた。	多治部城　（58塩城山城跡）	（毛利）右馬頭元就	（元亀二年）五月二十四日	1571年	13・36・106
71	毛利元就書状／下関市立長府博物館蔵長府毛利家文書	多治曰【部】事、真実現形たるへく候者、早々現形させ度事候　＼／	上記史料に関連して元就が小早川隆景に与えた書状。多治部氏が本当に毛利方へ味方する感触であれば、早々に味方につけたいものだ、と述べている。	多治部　（58塩城山城跡に関連）	（毛利）元就	（元亀二年）	1571年	119・133
72	土佐神社内陣楽書	備中国日差寺玉蔵寺松本坊、同行七人	元亀二年に日差寺の僧侶ら七人が四国の土佐神社を来訪した際残した落書き。	備中国日差寺（433日差山城跡）		元亀二年六月五日	1571年	87
73	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻廿五　清水宮内	就今度佐井田表之儀、某許別而御心遣奉察候、当城之儀以御覚悟堅固ニ被相拘候、誠無比類存候	毛利輝元が佐井田城合戦の結末をみて気遣いする横井左衛門尉の心情を汲みつつ、「当城」（今保城）が左衛門尉の心がけで堅固に保たれていることを褒めたもの。	佐井田　（76才田城跡） 当城　（〈備前279〉今保城跡・〈備前280〉松田屋敷跡ヵ）	（毛利）輝元	（元亀二年）九月九日	1571年	36・106
74	浦上宗景書状／阿波鳥山文書	今度者佐井田表太利候段、雖不始于今儀候、入精故以如此候、粉骨之至候	浦上宗景が佐井田城合戦の勝利について、鳥山弥四郎の以前からの精勤があったから良い結果になった、とその粉骨ぶりを褒めたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（浦上）宗景	（元亀二年）九月十日	1571年	36
75	浦上宗景書状写／『黒田御用記』乾　辻新兵衛所蔵文書	去四日備中国佐井田表合戦之刻、衝鑓於手下敵討捕之段、忠功無比返、必可被加賞録	九月四日の佐井田城をめぐる合戦で、槍をふるって敵を討ち取る手柄を挙げた岡本秀広に対し、浦上宗景が恩賞を与えることを約束したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（浦上）宗景	（元亀二年）九月十一日	1571年	33・36
76	宇喜多直家感状／河口文書	去四日佐井田表合戦、雖敵陣切崩、過半相残、戦之半討捕宗徒之者之段、忠節無比類	宇喜多直家が、去る九月四日の佐井田城合戦で敵陣を破った際、残存していた敵兵を討ち取る手柄を立てた河口左馬進を褒め、恩賞授与を約束したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（宇喜多）直家	元亀二年九月十一日	1571年	11・36
77	宇喜多直家判物写／『黄薇古簡集』巻第二・城府二　原与三太夫所蔵文書	去四日於佐井田表及合戦、敵陣切崩、討捕宗徒之者之段、忠節無比類、必恩賞可相計者也	宇喜多直家が、去る九月四日の佐井田城合戦で敵陣を破って敵兵を討ち取る手柄を立てた原二郎九郎を褒め、恩賞授与を約束したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（宇喜多）直家	元亀二年九月十一日	1571年	15・36
78	岡家利書状／備前難波文書	今度ハ於佐井田、心仕能、御勤無比類候、殊被疵由候ツ、如何候哉、無心元存候	宇喜多氏の宿老岡家利が、佐井田城合戦で奮戦して負傷した難波与右衛門尉の容態を見舞ったもの。	佐井田　（76才田城跡）	岡平家利（岡平内丞家利）	（元亀二年）九月十一日	1571年	11・36

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
79	伊賀久隆判物／備前片山文書	今度佐井田城芸州衆取詰候処、為後巻備作罷出、及一戦、長井越前守詞替、一番鑓突、即越前守頸打取候事、無比類候	佐井田城を包囲した芸州衆（毛利軍）に対し、後巻のため出陣した備作の軍勢（浦上・宇喜多軍）が戦いを挑んだ際、敵将長井越前守を討ち取る手柄を立てた片山与一兵衛を伊賀久隆が褒めたもの。	佐井田城　（76才田城跡）	（伊賀）久隆	（元亀二年）九月十六日	1571年	11・36
80	宇喜多直家書状／備前難波文書	先度於佐井田面、被疵由候、御心懸之故候、早御平喰候歟、無心許候	宇喜多直家が、先の佐井田城合戦で負傷した難波与右衛門尉を労い、その容態を問うたもの。	佐井田　（76才田城跡）	宇泉直家（宇喜多和泉守直家）	（元亀二年）九月二十三日	1571年	11・36
81	三村元親書状／山田文書	今度佐井田山囲付而、備前・美作・播磨之軍兵為後局多勢取出候、去四日一戦失利、諸卒乱足ヲ及難儀之節、被返合数刻之防戦、殊ニ左之肩被蒙疵、強敵被仕払候、親成依軍功、敗北之輩皆以遁死候、莫大の忠節申も疎候	三村元親が佐井田城を包囲した際、この城を救うため備前・美作・播磨国の大軍（浦上・宇喜多勢）が後巻のため出陣してきた。三村軍は去る四日に備作播の軍勢と一戦を交えたが敗北した。味方の兵は混乱に陥ったが、三村親成（孫兵衛）が引き返して防戦し、左肩を負傷しながら奮戦したので、強敵は退散し、敗走した味方も死を免れた。本書状は、こうした三村親成の活躍を、三村元親が激賞して与えたもの。	佐井田山　（76才田城跡）	三村元親	元亀二（月日欠）	1571年	19・86
82	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十七　飯田平右衛門	先様大利之趣、追々注進之、太慶此事候、鳥羽落去候上ハ、端要害ハ何もたまるましく候々	輝元が飯田尊継（三位）に近況を報せた書状。先日の勝利の様子について、追々注進が入っており目出度い、鳥羽城が陥落した以上、端々の要害はどれも持ちこたえられないだろう、と述べている。	鳥羽　（436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ）	（毛利）輝元	（元亀二年ヵ）十一月三日	1571年	107
83	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	鳥羽之儀頓落去候、誠大慶此節候、其表長々辛労無申計候	備中国鳥羽城（浦上方の城）が早期に落城したことを喜んだ毛利輝元が、在陣中の熊谷就真（小四郎）をねぎらった書状。	鳥羽　（436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ）	（毛利）輝元	（元亀二年ヵ）十一月十三日	1571年	53・108・132
84	浦上宗景書状／洗心斎古文状（水原岩太郎氏所蔵備前難波文書）	鳥羽表事、此方へも其聞候、弥立聞珍敷儀候ハヽ、可申越候	宗景が備前国赤坂郡の領主難波職経（三郎右衛門）に送った書状。鳥羽城の様子が宗景の方へも聞こえてきたので、風聞や珍しいことがあれば報告するよう職経に頼んでいる。	鳥羽　（436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ）	（浦上）宗景	（元亀二年ヵ）十一月十五日	1571年	22・31
85	浦上宗景感状／備前塚本文書	今度小早川動大軍、攻向之処、僅小城楯籠、堅固ニ相備之故、敵失謀計、無程令退散之段、忠肝異于他、神妙之至	小早川隆景が大軍を動員して侵攻してきた際、浦上方の宍甘与三左衛門尉はわずかな小城に立て籠もり、堅固に守ったので、小早川軍は策を失ってほどなく撤退した。こうした宍甘氏の他に抜きんでた働きを、宗景が賞したもの。上記の鳥羽城合戦に関連か。	小城　（436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ・番号なし芝場城跡ヵ）	（浦上）宗景	（元亀二年）十一月二十八日	1571年	11
86	浦上宗景感状／池木氏旧蔵文　書（現・岡山県立記録資料館所蔵文書）	今度小早川起大軍、取向之処、僅小城楯籠、堅固ニ相保之故、敵失勢、無程令敗走之段、誠忠勤不浅、神妙之至	上記史料と同じ籠城戦に参加した宍甘又兵衛尉の働きぶりを、宗景が褒めたもの。	小城　（436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ・番号なし芝場城跡ヵ）	（浦上）宗景	（元亀二年）十一月二十八日	1571年	14
87	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	其方事、長々之在陳に打続、鳥羽在番之儀、申聞候処、無故障罷籠候、別而之馳走辛労祝着千万候	粟屋就方（木工允）は長期在陣を続けていたが、毛利氏からの鳥羽城在番命令を承服し、同城の守備に就いた。こうした就方の活躍と苦労を毛利輝元が褒め称えたもの。	鳥羽　（436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ）	（毛利）輝元	（元亀二年ヵ）十二月十六日	1571年	53・106
88	大友宗麟書状／米多比文書	小見山水之平【手カ】迄敵取寄之段、預注進候、無心元存候、然者此方行可差急之通承候之条、前十五、田原近江守差立候、（中略）於赤間関表必近々可着陣候、警固船之事茂堅加下知候、可御心安候	大友宗麟が能島村上水軍の頭領村上武吉に送った書状。当時村上水軍支配下の小見山城が敵（毛利軍か）に攻められていた。村上武吉は敵が水の手まで迫ったことを盟友の宗麟に報じ、急速に兵を動かしてほしいと依頼した。この一報を受けた宗麟は戦況を心配し、去る十五日に重臣の田原親賢（近江守）を出陣させたこと、赤間関（下関）に近々大友軍が着陣すること、水軍（警固船）にも厳重に出動を命じたことを武吉に伝え、安心するよう書き送っている。	小見山　（253小見山城跡ヵ） ※伊予国大三島所在の同名の山にあった城を指す可能性が高く、要検討	（大友）宗麟	（元亀三年）潤正月十九日	1572年	88
89	三村元親書状／真島郡栗原村杉小左衛門所蔵文書	去々年其許籠城以来旁々別而御入魂之至祝着候（中略）誠少之所如何敷候得共中津井村之内津野新左衛門跡職進之候	元亀元年の籠城戦以来、三村氏との良好な関係を保ってきた杉右衛門尉に対し、三村元親が謝意を表し、中津井村内で所領を進呈したもの。	（該当城館未詳）	三村修理進元親	元亀三年三月九日	1572年	36・127

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
90	富田元秋書状写／『閥閲録』巻百十五之一湯原文左衛門	備中石川以調略生石之城仕取、番衆等堅固申付之由、従隆景如此被申越候間、為御披見案書持せ進入候	毛利元就の五男元秋が、湯原春綱（右京進）に与えた書状。小早川隆景からの一報によると、このころ備中国の石川久式が、調略を用いて生石城を攻略し、番衆を配置して守備を固めていた。元秋はその様子を湯原氏にも報せるため、本書状に隆景からの手紙の写し（案書）を添えて送付している。	生石之城　(386生石城跡)	(富田）少輔十郎元秋	(元亀三年）六月四日	1572年	108・134
91	宇喜多直家書状／備前松田文書	芸州衆至神辺・笠岡、自去月中旬比着陣候、因茲、境目分等申付故、不得寸隙、近日無沙汰候、（中略）万端従十倉可申候条、不克愚筆候	宇喜多直家が松田氏に与えた書状。神辺・笠岡あたりに着陣した毛利軍に対応するため、境目への指示命令に忙殺されて無沙汰を重ねたことを詫び、詳しくは徳倉城主から伝達する旨申し送ったもの。	十倉　(〈備前44〉徳倉城跡)	宇泉直家（宇喜多和泉守直家）	(元亀三年）九月三日	1572年	11・36
92	毛利輝元書状／毛利家文書	其表之事、頓可被相動御儀定之処、宇喜多申分付而、少被相延、一往之所御聞合之通承候、得其心候、定可為表裏之条、日幡・賀茂・蛙鼻間被見合、可被及御行之由、承知候、（中略）　一菟ニ角ニ三星表之儀肝心候条、為兵粮・銀子差上可然之由承候	毛利輝元が小早川隆景ほかの諸将と備前・美作国経略の方針について協議した書状。宇喜多直家の申し入れによって備前国攻撃は延期としたが、完全に信用できないので、日幡・賀茂・蛙鼻城あたりの様子をうかがって軍事行動を起こすつもりである、との隆景らの提案を輝元が承認している。また、三星城を救うため兵糧・銀子を送付すべし、との提案も了解している。	日幡　(431日畑城跡) 賀茂　(427加茂城跡) 蛙鼻　(番号なし蛙鼻城跡) 三星　(〈美作350〉三星城跡)	(毛利）輝元	(元亀三年）九月十二日	1572年	13・36・53・68
93	吉川元春・小早川隆景連署書状／吉見家文書	此表之儀、自備前渡候諸城于今何かと候て不相澄遅々候、三村・石川被罷越、種々六ヶ敷儀被申候段、可被成御推量候	元春・隆景が同じ毛利氏宿老の福原貞俊・口羽通良に送った書状。毛利氏と浦上・宇喜多氏との講和にともない、備前側から毛利側に引き渡された諸城の扱いについて、今になっても何かと問題があって落着が遅れているという。この件で三村元親・石川久式からあれこれ難しいことを要求されており、対応に苦慮している状況を御想像ください、と述べている。	自備前渡候諸城	(吉川）駿河守元春・(小早川）左衛門佐隆景	(元亀三年）十月十二日	1572年	131
94	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	当城備後衆可被残置之由、従隆景・貞俊被申越候、然者検使可入之由候之間、其方事去年以来打続雖辛労之儀候、暫時罷居候者可為祝着候	輝元が粟屋就方（木工允）に与えた書状。小早川隆景・福原貞俊の提案で、「当城」に備後衆を残留させることになり、これを監督する検使役が必要になった。そこで輝元は就方に対し、去年以来ずっと苦労しているところ申し訳ないが、検使として暫時「当城」に滞在してくれるとありがたい、と要請している。	当城　※備中国内の毛利方城館	(毛利）輝元	(元亀三年カ）十一月十二日	1572年	106
95	吉川元春・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻三十三　粟屋勘兵衛	粟　木工事、今度上口在陳中、彼方此方一段辛労候、取分佐井田・四畝為可請取、松山表江差上申、数日逗留令辛労候、可被加御詞事、於両人可目出候	元春・隆景が毛利輝元の側近粟屋元種（粟内蔵）に上申した書状。粟屋就方（粟木工）は、今度の上口（備前・備中方面）在陣中にあちこちで大変な功労があり、とりわけ浦上・宇喜多氏から佐井田城・四畝城を受け取るため、松山城へ出張し数日間逗留して尽力した。元春・隆景はこうした就方の働きを粟屋元種を介して毛利輝元に上申し、輝元から就方にお褒めの言葉をかけてやってくれれば、両人としてもうれしい、と述べている。	佐井田　(76才田城跡) 四畝　(93四ツ畝城跡) 松山　(158備中松山城跡)	(吉川）元春・(小早川）隆景	(元亀三年）十一月二十五日	1572年	13・106
96	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛に写しあり）	新見表動之事、急度申付之由、従元親被申越候、為加勢雲伯衆中相催、来月十六日聢与可罷立之候、就其検使一人可入之由候間、乍御辛労被罷出候而可給候	輝元が楢崎元兼（九郎次郎）に送った書状。三村元親より備中国新見への出陣要請を受けた輝元は、三村氏への加勢として出雲・伯耆の軍勢を四月十六日に出立させることにした。そこで、軍勢に付き添う検使が必要になったので、元兼に検使としての出向を依頼したもの。	新見　(8楪城跡カ)	(毛利）輝元	(天正元年）三月二十九日	1573年	13・107・132
97	三村元親書状写／『閥閲録』巻三十九　桂善左衛門	一昨日於神代舞尾、杠之者共及行候哉、被及合戦、吉田与二郎被討取、頸持給候、中々御手柄之段無比類候	五月二十五日、楪城の兵が神代舞尾にて毛利氏家臣桂元将（善左衛門尉）を攻撃する事件があった。元将はこれを撃退し吉田与二郎を討ち取った。このことにつき、三村元親が元将の武功を賞し、その活躍に謝したもの。	杠　(8楪城跡)	三村修理進元親	(天正元年）五月二十七日	1573年	13・107
98	三村元親書状写／『閥閲録』巻三十九　桂善左衛門	今度雇申ニ付而芸州御下向之節、於神代舞尾杠之者共、以多勢及行候処、数人被仕伏、殊ニ吉田与四郎被討取候、誠御武勇無比類存候、貴所依御手柄ニ以下々面々モ遁死ヲ候	上記史料とほぼ同内容で、元親が桂元将（善左衛門尉）に送った書状。「杠之者共」の襲撃を跳ね返し敵将を討った桂元将の武勇を称え、その手柄のおかげで下々の面々も死をまぬがれることができた、と感謝している。	杠　(8楪城跡)	(三村）元親	(天正元年）六月二十一日	1573年	107

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
99	毛利輝元書状／楢崎文書	備中江検使之儀、松山・幸山先両所へ可遣由候、松山へ申分候条、羽仁又右衛門尉・《○挿字：黒杭周防守》罷上候て、羽又右事者返事聞候て一旦可罷下候、黒杭周逗留肝要候、幸山へハ八幡原孫兵衛尉罷越可逗留候、久芳兵庫助事者、《○挿字：備後》外郡衆四人江為元太一礼可罷越候 ※二重線引き部分、原史料は見せ消し（本表では訂正後の語句のみ表示）	毛利輝元が備中松山城・幸山城へ派遣する検使について指示を与えた書状。申し分があるという松山には、羽仁・黒杭両名が向かい、羽仁氏は相手の意向を聞いたら一旦帰還し黒杭氏のみが松山に逗留すること、幸山へは八幡原氏が赴いて逗留することを指示している。また、元太城の一件で活躍した備後外郡衆四人に礼を述べるため、久芳元和（兵庫助）を派遣すると述べている。	松山　（158備中松山城跡） 幸山　（414幸山城跡） 元太　（〈備前261〉本太城跡）	（毛利）輝元	年未詳卯月十八日		53・118
100	桂元将軍忠状写／『閥閲録』巻三十九　桂善左衛門	頸一　備中於松山、庄又六御対治之時討捕之	桂元将が毛利氏に自身の立てたこれまでの武功を上申したもの。永禄二年（1559）の毛利氏による備中松山城攻めの際、元将は庄又六（高資）と戦って敵将の首を一つ討ち取ったのだという。	備中於松山（158備中松山城跡）	桂善左衛門尉元将	天正二年五月二十五日	1574年	107
101	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百三十　渡辺仁右衛門	弥四郎事、松山番手付而罷居候、定気遣推量候、乍去操之儀共候之間、鷕而可呼帰候、可心安候	輝元が三河内治部大夫（通忠ヵ）に送った書状。（松山城主三村元親が反逆したため）松山城に番手として配置していた増原弥四郎のことを心配していると思うが、今後の計略（操）のこともあって呼び戻すので、安心してほしい、と伝えている。	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正二年）閏十一月十二日	1574年	108
102	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛に写しあり）	猿懸之儀、頓一途申付度之条、誠毎事乍御辛労、来十八日至小田表被成御打登、御調儀頼存候	毛利輝元が備後国衆楢崎豊景（三河守）・信景（彦左衛門尉）父子に対し、猿掛城をはやく攻略したいので来る十八日に小田表まで出陣してほしいと依頼したもの。	猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）輝元	（天正二年）閏十一月十四日	1574年	13・107・132
103	小早川隆景書状／厳島野坂文書	爰元之儀、若宮山各山陣候、一両日中手・成羽之間、可差寄議定候、太利之段従是可申入候	隆景が厳島神社の神主棚守左近衛将監に備中の戦況を報じたもの。毛利軍は若宮山に陣取っており、一両日中に手城と成羽城のあたりに攻め寄せることに決した、次は勝利の一報をこちらから申し入れるだろう、と伝えている。	若宮山　（場所未詳） 手　（135国吉城跡） 成羽　（124三村氏居館跡・126鶴首城跡）	（小早川）隆景	（天正二年）十二月二十五日	1574年	116
104	浦上宗景書状写／下河内牧家文書「牧之家可秘」	其表之事堅固ニ被仰付候〔○異本：段〕寔以大慶候、併貴殿并各無油断動と存候、猶々備中之事少々雖敵心候、松山何茂無異儀候由可然候、其之〔異本：元〕程近之事候間、行等切々可被仰談候、真島御在城之由候、日夜之御辛身令察候	真島城に在城し日夜辛労して城を堅持している牧菅兵衛（三浦氏重臣）に対し、浦上宗景が戦況等について申し送ったもの。備中国で少々毛利方へ寝返る者が現れたが、松山城では特段の問題も発生していないとの報せを受けた宗景が、牧氏の在所は松山にほど近いので、今後の軍事行動について三村氏とよくよく相談するよう要請している。	松山　（158備中松山城跡） 真島　（場所未詳。〈美作63〉真木ヶ城跡ヵ）	浦上宗景	（天正二年）十二月二十九日	1574年	36
105	小早川隆景自筆書状／小早川家文書	此表之儀、成羽より手要害茂能、又三村も専ニ存、人数少々差籠由候条、各以相談之上、去廿六日、先至手取懸候、然処、自城内方々江申候て、平ニ懇望之儀申候へ共、行初と申、悉可討果存、一円不令許容候	毛利氏による備中三村氏掃討戦（備中兵乱）。成羽攻略に先んじて国吉城（手要害）を落とすことに決めた小早川隆景は、十二月二十六日に国吉城に攻めかかった。城内からは降伏したいと申し出があったが、いくさ初めでもあるから全員討ち果たすことに決め、城兵の降伏を許さなかった。	成羽　（124三村氏居館跡・126鶴首城跡） 手要害　（135国吉城跡）	（小早川）隆景	（天正二年）極月晦日	1574年	13・74
106	備中国手要害合戦頸注文／毛利家文書	天正三年正月朔日備中国手要害切崩之時討捕頸注文 毛利手 頸一　三村源七郎　粟屋彦衛門尉討取之　（後略）	毛利軍が備中国手要害＝国吉城を攻め落とした時に獲得した首級のリスト。敵将の名と、それを討ち取って手柄とした人物の名が列挙されている。	手要害　（135国吉城跡）		天正三年正月朔日	1575年	67
107	毛利輝元書状写／御書感状写	今度手城切崩之時、一廉遂粉骨、殊敵一人討捕候、心懸之段無比類候	毛利軍による手城攻略に参加して敵一人を討ち取った粟屋彦右衛門の手柄を、毛利輝元が褒めたもの。	手城　（135国吉城跡）	（毛利）輝元	（天正三年）正月一日	1575年	103
108	吉川元春書状写／御書感状写	今度於手城高名之由候、雖不有始之儀候、一段無比類候、雖被疵之由候、無煩之通承候条可然候、成羽之儀茂明過【退ヵ】之由候条、御大利不可有経候	宛名欠損。元春が手城攻略戦で比類ない高名を挙げた某を称え、その際の負傷を気遣った書状。成羽も開城・撤退したとのことで毛利軍の勝利は程ないだろうと喜んでいる。	手城　（135国吉城跡） 成羽　（124三村氏居館跡・126鶴首城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正三年）正月七日	1575年	103

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
109	小早川隆景書状／乃美文書	新見要害落去之儀者、先書申候、元範事落行候処、於路次多治部衆討捕候、今度雑意之儀、元親に指増相企候処討果候而、大慶此事候、然間松山之儀もはたと可落力候条、弥急度可隙明と肝要存計候	隆景が乃美宗勝（乃兵）に対し、新見要害（楪城）を攻略したことを報じた書状。城主の三村元範は城から落ち延びたが、通路で毛利方の多治部氏の手勢が討ちとったとある。このたびの三村氏の謀叛に関して、当主の三村元親の企てに参加した人物を討ち果たすことが出来、大変喜ばしいと述べている。これによって松山城もすっかり力を落とすと思われるので、きっと合戦も終息するだろうと述べている。	新見要害　（8楪城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（小早川）隆景	（天正三年）正月十一日	1575年	51
110	毛利元清書状／厳島野坂文書	此表至鬼身被取懸候、即時可為落去候之条、御吉左右可申入候	元清が厳島神社の神主棚守左近将監に備中の戦況を報じた書状。こちらでは鬼身城に攻めかかっており、即時に落城させるつもりなので、また吉報を申し入れるでしょう、と述べている。	鬼身　（270鬼身城跡）	（毛利）元清	（天正三年）正月二十四日	1575年	116
111	岡本氏秀書状写／下河内牧家文書「牧之家可秘」	先度ハ岩屋衆被成御行、数人被打取之段心地能存候（中略）次ニ松山表之事此表へ通路就不自由、此頃之趣不聞申候、御方へハ寔可相聞候、此御返事ニ委可預示候	浦上宗景の宿老岡本氏秀が、石井与兵衛・牧菅兵衛ら三浦氏重臣に通信したもの。三浦氏が宇喜多方の岩屋城衆を討ち取ったことを快事と喜び、通路不自由のため最近の様子がわからない松山城の情報について、返書で教えてほしいと述べている。	岩屋　（〈美作189〉岩屋城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（岡本）氏秀	（天正三年）二月七日	1575年	36
112	内藤隆春書状／毛利博物館蔵文書	上口勝利之由被申下候、松山一城之由申候間、定急度可被明御隙与珍重ニ候	毛利氏家臣の内藤隆春が、某(宛名欠)に送った書状。毛利軍の上口（安芸国から見て上方方面。ここでは備中方面）での戦勝の知らせを聞き、あとは松山城一つを残すのみとのことなので、きっとすぐに戦争が終わって暇が出来るだろう、と祝意を述べている。	松山一城　（158備中松山城跡）	（内藤）隆春	（天正三年）二月八日	1575年	131
113	小早川隆景書状／宇喜多文書	仰亀身之儀頓一着候条、先以大慶候、就夫御太刀一腰・鳥目百疋送給候、遠路御懇之段祝着候、松山行等為相請、宇喜多昨日爰許罷出候、東西之趣申談候間、急度至松山可為陣替候	村上武吉から鬼身城攻略成就の祝いの品を受け取った隆景が、返礼がてら備中国の戦況を報じたもの。宇喜多直家と松山城攻略の方針について打ち合わせを行った隆景が、松山方面に陣替する予定でいることを伝えている。	亀身　（270鬼身城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（小早川）隆景	（天正三年）二月二十一日	1575年	36
114	三村元親書状／由佐家文書	旧冬自十一月毛利小早川催数ヶ国仕懸候、当国中無智□奴原現比興悉対毛利降参仕候〔次脱ヵ〕第ニ候、宮内少輔、孫二郎両城相残雖及戦候、如右申国中此成行ニ付而何も腹ヲ仕候、於于今者当城計ニ相極従去十六日芸州衆寄進陣候	三村元親が讃岐国の領主由佐左京進に備中国の戦況を報じた書状。昨年十一月から毛利輝元・小早川隆景が数ヶ国の大軍を率いて備中国へ戦争をしかけてきたが、当国の無知な連中が比興を現してことごとく毛利氏に降参してしまった。宮内少輔（三村元範）・孫二郎（上田実親）の守る二つの城（楪城・鬼身城）が残って防戦したものの、国中の者が毛利氏に靡く状況に抗えず、二人とも切腹してしまった。今では元親自身の籠もる備中松山城だけが残り、三月十六日から芸州衆（毛利軍）が陣を寄せてきている状況である、と伝えている。	宮内少輔、孫二郎両城　（8楪城跡および270鬼身城跡） 当城　（158備中松山城跡）	（三村）元親	（天正三年）三月十八日	1575年	56
115	宍戸隆家書状写／『閥閲録』巻八十八　山内源右衛門	備中陣之儀、広瀬固屋之事一着之上、打続松山麓まて放火・麦薙悉被申付候、可然趣候	毛利氏宿老宍戸隆家が、自分の家臣（佐々部美作守・大窪民部丞・賀屋左馬助）に備中国の戦況を伝えたもの。毛利軍は広瀬固屋を攻め落とし、松山城の麓まで出張って放火・麦薙を行い、良好な戦果を得たとある。	広瀬固屋　（160広瀬固屋城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（宍戸）隆家	（天正三年）三月二十七日	1575年	13・107
116	井上春忠書状／荘家文書	松山ｙ手届之在所二ケ村相残候条、自此方検使被指出、伊達、石蟹、其外内郡衆ニ被申付、麦薙すてさせられ候、然処、中津井之内をも、右二ケ村近辺付而、少々麦薙被申付候、（中略）不相限彼在所、何方をも、松山手とゝきの在所をハ、不謂敵味方領、悉麦薙被申付候	松山城からほど近い二つの村に、毛利氏が検使を派遣し、伊達・石蟹氏らに命じて、敵味方の領地にかかわりなく麦を薙ぎ捨てたことを示すもの。	松山　（158備中松山城跡）	井上又右衛門尉春忠	（天正三年）四月二十二日	1575年	7
117	吉川元春・元長連署書状／末永文書	其表之御事ハ、国中無所残被任御存分、松山一城ニ相極候条、弓箭之惣なはいに不慮共出来候ハん事ハ不存候、今之分にてハ珍儀ハ有間敷候哉と推量申候、（中略）我等申様ニ御座候へハ、其表之御事、松山近辺之諸城堅固ニ被持せ、松山を被押候程之御賦候て、芸州衆一頭二頭ハ、此表被差出候へく候	吉川元春・元長父子が、小早川隆景に意見を伝えた書状。このころ、備中方面は国中残すところなく毛利氏の意のままに平定され、備中松山城一ヶ所を残すのみとなっていた。この状況を知った元春父子は、もう備中の合戦で不慮の事態が起きるようなことはないと推察できるので、松山城近辺の諸城を堅固に保持し、松山城を押さえ込むことができる程度の軍勢を配置した上で、毛利軍のうち一人か二人ほどの部将を因幡方面の戦線に回してほしい、と述べている。	松山　（158備中松山城跡）	（吉川）駿河守元春・（吉川）少輔次郎元長	（天正三年）五月十一日	1575年	55

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
118	三吉隆亮・広尊連署書状／三原城城壁文書	昨日廿一日御折帋今日申尅到来拝見候、松山儀内々以御調略之旨、竹井宗左衛門尉・三村兵部丞・同【日ヵ】名助左衛門尉以下致現形、天神丸・大松山御仕取之由、誠御太利尤目出候、小松山□ニ可為落去候	備後国衆三吉隆亮・広尊父子が、五月二十一日付けで備中松山城攻めの様子を伝えてくれた小早川隆景・福原貞俊に返答した書状。松山城に対する内々の調略が実って、竹井直定（宗左衛門尉）・三村兵部丞・日名助左衛門尉らが内応し、毛利軍は天神丸・大松山を攻め取ることができた。この報に接した三吉父子が毛利軍の勝利を祝賀し、小松山の本城もほどなく落城するでしょう、と述べている。	松山・小松山・大松山・天神丸（158備中松山城跡）	（三吉）安房守隆亮・（三吉）太郎広尊	（天正三年）五月二十二日	1575年	118
119	垣屋豊続書状／吉川家文書	備中松山之儀、隆景以御調略被属御本意由、誠珍重候	毛利氏と結ぶ但馬守護山名氏の重臣垣屋豊続が、小早川隆景の調略によって毛利氏が備中松山城を手に入れたことを聞き、祝意を伝えたもの。	備中松山　（158備中松山城跡）	垣屋駿河守豊続	（天正三年）六月七日	1575年	13・71
120	小早川隆景書状／正宗文庫所蔵文書	今度三村方逆意付而、松山城可取詰覚悟ニ而罷上候之処ニ、旁才覚以、頓ニ一着仕、中国之弓矢任本意大慶迄候、旁気遣之段令祝着候、就其松山領以知行千貫目令扶持候	三村元親が逆心した際、松山城を包囲するため毛利軍が出陣したが、中島大炊助の才覚で早期に決着がついた。その功に報いて、小早川隆景が中島氏に対し、松山城に付属する領域のうちで恩賞地を与えたもの。	松山城　（158備中松山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正三年）九月十一日	1575年	9・59
121	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛に写しあり）	新見表頓有御出、彼表即時得太利候、併旁御馳走之故本望存候	備中国新見へ速やかに出陣し、同所の戦いで大きく勝利に貢献した楢崎豊景（三河守）の手柄を、輝元が褒めたもの。下記史料に関連。	新見表　（8楪城跡）	（毛利）少輔大郎輝元	（天正三年）十一月六日	1575年	107・132
122	毛利輝元感状／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛に写しあり）	今度備中杠城落去之時、暦〔歴〕々被討捕之頸注文、慥令一見候、尤本望大慶存候	三村方の備中楪城を攻め落とし、主立った将兵を討ち取って首注文を提出した楢崎豊景（三河守）の働きぶりを、輝元が喜んだもの。	備中杠城　（8楪城跡）	（毛利）輝元	（天正三年）十一月六日	1575年	13・107・132
123	小早川隆景書状写／『岡山県通史』所載長府毛利家文書　※部分抄出	連々依御愁訴、今度猿懸要害並五千貫之地御拝領、誠吾等迄大慶候、輝元御懇の段乍勿論不可有御忘却事肝要候	以前からの訴えが叶えられ、穂田元清は毛利輝元から猿掛城と5000貫の領地を拝領した。本書状は、小早川隆景が弟元清の猿掛城主就任を喜び、輝元の懇情を忘れないよう伝えたもの。	猿懸要害　（227猿掛城跡）	（小早川隆景）	（天正三年）十一月二十二日	1576年	16・19
124	毛利輝元判物写／『岡山県通史』所載長府毛利家文書	備中国猿懸要害事預進之候、就夫於彼国伍千貫地《割注：在所注文別紙記之》事進置候	毛利輝元が叔父の穂田元清（四郎）に備中国猿掛城を預け、備中国内で5000貫の領地を与えることを伝えたもの。元清の猿掛城主就任を示す根拠史料。	猿懸要害　（227猿掛城跡）	（毛利）右馬頭輝元	天正三年十二月十八日	1575年	16・19・53
125	清水宗治・佐野忠職連署書状／吉備津神社文書	三ケ郷反銭之儀ニ付而、度々御懇ニ被仰越候、殊ニ今日ハ登城申候間、御帋面趣、即申聞候	吉備津神社が所領三ケ郷に対する段銭賦課軽減のため、石川氏のもとに嘆願書を送った。ちょうどこの日、清水宗治らは登城していたので、嘆願書の内容を主君に披露している。	（414幸山城跡）	清水長左衛門尉宗治・佐野和泉守忠職	年未詳二月二十六日		8
126	日幡正礼書状／吉備津神社文書	如御意、昨日左衛門二郎為名代と、高山江罷上、御出入之儀、清長・孫右衛門尉・舟木・鳥越方へも趣具ニ申渡候	吉備津神社所領に関する紛争解決のため、日幡正礼が「左衛門二郎」の名代として高山城へ出向き、清水宗治（清長）・舟木・鳥越氏らに具体的に話したことを、神主に報じたもの。	高山　（414幸山城跡）	日新正礼（日幡新右衛門尉正礼）	年未詳十二月一日		8・53
127	坪和宗親書状／吉備津神社文書	只今自高山□□候、備後衆事□中ニ至、宮内ニ□出候	虫食いが多く文意が明瞭でないが、高山城を起点に何がが動いたこと、関連して備後国の軍勢が宮内（吉備津神社門前町）に進出したことがわかる。	高山　（414幸山城跡）	坪和因幡守宗親	年月未詳五日		8
128	吉川元春・福原貞俊・口羽通良・小早川隆景連署書状写／『岡山県通史』所載長府毛利家文書	猿懸御在番の儀被仰出候処、則御請付候而此節悉御上候、寔遠国之儀候、無二御覚悟無比類存候、（中略）将又桜尾之事、御北尾並才菊殿被残置、番等堅固被仰付候由肝要存	穂田元清は、毛利輝元からの猿掛城在番命令について、遠国にもかかわらず即座に了承し、備中国へ移った。こうした元清の心がけに元春らが感心し、書状を送って賞揚したもの。なお、元清の母と幼い弟（才菊丸。後の小早川秀包）は、以前からの元清の居城安芸国桜尾城に残し、番を置いて守らせている。	猿懸　（227猿掛城跡）	（吉川）元春・（福原）貞俊・（口羽）通良・（小早川）隆景	（天正四年）正月二十五日	1576年	16・19
129	毛利輝元判物写／小早川家文書二（附録浦家文書）・『閥閲録』巻十一之二　浦図書	其方事、於所々数ケ度忠儀之段、慥承知候、寔無比類候、（中略）然間、備中猿懸領之内四拾瀬三拾貫、打田三拾五貫足之事、預ケ置候	井上春忠の所々における忠義を褒めた毛利輝元が、褒賞として備中猿懸城に付属する領域のうち四十瀬・打田で所領を給与したもの。	備中猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）輝元	天正四年正月二十八日	1576年	53・75・106

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
130	毛利輝元宛行状／山口県文書館蔵右田毛利家文書	於備中猿懸領内弐百貫進置之候	輝元が天野元政（六郎）に対し、備中国猿懸領の範囲内で２００貫の知行を給与したもの。	備中猿懸　（227猿掛城跡）	毛利輝元	天正四年二月二十五日	1576年	132
131	吉川元春書状写／岩国藩古文書纂	兵衛門ニ普請等々之儀無油断被申付候而可然候（中略）今度新見在番之儀申入候処御同心ニ而御上誠以大慶之至候	吉川元春が重臣今田経高（上野介）に宛てた書状。経高が新見城への在番要請を承諾し、備中国へ上ったことに謝意を示し、兵衛門なる者に城の普請などを油断なく命じるよう伝えたもの。	新見　（8楪城跡）	（吉川）元春	（天正四年ヵ）二月二十五日	1576年ヵ	103
132	毛利輝元判物写／『閥閲録』巻三十二　口羽衛士	備中国吉領所之事、於千貫之辻申付者、春良聢与令在番、何篇堅固可遂馳走之由候条、手之庄七百貫・中津井之内参百貫宛行候	毛利輝元が宿老口羽春良（中務大輔）に国吉城への在番を命じ、その見返りとして、手之庄および中津井の内にて合計１，０００貫の所領を与えたもの。	備中国吉（135国吉城跡）	（毛利）輝元	天正四年八月二十三日	1576年	13・106
133	社家配当注文／吉備津神社文書	一所　城ノおもて　壱反分　両毛　七百文　庭妹ノ九郎兵へ 一所　城ノまへ　畠卅代分　両作　三百六十文　青郷二郎太郎 一所　城ノ南　畠四十代分　両作　四百八十文　日幡村猪助	吉備津神社社家の一家に所領として配当された田畠とその耕作責任者を一筆ごとに記録したもの。小字として「城」が見える。	城　（401伝賀陽氏館跡、または402庭瀬城跡、431日畑城跡などに該当するか）		天正四年九月十一日	1576年	8
134	穂田元清書状／山口県文書館蔵右田毛利家文書	昨日者、矢かけまて参度候つれとも、城中あまりうちあけ候て、罷越候事もいかゝニ存候て、ミちより罷上候	「廿ニ罷成」った元清が、弟の天野元政に送った書状。昨日は矢掛まで行きたいと思っていたが、城中をあまり開けっ放しにして出かけるのもどうかと思い直し、道から城へ上がった、という。	矢かけ・城中（227猿掛城跡に関連か）	四　元清（穂田四郎元清）	（天正三～四年ごろヵ）十月十六日	1575～76年ごろヵ	132
135	小早川隆景書状／山口県文書館蔵寄組村上家文書（『閥閲録』巻廿二之二　村上図書に写しあり）	笠岡之儀、最前申談候、然者隆重被懸御意、御内存之通、重畳承候条、陶山領内千貫辻進置候、全可有御知行候	隆景が村上水軍の将村上元吉（少輔太郎）に与えた書状。最前より村上氏との間で申し合わせのあった笠岡城のことについて、村上隆重に与えたいとの元吉の内意を承知した隆景が、かつての笠岡城主陶山氏の旧領のうち1000貫の所領を村上氏に進呈するので、全て知行するよう伝えている。	笠岡　（254笠岡城跡）	小早川隆景	（天正四年ヵ）十一月二十三日 ※参考文献山内譲氏の見解による		106・130・132
136	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	就東口行之儀（中略）我等事、来十六日出張弥令儀定候、然者播州衆紀州表在陣候条、其内先至堺目一動可申付之段、宇喜多申談候、（中略）為先勢急度御打出可為本望候、来十六日幸山表於被相揃者、一人進之置、時宜可申談候	東上作戦について、毛利輝元が備後国衆の湯浅将宗に方針を伝えた書状。三月十六日の毛利軍出動が決定したので、播磨国衆が信長に従って紀州に在陣しているうちに境目に攻め込む方針で宇喜多直家と相談していることを伝え、湯浅氏に先陣として出動することを要請している。また、幸山城に集結した際隆景から人を出して相談したいと述べている。	幸山　（414幸山城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正五年）三月六日	1577年	36・108・132
137	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	播州境就動之儀、宇喜多其外行差急之条、誠雖御辛労候、方角之儀候条、為先勢御上頼存候、然者来十六日至幸山表御着陣肝要候	上の史料と同内容。播磨国境への軍事作戦について、宇喜多直家らが出動を急いでいることを湯浅将宗に伝え、来る十六日に幸山城へ着陣するよう要請したもの。	幸山　（414幸山城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正五年）三月十日	1577年	36・108・132
138	小早川隆景書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	輝元出張之儀、来十六日被打立候、然間旁之御事、（中略）先以至幸山頓有御打出、吉田検使可被成御待事肝要候、我等事明日十二至三原罷出、軈而以舟手笠岡可令着陣候条、毎事可申談候、仍上口之儀、至雑賀表信長被相動候条、至播州宇喜多人数并備作衆悉指出、動被申付候、如此条、十六日無相違御打出専一存候	織田信長が紀州雑賀に出陣した隙を狙って、宇喜多直家が備作の軍勢を率いて播磨国に攻め込んだ。これに合わせて毛利輝元も来る三月十六日に出陣することになった。これを受けた隆景が、湯浅将宗に対し、幸山城まで速やかに出動し、吉田郡山城から検使が到着するのを待つよう命じている。隆景自身も、明日三原城を出発し水軍で笠岡城へ着陣する予定であると伝えている。	幸山　（414幸山城跡） 笠岡　（254笠岡城跡）	小早川隆景	（天正五年）三月十一日	1577年	13・36・108・132
139	毛利輝元書状／山口県文書館蔵福間家文書（『閥閲録』巻八十三　福間彦右衛門に写しあり）	爰元之儀去十六日至備後伊多岐出張候、諸勢相揃即時播州表可及行候、隆景儀同日笠岡上着候	輝元が家臣の福間元明（彦右衛門尉）に与えた書状。毛利軍は三月十六日に備後国伊多岐まで出陣しており、諸勢が揃い次第すぐに播磨国への軍事行動に及ぶだろうと伝え、小早川隆景も同日に笠岡城へ到着していることを伝えている。	笠岡　（254笠岡城跡）	（毛利）輝元	（天正五年）三月十九日	1577年	107・132
140	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	為桂民部太輔替、至猿懸可罷上候、桂民儀者先様江遣子細候て申付候間、片時も差急可罷上事肝要候	輝元が熊谷就真（小四郎）に指示した書状。猿掛城に駐在している桂広繁（民部大輔）を領国の先の方へ派遣する用事が出来たので、広繁の代役として猿掛城へ急いで赴くよう就真に命じている。	猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）輝元	（天正五年ヵ）三月二十二日	1577年	108・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
141	小早川隆景書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	宇喜多事去廿日境目打出、昨日廿二至播州立野表相動候、然者為後詰一勢可差出之由申越候条、乍御太儀頓御打上干要候、片時茂被差急、至小田・高腰御着陣不可有御油断候	史料136～139と関連。宇喜多直家は三月二十二日に播磨国龍野城付近へ出陣し、毛利氏に後詰の援軍派遣を要請してきた。これを受けた小早川隆景が、湯浅将宗に対し、急いで備中国小田・高越城まで出陣するよう要請したもの。	高腰　（191高越城跡）	小早川隆景	（天正五年）三月二十三日	1577年	13・36・108・132
142	八田部郷之内六貫文之地田畠坪付／『閥閲録遺漏』巻弐之二　国貞平左衛門	阿宗郷之内　（中略）城のにし　一所田五段　三斗代　分壱石五斗　同人	小早川隆景が家臣の国貞景氏（助九郎）に対し、備中国賀陽郡八田部郷のうちで六貫文の給地を与えた。この坪付は、景氏の給地となった田畠の具体的な所在地・斗代・所有者名をまとめた目録。阿曽郷（阿宗郷）に「城のにし」という土地がみえ、付近に城館の存在が予想される。	城　（場所未詳）	桂右衛門大夫景信・井上又右衛門尉春忠・岡和泉守就栄・磯兼左近大夫景道・河内備後守熙資	天正五年五月二十二日	1577年	13・59・110
143	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻六十八　三隅勘右衛門	養仙所へ申遣候趣、返事披見候、今一往笠岡江令内談自是又可申下候	輝元が粟屋元英（粟二四）とやりとりした書状。養仙なる人に申し伝えた事柄の返事をみた輝元が、もう一度笠岡城の小早川隆景と内談した上でこちらから再度申し伝えるつもりである、と答えている。	笠岡　（254笠岡城跡）	（毛利）輝元	（天正五年）閏七月九日	1577年	107
144	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	至播州立野表一動申付之条、至笠岡来廿日御出張候而、隆景可被仰談事可為祝着候	史料136～139、141に関連。輝元が湯浅将宗に対し、播磨国龍野城攻撃への参戦を要請し、来る二十日に備中国笠岡まで出動して小早川隆景と相談してほしいと伝えている。	笠岡　（254笠岡城跡）※この時期、隆景が在陣する「笠岡」が笠岡城そのものを指すことについては、『御答書』を参照のこと。	（毛利）右馬頭輝元	（天正五年）閏七月十二日	1577年	36・108・132
145	宍戸隆家書状写／『閥閲録』巻八十八　山内源右衛門	今度於元吉城山下敵罷出候刻、従船本被罷出、以堅固之覚語相副候、鬼身被官已下分捕仕候、其方無緩段併無比類存候	宍戸隆家が家臣佐々部家祐（美作守）に与えた書状。讃岐国元吉城の麓に敵軍が押し寄せた際、家祐らは軍船から揚陸し堅固な覚悟でもって城側に助力したが、家祐の指揮下にあった備中鬼身城衆も活躍し、敵を討ち取った。隆家はこうした緩みない尽力を比類なきことと賞賛している。	鬼身　（270鬼身城跡）	（宍戸）隆家	（天正五年）八月十九日	1577年	107
146	毛利輝元書状写/『閥閲録』巻百　児玉惣兵衛	其方事、自阿州使者差下、申分之儀付而、重而至笠岡罷越候由辛労候	輝元が児玉就英（内蔵大夫）に与えた書状。阿波三好氏の使者の申し分に対応するため、再び笠岡城へ出張した就英を慰労している。	笠岡　（254笠岡城跡）	（毛利）輝元	（天正五年）十月朔日	1577年	108
147	吉川元長・元春連署書状写／吉川家中并寺社文書十	播州佐用郡事ハ羽柴一味之由候、於于今者後藤方之儀肝要迄候、如先年馳走者三星表〔カ〕事可有安否と存候（中略）井又右、自松山之折紙披見候（中略）去比作州高田へ忍共付候哉、城内ちと油断之様候つる〔カ〕か、相替儀候ハヽ、可被申越候	吉川元春父子が重臣の今田経高に近況を報じたもの。播磨国佐用郡が羽柴秀吉に味方したとのことなので、今後後藤氏の去就が注意されるが、後藤氏が先年のように毛利氏に尽してくれるなら三星城はとりあえず安心できるだろうか、と予測を述べる。また、松山城から届いた井上春忠（井又右）の書状を読んだことを伝え、少し前美作国高田城に忍者が侵入したとの噂に対し、城内に油断があるのではないか、変わったことがあれば報告するように、と伝えている。	三星　（〈美作350〉三星城跡） 松山　（158備中松山城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡）	（吉川）元長・（吉川）元春	（天正五年）十二月十三日	1577年	36
148	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十九　桂善左衛門	笠岡江使ニ可遣候、明日未明可罷越候、急用候	輝元が桂元将（善左衛門）に対し、笠岡城への使者を務めるよう指示し、急用なので明日未明には出立するよう命じた書状。	笠岡　（254笠岡城跡）	（毛利）輝元	（天正六年ヵ）二月十七日	1578年	107
149	三村親成書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	今度御兄弟之孫市郎殿、須々木御同然ニ至高松御越候、（中略）従御本陣、前之姿ニ須々木方秋山罷帰候へと被仰出候、左候処ニ、孫市郎殿へ御存分候へハ、御本陣之御下知を被相背候様ニ可被思召候条、於此節者、如此以前御分別専一ニ候	毛利氏による播磨国上月城包囲中、織田方に内通した須々木・秋山氏が備中高松城を乗っ取る事件が発生した。この時、福屋七郎兵衛の弟孫市郎も須々木氏らに加担して高松城へ入った。しかし、御本陣（毛利輝元）は、以前の通り須々木・秋山の一族をそれぞれの在所へ帰らせるよう指示した。福屋七郎兵衛は弟の孫市郎を独自に処罰しようとしていたが、三村親成は七郎兵衛を諭して、そのような私的制裁をすれば、結果として毛利輝元の下知に背くことになるので、今回はよく分別して行動するよう伝えている。	高松　（393備中高松城跡）	三村越前親成	（天正六年ヵ）六月朔日	1578年ヵ	15・59
150	小早川隆景書状／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三楢崎与兵衛に写しあり）	就此表任存分、為御祝儀太刀一腰・青銅百疋被懸御意候、寔御丁寧之至本望存候、山中事、今日至松山指下候	楢崎豊景（三河守）から上月城合戦の勝利に対する祝賀を受けた隆景が、謝辞を述べ、山中鹿介を今日松山城へ護送したことを伝えたもの。	松山　（158備中松山城跡）	（小早川）隆景	（天正六年）七月十日	1578年	13・107・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
151	吉川元春書状／吉川家文書	此表敵陳之儀、去月廿四日敗軍候、上月要害之儀茂、山中鹿介種々致懇望、尼子勝久・同助四郎方ニ腹ヲ切せ申候、（中略）山鹿以下生捕之者をハ、先備中至輝元陳所差下候	毛利軍が六月二十四日に織田軍を破り、上月城を降伏させて尼子勝久兄弟を切腹させたことにつき、元春が一色藤長（足利義昭の側近）に伝えたもの。生け捕った山中鹿介らをひとまず備中の毛利輝元陣所まで護送したことにも触れている。	備中至輝元陣所（158備中松山城跡）	（吉川）元春	（天正六年）七月十二日	1578年	13・72
152	吉川元春袖判同氏奉行人連署書状／山口県文書館蔵鹿野町岩崎家文書	杠城誘之儀、堅固可被仰付之由候、自然地下中緩之所候者礒質物を被召置候而、可被仰付候	吉川元春の奉行人二名が、楪城番の今田経高（上州）に送った書状。楪城の「誘」（こしらえ。修築工事の意）をしっかり行うようにとの元春の命を伝え、もし支配地域の民衆（地下中）で気が緩んでいるようなところがあれば、人質を取って城の修築工事に従事させるよう命じている。	杠城　（8楪城跡）	（吉川元春袖判）・児玉市介春種・二宮右京進春澄	「天正六」九月十四日 ※年号異筆	1578年	132
153	天野元明書状写／『譜録』井上孫兵衛勝政	於中津井板三拾八枚御預ケ之儀候条、至高橋御取越有之度之由候之条、頓申付取越申候	備中松山城在番の天野元明が、井上就正（孫兵衛尉）に与えた書状。就正が中津井に預けた板３８枚を「高橋」へ持っていきたいとのことだったので、すぐに申し付けて板を「高橋」に取り寄せたことを伝えている。	高橋　（158備中松山城跡）	天野中務少輔元明	（天正七年ヵ）七月十八日 ※出典書の年次比定に依る	1579年	125
154	穂田元清書状／中丸家文書	先日大野村堤所并荒所可有御見せ之由候哉、其節中丸市允事、猿懸為加番被差上付て、留守代申理候哉	元清が毛利輝元の奉行人粟屋元種（内蔵丞）・粟屋就秀（宗兵衛）に送った書状。これによると、元清の配下中丸市允が代官職を勤める安芸国大野村の堤防・荒れ地について毛利氏が調査をしようとしたことがあった。その時、中丸市允は猿掛城の加番を勤めるため備中国へ赴いており、留守番の人間が毛利氏の調査に応対したという。	猿懸　（227猿掛城跡）	（穂田）四郎元清	（天正四～六年ごろ）十一月二日	1576～78年	50・133
155	毛利輝元書状／毛利博物館蔵文書　毛利家旧蔵文書児玉家文書（『閥閲録』巻十七児玉三郎右衛門にも写しあり）	備前境之儀、火急之注進追々候、身かまへと相聞之候、至今日敵動ハ無之候、うかに地下人引分、四つうね取誘可居覚悟仕、加茂伊加へ加勢之儀申候へ者取合す候由候而、彼敵意者城をもゑ取付候ハて、はや相静候由、従国吉只今到来候、近比しらけたる事候	毛利輝元が重臣の児玉元兼に近況を知らせたもの。備前国境の情勢について火急の注進が届いているが、今日のところまでは敵軍に動きがないと伝える。また、有漢の地下人が毛利氏に背き、四畝城を修築して立て籠もる覚悟を決め、備前国加茂の伊賀氏に加勢を求める動きがあった。しかし、伊賀氏に取り合ってもらえなかったため、有漢の地下人たちは結局城の修築も出来ぬまま静まったとの報告が国吉城からもたらされ、これを聞いた輝元が呆れたことだと感想を述べている。	四つうね　（93四ツ畝城跡） 国吉　（135国吉城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）八月八日	1579年	13・36・106・131
156	宇喜多直家書状写／真島郡関村鈴木九右衛門所蔵文書（『作陽誌』、『美作国諸家感状記』にも写しあり）	鈴木名字一類中并庄官衆此方有一味松山高田之間通路可被指切之由然者水田七百貫之事一円可相計候	鈴木一族および荘官衆が宇喜多氏に味方し、毛利方の松山城と高田城との連絡通路を断ち切る働きをした。これを直家が褒め、水田での所領給与を約束したもの。	松山　（158備中松山城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡）	（宇喜多）直家	（天正七年）九月五日	1579年	36・127
157	毛利輝元書状写／藩中諸家古文書纂十	備前表之儀、境目一二ケ所要害取付之由候、月田之儀申付候由候哉、自高田も其分ニ申越候、宮山之儀をも諸牢人取付候由候条、左候へハ高田□〔江〕之通路相□〔差ヵ〕□□〔可ヵ〕然間、従是元彼伝之一城可被仰付候由、尤肝心候、盛重之罷出可取付候由被申候哉、寔短束之段不浅候、自此方も彼伝之一城可取誘との儀候、下野守国吉表罷居候て、右之一城之短束仕半候	備前・美作における宇喜多氏との合戦について、毛利輝元が吉川元春と情報・意見の交換を行ったもの。備前国との境目に一、二ヶ所要害を築いたとの報告があり、月田城についてもそのようにしたと高田城から報せがあった。宮山城にも敵方諸牢人が入ったとのことなので、高田城への通路を維持するよう指示している。また、杉原盛重が「彼伝之一城」構築に尽力する意向を示していることを聞いて感謝の意を伝え、現在口羽通良（下野守）が国吉城にあって「伝之一城」築城に取り組んでいることを伝えている。	月田　（〈美作54〉月田城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 宮山　（〈美作56〉宮山城跡） 国吉　（135国吉城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正七年）九月八日	1579年	36
158	小早川隆景書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	当城隣郷多分敵同意之由候、誠御心遣察存候、為始三吉方、追々人数某許差出候間、口中・成越被仰談、郷庄可被討果御行御調儀肝要候	松山城（当城）に隣接する郷村の多くが宇喜多方に同意し毛利氏に敵対したとの報せを受け、心配した毛利輝元が松山城番の天野元明・熊谷就真（玄蕃允）・坂元貞（式部大輔）に送った書状。おいおい三吉氏などの軍勢を松山へ派遣するので、口羽春良（口中＝口羽中務大輔の略）・成羽親成（成越＝成羽越前守の略）と相談し、敵対する郷庄の住民を討ち果たすてだてを練るのが大事である、と伝えている。	当城　（158備中松山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正七年）九月十一日	1579年	13・36・108・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
159	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	一当城之儀、元明堅固之覚悟之由候条、肝要候、其段者心安存候、たゝ＼／兵粮人数有間敷之と笑止千万候（中略）一中とをり一城可取付との儀候、何れ之在所可然との其元校量共に候哉、可被申越候、（中略）一外郡表之儀者、諸城堅固之儀候間、可心安候	毛利輝元が備中松山城周辺の動静につき、熊谷就真（熊玄）とやり取りした書状。松山城（当城）については、天野元明が堅固な覚悟でもって守備しているとのことで、その点は安心しているが、兵糧と人数がないというのは困ったものだと伝えている。また、「中とをり」＝中通りに城を一つ築城しようと思うが、どこに造ったら一番よいか就真の考えを聞かせてほしいと述べている。外郡の諸城については、堅固に維持されているとのことなので安心するよう伝えている。	当城　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）九月十一日	1579年	13・36・108・132
160	毛利輝元書状／毛利博物館蔵文書　毛利家旧蔵文書児玉家文書（『閥閲録』巻十七児玉三郎右衛門に写あり）	松山ニ兵粮も人数もなく候との事候、あらさむ＼／の仕合候（中略）備前より至今日動候事なく候、身かまゑまて候、松山近郷竹庄辺敵意候、仍中とをり一城可取付との事候、いかにも此方人数なく候、遠所山かに一戸衆残居候ハヽ、かい分聞立可出候	毛利輝元が重臣児玉元兼に備中松山城あたりの状況について伝えた書状。松山城に兵糧も人数もなく寒々しい状態であること、今のところ備前宇喜多氏からの攻撃はないこと、松山城の近郷にあたる竹庄付近の住民が毛利氏に敵対していることを報じている。また、「中とをり」に一城を構築することになったが、どうにも人数が足りないので、遠方の山家に一戸衆が居残っているようであれば聞き立て、駆りだすつもりであると伝えている。	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）九月十一日	1579年	13・36・106・131
161	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	爰元人数之儀、昨日差出候之処、外郡表敵相動之由候条、先是非彼表へ可指遣之由、火急ニ追々被申越候之条、至小田・高越罷出之可聞合之由申聞候	毛利輝元が天野元明・熊谷就真（熊玄）に与えた書状。毛利軍を昨日出動させたところ、備中国外郡表（備中国を半分に分けた南半分）に敵が侵攻してきたとのことで、軍勢をその方面へ火急派遣すべきだと申し入れがあった。そこで味方軍勢に対し、まず小田・高越城まで進出し相談するよう言い聞かせたという。	高越　（191高越城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正七年）九月十七日	1579年	108・132
162	宇喜多直家書状／新出沼元家文書	其元御在番御辛労察存候、弥頼存候、備中表之事、去十七日ニ鍛冶屋取捔、五ケ庄一円敷詰候	宇喜多直家が沼元新右衛門尉の某城在番の労をねぎらい、近況を知らせた書状。宇喜多軍が備中国に出陣し、九月十七日には鍛冶屋山城を修築し、「五ヵ庄」一帯を制圧したことを伝えている。	鍛冶屋　（354鍛冶山城跡）	（宇喜多）和泉守直家	（天正七年）九月二十四日	1579年	36・37・131
163	毛利輝元書状／井原家文書（『閥閲録』巻四十　井原藤兵衛に写しあり）	一昨日廿五高松向城へ近習衆之者罷出、及防戦得勝利、為始山川市介宗徒者数多打取候、初而之手合太利大慶候	毛利軍と宇喜多軍の最初の交戦（初めての手合わせ）ほかにつき、輝元が家臣の井原小四郎に報じたもの。一昨日、宇喜多軍が高松城に対抗して築いた向城に毛利輝元の近習衆が攻め込み、山川市助ほか主だった者を多数討ち取って勝利している。	高松　（393備中高松城跡） 向城　（場所未詳）　※高松城に対する宇喜多軍の陣城	（毛利）右馬頭輝元	（天正七年）九月二十七日	1579年	36・107・132
164	小早川隆景書状／熊谷家文書	佐井田可有御在番之由申候処、御分別可然存候、向後之儀者、徳良御望之由得其心候	毛利輝元が熊谷就真に佐井田城在番を要請したところ、就真はこれを了承した。こうした就真の分別に輝元が感謝し、今後の戦局進展後に徳良（徳倉城か）を申し受けたいという就真の希望を容認したもの。	佐井田　（76才田城跡） 徳良　（〈備前44〉徳倉城跡ヵ）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正七年）十月八日	1579年	36・132
165	穂田元清書状／厳島野坂文書	此表之儀、宮山被取付候、境目堅固被仰付候之条、可御心安候、諸城何茂手堅候、於此口之儀者不可有御心遣候、備前所々手塞之故、此節者曾而不及行候、（中略）作州山之内へも元康・盛重被罷出、要害二ケ所被申付之由候	元清が厳島神社の神官棚守元行に近況を報じた書状。備中国において毛利軍は宮山城？を築城し、諸城も手堅く防衛し境目を堅固に守っているので、安心してほしいと伝えている。また、美作国山之内にも末次元康・杉原盛重が出陣し、要害を二ヶ所構築したこと、備前の宇喜多軍は方々手詰まりで、今のところ目立った軍事行動を起こしていないことを報じている。	宮山　（353宮路山城ヵ） 要害二ヶ所（〈美作7〉飯山城跡・〈美作14〉大沼山陣所などを指すか？）	（穂田）治部太輔元清	（天正七年）十月十一日	1579年	36・116
166	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	就境目在番之儀、自隆景被申越之間、委細笠岡へ様躰申之条、可被相達候、今度者長々松山罷居、色々気仕共誠祝着候	輝元が熊谷就真（熊玄）に与えた書状。境目地域への在番配置について小早川隆景から問い合わせがあったので、隆景のいる笠岡城へくわしい状況を返答した、この件で隆景から就真あてに達しがあるだろう、と伝えている。また、就真が長らく備中松山城に駐在して色々気遣いしていることに対し、感謝の意を伝えている。	笠岡　（254笠岡城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月十二日	1579年	108・132
167	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	就今度其方在番之儀、従隆景・貞俊被申越之通、令承知之候、然者雖為何之境目、長久在宅候者、於備作之間千五百貫之地、可遣置候、先以当時佐井田城番肝心候	毛利輝元は小早川隆景・福原貞俊ら宿老の要請を容れ、自身の側近熊谷就真（玄蕃允）を備前・備中・美作境目地域の城に在番させることを了承した。輝元はそのことを就真に伝え、境目に長く在宅する場合は備前・美作付近で所領を与えるので、まずは佐井田城の番を務めることが肝心であると伝えている。	佐井田城　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月十二日	1579年	13・108

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
168	毛利輝元書状／岡山県立博物館所蔵文書	今度佐井田被籠候之儀、心懸之至神妙候、備前以一着之上、三十石之地可遣之候、堅固之在番肝要候	毛利輝元が和智元次（藤四郎）の佐井田城在番を賞し、備前国攻略の暁に３０石の給地を与えることを約束し、堅固に城を守るよう命じたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	11・36・108
169	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十八　井上彦左衛門	今度佐井田籠候儀、心懸之段神妙候、備前以一着之上、五拾石之地可遣之候、堅固之在番肝要候	毛利輝元が井上元勝（源右衛門尉）の佐井田城在番を褒め、将来備前国を平定した後に５０石の給地を与えることを約束し、堅固に城を守るよう命じたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	13・36・107
170	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十八　井上彦左衛門	今度佐井田籠候儀、心懸神妙候、其方事内々志候間、約束之外三拾石之地可遣候	毛利輝元が佐井田城在番を務める井上元勝の「内々志」に応え、上記の文書で約束した５０石とは別に３０石を追加で与えると伝えたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	13・36・107
171	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻六十九　井上新左衛門	今度佐井田籠籠之儀、心懸之至神妙候、備前以一着之上、五拾石之地可遣之候、堅固之在番肝要候	毛利輝元が井上元宗（新五郎）の佐井田城在番を褒め、備前国を平定した暁に５０石の給地を与えることを約束し、堅固に城を守るよう命じたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	13・36・107
172	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	今度佐井田籠籠候儀、心懸之段神妙候、備前以一着之上、百五拾石之地可遣之候、堅固之在番肝要候	毛利輝元が岡元良（宗左衛門尉）の佐井田城在番を賞し、将来備前国を平定した暁に１５０石の給地を与えると約束し、堅固に城を守るよう命じたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	13・36・107・132
173	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	今度佐井田籠籠候儀、心懸神妙候、（中略）内々別而志候間、弓矢静秘〔謐〕之上、約束之外百五十石可遣候、合三百石之地不可有相違□〔候〕、仍自然□〔其〕方於用立者、子とも之儀かい分乍勿論引立、跡目之儀いさゝか別儀候ましく候	輝元が佐井田城在番を務める岡元良に対し、上記の文書で約束した給地とは別に１５０石を追加で給与する旨を伝え、もし元良が戦死するようなことがあっても、その遺児を引き立て跡目を間違いなく継がせると約したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	13・36・107・132
174	毛利輝元書状写／『閥閲録遺漏』巻壱之二　苻野屋六兵衛	今度佐井田籠籠候、誠心懸之段神妙之至候、以備作一着之上、五十石之地可遣之候、堅固之在番肝要候	毛利輝元が山田清正（神右衛門尉）の佐井田城在番を賞し、備作統一の暁に５０石の給地を授けることを約束、堅固に城を守るよう指示したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十一月（十月ヵ）二十日	1579年	13・36・110
175	毛利輝元書状写／下関市立長府博物館蔵渡辺家文書	今度佐井田籠籠儀、心懸之至神妙候、備前以一着之上、五拾石之地可遣之候、堅固之在番肝要候	毛利輝元が渡辺宗（神右衛門尉）の佐井田城在番を賞し、備前平定の後に５０石の給地を与えることを約束、城を堅固に守備するよう命じたもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月二十日	1579年	36・50・133
176	毛利輝元書状写／下関市立長府博物館蔵渡辺家文書	其方事、佐井田籠籠候、毎事心老〔労〕之至候、内々別而志候間、約束之外三十石之地可遣之候	毛利輝元が佐井田城在番を務める渡辺宗の労に報いるため、上記文書で約束した給地とは別に３０石を与える旨、約束したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正七年）十月三十日	1579年	36・50・133
177	吉川元春書状写／『譜録』神保市郎右衛門常知	我等存事にハ、盛重一人此口ニ残申候て悉打丸、四畝表へ罷出、彼山之儀ハ則可被任御存分候、其御競ニ、宮山・寺畑之城、湯山之儀可落去候、左候て、作州葛下の城此方被成取付候者、祝山江成相、作州之儀者、多分一色可見せ候（中略）此方御短束候ハすハ、作州之儀も、備前境之儀も、岡山より仕堅候ハヽ、御手間も入成かね候すると存候	宇喜多直家の離反を受け、吉川元春が長男元長・志道元保に対し、今後の織田方との戦争の方針について述べた書状。元春は、山陰方面には杉原盛重一人を残し、毛利軍を結集させて四畝城を攻めれば、すぐにこの山城は落ちるであろう、と予測する。その余勢をもって宮山・寺畑・湯山城を落城させ、葛下城までたどり着くことが出来れば、祝山城と呼応して美作国での形勢をおおよそ決することができるだろう、と述べる。ただ、毛利側が努力しなければ、美作国も備前国境も岡山城の宇喜多氏によって堅められてしまい、手間が要ることになるだろうと述懐している。	四畝　（93四ツ畝城跡） 宮山　（〈美作56〉宮山城跡） 寺畑之城　（〈美作78〉大寺畑城跡） 湯山　（〈美作75〉湯山城跡） 葛下の城　（〈美作122〉葛下城跡） 祝山　（〈美作179〉医王山城跡） 岡山　（〈備前180〉岡山城跡）	（吉川）元春	（天正七年）十一月三日	1579年	36・119
178	某覚書／山口県文書館蔵毛利家文庫遠用物所収文書	一外郡表隆景御在陣候者、両口心安可有之哉之事、一四畝計之儀にハ従最前無気遣事にて候、自然備前衆□〔取ヵ〕出候てハとの儀ニ心遣候、外郡如只今被張詰候ハヽ内郡へ備前衆罷出事相成間敷候哉之事	宇喜多氏との合戦について、相談事をメモしたもの。備中国外郡（同国の南半部）に小早川隆景が在陣していてくれれば、南北両面とも安心できる状態になるのではないか、とある。また、四畝城だけならば心配事はないのだが、宇喜多軍（備前衆）が出陣してくるのではと心配しており、外郡に現在のように軍勢を張り付けていてくれたら、内郡（備中国北部）に宇喜多軍が出陣してくることもないのではないか、とある。	四畝　（93四ツ畝城跡）		（天正七年）	1579年	132
179	伊賀久隆感状／鈴木家文書	山王尾頸於通路口被討捕頸三到来候、誠ニ無由断心懸之段、無比類候 ※出典書掲載の写真版により翻刻を訂正	伊賀久隆が鈴木孫右衛門（鈴孫）に与えた感状。孫右衛門は山王城の尾根続きにある通路で敵の首３つを討ち取って久隆のもとへ送り届けた。こうした孫右衛門の油断ない働きについて、比類のないことと久隆が賞賛している。	山王　（79山王城跡）	（伊賀）久隆	（天正七年）十一月五日	1579年	4

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
180	毛利輝元自筆書状／吉川家文書	此表之儀、四つうねへ行澄申候間、本望候、とかく余境目おもハくいかゝとの最前より申事候処、可然趣候	毛利輝元が吉川元春父子に対し、境目の人々の思惑を心配していたが、四畝城までうまく辿り着けたので本望、と伝えている。	四つうね　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 右馬頭輝元	(天正七年)十一月五日	1579年	13・36・72
181	小早川隆景書状写／冷泉家文書	爰許之儀来十二日輝元我等事内郡出張候、然間旁之御事、十三日某元御出船候て、為岡山押沖口可被相動候、従此方茂警固申付候、左候条先至庭妹近辺浦、被懸御舟候て可然候	毛利氏による宇喜多氏攻撃。来る十二日に毛利輝元と隆景が備中内郡に出陣することになった。隆景は水軍の将冷泉元満（民部大輔）に対し、自分たちの出陣に合わせ、十三日に軍船を出して沖口、とくに庭瀬城近辺の海岸に船を停泊させ、岡山城を牽制するよう指示している。	岡山　(〈備前180〉岡山城跡) 庭妹　(402庭瀬城跡)	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正七年)十一月八日	1579年	13・108・131
182	清水宗治書状／福武家文書(矢掛)	各足弱衆引具候て、亀石へ御入城、尤神妙候、就其御加恩之事承候、笠岡我等急度罷下候間、相調可進之候	福武氏ら足守地域の土豪たちが非戦闘員を連れて亀石城に入城したことを清水宗治が褒め、笠岡へ行って彼らに恩賞が与えられるよう調整することを約したもの。	亀石　(331亀石山城跡) 笠岡　(254笠岡城跡)	清水長左衛門尉宗治	(天正七年)十一月十一日	1579年	10
183	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門	去十日佐井田有御入城、かさの丸堅固御在番之由、尤肝要候、当城かこい板・帆莚以下之儀承候、近日至其境輝元御出張、并各罷出候条可申談候	十一月十日、熊谷就真は佐井田城に入城し、「かさの丸」＝本丸の在番に就いて守りを堅固にした。これを伝え聞いた隆景が就真の働きを認め、城の改修に必要な「かこい板」「帆莚」などについては、近日その方面に毛利輝元以下の将兵が出陣した際に相談したいと述べている。	佐井田城　(76才田城跡)	(小早川) 左衛隆景	(天正七年)十一月十三日	1579年	13・36・108
184	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書(『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり)	其方之儀、至佐井田頓被罷籠由肝要候、追々加番之者可差籠候間、可被申談儀専一候、仍掻楯板・帆莚已下無支度候哉、可申付候	熊谷就真が早期に佐井田城へ籠る予定でいることを聞いた輝元が、追々加番の人たちも入城させるので相談して行動するよう伝えている。また、掻楯板・帆莚などの支度が出来ていないようなら、準備するように命じている。	佐井田　(76才田城跡)	(毛利) 輝元	(天正七年)十一月十三日	1579年	36・108・132
185	井上春忠書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	明後廿二日輝元御陣替被成候ニ弥定候、(中略) 内郡表程遠ニ付而、従爰元縄持せ候事難成由候間、佐野方構ニ預ヶ置候縄之内十束、近比乍御造作、河西之河原六郎右衛門尉方迄被差上候而、可被進候	小早川隆景の重臣井上春忠が、十一月二十二日に毛利輝元が陣替することを福屋七郎兵衛に伝え、関連する指示を与えたもの。内郡表（備中国北半部）は遠くて毛利領から縄を輸送することが困難なので、佐野方構（佐野氏の居城）に預けている縄の中から十束を取り出し、高梁川の西にいる河原六郎右衛門尉のところまで輸送するよう依頼している。	佐野方構　(407亀山城跡)	井上又右衛門春忠	(天正七年ヵ)十一月二十日	1579年	15・59
186	毛利輝元感状写／『閥閲録遺漏』巻壱之二　符野屋六兵衛	四畝之者一人虜引せ候、心懸之儀祝着候	宇喜多方についた四ツ畝城の籠城衆一人を捕えた山田清正（神右衛門尉）の働きを、毛利輝元が褒めたもの。	四畝　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 輝元	天正七年十一月二十四日	1579年	13・36・110
187	毛利輝元感状写／『閥閲録』巻三十八　井上彦左衛門	四畝江罷籠候者二人、為両人搦取之由、注進到来候、心懸之段祝着候	四ツ畝城へ入ろうとした者を二人生け捕りにした井上元勝（源右衛門尉）・山田清正（神右衛門尉）の働きを、毛利輝元が褒めたもの。	四畝　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 輝元	(天正七年)十二月三日	1579年	13・36・107
188	片山久秀書状写／美作国諸家感状記　真島郡関村鈴木九右衛門所持文書	於佐井田近辺、頭二ツ被討捕早々御持由候、可然候、何ケ度申候ても各御高名之段難申尽候由御意候（中略）諸境目為下知、福山へ被成御逗留候	伊賀久隆の重臣片山宗兵衛久秀が、鈴木孫右衛門に送った書状。佐井田城近辺で毛利軍と戦って首二つを討ち取った孫右衛門の働きに対し、主君久隆からの賞賛の意を伝えている。また、現在久隆は諸境目に指示を与えるため、福山城に滞在していることを報せている。	佐井田　(76才田城跡) 福山　(〈備前19〉福山城跡)	片宗久秀（片山宗兵衛尉久秀）	(天正七年)十二月十一日	1579年	36
189	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書(『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり)	爰元之儀、今日河面迄打出候、即可為山陣候、然間一昨日申候様ニ、其城番衆儀、先以悉至陣所可呼越候、乍勿論近習之者共之儀も、一とをり可召連候、其番之儀者、其方一人被残居候て気仕肝要候	十六日に備中川面まで出陣して山陣を張った輝元が、佐井田城番の熊谷就真（玄蕃允）に送った書状。佐井田城にいる番衆をことごとく川面の陣まで呼び出したので、就真が一人残って佐井田城の留守番をするように指示したもの。	山陣　(141寺山城跡) 其城　(76才田城跡)	(毛利) 輝元	(天正七年)十二月十六日	1579年	13・36・108・132
190	毛利輝元書状／新出岡家文書	爰元今日河面陣替候、明後日中陣たるへきとの事候、仍四畝之儀いかゝ聞及候哉、自然明退候而ハ、可申付儀候ましく候哉と勝事候、近習之者ニちと敵之廿人卅人ほと成とも討取度事候、(中略) 其元にハ熊玄はかり置候て、其外ハ何もミな＼罷出候様との申事候	毛利輝元が岡元良に送った書状。輝元自身はこの日備中国川面に陣替えしている。輝元は四畝城はどういった状態なのか、ひとりでに開城・撤退するようであれば、毛利軍としてするべきこともなく手持無沙汰だ、近習の者に敵を２～３０人ていどでもいいので討ち取らせたい、と述べている。また、元良のいる佐井田城では、熊谷就真だけを残し置いて、その他は全員出陣しようという話になっているという。	河面　(141寺山城跡) 四畝　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 輝元	(天正七年)十二月十六日	1579年	27・36・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
191	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之一湯原文左衛門	此表之儀、明日十八至四畝取懸候、即時ニ可拉之条、吉左右聽而可申入候、弥福三被仰談、堅固之御番肝要候	吉川元春が、美作国祝山城在番の湯原春綱に戦況を報じ、明日四ツ畝城への攻撃を開始し即時に切り取って吉報を届けようと思うので、祝山城でも福田盛雅（福三）とよく相談して堅固に番をするよう伝えている。	四畝　(93四ツ畝城跡)	(吉川) 元春	(天正七年)十二月十七日	1579年	13・36・108
192	毛利輝元書状／冷泉家文書	此表之儀も、已今日廿二山陣候、翌日至四畝取詰候	毛利輝元が児玉就方（周防守）に対し、今日山の上に布陣し、翌日から四畝城の包囲を開始する旨、伝えた書状。	四畝　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 輝元	(天正七年)十二月二十一日	1579年	36・131
193	毛利輝元書状／冷泉家文書(『閥閲録』巻百二之二　冷泉五郎にも写しあり)	此表之儀も既今日至四畝山陣候	毛利輝元が冷泉元満（民部少輔）に対し、今日四畝城の近傍に到着し山上に布陣したことを報じたもの。	四畝　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 右馬頭輝元	(天正七年)十二月二十一日	1579年	13・36・108・131
194	吉川経言書状／下家文書（吉川家中并寺社文書一にも写しあり）	至昨日廿四日之夜、四畝要害乗移、施外聞之段、悉皆其方機遣故候、軍功寔無比類候	吉川経言の家臣下右衛門尉は、十二月二十四日の夜、四畝城へ乗り込んで評判を取る活躍をした。そのことを経言が喜び、その軍功を称えたもの。	四畝要害　(93四ツ畝城跡)	(吉川) 経言	天正七年十二月二十五日	1579年	36・133
195	吉川経言書状写／御書感状写二	昨日廿四日之夜、至四畝要害乗移施外聞候段、悉皆御機遣之故候、誠祝着此事候	吉川経言の家臣千原又衛門は、十二月二十四日の夜、四畝城へ乗り込んで活躍し、評判になった。そのことを経言が賞したもの。	四畝要害　(93四ツ畝城跡)	(吉川) 経言	天正七年十二月二十五日	1579年	36・103
196	吉川元春書状／厳島野坂文書	此表之儀昨日廿四至四畝近陣差寄候之処、即今夜落去候、然処只今又申越候趣者、先様新山与申城茂落居之由注進候	吉川元春が厳島神社の神官棚守房顕・元行に備作の戦況を報じたもの。毛利軍が昨日四畝城近辺に陣を寄せたところ今夜落城したこと、今飛び込んできた注進によれば新山という城も落城したことを伝えている。	四畝　(93四ツ畝城跡) 新山　(〈備前8〉新山城跡)	吉川元春	(天正七年)極月二十五日	1579年	36・116
197	毛利輝元自筆書状／吉川家文書	今度四畝以来御馳走之段、令承知、本望存候	毛利輝元が、四畝城合戦以来の吉川経言の活躍に感心し、本望であると伝えたもの。	四畝　(93四ツ畝城跡)	(毛利) 右馬輝元	(天正七年)十二月三十日	1579年	36・72
198	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之三湯原文左衛門	此表四畝一着儀者先日申候、定而可為参着候、伊賀要害山下迄悉討果、付城数ヶ所取付、明隙候之条、不日至寺畑・宮山取懸、即時可仕崩候、吉左右聽而可申入候	吉川元春が祝山城番湯原春綱（湯右）に戦況を報じたもの。四ツ畝城を攻略した後、毛利軍は伊賀久隆の持ち城の麓を全て討ち果たした。この伊賀氏の城を包囲する付城を数ヶ所築いて手隙になったので、ほどなく寺畑城・宮山城に攻めかかり、即時に攻め落としたい、と伝えている。	四畝　(93四ツ畝城跡) 伊賀要害　(〈備前25〉虎倉城あるいは〈備前19〉福山城跡) 付城　(場所未詳)　※伊賀方の城に対する陣城 寺畑　(〈美作78〉大寺畑城跡) 宮山　(〈美作56〉宮山城跡)	(吉川) 元春	(天正八年)正月六日	1580年	13・36・108
199	蔵田元貞書状写／『閥閲録』巻百十五之一湯原文左衛門	此表四畝一着儀者、頓盛雅申入候条可被仰入候、一両日中高田表被成御陳替、寺畑・宮山儀可被討果儀定候	毛利輝元の臣蔵田元貞が、祝山城在番の湯原春綱（湯右）に毛利軍の最近の動向を伝えたもの。四ツ畝城を攻略したことについては、福田盛雅を通じて報じている通りであること、一両日中に高田城に陣替えし、寺畑城・宮山城を討ち果たす方針に決まったことなどを報じている。	四畝　(93四ツ畝城跡) 高田　(〈美作33〉高田城跡) 寺畑　(〈美作78〉大寺畑城跡) 宮山　(〈美作56〉宮山城跡)	「蔵田与三右衛門事也」元貞	(天正八年)正月九日	1580年	13・36・108
200	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百十五之三湯原文左衛門	去五日之御状到来披見候、(中略) 当城儀乍勿論堅固段、一入太慶候、弥無御油断福　三被仰談、無異儀様御才覚専一迄候、此表四畝一着儀者、先状申候、一両日中高田表令陳易、寺畑・宮山儀則時可討果候、御吉左右聽而可申入候	湯原春綱（湯右）から手紙を受け取った元春が、祝山城が堅固に保たれていることを喜び、福田盛雅（福三）と油断なく相談して異変ないよう才覚せよと返書したもの。ついでに、四ツ畝城攻略以後の戦況として、毛利軍が一両日中に高田城へ陣替えし、寺畑城・宮山城攻略を開始することを伝えている。	当城　(〈美作179〉医王山城跡) 四畝　(93四ツ畝城跡) 高田　(〈美作33〉高田城跡) 寺畑　(〈美作78〉大寺畑城跡) 宮山　(〈美作56〉宮山城跡)	(吉川) 元春	(天正八年)正月九日	1580年	13・36・108
201	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻七十四　粟屋縫殿	飯山在番之儀、具足以五十領、可相勤之由候之間、備・作以一着之上、三百貫之地可遣置之候	飯山城の在番を具足五十人分の負担で勤めることに同意した粟屋元定（弥三郎）に対し、輝元が備前・美作平定の後に３００貫の領地を与えることを約束したもの。	飯山　(140飯ノ山城跡)	(毛利) 輝元	天正八年正月十三日	1580年	13・36・107

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
202	小早川隆景書状／甲田家文書	爰許之儀両城普請等多分相調候条、急度寺畑差寄候、一途程有間敷候	隆景が阿曽沼元秀に対し、美作国の戦況を伝えたもの。両城の普請がほぼ整ったので、すぐに寺畑城に攻め寄せるつもりでおり、陥落させるのに時間はかからない、と述べている。	両城　（140飯ノ山城跡・〈美作66〉都我風呂城跡の２城か？） 寺畑　（〈美作78〉大寺畑城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）正月十五日	1580年	36・131
203	吉川元春書状写／『閥閲録』巻百　児玉惣兵衛	此表之儀四畝之事者頓落去候て、至備前内賀茂御陳易候而、伊賀城廻作州苅田悉討果放火候、一二ケ所要害被申付、近日至高田陣易候而、寺畑と申敵城、可被及御行之由候、吉さ右追々可申述候	吉川元春が児玉就英（内蔵大夫）に備作の戦況を報じたもの。四畝城が落城した後、毛利軍は備前国賀茂へ陣替えし、伊賀氏の城館の周囲や美作国苅田（鹿田）に放火、付近に一、二ヶ所ほど要害を構築した。近日は高田城まで陣替えして、寺畑城という敵の城を攻めようと計画している、とある。	四畝　（93四ツ畝城跡） 伊賀城　（〈備前25〉虎倉城あるいは〈備前19〉福山城跡） 一二ヶ所要害（140飯ノ山城跡・〈美作66〉都我風呂城跡の２城か？） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 寺畑と申敵城（〈美作78〉大寺畑城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）正月十七日	1580年	13・36・108
204	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻九十七　中村与三右衛門	飯山在番之儀、可令所勤之由、祝着候、然者以備作一着之上、五拾貫之地可遣置候	飯山城の在番を勤めることに同意した中村内蔵丞に対し、輝元が備前・美作平定後に５０貫の領地を与えることを約束したもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十二日	1580年	13・36・108
205	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻七十　天野七郎兵衛	松山在番辛労候、然間以備・作一着之上、三百貫地可進候	輝元が備中松山城の在番任務に就いている天野元祐（宮内少輔）に与えた書状。備前・美作での戦争が落着したら３００貫の領地を与えると約束している。	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年ヵ）正月二十三日	1580年	107
206	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻七十　天野七郎兵衛	今度元明同前、松山在番ニ付而、於古瀬之内百貫進之候、愈馳走肝要候、彼在番隙明候者以別所可申付候	輝元が天野元祐（宮内少輔）に送った書状。天野元明と同じく備中松山城の在番を務める元祐に対し、備中国古瀬にて１００貫の所領を給与し、更に奔走するよう伝えている。また、松山城在番が済んだら別の替地を用意する旨、約束している。	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年ヵ）正月二十四日	1580年	107
207	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	飯山在番可所勤之由、祝着候、以備作一着之、百弐拾五貫之地可遣置候	飯山城の在番を勤めることに同意した飯田元定（与一左衛門尉）に対し、備前・美作平定後に１２５貫の領地を与える旨、輝元が約束したもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十六日	1580年	13・36・107
208	吉川元春・口羽通良・福原貞俊・小早川隆景連署書状写／『閥閲録』巻四十一　馬屋原山三郎	就今度四畝御在番、以備作一着之上、千貫之地可被遣之置之由尤可然存候	四畝城への在番任務を了承した馬屋原兵部大輔に対し、備作平定の後に１０００貫の給地を与えるとの毛利輝元の意向を、元春らが伝えたもの。	四畝　（93四ツ畝城跡）	吉川元春・口羽下野守通良・福原出羽守貞俊・小早川隆景	（天正八年）正月二十七日	1580年	36・107
209	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻四十一　馬屋原山三郎	四畝之城可被遂御在番之由祝着之至候、然者以備作一着之上、千貫之地可進置之候、何篇中通之儀御短束頼存候	上に同じ。四畝城に在番として入ることを了承した馬屋原兵部大輔に対し、毛利輝元が備作平定の暁に１０００貫の給地を与える旨を伝え、「中通」における尽力を依頼したもの。	四畝之城　（93四ツ畝城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）正月二十八日	1580年	13・36・107
210	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻九十七　中村与三右衛門	飯山在番付而、其方惣給地跡目之事、女子可申付候之由、委細得其心候、少茂不可有相違之条、以此旨弥堅固之覚悟、肝要候	飯山城在番を勤めることになった中村内蔵丞が、もし自分が勤番中に死ぬようなことがあった場合、その遺領を娘に相続させたい、と輝元に申し出た。輝元はこれを承知し、必ずその通りにするのでそのつもりで堅固に勤めるよう伝えたもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十八日	1580年	13・36・108
211	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十六徳地裁判白木宇右衛門	飯山在番之儀、可令所勤之由、祝着候、然者以備作一着之上、拾五貫之地可遣置候	飯山城の在番を勤めることに同意した白木又三郎に対し、備前・美作平定後に１５貫の所領を与えることを輝元が約束したもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十八日	1580年	13・36・109
212	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十九内藤与三左衛門家来錦見与五郎	飯山在番之儀、可令所勤由、祝着候、然者以備作一着之上、拾五貫之地可遣置候	飯山城の在番を勤めることに同意した錦見右衛門尉に対し、備前・美作平定後に１５貫の所領を与えることを輝元が約束したもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十八日	1580年	13・36・109
213	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十之一萩町人佐伯惣兵衛	飯山在番之儀、可相勤之由、祝着候、然者以備作一着之上、弐拾五貫之地可遣之候	飯山城の在番を勤めることに同意した甲田与三兵衛尉に対し、備前・美作平定後に２５貫の所領を与えることを輝元が約束したもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）輝元	天正八年正月二十九日	1580年	13・36・109

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
214	小早川隆景・口羽通良・福原貞俊・吉川元春連署書状写／『閥閲録』巻百十五之二湯原文左衛門	此口之儀先書ニ如申遣候、伊賀左衛門尉城山下迄無残令放火、為初鹿田悉討果、要害二ケ所申付、番衆指籠隙明候条、明日二至月田令陣易、則寺畑取懸候、落去不可有程候間、可心安候、一兵粮之儀、追々可指上候条、是又可心安候、於様躰者、至寺畑切々可被申越候	毛利氏が祝山城在番の湯原春綱に戦況を報じた書状。毛利軍は伊賀久隆（左衛門尉）の城の麓を焼き払い、鹿田地域をことごとく討ち平らげた上、要害を二ヶ所構築してそこに番衆を籠めて守らせた。隆景らは明日には月田まで転陣し、すぐに寺畑城に攻め寄せる予定だが、落城まで時間はかからないと思うので安心するよう伝えている。また、春綱の元に兵糧を追々輸送するのでこれも安心してほしい、そちらの様子を寺畑の陣まで報せるように、と伝えている。	伊賀左衛門尉城（〈備前25〉虎倉城跡または〈備前19〉福山城跡） 要害二ヶ所（140飯ノ山城跡・〈美作66〉都我風呂城跡の２城か？） 月田　（〈美作54〉月田城跡） 寺畑　（〈美作78〉大寺畑城跡）	（小早川）隆景・（口羽）通良・（福原）貞俊・（吉川）元春	（天正八年）二月朔日	1580年	13・36・108
215	桂就宣書状／厳島野坂文書	此表之儀去二日陣易候、然者小寺畑之儀落去候、公私之御太慶此時候、仍我等事此表在番被仰付候、遠国乍太儀任上意如此候	飯山城在番の桂就宣が、厳島神社の神官棚守元行に近況を報じた書状。毛利軍が二月二日に陣替えし、小寺畑城を攻め落としたこと、就宣自身は毛利輝元の上意により、遠国のこの地に在番するよう命じられたことを伝えている。	小寺畑　（〈美作80〉小寺畑城跡）	（桂）就宣	（天正八年）二月十四日	1580年	36・116
216	小早川隆景書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	就岩山御在番之儀、内々以元将蒙仰、又申談辻輝元慥申聞候、御内意之通被得其心、於備作之間三百貫之地可被進置之段、一通被相調之条、御使江渡進之候、弥乍御太儀無御油断堅固之御在城可為肝要候	隆景が備後国衆湯浅将宗（治部太輔）に与えた書状。将宗は岩山城在番に対する褒賞につき、内々に上原元将を通じて申し出を行っていた。隆景は、こうした将宗の意向を毛利輝元に伝え、備作のうちで３００貫の恩賞地を与えるとの証文を書いてもらい、その証文を将宗からの使者に渡した。このように無事恩賞が出ることが約束されたので、大変だと思うが油断なく堅固に在城するよう将宗に伝えている。	岩山　（番号なし　岩山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年ヵ）三月二十二日	1580年ヵ	108・132
217	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	就今度岩山御在番、於備作之内三百貫之地可進置之候、毎事堅固之御馳走簡要候	上記史料に関連して輝元が湯浅将宗（治部大輔）に与えたもの。岩山城在番を務める将宗に対し、備作のうちで３００貫の給地を与えることを約束し、堅固に城を守るよう伝えたもの。	岩山　（番号なし　岩山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年ヵ）三月二十二日	1580年ヵ	108・132
218	桂景信書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之二　湯浅権兵衛にも写しあり）	先月十三日日幡・鴨・松島被相催、俄辛川口被相動、不調儀付而被失行候、然者当城衆旁御家来衆与今保表被及行、無比類御動御短息、殊更湯浅殿御家来之旁御忠儀之由、留守之者共申候	小早川隆景の重臣桂景信が、湯浅将宗・長井就安・栗原某に送った書状。三月十三日に、日幡・鴨・松島城の守備隊が辛川口に進軍したものの、作戦の不備で宇喜多軍に敗退した。その際、景信配下の庭瀬城衆（当城衆）と湯浅氏らの家来衆とが協力して今保に攻め込み、比類ない働きをしたとの報告を、留守番の者から景信が聞いた、とある。	日幡　（431日畑跡） 鴨　（427加茂城跡） 松島　（436松島城跡・番号なし　射越山城跡） 今保　（〈備前279〉　今保城跡・〈備前280〉松田屋敷跡ヵ） 当城　（402庭瀬城跡）	桂右衛門大夫景信	（天正八年）閏三月九日	1580年	13・36・53・108・132
219	桂景信書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之二　湯浅権兵衛に写しあり）	其表長々御在番、御辛労無申計候、何ヶ度申候て茂、去比之辛川口行付而、此口之儀今保為御手合、旁被仰談被差寄候処二、将宗御家来衆別而被遂御粉骨之段、則従留守之者所至沼田申下候、（中略）何茂諸城御普請被仰付、無御緩段専一候	上記史料に関連して、小早川家重臣の桂景信が湯浅将宗に送った書状。将宗の備中方面での在番について慰労し、諸城の普請を命じてゆるみなく防衛態勢を整えるよう伝えている。また、先日の辛川合戦の際、庭瀬城駐留の部隊が今保にいる敵方と交戦するため、将宗らと相談して攻め寄せた時、将宗の家来衆が特に奮戦していたと、留守居の者から小早川家の本拠沼田まで報告があったことを伝えている。	（番号なし　岩山城跡）	桂右衛門大夫景信	（天正八年）閏三月十一日	1580年	13・36・108・132
220	小早川隆景書状／井原家文書（『閥閲録』巻四十　井原藤兵衛に写しあり）	就蔵敷御在番之儀申入候処、今日御出之由尤肝要候	隆景が井原元尚（小四郎）に与えた書状。元尚に対し蔵敷城の在番任務に就くよう申し入れたところ、今日蔵敷へ出向いたとの報告があったため、肝要であると応答している。	蔵敷　（422小野城跡ヵ）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年ヵ）四月十二日	1580年ヵ	107・132
221	小早川隆景書状／冷泉家文書	岩屋御上着片時茂可被差急候、爰許城普請はや隙明候条、急度幸山可罷出候条、切々以早船可申談候	隆景が冷泉元満（民部少輔）・香川光景（左衛門尉）に淡路国岩屋への到着を急ぐよう命じ、近況を報じた書状。このころ隆景は滞在地（竹庄ヵ）での城普請を完了させ、幸山城へ移動しようとしていた。	爰許城　（場所未詳）　※関連史料より備中国竹庄付近の城と推定 幸山　（414幸山城跡）	小早川隆景	（天正八年）四月二十二日	1580年	131

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
222	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻十七　児玉三郎右衛門	其方気相路次中如何候哉、成羽ニ少逗留為仕之由候、無心元候	虎倉合戦で負傷した家臣の児玉元兼（児小次）に対し、輝元が送った見舞い状。帰路の道中での気分はどうか、成羽に少しの間逗留するとのことだが心配している、と伝えている。	成羽　（126鶴首城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）四月二十六日	1580年	106
223	杉原盛重書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十二　岡六兵衛に写しあり）	輝元年内より御山陣にて候間、我等事罷出度之由、於富田元春雖令申候、南条逆意付而被残置間、方々我等気遣儀候、（中略）作州山内にも一城抱置候、我等方々気遣之段、可有御察候、（中略）一備作表之儀、存分ニ輝元被申付候、竹庄表于今各山陣にて候（後略）	吉川元春の家臣杉原盛重が、岡伯耆守に送った書状。毛利輝元が備前・美作国攻略を思いのままに進め、今は備中国の竹庄の山に陣取っているとの話題を受けて、盛重も本心では出陣したいと述べている。盛重自身も美作国山内に持ち城を一つ抱えており、備作方面への気遣いが絶えなかった。しかし、月山富田城で吉川元春に出動を申し出たものの、毛利氏に反逆した伯耆国の南条氏への押さえとして残留を命じられ、あれこれ心配するだけの状態になっている。こうした不安な心境を察してほしい、と述べている。	山陣　（場所未詳）　※毛利輝元の陣。竹庄にあり 作州山内にも一城　（〈美作7〉飯山城跡または〈美作14〉大沼山陣所跡などか）	杉原盛重	（天正八年）五月朔日	1580年	36・107・132
224	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻四十七　南方九左衛門	庄田城在番之事、任望之旨申付候、然間以弓矢一着之上、四百貫之地可充行候	輝元が南方就正（宮内少輔）の希望を容れ、就正に庄田城の在番を任せる旨伝えた書状。合戦の決着後に４００貫の恩賞地を与えることを約束している。	庄田城　（番号なし　庄田城）※該当城未詳だが備作地域の城館である可能性あり	（毛利）輝元	（天正八～九年）五月十二日	1580～81年	107
225	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻四十七　南方九左衛門	今度庄田在番仕候而、自然内之者無届於欠落者、誰々相抱候共見合ニ一途可申付候	輝元が庄田城在番を務める南方就正（宮内少輔）に対し、もし無届けで勤番を放棄して脱走する者がいれば、誰の配下であろうと見つけ次第処分するよう命じている。	庄田城　（番号なし　庄田城）※該当城未詳だが備作地域の城館である可能性あり	（毛利）輝元	（天正八～九年）五月十三日	1580～81年	107
226	毛利輝元書状写／『閥閲録遺漏』巻一之二　井上彦左衛門	今度佐井田在番之儀可令所勤之由喜悦候、然者以備作一着之上、五拾貫之地可遣候	佐井田城在番の命令に服した井上七郎右衛門尉に対し、毛利輝元が備作統一の後に５０貫の恩賞地を与えることを約束したもの。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正八～九年）五月十三日	1580～81年	110
227	毛利輝元書状写/『閥閲録』巻九十二　天野九郎左衛門	弓矢一着之間、松山在番可有馳走之由候条、以備作平均之上、弐百貫之地可遣之候	輝元が天野元勝（少輔四郎）に与えた書状。元勝が備作地方での兵乱が一着するまでの間、松山城に在番することを了承したので、その恩賞として備作統一の後に２００貫の給地を与えることを約束したもの。	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年ヵ）五月十八日	1580年ヵ	108
228	毛利輝元書状写/『閥閲録』巻九十二　天野九郎左衛門	其方事松山在番就申付候、佐伯弥五郎相副候、然者以弓箭一着之上、於備作間拾貫地可宛遣候、此由能々可申旨儀肝要候	輝元が天野元勝（少輔四郎）に与えた書状。元勝が松山城在番に就くに当たって添えられた佐伯弥五郎に対し、兵乱終結後備作地方で１０貫の給地を与えるつもりなので、そのことを弥五郎に伝えるよう元勝に命じたもの。	松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年ヵ）五月十九日	1580年ヵ	108
229	毛利輝元書状／岡山県立博物館所蔵文書	藤佐井在番申付之候、然者、以備作一着之上、五拾貫之地可遣之候	毛利輝元が和智元次（主水允）に藤沢城（藤佐井）在番を命じ、その見返りとして将来の備作平定後に５０貫の給地を与える旨、約束したもの。	藤佐井　（〈備前17〉藤沢城跡）※藤沢城の別名「藤才城」の異表記	（毛利）輝元	（天正八年）五月二十五日	1580年	36・108
230	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十八　井上彦左衛門	源右衛門尉佐井田差籠候時、以面向約束之地之事、彼者次男ニ可遣之候	輝元が井上就正（和泉守）に与えた書状。井上元勝（源右衛門尉）が佐井田城在番を拝命した際、輝元は元勝に対し恩賞地を与える約束をしていた。しかし、虎倉合戦で元勝は戦死してしまったため、約束の恩賞地を元勝の次男に与えることにしたと、井上就正に伝えている。	佐井田　（76才田城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）五月二十五日	1580年	107
231	房顕覚書	四月十三日粟屋余十郎、児玉小次郎、神田宗四郎、此若輩衆我手勢七八百、三沢衆何哉かや千五百ニテ竹庄ト言在所へ言〔被ヵ〕懸、粟屋余十郎討死シ、名ヲ高〔後〕代上ル、児玉小次郎三ケ所ニ手ヲヽハルヽ（中略）其外四五十人打死ナリ	「賀茂崩れ」の関連史料。天正八年（1580）四月十三日、粟屋元信（余十郎）・児玉元兼（小次郎）・神田宗四郎（三浦元忠）ら若輩衆の率いる７、８００の兵と、三沢為虎の兵などを合わせた１５００人ほどの毛利軍が、竹庄という場所へ出陣した。粟屋元信は討死して名を後代に残し、児玉元兼は３か所ほど手傷を負った。その他４、５０人が討死した、という。	（〈備前25〉虎倉城跡・〈備前19〉福山城跡・〈備前15〉勝山城跡・〈備前24〉清常城跡・〈備前17〉藤沢城跡などに関連）	棚守房顕			36・117

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
232	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百十五之一　湯原文左衛門	岡山衆東郡蔵敷口打出之由候間、為押諸警固今日乗浮候之条、甲斐敷人数難打出候、定而事々敷申響、所々可及武略候、被得其心、何篇手堅御覚悟専一候、高田口急度一勢被指出候	宇喜多軍が美作国東郡・倉敷口へ出陣した。これを知った隆景は、水軍を出航させて宇喜多軍を牽制した。その上で隆景は祝山城番湯原春綱に対し、宇喜多軍の所々への武略に用心するよう伝え、毛利輝元が援軍を高田口まで差し向けるであろうことを報じている。	蔵敷　（422小野城跡または〈美作89〉林野城跡に関連）※「蔵敷口」について、備中国の倉敷、美作国の倉敷の２説あり （〈美作179〉医王山城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡）	小早川隆景	（天正八年）五月二十八日	1580年	13・36・108
233	鵜飼元辰書状写／『閥閲録』巻五十一　小川右衛門兵衛	鵜新元辰　判　幸山より	小早川隆景の家臣鵜飼元辰が、美作国祝山城番の小川元政（小右）に与えた書状。署名の下に書状の発信地が書かれており、当時元辰が幸山城に滞在していたことがわかる。	幸山　（414幸山城跡）	鵜新元辰（鵜飼新右衛門尉元辰）	（天正八年）六月八日	1580年	36・107・134
234	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十七熊毛郡裁判小田源之允	経山在番之儀、可令所懃之由祝着候、然者備前以一着之上、五拾貫之地可遣之候	経山城への在番を勤めることに同意した小田市助に対し、備前平定後に５０貫の所領を与える旨、輝元が約束したもの。	経山　（345経山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）六月十二日	1580年	13・109
235	毛利輝元書状／口羽家文書（『閥閲録』巻八十八　口羽四郎五郎に写しあり）	当春以平藤飯山にて承候つる舟木明所之儀	輝元が宿老口羽通良に与えた書状。今年の春、平佐就之（平藤）を介して飯山城で承った長門国舟木の明所（知行主のいない土地）について、相談したもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（毛利）右馬輝元	（天正八年ヵ）六月十九日	1580年	107・132
236	小早川隆景書状写／『譜録』井上孫兵衛勝政	井又右事、小串普請為見合明日差渡候条、乍辛労同前ニ可被罷越候、（中略）蔵敷へ被出相候て可被申談候	隆景が家臣の井上就正（孫兵衛尉）に与えた書状。井上春忠（井又右）が小串城の普請工事を見分するため、明日渡海するので、就正も春忠と一緒に小串へ向かってほしい、と伝えている。小串への渡海にあたっては、まず蔵敷（倉敷）で春忠と落ち合って相談するよう述べている。	小串　（〈備前224〉小串城跡） 蔵敷　（422小野城跡ヵ）	（小早川）隆景	（天正八年ヵ）七月一日	1580年ヵ	124
237	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書	替之儀、只今雖可申付候、上口就行之儀、備中諸城へ申付候替先差籠之条、此節之儀在番肝要候	輝元が熊谷就真（玄番允）に与えた書状。城の在番交替について、今すぐ申付けるつもりではいるものの、上口（備作方面）での軍事作戦にからんで、備中諸城に入れる交替要員を優先して手配しているので、今はそのまま在番を続けるよう要請している。	備中諸城	（毛利）輝元	（天正八～九年ヵ）七月八日	1580～81年ヵ	132
238	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻七十四粟屋縫殿	某許御在番之由尤可然候、御辛労察申候、其境無相易儀候哉、藤斎其外之衆中被仰合、切搦等堅固之儀肝要候	隆景が粟屋元通（粟備）に与えた書状。元通の飯山城在番の苦労をねぎらい、境目で何か変わったことがないか尋ね、藤沢城（藤斎城）その他に詰めている味方と相談して敵の通路遮断を堅固に行うのが大事だ、と伝えている。	藤斎　（〈備前17〉藤沢城跡）※藤沢城の別名「藤才城」の異表記 （140飯ノ山城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年ヵ）七月十四日	1580年ヵ	107
239	小早川隆景書状写／山口県文書館今川家文書（『防長風土注進案』七十四三田尻宰判　真尾村農仙右衛門所持文書にも写しあり）	今度灘手一行之儀、元秀御帰陣之砌、於幸山重畳申談候、（中略）雖無尽期候被成御意候て、御自身御乗船御人数等一かと御馳走頼存候、廿六日出船令儀定候	隆景が甲田美作守に対し、七月二十六日に自ら乗船し水軍を率いて出動することを要請した書状。このたびの海上作戦（灘手一行）について隆景は、甲田氏の主君阿曽沼元秀が帰陣した際、幸山城において話し合いをもったという。	幸山　（414幸山城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年ヵ）七月二十三日	1580年ヵ	123・132・134
240	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	於羽衣〔○石〕山下討捕候頸之注文進之候、可有御覧之候、仍而此書状并注文之儀、別于笠岡早々可有御届候	元春が重臣今田経高（上野介）に与えた書状。伯耆国羽衣石城の麓で討ち取った敵将の「頸之注文」を送るので、この書状と一緒に早々に笠岡城へ届けるよう指示している。	笠岡　（254笠岡城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）八月十五日	1580年	55
241	小早川隆景書状写／萩市郷土博物館蔵楢崎家文書（『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛にも写しあり）	就高田表行之儀、弾正忠殿御越候、委細申談候、弥至松山被仰談御上之儀肝要之通、申事候、豊景可有御上国之由、専要存候、仍御腹中当時被得御快気之由、肝心存候、何之様にも御養生候而作州御上、於輝元祝着可被申候	隆景が楢崎豊景（三川守）に与えた書状。美作国高田への軍事行動について、病気が快癒次第備中松山城で相談の上、美作国へ出向くよう要請したものか。	松山（158備中松山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年ヵ）八月二十日	1580年ヵ	107・132
242	吉川元春書状／岩国徴古館蔵今田家文書	此状至笠岡早々可被差遣候	元春が重臣今田経高に与えた書状。元春の書状を笠岡城へ早急に届けるよう指示している。上記史料に関連するか。	笠岡　（254笠岡城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年ヵ）八月二十八日	1580年ヵ	133

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
243	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻七十四 粟屋縫殿	然者当時某許御在番之由、誠御辛労令察候、（中略）爰許之儀、急度出張候、元春其境被打過候条、打合一行可申付与存候吉田ニも急度御出張之由候、万々於其境以面可申承候、直家事茂篠吹取付打入之由ニ候哉、於于今者、珍儀有間敷と存候	隆景が飯山城在番の粟屋元通（備前守）の辛労をねぎらい、戦況を報じたもの。隆景も必ず出陣し、すでに出動した吉川元春と打合せの上で軍事行動を起こすこと、毛利輝元も必ず出陣すると言っていることを伝え、宇喜多直家が篠吹城を修築していったん撤収したとの情報につき真偽を確認している。	（140飯ノ山城跡） 篠吹　（〈美作88〉篠向城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正八年）八月二十八日	1580年	13・36・107
244	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百三十六 磯兼求馬	祝山之儀、福田并番衆中以覚悟持堪候之条、追々令出勢儀候、然間其元各々事、六日にハ隆照上着肝要候、余爰元着急度候之間、先其内松山迄小物一人ニて可被越候哉との調儀候、一切不可有緩候	隆景が磯兼景道（左近大夫）らに送った書状。福田盛雅や番衆の覚悟で持ち堪えてきた祝山城を救援するため、毛利軍が出陣することになったと伝え、景道らにも六日には上着するよう伝えている。また、事を急ぎたいので、松山城まで従者一人だけ連れて来てもらおうか、という話も出ていることを伝えている。	祝山　（〈美作179〉医王山城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年）九月二日	1580年	36・108
245	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	祝山之儀、直家取懸種々及取拵、過半和平相調様候処、備前衆指操之趣、福田其外此方番衆聞付、各指固、甲丸三重堅固相拘、無二之覚悟之由、追々申来候、誠盛雅無比類段、申茂不足候、就其、右趣隆景へ申遣候間、此書状早々笠岡へ被付候て可給候	吉川元春が某（宛名欠）に対し、祝山城の戦況を記したこの書状を笠岡城の小早川隆景に届けるよう依頼したもの。そのころ宇喜多直家が祝山城に攻め寄せてあれこれ調略を行い、和平がととのうかのように見えたが、宇喜多軍（備前衆）の謀りごとに福田盛雅ら毛利方の番衆が気付き、甲丸（祝山城の主郭）を厳重に固めていたという。	祝山　（〈美作179〉医王山城跡） 笠岡　（254笠岡城跡）	（吉川）駿河元春	（天正八年）九月三日	1580年	36
246	小早川隆景書状／山口県文書館蔵寄組村上家文書（『閥閲録』巻廿二之二　村上図書に写あり）	当年行為相談、吉田長々令逗留候、此節備芸石之者共遂参会、来秋動覚悟等令議定候之間、隙明次第笠岡可罷上候	隆景が村上水軍の将村上元吉に送った書状。今年の作戦を相談するため、吉田郡山城にずっと滞在していたが、このたび備後・安芸・石見の人々が参会して来る秋に軍事行動を起こす覚悟を固めたので、手隙次第笠岡城へ出張すると伝達している。	笠岡　（254笠岡城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正九年）四月十七日	1581年	106・132
247	備中国上房郡有漢村庵之壁ニ落書写／『閥閲録遺漏』巻三之三（広島県立歴史博物館蔵黄葉夕陽文庫にも写しあり）	飯山在番芸州住人 次第不同 桂左衛門太夫 粟屋備前守　坂兵部之丞　中村内蔵之助　（中略）以上 右者芸州之住人、徒然之余如此ニ候	飯山城に在番していた桂就宣（左衛門太夫）・粟屋元通（備前守）を大将とする毛利軍155人が、暇つぶしに城の近在にあった有漢村のお堂の壁に自分たちの名前を落書きしたもの。	飯山　（140飯ノ山城跡）	（飯の山城在番衆）	天正九年五月吉日	1581年	110・120
248	小早川隆景ほか３名連署宛行状写/『閥閲録』巻九十五 柳沢九左衛門	就忍山相城重而御在番之儀、最前御約束之辻、於備前之国馬屋・津高之内被宛行候	毛利氏宿老四名が、岡元良（宗左衛門尉）に与えたもの。元良が忍山城の「相城」（＝付城）に在番することになったので、以前から約束していた恩賞地を備前国馬屋郷・津高郷内で与える旨、伝達している。	忍山相城　（〈備前40〉勝尾山城跡・〈備前39〉本陣山城跡・329忍山城出城跡・328元信城跡）	（福原）貞俊・（口羽）春良・（福原）元俊・（小早川）隆景	（天正九年）九月十三日	1581年	13・36・108
249	岡元良相番衆宛行高付立／岡家文書（『閥閲録』巻八十 岡吉左衛門に写しあり）	岡宗左衛門尉相番 八拾貫 和智主水助　（中略）以上百六拾五貫	どこかの城の在番を務める岡元良（宗左衛門尉）に対し、毛利氏が相番者のリストを示したもの。	（〈備前40〉勝尾山城跡・〈備前39〉本陣山城跡・329忍山城出城跡・328元信城跡）	（福原）貞俊・（口羽）春良・（福原）元俊・（小早川）隆景	天正九年九月十三日	1581年	36・107・132
250	小早川隆景ほか３名連署書状写／『閥閲録』巻七十四 粟屋縫殿	就忍山相城、重而御在番之儀、最前御約束之辻、於備前之国馬屋・津高之内被宛行候	上記とほぼ同じ。これは粟屋元定（弥三郎）に対して与えられたもの。	忍山相城　（〈備前40〉勝尾山城跡・〈備前39〉本陣山城跡・329忍山城出城跡・328元信城跡）	（小早川）隆景・（福原）元俊・（口羽）春良・（福原）貞俊	（天正九年）九月十七日	1581年	13・36・107
251	小早川隆景ほか３名連署宛行状写／『閥閲録遺漏』巻弐之一　赤川二郎左衛門	赤川又七郎一所 六拾五貫　赤川因幡守　（中略）以上七百五貫前 右、備前国於馬屋・津高郡可被遣者也	城名の記載はないが、史料248・250で触れられている備前国馬屋・津高郡において、705貫分の所領配分を示した目録であることから、赤川元種（又七郎）も忍山相城の在番者の一人と推測できる。	（〈備前40〉勝尾山城跡・〈備前39〉本陣山城跡・329忍山城出城跡・328元信城跡）	（小早川）隆景・（福原）元俊・（口羽）春良・（福原）貞俊	（天正九年）九月二十日	1581年	13・36・110
252	小早川隆景ほか３名連署書状写／『閥閲録遺漏』巻弐之一　赤川二郎左衛門	就重而御在番之儀申談在所之事、縦向後雖有望申者、不可有同心候条可御心安候	上記史料に関連して小早川隆景らが赤川元種（又七郎）に与えたもの。忍山相城に在番することになった元種に給与すると約束した所領につき、もし今後その取得を希望する者が現れても同意したりしないので安心せよ、と伝えている。	（〈備前40〉勝尾山城跡・〈備前39〉本陣山城跡・329忍山城出城跡・328元信城跡）	（小早川）隆景・（福原）元俊・（口羽）春良・（福原）貞俊	（天正九年）九月二十日	1581年	110
253	小早川隆景ほか３名連署宛行状写／『閥閲録』巻四十七　南方九左衛門	就忍山相城、重而御在番之儀、最前御約束之辻、於備前之国馬屋・津高之内被充行候	№248・250とほぼ同じ。これは南方就正（宮内少輔）に対して与えられたもの。	忍山相城　（〈備前40〉勝尾山城跡・〈備前39〉本陣山城跡・329忍山城出城跡・328元信城跡）	（小早川）隆景・（福原）元俊・（口羽）春良・（福原）貞俊	（天正九年）九月二十九日	1581年	13・36・107

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
254	穂田元清書状／厳島野坂文書	此表之儀、忍山被取詰候、然者此節敵城中殊外相弱候、落去不可有程候、備作過半被任存分候条、大慶候	穂田元清が厳島神社の棚守房顕に近況を報じた書状。こちらでは宇喜多方の忍山城を包囲しているが、城中は殊の外弱っているようで、落城まで時間はかからない、備作地域の過半は毛利氏の思い通りになり大慶である、と伝えている。	忍山　(327忍山城跡)	治太元清（穂田治部太輔元清）	(天正九年)十月二十二日	1581年	36・116
255	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻六　毛利伊勢	備前面之儀、忍山隆景被任存分候	毛利輝元が吉見正頼・広頼父子に対し、備前方面で小早川隆景が忍山城を攻略したことを報じたもの。	忍山　(327忍山城跡)	(毛利)右馬頭輝元	(天正九年)十月二十八日	1581年	36・55・106
256	織田信長黒印状写／蜂須賀家文書写	備中忍城事、字喜多依無覚悟、如此之段沙汰之限、此方まて無念不及是非候、其付宇喜多煩再発之由候、永々所労少得験気、又相発候旨、雖本復仕候、是又無是非次第候	信長が蜂須賀正勝（彦右衛門尉）の戦況報告に返答したもの。備中国の忍山城が落城したとのことであるが、宇喜多直家の心がけが足りないせいでこのような事態になり言葉もない、私まで無念に感じ、どうしようもないと述べる。直家の病気が再発したとのことだが、長く患った後少し回復し、また発病したということなので、もう本復は難しいのだろう、これもどうしようもないことだ、と述べている。	忍城　(327忍山城跡)	(織田信長)御黒印	(天正九年)十一月六日	1581年	36・61
257	小早川隆景ほか２名連署書状／岡家文書(『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり)	就今度忍山御在番、備前津高村之内参百五拾貫之事、先可有進止候	新たに忍山城の在番に任命された岡元良（宗左衛門尉）に対し、毛利氏が備前国津高村で350貫の所領を与えることを約束したもの。	忍山　(327忍山城跡)	(小早川)隆景・(口羽)春良・(福原)元俊	(天正九年)十一月二十日	1581年	13・36・107・132
258	毛利輝元書状／新出岡家文書	其方事、忍山在番之儀、重而従隆景被申聞候付而罷居之由、誠数年方角辛労之上、馳走之段、喜悦候	岡元良（惣左衛門尉）は、忍山城への在番を再度小早川隆景から命じられ、同城への駐在を続けていた。これを聞いた輝元が、元良の数年にわたる境目地域での辛労と奔走に感謝し、喜びの意を伝えたもの。	忍山　(327忍山城跡)	(毛利)輝元	(天正九年ヵ)十一月二十九日	1581年	27・132
259	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻六　毛利伊勢	南口之儀、忍山一着之後者無別候	輝元が吉見正頼・広頼父子に近況を報じたもの。備作戦線の南方においては、忍山城合戦が終わった後、特段珍しいことも起きていない、と伝えている。	忍山　(327忍山城跡)	(毛利)輝元	(天正九年)十一月三十日	1581年	36・55・106
260	天正九年村山檀那帳／山口県文書館所蔵文書	備中庭妹一《割注：合うすいたのし　五明二本　百本御供米上　みゑいとう》桂右衛門大夫殿　(中略)　備中松嶋一《割注：合うすいたしゝつ　御供米下緒のし百本五明両金》梨子羽中務丞殿　(中略)　備中松山一　合うすいた五明《割注：両金御供米　下緒　のし百本》天野中務少輔殿　(中略)　備中猿掛一万度厚板五明《割注：両金　下緒　御供のしニハ》毛利治部大輔殿　(後略)	伊勢神宮の御師村山武親が、毛利領内で自身の檀家になっている領主一族を列挙した記録。領主の拠点ごとに檀那がまとめられている。備中国では庭妹城の桂景信（右衛門大夫）、松嶋城の梨子羽景連（中務丞）、松山城の天野元明（中務少輔）、猿掛城の毛利元清（治部大輔）が、その一族家臣の名と共に記録されている。（ここでは城主名のみ抜粋し一族家臣は省略）	庭妹　(402庭瀬城跡) 松嶋　(436松島城跡・番号なし射越山城跡) 松山　(158備中松山城跡) 猿掛　(227猿掛城跡)	荒木田(村山)武親	天正九年十二月十二日	1581年	119
261	井上春忠書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	幸山衆之事、何之城在番等をも不被仰付候、当城并庭妹辺、其外境目之御城ニ被罷居衆中之事者、尤可然候、大少身共ニ、在所々ニ可被罷居衆、悉被相触、山南之衆中をハ東庄被打出、在陣して彼在所をも被相鎖、又於自然之儀者、何之城へ成とも被懸付候様、可被仰付候、中とをりの衆をは、佐野殿・禰屋殿・舟木殿なとの構へ被罷籠、旁以時々之用をも被仰談候様、可有御裁判之由候	小早川隆景の重臣井上春忠が、現在どの城の在番にも就いていない「幸山衆」（幸山城主石川氏の旧臣）の扱いについて、清水宗治に指示した書状。当城（高松城か）や庭瀬城、その他の境目諸城に既に在城している者については、そのままでよいという。しかし、どこの城にも入らず在所に居住している者については、大身か小身かを問わず全てに宗治から出動の触れを出すよう指示している。山南の衆（福山・日差山山系より南の地域に居住する者）は東庄へ在陣させてその地の鎮撫を行い、万が一の時にどこの城へでも駆けつけられるよう申し付けよと伝えている。また中通りの衆（総社盆地に居住する者）は、佐野・禰屋・舟木氏の居城へ籠らせておき、時々の用事を申しつけられるよう差配せよ、と伝えている。	幸山　(414幸山城跡) 当城　(414幸山城跡または393備中高松城跡) 庭妹　(402庭瀬城跡) 佐野殿禰屋殿舟木殿なとの構(407亀山城跡など)	井上又右衛門春忠	(天正七～九年ごろ)十月二十日	(1579～81年ごろ)	15・53
262	小早川隆景書状写／藩中諸家古文書纂十五	吾等事、聢々笠岡逗留之儀候条、外□〔郡ヵ〕辺之儀者可御心安候	隆景が吉田源四郎・森脇春方（飛騨守）に送った書状。隆景は現在笠岡城に逗留しているので、備中国外郡あたりのことは安心してほしい、と伝えている。	笠岡　(254笠岡城跡)	(小早川)左衛門佐隆景	(天正十年ヵ)正月五日	1582年	36

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
263	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻十一之一　浦図書	唯今従猿懸此数通到来候、然刻、弥常山へ之人数肝心迄と存候、不及申候へ共、誠被打振候て、御指上せ肝要迄候（中略）一大崎衆、はた＼／と候間、是非共常山へ可罷籠由、早船被差遣、可被仰候、　一不及申候へ共、是非共吉充・亮康短束候様ニ、能可被仰候	猿懸城の穂田元清からの書簡を受けた小早川隆景が、常山城の在番衆増員が肝要であるとし、乃美宗勝から村上吉充・亮康に対し常山へ向かうことを指示するよう依頼している。また、児島郡大崎の人たちを常山に収容するよう、早舟でもって連絡せよと伝えている。	猿懸　（227猿掛城跡） 常山　（〈備前240〉常山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）正月晦日	1582年	13・106
264	小早川隆景書状/萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	外郡之境目無相易儀候由肝要候、鎌倉山之儀弥堅固ニ候様、治部太輔殿可被仰談事専一候	隆景が備後国衆湯浅元宗（美濃守）に送った書状。元宗から備中国外郡の境目付近に異常ないとの報告を受けた隆景が、鎌倉山城をいよいよ堅固に保つことができるよう、湯浅将宗（治部大輔）と相談するように、と返答している。	鎌倉山　（〈備前40〉勝尾山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）二月三日	1582年	13・108・132
265	小早川隆景書状／福武家文書（矢掛）	近日諸軍当地ニ出張可致、就夫当城普請、急ニ可被相遂候、為検使与、此者進之候	小早川隆景が福武四郎太郎に対し、近日中に毛利軍が出張するので、「当城」の普請を急いで完成させるよう伝え、監督者（検使）を派遣したもの。	当城　（場所未詳）	（小早川）隆景	（天正十年）二月十一日	1582年	10
266	小早川隆景書状／福武家文書	当時諸城普請之儀申付候、就夫、当城普請之事此節可被申付之段、度々清長左迄申候、定可被相達候、為検□□〔使与〕此者進之候	毛利氏は当時諸城の普請を命じていた。小早川隆景は、福武氏らがいる「当城」に関しても、普請に取り掛かるよう清水宗治へ命じ、監督者（検使）も派遣したので、きっと宗治から福武氏らに対し達しがあるだろう、と予告したもの。	当城　（場所未詳）	（小早川）隆景	年未詳二月十五日		9
267	小早川隆景書状／福武家文書	当時諸城普請之儀申付候、就夫、当城普請之事此節可被申付之段、度々清長左迄申候、定可被相達候、為検使与此者進之候	同上（宛名のみ異なる）。	当城　（場所未詳）	（小早川）隆景	年未詳二月十五日		9
268	穂田元清書状写／小早川家文書	其元御普請之儀、能程相調之由簡要存候、然処、古堀ひろめ候て、十四五間相残候由、勝事存候、是者先度於幸山普請配所申、清長へ申渡候条、頓村々之者共催促候て、可被指出之処、殊外之延引にて候、御方御下候ハヽ、弥可為緩候条、近比乍御辛労、今一両日も御逗留候て、被相究、御下可然存候、自是茂明日早々清長へ可申遣候、（中略）吾等事明後日者幸山罷出候条、万可申談候	穂田元清が、備中国での城普請監督について、宛所の真田与三右衛門尉（真与三右）に指示を与えたもの。古い堀の拡張工事をしているが、１４、５間ほどやり残しが出ているという。以前、幸山城にて城普請の分担を決め（普請配）、清水宗治（清長）に対し村の者たちを動員して工事に取り掛かるよう申し渡したが、延引している。このまま監督役の真田氏が帰還すれば、気が緩んでますます工事が遅れるので、あと一両日現地に留まり、普請の進行をしっかり定めてから帰宅するのがよい、と指示している。元清からも清水宗治に工事を急ぐよう命じ、明後日には元清自身も幸山城へ出向くので、直接万事相談したい、と述べている。幸山城そのもの、または周辺諸城の改修工事に関わる史料。	幸山　（414幸山城跡）	（穂田）治部太輔元清	（天正八～十年）二月二十四日	1579～82年	75・134
269	小早川隆景書状写／『西備名区』巻八	上勢至備前表打下、外部〔郡ヵ〕江可相働実之左右到来候間、明日令陣替可取向覚悟候間、其方儀乍至幸山表可羅〔罷〕上候	隆景が家臣の礒兼景道（左近太夫）に与えた書状の写し（やや誤読・脱字が多い）。織田軍（上勢）が備前国まで出陣し、備中国外郡に出陣してくるとの確実性の高い報告が到来したため、明日にも陣替して織田軍に立ち向かう覚悟であると伝え、景道にも幸山城まで出動するよう命じている。	幸山　（414幸山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）二月十八日	1582年	121・134
270	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百三十六礒兼求馬	庭妹兵粮之儀、先村　弾舟にて只今四百俵差上候間、片時茂被差急、庭妹城着候様、御裁判専一候	隆景が庭瀬城に搬入する兵糧について、穂田元清・裳懸景利（裳采）・礒兼景道（礒左）に指示したもの。水軍村上景広（村弾）の軍船を使って400俵の米を送ったので、少しでも早く庭瀬城に到着するよう計らえ、と命じている。	庭妹城　（402庭瀬城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）三月三日	1582年	13・108
271	穂田元清書状写／『閥閲録』巻百四十五岡与左衛門	為御使今朝御出之由候、難去内用候て一昨夕猿懸罷越、只今爰元罷越候、少令延引不懸御目候而口惜候	穂田元清が岡景忠（岡与三左）に与えた書状。今朝、景忠は元清のもとへ小早川隆景の使者として出向いたが、元清は外せない用件があって猿懸城へ赴いており、面会できなかった。元清は用事に時間がかかって景忠に会えなかったことを残念がり、また手隙の際に来てくれれば面談したい、と景忠に伝えている。	猿懸　（227猿掛城跡）	（穂田）治太元清	三月六日		109
272	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百四十五岡与左衛門	岩山普請之儀、為両三人此節被申付之由可為祝着候段、彼城江其方罷越可申渡候、於趣者元清・元将可被申渡候	隆景が岡景忠（与三左衛門）に与えた書状。岩山城の改修工事を景忠・穂田元清・上原元将で実施することになったとの報せを喜んだ隆景が、景忠に対し岩山城へ赴いて改修工事の件を申し渡すよう命じ、詳しいことは元清・元将から説明がある旨伝えている。	岩山　（番号なし岩山城跡）	（小早川）隆景	（天正八年～十年）三月八日	1580～82年	109

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
273	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻五十飯田与一左衛門	上勢至岡山罷下之由候て、此表同前之到来候、実説為可承、居諸勢爰元相扣候、（中略）将又東国之儀、（中略）武田方及合戦、為始城介無残討果候、就夫信長茂至東境目被打出候由風聞候、依此儀岡山此節可相分存、播州衆罷下候と不審千万候	隆景が虎倉城主伊賀家久（伊与三）と織田軍の動向についてやりとりした書状。織田軍（上勢）が岡山城までやってきたとの報告が隆景のもとにもたらされたので、実説かどうか確認するため諸勢を待機させているという。隆景の耳に入った風聞によると、そのころ東国で織田軍と武田軍が合戦し、織田信忠（城介）らが残らず討死したため、信長自ら東の境目へ出馬したとのことだった。こうした情勢下では、岡山の宇喜多氏が態度を変えるようにも思われ、播磨国の羽柴秀吉勢が岡山へ下るとの情報は不審である、と述べている。	岡山　（〈備前180〉岡山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）三月十五日	1582年	13・107・134
274	羽柴秀吉禁制写／『黄薇古簡集』巻第八・上道郡　築地山村浄楽寺禅定院所蔵文書	築地山并多田屋敷、其外郷内之所、敵取廻之城用可取採候之条、剪採者在之者、忽可加成敗者也	羽柴秀吉が常楽寺の所在する築地山・多田屋敷を含む草ヶ部郷内において、敵を取り囲む陣城を構築するために必要な材木を伐採することを告げたもの。織田軍以外の者が伐採行為をした場合は成敗すると伝えている。	多田屋敷　（場所未詳） 敵取廻之城　※羽柴軍の陣城	（羽柴）秀吉	天正十年四月	1582年	15
275	清水宗治書状／光市文化センター保管清水家文書	御丸之普請配之儀、被成御尋候、桂右迄頓調進候、末被仰渡候哉、（中略。城普請の品目・分量とそれを負担する郷村名が列挙してある）右、分書定、桂右へ進候、是者空覚ニ而候条、桂殿書定進候、可被成御覧候、又、大矢倉之材木引手之事、蒙仰候、昨日者高松御普請之儀ニ、村ニ而百人申付候、重而者生石・鴨・新庄・庭妹・撫川・東庄・妹尾・箕島・足守村へ可被仰候	庭瀬城の在番衆の一人井上就正（孫兵衛）から、就正自身が守備を担当する曲輪（御丸・井孫兵丸）の普請配について質問された清水宗治が回答した書状。既に桂景信（桂右）が新しい塀や塀覆、済子（鳴子）を設置するための負担を東庄・撫川・足守の村々に割り振っていたので、その割振り表の写しを就正に送付し、一読するよう伝えている。また、大矢倉の建設に必要な材木の引手について、昨日高松城を普請した際は村から１００人動員したと回答し、再度人足を調達する場合は生石・鴨・新庄村などに申し付けてほしい、と述べている。	御丸　（402庭瀬城跡） 高松　（393備中高松城跡）	清長左宗治（清水長左衛門尉宗治）	（天正十年）卯月三日	1582年	52
276	桂景信御丸普請配書定写／光市文化センター保管清水家文書	一井孫兵丸七十五間内（中略）右之分配申候書定 一塀覆十間　撫川 一済子縄替十二間　　足守　新こうし九間分ニ渡一新塀七間　　東庄　　（後略）	庭瀬城番の桂景信（右衛門大夫）が定めた、井上就正（孫兵衛）が守る曲輪（井孫兵丸）の普請分担書。清水宗治が書き写したもの。撫川村・足守村・東庄に塀覆・済子（鳴子）・新塀設置の負担が割り振られている。	井孫兵丸　（402庭瀬城跡）	（桂景信）	（天正十年）	1582年	52
277	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百三十六礒兼求馬	羽　筑事昨日岡山着候、今日相働之由候之間、諸勢福山ニて可見合調儀候	隆景が家臣の礒兼景道（礒左）・手市（手島景繁）に対し、羽柴秀吉（羽筑）が昨日岡山城へ到着し、今日にも軍事行動に移る模様なので、毛利軍は福山に在陣して様子を見ることになったと伝えている。	岡山　（〈備前180〉岡山城跡） 福山　（415福山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）四月五日	1582年	13・53・108
278	小早川隆景書状／乃美文書	内々如風聞、羽柴去二日罷立昨日四岡山着、今日山見申付由候、定而明日聊動仕候歟、一城取詰候歟、何篇行不可指延候、（中略）諸城普請并諸支度之儀者随分申付候、（中略）爰許諸城へ人数相加候故、無人之段可有御推量候、其外作州表伊賀辺之儀も無相易事候間可御心安候	隆景が乃美宗勝（乃兵）に近況を報じた書状。風聞の通り、羽柴秀吉が四月二日に出陣してきて昨日（四月四日）岡山城に到着し、今日は「山見」を行うとの報告が、隆景のもとに入っていた。これを受け隆景は、羽柴軍が明日にも軍事行動を起こすのではないか、毛利方の城をとりかこむのないかと予測し、毛利方としても軍事行動を延期することは出来ない情勢になった、と述べている。また、味方の諸城の普請や籠城の支度を念入りに申し付け、守備兵を増加させたので、手元の軍勢が少なくなっているという。一方で美作方面や伊賀氏の勢力範囲では異変もなく、安心してほしいと述べている。	岡山　（〈備前180〉岡山城跡） 諸城　※毛利方の備中諸城 （350守福寺裏山の陣跡）　※秀吉の「山見」に関連	（小早川）隆景	（天正十年）四月五日	1582年	51

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
279	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻百廿五宍戸藤兵衛	猶々、元清・春良可被致加判候得共、後巻之為山見、被罷出候之条、無其儀候（中略）敵今朝今保川を打渡陣取候、岩山中間六七町ニ候、明日尾頸可取詰調儀迄候、玉薬兵粮鉄炮衆以下、悴家来之者共籠置、長井・湯浅方申談候之条、随分可相踏と存候、右之分候之条、元春・貞俊・元俊・元保猿懸表迄継夜於日着陣候之様、追々被仰下御催促肝要存候	隆景が毛利輝元の側近粟屋元種（内蔵丞）に織田軍侵攻の様子を報じたもの（本来は穂田元清・口羽春良と連署で報告すべきところ、彼らは陣地設置場所を探すため「山見」に出かけていて不在だった）。織田軍は今朝今保川を渡って布陣しており、岩山城と織田軍の陣との距離は六、七町くらいであること。明日にも織田軍が岩山城の尾頸に攻め寄せる算段のように見えること。ただし、岩山城には弾薬・兵糧・鉄砲隊や隆景自身の家来を籠城させ、在番の長井就安・湯浅将宗に協力させているので、織田軍に攻められても、かなり持ち堪えるのではないかと考えていること。以上の状況を輝元に進言し、吉川元春・福原貞俊らを猿懸城まで昼夜兼行で着陣させるよう催促してほしいと伝えている。	岩山　（番号なし岩山城跡） 猿懸　（227猿掛城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）申刻四月十三日	1582年	13・108
280	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻廿二之二　村上図書	此表之儀、羽筑陳取之趣等、久修可被及御覧候	隆景が村上武吉に与えた書状。備中国の戦況につき、羽柴秀吉（羽筑）の軍勢の布陣状況などについては、久枝修理亮（久修）が御覧になっているはずである、と述べている。	羽筑陳取	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）四月十四日	1582年	106
281	小早川隆景書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	如承候羽柴昨日陣取候、（中略）当城之儀、鎌倉衆被仰談、中途迄御人数被指出之由、尤肝要候、（中略）今朝郷中可相働与待請候之処、于今無其儀候、随而岡惣左手之者、至敵陳〔陣〕被忍出、頸二被討捕到来候、誠御心懸之至無比類候、（中略）於此口茂高松衆其外江昨晩数輩討捕之候	隆景が昨日の羽柴秀吉着陣を受けて、忍山城番の桂就宣（桂左太）・岡元良（岡惣左）に送った書状。忍山城衆が鎌倉山城衆と相談して途中まで出陣するとの報告を受けた隆景は、これを大事な任務だと応じている。今朝にも秀吉軍が郷中に攻めかかるのではと予測して待ち受けたが、今のところ動きがないことを伝え、岡元良の配下が敵陣に忍び込んで首二つを討ち取ったことを喜んでいる。また、高松城に駐留する軍勢その他も昨晩秀吉軍と戦って数人の敵を討ち取ったことを伝えている。	当城　（327忍山城跡） 鎌倉　（〈備前40〉勝尾山城跡） 敵陣　（場所未詳）　※羽柴秀吉軍の陣 高松　（393備中高松城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）四月十五日	1582年	107・132
282	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	至宮路山敵罷出之節、其方内之者懸合之敵二人討取之由、心懸之段神妙之通可申旨候	宮路山城に織田軍が攻め寄せた際、岡元良（宗左衛門尉）の家来が敵二人を討ち取った。そのことを聞いた輝元が、その家来の心がけに感心し、自分の気持ちをその家来に伝えるよう元良に命じたもの。	宮路山　（353宮路山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）四月十六日	1582年	13・107・132
283	羽柴秀吉書状／山口県文書館蔵寄組村上家文書（屋代島村上文書。『閥閲録』巻廿二之二　村上図書に写しあり）	此表敵城之中へわり入、かわやか城・すくも塚【○異本：城】両城取巻、其上小早川幸山ニ候へ共、毎々【異本：日】此方足軽申付、十町十五町之内迄雖令放火候、一人も不罷出候条、落居不可有程候	秀吉が毛利方村上水軍の将村上元吉（掃部頭）に備中国の戦況を伝え、内応をうながした書状。当時秀吉は、備中国内の敵城が散在する中へ割り込んでいき、宮路山城・すくも塚城（冠山城ふくむ）を包囲していた。小早川隆景は幸山城に陣取っていたが、秀吉方が毎日足軽に命じて幸山城から１０～１５町くらいの距離の場所に放火しても出撃してこないので、落城も遠くないだろう、と述べている。	かわやか城（353宮路山城跡） すくも塚城（373冠山城跡・381すくも城跡） 幸山　（414幸山城跡）	羽筑秀吉（羽柴筑前守秀吉）	（天正十年）四月十九日	1582年	6・106・132・134
284	穂田元清書状／山口県文書館蔵寄組村上家文書（『閥閲録』巻廿二之二　村上図書に写あり）	羽柴事、先日如申入候、宮路山・冠山雖取詰候、城中一段堅固候、急度及行可被得大利候	元清が村上水軍の将村上武吉・元吉父子に備中国の戦況を報じたもの。羽柴秀吉が宮路山城・冠山城を包囲しているが、城中は非常に堅固で、毛利軍が救援に動けば大勝利を得られる、と伝えている。	宮路山　（353宮路山城跡） 冠山　（373冠山城跡）	穂治太元清（穂田治部太輔元清）	（天正十年）四月十九日	1582年	13・106・132
285	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	至宮路・冠山、羽柴差寄候、両城堅固之由候之間、肝要候、先度如令申、爰元之儀、元春着候間、不日令陣替候、万緒可申談候、昨日忍其辺相動之由候、無心元候、毎事忍・鎌倉、被付御心之由祝着候	輝元が伊賀家久（与三郎）に備中国の戦況を報じたもの。宮路山城・冠山城を羽柴秀吉が攻撃しているが、両城とも堅固に保っており、間もなく輝元自身も出陣するので万事相談したいと伝えている。また、昨日忍山城付近に織田方が侵攻し安心できないので、忍山・鎌倉山城に対し配意してくれればありがたい、と伝えている。	宮路　（353宮路山城跡） 冠山　（373冠山城跡） 忍　（327忍山城跡） 鎌倉　（〈備前40〉勝尾山城跡）	毛利輝元	（天正十年）四月十九日	1582年	13・107
286	毛利輝元書状／新出岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	今度於羽柴陣頸三、其方手前へ討捕之由候、毎事心懸之至、誠無比類候	忍山城番の岡元良（惣左衛門尉）が羽柴秀吉の陣に攻撃をしかけ、敵の首３つを討ち取った。その武功を輝元が褒め称えたもの。	羽柴陣　（場所未詳）	（毛利）輝元	（天正十年）卯月十九日	1582年	27・107・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
287	毛利輝元書状写／山田家古文書三	羽柴事、宮路・冠山取詰候、両城之事堅固候間、肝要候	輝元が山田重直（出雲守）に備中国の戦況を伝えたもの。羽柴秀吉が宮路山城・冠山城を包囲しているが、両城とも堅固に守備し持ちこたえていると述べている。	宮路　（353宮路山城跡） 冠山　（373冠山城跡）	（毛利）輝元	「天正十年」四月二十一日	1582年	55
288	羽柴秀吉書状／中川家文書	一此表事、備中之内敵城数ヶ所在之中をわり入、令陣取、当日ニ敵城二ツ取巻、丈夫ニ覚悟候て、去年鳥取之ことく、堀・塀・柵以下堅申付候事、一小早川事、当陣取と一里斗之間、幸山与申城ニ在之条、後巻□□及一戦可相果与待請候処、至今日、無其儀候間、此上者右両城へしよりを申付、水手相留、一人も不洩可責殺調儀候	秀吉が中川秀政（長靍）に毛利攻めの戦況を伝えた書状。秀吉は備中国の毛利方城郭が数ヶ所点在する中へ割り込んで陣を構え、その日のうちに敵城二つ（冠山城・宮路山城）を取り囲み、しっかり覚悟して去年鳥取城を包囲した時と同じように掘・塀・柵などを厳重に構築するよう指示している。また、毛利方の小早川隆景は秀吉の陣から１里ほど離れた幸山という城に在城していた。秀吉は、もし隆景が敵城二つを支援するため後巻きに出陣してきた場合は、一戦をもって決着をつけようと待ちかまえていたが、今日まで毛利軍が動く気配はない。このような状態なので、秀吉は仕寄を設けて二つの城に迫り、水の手を遮断し、城兵を一人ももらさず攻め殺す計画を立てている、と述べている。	敵城二ツ　（373冠山城跡・353宮路山城跡） （鳥取之ことく）堀・塀・柵 幸山与申城（414幸山城跡）	羽筑秀吉（羽柴筑前守秀吉）	（天正十年）卯月廿三日	1582年	99・134
289	織田信長朱印状／肥後細川家文書	今度小早川従備前児島令敗北、備中高山楯籠之間、羽柴藤吉郎令出陣取巻之由、注進候、重而一左右次第可出勢候	信長が丹後国の一色五郎・細川藤孝（長岡兵部大輔）に備前・備中国の戦況を報じたもの。小早川隆景が備前児島から敗走し、備中幸山城（高山）に立て籠もったので、羽柴秀吉が出陣して包囲しているとの報告がもたらされたことを両名に伝え、次の報告次第で信長が備中国へ出陣するつもりでいることを伝えている。	高山　（414幸山城跡）	（織田）信長	（天正十年）四月二十四日	1582年	20・134
290	羽柴秀吉書状／米蟲剛石氏所蔵文書	我等事、備中之内へ令乱入、かわやが上城・すくもつか両城取巻、一人も不漏様ニ堀・塀・柵以下堅申付、従四方しより相責候、急度可為落去候、小早川従当陣取五十町西幸山ニ居陣之由候、此方之者共、毎日幸山之山下迄相越、令放火候へ共、一人も不罷出候、両城討果次第幸山を可取巻候、就其連々如堅約此節ニ候条、御色立専一候、御一味中被仰談、可成程御行肝要候	羽柴秀吉が、毛利方の某（宛名欠。日幡城番の上原元将あてと伝わる）に送った書状。このころ秀吉は、備中国宮路山城（かわやが上城）・すくも塚城を包囲し、一人も城から脱出できないよう堀・塀・柵を厳重に構築し、四方から陣を寄せて攻撃しており、これらの城はすぐ落城するだろうと述べている。また、小早川隆景は秀吉の陣から５０町ほど西に離れた幸山城に陣取っていた。秀吉は毎日のように配下の兵を幸山城下へ侵入させて放火しているが、城中からは誰も出撃してこないという。このような状態なので、宮路山・すくも塚両城を攻め落とし次第、幸山城を包囲する予定であると告げている。そして、以前からの約束を果たすのはこの時である、毛利氏に叛逆し織田方への味方を表明するのが大事である、そちらの一味中にも話をつけて、作戦を実行するのが肝要だ、と相手の決起をうながしている。	かわやが上城（353宮路山城跡） すくもつか（373冠山城跡・381すくも城跡） 当陣取　（場所未詳）　※羽柴軍の陣 幸山　（414幸山城跡）	（羽柴）秀吉	（天正十年）卯月二十四日	1582年	53・134
291	吉川元長書状写/石見吉川家文書	至備中金床山付城冠山宮路山両城、羽柴取懸候、在番衆者、乃美弾正忠、清水其外、隆景、元政家中宗徒之衆罷籠之由候、兵粮已下も有之由候、一段堅固之儀候間、可御心安候、隆景其外方角之国衆之事者、幸山尾頸福山ニ陣候	元長が同族の吉川経安に備中国の戦況を報じたもの。宇喜多方の備中金床山城の付城として毛利方が使用している冠山城・宮路山城に羽柴秀吉が攻め寄せたこと、城中には乃美景興（弾正忠）・清水宗治の家臣・小早川隆景・天野元政の家臣らが立て籠もっており、兵糧の蓄えも十分であること、小早川隆景らの軍勢は幸山城の尾根続きにある福山城に陣取っていることなどを伝えている。	金床山　（354鍛冶山城跡） 冠山　（373冠山城跡） 宮路山　（353宮路山城跡） 幸山　（414幸山城跡） 福山　（415福山城跡）	治部元長（吉川治部少輔元長）	（天正十年）四月二十四日	1582年	13・53・73
292	井上春忠書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	今度冠山城不慮之落去、不及是非候、然者貴所之御事、以御手柄、無恙御伐退之段、尤肝要ニ候	小早川隆景の家臣井上春忠が、冠山城の落城について述べたもの。城中にいた福屋七郎兵衛が手柄を立てつつ無事に城を脱出したことを労う。	冠山城　（373冠山城跡）	井上又右衛門春忠	（天正十年）四月二十七日	1582年	15・59
293	鵜飼元辰書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	今度冠城之儀不慮之落去、不及是非候、御方様之儀、以御手柄、被伐抜之段、無比類存候	小早川隆景の家臣鵜飼元辰が、冠山城の落城について述べたもの。これも福屋七郎兵衛が無事だったことを労う内容。	冠城　（373冠山城跡）	鵜飼新右衛門元辰	（天正十年）四月二十八日	1582年	15・59

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
294	吉川元長自筆書状／吉川家文書別集	我等出張来三日と存候処、冠山楽【落】去ニ付而、先様も陣替被差急候	吉川元長が僧侶の周伯に戦況を報じたもの。備中国への出陣を来月三日に予定していたが、冠山城が落城してしまったので、先発隊も陣替を急いでいることについて。	冠山　(373冠山城跡)	(吉川) 元長	(天正十年)四月二十八日	1582年	13・73
295	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十二　口羽衛士	冠山不慮不及是非候、就夫爰元陣替差急無緩候、雖不及申候、其表之儀、一大事存候、松山・成羽へも切々可被心付候、国吉之儀、少茂不可有緩候、堅固内々御調儀此時候	輝元が口羽少輔十郎に対し、冠山城落城について慨嘆したもの。輝元自身も急いで出陣できるよう準備しているが、備中方面は一大事なので松山城・成羽城にも十分配意するよう伝え、国吉城を緩みなく堅固に維持するよう命じている。	冠山　(373冠山城跡) 松山　(158備中松山城跡) 成羽　(126鶴首城跡) 国吉　(135国吉城跡)	(毛利) 輝元	(天正十年)四月二十八日	1582年	13・106
296	吉川元長自筆書状／吉川家文書別集	備前【備中の誤】宮路山冠山と申を敵取詰之由候	吉川元長が、織田軍による宮路山城・冠山城包囲についての伝聞を記したもの。	宮路山　(353宮路山城跡) 冠山　(373冠山城跡)	黙然(吉川元長の号)	(天正十年)孟夏日	1582年	13・73
297	羽柴秀吉書状／郡総社所蔵文書	先度縄之事申遣候之処、早速馳走候而相越、令祝着候、此表之儀、すくも塚の城乗崩一人も不残討果候、并かわやの城水之手迄責詰昨日落居候、同昨日かもの城端城乗破悉令放火候、然者何之城成共可取巻候ハヽ、縄之事今弐百束馳走候て相越候者、可為祝着候	織田軍に軍事用の縄を提供した「児島之内郡年寄中」(児島郡の郡村の指導者層)に対し、秀吉が礼を述べた書状。当時秀吉はすくも塚城を攻め落とし城兵を一人も残らず討ち果たし、かわやの城も水の手を攻撃する戦法で五月二日に落城させていた。同日中には加茂城の端城(外郭の曲輪)にも乗り込んで放火したという。このような戦況を報じた上で秀吉は、これから何れの城も包囲する予定なので、包囲戦に必要な縄をさらに２００束努力して届けてくれるとありがたい、と述べている。	すくも塚の城(373冠山城跡・381すくも城跡) かわやの城(353宮路山城跡) かもの城　(427加茂城跡)	(羽柴) 秀吉	(天正十年)五月三日	1582年	18
298	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻四十上山庄左衛門	昨日者敵以武略生石令逆意、既人数引入、自丑刻至申刻羽柴自身指寄、以冠・宮路両城之競仕懸、砕手之処、以堅固之覚悟被切崩、剰数輩被討捕之段、無比類次第、併御面目之至候、即至本陣遂注進候	五月二日、織田方の武略によって逆心した生石中務丞が、毛利方の加茂城に織田軍を導き入れた。これに乗じて丑の刻から申の刻にかけ、羽柴秀吉自身が冠山城・宮路山城を落した勢いに乗り、加茂城へ攻め寄せた。しかし、城中にいた上山元忠(兵庫助)は城を堅固に守って織田軍を切り崩し、数人を討つ手柄を立てた。この武功を、隆景が褒め称え、毛利輝元の本陣に報告する旨伝えたもの。	(427加茂城跡) 冠　(373冠山城跡) 宮路　(353宮路山城跡)	(小早川) 隆景	(天正十年)五月三日	1582年	13・107
299	小早川隆景書状写／山口県文書館蔵服部家文書(『閥閲録』巻七十二桂又兵衛にも写しあり)	誠昨日者鴨固屋中不慮候て敵差寄候処、桂民部太輔以堅固之覚悟、則時突崩数輩討捕得太利珍重候	隆景が小田宮内太輔に与えた書状。昨日、鴨城の城内で不慮の事件があって敵が攻め寄せてきた際、桂広繁(民部太輔)が堅固な心がけでもって則時に敵軍を突き崩し、数人を討ち取って勝利したことを喜んでいる。	鴨固屋　(427加茂城跡)	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正十年)五月三日	1582年	107・132
300	小早川隆景書状／山口県文書館蔵寄組村上家文書(『閥閲録』巻廿二之一　村上図書に写しあり)	此表之儀、無覚悟之城一両所落去候、以其競、昨日二、至鴨城羽柴自身取懸、終日雖責戦候、城中堅固仕、則切崩、敵数十人討捕、得太利本望候、就夫、敵打入候之き、輝元・元春其外諸勢追々着陣儀候之条、人数到着次第、一戦可申談覚悟候	隆景が村上水軍の将村上元吉に戦況を報じたもの。備中国では、心がけの足りない城が二ヶ所落城した。これを落とした勢いに乗って、昨日羽柴秀吉自らが鴨城に攻め寄せ、終日合戦が続いたが、城中の人たちが堅固に守ってすぐに織田軍を切り崩し、城方が大勝した。毛利輝元・吉川元春やその他の諸将も追々着陣するので、人数が揃い次第一戦をかまえる覚悟でいることを伝えている。	無覚悟之城一両所　(373冠山城跡・353宮路山城跡) 鴨城　(427加茂城跡)	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正十年)五月三日	1582年	13・106・132
301	小早川隆景書状／冷泉家文書	鴨城之儀逆意之者在之付而、羽柴自身至外構詰寄、終日雖及防戦候、甲丸以堅固之上合力即切崩、敵数人討捕之、太利此事候、就夫悉打入于今無珍儀候、(中略)当城之儀弥御用心等頼存計候	隆景が冷泉元満(冷民少)に対し、常山城を用心して守備するよう伝えると共に、鴨城合戦について報じたもの。鴨城には裏切り者が現れて羽柴秀吉自身が「外構」まで攻め寄せたので、終日防戦に努めた。その結果「甲丸」を堅固に守って織田軍を切り崩し、敵数人を討って退散させた。大勝利とはこのことである、と述べている。	鴨城　(427加茂城跡) 当城　(〈備前240〉常山城跡)	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正十年)五月四日	1582年	13・108・131

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
302	小早川隆景書状／長府桂家文書（『閥閲録』巻七十二　桂又兵衛、山口県文書館蔵服部家文書にも同文の写しあり）	今度当城之儀、生石依別心、羽筑差寄候之処、無二之御覚悟、殊為始内藤兵部丞・御同名右衛門尉御手之衆被尽粉骨、村上新五左衛門尉・内藤新右衛門尉以下宗徒之者被立用、銘々無比類動之趣、淵底令承知候、至本陣遂注進候	隆景が鴨城番の桂広繁（桂民）に与えた書状。広繁の守備する「当城」こと鴨城は、城中にいた生石氏の逆心によって羽柴秀吉軍の攻撃にさらされた。しかし、広繁は無二の覚悟をもって城を守り、内藤兵部丞・桂右衛門尉ら広繁配下の人々も奮戦し、村上新五左衛門尉・内藤新右衛門尉といった主立った武将が戦死した。こうした働きに対し隆景は、銘々の奮闘ぶりは承知しているので、毛利輝元の本陣へ報告した、と述べている。	当城　（427加茂城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）五月四日	1582年	49・107・132・133
303	小早川隆景書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	今度至此境羽柴打下、居陳〔陣〕候、然者当城於取詰者、以無二之御覚悟可被相抱之由、誠無比類存候、万一於被立御用者、御方一跡之儀者勿論、当御約束之地、対子息聊無相違被遣置候之様可申達候	羽柴秀吉の備中国侵攻を受け、隆景が忍山城番の岡元良（惣左衛門尉）に送った書状。元良は、忍山城が織田軍に包囲されても無二の覚悟で維持すると申し出た。この元良の心がけに感心した隆景は、万が一元良が名誉の戦死を遂げるようなことがあっても、岡家の名跡はもちろん恩賞として約束していた所領も全て遺児が間違いなく相続できるよう、毛利輝元に言い含めておくと約束している。	当城　（327忍山城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）五月五日	1582年	13・107・132
304	小早川隆景書状／赤木家文書	高松人数之儀申候処、成太左被仰合、則被差遣之候、誠此節御入魂令祝着候、然間百貫之地可進置之候	小早川隆景が赤木与四郎に対し高松城に配下の兵を入れるよう依頼したところ、赤木氏はこれに応じすぐに高松へ兵を遣わした。これを賞美した隆景が、恩賞として百貫の土地を与える旨伝えたもの。	高松　（393備中高松城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）五月五日	1582年	10・59
305	蜂須賀正勝書状／吉備津神社文書	先度加茂之儀付而、被負御手之由承候、事実候哉、後便ニ委曲可示給候	吉備津神社の社家（宮内の中番）が、合戦最中の加茂城に出向いて負傷する事件があった。この件につき、羽柴秀吉の家臣蜂須賀正勝が事実かどうか確認したいので詳しく返答してほしい、と述べたもの。	加茂　（427加茂城跡）	蜂彦右正勝（蜂須賀彦右衛門尉正勝）	（天正十年）五月五日	1582年	8
306	毛利輝元書状／新出岡家文書	台・土居・吉岡衆之儀、此口及行候、方角者之儀候条、自然其表へ敵取出候ハヽ、可馳向候、其節案内者等させ度候間、此表へ可差出候、当城可為無人候へ共、定而可為少人数候間、右之趣令分別候而、以此旨申渡之、早々罷出候様ニ心遣肝要候＼／	輝元が忍山城番の桂就宣（左衛門大夫）・岡元良（惣左衛門尉）に指示した書状。台・土居・吉岡衆は地域の事情をよく知る者なので、敵軍がその方面に進出した際に自軍の案内者とするため、輝元の本陣へ差し出すよう命じている。当城（忍山城）は人員不足の状況だが、台衆らは少人数なので理解して早々に出立させるよう心遣いせよ、と伝えている。	当城　（327忍山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月五日	1582年	27・132
307	毛利輝元書状／新出岡家文書	一至当城敵可指寄之由候、爰元之推量も其分ニ候、各堅固之覚悟之由無比類候、（中略）宮路之儀、如申越之候、不及是非候、然処、其方共之事、弥無二之覚悟由、安堵迄候、一城中ニ方角衆罷居付而気仕之由尤ニ候、（中略）然間人数者不□〔足〕候共、彼者共之儀者、此口へ召寄候て可置候、（中略）一彼是兵粮・玉薬なとの調ニ、桂兵事、松山まて今明之間遣之候	上記文書に関連し、輝元が桂就宣・岡元良に対し同日に発給した書状。輝元らの推量が当たって、織田軍が当城（忍山城）へ侵攻してきた。宮路山城も落城して言いようのない状況の中、桂・岡氏が無二の覚悟をもって忍山城を守備している様子をみて、輝元は安堵したと伝えている。また、忍山城中に地元の人間（方角衆）がいるのは心配の種だ、との桂・岡氏からの注進を受け、輝元は、そういった人たちを本陣に召し寄せ城から引き離すことを提案している。さらに、兵糧・玉薬の調整を行わせるため、桂広信（兵部丞）を松山城へ派遣したことを伝えている。	当城　（327忍山城跡） 宮路　（353宮路山城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月五日	1582年	27・132
308	鵜飼元辰書状／新出岡家文書	就当城被拘様之儀、被仰越之通、慥令披露候、（中略）亀石落去候条、御心遣彼是以致推量候、兵粮・玉薬之儀、急度可被進之置候、明日元春様其外有御相談、可被及御行御議定候、（中略）此度以一戦実否可相見之条、御弓矢長々敷儀にても有間敷之候【○異本：哉】	忍山城の維持状況について、岡元良（岡惣左）から報告を受けた小早川隆景の側近鵜飼元辰が、その報告をたしかに隆景に伝えた旨、返書したもの。亀石城が落城し心配ごとが増えただろう、兵糧や弾薬については毛利氏からすぐに手配されるだろうと伝えている。また、明日吉川元春らと相談して羽柴秀吉に一戦を挑むことに決した、この一戦で勝敗が見えるだろうから、今の戦争状態もそれほど長くは続かないのではないか、と述べている。	当城　（327忍山城跡） 亀石　（331亀石山城跡）	鵜飼新元辰（鵜飼新右衛門尉元辰）	（天正十年）五月五日	1582年	27・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
309	羽柴秀吉書状／亀井家文書	此表之儀、すくも塚の城去月廿五日ニ責崩、始城主首数三百余討果候、同取巻候かわやの城之事、水之手迄責詰、去二日ニ是又落居候、其競を以、かもの城端城乗崩、悉令放火候、并亀石之城同日ニ帰参候	秀吉が配下の亀井玆矩（新十郎）に、備中方面の戦況を伝えた書状。これによると秀吉は、すくも塚城を四月二十五日に攻め落とし、城主を始めとする３００余人の敵を討ち果たしている。同様に包囲していたかわや城についても、水の手を攻撃することによって５月２日に落城させた。これらの勝利の勢いに乗って、加茂城の端城（外郭）へも侵入して切り崩し、放火した。亀石城もこの日織田方に降参した、とある。	すくも塚の城（373冠山城跡・381すくも城跡） かわやの城（353宮路山城跡） かもの城端城（427加茂城跡） 亀石之城　（331亀石山城跡）	羽筑秀吉（羽柴筑前守秀吉）	（天正十年）五月六日	1582年	44
310	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	鍛冶屋山近辺ニて、岡宗中間分取仕、頸持越候、毎々心懸之段、神妙之至候	忍山城番の桂就宣（左衛門太夫）・岡元良（宗左衛門尉）が、織田方の鍛冶屋山城に攻め寄せた際、城の近辺で元良の中間が敵を討ち、その首級を挙げた。これらの活躍に感じた輝元が、忍山城衆を褒めたもの。	鍛冶屋山　（354鍛冶山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月七日	1582年	13・107・132
311	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	於鍛冶屋山麓、其方中間通路切仕、頸到来、毎事心懸無比類候	上記の戦いに関連して輝元が岡元良（宗左衛門尉）に与えた感状。	鍛冶屋山　（354鍛冶山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月七日	1582年	107・132
312	穂田元清書状写／山口県文書館蔵長府桂家文書	去二日生石令逆心、備前衆城中引込、殊上勢城際指寄候之処、以手柄則時敵を切出、剰数人被討捕候、寔無比類儀ニ候	元清が備中鴨城の城番の一人内藤兵部丞に与えた感状。五月二日、生石中務が逆心して宇喜多軍（備前衆）を鴨城の城中へ導き入れ、秀吉軍（上勢）も城の側まで攻め寄せてきた。この時、兵部丞は奮戦してすぐに敵を城外へ追い出し、数人を討ち取った。元清は、こうした兵部丞の活躍を比類なきものと褒め称えている。	（427加茂城跡）	（穂田）元清	（天正十年）五月七日	1582年	132
313	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻四十　上山庄左衛門	今度当城之事、以武略生石搆逆心、既羽柴引入、至二丸攻上及難儀候処、以御手柄敵被仕退候、寔以御粉骨之次第、不知所謝候	輝元が加茂城の城番の一人上山元忠（兵庫助）に与えた感状。加茂城では織田方の武略にかかった生石氏が逆心を起こし、彼に手引きされた羽柴秀吉の軍勢が二の丸まで攻め入って困難な状況にあった。そのような中、元忠は手柄を立てて羽柴軍を退却させた。輝元はこうした元忠の粉骨に対し、どう感謝してよいのかわからないと賞賛している。	当城　（427加茂城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月八日	1582年	107
314	小早川隆景書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五中島三季之助所蔵文書	今度冠山城不慮之落去、不及是非候、各無二之覚悟候処、如此之成下、惜次第ニ候、御方之儀、無差被伐退可然候、殊ニ被蒙疵之由候	小早川隆景が福屋七郎兵衛に対し、福屋氏らが無二の覚悟で守備したのに冠山城が落城してしまったことを惜しみ、負傷を気遣ったもの。	冠山城　（373冠山城跡）	小早川隆景	（天正十年）五月九日	1582年	15・59
315	小早川隆景書状写／『黄薇古簡集』巻第十五・窪屋郡山手之内岡谷村亀右衛門所蔵文書	今度冠山不慮落去、不及是非候、各無二之覚悟候処、如此成行候、惜次第候、御方之儀無差被取退可然候、殊被疵之由ニ候	小早川隆景が友野石見守に与えた感状の写しとされるもの。友野氏らが無二の覚悟で守備したのに冠山城が落城してしまったことを惜しみつつ、友野氏が無事に城から脱出したことを喜び、負傷を気遣っている。上記の福屋氏あて文書とほぼ同文。後世に上記文書を参考に作成された可能性もあり、やや検討を要する。	冠山　（373冠山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）五月九日	1582年	15・134
316	羽柴秀吉書状／真田宝物館所蔵文書	此表之儀、高松之城取巻、堤丈夫ニつきまわし、水責ニ申付候、国分寺如被見及候、落居不可有幾程候	秀吉が伊予国の得居通幸（右衛門佐）からの使者国分寺の到来を受け、通幸に返書したもの。当時秀吉は高松城を包囲し、堤防を丈夫に築き回して城を水攻めにしていた。国分寺が実見したのでわかると思うが、落城まで幾程もかからないだろう、と述べている。	高松之城　（393備中高松城跡）	羽筑秀吉（羽柴筑前守秀吉）	（天正十年）五月十八日	1582年	98
317	吉川元春書状写／山田家古文書六	此表之儀、去七日至高松城敵取懸候、是非後巻可被申付之由候、各於行者無緩候条、可心安候	元春が山田重直（出雲守）に備中方面の戦況を伝えたもの。去る五月七日、高松城に織田軍が攻め寄せてきたので、毛利輝元が敵軍の包囲を破るため「後巻」を命じる予定であることを伝え、各将とも緩みなく作戦を実施しているので安心するよう述べている。	高松城　（393備中高松城跡）	（吉川）駿河元春	「天正十年」五月十八日	1582年	55

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
318	羽柴秀吉書状／溝江家文書	一今度東国　御動座之刻、西国面為御手当、播州ニ雖被残置候、其儘可在之儀ニあらす候と存、備中内へ押入、令山取、則敵城かむり山之城并かわやか城、此間十五町計候を、同前取巻候事、一右之取巻候城より五十町西、幸山与申城ニ、小早川在城候、毛利・吉川も令着陣、後巻可仕ニ相究由候間、合戦儀者不余長候へ共、両城取巻如何与存、去月廿五日ニかむり山之城攻崩、城主林三郎左衛門尉・松田孫次郎始而、其外城中者不残一人、三百余人討果、則大将両人首安土へ致進上候事、一同取巻候河屋城事、四方より仕寄を申付貴詰、水之手を取、是又去三日ニ落去候事、一右之競ニ賀茂之城端城乗崩、悉令放火、本丸計はたか城ニ申付候事、一亀石と申城色々降参仕候間、令赦免、居城ニ召出候事、一去八日、同備中内高松与申城取巻候、当城事、平城ニ而候を、数年相拵、其上三方深田にて責口無之候之間、廻ニ堤を丈夫ニつかせ、近所之川を切懸、水責ニ申付候、はや端城の土居を水打越候間、落去不可有何程躰候事、一毛利・吉川・小早川事、右ニ如申候、当陣取より五十町西幸山ニ候、先の陣所十町十五町之間ニ候得者、目之前にて諸城如存分申付候、今十日五日之内ニ、高松事可為落去ニ付而、後巻儀是非可仕由候、不定候へ共自然於罷出者、及一戦、即時切崩、悉可討果事、案之内ニ候之間、可御心安事、	秀吉が溝江長逸（大炊允）に毛利攻めと高松城水攻めの状況を報じた書状。信長の武田攻めの際、秀吉は西国方面の押さえとして播磨国に残された。そのままじっとしているのもどうかと思った秀吉は、備中国内へ侵入し、山に陣所を取り、ただちに毛利方の冠山城・河屋城（宮路山城か）を包囲した。二つの城の間の距離は１５町ほど離れていた。二つの城からさらに５０町ほど西の幸山という城に小早川隆景が在城していた。そこに毛利輝元・吉川元春も着陣し、冠山城・河屋城救援のため後巻きをすることに決まったとの噂があったので、合戦じたいは長期化していないものの、このまま二つの城を包囲し続けるのもどうかと考え、四月二十五日に冠山城を攻め落とし、城主林三郎左衛門尉・松田孫次郎をはじめ、城中の者を一人も残らず三百余人討ち果たし、すぐさま林・松田両大将の首を安土城へ送り届けた。一緒に包囲していた河屋城も、四方に仕寄を設けて攻撃し、水の手を奪取して、五月三日に落城させた。この二つの城を落した勢いに乗って、賀茂城の端城（周囲の曲輪）を乗っ取って放火し、本丸だけの裸城にした。そのころ亀石という城から降参の申し出があったので、敵対の罪を許し、居城（秀吉の本陣か）に召し出した。そして五月八日、備中のうち高松という城を包囲した。高松城は平城であったが数年間修築を加えている上、三方が深田になっており攻め口がなかった。そのため、城のまわりに堤を丈夫に築かせ、近所の川を堰切り、水攻めにするよう命じた。もう端城の土居（周囲の曲輪に設けられた土塁）を水が乗り越えているので、落城まで時間はかからない様子である、という。毛利・吉川・小早川氏の軍勢は、前述の通り幸山にいたが、彼らの目の前で毛利方諸城を思うままに攻略した。あと十日か五日のうちに高松城も落城しそうなので、毛利氏はどうしても救援したいと考えているらしい。これは不確かな話だが、もし毛利軍が出撃してきたら、一戦に及んで即座に切り崩し、全て討ち果たす算段なので、安心してほしい、と伝えている。	かむり山之城（373冠山城跡） 河屋城　（353宮路山城跡） 幸山与申城（414幸山城跡） 賀茂之城端城（427加茂城跡） 亀石と申城（331亀石山城跡） 高松与申城（393備中高松城跡）	（羽柴）秀吉	（天正十年）五月十九日	1582年	5・111
319	穂田元清書状写／山口県文書館蔵長府桂家文書	此表之儀、明日高松後巻以仰付候、吉左右自是可申候	元清が桂伊賀入道に送った書状。明日高松城救援のため「後巻」の実施が命じられることになったと伝え、よい報せをこちらから申し入れます、と伝えている。	高松　（393備中高松城跡）	治太元清（穂田治部太輔元清）	（天正十年）五月二十日	1582年	132
320	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百六十之二萩町人岡佐右衛門	岡惣左衛門尉被官、於鍛冶屋山近辺羽柴下人一人討捕之頸到来之、殊馬一疋同前執之由、近比心懸無比類次第候、（中略）能々可申聞候	輝元が桂就宣（左衛門大夫）に与えた書状。就宣と組んで活動している岡元良（惣左衛門尉）の被官が、鍛冶屋山城の近辺で羽柴秀吉軍に所属する下人１人を討ち取り、その首を毛利本陣へ送り届けてきた。また、この戦いで彼は敵方の馬１匹も捕獲した。こうした岡氏被官の働きに感心した輝元が、よくよく自分が褒めていることを岡氏被官に申し伝えるよう就宣に命じている。	鍛冶屋山　（354鍛冶山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月二十一日	1582年	109
321	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	於通路羽柴下人一人討捕之、頸到来候、（中略）将又於当城普請以下別而令馳走由、彼是以粉骨不浅候、何様連々可加褒美候	上記史料に関連して輝元が岡元良（宗左衛門尉）に与えた書状。元良が羽柴軍の下人１人を討ってその首を毛利本陣へ届けたこと、忍山城の改修工事を念入りに実施していることを労い、褒美を与えるであろうと伝えている。	当城　（327忍山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月二十一日	1582年	107・132

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
322	熊谷信直書状／厳島野坂文書	爰元之儀昨日廿一日山陣候、敵方之事殊外さわき候て見へ候、かさの丸江人数ヲあけ、又城共仕出シ、一人茂出事今迄ハ無之候、此方之事勢衆一万余可有之候、ものより者細川野州・元清兄弟、木梨、なら崎、三村孫太郎其外当国衆、其次隆景衆、其次元春衆、次郎三郎事者隆景・元春之間ニ居事ニ候、又北口備前衆之堺目三吉方、天野元明、東之物より完【宍】戸、山内、三沢、其外吉田衆者中ほとニて候、高松之水も前より茂へり候て見へ候、何も此方諸城堅固きおいニて候、縦尚々敵下候とも珍敷儀有間敷候、又久敷山ニ者久代被居候	毛利氏配下の国衆熊谷信直が厳島神社の社家棚守房清に高松合戦の状況を報じた書状。毛利軍は五月二十一日に高松城周辺に到着し、山陣を構えた。これを受け、羽柴軍はずいぶん騒いでいるようにみえるが、「かさの丸」（城の主郭）に将兵を集め、周囲に陣城を構えて、今のところ一人の兵も出撃する様子がないとある。毛利軍は一万人余りで、「ものより」（物頭・侍大将級を指すか）として細川通董・穂田元清・木梨氏・楢崎氏・三村親宣ら備中衆が布陣し、これに次いで小早川隆景の軍、吉川元春の軍が布陣しているという。熊谷信直の子元直（次郎三郎）は隆景・元春の陣の間に布陣している。北口の宇喜多氏との境目の備えとしては、三吉氏・天野元明を配置し、東の方にも宍戸氏・山内氏・三沢氏を配備し、毛利輝元の吉田衆はその中ほどに在陣しているという。また、「久敷山」（日差山の当て字）には久代宮氏が布陣しているという。高松城を水浸しにしている水は、以前より減っているように見えるという。いずれにせよ、毛利方諸城は堅固で意気盛んであり、たとえ敵の増援部隊が下ってきても大事ない、と伝えている。	山陣　（428鷹の巣山城跡・414幸山城跡・415福山城跡・423庚申山城跡・426甫崎天神山城跡・424造山城跡など） かさの丸　（番号なし新庄山城跡ヵ） 高松　（393備中高松城跡） 久敷山　（433日差山城跡・428鷹の巣城跡）	（熊谷）伊豆守信直	（天正十年）五月二十二日	1582年	100・116
323	吉川元春書状／新出岡家文書	於亀石山下敵弐人被討捕之、頸到来候、（中略）各事昨日至爰許陣替候	桂就宣（左衛門大夫）・岡元良（宗左衛門尉）が織田方に降伏した亀石城下に攻め寄せ、敵２人を討ち取ってその首を毛利陣に送ってきた。これを受けた吉川元春が、毛利軍も昨日備中国に陣替えしたことを回答している。	亀石　（331亀石山城跡）	（吉川）駿河元春	（天正十年）五月二十二日	1582年	27・132
324	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	殊於亀石山下敵討取、頸二ツ到来、毎度之儀なから粉骨無比類候	忍山城番の岡元良（宗左衛門）は、織田方に降参した亀石城の麓に攻め寄せて敵を討ち、首級二つを毛利軍の陣へ送ってきた。これをみた輝元が、元良の奮闘を褒めたもの。	亀石　（331亀石山城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）五月二十三日	1582年	13・107・132
325	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	去廿一日延原被官難波源介事、城山於尾頸生捕之、種々相尋、其上を以打果、頸持せ越候、誠度々の儀なから、一段之者申付候、感悦不知所謝候	忍山城番の岡元良（宗左衛門）に輝元が与えた感状。去る二十一日、元良は「城山」の尾首にて宇喜多方の延原内蔵丞の配下難波源助を生け捕りにした。元良は源助にあれこれ尋問した上で討ち果たし、その首を毛利陣へ送達した。こうした元良の働きを輝元が褒めたもの。	城山　（場所未詳）	（毛利）輝元	（天正十年）五月二十三日	1582年	107・132
326	吉川元春書状／新出岡家文書	城山於尾頸敵一人被討捕候、難波源助と申者之由候、一段印候、旁御短束之段、無比類存候	忍山城番の岡元良（宗左衛門尉）は、「城山」の尾根続きで宇喜多軍の将難波源助を討ち取った。この報告を聞いた元春が、敵の重要人物の首級を挙げた元良の活躍を褒め称えている。	城山　（場所未詳）	（吉川）駿河元春	（天正十年）五月二十三日	1582年	27・132
327	二宮就辰書状／新出岡家文書	亀石於山下敵弐人被討捕、頸到来之趣、神妙之由候、則被成御書候、仍亀石城内拵共被懸申候哉、被成御心得候、其元実否被聞合、重而御注進肝要候、将又夜前土師弥十郎と申者、御方手へ罷退候哉、可然候、手切之儀被申付之、無二之覚悟候者、許要〔容〕候て敵前之趣共可被相尋候	忍山城番の岡元良（宗左）が亀石城下で敵二人を討ち、その首を毛利陣へ送ってきた。毛利輝元の側近二宮就辰は、こうした元良の活躍を輝元が喜び、直々に感状が与えられる旨を伝えている。また、亀石城内に対して「拵」（調略？）をかけているというのは本当か尋ねている。亀石城衆のうち土師弥十郎が岡氏の陣へ投降してきたとの報告に対しては、もし完全に敵と手切れになる覚悟のある者であれば、許容して敵情を聞き出すよう命じている。	亀石城　（331亀石山城跡）	二太右就辰（二宮太郎右衛門尉就辰）	（天正十年）五月二十三日	1582年	27・132
328	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻九十五柳沢九左衛門	就亀石之者共調略之儀、承候通得其意候、於忠儀之者一廉可加褒美候	輝元が忍山城在番の桂就宣（桂左）・岡元良（岡惣）に指示した書状。桂・岡両人からの提案を受け、亀石城籠城衆に対する調略に尽力した者にはきちんと褒美を与える旨、返答したもの。	亀石　（331亀石山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）五月二十三日	1582年	108
329	羽柴秀吉書状／総見寺文書	今夜高松へかせき被出、明船被引取候由尤御才覚御心懸故、城内可失手と珍重候	秀吉が「岡又」に与えた書状。岡又が夜間に高松城へ侵入し、城側の空き船を奪い取って戻ってきたことを褒め、船を失ったことで高松城内の人々は出撃する手立ても失ったことだろう、と喜んでいる。	高松　（393備中高松城跡）	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十年）五月二十三日	1582年	21・124

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
330	福原貞俊・福原元俊・口羽通良連署書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	飯田与一左衛門尉兄弟為通路待之、敵陣麓罷出、敵弐人討捕首到来、誠ニ心懸之段無比類存候、則御両殿江令披露候	鎌倉山城在番の桂元盛（桂源）に対し、貞俊らが与えた書状。元盛の指揮下にあった飯田与一左衛門尉・与五郎兄弟が、「通路待」のため宇喜多軍の陣地の麓まで出動し、敵二人を討ち取り、貞俊らの陣にその首を送り届けた。こうした飯田兄弟の活躍を貞俊らが褒め称え、すぐに「両殿」＝吉川元春・小早川隆景に上申する旨を元盛に伝えている。	敵陣　（場所未詳）　※宇喜多軍の陣	（福原）出羽守貞俊・（福原）式部少輔元俊・（口羽）下野守通良	（天正十年）五月二十七日	1582年	107
331	長井元為書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	於備前陣敵二人、御方并与五郎方被討捕之、頸被持せ候、遂披露候、神妙之由被成御書候	上記合戦に関連して、毛利家臣の長井元為が飯田与一左衛門尉に与えた書状。宇喜多軍の陣において飯田兄弟が敵二人を討ち取ったことについて、毛利輝元に報告したところ、輝元が喜んで感状（御書）が発給されたこと等を与一左衛門尉に伝達している。	備前陣　（場所未詳）　※宇喜多軍の陣	長右太元為（長井右衛門太夫元為）	（天正十年）五月二十七日	1582年	107
332	福原元俊書状写／『閥閲録』巻五十　飯田与一左衛門	猶々兄弟与五郎高名無比類存候、於鍛冶屋山下茂御方中間遂高名候、打続動之段、千万被成御褒美候、為通路待被罷出、敵弐人被討捕之、首到来候、誠御心懸之段、不始于今無比類存候、則至御座所、可遂注進候	上記合戦に関連して、福原元俊が飯田与一左衛門尉に与えた書状。飯田与一左衛門尉・与五郎兄弟が「通路待」に出動し、敵二人を討ち取ったこと、飯田氏配下の中間が鍛冶屋山城麓の戦いで高名を挙げたことを褒め称え、これらの活躍ぶりを毛利輝元の御座所へ報告したと述べている。	鍛冶屋山　（354鍛冶山城跡） 御座所　（227猿掛城跡）	（福原）式部少輔元俊	（天正十年）五月二十七日	1582年	107
333	小早川隆景書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	於城山之下敵一人、御方被官蒲池新左衛門尉討捕、頸到来候、誠度々之儀、粉骨無比類存候、并於真星表荒木中間一人被搦取、是又至亀石頸被懸置之由、重畳無緩御短束、更可申様無之候、則御本陣江茂得御意候之条、定而可被加御意候	忍山城番岡元良（岡惣左）の家来蒲池新左衛門尉が、「城山」の麓で敵一人を討ち取った。また真星表で亀石城衆荒木氏の中間を捕縛し、その首を刎ねて亀石城のそばに晒した。これらの武功に感じた隆景が、毛利軍本陣に報告するので、毛利輝元からもお褒めの言葉があるだろうと元良に伝えている。	城山　（場所未詳） 亀石　（331亀石山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年）五月二十八日	1582年	13・107・132
334	佐世元祝（元嘉）・二宮就辰連署書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	城山麓ニて敵壱人被討捕之、頸被持せ候間、披露申候、次亀石衆壱人被搦執之、被討果候て彼表被懸置之由、慥被　知召候、誠毎事御忠切〔節〕之段、御外実共御祝着之由、能々可申旨候	上記文書と関連。毛利氏の奉行人佐世・二宮氏が忍山城番の岡元良（岡惣左）に与えた書状。元良が城山の麓で敵一人を討ち取り、毛利陣営に首を送り届けてきたこと、亀石城衆の一人を生け捕りにし、これを処刑して亀石城付近で晒し者にしたことについて、毛利輝元が大変喜んでいることを伝えている。	城山　（場所未詳） 亀石　（331亀石山城跡）	佐与三左元祝（佐世与三左衛門尉元祝）・二太右就辰（二宮太郎右衛門尉就辰）	（天正十年）五月二十八日	1582年	107・132
335	口羽通良・同春良連署書状／新出岡家文書	城山於通路敵一人被討捕、首御持せ候、誠御心懸之段、今度中々御粉骨不及申候、御本陣へも遂注進候	上記文書と関連。忍山城番岡元良（岡宗左）の手勢が「城山」の通路で敵一人を討ち、その首を毛利陣へ送ってきた。これを受けて毛利氏宿老の口羽通良父子が元良の心がけと奮戦ぶりを称え、その働きを毛利輝元本陣にも注進する旨約束したもの。	城山　（場所未詳）	口下通良（口羽下野守通良）・口中太春良（口羽中務太輔春良）	（天正十年）五月廿八日	1582年	27・132
336	毛利輝元書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	去廿五日於城山下敵二人討取之、頸到来候、毎事心懸粉骨之至、喜悦候、神妙之趣、能々可申聞候	輝元が忍山城番の岡元良（宗左衛門尉）に与えた書状。去る二十五日、元良が「城山」の麓で敵二人を討ち取り、その首級を毛利陣へ提出したことを喜び、その奮闘を褒めたもの。	城山　（場所未詳）	（毛利）輝元	（天正十年）五月二十八日	1582年	107・132
337	毛利輝元自筆書状写／『閥閲録』巻八十五　新山十郎左衛門	高松之儀多分はや可一途候、無申事候、火手見へ候間、敵かと存候而人を遣候つれとも、渡不成候て帰候処、申越承知候	輝元が「惣」＝神田惣四郎元忠に宛てた書状。高松城はたぶん早晩落城してしまうだろう、言葉もない、と感想を述べている。火の手が見えたので敵が攻めてきたかと思って人を遣わしたけれども、川を渡ることもできず帰ってきた。ちょうどそこへ元忠から状況について報せがきたので、承知した旨返答している。	高松　（393備中高松城跡）	（毛利輝元カ）	（天正十年五月末～六月初旬）	1582年	107
338	小早川隆景書状／水原岩太郎氏所蔵文書	高松人数之儀申候処、成太左被仰合、則被差遣之候、誠此節御入魂令祝着候、然間五千貫之地可進置之候	小早川隆景が赤木与四郎に対し高松城に配下の兵を入れるよう依頼したところ、赤木氏はこれに応じすぐに高松へ兵を遣わした。これを賞美した隆景が、恩賞として五千貫の土地を与える旨伝えたもの。	高松　（393備中高松城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十年）六月五日	1582年	9
339	羽柴秀吉書状／長井喜平氏所蔵文書	日幡城上原右衛門大夫為人質舎弟を被相越候条、其方へ預ケ申候	秀吉が宇喜多氏宿老の岡家利（岡平）に与えた書状。織田方に寝返った日幡城の上原元将（右衛門大夫）が、人質として舎弟を差し出してきたので、宇喜多家に預ける旨、家利に伝えている。	日幡城　（431日畑城跡）	羽筑秀吉（羽柴筑前守秀吉）	（天正十年）六月五日	1582年	124

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
340	小早川隆景書状／岡家文書（『閥閲録』巻八十　岡吉左衛門に写しあり）	尚々、賀茂之儀茂、弥無二之覚悟候、自境目種々到来共候、何茂重畳可申承候＼／（中略）此表之儀、昨朝如申、以陣和談先各幸山・河辺迄打入候、此上之儀、遂相談候之条、於時宜者追々可申候	隆景が忍山城番の桂就宣（桂左太）・岡元良（岡宗左）に対し、織田方との和談にもとづきいったん毛利方諸将が幸山城・川辺宿まで撤収したことを報せ、今後のことは相談してから一報すると伝えたもの。また、伊賀家久（賀茂）も変わらず毛利方に従う覚悟を維持していることを告げ、境目から到来する様々な伝聞につき何事も報せるよう伝えている。	幸山　（414幸山城跡）	（小早川）左衛隆景	（天正十年）六月六日	1582年	13・107・132・134
341	清水行宗・清水景治連署書状写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六紺屋町海津屋十郎右衛門所蔵文書	今度高松成行、不及是非次第候、御親父之儀、宗治同前無二之御覧〔覚〕悟、似而申も疎候、（中略）宗治御親父被申置子細候之間、守安方迄可有御出候、御暇請之紙面、両人被書置候連共、各事はき被取、ふしき躰にて、悌面取落申候	清水宗治の甥行宗と、宗治の嫡男景治が、高松籠城戦で父親（難波田兵衛）を失った難波田右衛門尉を慰問した書状。宗治と田兵衛が自害する前に書き残した遺言状（御暇請之紙面）があったけれど、盗難に遭ってなくなってしまったという。そこで、宗治と田兵衛が言い残したことを口頭で伝えたいので、守安氏のところまで出向いてきてほしい、と田右衛門尉に伝えている。	高松　（393備中高松城跡）	清右行宗（清水右衛門尉行宗）・清源景治（清水源三郎景治）	（天正十年）六月八日	1582年	15・59
342	三村親宣感状／島瀬家文書（岡山県立博物館所在）	今度、於羽柴陣致夜打・太刀打之段、無比類候	備中国に進出した羽柴秀吉の陣に夜討ちをしかけ、太刀打ちの手柄を立てた山下牛助の活躍を、三村親宣が褒め称えたもの。	羽柴陣　（場所未詳）	（三村）親宣	天正十年六月九日	1582年	53
343	三村親宣感状／島瀬家文書（岡山県立博物館所在）	今度者、羽柴至当国罷下高松城取詰、及難堪刻、彼城へ差籠候之処、不顧余命日夜及防戦、剰遁虎口之難之段、無比類候、急度恩賞可相計候	羽柴秀吉が備中国へ進出し、高松城を包囲した際、山下牛助は高松籠城に参加し、命を惜しまず日夜防戦に努め、毛利氏の危急を救った。こうした牛助の働きを三村親宣が褒め、恩賞を与えることを約束したもの。	高松城　（393備中高松城跡）	（三村）親宣	天正十年六月九日	1582年	53
344	毛利輝元判物写／『閥閲録』巻四十　上山庄左衛門	備中国外郡鴨城在番之処、去月二日生石中務少輔搆逆意、既至二重丸、京勢羽柴筑前守引入、覃難儀之刻、以手柄焼崩之、敵数輩被討果之、御粉骨之次第、窪以感悦無拠謝者也	輝元が加茂城在番の上山元忠（兵庫助）に与えたもの。元忠が在番していた備中国外郡（備中国の南半国）の加茂城において、五月二日に生石中務少輔が逆心を起こし、「二重丸」へ羽柴秀吉の率いる上方勢を導き入れた。このため城の守備が難航していたところ、元忠の手柄によって内通者のいる曲輪を焼き崩し、敵軍をいくらか討ち果たすことができた。こうした元忠の活躍について輝元が、感動のあまりどのように感謝してよいのかわからないと賞賛の言葉を贈っている。	鴨城　（427加茂城跡）	（毛利）輝元	天正十年六月十日	1582年	107
345	小早川隆景書状／新出岡家文書	亀石明退之趣預注進、得其意候、かちや山之儀茂、無正儀之由候哉、何も被聞合、珍儀候者、可承候	岡元良（岡惣左）から亀石城衆が城を開けて退散したとの注進を受けた隆景が、鍛冶屋山城も混乱していると聞いたが本当か、いろいろ聞き合わせをして珍しいことがあれば報告するように、と回答している。	亀石　（331亀石山城跡） かちや山　（354鍛冶山城跡）	（小早川）隆景	（天正十年ヵ）六月十一日	1582年	27・132
346	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻　百　五清水右衛門	今度信長為先手、羽柴筑前守卒数万相動之処、高松城及数日籠城仕、雖相戦候、和平付対毛利家并城中之数千人、為可相助、父月清事、長左衛門尉同前於彼城切腹仕候、於城中茂其方事、無比類覚悟之通、淵底聞届候	信長の先手として、羽柴秀吉が侵攻してきた際、清水一族は高松城に籠城して戦った。しかしその後和平となり、毛利家と城中の数千人を助けるため、清水月清入道は宗治と一緒に切腹した。月清入道の子右衛門尉行宗もまた、城中において比類ない心がけを尽した。こうした親子の忠節について毛利輝元に報告する旨、隆景が清水行宗に伝えたもの。	高松城　（393備中高松城跡）	（小早川）隆景	天正十年六月十二日	1582年	13・108
347	小早川隆景書状写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六紺屋町海津屋十郎右衛門所蔵文書	今度至高松、羽柴被懸候処、数日籠城、殊其方父田兵衛尉事、長左衛門尉同前相果候段、誠無比類届、不及言語候	難波田兵衛尉の子息清水田右衛門尉に対し、隆景が送った慰問状。羽柴秀吉が高松城に攻めかかった時、難波田兵衛尉は数日籠城した末、清水宗治（長左衛門尉）と一緒に自害した。その忠節ぶりを称賛したもの。	高松　（393備中高松城跡）	（小早川）隆景	天正十年六月十三日	1582年	15・59
348	小早川隆景ヵ感状写／光市文化センター蔵文書（難波家文書）	今度至高松羽柴取詰候之処、父長左衛門尉事、以無二之覚悟、数日堅固被相拘、殊一身之切腹惣中被相扶候、窪無比類段都鄙被播名誉迄候、中々絶言語候	清水宗治の子次郎四郎に与えられた感状。高松城が羽柴秀吉に包囲された際、次郎四郎の父清水宗治は、無二の覚悟をもって城を数日間堅固に保ち、自身の切腹によって惣中の命を救った。こうした宗治の働きは比類なく全国に名誉を知らしめるものであり、言葉に尽くしがたい、と絶賛している。	高松　（393備中高松城跡）	差出欠（小早川隆景ヵ）	天正十年六月十三日	1582年	131
349	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻　四　十末近九左衛門	今度至高松、羽柴取詰之処、父左衛門尉事、以無二之覚悟、清水長左衛門尉同前ニ切腹、惣中相扶候、窪無比類段、都鄙不可有其隠候、名誉迄候	末近信賀（左衛門尉）は高松城を羽柴秀吉が包囲した際、無二の心がけで籠城し、清水宗治と一緒に切腹してたくさんの人を助けた。これを受け、隆景が信賀の子末近光久（四郎次郎）に対し、亡父の忠節ぶりに賛辞を贈ったもの。	高松　（393備中高松城跡）	（小早川）隆景	天正十年六月十八日	1582年	13・107

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
350	毛利輝元感状写／『閥閲録』巻廿五　清水宮内	今度羽柴筑前守押下、備中高松城取詰候処、父長左衛門事無二之以覚悟、数日雖相抱候、不叶令自害、城中之者共助置候段、都鄙之名誉、敵味方共以驚耳目候、古今之武勇、当家之面目、忠功無比類段、連々以不可有忘却候	羽柴秀吉が備中高松城を包囲した際、清水宗治（長左衛門尉）は無二の心がけをもって数日間城を維持したが、叶わず切腹し、城中の人たちの命を助けた。このことにつき、毛利輝元が宗治の遺児清水景治（源三郎）に一書をしたため、父宗治の忠節に最大限の賛辞を贈ったもの。※『山口県史』史料編中世２は要検討文書とする。	備中高松城（393備中高松城跡）	（毛利）輝元	天正十年六月二十六日	1582年	13・131
351	湯浅将宗申状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之二湯浅権兵衛に写しあり）	一今度岩山退城之事、不及是非候、其砌従元将折紙被越候、即長井方江見せ申、我等無別心之段明白候、就其岩崎御陳江元将敵心之段遂注進候、彼飛脚帰参迄者被相待可然之通申候つる、然処長井被申様ニ者、上原如此之時者同意之衆数多可有之候条、御陳茂頓可被打入候、地下一揆起候て者、路次難成之条、急罷退可然之由重畳被申事候、（中略）一従元将被越候書状之儀、我等別心之覚悟候者、なにしニ出可申候哉、無余儀故ニ相番衆随異見罷退候	羽柴秀吉との合戦の際、備中国岩山城を放棄して退却した湯浅将宗が、毛利氏からの疑念に対する弁解のため岡景忠（岡与）・林就長（林木）に提出したもの。岩山城を守備していた将宗のもとに、秀吉に内通した上原元将から密書が届いた。将宗はこれを相番の長井就安に見せ、毛利軍本隊のいる岩崎の陣所に飛脚を派遣して元将が敵方へ寝返ったことを報告した。将宗は飛脚が戻ってくるまで待機すべしと主張したが、相番の長井氏は「上原元将が寝返るような状況なら、これに同意して敵に通じる者が多数いるに違いない。毛利軍も早々に退却してしまうのではないか。毛利軍の敗北に乗じて民衆が一揆を起こしでもしたら、退路を断たれてしまうので、ここは急いで退却するのがよい」と主張した。そこで将宗も仕方なく長井氏の意見に従って岩山城から退去したのである。もし自分に反逆の心があれば、元将からの密書を毛利氏に提出したりはしない、自分に反意がないのは明白だ、と述べている。	岩山　（番号なし岩山城跡） 岩崎御陳　（423庚申山城跡）	（湯浅治部太輔将宗）	（天正十年六月二十日）※本申状に添えられた湯浅将宗書状より判別可能	1582年	108・132
352	小早川隆景書状／正宗文庫所蔵文書	為相談、輝元陣所迄下向之条、彼是爰元之趣、元清并坪泉申置候間、切々被相談、何篇被付合可承事可為祝着候	隆景が中島大炊助・清水右衛門尉行宗に与えた書状。隆景自身は相談のため毛利輝元の陣所まで下向するが、備中国の事柄については穂田元清・坪生和泉守に申し含めてあるので、よく相談して何事も双方でよく照合するよう中島・清水両人に指示している。	輝元陣所　（227猿掛城跡ヵ）	（小早川）隆景	（天正十年）七月二日	1582年	9・59
353	毛利輝元書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	今度羽柴筑前守押下候節者、其方於高松籠城清水同意ニ気遣、数度之戦功、無二之忠節、無比類覚悟候（中略）、長左衛門不居候間、国境之様子、隆景方へ可被申越候	羽柴秀吉が攻め下った際、高松に籠城して清水宗治同様に尽力した中島大炊助の功労を毛利輝元が褒め、宗治がいなくなったので今後は大炊助が国境の様子を隆景に知らせるよう命じたもの。	高松　（393備中高松城跡）	（毛利）輝元	（天正十年）七月四日	1582年	15・59
354	小早川隆景書状／正宗文庫所蔵文書	就今度上勢罷下ニ、高松城へ清水同前ニ被為籠、其上自分構ニ兄弟九右衛門被残置、堅固ニ被相抱、無二之覚悟無比類候	織田軍が攻め下った際、中島大炊助は清水宗治同様に高松城に立て籠もり、自分の居館（構）は兄弟の九右衛門に堅固に守らせた。これらの功労を隆景が賞揚したもの。	高松城　（393備中高松城跡） 自分構　（344小寺砦跡・346中島氏館跡）	小早川隆景	（天正十年）八月十三日	1582年	9・59
355	毛利輝元書状／臼井家文書（『閥閲録』巻八十九　臼井勘左衛門に写しあり）	其方事、飯山・忍以来在番候而、桂左太同前ニ辛労祝着候、殊城山於山下敵壱人討捕之段神妙候	輝元が神保雅楽允に与えた書状。雅楽允は飯山城・忍山城と引き続いて在番を務め、両城の守将である桂就宣（桂左太）同前に城の守備に尽力していた。輝元はこうした雅楽允の働きを褒め、特に「城山」の麓で敵一人を討ち取ったことを称えている。	飯山　（140飯ノ山城跡） 忍　（327忍山城跡） 城山　（場所未詳）	（毛利）輝元	（天正十年ヵ）八月二十八日	1582年ヵ	107・131

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
356	羽柴秀吉書状／東北大学附属図書館蔵秋田家史料	東国御出馬之刻より我等事者西国表へ相動、於備中国冠山之城取巻、則乗崩不残一人討果候、并河屋之城江取懸、是又丈夫ニ取巻、水之手取塀際迄責詰、即時落居候、以其競亀石之城退散仕候、然者高松与申城江押寄候之処、三方沼にて候之間、四方堤つき立、近所之河を切懸、水責ニ申付候処、城中難儀仕候ニ付而、為後巻毛利右馬頭・吉川・小早川五六万にて罷出、此方陣取与纔五町六町之間山取仕候、誠為天之与事候条、及一戦可討果与存候処、去六月二日、於京都信長御不慮之仕合注進候間、同五日迄対陣仕、右之湖へあたけ船を入、四方より押寄、同事ニ責崩、始城主悉刎首候	秀吉が出羽国の安東愛季に西国の状況を報じた書状。秀吉は信長が東国へ出馬したころ西国へ出陣し、備中国の冠山城を包囲してすぐにこれを攻略し、城兵を一人も残らず討ち果たした。また、河屋城へ攻めかかって厳重に包囲を堅め、水の手を奪い塀際まで攻め込んで即時に落城させた。その影響をうけ、亀石城の籠城衆は戦わずに退散した。これらの戦いを経て高松という城に押し寄せたところ、同城は三方が沼地になっていたので、城の四方に堤防を築き上げ、近所の川を切り塞ぎ、水攻めにした。水攻めにあった高松城中は困難な状況に陥ったので、城を後援するため毛利輝元（右馬頭）・吉川・小早川氏らの率いる５、６万の軍勢が出動し、秀吉の陣地とわずか５、６町しか離れていない山に布陣した。毛利軍の出動をみた秀吉は、まさに天の与えたチャンスだと考え、一戦で毛利氏を討ち果たそうと思っていたところ、六月二日京都で信長が不慮の最期を遂げたとの報告が到来した。そのため秀吉は、六月五日まで対陣を続け、高松城を浸す湖へ安宅船を浮かべ、四方から押し寄せて城を攻め崩し、城主をはじめ城中にいた人々をことごとく斬首した、という。※内容はかなり誇張されており注意が必要。	冠山之城　（373冠山城跡） 河屋之城　（353宮路山城跡） 亀石之城　（331亀石山城跡） 高松与申城（393備中高松城跡）	羽柴筑前守秀吉	（天正十年）九月二十日	1582年	98
357	羽柴秀吉書状写／国立公文書館蔵松花堂式部卿昭乗留書	備中国へ罷立、革屋之城・すくもの城責崩、悉首ヲ刎、重而高松与申城者名城ニ而、三方ニふけを構へ、城広長立不申付而、力責ニ不罷成、水責ニ可致与筑前見及候而、堤をつかせ、水はや土居半分ニ上り、城迷惑仕ニ付而、西国毛利一類五万計ニて、後巻ニ罷立、筑前弐参万ニ而取巻候処、五六町之内敵罷越、相陣ヲ構、後巻可仕由ニ相定事、一毛利陣所へ切掛、可切崩ニ相定候処ニ、上様京都ニ御座候ヲ、明知逆心を構、致夜討同前ニ、六月二日、御腹被為召候之由、同六〔四ヵ〕日ニ注進御座候、（中略）於此陣毛利ヲ切崩候ハヽ、明知退治之儀、安御座候与存知、同六日迄逗留仕、堅取巻責申候処ニ、城悉迷惑仕候付而、城主可腹切与種々懇望仕候へ共覚〔免ヵ〕不申、城主之事者不申及、悉首刎候事、	秀吉が織田信雄の家臣川田（幸田）彦右衛門・岡本良勝（太郎左衛門）に対し、備中攻めから明智光秀追討に至る経緯について書き送った書状。備中国へ出陣した秀吉は、革屋城・すくも城を攻め崩し、城兵の首をことごとく刎ね、さらに高松城を攻撃した。高松城は名城で、三方に深田をめぐらせ、規模も広く、湿地に足をとられて立てない立地にあるため、力攻めにすることができない。そこで秀吉は、水攻めにしてみようと考え堤防を築いた。堤防に堰き止められた水は高松城の土塁の半分の高さまで満ち、城内の人々は苦しい思いをしていた。そこで、西国の毛利一族が５万人の軍勢を率いて高松城を救援（後巻）するため出陣し、秀吉が２～３万人の軍勢で城を包囲しているところから５、６町の距離まで進出し、秀吉軍に相対するための陣を構えて城を救援する方針を固めた。これをみた秀吉は、毛利の陣所へ攻めかかり切り崩そうと考えていた。ところが、主君織田信長が京都に滞在中、明智光秀が逆心を起こし、夜討ち同前のやり方で信長を襲ったため、信長は６月２日に切腹した。信長切腹の報告は、６日（４日の誤り？）に秀吉のもとに届いた。秀吉はこの戦いで毛利軍を切り崩せば、明智光秀を退治するのが楽になると考え、６日まで備中に逗留し、高松城を堅く包囲して攻撃した。すると、城内の人々は困って城主が切腹するので降伏させてほしいと願い出てきた。秀吉はこの願いを許さず、城主をはじめ城兵の首をことごとく刎ねた、という。※内容はかなり誇張されており、事実とは言えない。	革屋之城　（353宮路山城跡） すくもの城（373冠山城跡・381すくも城跡） 高松与申城（393備中高松城跡）	筑前（羽柴秀吉）	（天正十年）十月十四日	1582年	98

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
358	羽柴秀吉披露状写／浅野家文書	其剋備中国へ罷立、かわや城、すくも城責崩、悉刎首候て、重而高松と申城ハ名城にて、三方ふけを抱、其上堀ひろく、たけたち不申付而、力責成不申、可致水責と筑前見及、右高松取巻、堤をつかせ、水はや土居半分ニあかり、城迷惑仕候ニ付て、西国悉催毛利一類後巻ニ罷出、五万計にて、筑前二三万にて取巻候処へ、五六町ニ罷成相陣をかまへ、後巻可仕と敵相定申候事、一右之陣取を筑前不用、後巻而已堅取巻申候へは、城主腹をきり可申と懇望申候へ共、免不申候処、六月二日ニ於京都、上様御腹めされ候由、同四日ニ注進御座候、筑前驚入候といへとも、御腹之御供をこそ不仕候共、於此陣者任本意、城之事ハ不及申、毛利を切崩刎首申候は、明智退陣之儀は安御座候と存切、六日迄致逗留、終城主事者不及申、悉刎首候事	秀吉が織田信雄の家臣（岡本次郎右衛門尉・斎藤玄蕃助）に備中攻めを含むこれまでの戦局を報じたもの。備中国へ出陣した秀吉は、かわや城・すくも城を攻め落として籠城衆の首を刎ねた。高松城は名城で、三方に深田を抱え堀も広くて足が立たないので力攻めが出来ず、水攻めにしようと見当をつけた。そこで高松を取り巻いて堤防を築くと、水かさが土塁の半分くらいの高さまで上がって城側は難儀した。これをみた毛利一族は五万の軍勢で救援に駆け付け、秀吉が三万の兵で包囲している場所から五、六町離れた場所に陣を構えた。秀吉は毛利の陣を相手にせず、城攻めに専念したので、城主が切腹したいと申し出てきて、これも拒絶した。ところが、京都で信長（上様）が自害したとの報告が六月四日にもたらされた。秀吉は驚いたが、この合戦を成功させてはじめて明智光秀退治に安心して取り組めると思い切り、六日まで備中に逗留して城主らの首をことごとく刎ねた、という。	かわや城　（353宮路山城跡） すくも城　（373冠山城跡・381すくも城跡） 高松と申城（393備中高松城跡）	羽柴秀吉	（天正十年）十月十八日	1582年	13・66
359	吉川元春書状写/『閥閲録』巻九十二　天野九郎左衛門	近年之儀松山就御在番、切々不承之通御理令承知候、（中略）先年御約束之地、此節御申有度之由無御余儀候、於我等無余儀候	元春が天野元勝（少輔四郎）に与えた書状。近年松山城への在番のため無沙汰しているという元勝が、以前毛利氏が元勝に約束していた恩賞地の給与について、交渉したいと申し出てきた。これに対し元春が、言い分はもっともであり、自分も約束の件を疎かに思っていない、と元勝に伝えたもの。	松山　（158備中松山城跡）	（吉川）駿河守元春	（天正十年ヵ）十一月十二日	1582年ヵ	108
360	庭妹郷御社領書出／吉備津神社文書	高安抱分　御城ノ南　田廿代分弐斗四升　（中略）末吉抱分　（中略）御城ノうしとら同廿五ゝ分三百文	備中国庭瀬郷内にあった吉備津神社の所領を、一筆ごとに書きつけたもの。字の表記に「御城ノうしとら」「御城ノ北」「御城ノ南」「御城ノ東」がみえ、郷内に尊称をもって呼ばれる城館があったことがわかる。	御城　（402庭瀬城跡ヵ）	坪和太郎右衛門尉良親・佐々井又四郎秀治	天正十年十二月二十六日	1582年	8
361	穂田元清書状写／山口県文書館蔵長府桂家文書	先日内又十進退之儀付而、具預御状候つる、（中略）こま＼／於猿懸可申談候＼／	桂広繁から内藤又十郎（内又十。兵部丞の若名）の進退について書状で相談された元清が、細かいことは猿掛城で相談しましょう、と返事したもの。	猿懸　（227猿掛城跡）	四元清（穂田四郎元清）	（〜天正六年）二月二日	〜1578年	132
362	小早川隆景書状写／『閥閲録』巻十一之一　浦図書	明日南　太事成羽可差上候条、弥申談度候	隆景が乃美宗勝（兵部丞）に与えた書状。明日「南　太」（南方太郎左衛門か）を成羽へ派遣する予定なので、そのことについて相談したい、と述べている。	成羽　（126鶴首城跡）	（小早川）隆景	年未詳正月十五日		106
363	毛利輝元自筆書状／下関市立長府博物館蔵長府毛利家文書	今度ハ尤其元参候而、三丸上様御礼可申候へとも、明日御上国付而令用捨候、自由之所御心得頼申候、なを至猿懸可申候＼／	輝元が穂田元清に与えた書状。今度はそちらへ参上して「三丸上様」にお礼を申し上げなければならないところだが、明日上国されるとのことだったので遠慮しました、なお猿掛城まで到着したらまた申します、との意か。	猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）輝元	年未詳正月二十八日		49・133
364	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十二　口羽衞士	備中表之儀此節肝要候、就其国吉抱様之儀、段々理令承知候、弥堅固可被相抱事不及申候、然間弓矢一姿之内、可閣他国役候	備中方面への配意を大事に思う輝元が、国吉城の維持状況に関する口羽春良（中務大輔）からの申し出を受け、春良に対し返答した書状。国吉城を堅固に維持する必要があるのは当然のことなので、現在の合戦が終結するまでの間、口羽氏が本来負担すべき他の国役を免除する、と述べている。	国吉　（135国吉城跡）	（毛利）輝元	年未詳二月九日		106
365	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻三十二　口羽衞士	備中被抱様之儀、委細面むき申分候、何ヶ度申候而も国吉之儀、無比類御支度、御心持不及申候、境目澄はの上、重畳又可申承候	上記の史料に関連して、輝元が口羽春良（中太）に与えたもの。備中国の維持状況については委細理解した、国吉城維持にかける春良の準備ぶりは比類ないものであり、境目の抗争が片付いたら色々とお話を承りたい、と伝えている。	国吉　（135国吉城跡）	（毛利）右馬輝元	年未詳二月九日		106
366	毛利輝元書状写／山口県文書館蔵長府桂家文書	近ころ辛労之儀候へ共、其方至備中猿懸暫時為検使可差遣之候、然来十五日可罷立候、只今者江田兵部少輔置候、其易に遣事候	輝元が、某（宛名欠）に対し、苦労をかけるが江田元勝（兵部少輔）と交代して備中猿掛城に赴き、しばらくの間検使を勤めるよう命じたもの。来る二月十五日に出立するように、とある。	備中猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）輝元	年未詳二月十日		132
367	小早川隆景書状写／『譜録』渡辺三郎左衛門直	猿懸普請之趣、少談合申度儀在之由、元清被申候、猿懸とをり御帰候而、乍御辛労、そと御登城、於我等可為祝着候	隆景が渡辺房（出雲守）に送った書状。猿掛城の普請工事について少し相談したいことがあると穂田元清が申しているので、帰途に猿掛城へ登城してくれるとありがたい、と伝えたもの。	猿懸　（227猿掛城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	年未詳三月四日		35

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
368	小早川隆景書状／新出湯浅家文書（萩市郷土博物館蔵湯浅家文書）	爰元為相談罷出付而、御使者殊樽弐荷并一折被懸御意候、（中略）相談漸明隙候之条、一両日中ニ笠岡罷上候	隆景が湯浅将宗（治部大夫）に送った書状。隆景が相談のため某地に赴いた際、将宗は隆景に使者と贈答品を送った。このことを隆景が謝し、相談がようやく片付いたので、一両日中にも笠岡城へ移動することを伝えている。	笠岡　（254笠岡城跡）	（小早川）隆景	年未詳四月三日		28・132
369	毛利輝元書状写／『閥閲録遺漏』巻弐之二　美禰郡小野村百姓幸右衛門所持文書	従景治被差越使者条々蒙仰候、承知〔○異本：候〕、杠表領等之儀付而委細令申候、仍為音信銀子一枚進之候	輝元が原太郎左衛門尉に与えた書状。多治部景治が毛利家に使者を送り何事かの申立を行った。これを受けた輝元は楪城領などに関する事項を多治部氏に伝え、音信として銀子を贈った。これらの経緯を原氏に伝えたもの。	杠　（8楪城跡）	（毛利）輝元	年未詳四月（二十）二日		110
370	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻九十七　中村与三右衛門	其方事今度備中、○○○城為検使差遣候付而、於彼表自然立用候者、一跡事対妹可申付之由得其心候、少茂不可令忘却候	輝元が中村助五郎に与えた書状。助五郎は毛利氏の命で備中の某城へ検使として派遣されることになった。出立にあたって助五郎は、もし備中での戦いで自分が毛利氏の用に立って戦死するようなことがあれば、遺領を妹に継がせてほしい、と輝元に要望した。本書状において輝元は、この申し出を了承し、絶対忘れないと助五郎に伝えている。	○○○城　（場所未詳）	（毛利）輝元	年未詳五月六日		108
371	穂田元清書状／正宗文庫所蔵文書	弥境目之趣被聞合、無御緩可承候、其城之儀近日一人差出可申談候	元清が中島大炊助に対し、境目の状況をよく聞き合わせて報告するよう命じ、大炊助のいる城につき近日人を派遣して相談したいと伝えている。	其城　（場所未詳）	（穂田）治部太輔元清	年未詳五月十一日		9・59
372	小早川隆景書状写／『譜録』礒兼求馬景秋	某元聢と尚逗留普請以下無緩被申付候由、（中略）隔子竹等追々至蔵敷差上候条、各被相談何と様にも成就候様、短束肝要候	隆景が桂景信（右衛門大夫）・礒兼景道（左近大夫）に与えた書状。両人が某所に逗留して普請に従事していることを謝し、隔子・竹など普請に必要な資材を追々倉敷に輸送するので、両人で相談して普請が成就するよう努力してほしい、と伝えている。	蔵敷　（422小野城跡ヵ）	（小早川）隆景	年未詳五月十三日		124
373	穂田元清書状／正宗文庫所蔵文書	其元普請可見合之由、重畳承候条、此者指出候、趣可被仰談候（中略）境目之趣弥無油断被立聞、節々可預御注進候	ある城の普請につき中島大炊助から要請を受けた穂田元清が、中島氏のもとに人を派遣して相談させている。境目の状況についても油断なく注進するよう命じる。	（対象城館未詳）	治太元清（穂田治部太輔元清）	年未詳五月十四日		9・59
374	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻九十二　天野九郎左衛門	元明幸山表被罷出候、松山之儀定而番衆可被申付候へ共、猶々用心専一候、其方事従今夜登城候て万可付心候	輝元が天野元勝（少輔四郎）に与えた書状。備中松山城番の天野元明が幸山城まで出陣してきた。元明は松山城に番衆を配置した上で出発しているとは思うが、用心に越したことはないので、今夜から松山城に登城して守備に当たるように、と天野元勝に命じている。	幸山　（414幸山城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（毛利）輝元	年未詳五月二十日		108・134
375	宇喜多忠家書状写／備前一宮社家大守家文書	今度備中撫川表出陣、為見廻御越候処ニ、折節及合戦付而、御手柄之程驚目候	宇喜多忠家が備中撫川に出陣した際、吉備津彦神社の社家大森氏が陣中見舞いにやってきた。ちょうどその時合戦がはじまって、その場で大森氏が手柄を立てたことを褒めたもの。	備中撫川　（番号なし　芝場城跡ヵ）	（宇喜多）七郎兵衛尉忠家	年未詳五月二十一日		10・36
376	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百三　尾越正右衛門	国吉在城之事、以連々申談之、二ノ丸預可申候、并城普請之儀者、如前々自三ケ村可相懃之候	毛利輝元が備後国衆有福元貞（民部大輔）に国吉城への在城を命じ、二の丸を預けたもの。また、以前のように三ヶ村を動員して城普請に当たるよう指示している。	国吉　（135国吉城跡）	（毛利）右馬頭輝元	年未詳四月二十六日		13・108
377	吉川元春書状写／岩国藩古文書纂	従新見被申越儀付而対[（虫喰）]折紙披見申候、此間承候つる新見平内・同玄蕃允羽柴へ為一礼、新見諸村へ懸銭為催促横見・小谷罷越、忍居候迄被聞立、横見事被討果候由候、近頃可然候、小谷事も深手負候て庄山領へ被退候哉	新見平内・玄蕃允が羽柴秀吉に通じ、その配下の横見・小谷氏が新見諸村から銭を取り立てる目的で忍び込んできた。新見在番の今田春倍（兵部丞）は彼らの所在を聞き出し、横見氏を討ち果たし小谷氏にも深手を負わせて伯耆国庄山領へ退散させた。本書状は、これらの報告を新見の春倍から受けた元春が、春倍に返答したもの。	新見　（8楪城跡）	（吉川）元春	二月四日		103
378	吉川元春書状写／岩国藩古文書纂	就池上・有地申分之儀、国右笠岡へ被越候、隆景談合候哉、替地ニ可相調趣と聞取候	元春が森脇春方（飛騨守）に送った書状。このころ、池上・有地氏の間で所領に関する確執があった。その解決について相談するため国司元武（国右）が笠岡城へ赴いて小早川隆景と相談し、替地で対応することになったという。	笠岡　（254笠岡城跡）	（吉川）元春	三月三日		103
379	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻十九　児玉四郎兵衛	鬼身衆と長井被申結之儀付而、両人事差上候、理非可相澄間之儀者、其方共事彼論地ニ罷居候て、此方之一左右可相待候	輝元が児玉元村（四郎兵衛尉）・児玉元言（四郎右衛門尉）に与えた書状。鬼身城の在番衆と長井氏との間で発生した紛争を解決するため、両人を備中国に派遣したことを伝え、紛争の理非が決着するまでの間、元村・元言は問題になっている土地に駐留して、輝元からの指示を待つよう伝えている。	鬼身　（270鬼身城跡）	（毛利）輝元	七月三日		106

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
380	小早川隆景書状写/『閥閲録』巻百十二井上孫兵衛	成羽へ雖去用段之儀候条、卒度雇申度候、当時某元雖無人候、差立用之儀候条有支度、明日爰元可有来儀候	隆景が井上就正（井孫兵）に与えた書状。成羽に放置できない用事が出来たため、そちらに人手がないのは承知の上で、支度をととのえて明日隆景のもとに来るよう指示している。	成羽　(126鶴首城跡)	(小早川) 隆景	七月十六日		108
381	穂田元清書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	鬼身城・長井申鎮儀候哉、然者鬼身衆重々仕懸之条、可相破内存之処、従吉田・沼田被加下知、長井理運ニ可被申付由候条、勘忍候、此節於吉田被相澄之由候条、急度可為落着候	元清が中島大炊助に与えた書状。鬼身城の在番衆と毛利家臣長井氏との間で何らかの紛争が生じたが、毛利輝元（吉田）・小早川隆景（沼田）が裁定し、長井氏側に有利なかたちで決着がついたことを伝えている。	鬼身城　(270鬼身城跡)	(穂田) 治部大輔元清	七月二十六日		15・59
382	小早川隆景書状写／『譜録』井上孫兵衛勝政	庭妹之儀無人と申無心元候条、於于今者用段も被相調候間、早々上国専一候	隆景が家臣の井上就正（孫兵衛尉）に与えた書状。庭瀬城が無人で心配な状態なので、今はもう用事も済んだのだから、早々に備中国へ上って庭瀬城の守備に戻るよう就正に命じている。	庭妹　(402庭瀬城跡)	(小早川) 隆景	七月二十九日		124
383	毛利輝元書状／山口県文書館蔵熊谷家文書（『閥閲録』巻百廿七　熊谷彦右衛門に写しあり）	其方之儀、先度如申、至猿懸為井上民部少輔替、来廿日可罷上候	輝元が熊谷就真（小四郎）に対し、井上民部少輔に代わって猿掛城に駐在するよう命じ、九月二十日に猿掛へ出立するよう伝えたもの。	猿懸　(227猿掛城跡)	(毛利) 輝元	年未詳九月十四日		108・132
384	小早川隆景書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五　中島三季之助所蔵文書	其方角之儀、無油断令短息、別而馳走之由、元清并高山之者共申越、令祝着候、弥何篇無緩御心掛干要候	隆景が中島大炊助に与えた書状。大炊助が備中方面で油断なく尽力しているとの報告を、穂田元清や高山城の在番衆から伝え聞いた隆景が、大炊助の態度を喜び、一層心を引き締めて諸事に当たるよう督励している。	高山　(414幸山城跡)	(小早川) 左衛門佐隆景	九月二十七日		15・59
385	小早川隆景書状／楢崎文書	備中外郡下々之儀、当時〔○挿字：少々〕雑説等申乱之由に注進候、所務時分之故候歟、(中略) 鳥羽并幸山検使之者共所へも、此由申遣候間、切々可被仰合候	備中国外郡（備中国を南北に分けた南半分）の民衆の間に、現在少々悪い噂が飛び交っているとの報告が、小早川隆景のもとにもたらされた。これを受けて隆景は、某（宛名欠損）に対し、鳥羽城や幸山城にいる検使にも指示を与えたので、彼らとよく相談するよう命じている。	鳥羽　(436松島城跡ヵ・番号なし射越山城跡ヵ・438鳥羽城山城跡ヵ) 幸山　(414幸山城跡)	(小早川) 隆景	(年月未詳) 十六日		53・118
386	小早川隆景書状／乃美文書	明日山見仕候て尺之木をもつきそめ候て、明後日陣所＼／へ手間不入打上候様、山配明日仕幸山之ふもとまて打下候て、支度可申付との議定候	隆景が乃美宗勝（乃兵）に送った書状。明日「山見」を行って陣所の柵木構築を開始し明後日には各自が陣所へ手間なく上ることが出来るようにしたいので、「山配」を明日行い幸山城の麓へ降りて支度を命じることに決まった、と伝えている。	幸山　(414幸山城跡)	(小早川) 隆景	(年未詳) 十月十九日		51
387	小早川隆景書状写／『譜録』渡辺三郎左衛門直所持文書	従猿懸可有御下向之由、先度之御返事ニ茂、又元清所へも申上せ候間、定而可為飯宅候、然者乍御辛労、急度御下向候者、備中辺之儀、万相談申度候、	隆景が渡辺房（出雲守）に与えた書状。猿掛城に駐在していた房が自身の領地に下向するとの意向を先便および穂田元清経由で聞いた隆景が、もう帰宅しているようであれば、備中方面の状況についてあれこれ相談したい、と伝えている。	猿懸　(227猿掛城跡)	(小早川) 左衛隆景	十一月八日 ※伊予国高尾城の件が落着したとあり、天正十三年の可能性を含む		35
388	穂田元清書状／中丸家文書	其方留守不思議之事不及□〔是〕非、定て朦気推量候、自猿懸可申遣と存候処、今迄延引無沙汰無申計候	元清が中丸雅楽允に送った書状。雅楽允が留守の間に不審な出来事があったらしい。安芸国へ戻った元清は雅楽允の不安を気遣い、猿掛城から見舞い状を送るつもりだったが、今日まで延び延びになり無沙汰してしまったとわびている。	猿懸　(227猿掛城跡)	(穂田) 元清	年未詳十二月九日		50・133
389	穂田元清書状／下関市立長府博物館蔵細川家文書	一長井一郎四郎事弥自鬼身被仕籠候、はや当毛をも少々被申付躰候、(中略) 一浅口にて喧嘩候事、自満越ハ何共更ニ難被仰入候条、其元江も不被得御意候、我等よく＼／相心得候て申上候て進之候へとの、又御使被下候て被仰候、(中略) 鬼身長一四申結子細、終ニ吉田へハ不申上候、然者相破候上にての御届に罷成候条、ちと以児三右申上候て可然候、(中略) かほとの事元孝・我等間にて不相澄候て、上へ申上候事いかゝニ存、色々申理候へ共、無分別候 (後略)	元清が田坂惣右衛門尉（田惣右）に送った長文の書状。備中国鬼身城の宍戸元孝と長井一郎四郎との間で領地をめぐる紛争があり、宍戸氏が長井氏を圧迫して長井領の今年の年貢（当毛）を収納してしまったことに触れている。当初、このようなことは元孝と元清との間で相談して済ませるつもりで吉田郡山城の毛利氏には申告しなかったため、結果的に事件に発展した後の届け出になってしまった、と述べている。また、同時期に浅口郡の細川領でも喧嘩があり、「満越」＝道越要害山城の細川通董から使者が到来し、当事者の細川氏から毛利氏へは直接申告しにくいので、元清から事情を申告してほしいと依頼があった、という。	鬼身　(270鬼身城跡) 満越　(307要害山城跡)	(穂田) 元清	(天正十一年ヵ) 六月十四日	1583年ヵ	133

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
390	毛利輝元書状／門司文書（『閥閲録』巻百九　門司弥次右衛門に写しあり）	其方事、去年以来、備中福山遂在番、辛労之至候	去年からずっと備中国福山城の在番を勤めていた門司親宗（藤兵衛）の苦労を、毛利輝元がねぎらった書状。	福山　（415福山城跡）	（毛利）輝元	（天正十一年）六月二十六日	1583年	53・108・128
391	羽柴秀吉書状写／福島於菟吉氏所蔵文書	我等西国江相働、於備中国城々攻崩、并高松与申城取巻候処、三方ニ沼抱、力攻ニ不成之段、筑前守見及、水責ニ可仕与存、堤を築、其国之川之事者不及申、備前国之川迄切懸、城内及難儀ニ付而、為後巻、毛利、小早川、吉川五万計ニ而罷出、六七町ニ令対陣、可後巻ニ雖相定候、不能承引付而、弥城中令迷惑候刻、同四日巳刻、於京都信長御腹召候由注進之間、右之高松六日攻崩、城主之事者不申及、悉刎首候	史料356・357・358と同趣旨、ほぼ同内容を短くまとめたもの。これは関東地方の有力武将太田資正（三楽斎）に宛てたもの。秀吉が高松城攻略にあたり、備中国の川だけでなく備前国の川まで切り塞いで水攻めに用いたという記述が追加されている。	高松与申城（393備中高松城跡）	羽柴筑前守秀吉	（天正十一年）七月二十九日	1583年	90
392	羽柴秀吉書状写／常総遺文	我等西国江相働、於備中国城々攻崩、并高松与申城被責候之処ニ、三方ニ沼を抱、力攻ニ不成候段、筑前守及見、水攻に可仕与存、堤をつき、其国川の事は不及申、備前国の川迄きりかけ、城内及難儀ニ付、後巻として毛利・小早川・吉川五万斗にて罷出、六七町に令対陣、可後巻相定といへとも、不能承引付而、いよ＼／城中令迷惑候刻、同四日巳刻に、於京都信長御腹召候由注進候之間、右之高松六日にせめ崩、城主事ハ不及申、悉刎首候	上記史料と同趣旨、ほぼ同内容。これは下総国の国衆多賀谷重経（修理亮）に送られたもの。上記史料と同じく、高松城水攻めの際、備前国の川も利用したことが記されている。	高松与申城（393備中高松城跡）	（羽柴）秀吉	（天正十一年）七月二十九日	1583年	98
393	八田部郷内清水与右衛門先給田畠坪付／『黄薇古簡集』巻第六・城府六　紺屋町海津屋十郎右衛門所蔵文書	城のにし 一所田二反分　八斗	備中国八田部郷において清水与右衛門が所領としていた土地を、一筆ごとに書き上げたもの。字に「城のにし」が見え、付近に何らかの城館があったことが窺える。	城　（場所未詳）	河内備後守（照資）・行友市允	天正十一年八月十二日	1583年	15・59
394	吉川元長起請文／吉川家文書	於備中飯山御陳、従小笠原次郎右衛門尉方、以市川雅楽允元春江被申	備中国の飯山城にて、小笠原長治（次郎右衛門尉）から市川氏を取り次ぎとして吉川元春に申し出てきた件について。	備中飯山御陣（140飯ノ山城跡）	（吉川）元長	天正十一年八月十三日	1583年	72
395	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻四　毛利伊豆（巻七十二桂又兵衛、山口県文書館蔵服部家文書にも同文の写しあり）	弥属元清、猿懸・桜尾之間被罷居、馳走肝要候	毛利輝元が桂少輔五郎に対し、穂田元清によく従って、猿懸城と安芸国桜尾城の両方に在番し、尽力するよう命じたもの。	猿懸　（227猿掛城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正十一年）八月二十八日	1583年	91・106・107・132
396	羽柴秀吉書状／佐竹文書	我等西国江相働、於備中国、城々責崩、并高松与申城取巻候処ニ、三方ニ沼を抱、力責ニ不成段、筑前見及、水責ニ可仕与存、堤を築、其国之河之事ハ不及申、備前国の川迄切懸、覃難儀付而、為後巻、毛利、小早川、吉川五万計ニ而罷出、六七町之間令対陣、可後巻雖相定候、不能承引付而、弥城中令迷惑候剋、同四日巳刻、於京都、信長被召御腹之由注進之間、右之高松六日ニ責崩、城主之事ハ不及申、悉刎首	史料391とほぼ同文。これは下総国の国衆結城晴朝に宛てたもの。	高松与申城（393備中高松城跡）	（羽柴）秀吉	（天正十一年）九月四日	1583年	90
397	小早川隆景書状／冷泉家文書	就其境傍爾之儀、蜂須賀有同道、安国寺・林山城守下向之由到来之条、手島東市助差上候、諸城諸郷之落着以有躰之儀、検使差出可相澄候間、聊無仰天被相静、堅固之御在番可為肝要候	隆景が備前・備中境目地域の城に在番する冷泉元満（民部少輔）に送った書状。毛利・宇喜多の領界確定のため、秀吉の重臣蜂須賀正勝を同道して安国寺恵瓊・林就長が戻ってくるとの通知を受け、隆景が家臣の手島景繁を境目地域に派遣している。諸城・諸郷の引き渡しが落着次第、検使を派遣してこの案件を済ませるつもりなので、静かに様子を見守りつつ、今いる城を堅固に在番するよう命じている。	（〈備前240〉常山城跡ヵ） 諸城　（414幸山城跡など）※次号文書参照	（小早川）左衛門佐隆景	（天正十一年）十月二十五日	1583年	36・131

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
398	羽柴秀吉書状／黒田家文書	境目城之儀、早々請取候かと存処ニ、于今無其儀旨、沙汰限次第候、併両人由断曲事候	秀吉が蜂須賀正勝（彦右衛門尉）・黒田孝高（官兵衛尉）に送った書状。備前・備中・美作境目の毛利方の城について、もう受け取りが済んだかと思っていたら、今になっても城の明け渡しが済んでいないとのことで、言語道断であり蜂須賀・黒田両人の怠慢は許されない、と叱責している。	境目城	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十一年）十一月二十四日	1583年	98
399	羽柴秀吉書状／黒田家文書	安国寺・林杢并毛利家老之者共、猿懸迄相越由得心候、先手寄之城四五ケ所相渡へき由尤候、早々可請取候、おも口成方候間、悉同時ニ相渡候様ニハ在之間敷候間、高山なとのやうなる肝要之城々より渡次第ニ可請取候	羽柴秀吉が、毛利氏との交渉を担当している黒田孝高・蜂須賀正勝に指示を与えたもの。毛利氏側の安国寺恵瓊・林就長・家老らが、秀吉側との交渉のため猿懸城まで来て、まず手近の城を四、五か所明け渡したいと言ってきたことを了承し、黒田・蜂須賀氏に早く城を受け取るよう命じている。全ての城を同時に処置するのではなく、高山城のような重要な城から順に受け取るよう指示している。	猿懸　（227猿掛城跡） 高山なとのやうなる肝要の城（414幸山城跡など）	（羽柴）秀吉	（天正十一年）十二月三日	1583年	42・91・134
400	小早川隆景書状／毛利家文書	境目傍尓之儀、猿懸上之衆種々雖被申理候、曾以無分別、河向之儀、はや地下中はらりと罷成候、諸城之衆も多分可罷退候、一鬼身之事、於于今者一口ニ罷成候、猿懸勿論候、五竜へ能被仰談、人数兵粮玉薬、堅固被相拘候、御調儀専一候（中略）一松山之儀申戦半候間、先度某元之御談合者爰にて候、山内多賀山被罷上候哉（中略）一多治部へハ田総可被遣之由	秀吉・毛利両氏の領域境の線引きについて、隆景が状況観察と見解を示したもの。猿懸城へ出かけた人たちが色々秀吉方に掛け合っているが、思うようにならない。高梁川の向こう側では、もう地下人たちの心も毛利氏から離れ、諸城の城主たちも多くは退去している。この状況下では、鬼身城と猿懸城が毛利領の最前線（一口）なので、宍戸元孝（五竜）によく言い聞かせて軍勢・兵糧・弾薬などを堅固に保持するのが大事である、と述べる。松山城の帰属については秀吉と討論している最中だが、山内・多賀山氏が守備のため松山へ向い、多治部城にも田総氏が派遣されたとある。	猿懸　（227猿掛城跡） 鬼身　（270鬼身城跡） 松山　（158備中松山城跡） 多治部　（58塩城山城跡）	（小早川）隆景	（天正十一年）十二月五日	1583年	13・69
401	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	今度京芸和談之儀ニ付而、南北分目之儀為可申談、至岡山蜂須賀・黒田被差下候条、従吉田、渡石見・児三、従隆景・我等、井又右・児市差出候、重畳此間中申談之由候、然者於南表ハ、児島之常山・松山・高田之儀、何と被申候共相渡間敷之由被申遣事候、（中略）備中外郡之儀茂、庭妹・松島・幸山・宮山・妹尾之儀、早被相渡之由候	元春が重臣の今田経高に、羽柴・毛利講和交渉（京芸和談）の状況を報じた書状。山陰・山陽における羽柴・毛利両勢力の境界（南北分目）を定めるため、秀吉が岡山城に蜂須賀正勝・黒田孝高を派遣してきた。毛利輝元・吉川元春・小早川隆景もそれぞれ重臣を派遣し、蜂須賀らとずっと相談させていた。毛利氏としては、備前児島の常山城・備中松山城・美作高田城は、秀吉が何を言ってきても渡さないが、備中外郡の庭妹城・松島城・幸山城・宮山城・妹尾城については、早々に秀吉側へ引き渡す方針であった。	岡山　（〈備前180〉岡山城跡） 常山　（〈備前240〉常山城跡） 松山　（158備中松山城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 庭妹　（402庭瀬城跡） 松島　（436松島城跡・番号なし射越山城跡） 幸山　（414幸山城跡） 宮山　（場所未詳） 妹尾　（442須浜城跡ヵ）	（吉川）駿河守元春	（天正十一年）極月十一日	1583年	36

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
402	安国寺恵瓊・林就長連署書状／毛利家文書	備中外郡諸城之事、悉引渡申候、無是非存候（中略）一作州江一両日中ニ蜂彦右、黒官可罷越之由候、（中略）高田一城被相残、早々御渡専一ニ存候、一虎倉之儀、尽善美侘言雖申候、一円無分別候、於虎倉岩屋之儀者、第一岡山相障候、自然上衆両人当座分別候ても、八郎母所より直文ニて申上せ候へは、両人失面目之由候、退城日限相延候やうにと雖申候、是も無分別候、やう＼／来廿二三日ニしかと可有退城之由申懸候（中略）一児嶋、松山、高田之事、ちと多過たる御愁訴ニて候、中にも児嶋之儀共ハ、曾分引仕間敷由ニて候、雖然、此一所ニ底意被縮候て可有御侘言候哉一つ、高田新見江かけ候て可被仰理候哉一つ、松山城領所共ニ可被仰理候哉一つ、此三つニて候（中略）去年南表、冠山、宮路山責落、高松二重三重ニ取巻候後、やう＼／猿懸河辺あたりまて御打出候、又当年来年と候ても、上衆ハ十日十五日之間ニ可罷出候（中略）世上不被御覧衆之御目とハちと違可申候、然共、芸州の御旁ハ底慢心御座候て、世上之者を御見こなし候	毛利氏と秀吉との間で行われた領界確定協議について、毛利側の交渉担当者恵瓊・就長が、毛利氏重臣佐世元嘉（佐与三左）ら４名に対し所見を述べたもの。備中国外郡の城は全て秀吉に引き渡したこと。一両日中に秀吉側の交渉役黒田・蜂須賀氏が美作国へ向かうので、高田城を早々に明け渡すこと。虎倉城については言葉を尽して毛利側に残すよう交渉しているが、秀吉側は全く聞き入れてくれないこと。虎倉城と岩屋城とは、岡山城の宇喜多氏にとって障害になるので、宇喜多秀家の母親が秀吉に直訴すれば話が破綻してしまうこと。秀吉側は、来る二十二日か二十三日には虎倉・岩屋両城から退城するよう言ってきていること。毛利側が児島と松山・高田両城の留保を求めているのは、要求が多すぎるので、どれか一つに絞って要求した方がよいこと。毛利氏は去年、冠山・宮路山両城が落ち、高松城が何重にも包囲された後、ようよう猿懸城・川辺宿あたりまで出陣できた程度で行動が遅い。上方の軍勢は十日か十五日あれば動ける。このように秀吉と毛利氏には力量の差があるのに、世間知らずの安芸国の人々は慢心して状況を理解していない、と述べる。	備中外郡諸城（414幸山城跡など） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 虎倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 岩屋　（〈美作189〉岩屋城跡） 岡山　（〈備前180〉岡山城跡） 松山城　（158備中松山城跡） 冠山　（373冠山城跡） 宮路山　（353宮路山城跡） 高松　（393備中高松城跡） 猿懸　（227猿掛城跡）	安国寺恵瓊・林杢允就長	（天正十一年）十二月十五日	1583年	13・36・69
403	安国寺恵瓊・林就長連署書状／毛利家文書	一秀吉者、於岩崎陣互以誓帋申定候之辻、今以可為同前之由被存候、（中略）毛頭上より事新申にて無之候、高田も松山も児嶋も御約束之内ニて候	毛利・秀吉間の領界交渉について、秀吉側の言い分を毛利輝元に伝えたもの。秀吉は岩崎の陣でお互いに誓紙を交わして約束した通りのことを今も変わらず要求しているのであって、高田城・松山城・児島を明け渡すという話は新しく言い出したことではないことを伝える。	岩崎陣　（423庚申山城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 松山　（158備中松山城跡・大松山城跡）	（安国寺）一任斎恵瓊・林木工就長	（天正十一年）十二月十八日	1583年	13・36・53・69・134
404	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百七　赤川次郎左衛門	福原式部少輔至備中幸山来十六日差上候、其方之事可相副候間同前可罷出候	輝元が家臣の赤川元之（二郎左衛門尉）に指示した書状。来る十六日、毛利家宿老の福原元俊（式部少輔）を備中国幸山城へ派遣する予定だが、赤川氏にも元俊に随行するよう命じている。	幸山　（414幸山城跡）	（毛利）輝元	（天正十一年以前）四月十日 ※『萩藩閥閲録』は天正三年に比定する	～1583年	108・134
405	羽柴秀吉書状／小早川家文書	一虎倉升形城請取由、尤候事、一伊賀与三郎城事、入念可請取事、一草苅城是又可被入念事、（中略）一高田、松山、児嶋、八橋等事、只今又可侘言由、沙汰限事候	秀吉が毛利氏から受け取る諸城について、黒田孝高・蜂須賀正勝に指示したもの。虎倉城・枡形城を無事受け取ったことを良しとし、伊賀与三郎家久の城・草刈重継の城（矢筈城）を入念に受け取ること、高田城・松山城等について今更毛利氏が明け渡したくないと言ってきているのは言語道断であることなどを伝える。	虎倉・伊賀与三郎城　（〈備前25〉虎倉城跡） 升形城　（〈美作141〉桝形城跡） 草刈城　（〈美作157〉矢筈城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 松山　（158備中松山城跡）	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十二年）正月二日	1584年	13・36・74
406	羽柴秀吉書状／小早川家文書（『閥閲録』巻十之三　堅田安房にも写しあり）	境目城之儀、急度請取、明隙可罷上候	秀吉が家臣の黒田孝高・蜂須賀正勝に対し、備中・美作・伯耆にある毛利方の城郭を早く接収して上坂するよう命じたもの。	境目城	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十二年）正月五日	1584年	36・89・106

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
407	安国寺恵瓊書状／毛利家文書	外郡諸城之儀、引渡申候、乍勿論、至川西聊無其煩候、（中略）一虎倉、岩屋、其外作州衆之儀、引付之段、種々雖申操候、曾以無分別候、先虎倉之事、急度請取候て、作州江可打越之由候、先書ニ如申上候、早々作州城々の儀、高田一城被相残、被成御渡候事専一ニ存候（中略）一高田、松山、児嶋、其外奥郡之儀、川東之内、過分之儀候（中略）一右分御渡候ても、露塵ほとも被申懸候所成候するとハ不存候、備中新見・から松辺、被仰さまによつて可有分別候哉、（中略）一高田、岩屋、宮山、高仙江自是申遣候儀、曾以不成候条、従其方可被仰遣候	安国寺恵瓊より、秀吉側への城明け渡しの件で報告・要請。備中国外郡の諸城の引き渡しが済み、高梁川西岸にはトラブルが起こらなかったこと、虎倉城・岩屋城そのほか美作国衆の件について秀吉側に種々要請しているが理解してもらえないこと、秀吉側は速やかに虎倉城を受け取って美作国へ赴くと言っているので、早々に高田城のみ残して美作国の諸城を明け渡すべきこと、高田城や松山城の残留を望むのはぜいたくであること、秀吉側に美作一国と伯耆国の諸城を渡したとしても毛利側が掛け合っている内容が成立するとは思えないが、備中新見と唐松あたりの処遇については言い方によって秀吉側の考えが変わるかもしれないこと、高田城・宮山城・高仙城へこちらから話しても事が進まないので、毛利氏首脳部から話してほしいこと、など。	外郡諸城　（414幸山城跡など） 虎倉　（〈備前25〉虎倉城跡） 岩屋　（〈美作189〉岩屋城跡） 高田　（〈美作33〉高田城跡） 松山　（158備中松山城跡） 新見　（8楪城跡） から松　（66甲籠城跡ヵ） 宮山　（〈美作56〉宮山城跡） 高仙　（〈美作85〉高山城跡ヵ）	安国寺恵瓊	（天正十二年）正月十一日	1584年	13・36・69
408	穂田元清書状／中丸家文書	旧冬此表御両所御逗留之刻、我等城替之儀可有御披露之通申談候つる、御下向已後両山能々見合候処、矢懸之中山彼是可然趣候条、彼山取付度存候、就其以此者申上候条、可然之様可被仰上事頼存候	猿掛城主穂田元清が、毛利氏宿老渡辺長（渡石）・児玉元良（児三右）に送った書状。元清は去年の冬に両人が猿掛城に逗留していた時、居城の変更について両人に相談していた。そして、両人が帰国した後、二つの築城候補地をよくよく見比べた元清は、矢掛の中山がよさそうに思えるので、ここに築城したい、と思うようになった。そこで、元清は渡辺・児玉両人に対し、築城許可が得られるよう毛利輝元に然るべく取りなしてほしい、と依頼している。	矢懸之中山（223茶臼山城跡・221中山城跡）	（穂田）治部太輔元清	（天正十二年）二月二日	1584年	50・133
409	羽柴秀吉書状／黒田文書	渡候城々請取候分、人数兵粮已下丈夫入置候て、両人儀者、早々可被罷上候事	秀吉が毛利氏からの城受け取りを担当している黒田孝高・蜂須賀正勝に対し、受け取った城に軍勢と兵糧を入れて厳重に守らせた上で、早々に上坂するよう命じている。	渡候城々	（羽柴）筑前守秀吉	（天正十二年）三月十一日	1584年	91
410	吉川元春外四名連署書状／新出湯浅家文書（萩市郷土博物館蔵湯浅家文書）	為某元御普請、御上国誠御辛労之至候、御人数有御馳走、頓相調候様御入魂、於輝元可被祝着申候、毎事元清可被仰談候	普請に従事するため上国した湯浅将宗（治部大夫）に対し、毛利氏宿老が与えた書状。普請にかかわる人員を手配し、早期に完成させるよう尽力してくれれば、毛利輝元も喜ぶだろう、穂田元清とよく相談して工事を進めるように、と伝えている。	（227猿懸城または223茶臼山城）	吉川元春・福原出羽守貞俊・口羽中務太輔春良・福原式部少輔元俊・小早川隆景	（天正十二年）三月二十二日	1584年	28・132
411	吉川元春外三名連署書状／新出湯浅家文書（萩市郷土博物館蔵湯浅家文書）	其表普請之儀無緩被仰付之由元清被申下候、於輝元太慶被存之候、寔乍御太儀、当時一口之山にて候間、普請之儀、猶以可預御馳走事、可為祝着之由被申候	上記史料に関連。湯浅将宗（治部太輔）は穂田元清のもとで普請工事を緩みなく監督していた。この様子を元清から聞いた吉川元春らは、毛利輝元も大層よろこんでいると将宗に伝えている。輝元は、将宗が普請している山城が現在の毛利領最前線の入口を押さえる山なので、さらに普請に尽力してくれるとありがたい、とも述べており、こうした輝元の意思を元春らが将宗に伝達している。	（227猿懸城または223茶臼山城）	吉川元春・福原式部少輔元俊・口羽中務太輔春良・小早川隆景	（天正十二年）三月二十七日	1584年	28・132
412	毛利輝元書状／新出湯浅家文書（萩市郷土博物館蔵湯浅家文書）	其元普請之儀、無緩被仰付之由、自元清被申越候、肝要太慶候、其境一口山之儀候間、弥可預御入魂候	輝元が湯浅将宗（治部太輔）に与えた書状。将宗が城普請を緩みなく監督していることを穂田元清から伝え聞いた輝元が、将宗の尽力を喜び、その城は境目の最前線の入口を固める山なので、さらなる入魂をお願いしたい、と述べている。	（227猿懸城または223茶臼山城）	（毛利）右馬頭輝元	（天正十二年）四月一日	1584年	28・132
413	毛利輝元書状／山口県文書館蔵右田毛利家文書	さるかけにハやうかいとも御しかへ候とて、つね＼／御心つかいのよし候、一さまならぬ御たんそく御きつかいにて候、さるかけへもけんしの物とも申つけ、さしのほせ申候	輝元が「さくらを御かた」（毛利元就の後妻乃美の方。穂田元清の母親）に送った仮名書きの書状。猿掛城での要害「御しかへ」（やり替え。改修または城そのものの移転）実施のため、元清周辺が一方ならぬ骨折りと気遣いをしている点をねぎらい、輝元のもとから猿掛城に検使を派遣する旨伝えている。	さるかけ　（227猿掛城跡）	むまてる元（毛利右馬頭輝元）	（天正十二年）四月九日	1584年	132
414	熊谷信直書状写／『閥閲録』巻十三之二山内縫殿	次郎四郎・新亮保井田江為音信罷越候、彼城普請驚目由申候、乍去急度成立間敷由、見及通申候	熊谷信直が備後国衆山内隆通に送った書状。使者として「保井田」＝穂井田を訪れた次郎四郎・新亮からの報告に、そこで行われていた城普請の様子に驚いたが、すぐには成立しそうにないと思われる、とあったことを隆通に伝えている。	彼城　（227猿懸城または223茶臼山城）	（熊谷）伊豆守信直	（天正十二年）四月二十三日	1584年	106

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
415	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一　湯浅権兵衛に写しあり）	就今度猿懸城替普請、御上国数日御逗留御苦労之故、頓相調之由、元清申越之候、寔御入魂之至畏入候	穂田元清の居城を猿掛城から矢掛茶臼山城へと変更する際の「城替」普請工事に関する史料。備後国の湯浅将宗（治部大輔）が備中国へ上って尽力したおかげで、普請が早めに整ったので、輝元が礼を述べたもの。	猿懸城　（227猿掛城跡）	（毛利）右馬頭輝元	（天正十二年）五月二十二日	1584年	13・108・132
416	多久和就忠・桂清言連署書状写／片山家文書	西方中村水出入之儀、（中略）殿様御帰城之時遂披露可申定候	穂田元清の奉行人多久和就忠・桂清言が、中村給人衆・弥四郎右衛門に与えた書状。西方と中村の用水相論につき、穂田元清（殿様）が帰城した際に報告した上で裁定を行う旨、中村給人衆らに伝達したもの。	（227猿懸城または223茶臼山城）	多久太右就忠（多久和太郎右衛門尉就忠）・桂蔵太清言（桂内蔵太夫清言）	天正十二年七月一日	1584年	129
417	口羽春良書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之二　湯浅権兵衛に写しあり）	境目出入等之儀、芸州如被申ニ分別被仕、松山・八橋之儀、此方へ被返付分候	毛利氏宿老口羽春良が、大坂から国元の湯浅将宗（治部太輔）に通信したもの。秀吉と毛利氏との領界問題が、結局毛利氏の思うように運び、松山城と伯耆国八橋城とが毛利氏に返還されることになった旨、伝える。	松山　（158備中松山城跡・大松山城跡）	口羽中務太輔春良	（天正十三年）二月十二日	1585年	13・53・92・108
418	羽柴秀吉書状写／斎藤報恩博物館所蔵文書	我等西国へ相働、於備中国城々攻崩并高松之城取巻候処、三方ニ沼を抱、力攻不成段秀吉見及、水攻ニ可仕と存、堤を築、其国之川之事者不及申、備前之川迄切懸、城中及難儀付而、為後巻毛利・小早川・吉川五万計に而罷出、六七町之間令対陣、可後巻雖相定候、不能承引付而、弥城中令迷惑剋、同四日之巳之剋、於京都信長御腹召候由、注進候條、右之高松六日攻崩、城主之事ハ不及申、悉刎首候	前出史料391・392・396とほぼ同文。これは伊達輝宗の家臣遠藤基信に与えたもの。	高松之城　（393備中高松城跡）	（羽柴）秀吉	（天正十三年）七月二日	1585年	93
419	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻百一　矢田庄左衛門	伯州之儀令一着之条太慶候、然者至与州諸勢差出之間、早々可有御渡海候、四畦番衆之儀者別人申付候間、替之衆着候者即御出津干要候	輝元が「矢田殿」に与えた書状。伯耆国の兵乱が無事落着したことを祝し、今度は伊予国へ軍勢を派遣するので「矢田殿」も早々に渡海するよう伝えている。現在「矢田殿」がいる四畦城については別人を番衆として派遣するので、交替要員がそちらに到着次第、すぐに出港するよう伝えている。	四畦　（93四ツ畝城跡ヵ）※他国の城郭の可能性あり	（毛利）右馬頭輝元	（天正十三年）八月二日	1585年	55・108
420	毛利輝元書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書（『閥閲録』巻百四之一湯浅権兵衛に写しあり）	今度上洛間之儀、松山在番之儀頼入候	輝元が湯浅将宗（治部大輔）に与えた書状。輝元が今度上洛することになったので、その間の松山城在番を将宗に依頼している。	松山　（158備中松山城跡）※別の松山城である可能性もあり	（毛利）右馬頭輝元	（天正十六年）六月二十六日	1588年	108・132
421	豊臣秀吉朱印状／浅野家文書	十三か国持候毛利を、六丁七町之内ニ、五万六万の人数を後ろニうけさせられ候てさへ、高松城を水責ニさせられ、太刀も刀も不入、水をくれ候て可被成御覧と被思召候刻、両人の者ハ存候哉、総見院殿六月二日御腹をめされ候事、三日の晩ニ彼高松表へ相聞候時、右之高松城主水をくらひ可死事ハ、無念次第候間、船を一艘被下候ハヽ、御前にて腹をきり申度候由、御歎申候といへとも、二日の日御腹をめされ候ニよて相ゆるし、舟を遣腹をきらせ候と、敵味方の諸卒存候てハと被思食候て、六日の日迄ふねを不被遣候処ニ、毛利方より国を五ケ国、彼高松城ニ相添進上可申旨、種々懇望申候間、船を被遣、高松城主腹をきらせられ候て、毛利をゆるさせられ、彼逆徒等明智可被刎首事こそ、道の道にて候と被思召、高松の城其外之城々被請取、不移時日馳上、光秀被刎首候事を、両人ハ忘申候哉	小田原の陣の最中、秀吉がかつての高松城水攻め前後の経緯を回想し、浅野長政（弾正少弼）・木村重滋（常陸介）に示したもの。毛利の大軍を背後にした状態で高松城を水攻めにし、太刀も刀も使わず水を食らわせてやろうと思っていたところ、六月二日に信長が切腹し、三日の晩にはその報せが高松まで届いた。その時、高松城主が水を飲まされて死ぬのは無念なので、船を一艘出してくれれば秀吉の眼前で切腹する、と申し出た。ただし、高松城主の切腹を許したのは信長が死んだからだと敵味方に推測されては困ると思い、六日まで船を出さずに待っていたところ、毛利方が五ヶ国を高松城に添えて進呈したいと懇願するので、船を出して高松城主に腹を切らせ、毛利氏を許した。そして逆臣明智光秀の首を刎ねるのが本道と考え、高松の城とそのほかの諸城を受け取った後、時日を移さず馳せ登って光秀を討ち取ったことを、両人はもう忘れたか、と問いかけている。	高松城　（393備中高松城跡）	（豊臣秀吉）	（天正十八年）五月二十日	1590年	66

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
422	毛利輝元条々写／武田金三所蔵文書	高麗渡海留守□□〔居之ヵ〕条々（中略）一備中鬼身・松山・猿懸・千田・竹庄・大佐・千屋・新見何も在々心付之事	毛利輝元が朝鮮出兵にあたり、留守居の佐世元嘉（与三左衛門）に指示を与えたもの。備中国鬼身城・松山城・猿懸城・新見城領および千田（星田）・竹庄・大佐・千屋の諸領域について、在所に対する心づかいに努めるよう命じている。	鬼身　（270鬼身城跡） 松山　（158備中松山城跡） 猿懸　（227猿掛城跡） 新見　（8楪城跡）	（毛利）輝元	天正十九年正月十一日	1591年	103・118
423	天野元信書状／室家資料	中津井之儀、町共ニ裁判之事、今度其方ニ申付候、背下知者候者、高橋留守居へ能相届堅可申付事肝要候	備中松山城在番の天野元信が、中津井の有力者室六右衛門に与えた書状。元信の留守の間、中津井および同地区の町場の支配（裁判）を室氏に委任する旨、伝えたもの。もし命令に背く者がいたら、「高橋」（備中松山城）の留守居に届け出て、厳格に処置するよう命じている。	高橋　（158備中松山城跡）	（天野）元信	慶二（慶長二年）五月二十五日	1597年	125
424	内藤周竹（隆春）書状写／『閥閲録遺漏』巻五之一　雲谷等龍家差出文書	家康へ之御意にハ、毛利と被仰合候子細ハ備中清水城被召詰候砌、信長を明智任存分候故、御神文被執替候終毛り表裏事本式者と被思召之由候、西国之儀被任置之由候	病床の豊臣秀吉が語った内容を使者から伝え聞いた周竹が、内藤元家（又二郎）にその内容を書き送ったもの。秀吉が徳川家康に語ったところによると、秀吉が毛利氏と親しく申し合う関係になったきっかけは、 備中清水城（清水氏居城の意。高松城のこと）を包囲していた際のことだという。この時、織田信長を明智光秀が討ち取ったため、秀吉は毛利氏と神文を取り交わして和議を結んだが、毛利輝元はその進退に間違いのない者（本式者）だと感じたので、毛利氏に西国のことを一任したのだ、という。	備中清水城（393備中高松城跡）	周竹(内藤隆春)	（慶長三年）八月十九日	1598年	110
425	木原平左衛門打渡状／平井国夫家文書	平井平兵衛給地之儀、御方御役目被仕候ハヽ、土居屋敷共ニ少も無相違イ渡可申候	毛利氏宿老宍戸元続の家臣木原平左衛門が、備中国荏原の土豪平井与次に与えた文書。宍戸氏が申し付けた「御役目」を果たすならば、平井平兵衛の所領だったところを土居屋敷も含めて平井与次に与える旨、伝えている。	土居屋敷　（番号なし　平井氏の土居屋敷跡）※『井原市史』Ⅰ自然風土・考古・古代・中世・近世通史編を参照	木原平左衛門	慶長五年八月十四日	1600年	2
426	宇喜多家分限帳／岡山県立図書館所蔵文書	岡越前守　弐万三千三百卅石 （中略）湯浅九郎兵衛尉　八百八拾石　内弐百九十石慶長二年加増　五百石慶長三年加幸山城領　（中略）岡平次郎 五百石　慶長三新知　幸山城領	宇喜多秀家の宿老岡越前守とその与力の知行高を記した部分から抄出。岡氏の与力湯浅九郎兵衛尉・岡平次郎の両名が、慶長三年（1598）に幸山城在番とされ、城に付属する領地（城領）内でそれぞれ５００石づつ役知の加増を受けていることがわかる。	幸山城　（414幸山城跡）		（慶長五年ごろ）	1600年	134
427	毛利輝元書状写／『閥閲録』巻五十七　渋谷九右衛門	御一献之儀付而、（中略）来廿四日にハ松山江可罷越候間、程近可談合候、 一石引綱之事、短束之由可然候、普請相定上を以可申遣候、一普請道具之事両度申遣候、是を後迄入物ニ候間、能やうに可調置候	毛利輝元が内藤元栄ほか三名に対し、来る二十四日に松山城へ赴くので、そのとき相談しようと伝えたもの。また、何らかの普請にともない、石引綱や普請道具の調達について指示を与えている。	松山　（158備中松山城跡）	てる元（毛利輝元）	年未詳六月二十一日		13・107
428	小早川隆景書状写／『譜録』井上孫兵衛勝政	彼気相以之外之由、従国吉茂態飛脚被越候条、早々被上候て養生之趣異見干要候	隆景が井上就正（孫兵衛尉）に送った書状。「成越」こと三村親成の「気相」（体調）がよくないと、国吉城からも飛脚が来て伝えてきたので、早々に上国し養生するよう意見するのが肝要だ、と述べている。	国吉　（135国吉城跡）	（小早川）左衛隆景	五月六日		119
429	三村親宣書状／三原城城壁文書	（前欠）□笠岡差出候、弥御両所被仰次第、其気遣可仕候	三村親宣（成羽紀伊守）が、何者かに差し出した書状の残欠。毛利方の笠岡城に何かを差し出し、「御両所」（毛利一族の誰か）の命に従って心遣いに努めることを誓った内容。	笠岡　（254笠岡城跡）	成紀伊親宣（成羽紀伊守親宣）	□月四日		118
430	細川元通室消息／下関市立長府博物館蔵長府毛利家文書	あさくちやとより　五もし	細川元通の妻ごもし（穂田元清の娘）が「おていさま」に送った消息の差出。現住所として「あさくちやと」の記載がある。	あさくちやと（293鴨山城跡または307要害山城跡）	五もし	年月日欠（戦国期）	16世紀後半	133

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
431	備中松山城図／孤蓬庵所蔵	（大手門の注記）此所弐間梁拾間之二階門御座候処ニ、石垣台斗残、二かい門者破損仕こほち取候間、立申度奉存候事（二の丸櫓門の注記）此所弐間梁之四間之二階門ニ御座候処ニ、二かい門破損仕并石垣も少々くつれ申候間、如本ノつき立、二かい門も立申度奉存候事（本丸天守の注記）此所二重之天主、五間半ニ七間御座候処ニ、破損仕こほち取申候并石垣少々くつれ申候間、如本之つき立、天主立申度奉存候事	備中松山城の修復に関する図面（完成予定図）で、既存の建造物に関する注記がみられる。大手門が二階建ての長い櫓門だったこと、二の丸城門も二階建て櫓門だったこと、天守も二階建てだったことがわかる。このうち、大手門と天守は破損が大きいため既存建物を撤去して建て直したいとの希望が記されている。二の丸櫓門と天守については、石垣も少し崩れている状況という。小堀政一による備中松山城復興の際につくられた図面と推定されている。	弐間梁拾間之二階門、弐間梁之四間之二階門、二重之天主、石垣　（158備中松山城跡）	（小堀政一ヵ）	（慶長年中ヵ）	1601～1615年ごろヵ	24・48
432	料紙請取／岸本家文書	請取申候料紙之事 合弐束者《但てつたこうしろ紙／御下屋敷之御用之分也》	備中国奉行小堀政一の配下中村重右衛門尉が、備中松山城の附属施設と考えられる「御下屋敷」で使用する杢多神代産の和紙を受け取った際に書いた受領証。	御下屋敷　（159備中松山城御根小屋の前身ヵ）	中村重右衛門尉	慶長十年十月二十三日	1605年	12
433	役儀人数書付／岸本家文書	松山御普請御やく儀人数之事（中略）合五百九拾七人、内《五百弐拾三人　小者／七十四人　人足》九月晦日までの分	備中国奉行小堀政一の配下が、備中松山城普請に九月末日まで参加していた小者・人足の人数を爪田休足に報告したもの。	松山　（158備中松山城跡）	杉作二・長弥太	慶長十一年十月十日	1606年	12・48
434	そぎ請取／岸本家文書	御下屋敷為御用、うけ取申そきの事《但午ノ切手五枚分の替也》（中略）合百六十七束	備中国奉行小堀政一の配下鈴木・比企氏が、備中松山城の附属施設と思われる「御下屋敷」修造に使用する「そぎ」＝屋根葺き材１６７束を、爪田休足から受け取った際に書いた受領証。	御下屋敷　（159備中松山城御根小屋の前身ヵ）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾壱年十一月五日	1606年	12・48
435	納米払帳断簡／岸本家文書	一、七十石　松山之御城御蔵入、十右衛門手形有之、　（中略）一、壱石一斗五升五合　町升　松山御城ノ御用人足百五十四人飯米、十右衛門手形有之、一人ニ七合五勺つゝ	備中松山城の御蔵入米の出納について記された帳面。松山城の普請あるいは修繕に関与した人足１５４人に支給した飯米の数量などが記されている。	松山之御城（158備中松山城跡）	（差出・宛名欠）	慶長十二年十二月十日	1607年	12
436	納米払帳断簡／岸本家文書	八斗五升　松山御下屋敷御用こわ壱万六千五百枚之代、平右衛門・吉介てかた有之、　（中略）五拾石　松山御城つめ米、十右衛門てかた有之	同上。備中松山城「御下屋敷」の普請あるいは修繕に使用する「こわ」代の支払いに、城の蔵入米を宛てたことなどが記されている。	松山御下屋敷（159備中松山城御根小屋の前身ヵ） 松山御城　（158備中松山城跡）	（差出・宛名欠）	（慶長十二年）申六月晦日	1607年	12・48
437	納米払帳断簡／岸本家文書	弐石八斗九升　松山御城御用役儀、小者千百五拾六人、昼飯一人ニ弐合五勺つゝ、奉行衆手形有之、弐石七斗弐升弐合五勺同御用人足三百六拾三人飯米一人ニ七合五勺つゝ、奉行衆手形有之、	同上。備中松山城の普請または修繕のため集めた小者１１５６人・人足３６３人の昼飯代として、城の蔵入米を支給したことなどが記されている。	松山御城　（158備中松山城跡）	ふか町（深町喜左衛門）	慶長十三申十二月十八日	1608年	12・48
438	大工作料書付／岸本家文書	松山御城御用大工作料之事 遠江様御てかた我等所有之	備中松山城の修築に関与していたと思われる「ふか町」が、城の修築に従事した大工へ支払う作料について、小堀政一の家臣中村重右衛門尉に申告したもの。	松山御城　（158備中松山城跡）	ふか町（深町喜左衛門）	慶長拾三年申十二月廿九日	1608年	12・48
439	役儀人数書付／岸本家文書	松山御普請御役儀人数之事 合百弐拾人（後略）	備中松山城の普請に関与していた小堀政一の陪臣井上久右衛門が、工事参加者の人数を小堀氏家臣の長屋木工に報告したもの。	松山　（158備中松山城跡）	中村重右衛門尉内井上久右衛門	慶長十四年二月晦日	1609年	12・48
440	役儀人数書付／岸本家文書	御普請御役儀人数之事　正月廿一日より二月晦日迄 中島・里山田・中村堤伐、其外ニ松山之御普請共ニ 合六拾壱人（後略）	備中松山城や中島・里山田・中村の堤防普請に従事した人々の人数を、小堀政一の家臣中村重右衛門尉が橘四郎右衛門に伝えたもの。	松山　（158備中松山城跡）	中重右衛門尉（中村重右衛門尉の略）	慶長十四年二月晦日	1609年	12・48
441	大工渡米書付／岸本家文書	松山御城為御用働申大工共被成御渡候米之事 合拾六石也（後略）	小堀政一の家臣鈴木・比企氏が、備中松山城の修築に従事した大工に支払う米の額について、同輩と思われる下村市左衛門に伝えたもの。	松山御城　（158備中松山城跡）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾四年酉七月十二日	1609年	12・48
442	役儀人数書付／岸本家文書	松山御普請御役儀人数之事 合弐百六拾八人（後略）	小堀政一の家臣杉新丞が、三月から七月末まで備中松山城普請に従事していた人足らの人数を、同輩と思われる積氏に伝えたもの。	松山　（158備中松山城跡）	杉新丞	慶長十四年八月二日	1609年	12・48
443	役儀人数書付／岸本家文書	松山御普請御役儀人［　　］合弐百八拾人（後略）	上記と同じく備中松山城普請の従事者人数を持明院に伝えたもの。	松山　（158備中松山城跡）	杉新丞	慶長十四年八月二日	1609年	12・48
444	檜皮請取／岸本家文書	請取　まいはたの事 合五拾束代米六斗《松山御城ため池御用ニ請取所如件》（後略）	小堀政一の家臣杉新丞が、備中松山城の溜池修築に用いる「まいはた」＝檜皮５０束分の代米を受け取った際に発行した受領証。	松山御城ため池（158備中松山城跡）	杉新丞	慶長十五年四月十四日	1610年	12・48

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
445	飯米書付／岸本家文書	松山御城御用かわらしニ渡飯米之事 合壱石者（後略）	小堀政一の家臣鈴木・比企氏が、備中松山城修築に従事した瓦師に支払う飯米について、同輩の中村十右衛門に伝えたもの。	松山御城　（158備中松山城跡）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾五年戌九月二日	1610年	12・48
446	飯米書付／岸本家文書	松山御城御用かわらしニ渡飯米之事 合弐石者（後略）	備中松山城の普請に従事した瓦師へ支給した飯米の数量について、小堀政一の家臣鈴木・比企氏が同輩の中村十右衛門尉に報告したもの。	松山御城　（158備中松山城跡）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾五年戌九月三十日	1610年	12・48
447	飯米書付／岸本家文書	松山御城為御用、働申大工ニ渡飯米之事 合壱石五斗者（後略）	小堀政一の家臣鈴木・比企氏が、備中松山城修築に従事した大工に支払う飯米について、同輩の中村十右衛門に伝えたもの。	松山御城　（158備中松山城跡）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾五年戌十月五日	1610年	12・48
448	枌請取／岸本家文書	請取申下御やしきそき入め之事 合弐拾束（後略）	備中松山城「御下屋敷」の普請または修造に必要な「そぎ」＝枌を、小堀氏家臣鈴木・比企氏が受け取った際に記した受領証。	下御やしき（159備中松山城御根小屋の前身ヵ）	比吉介（比企吉助の略）・鈴左大夫	慶長十五年十一月十九日	1610年	12・48
449	飯米書付／岸本家文書	松山御城御用かわらしニ渡飯米之事 合壱石者（後略）	備中松山城の普請または修築に参加した瓦師に支給した飯米の数量について、小堀氏家臣鈴木・比企氏が同輩の中村十右衛門尉に報告したもの。	松山御城　（158備中松山城跡）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾五年戌ノ十二月八日	1610年	12・48
450	枌請取／岸本家文書	御下屋敷やねのいた替之為御用、うけ取そきの事 上のそき一　拾壱束半　但御屋敷書院のやねいた替のそき也、（後略）	備中松山城「御下屋敷」「書院」の屋根板葺き替えに必要な「そぎ」＝枌を、小堀氏家臣鈴木・比企氏が受け取った際に発行した受領証。	御下屋敷、御屋敷書院　（159備中松山城御根小屋の前身ヵ）	鈴木平右衛門・比企吉助	慶長拾五年戌極月九日	1610年	12・48
451	そなえ米書付／岸本家文書	かうしろの まつやま御しろノ御やうそなえまい之事 合壱斗壱升ハ二人ふん（後略）	備中松山城関連の御用に関与する「一さへもん」が、小堀政一の家臣中村十右衛門に対し、使用した「そなえまい」（備え米ヵ）の分量について報告したもの。	まつやま御しろ（158備中松山城跡）	一さへもん	けいちやう廿、九月十一日	1615年	12
452	小堀政一書状／佐治重賢氏所蔵文書	松山城の番之儀、其許ニ在之者共ニ番之儀可申付候	小堀政一が宛先の人物に対し、備中松山城の勤番を宛先の人物周辺の者に申付けるよう指示している。	松山城　（158備中松山城跡）	（小堀政一）※後欠、宛所不明	（元和三～四年ごろ）	1617～18年ごろ	47
453	小堀政一書状／佐治重賢氏所蔵文書	松山替知相わたし可申旨被申候間、早々うけとり可申候、（中略）一、城之儀ハ、諸道具ミな々々下屋敷の長屋へそろ々々ととり下し可申候、天しゆニ存之分も、いつれも孫左衛門預り状可在之候、以来無相違様ニ可仕候、但余いそかぬ事候、乍去城之留主居無之候ハヽと申事候、当年中ニこほち候儀ニても無之間、門をうち、番少候へハ不苦候	池田長幸の備中松山入封にともない、それまで備中松山城主だった小堀政一が配下に指示を与えたもの。池田長幸が松山領の代替地を渡すと言ってきたので、早々に代替地を受け取るよう命じている。備中松山城の処置については、天守に置いてあるものも含め城内の道具を全て下屋敷（山下の居館か）の長屋へ収納すること、城には留守居を置いて管理すること、城を今年中に破却するわけではないので城門を閉じて少人数の番衆で管理させておいてかまわないことを伝えている。	松山、城、天しゆ、門　（158備中松山城跡） 下屋敷の長屋（159備中松山城御根小屋の前身ヵ）	（小堀政一）※後欠、宛所不明	（元和四年）	1617年	47
454	小堀政一書状／佐治重賢氏所蔵文書	城山ニてすミをやかせ候ニ、城の山の口をきり候ニ付、山もあせ、人の見かけも悪候様ニ申候間、おくへ入きらせ候様ニ可仕候、所替ニ仕候時も見かけ悪候へハ、いかゝニ候間、其心得可在之候	小堀政一が家老の小堀権左衛門に対し、備中松山城の管理について指示したもの。現在城山で炭焼きを許可しているが、城山の入口付近を切り開いているため、山の見た目が色あせ格好悪い状態であるとのことなので、今後は山奥で炭焼きの伐採を行うようにせよ、所替えで他人に城を引き渡す際に見かけが悪いのは問題なので、そのつもりで対処してほしい、と伝えている。	城山　（158備中松山城跡）	遠江（小堀政一）	（元和四年）後三月二十日	1618年	47
455	小堀政一書状／佐治重賢氏所蔵文書	松山城の儀、内々如有増、備中殿所替仕度之由、于今内証被申候、大手之ミへ申候かたニて、すミなとやかせ、木をきり候ハヽ、あきまニ成、ミかけあしく可在之候、其心得候て、大手よりミかけあしく不成様ニ可仕候事	小堀政一が家老小堀権左衛門に対し、備中松山城に池田備中守長幸（備中殿）が所領替えで入封することが内定したことを伝え、城の管理について指示したもの。現在、大手が見えるあたりで炭焼きを許可し木の伐採がなされているため、大手が露出して見た目が悪くなっているので、大手からの見た目が悪くならないよう配慮せよ、と伝えている。	松山城、大手（158備中松山城跡）	遠江（小堀政一）	（元和四年）閏三月二十一日	1618年	47
456	瀧九左衛門等連署書状／中島家文書	於小寺村前中島大炊助殿城跡地之内、当中島与助殿住居屋敷構之内之分、向後可為除地之旨権佐殿被仰付候	備中国賀陽郡小寺村の中島大炊助殿城跡のうち、現在も中島行光（与助）が住居している屋敷構を、領主蒔田定行（権佐）が年貢免除地とした。そのことを蒔田家重臣４名が中島行光とその子（次太夫・九右ヱ門）に伝えたもの。	中島大炊助殿城跡　（番号なし中島氏館跡）	瀧九左衛門・玉田文右衛門・宥利四郎右衛門・中島七郎兵衛	（天和二年）六月十一日	1682年	60

表 6　参考資料　一覧表

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
1	『源平盛衰記』古巻第三三　源平水島軍事	木曾左馬頭義仲是を聞て、信濃国住人矢田判官代義清、宇野平四郎行広を差遣す。（中略）平家は三百余艘の兵船を調て、屋島の磯に漕出たり。源氏は備中国水島が途に陣を取て、千余艘の兵船を構たり。（中略）寿永二年閏十月一日、水島にて源氏と平家と合戦を企つ。源氏等計けるは、（中略）島の東の海上より寄て、島の北に船を陸まで組合て、軍兵隙を諍て攻寄ば、（中略）島の上へ責入て城に火を懸ば、敵は舟へのみこそ競のらんずらめ、打物に堪たらん輩続て乗移て打とれ、島を責落しなば、（中略）浪に引れ風に随つて漂はんを、浦々渚々に追詰々々討とらんと定てけり。平氏は又船をば島の西南に附て、城の東北の木戸口を開て、名を得たらん人々進出て敵を指招かば、舟を竝て責寄べし、偽て引退ば島の上へ襲来らん歟、其時舟を島東北へ指廻して、三方より矢前揃て可射取、敵不堪して引退かば舟を指竝べて乗移、分捕せんとぞ謀りける。	木曾義仲の派遣した矢田義清・海野（宇野）行広の率いる源氏軍と、屋島を拠点とする平家水軍との合戦。源氏は東の海上から平家軍の拠る「島」の北側へ船を寄せ、島の上へ攻め入って平家方の「城」に火を掛ければ、平家軍は脱出のため船に乗り込もうとするだろうから、そこへ太刀打ちの得意な者が一緒に船に乗り込んで敵を討ち、島を失い船で漂っている敵を浦々に追い詰めて討ち取ろう、と算段していた。一方、平家軍は兵船を源氏軍の攻め口の反対側、島の西南に付けておき、「城」の東北の木戸口を開いて源氏方を誘い、偽って退却し源氏軍を島の上へおびき寄せ、そこで隠していた兵船を島の東北へ向かわせ、源氏軍を三方から包囲して射撃し、敵が退却をはじめたら敵方の船にこちらの船を並べ乗り移って敵を討とうと計画していた。	城		寿永二年（鎌倉中・末期）	1183 年（13 世紀中～後期）	13・53・135
2	『源平盛衰記』古巻第三三　木曾備中下向斉明被討竝兼康討倉光事	兼康は西河裳佐の渡を打渡り、福輪寺阡を堀切て、管植逆母木引などして、馬も人も通難く構たり。彼阡と云は遠さ二十余町、北に峨々たる山、人跡絶たるが如し。南に渺々たる沼田、遙に南海に連なりたり。西には岩井と云所あり。是をば打過て当国の一宮をも過佐々迫に懸。此佐々迫と云所は、東西は高き山、谷に一の細道あり。左右の山の上に弩多く張り立たり。後には津高郷とて、谷口は沼也ければ、究竟の城也。敵何万騎向たり共輒く攻落し難き所也。此には兵共を指置て、我身は唐河の宿、板蔵城に引籠て、今や〳〵と木曾を待けり。	妹尾兼康は牟佐の渡で旭川を越え、福輪寺の阡（ちまた）を掘り切り、先の尖った木や逆茂木を設置して、人馬が通いにくいような施設をつくった。この場所は、北に高峻な山があり、南は広々した沼田がはるかに海まで連なっていた。西の岩井というところを過ぎ、備前国の一宮も通り過ぎると佐々の迫りという場所に差し掛かる。ここは東西に高い山があり谷間に一つの細道が通っている。その左右の山には谷間の細道を往く者を攻撃できるよう、弩弓を多く設置した。津高郷を後ろに控えるこの谷口は沼になっており、屈強の城地だった。兼康はここを軍兵に守らせ、自分自身は辛川宿近くの板蔵城に籠って、木曾義仲の軍勢が来るのを待ち受けていた。	城　（〈備前 174〉鳥山城跡ヵ） 板蔵城（400 板倉桝形城跡ヵ）		寿永二年（鎌倉中・末期）	1183 年（13 世紀中～後期）	13・135
3	『源平盛衰記』古巻第三三　兼康板蔵城戦事	木曾三百余騎にて（中略）和気の渡を打渡し、可真郷へ打入て福輪寺阡を見れば、堀掘切て逆母木引、たやすく爰を難通、如何して関道を知らんとて、其辺を打廻て里人を尋けるに、可真郷の住人に、惣官頼隆と云者を尋出して云けるは、（中略）彼を責んとするに、きと道を得ず、通り道ありなんやと宣へば、候なんとて即頼隆山しるべして先陣に進み、北路に懸り鳥岳と云所を廻て、佐々の井より時を咄と造懸て、佐々が迫を責たりけり。（中略）佐々迫を攻落して、唐皮宿、板蔵城に押寄て時を造る。妹尾思儲たる事なれば、矢たばね解て散々に射る。	木曾義仲が三百余騎を率いて和気の渡を越えて可真郷に入り、福輪寺の阡を見ると、堀を掘り切って逆茂木が引いてあり、たやすく突破できそうになかった。何とか間道を探そうとして可真郷の惣官頼隆なる者を尋ね出し、通り道はないかと聞くと、ありますと言うので木曾軍は頼隆を先陣として鳥岳という場所を廻り、笹ヶ瀬川の井堰付近から鬨の声を挙げて佐々が迫の妹尾軍を攻めた。木曾軍は佐々の迫を攻め落とし、辛川宿、板蔵城に押し寄せた。妹尾兼康はこうなると予測して心づもりしていたので、矢を散々に射て応戦した。	板蔵城（400 板倉桝形城跡ヵ）		寿永二年（鎌倉中・末期）	1183 年（13 世紀中～後期）	13・53・135

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
4	『太平記』巻第十四　諸国朝敵蜂起事	同十一日〔異本：二十一日〕、備前国住人児嶋三郎高徳ガ許ヨリ、早馬ヲ立テ申ケルハ、「去月二十六日、当国ノ住人佐々木三郎左衛門尉信胤・同田井新左衛門尉信高等、細川卿律師定禅ガ語イヲ得テ備中国ニ打越、福山ノ城ニ楯籠ル間、彼国ノ目代先手勢計ヲ以テ合戦ヲ致ト雖モ、国中ノ勢催促ニ随ハズ。無勢ナルニ依テ引退ク刻、朝敵勝ニ乗シ間、目代ガ勢数百人討死シ畢。其翌日〔異本：其日〕ニ小坂・河村・庄・真壁〔異本：草壁〕・陶山・成合・那須・市川以下、悉ク朝敵ニ馳加ル間、程ナク其勢三千余騎ニ及ベリ。爰ニ備前国ノ地頭・御家人等、吉備津宮ニ馳集テ、朝敵ヲ相待処ニ、浅山備後守〔異本：浅山備前守または陶山備中守高直。浅山備後守の名を条就とする異本有〕、備後ノ国ノ守護職ヲ賜テ下向スル間、其勢ヲ并テ、同二十八日、福山ニ押寄責戦〔○異本：シ〕日、高徳ガ一族等大手ヲ責破テ、已ニ城中ニ打入ル刻、野心ノ国人等、忽ニ翻テ御方ヲ射ル間、目代浄智ガ子息七条弁房・小周防ノ大弐房・藤井六郎・佐井七郎以下三十余人、搦手ニ於テ討レ候畢。官軍遂ニ戦ヒ負テ備前国ニ引退、三石ノ城ニ楯籠ル処ニ、当国ノ守護松田十郎盛朝・大田〔異本：朝田または多田または松田〕判官全職・高津入道浄源〔異本：道源または浄円〕当国ニ下著シテ、已御方ニ加ル間、又三石ヨリ国中へ引返、和気ノ宿ニ於テ、合戦ヲ致ス刻、松田十郎敵ニ属スル間、官軍数十人討レテ、熊山ノ城ニ引籠ル。其夜、当国ノ住人内藤〔異本：内原または内原内藤〕弥二郎、御方ノ陣ニ有ナガラ、潜ニ敵ヲ城中へ引入貴刻間、諸卒悉行方ヲ知ラズ没落候畢。高徳一族等此時纔ニ死ヲ免ル者身ヲ山林ニ隠シ、討手ノ下向ヲ相待候。若早速ニ御勢ヲ下サレズバ、西国ノ乱、御大事ニ及ブベシ。」トゾ申タリケル。	建武二年十一月二十六日、備前国の住人佐々木信胤・田井信高らが足利尊氏方の細川定禅と結んで備中国に入り、福山城に立て籠った。備中国の目代が合戦を挑んだが、無勢で引き返した。備前国の地頭御家人等が備後国守護浅山備後守の軍勢と合同して十一月二十八日に福山城に押し寄せ攻め戦った。児島高徳の一族も大手を攻め破って城中に突入したが、味方から裏切り者が出て、搦手方面から攻撃中の武将が討死した。官軍は福山城攻めに失敗して備前国に退却し、三石城に立て籠った。官軍は備前国守護松田盛朝らを味方に加え和気宿で合戦したが、盛朝らが敵に寝返ったため、熊山城に引き籠った。ここでも内藤弥二郎が敵軍を城中に引きいれたので、官軍は没落した。	福山城（415 福山城跡） 三石城（〈備前 162〉三石城跡） 熊山城（〈備前 150〉熊山城跡）		建武二年（応安四年ごろ）	1335 年（1371 年ごろ）	13・53・79・104
5	『太平記』巻第十六　児島三郎熊山挙旗事　付船坂合戦事	四月十七日ノ夜半許ニ、児島三郎高徳、己ガ館ニ火ヲカケテ、僅ニ十五騎ニテゾ打出ケル。（中略）今木・大富・和田・射越・原・松崎ノ者共、取物モ不取敢馳著ケル間、其勢二百〔異本：三百〕余騎ニ成ニケリ。兼テハ夜中ニ熊山へ取上リ、四方ニ篝火ヲ焼テ、大勢籠リタル勢ヒヲ、敵ニミセント巧ミタリケルガ、（中略）夏ノ夜程ナク明ケレドモ、無力相図ノ時刻ヲ違ジトテ、熊山へコソ取上リケレ。如案三石・舟坂ノ勢共是ヲ聞テ、（中略）三千余騎ヲ引分テ、熊山へゾ向タリケル。（中略）相図ノ日ニモ成ケレバ、脇屋右衛門佐ヲ大将トシテ、梨原へ打莅ミ、二万騎ノ勢ヲ三手ニ分タル。（中略）江田兵部大輔ハ、三千余騎ニテ美作国へ打入テ、奈義能山・菩提寺二箇所〔異本：三ヶ所〕ノ城ヲ取巻給フ。彼城モスベキ様ナケレバ、馬・武具ヲ捨テ、城ニ連タル上ノ山へゾ逃上リケル。脇屋右衛門佐義助ハ、五千余騎ニテ三石ノ城ヲ責ラル。大江田式部大輔ハ、二千余騎ニテ備中国へ打越、福山ノ城ニゾ陣ヲ被取ケル。	四月十七日の夜半、児島高徳は自分の居館に放火して、わずか二十五騎を引き連れて出陣した。今木・大富・和田・射越・原・松崎の一党が、取るものもとりあえず馳せ参じたので、高徳の軍勢は二百余騎に増加した。予定では夜中に熊山へ登ってかがり火を炊き、いかにも大軍が籠っているかのように敵に思わせる算段だったが、夏の夜はすぐに明けてしまい、仕方なく相図の時刻通りに熊山へ登った。思った通り、三石・舟坂の足利方軍勢はこれを聞いて、三千余騎の兵を割き、高徳を討つべく熊山へ派遣した。高徳と示し合わせていた脇屋義助(右衛門佐)は、相図の日取りになったので、梨ヶ原に出撃し、二万騎の軍勢を三手に分けた。その一手である江田兵部大輔は、三千余騎を率いて美作国へ進出し、奈義能山・菩提寺の両城を包囲した。城方は防ぐ手立てもなかったので、馬も武具も捨てて城の背後に連なる高い山に逃れた。脇屋義助自身も五千余騎を率いて三石城を攻撃した。大江田式部大輔も二千余騎を連れて備中国へ攻め込み、福山城に布陣した。	己ガ館（和田城跡ヵ） 熊山　（〈備前 150〉熊山城跡） 奈義能山（〈美作 296〉名木ノ城・〈美作 301〉大別当城） 菩提寺（〈美作 300〉菩提寺城） 三石ノ城（〈備前 162〉三石城跡） 福山ノ城（415 福山城跡）		建武三年（応安四年ごろ）	1336 年（1371 年ごろ）	53・104

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
6	『太平記』巻第十六　備中福山合戦事	五月十五日ノ宵ヨリ、左馬頭直義三十万〔異本：廿万〕騎ノ勢ニテ、勢山ヲ打越ヘ、福山ノ麓四五里ガ間、数百箇所ヲ陣ニ取テ、篝ヲ焼テゾ居タリケル。（中略）夜已ニ明テ後、先備前・備中〔異本：備中備後〕ノ勢共、三千余騎ニテ押寄セ、浅原峠ヨリゾ懸タリケル。（中略）国々ノ勢一方＼／ヲ請取テ、谷々峰々ヨリ攻上リケル。城中ノ者共ハ、兼テヨリ思儲タル事ナレバ、雲霞ノ勢ニ囲マレヌレ共少モ不騒、此彼ノ木陰ニ立隠レテ、矢種ヲ不惜散々ニ射ケル（中略）敵ニ矢種ヲ尽サセント、寄手ハ態射ザリケレバ、城ノ勢ハ未ダ一人モ不手負。大江田式部大輔是ヲ見給テ、「サノミ精力ノ尽ヌサキニ、イザヤ打出テ、左馬頭ガ陣一散シ懸散サン。」トテ、城中ニハ徒立ナル兵五百余人ヲ留テ、馬強ナル兵千余騎引率シ、木戸ヲ開カセ、逆木ヲ引ノケテ、北ノ尾ノ殊ニ嶮キ方ヨリ喚テゾ懸出ラレケル。一方ノ寄手二万余騎是ニ被懸落、（中略）式部大輔是ヲバ打捨、「東ノハナレ尾ニ二引両ノ旗ノ見ルハ、左馬頭ニテゾ有ラン。」トテ、二万余騎磬ヘタル勢ノ中ヘ破テ入リ、時移ルマデゾ闘レケル。（中略）大勢ノ中ヲ颯ト懸抜テ御方ノ勢ヲ見給ヘバ、五百余騎討レテ纔ニ四百騎ニ成ニケリ。爰ニテ城ノ方ヲ遙ニ観レバ、敵早入替リヌト見ヘテ櫓・掻楯ニ矢ヲ懸タリ。式部大輔其兵ヲ一処ニ集メテ、「今日ノ合戦今ハ是迄ゾ、イザヤ一方打破テ備前ヘ帰リ、播磨・三石ノ勢ト一ニナラン。」トテ、板倉ノ橋ヲ東ヘ向テ落給ヘバ、敵二千騎・三千騎、此彼ニ道ヲ塞デ打留ントス。（中略）サレ共兵モサノミ討レズ、大将モ無差リケレバ、虎口ノ難ヲ遁テ、五月十八日ノ早旦ニ、三石ノ宿ニゾ落著ケル。左馬頭直義ハ、福山ノ敵ヲ追落シテ、事始ヨシト悦給事不斜。（中略）五月十八日晩景ニ、脇屋右衛門佐三石ヨリ使者ヲ以テ、新田左中将ノ方ヘ立テ、福山ノ合戦ノ次第、委細ニ註進セラレケレバ、其使者驚テ馳返テ、「白旗・三石・菩提寺ノ城未責落ザル処ニ、尊氏・直義大勢ニテ舟路ト陸路トヨリ上ルト云ニ、若陸ノ敵ヲ支ン為ニ、当国ニテ相待バ、舟路ノ敵差違テ帝都ヲ侵サン事疑ナシ。只速ニ西国ノ合戦ヲ打捨テ、摂津国辺マデ引退、水陸ノ敵ヲ一処ニ待請、帝都ヲ後ニ当テ、合戦ヲ致スベク候（中略）」トゾ、被仰タリケル。	五月十五日の宵に、足利直義が三十万騎の軍勢を率いて勢山（妹山。倉敷市と矢掛町の境）を越え、福山の麓四、五里の間に布陣した。夜明けの直後、足利方の備前・備中の軍勢三千余騎が浅原峠から福山に攻めかかった。諸国の軍勢も、それぞれの持ち場を受け取り、谷々峰々より攻め上った。城中の人たちは、かねてより覚悟していたので、雲霞のような大軍に囲まれても騒がず、あちこちの木陰に隠れて矢を惜しまず散々に射た。足利方は、籠城軍の矢を尽きさせる目的で、わざと反撃しなかったので、籠城兵に一人も負傷者はいなかった。福山城を守る大江田氏経（式部大輔）はこの様子を見て「それほど精力が尽きないうちに出撃して、足利直義の陣をけ散らしてしまおう」と考え、城中に歩兵をとどめ、騎兵千余騎を率いると、木戸を開き逆茂木をどかせて北の尾根の険しいところから喚声をあげて出撃し、寄せ手二万余騎を懸け落とした。さらに大江田氏経は「東側の離れた尾根に二引両の旗が見える。これは足利直義にちがいない」とみて敵中へ突入し、しばらくの間戦った。氏経が敵の大軍の中を颯爽と駆け抜けて味方の軍勢の様子を見ると、五百余騎が討たれてわずか四百騎に減っていた。城の方を遙かに見渡すと、敵勢が早くも入れ替わって攻め寄せたとみえ、櫓や掻楯が放火され燃えていた。氏経は味方の兵を一ヶ所に集め「今日の合戦はこれまでだ。いざ敵軍の一方を打ち破って備前国へ帰り、播磨国や三石にいる味方と合流しよう」と言って、板倉の橋を東へ向かって落ち延びようとした。そこで足利直義方の二～三千騎は、あちこちで道をふさいで大江田氏経を討ち留めようとした。しかし、それほど被害もなく、氏経は虎口の難を逃れて、五月十八日の早朝に三石の宿へ落ち着いた。足利直義は福山城の敵を追い落とすことが叶い「事始めとして上出来だ」と、この上なく喜んだ。五月十八日の夕方、脇屋義助（右衛門佐）は三石の陣から使者を出し、新田義貞（左中将）へ福山城合戦の詳細を報告した。すると、その使者がやがて戻ってきて新田義貞からの命令をもたらした。「自分たちが白旗・三石・菩提寺城を攻め落とせないうちに、足利尊氏・直義が大軍をもって海陸両方から攻め上っている状況で、もし陸路の敵を防ごうとして備前国にとどまれば、海路からの敵が素通りして京都を侵略することは間違いない。速やかに西国での合戦をやめ摂津国あたりまで引き返し、水陸の敵を一ヶ所で待ち受け、京都を背にして合戦をするのがよい」との命令だった。	福山（415 福山城跡） 三石　（〈備前 162〉三石城跡） 菩提寺ノ城（〈美作 300〉菩提寺城）		建武三年（応安四年ごろ）	1336 年（1371 年ごろ）	53・104
7	『梅松論』	宰府に三月三日より、四月三日まで御座ありし時分（中略）又備前の国三石の大将尾張親衛同申て云、新田脇屋大将として【○異本：当城に】むかふ間、兵粮用意なきよし赤松と同申（中略）漸五月五日の夕備後の鞆に御着有（中略）すでに敵播磨・備前両城を囲むよし其告あり（中略）五月十五日備前国児島に着給ふ、当所は佐々木の一族の所領なる間、加地筑前守渚近く仮御所を造、御風呂抔たて御休息あり（中略）五月十七日に下御所の御陳、備中の河原と備前の児島の間三里、下御所より御使あり、当手には備中・備後・安芸・周防・長門、大将・守護人・国人等并三浦介、美作国より昨日馳参ず、太宰少弐・大友供奉の間、御勢数をしらず候、（中略）但播磨の赤松、備前の三石の城合戦の最中のよし聞え候処に、結句新田・江田某、大将として馳下て近日備中の福山に楯籠間、今夕手分せしめ、明日払暁に追落し火をあぐべく候、（中略）去程に翌日十八日（中略）下部走下て云、既御方の大勢福山を責落して飛入て火を放間、敵皆落行よし申あげたり、（中略）則陸地の御勢備前国へ責入給ひしかば、三石の城の寄手脇屋没落すと聞えしかば、下御所より飛脚を以賀し申さる　※【当城に】の部分は、出典覧の『大日本史料』掲載本文のみにあり	延元元年（1336 年）四月三日。備前国三石の大将石橋和義（尾張親衛）から、脇屋義助を大将とする新田軍が三石城に向かっているが兵糧の用意がない旨、足利尊氏に通報があった。五月五日ごろには、城が敵に囲まれたとの報が、備後の鞆の浦にいた尊氏のもとにもたらされた。尊氏は五月十五日に備前国児島に到着した。ここは佐々木一族の所領だったので、尊氏は佐々木加地筑前守が海岸近くに用意した仮御所に入り、風呂などを使って休憩した。五月十七日には備中国の河原に陣取っていた足利直義（下御所）から尊氏のもとに使者が来訪した。使者が言うには、直義の軍に備中・備後・安芸・周防・長門の大将・守護・国人が参加し、美作国の三浦介も昨日馳せ参じ、九州の少弐・大友氏も従い、数え切れないほど大軍になっているという。播磨国の赤松氏からの報告では、備前国の三石城は新田軍との合戦の最中とのことだったが、近日新田一門の江田氏を大将とする一軍が馳せ下り、備中国福山に立て籠もっていた。そこで直義は、明日払暁にも福山から新田勢を追い落とし、火の手を上げる旨、尊氏に通告した。翌十八日、尊氏のもとに下部が走り込み、味方の軍勢がすでに福山を攻め落とし、城中に飛び込んで火を放ったので、敵軍はみな落ち延びた、と報告してきた。ただちに陸地を進む足利軍が、備前国に攻め込んだところ、三石城を囲んでいた脇屋義助の軍勢は没落したとのことで、直義は尊氏あてに飛脚を派遣して戦勝を祝賀した、という。	備前の国三石・当城・三石の城（〈備前 162〉三石城跡） 仮御所 福山（415 福山城跡）		建武三年（南北朝時代末期）	1336 年（14 世紀後半ごろ）	43・53・80

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
8	『太平記』巻第三十八諸国宮方蜂起事　付越中軍事	山陽道ニハ同年六月三日ニ、山名伊豆守時氏五千余騎ニテ、伯耆ヨリ美作ノ院庄へ打越テ国々へ勢ヲ差分ツ。先一方へハ、時氏子息左衛門佐師義ヲ大将ニテ、二千余騎、備前・備中両国へ発向ス。一勢ハ備前仁万堀〔異本：仁ノ堀〕ニ陣ヲ取テ敵ヲ待ニ、其国ノ守護勢、松田・河村・福林寺・浦上七郎兵衛行景等、皆無勢ナレバ、出合テハ叶ハジトヤ思ケン。又讃岐ヨリ細河右馬頭頼之、近日児嶋へ押渡ルト聞ユルヲヤ相待ケン。皆城ニ楯籠テ未曾戦。一勢ハ多治目備中守〔異本：田地目ノ備中守〕、楢崎ヲ侍大将ニテ、千余騎備中ノ新見へ打出タルニ、秋庭三郎〔異本：秋庭肥後守〕多年拵スマシテ、水モ兵粮モ卓散ナル松山ノ城へ、多治目・楢崎ヲ引入シカバ、当国ノ守護越後守師秀可戦様無シテ、備前ノ徳倉〔異本：得倉〕ノ城へ引退ク刻、郎従赤木父子二人落止テ、思程戦テ遂ニ討死シテケリ、（中略）、只陶山備前守許ヲ、南海ノ端ニ添テ僅ナル城ヲ拵テ、将軍方トテハ残リケル。	六月三日、山名時氏が軍勢を率いて美作国院庄へ出張し、国々へ兵を差し向けた。時氏の子・師義を大将とする軍の一隊は備前国仁堀に陣取った。備前国守護の軍勢および松田・河村・福林寺氏や浦上行景は、みな城に籠って山名軍と戦わなかった。備中では秋庭三郎（または肥後守）が多年にわたって築造し水も兵糧も潤沢な松山城に多治部・楢崎氏らを引き入れたので、備中国守護の高師秀は戦う術を失って備前徳倉城に退却した。備中ではただ陶山備前守だけが南海の端に小さな城を築き、幕府方として残っていた、という。	（守護勢、松田、河村、福林寺、浦上行景の）城 松山ノ城（158 備中松山城跡） 備前ノ徳倉ノ城　（〈備前 44〉徳倉城跡） 南海ノ端ニ添テ僅ナル城		康安二年（応安四年ごろ）	1362 年（1371 年ごろ）	83・105
9	森脇覚書	三村と穂田取あひ候時、三村へ為御加勢、元就様・元春様・隆景様いすへ井原迄御打出御陳候。三村先手にて猿懸へ相動候。其日、元春様御太将にて出被作候。穂田衆罷出、三村衆を追崩罷退候。御本手衆も歴々被参候。志道二郎四郎・桂新五左衛門・臼井藤二郎と申人打死候。其外数多越度候。元春様ハ屋かけと所ニ御ひかへ候て、少高き所御打上、御そばにハ桂上総殿被居候。御はたをも見ず、歴々の衆、逃退被申由、後御沙汰候。元春様御［手偏＋只］候故、敵相退、味方運をひらき申之由候。是ハ防州・雲州御陣よりも前之事と承候。	天文二十一年の猿掛城合戦についての回想。三村氏と穂田氏とが抗争した際、三村氏に加勢するため、毛利元就・吉川元春・小早川隆景らが出部・井原まで出撃し、陣を構えた。三村氏は毛利軍の先陣となって穂田氏の居城である猿懸城へ攻め寄せた。ある日、吉川元春が大将となって前線に赴いた。これに対し、穂田氏も出撃して毛利方の先鋒三村軍を撃破して城へ戻った。この日の戦いには毛利氏本隊（御本手衆）も参加しており、志道元信（二郎四郎）・桂新五左衛門・臼井藤二郎らが討死し、その他の武将もたくさん戦死した。毛利軍は味方の旗も見ず敗走する有様だったが、元春が桂元忠（上総殿）を連れて矢掛（屋かけ）の少し高い場所に控えていたため、敵は深追いをやめて撤退し、味方は運を開くことができたのだという。この合戦は毛利氏による防州（大内氏）攻め・雲州（尼子氏）攻めよりも以前の出来事という。	猿懸（227 猿掛城跡）	森脇春方（春秀）	天文二十一年（元和四年）	1552 年（1618 年）	57・64・112
10	臼井氏系譜／『閥閲録』巻八十九臼井勘左衛門	神保対馬守就俊　始弥九郎　又右衛門（藤兵衛）（中略）天正年中保井田・三村合戦之時、為御加勢臼井豊後守嫡子藤次郎、御人数被召加被差出候処、備中猿懸之城にて戦死仕候、藤次郎無嗣子、女子有之ニ付、神保弥九郎藤次郎娘ニ嫁、臼井之家相続被仰付候	天文年中（天正は誤り）、穂田氏と三村氏とが抗争していた時、毛利氏は三村氏に加勢した。その時毛利氏が派遣した援軍に臼井豊後守の嫡子藤次郎も参加させられたが、藤次郎は備中猿掛城の戦いで戦死してしまった。この臼井藤次郎には後継となる男子がなく娘だけがいたので、神保就俊（弥九郎）がこの娘と結婚して臼井の家を相続するよう、毛利氏から命じられたという。	備中猿懸之城　（227 猿掛城跡）	永田政純	天文二十一年（享保十一年）	1552 年（1726 年）	107
11	佛通禅寺住持記　報	自三月十三日、毛利父子、小早川隆景至備中松山取懸、少輔又六父子生害、	安芸国佛通寺の歴代住持が書き継いだ年代記。永禄二年三月十三日から毛利元就・隆元父子と小早川隆景が備中松山城を攻撃し、庄又六父子を自害させた、という。 ※「少輔又六」は「庄又六」の当て字	備中松山（158 備中松山城跡）	佛通寺住持	永禄二年（同時代か。写本成立年代は延享二年）	1559 年（同時代か。写本成立年代は 1745 年）	126
12	桂岌円覚書	三村修理家親と同国穂イ田庄取合に付て、家親へ御加勢成され、備中江原まで元就様、隆元様御出張成され、其響に三村、庄和睦仕り、御両殿様御帰陣成され、十日の内小笠原へ御出張成され候。	三村家親（修理進）と備中国の穂田庄氏が合戦に及んだので、毛利氏は家親に加勢して備中国荏原まで毛利元就・隆元父子が出陣した。その影響で三村・庄氏は和睦したので、元就・隆元の両殿様は帰陣し、十日後には石見国小笠原氏討伐に出陣した、という。	（227 猿掛城跡）	桂元盛（岌円）	永禄二年（元和八年）	1559 年（1622 年）	58・65・112
13	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八千城七	中島新左衛門尉。代々備中国居住仕候。賀陽郡之内三十貫致所知、同郡小寺片山在城仕候。毛利陸奥守元就幕下に罷成り同郡之侍大将庄伊豆守・同兵部大夫、尼子方に成り、雲州勢之先陣仕、国中毛利家方之城に攻取申時、中島居城へ押来節、遂防戦、尼子勢追崩、数百打取、加増給候由。感状今に所持仕候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。治大夫の先祖中島新左衛門尉は代々備中国に居住して賀陽郡内で３０貫の所領を保持し、同郡の小寺片山城に在城していた、という。新左衛門尉は毛利元就の配下になったが、庄伊豆守・庄勝資（兵部大夫）は尼子方になり、尼子軍（雲州勢）の先陣を務めて備中国中の毛利方の城を攻め取った。この時、尼子軍が中島氏の居城にも押し寄せたが、中島新左衛門尉は防戦をとげて尼子勢を追い崩し、数百人を討ち取って毛利氏より所領を加増された、という。その時もらった感状を、今も治大夫が所持しているという。	小寺片山・中島居城（344 小寺砦跡・346 中島氏居館跡）	中島治大夫	永禄六年（貞享年間）	1563 年（1684 ～ 1688 年）	30
14	渡辺道因奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』渡辺道因	私母方之祖父ハ渡部和泉か次男藤左衛門忠基、幼少ｙ三村家親ニ奉公仕、家親三男近江守方へ養子と成、鬼身へ入城之時、上田孫次郎実親と被号、藤左衛門ヲ家老ニナシ被付候、一乱前ニ病死仕候	岡山藩の医師渡辺道因が主家に提出した自家の履歴書。道因の母方の祖父を渡部忠基(藤左衛門。渡部和泉守の次男）といい、幼少より三村家親に仕えていた。家親の三男は上田近江守家実の養子となって鬼身城へ入城した際、上田孫次郎実親と名乗ったが、実親は渡部忠基を家老として遇した、という。忠基は備中兵乱（天正二～三年）が起こる前に病死した、という。	鬼身（270 鬼身城跡）	渡辺道因	戦国後期（寛文九年）	16 世紀後半（1669 年）	41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
15	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	一日幡の城へ加勢ニ本郷九郎左衛門と申さふらひ直家より被仰付御使を被成候ニ、直家様御使をハ被仰渡、其後本郷九郎左衛門ニ助兵衛様被仰候ハ、そこしんより御同心ならばこもらせられ候へと被仰渡候、（中略）九郎左衛門殿御返事ニ、あまり望ハ無之候へ共御さたならば不及是非と御返事被成候、（中略）助兵衛様直家様へ被仰上候ハ、九郎左衛門畏候とハ被申上候、あまり心中ニ請不被申と直家様へ被仰上て、其後誰をかると被仰候処ニ助兵様御望被成候を、直家様被仰候ハ、少キ者無用と被仰上とも是非共と被仰て御請を被成候、其より（中略）日幡へ御籠候ニ、伊賀甚右衛門其外一両人御加え候而こもらせられ日畑ノ城堅固ニ御持被成候由候、御年十八はかりと承及申候、それより日幡御りうんニ成候而より、備前山口・とわり・ゆつり三ケ村を助兵様へ被遣候、則山口之城を御こしらへて御もち被成、ならひの苅田・かるべ・ぬかた殿をてきニ被成候而日々御かせき御りうんニ被成候由候、（中略）一作州御取出被成、助兵様荒神山つめノ〔カ〕山御こしらへ被成候事書付上申候、	宇喜多直家が備中国の日幡城への加勢を本郷九郎左衛門に申し付けることになった。直家の命を伝える使者として花房職秀（助兵衛）が選ばれ、職秀が本郷氏に対し直家の意向を伝えると、積極的には望まないが命令とあれば従う、との返事だった。職秀は帰って直家に復命し、本郷氏は日幡城への加勢命令を承服したが、心中あまり乗り気でないようだ、と伝えた。それでは誰を日幡に置こうか、と直家が言ったので、職秀は自分が行きたいと望んだ。直家は若い者にはやらせない、と言ったが、是非ともやらせてくれと職秀が頼み込み、結局花房職秀が日幡城への加勢を請け負った。それより日幡へ籠城し、伊賀甚右衛門らの加番も得て城を堅固に維持し、目的を果たした。これは職秀が十八歳くらいの時のことだという。その時の褒美として職秀は直家から備前国山口・斗有・由津里をもらったので、山口の城を築城して維持し、近隣の苅田・軽部・額田氏と日々合戦し勝利した、という。その後、職秀は美作国へ進出し、荒神山城を築城した、という。	日幡の城（431 日畑城跡） 山口之城（詳細未詳） 荒神山（〈美作 250〉荒神山城跡）	小島次郎兵衛	永禄末～元亀三年ごろ（寛永拾八年六月十二日）	1567～1572 年ごろ（1641 年）	36
16	覚之次第／花房家記事	一是より直家様衆御成候而後御手柄の事、一一番に備中之内撫川をもりけ《傍注：按毛利家》よりもち申を、直家様より御人数被仰付候へ共、とりかね申所を助兵様御望被成被仰付、御せめおとし被成候事、	宇喜多氏の重臣花房職之が老後になって語った自身の戦歴を、その家臣が書き留めたもの。毛利氏が保持していた備中国撫川の城を、宇喜多直家が兵を出して攻めたものの、なかなか攻め落とせずにいた。そこで花房職之（助兵衛）が同城の攻略を志願し、これを攻め落とした、という。	撫川　（番号なし芝場城跡ヵ）	花房職之（筆記者は喜多島久左衛門）	永禄末～元亀三年ごろ（元和三年以前ヵ）	1567～1572 年ごろ（1617 年以前？）	36
17	覚之次第／花房家記事	一備中の内日幡ノ城主日幡八郎左衛門・森殿《傍注：按毛利》衆、則八郎左衛門備前へ御身方被申時なにかしにても加番ニ御入候ハんと直家様御家中御尋候時、助兵衛様御望被成加番ニ御入候而、堅固ニ御持つめ被成候、其時伊賀甚右衛門・あかゑだと申仁両人御つけ被成候、	同上。毛利方の備中国日幡城主の日幡八郎左衛門が、宇喜多氏に味方したいと申し出てきた。そこで直家は、誰かを日幡城に加番として入れようと考え、家中に尋ねたところ、職之が志願したので加番を任せた。職之は伊賀甚右衛門・赤枝氏と一緒に堅固に日幡城を維持した、という。	日幡ノ城（431 日畑城跡）	花房職之（筆記者は喜多島久左衛門）	永禄末～元亀三年ごろ（元和三年以前ヵ）	1567～1572 年ごろ（1617 年以前？）	36
18	楢崎景好御断書写／『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛	一私親三河守随分元就様・隆元様・殿様以来被遂御馳走候、（中略）中にも備後神辺之城、備中之藤井一類之者共、阿波之三好家之手合仕忍ひ取申候、（中略）則神辺之城へすかり、死人ておいむねとの者共八十余御座候つ、則切返し杉原兄弟入城させ申候、藤井一類備中高屋家城に取籠候之処、則取掛落去仕候	楢崎景好が毛利元就・隆元・輝元に従って尽力した父豊景（三河守）の武功を書き上げたもの。備後国神辺城が阿波三好氏に通じた備中藤井一族に乗っ取られた時、楢崎豊景はすぐに神辺城に攻め寄せ、死傷者８０名余を出しながら城を奪還し、杉原元盛・景盛兄弟を入城させた。そして、藤井一族が立て籠もる備中高屋の居城に攻めかかり、これを落城させたという。	備中高屋家城　（177 高屋城跡）	楢崎筑後守（景好）	永禄十二年（年未詳九月十八日）	1569 年（17 世紀初頭か）	107
19	桂岌円覚書	備中才田の城を三村持ち候を備前より取懸り候。後巻として庄元祐人躰にて罷り出で候処に、則ち一戦に及び備前衆勝利を得、三村の者共敗軍仕り候。其時庄元祐討死仕り候。	三村氏が維持していた備中才田城に、備前衆（浦上宗景・宇喜多直家）が攻めかかってきた。三村氏は庄元資（元祐は当て字）を大将とする軍勢を後巻きとして派遣し一戦に及んだが、備前衆が勝利して三村軍は負け、庄元資も討死した。	才田の城（76 才田城跡）	桂元盛（岌円）	元亀二年（元和八年）	1571 年（1622 年）	58・65
20	覚之次第／花房家記事	備中之内さいだ合戦、白中野相ニ而大鑓被成候、敵ハほいだ殿と申仁・森家衆	備中国佐井田城をめぐる穂田殿（庄元資）・毛利軍との合戦は、白昼の野戦で、花房職秀も大槍をふるって戦った、という。	さいだ（76 才田城跡）	（花房職秀）	元亀二年（元和三年以前ヵ）	1571 年（1617 年以前？）	36
21	氏名不詳某覚書／花房家記事	備中さい田の城、備前より宗影城をこしらへ人数こめをかれ候処ニ、もり殿より三村孫兵衛其外そふセいにてセめ申、すてにらつきよ可仕様ニ罷成候時、宗影へちうしん仕、備前衆悉うしろまきとしてさしつかわれ相たゝかい、則毛利殿衆きりくづしはいぐん仕候	浦上宗景が備中佐井田城を補修し、兵を入れて守らせていたところに、毛利方の三村親成（孫兵衛）らが総勢で攻め寄せてきた。落城が近い状態になった際、籠城衆が宗景に助けを求めたので、備前の軍勢がことごとく援軍として派遣され、毛利軍を切り崩し敗走させた、という。	さい田の城（76 才田城跡）	（宮山城番の某）※額田九郎兵衛ヵ	元亀二年（寛永十八年以前ヵ）	1571 年（1641 年以前？）	36
22	花房職利書状／備前正宗文庫所蔵文書	自身鑓を御合せ候事四度と承及候内、備中国さい田・伯州南谷、此両所覚候	花房職利が父職秀の武功に関する聞き伝えの記憶を記したもの。花房職秀が自ら槍をふるって戦ったのは四度で、そのうち二回は備中国佐井田城合戦と伯耆国南谷城合戦でのことだったと聞いた覚えがある、という。	さい田（76 才田城跡）	花房五郎左衛門職利	永禄十二～元亀二年（寛永十八年ヵ三月八日）	1569～1571 年（1641 年ヵ）	9

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
23	身自鏡	十七の歳は、正月十一日に、雲・伯の牢人共為御追罰被成御出張、勝久・鹿介、其外の者共追散し、被成御打果ける、（中略）元就様は六月十四日に、被成御他界、万民の愁歎申に計も無りけり、亦去年の一揆の残党、備中・備前の境に在之松島と云城に、宇喜田が人数千計差籠たり、先是を責伏べきとて、隆景様被成御発向、吉田よりも抜勢を被相添、其勢に被加我等立けり、彼松島と申城は、四方は大沼にて、其真中に高さ十丈余、広さ三町計、長さ五町程の山也、丸二つ在、北方の丸を城に誘へ、大堀二重ほり、練築地をつき、所々に高櫓を上げ、簀子を結、逆木を引、内には究竟の者共籠れり、（中略）又南方の丸は、本城よりも一ばい大也、夫迄大沼には、近方の家を壊て、竹木を寄せて大道を作り、尾頸の丸を御陳に被召、味方の我と思ふ者先懸して進みけり、予も人並に先前懸て渡しける、（中略）味方跡より続たりければ、敵は皆城の内へ引て入たりけり、	毛利氏家臣玉木吉保の覚書。吉保十七歳の年、毛利軍は出雲・伯耆の牢人討伐に出陣し、尼子勝久・山中鹿介を追い散らした。六月十四日には毛利元就が死去した。そのころ、去年毛利氏に刃向った人々の残党がいる備中・備前両国の境の松島という城に、宇喜多直家が千人ほどの軍勢を立て籠もらせていた。まずこれを攻め落とそうと小早川隆景が出陣し、吉田（毛利輝元）からも選抜された兵が添えられ、その中に吉保も加えられて出陣した。 この松島城は、四方が大沼に囲まれ、その真ん中にある高さ十丈余り、広さ三町、長さ五町ほどの山に築かれていた。「丸」（尾根上の空間か）が二つあり、北側の部分を城として造成し、大きな堀を二重に掘り、土を練った築地を設け、所々に高い櫓を建て、簀子を結って塀をつくり、逆茂木を引き、城内には屈強の兵が籠っていた。南側の部分は本城部分よりも一倍くらい大きいようだった。毛利軍は近所の家を壊した廃材と竹木を集めて大沼に大きな道を造り、尾頸（城の尾根続き）の空間に陣を敷き、我と思う者が先駆けして進軍した。吉保も人並みに真っ先に進んで敵と戦った。吉保の戦っている後方から、味方の後続部隊が進出してきたので、敵はみな城中へ引っ込んだ、という。	松島と云城・松島と申城（436 松島城・番号なし射越山城）	玉木吉保	元亀二年（元和三年）	1571 年（1617 年）	53・57・64
24	三村十助奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十三千城一二	石井彦左衛門。 備中松山城主三村修理進元親に奉公仕、同国上房郡竹之庄宝納村【室納村の誤植】之内にて知行高三百石被下罷在、天正元年、傍輩田中四郎兵衛と申者、備前加茂小倉之城主伊賀久隆と打果候節、能働御座候、為加増、則田中四郎兵衛跡式右竹之庄肥田村之内にて高二百石、同村久留見田と申所之家屋敷共に給候と承伝申候よし。	岡山藩士三村十助が主家に提出した奉公書。先祖の石井彦左衛門は備中松山城主三村元親（修理進）に仕え、備中国上房郡室納村で知行３００石を保有していたという。天正元年、傍輩の田中四郎兵衛が備前国加茂の虎倉城主伊賀久隆に討たれた際、彦左衛門は目覚ましい武功を立てたのだという。この働きに対する加増として、彦左衛門は田中四郎兵衛の遺領である竹庄肥田村のうち２００石と同村久留見田にある家屋敷とを一緒に給与された、と言い伝えられているという。	備中松山城（158 備中松山城跡） 備前加茂小倉之城（〈備前 25〉虎倉城跡） 久留見田と申所之家屋敷 （詳細未詳）	三村十助	天正元年（貞享年間）	1573 年（1684 ～ 1688 年）	30
25	渡辺道因奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』渡辺道因	一自享禄年中至天正二年迄、備中上房郡松山之城主ハ三村修理進源元親　知行高ハ不存 一同年代下道郡鬼ノ身之城主ハ上田近江守家実　右同断　　（中略）一私伯父上田将監光友ハ、生年十八歳迄者高田与十郎と申候、松山ニ而一番鑓ヲ仕、其時近江守大悦いたし、上田名字ヲ免、将監と号	岡山藩の医師渡辺道因が主家に提出した自家の履歴書。享禄年間～天正二年ごろ、備中国上房郡の松山城主は三村元親（修理進）、下道郡鬼身城の城主は上田家実（近江守）であった、という（それぞれの知行高は不明）。道因の伯父は十八歳まで高田与十郎を名乗り、備中松山城の戦いで一番槍の武功を挙げた。この活躍をみた主君の上田家実が大喜びして「上田」の名字を名乗ることを許したので、以後は「上田将監光友」を名乗った、という。	松山之城（158 備中松山城跡） 鬼ノ身之城（270 鬼身城跡）	渡辺道因	享禄年間～天正二年ごろ（寛文九年）	1528 ～ 74 年ごろ（1669 年）	41
26	佛通禅寺住持記　報	毛利小早川至備中口出張、松山尾州生害、其外国中侍衆生害也	安芸国佛通寺の歴代住持が書き継いだ年代記。天正三年、毛利輝元・小早川隆景が備中口へ出陣し、松山城の「尾州」＝三村尾張守元親を自害させ、国中の侍たちをも自決に追い込んだ、という。	松山（158 備中松山城跡）	佛通寺住持	天正三年（同時代か。写本成立年代は延享二年）	1575 年（同時代か。写本成立年代は 1745 年）	126

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
27	桂岌円覚書	（前略）三村阿州三好家を頼り、芸州へも御敵を仕るべき内存に候。然る時は三村一家の者共、御果し成され候はではとの儀に付て、備後境に候国吉と申す城へ、十二月廿七日に御取懸り成され候。当日より仕寄せ仰せ付けられ、きび敷御詰め成され候故、大晦日の夜、城主手之右京は人数上下廿人計りにて松山へ落ち行き候。城中のさはぎに付て、仕寄せの衆聞き付け、其儘乗崩し、残り居り候雑兵共、残り無く討果され候。さ候て正月二日に成羽へ御陣易成され、夫より外郡へ御陣易成され、鬼身に上野近江并に実親罷り居り候を取詰められ候処に、実親養父にて候上野近江入道未練を構へ、孫習と云ひ、養子に候実親に腹を切らせ、一身相助かり阿州へ罷り越し候。（中略）この響に荒平の城も明け退き候。石川久孝、三村元親姉習にて候つる。幸山に罷り居り候つる。是も程無く明け退き、（中略）家来の友野石見と申す者を頼り、阿州へ罷り退き度と申し候を、石見かへり忠仕り、隆景様へ申上ぐるに付て御人数遣はされ候。則ち相果され候。頸御本陣へ持たせられ候。其時輝元様は備中小田に御座成され候つる。同元親弟、是も同国新見ゆづりはと申す城に罷り居り候つ。籠城成らざるに付て、作州表をこゝろざし、退き候を所の者打果し、此頸も小田の御陣へ送り申し候。	天正二～三年の備中兵乱についての回想。三村氏は阿波三好家を頼り、毛利氏（芸州）へ敵対する内意を持っていた。こうなった以上、三村一族を討ち果たさなければならないということになり、天正二年十二月二十七日、毛利軍は備後国境に近い国吉城に攻めかかり、仕寄せを設けて厳しく包囲した。そのため、大晦日の夜、城主三村右京亮（手之右京）は松山城へ落ち延びた。その際の騒ぎに毛利方の仕寄せの衆が気付き、そのまま国吉城を攻め崩し、残留していた兵を残らず討ち果たした。その後正月二日に毛利軍は成羽に陣替し、そこから外郡（備中国南部）に移動して、上田近江入道・実親が守る鬼身城を包囲した。すると、近江入道は命が惜しくなって養子の上田実親を切腹させ、自分一人だけ助かって阿波国へ退去した。その影響で、荒平城も降伏開城してしまった。三村元親の姉婿で幸山城にいた石川久孝も城から退去し、家臣の友野石見守を頼って阿波国へ立ち退こうとした。ところ、石見守が逆心を起こし、小早川隆景に久孝の居場所を注進したため、毛利軍がやってきて久孝を討ち果たしてしまった。久孝の首は備中小田の毛利輝元本陣へ送り届けられた。また、三村元親の弟が新見楪城に居たが、籠城を続けられなくなって美作国を目指して退去しようとしたものの、在所の人たちに討ち果たされ、その首も小田の本陣に届けられた、という。	国吉と申す城　（135 国吉城跡） 松山（158 備中松山城跡） 鬼身（270 鬼身城跡） 荒平の城（272 荒平山城跡） 幸山（414 幸山城跡） 新見ゆづりはと申す城（8 楪城跡）	桂元盛（岌円）	天正二～三年（元和八年）	1574～1575 年（1622 年）	58・65
28	身自鏡	三村為御対治の備中へ被向御馬。（中略）手と端城成羽と云端城へ一首、　取懸は驚て和平に成羽故手にもたまらぬ敵の躰哉成羽孫兵衛尉と云者は、吉田馳走の者なれば、和談する也。	毛利軍が三村元親を退治するため備中国に出馬し、手という端城と成羽という端城に迫った際、一首の狂歌を詠んだ。成羽孫兵衛（＝三村親成）は以前から毛利氏のために尽していた人なので、和談となったのだという。	手と端城（135 国吉城跡） 成羽と云端城　（126 鶴首城跡）	玉木吉保	天正二～三年（元和三年）	1574～1575 年（1617 年）	57・64
29	氏名未詳功名覚書／備中荘家文書	毛利中納言様御内宍戸備前守先手ニて津々城御せめ被成候刻、鳥越久兵衛私両人、其外侍共五人加仕、寄場見立候様ニと被申付、足軽共食連罷出候処、城中ｙ物見を出追付、てき出合、則右之者一所ニ取合鑓を仕、てきを追込仕、寄場を取申候、其後外かわを乗取申刻、へいきわニて猶【楯ヵ】崎吉右衛門尉と申者討死候、私者鑓手をおい申候へ共、一番ニ外かわ乗申候（後略）	備中兵乱時に毛利軍が津々城を攻めた際、宍戸隆家（備前守）の部隊に所属して参戦した人物の書き残した体験記。城攻めのための「寄場」を見立てるため足軽を連れて出立した彼は、城中から偵察のため出てきた城兵と渡り合い、これを追い返して「寄場」を確保した。その後の城攻めで彼は、一番に外郭を突破したという。	津々城（77 加葉山城跡・100 津々城跡）		天正二～三年（年月日欠）	1574～1575 年（成立年未詳）	7
30	福間元明自筆覚書写／『閥閲録』巻八十三　福間彦右衛門	手之城にて頸一ツ取申候事	毛利氏家臣の福間元明（彦右衛門）が、天正二～三年の備中兵乱の際、国吉城攻めに参加して敵の首を一つ獲得したことを書きとどめたもの。	手之城（135 国吉城跡）	福間元明	天正二～三年（天正十四年春）	1574～1575 年（1586 年）	107
31	横見氏系譜／『閥閲録』巻百十四横見権左衛門	天正年中三村御退治之節、隆景公より備中手之城被成御預候由申伝候	萩藩家臣横見氏の系譜。先祖の横見和泉守（弥三郎・助右衛門・三郎右衛門）は小早川隆景に仕え、天正年間の備中三村氏討伐の際、隆景から国吉城（手之城）を預けられたという。	手之城（135 国吉城跡）	永田政純	天正三年（享保十一年）	1575 年（1726 年）	108
32	御答書／岩国徴古館所蔵文書	幸山ニ居候石川、山ヲ明ケ退キ阿州へ志、船手ニ至罷越候へ共、方角不案内ニ付て数代ノ家人友野石見と申者ヲ頼ミ、彼者所へ越候ヲ、可被頼由ニて呼越候て、則隆景公江申上候ニ付て、備後衆一両人被遣被討果候、右ニ申候松山城も明退キ候、城主をハ地下人討果し首隆景公陣所江持セ候、松山一城ニナリ家来ノ者も散々ニ成候ニ付て、元親も夜ニ紛レ山を出候て峯より磊と行歩も不成候ニ付て、麓ニ頼久寺と申寺候へ、罷越たるニ介妙仕下候へと被申候、（中略）是ニテ三村一家不残相果て備中一国御隙明候、猿懸ノ城ニハ元清公被成御座候、石川一家ノ儀隆景公へ被遣、幸山ノ城ニハ自隆景公坪生和泉・国弘隠岐両人ヲ被為置候、（中略）国吉ノ城ニハ口羽中務大夫春良被為置候	毛利氏家臣の覚書。天正三年（1575）。幸山城にいた石川久式は、城から脱出して阿波国を目指して落ち延びようと考え、船手のいる場所までたどり着いたが、方角が不案内だったので譜代の家臣友野石見守を頼った。ところが、友野氏は即座に久式の来訪を小早川隆景に密告したため、隆景が派遣した備後衆によって、久式は討ち果たされた。松山城は一つだけ取り残され、家来も散り散りになった。そのため、城主三村元親は夜の闇にまぎれて城を脱出したが、峯から転げ落ちて歩行も不自由になった。元親はここで観念し、「麓の頼久寺という寺まで行くので介錯してほしい」と毛利軍に申し入れた。こうして三村一族は残らず滅び、備中一国の戦乱は収まった。猿掛城には穂田元清が在城することになり、石川家の遺領は小早川隆景に与えられ、幸山城は隆景から派遣された坪生和泉守・国弘高実（隠岐守）が守ることになった。国吉城には口羽春良が配置されることになった、という。	幸山・幸山ノ城（414 幸山城跡） 松山城（158 備中松山城跡） 猿懸ノ城（227 猿掛城跡） 国吉ノ城（135 国吉城跡）	（桂源右衛門または粟屋越後守か）※出典田村氏論文による推定	天正三年（寛永十一年）※成立年は出典田村氏論文による	1575 年（1634 年）	94・113

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
33	三村十助奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十三千城一二	天正二年、元親と毛利輝元公と対陣にて、小早川隆景松山之城へ発向之節、一番に鑓を合、宗徒之敵打伏、其身も鑓疵負候、無双之忠節之由。就夫為加増、有漢田田〔マヽ〕跡式遣候と、天正三年正月六日之感状、爾今御座候。右感状之加増に取申候郷田田跡式は、備中上房郡有漢之内金倉村にて高三百石、都合八百石にて、右竹之庄之内徳元と申所に、少々かき上仕罷在候由、爾今所之者徳元之城は石井が城と申伝候。其後元親一家之内、并元親之家老三村孫兵衛と申者裏ぎり、松山及落城、元親切腹家来分散仕候。	岡山藩士三村十助が主家に提出した奉公書。天正二年、三村元親と毛利輝元が対陣し、毛利方の小早川隆景が備中松山城へ発向してきた際、十助の先祖石井彦左衛門は毛利兵と一番に鑓を合わせ、主立った敵将を討ち伏せ、自分も負傷した。この働きは三村元親から無双の忠節と称えられ、天正三年正月六日付けで感状を与えられ、所領の加増を受けたという。この時彦左衛門が加増分としてもらった某氏の遺領（跡式）は、上房郡有漢のうち金倉村３００石で、これ以降彦左衛門は合計８００石の知行を領有し、竹庄の徳元という場所に、ちょっとした掻き上げの城を構築して居城していた、という。現在もその土地の人は、徳元の城のことを石井氏の城と言い伝えているという。その後、三村元親の一族で家老を務めていた三村孫兵衛（親成）が裏切ったため、松山城は落城し、元親も切腹して家来は散り散りになったのだという。	松山之城（158 備中松山城跡） 徳元之城（詳細未詳）	三村十助	天正二～三年（貞享年間）	1574～1575年（1684～1688年）	30
34	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八千城七	備中松山城主三村修理をば、天正二年、信長公味方に成て毛利家逆心、国中之数城、備前常山城、所々へ楯籠り之時毛利輝元・小早川佐衛門尉、備中へ出馬、所々之城攻給時中島大炊助為案内者、先陣仕、度々戦御座候故、千貫加増仕候由、感状子今所持仕候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。備中松山城主三村元親（修理）は天正二年織田信長の味方になって毛利氏に反逆し、備中国中の数城・備前常山城など所々に楯籠もった。この時、毛利輝元・小早川隆景は備中国に出馬し、所々の城を攻撃したが、中島大炊助は備中方面の案内者として毛利軍の先陣を務め、たびたびの合戦に参加したので、毛利氏より 1000 貫の所領を加増された、という。その時の感状を治大夫が所持している、という。	備中松山城（158 備中松山城跡） 常山城（〈備前 240〉常山城跡）	中島治大夫	天正二～三年（貞享年間）	1574～1575年（1684～1688年）	30
35	山県長茂覚書／石見吉川家文書	山中鹿助毛利殿御被官ニと望ニ付、輝元様御座所備中松山へ被送着、天野元明ニ被仰付、あいの渡にて被討果之事	毛利輝元の御座所になっていた備中松山城に山中鹿助が護送され、結局毛利氏に許されず「あいの渡」で殺害された経緯を記録したもの。	備中松山（158 備中松山城跡）	山県源右衛門尉入道長茂	天正六年（寛永二十一年十一月十一日）	1578年（1644年）	73
36	桂岌円覚書	輝元様は備中の松山迄御出張成され、隆景様、元春様御人躰にて諸勢召具せられ、神月御取詰め成され候。（中略）鹿介又色々懇望致し、勝久、助四郎、其外雲州牢人共、芸州へ不忠の者五三人、勝久同前に打果し、鹿介は一命助かり、防長の間へと候て指下され候。是は隆景様、元春様御分別にて斯の如くに候へ共、輝元様兎角鹿介事は相果し成され候はではと思召すに付て、松山の麓あへの渡りにて仰せ付けられ候。	毛利輝元は備中松山城まで出陣し、小早川隆景・吉川元春を大将として諸勢を引率させ、上月城を包囲した。上月城に籠城していた山中鹿介が降伏を願い出たので、尼子勝久・弟の尼子助四郎・その他出雲国の牢人や毛利氏に不忠の者は討ち果たしたが、鹿介の命は助け、周防・長門国方面へ身柄を送致した。この助命は隆景・元春の判断によるものだったが、輝元は鹿介を討ち果たさなければいけないと思い、松山城の麓、高梁川の「合の渡」で鹿介の殺害を命じた、という。	備中の松山（158 備中松山城跡）	桂元盛（岌円）	天正六年（元和八年）	1578年（1622年）	58・65
37	身自鏡	廿二の歳には、山中鹿介が勝久を取立、又播摩の上月へ出ける。去ば、備前の字喜田難儀とて、御合力を請の間、隆景様・元春様、上月へ被成御取詰、殿様は、備中の松山迄被成御出張ける間、御供申けり。（中略）上月には勝久に腹切せ、鹿介は命を助り、中国へ下けるを、備中の松山御本陳にて、腹をぞ切せられける。	天正六年（1578）。玉木吉保が二十二歳の年に、尼子再興軍（尼子勝久・山中鹿介）が播磨国上月城で挙兵した。これに対し宇喜多直家の協力要請に応えた毛利軍が出陣したが、毛利輝元（殿様）も備中松山城まで出張し、ここを本陣とした。上月落城後、山中鹿介は助命されて中国地方へ送られたが、結局備中松山の本陣で切腹させられた、という。	松山（158 備中松山城跡）	玉木吉保	天正六年（元和三年）	1578年（1617年）	57・64
38	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八千城七	天正六年、輝元・隆景播州上月城攻給時、（中略）清水長左衛門尉・中島大炊助、備中勢八千を以て水之手へ堀寄、水筋を堀切城中難義仕尼子兄弟切腹、山中鹿之助降参、毛利被得勝利帰陣之時隆景備中高松・高山之両城へ立寄、多年之軍功、今度之忠戦、無類之由、感状給候。其上備中半国之侍大将を清水長左衛門尉組下に被申付、従芸州侍大将を高松城主に申付、残半国之侍大将中島大炊助組下に被申付、従吉田勢を被召、信長為押境目高山城主被申渡候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。天正六年、毛利輝元・小早川隆景が播磨国上月城を攻めた際、清水宗治（長左衛門尉）・中島大炊助は備中勢 8000 人を率いて上月城の水の手へ掘り寄せて水筋を断ち切った。そのため城中は難儀して尼子勝久兄弟は切腹、山中鹿介は降参し、毛利勢は勝利した。この戦いの帰陣の際、小早川隆景は備中高松城・幸山城の両城へ立ち寄り、清水・中島氏の多年の軍功、上月城合戦における働きを無類のことと称える感状を与えた。そのうえ、備中半国の侍大将を清水宗治の組下に配属させ、残る半国の侍大将を中島大炊助の組下に配属させ、毛利氏の本拠吉田からも兵を出し、織田信長の勢力圏との境目の押さえとして幸山城主に任命した、という。	高松城（393 備中高松城跡） 高山城（414 幸山城跡）	中島治大夫	天正六年（貞享年間）	1578年（1684～1688年）	30
39	桂岌円覚書	字喜多直家事、（中略）信長へ馳走致すべきの通り申すに付て、信長分別にて宇喜多事手切れ仕り候。夫に就き備中の内かち屋山と申す山を取誘へ、信原蔵允と申す者を差籠め候。	天正七年（1579）。宇喜多直家が織田信長に従うことを申し出て、信長もこれを受け入れたため、宇喜多氏と毛利氏とは手切れになった。この事態を受け、直家は備中国の鍛冶屋山という山に城を築き、延原内蔵丞にこれを守らせた、という。	かち屋山と申す山（354 鍛冶山城跡）	桂元盛（岌円）	天正七年（元和八年）	1579年（1622年）	58・65

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
40	桂岌円覚書	作州寺畑の城、宇喜多より持ち候へ、輝元様、隆景様、御取掛り成され候。五三日候て明け退き候。然ば伊賀左衛門尉城小倉へ付城仰せ付けらるべしと御意候刻、小倉より出城に持ち候福山と申すを明け退き候。幸の儀候条、此山をこなたより御取誘へ候て、御持せ成さるべしとて、備中の才田と申す城、前原左衛門尉大夫、熊谷玄蕃両人、今に於ては才田は入らず候間、右の福山に置かせらるべきの由御意候えば、両人御理に、其身は上意に任せ、何ようにもと存じ候え共、家人共打続き先様へ罷り越し候儀、相成る間敷と申し候。（中略）しからば同国松山に検使に置かせられ候桂源右衛門尉へ仰せ付けらるべしとて、寺畑の御陣へ召寄せられ、隆景様御座候所に置かせられ、（中略）去年以来松山に罷り越し辛身致し候。（中略）打続き辛身に候え共、福山へ罷り越し候はゞ御祝着たるべきの由仰せ聞けられ候。御意の如く賀茂付城仰せ付けられ候へば、松山は御撿使にも及ばず候。何方に罷り居り候も同前の儀に候間、兎角上意次第たるべしと御請け申し候	宇喜多氏の持ち城だった美作国寺畑城を、毛利輝元・小早川隆景が攻めたところ、十五日ていどで開城した。これを受けて輝元が、伊賀久隆の居城虎倉城に対する付城を構築しようと思っていたところ、伊賀氏が出城として持っていた福山城を放棄して退いた。輝元はこれを幸いに思い、福山城を自分たちで修築し毛利方の武将に守らせようと考え、備中才田城を守備していた馬屋原左衛門太夫・熊谷就真の二人に対し、もう才田城は守らなくてよくなったので福山城の守備につくよう命じた。ところが、馬屋原・熊谷両人は、自分たちは上意に従って行動したいと思っているが、家来たちが連続して最前線へ行くのを嫌がっている、と申し出た。仕方なく輝元は、備中松山城に検使として配置していた桂源右衛門尉元盛に福山城の守備を命じようと考え、寺畑城付近の毛利本陣に呼び寄せ、小早川隆景の御座所に滞在させた。その上で元盛に対し、去年から松山城への出張で辛労をかけているが、引き続き福山城へ出張してくれればありがたい、と申し聞かせた。輝元の依頼を聞いた元盛は、賀茂に付城があるなら松山城で検使をする意味もなく、どこに居ても同じことなので、上意に従って福山城の守備につくことを了承した、という。	寺畑の城（〈美作 78〉大寺畑城跡） 伊賀左衛門尉城小倉（〈備前 25〉虎倉城跡） 小倉より出城に持ち候福山 （〈備前 19〉福山城跡） 才田と申す城 （76 才田城跡） 松山（158 備中松山城跡）	桂元盛（岌円）	天正八年（元和八年）	1580 年（1622 年）	58・65
41	虎倉物語/類纂虎倉物語	備中・備前之境に藤沢と申城御座候、それへ毛利殿御取出被成候、伊賀殿御内河原六郎右衛門と申人、勘当にて浪人仕、毛利殿に居申候ニ付、是を案内者にて藤沢より毛利殿軍兵はなやかに拵へ、虎倉の様子御覧置とて上加茂まで御出被成候、其時虎倉より足軽衆参合、川越に鉄炮迫合仕候、毛利殿内青屋殿と申能侍壱人、上加茂村の片山与七郎与申人鉄炮にて川越に搏申す、其儘中間参候而首を取申候、（中略）それよりさん〳〵に追崩し、うすい谷・かわや谷にて余多打取申由にて、十力・おぎ坂迄追申候中に、加茂の侍土井と申人馬悪敷候て、おぎ坂にて河原六郎右衛門守に居申候而土井を打取申候、伊賀殿の御内ニ而ハ土井より外にハ打れ不申、そのまゝ毛利殿も御引被成候由	備中・備前の国境に藤沢という城があった。この城に毛利軍が進出してきた。毛利軍は伊賀氏の旧臣で浪人中の河原六郎右衛門を案内者とし、虎倉城の様子を偵察する目的で上加茂まで進軍した。その時、虎倉城から足軽衆が迎撃に現れ、川ごしに鉄砲の撃ち合いとなった。毛利軍の青屋殿（粟屋元信）は、上加茂村の片山与七郎に鉄砲で撃たれ、片山の中間によって首を取られた。それから宇喜多方伊賀軍は毛利勢をさんざんに追い崩し、臼井谷・かわや谷で多数の将兵を討ち取った。伊賀軍は十力・荻坂まで毛利軍を追撃したが、土井という人の馬が暴走し、毛利方に討たれてしまった。伊賀氏の家中では土井氏以外に討たれた者はいなかった。そのまま毛利軍も撤退した、という。	藤沢と申城（〈備前 17〉藤沢城跡） 虎倉 （〈備前 25〉虎倉城跡）	虎倉村又兵衛	天正八年（寛文元年九月二十八日）	1580 年（1661 年）	29・36
42	虎倉聞書/類纂虎倉物語	出城ハ備中四ツうね・作州鷹ケ城相持候処に、芸州毛利より四ツうねを乗取候、虎倉より二里計西、加茂市場村之内藤沢と申山に虎倉方之者取登り居申所ニ、又芸州より藤沢をも乗取、城番として青屋与十郎と申人を掘置申候、其後伊賀殿と扱に仕り、右領分之物成半納ツヽ藤沢と虎倉へ取入申候由、其節鷹ケ城を浦上宗景〔ママ〕より攻申候ニ付、後詰として虎倉より出勢仕共、其留主ニ扱を破り、藤沢より虎倉へ不意ニ押懸け申候を、留主居とも伝聞、城中の妻子・下女はしたまて呼出し旗刺物さゝせ、数百人城山の後、広面村と上加茂村の境高き山へ出張居申候、藤沢の者とも案之外ニ候へハ上加茂の坂中へ下り、軍の評議仕候処に、虎倉勢用ニ立程のものハ下加茂へ廻り、上加茂の後十力村の山の高ミへ取登り居申候。其内片山弥左衛門と申鉄炮の上手、上加茂川のへり、柳のかけニかまり居申候て、大将青屋与十郎をねらひ打ニ打落申候、其時後へ廻り居申者とも、ひた〳〵と打寄聞を揚候得ハ、敗軍仕り方々へ逃申候を追かけ大形打取申候、虎倉勢の内ニハ土井三郎左衛門と申もの壱人、長追を仕打死いたし候、大将与十郎打死、其外大勢打死仕候ニ付、藤沢推（難ヵ）抱、残ル者共ハ芸州へ立退申候	（伊賀氏は）出城として備中国四畝城・美作国高城を保持していたが、毛利氏によって四畝城を乗っ取られてしまった。また、虎倉城から２里ほど西にある加茂市場村の藤沢という山に虎倉城側に味方する人たちが登って拠点としていたが、これもまた毛利軍が奪取して、城番として粟屋元信（青屋与十郎）を配置した。その後、毛利氏と伊賀氏との間で休戦が成立し、年貢（物成）を折半して藤沢と虎倉の両方へ納める状態になった（半納）。その頃、高城が浦上宗景（宇喜多直家の誤り）に攻撃されたため、後詰めのため虎倉城から援軍を出陣させた。その留守を狙って毛利側が休戦を破り、藤沢城から虎倉城へ不意に攻め寄せてきた。虎倉城の留守居はこれを事前に伝え聞き、城中の妻子・下女まで呼び出して旗指物を掲げ、広面村と上加茂村の境の高い山へ数百人を配備した。藤沢城の軍勢にとっては思いの外のことだったので、上加茂の坂中で軍評定をしていたところ、虎倉城の軍勢のうち役に立つ者は下加茂へ回り込み、十力村の山の高みに登って陣取った。そのうち、片山弥左衛門という鉄砲上手が、上加茂川の傍の柳の陰から毛利軍の大将粟屋元信を狙撃し、背後に回り込ませていた軍勢が押し寄せ鬨の声をあげたところ、毛利軍は敗走し、それを追い打ちして多数を討ち取った。虎倉城側では、土井三郎左衛門という者１人が、深追いし過ぎて討死した。大将の粟屋氏が戦死し、その他大勢が討死したため、毛利氏は藤沢城を維持することが困難になり、残っていた者も毛利領へ退散した、という。	四ツうね（93 四ツ畝城跡） 鷹ヶ城（番号なし 高城跡） 虎倉 （〈備前 25〉虎倉城跡） 藤沢と申山（〈備前 17〉藤沢城跡）	下土井村庄屋土井六郎兵衛（話者）	天正八年（近世前期）	1580 年（17 世紀後半）	29・36

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
43	桂岌円覚書	福山は敵の方より差出たる山にて、しかも此方より渡り六かしき小川候、彼是以て然るべからずとて、河よりこなたに勝山と申す山を城に仰せ付けられ、五月三日に桂源右衛門尉、赤川次郎左衛門尉、岡惣左衛門差籠められ候。備中三村家の者に竹野井惣左衛門尉と申す者相副へられ候。さ候て輝元様、隆景様は五月五日に松山へ御打納め成され候。	天正八年（1580）。毛利氏にとって福山城は、地形的に敵方から差し出た山にあり、しかも毛利側から渡りにくい小川（宇甘川）に隔てられた地点にある。これは拠点としてよくないという話になり、川より毛利氏勢力圏側にある勝山という山に築城するよう毛利輝元より命が下った。五月三日には桂元盛（源右衛門尉。この記録の記主）・赤川元之（次郎左衛門尉）・岡元良（惣左衛門）および備中三村氏の家臣竹井直定（惣左衛門尉）が、勝山城に城番として配置された。その後五月五日に、輝元・隆景は松山城へ戻った、という。	福山　（〈備前 19〉福山城跡） 勝山と申す山　（〈備前 15〉勝山城跡） 松山（158 備中松山城跡）	桂元盛（岌円）	天正八年（元和八年）	1580 年（1622 年）	58・65
44	身自鏡	廿三の歳は、例の宇喜田め亦敵に成、備中・作州・伯耆騒動しける間、備中口は隆景様、伯州口は元春様、美作口は直に被成御発向ける。（中略）　又、竹の庄と云所に御陣被召けるに、松山との中間、一里半有ける狐谷と云難所在り。此谷に、常に、敵忍居て味方を打也。	玉木吉保（毛利輝元家臣）が２３歳のころ、宇喜多直家がまた毛利氏に敵対し、備中・美作・伯耆国が騒動になったので、備中口へは小早川隆景が、伯耆口には吉川元春が、美作口には毛利輝元自らがそれぞれ出陣した。また、毛利軍は竹庄というところに陣所を置いたのだが、この陣と備中松山城との中間一里半ほどの地点に「狐谷」という難所があった。この谷には常に敵が隠れており、通りがかる味方（毛利方）を襲撃していた、という。	竹の庄と云所に御陣（具体的な場所未詳。竹庄のうち） 松山（158 備中松山城跡）	玉木吉保	天正八年ごろ（元和三年）	1580 年ごろ（1617 年）	57・64
45	岡多兵衛奉公書／家中諸士家譜五音寄ウ・エ・オ　岡藤兵衛奉公書のうち	備中忍之城江祖父筑前、此時ハ信濃と申候、岡強助両人被入置候処ニ、安芸毛利猛勢にて取懸、及難儀候故、注進申候へハ、其節直家慈生之煩ニ付、加勢延引仕、終ニ天正六年十月廿八日ニ致落城候、信濃も切腹仕候由承伝候	宇喜多氏家臣の岡信濃守（もと筑前守）は、岡剛助（強助）と一緒に備中忍山城に配置されていた。そこに安芸の毛利氏が攻めかかり難儀に陥ったので、援軍を請うため戦況を注進したが、そのころ宇喜多直家は生死のかかった病に伏せっており、加勢の派遣が延期されてしまい、ついに天正六年十月二十八日に忍山城が落城し、岡信濃守も切腹してしまった、という。	忍之城（327 忍山城跡）	岡多兵衛	天正九年（寛永二十一年）	1581 年（1644 年）	40
46	虎倉物語／類纂虎倉物語	それより伊賀与三郎殿と直家様と不通ニ被成候、其間に毛利殿御様子被仰候而直家様と手切ニ候、備中之内高田村と虎倉の境忍ひと申城ニ、岡山より岡野合介殿を御置被成候、是へ毛利殿御出にて、虎倉の内宿の山に御陣御すへ忍ひを御攻被成候、其時伊賀与三郎殿ハ勝尾山の上に岡山の押へニ御座候、伊賀殿より金川へ夜打一両度打せられ、首をハ毛利殿へ被遣候、六十日程御攻候て合助殿に腹切らせ、毛利殿も御引取被成候、伊賀与三郎殿もそのまゝ下へ御のき被成候《割注：寛文元年ノ丑ノ年迄七十九年ニ成申候》	伊賀久隆の死去以降、伊賀家久（与三郎。久隆の子）は宇喜多直家と不仲になり、その間に毛利氏から誘いがあって直家と手切れになった。そのころ備中国高田村と虎倉との境に忍山という城があり、岡山城の宇喜多氏が岡剛助（岡野合介）を配置して守らせていた。これを攻めるため毛利軍が出陣し、虎倉のうち宿の山に陣所を設けて忍山城を攻撃した。伊賀家久も勝尾山の上に陣取って岡山城からの援軍を押さえる役割を果たし、宇喜多方の金川城へ二度ほど夜討ちをかけ、討ち取った首を毛利氏に進上した。毛利氏は六十日ほどかけて忍山城を攻め岡剛助を切腹させると、引き上げていった。伊賀家久もそのまま「下」（中国地方西部。毛利領）へ去った。これは寛文元年（1661 年）丑の年から七十九年前のことである、という。	忍ひと申城（327 忍山城跡） 岡山　（〈備前 180〉岡山城跡） 虎倉の内宿の山　（〈備前 39〉本陣山城跡） 勝尾山（〈備前 40〉勝尾山城跡） 金川　（〈備前 43〉金川城跡）	虎倉村又兵衛	天正九年（寛文元年九月二十八日）	1581 年（1661 年）	29・36

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
47	身自鏡	廿七の歳、件の宇喜田直家は死たりけれ共、其子の秀家は、羽柴筑前の守の縁者に成ければ、上勢を引入、備中の諸所へ行を生す。されば、中国勢も不残打立、先備前の児島蜂浜と云城を、備前より持たりけるを取詰けれ共、備中の所々騒動しける間、先児島をば差捨、猿懸・甲山へ打寄せて、備前境の高松・賀茂・日端・庭瀬・今保・松島・加室・鍛冶屋山・伊保山・八万山、右十余ケ所の城に人数差籠、上勢の行を窺、待懸てぞ候ける。 羽筑岡山に下着して、先今保の渡口に大城を構へ、其後十万余騎の勢にて、経山・かな床山両城を責落して、高松の城を十重廿重に取巻、大塘を築て水責にせられける。	玉木吉保（毛利輝元家臣）が２７歳のとき、例の宇喜多直家は死去したが、その子秀家は羽柴筑前守秀吉の縁者になっていたので、上方の軍勢を引き入れて備中国のあちこちに攻め込んできた。そのため、毛利氏の率いる中国勢も残らず出陣し、まず備前国児島の蜂浜（八浜）という宇喜多氏（備前）側が持っていた城を包囲したけれども、備中国内の所々があわただしくなってきたので、毛利氏はとりあえず児島を捨てて猿掛城・甲山城（幸山城）に集まり、備前との国境に当たる高松・賀茂・日端（日幡）・庭瀬・今保・松島・加室（冠）・鍛冶屋山・伊保山・八万山（八幡山）といった１０余りの城に軍勢を籠もらせ、上方勢の出方をうかがって待ち構えていた。 羽柴筑前守秀吉（略して羽筑）は岡山城に到着すると、まず今保の渡り口に大きな城を造り、その後１０万余りの軍勢でもって経山城・かな床山城（鍛冶屋山城の異称）を攻め落とし、高松城を何重にも包囲して、大きな堤防を築いて水攻めにした。	蜂浜と云城（〈備前 242〉両児山城跡） 猿懸（227 猿掛城跡） 甲山（414 幸山城跡） 高松の城（393 備中高松城跡） 賀茂（427 加茂城跡） 日端（431 日畑城跡） 庭瀬（402 庭瀬城跡） 今保　（〈備前 279〉今保城） 今保の渡口に大城（詳細未詳） 松島（436 松島城跡・番号なし射越山城跡） 加室（373 冠山城跡） 鍛冶屋山・かな床山（354 鍛冶山城跡） 伊保山（詳細未詳） 八万山（390 窪木八幡山城跡） 岡山　（〈備前 180〉岡山城跡） 経山（345 経山城跡）	玉木吉保	天正十年（元和三年）	1582 年（1617 年）	57・64
48	桂岌円覚書	かち屋山より声届きに宮路山と申す山候を、此方より御取付け候て、元政様御人数并に乃美差籠められ候。竹ノ井惣左衛門尉をも置かせられ候。然る処に秀吉公備前岡山へ御下り候て、四月七日に宮路山のうへしふくし山と申すへ打上られ、終日居られ候て極晩に打納められ候。	宇喜多方の鍛冶屋山城から声が届くほどの至近距離に宮路山という山があったので、毛利氏はこの山に城を築き、天野元政の配下の軍勢と乃美氏を籠城させ、竹井惣左衛門尉も一緒にこの城へ配属させた。こうしているうちに羽柴秀吉は備前岡山城までやって来て、四月七日に宮路山城にほど近い朱福寺山（しふくし山は音を平仮名で表したもの）に登り、終日ここに滞在して夜になってから帰陣した、という。	かち屋山（354 鍛冶山城跡） 宮路山（353 宮路山城跡） 岡山　（〈備前 180〉岡山城跡） しふくし山（350 守福寺裏山の陣跡）	桂元盛（岌円）	天正十年（元和八年）	1582 年（1622 年）	58・65

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
49	桂岌円覚書	同十四日の未明に、高松のうへ龍王と申す山へ陣取られ、備前衆は宮路山を請取り、取巻き候て仕寄せ、七口よりよせ候て夜白寸暇無く攻め候。此時隆景様、元春様は高松の向、岩崎と申す平山に御陣取成され候。輝元様は猿掛に御座成され候。岩崎、猿懸の間三里余候。さ候て宮路山は搦を入れ城を渡し、此方の衆皆罷り退き候。五月晦日にて候つ。	四月十四日の未明、羽柴秀吉は高松城にほど近い龍王山に陣取り、秀吉から宮路山城攻撃を委ねられた宇喜多軍（備前衆）は同城を取り巻き、七つの攻め口から仕寄を設けて夜昼寸暇無く攻め続けた。この時、小早川隆景・吉川元春は高松城の向かいにある岩崎という平坦な山に陣取っていた。毛利輝元は猿掛城を御座所としていた。岩崎の陣と猿掛城との間の距離は、三里余りであった。こうした攻防を経て宮路山城に籠もる毛利方籠城衆は織田方に講和を申し入れて城を明け渡しみな退去してしまったという。これは五月晦日のことだという。	龍王と申す山　（385 竜王山本陣） 宮路山（353 宮路山城跡） 岩崎と申す平山（423 庚申山城跡） 猿掛・猿懸（227 猿掛城跡）	桂元盛（宬円）	天正十年（元和八年）	1582 年（1623 年）	58・65
50	桂岌円覚書	六月朔日、高松へ近く陣を寄せられ、秀吉公は高松の上にかいるかはなと申す山に陣取られ候。翌日より高松大廻りに土手を築かれ、小河の候を築留められ候。其年以ての外の大雨続き候。五月雨の中と申し、程無く水上り候て、高松難儀大形にあらず候。	六月朔日、高松城近くまで陣を移動させた羽柴秀吉は、高松城を見下ろす位置にある蛙ヶ鼻（「かいるかはな」は音を平仮名で表記したもの）に陣取った。そして翌日から高松城を大きく廻るように土手を築き、小川があるのを堰き止めた。その年は例年にない大雨続きの天候だったため、五月雨の中ですぐに水位が上昇して、高松城は大変困難な状況に陥った、という。	高松（393 備中高松城跡） かいるかはな　（395 石井山陣跡）	桂元盛（宬円）	天正十年（元和八年）	1582 年（1622 年）	58・65
51	『信長公記』巻第十五	備中へ羽柴筑前守相働き、すくも塚の城あら〳〵と取寄り、攻落し、数多討捕り、並ゑつたが城へ又取懸け候処、降参申し罷退き、高松の城へ一所に楯籠るなり。又、高松へ取詰め、見下墨、くも津川、ゑつた川両河を関切り、水を湛へ、水攻めに申付けられ候。芸州より毛利・吉川・小早川人数引卒し対陣なり。	備中国へ羽柴秀吉が攻め込み、すくも塚城に攻め寄せて陥落させ、数多の敵を討ち取った。同時に「ゑつたが城」に攻めかかると、城衆は降参して退去し、高松城へ一緒に楯籠もった。そこで秀吉は高松城を包囲し、地勢を観察して判断した上で、二つの川を堰き止めて水を溜め、水攻めにした。これに対し、安芸国から毛利・吉川・小早川氏が軍勢を率いて出張し、秀吉と対陣した。	すくも塚之城　（373 冠山城跡・381 すくも城跡） ゑつたが城（429 河屋城跡？・353 宮路山城跡？） 高松之城（393 備中高松城跡）	太田牛一	天正十年四〜五月（慶長十五年ごろ）	1582 年（1610 年ごろ）	23
52	桂岌円覚書	高松の城より一里南に鴨の城と申す平城候。本丸には桂民部大輔、西之丸には上山兵庫、東之丸には小石と申す者、是は備中の石川家の者にて候。（中略）然る処に小石逆意仕り、筑前殿へ現形仕り、備前衆を小石丸へ引入れ、本丸へ夜中に申し候は、近年隆景様へ馳走を遂げ候え共、終に其御褒美もこれ無く候。然ば秀吉公より御懇意の御意に候間現形致し候。此中申談じたる験に、民部大輔殿御一命、差無く岩崎に至て送り申すべく候。（中略）然る間、城の儀早々御渡し尤もに候と申懸け候。　本丸よりは民部大輔親類に桂右衛門尉と申す者矢倉へ上り、（中略）民部大輔事、異儀無く送り届けらるべく候条、城早々相渡すべきの由、近比珍しき承り様に候。武士の上にはこれ有る間敷き儀に候。人数歴々出たる様に聞え候の間、早々手柄仕られ然るべく候と申し、言下に小石丸へ鉄炮を打掛け候。備前衆小石丸へ入はまり候。さ様候えば夜も明け候。其時内々民部大輔覚悟仕りたる火矢を小石丸へいさせ候。（中略）火消し候事も成らず候て焼上り候に付て、小石丸の者共一人も堪忍成らず、悉く城のそとへ崩れ候。弥鉄炮を以て打たて追出し候。是を岩崎御陣より御覧じ付けられ、御人数を出され、鴨の城より七八町程候て平山の候へ、諸勢打出され候。夫に就き備前衆も何たる行もこれ無く引退き候。	高松城から一里ほど南に、鴨城という平城があった。本丸は桂広繁（民部大輔）、西の丸は上山元忠（兵庫）、東の丸は生石氏（小石）という者（備中石川家の旧臣）が守っていた。その生石氏が毛利氏に対して逆意をいだき、羽柴秀吉（筑前殿）に味方して、宇喜多軍（備前衆）を自分の守備する曲輪（生石丸）に導き入れた。その生石氏が本丸に向かって夜中に叫んだところによると「近年小早川隆景に従って奔走してきたが褒美ももらえないので、懇意にしてくれる秀吉に味方することにした。桂広繁の一命は助け毛利方の岩崎の陣所へ送り届けるので、鴨城を早々に明け渡すように」とのことだった。　生石氏の呼びかけに対し、桂広繁の親類桂右衛門尉が本丸の矢倉に登って次のように回答した。「広繁の身柄を無事に毛利陣へ送致するので城を早く明け渡すようにとの話だが、近頃聞いたこともない言い分だ。そのようなことは武士である以上出来ない。名のある武将が出張ってきているように聞いているので、早々に手柄を立てられるのがよろしいでしょう」そして、言い終わるとすぐに生石丸に鉄砲を発射した。宇喜多軍は生石丸に閉じこもった。夜が明けると、桂広繁はあらかじめ用意していた火矢を生石丸へ射かけた。炎上する曲輪の火を消すことも出来ず、丸焼けになったので、生石丸にいた内通者と宇喜多軍はがまんできなくなって城の外へ敗走した。城内からさらに鉄砲を撃って敵を追い出した。この様子を岩崎の陣所にいた毛利軍がみて出撃し、鴨城から七〜八町ほどの場所にある平坦な山に出張った。このため宇喜多軍も大した反撃も出来ず引き返した、という。	高松の城（393 備中高松城跡） 鴨の城（427 加茂城跡） 岩崎御陣（423 庚申山城跡）	桂元盛（宬円）	天正十年（元和八年）	1582 年（1622 年）	53・58・65
53	桂岌円覚書	さ様候て十日計り以後、日幡の城におかせられ候上原右衛門大夫、是も秀吉公へ現形仕り候。此上原と申す者は、本来備後国の者にて候。此者の親豊将と申す者は元就様へ馳走を遂げ、備後御弓箭の節、一方御用に立ちたる者に候。（中略）元清様の御あねこ様を遣はされ、御縁者に召置かれ候。御用にも立つべき哉と思召され、日幡の城に置かせられたる儀に候。親に生をとり、未練を構へ右の次第に候。	鴨城の攻防から十日ほど後、日幡城に配置されていた上原元将（右衛門大夫）も、秀吉に寝返った。上原氏は本来備後国衆で、父親の豊将は毛利元就のために尽力し、備後国での合戦の際毛利家の役に立った人である。そういう経緯もあって、上原元将は穂田元清の姉を嫁にもらい毛利家の縁者として扱われており、今回の戦いでも役に立つだろうと期待されて、日幡城の守備を任せられていた。しかし、実際は父親に劣る人間で、未練がましい行動をして、日幡城は秀吉の手に渡ってしまった。	日幡の城（431 日畑城跡）	桂元盛（宬円）	天正十年（元和八年）	1582 年（1622 年）	58・65

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
54	桂岌円覚書	高松の者は弥水増し候て、後には家の空へ上り候て堪忍仕り候へ共相こたへず候。夫に就き清水長左衛門尉、其身腹仕るべく候間、城中の者共をば御助け候様にと、秀吉公へ申すに付て其意に任され、清水おぢおい并に末近右衛門尉、筑前殿陣の表へ筏に乗り罷り出で、六月四日堅固に腹を仕り、惣の者をば相助けられ候。	高松城水攻めの状況。どんどん水位が上がるため籠城衆は家の屋根に登って堪忍していたが、もう耐えられなくなった。そのため、城主清水宗治（長左衛門射）は「自分が切腹するので城中の者を助けてほしい」と羽柴秀吉に申し出た。秀吉はこれを許したので、清水宗治は伯父・甥および末近右衛門尉とともに秀吉（筑前殿）の陣の前まで筏に乗って出向き、六月四日しっかりと切腹して自分に従ってきた人たちの命を助けた、という。	高松（393 備中高松城跡）	桂元盛（岌円）	天正十年（元和八年）	1582 年（1622 年）	58・65
55	身自鏡	（前略）有時、敵陳へ忍入て見けるに、秀吉の陳は一段高所に、山陳ながら高棟あまた作並べ、其真中に五重の殿主を揚げ、惣陳を只一目に見渡す様に作たり。（中略）さて、高松の貴口を見てあれば、北東は山也。西南の方には堤の広さ十間計、高さ十二三間に築上、此方より寄んずる方には、塀を塗、簀子を結、十間程づゝに殿主をあげ、其中間には行灯を一間に一宛とぼし、内には究竟の兵共透間無居たりけり。又城の方には水澶々と湛へ、大海の如なるに、舟を数百艘浮べ、是にも殿主を組、大筒・小筒打、責寄る時は貝・鐘・鞍を鳴し、惣陳に時の声を作責戦ける。城の大将は、清水長左衛門と云ける一騎当千の兵なれば、少も不慄けれ共、城の内皆大海と成ければ、力不及、清水一人腹を切、自余の勢をば助たりけり。	玉木吉保（毛利輝元家臣）による高松城水攻めの回想。ある時、吉保が織田軍の陣地に忍び込んで偵察したところ、羽柴秀吉の本陣は一段高いところにあり、山陣でありながら背の高い建物をたくさん造り並べ、その中央には五階建ての天守が設けられ、全ての陣地を一望の下に見渡せるようにつくられていた、という。 また、高松城攻めの形勢を観察すると、城の北東は山地となっており、西南の方角に広さ十間・高さ十二～三間の堤を築いてある。この堤の、毛利軍（此方）が攻め寄せてくる側には、塗り塀を設け、簀の子を結い、十間ていどごとに天守を設け、天守と天守の間の堤上には行灯を一間につき一つづつ灯しており、その内側には屈強の兵士たちが隙間なく配備されていた。一方、堤の内側、高松城のある方角は、水がたっぷりと湛えられ大海のような状態になっていた。その水面に舟を数百艘浮かべ、この船上にも天守が組み立てられ、大筒・小筒を発射し、城に攻め寄る際は法螺貝・陣鐘・太鼓を鳴らし、陣全体で鬨の声を挙げて戦っていた。高松城の守将は、清水長左衛門宗治という一騎当千の強者だったので、こうした秀吉の戦術を少しも恐れなかったが、城内が全て大海のように水浸しになってしまったので、力及ばず、宗治一人が切腹してその他の城兵を助けたのである、という。 ※「殿主＝天守」は矢倉の意と思われる。全体に誇張多いが内容は興味深い。	秀吉の陳（395 石井山陣跡など） 高松（393 備中高松城跡）	玉木吉保	天正十年（元和三年）	1582 年（1617 年）	57・64
56	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八 干城七	天正十年、毛利家為退治、信長公陣代織田御次丸・羽柴秀吉、備中へ御出陣之時、従毛利家信長勢為押、高松之城主清水長左衛門尉四千二百余中島大炊助、（長左衛門甥、其上聟故）、為軍議四千余にて二之丸に楯籠候。自芸州加勢御座候。数月遂防戦持抱候由。輝元・隆景・元春高松近辺へ出張、御対陣之処清水長左衛門・同月清入道、籠城之勢之命に替り切腹仕候て天下御和議に成、大炊助は両御大将任御下知存命仕候。高松之城を黒田官兵衛・杉原七郎左衛門へ相渡し、城々之仕置其儘毛利家へ御願、秀吉は御登り被成候に付国中諸仕置毛利治部太輔、中島大炊助に被申付、	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。天正十年、毛利氏を退治するため織田信長の陣代として織田御次丸・羽柴秀吉が備中国へ出陣した。この時、毛利氏は信長勢の押さえとして、高松城主清水宗治（長左衛門尉）の 4200 余人に加え中島大炊助（宗治の甥にして聟）の率いる 4000 余人を二の丸に立て籠もらせた。毛利氏（芸州）より加勢があり、数ヶ月防戦して持ちこたえた、という。毛利輝元・小早川隆景・吉川元春が高松城近辺に出張し織田勢と対陣していたが、清水宗治・月清入道兄弟は籠城衆の命を救う代わりに切腹して織田・毛利の講和を実現させた。中島大炊助は両軍の大将の命令に従い、切腹せずに存命した。毛利氏は高松城を織田方の黒田孝高（官兵衛）・杉原家次（七郎左衛門）に引き渡した。羽柴秀吉は諸城の仕置きを毛利氏に任せて上洛したため、備中国中の諸仕置は毛利元清（治部太輔）・中島大炊助に委ねられた、という。	高松之城（393 備中高松城跡）	中島治大夫	天正十年（貞享年間）	1582 年（1684 ～ 1688 年）	30
57	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八 干城七	在所之居城自秀吉卿御攻被成候時、弟中島九右衛門能持抱候、無比類由にて従輝元・隆景・刑部卿【郷の誤植】三千二百貫加増給候感状今に所持仕候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。中島氏の在所の居城を羽柴秀吉が攻撃した際、中島大炊助の弟九右衛門はよく城を守って持ちこたえた。こうした九右衛門の働きは比類ないものと評価され、中島氏は毛利輝元・小早川隆景から備中国賀陽郡刑部郷において 3200 貫の所領を加増された。この時の感状を治大夫は今も所持している、という。	在所之居城（344 小寺砦跡ヵ・346 中島氏居館跡）	中島治大夫	天正十年（貞享年間）	1582 年（1684 ～ 1688 年）	30

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
58	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八 干城七	根矢七郎兵衛代々備中賀陽郡服部郷三千貫、所々にて二千貫、合五千貫所持仕候、数代窪木八幡山城主にて御座候、中島大炊助聟にて御座候、毛利輝元幕下にて居申内、秀吉公同国高松城御攻被成候節、根矢七郎兵衛三千余を相随へ、冠山之城主仕候時、秀吉公御簇本数万騎を以て冠城御取巻、数日御攻被成候節遂防戦堅固に持抱候処火難にて不存寄落城、七郎兵衛五十騎計り召連、敵之備切払立退中節大勢を以て御取巻、御打留可被成由御座候時、七郎兵衛度々小返仕、数十人打取、其身も蒙手疵候無比類働仕候由、従輝元・隆景感状給候由、今に所持仕候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。禰屋（根矢）七郎兵衛は代々備中国賀陽郡服部郷 3000 貫および所々の 2000 貫、合計 5000 貫を所持する領主で、数代にわたって窪木八幡山城に居城していた、という。この禰屋七郎兵衛は中島大炊助の聟だった。禰屋氏が毛利輝元の配下だったころ、羽柴秀吉が備中高松城を攻撃した。この時、禰屋七郎兵衛は 3000 余人の兵を率いて冠山城の城主を務めた。秀吉は旗本の軍勢数万騎をもって冠山城を包囲し、数日にわたって攻撃したため、七郎兵衛は防戦して堅固に城を維持していたが、失火によって思いも寄らぬ落城に見舞われた。七郎兵衛は 50 騎ほどを連れて秀吉軍の備えを切り払い、城から脱出した。秀吉方は大勢をもって七郎兵衛を取り巻き、討ち留めようとしたため、七郎兵衛はたびたびとって返して防戦し、数十人を討ち取って自身も手疵を負った。こうした働きが比類ないものと評価され、七郎兵衛は毛利輝元・小早川隆景から感状をもらった。この感状は今も治大夫が保管している、という。	窪木八幡山城 （369 長良山城跡または番号なし窪木八幡山城跡） 高松城（393 備中高松城跡） 冠山之城・冠城（373 冠山城跡）	中島治大夫	天正十年（貞享年間）	1582 年（1684 ～ 1688 年）	30
59	虫明又八奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十四 干城一三	秀吉公備中高松御陣之刻、宇喜多人数は不残御先手仕候。此節秀家八歳に罷成候に付、戸川縫殿之助・虫明九平次側を不離罷在、大形毎日高松御陣所へ秀吉公御機嫌伺に縫殿之助・九平次替々参申	岡山藩士虫明又八が主家に提出した奉公書。羽柴秀吉が備中高松城を攻めた際、宇喜多氏の軍勢は残らず出動し羽柴軍の先手を勤めた。このとき宇喜多秀家は八歳になっており、又八の祖父虫明九平次は戸川縫殿之助とともに秀家の側に離れることなく付き従い、毎日のように高松の陣所に交替で出向き、秀吉のご機嫌伺いを行ったという。	備中高松（393 備中高松城跡） 高松御陣所（395 石井山陣跡など）	虫明又八	天正十年（貞享年間）	1582 年（1684 ～ 1688 年）	30
60	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八 干城七	秀吉公天下一統御治、備中川切、蜂須賀彦右衛門殿・黒田官兵衛殿へ相渡申、清水・中島在城は宇喜多秀家卿へ被遣候（中略）隆景死去之後、秀俊を家督被仰付候節、清水五郎左衛門・中島治右衛門、伏見へ被召、秀吉公へ御目見仕、御朱印被下大炊助は御暇申上置備中へ被帰候。御代替、罷退候段不届に被思召候間、在所へ致蟄居候様にと山口玄蕃申渡候、大炊助・治右衛門引籠罷在候時、宇喜多秀家卿へ御下知に備中小寺村中島居城之跡地、御免地に被成被下候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。豊臣秀吉が天下を統一した際、備中国は高梁川を境に領土が切り分けられ、川より東側は秀吉方の蜂須賀正勝（彦右衛門）・黒田孝高（官兵衛）に引き渡され、清水氏や中島氏の居城は宇喜多秀家に与えられた。小早川隆景が死去した後、養子の秀俊（後の秀秋）が小早川家の家督相続を許された際、清水景治（五郎左衛門）・中島治右衛門は伏見に召し出されて秀吉に御目見得し、朱印状を与えられた。一方、中島大炊助は暇乞いをして備中国へ帰った。主家の代替わりに際して出仕をやめた中島氏を小早川秀秋は不届きと咎め、在所へ蟄居するよう山口宗永（玄蕃）を通じて中島父子に申し渡した。こうして中島大炊助・治右衛門父子が引き籠もっている時、宇喜多秀家の下知で小寺村の中島居城跡地が年貢免租地にされた、という。	清水…在城（393 備中高松城跡） 中島在城・小寺村中島居城之跡地（346 中島氏居館跡・344 小寺砦跡ヵ）	中島治大夫	天正後期～慶長初年ごろ（貞享年間）	1585 ～ 1598 年ごろ（1684 ～ 1688 年）	30
61	阿部多右衛門奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』阿部多右衛門	祖父田上越前、毛利右馬頭家来ニ而罷有候、備中国さるかけ之城ヲ預リ、知行三千石被申付候由	岡山藩士阿部多右衛門が主家に提出した自家の履歴書。多右衛門の祖父田上越前守（高見越前守とも）は毛利輝元（右馬頭）の家来で、 備中国猿掛城を預かり、知行三千石を与えられていた、という。	さるかけ之城 （227 猿掛城跡）	阿部多右衛門	天正三～慶長五年ごろ（寛文九年か）	1575 ～ 1600 年ごろ（1669 年か）	41
62	阿部多右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十二 干城一	阿部　高見越前。備中猿掛城主、毛利備中守元清家【「来」脱ヵ】の由。	上記史料と同じく岡山藩士阿部多右衛門が祖父の略歴を岡山藩に申告したもの。高見越前守（上記史料では田上越前守）は備中猿掛城主毛利元清（穂田元清）の家来だったという。	猿掛城（227 猿掛城跡）	阿部多右衛門	天正三～十一年ごろ（貞享年間）	1575 ～ 83 年ごろ（1684 ～ 1688 年）	30
63	八ヶ郷始覚書／旧菅生村子位庄窪津大紀所蔵文書	天正拾弐年きのへさる之年大ひてりニ而、八月朔日岡文【異本：豊】前守様宮内西へ御出被成、板倉之橋下よりたゝいノ井手水山南郡へ水筋井手ヲ付可被下と、水御もらせ被成候へば、東之庄村之北よりもす【異本：づ】かはなまて壱丈余西たかく御座候故、たゝいの水罷不成と被仰、にわせ【異本：庭瀬】へ御帰り被成候、同九月九日ニ山北たゝいへ御座被成、河筋御もくろミ被成、酒津古城へ御座被成御ひるへんとう城山ニて上り、それニて水筋御もくろミ被成、其日ハ浜村四郎三郎所ニ御逗留被成 ※『新修倉敷市史』所収の本文を元に『倉敷市史』第８冊所収本にて校訂	天正十二年（1584）は大日照りだったので、八月一日に宇喜多氏宿老の岡家利（豊前守）が宮内の西へ出向き、高梁川の湛井の井手から取水する用水を板倉の橋下から山南郡（福山・日差山山系より南の地域）へ通水しようとしたが、百舌ヶ鼻あたりの地形が高く、難しいということになり、庭瀬城へ帰城した。家利は九月九日に山北の湛井まで出向いて河筋を検討し、酒津古城の城山に登って昼食を取り、そこで用水の取り回しを計画し、その日は浜村の四郎三郎宅に逗留した、という。天正十三年作成の奥書があるが、本文（省略箇所）にはそれ以降の年代の話題が書かれており、近世以降に時代をさかのぼって書かれた由緒書と考えられる。	にわせ（403 撫川城跡・402 庭瀬城跡） 酒津古城（418 青江城跡ヵ）		天正十三年八月日 ※後付けの年号である可能性高し	1585 年（実際の成立は 17 世紀か）	39・52

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
64	福岡重継書状／毛利家文書	備中高松之城、従　大閤様被成御取詰候節より、諸口之通路無之間、只可立御用一筋之覚悟計ニ而候処、信長公不慮之儀候而、大閤様御上洛候条、運を開可申と存、成案堵之思候処、都鄙御和談弥有御順熟、悋城を渡可申旨　御意候而、井上新兵衛を被下候、従元春様・隆景様一人宛被成御添候	毛利方の矢筈城主草苅重継（このころ福岡姓に改名）が、後年になって天正十～十一年（1582年～1583年）の出来事を記したもの。備中高松城を秀吉が包囲したころから、諸方面への通路が途絶えており、重継は毛利氏の役に立って死ぬことを覚悟していたが、信長が不慮の最期をとげ秀吉が上洛したため、運がひらけたと安堵していた。ところが、秀吉と毛利氏との和談が整えられた結果、草苅氏の居城を秀吉方に引き渡すようにと、毛利輝元から命じられた。輝元からの使者は井上新兵衛で、吉川元春・小早川隆景からの使者も添えられていた、という。	備中高松之城　（393 備中高松城跡） 悋城　（〈美作157〉矢筈城跡）	福岡（草苅）対馬守重継	天正十～十一年ごろ（慶長十五年十一月十六日）	1582～1583年ごろ（1610年）	70
65	吉川広家覚書／吉川家文書	先年備中高松之城、太閤様御責之刻、信長御生害之故、当方御和平被仰談、御陣可被打入之折節、従紀州雑賀、信長不慮之段慥ニ申越候、下々申様ハ、此時手を返矛楯ニ及候者、天下則時ニ可被任御存分ニ所を、隆景、元春御分別違候と各被申候へ共、前日神文被取替候辻、無忘却被届之段、太閤様御感候而、其故御当家于今如此御安堵候段、隆景折々御物語候て、御自慢之一ニ候	吉川広家が高松城をめぐる合戦と織田・毛利両軍の講和につき、追想して記したもの。講和して毛利軍が撤収するころ、紀州雑賀から信長死亡の報せがあり、下々の者は「今、講和を破って織田軍に攻めかかれば毛利氏が天下を手中にできるのに隆景・元春は考え違いをしている」と言っていた。しかし、この時秀吉と交わした神文を守り講和を破らなかったから、秀吉に気に入られて毛利家が存続したのだ、と小早川隆景が折々自慢していた、という。	備中高松之城　（393 備中高松城跡）	吉川蔵人（広家）	天正十年（年未詳五月朔日）	1582年（17世紀初頭）	72・89
66	清水景治言上書／毛利家文書	先年私親長左衛門尉事、備中高松城預ケ被置せ候之処、従信長、羽柴筑前守殿被指下、備中備後可被下候条、西国之先手を可仕之段、信長被成御精帋、蜂須賀彦右衛門尉、黒田官兵衛殿御使として被遣、様々之御事に候へ共、一円承引不仕、右之御精帋を則大殿様、隆景様へ上ケ申、筑前守殿へ御返事ニハ、輝元、隆景境目預ケ被遣候上者、全逆意仕儀有間敷段申上、其上逆意之者ニ、両国を被遣候ても、又逆意を仕候へハ、両国もすたり申候間、被遂御分別可被下之由申上候、（中略）一其後数月籠城仕候へ共、不相叶、切腹仕、諸人助置候、其節大殿様者、備中猿懸之城に被成御座候、隆景様、元春様者、為後巻、備中岩崎と申所に御出陳候	先年、清水宗治（長左衛門尉）が備中高松城を毛利氏から預かり守っていたところ、織田信長が羽柴秀吉を派遣してきた。信長は宗治に対し「備中・備後両国を与えるので西国攻めの先陣を勤めるように」と言ってきた。しかし、宗治は信長からの持ちかけを一切承知せず、信長が送ってきた文書を毛利輝元（大殿様）・小早川隆景に差し出した。秀吉に対しては「輝元・隆景から境目を預かった上は、全く逆心をいだくことはない。ここで逆心するような者に両国を与えても、その者がまた逆心したらもっと事態が悪くなるだけだ」と返答した。その後、宗治は数カ月籠城したが、織田軍にかなわず、切腹して多くの人の命を助けた。その時毛利輝元は、猿懸城を御座所とし在城していた。隆景・元春は高松城救援のため、岩崎という場所に陣取っていた。	備中高松城（393 備中高松城跡） 備中猿懸之城　（227 猿掛城跡） 備中岩崎と申所（423 庚申山城跡）	清水美作守（景治）	天正十年（年未詳八月二十日）	1582年（17世紀初頭か）	70・89
67	楢崎景好御断書写／『閥閲録』巻五十三　楢崎与兵衛	先年大公様高松清水之城へ御取懸之時、上原逆心之時隆景様御陣以外御気遣被成候、すてに御引のき之様御座候つ、私親三河守江御尋を被成候、御縁者上原さへてきニ罷成候上ハ、国々共無御心元被思召との御意候つ、三河守申様ニハ、上原ひはたノ城持こらへ候儀不相成候而、命こいの御てきを申たると存候、先三河守ｙ為人質、孫五郎・右衛門兄弟・中務少隆景様御陣所へ上ヶ申候、左候而木梨・有地・古志・久代方之人しちをハ三河守陣所ニ取置候	楢崎景好が毛利元就・隆元・輝元に従って尽力した父豊景（三河守）の功績を書き上げたもの。先年羽柴秀吉（大公様＝太閤様）が清水氏の高松城へ攻めかかり、上原元将が逆心した時、小早川隆景の陣中は大変な不安にかられ、既に退却しそうな状態だった。隆景は私の父親楢崎豊景に対し「縁者の上原氏でさえ敵になるような状態では､国々の様子も心もとない」と告白した。これに対し豊景は「上原は日幡城を維持することが出来なくなって敵に命乞いをしたのだと思う」と述べ、自分の一族である孫五郎・右衛門兄弟・中務少輔らを人質として隆景の陣所へ預けた。その上で豊景は木梨・有地・古志・久代氏ら備後国衆から人質を集め、自分の陣所へ取り込んだという。	高松清水之城　（393 備中高松城跡） ひはたノ城（431 日畑城跡）	楢崎筑後守（景好）	天正十年（年未詳九月十八日）	1582年（17世紀初頭か）	107
68	三村十助奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十三 干城一二	石井総市郎。天正年中、松山之城主天野五郎左衛門元信より、幼少に候へども合力米を取罷在候。名乗字給候。天正十九年三月十二日、元信判形之書付、爾今御座候。病気に付高麗陣・閧ヶ原之御供にも参不申故に暇申請、竹之庄在所之名田へ引込罷在候。	岡山藩士三村十助が主家に提出した奉公書。先祖の石井総市郎は幼少で家督を継いだが、天正年中に備中松山城主天野元信（五郎左衛門）より合力米を与えられ、名前の一字を賜った。このころ与えられた天正十九年（1591）三月十二日付けの天野元信判物を今も所持しているという。病気で朝鮮出兵・閧ヶ原合戦にも参加できなかったので主家に暇乞いし、主取りをやめて竹庄の在所の名田に引きこもった、という。	松山之城（158 備中松山城跡）	三村十助	天正十九年三月十二日（貞享年間）	1591年（1684～1688年）	30
69	佐内与介覚書／備中荘家文書	刑部大夫居城当国手之城ニて御座候、我等も手ニ罷居候（中略）青野御陣之刻ハ、刑部大夫ｙ手之城を原九兵衛我等両人ニ被預ケ置、国ニ罷有候事	毛利輝元の重臣口羽通平（刑部大夫）が備中国国吉城を居城としており、通平の従者だった佐内与介自身も国吉城にいたこと、閧ヶ原合戦（青野御陣）の時、通平が国吉城を原九兵衛・佐内与介の二人に任せ、安芸国へ帰っていたことを証言したもの。	手之城（135 国吉城跡）	佐内与介	文禄元～慶長五年ごろ（慶安二年以前の丑年十二月二十日）※佐内与介は慶安三年没	1592～1600年ごろ（1601～1649年の間）	7・26

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名	作成者名	年月日	西暦	文献番号
70	宇喜多秀家判物断簡貼紙/社務大守家文書	備中窪屋郡三須村ニ而、百石被下候御判也、別ニ佐野ノ土居亀山ヲ加へ給候ツ、ふるきほうくにまきれ、子共ひきさき申、うせ候、備前岡山中納言様	破損して差出・宛名部分のみ残る宇喜多秀家判物に付された貼紙注記。この判物は使い古しの紙に紛れていたところを子供が引き裂いてしまい、本文がなくなってしまったとある。本来この判物は宇喜多秀家が大森藤左衛門尉に対し備中国窪屋郡三須村において１００石の知行を与える内容だったことを説明している。また、三須村１００石とは別に、佐野氏の居館だった亀山城も秀家から大森氏に与えられたという。	佐野ノ土居亀山（407 亀山城跡）	（吉備津彦神社社務大守氏）	天正十～慶長五年ごろ（近世前期か）	1582～1600 年ごろ(17 世紀代か)	32
71	根屋親光記／『備中誌』窪屋郡　巻之一	慶長年中根屋親光が記に、小堀遠江守殿、倉敷を御城米津出し場所と被成、上野（小野の誤記）庄五郎景盛が城跡に屋敷を建て、仕置をなすと有	『備中誌』が引用する「根屋親光が記」（禰屋七郎兵衛尉親光の覚書、または親光の子孫が同人についてまとめた書物か）によると、小堀政一（遠江守）は倉敷を御城米の積み出し港に指定し、小野景盛の居城跡に屋敷を建て、この屋敷を拠点に仕置きを行っていた、という。	小野庄五郎景盛の城跡、屋敷（422 小野城跡）	禰屋親光、またはその子孫ヵ	慶長年中（近世前期か）	1600～15 年ごろ（17 世紀前半ヵ）	38・115
72	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八 干城七	中島宇右衛門。女子一人御座候。同国根矢七郎兵衛と申者中島大炊助聟にて御座候。七郎兵衛次男与介事、大炊助に孫、子宇右衛門甥にて御座候を養子に仕、娘と申合候。私事宇右衛門孫子与介実子にて御座候。（中略）与介儀備中小寺村先祖城跡御免地外構堀埋地迄蒔田権介殿より除地に被成被遣御懇意に御座候て、今に小寺村に居申候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。中島宇右衛門に娘が一人いた。一方、禰屋七郎兵衛（中島大炊助の聟）の次男与介は、中島大炊助からみて孫、大炊助の子中島宇右衛門からみて甥に当たる人物だった。宇右衛門はこの与介を養子に迎え、娘と結婚させた。中島治大夫（私）は中島宇右衛門の孫で、与介の実子である。中島与介は備中国小寺村の先祖城跡免地に加え、城跡の外構堀の埋め地まで浅尾藩主蒔田定行（権介）から除地として与えられ、蒔田氏と懇意な関係を築いて今も小寺村に居住している、という。	小寺村先祖城跡　（346 中島氏居館跡）	中島治大夫	近世初期（貞享年間）	17 世紀前半（1684～1688 年）	30
73	難波氏覚書／連島難波太一氏所蔵文書	成羽は水谷伊勢守様関東より御越被遊候、山崎甲斐守様御跡御知行被遊候由、右之時に連島新田御取立被成、亀島山御城に罷成候筈に御座候由	山崎家治の領地だった成羽藩領は、関東から転封されてきた水谷勝隆（伊勢守）の領地となった。勝隆は成羽藩領に含まれる連島の新田開発を企て、その地先にある亀島山を居城として整備する予定であったというが、未遂におわった。	亀島山御城	（難波氏）	寛永十六～十九年ごろ（元文元年）	1639～42 年（1736 年）	17

表７　引用文献　一覧表

番号	文献名
1	『出雲尼子史料集』上巻
2	『井原市史』Ⅲ古代・中世・近世史料編
3	魚屋翔平「戦国期大内氏と岡山県地域の諸勢力の関係」(『岡山地方史研究』第 135 号)
4	内池英樹「鈴木家文書について」（岡山県立博物館『研究報告』36）
5	『越前金津城主溝江家』
6	『愛媛県史』資料編古代・中世
7	『岡山県古文書集』第１輯
8	『岡山県古文書集』第２輯
9	『岡山県古文書集』第３輯
10	『岡山県古文書集』第４輯
11	『岡山県史』家わけ史料
12	『岡山県史』諸藩文書
13	『岡山県史』編年史料
14	『岡山県上道郡古都村史』
15	岡山県地方史叢書８『黄薇古簡集』
16	『岡山県通史』下編
17	『岡山県農業土木史』第一篇第十章
18	『岡山市の文化財』（第１集）
19	『小田郡誌』上巻
20	『織田信長文書の研究』下巻
21	『尾張国遺存豊臣秀吉史料写真集』
22	『改修赤磐郡誌』
23	角川日本古典文庫『信長公記』
24	加原耕作「近世城郭としての備中松山城の築城と修復について」（岡山県立博物館『研究報告』16）
25	『鎌倉遺文』第 12 巻
26	『川上町史』通史編
27	岸田裕之「「新出岡家文書」について」(『史学研究』第 203 号)
28	岸田裕之「「新出湯浅家文書」について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』28)
29	『吉備群書集成』第３輯
30	『吉備群書集成』第６輯
31	『吉備考古』24 号
32	『吉備津彦神社史料』文書篇

番号	文献名
33	九州史料叢書第 12 巻『黒田御用記　乾・坤』
34	『教王護国寺文書』10
35	草戸千軒町遺跡調査研究報告 11「備後渡辺氏に関する基礎研究」
36	『久世町史』資料編第１巻編年資料
37	『熊山町史』参考資料編
38	『倉敷市史』第５冊
39	『倉敷市史』第８冊
40	倉地克直『岡山藩家中諸士家譜五音寄』１
41	倉地克直『岡山藩家中諸士家譜五音寄』３
42	『黒田家文書』第１巻
43	『群書類従』第 20 輯
44	『国立歴史民俗博物館研究報告』45
45	小林定一「渡邉氏の先祖覚書と長和庄支配構造」(『福山城博物館友の会だより』№31)
46	『金光町史』史料編
47	『佐治重賢氏所蔵小堀政一関係文書』
48	『史跡　備中松山城跡　保存管理計画策定報告書』
49	『下関市史』資料編Ⅳ
50	『下関市史』資料編Ⅴ
51	『新熊本市史』史料編第２巻古代・中世
52	『新修倉敷市史』第２巻古代・中世
53	『新修倉敷市史』第９巻史料古代・中世・近世（上）
54	『新鳥取県史』資料編古代中世１古文書編上
55	『新鳥取県史』資料編古代中世１古文書編下
56	『新編香川叢書』史料篇２
57	『戦国期中国史料撰』
58	『戦国期毛利氏史料撰』
59	『総社市史』古代中世史料編
60	『総社市史』近世史料編
61	『増訂織田信長文書の研究』補遺・索引
62	増補続史料大成 25『蔭涼軒日録』５
63	『続群書類従』巻３２８
64	第二期戦国史料叢書７『中国史料集』
65	第二期戦国史料叢書９『毛利史料集』
66	『大日本古文書』家わけ２

番号	文献名
67	『大日本古文書』家わけ８－１
68	『大日本古文書』家わけ８－２
69	『大日本古文書』家わけ８－３
70	『大日本古文書』家わけ８－４
71	『大日本古文書』家わけ９－１
72	『大日本古文書』家わけ９－２
73	『大日本古文書』家わけ９－別附録
74	『大日本古文書』家わけ 11 － 1
75	『大日本古文書』家わけ 11- 2
76	『大日本古文書』家わけ 11 －２附録
77	『大日本古文書』家わけ 14
78	『大日本古文書』家わけ 15
79	『大日本史料』６－２
80	『大日本史料』６－３
81	『大日本史料』６－ 14
82	『大日本史料』６－ 15
83	『大日本史料』６－ 24
84	『大日本史料』８－９
85	『大日本史料』９－７
86	『大日本史料』10 －６
87	『大日本史料』10 －７
88	『大日本史料』10 －８
89	『大日本史料』11 －１
90	『大日本史料』11 －４
91	『大日本史料』11 －５
92	『大日本史料』11 －13
93	『大日本史料』11 －16
94	田村哲夫「毛利氏軍記物語類の系統について」(『第二期戦国史料叢書９月報』)
95	『東京大学史料編纂所研究成果報告 2011 ー１小寺家文書』
96	図書寮叢刊『九条家文書』６
97	図書寮叢刊 『壬生家文書』１
98	『豊臣秀吉文書集』１
99	『中川家文書』
100	『成羽町史』史料編
101	『南北朝遺文』九州編第１巻

番号	文献名
102	『南北朝遺文』中国四国編第１巻
103	『新見市史』史料編
104	日本古典文学大系 35『太平記』二
105	日本古典文学大系 36『太平記』三
106	『萩藩閥閲録』第１巻
107	『萩藩閥閲録』第２巻
108	『萩藩閥閲録』第３巻
109	『萩藩閥閲録』第４巻
110	『萩藩閥閲録遺漏』
111	畑和良「織田・毛利備中戦役と城館群」(『愛城研報告』第 12 号)
112	畑和良「猿懸城合戦と毛利氏の備中国経略」(『倉敷の歴史』第 20 号)
113	畑和良「戦国期備中南部の支配体制と清水宗治の実像」(『吉備地方文化研究』第 19 号)
114	畑和良「細川通董の野州家相続とその背景」(『倉敷の歴史』第 22 号)
115	『備中誌』
116	『広島県史』古代中世資料編Ⅱ
117	『広島県史』古代中世資料編Ⅲ
118	『広島県史』古代中世資料編Ⅳ
119	『広島県史』古代中世資料編Ⅴ
120	広島県立歴史博物館展示図録第 45 冊『ひろしまの城と戦』
121	『備後叢書』第３巻
122	『防長風土注進案』第１巻
123	『防長風土注進案』第１０巻三田尻宰判下
124	光成準治「高松城水攻め前夜の攻防と城郭・港」(『倉敷の歴史』第 18 号)
125	光成準治「室家資料と中・近世移行期の中間層」(『岡山県立記録資料館紀要』第３号)
126	『三原市史』第五巻資料編二
127	『美作古簡集註解』全
128	『門司文書』
129	『矢掛町史』史料編
130	山内譲『海賊と海城』
131	『山口県史』史料編中世２
132	『山口県史』史料編中世３
133	『山口県史』史料編中世４
134	『山手村史』史料編
135	有朋堂文庫刊本
136	横田孝雄「所持銘のある末古刀・続追加と訂正」(『刀剣美術』第 447 号)
137	『鹿苑日録』第２巻

※合字「より」については英小文字「y」に置き換えて示した。

第５章　城館関連地名表

凡例

１　地名表の作成について

（１）本表は、『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店 1989 年や自治体誌等に収載された小字名から、城館に関連する地名を抽出し作成した。

（２）城館に関連する地名については、「城館調査ハンドブック」新人物往来社 1993 年を参考とした。

２　地名表の記載内容について

（１）本表には、市町村名、郡名、大字名、城館関連地名（小字名）、周辺城館等（大字地内に所在する城館跡）を記載した。なお、大字に残る城館関連地名（小字名）の場所に、必ず表記している城館が所在していたとは限らない。

（２）郡名は、新郡区編成時（明治 11 年）の名称を用いた。

表 8　備前国中世城館跡城館関連地名表

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
哲多郡	新見市	神郷高瀬	長久　フルヤサコ　茶屋坂　市庭　長久屋敷　鏡屋敷　高旗山　重久	１宗重屋敷跡　２仲村城跡　３勝ヶ城跡　６小郷寺城跡
哲多郡	新見市	神郷釜村	田口ヶ市　竹ノ谷　三ヶ市	４三ヶ市城跡
哲多郡	新見市	神郷油野	竹の下	７挽野城跡
哲多郡	新見市	千屋	代城　大城　大城　古屋　下馬場　茶屋　ヤスギの里　セキヤ谷　公名谷　馬場　公文　ヤスギ　九文名　九文名谷　九文名奥　九文名家の上　九文名家の後　為宗名主屋敷址　いもじや址	５名称未定
哲多郡	新見市	坂本	市庭分車瀬上　タチヤ谷　ウソガイチ　矢の峰　エノ壇　ウソカイチ　茶屋　庄地　近藤奥　円ノ壇　吉元　吉ヶ峪　友貞名主屋敷　正地　甲免　鍛治屋渡り　刀原	
哲多郡	新見市	上市	横見　横見ノ内　小谷　小谷ノ内　矢谷　矢谷ノ内　石ノ城谷峠　木戸　木戸ノ内　千矢谷　木戸　横見　地頭政所　戸屋ノ鼻　市庭　家ノ前　屋敷田　大道　大道ノ上　二日市庭　古屋　谷内　牛丸　山戸岐　政所　荒堀奥　土井　フルヤ　木戸サコ　寺領免　かねつき免	８樔城跡　９朝倉城跡　10横見政所跡　11粒根城跡　12地頭方政所跡
哲多郡	新見市	哲西町上神代	城山　見坂山　下馬　平古屋	13岩高城跡　14見坂山城跡
哲多郡	新見市	哲西町矢田	城山　矢田谷　馬場上　馬場下本町　荒堀　土井上　土井下横田　倉木　長者屋敷　城山　土井池　土井竹川内　矢田谷　土居畝　馬場	15万石城跡　16土井城跡　19豆木城跡
哲多郡	新見市	哲西町畑木	四日市　かじ屋　矢はぎ谷　新鍛冶屋　前鍛冶屋　後鍛冶屋　腰折前　城ノコシ　茶臼山城跡　四日市上　四日市中　四日市下	17白石城跡 18藤木城跡
哲多郡	新見市	神郷下神代	政所　門前　殿	14見坂山城跡　21中田山城跡
哲多郡	新見市	西方	土井　上金子　太田　宮田屋敷　政所　辻田　大田屋敷　久原　箱ヶ市　大門　大むしろ　下見取場　下見取場内　大田郷見取場　関ノ元　中縄手　中縄手ノ内　土井ノ内　城山　堀越　堀越ノ内羽場下　久原ノ内　久原谷　城松　ヨロイダキ　段高下　段　段ノ内　福本氏屋敷址　領家政所址　堀越　仮屋ヶ市　門田　古屋敷　福本　小丸山　鍛冶屋　政所址　横見　古屋敷　家脇　牛丸	22福本城跡　23竹野城跡　24金子氏屋敷跡　25西方政所跡　26宮田山城跡
哲多郡	新見市	哲多町成松	守家	30諏訪山城跡　42成松山城跡　43井ノ畝城跡
哲多郡	新見市	哲多町本郷	城谷　立石の畝　びくに屋敷　馬洗の池　沢がなる　大鼓がなる　掛土井　茶屋々敷　市場	31猿滝城跡
哲多郡	新見市	金谷	高丸山　高丸山ノ内　牛丸　牛丸ノ内　堀田　下屋敷　竹ノ下　竹ノ上ヱ　関戸山上ミ　関戸山上ミノ内　六日市	
哲多郡	新見市	石蟹	馬場　竹ノ花　城山　新屋垣内　古屋敷　垣　屋敷趾　垣内　門　門前	34石蟹山城跡
哲多郡	新見市	長屋	城ヶ峠　庚申山ノ下モ　築瀬　古城山	33鯉滝城跡　34石蟹山城跡　35名称未定
哲多郡	新見市	哲西町大竹	腰折	36岸本城跡
哲多郡	新見市	哲西町大野部	土井　二条殿屋敷　二条山　百射山	38育野古城跡　39二条殿跡
哲多郡	新見市	哲西町八鳥	要害山　市場　下鍛冶屋　土居屋　中鍛冶屋　上鍛冶屋　鍛冶屋　道明寺屋敷　小マル山	37西山城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
哲多郡	新見市	哲多町蚊家	田之河内　土井　田河内	40鎌ヶ畝城跡　41歴却山城跡
哲多郡	新見市	哲多町田淵	荒戸山　坊河内　小屋ヶ畝　追付川　皿洗いの池　ソーサク山	20荒戸山城跡　27馬酔木城跡 28小屋ヶ畝城跡
哲多郡	新見市	哲多町大野	田之河内　馬渡　則安　重藤　大野田河内	
哲多郡	新見市	哲多町花木	城山　光長　宗末　盛弘　重宗　安宗　詮盛　久保井野	32助正城跡
哲多郡	新見市	哲多町老栄	中屋敷	43井ノ畝城跡
哲多郡	新見市	哲多町矢戸	鍛冶屋　蔵本　倉屋　庄屋　久保屋　上河内　城畝	44越山城跡
哲多郡	新見市	哲西町	久保田山	
哲多郡	新見市	哲西町上野部	太刀洗いの池	
哲多郡	新見市	哲多町	垣の内	
哲多郡	新見市	井倉	大門　梶屋ノ下	
哲多郡	新見市	法曽	五段石　仮小屋　久家屋廻リ　戸屋ノ下　戸屋川ノ上　畝川内　狐久保　畑ヶ市道下タ　深久保　野田川内　臼久保	45柏山城跡
阿賀郡	新見市	千屋花見	庄司畑　倉谷　下ヶ市原　用害　古見　古見原　中ゴヤ　塔ノ畝加市田　ヤマカケタニ　コヤノタニ	46赤坂城跡
阿賀郡	新見市	千屋井原	関象　高丸　市倉　則越　古屋敷　堀■　堂念堀　殿田　森田	47西城跡　48仲村城跡
阿賀郡	新見市	千屋実	関ケ谷　堂面　庄原　カマシロ　鍛冶屋原　山根ヶ市　頭司屋敷　上大蔵　門田　小谷篠ヶ原　市場　鋳長山　堂免　大屋敷　坊ケ市　見守　矢ノ峠尻　土井　下馬場　馬場　刑部	49実山城跡
阿賀郡	新見市	大佐大井野	戸井峪　御所原　カマヘ原　梅ノ木且　茶屋ヶ平　中ノ河内大平　旦　落ノ旦　小段　東ケ旦　東ヶ段　竹ノ谷　中ノ河内大谷　桜ヶ内上　竹ノ上　竹ノ下　段ノ前　堀田奥　上中倉尻　中倉尻　中ノ河内大平尻　古家の谷尻　円丸尻　垣ソヘ　カド　円丸　桜ヶ市　中ノ河内　河内　田ノ河内　下ヶ市　垣ノ内　柿ノ市　カヒチ　中倉　下中倉　市倉　屋敷ノ谷　小屋床　ヨウガイ　ナワ手　墓ノ旦　国司　国司田　国司谷　的場　馬場高下　カジヤ谷　欠戸　ハヶ段　御世の旦　段ノ高下　小ヤノ谷　上小谷　小谷　下中倉尻　小谷尻　トイ口	
阿賀郡	新見市	大佐上刑部	トイサコ　マタラ河内　城ヶ平　狐ヶ且　桜ヶ且　林之段　大段　柳之段　家之段　坂口中ノ段　柏ヶ且　笹ヶ且　且　峠段　ヤサン畑　小久保大坂　風呂ノ段　小谷ノ上　矢散畑道ノ上　門之上　地蔵山下　庚申山下　小谷尻　小家ノ谷尻　柴尾尻古屋尻　柿本　矢之元　竹添　古谷西山　竹ヘリ　築山　小久保口　垣之内　鍛冶屋敷　木治屋敷　屋敷田　倉馬様　古鍛冶屋　久清　堀池　的場　古谷　馬飼場　馬綱 要害　城ヶ平　シヤジウネ　小久保　矢散畑道ノ上　馬背	50葛籠畑山城跡
阿賀郡	新見市	大佐小阪部	河内　清水河内　下河内　為清河内　久原　梅ノ木段　河内曾根　段畑　堀田　前田　角田　河内田　柿田　竹通り　竹添　乗越　竹之上　段之上　カジヤノ後　竹ノヘリ風呂ベリ　上竹　輪ノ内　加市　垣内　ヶ市　平ヶ市　垣之内　西垣之内　清水ヶ市　上市場　市場の後　下市場　古屋敷　名子屋敷　古屋　ナコヤ　元屋敷　代官給　土井之内　竹ノ花　竹ノ内　戸部　実久　縄手　堀　船堀　瀬戸新開　北田神免　神主免　神子免　神田ノ灯明田竜王免　カチツキメン　薬師丸　湯免　峠見堂　カ子スキメン　伊豆免　庄元田　カジ屋河内　矢元　矢ハギ　城山　刑部　矢はぎ　大津久清　小守峠　越峠　山根ヶ市　ボーガー市　龍王免　ゆ免　伊豆免釿坂	51割亀山城跡
阿賀郡	新見市	大佐永富	蔦河内カクレ迫　竹ヶ迫高下の迫　竹平　平段　戸谷　小屋ノ谷　久口田　角田　帯刀田　構田　柿田　かけ上り　縄手淵　構マタゲ　構田　竹ノ上　竹ノ下　トイノ前　前田　横見　マヘ　木戸脇　横見ノ向　竹添　カキ添　山根ヶ市　ボウガ市　加市　カキウチ　惣ヶ市　オ小ヶ市　下ヶ市　横見屋敷上　土井畑　城之内ワキ町　馬乗場　乗トモ　横見　横見上　宮縄手　満堀　角免　矢萩　乗トモ　馬場　蔦河内　竹ヶ迫　土居　城之内	52矢作城跡　53円通山城跡
阿賀郡	新見市	大佐小南	太宰川内　寺奥川内　西河内　河内平　川内峠　垣畑　前田　カキソヘ　乗越影　イヤ垣ノ元　屋敷ワキ　前田中口　乗越地先　ハタホリ　斧ケ市　風呂ヶ市　屋敷田　屋シキ　実久　大蔵　河原新開焼山　追月免　トウメン　堂ノ段　馬場田　的場　城山　宗堂　マトバ　太宰川内　角田　一之奥　河原新開	54周防城跡
阿賀郡	新見市	大佐田治部	城山　御門の口　馬乗石　仲倉　馬場ヶ迫　梨木ケ市　城山　馬場　ヤスモト　漆原　柿迫　トイガ迫　竹ノ迫　小家ノ迫　柿原　段ノ平　竹平　戸板平　シロカ子平　赤滝川平ノ段　城ノ畝　ホリウ子　木戸カニワ谷　戸谷　小屋谷　番場谷　段バナ　梶畑　段畑　段々畑　前田　前サイ田　ダン後河原田　だん　脇だん　榎の且　前サイ田山添　大平竹ゾエ　竹添　久ノ板尾　丸山畝ヶ市横路　突あて　乗越　オリゴエ　高ギ　免ラ元　古屋敷ノ上　国司道上　コヤノサコ道上　馬場上　ツキ田上　ホリ田上　竹ノ上　久森上　だんの上　垣内道下　小丸道下　ホリ田ノ下　馬場下　竹ノ下　投石下　馬場ノ前　ダン後　馬場奥　久ノ板尻　竹本　且堂脇　竹ノ脇　小屋ノサコ峠西　だんの向　国司川向　馬乗岩　木戸ノ内　木戸口　城ヶ頭　堂つきの段　上ケ市　奥ヶ市　カイチ　古屋ケ市　峠ヶ市　小原ケ市　サライケ市　きん上ケ市　下ケ市　瀬ケ市　御崎ケ市　森ケ市　林ケ市　北ケ市　中ケ市　梨ノ木ケ市　戸谷ケ市　コウヤケ市　鉄ケ市　垣内　古屋敷　屋敷　宗四郎古屋敷　与十郎古屋敷　屋敷田　鍛冶屋奥　竹ノハナ　竹ノ内　役所ノ上　山小屋　一久保田　五久保田　畷　家ノ下新開畑　堀越　仲堀　荒堀　堀　堀越し　木戸　国司　国司宮太夫　ビクニ油免　仏具免　キヨウツカ丸　馬場　的畑　的場畑　安元　馬場ヶ迫　大久保山　投石　大垣　長畑古道新開　久森　久ノ板　岡ノ下藤久保　高馬　トヲノ面　久床　モモシロ　ツクノ田　打置　馬のほせ　壱町小丸　町小丸　サルカキウエ　サルカキ　黒ノ田小丸　久ハ下モ　小黒見　ツクノ田　戸谷田　大マガリ　岡だん　岡ノ下堂突　免ラ元奥ツキ　古屋敷ノ上　コヤノサコ道上　馬場上　ツキ田上　馬場奥東奥　久ノ板尻り　垣之本　三崎ヶ市　仲倉　クボ田　二クボ　大クボ田　畷　ヤトウゾウリ　久蔵畑　ハデ場　カシバタ　仏倉田　込山投石　町小丸イカリ	55安本城跡
阿賀郡	新見市	馬塚	奥ケ市　古屋敷小丸山　古屋敷　屋敷おけだ　城ケ谷　竹ケ市　鍛治屋渡リ　古屋敷　石垣　馬塚中　馬塚下	
阿賀郡	新見市	菅生	茂村古屋谷　竹谷　上垣内　城山　竹ノ谷　小屋谷　荒堀　段号付　前田　宮ケ市　大堀田　ケ市　馬場迫　ツノ河内山　当代ケ市　蔵本前　蔵本　空ケ市　段畑ケ　小屋奥本谷　竹ノ下　かなら袋美地森ケ市　竹花　梅ノ木門出　垣内　金倉向　ヌクユ道下たゝかい　枕原　垣内　久シ　後口迫金倉　門脇　分ケ原ケ市　分原ケ市　中倉　小谷　馬場ノ下　竹ノ下　カジヤケ市　弥五郎垣内　登リ立　当ケ市　打置　向ケ市　前田　上ケ市　林ケ市　岡分林　垣内　西谷	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
阿賀郡	新見市	上熊谷	越倉　土居四河　黒谷丸山　国屋　政所　小谷　国司ヶ丸　杉山殿畑　須丸　中倉　塩城山　陣坂　土居　土井　殿屋敷　丹治部　古屋敷　大門　国屋屋敷　政所上　政所家ノ後　トノ畑　土井　乙原　陣坂　陣迫　要害	56土居遺跡　57田治部氏屋敷跡　58塩城山城跡　60田治部国衙政所跡
阿賀郡	新見市	下熊谷	木呂古谷	
阿賀郡	新見市	大佐布瀬	高丸　要京　堅城　竹田峠　鐘突堂　津加の丸　弓張　馬の足冷　河内　中河内　河内上　上河内　末河内　上河内前河原　ケゴヤ大平　野原新開山平　竹田畑　ハナグリ柿畑　柿畑　角田　大谷カド田　木戸道下角田　竹田畑流田　段道　坂ノ段　古屋敷坂上　古屋敷坂ノ段　ユイガキ　小丸　ケコヤ道ノ上　木谷道下　上河内前　竹田畑谷奥　竹田尻　トイノ元　竹ノ元　垣内谷ノ向　上河内川端　垣内ヶ市　空ヶ市　中ヶ市　下垣内　オナガ市　ヨリヶ市　奥ヶ市　ツルシケ市　鍛冶屋ヶ市　梨ノ木ヶ市　土井の内　古屋敷　カジヤ迫　フルヤ　大蔵　門畑　京メン　湯免　馬場辻　馬場畑　ケゴヤ　落石　木谷道下落　開山　ヒラ木　■草　椿ノ段　コウノミコウ　カモン田　打入　定トク場　城ヅケ　市ヶ迫　湯原川原上河内前河原　突出し　新田突出し　作り立テ　大フロガケ小丸　ケコヤ道下　一クボ田　道ノ上一クボ田　ハデ場　山ノ神ユイガキ　要京　ヒラ木	59大山城跡
阿賀郡	新見市	豊永赤馬	竹ノ鼻　アガリ迫　高丸　門畑ケ　竹前　後ケ市　横畑ケ竹浴　竹ノ脇　前田　下ケ市　浴ケ市　天王ケ市　上ケ市　風戸　小屋ノ谷　中屋ケ市　堀田　サイノ段尻リ　サイノ段　堀田平　古谷　段ノ下　徳城　鍛治畑　鍛治屋谷　門道狭ミ　小丸山　鍛治屋　久ゴ平　河内　中開　鳶ヶ城山　三久　佐久良	70鳶ヶ城跡
阿賀郡	新見市	高尾	弓削　加市田　志よ婦迫　向ヶ市　姓免荘　高尾ヶ市　竹ノ下　竹ノ下尾添	62丸山城跡
阿賀郡	新見市	新見	三日市　城山　戸堀　千丸　高丸　馬ヶ迫木谷奥　ヨウガイ　壇頭が畝　三日市庭　三日市場　市庭	63小谷山城跡　64鳶ヶ巣城跡
阿賀郡	新見市	正田	荒堀リ下タ　柿田天川内　寺ヶ市　カジヤカウゲ　桜ヶ市山田　桜ヶ市　上ヶ市　行免　鍛治屋谷	65角尾城跡
阿賀郡	新見市	唐松	堀切上ミ　堀切　前田津　前田津　要害　段林　市場　市場東　津戸木　段　伴蔵　要害山　城山	66甲籠城跡　67山根城跡　69鬼山城跡
阿賀郡	新見市	足見	前河内　上河内　浅尾矢茂　矢茂ノ上ヱ　旗ノ畝　大成ヶ市　岩刈ヶ市　窪ヶ市　堂ヶ市　ヶ市　西ヶ市　竹ノ花廻リ　越山　コモリ山　小板屋　門　加治屋　的場　中門　万殿　久保井　城山　杵築山　庄五成　津倉　津倉ノ下　倉掛　当免場　才ヶ市　大段道西　大段道之東	68城山城跡
阿賀郡	新見市	土橋	段ノ後　上ヶ市　小丸山　段　下ヶ市　下ヶ市向　加庄原　森屋ヶ市　下ヶ市　氏名戸　木所　馬見峠　ヶ市　屋形風呂　土井　段ノ原　亀ヶ段　小丸山	
阿賀郡	新見市	草間	荒堀向　市場　轟き荒堀ノ下タ　丁字ガ丸　下ヶ市　申面　梶原　盗人小屋　羅庄門　ヨウガイ大前　段　矢迫　小板屋　殿ヶ市　ソリヶ市　森ヶ段　矢曽　千防　久保井　城山	97川崎城跡
阿賀郡	新見市	豊永佐伏	平ヶ市　カジヤ　久保　ついじ　大倉　浜子段　竹ノハナ　北ヶ市　ツイジ　陳山東山　陳山　ヶ市　陳山横部　家老浴　ヶ市　上ヶ市　峠ヶ市	
阿賀郡	新見市	豊永宇山	名越　大手毛　高丸　古うぢ　大曲　古屋井頭向　太鼓　久之内　小久保　矢峠　矢中向　八重垣　下タ々べ俵林　大曲　馬切り　登リ立テ　馬切リ　城山　矢中	71宇山城跡
阿賀郡	高梁市	中井町津々	古城	77加葉山城跡　100津々城跡
阿賀郡	高梁市	中井町	城山　御堂がいち　かぢや　御蔵屋敷　屋敷　御堂かいち	
阿賀郡	高梁市	中井町西方	庄屋谷　市場　鍛治屋　倉ヶ市　柴倉後　柴倉前　佐内丸	98古見山城跡　99城山城跡　100津々城跡
阿賀郡	真庭市	上呰部	古屋敷 的場　縄手ノ下　殿屋敷　竹ノ下　殿屋敗水納屋	72双内城跡　73高釣部城跡
阿賀郡	真庭市	下呰部	馬場　古城　政所　木戸ノ口　城山	74植木城跡　78上合地砦跡　80丸山城跡　81植木遺跡
阿賀郡	真庭市	上中津井	代官畑　大蔵古屋敷　コ屋　古屋敷　垣ノ内　竹ノ元　的場　武士ケ坪　鍛冶屋敷　ヤクラ　門田　勝陣　紺屋古屋敷　六蔵古屋敷　前田　マト場　竹ノ鼻　堀ノ内　馬場南　土居前　土居前畑田　土井　土居道上　矢倉　城山　城ノ下	95定砦跡　96高機山遺跡　101勝陣山遺跡　102陣ガ畝砦跡
阿賀郡	真庭市	下中津井	馬場　堀之内　竹中　馬場前　城山　城ノ下　前田　古屋敷　家老畑	75土井砦跡　76才田城跡　94柾木館跡
阿賀郡	真庭市	上水田	馬場　城ノ峠　城崎　垣ノ内　竹ノ下　竹ノ下　馬場　土居　前田　竹ノ内　竹ノ下火派　土井元　城ノ段　竹ノ下　門ノ下　城　門田　馬場　コヤ　竹ノ内　古城　城ノ内　大門　馬場	82井尾城跡　83赤茂館跡　86飯山城跡　87陣山砦跡　88福尾城跡　89山東塚城跡　90小殿城跡　91小松城跡　92荒木城跡　93四ツ畝城跡
阿賀郡	真庭市	五名	古城　馬渡　井堀　山之城　土井　的場　前田	79山王城跡
阿賀郡	真庭市	宮地	門田　古屋　城田　北垣内　前田	84片山城跡　85片山古城跡　86飯山城跡　87陣山砦跡
阿賀郡	真庭市	山田	門田　宮城田　馬場崎　馬場葵苳　馬場コウゲ　土井　土井畑　古屋敷　古屋敷	86飯山城跡
川上郡	高梁市	成羽町吹屋	水山境御番所ノ下モ　金山小屋　ユリモノ小屋　矢多ラ　城山　城山水分神　前城山東平　後ロ城山　的場　矢広新田　城山　城越　矢先　矢迫　カジヤトコ　カオガイチ　ドウガイチ　ロオガイチ　サカイチ　盗人小屋　縄手　段　平次郎河内　石の中　石垣ノ内	105小金山城跡
川上郡	高梁市	成羽町中野	矢谷　矢広	
川上郡	高梁市	成羽町坂本	矢光	
川上郡	高梁市	備中町西山	番屋跡　細川磯五郎の元屋敷跡	103戸構城跡
川上郡	高梁市	備中町平川	小戸森　竹の倉　越山　堀井	109北丸城跡　111紫城跡　112平川氏館跡　113山根城跡　114金子山城跡　115大原田城跡
川上郡	高梁市	宇治町穴田	根小屋	119丸山城跡
川上郡	高梁市	成羽町小泉	上城山　下城山　大門　城松山　一ノ門　二ノ門　三ノ門　大刀洗いの池　シュウジンガシラ	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
川上郡	高梁市	松原町松岡	陣山　まんじょう　畑谷庄屋	120陣山城跡　121馬之城跡
川上郡	高梁市	成羽町羽山	馬場	
川上郡	高梁市	成羽町成羽	お茶屋　上市　下市　新張　城ノ東　城ノ西　城ノ南　城ノ北　東堀　西堀　南堀　乾角　桜ノ馬場　新屋敷　勘太郎テエ　松尾屋敷　治平屋敷　庄左エ門　御殿　下馬　的場　星原丁　鷹部屋丁　本丁　裏丁　柳丁　白谷番所跡　白谷犬の馬場　白谷矢原　矢原　鍛冶屋谷　下モ大猿尾　大段　縄手　轅立　番所　馬場田　馬飼い田　馬場　梶原　トイノモト　乾角ミ　乾角　乾角ノ上へ　北堀　御茶屋北土手　御茶屋　御茶屋東土手　瓦屋敷　御茶屋南土手　桜ノ馬場　御茶屋西土手　城ノ西　市場　太鼓丸　堀切　溜め井　一ノ壇　二ノ壇	124三村氏居館跡
川上郡	高梁市	成羽町下原	馬場　城山	125三村氏陣屋跡　126鶴首城跡・古鶴首城跡
川上郡	高梁市	高倉町飯部	河内	
川上郡	高梁市	高倉町田井	下梶村　上梶村	
川上郡	高梁市	落合町阿部	市場　藤倉	127阿部深山城跡
川上郡	高梁市	落合町近似	鍛冶屋町	
川上郡	高梁市	落合町福地	境谷	128鍋阪城跡
川上郡	高梁市	落合●	新城池	
川上郡	高梁市	玉川町増原	中仙戸	
川上郡	高梁市	川上町地頭	平殿　新屋ヶ市　中屋ヶ市　新谷ヶ市　ハントケ市　中屋ヶ市空ケ市　大久保　奥ケ市　奥ケ市家ノ上　見ノ上谷　巳ノ上谷　殿田　土井　八十石奥上エケ市　上エケ市家ノセド　カジヤ奥　カジヤ　鍛治屋下タ　見取場　倉ノ前　クラヤ　蔵屋　中久保　中ノ久保　前田　ナル大段　竹ノ鼻　竹ノ下　上ミケ市　上ケ市　縄手　孫右エ門田　ナワテ添　空ケ市　馬田　浅倉　浅倉山ノ神　浅倉大平　浅倉ヤケミトウ　浅倉石垣成ル　浅倉背狭　浅倉細コウロ　竹ノ内　曲リ屋敷田道添　曲リ屋敷田　向角田　角田　クラヤ　堀ノ内落　堀ノ内　皿谷久保　山免　湯免　屋敷田　屋敷田　大門　下ケ市前　垣内　下垣内　下ケ市　鍛治屋渡リ　鴨ケ市廻田　鴨ケ市　的場　半戸ケ市　下モ垣内　ケ市　松尾空ケ市　水之久保　面垣内　カジヤワタリ　井ノ上前田道狭　マヘ田　湯免　由免　湯免道下　湯免六郎田　皿谷久保　船谷平田久保　枝久保　大畑大手　大柏大柏大久保　大柏長久保　上ケ市　竹ノ花　上ケ市　竹ソネ　竹ノ鼻道狭　上ケ市道狭　縄手　前田　角田道狭　南上エ上ケ市　城山　大竹境　今丸　大小敷家ノ上　大コシキ　コシキ　前畑　竹ノ花　大古敷　古屋敷	134小社森城跡　136堀ノ内遺跡
川上郡	高梁市	川上町七地	シヤウブノ久保　乗本後ロ　大開キ　堀田　向ケ市　曾根ケ市　縄手　上縄手　井堀　井堀向　井堀鼻谷山　根ケ市向　向ケ市　堀田ノ上エ　堀田　矢城司　矢城司　殿田　仏性面　蔵地面　行ヒ免　東久保　西ケ市　西ケ市　ビワケ市　前ケ市　井ノ木谷番姓免　梶原　迫ケ市向　東ケ市　高丸　竹ノ上エ　竹ノ土井　竹ノ鼻向　竹ノ鼻　城谷　城平　迫ケ市　西ケ市　野免羅　仏性面　堀井　下モ縄手　竹ノ窪　梨久保　小丸甲　軽ケ市　堀井　後ケ市　竹ノ下タ　後ケ市向　竹ノ下　堀井　蔵ノ後ロ　飯柿ノ元　縄手ノ下タ　西ケ市　二方ケ市　二方ケ市　殿畑　的場平　的場　小城山　古城ノ後ロ　城山　城山鼻　馬渡リ　馬渡ノ上　桐ノ木ノ段　ジンヤマ　ジンママ　殿山道下　殿山尻　木戸ノ本　屋巳屋　縄手向　中土居　上ケ市　中ケ市　関戸　矢淵　縄手ノ下稗田ノ上エ　竹ノ埒　新屋ケ市　茶ノ木垣内　段　段ノ平　笹ノ久保　平蔵後ロ　平蔵　縄手ノ下タ　万蔵アン　矢ノ迫上エ　矢野迫　与美奈和手　大久保　釜ノ久保　高丸　野田久保　矢ノ迫	133小城山城跡　135国吉城跡
川上郡	高梁市	川上町三沢	高原谷久保尻リ　下乗竹下モ　下乗竹シリ　乗竹　鳥越荒神田下乗竹　下乗竹上へ　乗竹縄手下モ　乗竹石ヶ坪　乗竹前へ河原　市平前田　藤迫ノ段　藤迫ノ久保　カジヤ家前　マヘ田ノ口　カジヤ平　カジヤ谷　東ノ久保　ヤシキガ市シリ　小久保シリ　家ノ後久保　小ハケ市　石指久保　石指奥サイノ久保　開キ　馬留谷　野田久保　野田久保道ノ下タ　サイノ久保頭　八久保　日出谷カジヤ向新屋向陰地　前田大町　中縄手下モ　下ノ門畑ノ詰　屋敷田ノ下タ　城谷　家ノ上久保　西久保ソネ　清二郎前田ノ口　具足田上エ　具足田荒神田　大ダン　石亀久保　松山前畑　ノリモト上へ　古屋敷下タ　乗元タンジ　壱町田乗元道ノ下タ　堂丸　連戸　栗ケ久保　古屋敷　ナルトノ上へ　サイノ久保　狸久保　サイノ久保下タノソネ　才ノ久保尻リ　志やう婦　水木ノ久保　津へクボ惣田久保　大段渡リ　朽ケ久保　小久保ノ頭　淀開　大段　向垣内上エ　向垣内　屋敷の内　屋敷奥　屋敷ノ上へ　西元ノ下モ　西河内　西河内上へ　西垣内小尻リ　芋迫門詰メ　宮迫ノ上エ矢平ノ奥　中矢平上へ　中矢平　矢平谷　中矢平谷　中矢平谷田ノ上へ　矢平下タ　矢平　中矢平前畑　矢平家ノ上へ　矢平家ノ下モ　野垣内ノ下タ　野垣内　上垣内後ロ　上垣内　上垣内家後　上垣内下タ　上垣内後小尻リ　上垣内前畑　上垣内上へ　野垣内後ロ　野垣内家ノ前　野垣内ノ奥　野垣内上ミ　野垣内渡リノ上へ野垣内渡リバ　鍛治屋畑　鳥井ノ久保　矢平奥　矢平向朽谷　矢平奥柳ガ迫　矢平奥松見　矢平奥地蔵後　矢平奥池田ノ後　大屋敷　広丸　久保　西ノ久保前畑　油免　矢ゲン谷ソネ　矢ゲン谷　矢ゲン谷頭　大屋敷谷　ハガネノ久保　元屋　前畑　前田口　前田　漆久保　漆久保頭　白滝桐之木大段　野中前畑　野中前畑ノ下モ　ホリ川ノ下タ　ホリ川　萩ノ久保　塩見マヘ田ノ口　部屋倉マヘ　大段　大段ノ下タ　森久保下モ田ノ上へ　森久保下タ　森久保上ミ　森久保上道下　森久保家下　森久保森久保大道ノ上へ　森久保道ノ上へ　土井ノ鼻　城山　土井　城ノ元　城ノ元道ノ下　土井ワキ　土井表　土井ノマエ　土井北請　土井後ロ　土井家ノ後ロ小林ノ下タ　竹城　北ケ市上へ　ソ子ケ市上へ　空ケ市　北河内　北ケ市　北垣内　殿屋敷上へ　殿屋敷　前畑詰　前畑　北ケ市道ノ下タ　竹ノハナ　丸山下モ　久保　竹ノハナ道下タ　竹ノハナ前畑　町ノハナ前畑　荒神ノ前畑ノ下タ荒神ノ前ノ下タ　大見谷向　小見山　下モノ久保　大マガリ　上ミノ久保イヤ　上ミノ久保　横道ノ下タ下モノ久保　竹ノ下ノ上ミ　竹ノ下タ　竹ノ下小尻リ　竹下タ　門ケ市下タ　門ケ市　門ケ市下モ　門ケ市家ノ下モ　堀道ノ下タ　堀道ノ上へ　小西前畑　木綿久保　木綿久保道下タ　木綿久保尻リ　中ノ垣内ノ下タ　中ノ垣内前田　中ノ垣内　中垣内上へ　竹ノ久保松山大道ノ下タ　鞍掛ケ松大仙城大平上へ　大仙城上へ　大仙城下タ　大仙城大平下タ　鉢ガ久保滝ノ下タ　矢筒　滝ノ久保　矢筒本谷　中久保　笹ケ市　平ノ久保道ノ下タ　平ノ前汲川ノ元竹ノ口　平ノ前久保　平門ノ前道ノ上へ　城仙　笹ノ丸橋ノ下モ陰地　久保田　古屋敷下タ　笹丸ハナ　古屋敷　前畑　古屋舗　空ケ市　笹丸　笹丸陰地　竹ノ迫三角畑　川久保　前田荒神田　竹ノ迫　竹ノ迫頭　前田　竹ノ迫ノ尻リ　竹ノ迫北受　竹ノ迫マヘ　竹ノ迫ノ口　面田　古屋　笹丸尻リ古屋　面田上リ　小丸古ウ	138野田城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
川上郡	高梁市	川上町領家	大久保　大開　花内端久保　開キノ内　井手ノ上ヱミノ久保　垣添向　上ミヶ市　廻リヶ市　迫ヶ市　西ヶ市　上垣内　上ヶ市　マワリ前ヶ市　上ミコメン　中屋ヶ市　クラシキ　ホリ　門田　ヤウ久保　下モ久保　北ヶ市　トノバタ　大門　北ヶ市　前田　垣添　屋敷田　秡ヶ市　大門　原垣添　下梶田　梶田渡リノ上　梶田　梶田下モ　梶田ノ口　梶田前　梶田向　久門　片山下モ　九門　北ヶ市　梶田　カキテノ口　垣手古川　乗本　乗元道添　門ヶ市　片山シモ　乗元後　乗元原　前田　一門　土井田　堀釜　堂ヶ市　大開堂ノ奥　屋敷門田　竹ノ内　竹ノ原　行免　大段ノ下タ　平ヶ市　竹ノ花　竹ノ鼻　大久保　馬場　行免　神原久保　大番　ユメン　久保　クボノ上へ　イセ免　前田　イセ免　前田　馬場　梶田前	
川上郡	高梁市	川上町臘数	庄ろふ　シャフロフ道上へ　シャフロフ　シャフロフ道下タ　庄ロフ　ナワ手道上へ　後山ノ下タ　ユスノ木ノ段　久保畑ケ　古屋敷上へ　表屋敷下タ　ヒラキ　古屋敷　クホ畑ケ　表屋敷　表屋敷上へ　平木大柿ノ本　墓ノ段　堀ノクホ　堀田　祭リ殿ノ下タ　屋敷畑ケ　社ノタン　屋敷畑ケ下タ　地蔵ノ段　マトハ　マトバ下タ　マツリテン　ナワテ　ナワテ道下タ　墓ノタン　竹ノ内堂ノ上へ　カト　門先　竹ノ内ヒラキ　竹ノ内　竹ノ内下タ　カジヤ田　前田　コヘバ　大久保　サギ長久保　サキ長久保山根　竹ノ上へ　古庄屋上へ　カキノ内　木小屋畑ケ　丸山下タ　榊ノ段　古庄屋	
川上郡	高梁市	川上町吉木	元屋　屋敷　シロノ木畑ケ落	
川上郡	高梁市	川上町仁賀	金堀　大蔵風呂　原畑ケ出目前田　中山下タノ段　中山久保　土井　さんでん山　麺面ヶ市前東荒神　矢ノ迫　角田　西ヶ内　西ヶ市　西ヶ市道ノ下タ　屋敷下タ　倉　下馬場　辻ウ子前畑　ヒラキ　庄兵衛迫　庄兵衛ぞふり　門ノ下タ　衛門田　ビワ田横川マへ横川前田　堀田　前ヶ市土井　空ヶ市下タ　犬の馬場　狸の久保　本久保　土井　落段　小家　小家ジリ　桐ノ段　竹ノ窪　新屋ヶ市　竜王竜王ノ前畑　久保畑ケ　竹之内　小家谷　ナベダシゴウロ久保　清水久保細田　下ノヶ内五百手　下ヶ内谷　土井ノ下タ　新久保　小丸山　竹ノ久保　十久保　コリンガ久保　トヤノ久保　カヤノ久保　西畑狸ノ久保　西畑久保道下　西畑久保　前角畑　西ノ久保　前畑窪　宗信前畑　堀切リ　榎ヶ市　川狭堀リ口　矢ノ平　小ヤシキ　二井ヤ前畑　堀田　馬場畦向　馬場畦　馬場畦峠　バヾウ禰　馬場畦辻　迫ヶ市タワ　迫ヶ市　迫ヶ市下タ　迫ヶ市汲川　土井　土井の上　小屋敷キコヤ　青柿之段　久保　鍬打尻リ之段　家ノ向キコヤ　垣手ノ下タ　垣手ノハナ　曾禰田久保　イダノ久保　竹ノ上　乙カセ堂竹ノ迫　門田　乗越　細久保　免田　馬場ノ迫　馬場ノ向ヒ　馬場ノ向ヒ道ノ上へ　馬場ノ上　下ヶ市　前畑　下ヶ市家ノウへ　下ヶ内　紙屋前畑　サイノ久保辻　寺山下タ　向ヶ市屋敷　向ヶ市　向ヶ市道ノ下タ　向ヶ市道ノ上　屋敷　角畑　大久　門丸人　乾田久保　草田久保　大屋敷　志やう婦　門丸人　門丸人山　茶ノ木ヶ市　前田　マへ畑　大段畦猫ゾフリ　大段家ノウへ　竹ノ窪　小丸子　栄楽小丸子　大段平　向ノ久保　細畦前畑カミ　大段　大段木小屋敷　大段宇禰　大段ウへ　大段脇　中ノ段　大段越　金ナ堀　久保畑ケ　ツケノサコ前垣内　前ヶ市　前垣内谷　前垣内迫　古屋敷廻リ　古屋敷上　上ヶ市谷ノヶ市　谷小屋　空ヶ市　松ノ段　横山ノ下タ　志やう婦　土井ノ下タ　縄手ノ下タ　興市ヶ市　後ヶ市　上ヶ市　カミカ市峠　光松前田　前畑　墓ノ上戸倉屋　ヒラキ谷　開谷　ヒラキ　コスル免　小屋の迫　面田尻リ　面田向　面田　面田道ノ下タ　ボウジノ後ロ　ぼうじのろ　前田上　東ヶ市　矢の迫　元堀　元堀迫トリ田　ウツボガ迫　うつぼが迫　古屋敷　竹ノ窪　柿木迫小堀田　がん丸がし　久保畑ケ小堀田　中間土井　角ト畑　登リ立　面田　面田道ノ下タ　段ノ西　段の坂　段の谷　マタ免　木小屋ノ下タ　柿木ノ段　高丸　ヒラキ　屋敷谷　面田西平　堀田尻リ　堀田道ノ下タ　堀田向　ヒノ木久保　上房前田　前畑　前田　手ノ久保　久保　中屋敷下タフロノ迫　カジヤ部屋メウカ下ノ段　中ノダン　馬立　仲屋敷　面田小屋敷　馬場　馬場ハナ　中西木小屋　カウチ屋　角畑ケ　カド田　枇杷ノ木段　堀田　堀田向イ　堀田前　トヤノ丸　トヤノ丸尻リ　トヤノ丸下モ　トヤノ丸後仙田ノ久保　ヒ田ノ迫久保　ヒ田ノ久保　ナルト　ハカダン　槙ノソ子土井　上川内脇　惣田ノ久保　古屋ヶ谷　大久保　乗越　松久田　志よ婦が迫　小丸山　前畑窪　大年畑木古屋　大屋敷　前畑脇　前畑　下モ屋敷　下平上の段　下平下段　花段　手畑向下段　手畑前下段　中畦下段　宮迫前畑　新屋ヶ市下タ宮向　谷乃丸　谷ノ丸窪　谷丸ウへ　谷ノ丸脇　谷ノ丸尻リ道ノ下タ　新屋ヶ市家ウへ木小屋　新屋ヶ市脇　新屋ヶ市　土井後　野田後上段　原ヶ市　土井　中土井　土井脇　土井向ヒ　小屋敷　小屋ノ丸　丸屋小屋　小屋ノ門　小屋向　小屋ノ前　石田峠家ノ前古屋敷　竹原向　梶ヶ迫　峠ノ前畑　隣ヶ市　登リ立　アサダレ久保　笹古谷　風吹木古屋　開キ　大アガリ　ワサ田ショウブ坪　上ヶ市　上ミ久保　古屋	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
川上郡	高梁市	川上町上大竹	崩ノ久保　崩ノ久保道ノ下タ　竹ノ脇道ノ下タ　崩ノ久保曾根平　木戸ノ口　竹ノ脇ウヘ　竹ノ後口　野垣内ウエ　ダンノ平　ダンノ平口　屋敷ハナ　小屋ノ谷　小屋谷川ブチ　小屋谷ハナ　家ノ下タ中ノダン　段ノ平家ノ下タ　段ノ平後口道間　段田ノ上エ　段田道ノウエ　段田　久保下ノ段　崩ノ久保曾根　馬屋　谷垣内下タ落　谷垣内渡リ上ミ　谷垣内　段田向　陰地谷向久保下タ　滝ノ久保　清水久保　中垣内山ベリ　中垣内古屋敷上エ　前田　田中家ノ上ヱ中角屋　川ノ上前畑　中垣内　野田久保　野田ノ久保道ウエ　野田ノ久保田ノウエ　野田久保道下タ　大開　中垣内ウエ　段広間　横蔵　横蔵下モ　横蔵ウエ段滝　久保前原　久保　久保頭川ノ元　八久保　城山　土井ノ向　土井ノ奥　八久保池ノ下タ　八久保池ノ尻　土井　五条久保　笠ガ久保　ナシガ久保　シウジヤ久保　長久保　見滝久保　大垣内ノ下モ　大垣内　竹シロ　大垣内谷　大垣内下タ　大垣内下モ井手上エ　大垣内道ノ上ミ　大垣内谷道ノ下タ　大垣内谷下モ道ノ下タ　大垣内家ノ南　大垣内ノ上エ　久保尻岩井谷　中山ノ下タ　堀ノ前　木小屋ノマヘ国近家ノ上エ　久保畑　馬場ノ西　井ノ久保家ノ北　井ノ久保北　井ノ久保家ノウエ　石丸道ノ下タ　鉢ノ久保　鉢ノ久保西ノ方　井ノ久保前　井ノ久保　後垣内　郷路前畑　門畑口　門畑　門畑下タ　下モ垣内　下垣内ノ上エ　久保尻　久保尻道ノ上　久保尻上ミ　元屋向　本屋家ノ南上エ　石丸川辻　堂迫ノ久保　鉢ノ久保　カジヤ　石丸ノ後　石丸家ノウエ　石丸　滝ノ久保　梶屋西向　上ミノ久保　保屋坂大久保　堂面道ウエ　坂本鍛治屋　堂面　堂面店ノ前　竹ノ上エ中　仏供免　蔵元　堂免　大段　サキノ久保　黒土上久保　油メン川本　油メン　油メン大町　不動垣内　長重ノ久保　有田ヶ市　有田ヶ市沖ノ坂　竹城　北ヶ市　馬場下タ　馬場　馬場ノ上　土井　川ノ久保　川ノ久保尻　屋敷詰　小迫下タ段　前垣内　竹ノ鼻　寺久保　上垣内　上垣内峠吉元奥　上垣内前畑　上垣内奥道下タ　上垣内川ノ尻　上垣内向　上垣内道ノウエ　杵築　大曲下タ　大曲リ　大曲リ道上エ　前田長通里　屋敷詰家ノ前　柿木ダン　ソウリノ久保　城ガ迫　栗原下モノ久保　大壇道ノ下タ　大壇道ノ上エ　野垣内向落　野垣内　野垣内上ミ三百手　新イ屋向　大マガリ　坂根ノ下モ川ノ久保　大久保北平　此畦大久保曾根道ウエ　此畦大久保曾根道ノ間　大久保道ウエ　大久保下モノ平　此畦大久保奥　此畦大久保下モノ平　此畦大久保曾根　モガリ岩本ヨリウツキガ久保　越山南久保　坊迫川ノ久保　坊迫川ノ久保陰地　釜ノ久保　坊迫中ノ坪坊迫大久保向田ベリ　坊迫大久保　仏供免　古屋向　竹ノ迫家ノ向　竹ノ迫家ノ奥　竹ノ迫奥　竹ノ迫前　竹ノ迫前畑下タ　竹ノ迫向　竹ノ迫北脇　竹ノ迫　竹ノ迫家ノ奥　先キノ久保道上エ　井ノ辻高丸　猪ノ辻家前畑　ビシヨノ久保本谷　橋ノ久保　竹ノ迫陰居ノ上エ　竹ノ迫向梅木本　古屋家ノ上エ　古屋　古屋下ノ久保　古屋前畑　古屋前砂田　野垣内　大開　野垣内下モ　野垣内奥　カド田ノウエ　栗原前田口　馬作り　上エヶ市奥　上垣内　上エ垣内奥　上垣内道バタ　上垣内前　上ヶ市向　下モ加里ガ上エ下タノ段　大段林　小畑古屋敷　新開　沖垣内　沖垣内上エ　小畑向沖垣内　沖垣内道ノ下タ　正迫ノ杉久保　新開キ　正迫丸田ノ上エ　正迫大久保　竹吉屋家ノ奥　竹吉屋　木戸ノ本　木戸ノ元下タ　高瀬高丸　高瀬釜久保高瀬釜ノ久保東平　釜ノ久保　高瀬釜久保道上エ　釜ノ久保中　高瀬釜ノ久保南平　寺久保　矢谷　中ノ坪矢谷道ノ上エ　中ノ坪矢谷　山城　山城田　高瀬惣田久保　惣田久保　高瀬惣田久保奥　高瀬惣田久保東平　高瀬木戸ノ久保　高瀬大久保北平　高瀬境久保奥　友国陰地境ノ久保　友国釜ノ久保　友国釜堀久保友国林ノ久保　友国釜堀久保上エ　友国宮ノ久保　金堀久保尻上ミ　友国谷堀久保尻　金堀久保上ミ　神新開キ　宮ノ段友国五拾手　下ノ久保　古頃家ノ下モ　鍛治屋　平松木小屋　古頃家ノ上エ　馬場詰メ　竹藪ノ上エ　カミヤガイチ　梶原　梶原道ノ下タ　原垣内　梶原平　梶原奥　梶田　一ノ段　戸屋ノ丸　大杭奥曾根垣内谷日向　曾根垣内谷　竹ノ奥谷　落ウトノクチ　小滝下モ久保　下垣内　江ノ久保　向久保尻　射場ノ峠　畷　岡ノ段尻　岡ノ段上エ	
川上郡	高梁市	川上町下大竹	竹ノ内　鍛治屋畑ヲンジ　鍛治屋畑上エ　鍛治屋畑　大段ノ下タ　竹中ノ上エ　鍛治屋畑道上エ　成場々竹中　竹ノ西　院之場々畑ノ上　院ノ場々畑ノ上エヒナ　大段　小坂屋　大段道上エ　大段道下タ　大段道狭　大段端　馬渡リ　大段尻　馬渡リ道上エ　狭戸　カラスドマリ狭戸道上エ　上ミノ久保尻　松室家ノ谷金堀向フ　金堀　平蔵向　木戸ノ本　平蔵谷　平蔵谷ウヘ　平蔵家マヘ　平蔵　平蔵谷道上エ　段ハナ　段　平蔵ノ上エ　平蔵ノ下タ　山神ノ下タ上矢谷　平蔵谷向　曾根竹ノ内　金堀ノ下タ　溝ノ下久保　水ガ迫下モノ久保　落石　中屋敷　荒神ノ久保　上ヶ市尻　上エヶ市谷　上エヶ市　上エヶ市西　上川内　東ノ久保　新開　平ヶ市　野田ノ丸　下河内　茶木ヶ市　茶木川内　西ヶ市　笹ノ丸　張連場　八ノ久保　惣田向家ノ下タナワテ　家ノ前久保　迫ノ久保　ヒラキ　下ヶ市谷　下モヶ市谷道下タ　下垣内下モ　下モヶ市下タ　下モ川内下モ　下川内谷道上へ　志田上へ久保　志田下モ久保　城板　堂前ヶ市　神ノ前今丸　今丸家ノ西　家脇久保　今丸向　稗田前畑　今丸向浦梨　空道上エ久保尻　城イタ　前ヶ市　前田　中屋ヶ市下タ　中屋ヶ市　門口　中屋カイチ　段ノ下タ　山田久保　城所　城所家ノ上エ　屋敷ノ前　城所溝下タ　堀切道下タ　堀切日向　堀切　堀切下モ　城所向　小丸コウ　木小屋　カド　竹ノ段　大前田　段ノハナ　段畑ケ　中屋畑川内　城山　河東段ノ端　ゴマヶ市　ダイノ奥枇ヶ市　小丸古　小丸古平　的場　北川内　北川内ノ尻　岩神段ノ下　ホウノ久保　栗久保　前ヶ市向　実久向下向　実久丸古山　奥迫ソウノ久保　実久奥　実久上ミ　実久家ノ瀬土　実久　前田川畦渡リ広間　前田道ノ下タ　西久保　グルミヶ市　水ノ久保　黒瀬丸　大久保峠　柳ヶ迫西久保　高丸楠見谷　大垣内向　大垣内谷　大垣内　大垣内向田ノ上エ　ハデバ新屋向道下モ　小谷久保　芋ヶ迫芋ヶ迫竹ノ下タ　落石　段迫尻リ畑上エ　下屋敷　正東田久保上ミ　長迫北久保道ノ上エ　長迫北久保中　前田中　相屋敷　中屋敷ノ下タ　後平久保	
川上郡	高梁市	川上町高山市	梶間屋　土井　土井屋敷　コカリヤ　馬喰座　梶屋谷隠地平　久保頭　久保ノ平　梶屋谷平　カシヤ谷　後向ヶ市日名平　後向ヶ市　的場ヶ滝　向ヶ市平　向ヶ市ゴフロ　桧木久保下向　寺ヶ市隠地　寺ヶ市コウロ　寺ヶ市　城田　水ノ久保平　水久保上　水久保陰地笹屋尻リノ上へ　穴久保　小屋谷向上　小屋ノ平谷　小屋谷平　小屋谷向　宇津木原日向小屋谷下平　杉久保尻リ　杉ノ久保　飯場加滝　トウノ丸ハナ　トウノ丸東平　塔ノ丸下平　塔ノ丸後平　塔ノ丸後市　塔ノ丸平　竹ノ本　侍後　段原　堀田　竹ノ奥　市場板　向川内　中川内　矢ノ尻　前畑ヌルイ　トイシ久保　ヒルイバ大久保界　川平カベケノ久保　川平上ミ久保日南　川平谷ヨリ新ナシ上ミノ久保　新ナシ上久保　新ナシ下タノ久保　正田川内　小田川内　ナル川内道上　元家　シフズ久保　シウヅ久保隠地　鍛治屋谷　般ノ久保	131中山城跡
川上郡	高梁市	川上町大原	石丸　折久保　垣之本　垣ノ外　ゴジロガ市　壱板畑竹ノ元　大原久保畑　大原久保　大地ノ後竹の迫	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
川上郡	高梁市	川上町高山	門ヶ奥　梶森ノ向　木小屋ノ下タ　久保　垣手　下久保平　垣手出口　久保平　久保頭　古屋前谷　古谷　円丸　古屋谷　東円丸　谷垣内　円丸谷　城山　縄手ノ下タ　ヒラキ　東久保　前田尻リ　前田　下ヶ市　上ミヶ市陰地　上ミヶ市　開木　カ子田　オノシリカ子田細迫　竹迫前　前田上ヱ　前田　竹迫向　竹迫ノ後ロ　中円丸　円丸下　大深山縄手ノ下タ　大深山久保　家垣内　西ノ久保　久保川　横見山　馬橋　馬橋ノ元　沖ノ久保　巻ヶ市　巻ヶ市東　門鼻　槙ヶ市　槙ヶ市家之瀬戸　巻ヶ市西　幟立　梶ガ迫　下垣内　古家窪　陰地川内　大梶　大梶向大梶ノ脇　馬カ迫　土井　中間小段　馬場日向　一面門　竹田上ヱ　ダケ上　竹ノ下　妙地ヶ丸　名田ノ丸谷道ノ間　名田丸家ノ下モ　名田ノ丸下タ　名田ノ丸谷　父蔵山　馬形石ノトイ　馬形　暖ノ下タ　カジヤ　角ノ鼻　カシ野田屋敷　小屋ノ屋根　屋敷ノハナ　馬場　家ノ上馬場　寺前田名田西　名ノ丸木小屋　木小屋　妙見久保前　久保前　神田塚戸ノ前　西垣内　新見　新見前　後ロ新見　新見カウロ　新見上ミ　新見ガヲロ　馬場ノ鼻　中原古屋敷　蔵之東　西垣内ガフロ道下タ　西垣内倉ノ東　野田ヶ市　木ヤ前エ　木ヤ　古屋敷　新見久保高林　向イ上ノ久保　高林久保　堂面　原畑ケ原ノ小段　大段林　シャウガ久保　ヒサゲノ久保　竹ノ皮　城ヶ迫　杉窪堀田　堀田　赤迫奥久保　榎ノ段　堤ミ久保　水久保屋敷　水久保前場　水久保　水久保家ノ東　ソ子カ市前場　竹屋屋敷　道ノ角田　西久保屋敷　西久保　キドノモト　ヨシ久保　古谷屋敷　古屋道下タ　古屋谷　天神後久保　後ケ市　後ヶ市久保川之本　後ヶ市久保　屋敷脇　柿ヶ市　柿ヶ市向　柿ガ市家　柳ノヶ市	132折居城跡
川上郡	井原市	美星町黒忠	城山平　城平　笠ノ丸　城山東平　城平土蔵　下木戸　上垣内ノ屋敷　垣内廻り　縄手ノ下　森ノ脇縄手ノ下　松葉サノ窪縄手ノ下　国光縄手ノ下　三十代竹ノ下　竹ノ下上リ　竹下　下竹之口　竹ノ下モ　竹之下口　ヨミ縄手　弓場　縄手ノ上　竹ノシロ　竹小路　樽田垣内口　樽田垣内下タ　樽田垣内尻リ　佃西平　佃ノ上ミ　佃溝ノ上　佃ノ上本迫　前田ノ口　谷垣内後　谷垣内谷　前田ノ尻　前田　前田口　前田川ノ尻	137小笹丸城跡　139氏高公館跡
川上郡	井原市	美星町明治	竹ノ丸　前田　佃　開　犬ノ馬場　円城防　円城防脇　古屋敷　城ノ迫　竹ノ丸　大段　城山　城山尻リ　垣ノ内	
川上郡	高梁市	川上町	馬渡し　東円丸　西円丸　大久保　小谷ヶ市　乗元　笹之丸	
川上郡	高梁市	中地区＝合併前中村(布寄,長地,相坂,羽根,小泉村)	国司　国司ノ前　国司ノワキ　梶屋　カジヤ　古城　城ノ腰　古城後口　古城下　城ノ脇　古城前　大城腰　大城　長城　ツルギ　吹屋　馬場　相崎	117中村城跡　118長地城跡
川上郡	高梁市		東堀	
上房郡	高梁市	川面町	市場　屋敷　大倉　鳴戸　城平	141寺山城跡　142城平城跡 143鳴戸城跡
上房郡	高梁市	巨瀬町	古屋　陣山　馬場塚	148粧田山城跡
上房郡	高梁市	有漢町上有漢	三関上　川関下　垣元垣上　金倉	140飯ノ山城跡
上房郡	高梁市	有漢町有漢	市場　城下　土居　下横見　上横見　弓馬場　馬場畝	144殿屋敷跡　145飯の山城跡 146台ヶ鼻城跡　147常山城跡
上房郡	吉備中央町	上竹	上竹荘　市庭　ヤカタ　ドイヘリ　土井	151野路山城跡　152陰地城跡 156矢倉城跡　161離小屋城跡
上房郡	吉備中央町	竹荘	田中うね	150上ヶ城跡
上房郡	吉備中央町	黒土	鍛冶屋　的場　土井	
上房郡	吉備中央町	豊野	西ノ土井	149羽子田城跡
上房郡	吉備中央町	田土	ヤカタ　垣ノ内　古殿の上	153大原城跡
上房郡	吉備中央町	湯山	殿畑　垣内　下竹荘	154小谷城跡　155大畑城跡
上房郡	吉備中央町	納地	殿屋敷　馬場　出張　的場　ドイ	162大和佐山城跡
上房郡	高梁市	松山	大久保　河内谷	160広瀬固屋城跡
上房郡	高梁市	松山	高陣　傾城ヶ丸	157高陣の陣跡
上房郡	高梁市	松山城下	御城坂　御茶屋	158備中松山城跡　159備中松山城御根小屋跡
上房郡	高梁市	御前町	上士1の1丁目　上士1の2町目　上士2町目上士3町目	
上房郡	高梁市	鉄砲町	鉄砲町上　鉄炮町下	
上房郡	高梁市	段町	段町　段町上	
上房郡	高梁市	津川町今津	幡見　地久	
上房郡	高梁市	津川町八川	久原	
後月郡	井原市	芳井町東三原	前田　城ノ上　金堀	
後月郡	井原市	芳井町西三原	門田　前田　小屋　馬場ノ下　土居屋敷　縄手町	
後月郡	井原市	芳井町山村	古屋所	
後月郡	井原市	芳井町下鴫	前田　縄手　城山　馬場ノ下　土井ノ前	165井戸橋城跡
後月郡	井原市	芳井町井山	土井　馬場前	
後月郡	井原市	芳井町種	まへ田　つく田　こや　土井前　城後　馬場　ゑの木なわて　かひ地	166小屋の山城跡
後月郡	井原市	芳井町花滝	家古屋平	
後月郡	井原市	芳井町名越	前田　土居ノ門　縄手ノ渕	
後月郡	井原市	芳井町川相	前田　土居ノ内　射場ノ前　城山	167中山城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
後月郡	井原市	芳井町吉井	的場　城ノはな　城ノひら　前田　つくだ　市場	169正霊山城跡　170有井城跡 171大仙山古城跡　172能多ヶ丸城跡　173名称未定
後月郡	井原市	芳井町片塚	門田ノ口　城か蔵　まとは　どい　こやまとは	
後月郡	井原市	芳井町宇戸川	どいの下　城の谷　城山　古屋　まへ田　なわてのうへ　かねほり	168木之山城跡
後月郡	井原市	芳井町与井	とひ	173名称未定　174雄瀬山城跡
後月郡	井原市	芳井町簗瀬	馬場ノ上	
後月郡	井原市	芳井町梶江	どいノ後	174雄瀬山城跡
後月郡	井原市	井原町	城ヶ野呂　佃　馬場前　馬場脇　前田	181念堂山城跡　182横手山城跡
後月郡	井原市	七日市町	伊達屋敷　佃	185伊達氏館跡
後月郡	井原市	北山町	竹ノ鼻　前田	
後月郡	井原市	稗原町	上古家　中古家　下古家　山下	
後月郡	井原市	青野町	東木戸	
後月郡	井原市	野上町	垣内　古屋ヶ谷　ツイジ　土居ノ本	
後月郡	井原市	神代町	土井	191高越城跡
後月郡	井原市	東江原町	上佃　木戸口　下佃　竹ノ下	189白実城跡　190米持城跡 191高越城跡
後月郡	井原市	西江原町	一ノ堀　蔵本垣内　竹ノ内　館跡	175小菅城跡　183青蔭城跡 186十蔵城跡　187中堀城跡 188亀迫城跡　189白実城跡
後月郡	井原市	高屋町	市場　城ヶ坪　道城　馬場	176落石城跡　177高屋城跡 178吉谷城跡　179山手城跡 180小見山城跡
後月郡	井原市	上出部町	軍ノ森　後的場　鹿木戸　土井ノ下　前的場	184鎌田城跡
後月郡	井原市	下出部町	城ヶ後　城ヶ平　佃　馬場添	192戸木荒神山城跡
後月郡	井原市	木之子町	垣内　城ヶ鼻　城山　竹ノ内ヶ市　竹ノ鼻　天神馬場　土井の前　中土井ヶ市　堀	193才崎城跡
後月郡	井原市	門田町	竹ノ下　築地　土井　馬場	
小田郡	井原市	大江町	市場　犬ノ馬場　合戦場　土城堀　法城　大段　古城山　倉垣内　城ヶ谷	230滝山城跡　232すくも山城跡
小田郡	井原市	岩倉町	垣内　縄手	
小田郡	井原市	美星町星田	尼ヶ城	196茶臼山城跡　200三村氏居館跡　201金黒山城跡　202法雲山城跡　203岩崎城跡　204尼子城跡
小田郡	井原市	美星町大倉	縄手　門ノ前　門　門之脇　垣内向　垣ノ内向　垣ノ内	
小田郡	井原市	美星町三山	古家　土井ノ前　土井ノ下　土井　土居ノ上　土井ノ下　城山	197城山城跡　198土井の前城跡
小田郡	井原市	美星町宇戸谷	垣内　馬場	194宇戸谷茶臼山城跡
小田郡	井原市	美星町鳥頭	馬場道　馬場道　佃　二垣之段　竹之下　古屋　長堀　門田　門ノ口　門ノ出口道下　門ノ下　前田口　前田　平古屋舗　土井後家ノ上　土井　土井前場	195土居山城跡
小田郡	井原市	美星町宇戸	馬場ヶ市　馬場前　馬場峠　垣ノ内　大段　垣ノ内	
小田郡	井原市	西水砂		
小田郡	井原市	美星町東水砂	ホリ田　土井ノ下　前田　竹ハナ　竹ノ端　古屋敷　前田　縄手	
小田郡	井原市	美星町黒木	竹城	
小田郡	矢掛町	上高末	コヒラキ　ヒラキ　マエダ	199殿ヶ市城跡　205下高末城跡
小田郡	矢掛町	小田	堀越	209神戸山城跡　210岩屋山城跡 211龍山城跡
小田郡	矢掛町	西川面	城ノ上　城ノ東　上堀　東堀　城内　西堀　城下　堀　城西　本堀　赤免	212川面館跡
小田郡	矢掛町	東川面	志留免　権現免　折免	215蓮池城跡
小田郡	矢掛町	江良	城山	213太郎丸城跡　218伽藍山城跡
小田郡	矢掛町	里山田	城山　城焼山	218伽藍山城跡
小田郡	矢掛町	横谷	御土井	221中山城跡　224庄氏館跡 225花房氏館跡　226原砦跡 227猿掛城跡
小田郡	笠岡市	走出	城	228楢村氏居館跡
小田郡	笠岡市	走出	要害　的場　馬場	229折敷山城跡
小田郡	笠岡市	走出	濱射場　城之前　政所	
小田郡	笠岡市	押撫	的場　垣ノ内	
小田郡	笠岡市	入田	的場	234入田城跡
小田郡	笠岡市	東大戸	的場　土井　堀切	
小田郡	笠岡市	大河	馬場	
小田郡	笠岡市	大宜	城山　堀　前田　馬場　要害	239大橋山城跡
小田郡	笠岡市	吉浜	今城	
小田郡	笠岡市	生江浜	郷堀　郷堀上　郷堀下　船隠	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
小田郡	笠岡市	笠岡	古城山　古城山下	248鳶の子城跡　249笠岡山城跡　254笠岡城跡
小田郡	笠岡市	山口	城山　城山白　城平	242諏訪山城跡　243馬鞍山城跡
小田郡	笠岡市	尾坂	土井前　古土井	244小丸山城跡
小田郡	笠岡市	新賀	城平	241政所山城跡
小田郡	笠岡市	関戸	前田	
小田郡	笠岡市	吉田	土井ヶ市　堀之内	
小田郡	笠岡市	小平井	門戸	245小平井城跡
小田郡	笠岡市	園井	土井　馬場	246園井土井遺跡　247園井城跡　248鳶の子城跡
小田郡	笠岡市	今立	土井　土井元	
小田郡	笠岡市	広浜	城山	250広浜城跡
小田郡	笠岡市	広浜	垣内	
小田郡	笠岡市	用之江	馬場　城後田	
小田郡	笠岡市	用之江	城山	238森山城跡
小田郡	笠岡市	用之江	小屋ヶ谷	237明知山城跡
小田郡	笠岡市	相生（木之目）	馬場田	
小田郡	笠岡市	横島	城山	255鳴ヶ端城跡　256横島城跡
小田郡	笠岡市	神島内浦	カウ土居后　福浦射場　福浦位ノ丸　福浦位丸南　中村殿土井　中村的場　中村射場　東村馬場	257福浦城跡　258鳥越城跡
小田郡	笠岡市	神島	城ノ后	253小見山城跡
小田郡	笠岡市	神島外浦	城山	259大道城跡
小田郡	笠岡市	神島外浦	城平	
小田郡	笠岡市	北木島	矢倉	
小田郡	笠岡市	真鍋島	城山	263城山城跡
小田郡	笠岡市	真鍋島	城山　城山北	262真鍋城跡
小田郡	笠岡市	真鍋島	城田　城田回渡	261沢津城跡
小田郡	笠岡市	真鍋島	浦ノ内的場・射場	
小田郡	笠岡市	大島中	堀切レ	319青佐山城跡
小田郡	笠岡市	大島中	古土井　政所　下殿	
下道郡	総社市	原	市場土手外　市場　竹ノ鼻　鏡免　切戸　油免　水内古城　上田山古城　要害	264要害山城跡　265三本松城跡　266山本城跡
下道郡	総社市	影	松尾河内　西ノ河内　水木丸　馬場　ミノテ　油免　門　土井　門ゼ　土井　カド　門前　正田	
下道郡	総社市	中尾	かじや谷　縄手　下ヶ市　中縄手　竹ニ五　西ヶ市　鍛冶屋　弓木　宝殿　鍛冶屋前	
下道郡	総社市	下倉	馬場ヶ市　段之下　コイキド道下　宮ヶ市　倉ヶ市　下木戸　向ヶ市　向木戸　木戸　木戸奥尻　木戸奥　竹仁ご　ヤハイケ市　金堀黒岩　堂ヶ市	267下倉城跡　270鬼身城跡
下道郡	総社市	福谷	師匠免　上開　下開　城ノ内　一丸　明未開	
下道郡	総社市	山田	殿砂　四条深堀　殿奥　角ヶ市　大門　大門丁　飛ヶ市　飛川内　城山　竹ノ鼻　中縄手　後久　狩屋　濠堀　市之出　上市　下市　塩掛場　有市　大門町	270鬼身城跡
下道郡	総社市	久代	市場　寺ヶ市　寺ヶ市奥　市後的場　勝負砂　切戸　西前田　花ヶ市　花ヶ市奥　ヶ市　ヶ市奥　大黒馬場　馬場ノ西　馬場東　馬場前　狩屋敷　ウネヶ市　北ヶ市　南ヶ市亀ノ目　竹ノ内　下カリ屋敷	268田広木城跡　270鬼身城跡　271高丸古城跡　275襄越城跡　276名称未定
下道郡	総社市	上原	土城　ヤ　竹ノ元　船堀　才免	
下道郡	総社市	秦	東竹原　西竹原　古屋敷　明見谷平城　土井　沢ヶ市　坊ヶ市　土井端　城ノ内　堀田大窪　古城下　城山　山下　大蔵　射場　西市場　中市場　丈夫殿　加茂殿	272荒平山城跡
下道郡	総社市	新本	市場　免田　屋敷　原ヶ市　畑垣内　竹切　城　坊ヶ内　土井　殿砂　小竹　佃　天守	269殿砂遺跡　273市場古城跡　274馬首城跡
下道郡	総社市	富原	垣淵　京免　油免　下段	
下道郡	総社市	八代	猫河内　土井ノ内　土井ノ内河田　竹ノ下　山ノ下　八幡山下　的場	275襄越城跡　276名称未定　278木村山城跡
下道郡	総社市	下原	南城ノ下　南市場　東市場　北市場　東前田　西前田　上新開　大下新開南大向	279夕部山城跡
下道郡	倉敷市	玉島陶	大蔵田　行面　源蔵闘　小丸山　幡八反田　門前　門垣内	281陶山城跡
浅口郡	倉敷市	船穂町柳井原	勝負坂辻　勝負坂　殿坂　勝負砂　合戦村　矢形勝負砂　古城山　城ぴろ	285南山城跡　286築場山城跡
浅口郡	倉敷市	船穂町船穂	仕垣　東木戸　惣堂ヶ市　竹京　谷ヶ市　外開　釜之堀　車竹　前田　梶谷　真弓砂　南戎戎立縄　長尾開　弥六開清兵衛山　下羽出　中羽出　上羽出　殿開　杭開　三之関　福島山ノ門　西縄　西縄道北　立縄	287后王城跡
浅口郡	倉敷市	船穂町水江	江田前田　地蔵山江田前田　蔵下牛ノ首　加瀬上ノ山下	
浅口郡	浅口市	鴨方町小坂東	加治谷　蔵本　奥川内　縄之内　土井　山下　土井　土井前　西が市　土井谷　土井奥　馬が谷　金堀　要害山　馬場　高丸　北の馬場　鍛冶屋谷	289杉山城跡　293鴨山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町本庄	乗家　荘山　大門	293鴨山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町深田	築地　鐘鋳場　東門　かどくち　撞山　きやうでん　ほりきれ　しやうさかへ　をくら　まとば　修理殿　堂屋敷　的場	293鴨山城跡　294石井山城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
浅口郡	浅口市	鴨方町鴨方	城山　北殿	293鴨山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町地頭上	馬出し　馬場　国主　城深　城深田　垣ノ内　城補花　大殿　前田　守屋　殿界地　垣木　垣界地　茂戸尻　トヤガ平　段林　道面　森ノ元	290西知山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町益坂	殿界地　始開　新開　中開　西木戸　山下　開ノ谷　安芸守山　明上　古城山　城山　休床　旗の谷　垣の内　花屋　休床旗の谷　垣の内　花屋　大殿　国主	290西知山城跡　291名称未定　295益坂城跡　297片山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町六条院西	土居　城殿山　土居　堀屋敷	304土居遺跡　318竜王山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町六条院中	城山　一ノ丸	299泉山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町六条院東	地頭明	318竜王山城跡
浅口郡	浅口市	鴨方町六条院	むねがいち　あしこがいち　小家がいち　どうりがいち　こしやがいち　堂ヶ市　平ヶ市　向ヶ市	
浅口郡	浅口市	金光町地頭下	安芸守山　竹原	296安芸守山城跡
浅口郡	浅口市	金光町占見	おどえ屋敷　山角　井戸居　夕免　茶屋屋敷　おどい屋敷　城が辻　茶屋屋敷　茶屋の池	298おどえ屋敷跡
浅口郡	浅口市	金光町占見新田	夕免　中島加賀屋敷　加賀池　加賀山　古屋敷　西城ヶ前池	292城山城跡
浅口郡	浅口市	金光町上竹	土井　馬場　土居　上竹城山	292城山城跡　305上竹城跡　306名称未定
浅口郡	浅口市	金光町下竹	門石	
浅口郡	浅口市	金光町須恵	殿部　大戸平	
浅口郡	浅口市	金光町佐方	城山　城ヶ平　北殿　前殿　向殿　金井殿　善我殿　古戸居　屋敷	300長山城跡　301佐方城跡　303竜王山城跡
浅口郡	浅口市	寄島町	上陣屋　下陣屋　殿山	318竜王山城跡　319青佐山城跡
浅口郡	倉敷市	玉島長尾	一の丸　二の丸　三の丸　底山　馬場　城の出口　前ヶ市　後峠　民部	
浅口郡	倉敷市	玉島爪崎	伏越　門前田	
浅口郡	倉敷市	玉島柏島	久々井　戸山　満所　政所山　城山	309小山崎城跡　310畑山城跡　311森本松山城跡
浅口郡	倉敷市	玉島黒崎	御所上	
浅口郡	倉敷市	玉島乙島	岡新開　久美鯛　城　城ノ向　城ノ下　竹ノ浦　船堀　堀貫	312水島城跡
浅口郡	倉敷市	玉島服部	的場　的場下	
浅口郡	倉敷市	玉島	台場	
浅口郡	倉敷市	玉島	越山　要害山	307要害山城跡
浅口郡	倉敷市	西阿知町	馬場脇　馬場東　馬場西　塩垣場　竹ノ下　拾弐貫外開	
浅口郡	倉敷市	西阿知町西原	牛開　大開　正下開　当免　塩垣場　山城地	
浅口郡	倉敷市	片島	鉄炮前狭　鉄炮後口　外開　上鉄炮　矢倉　下鉄炮　横縄　矢柄地下中沖　角田　北山下　東前田　南山下　西前田　小開　前新田　前新田堤外	313片島城跡
浅口郡	倉敷市	連島町連島	五反地船戸　小屋地　東前田　西前田西ノ端　山之下　戎ヶ市　山ノ下　東縄　大戸　小屋京　新開田　新倉	316丸山城跡
浅口郡	倉敷市	連島町矢柄	船蔵　猿ヶ市　矢柄下辻堂　船倉　矢柄池尻　矢柄猿ヶ市　矢柄丸尾　矢柄中尾　矢柄井柳　矢柄中山　矢柄大畑　矢柄崎　川内　矢柄瀬越　矢柄前場　長田矢柄長田　開戸　矢柄中原　矢柄大藪　矢柄浜側　東縄　西縄	315大平山城跡
浅口郡	倉敷市	連島町亀島新田	川内　中縄　南堤外福喜新開	
浅口郡	倉敷市	連島町西之浦	米屋開四ノ割　米屋開三ノ割　米屋開二ノ割　串ノ山下開　大縄　大縄八間川　米屋開一ノ割	314西山城跡
浅口郡	倉敷市	連島	丸山	316丸山城跡
浅口郡	倉敷市	連島	牛ノ首	
浅口郡	倉敷市	連島	天上	
	倉敷市	？	矢崎　矢頭　矢出	
	倉敷市	東三成	関ヶ鼻	
賀夜郡	吉備中央町	岨谷	大古屋	
賀夜郡	吉備中央町	西	丸山城	320佐与谷城跡
賀夜郡	吉備中央町	北	ヤカタ　尾土井　古屋	321野山城跡　322伊達弾正館跡　323古和田城跡
賀夜郡	吉備中央町	東	土井	
賀夜郡	岡山市	掛畑	道心屋敷　小屋前　矢ノ仏　矢ノ坂	
賀夜郡	岡山市	真星	坂田市　小屋ノ尾　矢ノ上　土井ノ上　本陣　今屋敷　ヤケ市　ヤシキ廻り　矢ノ板　弥ホヤシキ　屋敷廻り　比沙門堂　柿畑　畑ヶ市　門下　柿木下　屋敷山東　屋敷山ノ下　根木屋敷	
賀夜郡	岡山市	西山内	カジキ　犬ノ馬場	330名称未定
賀夜郡	岡山市	山上	市場　矢田	329忍山城出城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
賀夜郡	岡山市	石妻	矢金　矢金坂	
賀夜郡	岡山市	上高田	矢尻　土ヰ前	326草谷城跡　327忍山城跡 328元信城跡　329忍山城出城跡
賀夜郡	岡山市	日近	屋敷　河市　ホリ田　土居　殿畑	351日近城跡
賀夜郡	岡山市	下高田	善城寺	
賀夜郡	岡山市	吉	南小屋ヶ谷　北小屋ヶ谷　矢坂谷　土井　土井ノ前　屋敷　梶屋谷　古市場　安ヶ市　庄ノ屋敷	333亀山城跡　349和田城跡
賀夜郡	岡山市	庄田	北力市	
賀夜郡	岡山市	河原	土井向　堀越	
賀夜郡	岡山市	間倉	小屋谷　城山　城谷　馬場崎　土井ノ元　小屋坂　柿ノ田　柿木田	
賀夜郡	岡山市	大井	岡屋敷　弓矢　堀越　馬場　上鍛冶屋　下鍛冶屋　鍛冶山　古市場　東町屋敷　西町屋敷	352構跡　353宮路山城跡　354鍛冶山城跡
賀夜郡	岡山市	足守	土居下　矢ノ奥　下屋敷　中屋敷　院ノ馬場　下古屋敷　上古屋敷　小屋ヶ谷	353宮路山城跡　354鍛冶山城跡 355植之町西陣跡　356植之町東陣跡
賀夜郡	岡山市	下足守	箕山　土居下　馬場ノ西　柿ノ内　奥ヶ市　城ノ根	350守福寺裏山の陣跡　371土居武家屋敷跡　372一国山城跡 373冠山城跡　374名称未定 375南坂南陣跡　376南坂北陣跡 377下足守A陣跡　378下足守B陣跡　380山上土塁跡　381すくも城跡
賀夜郡	岡山市	上土田	倉ヶ市　屋敷　市崎鼻　溝市場	379上土田大崎境の陣跡　380山上土塁
賀夜郡	岡山市	下土田	西邸　築地之内　東邸　寺屋敷	
賀夜郡	岡山市	高松	瓦師　庄ノ市　太鼓田　弐之丸　本丸　城ノ下　八反堀　城南　射場	393備中高松城跡
賀夜郡	岡山市	立田	鼓山下　鼓山	394御崎山陣跡　395石井山陣跡 396蛙ヶ鼻陣跡　397高松城水攻め築堤跡(蛙ヶ鼻)　399鼓山城跡
賀夜郡	岡山市	原古才	太鼓田　舘西　舘　舘東　瓦師　鼓山下	
賀夜郡	岡山市	吉備津	馬場　馬場町　城ノ内　市場　三日市　的場　新邸	399鼓山城跡　400板倉枡形城跡 404宮内城跡
賀夜郡	岡山市	門前	内城　大門　馬場　城西　堀リ	386生石城跡
賀夜郡	岡山市	小山	馬揃　堀	387小山城跡
賀夜郡	岡山市	高塚	屋敷　箕田	
賀夜郡	岡山市	福崎	屋敷ノ丁　門田　古市場	398高松城水攻め築堤跡(副堤跡)
賀夜郡	岡山市	田中	方リ田　屋敷　戸井ノ口　屋敷脇　居屋敷　ヤシキ脇　屋敷前　屋敷添　古屋敷　西屋敷 居ヤシキ	
賀夜郡	岡山市	庭瀬	町屋敷　城丸　庭瀬屋敷　西城丸	402庭瀬城跡
賀夜郡	岡山市	平野	堀田	
賀夜郡	岡山市	川入	城廻り　馬場之内	401伝賀陽氏館跡
賀夜郡	総社市	美袋	仮屋敷　カウヤヶ市　馬場　御前垣内　城山　土居　平城	337金頭山城跡　338大渡城跡
賀夜郡	総社市	日羽	紺屋ヶ市　馬乗　向ヶ市　前畑　城麓　カジ谷　馬場ノ上　西ヶ市　久分田　北ヶ市　雲開 城山　城の辻　殿ご坂	
賀夜郡	総社市	宍粟	土井畑ケ　門田　御堂開地六月田　門開地　森開地　馬場実家　西開地　金宗主谷赤木古城	341志良計城跡
賀夜郡	総社市	槙谷	城山ノ元　前田　市場　市場前　山ノ下	339鍋坂城跡　340高馬城跡
賀夜郡	総社市	見延	小丸　城山　槙ノ開地　大檀　治部田　木戸	341志良計城跡
賀夜郡	総社市	黒尾	竹ノ鼻　上田兵開　勝負ヶ谷	345経山城跡
賀夜郡	総社市	久米	向山下　古池ノ下セン丸　垣ノ内　高丸	
賀夜郡	総社市	奥坂	前田　山ノ下　くもんめよう　下河内板谷ノ谷　片山ノ下　矢谷　矢谷後　下矢谷　鬼ノ城	357大陣屋跡　358千引砦跡 359名越１号砦跡　360名越２号砦跡　361名越３号砦跡　362名越４号砦跡　363小陣屋跡　365尾崎１号砦跡　366尾崎２号砦跡
賀夜郡	総社市	西阿曽	前田　御門　下開市　谷ヶ市　上宝殿　下宝殿　竹ノ鼻　中段地　庄寸　高丸	366尾崎２号砦跡　367尾崎３号砦跡
賀夜郡	総社市	東阿曽	矢ノ奥　幟立　古屋敷　城山　免田　前田　西前田　塔ノ北竹ノ鼻　鶴免	359名越１号砦跡　360名越２号砦跡　364牛神砦跡　365尾崎１号砦跡　366尾崎２号砦跡　367尾崎３号砦跡　368鳥越山城跡
賀夜郡	総社市	門田	浅尾　前田　元屋敷　勝負池	343浅尾藩陣屋跡
賀夜郡	総社市	総社	竹下　堀後　堀東　堀　堀西　要地明　堀前　横関　高縄手　城ノ越	370総社遺跡
賀夜郡	総社市	井手	城ノ越　庄義	
賀夜郡	総社市	刑部	木戸　ミノテ　太鼓谷	
賀夜郡	総社市	福井	梶田　太鼓谷	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
賀夜郡	総社市	小寺	城ノ辻	344小寺城跡　346中島屋敷跡
賀夜郡	総社市	井尻野	免田　前田　竹ノ下　城ノ谷　晩鐘影狐塚後	342井山城跡
賀夜郡	総社市	長良	網縄手　前田屋敷　前田	369長良山城跡
賀夜郡	総社市	窪木	城山　矢倉　乾ノ丸　馬場　下前田　上前田	369長良山城跡
賀夜郡	総社市	北溝手	国府殿田深町	
賀夜郡	総社市	南溝手	トキノ元　唐戸	
賀夜郡	総社市	金井戸	御所	370総社遺跡
窪屋郡	総社市	溝口	免田　北彼ノ城　南彼ノ城　東彼ノ城　城の内※真壁城址	405真壁城跡
窪屋郡	総社市	上林	前畑江崎　前田	
窪屋郡	総社市	下林	国領殿　亀山下　土井	407亀山城跡
窪屋郡	総社市	赤浜	城下　折敷山下	408赤浜城山城跡
窪屋郡	総社市	真壁	築地ノ内　荒神ヶ市ノ一　荒神ヶ市　馬場尻　馬場　東庄　西庄　市場　市場堤外	
窪屋郡	総社市	中原	段西　段　川市　東庄前　北庄　東庄	
窪屋郡	総社市	三輪	堀前　竹下　堀　堀上　樋元　三城　丸山下　殿山下　殿山　鐘鋳場	
窪屋郡	総社市	三須	仁重垣　作山段　東掘　城越　城ノ南　城廻リ　古城　城東　前田　門所　五所山	406三須城跡
窪屋郡	総社市	清音柿木	堀之前　久保　鐘鋳場　百間破戸	
窪屋郡	総社市	清音軽部	竹之下　馬渡り向　前田　西市場　馬渡利　馬渡り口　北市場　梶之木　八幡馬場下新田　スシノメン　城之内　掛上り　城ノ北　城之堀　馬場内　馬場下宮之下　城之西　城之下　城ノ東　大段　大段下　下城之平	409下軽部遺跡　410軽部山城跡
窪屋郡	総社市	清音上中島	坪ノ堀　大開	
窪屋郡	総社市	清音古地	城之尾　馬場前	410軽部山城跡
窪屋郡	総社市	清音黒田	開　大井手　土井ノ内　城之下　城ケ平　堀田　堀田上　高丸　開上　鐘堀谷	417黒田古城跡
窪屋郡	総社市	清音三因	馬場　矢井端　免ヶ坪　丸山下　羽織　百射　百射口　鋳場師迫　鋳場師池ノ上　百射山　上小屋　七曲り　飼場山　百射山※福山城の別名という説あり	414幸山城跡　415福山城跡
窪屋郡	倉敷市	酒津	才原庄境　二八二八庄境　三ツ畦庄境　大倉　非戸　土居下　阿志田庄境　婦毛庄境　堀田　馬場下　金堀楠山　城ノ辻　城ノ辻ノ内荒神谷　上中須賀鎧端　鎧西　鎧山　古樋東　鎧山堤外　鎧北堤外　鎧東堤外　鎧端堤外　大倉堤外　走り上り堤外　城ノ内　射場　庄境　竹ヶ谷　竹之谷奥　鐘鋳谷　走り上り　殿屋敷　兜山　甲山　城山　木屋	411流山城跡　418青江城跡
窪屋郡	倉敷市	中島	殿屋敷　村内梶向　前田　安重久宮之木　高堤大開　切戸　陣之内　堀切開　壱本木開	412上河原城跡　413中大道城跡
窪屋郡	倉敷市	三田	蔵免　門田　江木戸　立ノ免　竹ノ下　角田　土井ノ下　中屋敷　東屋敷相　馬場　屋敷ノ前　屋敷相　広段　西屋敷相　殿山　東加治屋　加治屋谷　桜ヶ市　西奥ヶ内	
窪屋郡	倉敷市	浅原	虚空蔵　久連寺　境ノ西　飼曽根　蔵見谷　大丸山　古屋奥	
窪屋郡	倉敷市	西岡	梶ノ曲　鐘鋳谷	
窪屋郡	倉敷市	祐安	防ヶ谷	
窪屋郡	倉敷市	宮前	馬場　城ノ内	419宮前城の内城跡
窪屋郡	倉敷市	浜ノ茶屋	古屋敷向	
窪屋郡	倉敷市	西坂	俵縄手　免ヶ坪　西ヶ市　馬渡り　八束竹　前田	
窪屋郡	倉敷市	生坂	烏帽子丸　坂面　山城　戸ノ袋　南佃　北佃二ノ坪　連角免　角田　八幡面　竹ヶ端　屋敷ノ前　屋敷ノ内　堀田	
窪屋郡	倉敷市	大内	築田　晩照鐘　走上り	
窪屋郡	倉敷市	川入	築田　乗越	
窪屋郡	倉敷市	寿町	走上り	
窪屋郡	倉敷市	日ノ出町	堀切　走上り　才免	
窪屋郡	倉敷市	日吉町	大開　矢倉地	
窪屋郡	倉敷市	八王子町	大開　上開	
窪屋郡	倉敷市	石見町	日吉庄境	
窪屋郡	倉敷市	浜町	才面	
窪屋郡	倉敷市	昭和町	五段地南割　日吉庄境　才免	
窪屋郡	倉敷市	幸町	弐段地南割　古久賀	
窪屋郡	倉敷市	羽島	前田　北開　皷地　荒神段　居屋敷　小丸山　前田八畝川田	
窪屋郡	倉敷市	二日市	走り上り　払殿　論所　屋敷　仏殿	
窪屋郡	倉敷市	新田	矢倉　丸山下	
窪屋郡	倉敷市	加須山	西ノ庄　長川内　有城地　笹山下　丸山下	
窪屋郡	倉敷市	有城	屋敷割	
窪屋郡	倉敷市	中庄	縄目　城ノ内　倉ノ原　殿ノ後　久福　城ヶ元　地志久	421万寿城跡
	倉敷市		関ヶ鼻	
都宇郡	岡山市	加茂	毘沙門　市場　今市	425津寺遺跡　427加茂城跡
都宇郡	岡山市	新庄下	中屋敷　堀返	424造山城跡　428鷹巣城跡
都宇郡	岡山市	中村	古屋敷	
都宇郡	岡山市	下撫川	本屋敷　城ノ内	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	周辺城館等
都宇郡	岡山市	中撫川	梶田	
都宇郡	岡山市	妹尾	城本	442名称未定
都宇郡	岡山市	山田	馬弓　馬場下	
都宇郡	岡山市	妹尾崎	馬弓　土井下　柿木田	
都宇郡	倉敷市	上東	鍛治東　■免　南屋敷　荒神前城ノ内　当免　山下　保頭免　北保頭免　矢削田　北京免　南京免　門ノ明　念仏免九ツ田　外城　熊ノ免　西備中ヶ城　東備中ヶ城　上庄　東鬼川市　西鬼川市　☒免　鍛治東　念仏免　西備中城　東備中城　城の内　南屋敷　右京之進　左馬之助　七段田　鍛治田	432庄城跡
都宇郡	倉敷市	上東	勝負谷　庄畑ケ　水門田　柿負東　的場　西前田　城ノ内　木城　西城　南城　竹ノ端　矢道　山下　土居田　門　城ノ内　横関　兵　西黒川市　掘割　山下　前田　前田	432庄城跡
都宇郡	倉敷市	下庄	庄　鍛冶屋　矢出　西ノ城　南ノ城　前田　兵庫　横関　平松　遊免　外城　鍛治東　念仏免　熊免　南屋敷　東備中ヶ城　西備中ヶ城　城ノ内　右京進　左馬之助　北京免　矢ノ削田　北保頭免　保頭免　矢削田　南京免　山下　當免　西城　本城　馬竹　竹ノ端　南城　歩取	437平松城跡
都宇郡	倉敷市	栗坂	馬竹　竹ノ端　庄村	
都宇郡	倉敷市	松島	梶田　本城　城ノ内　岳ノ元　西ニガキ　東ニカキ　馬場　的場　射越山　城山　城の内　梶田	436松島城跡
都宇郡	倉敷市	二子	小苗手　地重免　西前田　屋敷石ヶ町　池ノ内古屋敷　山下　的場　柿ノ端　樋免　九段田　八之敷　屋敷　柿之端　古屋敷　樋ノ免	435高鳥居城跡
都宇郡	倉敷市	山地	庄畑ケ　西蔵本　小門田　勝負谷	434練尾氏城跡
都宇郡	倉敷市	西尾	前田	
都宇郡	倉敷市	日畑	掘割　大手　城山　向屋敷	431日畑城跡
都宇郡	倉敷市	矢部	大川内　旗　竹ノ下　堀越　勝負　山旗　勝負谷　楯築山	429河屋城跡　430楯築陣山跡
都宇郡	倉敷市	茶屋町	中川内　蟹取川内壱番川内　弐番川内　三間川内　片揚川内　菖蒲川内　九尺川内	
都宇郡	倉敷市	早高	中開　河内	
都宇郡	倉敷市	黒崎	前田　角田向山　倉ノ原池田　金堀　竹藤　門ノ山	
都宇郡	倉敷市	鳥羽	実久　楠戸　蔵屋敷　天神免　山ノ下　土井ノ下　前田　中屋敷　北屋敷　仁部　仁部前	438鳥羽城山城跡
都宇郡	倉敷市	徳芳	楠戸　京面　荒神免　戸遠木	
都宇郡	倉敷市	帯高	古開一ヨリ十一迄　古開	
都宇郡	倉敷市	五日市	角田　竹ノ端　幸山下　源ノ山下　竹藤	
都宇郡	倉敷市	中帯江	昆砂免　竹藤	
都宇郡	倉敷市	西田	唐戸　河内	
都宇郡	早島町	矢尾	上矢尾　上矢尾ノ端熊野　西前田　乗越　箸ノ免	
都宇郡	早島町	早島	屋敷割　市場前　市場　矢尾前　西前田　城　佃　横城　竹ノ下　屋敷割　田中城　関当城山　唐戸　堀割地　柿原　上ノ段　九反坪山下	440早島城跡　441戸川家陣屋跡
都宇郡	早島町	前潟	久々原　屋敷割	

第６章　総括

第１節　考古学から見た備中国の城館跡

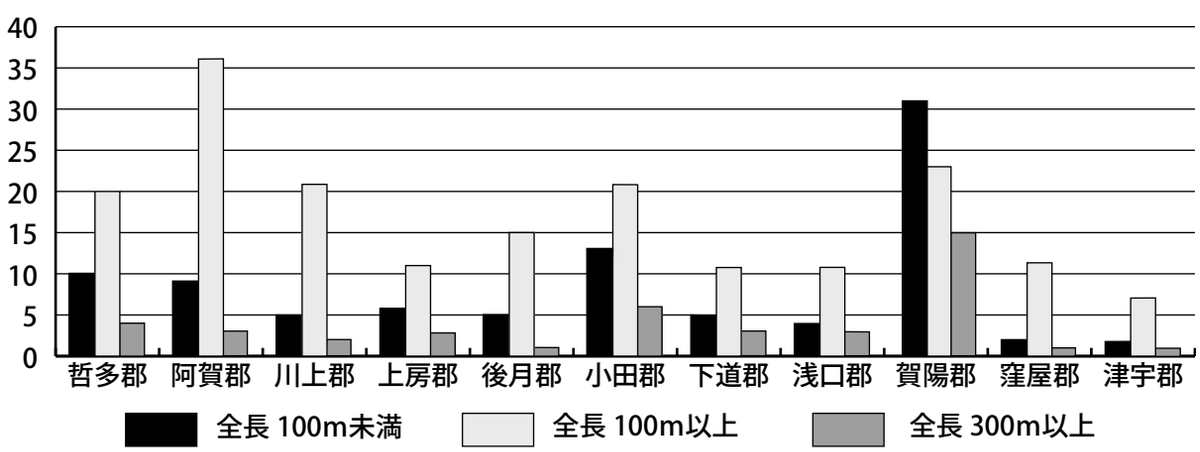
１　はじめに

備中国における城館の考古学的調査は、1970 年代に建設された中国縦貫自動車道建設に伴い６か所の城館が調査対象となったことに端を発する[1]。1980 年には『日本城郭体系』13 巻（以下､『体系』）が出版される[2]。『体系』では 43 か所の備中国の城館が縄張り図と考古学的調査の成果を交えつつ紹介されたほか､郡別に 262 か所の城館が一覧として掲載されている。1987 年には村田修三監修の元、池田誠等による縄張り図調査をまとめた『図説中世城郭辞典』三（以下、『辞典』）が刊行される[3]。この『辞典』では、備中高松城のに戦いに関連する陣城[4]群の縄張り図が掲載され、当該期の陣城研究に寄与することとなった。さらに、1990 年代に入るとこれら陣城群や山上土塁が発掘調査の対象となり、その構造の一端が判明している[5]。同じ頃、158 備中松山城跡の史跡整備が開始された[6]。備中松山城の天守は現存 12 天守の一つに数えられ、2000 年代以降も大手門や大池などを対象にして、継続的に発掘調査が実施されている[7]。

ここからは、まず今回の総合調査で新たに判明した、備中国の城館の規模や立地について検討を加える。続いて旧郡ごとの城館の概要について記述し、最後に考古学と縄張り図研究を合わせて検討した、備中国の城館の類型と時期ごとの特徴について述べていきたい。

２　城館の規模について

第 366 図に、備中国の城館規模を郡別にまとめた棒グラフを掲載した。ここでは便宜的に全長 100 m未満、100 m以上、300 m以上の三つに分類している。これを見ると、各郡で城館規模に差異のあることが判明する。ここでは哲多、阿賀、川上、上房を備中国北部、後月、小田、下道、浅口



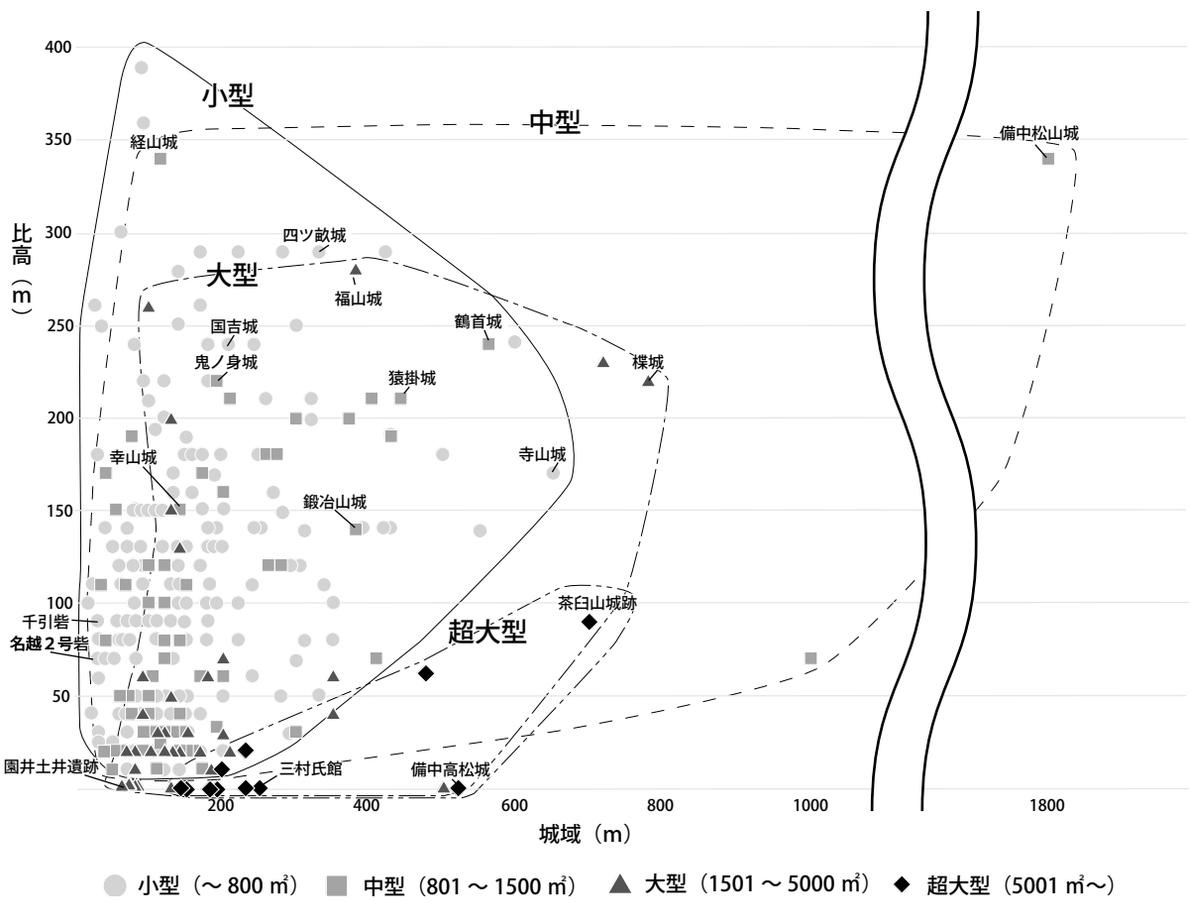
第 366 図　郡別に見た備中国の城館規模

窪屋、津宇郡を備中国南部と呼称し、それぞれ見ていこう。

まず、備中国北部では、阿賀郡の城館数が他の郡から抜き出ている（49 城）。さらにその規模を見ると、全長 100 m以上、300 m未満の城館の数が卓越している（36 城）点を特徴としてあげられるだろう。一方、上房郡は城館そのものの数が少ないが、この郡には中世前半と目される大松山城の築城以降、近世に至るまで一貫して備中国の中核城郭であった、158 備中松山城跡が含まれている点を指摘しておきたい。

続いて備中国南部を見ていく。まず、城館数において、賀陽郡が卓越している（69 城）。その内訳を見れば、全長 100 m以下の城が最も多く（29 城）、全長 300 m未満の城館（25 城）が続く。全長 300 m以上の城も全郡中最多で、15 城を数える。また、他の郡と大きく異なる点は、全長 100 m以下の城の数が多い点である。後述するとおり、これらの城館の大半が備中高松城の戦いに関する臨時的な陣城である。また、全長 300 mを超える城館には「境目七城」である 353 宮路山城跡や 393 備中高松城跡が含まれるほか、これらに対して宇喜多方が「楔を打ち込むように」[8]築いたとされる 354 鍛治山城跡も含まれる。城館数では小田郡がこれに続き（40 城）、浅口郡、下道郡はほぼ同程度の城館が見られる。概して言えば、山陽道沿いに城館数が多く、これに瀬戸内海沿岸部が続く点を指摘できるだろう。

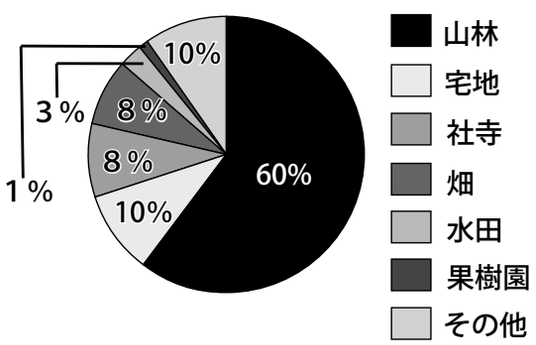
ここで、備中国の城館の城域と比高、および主郭、あるいはこれに準ずる規模を持つ曲輪の面積との相関関係を第 367 図に示した。ただ、非線形累線を描く山城の主郭面積を正確に計算することは



第 367 図　比高、城域と主郭面積の相関関係

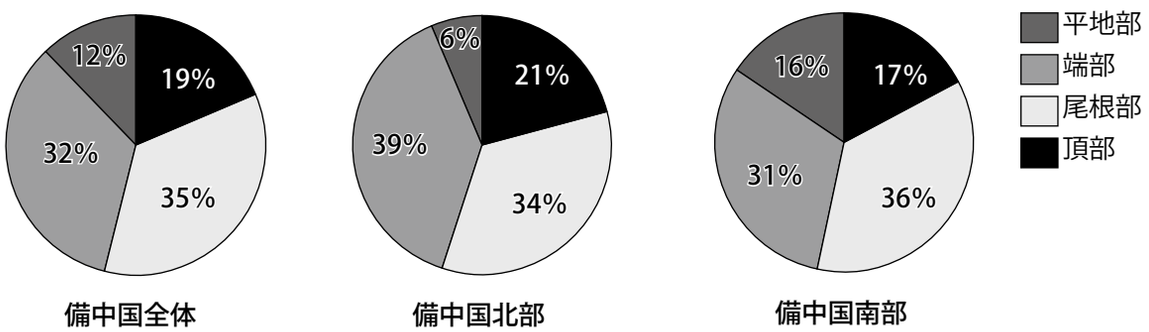
難しい。そのため、ここでは曲輪の最大長と最大幅のそれぞれ計測し、値の積によりこれを求めた。その上で 800㎡未満を小型、801㎡～ 1500㎡を中型、1501㎡から 5000㎡を大型、そして 5001㎡以上を超大型として分類した。まず、主郭規模が小型となる城館が最も多い（197 城）。比高の平均は 114 m、同じく平均城域は 155 mである。この類型には備中高松城の戦いの前哨戦となった、下足守の戦いで使用されたとされる 360 名越 2 号砦跡や 358 千引砦跡といった小型の陣城群が含まれている。ただ例外もあり、主郭面積 400㎡を測る 141 寺山城跡の城域は、650 mにも達する。この城は天正 9 年 10 月に毛利輝元の陣所となった可能性が指摘される（第 4 章、以下同じ一次史料 190）。中型城館には 158 備中松山城跡や 126 鶴首城跡や 227 猿掛城跡など、有力国衆の本城となる城が含まれている点を指摘したい。比高差の平均 95 m、城域も備中松山城跡の約 1,800 mを最大とし、平均は 196 mを測る。大型城館であるが、分布の中心は比高 150 m以下にあり、平均比高は 57 mを測る。城域の平均長は 176 mである。超大型城館の比高の平均は 8 m、城域の平均は 238 mを計る。124 三村氏居館跡や 393 備中高松城跡など有力国人の方形居館や、「境目七城」の一角を占める平地城館はこの類型に属する。加えて、天正 11 年に築城された、毛利氏の拠点城郭とされる[9] 223 茶臼山城跡も含まれるが、比高は 90 mと低い。以上をまとめると、①主郭規模小型城館の比高差は全類型中、最大で、城域は最小となる。これには陣城となる臨時的な城館が含まれる。②主郭規模中型城館は比高差、城域ともに大きく、地域支配の有力国衆の拠点城郭が含まれる。③主郭規模大型、超大型城館は比高差が小さく、特に超大型は過半数が 10 m以下となっている。有力国衆の居館、広域権力の支配拠点となった城などがこれに含まれている。

3　備中国城館の現況と立地



第 368 図　備中国城館の現況

第 368 図に備中国城館の現況を、第 369 図に備中国城館の立地をそれぞれ円グラフで示した。まず現況は 60％が山林である。これに植林地も含まれる。続いて立地について見ていこう。ここではその立地を平地部、山塊の端部、尾根部、及び頂部に分けてみた。備中国全体では山塊端部と尾根部がそれぞれ３割強を占め、頂部と平野部が続く。地域別で見れば、備中国北部に比べ南部では平地城館が多いことがわかる。　　（和田）



第 369 図　備中国城館の立地

4　備中国の郡別城館概要

＜哲多郡＞　哲多郡は備中国の北西端にあたり、備後・伯耆国と国境を接する。城館群は、高梁川沿いの新見盆地周辺と神代川流域が多い。伯耆国国境近くや本郷川～坂本川流域にも分布が見られる。

新見盆地周辺では、新見盆地の北部に位置する 8 楪城跡（全長 780 m）が当郡最大で、西部の 23 竹野城跡（310 m）、南部の 33 石蟹山城跡（280 m）が続く。楪城跡は全体の規模だけではなく北側の通称本丸・二の丸の曲輪面積も広い。26 宮田山城（120 m）は畝状竪堀群・掘切・土塁が効果的に配されている。平地の館跡は、12 地頭方政所跡（85 m）が明瞭な区画と堀跡を残す。

神代川流域では、37 西山城跡（280 m）を筆頭に丘陵裾・頂部に城館跡が 12 か所存在する。16 土井城跡・18 藤木城跡・36 岸本城跡は平地に突き出た尾根先端部に立地、発掘調査で掘立柱建物を確認し、南北朝期から 15 世紀後半までの館跡と考えられる。神代川流域の城館は曲輪 1 面の規模が大きく、19 豆木城跡（180 m）の主郭面が東西 60 mで、西山城跡にも長さ約 50 mの曲輪がある。

＜阿賀郡＞　阿賀郡は備中国の北東端で、伯耆・美作国と境を接する。城館分布の最大の集中域は南東部の呰部の盆地周辺で、熊谷川流域、小坂部川中・下流域、高梁川東岸にも位置している。

呰部の盆地周辺では、盆地北側の山頂部に、堀切・竪堀群が厳重な 73 高釣部城跡（全長 210 m）・79 山王山城跡（170 m）、城中央に深さ 10 mの堀切を設ける 80 丸山城跡（260 m）が位置する。盆地西端には多くの合戦が行われた 76 才田城跡（240 m）、盆地東端の国境付近には 84 片山城跡（140 m）から 87 陣山砦跡（130 m）が同一尾根上に並ぶ。盆地に面する丘陵上には、曲輪 1 面の面積が広い城館が多い。平地館跡では、83 赤茂館跡（65 m）で発掘調査により室町時代中葉～後半の掘立柱建物群が検出された。

小坂部川下流域の 66 甲籠城跡（170 m）は曲輪が小規模で加工度合いが低く、急峻な山上に立地する。これに対し 69 鬼山城跡（430 m）は曲輪面積も大きく、城域は谷部も含めて広い。熊谷川流域では、国人田治部氏の本城 58 塩城山城跡（280 m）と 57 田治部氏屋敷跡が対で残る好例である。

＜川上郡＞　川上郡は備中国の中央部西端にあたり、東端は高梁川、西端は備後国と境を接する。中央を成羽川が東へ流れ、その流域に城館が集中するが、高原の小盆地沿いにも城館が確認できる。

成羽川とその支流が深い渓谷を刻む備後国境の平川地域では、111 紫城跡（全長 150 m）を中心に小規模であるが技巧的な施設を設ける 7 か所の城館が見られる。成羽町中心部の南側山塊には当郡最大の 126 鶴首城跡（560 m）が交通の要衝を占める。規模の大きい曲輪に石垣と竪堀群で固める本丸と、多数の曲輪を重ねる二の丸は対照的な造りである。成羽川流域以外で、北側には川上町地頭集落を見下ろす 135 国吉城跡（210 m）、高梁市宇治町周辺には 108 白毛ヶ城跡（120 m）を中心にまとまった城館群がある。南側には頂部曲輪を土塁で囲む 137 小笹丸城跡（120 m）がある。

＜上房郡＞　上房郡は備中国の中央部東端で、西端は高梁川、東端は美作・備前国に接する。城館の分布は、高梁川沿い、有漢川流域の阿賀郡に近い北側、中央部を東流する宇甘川南北岸で見られる。北端国境に頂部曲輪群を堀切と竪堀が取り巻く 140 飯ノ山城跡（全長 170 m）、曲輪は多くないが堀切と横堀を駆使する 147 常山城跡（280 m）、高梁川沿いで丘陵頂部を 4 つの曲輪群で占める 141 寺山城跡（650 m）などがある。備中国最大の 158 備中松山城跡（1800 m）は、近世城郭が建つ小松山城跡の他、大松山城跡、天神の丸跡、相畑木戸跡、あせびの丸跡などからなる複合的な山城である。宇甘川の南岸で山頂にある 156 矢倉城跡（65 m）は単郭を平面六角形の土塁で囲む。（氏平）

＜後月郡＞　後月郡は備中国の東南部に位置し、備中国と備後国との国境地帯にあたっている。郡南部には小田川と、これに沿って東西に走る山陽道を中心にした平野が見られるが、郡北部の大半は標300 m程度の丘陵地帯が広がっている。本郡の城館は主に群域南部の小田川及び山陽道を挟んで展開している。本文で概要を記したものが 22 城である。このうち、169 正霊山城跡と 191 高越城跡が井原市指定史跡となっている。本郡の城館の特徴として、山陽道沿い、特に備中･備後国境地帯に、堀切や畝状空堀群、土塁を組み合わせた、堅固な防御線を形成する城館が見られる点を上げられる。その代表的な例として 177 高屋城跡や 180 古見山城跡、192 戸木荒神山城跡、193 才崎城跡が上げられる。これらのうち 177 はやや北に奥まった位置にあるが、180、192、193 は山陽道に対して南北から突出する丘陵上に位置している。

＜小田郡＞　小田郡は後月郡と同じく備中国東南部に位置する。その地勢は多様で、南部の海浜域から小田川の形成する沖積平野、そして北部は標高 300 m以上の丘陵地帯が広がっている。郡域の中央を東流する小田川に沿って、山陽道が走る。200 三村氏館跡、201 金黒山城跡、231 工ヶ城跡が井原市の、227 猿掛城跡が矢掛町並びに倉敷市の、そして 262 真鍋城跡が笠岡市の指定史跡となっている。海浜部には村上水軍の活動拠点とされる、254 笠岡城跡が位置する。一方、山陽道沿いでは先述した 223 茶臼山城跡を中心として、218 伽藍山城跡、220 要害山城跡、227 猿掛城跡など、堀切、畝状空堀群や土塁を組み合わせた防御施設を有する城郭群がひしめいている。さらに 218、227 には折れを伴う虎口が見られ、戦国後期の築城、改修を想起させる。

＜下道郡＞　下道郡は備中国中南部に位置する。郡の南部には備中国を南北に貫流する高梁川と、東西に流れる小田川の両者が形成した沖積平野が広がっている。天正 10（1582）年の備中高松城の戦い以降、宇喜多方と毛利方との境目領域となった。このうち、270 鬼身城跡が総社市指定史跡となっている。この鬼身城跡は野面積みの石垣を築いて防御線をなす、外枡形空間を有する[10]。主郭周辺では内面にコビキＢ痕跡を残す丸瓦片が表採されており[11]、「織豊城郭」的特徴を示す。その他、272 荒平山城跡、278 木村山城跡や 279 夕部山城跡など、天正２～３（1579 ～ 80）年にかけて勃発した「備中兵乱」に関する城館が所在する。他にも、平成 30 年度から調査が行われている 285 南山城跡では、多重堀切や土塁と畝状空堀群を組み合わせた強力な遮断線、多折れを伴う虎口など戦国最末期の特徴を示す縄張りが検出されている。この城はこれまで指摘されているとおり[12]、宇喜多・毛利氏間の分国境界における緊張関係を具現化した城と言えよう。

＜浅口郡＞　浅口郡は備中国南部の臨海部に位置し、乙島、連島など、吉備穴の海の入り口にあたる島嶼部を含む。郡域東側は近世の干拓により旧観をとどめていないが、中世を通じて高梁川の河口域にあたっていた。浅口郡は応永 14（1407）年に細川満国が幕府から一円知行を許されて以来、中世を通じて細川野州家の知行地であった[13]。なかでも天文年間に当主となった細川通董は当初尼子氏に、やがて大内氏から毛利氏へと主を変え、なおかつその居城も 318 竜王山城跡から 293 鴨山城跡、そして子の元道の代には 307 要害山城跡へ移したとされる[14]。文禄年間から天正 10 年頃まで通董の居城であった 293 の周囲 4 km 以内には、支城と見られる城館群が点在している。特に瀬戸内海沿岸の丘陵頂部に多く分布する傾向があり（９城）、うち６城で畝状空堀群が見られる。なかでも 299 泉山城跡と 317 茶臼山城跡では土塁や平面Ｖ、Ｕ字形を呈する堀切が見られる。

＜賀陽（夜）郡＞　賀陽郡は備中国の南東部に位置する。郡域の北側は標高 300 ～ 400 mを測る吉備高原となっており、南部は高梁川が形成した沖積平野である総社平野が広がる。郡域の東側は備前

国との国境地帯にあたり、さらに山陽道も延びるなど、備中国でも有数の要衝である。その地勢にふさわしく、城館数は備中国最大である（伝承地を含め 97 城）。天正 7 年～ 10（1579 ～ 82）年、宇喜多氏の毛利方離反から「備中高松城の戦い」に至る 4 年間は、厳しい緊張状態に置かれた。そうした軍事的緊張を背景に、毛利・織田方（宇喜多・羽柴氏）の境目領域となった郡域東南部の足守川流域に、城館が濃密に分布している。この足守川流域が「備中高松城の戦い」の舞台となった。先述したとおり、この戦いに関連したとみられる陣城群の一部で、発掘調査が行われている。これら陣城群からは遺物が出土せず、短期間の運営であったことが発掘調査からも裏付けられた。また、国指定史跡である 393 備中高松城跡[15]や 397 備中高松城築堤跡（蛙ヶ鼻）でも発掘調査が行われており[16]、城の存続期間や築堤の構造を知る上で、貴重な知見が得られた。

＜窪屋郡＞　窪屋郡は備中国南部に位置する。古代より山岳霊場であった福山をはさんで、北は総社平野南部、南には倉敷平野が広がる。倉敷平野の南部は西阿知新田をはじめとする近世の干拓地であり、中世は吉備穴の海の西側入り口にあたっていた。このうち 415 福山城跡は国の史跡に指定されている。本城は『太平記』の舞台としてよく知られるところであるが、その遺構の理解については諸説ある[17]。総社市指定史跡である 414 幸山城跡は、主郭こそ自然地形を残すが、大規模な堀切、土塁、畝状空堀群からなる遮断線を有している。なお、本城は「備中高松城の戦い」に際し、毛利方の本営の一つであった[18]とされる。

＜郡宇郡＞　都宇郡は備中国に最南部に位置する。郡域南部は吉備穴の海に接する早島が位置し、北側には足守川が形成した沖積平野が広がる。本郡は「備中高松城の戦い」に際しては、北の賀陽郡から続く毛利方の防衛線が敷かれた。倉敷市指定史跡である 427 加茂城跡の他、431 日畑城跡、436 松島城跡がいわゆる「境目七城」に含まれる。その他 423 庚申山城跡や 433 日差山城跡、426 甫崎天神山城跡等が毛利方の陣城であると伝わる。うち、426 では発掘調査が実施されており、深さ 4 mを超える堀切や横堀、掘立柱建物が検出されている[19]。なお、出土遺物は 16 世紀後半の年代を示す。

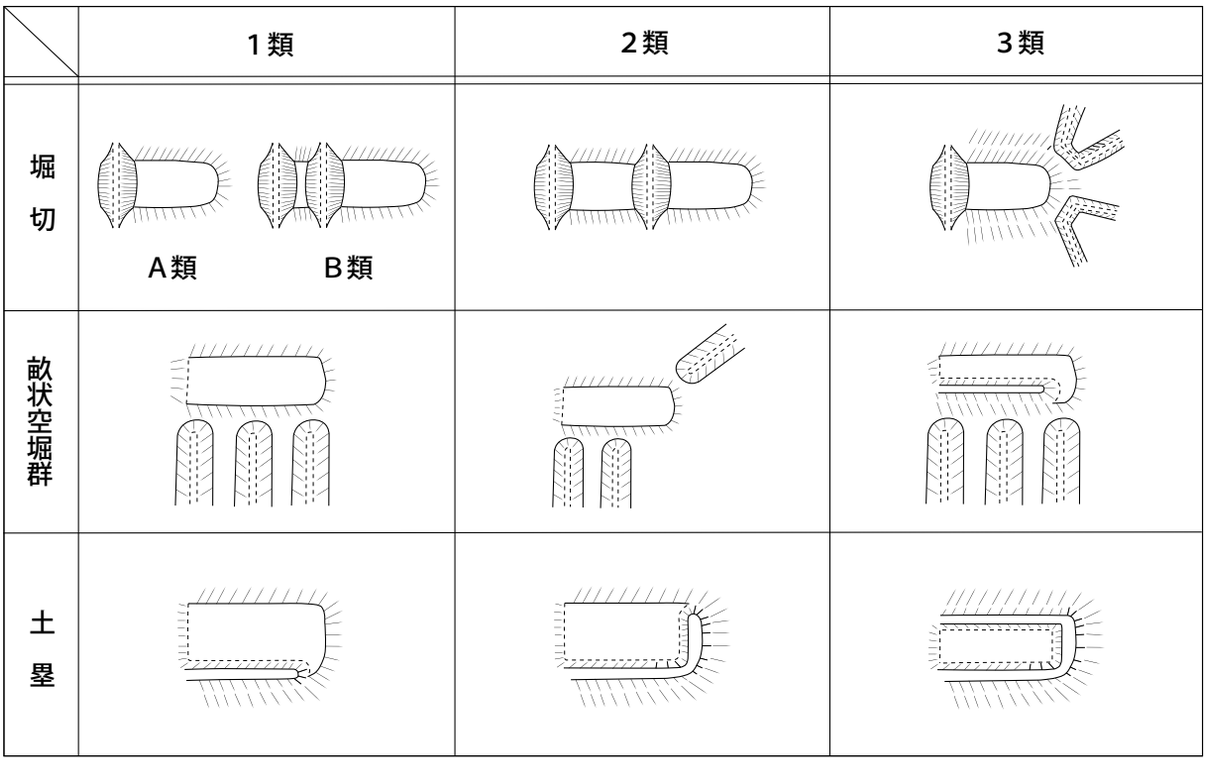
5　備中国城館の縄張りと分布

研究史と課題　ここまでは備中国における城館の分布を郡別に検討してきた。ここで備中国における城館縄張りの研究史を今一度振り返っておこう。備中国における城館縄張り研究の鏑矢となったのは、すでに述べた通り『体系』と『辞典』である。その後、備中国の城館研究は三つの方向に分かれて推移してきた。第一には備中高松城の戦いで使われた陣城群についての検討である[20]。これらでは特に低土塁による囲繞性の見られる小城館について、宇喜多・羽柴氏との関連が指摘されている。第二は、285 南山城跡の縄張りの検討、特に畝状空堀群と一部が櫓台として機能分化した土塁の累線形状などから、天正 10 年以降の中国国分を巡り、毛利氏の関与を指摘したもの[21]である。第 3 は備中国府周辺域の城館群を「空間的」に検討を加えたもの[22]である。さて、畑和良は当該地域の城館縄張りの検討を進める上で二つの方向性を示している。第一は「城館の縄張りを網羅的に把握し類型化することによって地域の城館類型の組成状況を抽出し」、第二に「個別城館の使用主体や年代、地域や戦争の中での位置づけを物語る良質な文献に基づき各類型の性格を比定することによって、地域の城館構成と政治情勢・合戦状況との関連を明らかにすることが求められる」とする[23]。今回の調査により、備中国の城館縄張りが把握された。そこで畑の提言に従い、第一に城館縄張りの網羅的な類型化を行う。続いて時期ごとに一次文献に登場する城館について、発掘調査の成果を交えつつ検討を加えていこう。

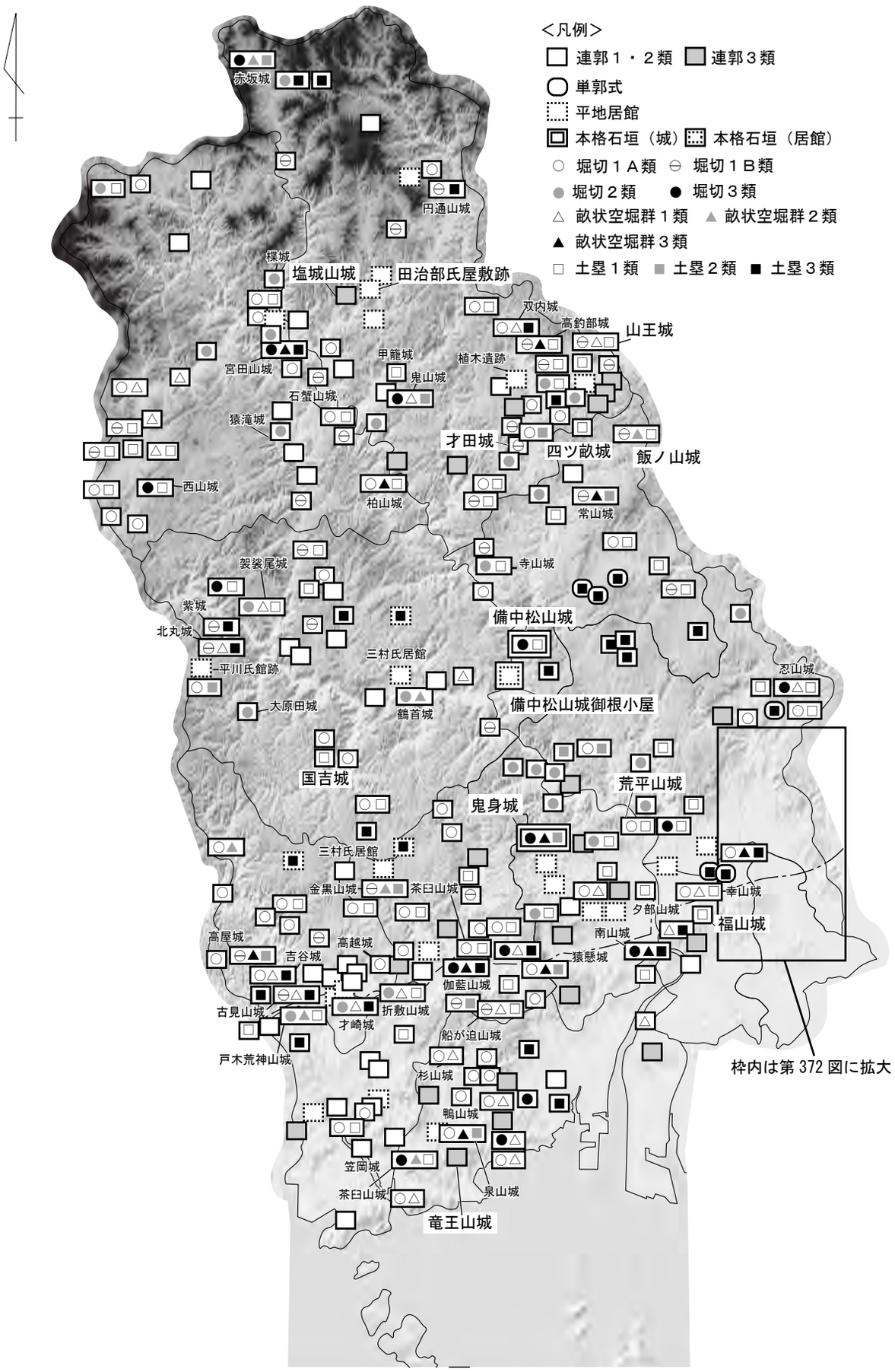
城館の縄張りと分類　さて、今回の総合調査で改めて判明した点は、当地域における城館群においては虎口や馬出といった入口、すなわち松岡進のいう「導入系施設」の発達が未成熟である一方、同じく松岡が「遮断系施設」と呼ぶ[24]、堀切、土塁、畝状空堀群の発達が顕著である点である。ただ、これも全面的に作用されているわけではなく、堀切、土塁、畝状空堀群の全てを兼ね備える城は、備中国 436 城中、28 城にとどまる。そこで、類型化にあたっては、まず城館を構造に基づき分類し、これに「遮断系施設」とのセット関係を組み合わせて検討する方法を採用したい[25]。まず、第 370 図で検討した、城館の立地に基づき山城（比高差 10 m以上）と平地城館（比高差 10 m未満）とに分ける。さらに山城については階段状に曲輪を連ねる連郭式と、主郭のみからなる単郭式とを分ける。また、連郭式については、全長 100 m以下で何らの「遮断系施設」を設けないものを連郭１類、何らかの「遮断系施設」を設けるものを２類とする。また全長 100 mを超え、かつ「遮断系施設」のないものを３類とする。

続いて「遮断系施設」について分類を試みる（第 369 図）。まず堀切であるが、城域の後背、あるいは前方に掘削され、城域を画するものを１Ａ類、２条以上連続して掘削するものを１Ｂ類とする。これらに加えて、城域の中央付近を切断したものを２類とする。さらに、平面Ｕ字、あるいはＶ字形を呈し、先端が竪堀状となり尾根線、稜線を完全に切断するものを３類とする[26]。畝状空堀群は城域の一部に部分的に用いられるものを１類、２ヶ所以上で用いられ囲繞性のあるものを２類、そして、上位にある曲輪に土塁を設け、遮断性を強めたものを３類とする[27]。土塁は、曲輪の一辺のみに築かれたものを１類、曲輪の２辺に築かれたものを２類、曲輪の三辺以上に築かれ、囲繞性の高いものを３類とする。なお、複数の類型がある際は、より囲繞性の高い類型をあてる。

以上の分類に基づき、第 371・372 図では、各城館の構造と遺構のセット関係を分布図に示した。以後、主に一次資料に基づき、各時期に使われた城館の類型について検討する。



第 370 図　遮断系施設の分類概念図



第 371 図　備中国城館の分布（1/400,000）　※背景地図は国土地理院基盤地図情報を元に作成

南北朝時代（1336 ～ 1392）の城　備中国における南北朝期の城郭は 415 福山城跡が知られる（史料６～ 13）。福山城跡は大きくは二つの曲輪からなっている。遺構は北側の曲輪に集中している。この北側の曲輪縁辺に沿うように溝状の遺構が見られることは既に述べたとおりである。また、門、ないしは虎口かと見られる部分が石塁化された土塁１類が見られるものの、これが確実な城郭遺構であるかは判然としない。その他、堀切等の明確な「遮断系施設」が見られない点も特徴として挙げられるだろう。連郭２類に分類できるが、遺構の同時代性については課題が残る。

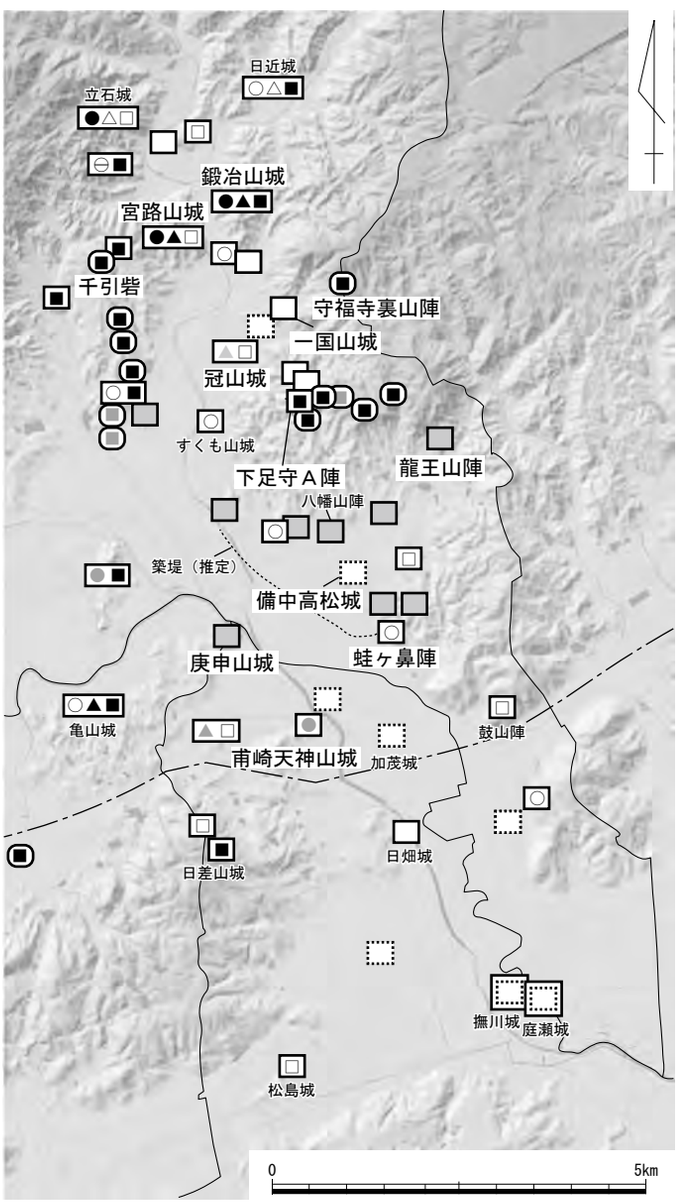
さて、この場所には山岳寺院である浅原寺が所在していた。南北朝期に山岳寺院を城として利用した例として、美作国の 300 菩提寺城が知られる他、河内国笠置城も山岳寺院であったことが知られている[28]。こうしたことから、南北朝時代初期の山城のありかたとして、常設的な駐屯地を設けず山岳寺院を利用する[29]例が、備中国においても見られる点を指摘しておく。

戦国時代前半から半ばの城―延徳～元亀（1489 ～ 1572）年間―　この時期の城館の中で、一次文献に登場しかつ、改修の手が入っていない可能性の高い城の例として、318 竜王山城跡を挙げる。この城は浅口郡一円支配をなした細川通董の初期の居城である。史料 43 によれば、天文 19（1550）年に通董は同城を居城としていた。この城は城域こそ 250 ｍを超える大型の城郭であるものの、曲輪配置は散在的な上、堀切等が見られない連郭３類に属する。第２の例として、58 塩城山城跡を挙げる。この城は室町幕府奉公衆で、東寺百合文書にもその名がみえる田治部氏の居城とされる。史料 70 によれば、三村元親と庄元資兄弟が元亀元（1571）年にこの城を攻略しようとしていたことが判明する。この城は最頂部に主郭を据える連郭式山城である。中腹に出丸が築かれているが、その間には曲輪は配されていない。堀切や土塁等の「遮断系施設」はみられず、この城も連郭３類に属する。なお、この城の麓には発掘調査の成果から、田治部氏の屋敷跡とされる平地城館がある（57 田治部氏屋敷跡）。塩城山城跡とは館と詰め城の関係にあったとされる[30]。以上、曲輪配置にみる散在性、「遮断系施設」の未発達をこの時期の山城の特徴としてあげることができよう。あわせて、館と山城（詰め）という関係性が出現している点にも注目したい。

「備中兵乱」と城―天正２～３（1572 ～ 73）年―　天正２年５月。毛利方の先兵として尼子・宇喜多・浦上氏と争っていた備中国有力国人である三村氏は、宇喜多・毛利和平に及んで、毛利氏から離反し、織田氏と同盟した。そのため毛利氏が追討に乗り出し、備中国内の諸城が戦場となった。この時に三村方の城として記録される（史料 105 ～ 108）、135 国吉城跡を見てみよう。この城は堀切こそ判然としないが、土塁１類を伴う連郭２類の城館である。主郭の全長は 30 ｍを超え、その大型化の兆しが見られる。切岸の比高差も最大で５ｍを超え、大規模な造成の様子が忍ばれる。ただ、その曲輪は南北に延びる尾根筋にのみ配され、東西方向への広がりは見られない。一部に腰曲輪が見られるが、城側面への防御意識は低いと言わざるを得ない。その他、参考資料 27 に登場し、三村方の「荒平の城」に比定される 272 荒平山城跡では、堀切１類、土塁１類の組み合わせが見られる。荒平山城跡ではこれらに加え、主郭他の曲輪の入り口となる部分に、平入り、あるいは一折れとなる虎口状の施設が見られる。土塁は高さ１ｍ、堀切は最大で深さ３ｍを測る。ただ、国吉城跡と同様に、曲輪側面は部分的に腰曲輪を配することで防御線をなしている。このように、「備中兵乱」で用いられた山城は、堀切、土塁により城域を隔絶する連郭２類である点が前代とは異なる。また、比高差の高い堀切、土塁により防御線を形成しているが、城の側面への防御意識は低いという特徴を見いだすことができそうである。

四ッ畝城の戦いと城　―天正７～８（1579～80）年―　天正７年９月、それまで毛利氏と同盟関係にあった宇喜多直家が織田方に与した。同じ頃、93 四ッ畝城跡に反毛利氏の土豪等が籠城した。土豪等と宇喜多氏との結集を恐れた毛利氏の動きは速く、毛利輝元、吉川元春等、毛利氏首脳が直々に出陣している（史料 177、180）。この時に毛利方の本営は史料 166 ～ 176 までの 10 通もの文書から、６名もの在番が置かれたことがわかる、76 才田城跡であったとみられる。才田城跡は連続堀切１Ｂ類が見られる連郭２類の城館である。ただ、それ以外にも史料 179 から宇喜多氏配下の伊賀氏の兵が戦いを挑んだ記録が残る 79 山王城跡をはじめ、翌天正８年正月に毛利輝元の命により在番が置かれた 140 飯ノ山城跡等、四ッ畝城の周囲４km を取り巻くように位置する５つの城で堀切、畝状空堀群、土塁の共伴が認められる。ここで飯ノ山城跡の縄張りを見ると、頂部に全長 40 ｍを測る主郭を配し、その周囲を取り巻くように２面の腰曲輪が設けられている。城域の背後は２条からなる連続堀切１Ｂ類により完全に切断されている。また、城の周囲を取り巻くように 19 条もの畝状空堀群２類が設けられ、城域の全方位に渡って、強力な防御線が張り巡らされている。こうした防御線はこれまでの備中国の城館の縄張りから隔絶しており、外来的な要素であった可能性が高いものとみられる。

備中高松城の戦いと城（第 372 図）―天正 10（1582）年―　天正 10 年３月。宇喜多氏からの援軍要請を受けて姫路を発した羽柴秀吉は、史料 278 によると翌４月４日に岡山城に着陣する。同史料によると、秀吉は５日に「山見」（350 守福寺裏山陣跡）を行い、13 日に今保を経由して備中国へ進出する。史料 285 によれば、遅くとも４月 19 日には 353 宮路山、373 冠山城跡への攻撃が開始された。この際の織田方の陣と考えられているのが 358 千引砦跡、377 下足守Ａ陣跡、372 一国山城跡等である。ここでその分布状況を見ると、この時織田方の陣は攻撃対象となった宮路山城跡、冠山城跡の周囲 600 ～ 1,000 ｍ以内に 22 ヶ所も緻密に配されていたことが分かる。このうち 16 の城で土塁が用いられる。一国山のような連郭１類の城館も見られるが、これは一時的な駐



第 372 図　備中高松城の戦い関連城館の分布（1/100,000）
※背景地図は国土地理院基盤地図情報を元に作成

屯地、平坦地であったか。その他 380 山上土塁跡に見るように、陣と陣とを繋ぐ尾根上には土塁が設けられていた。史料 291 他から、この時織田方の本営と言えるのが 291 鍛冶山城跡である。その縄張りを見ると、堀切３類、畝状空堀群３類、土塁３類という、最も遮断性の高い縄張りを見いだすことができる。戦いの後半は世に名高い備中高松城水攻めである。史料 318 によると織田方は５月８日には 393 備中高松城跡の包囲を開始した。この時、城の南に築堤（397・398 備中高松城水攻め築堤跡）を築き、足守川の流水を引き入れて水攻めしたことは、よく知られるところである。この際の織田方の陣所は参考資料 49、50 等から 385 龍王山陣跡、396 蛙ヶ鼻陣跡であったことがわかる。その他、備中高松城周囲２km 以内に 390 八幡山陣跡をはじめとする連郭式の山城群が 10 ヶ所分布し、うち、７ヶ所の城が連郭３類である。こうした陣城の縄張りの共通性の高さと分布の凝集性は、この前年に勃発した、因幡国鳥取城攻めの陣城群との共通する点と言える。

ここで、この戦いで使われた毛利方の城館の縄張りを見てみよう。宮路山城跡は堀切３類、畝状空堀群３類で防御線を形成するのに対し、冠山城跡は堀切が明確でなく、畝状空堀群２類が採用される。また、備中高松城救援（後巻）のため毛利方が入った山陣（史料 322）についても、423 庚申山城跡が連郭３類、426 甫崎天神山城跡が連郭２類となるなど、縄張りの共通性があまり見られない。

織豊城郭から近世城郭へ　―天正 13（1585）年以降―　天正 13 年に毛利氏、宇喜多氏間で領土交渉が結ばれ、高梁川を境とする領国が確定した。天正 18[31]（1590）年、宇喜多秀家は岡山城の改修を開始し、「礎石建物・瓦・石垣」を備える織豊城郭化[32]を進めた。この前年には毛利氏の広島城の築城も開始されていた。備中国では、402 撫川城跡の石垣が、この時期のものとされている[33]。この時、毛利方の城であった備中松山城跡での普請・作事の痕跡は見いだしがたいが、270 鬼身城跡で、虎口部分に石垣化を伴う改修が行われていることが推察された。

慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いの後、備中国は幕府直轄地、旗本領、足守藩領などに分割された。この際、備中国総奉行の小堀政一が 158 備中松山城跡・159 備中松山城御根小屋跡の改修を行った記録が残る（史料 432 他）。備中松山城御根小屋の一部の石垣隅角部で専用隅脇石の充填、明確な反りが見られる。布目崩しとなる築石の特徴と合わせ、この時期の改修によるものと思われる。

６　まとめ

ここまでは城館の規模、比高や立地について、続いて城館の時期ごとの縄張りの違いを考古学的な調査成果を交えつつ検討してきた。結果、①郡ごとで城館規模の構成が異なること、②主郭の規模と比高、城域には概ね相関関係あり、それぞれ陣や有力国人あるいは、広域権力の支配拠点となる城館などを抽出しうる可能性があること、③縄張りでは連郭２類にみる「遮断系施設」は時代が下るにつれ複雑、複合化の進むこと、④畝状空堀群については備中国内部での自生的な発達は見られず、外来的な要素であった可能性が高いことを指摘できた。

ただ、今回、一次史料を用いて検討を加えた城館については、その上限年代が明らかとなっただけであり、記録には残らない改修が行われている可能性は残る。加えて、周囲の城館との時空間的な同一性の検討が、今後の課題となる。特に連郭３類の分布は①四ッ畝城跡周辺、②山陽道沿い、③備中高松城跡周辺の３ヶ所に集中している。③についてはほぼ確実に陣であったと言える。一方、②についてはＡ）侵攻ルート沿いの一時的な陣[34]、またはＢ）古式の山城、あるいはＢ）に改修を加えたＡ）である可能性等が想定される。その個々の性格については今後の検討にゆだねたい。　（和田）

註

1 「土井城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21　1977　岡山県教育委員会　他
2 葛原克人 『日本城郭体系』13　1980　新人物往来社
3 村田修三編 『図説中世城郭辞典』三　1987　新人物往来社
4 「陣城」という用語は江戸時代の軍学研究の進展の中で生み出された造語である。『閥悦録』等の史料には「陣」「砦」、「ようかい（ようがい）」等の用語が用いられている。どれが厳密な意味で「陣城」に該当するかは検討の余地がある。
5 「千引砦」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15　1999　総社市教育委員会他
6 『史跡備中松山城跡　保存管理計画策定報告書』 1992　高梁市教育委員会
7 「史跡備中松山城跡　大手門跡・二の平櫓跡発掘調査報告書」『高梁市埋蔵文化財発掘調査報告』第 3 集　2014　高梁市教育委員会他
8 尾崎　聡 「備中高松城前哨戦における秀吉の陣城鍛冶屋山城―伝承と軍記録と遺構（総石垣造りの主郭・大型石材を利用した主郭櫓台・石垣造りの井戸曲輪状遺構）―」『戦乱の空間』第２号　2003　戦乱の空間委員会編
9 畑　和良 「備中南山城の縄張りとその成立背景」『倉敷の歴史』第 29 号　2018
10 尾崎　聡 「毛利氏によって総石垣化された宇喜多領境目の城－備中鬼ノ身城の例－」『戦乱の空間』第 5 号　2006　戦乱の空間編集会
11 「鬼ノ身城跡」『続 織豊期城郭瓦研究の新視点　付　織豊期城郭資料集成 4』 2018　織豊期城郭研究会
12 小山好文 「備中南山城についての一考察」『中世城郭研究』14 号　2000　中世城郭研究会、註 10 文献
13 畑　和良 「細川道董の野州家相続とその背景」『倉敷の歴史』第 22 号　2012
14 註 10 文献
15 a『備中高松城跡公園発掘調査概報　1976　岡山市教育委員会
b『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』 2004　岡山市教育委員会
16 『備中高松城水攻め築堤跡』 2008　岡山市教育委員会
17 島崎東は主郭周囲に見られる「浅い溝状の遺構」を、発掘調査の成果から南北朝期の山城とされる城峪城において検出されている溝状遺構（報告書では横堀とされる）類似性から、南北朝期のものと判断している。一方、松岡進は「比較的小規模な作業で」築かれた「臨時的城郭」とした上で、比高、歴史史料との整合性から、現在見られる遺構は備中高松城の戦いに際して「毛利方の本陣が据えられた」天正 10 年を前後する時期のものとする。
a 島崎　東 「岡山県下における中世前半期の城郭」『岡山県立博物館研究報告』33　2013　岡山県立博物館
b 松岡　進 「備中国府域をめぐる城郭群―空間論からのアプローチ―」『中世城郭研究』第 25 号　中世城郭研究会
18 註 16b 文献
19 「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　1994　岡山県教育委員会
20 註 3 文献
a 畑　和良 「織田・毛利備中戦役と城館群」『愛城研報告』12　2008　愛知中世城郭研究会
b 畑　和良 「備前・備中境目城館と大名抗争―岡山市下足守の城館遺構をめぐって―」『中世城郭研究』第 24 号　2010　中世城郭研究会
c 乗岡　実 「備中高松城攻めの陣城群」『織豊城郭』第 13 号　織豊期城郭研究会　2013
d 高橋成計 「備前宇喜田氏の陣城縄張りの考察―陣城縄張りの変遷―」『中世城郭研究』第 28 号　中世城郭研究会　2014
21 註 10、12 文献
22 註 11 ｂ文献
23 註 20 ｂ文献
24 「導入系施設」、「遮断系施設」の用語については、松岡進の以下の文献による。
松岡　進 「第７章　戦国・織豊期における築城技術」『戦国期城館群の景観』 2002　校倉書房
25 こうした防御系施設による城館の類型化、編年については、すでに山本浩之、池田　誠による先駆的な研究がある。
山本浩之 「防御パーツの組み合わせによる城郭遺構の分類（上）―南伊勢の諸城を中心として―」『中世城郭研究』第 16 号　2002
山本浩之 「防御パーツの組み合わせによる城郭遺構の分類（下）―南伊勢の諸城を中心として―」『中世城郭研究』第 16 号　2003
池田　誠 「城郭における防御パーツ類構築編年の研究」『中世城郭研究』第 18 号　2004　中世城郭研究会
26 この種の堀切について、尾崎聡が鍛冶山城の縄張りを記述する中で「馬蹄形」ないしは「U字形」を呈する特徴をあげる。畑和良は317茶臼山城にみられる同種の遺構について「両脇竪堀」と呼び、尾根筋への遮断性を強めたものと評価している。
註８、10 文献
27 畝状空堀群についてはその名称の妥当性を含めて長い研究史があるが、現状、横堀との組み合わせで新旧を分けた千田嘉博の研究が、一つの定点となっている。その後、高屋茂男により、畝状空堀群に対して、上部に位置する曲輪からの横矢がけという、新たな視点が提出された。近年、高田徹は畝状空堀群の周辺遺構や地形に注目することで、機能や役割が推し量れるとの見通しを出している。
千田嘉博 「中世城郭から近世城郭へ―山城縄張りの研究から―」『月刊文化財』第 305 号　1989　第一法規出版
高屋茂男 「戦国城館における斜面防御の一形態―畝状空堀群と横矢の可能性から―」『新視点　中世城郭論集』 2002　新人物往来社
髙田　徹 「畝状空堀群の諸問題―その現状と課題―」『中世城郭研究』第 31 号　2017　中世城郭研究会
28 中井　均 「笠置城」『図説　中世城郭辞典』第２巻　1987　新人物往来社
29 角田　誠 「近畿地方における南北朝期の山城」『中世城郭研究論集』 1991　新人物往来社
30 「田治部氏屋敷跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67　1988　岡山県教育委員会
31 『吉備前鑑』の批判的検証から、天正 16 年に開始されたとする異説もある。
森　俊弘 「岡山城とその城下町の形成過程」『岡山地方史研究』118　2009　岡山地方史研究会
32 中井　均 「織豊系城郭の画期―礎石建物・瓦・石垣の出現―」『中世城郭研究論集』 1990　新人物往来社
33 乗岡　実 「宇喜多氏城郭群の瓦と石垣―岡山城の支城群の諸段階―」『吉備地方文化研究』第 18 号　2008
34 この種の遮断性の低い大型連隠式山城について、毛利氏が石見国の小笠原氏を攻略する際に用いた会下山を挙げることができる。
寺井　毅 「石見の攻城戦について―毛利軍の陣城を中心にして―」『中世城郭研究』第 20 号　2006　中世城郭研究

第２節　備中国の政治・軍事動向と城館

本稿では、備中国の平安末期から近世初期（12 世紀後半～ 17 世紀前半）の政治・軍事史をまとめた。本巻掲載の文献史料一覧表に依拠した記述には史料番号（参考史料は「参 1」と表記）を、それ以外の史料・先行研究（文末に記載）に基づく記述には注記を施した。

（平安後期～鎌倉期の備中国）　備中国は平氏との結びつきが強い領域で、同国を本拠とする妹尾兼康は平氏政権の軍事的基盤の一翼をなし、平清盛から大和国検非所に任じられるほど重用されていた（平家物語）。寿永二（1183）年十月、平氏追討のため木曾義仲が山陽道へ進出した際、平氏に味方する兼康は備前・備中両国の境目に位置する「篠のせまり」「福輪寺阡」および「板蔵城」で源氏軍を迎え撃ち（参２・3）、討死を遂げた。勝利した義仲軍は、瀬戸内海を東上中の平氏水軍を備中国水島にて迎え撃とうとしたが、同年閏十月平知盛率いる平氏水軍に翻弄され大敗を喫している（参 1）。

元暦元（1184）年、源義経・範頼に命じて摂津国一ノ谷で平氏軍を破った源頼朝は、同年のうちに土肥実平を備前・備中・備後国の惣追捕使に任じた（伊藤 2010）。この惣追捕使と呼ばれる職掌が後の守護職の淵源と考えられており、実平は平氏に追放されていた備中国衙の在庁官人を本務に復帰させ、彼らを指揮して国務を執った（同）。その後、文治元（1185）年三月の平氏政権滅亡、承久の乱（1221 年）における後鳥羽上皇方敗北を受け、平氏および京方の強い影響下にあった備前・備中両国では多くの武士が鎌倉幕府によって所領を没収される。それらの地には勲功の賞として鎌倉幕府から地頭職を付与された御家人が入部するが、その多くは関東を本貫地とする武士であった。

そのうち早くから備中国周辺での活動を確認できるのが、武蔵七党の一流児玉党に出自をもつ庄氏である。承久の乱直後の貞応元（1222）年、備前・備中両国が幕府知行国となった関係で、庄四郎が備前国和気郡・赤坂郡の検注使に任じられ両郡の土地調査と報告を課せられているのが、確実な史料における庄氏の当地方での初見となる（「西家文書」貞応元年七月備前国司庁宣案／山口県史史料編中世 4）。後年の系譜は、源氏軍に従って一ノ谷合戦で奮戦し平重衡を生け捕った庄四郎高家が備中国で勲功の賞を与えられ来住したとするが、庄四郎・五郎が承久の乱で軍忠し北条泰時に褒賞されたことを示すとみられる「西家文書」（承久元年ヵ）後十月二十一日某書状案（山口県史史料編中世 4）も残ることから、備中国での地頭職拝領の直接の契機は承久の乱であった可能性も考えたい。庄氏の備中国における本領は草壁庄で嘉元三（1305）年には庄内東方に相伝の「地頭屋敷」を構えていた（2、岡山県 1990）。また、下野国那須庄を本貫とする那須氏は、屋島合戦の「扇の的」説話で著名な那須与一を輩出した武家だが、嫡流の那須肥前守家（資村）の三男に比定できる肥前三郎資泰が建長三（1351）年備中国後月郡頂見寺に梵鐘を寄進している。この年以前に備中国荏原郷地頭職を那須肥前守家が拝受し、これを分与された庶子家の那須資泰が入部した可能性が考えられる（畑 2009a）。その他、家名と後年の家伝から鎌倉期の西遷御家人と考えられる氏族に、三村（苗字の地は常陸国三村郷、本領は信濃国洗馬庄）・赤木（信濃国赤木郷が苗字の地。岡山県 1990）・伊達氏などがいる。一方、鎌倉期の備中国守護については今日まで史料がみつかっておらず、北条時宗の時代に北条氏嫡流家（得宗）の分国化し、長崎時綱が守護代を務めたことが知られているのみである（伊藤 2010）。

（南北朝内乱と備中国人）　元弘元（1331）年、鎌倉幕府転覆を画策する後醍醐天皇を制圧するため、幕府は大軍をもって後醍醐天皇の籠る笠置山の城を攻撃した。備中の御家人陶山・小宮山氏も幕府軍

に加わって出動し、城郭に火を放ち笠置山陥落に貢献する。敗北した後醍醐天皇は隠岐島へ流刑されるが、元弘三（1333）年閏二月配所を脱出し伯耆国船上山へ遷幸、これをみた備中国の新見・成合・那須・三村・小坂・河村・庄・真壁氏らは船上山に馳せ参じ、後醍醐天皇に味方した（岡山県 1990）。同年四月、後醍醐天皇から合戦で勲功があれば恩賞を与えるとの綸旨を受けた藤原貞資（「長府毛利家所蔵文書」（元弘三年）四月十三日後醍醐天皇綸旨／南北朝遺文中国四国編 1）は倒幕軍に参陣した庄氏とみられる。だが、一族の庄左衛門四郎は陶山次郎・真壁三郎らと幕府方に留まり、六波羅探題軍の将として倒幕軍と交戦、近江国番場宿で自害した（岡山県 1990）。間もなく鎌倉幕府も滅びる。

翌年、後醍醐天皇の親政下に建武政権が発足するが、この時誰が備中国守護に任命されたのか判明していない。建武政権の施政は倒幕に寄与した武士に受け入れられず、建武二（1335）年十一月足利尊氏は後醍醐天皇に反旗を翻し、讃岐国へ重臣細川定禅を送り込み、周辺諸国の武士を糾合せんとした。定禅に呼応して足利方についた備前国の旧守護家佐々木一族は、備中国に攻め入り福山城を占拠、後醍醐方の備中国衙目代の軍勢を敗走させた（参 4）。これをみた備中国の小坂・河村・庄・真壁・陶山・成合・那須・市川氏らも建武政権から離反し福山城の足利方に合流する（岡山県 1990）。

ところが、足利尊氏は翌建武三（1336）年二月、後醍醐方の北畠顕家との合戦で大敗を喫し、遠く九州へと退避を余儀なくされる。足利軍を追撃する後醍醐天皇方は、庄八郎入道に対し一族に呼び掛けて備中国内の朝敵を誅伐すれば恩賞を与える旨を伝えて足利方からの離反を誘った（小川 2001）。対する足利尊氏は後醍醐方の追撃を食い止めるべく、一門出身の宿老石橋和義を備前国三石城へ配して備前・備中の足利方諸将の指揮を委ねた（岡山県 1990）。和義はこの権限に基づき、建武三年二月足利方に参じた新見貞直を賞し、彼を新見庄地頭職に復することを約束している（「竹田家文書」建武三年二月二十七日石橋和義奉書／岡山県史編年史料）。新見氏は庄・真壁・陶山・成合・多治部氏らと共に、下道郡妹山に陣取って山陽道を封鎖、後醍醐方軍勢の西進に抗する動きをみせており（岡山県 1990）、和義による新見庄地頭職返還の保証はこうした行動に報いたものと言える。

同年四月ごろ、後醍醐天皇方の新田義貞は石橋和義を三石城に囲む一方、大井田氏経を将とする一軍を備中国福山城に進駐させ（参 5）、妹山に陣取る足利方備中国人と対峙した。間もなく、九州で態勢を立て直した足利尊氏・直義兄弟は上洛軍を起こし、陸路を進んだ直義は妹山の味方軍勢と合流して五月十七日には高梁川西岸まで進出する。翌日、直義率いる大軍は福山城へ攻めかかり、わずか一日の激戦で大井田氏経を破って福山城を陥落させた（岡山県 1990、5 ～ 13、参 6 ～ 7）。この後、足利尊氏は畿内へと進撃して後醍醐天皇を追い、その年のうちに室町幕府を開くことになる。

室町幕府体制下における備中国守護の初見は暦応元（1338）年九月、この年までに足利尊氏の執事高師直の一門衆南宗継（遠江権守）が守護職に任命されている（「西家文書」暦応二年五月十一日足利直義裁許状案／山口県史史料編中世 4）。これに先立つ建武四～五年には、庄貞資・真壁玄覚が幕命の現地執行・復命を担当しているが（「萩藩譜録」建武五年二月十日藤原貞資請文写／南北朝遺文中国四国編 1、「西家文書」暦応二年五月十一日足利直義裁許状案／山口県史史料編中世 4）、正規の守護が赴任した後も彼ら備中国人は幕府―守護系列による備中国支配を補完した。

やがて足利尊氏・高師直と足利直義・直冬が対立し、観応の擾乱と呼ばれる内乱が発生する。観応二（1351）年二月には直義派によって高師直が誅殺され、高一族だった備中国守護南宗継も没落した（佐藤 1988）。南氏が去った備中国では足利直義・直冬派が勢いを増し、山陽道を押さえる高越

城を拠点に尊氏方の庄四郎左衛門らを圧迫したため、観応二年十月尊氏派の備後国守護岩松頼宥が備中国へ出動し高越城を攻撃している（16 ～ 17、岡山県 1990）。翌年（1352）南氏に代わる備中国守護として同国有漢保を本拠とする秋庭備中守が登用されたが任期は短く、再び高一族の高師秀が守護に就いたとされる（佐藤 1988）。これと同時に、延文元（1356）年七月細川頼之が「中国管領」に任じられ、山陽道諸将を指揮下において中国路の直冬党を押さえることになった（小川 1980）。ところが、康安二（1362）年頼之が真壁孫三郎・陶山三郎ら備中勢を率いて讃岐国へ渡海した（太平記）隙を衝き、直冬・南朝方の山名時氏が多治部師景（備中守）を味方につけ備中国に侵攻する。師秀は備中松山城に籠城してこれに抗するが、前守護秋庭一族の裏切りに遭い備前国徳倉城へと脱出した（参 8、岡山県 1990）。この敗戦により高氏は備中国守護職から離職させられ、山名軍侵攻に抗して手柄のあった備後国の有力国人宮道仙が守護に任命された（佐藤 1988）。この宮氏による備中国統治も二年弱と短く、貞治四（1365）年足利一門の渋川義行が鎮西探題と備中・備後守護職を兼ねることとなり、ようやく目まぐるしい守護交替劇が落ち着き、以後 28 年間渋川氏が備中国を管掌した（佐藤 1988）。もっとも、細川頼之が中国管領として備中諸将を指揮した際の縁故から庄氏は細川氏との関係を深め、康暦元（1379）年頼之が幕閣有力者内の政争によって失脚し幕府から討伐対象とされた際、庄四郎入道は頼之に味方して自身の居城に籠り、山名時義の差し向けた討伐軍と戦っている（18 ～ 19）。こうした忠節により庄氏は細川京兆家（細川一族の宗家）の有力内衆（重臣）の列に加えられ、明徳三（1392）年ごろの当主頼資（小川 1980）、頼資子息とみられる満資（「康富記紙背文書」応永二十五年八月庄満資言上状案／大日本史料 7 － 33）と歴世にわたり京兆家当主を支えた。

（細川氏の備中国支配と守護所・政所） 明徳元（1390）年、室町幕府三代将軍足利義満が山名時熙の討伐に乗り出した際、細川頼之・頼有兄弟は四国より備中国へ渡海し、下道郡「二万山」で山名軍を破り近傍の城を攻略する（20、細川家譜、小川 1980）。備中国へ進駐した頼之に対し、幕府は備中国の支配権の一部（分郡守護職か）を与え守護渋川満頼の分国支配を援護させた（佐藤 1988）。頼之が得た備中国に対する権限はその弟細川満之（伊予国新居郡主）に継承され、渋川・細川氏による備中国の分割支配が行われたが、明徳四（1393）年室町幕府は細川満之を備中一国の守護に任命（同）、以後満之の子孫が守護職を継承する体制が固まった。応永十二（1405）年の満之没後、二代目守護となった細川頼重は、山陽道と高梁川が交わる水陸交通の中継地川辺、高梁川中流の要地備中松山城を擁する巨瀬庄を新たに掌握し、備前松田氏に代わって備中国一宮吉備津神社の社務職に就任、一宮の保持する一国規模の影響力を取り込んだ（藤井 1971・小川 2001）。満之系の守護細川氏当主は頼重以降代々「上総介」を最終官途とするので、以下同家を「総州家」と呼ぶことにする。

一方、以前から備中国と関係の深かった細川京兆家は、前述した庄一族の登用を皮切りに三村・河西・那須・新見・安部・多気・山田氏など多数の国人と主従関係を結び（末柄 1992）、同国に対する影響力を増大させていた。南北朝期まで根強い政治力を維持していた備中国衙も京兆家に掌握され、1 万 6 千貫といわれる国衙領の支配権と備中国惣社宮の造営・祭祀権は国衙目代として送り込まれた京兆家重臣安富氏の手に握られた（22、小川 2001）。応永十四（1407）年には浅口郡も守護の管轄から切り離され、京兆家に最も近い親類細川満国が郡主となってこれを知行、以後満国の末裔細川野州家は同地を基盤に細川京兆家の補佐役として力を振るった（末柄 1992）。このように備中国は名義上総州家が守護とは言うものの、重要な権益や国内領主の指揮権が京兆家一門によって分掌されて

いたため、守護が一元的に国内支配を遂行することは難しく、守護代の人選もこうした背景を色濃く反映したものとなった。すなわち、備中守護代は当初、石川・庄氏（小川 2001）および高橋之光（駿河入道）が務めたが（「南禅寺文書」応永二十六年十二月二十日細川頼重書下／矢掛町史史料編、「吉備津神社文書」応永八年正月十一日吉備津宮法楽一万句連歌／大日本史料 7‐5）、応永三十（1423）年以降は石川満経（左衛門尉。花押の一致する石川道寿と同一人）・庄永充（甲斐入道）が守護代職・一宮社務代職を兼務する両守護代制が敷かれた（藤井 1971・小川 2001）。このうち石川氏は、細川満之が伊予国新居郡主だった頃から総州家に仕える譜代の重臣で（末柄 1992）、先祖伝来の所領も伊予国にあったが（「保国寺文書」永享六年九月二十二日石川道寿《満経》寄進状／清音村史史料編）、満之の守護就任に伴って備中国へ入部した領主である。もう一方の庄氏は、細川京兆家に出仕する鎌倉期以来の在地有力者庄一族の分家（甲斐守家）で、京兆家は自らの重臣庄氏一門を守護代に据えることで、守護総州家の独自的支配権確立を抑え自らの統制下に置こうとしたとされている（末柄 1992）。

細川京兆家が備中国の支配を守護細川総州家に一任せず、直接的掌握に意を注いだのは、同国が細川氏にとって山陽道唯一の分国であり、山名・大内・赤松氏らに対する軍事的牽制の上で重要地点だったためらしい（末柄 1992）。嘉吉元（1441）年、六代将軍足利義教を謀殺した播備作三ヶ国の守護赤松満祐は、備中国井原庄にいた足利直冬の孫・義尊を擁立し、幕府の追討軍に対抗した（岡山県 1991）。この動きを察した守護細川氏久（頼重の子）は義尊の弟義将を斬り（同）、守護代石川満経・庄甲斐守率いる追討軍（「安養寺所蔵文書」嘉吉元年九月細川氏宿老連署禁制写／黄薇古簡集 12。連署者「沙弥」は花押から石川満経と判定可能）を備前国へ出陣させ、赤松勢の掃討に努めた（備前編参照）。細川一門の山陽道の押さえ役として、氏久指揮下の備中勢は本来の使命を果たしたと言えよう。

この時代の備中国守護所は東寺百合文書（22）や地名の分析から「符中」こと総社市中心部に存在したとされている（小川 2001）。また、吉備津宮の門前都市宮内、山陽道と高梁川の交差地点川辺には守護直轄の倉が置かれ、宮内～川辺をつなぐ山陽道を遮る餅坂の直上に幸山城が築かれていた。この幸山城は、その城名の読み「こうざん」から国府山＝符中領域の中核をなす軍事拠点と評価されている（同）。これに加え、高梁川右岸の華光寺（総社市山田）は今川泰徳のものと伝えられる位牌を祀っているが（備中誌）、その位牌銘は細川氏久の法名と完全一致する。華光寺は「細川総州頼重公」の建立伝承をもつ総社市水内の華蔵院（吉備郡史巻下）と共に総州家菩提寺ということになり、以上の守護所・倉・城郭・菩提寺を包含する範囲を備中守護家の本拠領域として捉えることができる。

寛正四（1463）年、東寺領新見庄領家方の代官祐清が地頭方の百姓に殺害され、その報復に領家方の荘官・百姓が地頭方政所屋敷を襲った。事件の舞台となった政所屋敷と隣接地にある政所管理者の百姓家の指図から、政所のみが四方を堀で囲繞する防御構造を有していたことが判明している（福島 2006）。武士の拠点とは別に、様々なレベルの暴力に対応する目的で荘郷統治の核となる公的施設が地域住民によって武装化され方形館の一つのルーツをなしていることが理解でき、興味深い。

（備中大合戦） 長禄四（1460）年の細川氏久没後守護となった細川勝久は、従前どおり石川・庄の両守護代に分国統治を委ねた。文明二（1470）年には庄季法師なる少年が呰部郷代官職を継ぎ、石川源三とともに両守護代としての活動を開始する（「山科家礼記」文明二年八月二十四日条、「法泉寺文書」八月六日細川勝久書下／岡山県古文書集 3）。翌年、呰部郷代官として現れる庄又六勝資（実名は「山科家礼記」延徳三年七月二十九日条紙背文書／宮内庁書陵部蔵による）は季法師の元服後の

姿とみられる。勝資は守護代として勝久の分国支配を助けつつ、呰部郷を拠点に備中北部に自身の版図を形成する。一方で勝久は、高橋光秀（兵庫助）・杉三郎兵衛尉・徳倉氏・竹井氏（「蔭涼軒日録」文明十八年六月二十一日条、「石清水文書」文明三年霜月十五日高橋光秀請文／大日本古文書 4 ‐ 1）ら備中国の中小国人を登用し地域基盤の裏付けをもつ近臣集団を形成、当主権限の強化を図った。

応仁・文明の乱（1467 年）が勃発すると、在京する勝久は東軍の総大将となった京兆家細川勝元の指揮下に入り、洛中洛外の合戦で活躍する。この間、隣接する備前国にいた西軍山名氏が東軍赤松氏によって早々に駆逐されたためか、備中国に対して西軍が大規模な攻勢をかけた形跡は今のところ確認できない。こうした状況下、京兆家細川勝元・政元父子に直属する庄元資（伊豆守）は、京兆家の山陽道方面担当者として備前松田氏ら備前･備中両国の京兆家家臣団と共に出動し、文明三（1471）年の備後国柏村における宮氏との合戦、同七年（1475）の沼田小早川氏居城安芸国高山城救援に活躍するなど、備後・安芸方面の西軍派掃討に力を振るった（谷重 1992・末柄 1992）。また、延徳二（1490）年ごろ元資は、安芸国寺原庄の安堵を求める吉川経基の歎願を細川政元の宿老に取り次ぐことを約しており（「吉川家文書」三月九日庄元資書状／大日本古文書 9 ‐ 1）、芸備国衆と細川京兆家とを結びつける重要な位置を占めていた。こうした立場を背景に庄元資は芸備国衆と広範に提携し、吉川経基との間で養子配偶の相談も行われている（「吉川家文書」三月十日是経書状／大日本古文書 9 ‐ 1）。

文明十五（1483）年、備前松田元就が山名政豊と結んで備前守護赤松氏に合戦を挑んだ際、幕府では備後国の山名軍が松田氏支援のため備前国へ出動するのを道中で阻むよう備中守護細川勝久に下命すべきことが議論された（「蜷川家文書」伺事条々注文／大日本古文書 21 ‐ 1）。ところが、庄元資は山名･松田連合軍に合流し赤松氏の備前福岡城を攻撃している（備前文明乱記／吉備群書集成 3）。細川勝久と備前松田氏は寛正五（1464）年から吉備津神社社務職をめぐって抗争し、文明八（1476）年九月には同社の権益を奪取するため備中国へ進出した松田軍と合戦を展開する（23）など敵対関係にあった（榎原 2000）。細川京兆家との主従関係を背景に山陽道諸将と手広く結びつき、守護細川総州家よりも盟友との関係を優先する庄氏の存在は、守護の統治から完全に逸脱したものだった。

やがて、細川勝久と庄氏の間に横たわる矛盾は頂点に達し、延徳三（1491）年十一月、庄元資は安芸毛利弘元ら芸備国衆、備前松田元就と連合し、守護細川総州家に対する反乱を引き起こす（備中大合戦）。庄氏らは守護方の軍勢を破って 500 余名を討死させ、川辺・宮内にある守護直轄の倉を略奪した。将軍足利義材の近江六角氏征伐に従軍中の細川勝久は備中国へ下向し、庄元資らに決戦を挑んだ。元資は京兆家重臣の上野元氏・香西五郎左衛門尉の助勢も受け、「城」（猿掛城か）を拠点に勝久軍を迎え撃つが、勝久は延徳四（1492）年三月の合戦で庄氏らを撃破する（24 ～ 25）。同年六月には和議が成立し抗争は一段落するが、上野・香西氏らの動きから反乱の影に総州家弱体化・備中国の直接掌握を謀る細川政元の策動を読み取った細川勝久は、庄氏ら備中国内の京兆家家臣団所領の没収を断行、京兆家と総州家は敵対することになった（末柄 1992 に拠りつつ史料を勘案し再構成）。

（備中守護家の交替と細川一族の内紛） 庄元資の反乱を鎮圧した細川勝久はそのまま在国して分国掌握に努めたが（末柄 1992）、明応三（1494）年前後に死去する。勝久には実子がなく、細川政元が「岩一殿」の幼名で呼ぶ年少者が後継者として現れる（「新熊野文書」八月五日細川政元書状案／岡山県史編年史料）。岩一丸は年齢や直後の状況から、阿波守護細川義春の子で永正年間の備中国守護として「不問物語」に名を残す細川之持の幼名と判断できる。勝久死没と入れ替わりに「備中守護」

の肩書で登場する細川駿河守（末柄 1992）は、幼少の岩一丸に代わり守護権を代行した人物であろう。之持のもとで国務を担ったのは、守護代上野子々法師および高橋久光（兵庫助）・杉直忠（三郎兵衛）・明石盛高（勘解由左衛門）・竹井直定（宗左衛門尉）らだが（「東寺百合文書」サ函 243 – 1、サ函 243 – 2、サ函 246）、高橋・杉・竹井らは細川勝久が近臣として取り立てた総州家の家臣である。政務担当者に連続性が認められる点は、備中国支配の実権が守護をかつぐことで「国方」と称する政治勢力を形成していた国人集団に握られつつあったことを示すが、一方で上野氏が守護代となっている点は注目される。之持は総州家以来の政治勢力を取り込んで政権基盤の安定を図りつつ、阿波守護家と主従関係にあった上野氏を守護代に据えることで自らの主導性を確保しようとしたのであろう。

細川之持と細川駿河守は、「総州」＝勝久の政元家臣団所領の押領政策を引き継ぎ、細川政元からの所領返還要求に応じなかったため、政元から「義絶」されていた（「新熊野文書」八月五日および十二月二十七日細川政元書状案／岡山県史編年史料）。このため、明応三（1494）年五月庄元資は所領奪還のため守護に再戦を挑むが、細川駿河守はこれを破り元資を国外へ追放している（末柄 1992）。政元は毛利弘元らに庄元資を支援するよう要請し、元資は政元の威光を後ろ盾に芸備石の国衆を糾合して備中国再帰を企てたが（同）、文亀二（1502）年に死去した（古野 2002）。翌年細川政元は細川之持の弟澄元を養子に迎えることで阿波・備中守護細川讃州家と講和するが、間もなく跡目争いによって暗殺され、細川澄元が京兆家当主となった。京兆家当主の実兄となった「阿州」こと細川之持は、永正四～五（1507 ～ 8）年にかけ幕府御料所・三社領を除く備中国中の荘園に対し年貢を兵糧として差し押さえる指令を出し、新見庄などの年貢を家臣団の兵糧料として配分するなど、在地掌握を強力に推進する（辰田 2009）。ところが、まもなく細川澄元は細川高国（浅口郡主細川野州家当主政春の嫡子）に敗れて没落し、備中守護細川之持も永正九（1512）年正月病死した（尊卑分脈）。

（永正・大永の内乱と有力国衆の登場） 細川澄元派を破って京兆家当主となった細川高国は、永正十（1513）年九月「備中国一宮法楽」和歌五百首を募っており（再昌草／桂宮本叢書 12）、守護細川之持が病死した直後に高国が備中国を影響下に収めたことが窺える。高国政権下における最初の備中国守護は、細川九郎次郎なる永正十年当時 17 歳の少年であった。ところが、九郎次郎は永正十二（1515）年十月になって自殺し、細川高国は即座に自らの父親細川政春を新守護に据えている（岡田 2010）。年若い九郎次郎が澄元・之持兄弟の支持母体だった備中国人の取り込みに失敗して没落し、急遽年功者の細川政春が備中国守護を継投したものと考えられる。その政春も永正十五年正月に病没するが、高国は従兄弟の細川国豊（治部少輔）を備中国守護に任じ、引き続き自派による備中国確保に努めた（畑 2012）。しかし、九郎次郎の変死を招来した政治的背景がきっかけとなったものか、永正十二年から備中国では「国方」として守護の名のもとに所領維持・拡大を目指す国人と、荘園領主や外部勢力と結合して現地支配を行う国人との争奪が同時多発的に発生し、内乱状態になる。

永正十二年八月「国方」に属する伊達遠江守が多治部氏と結び、唐松城を攻略して新見庄へと侵攻した。新見庄代官の新見国経は弟の三郎を失いつつ伊達・多治部勢の攻撃をしのぎ、同年十一月逆襲に転じて伊達遠江守の子を討ち唐松城を奪還している（27、32）。同十四（1517）年九月にも国経は、守護から新見庄を給付されたと称する三村与次（成羽を本拠とする国衆）・多治部氏の攻撃を受け、多大な犠牲を払いつつ「当城」に籠城して攻勢に耐えた（31、33、辰田 2009）。同年には「備中大合戦」で活躍した庄元資の後継者・元資（同名異人）も勢いを盛り返し、混乱に乗じて高梁・小田川

舟運と瀬戸内海航路をつなぐ経済的拠点西阿知を手中に収めている（古野 2002）。この年、高梁川中流の水内庄でも代官を務める守護の重臣高橋久光が同族光資との内紛によって没落し、現地の在地領主上田光実（水内光雲寺山城主）が水内庄を掌握（「石清水文書」永正十四年十二月七日高橋光資書状および大永二年六月二十八日上田光実請文／大日本古文書 4 ‐ 1）、鬼身城を本拠とする国衆に成長した。

こうした混乱の中、守護代上野子々法師の元服後の姿とみられる上野伊豆守は、大永五（1525）年備中松山城の東北にある幕府御料所中津井庄を代官として管轄し、美作国衆三浦貞国・多治部次郎による中津井庄侵攻を退けた（「図書寮文庫所蔵文書」書札之御案文／宮内庁書陵部所蔵）。同じころ、上田光実と結んだ上野伊豆守は、上田氏領水内庄へ乱入した三村氏の軍勢を撃退し、逆に三村氏の本拠地成羽を攻撃して勝利する（「石清水文書」十二月二日上田光実書状／大日本古文書 4 ‐ 1。花押・署名により発給者を訂正）など、錯乱の鎮圧に努めている。上野伊豆守は『西国太平記』が天文初年までの備中松山城主とする人物だが、史実でも松山を軸とする同心円状の活動状況がみられ、伝承どおり備中松山城を拠点に成羽・中津井・水内へと影響力を波及させていたものとみられる。

享禄四（1531）年細川高国が細川晴元に敗れて自害すると再び備中国に混乱が生じ、天文二（1533）年「当国事、二ツわかり候て、只今取相可為必定」という抗争に発展した（「東寺百合文書」ヤ函 215 ／岡山県史家わけ史料）。その渦中、高梁川中流域の実力者上野氏と河口地域を押さえる庄氏が決戦に及び、庄為資が上野伊豆守を自害させ備中松山城を落城させたという（西国太平記）。これ以降に松山城主として名を残す庄又六は通称から呰部庄氏（又六勝資の子孫）とみられ、為資が呰部庄氏を糾合し上野氏攻略を成功させた可能性がある。松山城を手中にした庄為資は高梁川・小田川の中流域から河口部に至る河川流通の骨格を掌握し、備中国内屈指の国衆に成長した。一方、細川総州家譜代家臣出身の石川通経（四郎左衛門尉・備中守）は、主家断絶の影響を受け伊予国新居郡にいた様子だが（「佐野家文書」十一月二十三日石川通経書状／岡山県古文書集 4）、足守川上流の立石城を本拠とする石川源三ら庶家を通じて備中国南部での基盤確保に努めた。石川氏も享禄三（1530）年以前に国内の内乱に巻き込まれるが、その時点で在地領主日幡･佐野氏らを立石籠城に参加させ、渋江･徳芳・福島・浜といった郷村に籠城への参集を呼び掛ける（44）など、都宇・窪屋郡における指導的立場を確立していた。その結果、天文二（1533）年までに石川幸久（左衛門尉）が幸山城を居城化して（35）細川総州家の権力基盤中枢部を取り込み、窪屋・都宇・賀陽郡南部を影響下におく国衆となった。

（尼子・大内氏の介入） 永正･大永の内乱を経ていくつかの国衆が頭角を表すころ、国外では尼子氏･周防大内氏が強大な広域権力に成長し、覇権を競っていた。敵対領主の介入を防ぎ所領を維持するための後ろ盾を求める備中国衆は、次第に尼子・大内両氏のいずれかに結び付いていく。備中国北部では永正の内乱をきっかけに新見国経が尼子経久と結び（33）、尼子軍の先兵として活動していた（辰田 2009）。こうした尼子氏の与同勢力を押さえるため、大永八（1528）年大内義隆に呼応した「備中衆」が備後国衆宮氏と協力し野部新城・八鳥城を攻略している（34、魚屋 2015）。この時の「備中衆」の具体像は未詳だが、備中国では庄・三村氏らが大内氏と結びついて活動していたことが知られている（畑 2010）。天文年間初頭までの備中国では、こうしたかたちで国衆が大内・尼子氏の要請に応じ作戦行動に参加することはあったが、大内・尼子氏が備中国に進出を試みた形跡はない。

ところが､天文八（1539）年七月､細川晴元打倒を狙う細川高国派の残党と気脈を通じた尼子詮久は､

自ら大軍を率いて備中国へと侵攻し、大内方の庄氏が立て籠もる備中松山城を包囲した（40）。高国派の支援勢力が山陽道に足がかりを築くことを恐れた細川晴元は、阿波守護細川持隆の軍勢を備中国へ渡海させ庄氏を助けて尼子軍に立ち向かったが、同年十月尼子軍に大敗する（畑 2012）。尼子軍の圧倒的な軍事力を前に、幸山城主石川家久ら多くの国衆が尼子氏に帰属するに至った。抵抗の術を失った庄為資はいったん国外へ逃亡するが、翌年尼子軍が毛利氏攻略のため安芸国へ転進した隙を衝いて備中国へ復帰し、石川家久父子を討ち果たすなど尼子方国衆の掃討に努めた（畑 2009b）。穴田郷の国人赤木蔵人も、このころ内藤隆時を取次として大内義隆に味方している（「会見郡平岡村赤永氏所蔵文書」九月十八日大内義隆書状／伯耆志 1）。こうした備中国衆の反攻を掣肘するため、尼子詮久は天文十（1541）年五月ごろ呰部に進出し同地の在地領主植木氏を攻撃した（41、森 2014）。

このころ、故細川高国の実家で浅口郡主を務める細川野州家は、当主不在のまま衰微していた。高国跡目として挙兵した細川氏綱は、尼子氏との軍事連携によって備中国における高国系細川氏の基盤回復を実現すべく、伊予国にあった細川通董を浅口郡へ送り込み野州家を再興させた（畑 2012）。通董は備後神辺城の山名理興らと結んで備南地域に尼子方勢力を形成し、大内氏の進出に抗した。尼子軍も通董らを後援すべく、天文十六（1547）年冬に備中国北部へ侵攻している（同）。しかし、これ以降尼子軍の動きは停滞し、天文十八（1549）年大内義隆は孤立した備後神辺城を攻略して山名氏を滅亡させ、浅口郡への進出を開始した（42）。単独での大内軍との対戦に限界をみた細川通董は、同年十二月ごろ大内方の毛利元就による調略に応じ大内義隆に帰服する（畑 2012・2019）。これによって、細川京兆家は室町期以来の山陽道の拠点備中国を完全に喪失することとなった。

（毛利氏の備中国進出と三村氏） 天文二十（1551）年、大内義隆が陶隆房の謀反によって横死し、その影響下にあった諸国が動揺するのを見計らった尼子晴久は、翌年備中国への武力介入を再開し、庄氏の備中松山城を圧迫する。大内氏の頽勢をみた庄為資は尼子方へ転向し、大内方に残留した三村家親・細川通董と敵対した（畑 2010）。備中国全域が尼子氏の影響下に屈することを憂慮した大内方の毛利元就は、三村・細川野州家を支援して尼子勢力の拡大を抑止すべく天文二十一（1552）年九月に自ら出陣して庄氏の本拠猿掛城に迫ったが、庄為資の激しい抵抗に遭い手痛い敗北を喫する（同、49、参 9 ～ 10）。その後も毛利氏は細川通董を後援して杉山城などに進駐する庄氏勢力掃討を実施すると共に（51、畑 2019）、弘治二（1556）年には足守川流域へ派兵して石川久忠（源三）が籠城する忍山城を攻略した（52、畑 2009b）。この間、毛利氏は大内氏の影響を脱して自立し、厳島合戦を経て弘治三年（1557）大内義長を滅ぼし、防長芸備四ヶ国を支配する戦国大名に成長する。そして、永禄二（1559）年三月、毛利元就・隆元父子は三村家親の軍勢を後押しして備中松山城を攻撃し、城主庄又六父子を自害に追い込む（55、100、参 11、畑 2019）。追い詰められた庄為資から講和を求められた三村家親は、講和に応じる代わりに自らの長男元資に庄氏の家督と猿掛城を継承させ、庄氏を自身の系列に組み込んだ（畑 2010）。ほどなく家親は本拠地を成羽から備中松山城に移し（58 など）、庄氏の勢力基盤の枢要であった河川流通の骨格部を握る。細川通董も庄氏の影響力を排除して浅口郡の一円支配権を回復し、鴨山城へ本拠を移した（畑 2019）。また永禄六（1563）年、阿波三好氏の攻撃を受け逃亡した讃岐国衆香川之景を「村上右近大夫」隆重が保護し備中笠岡の神島に匿うという出来事があった（畑 2016）。この事件から、毛利氏の備中経略に伴い能島村上水軍の重鎮村上隆重が備中沿海部に進出、永禄初年までに笠岡城を本拠としたことが判明する。こうして永禄二年ごろ、毛利元就は味方国衆を後援して陸海の要地を押さえ、備中国平定を成し遂げたのである。

毛利氏の衛星権力として影響力を増大させた三村家親は、幸山城主石川久智と婚姻によって提携し（参 27）、三男元範を新見楪城に送り込んで新見庄を掌握（「壬生家文書」永禄十一年十二月十九日三村元親書状／成羽町史史料編）、四男実親を鬼身城主上田氏の養子に入れ上田氏当主の座につける（参 14・参 27）など、血縁を駆使して有力国衆を自らの系列へ組み入れていった。毛利元就は備中国の親毛利派勢力の核として三村氏の成長を支援しつつ、取次者三村親成をを介して連絡・統制を行い、美作・伯耆方面の尼子派勢力掃討に動員した。ところが、永禄六（1563）年備前浦上宗景が毛利氏から離反し、これに呼応した庄氏の残党が蜂起して、伯耆国在陣中の三村氏系国衆領を襲った。石川領では留守居の中島新左衛門尉が奮戦して庄氏残党を退けたが（57、参 13）、連島・児島での反乱分子の蠢動は収まらず、同年閏十二月三村家親は山陰から帰国し村上水軍と合同して反乱鎮圧に努めている。これをきっかけに三村氏系備中衆と備前浦上氏との関係は急速に悪化、両勢力は備前・美作各地で武力衝突を繰り拡げ、その渦中の永禄九（1566）年三村家親は美作国の陣営で浦上方の有力武将宇喜多直家によって暗殺された。家親の跡目は次男の三村元親が継承するが、三村氏系列の備中衆の動揺は大きく、同年閏八月には幸山城主石川氏の配下生石治家（生石城主）が宇喜多直家に服属している（「柏原文書」（永禄九年）閏八月十日宇喜多直家書状／柏原及也『鴨重兵衛と鴨庄』）。こうした状況を懸念した毛利氏は、永禄十（1567）年三月宇喜多直家に使者を派遣し、浦上氏と三村元親・庄元資との和睦仲介を試みたが不成立に終わった（「譜録　渡辺三郎右衛門直所持文書」（永禄十年）三月二十四日小早川隆景書状写／山口県文書館所蔵）。三村氏系備中衆は金光要害・龍口城を拠点に備前国西部へ勢力を伸ばしていたが、同年八月前後には浦上宗景の指令をうけた宇喜多軍によってこれらの城も攻略され、その勢力は大きく後退させられた（本節、備前編も参照）。

（毛利氏包囲網と備中争奪戦）　永禄十二（1569）年、備前浦上宗景は豊後大友宗麟の呼びかけに応じ、尼子再興軍などと提携して毛利氏包囲網を形成、毛利氏への敵対行動を本格化させた（森脇 2016）。このころ毛利軍主力は筑前国に遠征していたが、その隙を衝いて備中国吉井の藤井皓玄が毛利氏包囲網に味方して蜂起、備後神辺城を攻略する。驚いた毛利氏は備後国衆楢崎豊景・細川通董に命じて神辺城を奪還させ、高屋城に軍勢を入れて藤井氏の動きを封じ、これを討滅した（63、参 18）。翌元亀元（1570）年八月には浦上・宇喜多軍が備中石川領へと侵攻し（森 2006）、日幡城・撫川城・松島城などを降伏させ（参 15 ～ 17、23）、石川久式の本拠幸山城へ迫った。翌年以降の戦況から、この時浦上・宇喜多軍が備中国北部へも進出し、塩城山城主多治部景忠を味方につけ四畝山城・佐井田城を攻略したことが窺える。備前勢は佐井田城を旧松山城主庄又六の残党に守らせて（森 2014）三村元親の本拠備中松山城を東北方向から脅かし、同年冬までに阿波三好氏と結んで備前児島に進出したため（備前編参照）、三方に敵を受けた毛利方は難しい用兵を迫られることになる。

元亀二（1571）年正月から五月にかけ毛利方の三村元親・庄元資・細川通董は、本太城などの敵勢を逐い備前児島の維持に努めた（備前編参照）。備中衆の児島在陣の隙を衝き、浦上軍が幸山城を衝く構えをみせるが（68）、やがて毛利元就の甥敷名元範を将とする備後勢が西阿知へ到着し（69）、備前児島・備中南部の危機は回避される。戦局好転を受け毛利勢は備中北部に転じて塩城山城への調略を進め（70 ～ 71）、三村元親も同年九月佐井田城を包囲攻撃するが、同城救援に現れた浦上宗景・宇喜多直家・伊賀久隆を中核とする備前・美作の大軍に大敗し、実兄庄元資を討ち取られた（73 ～ 81、参 19 ～ 22、森 2014）。この直後に毛利軍の反攻が本格化し、同年十一月には小早川隆景・三村元親が鳥羽城を攻略、続いて松島城を攻城の末に開城させ（82 ～ 84、参 23、「東寺百合文書」

え函 137 ／東寺百合文書ＷＥＢ）、翌年六月には石川久式も生石城などの奪還を進めた（90、光成 2008）。浦上・宇喜多軍は松島城合戦直後の「小城」防衛戦で勝利するものの（85、86）、元亀三（1572）年九月にはその前線を蛙鼻・日幡・鴨城付近まで後退させた（92、森 2006）。形勢逆転を憂慮した宇喜多直家は将軍足利義昭と連携して「備芸和睦」の工作に努め（同）、同年十一月毛利氏と浦上・宇喜多氏は講和した。講和にあたって浦上・宇喜多氏は佐井田城・四畝山城など備中国で略取した諸城を毛利氏に明け渡すことになり、毛利氏は検使を遣わしてこれらの城を受け取っている（93、95）。

（備中兵乱と三村氏滅亡） 天正二（1574）年、織田信長と結んだ備前浦上宗景に反発し宇喜多直家が挙兵すると、宿敵浦上氏を討つ好機とみた毛利輝元は宇喜多氏と結んだ。浦上宗景・三浦貞広はこの動きに対抗するため大友宗麟・三好長治と通謀して毛利氏包囲網の復活を画策する。こうした情勢下の同年閏十一月、毛利氏包囲網側から誘いを受けた備中松山城主三村元親は二十年来の盟主毛利氏と断交し、反旗を翻した（森脇 2016）。三村一門衆の多くや養子・婚姻政策によって三村氏系列に属していた国衆上田実親･石川久式らは元親の挙兵に同調したが､三村家中における対毛利氏取次だった成羽城主三村親成（参 28）および細川通董・多治部景治ら元々三村氏の系列外にあった奉公衆系の国衆らは毛利方に留まり（藤井 1971）、三村元親一党と対峙する情勢となった。

事態を深刻視した毛利輝元が小早川隆景と共に備中国へ出陣すると、庄勝資（呰部庄氏。戦国初期の勝資の子孫）が毛利軍に呼応して蜂起し、閏十一月十八日三村方の佐井田城を攻略した（備中兵乱記）。同日、猿掛城の守備隊も毛利軍への抵抗をあきらめ撤退する（同、102）。続いて十二月二十六日、手右京亮が守る国吉城に押し寄せた毛利軍は、籠城衆の助命嘆願を無視して総攻撃を加え、翌年（1575）正月元旦守備隊 306 人を全滅させ落城させた（105 ～ 108、参 27、山本 2007）。その後、毛利軍は三村元範の新見楪城・上田実親の鬼身城へと侵攻するが、いずれも毛利方への内通者出現によってあえなく落城・開城し、元範は討死、実親は自刃する（109、113、114）。石川久式も指揮下の在地領主を反毛利党として組織化できず幸山城への籠城を断念、備中松山城に入った（畑 2009b）。

同年三月十六日、小早川隆景率いる毛利軍は高梁盆地へ進出し、盆地の周囲に築かれていた広瀬固屋・大離固屋（離小屋）と呼ばれる臨戦用城郭での小戦闘を経て（114、115、備中兵乱記）、三村氏の本拠備中松山城を包囲した。毛利軍は力攻めを避けて寺山の古城に布陣し、籠城を支える将兵・農民の生活基盤を破壊すべく徹底的な麦薙ぎを敢行する（116、山本 2007、備中兵乱記）。あわせて、庄勝資に依頼して津々川流域の西方に付城を構築させ、三浦氏の高田城･浦上氏の天神山城への連絡･逃走経路を厳しく遮断した（(天正三年）五月十三日小早川隆景書状／平成九年新春展倭文亭文庫コレクション）。五月二十一日には城中から内通者が現れて籠城体制は崩壊し（118）、三村元親は城を脱出するが間もなく逃走を断念、切腹を遂げた（参 26、32、備中兵乱記）。石川久式も逃亡先で自刃し（参 27、32）、毛利氏の山陽道経略の一翼を担った三村氏本家とその系列下の国衆は滅亡した。

戦後、毛利輝元は三村氏与党の所領処分を行い、旧国衆領は居城とセットで毛利一族・重臣に分配された。猿掛城と庄氏領（猿掛領）は毛利元就の四男・元清に授与され、以後元清は「穂田元清」を名乗った（123 ～ 124、参 32、浅尾 1941）。幸山城と石川氏領は小早川隆景が領有し、隆景の配下国弘高実らと在地有力者清水宗治との協同統治によって治められることになった（参 32、畑 2009b）。国吉城と手三村氏領は口羽春良の所領とされ（132、参 32）、楪城には吉川元春の重臣今

田経高が入り天正六（1578）年に修築された（131、152）。その他、鬼身城と上田氏領が宍戸隆家に（145）、備中松山城が天野元明に委ねられたこと（206、260）が後の状況から判断できる。

（織田・毛利備中戦争） 備中兵乱の翌年、織田信長に追放された将軍足利義昭を毛利輝元が保護したことを契機に織田・毛利両氏の関係は破綻し、全面戦争が始まった。毛利氏は備前宇喜多直家を先鋒に対織田戦を展開したが、天正七（1579）年秋その直家が織田方へ寝返ったため、毛利・宇喜多氏の勢力境である備前・備中境目地域が織田・毛利両軍の対峙する最前線へと変貌した。開戦前夜、備中北部の竹庄・有漢・水田の在郷勢力は率先して宇喜多氏に与同し、至近地にある毛利氏の重要拠点備中松山城を脅かした。中でも有漢の地下人の行動は早く、四畝山城を修築して籠城する覚悟を決め、備前虎倉城を本拠とする有力国衆伊賀久隆に加勢を申し込む（山本 2010）が、当初久隆はこれに取り合わなかった（155）。備作三ヶ国の境界領域を勢力圏とし織田・毛利戦争の最前線に身を置く伊賀氏は、軽率な判断を避け彼我の優劣とタイミングを見極めたうえで旗幟を明らかにするつもりだったのだろう。間もなく伊賀氏も宇喜多氏の盟友として毛利氏との対戦を決意する。隣接地域の郷村挙げての離反にさらされた松山城は、天野元明・熊谷就真らにより堅固に守られていたが糧食と兵員が乏しく（159）、憤慨した毛利輝元は敵対する郷庄を武力制圧するよう元明らに命じる（山本 1994b）と共に、就真の提案で「中とをり」に城を築き郷村の動きを管制する計画を練った（159 ～ 160）。

宇喜多直家は同年九月十七日備中南部へと侵攻し、足守川上流域の鍛冶屋山に前線拠点を設け延原内蔵丞を配置した（山本 1994b・畑 2008）。また、鍛冶屋山城への兵站ルート維持のため忍山城を奪取し宇喜多信濃守・岡勝助に守らせた（「御答書」／畑 2009c）。こうして足守地域を押さえた直家は、備中高松城に対する向城を構築して清水宗治を圧迫する。宇喜多軍侵攻の報せを受けた毛利輝元は近習部隊を発遣し、九月二十五日に向城をめぐって宇喜多軍と交戦に及ぶ（山本 1994b）。開戦を受け、十月十二日ごろ輝元は笠岡城に宿営中の小早川隆景と協議し、「境目在番」の体制を決定した（166）。備中南部では、鍛冶屋山城への付城として宮路山城を築くと共に、冠山の古城を復旧して林氏と松田孫次郎を入れ、宇喜多勢の行動を抑止した。また、鴨城（桂広繁・上山元忠・生石治家）・日幡城（上原元将）・松島城（梨羽景運）・庭瀬城（桂景信・井上就正）・岩山城（湯浅将宗・長井就安。216、279）など備前・備中国境に接する諸城へ在番衆を配して宇喜多軍侵攻に備えた（「御答書」／畑 2009c）。備中北部では佐井田城を整備して在番衆を多数配備することになり、十一月十日熊谷就真が「かさの丸」＝主郭守備に就いた（183 など）。全体の戦略も描かれ、小早川隆景が水軍を庭瀬沖に展開して宇喜多軍を岡山城に釘付けにし、その隙に毛利軍主力をもって四畝山城を攻略することが決められた（178、181）。足守川上流域の在郷勢力が非戦闘員を連れて亀石城へ入り清水宗治の指揮下に入ったのも、この十一月のことである（山本 1994b）。彼らは鍛冶屋山城に進駐した宇喜多勢に圧迫され去就を明らかにしていなかったが、毛利氏の防衛体制構築をみて毛利方残留を決意したのである。

十一月から十二月にかけ、伊賀久隆は「境目下知」のため備前福山城に出馬し、在郷勢力に指示して山王山城の尾首や佐井田城周辺で毛利兵を斬らせた（179、188）。佐井田城衆も四畝山城に出入りする兵を斬り、互いに心理攻撃を繰り返した（山本 2010）。水面下の抗争が続く中、十二月十六日毛利輝元が自ら大軍を率いて備中川面に「山陣」し（189 ～ 190）、佐井田城衆や吉川広家と合流して宇喜多方の四畝山城を猛襲、二十四日夜に落城させた（山本 2010）。翌天正八（1580）年正月、輝元は備作三ヶ国の境界線上に飯山城・塚風呂城を築き（198、201 など）、伊賀氏が自軍の背後を

衝く動きを封じた上で美作方面へと進軍する。その後、同年五月には藤沢城（藤佐井・藤斎）に在番を入れて備前虎倉から竹庄を経て備中松山へ至る主要道も塞ぎ（229、238）、伊賀氏の動きを厳しく制した。

天正九（1581）年に入ると、毛利氏の軍事展開を阻害していた伊賀久隆が変死し、跡を継いだ伊賀家久は宇喜多氏を見限って毛利輝元に帰順する（山本 1994a）。輝元はこれを好機として備中南部の宇喜多氏勢力掃討に着手、同年九月小早川隆景が伊賀軍と合同して宇喜多方の忍山城を攻撃した（同、248、254）。毛利軍は忍山城を見下ろす高地に鎌倉山城を築き（勝尾山城と同一。「御答書」／畑 2009c）、鍛冶屋山城との通路上にも付城を設け忍山城を孤立させた。当時宇喜多直家は瀕死の重篤で有効な対処ができず、十月隆景は総攻撃を実施して忍山城を陥落させ（255 ～ 256、参 45 ～ 46、山本 1994a）宇喜多氏の拠点鍛冶屋山城の孤立化、備前国内陸部への直撃ルート確保に成功する。

（足守・高松の攻防） 天正十（1582）年初春から四月にかけ、毛利氏は備前国児島へ軍勢を送って宇喜多氏を圧迫すると共に、清水宗治を通じて郷村に人夫と築城用材の負担を割り当て、境目諸城で「古堀」拡張を伴う改修を実施する（268、山本 1994b）。このとき、庭瀬城の井上就正在番曲輪（井孫兵丸）に「大矢倉」建設が進められた（275 ～ 276）。織田氏の中国戦線における協力者宇喜多氏存亡の危機を知った織田方の羽柴秀吉は、同年四月四日軍勢を率いて備前岡山城へ入り、毛利軍の直接対決に臨んだ。翌日秀吉は朱福寺山に布陣して「山見」＝地形・敵情視察を実施（278、畑 2008）、宇喜多氏の鍛冶屋山城周辺に配された毛利方の付城冠山・宮路山城攻略を基軸とする作戦展開を考案した。迎え撃つ毛利方の小早川隆景は幸山城・福山城に布陣し（289、291）、穂田元清・口羽春良に織田軍来襲時の「後巻」に適した布陣地を検討させると共に、吉川元春・福原貞俊ら主力部隊の急速なる発遣を毛利輝元に求めた（279、畑 2008）。まもなく秀吉は足守盆地の南・西側を画する丘陵に陣城群を構えて足守諸城と幸山城・高松城との連絡を絶ち、包囲網の中に封じ込めた冠山城・宮路山城への攻撃を開始する（同）。秀吉は、毛利軍が勢揃いする前に幸山城の小早川隆景を足守諸城の救援に引きずり出し個別撃破することを狙い、幸山城下に放火して隆景の出撃を誘ったが、隆景は静観に徹した（283、288）。隆景が動かないことを悟った秀吉は、冠山城とその出城すくも塚城を猛攻し四月二十五日に陥落させ、城将林重真・松田孫次郎を斬った（292、318、畑 2008）。毛利軍が味方を見殺しにする様子をみた足守諸城の在番者は動揺し、五月二日宮路山城の乃美景興は城を織田方に明け渡して退去（光成 2008・畑 2008）、亀石城の在郷勢力も織田方に降伏し（山本 1994b・畑 2008）、足守盆地は織田軍に掌握された。以後も鴨城で内通者が発生し（畑 2008）日幡城主上原元将が織田方に寝返る（光成 2008）など、毛利氏の防衛体制は緒戦の結末が尾を引くかたちで自壊する（318、339、351 など）。

五月七日、羽柴秀吉は蛙鼻付近の丘陵に本陣を移して清水宗治の高松城攻略に着手し、城が浮かぶ低湿な盆地を締め切るように土堤を構築、その内部に足守川の河水を導入して城を水攻めにする（316、318、畑 2008）。五月二十一日、吉川元春が岩崎の陣所へ到着し「久敷山」＝日指山を含む高松城南方丘陵上に毛利軍が勢揃いしたが（322、畑 2008）、すでに高松城は周囲も含めて水浸しで、城に近づくことも周辺丘陵の織田方陣城に攻撃を加えることも不可能になっていた。再び眼前の味方を救援できない状況を露呈した毛利陣営では流言が飛び交い、細川通董に織田軍内通の疑いがかけられるなど（「旧長府藩蔵足利豊臣ヨリ古文書」天正十年十一月七日細川通董起請文写／山口県文書館蔵）、織田軍との決戦は望むべくもない事態に立ち至った。高松籠城衆・毛利軍ともに極限状態に達

した六月二日、織田信長が明智光秀の謀反によって横死する（本能寺の変）。事件を秘密裏に知った羽柴秀吉と継戦困難な状態にあった毛利氏の間で瞬く間に講和が成立し、翌日高松城主清水宗治ら籠城衆の主将が自刃（346、348）、城は織田軍に明け渡され、織田・毛利両軍は高松周辺から撤兵した（340）。

（中国国分とその影響） 天正十一（1583）年になると秀吉と毛利氏の間で互いの領国を確定し新しい境界を決める交渉が始まる。秀吉が提示した高梁川より東側を全て宇喜多氏領とする案に毛利輝元は難色を示したが、同年十二月に毛利氏は窪屋・都宇郡の全てと賀陽郡の過半を手放すことを了承し、幸山城・庭瀬城・松島城などが宇喜多秀家に引き渡された（399、401、畑 2019）。これによって備中南部においては高梁川を基準に東岸を宇喜多領、西岸を毛利領とする国分けが実現する。毛利氏が備中松山城の維持にこだわったため備中北部の国分け交渉は難航し、天正十三（1585）年春、秀吉は毛利氏の備中松山領有を認め、高梁川東岸に所在する英賀郡全域と上房・賀陽郡の一部が毛利領として残された。この付近の毛利・宇喜多領境界は、竹庄付近に存在した模様である（森脇 2012）。分国境界の後退を余儀なくされた備中国南部では、天正十二（1584）年穂田元清による城郭再編が行われ、元清自身の新しい居城として矢掛茶臼山の選定・築城の開始、旧居城猿掛城の前衛基地としての改修、新しい分国境への家臣配備が実施された（408、414 ～ 416、畑 2019）。この一環として南山城が現在の姿に改修された可能性がある（畑 2019）。天正十九（1591）年毛利輝元は惣国検地に基づく大規模な所領替えを実施し、備中国内の穂田元清領はほぼ消失、代わって毛利領備中国５万 3418 石余の５分の１を占める１万石余が宿老宍戸元続の所領とされ、細川野州家の一円支配地浅口郡を除く全郡に宍戸領が設定され（「毛利家文庫」八ヶ国御配地絵図／山口県文書館蔵、資料毛利氏八箇国御時代分限帳、人見 1986）、宍戸氏と備中国支配との関連付けが強化された。宍戸氏備中領の拠点鬼身城は文禄～慶長期に高石垣を伴う城郭として整備された可能性が指摘されているが（尾崎 2006）、備中国の所領構成再編に関連し毛利氏が備中国支配の枢要の城として改修した可能性が高い。この他、備中松山城・猿掛城・国吉城が文禄・慶長期も引き続き利用された（422 ～ 423、参 69）。一方、宇喜多氏備中領では庭瀬城が支城として存続し宿老岡家利が入ったとされ（参 63）、その与力が幸山城を管理した（426）。また、鍛冶屋山城に浮田土佐守（延原内蔵丞が改名。畑 2001 ～ 2006）が在城したことが、近世前期の伝承（元禄四年磐梨郡田原村父井村論山口上幷山見方／撮要録上）から推測できる。

（近世初期の所領構成と備中松山城） 慶長五（1600）年の関ヶ原合戦で毛利・宇喜多氏は西軍に属したため備中国は徳川家康によって没収され、所領構成は大きく改められた。具体的には江戸幕府直轄領が設定され、その他の領域は小堀正次、木下家定、伊東長実、蒔田広定、戸川達安らによって分割領有されることになった（人見 1986）。備中国奉行として幕府直轄領の管理を委ねられた小堀政一（遠州。正次の子）は、慶長十三～十五（1608 ～ 10）年備中松山城を「天しゆ」を持つ瓦葺きの近世城郭に改修し（440 ～ 452、人見 1986）、高梁川河口部の港だった倉敷にも役所を設け（三宅 2019）、幕領と自身の所領支配に臨んでいる。元和三年（1617）七月、幕府は鳥取藩主池田長幸を備中笠岡へ、若桜藩主山崎家治を成羽へ転封させた。池田長幸は笠岡城に入ったが小堀政一の領有する松山城を欲し、翌年小堀・池田両氏の間で松山・笠岡の所領交換が実現する（三宅 2019）。松山城では廃城準備が進められていたが（453、人見 1986）、所領交換の結果松山城は池田藩６万５千石の藩庁として存続することになり、以後藩主交替を経つつ備中国唯一の城郭として利用された。

（畑　和良）

（参考文献）

浅尾儀一郎 1941 『増訂小田郡誌』上（小田郡教育会）
藤井駿 1971 『吉備地方史の研究』（法蔵館）
小川信 1980 『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館）
人見彰彦 1986 『備中国奉行小堀遠州』（山陽新聞社）
佐藤進一 1988 『室町幕府守護制度の研究　下』（東京大学出版会）
岡山県 1990 『岡山県史』第四巻中世 1（岡山県）
岡山県 1991 『岡山県史』第五巻中世 2（岡山県）
末柄豊 1992 「細川氏の同族連合体制の解体と畿内領国化」（『中世の法と政治』吉川弘文館）
谷重豊季 1992 『四五迫城跡』（広島県芦品郡新市町教委）
山本浩樹 1994a 「天正年間備中忍山合戦について」（『岐阜工業高等専門学校紀要』29 号）
山本浩樹 1994b 「戦国大名領国「境目」地域における合戦と民衆」（『年報中世史研究』19）
榎原雅治 2000 「備前松田氏に関する基礎的考察」（『日本中世地域社会の構造』校倉書房、初出 1988 年）
小川信 2001 「中世備中の国衙機構と惣社造営」（『中世都市「府中」の展開』思文閣出版）
畑和良 2001 ～ 2006 『落穂ひろい』（ウェブサイト、http://ochibo.my.coocan.jp/）
古野貢 2002 「細川氏内衆庄氏の展開と地域支配」（『年報中世史研究』27）
尾崎聡 2006 「毛利氏によって総石垣化された宇喜多領境目の城」（『戦乱の空間』5）
福島克彦 2006 「中世方形館研究の問題点」（『城館史料学』4）
森俊弘 2006 「宇喜多直家の権力形態とその形成過程」（『岡山地方史研究』109）
山本浩樹 2007 『西国の戦国合戦』（吉川弘文館）
光成準治 2008 「高松城水攻め前夜の攻防と城郭・港」（『倉敷の歴史』18）
畑和良 2008 「織田・毛利備中戦役と城館群」（『愛城研報告』12）
畑和良 2009a 『図説井原・笠岡・浅口の歴史』（共著、郷土出版社）
畑和良 2009b 「戦国期備中南部の支配体制と清水宗治の実像」（『吉備地方文化研究』19）
畑和良 2009c 「備前･備中境目地域の城館と大名間抗争」（『第 26 回全国城郭研究者セミナー』資料集）
辰田芳雄 2009 「中間地域における戦国期荘園の転回とその意味」（『岡山朝日研究紀要』30）
伊藤邦彦 2010 『鎌倉幕府守護の基礎的研究　国別考証編』（岩田書院）
山本浩樹 2010 「織田・毛利戦争の地域的展開と政治動向」（『西国の権力と戦乱』清文堂）
岡田謙一 2010 「細川右馬頭尹賢小考」（『中世政治史の研究』日本史史料研究会）
畑和良 2010 「猿懸城合戦と毛利氏の備中国経略」（『倉敷の歴史』20）
畑和良 2012 「細川通董の野州家相続とその背景」（『倉敷の歴史』）
森脇崇文 2012 「宇喜多氏備中領の範囲について」（『倉敷の歴史』22）
森俊弘 2014 「中近世移行期の猿掛庄氏とその一門衆」（『倉敷の歴史』24）
魚屋翔平 2015 「戦国期大内氏と岡山県地域の諸勢力の関係」（『岡山地方史研究』135）
森脇崇文 2016 「天正初期の備作地域情勢と毛利・織田氏」（『ヒストリア』254）
畑和良 2016 「本太城と南山城」（平成 28 年度倉敷市総務課歴史資料整備室歴史資料講座資料）
三宅正浩 2019 「近世初期備中国の所領構成」（『倉敷の歴史』29）
畑和良 2019 「備中南山城の縄張りとその成立背景」（『倉敷の歴史』29）

備中国中世城館関連文献一覧表

凡例

・一次資料を除く主な城館関連文献を近世地誌類、自治体史、その他関連文献、及び発掘調査ごとに分けて一覧表を掲載している。なお、文献番号は通し番号である。
・各一覧表に記載されている文献番号は、出典文献の読み仮名順に振っている（順不同）。
・城館文献一覧表には報告書掲載番号、城館名とその城について記述がみられる文献番号を記載している。

近世地誌

・出典欄には資料名称と出典を記している。
・年代は出版年ではなく、編纂年を記している。

自治体史

・単著によるものは著者名を、共著によるものは編集者、あるいは出版者名を記している。

その他

・主に明治時代以降に編纂された地誌類や、軍記物、個人研究の一部を記している。

発掘調査報告書

・発掘調査対象となった城館名、出典、及び調査主体を記している。

表９　備中国中世城館跡文献一覧表

近世地誌

文献番号	著者	出典	編集者・出版社	年代
1	桂元盛	「桂岌円覚書」『第二期戦国史料叢書9　毛利史料集』	新人物往来社	元和８（1622）年
2	大沢惟貞	『吉備温故秘録』		寛政年間(1789~1801)
3	古川古松軒か	「吉備之志多道」『吉備群書集成』第壹輯	吉備群書集成刊行会	天明８（1788）年
4	平川親忠	「古戦場備中府志」『吉備群書集成』第五輯	吉備群書集成刊行会	享保20（1735）年
5	五弓久文	『三備史略』巻之三	香文社	1894年
6	石丸定良	『備前記』全		元禄13（1700）年
7	村瀬安兵衛	「備前国人佐柿入道常円物語」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行会	貞享４（1687）年
8	在田軒道貞	『備中小田物語』	甲弩郷史談会	元禄６（1693）年
9	不詳	『備中誌』下編	吉田研一編	1903年
10	不詳	『備中誌』上編	吉田研一編	1903年
11	柳井重法	「備中巡禮畧記」『吉備群書集成』第貳輯	吉備群書集成刊行会	寛政２（1790）年
12	渡邊正利	「備中村鑑」『吉備群書集成』第貳輯	吉備群書集成刊行会	文久元（1861）年
13	不詳	『備中地誌』		享保２（1717）年
14	奥田樂淡	『備中略史』巻之上		1878年
15	石丸定良	『備陽記』		享保６（1721）年
16	和田正尹ほか	『備陽国誌』『吉備群書集成』第壹輯	吉備群書集成刊行会	元文４（1749）年

自治体史

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
17		『浅口郡誌』	浅口郡誌編纂委員会	1925年
18		『阿哲郡誌』上巻	阿哲郡教育会	1929年
19		『井原市史1自然風土・考古・古代・中世・近世通史編』	井原市史編纂委員会	2005年
20		『井原市史3古代・中世・近世史料編』	井原市史編纂委員会	2003年

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
21		『井原市史6民俗編』	井原市史編纂委員会	2001年
22		『井原の歴史　井原市史紀要』第5号	井原市史編纂委員会	2005年
23		『井原市芳井町史』通史編	井原市史編纂委員会	2008年
24	岸加四郎編	『井原史料』	井原市教育委員会	1973年
25	遠藤逸夫、笹井準二	『岩田村史』		1957年
26		『有漢郷土史　続』	有漢町教育委員会	1981年
27		『有漢町史』 地区誌編	有漢町	1997年
28		『大佐町史』上巻	大佐町史編纂委員会	1979年
29		『岡山県小田郡中川村誌』	高槻次郎	1932年
30		『岡山県史』第１巻	岡山県史編纂委員会	1983年
31		『岡山県史』第４巻	岡山県史編纂委員会	1989年
32		『岡山県史』第５巻	岡山県史編纂委員会	1994年
33		『岡山県史』第６巻	岡山県史編纂委員会	1984年
34		『岡山県史』第７巻	岡山県史編纂委員会	1986年
35		『岡山県史』第17巻	岡山県史編纂委員会	1991年
36		『岡山縣後月郡誌』全	後月郡役所	1926年
37	永山卯三郎	『岡山県通史』		1930年
38		『岡山市史』全	岡山市役所	1920年
39		『岡山市史』第一巻	岡山市役所	1920年
40	板津謙六	『岡山市史』第二巻	岡山市役所	1936年
41		『小田郡誌』	岡山県小田郡教育会	1941年
42	浅尾儀一郎	『小田町史』		1933年
43		『笠岡市史史料編』下巻	笠岡市史編さん室	2002年
44		『笠岡市史史料編』上巻	笠岡市史編さん室	1999年
45		『笠岡市史史料編』中巻	笠岡市史編さん室	2001年
46		『笠岡市史』第一巻	笠岡市史編さん室	1983年
47		『笠岡市史』第二巻	笠岡市史編さん室	1989年
48		『笠岡市史』地名編	笠岡市史編さん室	2004年
49		『笠岡町誌』	高田九郎	1917年
50		『笠岡町誌』	笠岡町	1926年
51		『鴨方町史』本編	鴨方町史編纂委員会	1990年
52		『賀陽町史』	賀陽町教育委員会	1972年
53	藤井定市	『川相誌』		1959年
54		『川上郡誌』	私立川上郡教育会	1920年
55		『吉備郡史』中巻	永山卯三郎	1971年
56		『清音村誌』	清音村誌編集委員会	1979年
57	永山卯三郎	『倉敷市史』第２冊	名著出版	1973年
58	永山卯三郎	『倉敷市史』第６冊	名著出版	1973年
59	永山卯三郎	『倉敷市史』第８冊	名著出版	1973年
60	横山定	「倉敷市内の中世城郭－備中国浅口郡片島城」 『倉敷の歴史』倉敷市史紀要第６号	倉敷市史研究会	1996年
61		『郷の村誌』	寺阪五夫	1960年
62		『巨瀬町誌』	巨瀬公民館	1970年
63		『巨瀬町誌』	巨瀬町誌編集委員会	2004年
64		『御登極記念小田郡誌』	小田郡教育会	1924年
65		『金光町史』本編	金光町史編纂委員会	2003年
66		『金光町史』民俗編	金光町史編纂委員会	1998年
67	岡道夫	『里庄村誌』	里庄村	1927年
68		『里庄町誌』	里庄町誌編集員会	1971年
69		『庄村誌』	庄村誌編纂委員会	1971年
70		『上道郡誌』	上道郡教育会	1922年
71		『上房郡誌』全	私立上房郡教育会	1972年
72	大月雄三郎	『昭和町史』	昭和町教育委員会	1970年
73		『新修倉敷市史』２　古代・中世	倉敷市史研究会	1999年
74		『新修倉敷市史』３　近世	倉敷市史研究会	2000年
75		『総社市史』通史編	総社市史編さん委員会	1998年
76		『総社市史編纂史料報告書』第１次	総社市史編さん事務局	1980年
77		『総社市史編纂史料報告書』第３次	総社市史編さん事務局	1982年
78		『増補版　高梁市史』下巻	高梁市史（増補版）編纂委員会	2004年
79		『増補版　高梁市史』上巻	高梁市史（増補版）編纂委員会	2004年
80		『里庄町誌　続（昭和46～55年）』	続里庄町誌編纂委員会	1982年
81		『高梁市史』	高梁市史編纂委員会	1979年
82		『有漢町史』地区誌編	有漢町教育委員会	1997年

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
83		『都窪郡誌』	都窪郡教育会	1923年
84		『連島町史』	連島町誌編纂会	1956年
85		『哲西史』	哲西史編集委員会	1963年
86		『哲西史』史料編1	哲西町	2005年
87		『哲多町史』民俗編	哲多町史民俗編編集委員会	2001年
88		『常盤村誌』	常盤村誌編集会	1961年
89		『中川村誌』	中川村誌編纂委員会	1977年
90		『中津井誌』	横上若太郎	1959年
91		『成羽町史』通史編	成羽町	1996年
92		『成羽町史』民俗編	成羽町	1991年
93		『新見市史』	新見市	1965年
94		『新見市史』史料編	新見市史編纂委員会	1990年
95		『新見市史』通史編　下巻	新見市史編纂委員会	1991年
96		『新見市史』通史編　上巻	新見市史編纂委員会	1993年
97	河合健三	『西江原村史』		1912年
98		『早島の歴史』1　通史編　上	早島町史編輯委員会	1997年
99		『美星町史』通説編	美星町史編集委員会	1976年
100		『備中町史』史料編	岡山県川上郡備中町教育委員会	1974年
101		『備中町史』本編	備中町史編集委員会	1972年
102		『船穂町誌』	船穂町誌編集委員会	1968年
103		『北房町史通史編上』	北房町史編集委員会	1992年
104		『真備町史』	真備町史編纂委員会	1979年
105		『馬屋下村史』	片山峯吉	1971年
106		『萬歳村誌』	萬歳村誌編纂委員会	1987年
107		『美穀村史』	美穀村史編集委員会	1963年
108		『村のなりわい』	旧上竹荘村誌編纂委員会	1956年
109		『矢掛町史』史料編	矢掛町史編纂委員会	1982年
110		『矢掛町史』本編	矢掛町史編纂委員会	1982年
111		『山手村史』史料編	山手村史刊行委員会	2003年
112		『山手村史』本編	山手村史刊行委員会	2004年
113	堀口正志	『大和村誌』		1975年

その他

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
114	香川正矩	「陰徳太平記」『通俗日本全史』13･14巻	早稲田大学出版部	1912～14年
115	島崎東	「岡山県下における中世前半期の城郭」『岡山県立博物館研究報告』33	岡山県立博物館	2013年
116	平井春樹	『おかやまの歴史』	河原書店	1960年
117	畑和良	「織田・毛利備中戦役と城館群」『愛城研報告』第12号	愛知中世城郭研究会	2008年
118	浅尾儀一郎	『小田町略史』	小田町商工会	1938年
119		『笠岡古城山沿革考』	淺尾儀一郎編	1935年
120	谷口澄夫他	『郷土の歴史』　中国編	宝文館	1959年
121		『倉敷の歴史』倉敷市史紀要第18号	倉敷市史研究会	2008年
122	森俊弘	『倉敷の歴史』第24号	倉敷市文書館（アーカイブズ）研究会	2014年
123		『神島史誌』	広沢澄郎編	1985年
124		『山陽の城』	小学館	1989年
125	早田玄洞	『史上の吉備』下	歴史図書社	1975年
126		『新釈備前軍記』	柴田一編　山陽新聞社	1986年
127		『新釈備中兵乱記』	加原耕作編　山陽新聞社	1987年
128	杉山博	『シンポジウム中世の瀬戸内』下	山陽新聞社	1982年
129	池田誠	『図解　中世城郭事典』第3巻	新人物往来社	1987年
130		『全国遺跡地図』33岡山県	文化庁文化財保護部	1985年
131		『続有漢郷土史』	有漢町教育委員会	1981年
132	高田馬治	『高松城の水攻』	高田馬治先生頌徳会	1965年
133		『地域研究』第24集	地域研究会	1984年
134	中島元行	「中国兵乱記」『吉備群書集成』第参輯	吉備群書集成刊行會	元和元（1614）年
135	松尾惣太郎	『中世期における備中国の荘園と国人』		1966年
136	島崎東・竹原伸之	「哲西の山城Ⅱ」『やたべ』No.43	哲西民俗研究会	2013年
137	山下晃誉	「天正後期の陣城について－中国地方を事例に－」『賤ヶ岳合戦城郭報告書』	滋賀県長浜市教育委員会	2013年

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
138	山本浩樹	「天正年間備中忍山合戦について」『岐阜工業高等学校紀要』第29号		1994年
139	宇垣武治	『撫川領改革記』		1969年
140	池田誠・光畑克己	『縄張研究の視点からみる「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の一考察』		1998年
141		『日本城郭全集』10	人物往来社	1967年
142		『日本城郭全集』15補	人物往来社	1968年
143	葛原克人	『日本城郭大系』13	新人物往来社	1980年
144	土肥経平	「備前軍記」『吉備群書集成』第参輯	小橋藻三衛	1897～99年
145	岡田政男	「備中国の国人三村氏について」『岡山の歴史と文化』	藤井駿先生喜寿記念会編	1983年
146	石井了節	『備中集成志』	吉備文化研究会	宝暦3（1753）年
147	乗岡実	「備中高松攻めの陣城群」『織豊系城郭の陣城』		2012年
148	島崎東	「備中西山城とその周辺の山城」『やたべ』No.39	哲西民俗研究会	2007年
149		『備中福山城戦史』	巌津政右衛門　編	
150	江草正光	『ふるさと平川　歴史探訪』	吉備人出版	2012年
151		『芳井町誌』	岡山大学教育学部内地域研究会編	1972年
152	田中一雄	『吉川誌』		1956年
153		『よしはま物語』	関藤不二男著	1973年
154		『わたくしたちの福田村』	笠石隆秀	1983年

発掘調査

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
155		「岩屋城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21	岡山県教育委員会	1977年
156		「土井城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21	岡山県教育委員会	1977年
157		「藤木城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』23	岡山県教育委員会	1978年
158		「岸本城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22	岡山県教育委員会	1977年
159		「上熊谷土居遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20	岡山県教育委員会	1990年
160		「田治部氏屋敷跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67	岡山県教育委員会	1988年
161		「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11	岡山県教育委員会	1976年
162		「谷尻遺跡赤茂地区」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』4	北房町教育委員会	1986年
163		『岡山県高梁市川面町寺山城跡測量調査報告書』	高梁市教育委員会	2009年
164		「粧田山城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113	岡山県教育委員会	1996年
165		『備中松山城関連遺跡』	順正短期大学運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会	1986年
166		『史跡備中松山城跡　保存管理計画策定報告書』	高梁市教育委員会	1992年
167		『史跡備中松山城跡　環境整備基本計画策定報告書』	高梁市教育委員会	1992年
168		「史跡備中松山城跡　大手門跡・二の平櫓跡発掘調査報告書」『高梁市埋蔵文化財発掘調査報告』第3集	高梁市教育委員会	2014年
169		『史跡備中松山城跡　中太鼓の丸跡・下太鼓の丸跡保存整備工事報告書』	高梁市教育委員会	2014年
170		『史跡備中松山城跡　小松山城跡保存整備・災害復旧工事報告書』	高梁市教育委員会	2017年
171		「川面館」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5	岡山県教育委員会	1974年
172		「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70	岡山県教育委員会	1988年
173		「殿砂遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』5	総社市教育委員会	1995年
174		「南山城跡」『岡山県埋蔵文化財報告』48	岡山県教育委員会	2018年
175		「忍山城出城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』72	岡山県教育委員会	1989年
176		「金頭山城跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』7	総社市教育委員会	1997年
177		「金頭山城跡２」『総社市埋蔵文化財調査年報』8	総社市教育委員会	1998年
178		「千引砦」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15	総社市教育委員会	1999年
179		「名越砦」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15	総社市教育委員会	1999年
180		「備中国府跡緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7	総社市教育委員会	1989年
181		「総社遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209	岡山県教育委員会	2007年
182		『南坂８号墳　一国山城跡　一国山古墳群』	岡山市教育委員会	2006年
183		『すくも山遺跡』	岡山市教育委員会	1998年
184	西川　宏	「佐古田堂山古墳」『岡山県史』18巻　考古資料編	岡山県	1986年
185		『備中高松城跡公園発掘調査概報』	岡山市教育委員会	1976年
186		『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』	岡山市教育委員会	2000年
187	乗岡 実	「林信夫氏蒐集の考古資料Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999(平成11)年度』	岡山市教育委員会	2001年
188		『備中高松城水攻め築堤跡』	岡山市教育委員会	2008年

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
189		「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90	岡山県教育委員会	1994年
190		「津寺遺跡」 2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98	岡山県教育委員会	1995年
191		「津寺遺跡」 3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104	岡山県教育委員会	1996年
192		「津寺遺跡」 4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116	岡山県教育委員会	1997年
193		「津寺遺跡」 5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127	岡山県教育委員会	1998年
194		「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89	岡山県教育委員会	1994年

表 10　備中国中世城館跡城館関連文献一覧表

城館番号	城館名	別称	文献番号
3	勝ヶ城跡		4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 124, 141, 143, 146
6	小郷寺城跡		143
7	挽野城跡	挽野々城・引斤古城・引野ヶ古城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 99, 141, 143
8	楪城跡	杠城・譲葉名城・新見城・譲葉城・杠の城	4, 11, 12, 18, 19, 20, 28, 32, 33, 35, 37, 40, 55, 59, 71, 72, 75, 79, 81, 84, 86, 91, 92, 93, 99, 103, 104, 107, 112, 114, 116, 120, 124, 125, 126, 127, 135, 141, 143, 146
9	朝倉城跡	朝倉山城・淺倉城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 99, 141, 127, 134, 143
11	粒根城跡	粒根ノ城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 142, 143
12	地頭方政所跡		94, 128
13	岩高城跡		18, 85, 136, 141, 143
14	見坂山城跡	武坂城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 85, 116, 136, 141, 143
15	万石城跡		18, 115, 136, 143
16	土井城跡		115, 143, 148, 155
17	白石城跡	藤林城	4, 136
18	藤木城跡		4, 12, 18, 37, 85, 86, 99, 115, 124, 141, 143, 148, 156
19	豆木城跡	真木城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 85, 86, 124, 136, 141, 143
20	荒戸山城跡		4, 11, 12, 37, 86, 142, 143
21	中田山城跡	岩屋城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 115, 124, 141, 143, 157
22	福本城跡		96
23	竹野城跡	竹野々城・竹野の城・竹城・竹之城	4, 11, 12, 18, 37, 40, 59, 79, 81, 86, 92, 99, 112, 124, 141, 143
24	金子氏屋敷跡	金子衡氏の屋敷址	93
25	西方政所跡	西方領家方政所址	93
26	宮田山城跡	宮田城	93
27	馬酔木城跡		4, 12, 18, 37, 44, 86, 124, 141, 143
29	滝丸城跡	瀧山城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 87, 141, 143
31	猿滝城跡	猿瀧城・猿獄城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 87, 124, 141, 143
32	助正城跡	助安城・祐安城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 124, 141, 143
33	鯉滝城跡	鯉瀧城	4, 11, 12, 37, 44, 86, 94, 99, 141, 143
34	石蟹山城跡	石賀・新見城・石加山城・石賀山城	4, 5, 11, 12, 18, 37, 44, 75, 79, 81, 86, 93, 99, 103, 107, 135, 141, 143
36	岸本城跡	岸本山城	4, 12, 18, 37, 44, 77, 85, 115, 124, 141, 143, 148, 158
37	西山城跡	西山古城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 85, 86, 124, 143, 147, 148
38	育野古城跡	育野々城・育野の城・音野城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 85, 86, 136, 141, 143
39	二条殿跡		85
40	鎌ヶ畝城跡		143
42	成松山城跡		4, 12, 18, 37, 124, 141, 143
43	井ノ畝城跡	井畝城・井の畝城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 124, 141, 143, 146
44	越山城跡	越シ山城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 124, 141, 143
45	柏山城跡	飯山の城	4, 11, 12, 18, 37, 44, 86, 93, 124, 125, 142, 143, 146
46	赤坂城跡	赤阪城・赤崎城	4, 9, 11, 12, 18, 37, 44, 124, 141, 143
49	実山城跡		4
50	葛籠畑山城跡	葛籠畑山古城・菖山城・つゝら畑山城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 44, 141, 143
51	割亀山城跡	免山城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 44, 94, 116, 124, 141, 143
52	矢作城跡	矢はぎか城・矢作ヶ城・矢はき城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 99, 124, 141, 143
53	円通山城跡	圓通山城・免通山城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 44, 71, 103, 124, 141, 143
54	周防城跡	因防城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 44, 124, 141, 143

城館番号	城館名	別称	文献番号
55	安本城跡	安元城	28, 143
56	土居遺跡		159
57	田治部氏屋敷跡	多治部氏の屋敷址	93, 160
58	塩城山城跡	塩山城・鹽山城・潮城・多治部城・塩が城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 93, 94, 99, 135, 141, 143
59	大山城跡		4, 9, 12, 18, 28, 37, 71, 103, 124, 141, 143
60	田治部国衙政所跡		96
63	小谷山城跡	小笹城	4, 9, 12, 18, 37, 142, 143
64	鳶ヶ巣城跡	鳶ノ巣城・鳶巣城・新見	4, 9, 11, 12, 18, 28, 37, 44, 79, 81, 93, 94, 99, 103, 107, 124, 135, 141, 143, 146
65	角尾城跡	角尾山城	4, 9, 11, 12, 18, 37, 40, 44, 55, 59, 75, 92, 107, 112, 116, 124, 142, 143
66	甲籠城跡	唐松・甲瀧城	9, 11, 12, 18, 28, 37, 44, 79, 81, 93, 94, 103, 107, 125, 135, 141, 143
67	山根城跡	阿賀郡唐松	75
68	城山城跡		107, 142, 143
69	鬼山城跡	真壁城	4, 9, 11, 12, 18, 37, 103, 107, 124, 125, 141, 143
70	鳶ヶ城跡	鳶ノ城	4, 9, 12, 18, 37, 142, 143
72	双内城跡	双知城	103
73	高釣部城跡	此口部城・高釣瓶城・高釣部山城	4, 5, 9, 11, 12, 13, 18, 28, 37, 44, 47, 71, 90, 103, 124, 125, 135, 141, 143
74	植木城跡	植木古城	103, 143
75	土井砦跡	土井城	103, 143
76	才田城跡	佐井田城・斎田城・斉田ノ城・齊田城山・西田城	4, 5, 11, 12, 18, 20, 26, 28, 32, 35, 37, 38, 40, 44, 47, 55, 71, 72, 75, 79, 81, 84, 90, 91, 92, 99, 103, 112, 114, 116, 122, 124, 125, 126, 127, 135, 141, 143, 144
77	加葉山城跡	賀葉山城・迦葉山城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 55, 71, 79, 81, 90, 103, 124, 141, 143
78	上合地砦跡	砦部上合寺山城・上合寺山城	79, 81, 103
79	山王城跡	山手山・山王山・山王山城	4, 5, 9, 11, 12, 13, 37, 44, 71, 90, 103, 124, 125, 126, 141, 143
80	丸山城	砦部・砦部丸山の城	4, 9, 11, 12, 18, 28, 32, 35, 37, 44, 55, 71, 75, 79, 81, 103, 104, 112, 122, 124, 125, 141, 143
81	植木遺跡	植木館・植木氏居館	103, 143, 161
82	井尾城跡	井尾野城・荘城	37, 71, 103, 124, 125, 142, 143, 146
83	赤茂館跡		103, 162
84	片山城跡		4, 9, 12, 37, 71, 103, 141, 143
85	片山古城跡		103
86	飯山城跡	飯ノ山城	44, 71, 103
87	陣山砦跡		103
88	福尾城跡		37, 71, 103, 142, 143
90	小殿城跡		71, 103, 142
91	小松城跡	小松山城・山松城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 71, 103, 142, 143
92	荒木城跡		71, 103, 142
93	四ッ畦城跡	四畦城	4, 9, 12, 37, 44, 71, 103, 141, 143
94	柾木館跡		103
95	定砦跡		103
96	高機山遺跡	建旗山	103
97	川崎城跡		4, 11, 12, 18, 37, 44, 96, 124, 141, 143
98	古見山城跡		79
99	城山城跡	古城	52, 81, 143
100	津々城跡	福山城・津々羅城	9, 18, 28, 75, 79, 81, 103, 143
103	戸構城跡	西山城	4, 9, 12, 37, 101, 124, 141, 143
104	軽尾城跡	かる尾城・苅尾城	4, 9, 12, 28, 37, 44, 92, 93, 135, 141, 143, 146
105	小金山城跡	右金山城・古金山城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 79, 81, 91, 92, 124, 143
106	笹尾城跡		4, 9, 11, 12, 37, 44, 54, 79, 81, 99, 124, 141, 143
107	滝谷城跡	瀧谷城・境谷城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 79, 81, 92, 100, 101, 124, 135, 142, 143
108	白毛ヶ城跡	しらけが城・白毛城	4, 9, 11, 12, 37, 55, 79, 81, 124, 141, 143
109	北丸城跡	北丸之城	4, 11, 12, 37, 44, 101, 142, 143, 150

城館番号	城館名	別称	文献番号
110	袈裟尾城跡	袈裟尾山城・京尾城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 99, 124, 141, 143
111	紫城跡	紫之城	4, 5, 11, 12, 37, 44, 75, 92, 100, 101, 124, 133, 141, 143, 150
113	山根城跡	山根山城	4, 11, 12, 37, 44, 142, 143, 150
114	金子山城跡	金子城・金護山城	4, 11, 12, 37, 44, 101, 116, 142, 143, 150
115	大原田城跡		4, 11, 12, 37, 44, 142, 143, 150
116	勝負城跡	菖蒲城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 92, 100, 101, 124, 142, 143
117	中村城跡		4, 9, 11, 12, 37, 91, 92, 99, 124, 141, 143
118	長地城跡		4, 9, 11, 12, 37, 44, 91, 92, 124, 141, 143
119	丸山城跡	穴田城	4, 9, 11, 12, 18, 37, 54, 75, 79, 81, 99, 100, 101, 124, 125, 135, 141, 143, 144
120	陣山城跡		37, 79, 81
121	馬之城跡		79, 81, 143
122	秋町城跡	秋町ノ城	4, 9, 11, 12, 37, 79, 81, 124, 141, 143
123	高ノ盛城跡	高森城・高盛城	4, 9, 11, 12, 14, 37, 53, 91, 92, 124, 133, 143
124	三村氏居館跡	成羽城	91, 92, 143
125	三村氏陣屋跡	成羽の陣屋・御殿陣屋	30, 38, 40, 124, 133, 141, 143
126	鶴首城跡・古鶴首城跡	成羽城・鳴輪城・鶴頸城	4, 5, 9, 11, 12, 14, 18, 19, 28, 32, 33, 35, 37, 40, 42, 44, 47, 53, 54, 55, 56, 71, 72, 75, 79, 81, 84, 90, 91, 92, 93, 99, 103, 104, 107, 112, 114, 116, 118, 119, 122, 124, 125, 126, 127, 133, 135, 141, 143, 144, 146
127	阿部深山城跡	相見山城・深山城	4, 9, 12, 14, 37, 79, 81, 99, 124, 127, 143
129	ツガン丸城跡		143
130	玉の城山城跡	玉の城	79, 81, 143
131	中山城跡		4, 9, 11, 12, 37, 44, 124, 141, 143
132	折居城跡	新居城	11, 12, 37, 44, 54, 143
135	国吉城跡	国吉ノ城・手要害	4, 5, 9, 11, 12, 18, 19, 28, 32, 33, 35, 37, 40, 44, 47, 53, 55, 71, 72, 75, 79, 81, 91, 92, 99, 102, 103, 107, 114, 116, 124, 125, 126, 133, 135, 141, 143, 144, 153
137	小笹丸城跡	小笹城・黒忠の城	9, 11, 37, 72, 98, 99, 124, 125, 143
138	野田城跡	野田の「土居」	99
140	飯ノ山城跡	飯山城	2, 6, 10, 11, 12, 15, 16, 37, 40, 71, 143
141	寺山城跡	川面山城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 55, 63, 71, 79, 81, 91, 114, 124, 125, 127, 139, 141, 143, 163
142	城平城跡	城の辻城	37, 71, 79, 81, 142, 143
144	殿屋敷跡		27, 82
145	飯の山城跡		26, 27, 82, 103
146	台ヶ鼻城跡	台ヶ城	26, 27, 37, 71, 79, 81, 82, 115, 124, 141, 143
147	常山城跡		4, 10, 11, 12, 27, 37, 44, 54, 71, 72, 79, 81, 82, 124, 135, 142, 143, 146
148	粧田山城跡	少田山・庄田山城・荘田・荘山田	4, 10, 11, 12, 44, 55, 62, 63, 71, 75, 79, 81, 104, 112, 124, 125, 127, 164
149	羽子田城跡	羽田城・刎田城	52, 141, 143
150	上ヶ城跡	上ガ城	52, 142, 143
151	野路山城跡		52, 108, 143
153	大原城跡	土生山城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 52, 71, 99, 124, 125, 141, 143
154	小谷城跡	古屋城	37, 52, 71, 116, 124, 142, 143
155	大畑城跡	勘兵衛城	52, 142, 143
156	矢倉城跡	矢蔵畦城・矢倉畝城・桝形城址	4, 10, 11, 12, 18, 37, 40, 44, 52, 55, 71, 72, 75, 79, 81, 99, 103, 104, 108, 112, 116, 124, 125, 127, 135, 141, 143, 144
158	備中松山城跡	大松山城	4, 5, 10, 11, 12, 14, 18, 19, 20, 24, 26, 27, 28, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 37, 40, 42, 44, 47, 53, 55, 56, 57, 58, 59, 63, 70, 71, 72, 74, 75, 78, 79, 81, 83, 84, 90, 91, 92, 93, 97, 99, 100, 102, 103, 104, 107, 112, 114, 116, 118, 119, 121, 122, 124, 125, 126, 127, 133, 135, 141, 143, 144, 146, 165, 166, 167, 168, 169, 170
159	備中松山城尾根小屋跡		30, 33, 34
160	広瀬固屋城跡	広瀬小屋	75, 79, 81, 143

城館番号	城館名	別称	文献番号
161	離小屋城跡	大離の陣屋	4, 10, 11, 12, 18, 37, 44, 52, 71, 72, 75, 79, 81, 103, 108, 124, 125, 127, 142, 143
162	大和佐山城跡	大和山城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 52, 71, 108, 124, 141, 143
163	菅野城跡	菅野々城	4, 10, 12, 37, 52, 71, 141, 143, 147, 152
164	高原城跡		10, 36, 53, 141, 143
165	井戸橋城跡	井戸橋山城	4, 10, 11, 12, 20, 23, 36, 37, 44, 53, 124, 141, 143, 151
166	小屋の山城跡		23
167	中山城跡		4, 10, 11, 12, 19, 20, 36, 37, 44, 53, 125, 141, 143, 146, 151, 153
168	木之山城跡	木野山城趾	36, 53, 142, 143, 151
169	正霊山城跡	正雪山城	4, 10, 11, 12, 20, 24, 36, 37, 44, 53, 79, 81, 116, 125, 141, 143, 151
170	有井城跡	矢津の城	53, 83, 151
171	大仙山古城跡	古城跡	20
172	能多ヶ丸城跡	古城跡	10, 20, 36, 53, 142, 143, 151
174	雄瀬山城跡	古城跡	10, 20, 23, 36, 53, 142, 143, 151
175	小菅城跡	小菅山城・小菅ノ城	4, 11, 12, 19, 20, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 81, 97, 99, 116, 124, 141, 143, 151
176	落石城跡	小山城趾	19 , 151
177	高屋城跡	高屋要害・高屋山城・高谷城	4, 10, 11, 12, 19, 20, 21, 24, 36, 37, 44, 46, 53, 103, 123, 124, 125, 141, 143, 151, 153
178	吉谷城跡	高屋寄せ城・山野、吉井之間一城	19, 20
179	山手城跡	城峪城	19, 22
180	小見山城跡	古見山の城	4, 8, 11, 12, 19, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 124, 141, 143
181	念堂山城跡	猪原の城山	19, 22
182	横手山城跡	横手城	4, 10, 11, 12, 19, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 97, 124, 125, 141, 143
183	青陰城跡	青蔭城	4, 10, 11, 12, 19, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 97, 115, 141, 143
184	鎌田城跡	出部古城・出部城	4, 11, 12, 19, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 55, 124, 141, 143
185	伊達氏館跡	伊達屋敷	19, 22
186	十蔵城跡	戸蔵城	22, 24, 36, 53, 141, 151
187	中堀城跡	中堀り城	4, 10, 11, 12, 19, 20, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 97, 116, 124, 141, 143, 151
188	亀迫城跡		19, 22, 36, 53, 97, 142, 143
189	白実城跡		19, 22, 36, 53, 142, 143
190	米持城跡	泉山城・いつみ山	8, 10, 19, 20, 36, 37, 44, 53, 125, 141, 143
191	高越城跡	高越山城	4, 5, 8, 10, 11, 12, 14, 19, 20, 21, 22, 24, 35, 36, 37, 42, 44, 45, 47, 53, 55, 57, 75, 81, 97, 99, 104, 112, 116, 118, 124, 125, 141, 143, 144, 153
192	戸木荒神山城跡	とぎ山の城	4, 10, 11, 12, 19, 20, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 124, 141, 143
193	才崎城跡	才崎の城	4, 8, 10, 11, 12, 19, 20, 22, 24, 36, 37, 44, 53, 124, 141, 143, 146
194	宇戸谷茶臼山城跡		99, 143
195	土居山城跡	宇戸土居城	99, 143
196	茶臼山城跡		143
198	土井の前城跡	迫の土井城	99, 143
199	殿ヶ市城跡	上高末の城山	110
200	三村氏居館跡	三村屋敷・星田の蔵光	81, 99, 143
201	金黒山城跡		10, 99, 141, 143
202	法雲山城跡		4, 10, 11, 12, 19, 37, 44, 79, 81, 92, 99, 133, 143
203	岩崎城跡	福岡城	112, 143
204	尼子城跡	尼ヶ城	10, 142, 143
205	下高末城跡	城山	64, 110
206	瀧山古城跡		44, 64, 110
207	薬師山城跡		110
208	小林山城跡	小林城	10, 20, 99, 110, 125, 143
209	神戸山城跡	城山・小田	4, 8, 10, 12, 19, 20, 37, 42, 44, 47, 53, 64, 81, 89, 110, 118, 119, 124, 125, 135, 143, 146

城館番号	城館名	別称	文献番号
210	岩屋山城跡	岩屋城	8, 10, 20, 29, 42, 44, 47, 64, 79, 81, 110, 118, 119, 125, 143, 144
211	龍山城跡	龍山・竜山城	8, 20, 29, 42, 44, 47, 79, 81, 89, 110, 118, 127, 143
212	川面館跡	小田氏の邸趾・川南館・郡家	55, 64, 110, 118, 171
213	太郎丸城跡		64 , 109
214	神子山城跡	神子山城・小林北古城址	4, 11, 37, 110, 125
215	蓮池城跡	中山	110
216	中山城跡		4, 110
217	山本城跡	山もとの城	4, 8, 10, 20, 44, 55, 109, 141, 143, 144
218	伽藍山城跡	からん山	4, 8, 10, 11, 12, 20, 29, 37, 44, 64, 77, 89, 110, 125, 143, 144
219	山田古城跡	焼山の要害	4, 12, 30, 37, 41, 44, 64, 110, 125, 143, 144
220	要害山城跡		8, 37, 55, 110, 143
221	中山城跡	中山堡・中の船ヶ迫城	4, 8, 10, 11, 12, 20, 37, 44, 64, 110, 124, 141, 143
222	船が迫山城跡	船ヶ迫山城・城山ふなかさこ	4, 8, 10, 12, 20, 37, 44, 124, 125, 142, 143
223	茶臼山城跡	東三成山城	4, 8, 10, 12, 37, 44, 104, 109, 110, 125, 143
224	庄氏館跡	居館・御土井	79, 81, 110
225	花房氏居館跡	御土井	110
226	原砦跡	原ノ砦	143
227	猿掛城跡	猿懸城・猿掛山古城	3, 4, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 14, 18, 19, 20, 24, 28, 32, 33, 35, 37, 38, 40, 42, 44, 45, 47, 53, 55, 56, 57, 58, 59, 64, 69, 70, 71, 72, 74, 75, 79, 81, 83, 84, 89, 90, 91, 92, 93, 97, 99, 102, 103, 104, 110, 112, 114, 116, 118, 119, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 132, 133, 135, 140, 141, 143, 144, 153
228	楢村氏居館跡	走出城	47, 141, 143, 144
229	折敷山城跡	尾敷山城・尾鋪山城・屋鋪山城・走出村の要害	4, 8, 10, 11, 12, 18, 20, 22, 24, 37, 42, 44, 46, 47, 48, 64, 103, 110, 118, 119, 123, 124, 125, 141, 143, 144
230	滝山城跡	瀧山ノ古城	10, 19, 20, 44, 64, 142, 143
231	工ヶ城跡	工加城・匠ヶ城・工ガ城	4, 10, 11, 12, 19, 20, 24, 37, 44, 110, 115, 124, 135, 143, 153
232	すくも山城跡		19
233	仮名沢城跡	城関山城	10, 19, 20, 46, 48, 141, 143
234	入田城跡		44, 48
235	有田城跡	在田城	10, 19, 36, 44, 46, 141, 143
236	明知城跡		48
237	明知山城跡		48, 141
238	森山城跡	森山古城	44, 46, 48, 142, 143
239	大橋山城跡		44, 46, 48, 64, 141, 143, 153
240	西浜城跡	陶山城・陶山岡城・西濱村城	4, 8, 10, 11, 12, 20, 31, 37, 44, 46, 48, 49, 55, 72, 97, 119, 124, 125, 143, 144, 153
241	政所山城跡	長畝山城	4, 8, 10, 11, 12, 37, 42, 44, 46, 47, 48, 118, 119, 124, 142, 143
242	諏訪山城跡	大間の城山	8, 10, 42, 44, 46, 47, 48, 118, 119, 125, 142, 143
243	馬鞍山城跡	尊勤山城・馬くら山・馬ノ鞍山城	4, 8, 10, 11, 12, 37, 42, 44, 46, 47, 48, 53, 64, 81, 103, 110, 118, 124, 125, 135, 141, 143, 153
244	小丸山城跡	尾坂城	16, 46, 142, 143
245	小平井城跡	小平井ノ城	10, 46, 48, 142, 143
246	園井土井遺跡		48, 172
247	園井城跡	園井村古城	10, 20, 125, 144
248	鳶の子城跡	鳶子城・鳶ノ子城	10, 19, 36, 37, 44, 46, 49, 50, 123, 142, 143
249	笠岡山城跡	笠岡城	4, 8, 10, 12, 19, 37, 44, 46, 47, 48, 49, 50, 68, 116, 143, 153
250	広浜城跡	笠岡の城	46, 48, 55
251	高丸城跡		46, 48, 142, 143
252	前影山城跡		46, 48, 64, 142, 143
253	小見山城跡	丸山城・十神島城	10, 19, 44, 46, 47, 48, 123, 141, 143
254	笠岡城跡	笠岡山城・笠岡古城山	10, 11, 18, 40, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 57, 68, 77, 79, 81, 110, 119, 123, 124, 125, 135, 141, 144, 153
255	鳴ヶ端城跡	鳴ヶ端砦・笠岡	20, 46, 48, 49, 141
256	横島城跡		48

城館番号	城館名	別称	文献番号
257	福浦城跡		48
258	鳥越城跡		10, 46, 48, 119, 123, 142, 143
259	大道城跡		46, 48
260	平山砦跡		141
261	沢津城跡	澤津城	46, 48, 141, 143
262	真鍋城跡	真鍋島城	4, 10, 12, 37, 44, 46, 48, 124, 141, 143
263	城山城跡	真鍋島古城・真鍋島城	44, 46, 48, 141, 143
264	要害山城跡	要害城・上田山古城・上田山城・光雲寺山城	9, 11, 37, 55, 72, 142, 143
265	三本松城跡	三本松	72, 116, 125
266	山本城跡	山本古城・上田山城・上田山古城	3, 4, 9, 12, 37, 44, 55, 72, 99, 124, 125, 141, 143
267	下倉城跡	下倉古城	9, 11, 44, 72
269	殿砂遺跡		173
270	鬼身城跡	鬼城・鬼之城・鬼身の城・鬼身山城	3, 4, 5, 9, 11, 12, 18, 19, 20, 24, 28, 32, 33, 36, 37, 40, 44, 47, 53, 55, 59, 71, 72, 75, 77, 79, 81, 83, 84, 89, 91, 92, 93, 99, 103, 104, 110, 112, 114, 116, 124, 125, 126, 127, 135, 141, 143, 144, 146
271	高丸古城跡	高丸城	9, 55, 125, 141, 143
272	荒平山城跡	荒平城・荒手山城・荒平古城山跡・荒平の城	3, 4, 9, 11, 12, 15, 16, 37, 44, 53, 55, 59, 71, 72, 75, 77, 79, 81, 99, 114, 124, 125, 127, 141, 143, 144
273	市場古城跡	市場山城・市場城趾	3, 4, 9, 12, 37, 44, 55, 143, 151
274	馬首城跡	馬頭城・馬頸城・馬頭古城	3, 4, 9, 11, 12, 37, 44, 55, 124, 142, 143
275	襄越城跡	みのこし古城・簑越城・箕越山城・蓑越城・箕腰山砦	9, 37, 55, 72, 75, 104, 124, 125, 142, 143
277	馬入道山城跡	場入堂山城・馬入堂山城・羽入道山城	3, 4, 9, 11, 12, 15, 37, 55, 99, 104, 112, 124, 125, 127, 141, 143
278	木村山城跡	喜村山城・鬼邑山城	3, 4, 12, 15, 16, 20, 37, 55, 57, 72, 79, 81, 104, 112, 124, 125, 127, 135, 141, 143, 144
279	夕部山城跡	伊予部山城・伊与部山城・伊世部城・勝山城	3, 4, 9, 12, 15, 16, 37, 44, 55, 75, 81, 99, 104, 110, 125, 135, 142, 143, 144
280	桜城跡	櫻氏古城・櫻城	9, 37, 55, 104, 143
281	陶山城跡	陶山古城	9, 37, 55, 142, 143
282	諏訪山城跡		37, 55, 104, 142, 143
283	鳥ヶ岳城跡	石田城・鳥獄城・鳥嶽城・鳥ヶ嶽城	3, 4, 9, 11, 12, 37, 55, 104, 124, 141, 143, 144
284	岡田藩陣屋跡	岡田の陣屋	30, 24, 143
285	南山城跡	南山古城	3, 4, 9, 11, 12, 17, 37, 44, 55, 57, 124, 141, 143, 174
286	梁場山城跡		4, 10, 11, 12, 37, 44, 102, 141, 143
288	鳶尾城跡	鳶尾山城・鳶ノ尾山城・虚空蔵山砦	4, 10, 11, 12, 16, 37, 44, 47, 67, 68, 80, 124, 141, 142, 143
289	杉山城跡		4, 10, 11, 12, 16, 37, 44, 47, 103, 119, 123, 125, 141, 143, 144
290	西知山城跡		4, 10, 12, 17, 37, 44, 141, 143
292	城山城跡	加賀山城	16, 37, 142, 143
293	鴨山城跡	加茂山城・鴨方城	4, 10, 11, 12, 16, 20, 32, 35, 37, 44, 47, 51, 53, 55, 67, 68, 71, 72, 79, 81, 84, 91, 102, 103, 104, 110, 124, 125, 135, 141, 143
294	石井山城跡	鼓山	4, 10, 11, 12, 37, 44, 75, 143
295	益坂城跡		141
296	安芸守山城跡	古城山	16, 17, 141, 143
298	おどえ屋敷跡		65
299	泉山城跡		10, 16, 37, 141, 143, 144
301	佐方城跡	佐方古城	4, 12, 17, 37, 65, 124, 142, 143
303	竜王山城跡	龍王山城・佐方村古城	4, 11, 44, 65, 141, 143
304	土居遺跡		65
305	上竹城跡	古城山跡	15, 16, 65, 142
307	要害山城跡	道越城・とうし山城	4, 12, 16, 37, 44, 124, 125, 142, 143
308	亀崎城跡	龜崎城・亀山城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 73, 116, 124, 142, 143
310	畑山城跡		4, 10, 12, 37, 44, 73, 142, 143
311	森本松山城跡	森元城・松山城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 73, 124, 141, 143
312	水島城跡	水嶋城・水島の城	4, 5, 10, 11, 12, 44, 57, 73, 143
313	片島城跡		10, 20, 55, 57, 60, 73, 75, 81, 84, 112, 125, 127, 135, 144

城館番号	城館名	別称	文献番号
314	西山城跡		84
315	大平山城跡	大平山古城・北面城・北茂城	4, 10, 12, 37, 44, 59, 84, 143
316	丸山城跡		84
317	茶臼山城跡		10, 16, 37, 67, 68, 143
318	竜王山城跡	龍王山城	4, 10, 12, 16, 37, 44, 47, 51, 68, 124, 125, 141, 143
319	青佐山城跡	大佐山城	4, 10, 11, 12, 15, 16, 37, 44, 46, 47, 48, 53, 68, 124, 125, 143, 153
320	佐与谷城跡	天神山城・大はなれ城	52, 55, 113, 141, 143
321	野山城跡	古和田城・小和田城	4, 9, 11, 12, 37, 40, 44, 52, 55, 71, 72, 75, 79, 81, 99, 103, 104, 110, 113, 115, 116, 121, 124, 125, 127, 135, 142, 143
322	伊達弾正館跡	野山古城・府元山城・奥樋の城	9, 37, 39, 52, 55, 72, 113, 115, 135, 141, 143, 144
327	忍山城跡	忍の城・忍城	4, 5, 9, 11, 12, 25, 35, 37, 38, 40, 44, 53, 55, 71, 103, 105, 114, 124, 125, 126, 135, 141, 143, 144
329	忍山城出城跡		138, 175
331	亀石城跡	甕石山城	55, 117, 124, 142, 143
332	名称未定	実訳城	44
336	延原城跡	延原古城阯・豊岡宗清館	55, 72, 142
337	金頭山城跡		72 , 176, 177
338	大渡城跡	岸の上砦・美袋の城・美袋山城	4, 9, 11, 12, 37, 44, 47, 55, 59, 71, 72, 77, 79, 81, 92, 99, 103, 110, 112, 116, 124, 125, 126, 127, 141, 142, 143, 144
339	鍋坂城跡	古城跡	4, 9, 11, 15, 127, 134
340	高馬城跡		37, 55, 142, 143
341	志良計城跡	しらけヶ城・米城山	4, 9, 11, 12, 15, 16, 37, 44, 81, 124, 142, 143, 144, 146
342	井山城跡		4, 9, 11, 12, 37, 44, 55, 124, 141, 143
343	浅尾陣屋跡	浅尾屋敷・浅尾城	30, 68, 141, 143
344	小寺城跡	片山城・小寺村要害	9, 20, 55, 72, 75, 103, 124, 141, 142, 144
345	経山城跡	經山城	4, 9, 11, 12, 20, 37, 40, 44, 47, 55, 56, 58, 75, 76, 79, 81, 83, 93, 99, 103, 112, 117, 124, 125, 127, 134, 135, 141, 143, 144
346	中島屋敷跡	小寺の要害・小屋谷	55, 61
347	立石城跡	竪石城・亀石城・粟井城	37, 55, 105, 121, 124, 141, 143
348	久田城跡		130
350	守福寺裏山の陣跡		1, 127, 134
351	日近城跡	日近古城	3, 4, 9, 11, 12, 37, 44, 55, 105, 116, 117, 142, 143
352	構跡		37
353	宮路山城跡	宮磁山城・宮地山城	1, 9, 33, 37, 40, 44, 55, 58, 74, 75, 79, 81, 93, 98, 105, 112, 114, 117, 121, 124, 125, 126, 127, 132, 134, 135, 141, 143, 144, 182
354	鍛冶山城跡	鍛治屋山城	4, 9, 11, 12, 33, 37, 44, 55, 75, 105, 124, 125, 127, 134, 141, 143, 144
355	植之町西陣跡	金床山	44 , 125
358	千引砦跡		178
361	名越３号砦跡		179
365	尾崎１号砦跡	御崎城	53
368	鳥越山城跡		55
369	長良山城跡	長良城趾・八幡山城	4, 9, 11, 44, 55, 75, 124, 135, 141, 143, 146
370	総社遺跡	国府市正屋敷跡	10 , 180, 181
372	一国山城跡	一国山	55 , 115, 182
373	冠山城跡	冠城	4, 5, 7, 9, 12, 22, 33, 37, 40, 44, 53, 55, 58, 74, 75, 79, 81, 83, 91, 92, 93, 98, 105, 110, 112, 114, 116, 117, 121, 124, 125, 126, 127, 132, 134, 135, 141, 143, 144
375	南坂南陣跡		147
376	南坂北陣跡		147
377	下足守Ａ陣跡		117 , 147
378	下足守Ｂ陣跡		117 , 147
379	上土田大崎境の陣跡		147
380	山上土塁跡		147

城館番号	城館名	別称	文献番号
381	すくも山城跡	すくも塚の城・宿面	55 , 142, 183
382	三上山東の陣跡		137 , 147
383	三上山の陣跡		137 , 147
384	三上山西の陣跡		137 , 147
385	龍王山陣跡		114, 127 , 134, 144
386	生石城跡		9, 55, 141, 143
387	小山城跡		127 , 134
388	大崎城跡		127 , 134
389	坂古田陣跡		129 , 184
390	八幡山陣跡	八幡山	55 , 125, 127, 134
391	岡之鼻陣跡	平山城	9 , 105
392	カジヤマの陣跡	平山村	55
393	備中高松城跡		4, 5, 7, 9, 10, 11, 12, 19, 20, 33, 37, 38, 40, 44, 45, 47, 53, 55, 56, 58, 68, 69, 74, 75, 77, 78, 79, 81, 83, 84, 91, 92, 93, 98, 99, 100, 103, 104, 105, 112, 114, 116, 117, 118, 119, 121, 124, 125, 126, 128, 132, 135, 139, 141, 143, 144, 147, 154, 185, 186, 187
394	御崎山陣跡	御崎山	55 , 125, 127, 129, 134
395	石井山陣跡	石井山陣・奈良邊ノ城	1, 33, 37, 55, 69, 83, 105, 112, 124, 125, 142, 143, 144, 147
396	蛙ヶ鼻陣跡	蛙ヶ鼻	1, 9, 83, 141, 147
397	高松城水攻め築堤跡（蛙ヶ鼻）	蛙ヶ鼻	10, 55, 58, 79, 112, 114, 125, 135, 144, 188
399	鼓山城跡	立田山・鼓石井	9, 40, 58, 75, 79, 81, 83, 105, 114, 117, 121, 124, 125, 127, 134, 135, 141, 143
400	板倉桝形城跡	板倉城	4, 9, 10, 12, 37, 40, 55, 57, 58, 121, 124, 141, 143, 153
401	伝賀陽氏館跡	賀陽屋敷阯・賀陽城	39, 55, 121, 142, 143
402	庭瀬城跡		9, 15, 33, 37, 47, 55, 58, 74, 83, 98, 112, 114, 116, 121, 124, 125, 126, 127, 132, 134, 135, 139, 141, 143, 144
403	撫川城跡	かうげが城・芝場城	10, 37, 38, 44, 83, 116, 124, 125, 126, 139, 141, 143
404	宮内城跡	吉備城・吉備中山	4, 9, 11, 12, 40, 55, 58, 79, 114, 143
405	真壁城跡	薬師寺氏の邸阯・溝口城	4, 12, 37, 55, 83, 88, 124, 135, 142, 143
406	三須城跡	西三須村城郭	77
407	亀山城跡	林ノ城	10, 37, 55, 57, 83, 105, 112, 124, 141, 142, 143
409	下軽部遺跡	角田構	61
410	軽部山城跡	軽部古城山跡	15
411	流山城跡	酒津八幡山城・酒津城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 55, 57, 71, 72, 73, 81, 83, 112, 116, 143, 144
412	上河原城跡		4, 10, 11, 12, 37, 44, 57, 73, 124, 143
413	中大道城跡	大道城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 57, 73, 143
414	幸山城跡	高山城	4, 5, 10, 11, 12, 15, 16, 18, 19, 22, 24, 28, 32, 33, 37, 44, 47, 53, 55, 56, 57, 58, 59, 70, 71, 72, 74, 75, 79, 81, 83, 84, 91, 92, 93, 99, 103, 104, 110, 111, 112, 114, 116, 121, 124, 125, 126, 127, 134, 135, 141, 143, 144, 149
415	福山城跡		4, 5, 10, 11, 12, 14, 15, 16, 19, 20, 28, 31, 35, 37, 40, 44, 46, 55, 56, 57, 72, 75, 79, 81, 83, 88, 93, 98, 103, 104, 105, 111, 112, 115, 116, 119, 121, 124, 125, 127, 134, 135, 139, 141, 143, 144, 149
416	岡谷城跡		4, 10, 11, 12, 37, 44, 57, 83, 112, 124, 143, 149
417	黒田古城跡	黒田城	16, 37, 143
418	青江城跡	青江山城	4, 10, 11, 12, 37, 44, 57, 73, 83, 124, 143
421	万寿城跡	萬壽城	4, 10, 12, 37, 57, 73, 83, 116, 124, 139, 143
422	小野城跡	小野ヶ城・倉敷古城・羽嶋城	4, 11, 12, 37, 44, 57, 83, 124, 143
423	庚申山陣城跡	帝釋山城・岩崎山	4, 9, 10, 12, 37, 40, 55, 74, 75, 77, 79, 81, 83, 93, 112, 125, 127, 132, 134, 142, 143, 144
424	造山城跡	天神山崎・作山	75 , 105, 112, 117, 125, 144
425	津寺遺跡		189 , 190, 191, 192, 193
426	甫崎天神山城跡	天神山	40, 75, 81, 105, 112, 125, 127, 134, 144, 194

城館番号	城館名	別称	文献番号
427	加茂城跡	鴨城・加茂岡崎城趾・鴨庄城	10, 33, 37, 40, 44, 55, 58, 74, 75, 79, 81, 83, 91, 98, 105, 112, 114, 116, 121, 124, 125, 126, 132, 135, 141, 143, 144
428	鷹巣城跡		73, 114, 124, 127, 134
429	河屋城跡		11, 73, 139
430	楯築陣山跡	楯山・楯築陣城	69, 75, 112, 121
431	日畑城跡	日幡城	4, 5, 10, 11, 12, 37, 40, 44, 53, 55, 58, 69, 73, 74, 75, 81, 83, 91, 98, 105, 110, 112, 114, 116, 121, 124, 125, 126, 127, 132, 134, 135, 139, 143, 144, 146
432	庄城跡	庄の城	10, 37, 73, 83, 140, 142, 143
433	日差山城跡	庇山	33, 35, 40, 44, 55, 58, 69, 74, 75, 79, 81, 83, 98, 105, 112, 114, 116, 125, 127, 134, 144
435	高鳥居城跡	二子山城	37, 69, 83, 141, 143
436	松島城跡	松島古城山跡・射越山城	10, 15, 16, 37, 44, 55, 58, 69, 73, 74, 83, 98, 112, 116, 121, 124, 125, 132, 135, 141, 143, 144, 146
437	平松城跡		69
439	坪井城跡	坪井之城・坪井村之砦・坪井村之要害	83, 154
440	早島城跡	城山	37, 83, 143
441	戸川家陣屋跡	早島の陣屋	30
442	名称未定	須浜城・須崎城・妹尾城	4, 10, 11, 37, 83, 124, 141, 143

報告書抄録

ふりがな	おかやまけんちゅうせいじょうかんあとそうごうちょうさほうこくしょ
書名	岡山県中世城館跡総合調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	氏平昭則・和田　剛・小林利晴・上栁　武・岡本泰典・小嶋善邦・物部茂樹・米田克彦・亀山行雄・島崎　東・澤山孝之・髙田恭一郎・畑　和良
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-３　　℡ 086-293-3211
	https://pref.okayama.jp/site/kodai/
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市北区内山下２-４-６　　℡ 086-224-2111
発行年月日	2020年02月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
岡山県美作地域所在の城館跡等409か所	新見市	33210	９ほか	―	―	20150401～20190331	―	岡山県中世城館跡総合調査
	高梁市	33209	９ほか					
	真庭市（旧北房町）	33214	14ほか					
	井原市	33207	６ほか					
	総社市	33208	２ほか					
	笠岡市	33205	７ほか					
	浅口市	33216	７ほか					
	倉敷市	33202	266ほか					
	岡山市	33201	37ほか					
	吉備中央町	33681	７ほか					
	矢掛町	33461	６ほか					
	里庄町	33445	40ほか					
	早島町	33423	22ほか					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡山県美作地域所在の城館跡等409か所	城館跡及び関連遺跡	鎌倉時代から江戸時代	曲輪・堀切・横堀・竪堀・土塁・石垣・虎口・櫓台・土橋など	なし	

要約	岡山県内各地に残る中世城館跡の現状を把握し、その保存と活用を図るための記録を作成することを目的に、平成25年度から国庫補助事業として実施した中世城館跡総合調査の成果。岡山県全体では、1,423地点の調査を実施し、1,126城の城館関連遺構を確認。目的、経緯、概要（位置・規模・構造・現況・略史・縄張り図）、分布地図、一覧表等を掲載。備中国では、484地点の調査を実施、442城の城館関連遺構を確認し、備中松山城跡など326城について掲載した。

岡山県中世城館跡総合調査報告書
第２冊
－　備中編　－
令和２年２月 28 日　印刷
令和２年２月 28 日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市北区西花尻 1325- ３
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市北区内山下２- ４- ６
印　刷　株式会社中野コロタイプ
　　岡山市北区玉柏 390